岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474集

河崎の柵擬定地発掘調査報告書

床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査

（第１分冊　古代・中世・近世編）

２００６

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

河崎の柵擬定地発掘調査報告書

床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査

（第１分冊　古代・中世・近世編）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、床上浸水対策特別対策事業に関連して平成13・14・15・16年度に発掘調査された東磐井郡川崎村の河崎の柵擬定地の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代後期～晩期の遺物包含層、８～9世紀代の集落跡、11世紀「前九年合戦」の時代の遺物、堀、12世紀奥州藤原氏の時代に関連する遺物、中世の陶磁器、板碑、近世の屋敷跡などが発見され、貴重な資料を提供することができました。東磐井郡においては、これまでこれらの時期の調査例は少なく、地域の歴史に新たな一ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、川崎村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年２月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　　言

1　本報告書は、岩手県東磐井郡川崎村門崎字川崎・字銚子地内に所在する河崎の柵擬定地の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は、床上浸水対策特別対策事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3　岩手県遺跡登録台帳に記載されている遺跡番号はOE09－1173、遺跡略号はKSG－01（平成13年度)、KSG－02（平成14年度)、KSG－03（平成15年度）KSG－04（平成16年度）である。

4　野外の発掘調査期間は４カ年に渡っている。各年度の野外調査期間と調査面積は以下のとおりである。

平成13年度	８月１日～11月19日	調査面積	1,000㎡
平成14年度	４月16日～11月29日	調査面積	1,300㎡
平成15年度	４月14日～11月28日	調査面積	17,340㎡
平成16年度	４月８日～８月18日	調査面積	3,205㎡

5　各年度の室内整理期間は以下のとおりである。

平成13年度	平成13年11月１日～平成14年３月31日
平成14年度	平成14年11月１日～平成15年３月31日
平成15年度	平成15年11月１日～平成16年３月31日
平成16年度	平成16年11月１日～平成17年３月31日

6　各年度の発掘調査、室内整理の担当は以下のとおりである。

平成13年度	溜　浩二郎・原　美津子
平成14年度	溜　浩二郎・鈴木裕明
平成15年度	阿部　憲・亀沢盛行・林　勲・鈴木裕明・阿部孝明・羽柴直人・星　幸文 溜　浩二郎・米田　寛・川又　晋・村田　淳・立花　裕・江藤　敦
平成16年度	羽柴直人・鈴木裕明・川又　晋・西澤正晴・小針大志

7　本報告書の執筆は上記の調査担当者が分担しておこなった。各文の執筆者名はその文末に名前を記している。編集も基本的には担当者が分担しておこなったが、総合的な編集は羽柴と川又がおこなった。

8　委託業務は以下の機関・個人に委託した。

（１）基準点設置……株式会社総合土木コンサルタンツ
（２）空中写真……東邦航空株式会社
（３）石質鑑定……花崗岩研究会
（４）樹種同定……パリノ・サーヴェイ株式会社
（５）鉄製品保存処理……JFEテクノリサーチ株式会社
（６）鉄製品・銅製品保存処理……岩手県立博物館
（７）黒曜石産地同定……古環境研究所
（８）土壌分析……古環境研究所
（９）人骨鑑定・人骨精査指導……奈良貴史（国際医療福祉大学助教授）

鈴木敏彦（東北大学大学院歯学研究科助手）

（10）銅製品分析……松井敏也（筑波大学）

9　本報告書の作成にあたり、次の方々にご協力・ご指導をいただいた。（敬称略）

井上雅孝（滝沢村教育委員会）、藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、本澤慎輔、及川司、菅原計二、鈴木江利子（以上平泉町教育委員会）、八重樫忠郎（平泉町世界遺産推進室）、千葉信胤（平泉町郷土館）、鹿野里絵（衣川村教育委員会）、及川真紀、依田恵美子（前沢町教育委員会）、斉藤邦雄（平泉町世界遺産推進室）、矢崎静香、矢崎木綿子、丸山聡子、小原美紀子、小島一宣（柳之御所遺跡調査事務所）、大平聡（宮城学院大学）、宮本升平（胆江日々新聞社）、千葉周秋、平景子（金ヶ崎町教育委員会）、野坂晃平（江刺藤原の里資料館）、岡田清一（東北福祉大学）、井出靖夫（中央大学博士後期課程）、入間田宣夫（東北大学）、大矢邦宣（平泉町郷土館館長）、宇部則保（八戸市教育委員会）、前川要（中央大学）、吉田歓（米沢女子短期大学）、冨島義幸（滋賀県立大学）、大石直正（東北学院大）、工藤雅樹（福島大学）、伊藤博幸、佐藤良和、遠藤栄一、小野寺摩耶（水沢埋文）、小泉和子（昭和のくらし博物館）、山本信夫（福岡県太宰府市）、菅野成寛（中尊寺仏教文化研究所）、吉井宏（東北福祉大学）、室野秀文（盛岡市教育委員会）、村田晃一（宮城県教育委員会）、八木光則（盛岡市中央公民館）、久保智康（京都国立博物館）、畠山篤雄（千厩町教育委員会）、杉本良、小田嶋知代（北上市埋文）、小野哲也（厚真町教育委員会）、樋口靖（岩手大学）、川又隆央（岩沼市教育委員会）、畠山喜一（東山町松川）、土方和行、千田浩一、葛西清成（川崎村教育委員会）、葛西長三郎、葛西成夫、葛西信一、葛西功成、葛西直人（川崎村門崎）、佐藤敏幸（矢本町教育委員会）、佐々木務、高木晃、小原祐子（岩手県立博物館）、岡陽一郎（青山学院大学）、五味文彦（東京大学）、狭川真一（元興寺文化財研究所）、柴垣勇夫（静岡大学）、津野仁（とちぎ生涯学習財団）、伊藤玄三（法政大学、一関市立博物館）、宇田川健一（秋田埋文）、田辺由美子（千葉県立中央博物館）、小野隆志（秋田市教育委員会）、吉川耕太郎（秋田埋文）、水戸部秀樹（山形埋文）、百瀬正恒（京都背精華女子大学）、中村紀顕（岩手日報社）、前川佳代（奈良女子大）、遠藤祐太郎（岩手大学）

10　土層の観察は「新版標準土色帳」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、（財）日本色彩研究所監修　1989）を使用した。

11　これまでに、調査成果の一部を現地説明会資料や調査略報等に発表しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本書が優先するものである。

調査で得られた出土遺物や整理に係わる諸記録等については、すべて岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

12　川崎村は平成17年９月の市町村合併により一関市となった。本報告書は平成17年３月における合併前の市町村名を用いている。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 ……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……1
1　位　　置 ……1
2　地形・地質 ……3
3　基本土層 ……3
4　周辺の歴史的環境 ……6

Ⅲ　調査と整理の方法 ……12
1　野外調査の方法 ……12
2　室内整理の方法 ……15

Ⅳ　平成13年度調査区の遺構 ……16
1　平成13年度調査区概観 ……16
2　竪穴住居(SI) ……16
3　掘立柱建物(SB) ……18
4　土　　坑(SK、SX) ……22
5　溝(SD) ……39

Ⅴ　平成14年度調査区の遺構 ……43
1　平成14年度調査区概観 ……43
2　竪穴住居(SI) ……43
3　掘立柱建物(SB) ……44
4　土　　坑(SK) ……48
5　溝(SD) ……58

Ⅵ　B区の遺構 ……60
1　B区概観 ……60
2　竪穴住居(SI) ……60
3　焼土遺構 ……64
4　土　　坑(SK) ……65
5　溝(SD) ……81
6　その他の遺構(畝間状、集石、沢跡) ……86

Ⅶ　C区の遺構 ……93
1　C区概観 ……93
2　竪穴住居(SI) ……93
3　溝、堀(SD) ……103
4　畝間状遺構(SX) ……114

5 掘立柱建物(SB) ……117

Ⅷ D区の遺構 ……121
1 D区概観 ……121
2 竪穴住居(SI) ……121
3 掘立柱建物(SB) ……123
4 土坑(SK) ……137
5 畝間状遺構(SX) ……140

Ⅸ E区の遺構 ……142
1 E区概観 ……142
2 竪穴住居(SI) ……142
3 掘立柱建物(SB) ……154
4 土坑(SK) ……168

Ⅹ 出土遺物 ……183
1 土師器・須恵器 ……183
2 かわらけ ……229
3 中世陶磁器 ……243
4 近世陶器 ……255
5 近世磁器 ……280
6 金属製品 ……296
7 その他の遺物 ……309
8 近代遺物 ……314

Ⅺ 付編 ……319
1 土壌分析・放射性炭素年代測定 ……319
2 密教法具の材質分析 ……325

Ⅻ まとめ ……326
1 河崎の柵擬定地の遺構変遷 ……326
2 河崎柵研究史 ……329
3 「河崎の柵擬定地」は「河崎柵」であるのか ……337
4 土師器・須恵器について ……339
5 緑釉陶器小壺について ……342
6 11世紀のかわらけについて ……343
7 12世紀の遺物について ……346
8 近世陶磁器の出土傾向 ……349
9 E区SI4出土の蕨手刀について ……356
10 鉄鏃に関する検討 ……362
11 小札に関する検討 ……371

報告書抄録 ……579

図版目次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡周辺の地形 ……2
第３図　基本土層 ……4
第４図　遺跡周辺の地形分類図 ……5
第５図　明治時代の遺跡周辺（河川台帳副本） ……9
第６図　門崎村字川崎地籍図 ……10
第７図　門崎村字銚子地籍図 ……11
第８図　河崎の柵擬定地グリッド配置図 ……13
第９図　調査区区分図 ……14
第10図　C区SI１（平成13年検出） ……17
第11図　C区SB１（平成13年検出） ……19
第12図　C区SB２①（平成13年検出） ……20
第13図　C区SB２②（平成13年検出） ……21
第14図　01SK１～01SK５ ……23
第15図　01SK８～01SK13 ……27
第16図　01SK14～01SK19 ……29
第17図　01SK20～01SK24、01SK29、01SK33 ……31
第18図　01SK25～01SK28、01SK31、01SK32 ……35
第19図　01SX１、01SX２ ……37
第20図　01SX３、01SX４ ……38
第21図　01SD１、01SD２ ……40
第22図　01SD３、01SD４ ……42
第23図　C区SI２（平成14年検出） ……44
第24図　C区SI３①（平成14年検出） ……45
第25図　C区SI３②（平成14年検出） ……46
第26図　C区SB３（平成14年検出） ……47
第27図　02SK７、02SK34～02SK37、02SK40 ……49
第28図　02SK38、02SK39、02SK41～02SK45 ……51
第29図　02SK46、02SK47、02SK51～02SK55 ……55
第30図　02SK56～02SK59 ……56
第31図　02SD５、02SD６、02SD８ ……59
第32図　B区遺構配置図 ……61
第33図　B区SI１ ……63
第34図　B区１号焼土、B区２号焼土 ……64
第35図　B区SK１～B区SK６ ……66
第36図　B区SK７～B区SK12 ……68
第37図　B区SK13～B区SK16、B区SK18、B区SK19 ……71
第38図　B区SK20～B区SK22、B区SK24～B区SK26 ……73
第39図　B区SK27～B区SK33 ……76
第40図　B区SK40～B区SK45 ……78
第41図　B区SD１（方形周溝） ……82
第42図　B区SD２、B区SD３ ……83
第43図　B区SD４（平成16年検出） ……85
第44図　B区SX１（畠状遺構） ……86
第45図　B区集石 ……87
第46図　B区沢跡 ……89
第47図　C区・D区遺構配置図 ……91
第48図　C区SI４ ……94
第49図　C区SI５① ……95
第50図　C区SI５② ……96
第51図　C区SI５③ ……97
第52図　C区SI６① ……98
第53図　C区SI６② ……99
第54図　C区SI６③ ……100
第55図　C区SI７（平成16年検出） ……101
第56図　C区焼土１（平成16年検出） ……102
第57図　C区SD101①、C区SD104① ……105
第58図　C区SD101② ……107
第59図　C区SD101③ ……108
第60図　C区SD101④ ……109
第61図　C区SD104② ……111
第62図　C区SD104③ ……112
第63図　C区SD104④ ……113
第64図　C区SD105 ……114
第65図　C区SX１ ……115
第66図　C区SX２ ……116
第67図　C区SX３ ……117
第68図　C区SB４（平成16年検出） ……119
第69図　C区第１検出面ピット群 ……120
第70図　D区SI１ ……122
第71図　D区SI２ ……124
第72図　D区SB１① ……125
第73図　D区SB１② ……126
第74図　D区SB２ ……128
第75図　D区SB３ ……129
第76図　D区SB４ ……130
第77図　D区SB５ ……132
第78図　D区SB６ ……133
第79図　D区SB７ ……135
第80図　D区SB８ ……136
第81図　D区SK118～D区SK122 ……139
第82図　D区SX20、D区SX21 ……141
第83図　E区遺構配置図 ……143
第84図　E区SI１ ……145
第85図　E区SI２ ……147
第86図　E区SI３ ……149
第87図　E区SI４ ……151
第88図　E区SX１ ……152
第89図　E区焼土１ ……153
第90図　E区SB１① ……155

第91図　E区SB１②　……157
第92図　E区SB２　……160
第93図　E区SB３　……161
第94図　E区SB４　……163
第95図　E区SB５　……165
第96図　E区SB６　……167
第97図　E区SK４～E区SK10、E区SK23、
　　E区SK25　……170
第98図　E区SK７～E区SK11、E区SK21、
　　E区SK23　……172
第99図　E区SK12～E区SK15　……174
第100図　E区SK16～E区SK20　……176
第101図　E区SK22、E区SK24、E区SK26、
　　E区SK27　……178
第102図　E区SK28～E区SK31　……182
第103図　C区SI１の土師器、須恵器①（１～８）……185
第104図　C区SI１の土師器、須恵器②（９～11）……186
第105図　C区SI２の土師器、須恵器(12～13)　……187
第106図　C区SI３の土師器、須恵器①(14～23)　……188
第107図　C区SI３の土師器、須恵器②(24～29)　……189
第108図　B区SI１の土師器、須恵器①(30～35)　……190
第109図　B区SI１の土師器、須恵器②(36～38)　……191
第110図　C区SI４の土師器、須恵器(39～43)　……192
第111図　C区SI５の土師器、須恵器①(44～56)　……194
第112図　C区SI５の土師器、須恵器②(57～62)　……195
第113図　C区SI５の土師器、須恵器③(63～64)　……196
第114図　C区SI６の土師器、須恵器(65～71)　……197
第115図　D区SI１の土師器、須恵器①(72～83)　……199
第116図　D区SI１の土師器、須恵器②(84～87)　……200
第117図　D区SI１の土師器、須恵器③(88～91)　……201
第118図　D区SI１の土師器、須恵器④(92～93)　……202
第119図　D区SI２の土師器、須恵器(94～96)　……203
第120図　E区SI１の土師器、須恵器①(97～104)　…204
第121図　E区SI１の土師器、須恵器②(105～108)　…205
第122図　E区SI１の土師器、須恵器③(109～110)　…206
第123図　E区SI３の土師器、須恵器(111～114)
　　E区SI４の土師器、須恵器(115～117)　……207
第124図　E区SX１の土師器、
　　須恵器(118～122)　……208
第125図　E区焼土１の土師器、
　　須恵器(123～124)　……209
第126図　平成13～15年度遺構内出土土師器、
　　須恵器(125～132)　……210
第127図　C区第２検出面出土土師器、
　　須恵器①(133～147)　……213
第128図　C区第２検出面出土土師器、
　　須恵器②(148～159)　……214
第129図　C区第２検出面出土土師器、
　　須恵器③(160～174)　……215
第130図　C区第２検出面出土土師器、
　　須恵器④(175～180)　……216
第131図　C区第２検出面出土土師器、
　　須恵器⑤(181～187)　……217
第132図　C区第２検出面出土土師器、
　　須恵器⑥(188～196)　……218
第133図　C区第２検出面出土土師器、
　　須恵器⑦(197～200)　……219
第134図　C区第２検出面出土土師器、
　　須恵器⑧(200～204)　……220
第135図　第１検出面出土土師器、
　　須恵器(205～217)　……221
第136図　C区SI7の土師器、
　　須恵器①(218～222)　……222
第137図　C区SI７の土師器、
　　須恵器②(223～272)　……223
第138図　平成16年第１検出面出土土師器、
　　須恵器(273～278)　……225
第139図　平成16年第２検出面出土土師器、
　　須恵器①(279～290)　……227
第140図　平成16年第２検出面出土土師器、
　　須恵器②(291～292)　……228
第141図　11世紀のかわらけ①（1001～1019）　……232
第142図　11世紀のかわらけ②（1020～1037）　……233
第143図　11世紀のかわらけ③（1038～1057）　……234
第144図　11世紀のかわらけ④（1058～1078）　……235
第145図　11世紀のかわらけ⑤（1079～1100）　……236
第146図　12世紀のかわらけ①（1101～1121）　……238
第147図　12世紀のかわらけ②（1122～1142）　……239
第148図　12世紀のかわらけ③（1143～1160）　……240
第149図　13～14世紀のかわらけ（1201～1220）　…242
第150図　中世の国産陶器①（2001～2002）　……246
第151図　中世の国産陶器②（2003～2015）　……247
第152図　中世の国産陶器③（2016～2025）　……248
第153図　中世の国産陶器④（2026～2033）　……249
第154図　中世の中国産陶磁器①（2034～2048）　…250
第155図　中世の中国産陶磁器②（2049～2066）　…251
第156図　中世の中国産陶磁器③（2067～2081）　…252
第157図　中世の国産陶器⑤（2082～2091）　……253
第158図　中世の国産陶器⑥（2092～2094）　……254
第159図　近世の陶器①（3001～3016）　……260
第160図　近世の陶器②（3017～3033）　……261
第161図　近世の陶器③（3034～3046）　……262
第162図　近世の陶器④（3047～3064）　……263
第163図　近世の陶器⑤（3065～3079）　……264
第164図　近世の陶器⑥（3080～3094）　……265
第165図　近世の陶器⑦（3095～3111）　……266
第166図　近世の陶器⑧（3112～3124）　……267
第167図　近世の陶器⑨（3125～3134）　……268

第168図　近世の陶器⑩（3135～3144）……269
第169図　近世の陶器⑪（3145～3147）……270
第170図　近世の陶器⑫（3148～3153）……271
第171図　近世の陶器⑬（3154～3166）……272
第172図　近世の陶器⑭（3167～3182）……273
第173図　近世の陶器⑮（3183～3190）……274
第174図　近世の陶器⑯（3191～3192）……275
第175図　近世の陶器⑰（3193～3194）……276
第176図　近世の陶器⑱（3195～3211）……277
第177図　近世の陶器⑲（3212～3223）……278
第178図　近世の陶器⑳（3224～3231）……279
第179図　近世の磁器①（4001～4019）……284
第180図　近世の磁器②（4020～4035）……285
第181図　近世の磁器③（4036～4050）……286
第182図　近世の磁器④（4051～4067）……287
第183図　近世の磁器⑤（4068～4079）……288
第184図　近世の磁器⑥（4080～4094）……289
第185図　近世の磁器⑦（4095～4109）……290
第186図　近世の磁器⑧（4110～4118）……291
第187図　近世の磁器⑨（4119～4131）……292
第188図　近世の磁器⑩（4132～4147）……293
第189図　近世の磁器⑪（4148～4156）……294
第190図　近世の磁器⑫（4157～4162）……295
第191図　古代～中世の鉄製品①（5001～5002）…298
第192図　古代～中世の鉄製品②（5003～5020）…299
第193図　古代～中世の鉄製品③（5021～5036）…300
第194図　古代～中世の鉄製品④（5037～5043）…301
第195図　銅製品（密教法具）（5044～5046）……304
第196図　銭貨①（5047～5058）……305
第197図　銭貨②（5059～5069）……306
第198図　銭貨③（5070～5081）……307
第199図　銭貨④（5082～5092）……308
第200図　後北式土器（6001～6002）……309
第201図　土製品（6003～6008）……310
第202図　石製品①（6009～6011）……311
第203図　石製品②（6012～6014）……312
第204図　石製品③（6015）……313
第205図　石製品④（6016～6017）……314
第206図　近代陶磁器①（7001～7010）……315
第207図　近代陶磁器②（7011～7020）……316
第208図　ガラス瓶①（7021～7034）……317
第209図　ガラス瓶②（7035～7043）……318
第210図　墨書・刻書集成……341
第211図　11世紀のかわらけ分類図……345
第212図　12世紀遺物集成……348
第213図　岩手県内出土蕨手刀の諸例……358
第214図　鉄鏃部分名称図……362
第215図　鉄鏃分類概念図（水野2003より転載）…362
第216図　岩手県内出土鉄鏃分類模式図……364
第217図　岩手県内出土鉄鏃の諸例①……368
第218図　岩手県内出土鉄鏃の諸例②……369
第219図　岩手県内出土鉄鏃の諸例③……370

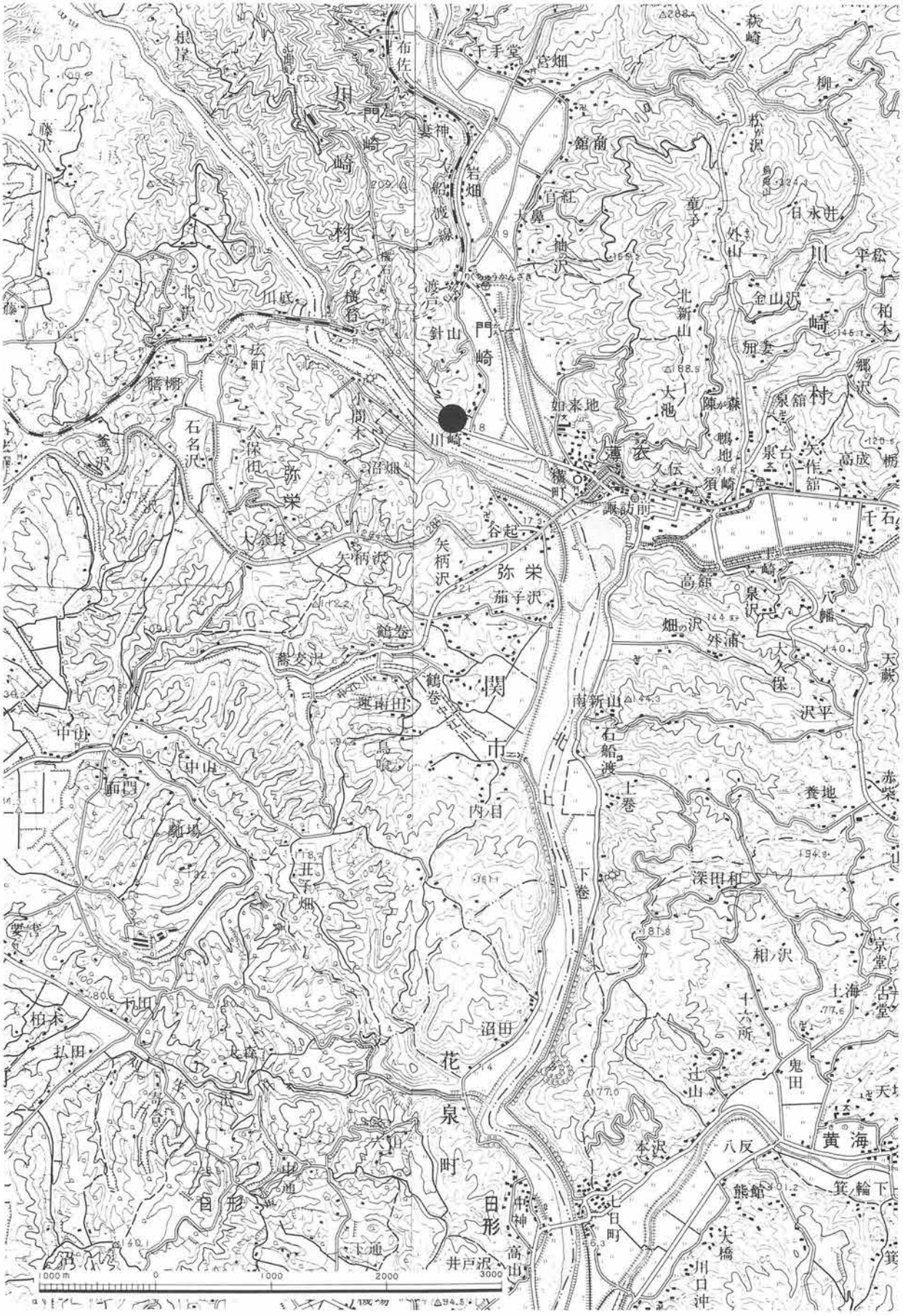
写真図版目次

写真図版１　調査区遠景、調査区全景……375
写真図版２　C区SD101……376
写真図版３　蕨手刀、古代の鉄製品……377
写真図版４　和同開珎、11世紀のかわらけ……378
写真図版５　11～12世紀、中世の陶磁器……379
写真図版６　六器、12世紀のかわらけ……380
写真図版７　航空写真平成13年度……381
写真図版８　航空写真平成15年度……382
写真図版９　航空写真平成16年度……383
写真図版10　C区SI１①……384
写真図版11　C区SI１②……385
写真図版12　C区SB１・SB２……386
写真図版13　01SK１～４……387
写真図版14　01SK５～10……388
写真図版15　01SK11～14……389
写真図版16　01SK15～18……390
写真図版17　01SK19～24……391
写真図版18　01SK25～28……392
写真図版19　01SK29・31～33……393
写真図版20　01SX２・３……394
写真図版21　01SX１～４……395
写真図版22　01SD１・２……396
写真図版23　01SD３・４……397
写真図版24　C区SI２①……398
写真図版25　C区SI２②……399
写真図版26　C区SI３①……400
写真図版27　C区SI３②……401
写真図版28　C区SI３③……402
写真図版29　C区SI３④……403
写真図版30　C区SB３、02SK７・34……404
写真図版31　02SK34～39……405
写真図版32　02SK40～43……406
写真図版33　02SK44～47……407
写真図版34　02SK51～54……408
写真図版35　02SK55～59……409
写真図版36　02SD５、SD６……410
写真図版37　02SD５、SD６、SD８……411
写真図版38　B区SI１①……412

写真図版39　B区SI１②……413
写真図版40　B区焼土１・２、B区SK１・２ ……414
写真図版41　B区SK３～６ ……415
写真図版42　B区SK７～10 ……416
写真図版43　B区SK11～14 ……417
写真図版44　B区SK15～19 ……418
写真図版45　B区SK20～22・24 ……419
写真図版46　B区SK25～28 ……420
写真図版47　B区SK29～32 ……421
写真図版48　B区SK33・40～42 ……422
写真図版49　B区SK43～45 ……423
写真図版50　B区SD１① ……424
写真図版51　B区SD１② ……425
写真図版52　B区SD１③ ……426
写真図版53　B区SD２、SD３ ……427
写真図版54　B区SD４① ……428
写真図版55　B区SD４② ……429
写真図版56　B区沢跡①……430
写真図版57　B区沢跡②……431
写真図版58　B区沢跡③……432
写真図版59　B区SX１、B区集石 ……433
写真図版60　C区SI４ ……434
写真図版61　C区SI５①……435
写真図版62　C区SI５②……436
写真図版63　C区SI５③、C区SD105 ……437
写真図版64　C区SI６①……438
写真図版65　C区SI６②……439
写真図版66　C区SI７①……440
写真図版67　C区SI７②、C区焼土１、C区SB４ ……441
写真図版68　C区SD101①……442
写真図版69　C区SD101②……443
写真図版70　C区SD101③……444
写真図版71　C区SD101④、C区SD104① ……445
写真図版72　C区SD104②……446
写真図版73　C区SD104③……447
写真図版74　C区SX１、SX２ ……448
写真図版75　C区SX３ ……449
写真図版76　C区第１検出面ピット群……450
写真図版77　D区SI１①……451
写真図版78　D区SI１②……452
写真図版79　D区SI２……453
写真図版80　D区柱穴群 ……454
写真図版81　D区SB１～４ ……455
写真図版82　D区SB１、２柱穴 ……456
写真図版83　D区SB５～８ ……457
写真図版84　D区SK118～121 ……458
写真図版85　D区SK122、D区土層断面 ……459
写真図版86　D区SX20 ……460
写真図版87　D区SX21 ……461
写真図版88　E区SI１①……462
写真図版89　E区SI１②……463
写真図版90　E区SI２①……464
写真図版91　E区SI２②……465
写真図版92　E区SI３①……466
写真図版93　E区SI３②……467
写真図版94　E区SI４①……468
写真図版95　E区SI４②……469
写真図版96　E区SI４③……470
写真図版97　E区SX１ ……471
写真図版98　E区焼土１……472
写真図版99　E区SB１ ……473
写真図版100　E区SB１柱穴① ……474
写真図版101　E区SB１柱穴② ……475
写真図版102　E区SB１柱穴③ ……476
写真図版103　E区SB１柱穴④ ……477
写真図版104　E区SB１柱穴⑤ ……478
写真図版105　E区SB１柱穴⑥ ……479
写真図版106　E区SB１柱穴⑦ ……480
写真図版107　E区SB２・３ ……481
写真図版108　E区SB２柱穴 ……482
写真図版109　E区SB３柱穴 ……483
写真図版110　E区SB４完掘、柱穴 ……484
写真図版111　E区SB４柱穴 ……485
写真図版112　E区SB５・６ ……486
写真図版113　E区SB５柱穴 ……487
写真図版114　E区SB５・６柱穴 ……488
写真図版115　E区SB６柱穴 ……489
写真図版116　E区SK４～７ ……490
写真図版117　E区SK８～11 ……491
写真図版118　E区SK12～15 ……492
写真図版119　E区SK16～19 ……493
写真図版120　E区SK20～23 ……494
写真図版121　E区SK24～27 ……495
写真図版122　E区SK28～31 ……496
写真図版123　調査風景、現地説明会など
(平成15年度) ……497
写真図版124　調査風景、現地説明会など
(平成16年度) ……498
写真図版125　C区SI１の土師器、須恵器①(１～８)
……499
写真図版126　C区SI１の土師器、須恵器②(９～11)
C区SI２の土師器、須恵器(12～13)
……500
写真図版127　C区SI３の土師器、須恵器①(14～23)
……501
写真図版128　C区SI３の土師器、須恵器②(24～29)
B区SI１の土師器、須恵器①(30・31)
……502

写真図版129　B区SI１の土師器、須恵器②
（32～37）……503
写真図版130　B区SI１の土師器、須恵器③（38）
C区SI４の土師器、須恵器（39～43）
……504
写真図版131　C区SI５の土師器、須恵器①
（44～56）……505
写真図版132　C区SI５の土師器、須恵器②（57～64）
C区SI６の土師器、須恵器①（65～67）
……506
写真図版133　C区SI６の土師器、須恵器②（68～71）
D区SI１の土師器、須恵器①（72～77）
……507
写真図版134　D区SI１の土師器、須恵器②
（78～87）……508
写真図版135　D区SI１の土師器、須恵器③
（88～91）……509
写真図版136　D区SI１の土師器、須恵器④（92～93）
D区SI２の土師器、須恵器（94～96）
……510
写真図版137　E区SI１の土師器、須恵器①
（97～105）……511
写真図版138　E区SI１の土師器、須恵器②
（106～110）……512
写真図版139　E区SI３の土師器、須恵器（111～114）
E区SI４の土師器、須恵器（115～117）
E区SX１の土師器、須恵器（118～122）
……513
写真図版140　E区焼土１の土師器、須恵器
（123～124）
平成13～15年度遺構内出土土師器、
須恵器（125～132）
第２検出面出土土師器、須恵器①
（133～141）……514
写真図版141　第２検出面出土土師器、須恵器②
（142～156）……515
写真図版142　第２検出面出土土師器、須恵器③
（157～174）……516
写真図版143　第２検出面出土土師器、須恵器④
（175～183）……517
写真図版144　第２検出面出土土師器、須恵器⑤
（184～196）……518
写真図版145　第２検出面出土土師器、須恵器⑥
（197～200）……519
写真図版146　第２検出面出土土師器、須恵器⑦
（201～204）
第１検出面出土土師器、須恵器
（205～217）……520
写真図版147　C区SI7の土師器、須恵器①
（218～223）……521
写真図版148　C区SI７の土錘
（224～272）
平成16年第１検出面出土土師器、須恵器
（273～278）
平成16年第２検出面出土土師器、
須恵器①（279～281）……522
写真図版149　平成16年第２検出面出土土師器、
須恵器②（282～290）……523
写真図版150　平成16年第２検出面出土土師器、
須恵器③（291・292）……524
写真図版151　11世紀のかわらけ①
（1001～1023）……525
写真図版152　11世紀のかわらけ②
（1024～1057）……526
写真図版153　11世紀のかわらけ③
（1058～1100）……527
写真図版154　12世紀のかわらけ①
（1101～1128）……528
写真図版155　12世紀のかわらけ②
（1129～1149）……529
写真図版156　12世紀のかわらけ③（1150～1160）
13～14世紀のかわらけ（1201～1220）
……530
写真図版157　中世の国産陶器①
（2001・2002・2026・2029・2031・2033）
……531
写真図版158　中世の国産陶器②（2003～2018）…532
写真図版159　中世の国産陶器③（2019～2025・2027・
2028・2030～2032）……533
写真図版160　中世の中国産陶磁器④
（2034～2048）……534
写真図版161　中世の中国産陶磁器⑤
（2049～2066）……535
写真図版162　中世の中国産陶磁器⑥
（2067～2080）……536
写真図版163　平成16年度出土の中世陶磁器
（2081～2094）……537
写真図版164　近世の陶器①（3021～3023・3041～
3045・3061～3063・3074・3075・3080）
……538
写真図版165　近世の陶器②（3092・3095・3104・3111・
3114・3145・3181・3185・3187）……539
写真図版166　近世の陶器③（3191・3192・3194・3195・
3204・3220～3222）……540
写真図版167　近世の陶器④（3001～3016）……541
写真図版168　近世の陶器⑤（3017～3036）……542
写真図版169　近世の陶器⑥
（3037～3040・3046～3058）……543

写真図版170　近世の陶器⑦（3059・3060・3064～3073・3076～3079）……544
写真図版171　近世の陶器⑧（3081～3094）……545
写真図版172　近世の陶器⑨（3096～3102・3105～3110・3112・3113）……546
写真図版173　近世の陶器⑩（3116～3132）……547
写真図版174　近世の陶器⑪（3133～3141・3143・3144）……548
写真図版175　近世の陶器⑫（3142・3146・3147）…549
写真図版176　近世の陶器⑬（3148～3153）……550
写真図版177　近世の陶器⑭（3154～3166）……551
写真図版178　近世の陶器⑮（3167～3180・3182）…552
写真図版179　近世の陶器⑯（3183・3184・3186・3188～3190・3197～3202）……553
写真図版180　近世の陶器⑰（3203・3205～3219・3223）……554
写真図版181　近世の磁器①（4025～4028・4035・4036・4049・4051～4053・4057・4058）……555
写真図版182　近世の磁器②（4068・4069・4080・4081・4095・4125・4132・4133・4145・4146）……556
写真図版183　近世の磁器③（4001～4019）……557
写真図版184　近世の磁器④（4020～4024・4029～4034・4037・4038）……558
写真図版185　近世の磁器⑤（4039～4048・4050・4054～4056）…559
写真図版186　近世の磁器⑥（4059～4067）……560
写真図版187　近世の磁器⑦（4070～4079・4082～4088）……561
写真図版188　近世の磁器⑧（4089～4094・4096～4109）……562
写真図版189　近世の磁器⑨（4110～4117・4119～4123）……563
写真図版190　近世の磁器⑩（4124・4126～4131・4134～4137）…564
写真図版191　近世の磁器⑪（4138～4147）……565
写真図版192　近世の陶器⑱（3224～3231）
近世の磁器⑫（4148～4153）……566
写真図版193　近世の磁器⑬（4154～4162）……567
写真図版194　古代～中世の鉄製品①（5001～5020・5031・5033）……568
写真図版195　古代～中世の鉄製品②（5021～5030・5034～5042）……569
写真図版196　銅製六器（5044～5046）、和同開珎（5047、5048）後北式土器（6001・6002）、石製品①（6012～6014）……570
写真図版197　蕨手刀顕微鏡写真……571
写真図版198　古代～中世の金属製品X線写真①…572
写真図版199　古代～中世の金属製品X線写真②…573
写真図版200　土製品（6003～6007）……574
写真図版201　石製品②・瓦質土器（6008～6011）…575
写真図版202　石製品③（6015～6017）……576
写真図版203　近代磁器①（7001～7013）……577
写真図版204　近代磁器②（7014～7020）……578



1：50,000　一関　千厩

第１図　遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経過

砂鉄川は、岩手県南部に位置し、「一関遊水地事業」箇所から約10km下流の諏訪前地点直上流で北上川に合流する左支川である。流域面積は375.01㎢で流域は典型的な山地流域であるが、最下流部は幅数百mの細長い沖積地となり、川崎村・東山町の貴重な宅地や耕作地として利用されている。

河道及び沿川の状況は標高が13.0～14.0m程度と低く、蛇行が著しい無堤状態となっていることから、洪水時には北上川本川の背水の影響により河川水位が上昇し、水害常襲地帯となっている。

当地区の洪水被害の特徴としては、北上川の水位上昇による被害のため、冠水時間が３～４日と非常に長く、また地形条件・土地利用条件から集落等が分断され孤立する家屋が多く壊滅的被害が発生する。このような状況を早期に解消するため、平成11～16年度の６カ年で重点的に投資を行い、築堤、河道掘削、排水樋門、揚水機場、橋梁掛け替え、道路付け替え等の工事を実施している。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施し、1遺跡が確認されている。その結果に基づいて岩手県教育委員会は国土交通省岩手工事事務所（現岩手河川国道事務所）と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受諾事業とすることにした。

これにより岩手県教育委員会は、平成12年度埋蔵文化財調査事業について平成12年１月24日付け「教文第1074号」により財団法人岩手県文化振興事業団へ通知し、それを受けて岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、平成12年４月１日付けの委託契約に基づいて平成12年４月６日から河崎の柵擬定地の発掘調査に着手した。平成12年度当初調査面積は4,680㎡で終了面積は同じく4,680㎡である。

なお、平成12年12月の試掘調査により、この箇所以外の同遺跡の発掘調査の必要性が確認され、平成14年度は1,300㎡、平成15年度には17,340㎡、平成16年度は3,205㎡の調査を実施した。

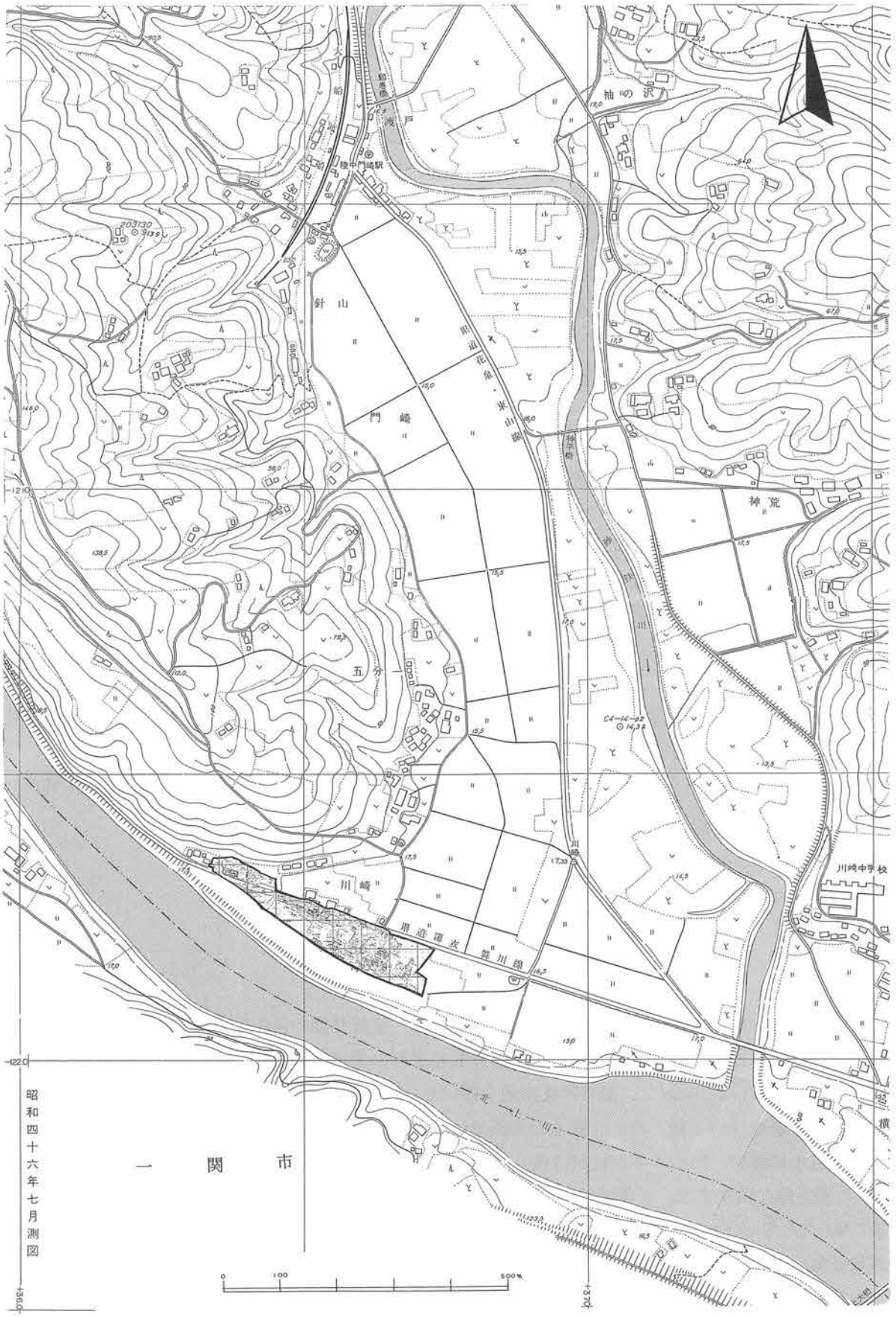
（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　位　　置

河崎の柵定地が所在する東磐井郡川崎村は岩手県南部、東磐井郡の西方に位置し、北は東磐井郡東山町、南は東磐井郡藤沢町、西は一関市、西磐井郡花泉町、東は東磐井郡千厩町の１市４町に接している。町の総面積は42.48㎢で、面積は県内最小の村である。そのおよそ半分以上は山林原野が占め、水田・畑地の割合は約１割である。耕地の大部分は北上川支流の千厩川、砂鉄川の河川沿いに集中する。昭和31年に薄衣、門崎の２か村が合併して川崎村が成立した。「川崎」の村名は前九年の役の「河崎柵」の擬定地に由来する。合併時に8,000人を超えた人口は、それ以降減少傾向にあって、現在はおよそ4,900人となっている。

河崎柵擬定地は川崎村門崎字川崎、同字銚子地内に所在する。その位置は、川崎村役場から北西へ約１km離れた北上川左岸である。地形図上の位置は、国土地理院発行の５万分の１地形図「千厩」（NJ－54－14－11）及び、2万５千分の１地形図「一関」（NJ54－14－11－1）にある。遺跡の経・緯度は北



第２図　遺跡周辺の地形

緯38度54分5秒、東経141度15分23秒である。

2　地形・地質

北上山地の西南部に位置する川崎村は、村の西部の境界を南流する北上川の東～北岸に立地している。中央部を千厩川が東から西側へ貫流し、村の西部では砂鉄川が北から南側に流れ北上川と合流する。北上川は県北部の岩手町御堂観音境内がその源とされ、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ延長243km、流域面積10,720㎢の東北地方最大の一級河川である。北上川の流域は盛岡以北を上流域、盛岡から前沢町間が中流域、前沢町以南を下流域に区分されており、川崎村は下流域の上部に相当する。

北上川下流域上部は、北上河谷帯（北上盆地）の南端部にあたり、東側が北上山地西縁部に接続している。西縁部は標高600m未満の束稲山山地、石蔵山山地とそれらに続く束稲西麓丘陵、駒ヶ嶺丘陵、門崎丘陵などからなっており、南側で有壁丘陵に連続している。有壁丘陵は北上川を挟んで北上山地に接しているために、県中央部を南流していた北上川は流れを阻まれて北上山地西縁部と有壁丘陵に挟まれた狐禅寺渓谷で南東方向に流れを変えていく。狐禅寺渓谷の西側は、北上川に向かって東流する磐井川によって形成された河岸段丘が奥羽山脈へと続き磐井川の左岸に衣川丘陵、右岸に達古袋丘陵が広がり南東側で有壁丘陵に続いている。

遺跡周辺の地勢を概観すると比較的標高が低い山稜が連なっており、北東側に烏兎山（標高358m）、北北東側に高烏兎山（標高288m）、北北西側に石蔵山（標高358m）、南南東側に南新山（標高144m）が望まれる。また北北西側には束稲山（標高596m）の山塊から南西方向に延びる石蔵山山地、それに続く門崎丘陵、砂鉄川を挟んだ北東側には弓折山山地と薄衣丘陵が続いている。本遺跡は門崎丘陵東側の自然堤防上に立地しており、北上川と砂鉄川の合流点から西北約600mの地点にあたる。

地質は北上河谷帯西縁を南北に縦断する盛岡－白河構造線によって東西に大きく分けられる。表層地質見ると西側は火山性の安山岩質岩石が広く分布し、その中に中新世の砂岩、鮮新世以降の花崗岩類と砂岩等で構成されている。砂鉄川流域には石炭紀、二畳紀の長坂石灰岩が良く発達している。

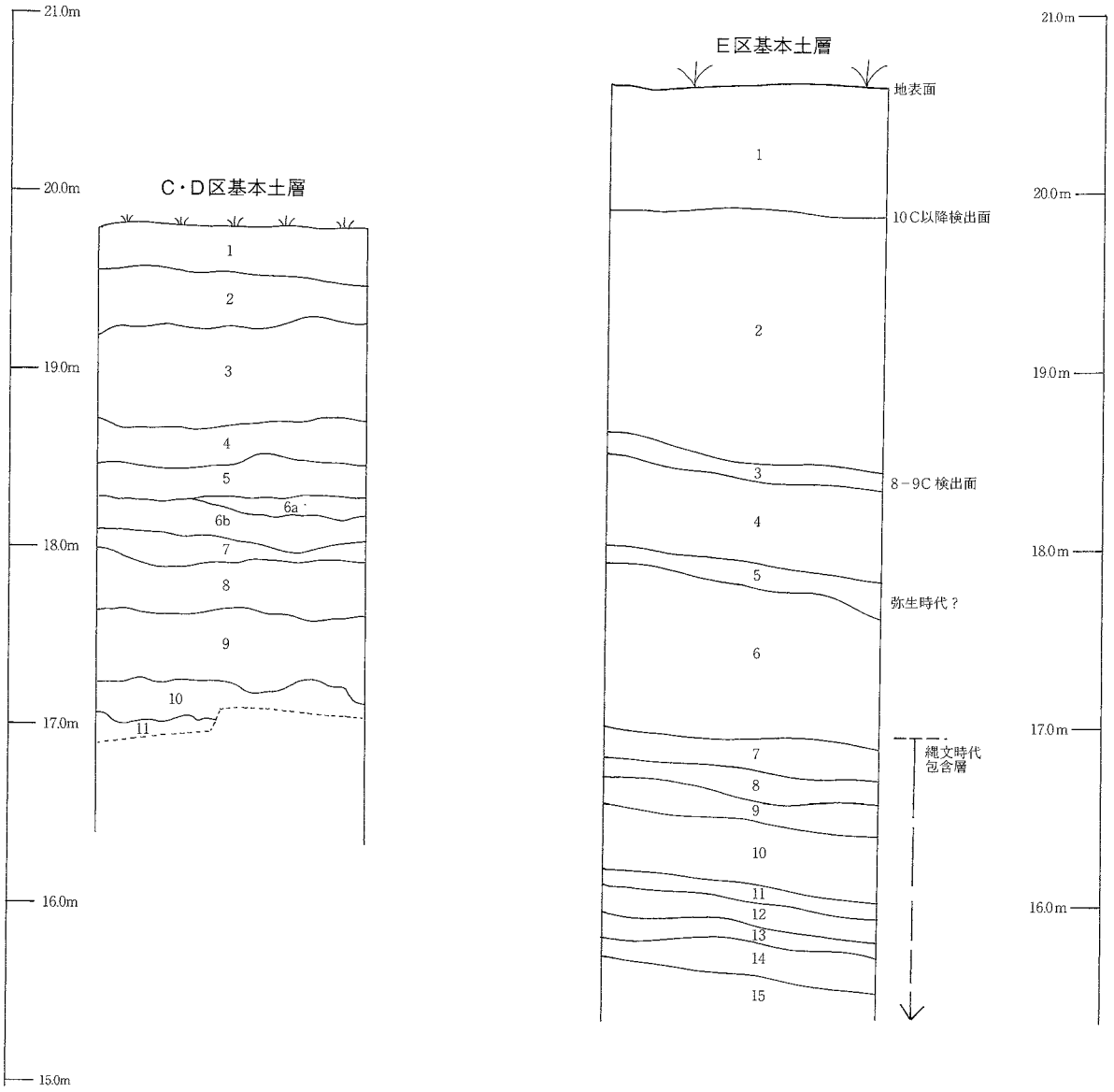
岩手県農政部北上山系開発室　1975「北上山系開発地域土地分類基本調査　千厩」
岩手県農政部北上山系開発室　1978「北上山系開発地域土地分類基本調査　一関」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001「河崎の柵擬定地発掘調査報告書」第371集

3　基本土層

調査区が広大でまた堆積土層も非常に厚く、遺跡内の基本土層を単独地点で示すのは非常に難しい。また年度、地点も多岐に渡り、調査員により、土層の把握も異なっている点がある。ここでは、平成15年度のC区、D区の共通の基本土層とE区の基本土層を示す。

近世～古代の遺構検出面は２面ある。１面目はC・D区の３層上面、E区の２層上面である。それぞれこの検出面よりやや下には十和田a降下火山灰層が存在し、第１検出面は十和田a火山灰降下以後10世紀前半頃と判断できる。

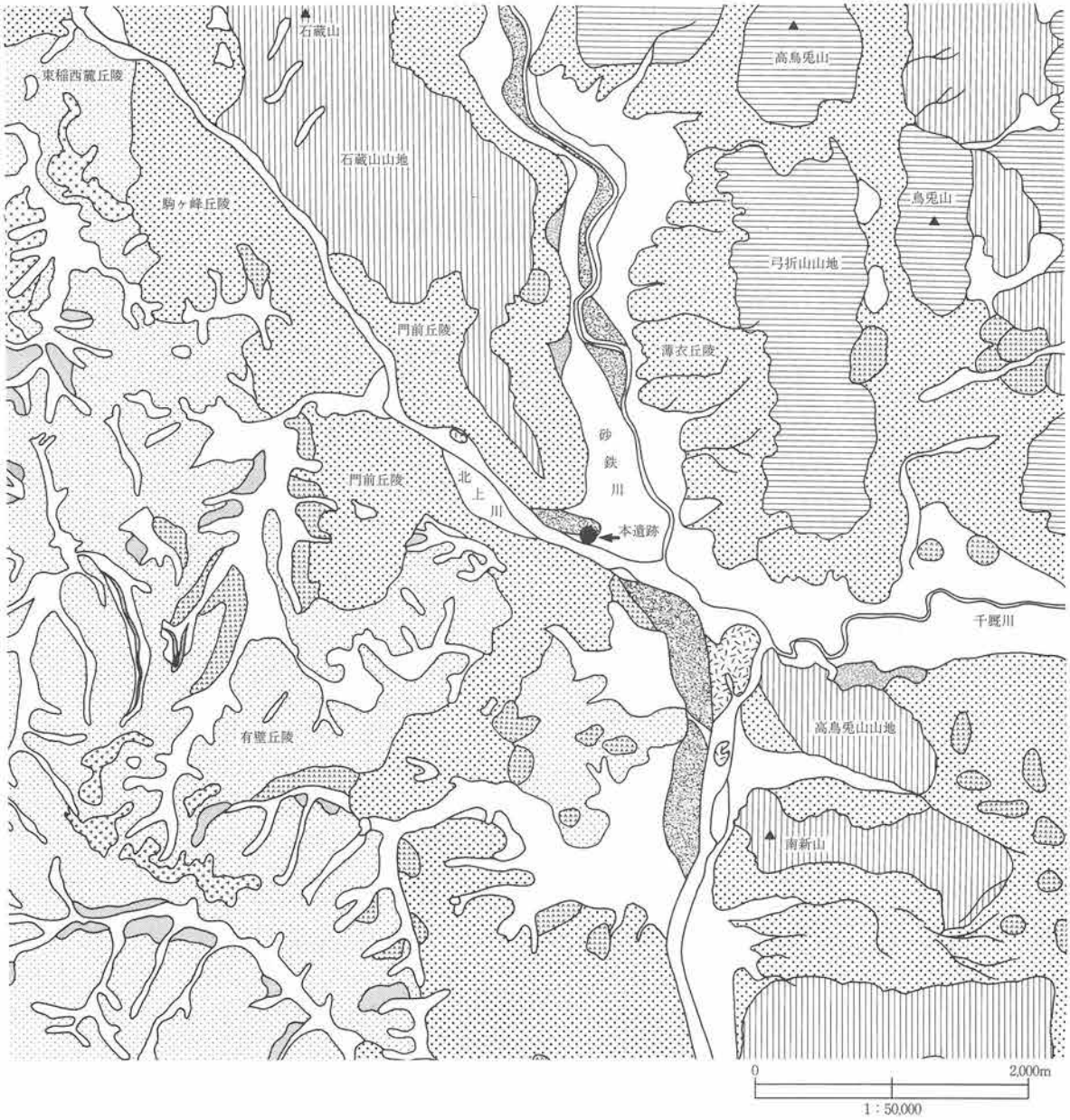
第２検出面はC・D区の５層上面、E区の３層上面である。この面に散布する土師器、須恵器、遺構の年代観から８世紀後半～９世紀初頭頃の面と判断される。第１検出面との間には１～２mの遺物の混入のない砂が堆積している。



C・D区基本土層（ⅢF66付近）
1．10YR4/2～5/6灰黄褐色～黄褐色土　砂利が多量混入、しまり弱い。
2．10YR3/2黒褐色土　砂粒40％含む、しまり弱い。
3．10YR5/6黄褐色砂　しまり弱い、洪水堆積層、上位に十和ａ火山灰を含む。
4．10YR4/4褐色砂　粘土粒10％混入、しまり弱い。
5．10YR4/4褐色砂　粘土粒２％混入、しまり弱い。第２遺構検出面
6a．10YR4/4褐色土　炭化物粒５％混入、しまり中程度。
6b．10YR4/4褐色土　水酸化鉄を含む、しまり中程度。
7．10YR4/4褐色土　炭化物粒５％混入、しまり中程度。
8．10YR4/4褐色土　炭化物粒２％混入、砂粒５％混入、しまり強い。
9．10YR4/4褐色土　炭化物粒１％、水酸化鉄２％含む、しまり中程度。
10．10YR4/4褐色砂　粘土粒２％混入、しまり弱い。
11．10YR3/4暗褐色土　炭化物粒10％混入、縄文土器を包含する。

E区基本土層（ⅠA05付近）
1．10YR4/4褐色土　礫、近代遺物など混入。
2．10YR5/4にぶい黄褐色砂　上部に十和田ａ火山灰を含む。
3．10YR3/3暗褐色土やや粘性がある。部分的に10YR4/2灰黄褐色土と炭化物粒を包含する。
4．10YR5/4にぶい黄褐色砂　砂の粒子が粗い部分と細かい部分がある。部分的に炭化物を含む。10YR6/1褐灰色のグライ化したした土が縞状に入る。
5．10YR4/4褐色土　やや粘性がある。炭化物粒少量混入。
6．10YR4/6褐色土　やや粘性がある。炭化物粒が少量混入、縄文土器片を少量含む。
7．10YR4/6褐色土　炭化物粒を多量混入。
8．10YR4/6褐色砂　混入物ほとんどなし。
9．10YR4/6褐色土　やや粘性がある。部分的に炭化物粒、10YR4/2灰黄褐色土多量に混入。
10．10YR4/6褐色砂　混入物ほとんどない。
11．10YR4/3にぶい黄褐色土　粘性あり炭化物粒少量混入、しまりあり。
12．(10YR4/3) にぶい黄褐色土　粘性あり炭化物粒微量混入、縄文土器片包含。
13．(10YR4/4) 褐色砂　湿っている、炭化物粒少量混入。
14．(10YR4/4) 褐色土　粘性あり、しまりあり。部分的に10YR4/2灰黄褐色土ブロック微量混入。
15．(10YR4/4) 褐色砂　しまりあり。混入物ほとんどなし。

第３図　基本土層



第４図　遺跡周辺の地形分類図

E区においては５層付近で後北土器が出土しており、弥生時代～古墳時代の層と推測される。またC･D区では11層、E区では６層下部に縄文土器片を包含しそれより下の層が縄文時代の包含層となる。C･D区の11層は地表面から３m、E区の６層下部は地表面から3.8mの深さになる。縄文時代の土器包含層の土層については、第３分冊「縄文時代編」に詳しく記している。

4　周辺の歴史的環境

河崎の柵擬定地は川崎村門崎に所在する。門崎地区は藩政時代から昭和31年まで門崎村として存続しており、行政単位としてまとまりを持つ地域である。ここでは門崎地区を中心とした歴史的環境についてふれる。

(1)　門崎地区の板碑

門崎地区には中世の石製の供養碑である板碑が多数存在する。岩手県内における板碑の分布をみると、県北部ではその数が非常に少なく、県南部に集中域があることが明瞭に看取できる。その中で門崎地区を含む川崎村には98基の板碑が存在する。川崎村に隣接する藤沢町（板碑数229基）、花泉町（板碑数375基）は岩手県内における板碑の最密集地帯で、この県南端の三町村だけで岩手県内全体の70%を占める数の板碑が存在する。川崎村の板碑数98基は、市町村別では県内第３位の数になるが、面積や藩政時代の村数を考慮にいれると、分布密度は１位の花泉町、２位の藤沢町に比較してもむしろ高いといえる。そして、さらに門崎地区には薄衣地区の36基を上回る62基の板碑が所在しており、門崎地区は岩手県内において最も板碑が高密度に分布する地区と言っても過言ではない。

川崎村の板碑については「川崎村石造文化財第一部石塔婆（板碑）」（川崎村教育委員会1984）にまとめられている。本文も、これを参照、引用した部分が多い。板碑の数量、所在地も基本的にはこの文献に準拠している。この文献によると門崎地区では８カ所に合計62基の板碑が所在する。

布佐の最明寺には境内に15基の板碑が所在する。この内紀年銘板碑は６基あり、岩手県最古の紀年銘を持つ建長八（1256）年の板碑が存在する。この碑は双式碑とされ、対となる紀年銘のない胎蔵界大日如来の種子を持つ碑も含め１基にカウントしている。他の紀年銘板碑は永仁四（1296）年、徳治三（1308）年、延慶二（1309）年、延慶三（1310）年、応安五（1372）年で、鎌倉期のものがほとんどである。この他に紀年銘のないものが９基存在する。

門崎駅裏堤端の鈴木広家墓地には19基が所在するが、紀年銘を持つものは存在せず、種子のみの小型のものが多い。

千手堂の佐々木家宅地の板碑は、門崎村史（門崎村史編纂委員会1956）によると、「碑は昭和６年佐々木氏宅焼失路整理の際発見したもので６基あり・・」と記されている。紀年銘のある碑は１基あり、永和五（1379）年 四月六 の銘がある。種子は勢至菩薩である。また紀年銘のない種子「勢至菩薩」の碑には妙見大姉の文字があるが、門崎村史には「妙見大姉には金箔があった」とある。

千手堂梅ヶ森屋敷千葉養右衛門裏崖には１基が所在し、康永二（1341）年の紀年銘を持つ種子「阿弥陀如来」の板碑である。父「平朝臣沙弥光連」の没35日目に供養した旨の意趣文が刻まれている。

千住堂千葉五郎氏宅裏には紀年銘の無い種字「阿弥陀如来」の碑が１基ある。

千手堂寺屋敷の小野寺喜十郎氏宅地には紀年銘の無い種子「金剛界大日如来」の碑が１基ある。「川崎村石造文化財」（川崎村教育委員会1984）ではこれら千手堂所在の板碑の所在地を「千手堂　観音堂」と一括の所在地で示している。この「観音堂」は千手堂に所在していたが、文治五年（あるいは元和二

年）に焼亡し、6体の焼損仏がある旨の記述が「川崎村の主な仏像」（川崎村教育委員会1982）に記されている。安永風土記には「観音堂　子名　千手堂・・本尊　木仏立像　御長一尺八寸」の記載がある。

神平の塚の森には塚の上に板碑が立っているとされる。塚の森は塚に古くから石の長持ちが入っていると伝えられているという。安永風土記には「一、古塚三つ・・　塚の森　一、供養塚　高さ一丈廻り十三間半」と記されている。この塚の上に9基の碑が所在していたという。安永風土記には塚の森に永和四(1378)年10月15日銘の板碑が所在した旨が記されている。しかしこの永和四年の紀年銘の板碑の所在が「川崎村石造文化財」の調査時に確認できなかったという。昭和31年刊行の「門崎村史」でもすでに所在が不明と記されている。他に紀年銘の無い板碑が8基所在している。

御滝の佐藤武家墓地には紀年銘の無い板碑が3基所在している。種子は「阿弥陀如来」が1基で、他の2基は種子不明である。鳥畑家墓地には紀年銘のない板碑が2基所在する。種子は「胎蔵界大日如来」と「阿弥陀如来」である。

妻神あるとされる板碑は、「岩手の石塔婆」（司東真雄1985）に、陰刻の地蔵絵と「二年」の文字が記された碑が、「二十人分の人骨と馬一頭分の骨出土」という文を添え掲載されている。板碑の範疇に入るものかは筆者には判断できない。

銚子葛西長三郎家墓地は今回の「河崎の柵擬定地」調査区内に所在する。「川崎村石造文化財」では紀年銘のある碑が2基、紀年銘の無い碑が2基の所在が記されている。紀年銘は文保二(1318)年と徳治年中（1306～1308）である。徳治碑は調査時には所在を確認できなかったと記されている。

(2)　門崎地区の城館

岩手県中世城館跡分布調査報告書（岩手県教育委員会　1986）には門崎地区の中世城館が6カ所（河崎の柵擬定地を除く）記載されている。これをもとに門崎地区の中世城館を紹介する。

大河戸館は字千手堂に所在する。標高204mの山稜頂部に立地し、城域は東西200m×南北150mの範囲で東端には尾根を切る堀切がある。城主、年代を伝える文献は無く、永禄年中秋山左京太夫頼重の居館（門崎村史）、前九年の役の安倍貞任の陣跡などの言い伝えがあるという。

布佐館は字布佐に所在する。JR岩ノ下駅の南約1.3kmの丘陵に立地し、北約250mには岩手県最古の板碑「建長の碑」の所在する最明寺がある。城域は東西260m、南北180mと推定される。「仙台領古城書上」には「東西18間南北12間二ノ丸東西20間南北20間城主布作伊豫守」と記されている。

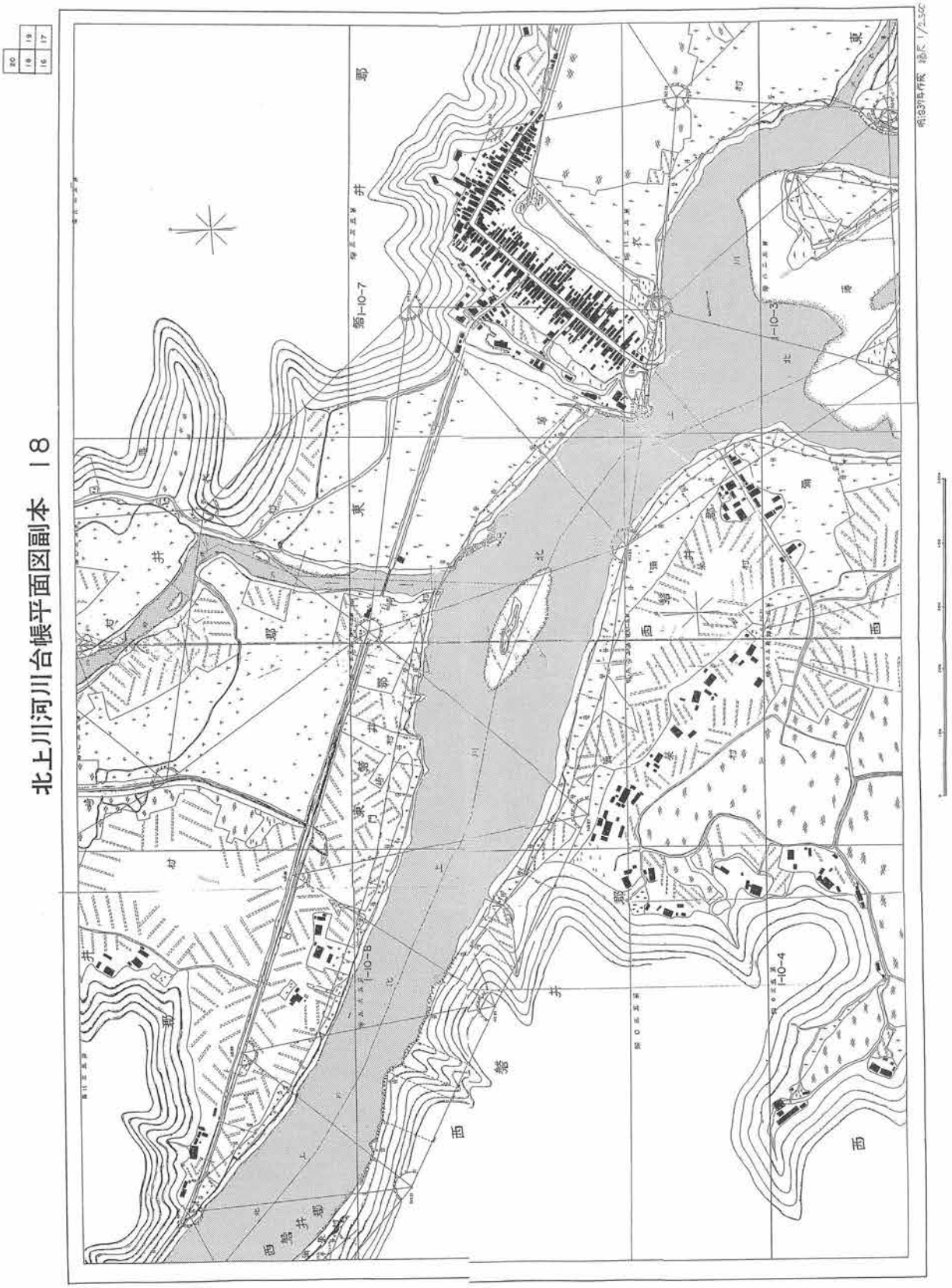
古舘は字館畑に所在する。JR門崎駅の北東約2kmの丘陵上に立地する。丘陵の裾に曹洞宗長松山常堅寺がある。推定城域は東西350m、南北310mである。尾根頂部を空堀で区切られた3つの郭がありそれを帯郭が取り巻いている。言い伝えによると「門崎城」が完成するまでの居館であるという。また「川崎村の歴史」（小林文夫1990）には、「薄衣千葉氏3代清綱の次男胤村（1386年没）を始祖とする前期門崎氏の居城が古舘と思われるが未詳」とある。

門崎城は字館畑に所在する。JR門崎駅の北東約1.7kmの丘陵上に立地する。北250mには古舘がある。最高所に主郭を設け、段々に郭を持っている。南側は沢により急峻な崖になっている。「仙台領古城書出」には「山門崎城東西18間南北30間二ノ丸東西15間南北12間城主門崎安芸。末孫御家中ニ在。門崎長之助カ」とある。砂鉄川流域では山吹城（大東町大原）、松川城（東山町松川）と並び最大級の城館である。「河崎の歴史」では長坂城主（東山町長坂）千葉頼胤の五男胤重が後期門崎氏の始祖で、胤重は当初気仙郡浜田城主となって「浜田氏」を名乗り、その11代目の千葉胤糺が浜田城より門崎城に移り「門崎氏」を名乗った旨が記されている。

馬場館は字千手堂に所在するが詳細不明である。小館は字館畑に所在する。標高20～35mの丘陵端部に立地し、規模150×50mとされる。

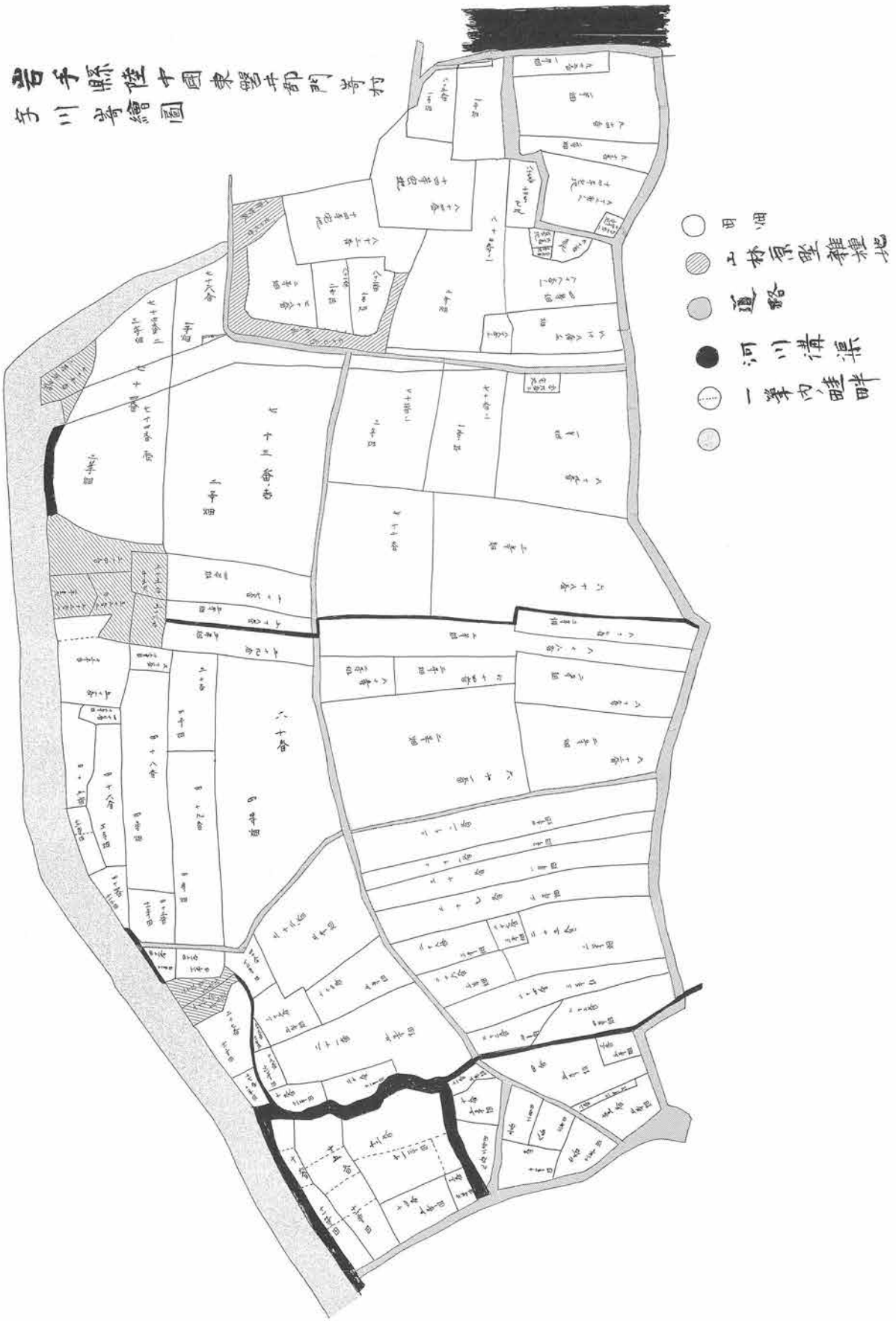
引用参考文献

岩手県企画開発室　1978「北上山地開発地域　土地分類基本調査（一関）」　岩手県
岩手県教育委員会　1986「岩手県中世城館跡分布調査報告書」第82集
川崎村教育委員会1984「川崎村石造文化財第一部石塔婆（板碑）」
川崎村教育委員会1982「川崎村の主な仏像」
門崎村誌編纂委員会1956「門崎村誌」
金野清一ほか　1990「岩手県の地名」日本歴史地名体系３　平凡社
司東真雄1985「岩手の石塔婆」モノグラム社



岩手河川国道事務所提供

第５図　明治時代の遺跡周辺（河川台帳副本）



第６図　門崎村字川崎地籍図（川崎村税務課提供）

第７図　門崎村字銚子地籍図（川崎村税務課提供）

Ⅲ　調査と整理の方法

1　野外調査の方法

グリッドの設定

グリッドは平面直角座標のX系（日本測地系）に沿って設定した。大グリッドは一辺50mとしている。東西ラインは西から東に向かってA、B、C、D、E、F・・・・と50m毎に付し、南北ラインは北から南へ向かって0、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ・・・・と50m毎に付している。大グリッドの呼称は南北ラインのローマ数字と東西ラインのアルファベットの大文字との組み合わせで「ⅡB」、「ⅣD」というように表す。大グリッドはさらに内部を一辺５mの小グリッドに細分している。大グリッド内は100の小グリッドに分割されている。小グリッドは北西隅から01、02、03、04、05、06、07、08、09、10と東側に向かって付し、２列目は西から東に向かって11、12、13、14、15、16、17、18、19、20と付している。10列目は91、92、93、94、95、96、97、98、99、100となる。各グリッドは大グリッドと小グリッドの組み合わせで「ⅡB35」「ⅣF18」とういうように呼称する。各グリッドの名称はそのグリッドの北西隅の杭にその呼称を付している。

大グリッド南北軸のⅠとⅡの境界ラインはX＝－121705m（日本測地系）、大グリッド東西軸AとBの境界ラインはY＝36400m（日本測地系）である。ⅠA01グリッドの北西隅杭の値はX＝－121655m、Y＝36350m（日本測地系）である。

調査区区分

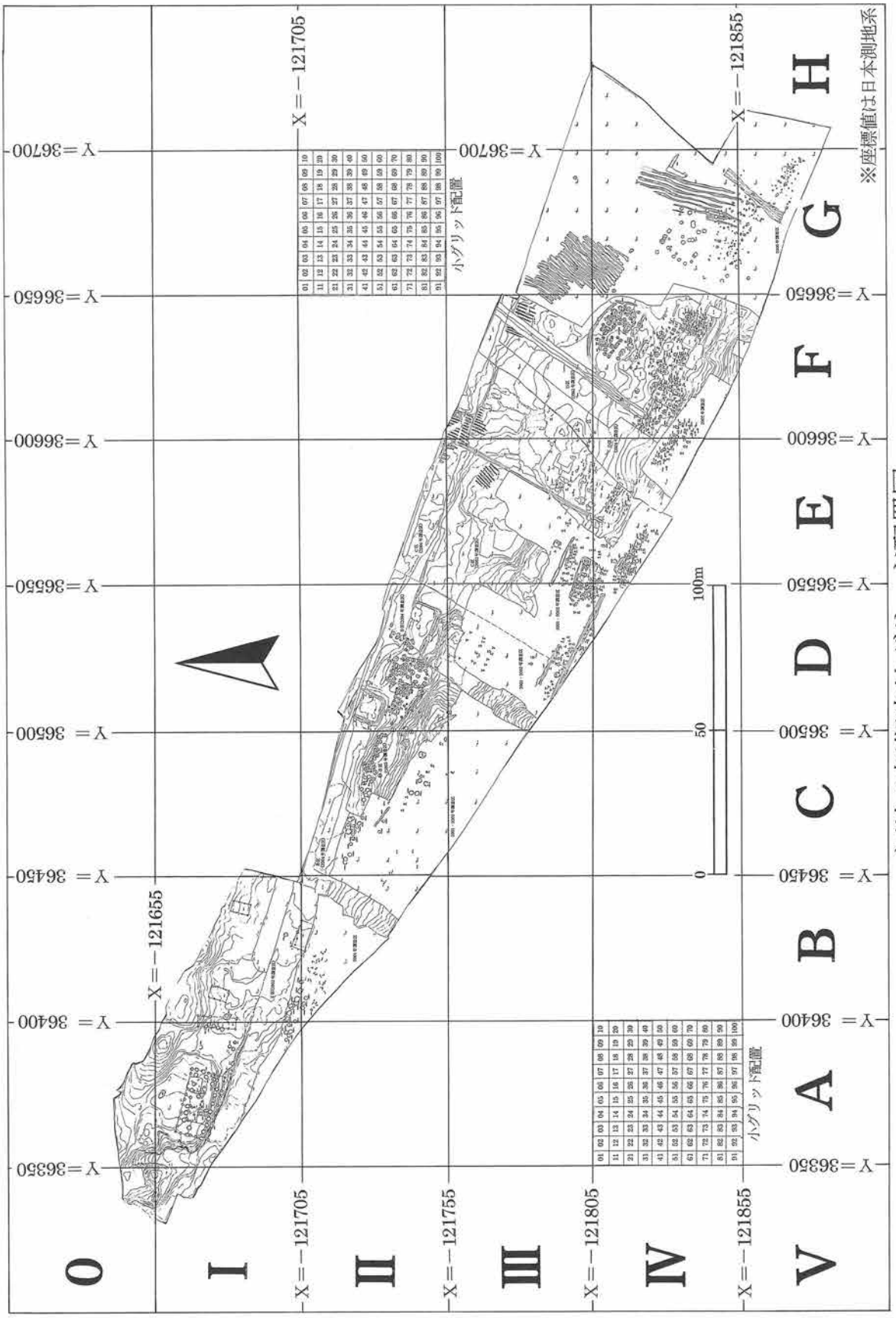
調査年度が４年にわたり、調査区が広大なため、平成15年度調査時より便宜的に調査区を区分し調査をおこなった。調査区区分は第９図に示してある。B区は平成15年度調査区の大グリッドⅡB、ⅡC、ⅡD、ⅢD付近である。この調査区は主に平成15年度の２班（担当　鈴木ほか）が担当した。C区は大グリッドのⅡE、ⅢE、ⅣE付近である。平成15年度は主に３班（担当　米田、村田ほか）が担当した。D区は大グリッドⅢF、ⅣF、ⅣE付近、本報告所掲載調査区の最も東側に位置する。平成15年度は主に４班（担当　川又、江藤ほか）が担当した。C区とD区との境は村道川崎３号線である。E区は調査区全体の最も西側に位置する。大グリッドのⅠA、ⅠB付近に相当する。平成15年度は１班（担当　羽柴、星、立花ほか）の担当である。

平成13年、平成14年度調査区は平成15年度に設定した調査区をまたいで連続する遺構名を付しており、調査区毎に報告するのは適切ではないと考え、平成13年度調査区、平成14年度調査区として報告する。だが平成13・14年調査区であっても、表、文章中において、それぞれB区、C区、D区に相当する地点に対して、各調査区の名称を用いている場合もある。また平成15年度当初、E区の南に接する三角形の平成13年度調査区を「A区」として設定したが、本報告書では「A区」の名称を基本的に使用していない結果となっている。

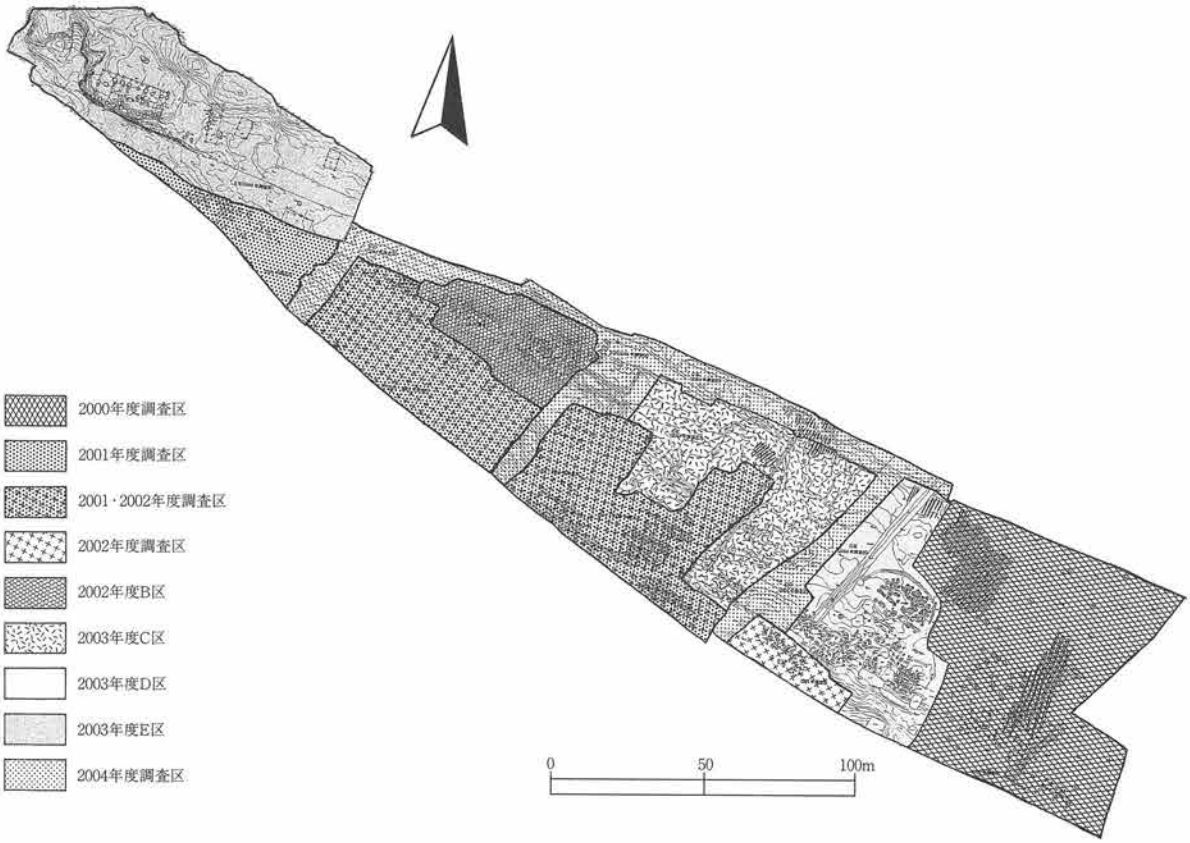
遺構の名称

遺構の名称は以下のように略号を付した。

掘立柱建物・・SB　　竪穴住居・・SI　　土坑・・SK　　溝、堀・・SD　　墓壙・・SZ
柱穴・・P　　その他の遺構・・SX



第８図　河崎の柵擬定地グリッド配置図



第９図　調査区区分図

その他の遺構SXには、畝間状遺構、自然の窪み？状遺構などがある。また現地性焼土、沢跡、石組み遺構には略号を付していない。また、調査時にSKとしたものの幾つかを検討の結果、掘立柱建物の柱穴に変更しているが、名称はSKのままで報告している。

また、調査年度、調査区が多岐にわたるため、遺構の名称の頭に調査年度、調査区名を冠して遺構名を区別している。平成13年度、平成14年度検出の遺構は「01SK10」、「02SD２」というように呼称している。平成15年度は調査区が多岐にわたるため「C区SD104」「E区SI４」というように呼称している。平成16年度調査は平成15年度の調査区に準拠し「B区SD４」、「C区SI７」というように呼称している。平成13年、平成14年調査区検出の竪穴住居跡は３棟あるが、いずれもC区に相当する地区に位置し、「C区SI１」、「C区SI２」、「C区SI３」の名称を付している。C区SD101、C区SX１は平成15年度D区から検出されたが、調査時に「C区」の名称を冠した遺構名を付し、図面実測、写真撮影等をおこなったため、混乱を避けるため遺構名はそのままで掲載している。

粗掘り・遺構検出

雑物撤去後にトレンチを設定し、遺物の包含状況、遺構の確認面を把握した。その後、遺構確認面まで重機を用いて表土を除去した。遺物を多く包含する層に関しては人力によって表土の除去をした。遺構の確認は表土を除去した面をジョレン、両刃鎌で、平滑にし、プランを確認するようにした。

遺構の精査

検出した遺構は、土層を観察するベルトを設定して掘り下げることを基本とした。掘立柱建物は、平面プランを把握した後に、柱穴の断ち割りを行うようにした。

遺物の取り上げ

遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。遺構内の遺物は必要と思われる場合、地点とレベルを記録した。またそれ以外では可能な限り埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。

実測・写真撮影

平面実測は簡易遣り方測量で、５ｍグリッドを１ｍに細分したメッシュを用いておこなった。原則として1/20の縮尺を用い、必用に応じて任意の縮尺を用いた。

写真撮影は35㎜モノクロームとカラースライドを主に使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行った。また平成14年度から平成16年度の各調査終了時にはセスナ機により空中写真を撮影した。

2　室内整理の方法

出土遺物は水洗注記を行い、必用なものは接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書掲載遺物を選び出し、登録をおこなった。

遺物実測は原則として実寸で行った。野外調査で作成した遺構実測図は、必要なものについては第２原図を作成した。その後、これらの遺構，遺物実測図のトレースを行い、種別ごとに観察表と図版を作成した。

撮影したフィルムはネガアルバムにベタ焼きの写真と一組にして収納した。カラースライドはスライドファイルに撮影順に収納した。また報告書掲載分の遺物の撮影を行い、写真図版を作成した。これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。

Ⅳ　平成13年度調査区の遺構

1　平成13年度調査区概観

平成13年度調査区は西側調査区と中央部調査区、東側調査区の３地点に分かれている。西側調査区は大グリッドのＩＡ、ⅡB付近、中央部はⅡC、ⅢC付近でB区の南部に相当する。東側調査区はⅢD、ⅢE付近で概ねC区の南部に相当する。西側調査区は平成13年度の単独年次の調査であるが、中央部、東側調査区は平成14年度調査にまたがる調査区域である。

平成13年度の野外調査期間は８月１日～11月９日である。野外調査担当者は溜浩二郎である。調査区全体の地形は、地形図が作製されていないため詳細は不明であるが、北上川に向かう緩斜面と推測される。

報告書掲載の遺構図面の作成、文章記述は鈴木、川又、羽柴がおこなっているが、残された記録が十分とはいえず、解釈に苦慮する点も多かった。野外調査者は01SX１～４に「竪穴状」名称を冠していた。しかし、これらの遺構が、住居跡、竪穴建物に成り得る要素は全く存在せず、また、その定義も調査者は全く示していない。「竪穴状」の名称の使用は遺構の性格に誤解を招く恐れがあるため、本報告書では使用しないことにした。形状からは土抗（SK）に分類するのが妥当であろうが、これも混乱を招く恐れがあり、やむを得ず、「SX」の遺構名を冠して報告する。調査時の１号竪穴状遺構、２号竪穴状遺構、３号竪穴状遺構、４号竪穴状遺構はそれぞれ、01SX１、01SX２、01SX３、01SX４の名称に変更する。掲載した遺構は竪穴住居（SI）１棟、掘立柱建物（SB）２棟、土坑（SK）30基、上記のSX遺構４基、溝（SD）４条である。

2　竪穴住居（SI）

C区SI１竪穴住居　（第10図、写真図版10・11）

〔位置〕平成13年度調査区のⅣE02グリッドに位置する。平成13年度調査区の検出であるが、C区に相当する位置にあるので、C区の名称を冠した。

〔検出面〕第２検出面で検出したと推測される。

〔重複関係〕01SD３と重複し、これよりも古い。

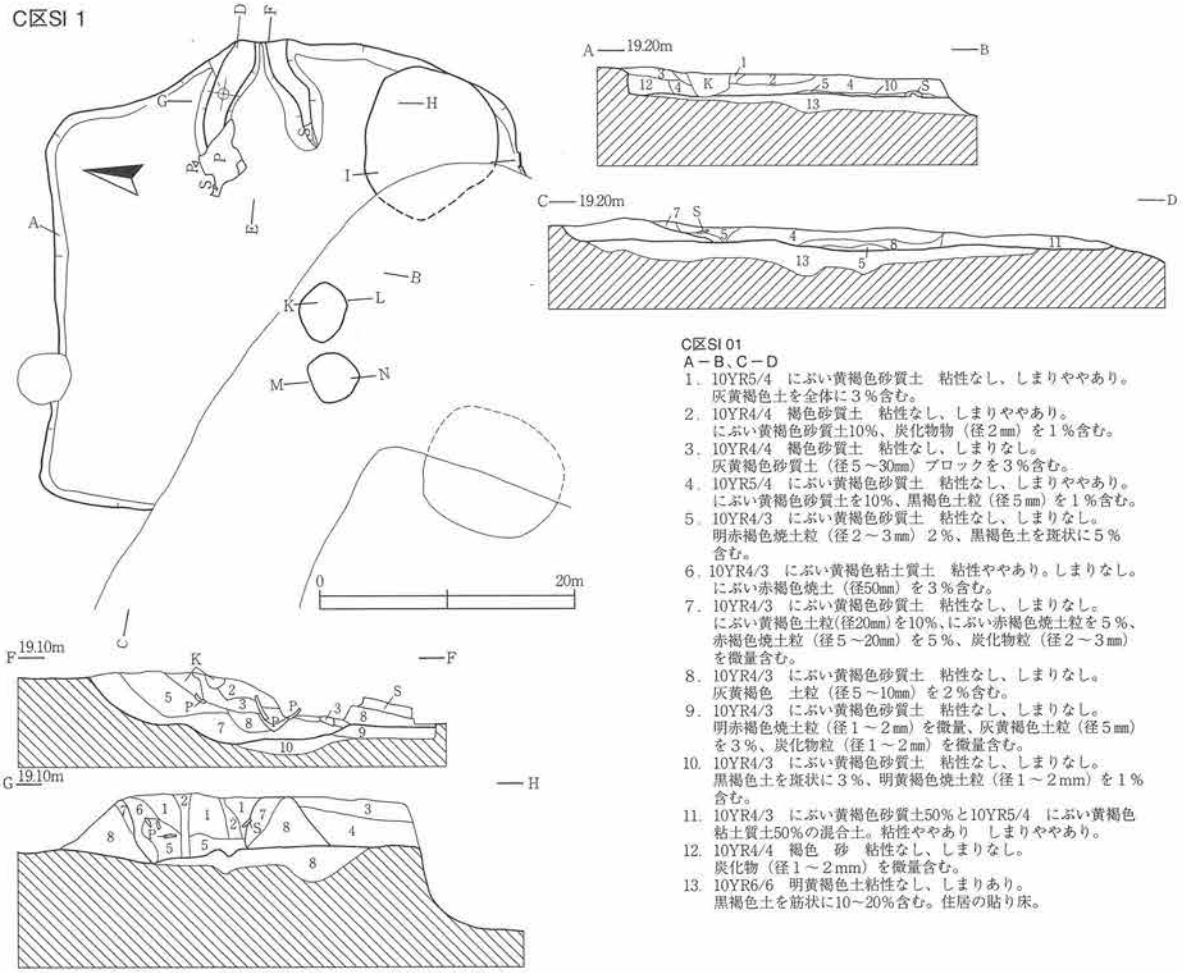
〔形状・規模〕01SD３に切られ、遺構の1/2以上は失われている。残存部分から、平面形は方形と推定される。規模は、残存する東西方向が3.5mである。検出面から床面までの深さは、北壁22cm、東壁18cmである。

〔埋土〕褐色～黄褐色砂質土を主体とする。カマド周辺には、暗褐色粘土質土の貼床が施される。一方、カマドから離れた場所には貼床がなく、埋土と床面・地山の区別が非常に困難である。

〔カマド〕東壁面のやや南側に位置する。煙道の主軸方向はN－30°－Wである。芯材の礫と、構築土の暗褐色土が残存していた。構築土には土師器甕の小破片を含む。燃焼部焼土は、50×45cmの範囲で広がり、床面から最大５cmの深さまで被熱している。

〔床面施設〕土坑１基、小土坑２基を検出した。土坑はカマド脇に位置する。開口部径104cm、深さ30cmで、貯蔵穴と考えられる。小土坑２基は、いずれも埋土に焼土ブロックを含む。柱穴は確認できなかった。

C区SI 1



C区SI 01

A－B、C－D

1. 10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
   灰黄褐色土を全体に３％含む。
2. 10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
   にぶい黄褐色砂質土10%、炭化物物（径２㎜）を１％含む。
3. 10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
   灰黄褐色砂質土（径５～30㎜）ブロックを３％含む。
4. 10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
   にぶい黄褐色砂質土を10%、黒褐色土粒（径５㎜）を１％含む。
5. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
   明赤褐色焼土粒（径２～３㎜）２%、黒褐色土を斑状に５％含む。
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質土　粘性ややあり。しまりなし。
   にぶい赤褐色焼土（径50㎜）を３％含む。
7. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
   にぶい黄褐色土粒(径20㎜)を10%、にぶい赤褐色焼土粒を５%、赤褐色焼土粒（径５～20㎜）を５%、炭化物粒（径２～３㎜）を微量含む。
8. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
   灰黄褐色　土粒（径５～10㎜）を２％含む。
9. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
   明赤褐色焼土粒（径１～２㎜）を微量、灰黄褐色土粒（径５㎜）を３%、炭化物粒（径１～２㎜）を微量含む。
10. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
    黒褐色土を斑状に３%、明黄褐色焼土粒（径１～２mm）を１%含む。
11. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土50%と10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質土50%の混合土。粘性ややあり　しまりややあり。
12. 10YR4/4　褐色　砂　粘性なし、しまりなし。
    炭化物（径１～２mm）を微量含む。
13. 10YR6/6　明黄褐色土粘性なし、しまりあり。
    黒褐色土を筋状に10～20%含む。住居の貼り床。

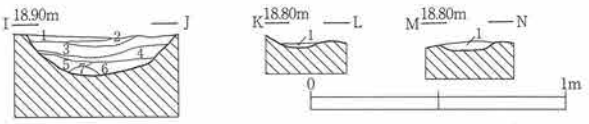
K・・・撹乱層

E－F

1. 10YR3/3　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
   炭化物片（径５㎜）を微量含む。
2. 10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
   炭化物片（径７～10㎜）を３%、赤褐色焼土粒を微量含む。
3. 10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
   炭化物片（径６㎜）微量含む。２層より濃色。
4. 10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
5. 7.5YR3/3　暗褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
   明赤褐色焼土を10%含む。
6. 5YR4/4　にぶい赤褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
7. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性あり、しまりあり。
   赤褐色焼土を10～20%含む。炭化物物微量含む。
8. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
   炭化物粒（径２㎜）を微量含む。
9. 10YR6/6　明黄褐色土粘性なし、しまりあり。
   黒褐色土を筋状に10%含む。住居の貼り床。
10. 7.5YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
    カマドの燃焼痕。

G－H

1. 10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
   赤褐色焼土を２～３%含む。
2. 10YR3/3　暗褐色土　やや砂質　粘性なし、しまりあり。
   赤褐色焼土を１～２%含む。
3. 10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりあり。
   炭化物片（径６㎜）微量含む。
4. 10YR3/3　暗褐色　砂質土　粘性なし、しまりあり。
   炭化物片（径４～７㎜）を微量含む。
5. 7.5YR3/3　暗褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
   赤褐色焼土粒を２%含む。
6. 10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりあり。
   赤褐色焼土粒を１%含む。
7. 5YR4/4　にぶい赤褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
   にぶい黄橙色土を20～30%含む。カマドの構築土。
8. 10YR6/4　にぶい黄褐色土　粘りなし、しまりあり。
   赤褐色焼土（径10㎜）を微量含む。カマドの構築土。
9. 10YR6/6　明黄褐色土　やや砂質　粘性あり、しまりあり。
   赤褐色焼土（径８㎜）を微量含む。



I－J

1. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
   炭化物片（径４～５㎜）を１%、明赤褐色焼土を微量含む。
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
   橙色焼土を微量含む。
3. 10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりあり。
   橙色焼土粒（径４～８㎜）を１%、炭化物物（径４～８㎜）を１%、黒褐色土を３%含む。
4. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
   にぶい黄褐色土を10%含む。
5. 10YR3/4　暗褐色土　やや砂質　粘性なし、しまりあり。
   暗赤褐色焼土を１～２%、炭化物を１～２%含む。
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
   暗赤褐色焼土を微量含む。
7. 10YR3/4　にぶい黄褐色　砂　土粘性なし、しまりなし。

K－L

1. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
   赤褐色焼土を30%、炭化物粒（径５～８㎜）を微量含む。

M－N

1. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
   赤褐色焼土を20～30%、炭化物粒（径２～３㎜）を微量含む。

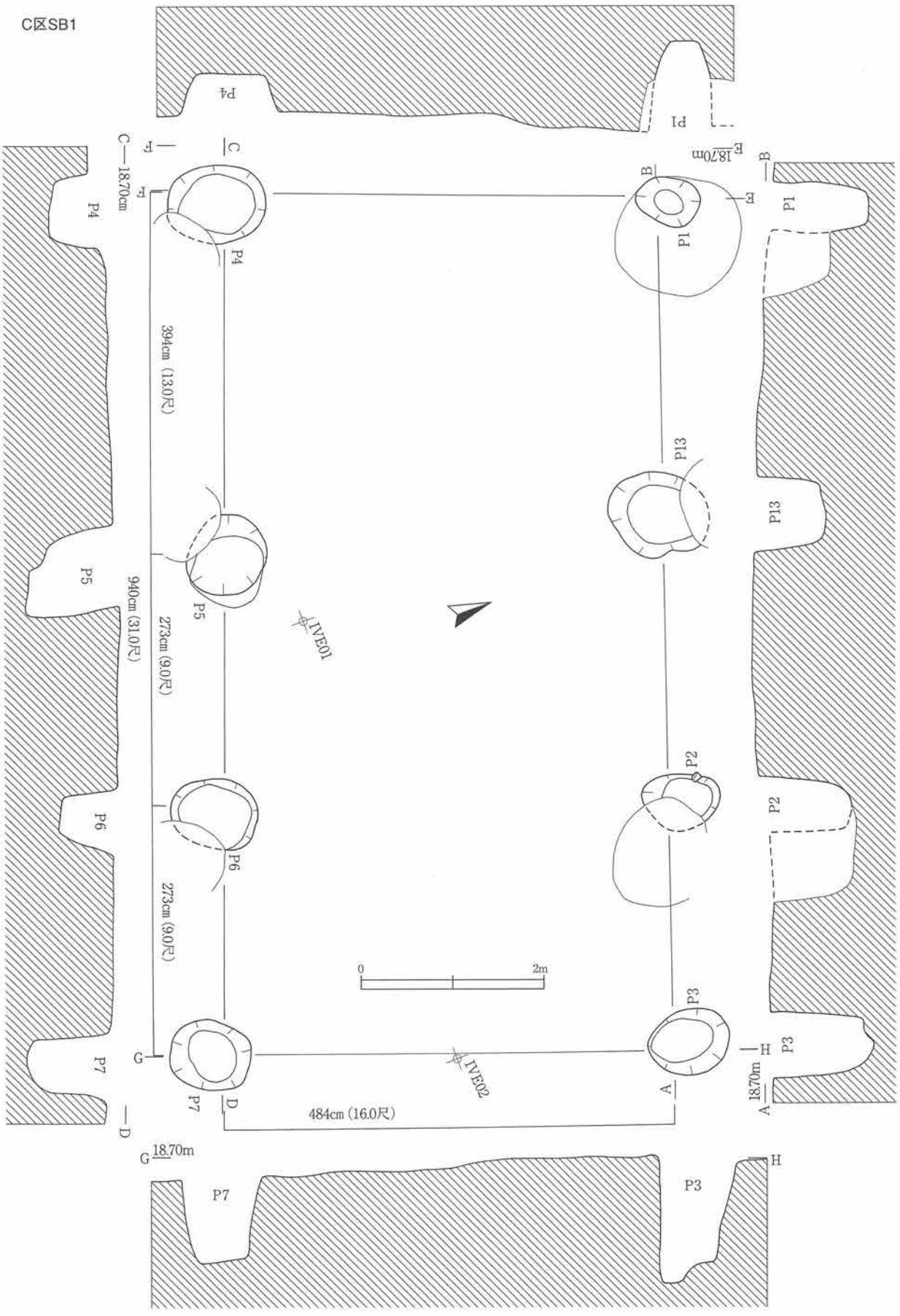
第10図　C区SI1（平成13年検出）

〔出土遺物〕土師器坏２点（１・２）、須恵器坏４点（３～６）、土師器長胴甕４点（７～10）、須恵器長頸壺１点（11）が出土した。
〔時期〕出土した土師器、須恵器から８世紀末～９世紀初頭と推測される。

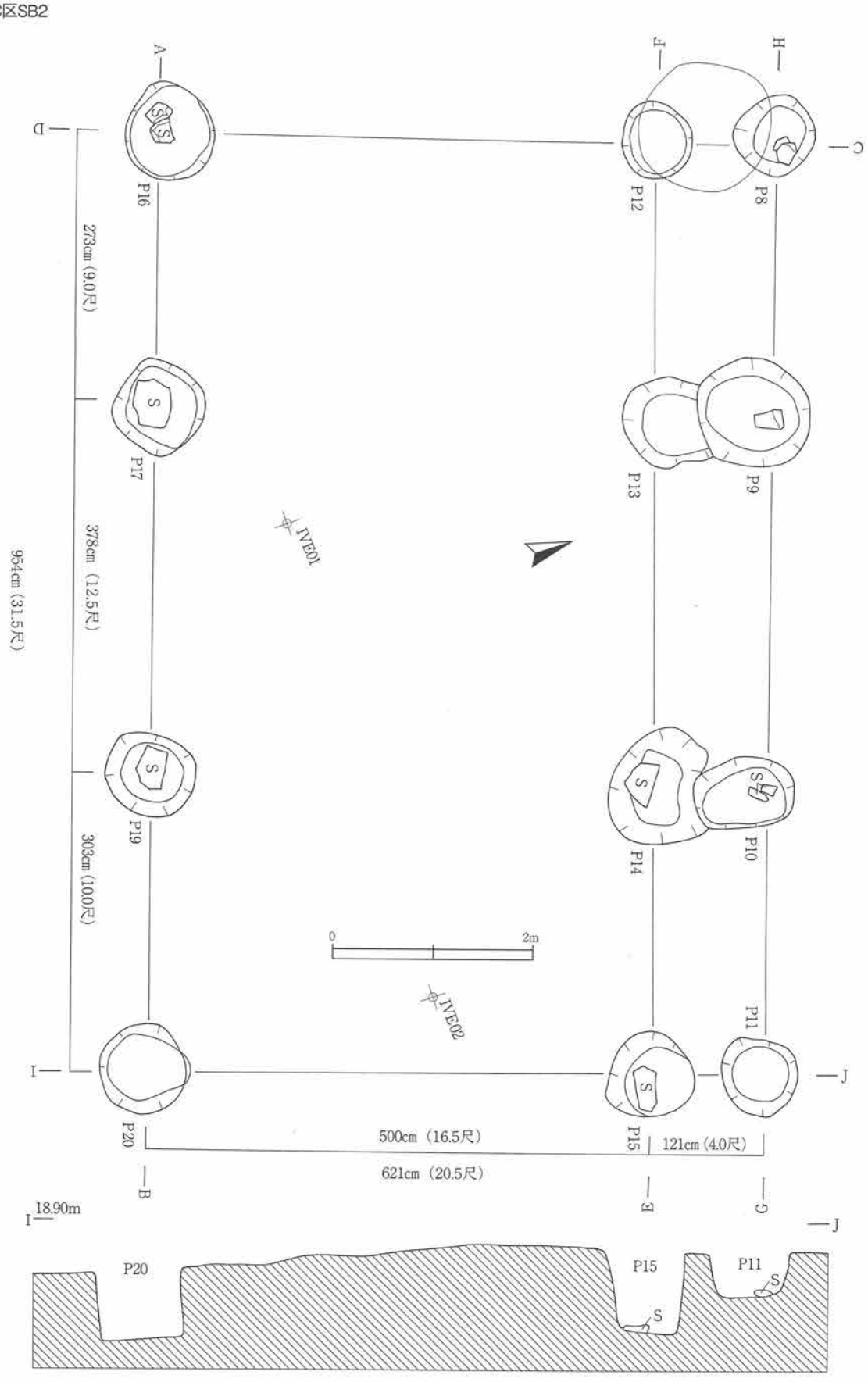
2　掘立柱建物（SB）

C区SB１掘立柱建物　（第11図、写真図版12）
〔位置〕C区ⅣD10､20、ⅣE01､02・11グリッドに位置する。平成13年度調査区の検出であるが、C区に相当する位置にあるので、C区の名称を冠した。
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き940cm、梁間484cmで、面積は45.5㎡（13.8坪）である。８個の柱穴（P１～７・13）を使用した。
〔柱穴〕柱痕は確認できなかった。礎盤はいずれの柱穴からも検出されなかった。
〔建物方位〕桁行きの軸方向は、N－73°－Eである。
〔柱間寸法〕桁行きでは､273cm（9.0尺）を多用している。
〔重複関係〕C区SB２とプランが重複し、P２がP14に、P４がP16に、P５がP17に、P６がP19に、それぞれ切られ、本建物がC区SB２よりも古い。C区SB３ともプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いはない。
〔出土遺物〕なし。
〔付属施設〕01SD３が本建物構築の際の平場を造成するための掘り込みと推測される。
〔建物の性格〕不明である。
〔時期〕重複関係から、C区SB２よりも古い。所属時期は中世～近世と推測されるが詳細は不明である。

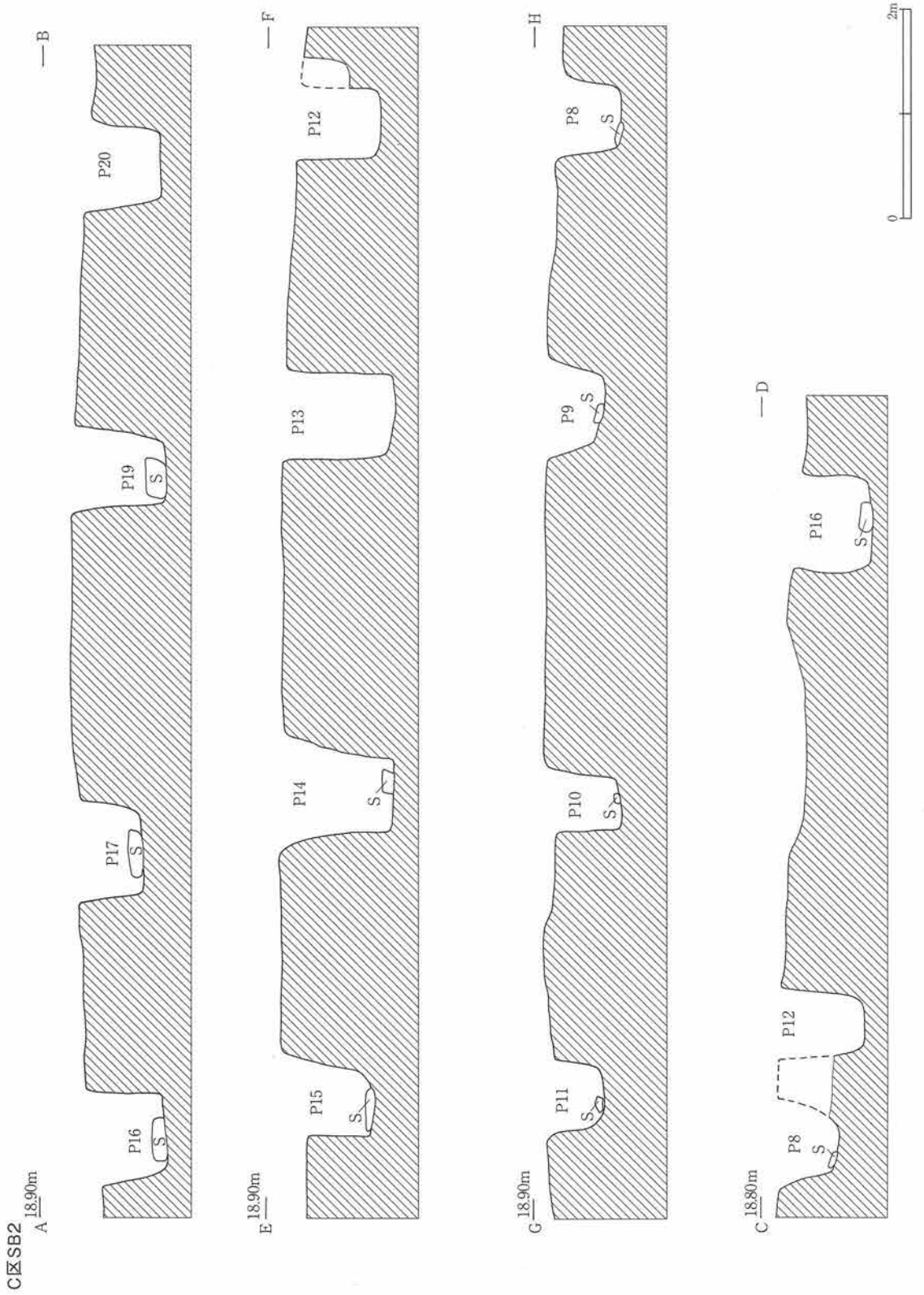
C区SB２掘立柱建物　（第12・13図、写真図版12）
〔位置〕C区ⅣD10､20、ⅣE01､02・11グリッドに位置する。平成13年度調査区の検出であるが、C区に相当する位置にあるので、C区の名称を冠した。
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔平面形式〕掘立柱建物である。規模は、桁行き954cm、梁間621cmで、面積は59.24㎡（17.9坪）である。12個の柱穴（P８～17・19・20）を使用した。上屋柱と下屋柱からなる構造である。
〔柱穴〕柱痕は、確認できなかった。P８～10・14～17・19の底面には礎盤が置かれていた。
〔建物方位〕桁行きの軸方向は、N－75°－Eである。
〔柱間寸法〕桁行きの柱間寸法は273cm（9.0尺）、378cm（12.5尺）、303cm（10.0尺）と不規則で、基準寸法は見出せなかった。
〔重複関係〕C区SB１とプランが重複し、P14がP２を、P16がP４を、P17がP５を、P19がP６を、それぞれ切っている。SB３ともプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いはない。
〔出土遺物〕P15から凝灰岩製の銭の模造品（6014）が出土した。
〔付属施設〕01SD３が本建物構築の際の平場を造成するための掘り込みと推測される。
〔建物の性格〕不明である。
〔時期〕重複関係から、C区SB１より新しい建物である。所属時期は中世～近世と推測されるが詳細は不明である。



第11図　C区SB1（平成13年検出）



第12図　C区SB2①（平成13年検出）



第13図　C区SB2②（平成13年検出）

4　土　　坑（SK）（SX）

01SK１土坑　（第14図、写真図版13）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣE22グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径159×140cm、底部径90×88cmで、深さは30cmを測る。

〔埋土〕５層に分けられる。上位には暗褐色土、下位にはにぶい黄褐色粘土質土が堆積する。

〔重複関係〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK２土坑　（第14図、写真図版13）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣE01グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径138×89cm、底部径77×70cmで、深さは24cmを測る。

〔埋土〕６層に分けられる。上～中位には粘性の強い灰黄褐色粘土が、底面付近には黒褐色土が堆積する。角礫多く含む。

〔重複関係〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK３土坑　（第14図、写真図版13）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣE03グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径105×82cm、底部径72×56cmで、深さは22cmを測る。

〔埋土〕２層に分けられる。灰黄褐色土を主体とし、下位には黄褐色砂が堆積する。

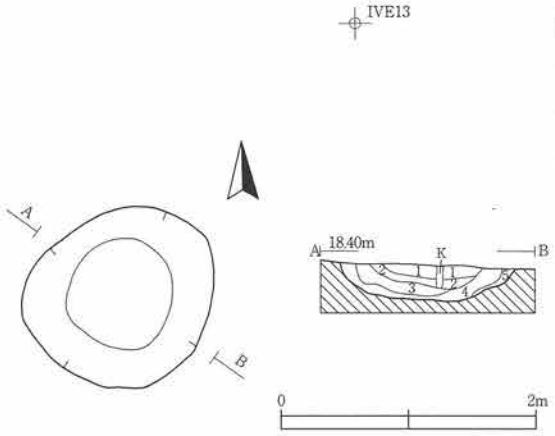
〔重複関係〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

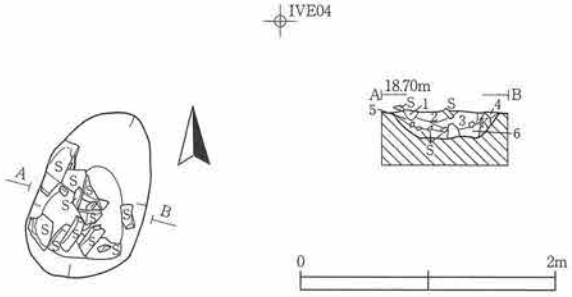
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK1



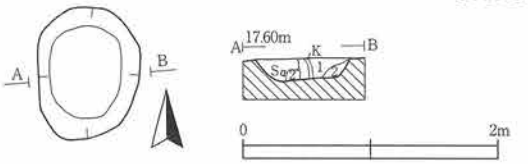
01SK1
1．10YR3/3　暗褐色土　粘性ややあり、しまりややあり。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　にぶい黄褐色粘土質土（径1㎜）を1％、炭化物粒（径5㎜）を1％、
　水酸化鉄粒を1％含む。
3．10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質土　粘性ややあり、しまりややあり。
　暗褐色砂質土を2％含む。
4．10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質土　粘性ややあり、しまりややあり。
5．10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　褐色砂質土を1％含む。
K…撹乱層

01SK2



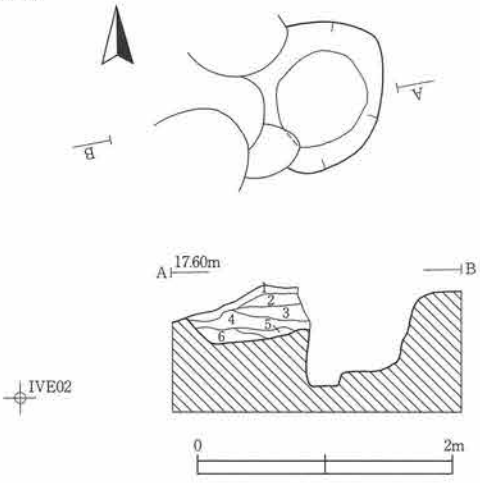
01SK2
1．10YR4/2　灰黄褐色粘土質土　粘性あり、しまりあり。
　褐色土を30％含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色粘土質土　粘性あり、しまりあり。
　炭化物粒（径5㎜）を微量含む。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性あり、しまりあり。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性あり、しまりあり。
5．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性あり、しまりあり。
6．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性あり、しまりあり。
　赤褐色焼土粒を30％含む。
K…撹乱層

01SK3



01SK3
1．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
2．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　褐色砂を3％、炭化物粒（径5～10㎜）を1％含む。

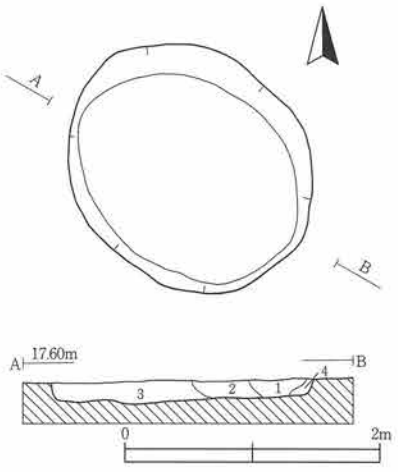
01SK5



01SK5
1．10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりややあり。
　暗褐色砂質土10％、赤褐色焼土粒（径5～10mm）を微量含む。
2．10YR4/4　褐色粘土質土　粘性なし、しまりややあり。
　赤褐色焼土粒（径5～7㎜）を1％、炭化物粒（径3～5㎜）を1％
　含む。
3．10YR4/4　褐色粘土質土　粘性なし、しまりなし。
　にぶい黄褐色粘土質土、炭化物粒（径2～10㎜）1～2％含む。
4．10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質土50％、10YR4/4　褐色粘土質土50％
　の混合土層。赤褐色焼土（径1～4㎜）ブロックを層全体に20％含む。
5．10YR5/4　にぶい黄褐色土　粘性ややあり、しまりややあり。
　赤褐色焼土粒（径2～3㎜）を1％含む。
6．10YR4/4　褐色粘土質土50％、10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質土50％
　の混合土層。粘性ややあり　しまりなし。赤褐色焼土粒を1％含む。

01SK4
1．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
2．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　褐色砂を3％、炭化物粒（径5～10㎜）を1％含む。
3．10YR2/3　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　褐色砂を1％、炭化物粒（径5～10㎜）を2％含む。
4．10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりややあり。

01SK4



第14図　01SK1～01SK5

01SK４土坑　（第14図、写真図版13）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕C区ⅢD08グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径159×140cm、底部径90×88cmで、深さは30cmを測る。
〔埋土〕４層に分けられる。黒褐色砂質土を主体とし、炭化物を少量含む。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK５土坑　（第14図、写真図版14）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕C区ⅣE02グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径115×107cm、底部径80×72cmで、深さは43cmを測る。
〔埋土〕６層に分けられる。褐色粘土質土を主体とし、中位には焼土粒が多く含まれる。
〔重複関係〕01SD３に切られる。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK６・01SK７土坑　欠番

01SK８土坑　（第15図、写真図版14）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡA09グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径112×112cm、底部径112×106cmで、深さは72cmを測る。
〔埋土〕２層に分けられる。灰黄褐色砂質土を主体とし、底面には褐色粘土質土が堆積する。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK９土坑　（第15図、写真図版14）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡA10グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径132×116cm、底部径121×102cmで、深さは46cmを測る。
〔埋土〕灰黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土である。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK10土坑　（第15図、写真図版14）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡA10グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径128×120cm、底部径106×100cmで、深さは54cmを測る。
〔埋土〕黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土である。火山灰粒を微量含む。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK11土坑　（第15図、写真図版15）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡA10グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径149×126cm、底部径130×105cmで、深さは27cmを測る。
〔埋土〕灰黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土である。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK12土坑　（第15図、写真図版15）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡA10グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径145×135cm、底部径133×125cmで、深さは67cmを測る。
〔埋土〕２層に分けられる。上位には灰黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土、下位には褐色粘土質土混じりのにぶい黄褐色砂質土が堆積する。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。

〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK13土坑　（第15図、写真図版15）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡA10グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径129×115cm、底部径118×106cmで、深さ48cmを測る。
〔埋土〕灰黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土である。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

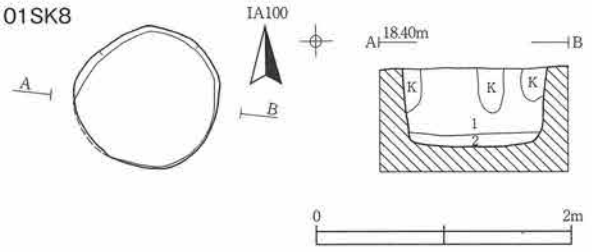
01SK14土坑　（第16図、写真図版15）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡB11グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径85×77cm、底部径62×52cmで、深さ29cmを測る。
〔埋土〕４層に分けられる。上位には暗褐色砂質土、下位には褐色砂質土とにぶい黄褐色砂が堆積する。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK15土坑　（第16図、写真図版16）

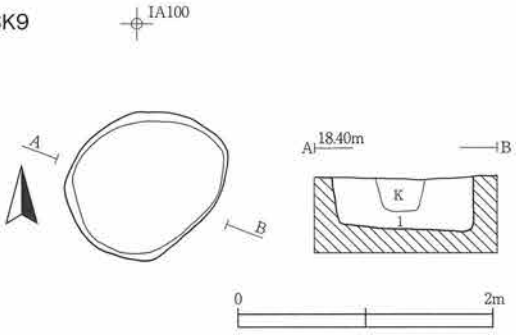
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡB12グリッドに位置する。
〔形状･規模〕平面形は円形である。開口部径124×111cm、底部径108×101cmで、深さは､58cmを測る。
〔埋土〕４層に分けられる。黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土を主体とする。上位には火山灰粒が微量含まれる。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK8



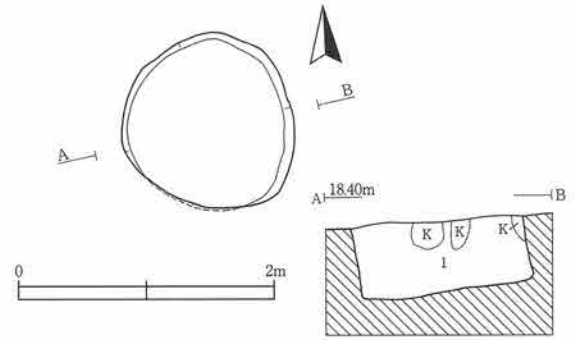
01SK8
1．10YR4/2　灰黄褐色砂質土60%、10YR4/6　褐色砂質土40%
　の混合土層。粘性なし、しまりなし。
　炭化物粒（径１～２㎜）を微量含む。
2．10YR4/4　褐色粘土質土粘性あり、しまりあり。
　灰黄褐色砂質土を層全体に５%含む。
K…攪乱層

01SK9



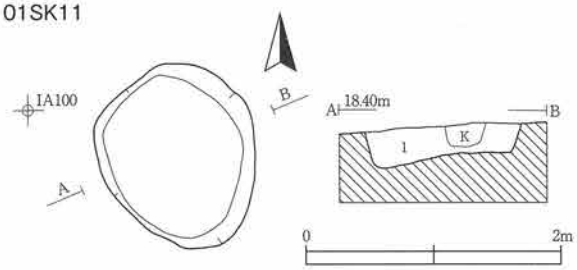
01SK9
1．10YR4/2 灰黄褐色砂質土50%、10YR4/6褐色砂質土50%の
　混合土層。粘性なし、しまりなし。
　炭化物粒（径１～３㎜）を１%含む。
K…攪乱層

01SK10



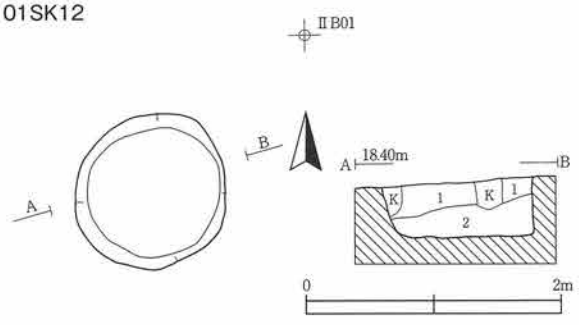
01SK10
1．10YR4/2　灰黄褐色砂質土50%、10YR4/6　褐色砂質土50%
　の混合土層。にぶい黄褐色火山灰粒を１%、
　炭化物粒（径２～５㎜）を１%含む。
K…攪乱層

01SK11



01SK11
1．10YR4/2　灰黄褐色砂質土60%、10YR4/6　褐色砂質土40%
　の混合土層。粘性なし、しまりなし。
　炭化物粒（径１～３㎜）を１%含む。
K…攪乱層

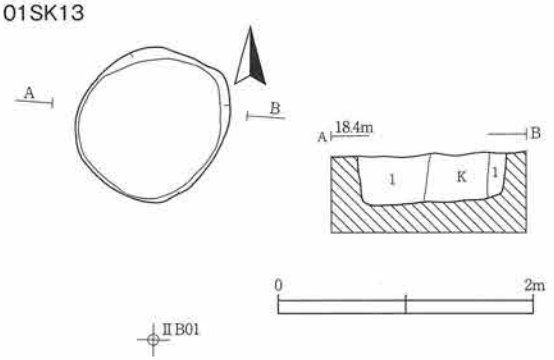
01SK12



01SK12
1．10YR4/6　褐色砂質土50%、10YR4/2　灰黄褐色砂質土50%
の混合土層。粘性なし、しまりあり。
　炭化物粒（径２～３㎜）を１%含む。

2．10YR5/4　にぶい黄褐色砂70%、10YR4/6　褐色粘土質土20%、
　10YR4/2　灰黄褐色　砂質土10%の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。炭化物粒（径２～３㎜）を１%含む。
K…攪乱層

01SK13



01SK13
1．10YR4/6 褐色砂質土50%、10YR4/2　灰黄褐色砂質土50%
　の混合土層。粘性なし、しまりなし。
　にぶい黄褐色火山灰粒を２%、炭化物粒（径５㎜以下）を
　２%含む。
K…攪乱層

第15図　01SK8～01SK13

01SK16土坑　（第16図、写真図版16）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕平成13年西側調査区ⅡB12グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径140×121cm、底部径121×111cmで、深さは44cmを測る。

〔埋土〕２層に分けられる。灰黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土を主体とする。火山灰？を微量含む。

〔重複関係〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK17土坑　（第16図、写真図版16）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕B区ⅡC63～ⅡC64グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径96×93cm、底部径86×82cmで、深さは62cmを測る。

〔埋土〕５層に分けられる。上位にはにぶい黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土、下位には暗褐色砂質土と褐色砂質土の混合土が堆積する。

〔重複関係〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK18土坑　（第16図、写真図版16）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣE31グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径161×142cm、底部径80×78cmで、深さは24cmを測る。

〔埋土〕４層に分けられる。上位には灰黄褐色砂質土と褐色土の混合土、下位には褐色砂質土が堆積し、全体的に固く締まる。

〔重複関係〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

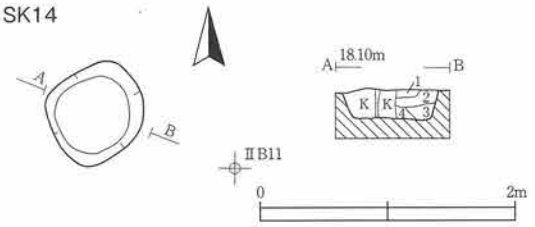
01SK19土坑　（第16図、写真図版17）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣE44グリッドに位置する。

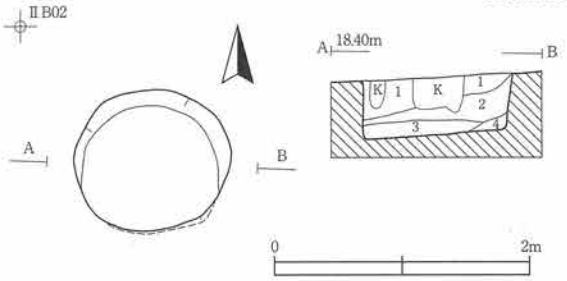
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径120×82cm、底部径58×41cmで、深さは25cmを測る。

01SK14



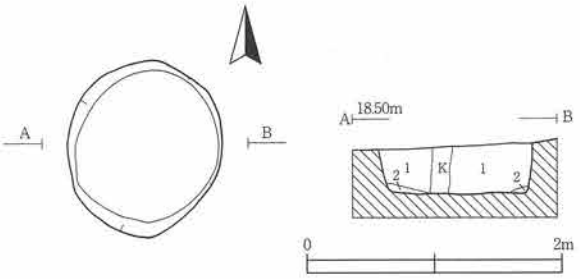
01SK14
1．10YR3/4　暗褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
2．10YR3/4　暗褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　褐色砂粒（径2㎝）を1％、小礫（径10㎜以下）を1％含む。
3．10YR4/6　褐色砂50%、
　10YR4/3　にぶい黄褐色砂50%の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。炭化物粒（径2㎜）を1％含む。
4　10YR4/4　褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
K…攪乱層

01SK15



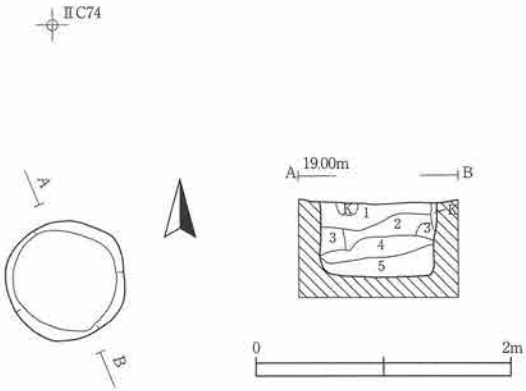
01SK15
1．**10YR4/2**　灰黄褐色砂質土80%、
　10YR4/6　褐色砂質土20%の混合土層。
　粘性なし、しまりややあり　にぶい黄褐色火山灰を2％含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色砂質土50%、
　10YR4/6　褐色砂50%の混合土層。粘性なし、しまりなし。
　炭化物粒（径2㎜）を1％含む。
3．10YR4/2　灰黄褐色砂質土80%、
　10YR4/6　褐色砂質土20%の混合土層。粘性なし、しまりなし。
　炭化物粒（径5㎜）を1％含む。
4．10YR4/6　褐色砂質土粘性ややあり、しまりなし。
　灰黄褐色砂質土を2％含む。
K…攪乱層

01SK16



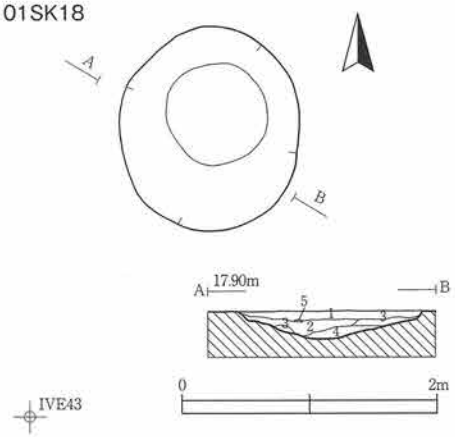
01SK16
1．10YR4/6　褐色砂質土50%、
　10YR4/2　灰黄褐色砂質土50%の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。火山灰を微量含む。
2．10YR4/6　褐色砂粘性なし、しまりなし。
　灰黄褐色砂質土を層全体に3％含む。
K…攪乱層

01SK17



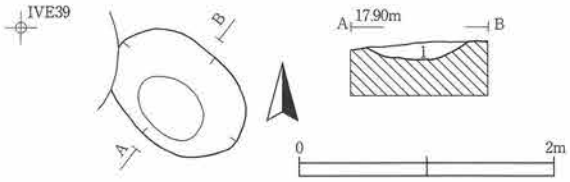
01SK17
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土60%、
　10YR4/6　褐色砂質土40%の混合土層。粘性なし、しまりややあり。
2．10YR4/6　褐色砂質土60%、
　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土40%の混合土層。
　粘性なし、しまりややあり。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土（径2㎝）を10%含む。
4．10YR3/4　暗褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　褐色砂質土を層全体に10%含む。
5．10YR3/3　暗褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　褐色砂質土を層全体に5％含む。
K…攪乱層

01SK18



01SK18
1．10YR5/2　灰黄褐色土50%、
　10YR4/4　褐色土50%の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。
2．10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりあり。
　炭化物粒（径2～4㎜）を微量含む。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土粘性あり、しまりあり。
　炭化物粒（径2～4㎜）を微量含む。
4．(10YR4/4) 褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。

01SK19



01SK19
1．10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
　炭化物粒（径3～5㎜）微量含む。

第16図　01SK14～01SK19

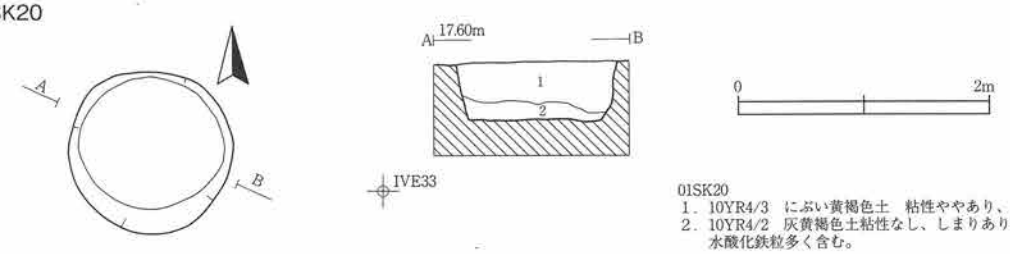
〔埋土〕暗褐色土による単層である。
〔重複関係〕01SX3に切られる。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕不明である。

01SK20土坑　（第17図、写真図版17）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕C区ⅣE32グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。
〔埋土〕２層に分けられる。にぶい黄褐色土を主体とし、底面には水酸化鉄粒を含む灰黄褐色土が堆積する。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK21土坑　（第17図、写真図版17）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕A区ⅡB02グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径190cm、底部径166cmで、深さは40cmを測る。
〔埋土〕にぶい黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土である。
〔重複関係〕01SK22・01SK29に切られる。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

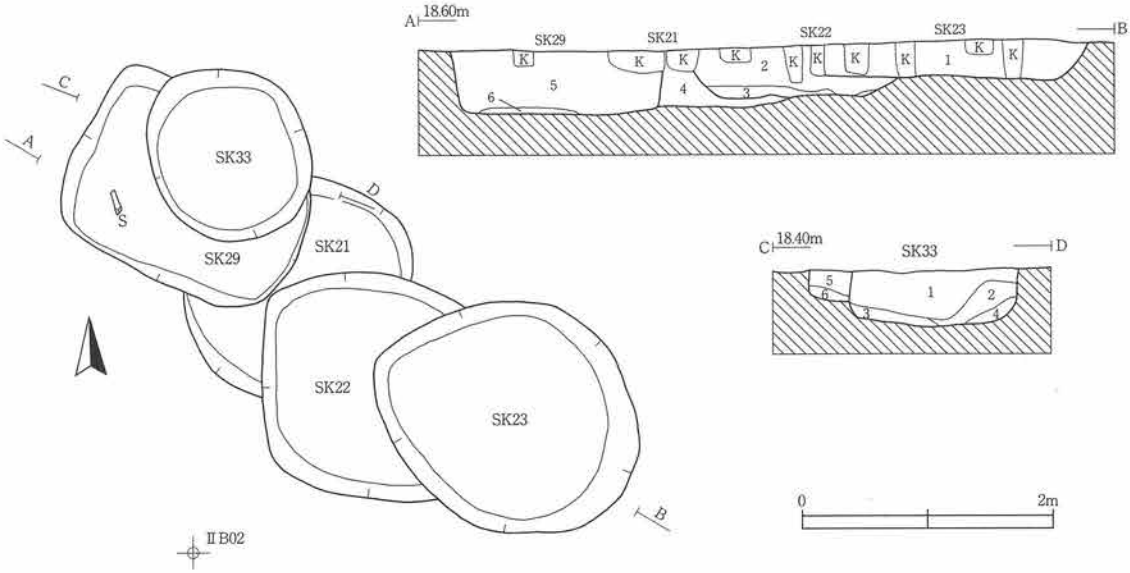
01SK22土坑　（第17図、写真図版17）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡB02グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は長方形である。開口部径180cm、底部径155cmで、深さは39cmを測る。
〔埋土〕にぶい黄褐色砂質土と砂の混合土を主体とする。底面には灰黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土が堆積する。２層に分けられる。
〔重複関係〕01SK21を切る。また、01SK23に切られる。
〔出土遺物〕大堀相馬産の碗１点（3034）、瀬戸・美濃産の志野菊皿１点（3079）が出土した。
〔性格〕不明である。
〔時期〕陶磁器の年代から18世紀以降の土坑と推測される。

01SK20



01SK20
1．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性ややあり、しまりあり。
2．10YR4/2　灰黄褐色土粘性なし、しまりあり。
　水酸化鉄粒多く含む。

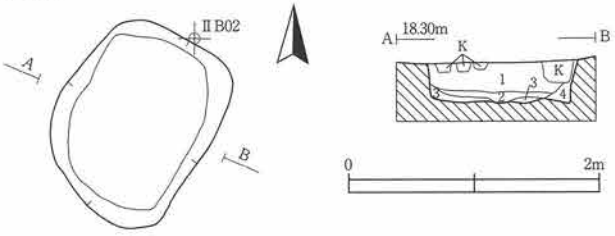
01SK21　SK22　SK23　SK29　SK33



01SK21・SK22・SK23・SK29
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。
　にぶい黄褐色砂を10%、炭化物粒（径２～５㎜）５%含む。（SK23埋土）
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　にぶい黄褐色砂20%、炭化物粒（径３～10㎜）５%含む。（SK22埋土）
3．10YR5/2　灰黄褐色砂質土60%、10YR4/4　褐色砂質土　40%の混合土層。
　粘性ややあり、しまりややあり。炭化物粒（径３～５㎜）３%含む。
　（SK22埋土）
4．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土50%、
　10YR4/6　褐色砂質土50%の混合土層。粘性なし、しまりややあり。
　炭化物粒（径３～５㎜）を２%含む。（SK21埋土）
5．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土70%、10YR4/6　褐色砂質土30%の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。（SK29埋土）
6．10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂質粘性なし、しまりあり。（SK29埋土）
K…攪乱

01SK29・SK33
1．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　黄褐色砂を20%、褐色粘土質土（径１～２㎝）を10%、
　炭化物粒（径５～７㎜）を２%含む。粘性なし、しまりなし。（SK33埋土）
2．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土粒（径１㎝）を５%含む。炭化物粒（径１～２㎜）を２%含む。
　（SK33埋土）
3．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土と　10YR4/2　灰黄褐色砂質土の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。褐色粘土質土粒（径10㎜）を５%含む。（SK33埋土）
4．10YR4/2　灰黄褐色砂50%、10YR4/6　褐色粘土質土50%の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。炭化物粒（径５㎜）を１%含む。（SK33埋土）
5．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土70%、10YR4/6　褐色砂質土30%の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。（SK29埋土）
6．10YR6/2　灰黄褐色砂20%、10YR4/4　褐色粘土質土60%、
　10YR4/2　灰黄褐色粘土質土20%の混合土層。
　粘性ややあり、しまりなし。（SK29埋土）

01SK24



01SK24
1．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　褐色粘土質土（径２～３㎝）を10%、
　炭化物粒（径２～３㎜）を１%含む。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　にぶい黄褐色粒を10%、炭化物粒（径５㎜）を微量含む。
3．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　にぶい黄褐色砂を10%含む。
4．10YR5/4　にぶい黄褐色砂20%、10YR3/3　暗褐色砂質土40%、
　10YR4/4　褐色砂質土40%の混合土層。粘性なし、しまりなし。
K…攪乱層

第17図　01SK20～01SK24、01SK29、01SK33

01SK23土坑（第17図、写真図版17）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年度西側調査区ⅡB02グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径222×183cm、底部径182×156cmで、深さは48cmを測る。
〔埋土〕にぶい黄褐色砂質土を主体とする。同色の砂を含む。
〔重複関係〕01SK22を切る。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK24土坑　（第17図、写真図版17）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年度西側調査区ⅡB11グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は長方形である。開口部径158×124cm、底部径135×100cmで、深さ38cmを測る。
〔埋土〕４層に分けられる。灰黄褐色砂質土を主体とし、褐色粘土質土粒を含む。底面には、暗褐色砂質土と褐色砂質土が堆積する。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕美濃産の灰釉菊皿１点（3082）が出土した。
〔性格〕不明である。
〔時期〕出土遺物から17世紀以降の土坑と推測される。

01SK25土坑　（第18図、写真図版18）

〔検出面〕第１面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡB03～ⅡB13グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径152×151cm、底部径122×107cmで、深さは41cmを測る。
〔埋土〕４層に分けられる。にぶい黄褐色砂質土と暗褐色砂質土の混合土を主体とする。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK26土坑　（第18図、写真図版18）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕B区ⅡC42グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径144×133cm、底部径121×111cmで、深さは51cmを測る。

〔埋土〕 4層に分けられる。灰黄褐色砂質土を主体とし、褐色粘土質土粒を含む。底面には灰黄褐色粘土質土が堆積する。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕産地不明の筒型鉢1点（3118）が出土した。
〔性格〕不明である。
〔時期〕出土遺物から近世後半以降の土坑と推測される。

01SK27土坑　（第18図、写真図版18）

〔検出面〕第1検出面で検出した。
〔位置〕C区ⅢD83グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径88×76cm、底部径76×63cmで、深さは17cmを測る。
〔埋土〕 3層に分けられる。暗赤褐色焼土の上面に、炭化物粒を含む黒褐色砂が堆積する。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK28土坑　（第18図、写真図版18）

〔検出面〕第1検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡB01グリッドに位置する。
〔形状･規模〕平面形は長方形である。開口部径145×122cm、底部径130×100cmで、深さは26cmを測る。
〔埋土〕 2層に分けられる。暗褐色砂とにぶい黄褐色土の混合土を主体とする。底面には、やや粘性のある褐灰色土が堆積する。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK29土坑　（第17図、写真図版19）

〔検出面〕第1検出面で検出した。
〔位置〕平成13年度西側調査区ⅡB02グリッドに位置する。
〔形状･規模〕平面形は長方形である。開口部径197×151cm、底部径177×137cmで、深さは45cmを測る。
〔埋土〕 2層に分けられる。にぶい黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土を主体とする。
〔重複関係〕01SK21を切る。また､01SK33に切られる。
〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

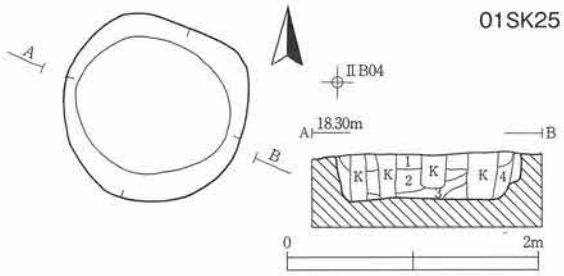
01SK30土坑　欠番

01SK31土坑　（第18図、写真図版19）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年度西側調査区ⅡB03グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は長方形である。開口部径189×148cm、底部径170×128cmで、深さは77cmを測る。
〔埋土〕３層に分けられる。にぶい黄褐色砂を主体とし、褐色粘土質土粒が含まれる。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK32土坑　（第18図、写真図版19）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年度西側調査区ⅡB01グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径167×149cm、底部径116×112cmで、深さは48cmを測る。
〔埋土〕４層に分けられる。灰黄褐色砂質土を主体とし、褐色粘土質土粒が含まれる。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

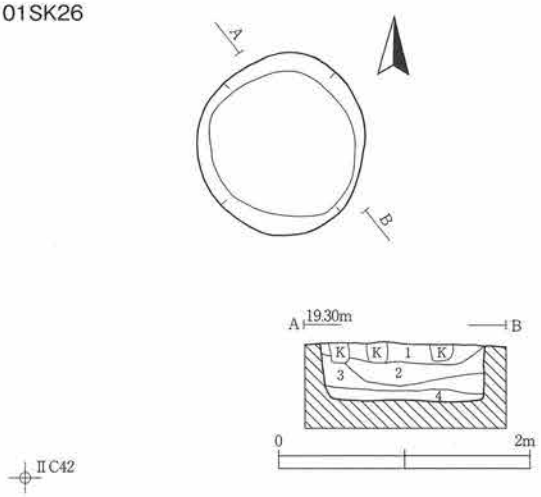
01SK33土坑　（第17図、写真図版19）
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置〕平成13年西側調査区ⅡB02グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径146×129cm、底部径117×113cmで、深さは47cmを測る。
〔埋土〕灰黄褐色砂質土を主体とする。褐色粘土質土粒を含む。
〔重複関係〕なし。
〔出土遺物〕なし。
〔性格〕不明である。
〔時期〕詳細は不明であるが、検出面から、近～現代の遺構である可能性が高い。

01SK25



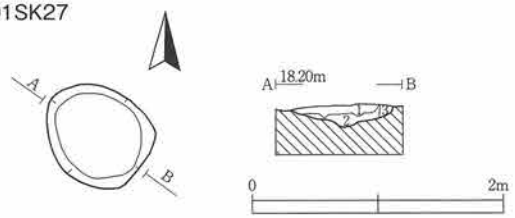
01SK25
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　暗褐色砂質土を10%、炭化物粒（径３～５㎜）２%含む。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　にぶい黄褐色砂粒を10%、炭化物粒（径２～３㎜）を１%含む。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色砂50%、暗褐色砂質土50%の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。炭化物粒（径２～３mm）を１%含む。
4．10YR4/3　にぶい黄褐色砂60%、
　10YR3/3　暗褐色砂質土40%の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。炭化物粒（径１～３㎜）を１%含む。
K…撹乱層

01SK26



01SK26
1．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土（径10㎜）を５%含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土（径１～３cm）を10%、
　灰黄褐色粘土質土粒（径１～２cm）を２%含む。
3．10YR4/2　灰黄褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　にぶい黄褐色砂（径１～３cm）を５%含む。
4．10YR4/2　灰黄褐色粘土質土40%、
　10YR5/2　灰黄褐色粘土質土50%、
　10YR4/2　灰黄褐色砂質土　10YR4/2　10%の混合土層。
　粘性あり、しまりなし。

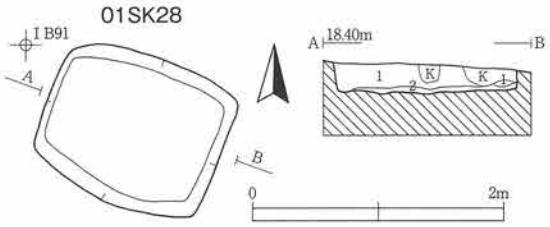
01SK27



01SK27
1．10YR3/2　黒褐色　砂粘性なし、しまりややあり。
　炭化物粒（径８～10㎜）を微量含む。
2．5YR3/4　暗赤褐色砂粘性なし、しまりなし。焼土。
3．10YR3/2　黒褐色砂粘性なし、しまりなし。

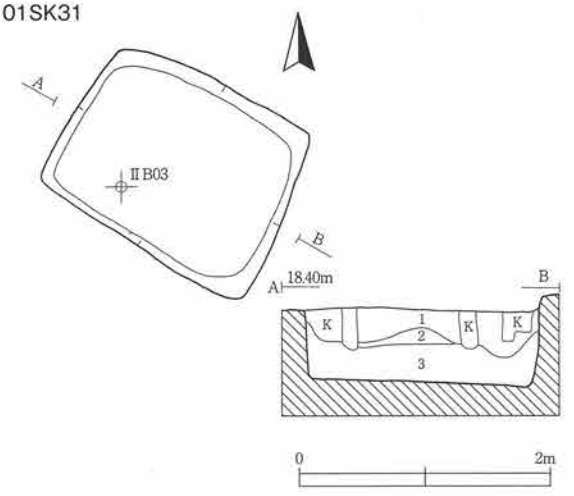
ⅢD86

01SK28



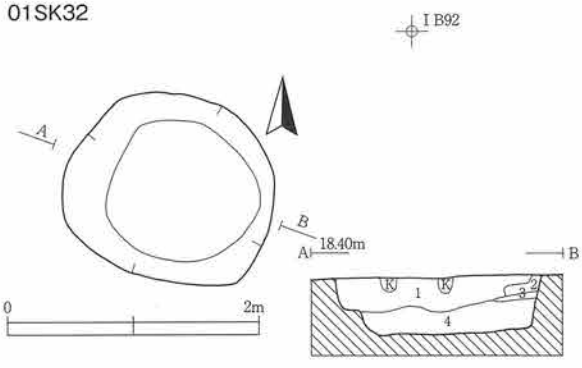
01SK28
1．10YR3/4　暗褐色砂60%、10YR4/3　にぶい黄褐色土40%の混合土層。
　粘性なし、しまりややあり。
2．10YR4/1　褐灰色土粘性ややあり、しまりあり。
K…撹乱層

01SK31



01SK31
1．10YR5/4　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土を10%含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色砂質土40%、10YR5/4　にぶい黄褐色砂40%、
　10YR4/6　褐色粘土質土20%の混合土層。粘性なし、しまりなし。
3．10YR5/4　にぶい黄褐色砂　灰黄褐色砂質土粒（径１～２㎜）を10%含む。
　褐色粘土質土（径１～２cm）を５%含む。
K…撹乱層

01SK32



01SK32
1．10YR4/2　灰黄褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土（径５～10㎜）を10%、炭化物粒（径２～５㎜）を１%含む。
2．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　炭化物（径２～10㎜）を微量含む。
4．10YR4/2　灰黄褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土（径５～20㎜）を30%含む。
K…撹乱層

第18図　01SK25～01SK28、01SK31、01SK32

01SX１土坑　（第19図、写真図版21）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣE31・41・42グリッドに位置する。

〔形状・規模〕後世の削平により壁の大半は失われ、正確な形状・規模は不明である。残存部から推定すると、平面形は方形基調であったと考えられる。規模は、320×260cmである。

〔埋土〕６層に分けられる。上位～中位は灰黄褐色土、下位は灰黄褐色土を主体とする。床面は固く締まる。

〔重複関係〕01SD４、P97～99・101～103に切られる。

〔出土遺物〕瀬戸・美濃産の天目茶碗１点（3011）、在地産の火入れ１点（3100）、相馬産の土瓶１点（3214）、肥前産の丸碗１点（4008）、肥前産の皿１点（4068）、永楽通寶１点（5064）、古寛永通寶１点（5078）が出土した。

〔性格〕調査記録に矛盾点が多く性格を推測できない。少なくとも、竪穴建物と推測される要素は全く存在しない。

〔時期〕出土遺物から19世紀以降のものである。

01SX２土坑　（第19図、写真図版20・21）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣE32・33グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面形は長方形で、規模は360×226cmである。底面は平坦であり、壁は内湾ぎみに立ち上がる。検出面から底面までの深さは、最深部で32cmを測る。

〔埋土〕４層に分けられる。灰黄褐色土を主体とし、下位にはにぶい黄褐色土層が堆積する。

〔重複関係〕P116～123に切られる。

〔出土遺物〕古寛永通寶１点（5079）が出土した。

〔性格〕不明である。

〔時期〕近世以降である。

01SX３土坑　（第20図、写真図版20・21）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣE43・44・53・54グリッドに位置する。

〔形状・形状〕平面形は楕円形で、規模は380×222cmである。底面は概ね平坦で、壁は外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは、最深部で20cmを測る。

〔埋土〕３層に分けられる。灰黄褐色砂質土を主体とし、炭化物粒を微量含む。下位には褐灰色土・褐色土の混合土が堆積する。

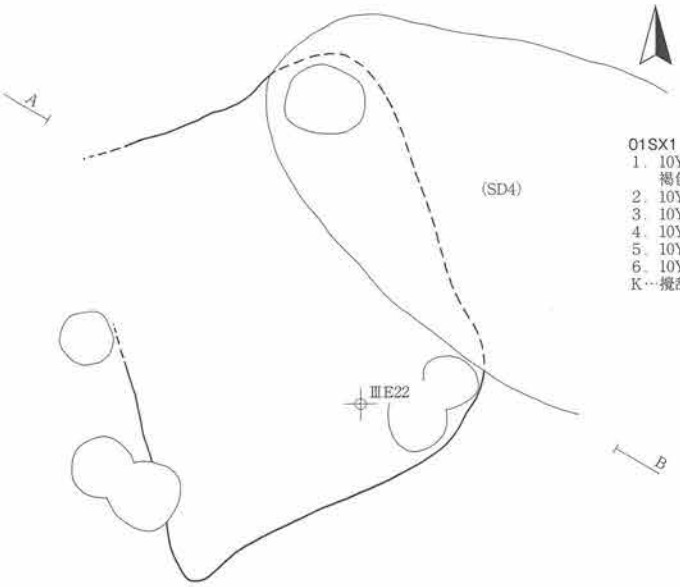
〔重複関係〕P126～128に切られる。

〔出土遺物〕中国産の磁器小皿１点（2060）、美濃産の向付１点（3218）、産地不明の筒型鉢１点（3102）、肥前産の碗１点（4018）、古寛永通寶１点（5080）が出土した。

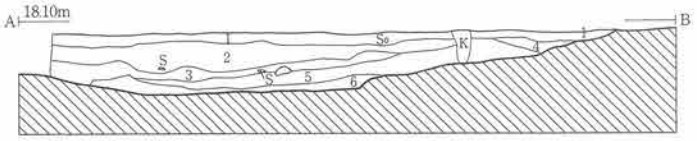
〔性格〕不明である。

〔時期〕近世以降である。

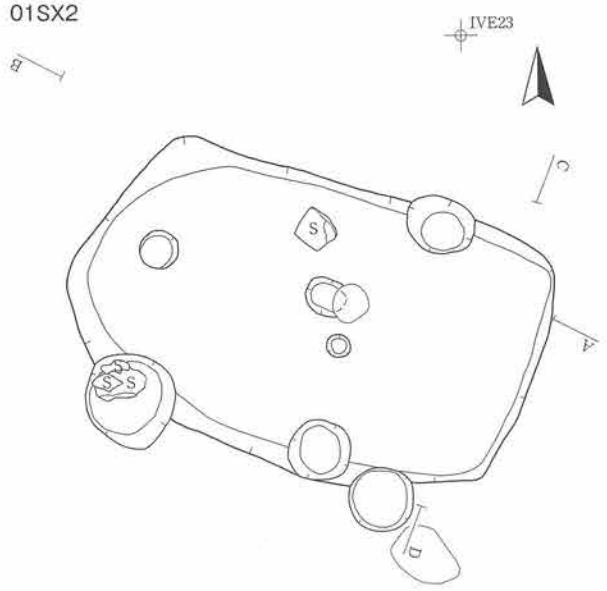
01SX1



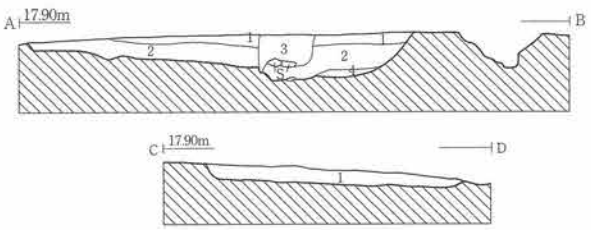
01SX1
1．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土粒（径5～7㎜）を1～2％含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。灰黄褐色土を3％含む。
3．10YR4/1　褐灰色土　粘性なし、しまりあり。
4．10YR5/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
5．10YR4/3～4/4　にぶい黄褐色～褐色土　粘性なし、しまりあり。
6．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
K…撹乱層

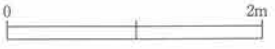


01SX2



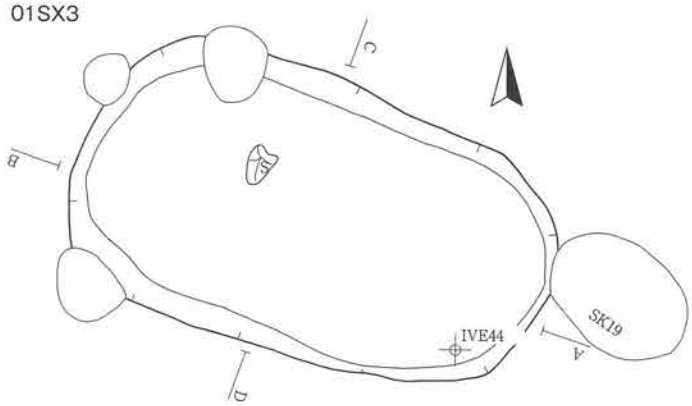
01SX2
1．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。褐色土粒を1％含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　炭化物（径3～5㎜）を微量含む。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　灰黄褐色土を5～10％含む。
4．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。

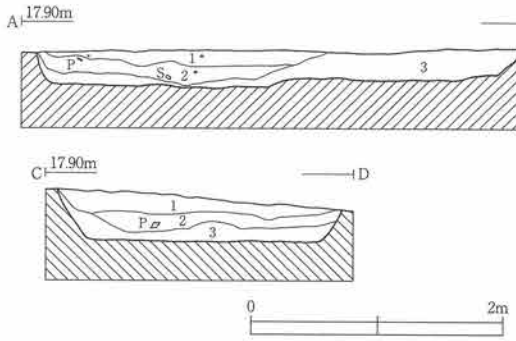




第19図　01SX1、01SX2

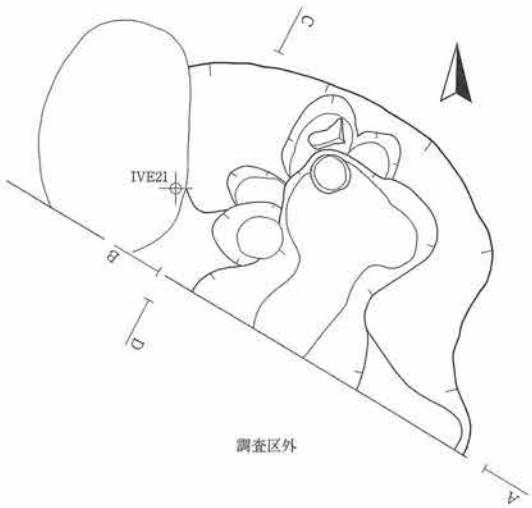
01SX3





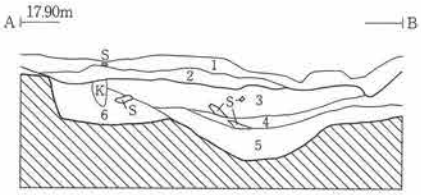
01SX3
1．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　褐色砂質土粒（径10～20㎜）を10%、
　炭化物粒（径10～20㎜）を１%含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色粘土質土　粘性あり、しまりあり。
　褐色砂質土を５%、炭化物粒（径５～20㎜）を３%含む。
3．10YR4/1　褐灰色砂質土50%、
　10YR4/4　褐色砂質土50%の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。炭化物粒（径２～３㎜）を微量含む。

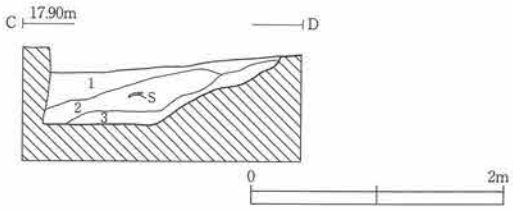
01SX4



01SX4
A－B
1．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性あり、しまりあり。
2．10YR3/2　黒褐色土　粘性あり、しまりあり。
3．10YR3/2　黒褐色土　粘性あり、しまりあり。
　炭化物粒（径１～３㎜）を１～２%含む。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性あり、しまりあり。
　炭化物粒（径４～５㎜）を微量含む。
5．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　炭化物粒（径４～５㎜）を微量含む。
6．2.5YR4/1　黄灰色土　粘性あり、しまりあり。
K…撹乱層

C－D
1．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　炭化物粒（径４～５㎜）を微量含む。
2．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　炭化物粒（径４～５㎜）を微量含む。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性ややあり、しまりあり。
　黒褐色土を40%含む。
K…撹乱層





第20図　01SX３、01SX４

01SX４土坑　（第20図、写真図版21）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置〕C区ⅣD30、ⅣE21グリッドに位置する。

〔形状・規模〕遺構の南側は調査区外にあるため、全体の形状・規模は不明である。確認できた範囲では、東西方向が径370cm、深さ60cmを測る。

〔埋土〕６層に分けられる。黒褐色土を主体とする。

〔重複関係〕P90～P94に切られる。

〔出土遺物〕なし。

〔性格〕不明である。

〔時期〕不明である。

5　溝（SD）

01SD１溝　（第21図、写真図版22）

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置・形状・規模〕C区ⅣD20グリッドから北西方向へ直線的に延び、ⅢD83グリッドへ至る。それより以西は、調査区外であるため未確認である。確認できた長さは51mである。北西側に進むにつれ底面のレベルは低くなる。断面形はU字形で、上部が開く。上端幅89～185cm、下端幅30～98cmで、深さは60cm前後を測る。

〔埋土〕上位は黒褐色砂質土、下位は暗褐色砂質土を主体とする。下位には黄褐～褐色の砂を含む。

〔重複関係〕複数の柱穴と重複する。

〔出土遺物〕中世の手づくねかわらけ１点（1201）、中世のロクロかわらけ６点（1202・1203・1206・1207・1210・1211）、11世紀のロクロかわらけ２点（1038・1041）、12世紀の手づくねかわらけ１点（1108）、大宰府Ⅲ系の白磁四耳壺１点（2042）、肥前産の刷毛目鉢１点（3132）、開元通寶１点（5049）、凝灰岩製の人形（6012）が出土した。

〔性格〕不明である。

〔時期〕出土遺物の主体は11世紀～14世紀のものである。近世陶器の3132の出土は疑問である。調査者が重複する柱穴に含まれていた遺物を認識できなかったのではないだろうか。おそらく13～14世紀に属する溝と推測される。

01SD２溝　（第21図、写真図版22）

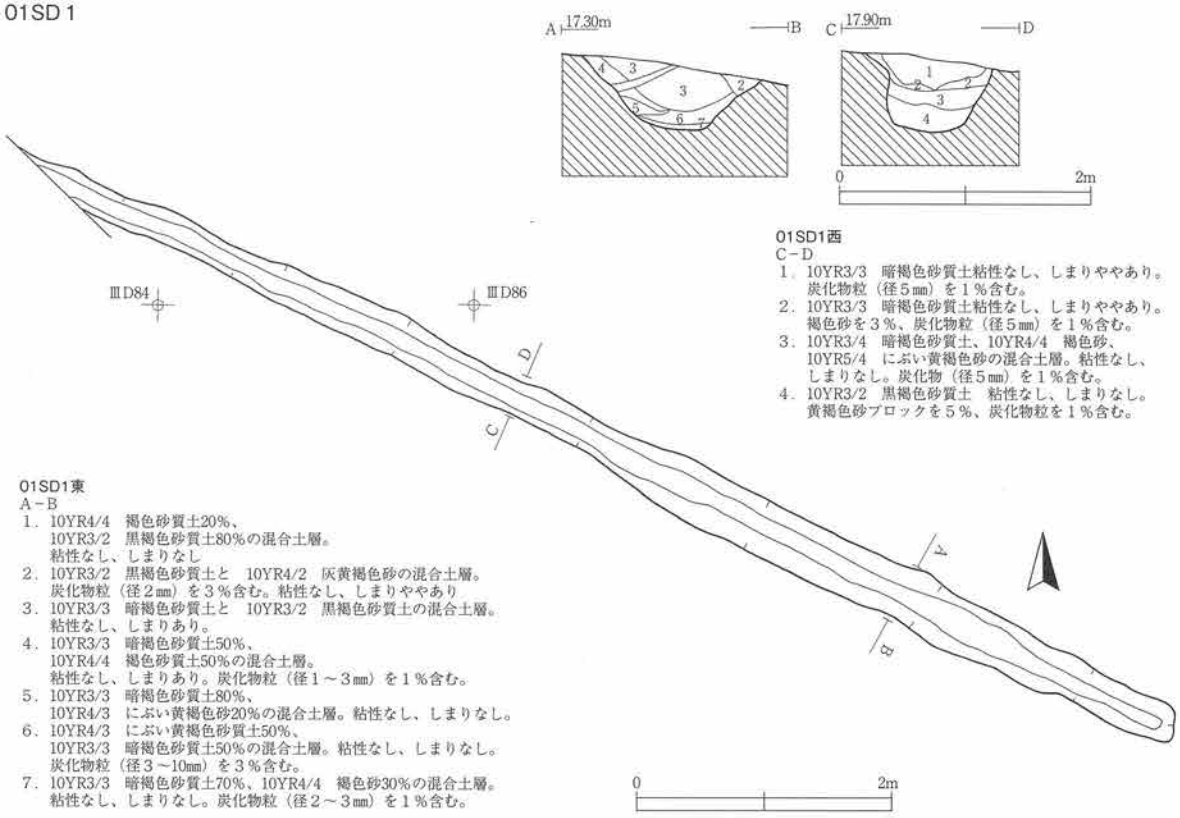
〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔位置・形状・規模〕C区ⅢD98グリッドから北西方向へ直線状に延び、ⅢD63グリッド付近で途切れる。確認できた長さは42mである。断面形は浅皿形を呈する。上端幅162～330cm、下端幅39～115cmで、深さは45cm前後を測る。

〔埋土〕黒褐色砂質土と暗褐色砂質土を主体とする。北西側部分では、埋土中位にTo－aと思われる火山灰を含む。

〔重複関係〕複数の柱穴と重複する。

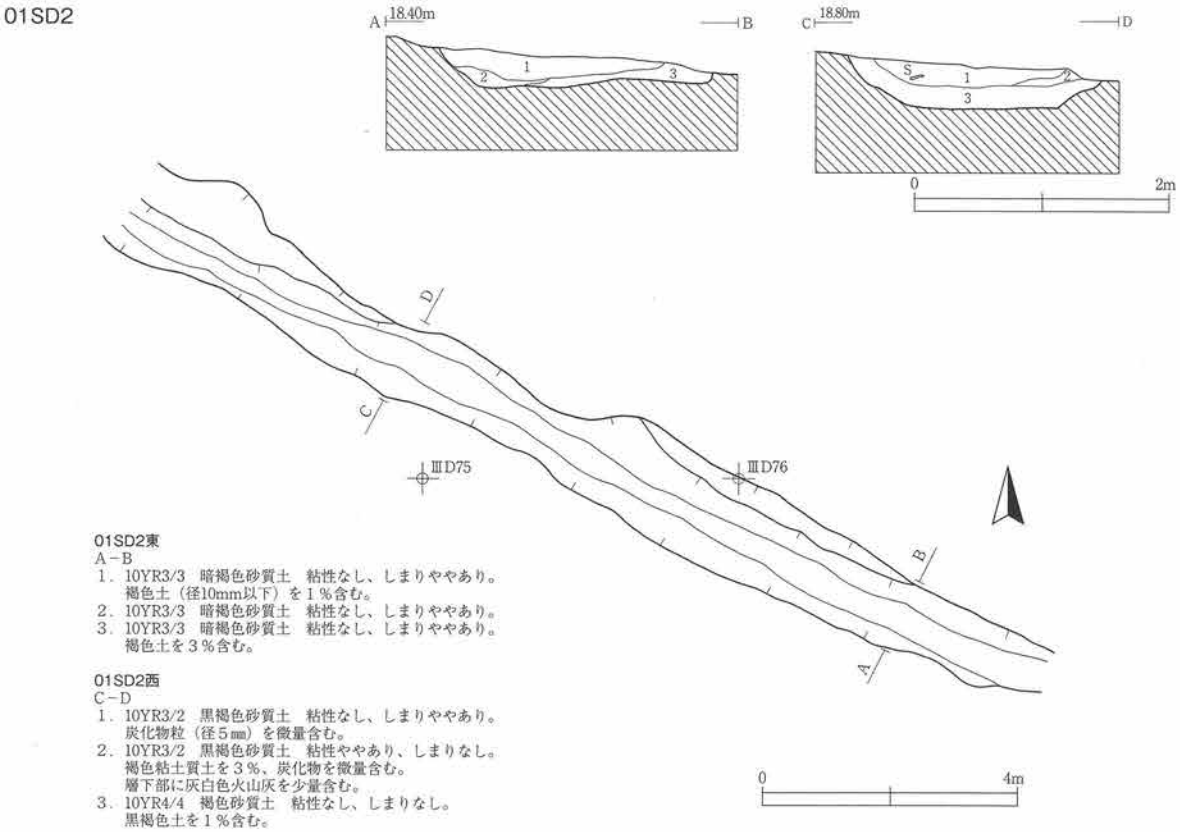
01SD1



01SD1西
C－D
1．10YR3/3　暗褐色砂質土粘性なし、しまりややあり。
　炭化物粒（径5㎜）を1％含む。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土粘性なし、しまりややあり。
　褐色砂を3％、炭化物粒（径5㎜）を1％含む。
3．10YR3/4　暗褐色砂質土、10YR4/4　褐色砂、
　10YR5/4　にぶい黄褐色砂の混合土層。粘性なし、
　しまりなし。炭化物（径5㎜）を1％含む。
4．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　黄褐色砂ブロックを5％、炭化物粒を1％含む。

01SD1東
A－B
1．10YR4/4　褐色砂質土20％、
　10YR3/2　黒褐色砂質土80％の混合土層。
　粘性なし、しまりなし
2．10YR3/2　黒褐色砂質土と　10YR4/2　灰黄褐色砂の混合土層。
　炭化物粒（径2㎜）を3％含む。粘性なし、しまりややあり
3．10YR3/3　暗褐色砂質土と　10YR3/2　黒褐色砂質土の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。
4．10YR3/3　暗褐色砂質土50％、
　10YR4/4　褐色砂質土50％の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。炭化物粒（径1～3㎜）を1％含む。
5．10YR3/3　暗褐色砂質土80％、
　10YR4/3　にぶい黄褐色砂20％の混合土層。粘性なし、しまりなし。
6．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土50％、
　10YR3/3　暗褐色砂質土50％の混合土層。粘性なし、しまりなし。
　炭化物粒（径3～10㎜）を3％含む。
7．10YR3/3　暗褐色砂質土70％、10YR4/4　褐色砂30％の混合土層。
　粘性なし、しまりなし。炭化物粒（径2～3㎜）を1％含む。

01SD2



01SD2東
A－B
1．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　褐色土（径10㎜以下）を1％含む。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
3．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　褐色土を3％含む。

01SD2西
C－D
1．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　炭化物粒（径5㎜）を微量含む。
2．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。
　褐色粘土質土を3％、炭化物を微量含む。
　層下部に灰白色火山灰を少量含む。
3．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　黒褐色土を1％含む。

第21図　01SD1、01SD2

〔出土遺物〕中世のロクロかわらけ１点（1205）龍泉窯系の青磁碗１点（2051）、青花皿１点（2079）、肥前産の火入１点（4119）、祥符元寶１点（5050）が出土した。
〔性格〕不明である。
〔時期〕出土遺物の主体は中世のものである。近世磁器の4119の出土は疑問である。調査者が重複する柱穴に含まれていた遺物を認識できなかったのではないだろうか。おそらく16世紀頃に属する溝と推測される。

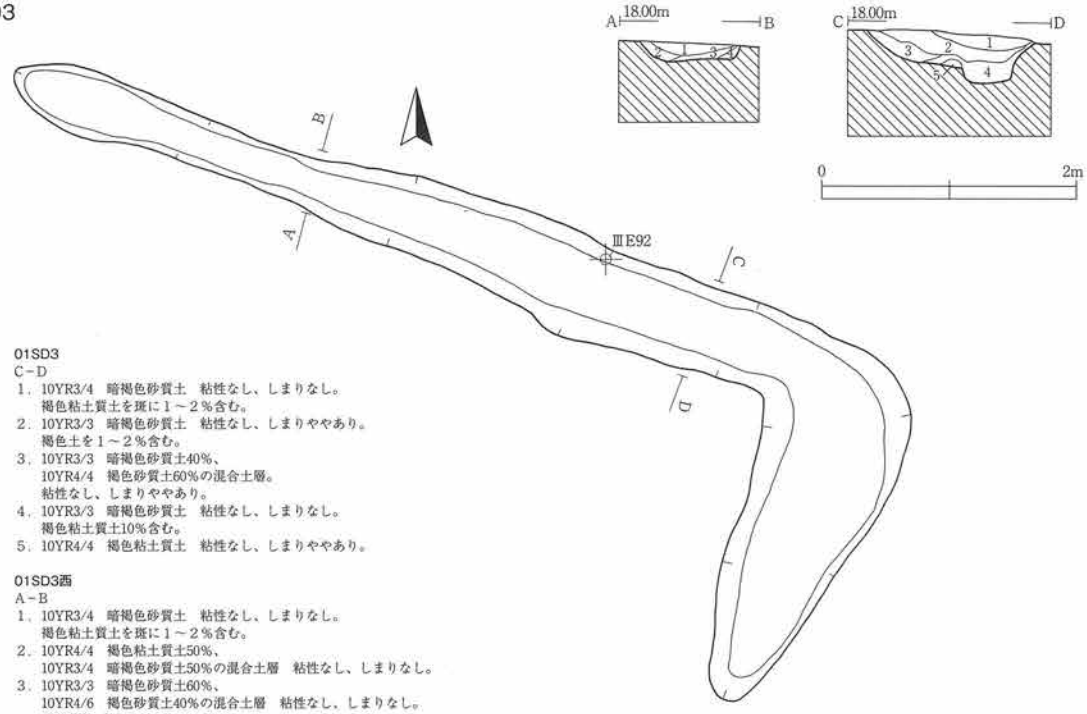
01SD３溝　（第22図、写真図版23）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置・形状・規模〕形状はL字型である。C区ⅢD100グリッドから南東方向へ直線的に延び、ⅣE02グリッドで直角に折れ南西へ向きを変え、ⅣE12グリッドで途切れる。ちょうど01SB１の北東面と南東面に沿った位置である。長さは北西－南東が15m、北東－南西が５m90cmである。断面形は浅皿形を呈する。上端幅69～238cm、下端幅43～164cmで、深さは16～42cmを測る。
〔埋土〕上位は暗褐色砂質土、下位は褐色粘土質土を主体とする。下位の埋土は壁面の崩落によるものと考えられる。
〔重複関係〕01SI１を切る。
〔出土遺物〕龍泉窯系青磁碗１点（2051）、青花碗１点（2075）、瀬戸・美濃産の天目茶碗１点（3013）が出土した。
〔性格〕C区SB１、SB２のプランの北側に接して位置しており、本溝がC区SB１、SB２建築の際の平場を造成するための掘り込みと推測される。
〔時期〕出土遺物から中世～近世と推測される。

01SD４溝　（第22図、写真図版23）

〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔位置・形状・規模〕C区ⅣE21グリッドから南東方向へ直線的に延び、ⅣE33グリッドで途切れる。全長は６mである。溝とするには形状が疑問であるが、調査者の付した名称をそのまま用いている。断面形はU字形で、上部が開く。上端幅176～264cm、下端幅42～55cmで、深さは70cmを測る。
〔埋土〕褐灰色～にぶい黄褐色土を主体とする。全体がグライ化し、硬くしまる。
〔重複関係〕01SX１を切る。また、複数の柱穴に切られる。
〔出土遺物〕中国産の白磁碗１点（2039）、中国産の青白磁碗１点（2047）、中国産の磁器小皿４点（2059・2061・2062・2065）、肥前産の丸碗１点（4002）、産地不明の碗１点（4043）、肥前産の小杯１点（4053）、肥前産の大鉢１点（4124）が出土した。
〔性格〕不明である。
〔時期〕出土遺物から近世以降のものと推測される。

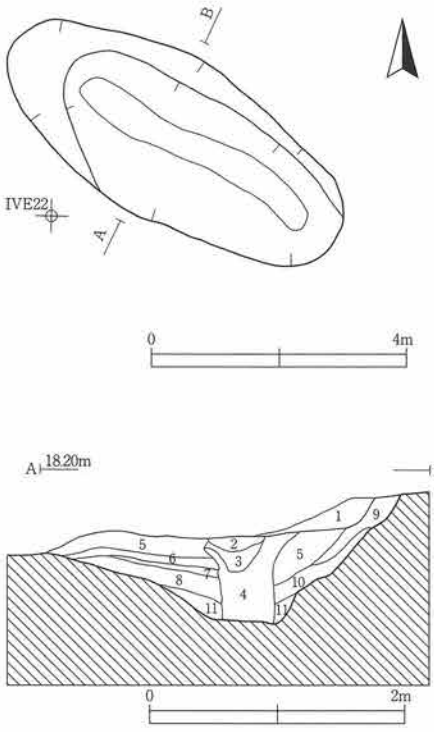
01SD3



01SD3
C－D
1．10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土を斑に１～２％含む。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　褐色土を１～２％含む。
3．10YR3/3　暗褐色砂質土40％、
　10YR4/4　褐色砂質土60％の混合土層。
　粘性なし、しまりややあり。
4．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土10％含む。
5．10YR4/4　褐色粘土質土　粘性なし、しまりややあり。

01SD3西
A－B
1．10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土質土を斑に１～２％含む。
2．10YR4/4　褐色粘土質土50％、
　10YR3/4　暗褐色砂質土50％の混合土層　粘性なし、しまりなし。
3．10YR3/3　暗褐色砂質土60％、
　10YR4/6　褐色砂質土40％の混合土層　粘性なし、しまりなし。
　炭化物粒（径５㎜）を１％含む。
4．10YR4/6　褐色粘土質土　粘性なし、しまりややあり。
　黒褐色土を斑に１～２％含む。壁面崩落土。

01SD4



01SD4
A－B
1．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土を１％含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
3．10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土を30～40％含む。炭化物（径10㎜）を１％含む。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土を１～２％含む。炭化物（径５～10㎜）３％含む。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土を１～２％含む。炭化物（径５～10㎜）１％含む。
6．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土を１～２％含む。炭化物を筋状に30％含む。
7．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
8．10YR4/1　褐灰色土　粘性ややあり、しまりあり。
9．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
　褐色砂質土を10％含む。
10．10YR4/2　灰黄褐色土50％、
　10YR4/4　褐色砂質土50％の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。
11．10YR4/2～3/2　灰黄褐色～黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　砂少量含む。

第22図　01SD３、01SD４

Ⅴ　平成14年度調査区の遺構

1　平成14年度調査区概観

平成14年度調査区は西側調査区（B区）と中央部調査区（C区）、東側調査区（D区）の３地点に分かれている。西側調査区は大グリッドのⅡC、ⅢC付近、中央部はⅢD、ⅢE付近で、南側の県道に接する部分は一部平成13年度調査区と重複している。東側調査区はⅣE、ⅣF付近で細長い長形を成している。３地点とも隣接する北側は平成15年度調査区にまたがる調査区域である。

平成14年度の野外調査期間は４月17日～11月22日である。野外調査担当者は溜浩二郎、鈴木裕明である。調査区全体の地形は、大小いくつかの自然堤防が連なった谷間に北上川の洪水による砂層が堆積してできた微高地で、北上川に向かい緩斜面を成している。報告書掲載の遺構図面の作成、文章記述は鈴木がおこなっている。

掲載した遺構は竪穴住居（SI）２棟、掘立柱建物（SB）１棟、土坑（SK）24基、溝（SD）３条である。（鈴木）

2　竪　穴　住　居（SI）

C区SI２竪穴住居　（第23図、写真図版24・25）

〔検出面〕第２検出面で検出した。

〔位置〕ⅢE94に位置する。検出状況は、カマド煙道部が中心で、カマドが設置されたと思われる東壁以外は明瞭には確認できなかった。

〔形状・規模〕壁面が不明瞭なため、規模は不明である。

〔床面・壁面〕カマド周辺の床面には、暗褐色土～砂質土の貼り床が施されている。埋土と貼り床の識別は困難である。

〔カマド〕煙道の向きから東壁に設置されたと思われるが、壁面における設置箇所については不明である。

〔床面施設〕土坑・柱穴等は確認できなかった。

〔重複関係〕なし

〔遺物〕土師器長胴甕１点（12）と須恵器大甕１点（13）が出土した。

〔時期〕出土遺物から、９世紀の遺構と考えられる。（鈴木）

C区SI３竪穴住居　（第24・25図、写真図版26～29）

〔検出面〕第２検出面で検出した。

〔位置〕ⅢE84に位置する。カマドの設置された北壁・東壁付近は明瞭に検出され黄たが、南壁・西壁については、一部不明瞭であった。

〔形状・規模〕平面形は方形であり、規模は550×540cmを測る。拡張前の住居については、残存部は台形であり、規模は約460×360cmと推定される。

〔床面・壁面〕カマド周辺の床面は、暗褐色粘土質土により貼り床が施され、周辺部分に比べてやや高い。

〔埋土〕検出面～埋土上位は褐色の砂、上位～中位は黒褐色～暗褐色砂質土、下位は暗褐色砂質土～シルトを主体としており、下位～床面には炭化物粒・暗赤褐色焼土粒が少量含まれる。自然堆積と考えられる。

〔カマド〕１号カマド（新C区SI03のカマド）は、新C区SI03の東壁中央やや南に位置する。芯材には厚さ８cmほどの扁平な礫を使用し、これに土師器甕の小破片を補強のため加え、暗褐色土で覆い固めて構築されている。燃焼部には赤褐色焼土が広がる。焼土は径30×26cmで、厚さは最厚部で15cmを測る。２号カマド（旧C区SI03のカマド）は、旧C区SI03の北壁中央に位置する。煙道部分以外は住居の作り替えの際に壊され、燃焼痕、左袖部の一部のみが残る。

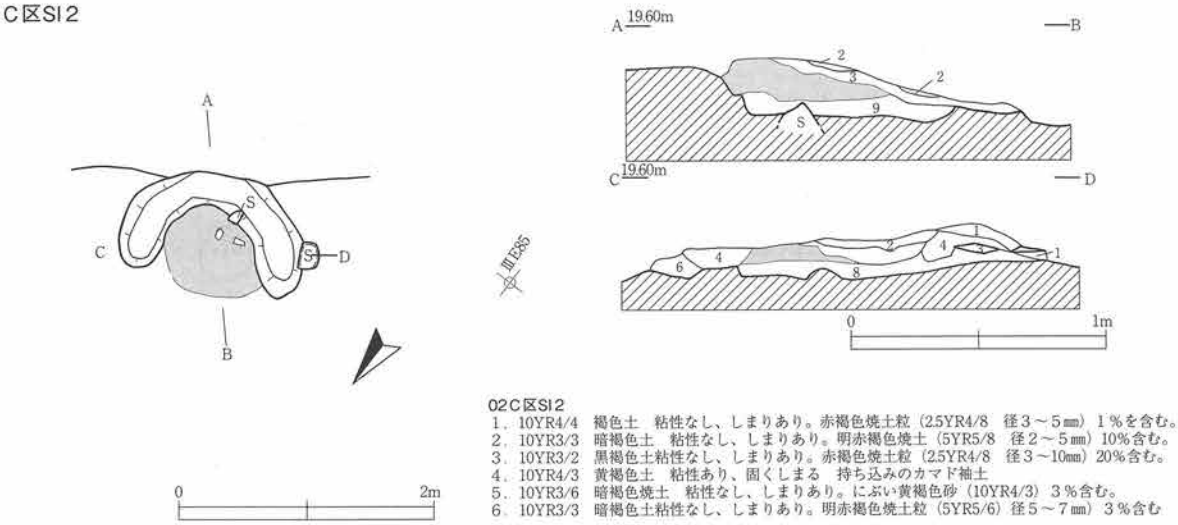
〔焼土〕カマド燃焼部以外の３カ所で焼土を確認した。うち２カ所は、その位置から２号カマド燃焼部痕の可能性がある。

〔土坑・柱穴〕カマド脇で土坑１基を検出した。その埋土～底面から土師器坏の破片が出土した。貯蔵穴と考えられる。

〔重複関係〕なし

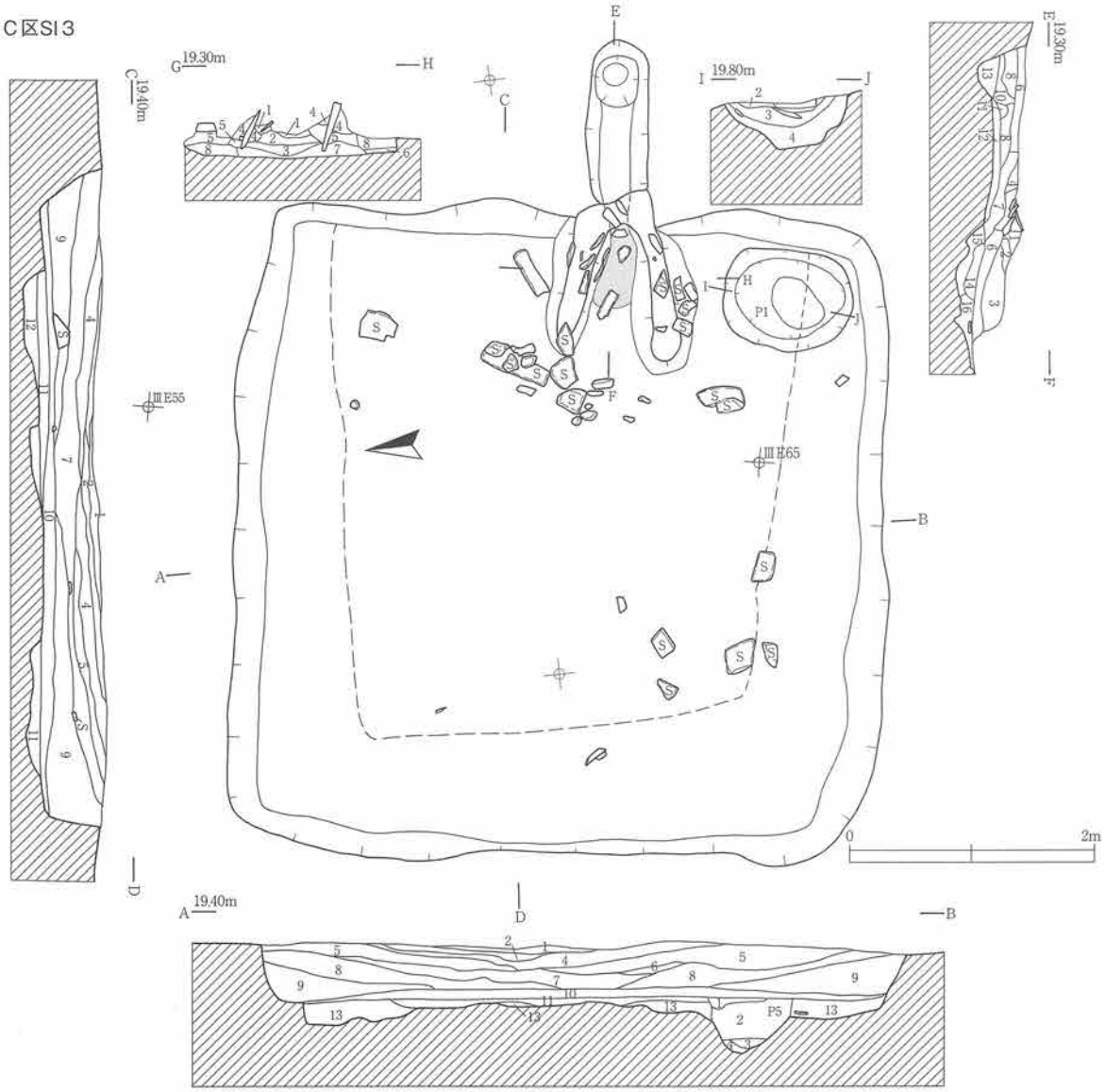
〔遺物〕土師器坏（14～18）、須恵器坏（19～23）、土師器長胴甕（24～26）、須恵器甕（27）、須恵器鉢（28）、須恵器土錘（29）、土師器坏（30）、須恵器坏（31）、土師器長胴甕（32～38）が出土した。

〔時期〕出土遺物から、８世紀末～９世紀前半の住居と考えられる。　（鈴木）



第23図　C区SI2（平成14年検出）

C区SI3



02C区SI3

A－B、C－D

1. 10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりなし。
2. 10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
3. 10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
4. 10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
   赤褐色焼土粒（5YR4/8）径2㎜）微量含む。
5. 10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりなし。
6. 10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
7. 10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
8. 10YR4/2　灰黄褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
9. 10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
10. 7.5YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
    褐色砂（10YR4/4）60%混入。新住居の貼り床土
11. 10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
    暗赤褐色焼土（5YR3/6　径4～7㎜）の粒状で1～2%、
    炭化物1%含む。旧住居の貼り床土。
12. 10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
    暗赤褐色焼土（5YR3/4）3%含む。
13. 10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。

P1

I－J

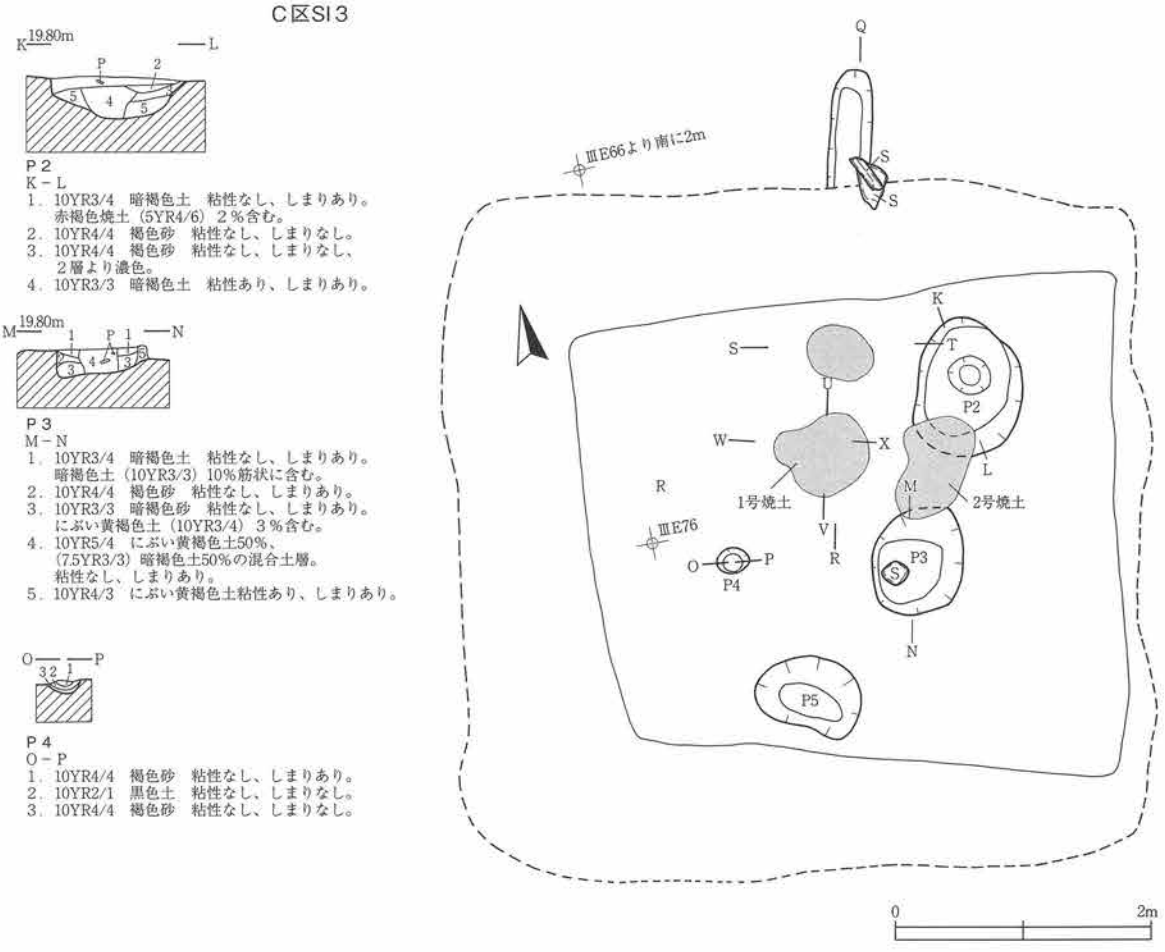
1. 10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
   褐色粘土質土（10YR4/4）20%の混合土層。
2. 5YR3/3　暗赤褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
   径2～4㎜の炭化物粒微量含む。
3. 5YR3/2　暗赤褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
   暗褐色砂（10YR3/4）3%含む。
4. 10YR5/2　灰褐色砂　粘性なし、しまりあり。

E－F、G－H

1. 10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
   暗褐色土（7.5YR3/3）2%含む
2. 10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
   灰黄褐色土（10YR4/2）筋状で10～15%含む
3. 10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
4. 4.5YR2/2　黒褐色焼土　粘性なし、しまりなし、
   暗褐色砂質土（10YR3/4）2～3%含む
5. 10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし、
   暗褐色土（7.5YR3/3）30%含む
6. 10YR3/2　黒褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
   暗褐色砂質土（10YR3/4）3～5%含む
7. 10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし、
   黒褐色焼土（5YR2/2）3%含む
8. 7.5YR2/2　黒褐色焼土90%、5YR3/4　暗赤褐色焼土5%、
   10YR4/4　褐色砂5%の混合土層　粘性なし、
   しまりややあり。
9. 10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりややあり。
   黒褐色土（10YR2/2）1～2%含む
10. 7.5YR2/3　極暗褐色砂　粘性なし、しまりややあり。
    黒褐色砂（10YR3/4）1%含む
11. 10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりややあり。
    黒褐色砂（10YR2/2）1%含む
12. 10YR2/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
    褐色砂（10YR4/4）10%、炭化物微量含む
13. 10YR2/1　黒色土　粘性なし、しまりなし、
    暗褐色土（10YR4/4）2%含む
14. 5YR4/4　にぶい赤褐色焼土　粘性なし、しまりなし、
    にぶい黄橙色土（10YR6/4）30%含む
15. 5YR3/3　暗赤褐色焼土　粘性なし、しまりなし。
16. 10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
    径3～4㎜の炭化物粒を1%含む

第24図　C区SI3①（平成14年検出）

C区SI3



P2
K－L
1．10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
　赤褐色焼土（5YR4/6）２％含む。
2．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりなし。
3．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりなし、
　２層より濃色。
4．10YR3/3　暗褐色土　粘性あり、しまりあり。

P3
M－N
1．10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
　暗褐色土（10YR3/3）10％筋状に含む。
2．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
3．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　にぶい黄褐色土（10YR3/4）３％含む。
4．10YR5/4　にぶい黄褐色土50％、
　（7.5YR3/3）暗褐色土50％の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色土粘性あり、しまりあり。

P4
O－P
1．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
2．10YR2/1　黒色土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりなし。

02C区SI3
Q－R、S－I
1．10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりあり。
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
3．10YR2/2　黒褐色土70％、（10YR4/2）　灰黄褐色土30％の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。
4．10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
5．10YR5/3　にぶい黄褐色土　粘土質　粘性なし、
　褐色焼土（7.5YR4/4）５％含む。
6．5YR3/4　暗赤褐色焼土　砂質　粘性なし、しまりあり。
7．5YR3/3　暗褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
　にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）30％含む。
8．10YR4/4　褐色砂60％、（5YR3/3）赤褐色焼土40％の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。
9．10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりなし、
　赤褐色焼土粒（5YR4/6　径３～５㎜）２％含む。
10．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　赤褐色焼土（5YR4/8　径８～13㎜）40％含む。
11．7.5YR3/3　暗褐色土　粘性あり、しまりあり。

U－V、W－X
1．7.5YR3/3　暗褐色焼土　粘性なし、しまりあり。
　赤褐色焼土粒（5YR4/6　径12～20㎜）10～15％、
　径２～５㎜の炭化物粒１％含む。
2．7.5YR3/4　暗褐色焼土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR4/4　褐色土　粘性なし、固くしまる
　暗褐色焼土（7.5YR3/3）30％含む。
4．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　暗赤褐色焼土（5YR3/4）30％含む。

第25図　C区SI3②（平成14年検出）

3　掘立柱建物（SB）

C区SB３掘立柱建物　（第26図、写真図版30）

〔検出面〕第１検出面で検出した。検出面は平安時代の住居跡と同層ないし、下層である。

〔位置〕C区東側のⅢD100・ⅢE01・ⅣD10・ⅣE01グリッドに跨る。

〔主軸方向〕N－19°－Wである。

〔規模〕１間×４間の建物跡で、梁行4.39×桁行7.88mである。

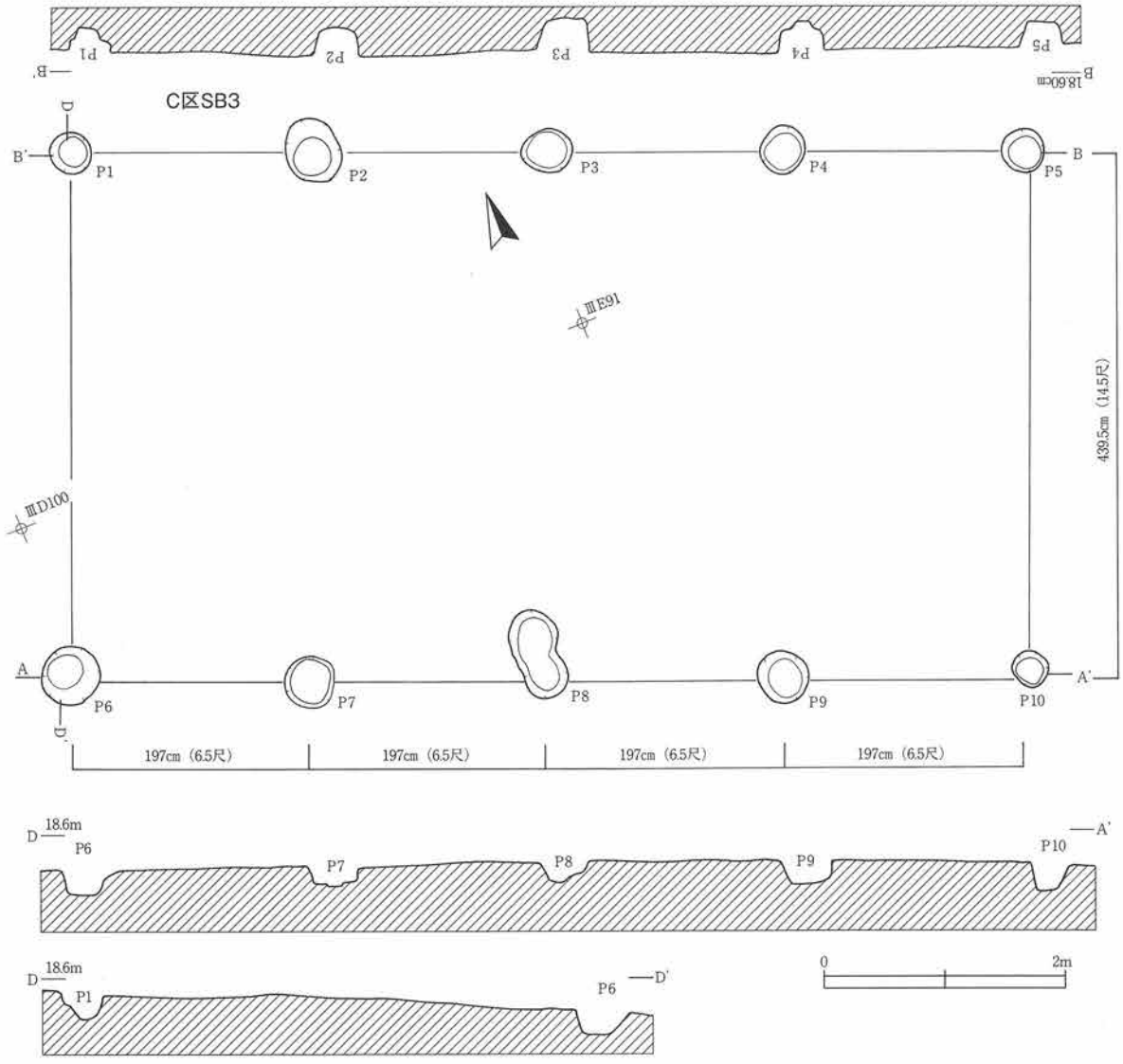
〔柱穴〕直径はいずれも40cm前後で、底面までの深さは20cm前後のものが多い。最深のものでは30cmを測る。底面に礎盤などは確認されず、直に柱を置いたと思われる。

〔柱間寸法〕桁行きでは197cm（６尺５寸）を用いている。

〔重複関係〕なし

〔出土遺物〕なし

〔時期〕検出状況から、中世以降の建物と考えられる。　（鈴木）



第26図　C区SB３（平成14年検出）

4　土　　坑（SK）

24基検出した。平面形は方形、円形、楕円形がある。規模は開口部径90～234cm、底部径61～216cm、深さは11～82cmで、B区北側とC区東端、D区全域（平成14年度分）で検出された。B区のものは検出面や出土遺物から近世の遺構と考えられる。C区検出の土坑についても埋土状況などからB区同様、近世の遺構と考えられる。D区検出の土坑についても埋土状況や出土遺物から近世以降の年代と推察される。

02SK７土坑　（第27図、写真図版30）

〔位置・検出面〕ⅢE94に位置する。第２検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径234×216cm、底部径216×176cmで、深さは34cmを測る。

〔埋土〕11層に分けられ炭化物を微量に含む黒褐色砂を主体とする。上部に一部撹乱が見られ、下位には黒褐色砂と褐色砂の混合土が堆積する。

〔出土遺物〕須恵器坏１点（126）が出土した。墨書がある。

〔重複関係〕なし。

〔時期〕出土遺物から古代（平安初期）以降と考えられる。　（鈴木）

02SK34土坑　（第27図、写真図版30）

〔位置・検出面〕ⅡC43に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径100×94cm、底部径88×86cmで、深さは11cmを測る。

〔埋土〕３層に分けられ、にぶい黄褐色土を主体とする。下位に褐色砂質土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

02SK35土坑　（第27図、写真図版31）

〔位置・検出面〕ⅡC43に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径110×106cm、底部径98×92cmで、深さは39cmを測る。

〔埋土〕褐色砂質土の単層。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

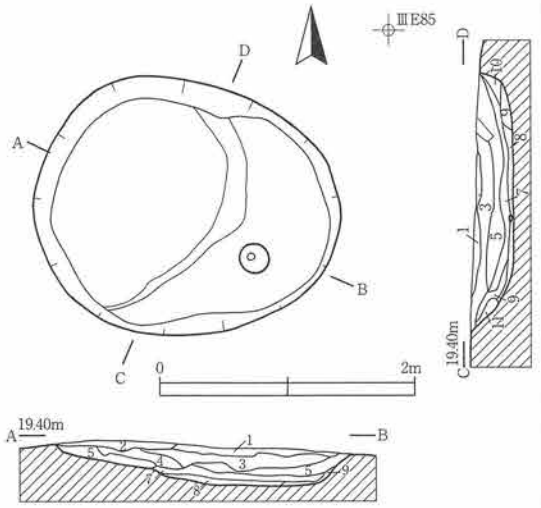
02SK36土坑　（第27図、写真図版31）

〔位置・検出面〕ⅡC54に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径102×102cm、底部径94×88cmで、深さは30cmを測る。

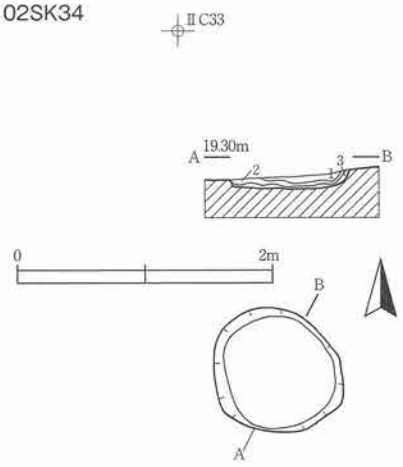
〔埋土〕２層に分かれにぶい黄褐色土を含む褐色土を主体とする。　（鈴木）

02SK７



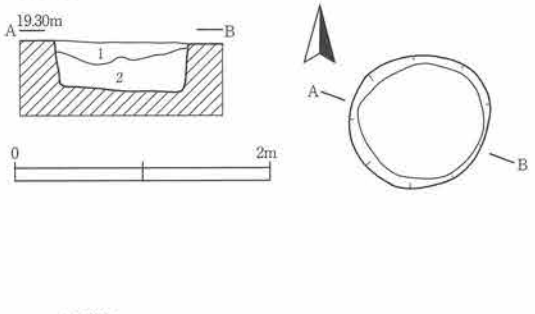
02SK7
1．10YR3/1　黒褐砂　粘性なし、しまりなし、径５㎜の炭化物微量含む。
2．10YR3/3　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし、
　黒褐色砂（10YR3/1）20%混合
3．10YR3/1　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし、
　褐色砂（10YR4/4）微量含む。
4．10YR2/2　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし、径10㎜の炭化物微量含む。
5．10YR3/1　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし、径４㎜の炭化物微量含む。
6．10YR2/1　黒色砂　粘性なし、しまりなし、
　褐色砂（10YR4/4）２%含む。
7．10YR3/1　黒褐色砂粘性なし、しまりなし、径10mmの炭化物片微量含む。
8．10YR2/2　黒褐色砂50%、（10YR4/4）褐色砂50%の混合土層
　粘性なし、しまりなし、
9．10YR3/1　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし。
10．10YR3/1　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし。
11．10YR3/1　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし、
　褐色土（10YR4/4）10%混入

02SK34



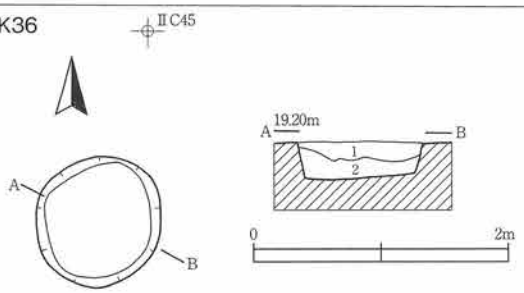
02SK34
1．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
2．10YR4/4　褐色土　粘性ややあり、しまりややあり。
　にぶい黄褐色土（10YR5/4）10%含む。
3．10YR4/6　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。

02SK35



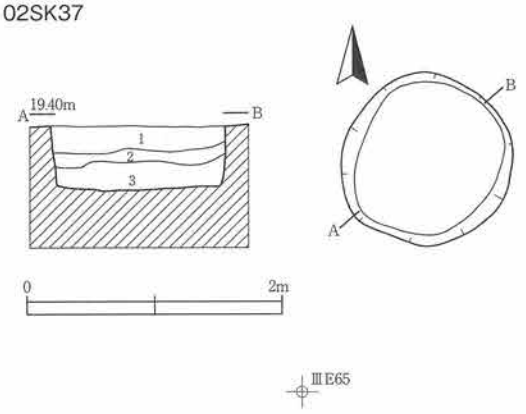
02SK35
1．10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
2．10YR4/6　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。

02SK36



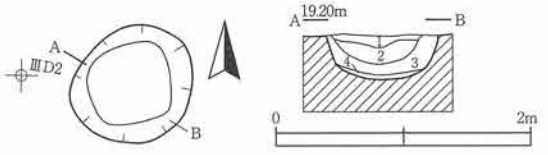
02SK36
1．10YR4/4　褐色土粘性なし、しまりややあり。
　にぶい黄褐色土（10YR4/3）15%、黄色土（10YR5/6）10%含む。
2．10YR4/4　褐色土粘性ややあり、しまりなし、
　褐色土（10YR4/6）10%含む。

02SK37



02SK37
1．10YR3/2　黒褐色砂　粘性なし、しまりあり。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。
3．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりややあり。

02SK40



02SK40
1．10YR2/3　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　暗褐色土（10YR3/3）５%混入　径５～12㎜の炭化物片１%以下含む。
2．10YR2/3　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　径３～７㎜の炭化物片微量含む。
3．10YR3/3　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
4．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。

第27図　02SK７、02SK34～02SK37、02SK40

〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

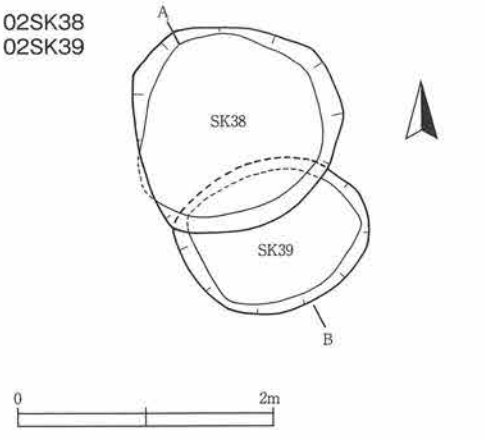
02SK37土坑　（第27図、写真図版31）
〔位置・検出面〕ⅢE65に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径138×130cm、底部径129×127cmで、深さは51cmを測る。
〔埋土〕３層に分かれ中位のにぶい黄褐色土を挟んで上位は黒褐色砂、下位は褐色砂が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK38土坑　（第28図、写真図版31）
〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径169×164cm、底部径152×143cmで、深さは82cmを測る。
〔埋土〕４層に分かれる。褐色砂質土を主体とし、上位には褐色土を含む黄褐色土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕02SK39に切られる。
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK39土坑　（第28図、写真図版31）
〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径174×134cm、底部径138×85cmで、深さは50cmを測る。
〔埋土〕褐色砂質土の単層。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕02SK38を切る。
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

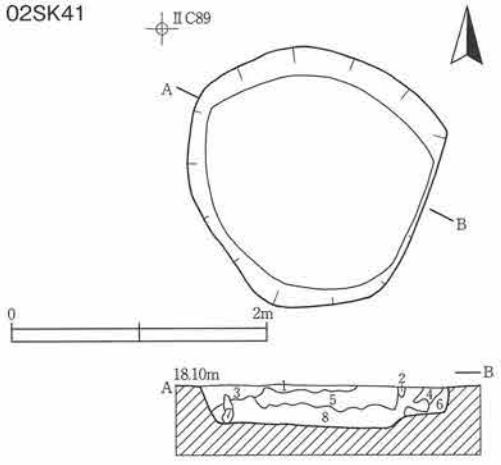
02SK40土坑　（第27図、写真図版32）
〔位置・検出面〕ⅢD02に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径102×97cm、底部径94×73cmで、深さは35cmを測る。
〔埋土〕４層に分かれる。暗褐色土を主体とし、上位には炭化物を微量に含む黒褐色土、下位には褐色砂質土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし（鈴木）

02SK38
02SK39



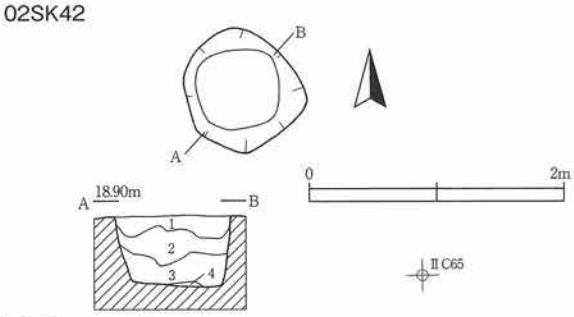
02SK38・39
1．10YR4/6　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
2．10YR5/6　黄褐色土　粘性なし、しまりなし、
　褐色土（10YR4/6）５％含む。
3．10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
4．10YR4/6　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。

02SK41



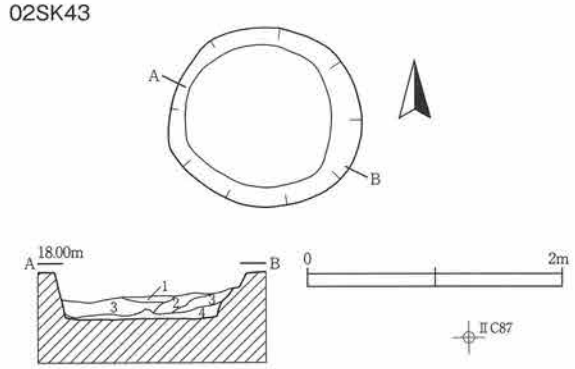
02SK41
1．10YR5/6　黄褐色土　粘性なし、しまりややあり。炭を５％含む。
2．10YR5/4　にぶい黄褐色砂土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR4/4　褐色土　粘性あり、しまりなし、炭を２％含む。
4．10YR4/6　褐色土　粘性あり、しまりあり。
5．10YR3/3　暗褐色土　粘性あり、しまりややあり。炭を10％含む。
6．10YR4/4　褐色土　粘性あり、しまりなし。
7．10YR4/6　褐色土　粘性なし、しまりややあり。
8．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性ややり　しまりあり。

02SK42



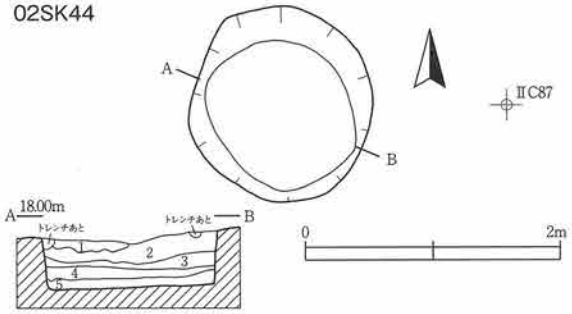
02SK42
1．10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。褐色土（10YR4/6）７％含む。
2．10YR3/3　暗褐色土　粘性ややあり、しまりあり。黄褐色土（10YR5/6）10％含む。
3．10YR3/4　暗褐色土　粘性ややあり、しまりややあり。褐色土（10YR4/4）５％含む。
4．10YR3/3　暗褐色土　粘性ややあり、しまりややあり。

02SK43



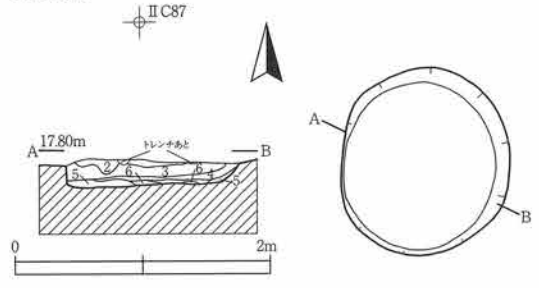
02SK43
1．10YR5/6　黄褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
2．10YR4/6　褐色土　粘性あり、しまりなし、粘土質である。
　褐色土（10YR4/4）、砂７％含む。
3．10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
4．10YR3/4　暗褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。

02SK44



02SK44
1．10YR6/6　明黄褐色土粘性なし、しまりなし、砂質である。
　黄褐色土（10YR5/6）３％含む。
2．10YR5/6　黄褐色土粘性なし、しまりなし、砂質である。
　褐色土（10YR4/4）７％含む。
3．10YR3/3　暗褐色土粘性ややあり、しまりややあり。
4．10YR4/6　褐色土粘性ややあり、しまりややあり。
5．10YR4/4　褐色土粘性あり、しまりなし、
　粘土質である炭を若干含む。

02SK45



02SK45
1．10YR4/6　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
2．10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
3．10YR5/6　黄褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。
4．10YR3/4　明褐色土　粘性ややあり、しまりなし。
5．10YR4/4　褐色土　粘性あり、しまりややあり。
6．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりなし、砂質である。

第28図　02SK38、02SK39、02SK41～02SK45

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK41土坑　（第28図、写真図版32）
〔位置・検出面〕ⅡC99に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径197×196cm、底部径180×163cm、深さは33cmを測る。
〔埋土〕８層に分かれる。炭化物含む暗褐色土を主体とし、下位にはにぶい黄褐色土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK42土坑　（第28図、写真図版32）
〔位置・検出面〕ⅡC64に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径94×90cm、底部径69×65cmで、深さは57cmを測る。
〔埋土〕４層に分かれ暗褐色土を主体とする。褐色土や黄褐色土を含む。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK43土坑　（第28図、写真図版32）
〔位置・検出面〕ⅡC86に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径148×142cm、底部径120×110cmで、深さは20cmを測る。
〔埋土〕４層に分かれ褐色砂質土を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK44土坑　（第28図、写真図版33）
〔位置・検出面〕ⅡC86に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径146×138cm、底部径128×111cmで、深さは43cmを測る。
〔埋土〕５層に分かれる。暗褐色土をはさみ、上位に黄褐色砂質土、下位に褐色粘土質土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK45土坑　（第28図、写真図版33）
〔位置・検出面〕ⅡC97に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径144×136cm、底部径124×118cmで、深さは24cmを測る。
〔埋土〕 6層に分かれ黄褐色土を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK46土坑　（第29図、写真図版33）
〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第1検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径194×183cm、底部径166×163cmで、深さは45cmを測る。
〔埋土〕褐色土の単層。底面に黄褐色土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK47土坑　（第29図、写真図版33）
〔位置・検出面〕ⅡC97に位置する。第1検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径156×142cm、底部径126×125cmで、深さは19cmを測る。
〔埋土〕 4層に分れ、にぶい黄褐色土を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK51土坑　（第29図、写真図版34）
〔位置・検出面〕ⅡC54に位置する。第1検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は方形状である。開口部径152×100cm、底部径136×88cmで、深さは26cmを測る。
〔埋土〕 5層に分かれる。黒褐色砂質土をはさみ、上位は褐色砂、下位は暗褐色砂が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕02SK52に切られる。
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK52土坑　（第29図、写真図版34）
〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第1検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径144×134cm、底部径138×115cmで、深さは53cmを測る。
〔埋土〕 4層に分かれる。上位には暗褐色砂質土、中、下位には黄褐色砂、暗褐色砂が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕02SK51を切る。02SK53に切られる。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。

02SK53土坑　（第29図、写真図版34）

〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径122×98cm、底部径100×78cmで、深さは34cmを測る。

〔埋土〕４層に分かれる。暗褐色砂をはさんで上位に灰黄褐色砂、下位ににぶい黄褐色砂が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕02SK52を切る。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

02SK54土坑　（第29図、写真図版34）

〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状･規模〕平面形は方形状である。開口部径136×117cm、底部径124×94cmで、深さは38cmを測る。

〔埋土〕３層に分かれる。微量の炭化物を含む暗褐色砂を主体に、上位ににぶい黄褐色砂、下位に灰黄褐色土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕02SK53を切り、02SK56に切られる。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

02SK55土坑　（第29図、写真図版35）

〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状･規模〕平面形は楕円形である。開口部径138×98cm、底部径110×73cmで、深さは54cmを測る。

〔埋土〕３層に分かれる。褐色砂をはさんで、上位に暗褐色砂、下位ににぶい黄褐色砂が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

02SK56土坑　（第30図、写真図版35）

〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状･規模〕平面形は方形状である。開口部径214×126cm、底部径203×100cmで、深さは65cmを測る。

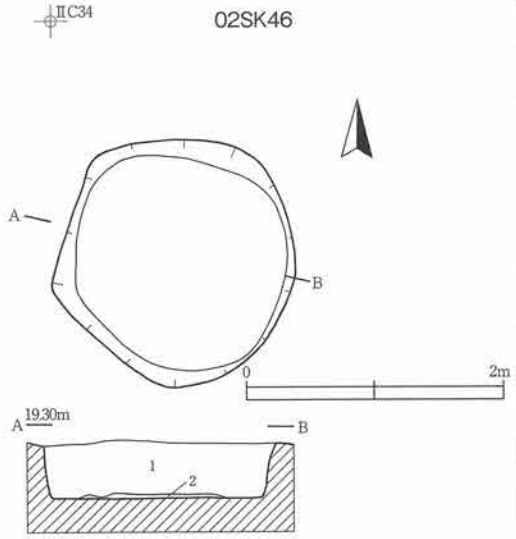
〔埋土〕５層に分かれる。灰黄褐色土を含む暗褐色砂を主体とし、上位には暗褐色砂、下位には黒褐色土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕02SK54に切られる。

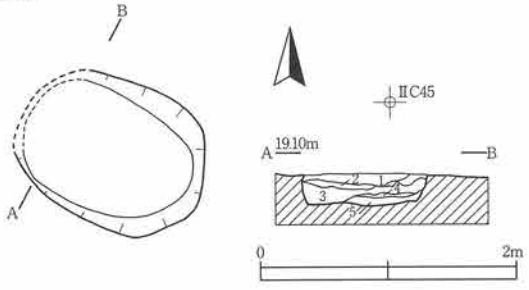
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

02SK46



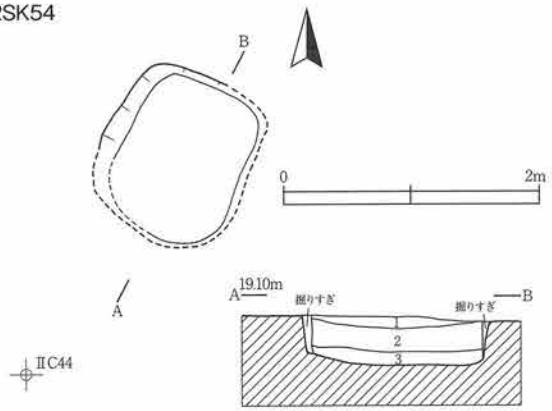
02SK46
1. 10YR4/6　褐色土　粘性なし、しまりなし。
2. 10YR5/6　黄褐色土　粘性なし、しまりややあり。

02SK46



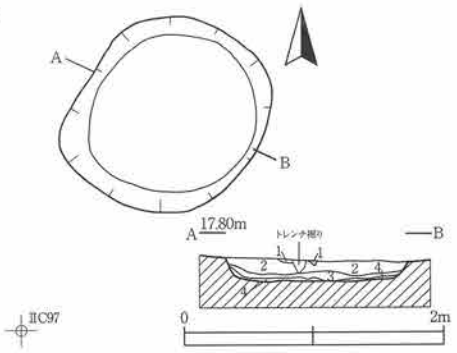
02SK51
1. 10YR4/2　灰黄褐色　砂粘性なし、しまりあり。
2. 10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
3. 10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
4. 10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
5. 10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。

02SK54



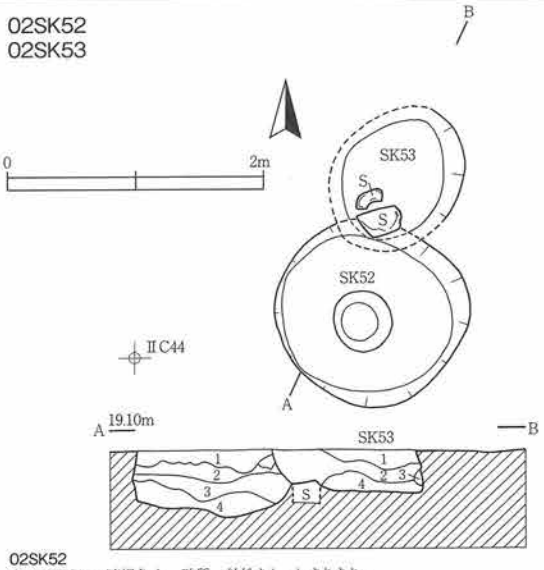
02SK54
1. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりあり。
2. 10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　褐色土（10YR4/4）径1cmの粒状で1％含む。
3. 10YR4/2　灰黄褐色土粘性あり、しまりあり。

02SK47



02SK47
1. 10YR4/4　褐色土　粘性なし、しまりなし。砂質である
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性ややあり、しまりあり。
3. 10YR3/4　暗褐色土　粘性ややあり、しまりややあり
4. 10YR5/6　黄褐色土　粘性なし、しまりあり。砂質である

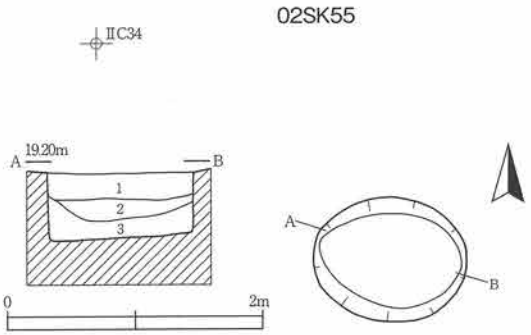
02SK52
02SK53



02SK52
1. 10YR3/4　暗褐色土　砂質　粘性なし、しまりあり。
　褐色砂（10YR4/4）10%混合土層
2. 10YR4/2　灰黄褐色砂　粘性なし、しまりややあり
3. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりなし。
4. 10YR3/3　暗褐色砂　粘性ややあり、しまりややあり

02SK53
1. 10YR4/2　灰黄褐色　砂粘性なし、しまりあり。
2. 10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
3. 10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
4. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりあり。

02SK55



02SK55
1. 10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりなし。
2. 10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりなし。
3. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりなし。

第29図　02SK46、02SK47、02SK51～02SK55

02SK57土坑　（第30図、写真図版35）

〔位置・検出面〕ⅡC43に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径152×134cm、底部径132×110cmで、深さは48cmを測る。

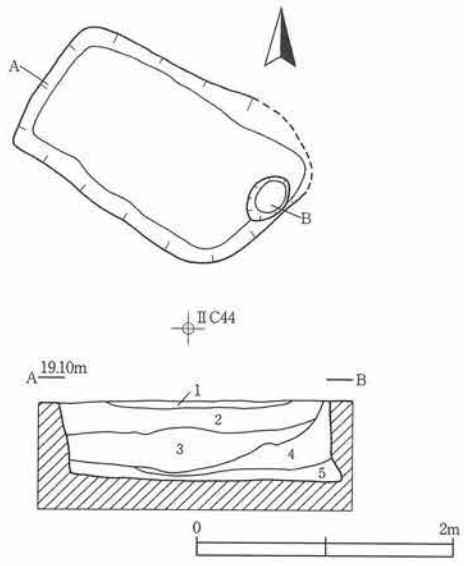
〔埋土〕５層に分かれ、黄褐色砂を主体に、上位に褐色砂、下位に黄褐色土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕SK58を切る。

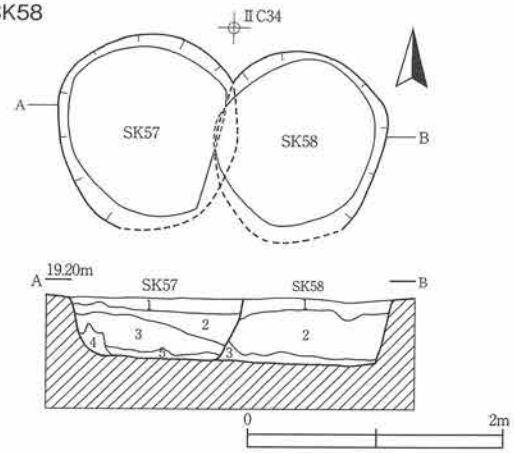
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

02SK56



02SK56
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりあり。
2．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
3．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　灰黄褐色土（10YR4/2）径20～30㎜の粒状で３％含む。
4．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　黒褐色土（10YR3/2）10～15%含む。
5．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　径１cmの炭化物粒１％以下含む。

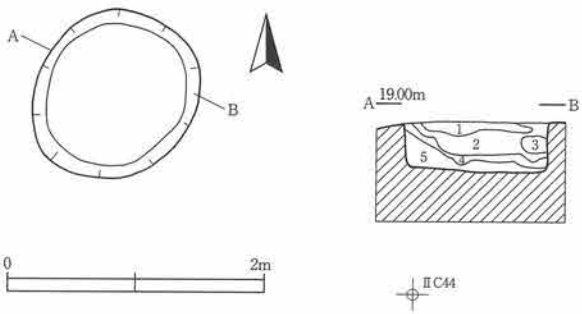
02SK57
02SK58



02SK57
1．10YR4/4　褐色砂土　粘性なし、しまりなし。
2．10YR4/6　褐色砂土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR5/6　黄褐色砂土　粘性なし、しまりなし。
4．10YR4/6　褐色砂土　粘性なし、しまりなし。
5．10YR5/6　黄褐色土　粘性なし、しまりややあり

02SK58
1．10YR4/6　褐色砂土　粘性なし、しまりなし。
　褐色粘土（10YR4/6）２％含む。
2．10YR5/6　黄褐色砂土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR5/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりなし。

02SK59



02SK59
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂土粘性なし、しまりなし。
2．10YR5/4　にぶい黄褐色砂土粘性なし、しまりなし。
3．10YR5/3　にぶい黄褐色砂土粘性なし、しまりなし。
4．10YR5/3　にぶい黄褐色砂土粘性なし、しまりなし。
5．10YR4/4　褐色砂土粘性なし、しまりなし。

第30図　02SK56～02SK59

02SK58土坑　（第30図、写真図版35）

〔位置・検出面〕ⅡC44に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径151×134cm、底部径128×120cmで、深さは52cmを測る。

〔埋土〕黄褐色砂を主体に、上位に褐色砂、下位ににぶい黄褐色土が堆積。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕02SK57に切られる。

〔時期〕検出状況から近世遺構の遺構と考えられる。（鈴木）

02SK59土坑　（第30図、写真図版35）

〔位置・検出面〕ⅡC43に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径135×124cm、底部径112×106cm、深さは38cmを測る。

〔埋土〕５層に分かれ、にぶい黄褐色砂を主体とする。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

5　溝（SD）

3条検出した。このうち1条は片端が調査区外に延び、またもう2条は片端の下端が上端とくっついて消滅する形となっており、いずれの溝も全長は不明である。確認できた長さは最長で19m、上幅は35～151cm、下端は21～104cm、最深で30cmとなっている。時期は検出状況から近世が3条であると考えられる。（鈴木）

02SD 5 溝　（第31図、写真図版36・37）

〔位置・検出面〕　ⅢE81～ⅢE94に位置する。第1検出面で検出した。

〔形状・規模〕南東から北西方向へ、直線上に延び、西端は傾斜して上がっていっており、溝の形は消えてなくなってしまっている。断面形はV字状で、上部が開く。全長は19m60cmである。上端幅は68～118cm、下端幅は28～80cmで、深さは30cmを測る。

〔埋土〕3層に分かれる。褐灰色砂質土を主体とし、上位に褐灰色砂質土を含む黄褐色砂質土、下位に褐灰色砂質土を含む褐色砂質土が堆積している。

〔重複関係〕なし

〔遺物〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SD 6 溝　（第31図、写真図版36・37）

〔位置・検出面〕ⅡC64～ⅡC65に位置する。第1検出面で検出した。

〔形状・規模〕南東から北西方向へほぼ直線状に延び、西端は傾斜して上がり、溝の形は消えてなくなっている。断面形はU字状で、上部が開く。全長は8m30cm弱である。上端幅は35～56cm、下端幅は26～44cmで、深さは24cmを測る。

〔埋土〕2～4層に分かれる。黒褐色砂質土と褐色砂質土を主体とする。

〔重複関係〕なし

〔遺物〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SD 8 溝　（第31図、写真図版37）

〔位置・検出面〕ⅢD1～ⅢD12に位置する。第1検出面で検出した。

〔形状・規模〕南東から北西に直線上に延び、西端は調査区外へと続く。断面形は浅皿状で、上部が開く。全長は10m弱である。上端幅は47～151cm、下端幅は21～104cmで、深さは29cmを測る。

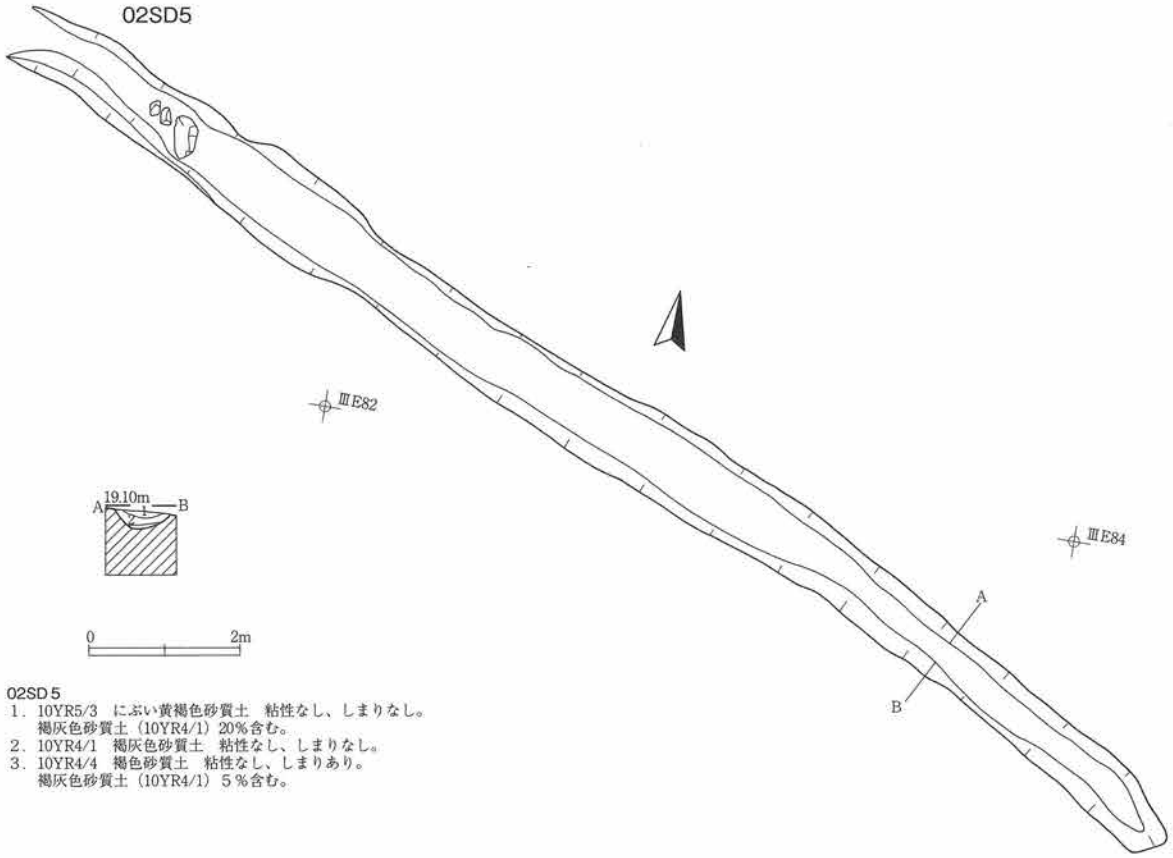
〔埋土〕4層に分かれ炭化物を微量に含む黒褐色土を主体とする。

〔重複関係〕なし

〔遺物〕なし

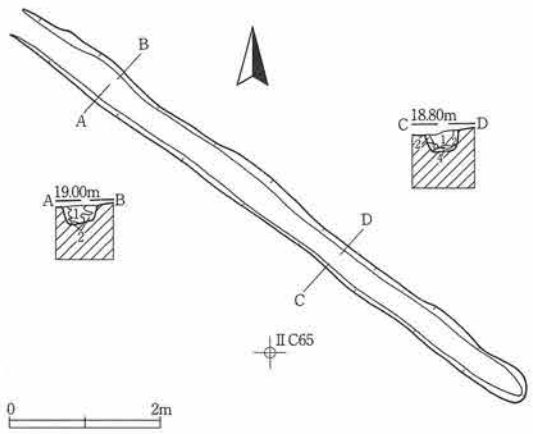
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

02SD5



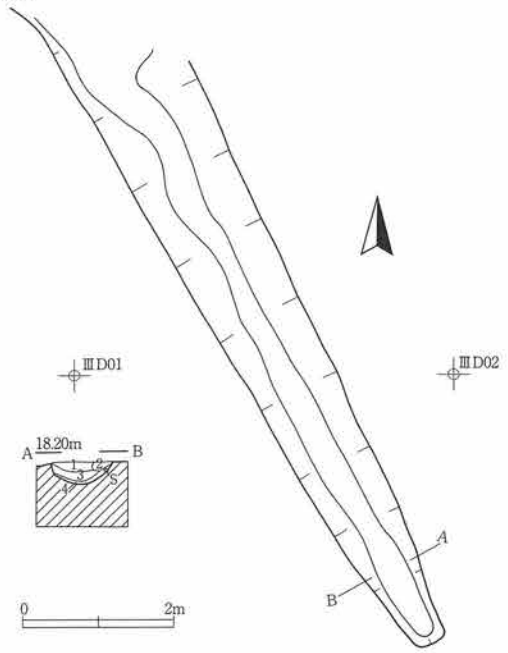
02SD5
1．10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐灰色砂質土（10YR4/1）20%含む。
2．10YR4/1　褐灰色砂質土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
　褐灰色砂質土（10YR4/1）５%含む。

02SD6



02SD6
A－B
1．10YR3/1　黒褐色砂質土　粘性ややあり、しまりややあり
2．10YR4/6　褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり
C－D
1．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）７%含む。
2．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。
4．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。

02SD8



02SD8
1．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　径２～３㎜の炭化物物微量含む。
2．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。
　灰黄褐色土（10YR4/2）10%含む。
3．10YR3/1　黒褐色土　砂質　粘性なし、しまりあり。
4．10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりあり。３層10%含む。

第31図　02SD５、02SD６、02SD８

Ⅵ　B区の遺構

1　B区概観

大グリッドⅡC東側、ⅡD南側付近をB区と称している。北限は旧県道、東限は大グリッドDとEの境界付近の民家の敷地境界を延長した線、西、南限は平成14年度調査区である。調査区全体の中ではほぼ中央部に位置する。B区ではB区墓域として計123基の墓壙が検出されたが、それらは第３分冊でD区の墓壙とともに報告する。

B区は調査前には墓地、製材所、畑、県道として使用されていた。平成15年度の調査担当は溜、鈴木、阿部孝明、平成16年度の担当者は羽柴、川又、鈴木、西澤、小針である。B区の地形は旧県道筋の北側ほど標高が高く、南側（北上川）に向かうに従って標高を減じ、緩斜面になっている。

ここに掲載するB区検出の遺構は竪穴住居（SI）１棟、土坑（SK）37基、溝（SD）４条、畝間状遺構（SX）１基、焼土遺構２基、集石遺構１基、沢跡１条である。（鈴木）

2　竪穴住居（SI）

B区SI１竪穴住居　（第33図、写真図版38・39）

〔検出面〕第２検出面で検出した。

〔位置〕ⅡC55に位置する。カマドの設置された東壁付近は明瞭に検出されたが、それに続く煙道の平面や北壁については、ほとんど不明瞭で確認できなかった。

〔形状・規模〕壁面が不明瞭なため、規模は不明である。

〔床面・壁面〕カマド周辺の床面は、暗褐色砂質土により貼り床が施されて、周辺部分に比べてやや高くなっている。貼り床が砂質土でつくられているため、埋土との識別がより非常に困難である。

〔埋土〕14層に分かれる。上位に暗褐色砂、下位に黒色砂が堆積している。

〔カマド〕カマドは東壁中央南側に位置する。芯材には礫を使用し構築されている。燃焼部には、暗赤褐色焼土が広がる。

〔焼土〕カマド燃焼部の１ヶ所のみで焼土を確認した。

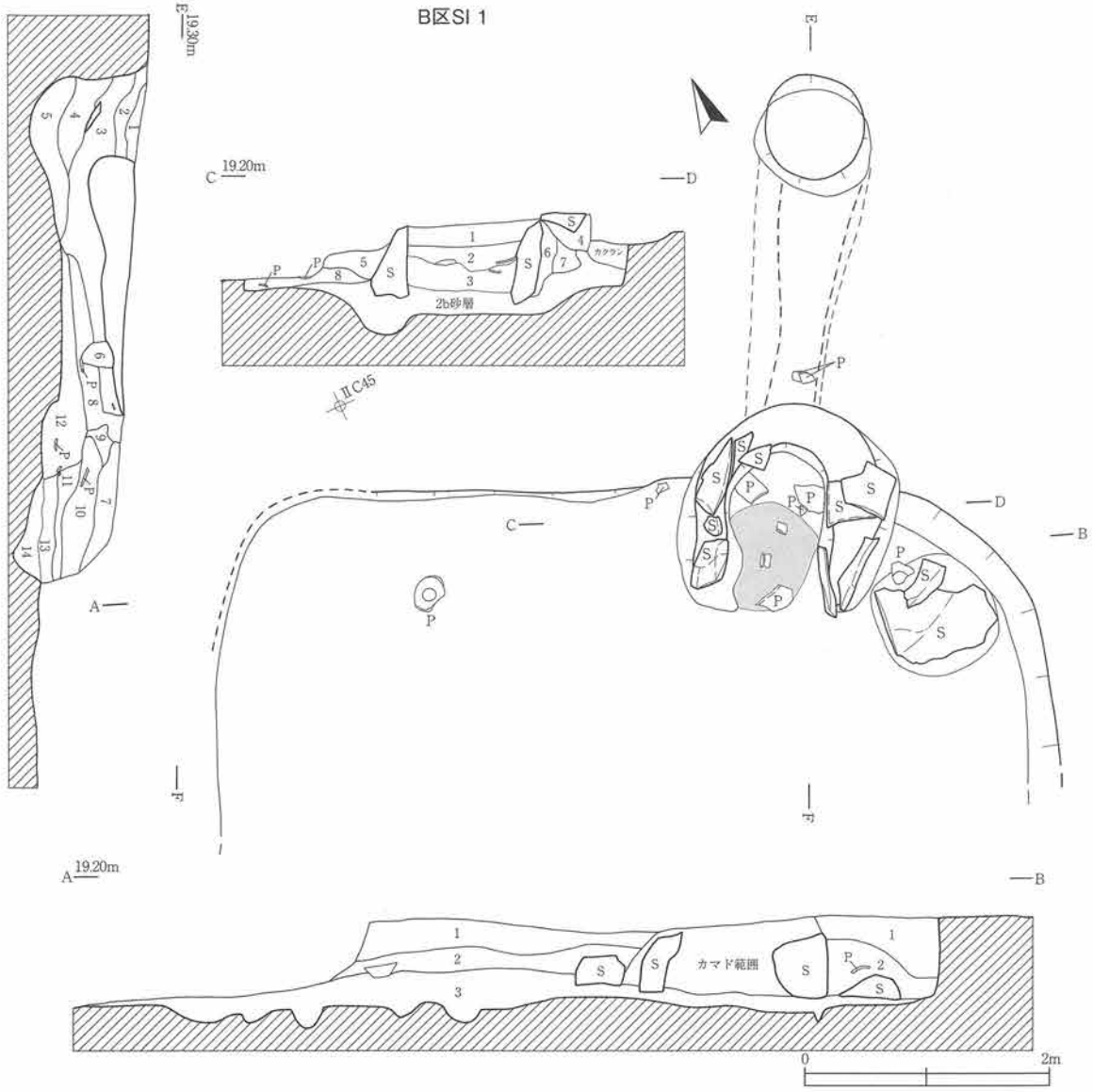
〔土坑・柱穴〕土坑、柱穴等は、確認できなかった。

〔重複関係〕なし

〔遺物〕土師器坏（30）、須恵器坏（31）、土師器長胴甕（32～37）、土師器鉢（38）が出土している。

〔時期〕出土した土師器、須恵器の年代観から８世紀末～９世紀初頭の住居と考えられる。（鈴木）

第32図　B区遺構配置図



B区SI 1

A－B
1．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
2．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　にぶい赤褐色焼土（2.5YR4/4）３％含む。
3．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
　住居貼り床土。

C－D
1．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）１％含む。
2．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
3．5YR3/3　暗赤褐色焼土　粘性ややあり、しまりあり。
　褐灰色土（7.5YR4/1）30％含む。燃焼痕。
4．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。
　暗赤褐色焼土（5YR3/3）10％含む。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色土70％、
　（5YR3/3）暗赤褐色焼土30％の混合土層。
　粘性なし、しまりあり。カマド構成土の崩落か？
6．10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりややあり。
　暗褐色焼土（7.5YR3/3）２～３％含む。
7．10YR3/4　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
8．7.5YR3/3　暗褐色土　粘性なし、しまりあり。
　赤褐色焼土粒（2.5YR4/8）３％含む。住居貼り床土。

E－F
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂粘性なし、しまりややあり、
　にぶい黄褐色土（10YR5/4）径10～13㎜の粒状で２％含む。
2．10YR4/4　黄褐色砂粘性なし、しまりあり。
　にぶい黄褐色土粒（10YR5/4　径10～15㎜）３％、炭化物がしみ状に混入。
3．10YR3/4　暗褐色砂粘性なし、しまりあり。溶けた炭化物、しみ状に10％含む。
4．10YR4/3　にぶい黄褐色砂粘性なし、しまりなし。
　溶けた炭化物、しみ状に50％含む。
5．10YR3/3　暗褐色砂粘性なし、しまりなし。溶けた炭化物、しみ状に60～70％含む。
6．10YR3/4　暗褐色砂粘性なし、しまりややあり。
7．10YR4/4　褐色砂粘性なし、しまりあり。にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）１％含む。
8．10YR3/3　暗褐色砂粘性なし、しまりあり。溶けた炭化物をしみ状に10％、
　にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）20％含む。
9．10YR3/3　暗褐色砂粘性なし、しまりあり。暗赤褐色焼土（5YR3/3）10％含む。
10．10YR4/4　褐色砂粘性なし、しまりあり。
11．10YR4/4　褐色砂粘性なし、しまりあり。暗赤褐色焼土（5YR3/3）３％含む。
12．5YR1.7/1　黒色砂粘性なし、しまりややあり
　にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）ブロックで３％、
　暗褐色砂（10YR3/4）10％含む。褐灰色土（7.5YR4/1）10％含む。
13．7.5YR4/1　褐灰色土粘性あり、しまりあり。
14．5YR4/6　赤褐色砂粘性なし、しまりあり。

第33図　B区SI 1

3　焼　土　遺　構

B区焼土１　（第34図、写真図版40）

〔位置・検出面〕ⅡC48グリッドに位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕大きさは139×57cmの楕円形をなし、焼土層の厚さは約９cmを測る。

〔埋土〕赤褐色砂質焼土を主体とする。

〔重複関係〕なし

〔遺物〕なし

〔時期〕検出状況から、近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

B区焼土２　（第34図、写真図版40）

〔位置・検出面〕ⅡC48グリッドに位置する。第１検出面で検出した。

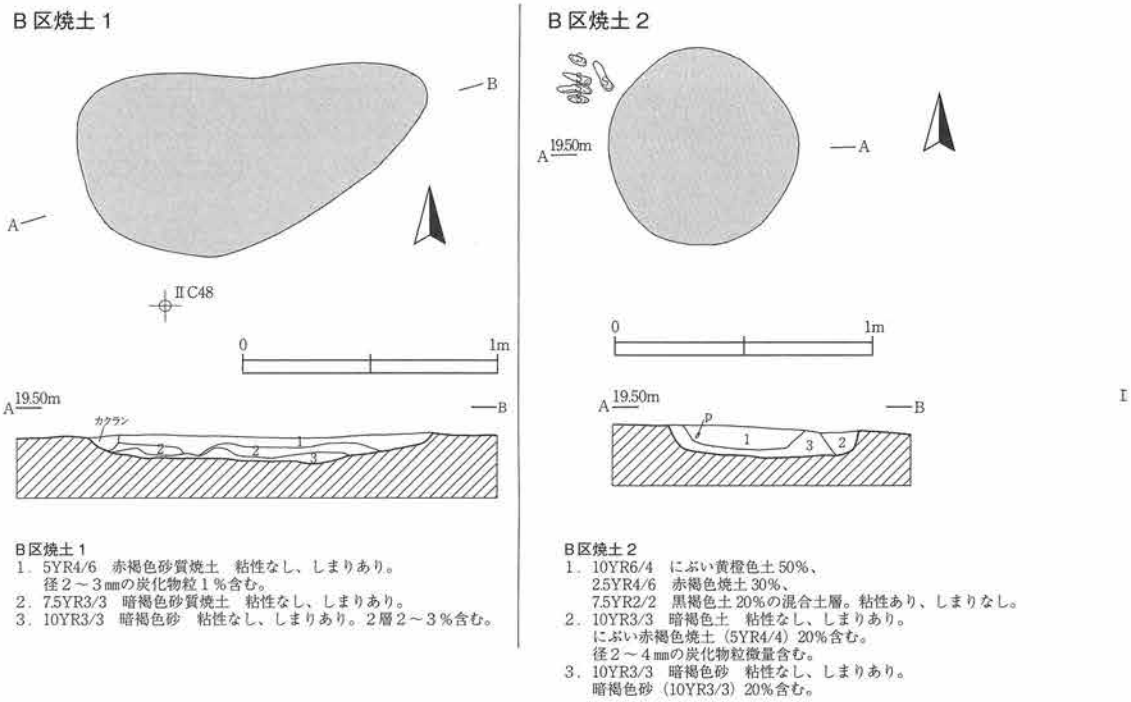
〔形状・規模〕79×71cmの円形をなし、焼土層の厚さは約14cmを測る。

〔埋土〕にぶい黄橙色土、赤褐色焼土、黒褐色土の混合土を主体とする。

〔重複関係〕なし

〔遺物〕なし

〔時期〕検出状況から、近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）



第34図　B区焼土１、B区焼土２

4　土　　坑（SK）

38基検出した。ほとんどは、B区墓域の西側、旧県道沿いでまとまって検出された。検出面からその大部分は近世の遺構と考えられる。（鈴木）

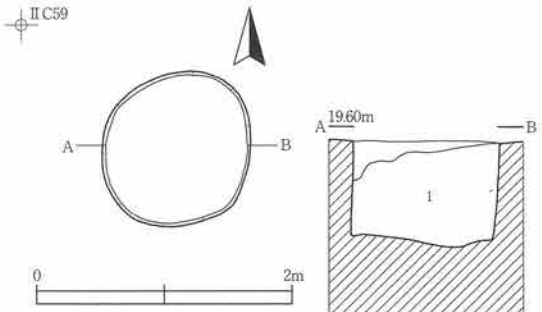
B区SK１土坑　（第35図、写真図版40）
〔位置・検出面〕ⅡC69に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径153×138cm、底部径146×130cmで、深さは99cmを測る。
〔埋土〕２層に分かれにぶい黄褐色砂を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK２土坑　（第35図、写真図版40）
〔位置・検出面〕ⅡC68に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径178×160cm、底部径155×143cmで、深さは89cmを測る。
〔埋土〕にぶい黄褐色砂質土の単層である。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK３土坑　（第35図、写真図版41）
〔位置・検出面〕ⅡC58に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径160×150cm、底部径143×132cmで、深さは150cmを測る。
〔埋土〕にぶい黄褐色砂質土の単層である。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

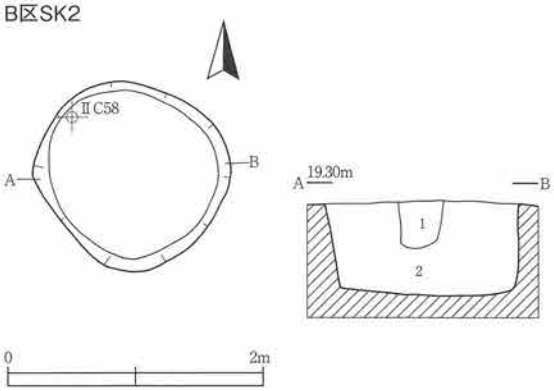
B区SK４土坑　（第35図、写真図版41）
〔位置・検出面〕ⅡC70に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径171×151cm、底部径168×146cmで、深さは84cmを測る。
〔埋土〕２層に分かれ上位ににぶい黄褐色砂質土、下位に褐色シルトが堆積する。
〔出土遺物〕なし

B区SK1



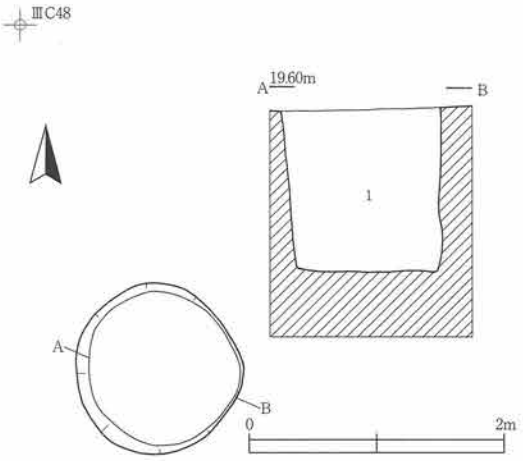
B区SK１
1．10YR4/6　褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂粘性なし、しまりなし。

B区SK2



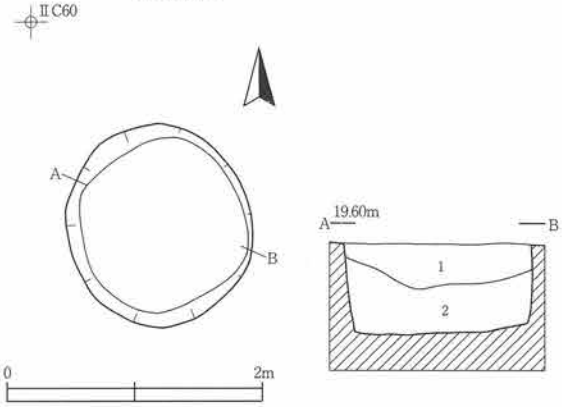
B区SK２
1．10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
　径３～４㎜の炭化物を２％含む。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。

B区SK3



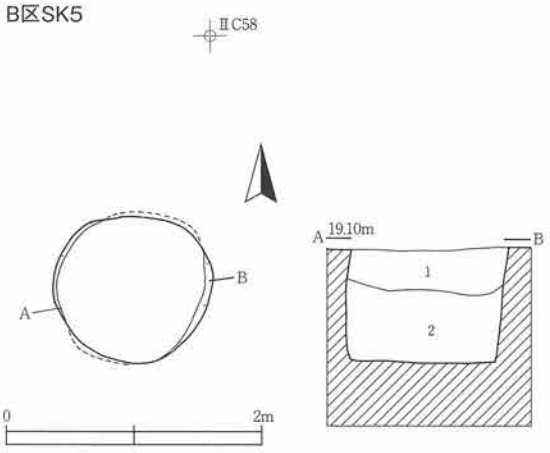
B区SK３
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。

B区SK4



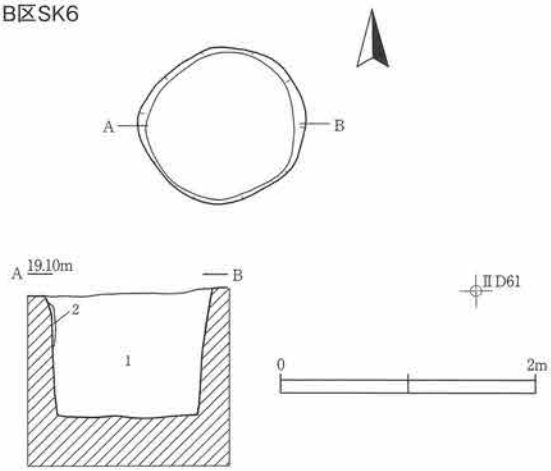
B区SK４
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。
2．10YR4/4　褐色シルト　粘性ややあり、しまりなし。

B区SK5



B区SK５
1．10YR4/3　にぶい黄褐色シルト粘性ややあり、しまりなし。
　褐色土（10YR4/4）を７％、径３～４㎜の炭化物を５％含む。
2．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性ややあり、しまりなし。
　褐色土（10YR4/4）を10%、径３～４㎜の炭化物を３％含む。

B区SK6



B区SK６
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土粘性ややあり、しまりややあり。
　褐色土（10YR4/4）を10%、径２～３㎜の炭化物を３％含む。

第35図　B区SK１～B区SK６

〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK５土坑（第35図、写真図版41）
〔位置・検出面〕ⅡC67に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状･規模〕平面形は円形である。開口部径141×138cm、底部径128×124cmで、深さは105cmを測る。
〔埋土〕２層に分かれ、上位ににぶい黄褐色シルト、下位に暗褐色シルトが堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

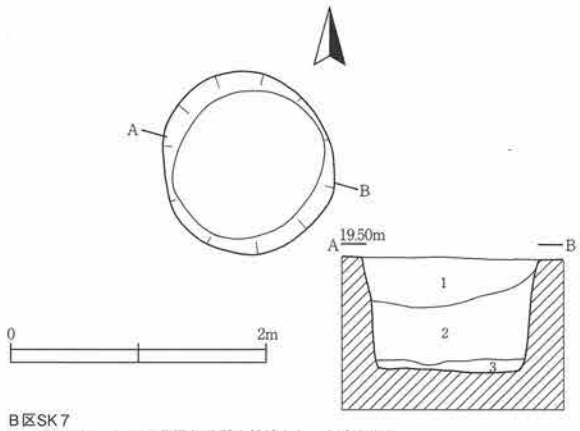
B区SK６土坑（第35図、写真図版41）
〔位置・検出面〕ⅡC70に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状･規模〕平面形は円形である。開口部径155×138cm、底部径135×128cmで、深さは115cmを測る。
〔埋土〕にぶい黄褐色砂質土の単層である。褐色土と微量の炭化物を含む。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕B区SK19を切る。
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK７土坑（第36図、写真図版42）
〔位置・検出面〕ⅡC57に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状･規模〕平面形は円形である。開口部径168×161cm、底部径141×132cmで、深さは108cmを測る。
〔埋土〕３層に分かれる。暗褐色砂質土を主体とし、上位ににぶい黄褐色砂質土、下位に褐色土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK８土坑（第36図、写真図版42）
〔位置・検出面〕ⅡC58に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状･規模〕平面形は円形である。開口部径179×151cm、底部径141×128cmで、深さは161cmを測る。
〔埋土〕４層に分かれる。にぶい黄褐色砂質土、暗褐色シルトを主体とし、下位に褐色シルトにぶい黄褐色砂質土が堆積する。
〔出土遺物〕なし

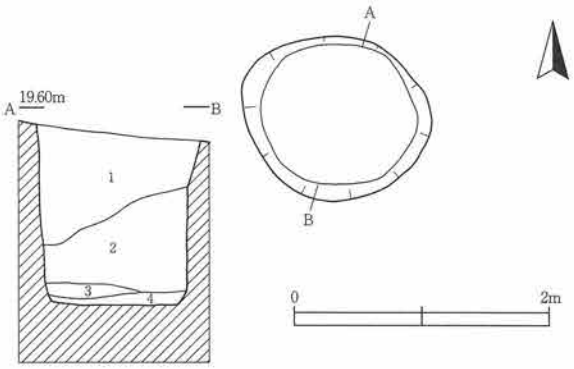
ⅢC47

B区SK７



B区SK７
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
2．10YR3/4　暗褐色砂質土粘性ややあり、しまりややあり。
　褐色土（10YR4/4）を30%含む。
3．10YR4/4　褐色土粘性ややあり、しまりややあり。

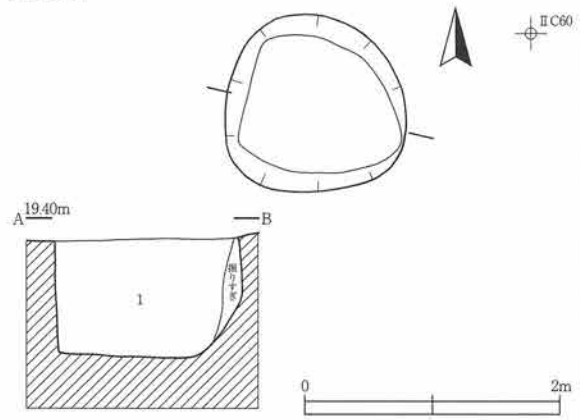
B区SK8



B区SK８
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。
2．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性ややあり、しまりなし。
　径４～５㎜の炭化物を含む。
3．10YR4/4　褐色シルト粘性ややあり、しまりややり。
4．10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土粘性ややあり、しまりあり。

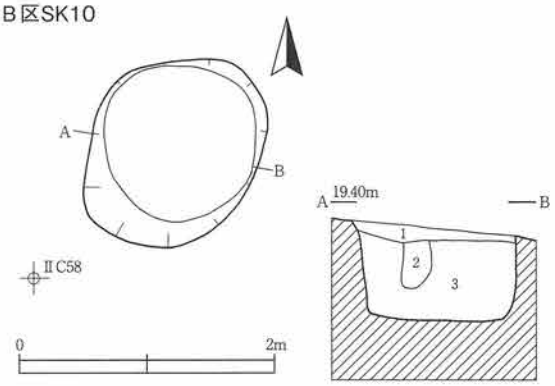
B区SK７

ⅡC60



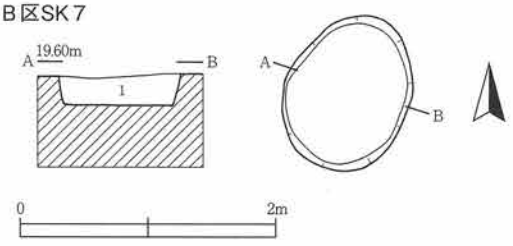
B区SK９
1．10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　にぶい黄褐色土（10YR5/4）を５%、径４～５㎜の炭化物を２%含む。

B区SK10



B区SK10
1．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりややあり。
　褐色土粒（10YR4/4）を５～１%含む。
2．10YR3/2　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし。
3．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし　しまりなし。
　褐色土（10YR4/4）20%混合。

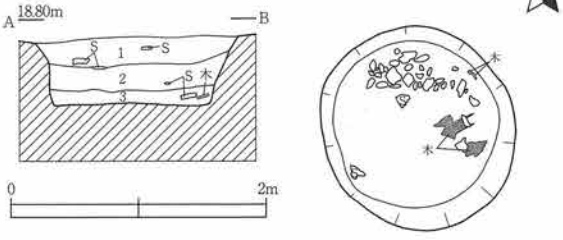
B区SK７



B区SK11
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト粘性なし、しまりなし。
（10YR4/4）褐色土10%含む。

ⅡC58

B区SK12



B区SK12
1．10YR3/2 黒褐色砂質土粘性なし、しまりややあり。
　径２～４㎜の小礫少量含む。
2．10YR3/2　黒褐色砂質土70%、（10YR3/3）暗褐色砂質土30%の混合土層、
　粘性なし、しまりなし。
3．10YR4/1　褐灰色粘土粘性あり、しまりあり、水酸化鉄多く含む。

ⅡD81

第36図　B区SK７～B区SK12

〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK９土坑　（第36図、写真図版42）
〔位置・検出面〕ⅡC69に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径181×171cm、底部径146×123cmで、深さは112cmを測る。
〔埋土〕炭化物を微量に含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK10土坑　（第36図、写真図版42）
〔位置・検出面〕ⅡC58に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径194×155cm、底部径138×143cmで、深さは87cmを測る。
〔埋土〕２層に分かれ褐色土を含む暗褐色砂を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK11土坑　（第36図、写真図版43）
〔位置・検出面〕ⅡC57に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径148×115cm、底部径128×103cmで、深さは29cmを測る。
〔埋土〕褐色土を含むにぶい黄褐色砂質シルトの単層である。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK12土坑　（第36図、写真図版43）
〔位置・検出面〕ⅡC90に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径186×176cm、底部径153×151cmで、深さは66cmを測る。
〔埋土〕黒褐色砂質土と暗褐色砂質土の混合土をはさんで、上位に小礫を少量含んだ黒褐色砂質土、下位に水酸化鉄を多く含む灰褐色粘土が堆積。
〔出土遺物〕木片

〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

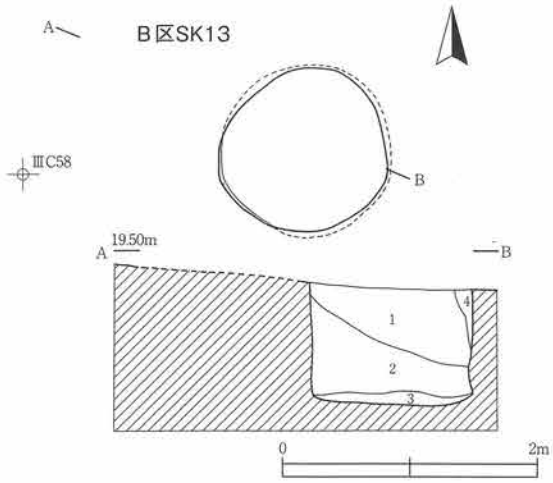
B区SK13土坑　（第37図、写真図版43）
〔位置・検出面〕ⅡC58に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状･規模〕平面形は円形である。開口部径158×155cm、底部径153×148cmで、深さは113cmを測る。
〔埋土〕３層に分かれる。上位に褐色砂質シルト、下位ににぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK14土坑　（第37図、写真図版43）
〔位置・検出面〕ⅡC80に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状･規模〕平面形は円形である。開口部径174×171cm、底部径140×146cmで、深さは123cmを測る。
〔埋土〕２層に分かれる。黒褐色砂質土と黄褐色土の混合土を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK16土坑　（第37図、写真図版44）
〔位置・検出面〕ⅡC80に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状･規模〕平面形は楕円形である。開口部径303×268cm、底部径132×128cmで、深さは74cmを測る。
〔埋土〕３層に分かれる。径４cm程の礫を少量含む黒褐色砂を主体とし、下位に黒褐色砂質土、明黄褐色土を含む灰黄褐色砂質土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

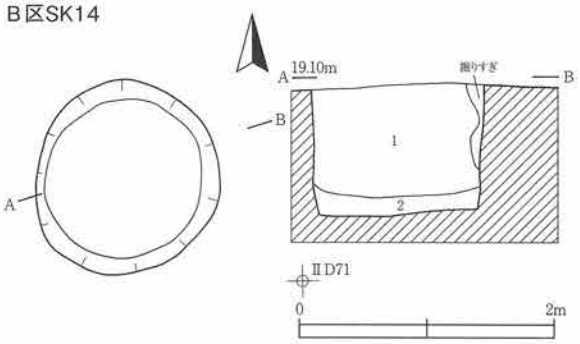
B区SK17土坑　（第37図、写真図版44）
〔位置・検出面〕ⅡC56に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状･規模〕平面形は円形である。開口部径141×130cm、底部径110×108cmで、深さは66cmを測る。
〔埋土〕褐色砂質シルトの単層である。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし

B区SK13



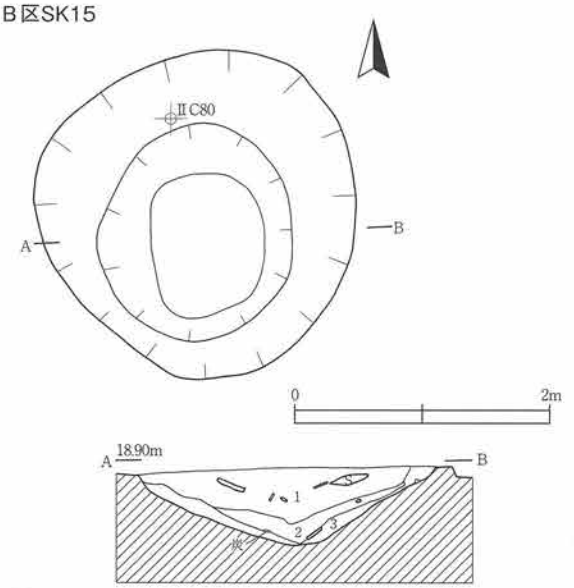
B区SK13
1．10YR4/4　褐砂質シルト　粘性なし、しまりなし、
　10YR4/3　にぶい黄褐10%含む。
2．10YR4/3　にぶい黄褐砂質シルト　粘性ややあり、しまりなし。
　10YR4/4　褐20%含む。
3．10YR4/2　灰黄褐砂質シルト　粘性ややあり、しまりなし。
4．10YR4/4　褐砂質シルト　粘性なし、しまりなし。炭化物1%含む。

B区SK14



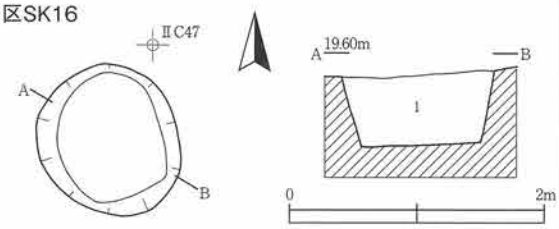
B区SK14
1．10YR3/2　黒褐色砂質土80%、10YR5/6　黄褐色土20%の混合土層、
　粘性なし、しまりなし。

B区SK15



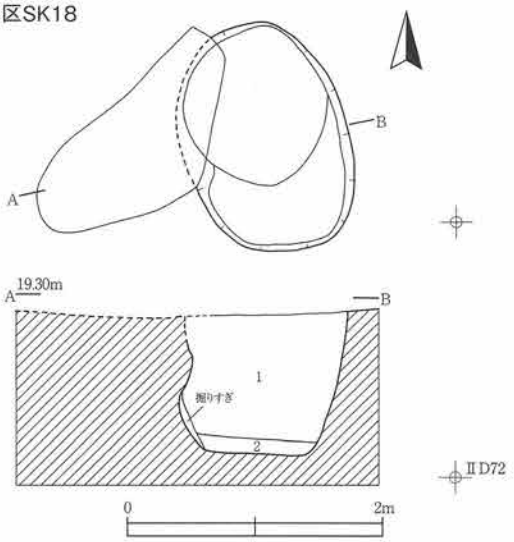
B区SK15
1．10YR3/2　黒褐色砂　粘性なし、しまりなし。
　径4cm程の礫少量含む。
2．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
3．10YR4/2　灰黄褐色砂質土粘性なし、しまりあり、
　明黄褐色土　10YR6/6　ブロックで5%含む。

B区SK16



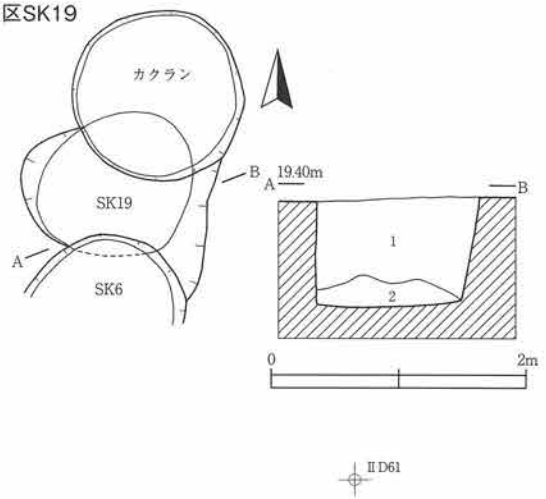
B区SK16
1．10YR4/4　褐砂質シルト　粘性なし、しまりややあり。

B区SK18



B区SK18
1．10YR3/3　暗褐色砂質土粘性なし、しまりなし。
　褐色土（10YR4/4）3%、径5㎜の炭化物20%含む。
2．10YR4/4　褐色砂質土粘性ややあり、しまりあり。

B区SK19



B区SK19
1．10YR3/2　黒褐色砂質土70%、
　10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりややあり。
2．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。

第37図　B区SK13～B区SK16、B区SK18、B区SK19

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK18土坑（第37図、写真図版44）

〔位置・検出面〕ⅡD71に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径214×153cm、底部径198×133cmで、深さは132cmを測る。

〔埋土〕２層に分かれる。褐色土や炭化物を含んだ暗褐色砂質土を主体とし、下位に褐色砂質土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK19土坑（第37図、写真図版44）

〔位置・検出面〕ⅡC70に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径112cm、底部径138×136cmで、深さは99cmを測る。

〔埋土〕２層に分かれる。黒褐色砂質土とにぶい黄褐色土の混合土を主体とし、下位に黒褐色砂質土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕B区SK６と撹乱に切られる。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK20土坑（第38図、写真図版45）

〔位置・検出面〕ⅡC69に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径161×148cm、底部径132×123cmで、深さは135cmを測る。

〔埋土〕２層に分かれる。黒褐色砂質土と褐色砂質土の混合土を主体とし、上位に黒褐色砂質土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK21土坑（第38図、写真図版45）

〔位置・検出面〕ⅡC58に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径181×156cm、底部径168×138cmで、深さは115cmを測る。

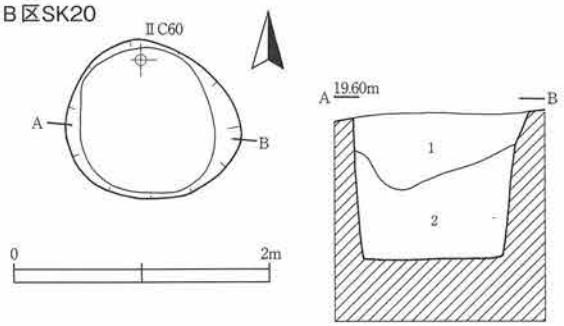
〔埋土〕炭化物を含む褐色砂質土の単層である。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

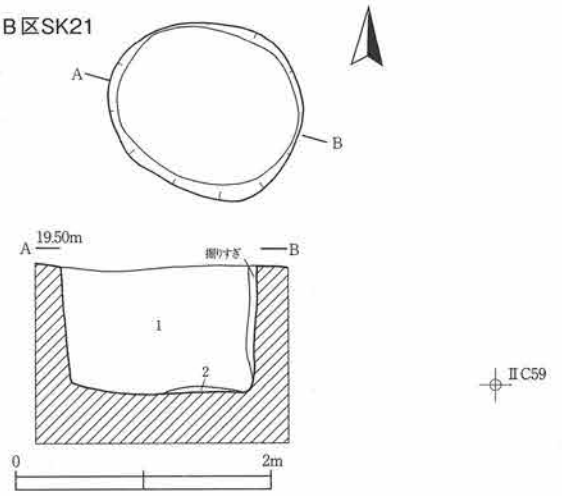
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK20



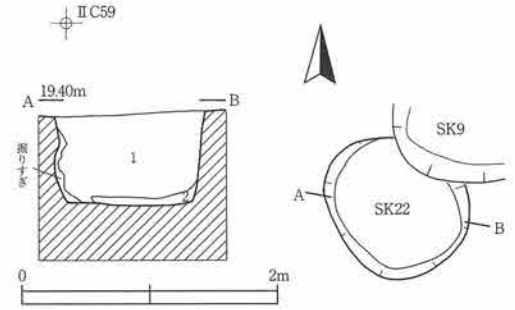
B区SK20
1．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
2．10YR3/2　黒褐色砂質土70%、
　褐色砂質土（10YR4/4）30%の混合土層。
　筋状に交互に重なって堆積　粘性なし、しまりなし。

B区SK21



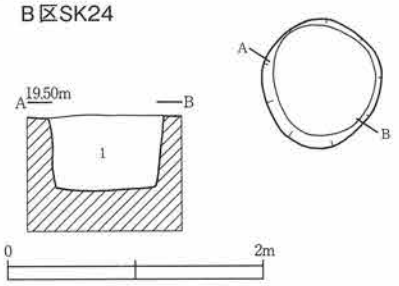
B区SK21
1．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　径4～5㎜の炭化物を5%含む。
2．10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。

B区SK22



B区SK22
1．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐色土（10YR4/4）30%混合、径5～8㎜の炭化物微量含む。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし、
　径5～8㎜の炭化物微量含む。

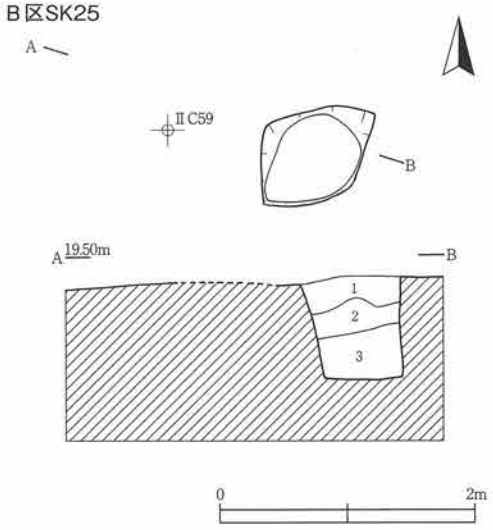
B区SK24



B区SK24
1．10YR4/4　褐砂質シルト　粘性なし、ややしまる。
　径2～3㎜の炭化物を1%含む。

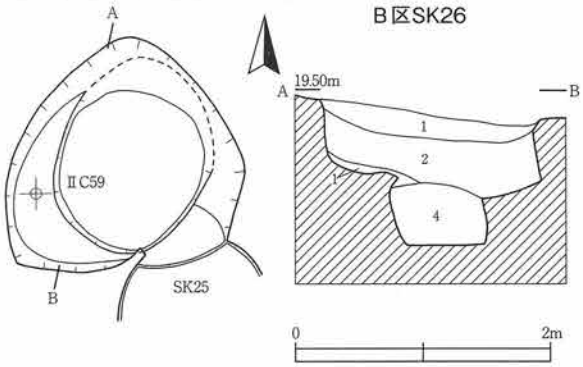
ⅡC57

B区SK25



B区SK25
1．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりあり。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりあり。
3．10YR4/4　褐色砂　粘性なし、しまりあり。

B区SK26



B区SK26
1．10YR4/4　褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。
　径3～4㎜の炭化物を2%含む。
2．10YR4/4　褐色砂質土　粘性ややあり、しまりなし。
　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）を20%、径7～8㎜の炭化物を1%含む。
3．10YR4/4　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
4．10YR3/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　径3～4㎜の炭化物1%含む。

第38図　B区SK20～B区SK22、B区SK24、B区SK26

B区SK22土坑　（第38図、写真図版45）

〔位置・検出面〕ⅡC69に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径138×125cm、底部径120×102cmで、深さは89cmを測る。

〔埋土〕黒褐色砂質土の単層である。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕B区SK９に切られる。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

B区SK24土坑　（第38図、写真図版45）

〔位置・検出面〕ⅡC56に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径115×108cm、底部径95×92cmで、深さは72cmを測る。

〔埋土〕炭化物を含む褐色砂質シルトの単層である。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

B区SK25土坑　（第38図、写真図版46）

〔位置・検出面〕ⅡC69に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径133×94cm、底部径99×74cmで、深さは95cmを測る。

〔埋土〕３層に分かれる。にぶい黄褐色砂をはさんで、上位に暗褐色砂、下位に褐色砂が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕B区SK25に切られる。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

B区SK26土坑　（第38図、写真図版46）

〔位置・検出面〕ⅡC59に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は楕円形である。開口部径214×224cm、底部径140×130cmで、深さは122cmを測る。

〔埋土〕４層に分かれる。にぶい黄褐色砂質土、炭化物を含む褐色砂質土を主体とし、上位に炭化物を含む褐色砂質土、下位に炭化物を含む暗褐色砂質土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕B区SK25を切る。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

B区SK27土坑　（第39図、写真図版46）

〔位置・検出面〕ⅡC57に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径168×155cm、底部径158×138cmで、深さは92cmを測る。

〔埋土〕４層に分かれる。暗褐色砂を主体とし、上位に暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、下位に黒褐色砂質土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK28土坑　（第39図、写真図版46）

〔位置・検出面〕ⅡC57に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径148×153cm、底部径146×141cmで、深さは115cmを測る。

〔埋土〕４層に分かれる。暗褐色砂質土を主体とし、下位に褐色砂が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK29土坑　（第39図、写真図版47）

〔位置・検出面〕ⅡC70に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径145cm、底部径128×136cmで、深さは115cmを測る。

〔埋土〕２層に分かれ上位ににぶい黄褐色を含む黒褐色砂質土、下位ににぶい黄褐色土を含む黒褐色砂質土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕B区SK19、撹乱に切られる。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK30土坑　（第39図、写真図版47）

〔位置・検出面〕ⅡC56に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径161×148cm、底部径143×128cmで、深さは128cmを測る。

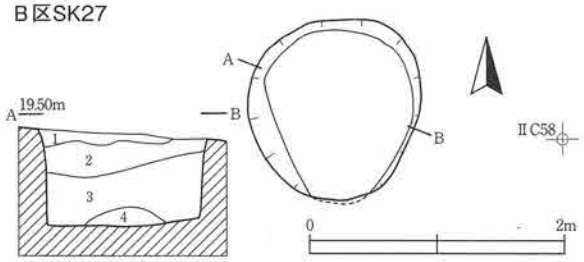
〔埋土〕３層に分かれるが、暗褐色砂質土を主体とする。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕B区SK24に切られる。

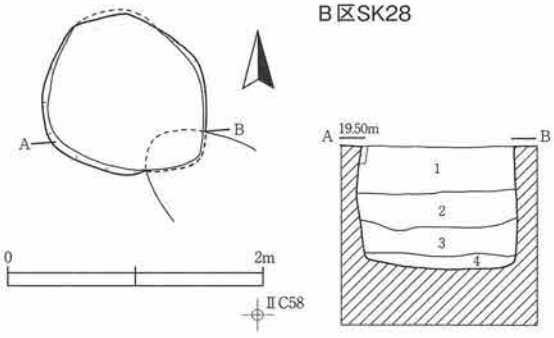
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK27



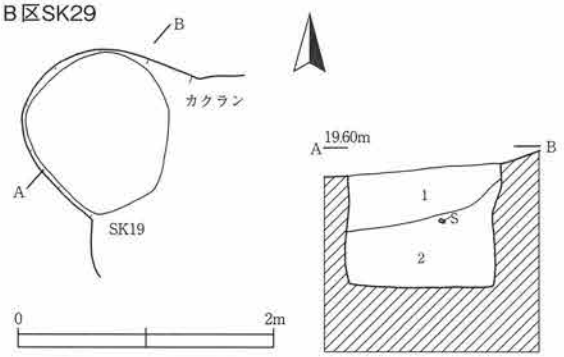
B区SK27
1．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややり。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
3．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりなし。
4．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。

B区SK28



B区SK28
1．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
3．10YR3/3　暗褐色砂質土1、2層より濃色
　粘性なし、しまりややあり。
4．10YR4/4　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。

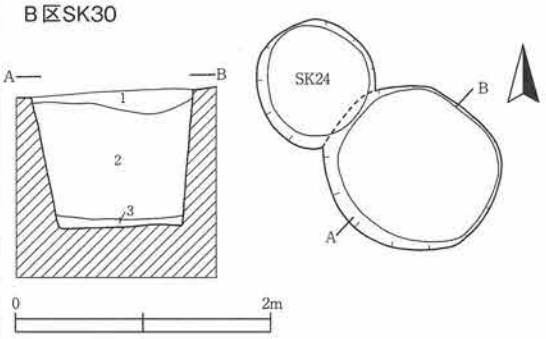
B区SK29



B区SK29
1．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
　にぶい黄褐色土（10YR4/3）10%含む。
2．10YR3/2　黒褐色砂質土粘性なし、しまりややあり。
　にぶい黄褐色土（10YR4/3）2～3%含む

ⅡD61

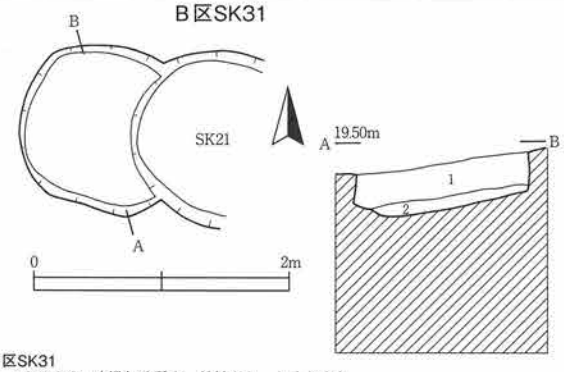
B区SK30



B区SK30
1．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土（10YR4/4）10%、炭化物粒径1㎜微量含む。
2．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
3．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。

ⅡD57

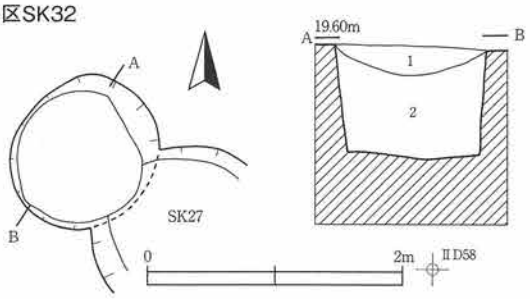
B区SK31



B区SK31
1．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土（10YR4/4）10%含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。

ⅡD59

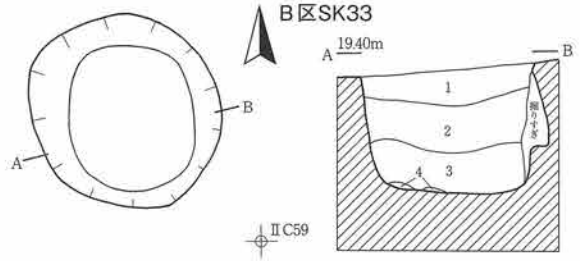
B区SK32



B区SK32
1．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
2．10YR4/2　灰黄褐色土　粘性なし、しまりあり。

ⅡD58

B区SK33



B区SK33
1．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
　褐色砂質土（10YR4/6）を20%含む。
2．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性ややあり、しまりややあり。
　褐色砂質土（10YR4/6）を20%、径2～3㎜の礫を3%、
　径3～4㎜の炭化物を2%含む。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土粘性ややあり、しまりなし。
　径3～4㎜の炭化物を2%含む。
4．10YR4/6　褐色土粘性ややあり、しまりなし。

0
2m

第39図　B区SK27～B区SK33

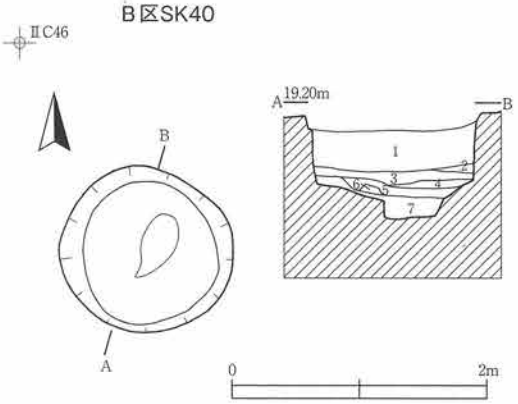
B区SK31土坑　（第39図、写真図版47）
〔位置・検出面〕ⅡC58に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径158×156cm、底部径145×135cmで、深さは61cmを測る。
〔埋土〕２層に分かれ褐色土を含む暗褐色砂質土を主体とし、下位に灰黄褐色砂質土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕B区SK21に切られる。
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK32土坑　（第39図、写真図版47）
〔位置・検出面〕ⅡC57に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径143×128cm、底部径112×118cmで、深さは88cmを測る。
〔埋土〕灰黄褐色土を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕不明
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK39土坑　（第39図、写真図版48）
〔位置・検出面〕ⅡC58に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径186×166cm、底部径136×112cmで、深さは115cmを測る。
〔埋土〕３層に分かれる。褐色砂質土、炭化物を含む暗褐色シルトをはさみ、上位に褐色砂質土、下位に炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土が堆積する。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。

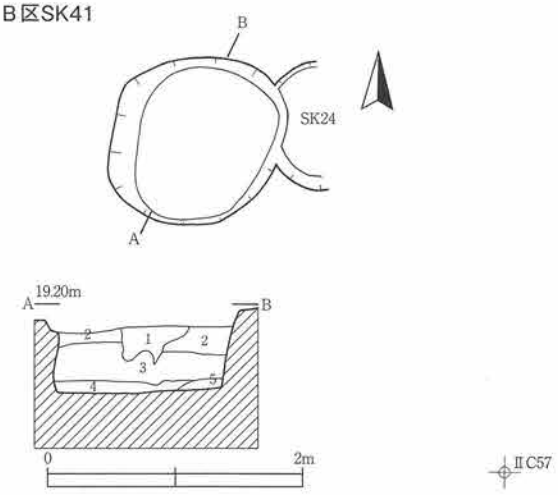
B区SK40土坑　（第40図、写真図版48）
〔位置・検出面〕ⅡC47に位置する。第１検出面で検出した。
〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径156×150cm、底部径132×125cmで、深さは82cmを測る。
〔埋土〕７層に分かれる。にぶい黄褐色砂質土を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔重複関係〕なし
〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK40



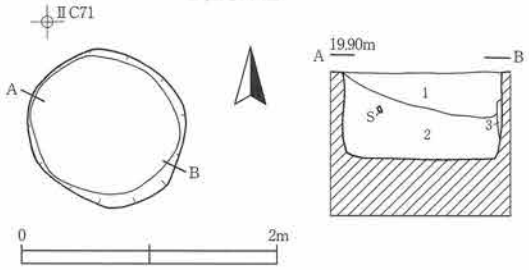
B区SK40
1．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
2．10YR4/4　褐色粘土　粘性あり、しまりややあり。
3．10YR3/3　暗褐色砂質土　粘性なし、しまりなし。
4．10YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりなし。
6．10YR4/4　褐色粘土　粘性あり、しまりなし。
7．10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性あり、しまりなし。

B区SK41



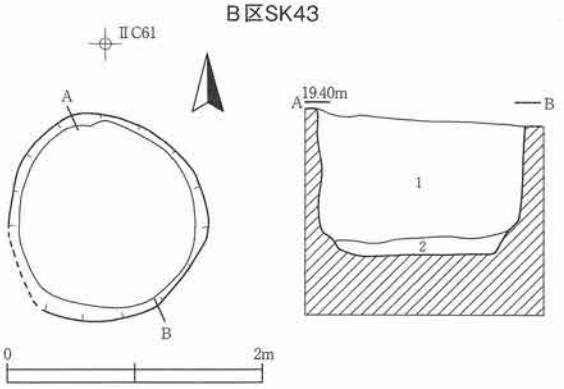
B区SK41
1．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　粘性なし、しまりややありと、
　7.5YR4/4　褐色砂質土　粘性なし、しまりややありの混合土。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりややあり。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土（2より暗い）粘性なし、しまりややあり。
　褐色粘土（10YR4/4）を3％含む。
4．10YR4/4　褐色土　粘性ややあり、しまりなし。
5．10YR5/4　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりなし。

B区SK42



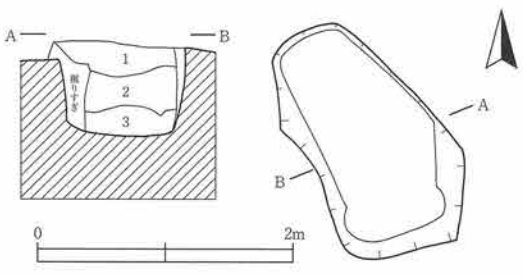
B区SK42
1．10YR4/4　褐砂質シルト　粘性なし、しまりなし。炭化物15％含む。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性ややあり、しまりなし。
　炭化物20％含む。
3．10YR4/3　にぶい黄褐粘土　粘性あり、しまりあり。

B区SK43



B区SK43
1．10YR4/4　褐砂50％（10YR2/2）黒褐砂質シルト50％の混合土層
　粘性なし、しまりなし。炭化物5％含む。
2．10YR4/6　褐砂質シルト　粘性なし、しまりなし。

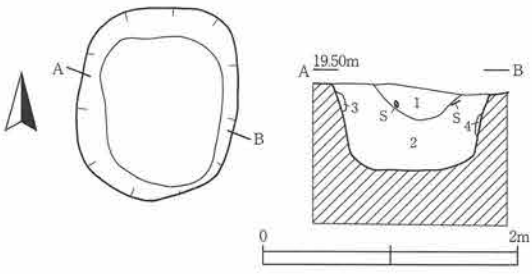
B区SK44



B区SK44
1．10YR3/2　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土（10YR4/4）20％含む。径5㎜の炭化物粒微量含む。
2．10YR3/1　黒褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
　褐色土（10YR4/4）30％含む。径2～3㎜の炭化物粒微量含む。
3．10YR4/4　褐色土　やや粘土質　粘性あり、しまりあり。
　黒褐色砂質土（10YR3/2）10％含む　径1～2㎜の炭化物粒微量含む。

ⅡD2

B区SK45



B区SK45
1．10YR3/4　暗褐色土　粘性ややあり、しまりなし。
　径3～4㎜の炭化物を5％含む。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　粘性なし、しまりあり。
　径2～3㎜の炭化物を含む。
3．10YR4/6　褐色砂　粘性なし、しまりなし。
　褐色砂質土（10YR4/4）を5％含む。
4．10YR5/3　にぶい黄褐色砂　粘性なし、しまりなし。

ⅡD54

第40図　B区SK40～B区SK45

B区SK41土坑　（第40図、写真図版48）

〔位置・検出面〕ⅡC56に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径165×155cm、底部径146×118cmで、深さは64cmを測る。

〔埋土〕５層に分かれる。褐色粘土を含むにぶい黄褐色砂質土を主体に、上位に灰黄褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、下位に褐色土、にぶい黄褐色砂が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕B区SK24を切る。

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

B区SK42土坑　（第40図、写真図版48）

〔位置・検出面〕ⅡD81に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径146×136cm、底部径133×122cmで、深さは64cmを測る。

〔埋土〕２層に分かれる。上位に炭化物を含む褐色砂質シルト、下位に炭化物を含むにぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

B区SK43土坑　（第40図、写真図版44）

〔位置・検出面〕ⅡD71に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径193×186cm、底部径174×163cmで、深さは125cmを測る。

〔埋土〕２層に分かれる。褐色砂と黒褐色砂質シルトの混合土を主体とし、下位に褐色砂質シルトが堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。　（鈴木）

B区SK44土坑　（第40図、写真図版44）

〔位置・検出面〕ⅢD01に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は方形である。開口部径234×122cm、底部径204×105cmで、深さは89cmを測る。

〔埋土〕３層に分かれる。褐色土と微量の炭化物を含む黒褐色砂質土を主体に、上位に黒褐色砂質土、下位に黒褐色砂質土、微量の炭化物粒を含む褐色土が堆積する。

〔出土遺物〕なし

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SK45土坑　（第40図、写真図版44）

〔位置・検出面〕ⅡD54に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕平面形は円形である。開口部径178×148cm、底部径130×105cmで、深さは79cmを測る。

〔埋土〕２層に分かれる。炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土を主体に、上位に炭化物を含む暗褐色土が堆積する。

〔出土遺物〕12世紀のロクロかわらけ（1127）が出土した。

〔重複関係〕なし

〔時期〕検出状況から墓域に隣接した近世以降の遺構と考えられる。出土した12世紀のロクロかわらけはB区沢跡から流入したものと考えられる。（鈴木）

5　溝（SD）

4条検出した。うち1条のB区SD1は、平成15年度検出分と平成16年度検出分とつながり、方形周溝を成している。2条はB区墓域の南端境界付近から見つかっている。B区SD4は平成16年度調査で検出した。（羽柴）

B区SD1溝（第41図、写真図版50～52）

〔位置〕ⅡD31・32・33・41・42・43・51・52・53に位置する。第1検出面の地形図をみると、自然堤防の尾根上に構築されていることがわかる。

〔検出面〕第1検出面。県道の路盤の下で検出された。

〔重複〕現代の水道の導水管と重複するが本遺構が古い。また墓壙B区SZ108と重複するが本遺構が古い。また直接の切り合い関係はないが、プラン内に墓壙B区SZ104、B区SZ105が存在する。

〔形態〕南北径（溝幅を含む）12m20cm、東西径10m40cmの方形に巡る溝である。コーナー部分は丸くなっており、平面形は隅丸方形を呈する。溝の上幅は100～180cm、深さは25～50cmである。底面の標高はいずれも概ね19.60mで、高低差はほとんどない。溝の軸方向は南北辺でN－23°－Eである。

また、本遺構周辺の等高線を見ると、周溝内部が周囲よりも標高が高くなっていることを看取できる。

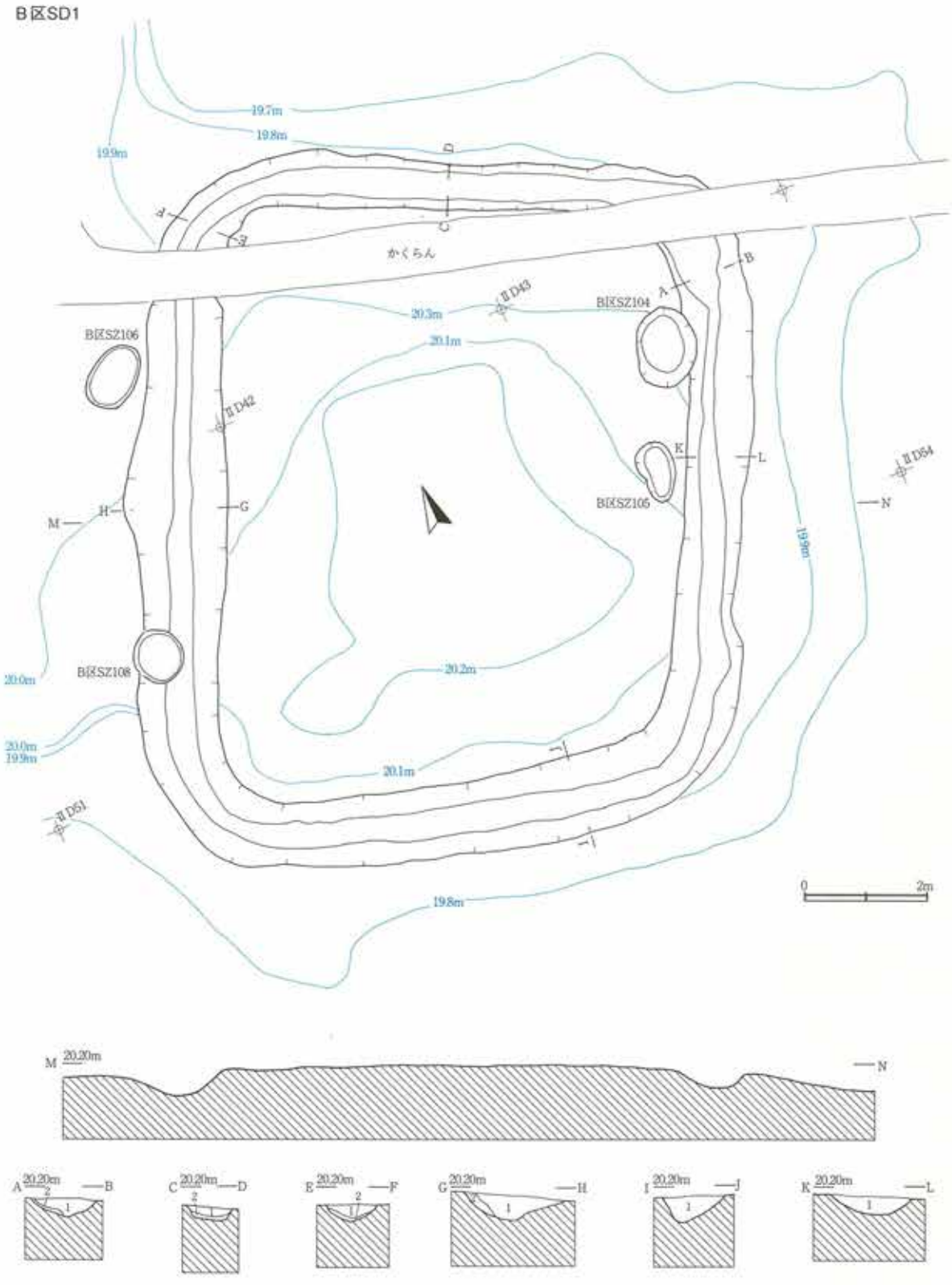
〔埋土〕埋土は1～2層に分けられる。堆積土の形状から自然堆積と推測されるが断定できない。流水、滞水の痕跡は存在しない。

〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけの細片が出土している。平成16年度調査区からは10片出土し、平成15年度調査区では3片出土している。これらは微細片のため図示できないが、当遺跡で出土している12世紀の手づくねかわらけと、胎土、質感共に共通するものである。また埋土中から渥美産陶器山茶碗片（2090）が出土している。また、平成16年度の調査で、周溝北辺の西側埋土中から、人骨（大腿骨？）が出土している。他に埋土中から土師器微細片が1片出土している。

〔性格〕調査で得られた事象では立証できないが、塚の周囲を巡る周溝ではないかと推測する。塚の封土は崩れてしまったと解釈したい。周溝内の標高が周囲よりも高いのは、その名残の可能性がある。埋土から出土した手づくねかわらけ、渥美産山茶碗は12世紀のもので、塚を構築した際の儀礼に使用した器の可能性が高い。

また、本遺跡では白磁四耳壺、渥美産壺、須恵器系陶器波状文四耳壺、青白磁小壺蓋など、12世紀の経塚に埋納されることの多い遺物が出土している。そして、これらは、本遺構から近い場所で多く出土している。これらの遺物の存在は、本遺構が経塚である可能性を強く示しているのではないだろうか。封土中に埋納されたこれらの遺物が、封土の流出とともに周囲に散乱したと推測される。また本遺跡から出土している手づくねかわらけ、銅製六器は、経塚を築いた法要の際に使用したものと解釈できる。少なくとも銅製六器の存在は、本遺跡内で12世紀に何らかの仏教儀礼がおこなわれたことを明示している。方形の経塚は岩手県内でも北上市南部工業団地、花巻市高松経塚などの事例があり、これらには周溝も巡っている。以上の点から本遺構を経塚、あるいは経塚類似遺構と考えたい。

本遺構の周囲に幾つか墓壙が存在する。これらはB区SZ108の事例から、周溝より墓壙の方が新しいと推測される。これらは塚の封土が遺存している段階に、塚に「結縁」して墓を構築したものと推測される。周溝内の人骨も12世紀段階のものではなく、開口している周溝に「埋葬」されたものと判断される。周溝が完全に埋没するまでにはかなりの時間がかかったのであろう。



B区SD1
1．10YR4/2　灰黄褐色土（10YR6/4）にぶい黄橙色砂まだら多量混入　炭化物粒少量混入
2．10YR6/4　黄橙色砂（10YR4/2）灰黄褐色土まだら多量混入　炭化物粒少量混入

第41図　B区SD1（方形周溝）

本遺構に近接して中世の板碑が存在している。これらも、12世紀の塚である本遺構に「結縁」して周囲に立てられたものと解釈される。板碑には文保二（1318）年銘のものがあり、14世紀前半までは塚の封土は残っていたと解釈できる。中世にはこの塚は「霊場」として認識され、埋葬所、供養所になっていたと推測される。

〔年代〕周溝埋土の出土遺物から12世紀後半に構築されたと推測される。（羽柴）

B区SD２溝　（第42図、写真図版53）

〔位置・検出面〕ⅡD95グリッドに位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕北東から南西に延び、北端は撹乱に、南端はSZ89に切られ、はっきりとした長さは不明である。確認できた全長は５m70cmである。上端幅は40～68cm、下端幅21～42cmで深さは18cmを測る。

〔埋土〕黒褐色砂質シルトが筋状に入った暗褐色砂の単層である。

〔重複関係〕SZ89、撹乱に切られる。

〔遺物〕なし

〔時期〕検出状況から、近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）

B区SD３溝　（第42図、写真図版53）

〔位置・検出面〕ⅡD81～ⅡD83グリッドに位置する。第Ⅰ面で検出した。

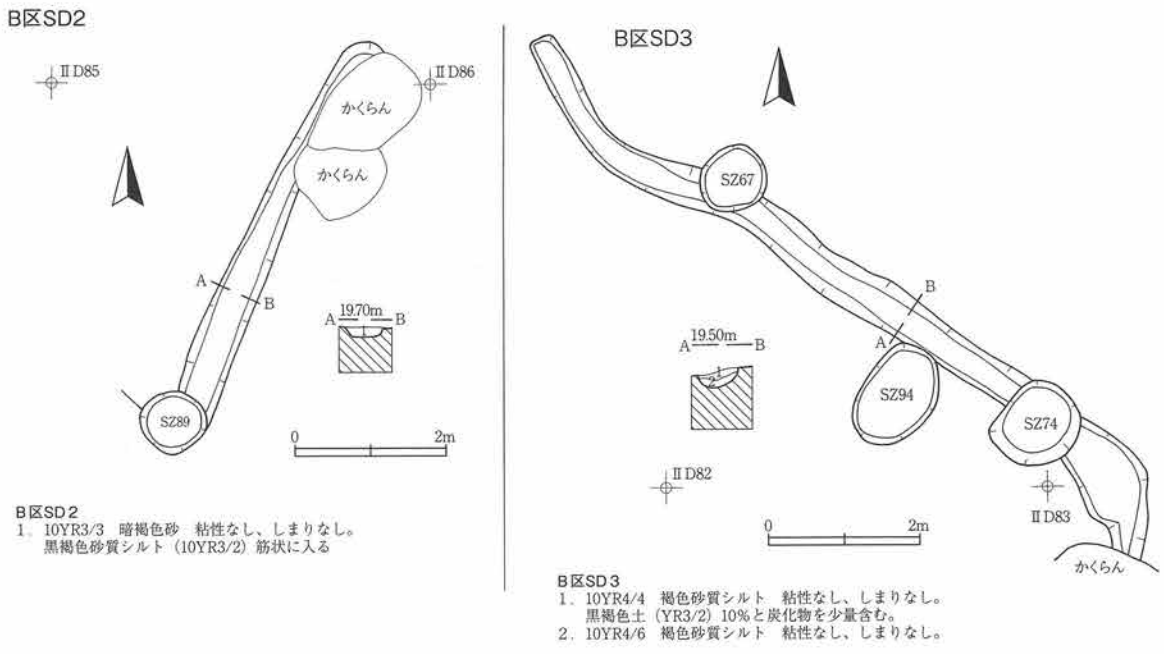
〔形状･規模〕北西から南東に直線状に延び、南端は撹乱に切られ、はっきりとした長さは不明である。確認できた全長は11m弱、である。上端幅は40～110cm、下端幅は28～82cmで深さは28cmを測る。

〔埋土〕２層に分かれる。上位に黒褐色土と炭化物を含む褐色砂質シルト、下位にそれより明るい褐色砂質シルトが堆積する。

〔重複関係〕SZ67、SZ94、SZ72、撹乱に切られる。

〔遺物〕なし

〔時期〕検出状況から近世以降の遺構と考えられる。（鈴木）



B区SD２
1．10YR3/3　暗褐色砂　粘性なし、しまりなし。
　黒褐色砂質シルト（10YR3/2）筋状に入る

B区SD３
1．10YR4/4　褐色砂質シルト　粘性なし、しまりなし。
　黒褐色土（YR3/2）10%と炭化物を少量含む。
2．10YR4/6　褐色砂質シルト　粘性なし、しまりなし。

第42図　B区SD２、B区SD３

B区SD４溝（第43図、写真図版54・55）

〔位置〕ⅡD79・86・87・88・89・97・98・99に位置する。第１検出面の地形図をみると、自然堤防の尾根上に構築されていることがわかる。平成16年度の調査区で検出された。

〔検出面〕第１検出面。

〔重複〕現代の水道の導水管、民家の基礎と重複するが本遺構が古い。

〔形態〕南北８m90cm、東西16m10cmの「L」字形の溝である。コーナー部分は丸くなっており、直角的な曲がりではない。北側は検出面の地形の傾斜が溝の底面より低くなっており、本来は北側にまだ溝が延びていたと推測される。西側は平成15年度のB区の調査区境で突然途切れており、本来は西側に溝が続いていたと判断できる。これは平成15年度B区担当者が本溝の続きを検出できなかった事になる。よって検出された平面形は「L」字型であるが、本来の平面形は不明である。

溝の上幅は70～180cmである。検出面からの深さは15～55cm、底面の標高は19.50～19.90mである。東西溝の中央部分の標高が低く、他は概ね19.80～19.90mで、あまり差がない。

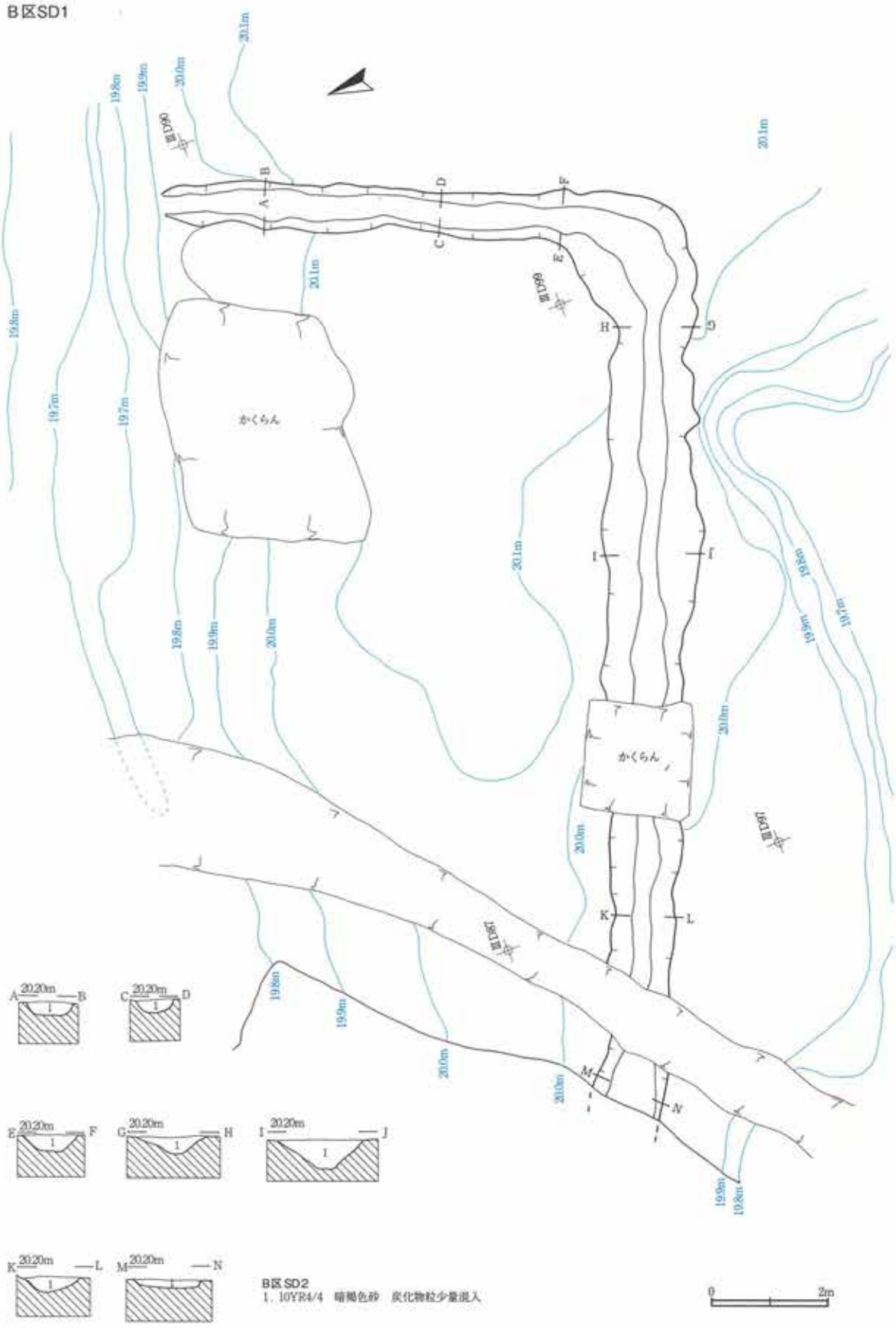
溝の軸方向は南北辺でN－23°－Eである。

〔埋土〕埋土は１層に分けられる。単層のため自然堆積と人為堆積の別を判断できない。流水、滞水の痕跡は存在しない。

〔出土遺物〕埋土中から中世の国産陶器片（2089）が出土している。また細片のため図示していないが12世紀の手づくねかわらけが２片、13後半～14世紀前半のかわらけが１片、古代の土師器が11片出土している。そのほかに埋土中から鍛冶滓５個、羽口の細片が１点出土している。

〔性格〕本来の平面形が不明であり、性格を確定することができない。方形周溝B区SD１と軸方位が共通し、立地も同じ尾根上であり、B区SD１と同様の塚の周りを廻る方形周溝の可能性もある。この場合、一辺16m以上の大規模な方形周溝、塚ということになる。しかし、これを立証するには事象があまりに乏しく、可能性の提示に留めておきたい。

〔年代〕埋土から出土した遺物で最も新しいものは、13世紀後半～14世紀前半のかわらけ細片である。このことから本溝は13世紀後半～14世紀前半までは開口していたと解釈できる。構築時期については不明であるが、12世紀後半の手づくねかわらけの細片も出土しており、B区SD１と同様に12世紀後半の構築である可能性も否定できない。（羽柴）



第43図　B区SD４（平成16年検出）

6　その他の遺構（畝間状遺構（SX）、集石遺構、沢跡）

B区SX１畝間状遺構　（第44図、写真図版59）

〔位置・検出面〕ⅡD91に位置する。第２検出面で検出した。

〔形状・規模〕南西から北東寄りにほぼ等間隔で７条が並ぶ。西寄りの２条は全長が約２m半弱と短く他の５条は約５m弱となっている。上端幅は30～40cm、下端幅は20～30cm幅で深さは５から10cmとかなり浅い

〔埋土〕褐色砂質土を主体とする。

〔重複関係〕なし

〔遺物〕なし

〔時期〕検出状況から、古代の遺構と考えられる。

〔性格〕畠と推測される。　（鈴木）

B区集石遺構　（第45図、写真図版59）

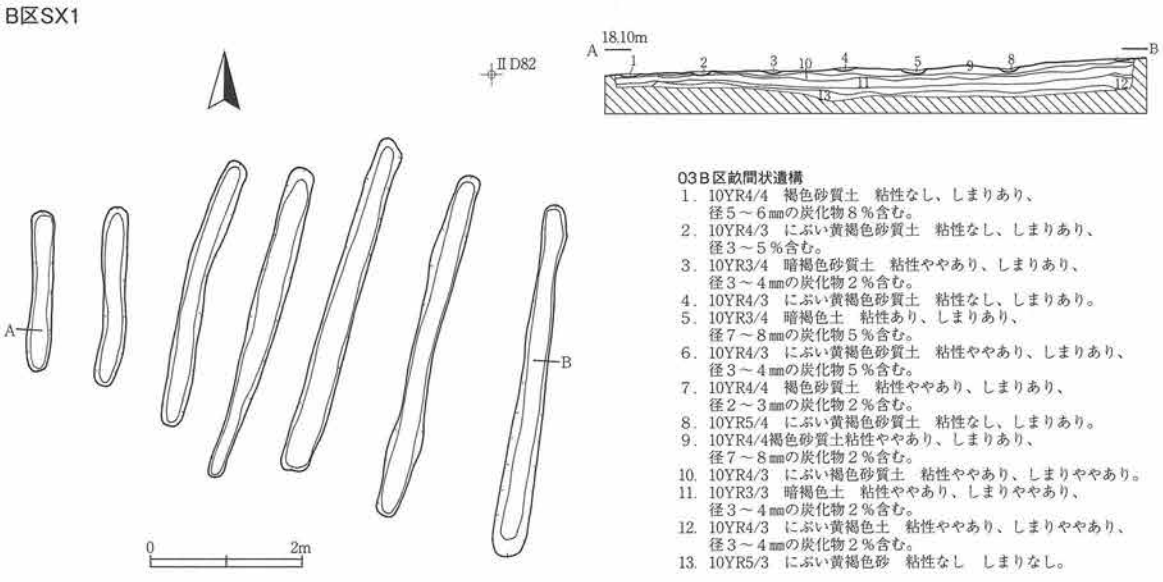
〔位置・検出面〕ⅡD82・92に位置する。第１検出面で検出した。

〔形状・規模〕142.5×133.9cmの方形を成す。

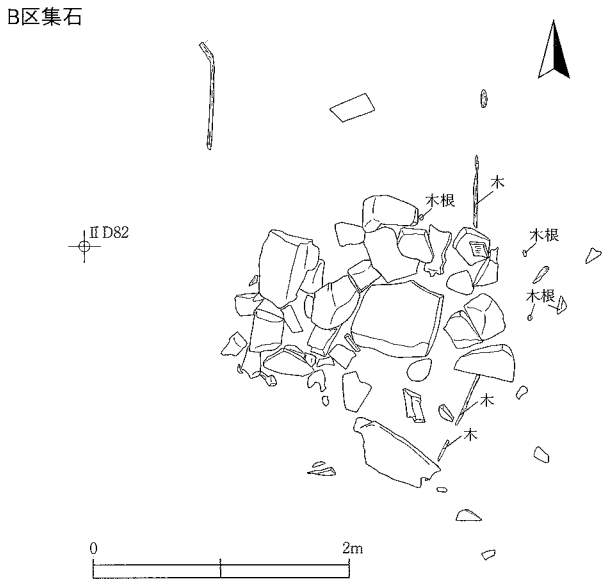
〔重複関係〕なし

〔遺物〕なし

〔時期〕検出状況から、近世墓、あるいは中世の板碑に関わる遺構と考えられる。　（鈴木）



第44図　B区SX１（畝間状遺構）



第45図　B区集石

B区沢跡　（第46図、写真図版56～58）

〔位置〕ⅡC90・100・ⅢC10・ⅡD71・72・81・82・83・84・85・86・91・92・93・94・95・96・97・98・ⅢD02・03・04・05・06・07・08・09に位置する。

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔重複〕02SK40、02SK44、02SD８とプランが重複するが、おそらく本沢跡が古い。

〔形態〕長さ44mに及ぶ自然流路である。水は東から西側に流れる。下流方向（西側）と上流部の南側は平成13・14年度の調査区であるが、担当者が遺構として認識できず、掘り下げをおこなったため、その部分の記録は存在せず、沢跡の全体形は不明になっている。以下では、この失われた部分も補正して記述する。

沢跡は大きく西側（平成15年度B区）と東側（平成16年度調査区）に分かれる。東側は池状であり、西側は比高差のある流路になっている。水はいったん東側の池状の部分に溜まり、溢れ出た水が西側を流れるようになっている。東側は等高線の形状をみると長径19m、短径10mほどの楕円形の池状になっている。検出面から最深部までの深さは約110cm、最深部の標高は18.8mである。西側の流路は標高19.1mから標高17.6mで1.5mの比高差がある。この西側の流路の長さは検出した分で約20mを数える。

〔埋土〕埋土は大きく２層に分けられる。１層は灰黄褐色の砂で、混入物等からa～cに細分している。２層は黄褐色の砂で湿り気を帯びている。堆積土断面の形状から自然堆積と推測される。

〔出土遺物〕埋土中から多量の遺物が出土している。図示したものでは、須恵器坏（127）、凸帯が巡る須恵器甕（128）、土師器長胴甕（217）、器種不明須恵器（274）、11世紀のかわらけ（３・５・６・８・10～13・15・17～19・23・25・28～36・42・46・48・50・54・57・58～100）、12世紀のかわらけ（107・109・114・117・121・125・126・131・132・134・138・142・143・149・150・153・156・159・160）、13世紀後半～14世紀前半のかわらけ（213～220）、常滑産陶器甕（2082）、渥美産陶器壺（2093）、産地

不明国産陶器甕（2028・2084・2085）、大宰府分類２類白磁碗（2036）、中国産白磁小壺（2044）、雁又鏃（5006）、鑿矢鏃（5010･5011）、鉄鏃（5014～5016･5033）、小札状鉄製品（5020）、不明鉄製品（5035･5037）、刀子（5025）、釘（5039～5041）、鉄鍋？（5042）、凝灰岩製の錘（6013）が出土している。また、平成15年度に志野菊皿（3076）が埋土中から出土したことになっているが、取り上げか記載の誤りと推測され、直接本遺構に係わる遺物ではないと考えたい。

図示していない遺物では、細かく砕けた羽口片が約90片（1.2kg）、碗型滓が４個（1.0kg）、鍛冶滓が９号ビニール袋約半分（2.1kg）、溶解したガラス状の滓が９号ビニール袋１つ分（3.1kg）出土した。また動物骨、歯が27点出土している。また図示していない土師器が中コンテナ１つ分（9.5kg）出土している。かわらけ、中世陶磁器は極微細片を除き全点掲載している。

これらの遺物は土砂が沢を埋没させる過程で土とともに流れ込んだものと推測される。鍛冶関係の羽口、鉄滓が多量に出土したことは、近隣の地点で鍛冶が行われたことを示している。鍛冶関係の遺物の年代は特定できないが、埋土中から多量に出土した11世紀～14世紀前半のかわらけのいずれかに伴う年代と推測される。

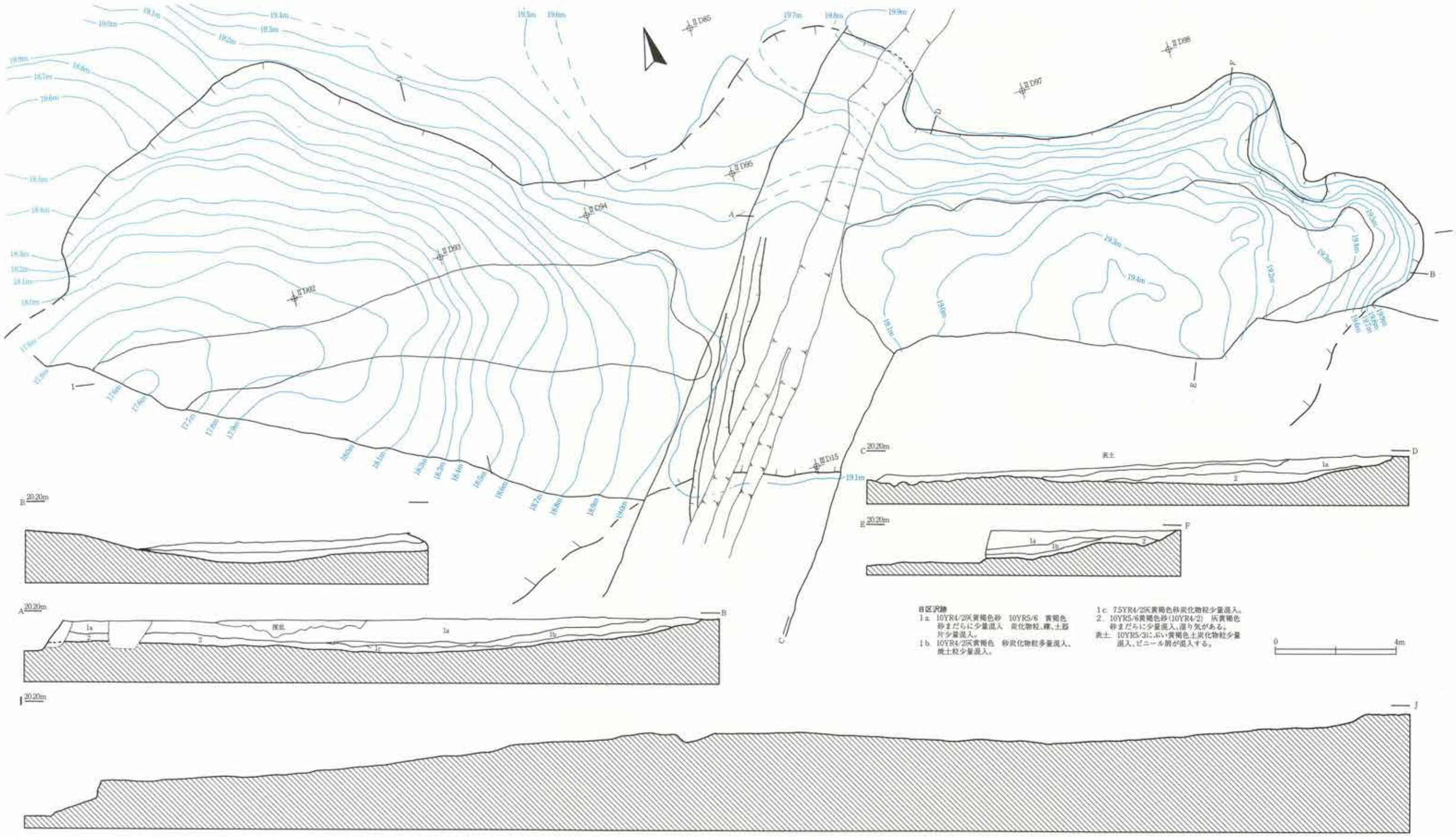
〔性格〕自然の流水により生じた埋没沢である。自然堤防の尾根頂部に接した南斜面が水の流出源になっている。B区SD４が塚であれば、その位置関係から、塚の盛土により水が塞き止められ、溜まった水が一気に流れることによって地表が抉られ、本流路が形成されたきっかけを説明できる。しかしこれはB区SD４が塚であった場合であり、その成因を特定することは難しい。

〔年代〕時代を特定できる出土遺物の中で最も新しい遺物は、13世紀後半～14世紀前半のかわらけである。この13～14世紀には沢がまだ埋没しきっていない可能性を高くしている。沢が生成された年代は特定できないが、検出面から十和田ａ火山灰降下より後であるのは確実である。埋土から出土した11～12世紀のかわらけはいずれも破片の状態で、一次的な廃棄とは考えられず、沢が生成されたのは12世紀よりも新しいと考えたい。

〔出土動物骨の鑑定〕本沢跡から出土した動物骨、歯について岩手県立博物館佐々木務氏に鑑定を依頼した。鑑定結果は以下の表のとおりである。（羽柴）

B区沢跡動物骨、歯観察表

番号	出土位置	動物種	部位	重量（g）	その他
1	１a層（ⅢD18）	シカ	鹿角（落角）成体ではない	4.2	焼けている。
2	２層（ⅢD07）	シカ？	臼歯片	0.3	
3	１層（ⅢD18）	シカ	下顎　右　・P３、P４、M１	5.1	歯根なし
4	１c層（ⅢD18）	シカ	臼歯片　右上顎P３	0.8	
5	埋土（ⅢD18）	シカ	左下顎　PM２～４含む	11.4	
6	底面（ⅢD08）	シカ	臼歯片	1.5	
7	埋土（ⅢD05）	シカ	臼歯片	3.2	複数の臼歯の破片
8	１c層（ⅢD18）	シカ	左下顎骨（M３臼歯含む）	23.8	
9	１a層（ⅢD17）	シカ	臼歯片	0.6	
10	１層上位（ⅢD17）	シカ？	臼歯片	0.7	
11	１層（ⅢD07）	ホ乳類		6.0	
12	１c層（ⅢD18）	ホ乳類		2.4	
13	２層（ⅢD18）	ホ乳類		2.6	焼けている
14	１c層（ⅢD18）	ホ乳類		0.8	
15	２層（ⅢD18）	ホ乳類		0.5	
16	２層（ⅢD07）	ホ乳類		0.9	
17	２層（ⅢD18）	ホ乳類		4.8	
18	１層（ⅢD18）	ホ乳類		0.7	
19	２層（ⅢD07）	ホ乳類		1.3	焼けている
20	１層（ⅢD18）	ホ乳類		0.6	
21	２層（ⅢD18）	ホ乳類		2.4	
22	１層上位（ⅢD17）	ホ乳類		11.2	焼けている
23	１c層（ⅢD18）	ホ乳類		0.4	
24	１c層（ⅢD18）	ホ乳類		0.3	
25	１c層（ⅢD18）	ホ乳類		0.8	
26	１c層（ⅢD18）	ホ乳類		0.1	
27	１層（ⅢD17）	ホ乳類		1.2	


B区沢跡
1a. 10YR4/2灰黄褐色砂　10YR5/6　黄褐色砂まだらに少量混入　炭化物粒、瓦、土器片少量混入。
1b. 10YR4/2灰黄褐色　砂炭化物粒多量混入、焼土粒少量混入。
1c. 7.5YR4/2灰黄褐色砂炭化物粒少量混入。
2. 10YR5/6黄褐色砂(10YR4/2)　灰黄褐色砂まだらに少量混入、湿り気がある。
表土　10YR5/3に、ぶい黄褐色土炭化物粒少量混入、ビニール屑が混入する。
0
4m

第46図　B区沢跡

第47図　C区・D区遺構配置図

Ⅶ　C区の遺構

1　C区概観

大グリッドⅡE、ⅢE区及びⅢF区西側付近をC区と称している。東限は村道川崎3号線、西限は大グリッドDとEの境界付近の民家の敷地境界を延長した線である。調査区全体の中では中央部よりやや東側部分に相当する。C区の南側は平成13・14年度の調査区で、C区の名称を冠した遺構名（竪穴住居を除く）を付していないので、この章ではなく各々の年度で章立てを行い報告している。またD区に所在するC区SD101は調査時に「C区」の名称を付してしまったため、混乱を避けるためこの章で報告する。

C区は調査前には宅地、畑、県道として使用されていた。平成15年度の調査担当は米田、村田、平成16年度の調査担当は小針ほかである。C区の地形は中央の標高が高く、自然堤防の尾根筋になっている。そして北側（山手）、南側（北上川）に向かうに従って標高を減じ、緩斜面になっている。尾根筋の最高部が標高20.5m、調査区の最低部が18.5mである。

C区の基本土層は第3図のように認識した。3層上面は第1検出面である。3層上部には十和田a降下火山灰を含んでおり、第1検出面（3層上面）で検出される遺構の上限年代を示す。また5層上面は第2検出面である。出土土師器の年代観から8世紀後半～9世紀初頭頃の面と推測される。基本土層の11層は縄文時代の土器を含んでおり、それより下の層は縄文時代の包含層となる。

ここに掲載するC区検出の遺構は、竪穴住居跡（SI）4棟、焼土1基、溝・堀（SD）3条、畝間状遺構（SX）3基、堀立柱建物（SB）1棟である。（羽柴）

2　竪穴住居（SI）

C区SI 4 竪穴住居　（第48図、写真図版60）

〔位置〕ⅢE73・74・83に位置する。

〔検出面〕第2検出面と推測される。

〔形態〕平成14年度の調査時に不用意に検出面を下げすぎており、残存状況が良くなかったため、住居壁などは不明瞭であった。一辺約3.8mのほぼ方形の平面形態である。床面積は約14.14㎡である。貼床部が厚さ2㎝程度残存していたが、柱穴、壁溝は検出できなかった。確認面標高18.60m、床面標高は18.55mである。カマドは西壁中央に構築されている。煙道は掘り込み式で煙出し部分は柱穴状の掘りこみが見られる。袖の構築材に砂質粘土を使用しているため崩れやすく残存状況が良くない。心材には礫を使用し、使用礫はカマド周辺に散在している状態であった。

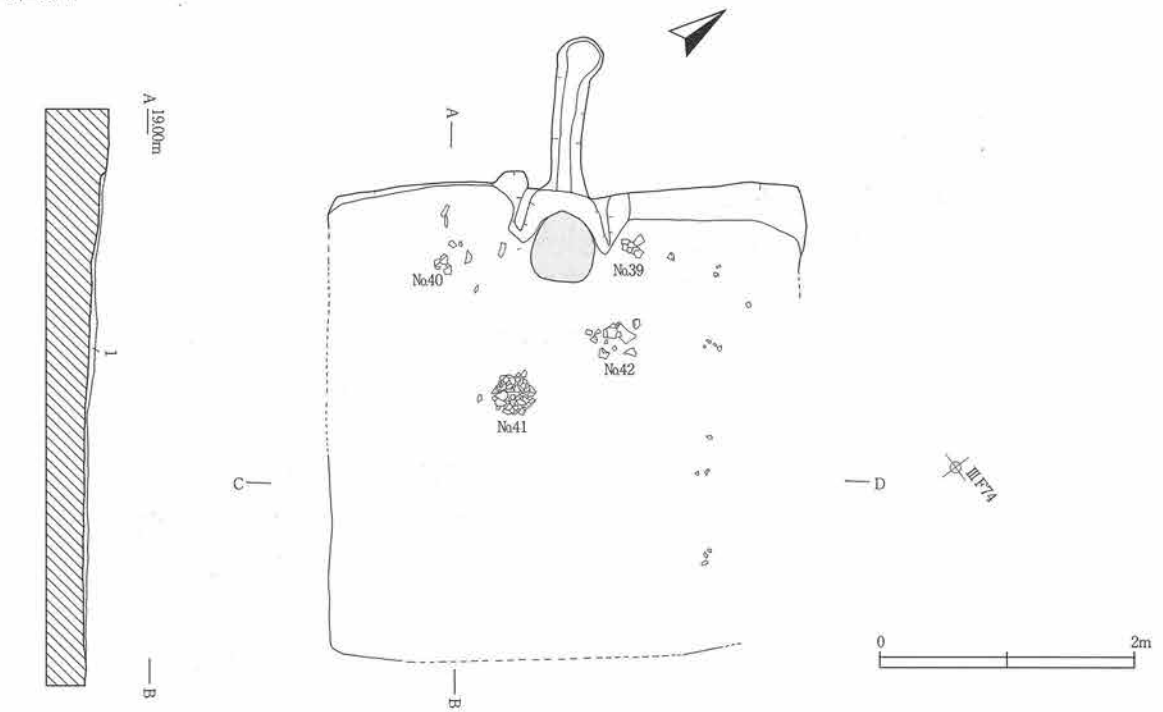
〔埋土〕カマド崩落土の直上に黄褐色の砂層がわずかに認められたのみで、貼床部のみ残存している状況であった。

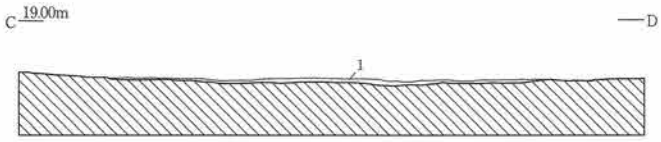
〔出土遺物〕カマド付近を中心に土師器・須恵器が出土しており、土師器坏（39・40）、土師器長胴甕（41）、土師器球胴甕（42）、土製品（43）を図示した。遺物属性については第110図および観察表を参照されたい。土製品（43）は円形の製品で、カマド内から出土したことから支脚の可能性がある。

〔性格〕古代の竪穴住居である。

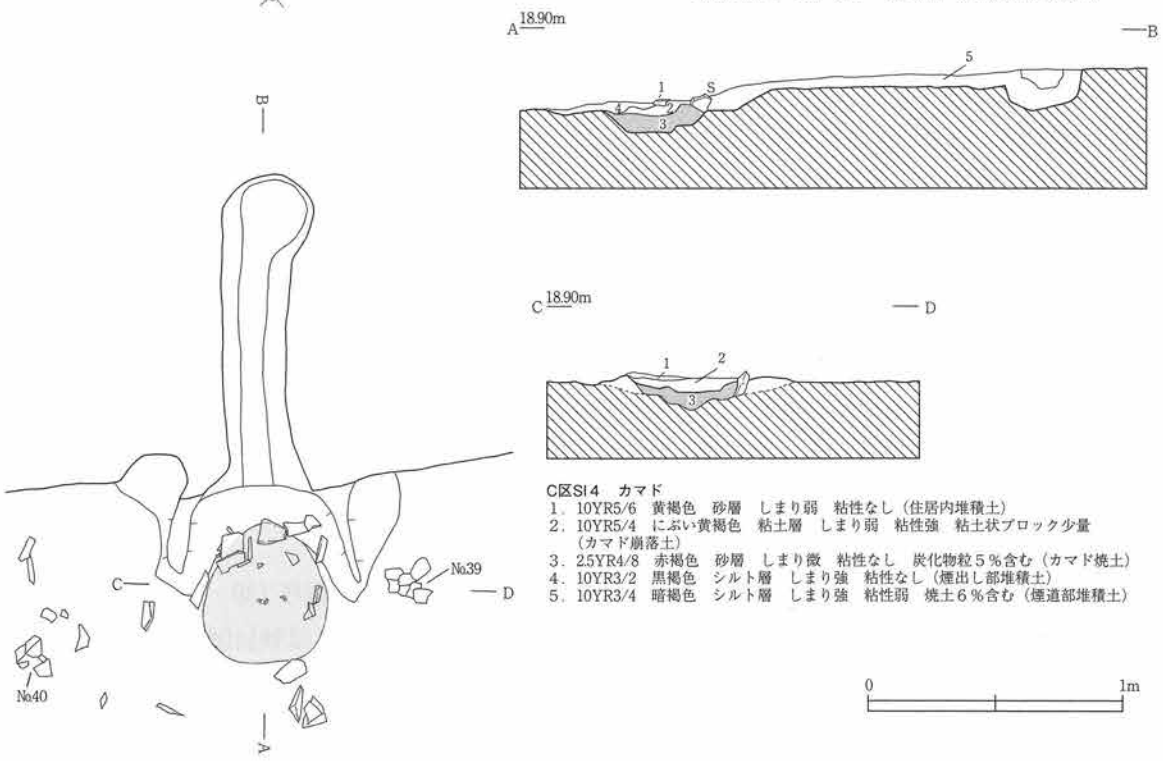
〔年代〕出土土師器から8世紀後半と推測される。（米田）

C区SI4





C区SI4
1．10YR6/4　褐色　砂層　しまり強　粘性微（住居貼床部）



C区SI4　カマド
1．10YR5/6　黄褐色　砂層　しまり弱　粘性なし（住居内堆積土）
2．10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土層　しまり弱　粘性強　粘土状ブロック少量（カマド崩落土）
3．2.5YR4/8　赤褐色　砂層　しまり微　粘性なし　炭化物粒５％含む（カマド焼土）
4．10YR3/2　黒褐色　シルト層　しまり強　粘性なし（煙出し部堆積土）
5．10YR3/4　暗褐色　シルト層　しまり強　粘性弱　焼土６％含む（煙道部堆積土）

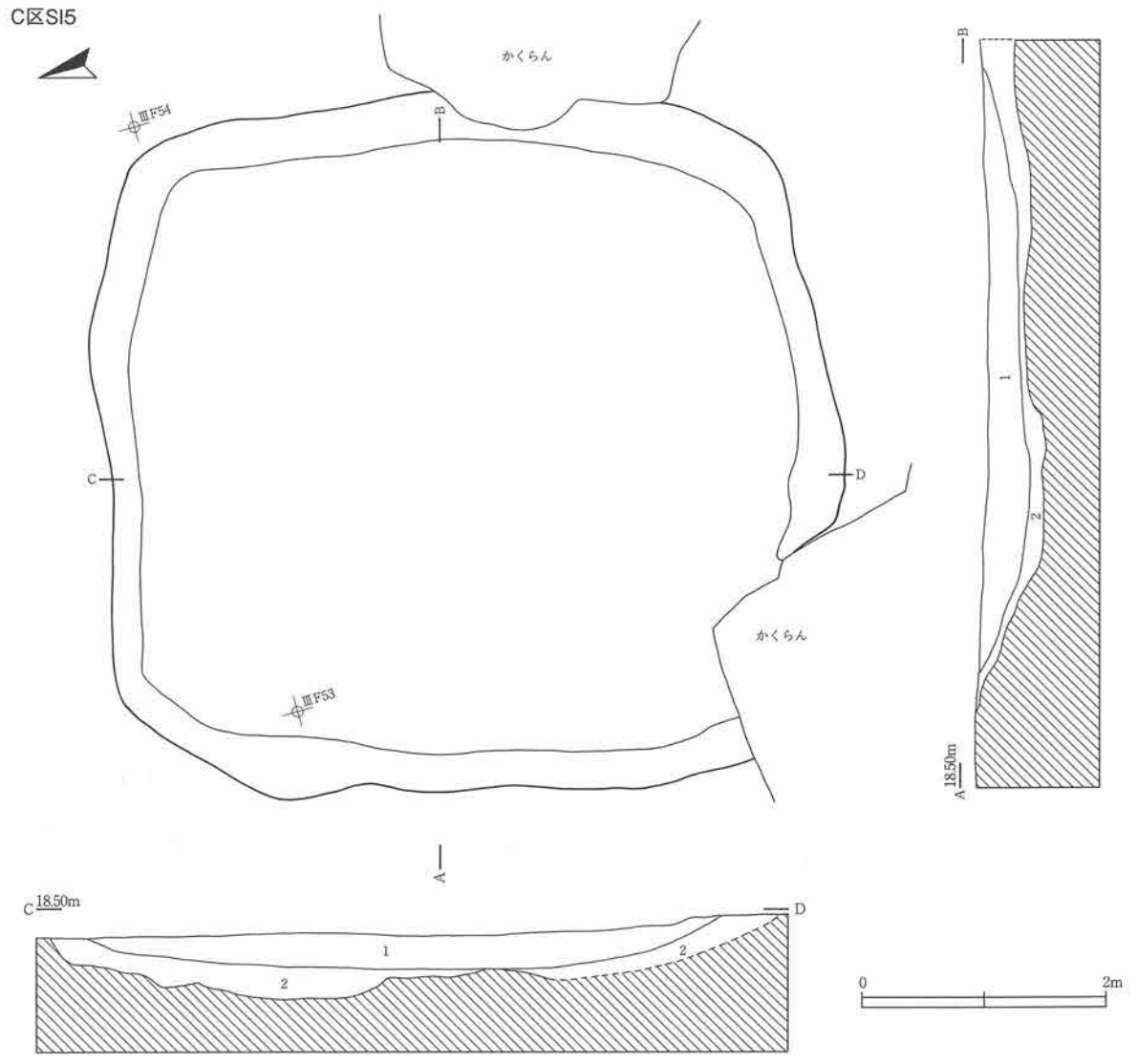
第48図　C区SI4

C区SI５竪穴住居　（第49～51図、写真図版61～63）

〔位置〕ⅢF53・54に位置する。

〔検出面〕第５層上面、（第２検出面）で検出された。

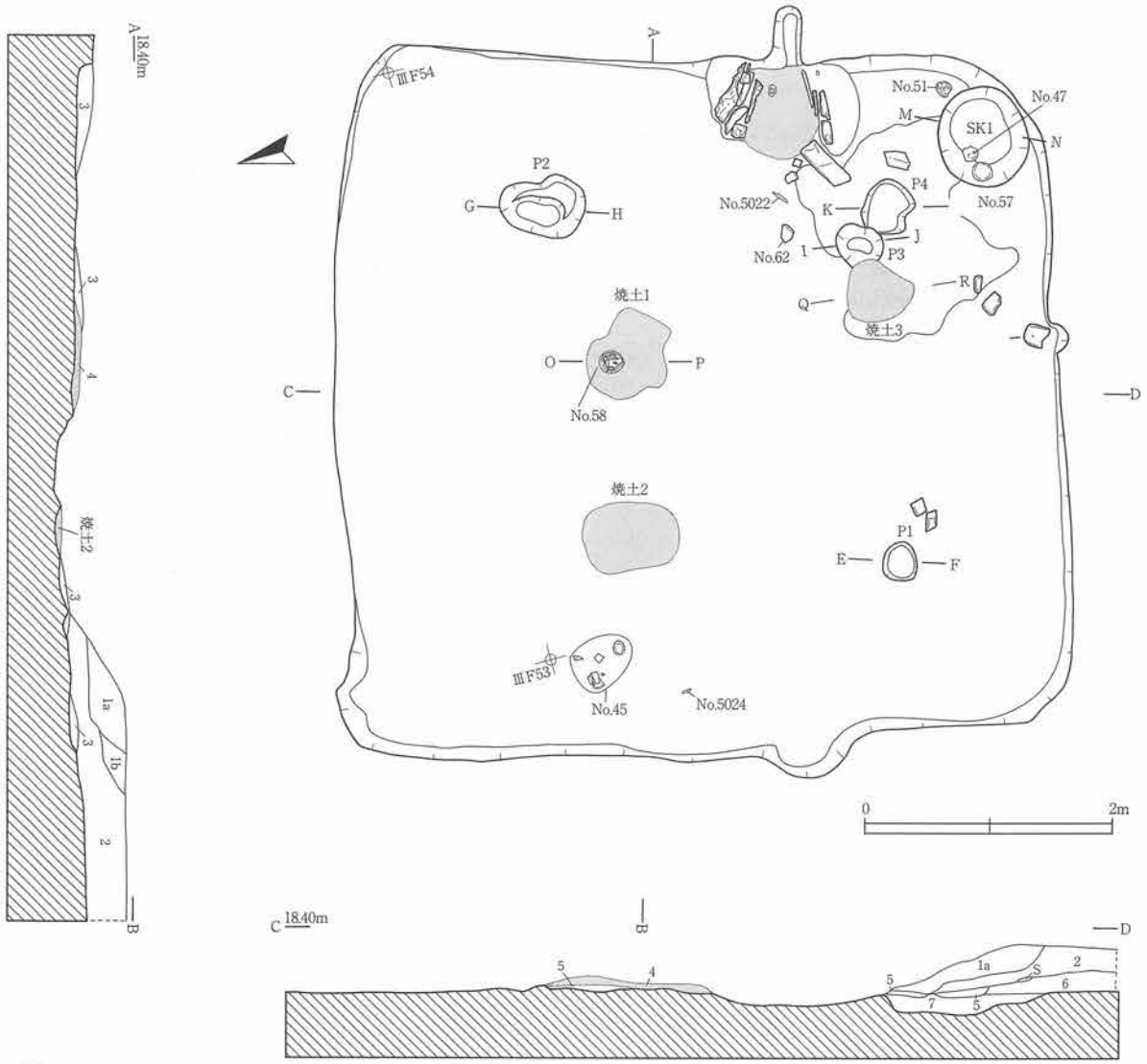
〔検出状況〕暗褐色土が周囲をめぐるほぼ正方形のプランとして検出され、内部に黄色砂層（第１層）が堆積していた（第49図）。当初はいわゆる周溝状遺構とも考えられたが、この状況での遺物出土がなかったため性格不明遺構（SX12）としていた。そのため、掘削に際しては第一に層位の前後関係を確認するために方形部の中心から西側にかけて0.5m幅のトレンチを設定して裁ち割りを行った。それによって第２層→第１層の順で堆積していることが確認されたため、SX12については周囲と同様な堆積をするなかでこの部分のみが何らかの原因で陥没し、洪水堆積層である第１層がそこに流れ込んだものであると判断した。そのため南側にも0.7m幅で裁ち割りトレンチを設定して層位を確認した後、土層確認用のベルトを設定して第１層から層位的に掘り下げを行った。ベルト北西側を0.3～0.5m掘り下げたところ、焼土の拡がりが認められ、その他の地点でも板石や土器片が一定のまとまりをもって出土した。また、陥没部分の東側にある攪乱を掘り上げたところ、攪乱の壁面に半円形の焼土堆積



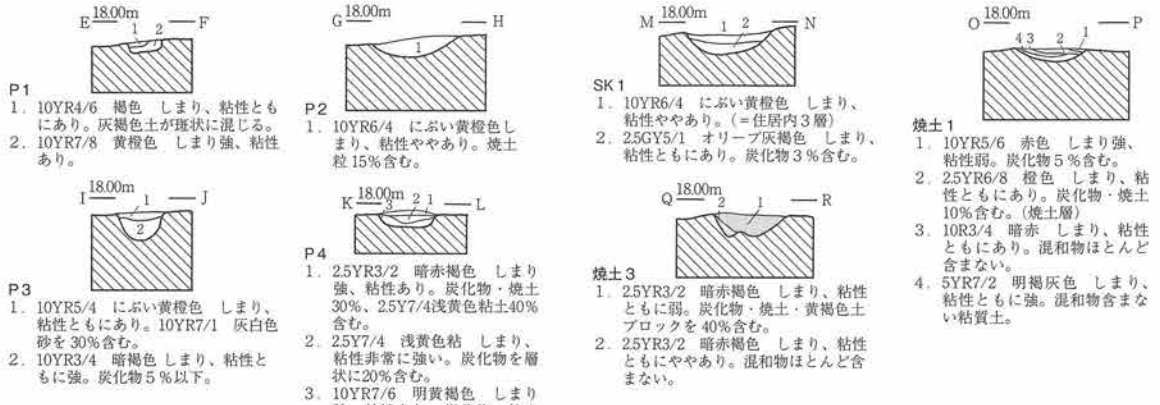
C区SI５　検出時
1．2.5YR8/6　黄色砂層　しまり、粘性ともに弱。炭化物を２％含む。
2．7.5YR3/2　黒褐色　しまり、粘性ともに強。φ２～５mmの炭化物を５％含む。
3．2.5YR7/8　黄色　しまり、粘性ともにあり。混和物含まない。

第49図　C区SI５①

C区SI5



SI5
1a. 10YR4/4　褐色　しまり、粘性ともにあり。炭化物５％含む。（洪水堆積層）
1b. 10YR4/4　褐色　しまり、粘性ともにあり。混和物ほとんど含まない。
2．10YR5/6　黄褐色　しまり、粘性ともにあり。炭化物３％含む。第１層より砂質。（洪水堆積層か）
3．10YR6/4　にぶい黄橙色　しまり、粘性ややあり。灰褐色粘土ブロックを含む。（住居内堆積土）
4．2.5YR4/3　にぶい赤褐色　しまり、粘性ともに強。炭化物・焼土40％含む。
5．5GY7/1　明オリーブ灰色　しまり強、粘性あり。
6．10YR5/6　黄褐色　しまり、粘性ともにあり。炭化物３％含む。
7．10YR6/4　にぶい黄橙色　しまり、粘性ともにあり。炭化物・灰褐色粘土・焼土粒をいずれも３％含む。
焼土２　2.5YR4/3　にぶい赤褐色　しまり、粘性ともに強。炭化物35％含む。



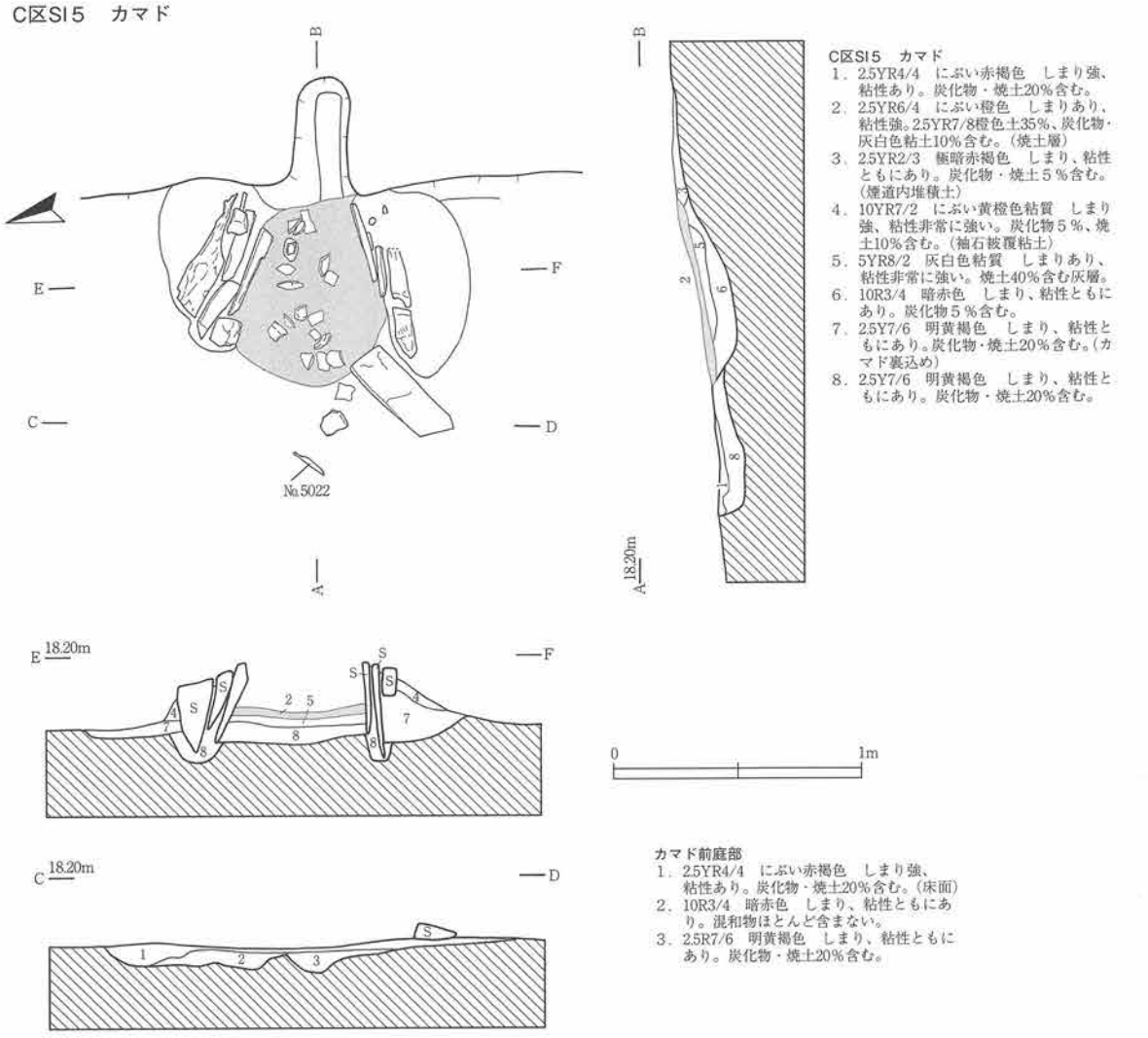
第50図　C区SI5②

層とそれを挟むように３枚ずつ板石が並んでいる状況が確認された。

〔形態〕埋土と壁面の判別が困難であったため、石材や遺物の分布状況をもとに床面プランを確認できたのみであった。完掘した状態では東西5.7m、南北5.9mの隅丸方形で、床面積は33.6㎡である。床面は水平ではなく、中心に向かってわずかに窪んでいる。南東コーナー付近で貼床状の硬化範囲を確認しているが、その他の部分では地山がそのまま床面として使用されている。

カマドは東壁中央やや南寄りに設置されている。袖は大型の板石(粘板岩)を片側６～７枚用いて構築されており、袖石の上部には被覆用に地山より若干粘性の強い土が用いられている。カマド内には棒状礫製の支脚(64)が１本設置されていた。燃焼部床面及び袖石には被熱の痕跡が明瞭ではない。煙道は残存幅0.4mで斜め上方に向かって傾斜しているが、攪乱によって大幅に削平されているため全長や構築方法などについては不明である。

床面からはピット４個、土坑１基、焼土３基が検出された。Ｐ１～Ｐ３は配置から本住居跡に伴う柱穴と考えられる。土坑は南東コーナー付近にあり、埋土から土師器(47･57)が出土している。焼土は、焼土１を除いては住居内の窪地に流れ込んだ二次的焼土と考えられる。



第51図　C区SI５③

〔埋土〕純粋にこの住居の埋土と認められるのは第３層のみである。それ以外については本住居が廃絶した後に流入した洪水堆積層と考えられる。

〔出土遺物〕土師器・須恵器と刀子が出土している。土師器・須恵器はカマド内、住居内堆積層上層、住居床面直上の３地点から出土している。ただし、床面直上遺物については、45・47・53・54・59・60・61を除くと第２・６層からの出土であり、厳密に本住居に伴う遺物か否かは検討を要する。

〔性格〕古代の竪穴住居であり、本遺跡においては大型の部類に属する。

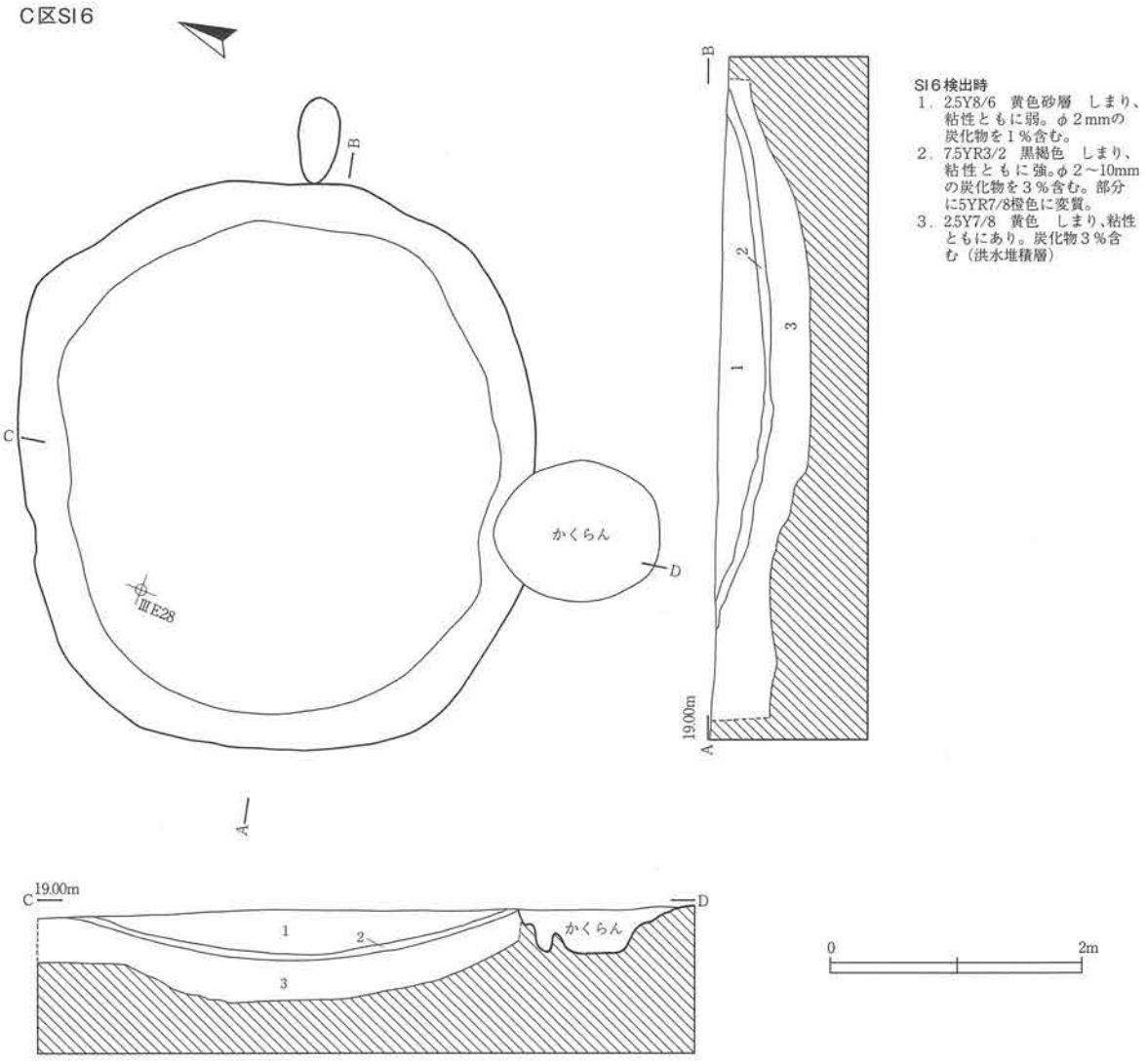
〔年代〕床面直上出土の土師器類から８世紀末～９世紀初頭と考えられる。　（村田）

C区SI６竪穴住居　（第52～54図、写真図版64・65）

〔位置〕ⅢF28・29に位置する。

〔検出面〕第５層上面（第２検出面）で検出された。

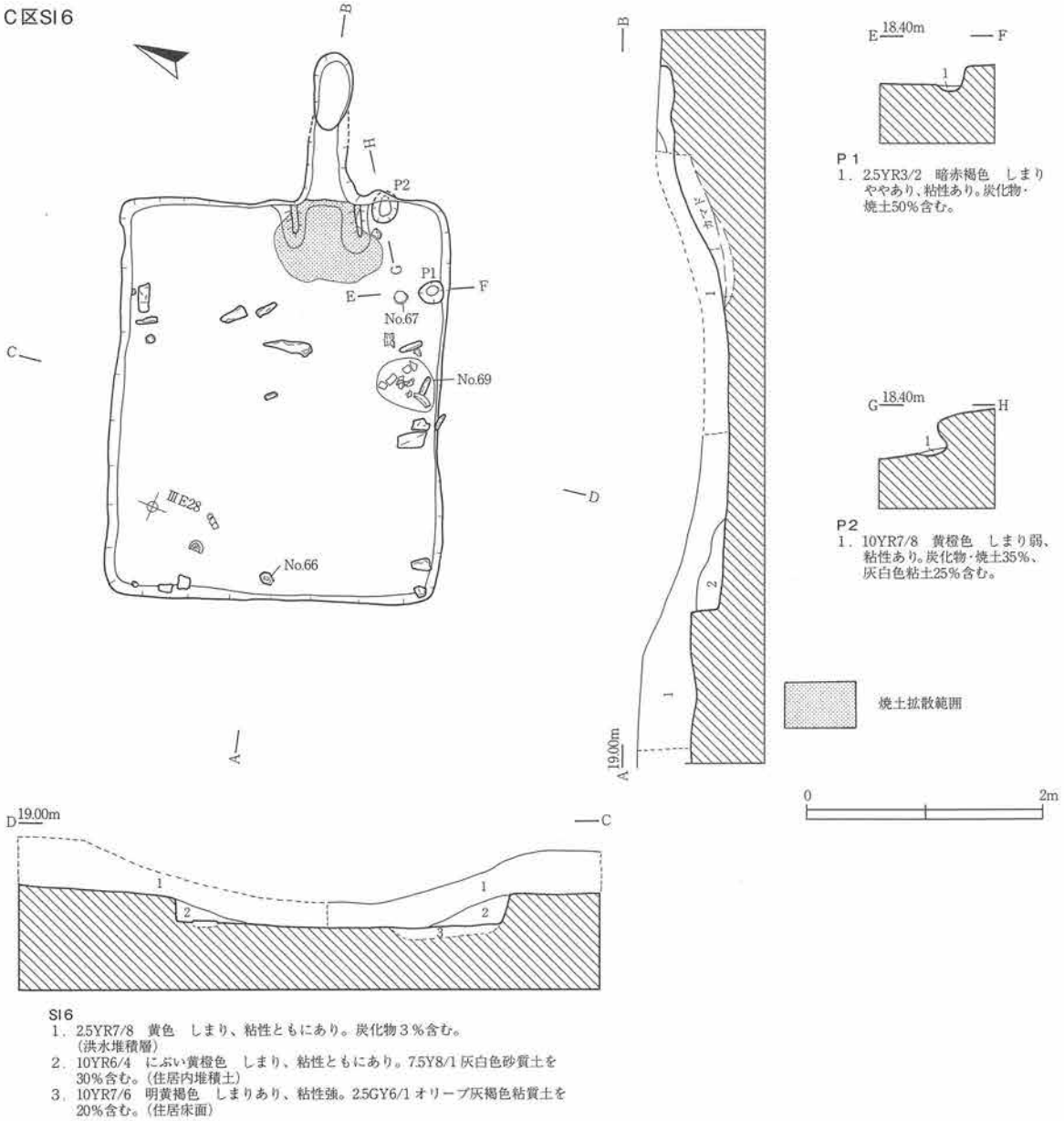
〔検出状況〕本遺構もC区SI５と同様に暗褐色土層（第２層）の内部に黄色砂層が堆積するという状況で検出された（第52図）。ただし、こちらは平面形が円形であり、東側と南側にピットを伴っていた。この検



第52図　C区SI６①

出状況についてもSI５と同様、堆積の前後関係を確認するために遺構西側に幅0.5mのサブトレンチを設定して裁ち割りを行った。トレンチにおける断面観察の結果、第１～３層までがレンズ状に堆積していることから本遺構も自然陥没坑であると考えられた。しかし、これに先行して調査を行ったSX12の直下でSI５が検出されたことから、本遺構についても直下に遺構(竪穴住居跡)の存在を想定して遺構中央に十字ベルトを残して第１層から掘り下げを行った。

〔形態〕東西3.5m、南北2.8mの長方形状で床面積は9.8㎡である。壁面の立ち上がりはほぼ垂直で、最も残りの良い西壁は残存高で0.3mである。床面は埋土との判別が困難なほどしまりが弱く、貼床は確認できなかった。カマドは東壁のやや南寄りに設置されている。袖は床面より若干しまりのある明黄褐色土を用いている。しかし住居廃絶後の流出が激しいため、残存状況は悪く、焼土も袖の外側



第53図　C区SI６②

及び前庭部にまで拡散していた。煙道は刳り貫き式で、住居東壁から斜め上方へ向かって緩やかに傾斜している。また、カマド南側と南壁際で張り付くようにピット２個が検出されている。

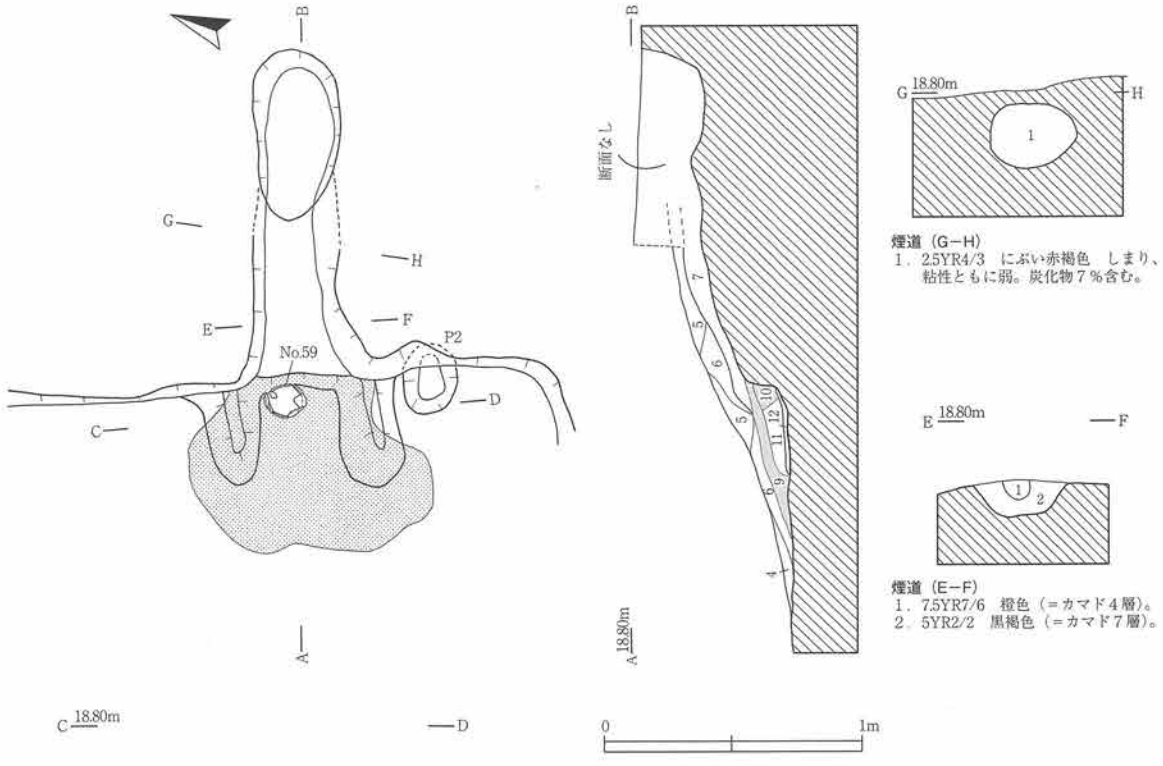
〔埋土〕C区SI５同様、ほとんどが洪水堆積層であり、確実に住居壁面の崩落などに伴うと考えられるのは第２層のみである。

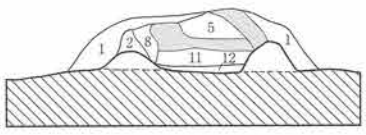
〔出土遺物〕土師器と須恵器があり、カマド付近と南壁付近から集中して出土している。今回図示したものは８点で、このなかで70・71以外はカマド内あるいは第２層からの出土であり、本遺構に伴う可能性が高いと考えられる。

〔性格〕古代の竪穴住居である。廃絶した後壁面の崩落が始まった早い段階で洪水に見舞われたため、住居内が洪水堆積層でパックされて凹地状になっていたものと考えられる。

〔年代〕床面直上出土の土器から８世紀末～９世紀初頭と考えられる。　（村田）

C区SI６





SI６　カマド（A−B、C−D）
1．10YR6/4　にぶい黄褐色　しまり、粘性ともにあり。灰白色砂質土を15％含む。（住居内堆積土）
2．7.5YR7/6　橙色　しまり、粘性ともにあり。炭化物30％、焼土20％含む。（袖材か）
3．2.5YR6/8　橙色　しまり、粘性ともに強。（焼土層か）
4．7.5YR7/6　橙色　しまり強、粘性あり。炭化物30％、焼土20％含む。（第２層の流土層か）
5．5YR7/4　にぶい橙色　しまり、粘性ややあり。炭化物10％含む。
6．2.5YR3/4　暗赤褐色　しまり強、粘性あり。
7．5YR2/2　黒褐色　しまり、粘性ややあり。
8．2.5YR6/8　橙色　しまり、粘性ともに強。
9．2.5YR6/8　橙色　しまり、粘性ともに強。（焼土層）
10．2.5YR6/8　橙色　しまり、粘性ともに強。
11．5YR8/2　灰白色粘質　しまり強、粘性非常に強い。焼土40％、骨または貝殻の極小片を微量含む。
12．5YR7/1　明褐灰色土　しまり強、粘性非常に強い。炭化物・焼土粒20％、粘板岩片を15％含む。

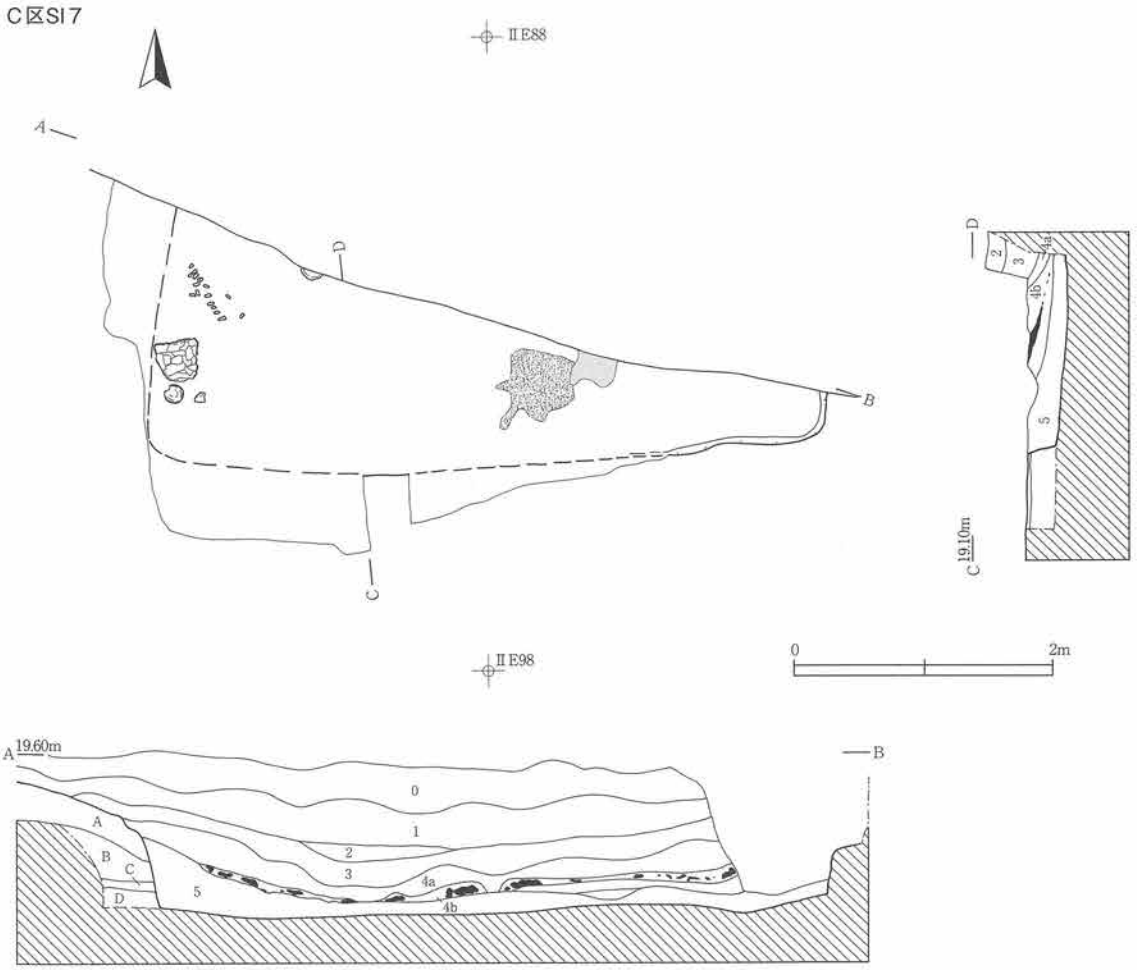
第54図　C区SI６③

C区SI７竪穴住居　（第55図、写真図版66・67）

〔位置〕ⅡE87・88に位置する。

〔検出状況〕第１検出面においてはプランが不明瞭であった。第２検出面へ掘下げ中十和田ａ降下火山灰の分布が確認され、住居跡の存在を把握した。調査区境の切り通しの土層断面観察から第１検出面からの掘り込みを確認した。

〔形態〕プランの北側約3/4は調査区外にかかっており、検出できたのは南側約1/4のみである。南辺の長さは5.6mである。西辺は2.0m、東辺は0.3m分検出できた。調査した部分の床面積は約5.9㎡である。平面プランが正方形と仮定した場合、床面積は約31.4㎡になる。



C区SI７
0．10YR5/6　黄褐色砂質土　しまり中、粘性やや弱、雲母片を多く含む。洪水堆積層。上部は道路用の砕石で削平されている。畠跡耕作層かもしれない。
1．10YR3/1　黒褐色シルト　しまり中、粘性やや弱、炭化物を多量に含む。
2．10YR4/6　褐色砂質土　しまりやや弱、粘性やや弱、粒径の細かな砂。炭化物を微量に含む。２～５層が住居の埋土。
3．10YR4/2　灰黄褐色粘質土　しまりやや強、粘性やや強、炭化物をやや多く含む。一部に砂ブロック、火山灰粒を含む。
4a．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　しまり中、粘性中、灰白色火山灰粒を多く含む。灰白色火山灰層よりは上位層。
4b．10YR8/1　灰白色火山灰　しまり強、粘性やや弱、灰白色火山灰ブロックが帯状に連なって層状にみえる。主体はブロックで一部層状になっている。２次堆積と考えられる。
4c．10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　しまり中、粘性中、灰白色火山灰粒を少量含む。灰白色火山灰の固まりの下位層。
5．10YR4/4　褐色砂質土　しまり中、粘性中、炭化物を少量含む。
A．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土　しまりやや弱、粘性中、上位に砂ブロックを含む。粘土層であるが薄い。この層が途切れているところを住居跡と考えた。３箇所で確認。
B．10YR4/4　褐色砂質土　しまり中、粘性やや弱、混合物の少ない砂層。
C．10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　しまり中、粘性やや弱、雲母片を多く含む。
D．10YR4/6　褐色砂質土　しまりやや弱、粘性中、横褐色粒を少量含む。

第55図　C区SI７（平成16年検出）

壁は非常に把握しづらく、西壁と南壁の大部分を掘過ぎてしまった。壁の推定線は、土層断面ベルトで判断した部分を延長したものである。断面部分の観察では、壁はやや斜めに立ち上がり、上部では漏斗状に広がる。 壁の高さは約70cmである。

床面はしまりがなく把握しづらかったが、概ね平坦と判断した。床面の標高は約18.25mである。カマドは検出した範囲には存在していない。南壁寄り中央に焼土と炭化物の分布があり、地床炉の可能性が考えられる。

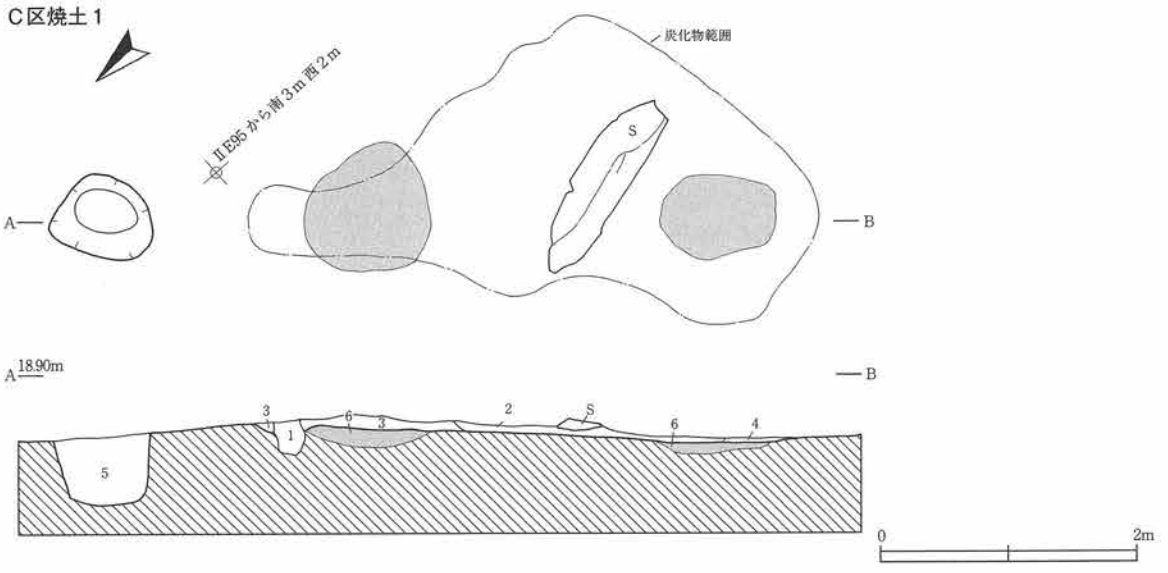
〔埋土〕７層に分けられた。４b層は十和田a降下火山灰の層で、住居内にレンズ状に堆積している。十和田ａ層の下にも土の堆積が見られ、本住居が廃棄され、ある程度埋没が進んだ段階で火山灰が降下したことがわかる。土層全体の堆積過程は自然堆積と判断できる。

〔出土遺物〕床面からやや浮いた面から土師器坏（218）、土師器長胴甕（219・220）、土錘（224～266）が出土した。土師器坏（218）は正位の状態で、土師器長胴甕（220）はその傍らに横倒しの状態で出土した。土錘(224～266)は土師器長胴甕からおよそ40cm離れた地点で集中して出土した。また埋土上位から、ロクロ土師器長胴甕(221)、内外面にミガキを施した土師器鉢(222)、須恵器甕(223)、土錘(267･268)が出土した。また住居のプランを把握する以前に出土した土錘(269～272)も本住居の土錘集中に伴う遺物と判断し、本住居出土遺物として掲載した。

〔性格〕古代の竪穴住居である。十和田a降下火山灰との層位関係が明確で、良好な資料である。

〔年代〕埋土中の十和田a降下火山灰の位置、出土土器の形態から、10世紀初頭頃に廃絶された住居と考えられる。

（西澤・羽柴）



C区焼土1
1．10YR2/3　黒褐色砂　しまりなし、粘性なし、炭化物・焼土粒を多量含む。
2．10YR7/6　明黄褐色砂　しまり弱、粘性なし、炭化物・焼土粒を少量含む。骨片が混じる。
3．10YR2/3　黒褐色砂　しまり弱、粘性なし、炭化物・焼土粒を多量含む。
4．2.5YR4/6　赤褐色砂質土　しまり弱　粘性やや弱　炭化物・焼土粒の固まりを少量含む。骨片・土器片が混じる。
5．10YR4/4　褐色シルト　しまり強　粘性あり　炭化物を少量含む。
6．5YR4/6　赤褐色焼土

第56図　C区焼土１（平成16年検出）

C区焼土１　（第56図、写真図版67）

〔位置〕ⅡE94に位置する。

〔検出面〕第２検出面である。

〔形態〕円形の２つの火焼面とその上を被覆する焼土、炭化物混じりの土の分布からなる。２つの火焼面は現地性焼土である。熱変化は８cmに及んでいる。火焼面上面の標高は18.69mである。火焼面を被覆する土は厚さおよそ10～20cmである。土の上に偏平な粘板岩が載っている。

〔出土遺物〕火焼面を被覆する土の中から須恵器坏（273）が出土した。明黄褐色を呈し硬い胎土である。

〔性格〕現地性の焼土である。古代の竪穴住居の壁が失われ、残存したカマド火焼面、あるいは地床炉部分の可能性がある。

〔年代〕検出面と出土した須恵器から９世紀初頭～前半頃と推測される。　（羽柴）

３　溝　・　堀（SD）

C区SD101堀　（第57～60図、写真図版68～71）

〔位置〕調査区の区分では平成15年度D区に位置するが、調査時にはC区SD101として精査を行ったため、C区の遺構として掲載する。北側約５mは平成16年度に調査を行った。ⅢF39・48・49・50・58・59・67・68・76・77・78・86・87・95・96・ⅣF04・05・13・14・15・22・23・24・32・33・34に位置する。

〔検出状況〕第１検出面でプランが確認された。調査区境の切り通し断面を観察した結果、掘り込み面は十和田a降下火山灰を包含する層より15cm程上と確認できた。

〔重複〕C区SX１と重複するが、本遺構が新しい。またD区SZ90とも重複するが、本遺構が古い。

〔形態〕上幅3.3～4.9m、長さ64mの堀である。南側は端部が検出されたが、北側はまだ調査区外に延びる。多くの部分の上幅は概ね4.2m程である。ほぼ真っ直ぐに延び、軸方向はN－37°－Eである。検出面からの深さは90～180cmで、南端から7.5mの地点で段が付き40cm程深くなる。またさらに南端から32m付近で段が付き30cm程浅くなる。さらに南端から49m付近で段が付き40cm程また深くなっている。段と段の間は概ね平坦である。最深部の標高は17.6mである。断面形は逆台形で、薬研形にはなっていない。底面の幅は60～110cmで、多くの部分では100cm程度である。

〔埋土〕６箇所で断面を記録している。土層区分は各々の箇所で異なるが、単層の箇所が多い。複数の層に分けた箇所も、顕著に埋土が異なっている訳ではない。埋土は地山と判別が難しい砂質の土で、人為堆積、自然堆積の別の判断が難しい。一時の洪水で一気に埋没した可能性も考えられる。

〔出土遺物〕埋土中位から大宰府分類Ⅱ類の中国産白磁碗が２片（2034・2035）出土した。これらは同一個体の可能性もある。また図示していないが、埋土中から土師器の微細片30片、須恵器甕１片、縄文土器１片、加工痕のない５～８cm四方の礫９個が出土している。土師器片の出土が割合多いのは、堀の構築時に土師器を包含する第２検出面の土層まで掘り込まれた結果、土師器片が出土し、それが埋土に混入した結果と推測される。なお、本遺構の直下の第２検出面ではD区SI１、D区SX20､21、D区SK122が検出されている。

〔性格〕規模が大きく、単なる区画施設といった性格ではなく、軍事的な目的の防御施設の性格が想定される。

河崎の柵擬定地は、北上川と高地である針山に挟まれた幅の狭い自然堤防上に立地している。遺跡

より東側は砂鉄川の流域の沖積平野が広がるが、遺跡より西側では北上川に直接高地が落ち平坦部は全くなくなる地形（狐禅寺狭窄部）である。このように本遺跡は平地と狭窄部の境界に位置しているのである。

北上川の上流に進撃しようとする場合、高地を避け、狐禅寺狭窄部を川沿いに上って行くルートが最も合理的である。河崎の柵擬定地は正に、狐禅寺狭窄部に至る「漏斗」の口にあたる部分に位置している。実際に河崎の柵擬定地は東側が平地の幅が広く、西側では幅が狭くなる「漏斗」のような平面形を呈している。C区SD101は平野が窄まり始める「漏斗の口」の部分を塞ぐ形に構築されている。

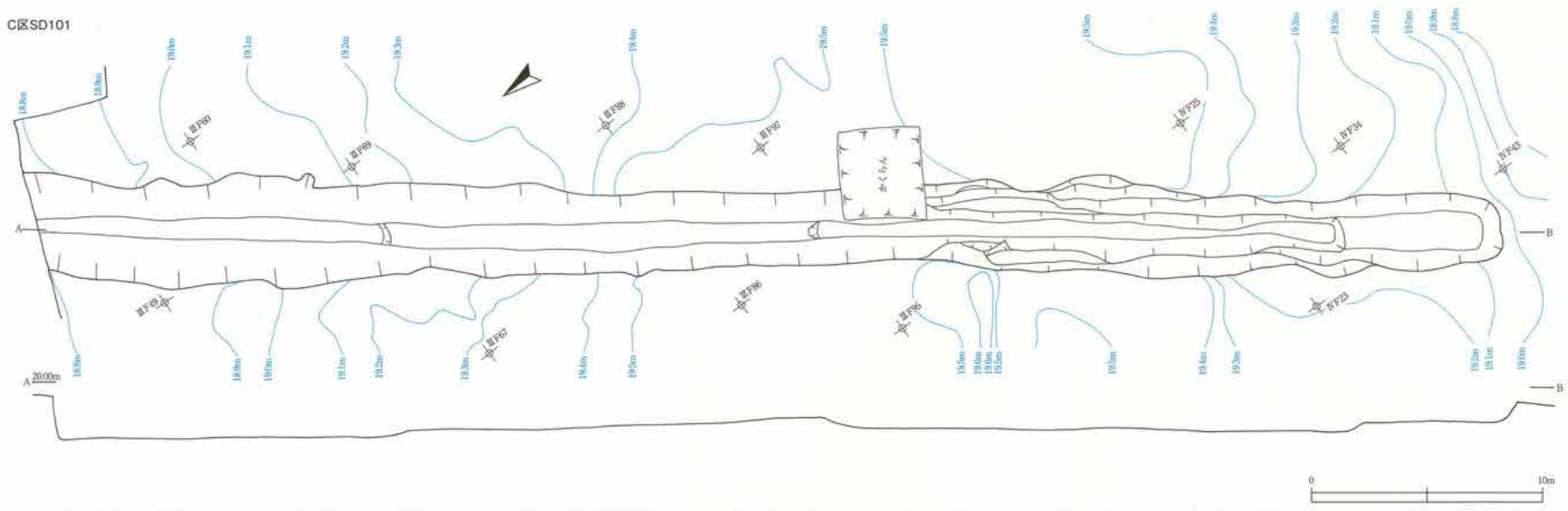
C区SD101のラインを北側に延長すると、ちょうど高地である針山の裾を通る道路のラインに乗ってくる。C区SD101が調査区外の北側のどこまで延びるかは発掘調査で確かめるしかないが、おそらく針山の裾にぶつかる地点まで延びていると予測される。このようにC区SD101は針山と北上川の間を塞ぎ、合戦の際の敵軍の進撃を阻止する目的の「交通遮断施設」と推測される。

〔年代〕土層断面の観察と畠状遺構C区SX１との重複関係から、C区SD101の構築は十和田ａ火山灰の降下より新しいことが明らかである。また堀の南端部では墓壙D区SZ90と重複しているが、C区SD101の方が古い。D区SZ90は人骨のみの出土で、副葬品が無く時期を特定できないが、中世～近世の墓壙と考えられる。これらのことから、C区SD101の構築は、上限を十和田a火山灰降下の西暦915年頃、下限を近世と考えることができる。

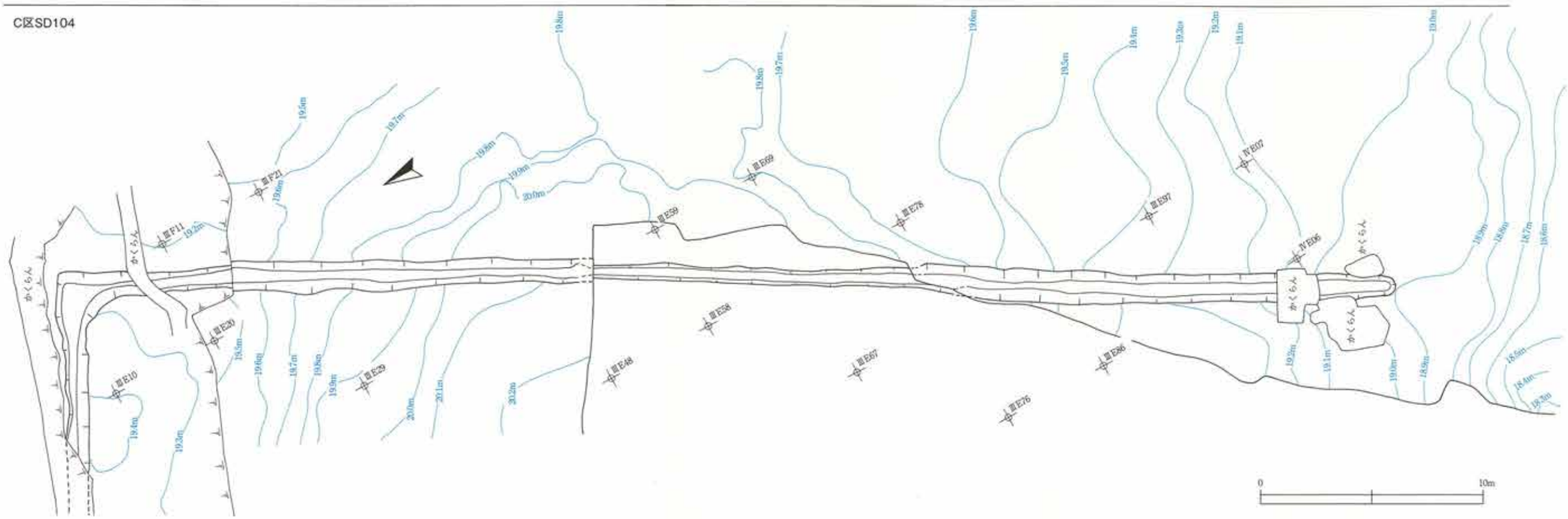
埋土中からは大宰府分類Ⅱ類の中国産白磁碗の破片が２点出土している。この白磁は11世紀～12世紀前半に比定されるもので、C区SD101の構築、使用年代を考える上で重要な遺物である。Ⅱ類の白磁碗自体、非常に出土事例が希有な遺物である。それが11世紀の柵の「擬定地」の、防御施設である堀から出土しているのである。この白磁碗の出土は、C区SD101が11世紀中葉に構築された可能性を強く示唆していると考えられる。

また、C区SD101の埋土中から出土した炭化物４点をAMS14C年代法で測定を実施した。試料は10－①、10－②、11、12の４点である。樹種はいずれも広葉樹で、10－①、10－②、11が埋土の中位、12が底面近くの採取である。結果10－①が630±40BP、10－②が720±40BP、11が810±40BP、12が1130±40BPであった。BPは西暦1950年の基点とした年代であり、埋土中位の３点（10－①、10－②、11）の年代は西暦1100年～1360年の値、底面の12は西暦780～860年の値を示している。底面の12の年代は、C区SD101の掘り込みが９世紀頃の土層面まで達しており、その時代の炭化物が混入した結果と解される。埋土中位の試料はいずれも、構築年代の予想の11世紀中葉より新しい年代値である。これはC区SD101が14世紀頃まで開口していた可能性を示している。現代でも中世城館の堀は、埋まりきらずに形状を保っている事例は多い。11世紀中葉に掘られた堀が、14世紀頃まで埋まりきらずにいる状況は有り得ることである。（羽柴）

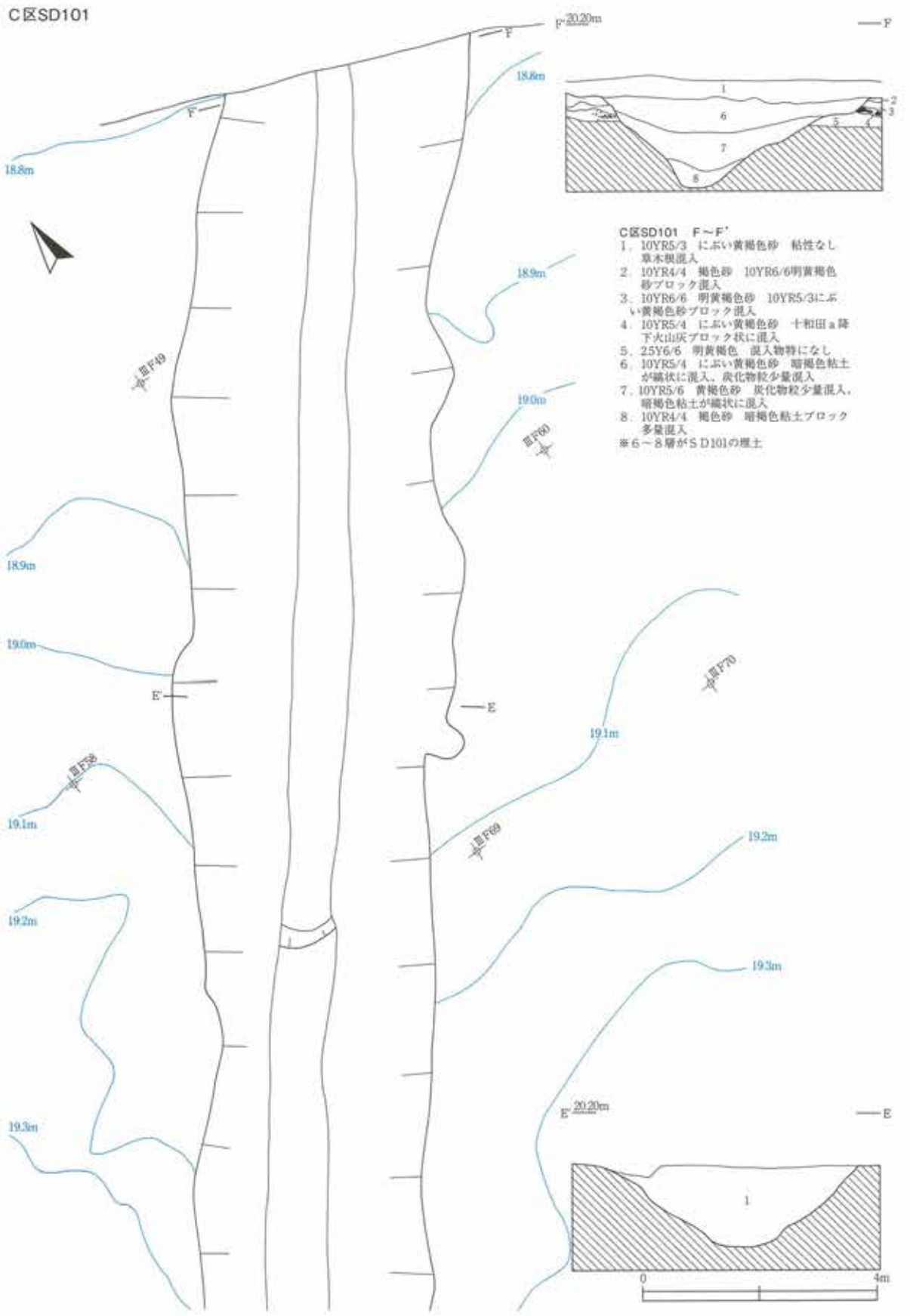
C区SD101



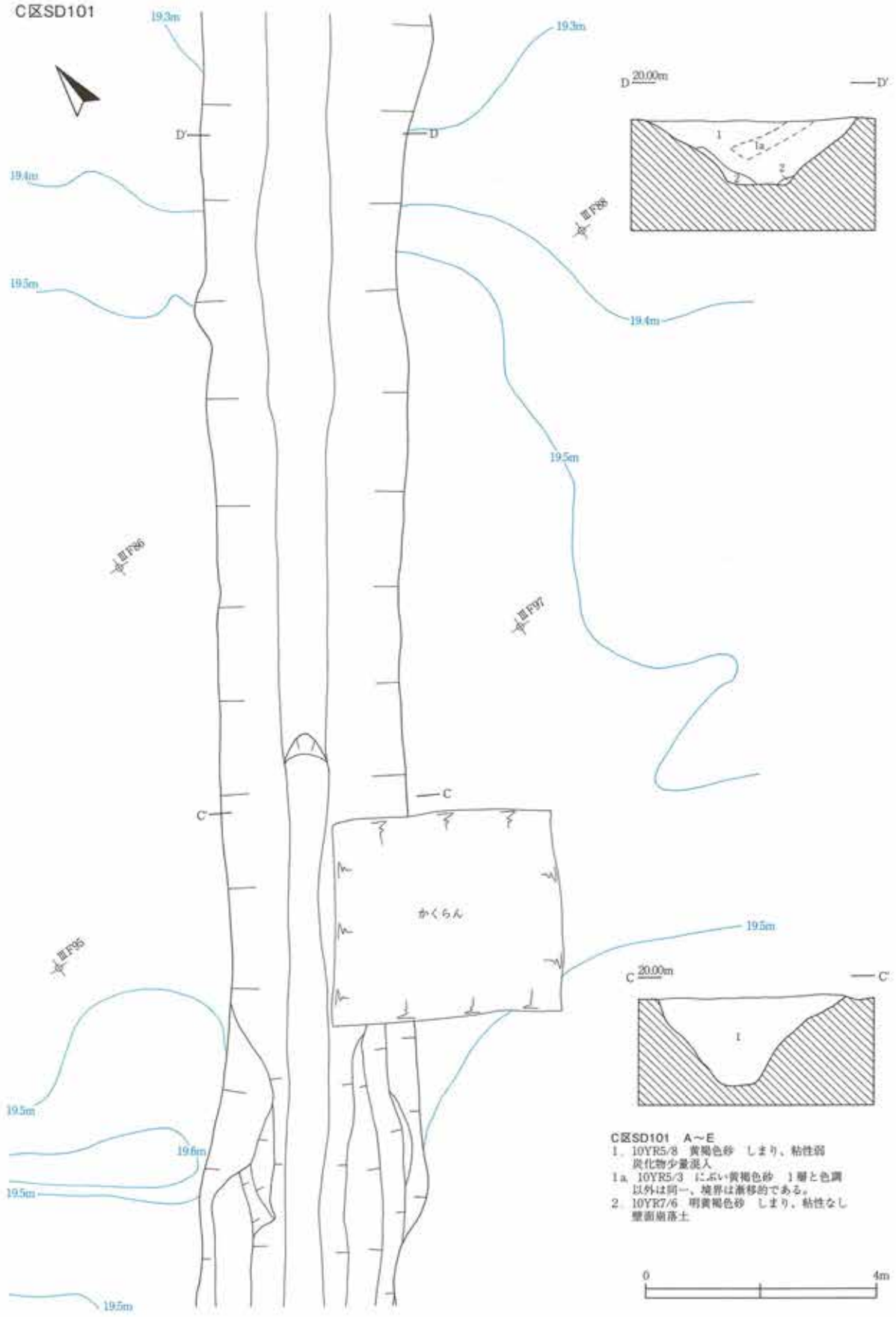
C区SD104



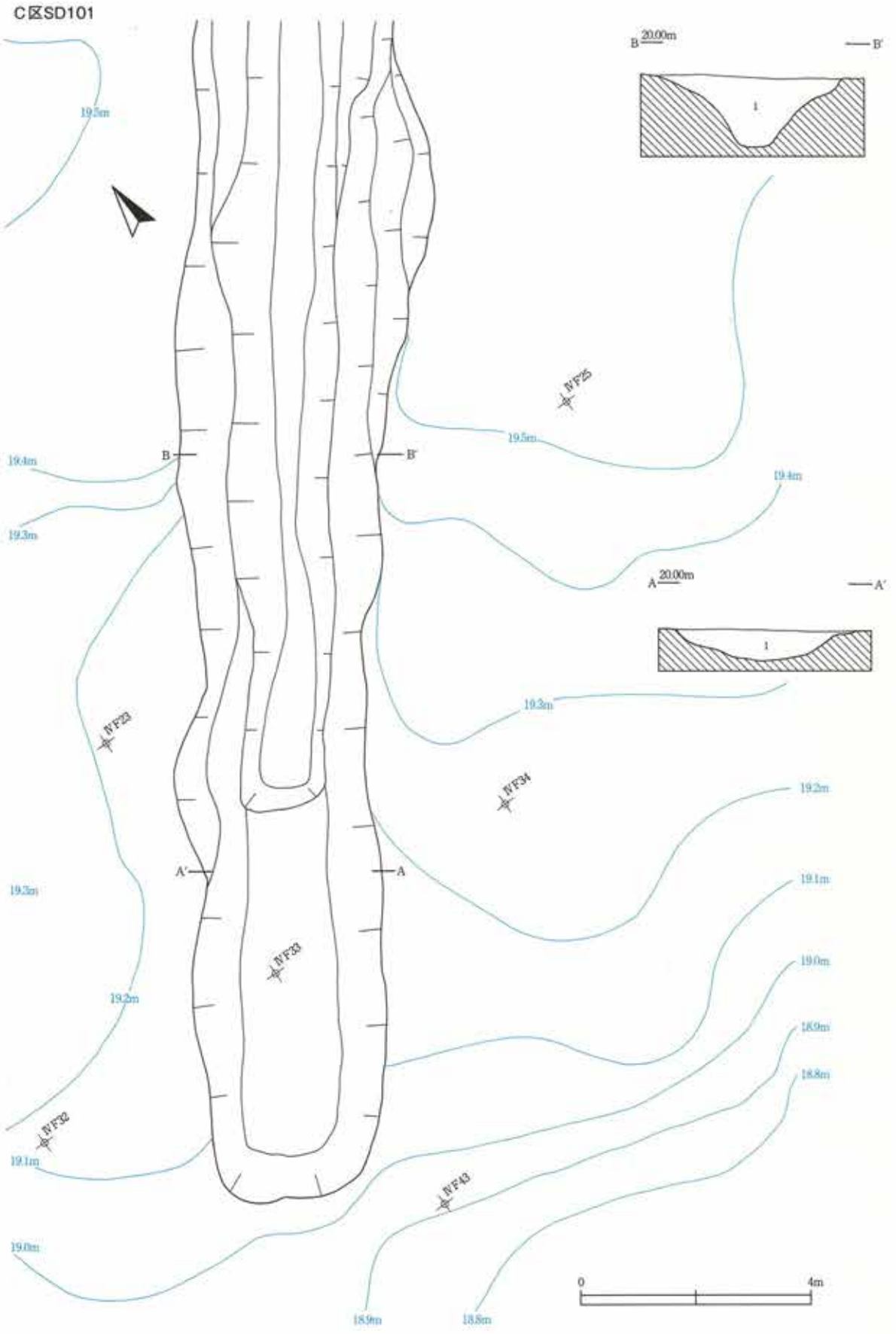
第57図　C区SD101①、C区SD104①



第58図　C区SD101②



第59図 C区SD101③



第60図　C区SD101④

C区SD104溝 （第57・61～63図、写真図版71～73）

〔位置〕ⅡE99・100・ⅡF91・ⅢE10・20・29・30・39・48・49・58・67・76・77・86・95・96・ⅣE05・ⅢF01に位置する。

〔検出状況〕第1検出面でプランが確認された。中央部分約14mは平成14年度、北側約7mは平成16年度に調査をおこなった。他は平成15年度の調査である。

〔重複〕C区SX2と重複するが本遺構が新しい。

〔形態〕上幅0.7～1.5mの「L」字形の溝である。多くの部分の上幅は約1.2～1.5m程である。平成14年調査区部分の上幅が極端に狭くなっているが、これは検出面を下げすぎた結果で、本来は他と同程度の上幅であったと思われる。溝の南北部分は約60m、東西部分は約8m検出された。南北部分の南端部は検出面の傾斜が急になり曖昧な状態で途切れるが、本来はなお南側へ溝が延びていた可能性が高い。東西部分は西側が水道管の掘り込みで破壊されており、プランの延びを検出することができなかった。曲がりの部分は外側のコーナーがほぼ直角に、内側のコーナーが丸みを持って曲がっている。南北部分の軸方向はN－27°－Eの傾きである。検出面からの深さは28～42cmで、底面に明瞭な傾斜はなく、底面の標高は19.0m程度の部分が多い。溝の断面形は半円形に近い形状である。

〔埋土〕6箇所の断面を記録し掲載した。土層区分は各々の箇所で異なるが単層か2層の箇所が多い。埋土は地山と判別が難しい砂質の土で、人為堆積、自然堆積かの判断が難しいが洪水による自然堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕平成16年度調査区の溝のコーナー付近埋土で常滑産陶器甕片（2083）が出土している。口縁部が欠損しているため明確な年代は特定できないが、中野編年5型式（13世紀中葉）頃と推測される。また図示していないが、平成15年調査区の南側部分の埋土で祥符通寶（初鋳年1009年）と洪武通寶（初鋳年1368年）が出土している。他に埋土中から土師器微細片が約40片出土している。

〔性格〕断定はできないが、何らかの区画施設と推測される。

〔年代〕埋土中から13世紀頃の常滑産陶器が出土し、また初鋳年西暦1368年の洪武通寶が出土したことから、13～14世紀に構築、使用された溝と推測される。（羽柴）

C区SD105溝 （第64図、写真図版63）

〔位置〕ⅢF21に位置する。

〔検出面〕第5層（第2検出面）の遺構であるが、検出面から10～20cmほど掘り下げた時点で検出された。

〔形態〕上面を大幅に削平されているものと思われる。現状での規模は長さ約4.6m、幅0.3～0.4m、深さは0.1mである。ほぼ真北へ走っているが、南端から0.9mの地点で角度を変え、そこからは地形の傾斜に沿って若干弧を描きながら北西方向へと向かっている。横断面形は浅い皿状である。

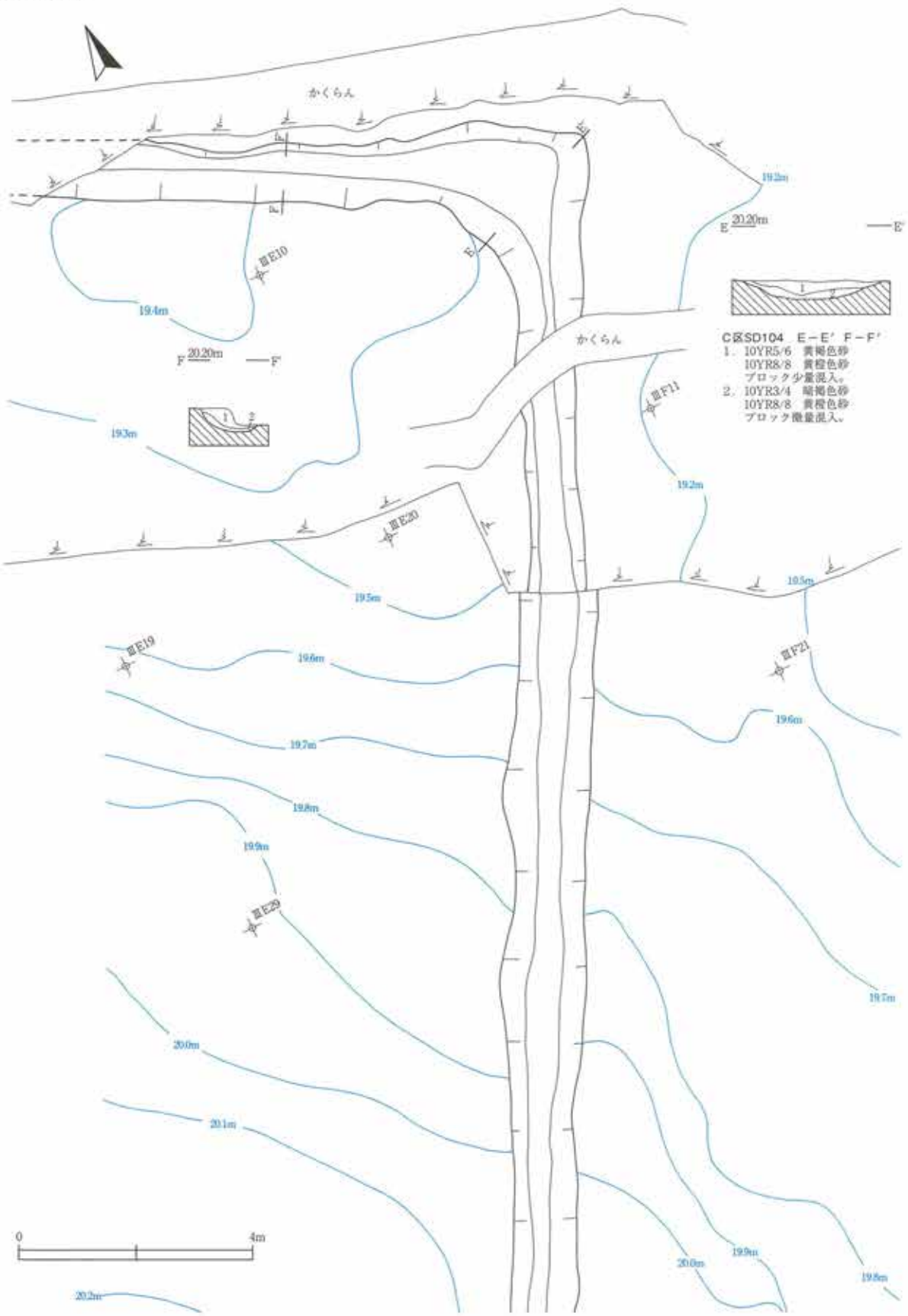
〔埋土〕明黄褐色砂層が1層のみ堆積していた。

〔出土遺物〕なし。

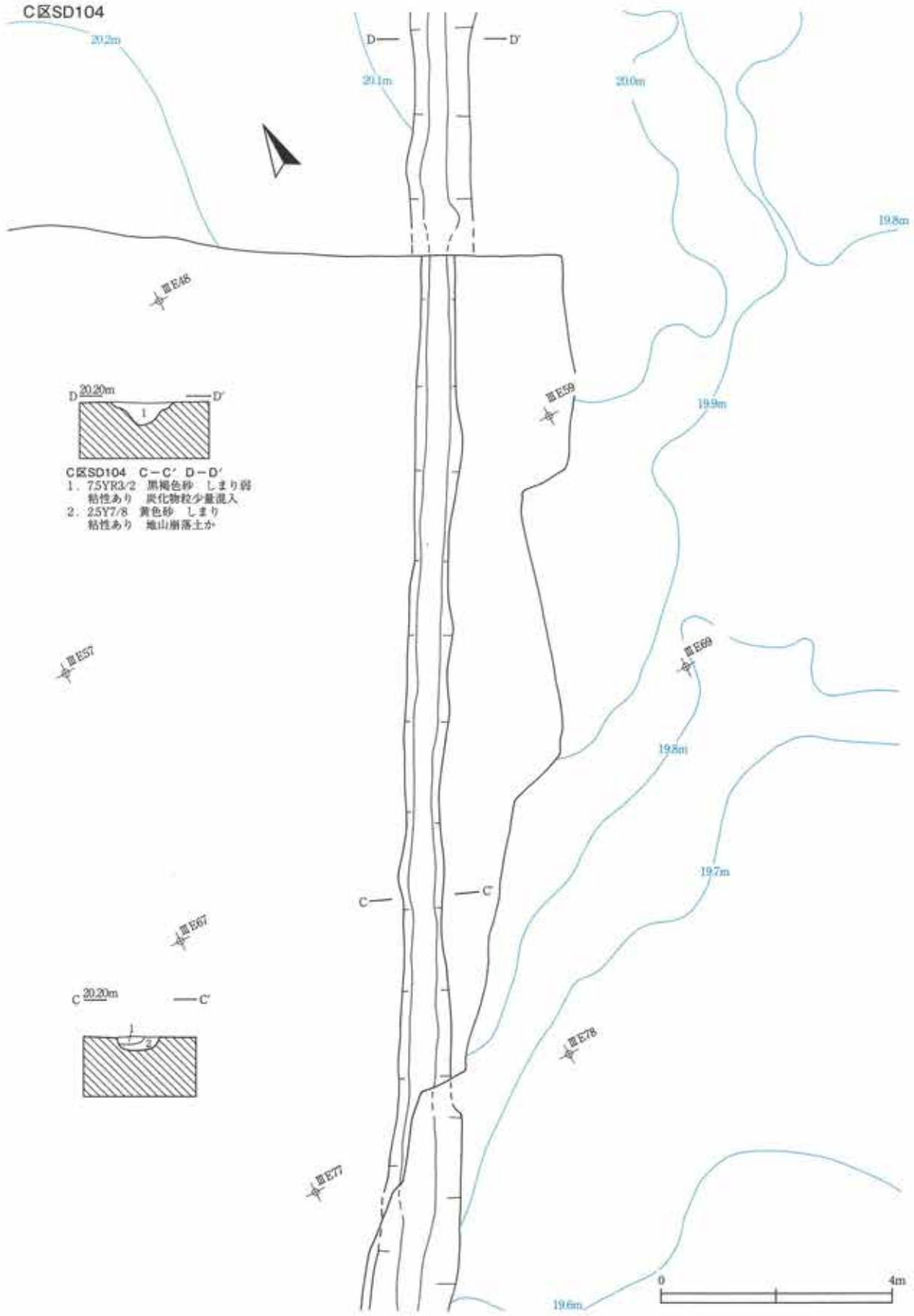
〔性格〕不明。

〔年代〕出土遺物が皆無なため不明であるが、検出面から8世紀後半～9世紀に構築された可能性が高い。（村田）

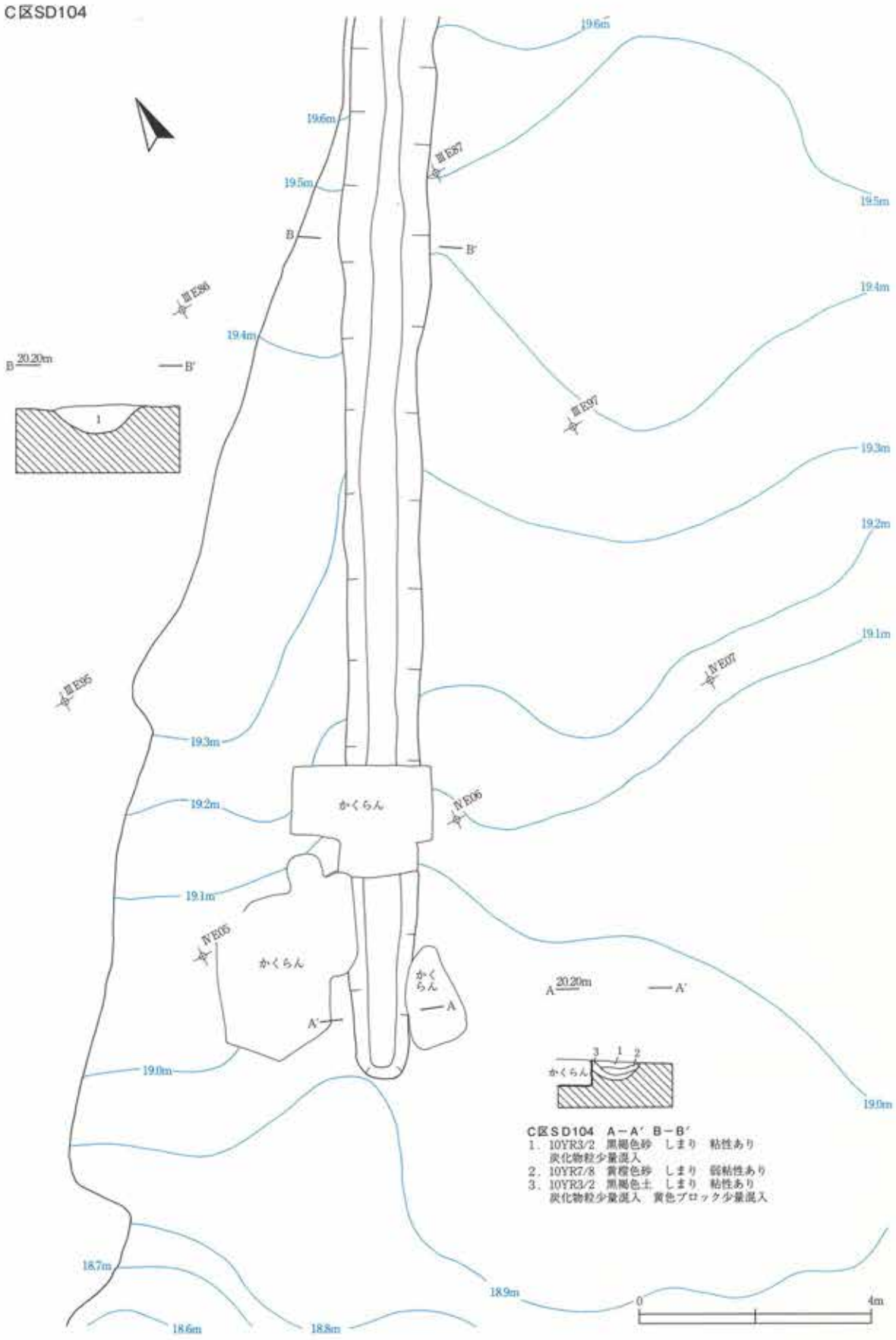
C区SD104



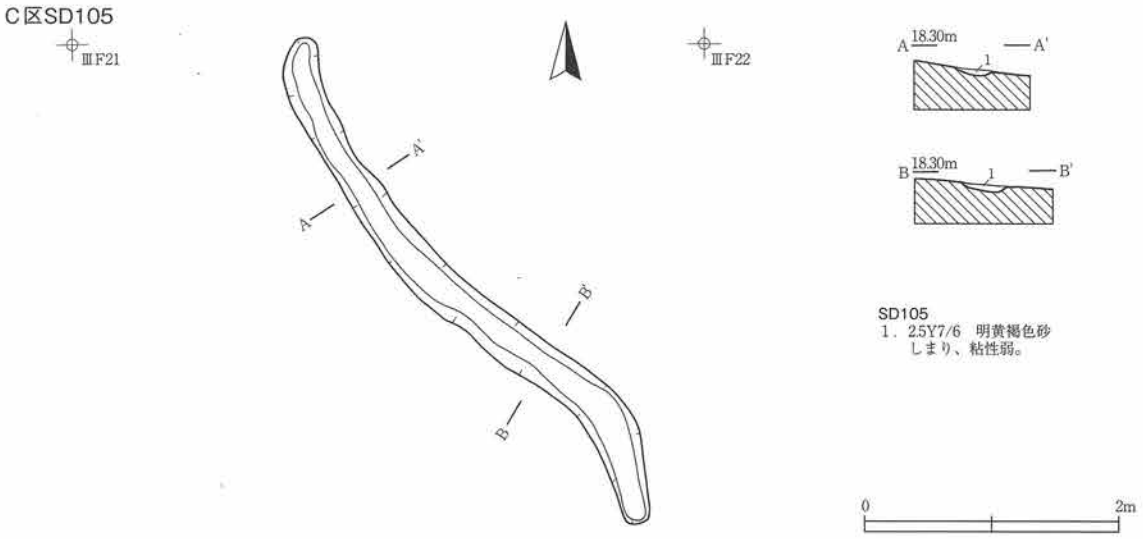
第61図　C区SD104②



第62図 C区SD104③



第63図　C区SD104④



第64図　C区SD105

4　畝間状遺構（SX）

C区SX 1 畝間状遺構　（第65図、写真図版74）

〔位置〕ⅢF48・49・50・58・59・60・69・70に位置する。

〔検出状況〕第１検出面で畝状のプランを確認した。

〔重複〕C区SD101と重複するが本遺構が古い。

〔形態〕上幅20～30cm、長さ約7.5mの溝が８条平行に並んでいる。溝の深さは約10cmである。この溝部分が、断面の観察から畠の畝間と判断される。畝間の断面は半円形である。畝間の軸方向はN－24°－Eである。検出された面積は約74㎡である。畝間の軸方向と、検出面がC区SX２と共通しており、同時期の所産と推測される。

〔層位〕C区SX２と同様の層位関係で、本遺構については記載していない。C区SX２の記述を参照されたい。

〔出土遺物〕なし

〔性格〕古代の畠である。

〔年代〕十和田ａ火山灰の堆積状況から10世紀中葉以降と考えられる。　（米田）

C区SX２畝間状遺構　（第66図、写真図版74）

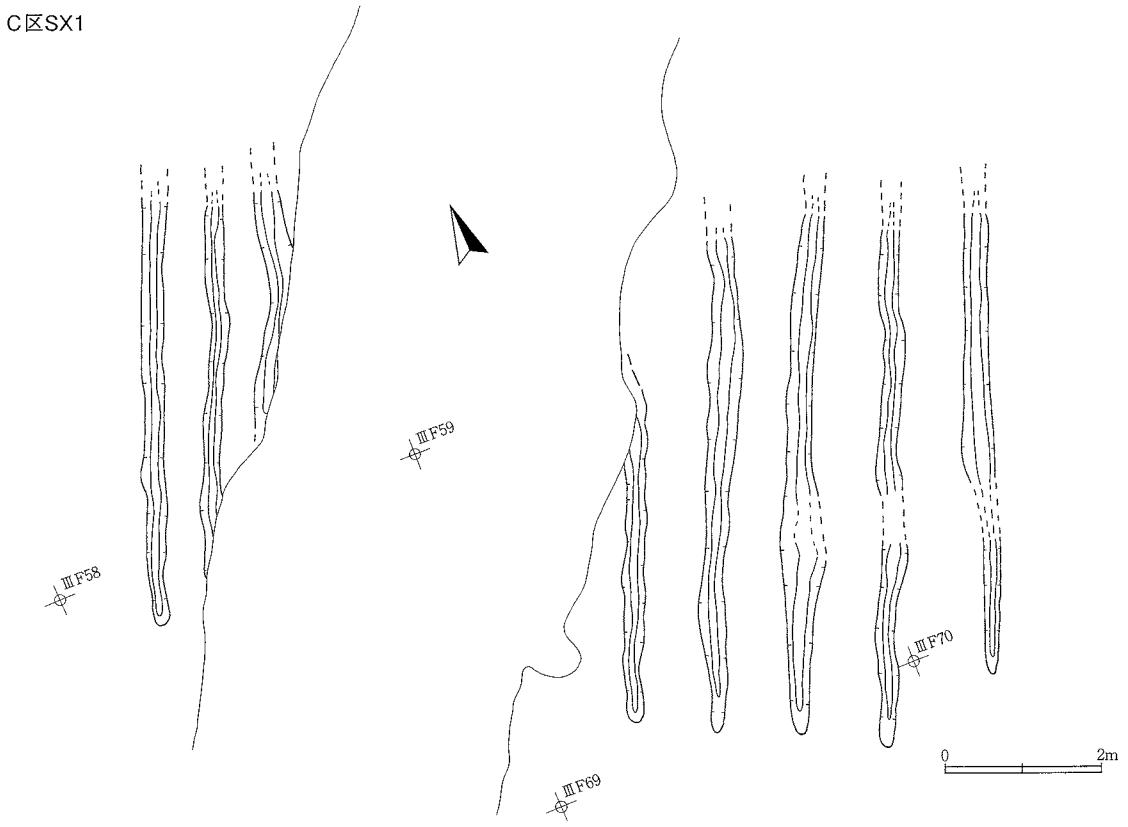
〔位置〕ⅡE89・90・100・ⅢE10・20・ⅡF81・91・92・93・ⅢF11・12・21・22・23に位置する。平成15年度調査区と平成16年調査区の両方にまたがる。

〔検出状況〕第１検出面で畝状のプランを確認した。

〔重複〕C区SD104と重複するが本遺構が古い。

〔形態〕上幅30～90cm、長さ最長14.1m、最短1.8mの溝が21条平行に並んでいる。溝の深さは約10cmである。この溝部分が、断面の観察から畠の畝間と判断される。畝間の断面は半円形である。畝間の軸方向はN－25°－Eである。検出された面積は約160㎡である。

〔層位〕畝間を埋める土は明黄褐色の砂（第３層）である。畠の上面を洪水が起源の砂質土が覆ってい



第65図　C区SX１

る状況と考えられる。畠の耕作土(第４層)は黒褐色土で粘性ある土である。厚さは平均15cmほどである。この耕作土の下には十和田a火山灰を含む層が存在する。よって畠が営まれたのは、十和田ａ火山灰降下後ということになる。

〔出土遺物〕なし

〔性格〕古代の畠である。

〔年代〕十和田a火山灰の堆積状況から10世紀中葉以降と考えられる。　（羽柴）

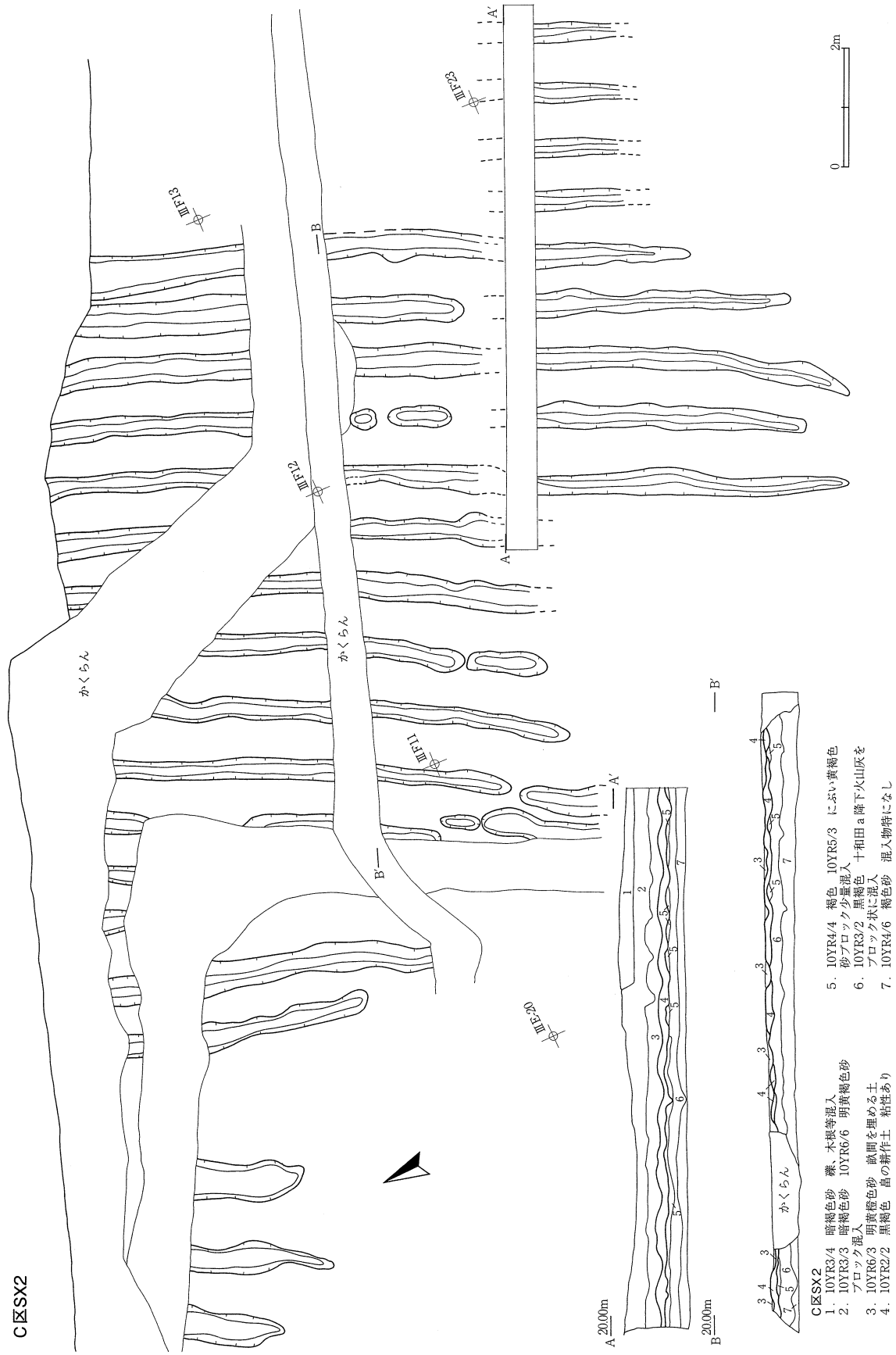
C区SX３畝間状遺構　（第67図、写真図版75）

〔位置〕ⅢE18・27・28・29・38・39に位置する。

〔検出状況〕第１検出面で畝状のプランを確認した。

〔形態〕洪水砂層内に南西－北東方向6.3m、北西－南東方向8.2mのほぼ長方形の土壌化した暗褐色土範囲を確認した。現代の貯蔵施設(芋穴)や水道管などで撹乱を受けているが、残存状況は比較的良好であった。畝間は９条確認されている。確認面からの高さは８～10cmで、畝間断面は半円形である。畝間の軸方向はN－43°－Eである。畝間が広がる範囲の面積は約48㎡である。

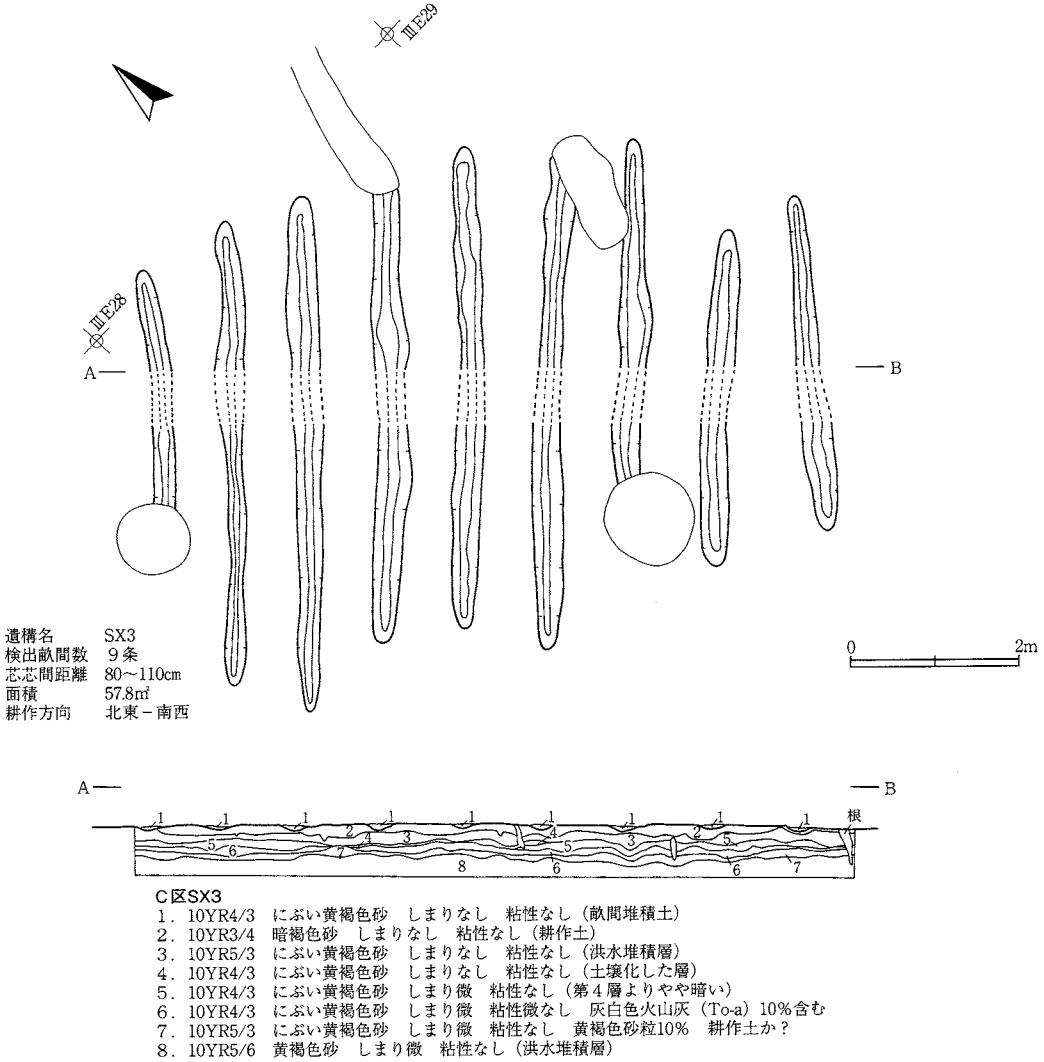
〔層位〕第2層は土壌化していることから、耕作土と考えられる。第6層に十和田ａ火山灰が包含されており、その上位の層は畝の特徴を示し、土壌化がみられる。しかし、第５層は火山灰を母材とした人為性の低い土壌層の可能性も否定できない。


C区SX2
かくらん
かくらん
かくらん
ⅢF13
ⅢF12
ⅢF11
ⅢF23
ⅢE-20
A
A′
B
B′
0
2m
20.00m
20.00m
C区SX2
1．10YR3/4　暗褐色砂　礫、木根等混入
2．10YR3/3　暗褐色砂　10YR6/6　明黄褐色砂
　ブロック混入
3．10YR6/3　明黄橙色砂　畝間を埋める土
4．10YR2/2　黒褐色　畠の耕作土　粘性あり
5．10YR4/4　褐色　10YR5/3　にぶい黄褐色
　砂ブロック少量混入
6．10YR3/2　黒褐色　十和田a降下火山灰を
　ブロック状に混入
7．10YR4/6　褐色砂　混入物特になし

第66図　C区SX２

〔出土遺物〕図示していないが、土師器細片が出土している。
〔性格〕古代の畠跡である。
〔年代〕出土遺物と十和田ａ火山灰との関係から10世紀中葉以降と考えられる。　（米田）

C区SX3



第67図　C区SX３

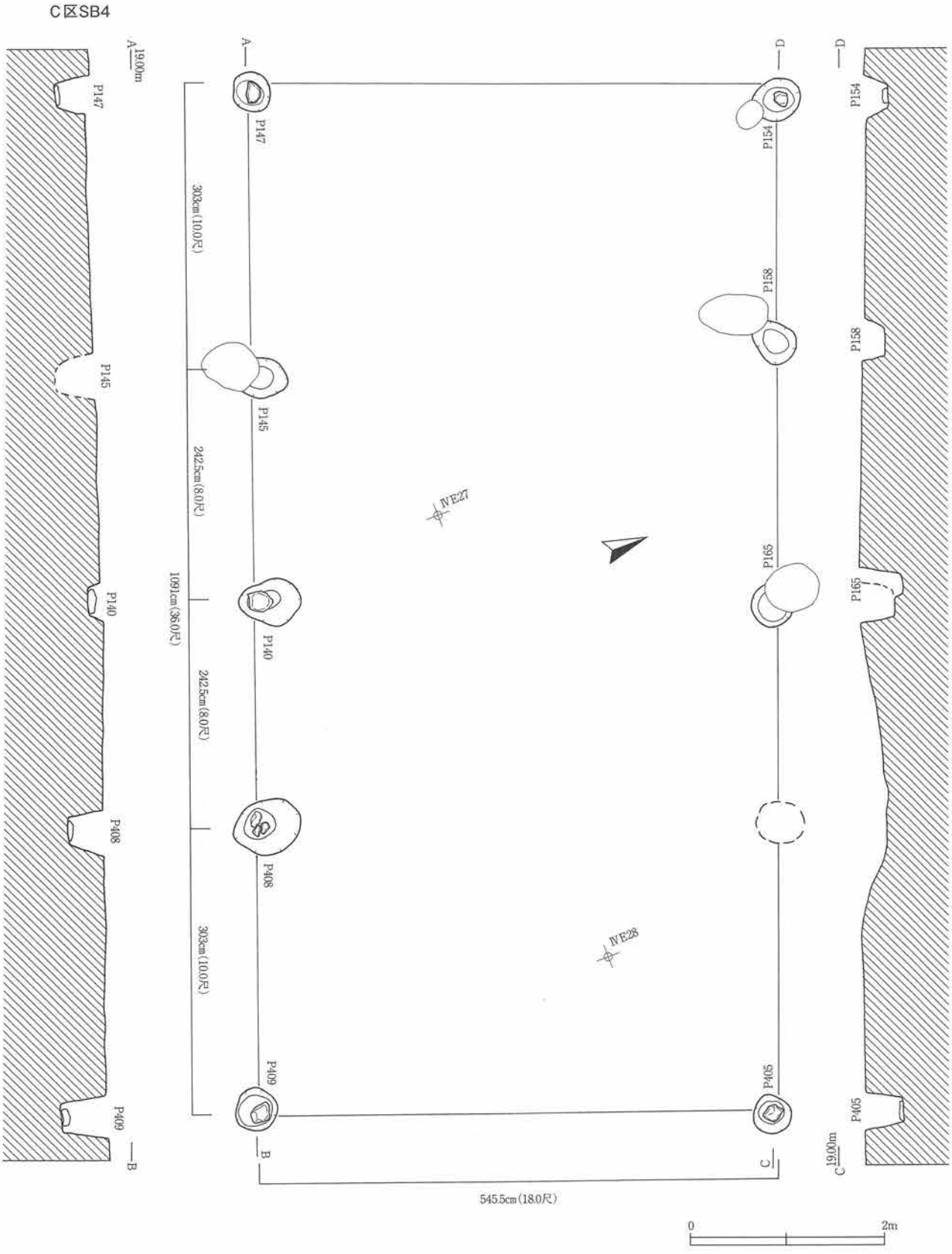
5　掘立柱建物（SB）

C区SB４掘立柱建物　（第68図、写真図版67）

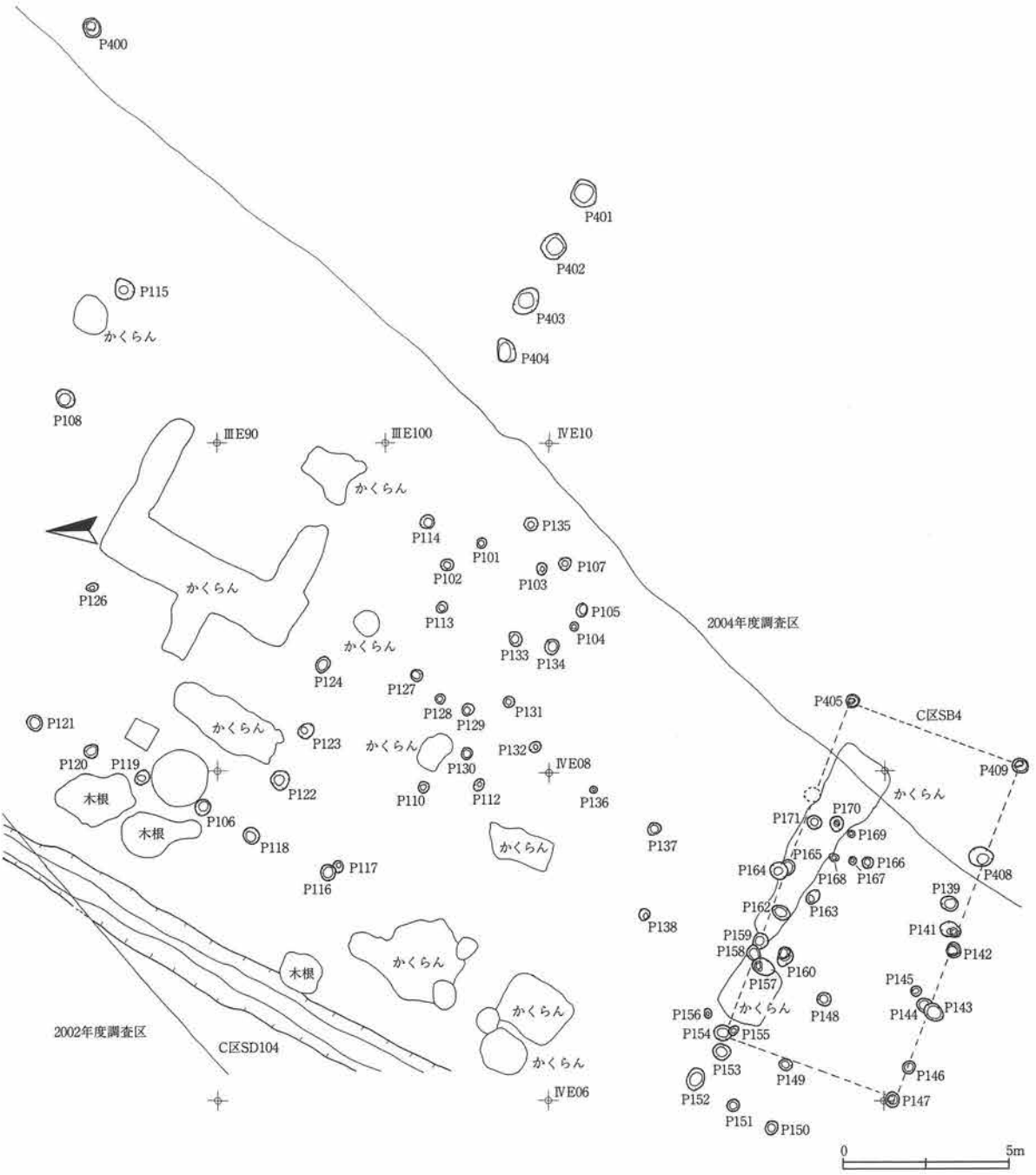
〔位置〕ⅣE16・17・18・26・27・28に位置する。平成15年度C区と平成16年度調査区にまたがって検出された。
〔検出面〕第１検出面である。

〔平面形態〕掘立柱建物である。桁行は1091cm、梁間は545.5cmである。梁間と桁行の長さの比は１：２である。面積は59.51㎡（18.0坪）である。使用した柱穴は９個である。桁行北列のP405とP165の間の柱穴は検出できなかった。梁間の中間に柱穴は存在しなかった。
〔柱穴〕いずれの柱穴からも柱痕は見いだせなかった。また、抜き取りの有無は判断できなかった。P147、P140、P408、P409、P154、P405には偏平な粘板岩が置かれており礎盤と判断される。
〔建物方位〕桁行の軸方向はN－21°－Eである。
〔柱間寸法〕桁行では303cm（10.0尺）と242.5cm（8.0尺）を使っている。梁間は545.5cm（18.0尺）を使用している。
〔出土遺物〕本建物の柱穴P158と重複するP157から密教法具六器の受け皿（5046）が出土しているが、本建物とは直接の関係はないと思われる。
〔付属施設〕特になし。
〔建物の性格〕不明。
〔年代〕検出面から中世～近世の建物と推測される。（羽柴）

C区Pit群　（第69図、写真図版76）
〔位置〕C区SD104より東側、ⅢE78・87・97から東側へ40m四方の間で35個検出された。
〔検出面・状況〕第２層上面である。分布状況をみると、やや規模が大きくてC区SD104に並行する一群と、ⅢE98からⅣE20までの10m四方の間に群集する一群とがあり、さらにそれらから離れて散在するものがある。
〔形態・規模〕いずれも不整円形である。検出面での開口部径は16cm（P136）～67cm（P115）までと様々であるが、なかでも30～35cmと40～44cm程度のものが多い。底部形状は、浅い皿状もしくはほぼ水平な平底である。
〔埋土〕いずれも壁面の崩落土を除いて埋土は単層である。今回精査したPit内の埋土は、ほとんどが黒褐色～にぶい黄褐色土で、混和物として炭化物を５％、黄色～明黄褐色砂質土を10～40％含む。いずれも掘り込み面である黄色砂層よりは相対的にしまっているが、全体としてはしまり、粘性ともに弱いものが多い。
〔出土遺物〕P120とP126からそれぞれ陶器の微細片が１点ずつ出土している。しかし、いずれも図示可能な大きさではないため、年代や産地を特定することはできない。また、P121では検出時に近現代のガラス片が出土している。
〔性格・年代〕SD104に並行する一群（P116・P106・P118～121）は、ほぼ一直線に並んでいることから、柵列などを構成する一群である可能性がある。P120･126から時期不明の陶器片が出土したのみであるため年代決定は困難であるが、今回はP121の検出面でガラス片が出土していることも考慮して、これらのPitは近世～現代のある時期に掘削されたものと考えておきたい。
北東側に群集する一群については、確認されたPitの分布を見る限り配置に規則性は認められず、これらが掘立柱建物などの構造物に関わるものであるとは考えがたい。この一群では出土遺物が皆無であり、年代や性格については不明である。（村田）



第68図　C区SB４（平成16年検出）



第69図　C区第１検出面ピット群

Ⅷ　D区の遺構

1　D区概観

大グリッドⅢF、ⅣF区、ⅣE区西側付近をC区と称している。西限は村道川崎3号線、東限は平成12年度調査区との境界である。平成16年度調査の村道川崎線の道路敷き部分もD区に含めている。D区は本報告書の調査区では最も東側に相当する。D区の南端部は平成14年度の調査区で、D区の名称を冠した遺構名を付していないので、この章ではなく、各々の年度で章立てを行い報告している。またD区に所在するC区SD101は調査時に「C区」の名称を付してしまったため、混乱を避けるためC区の章で報告している。

D区は調査前には宅地、製材所、墓地、道路として使用されていた。平成15年度の調査担当は川又、江藤、平成16年度の担当者は川又ほかである。

D区の地形は中央の標高が高く、自然堤防の尾根筋になっている。そして北側と南側（北上川）に向かうに従って標高を減じ、緩斜面になっているD区内の最高部が標高19.6m、最低部が16.8mである。D区の基本土層は第3図のように認識した。3層上面は第1検出面である。3層上部には十和田a降下火山灰を含んでおり、第1検出面（3層上面）で検出される遺構の上限年代を示す。また5層上面は第2検出面である。出土土師器の年代観から8世紀後半～9世紀初頭頃の面と推測される。基本土層の11層は縄文時代の土器を含んでおり、それより下の層は縄文時代の包含層となる。

ここに掲載するD区検出の遺構は竪穴住居跡（SI）2棟、堀立柱建物（SB）8棟、土坑（SK）5基、畝間状遺構（SX）2基である。この他に墓壙（SZ）107基とそれに伴う溝（SD）3条があるが、これらは第2分冊に掲載している。（羽柴）

2　竪穴住居（SI）

D区SI 1 竪穴住居　（第70図、写真図版77・78）

〔位置〕ⅢF94・95・ⅣF04・05グリッドに位置する。

〔検出面〕第2検出面で検出した。

〔重複関係〕重複する遺構はない。ただし、北西側の壁とカマドの煙道を現代の用水路に切られる。

〔形状・規模〕北西側の壁を破壊されているが、平面形は隅丸方形と推定される。規模は465×（370cm）である。床面の認識が難しく、大半の部分を掘りすぎたが、遺物が殆ど同一レベルで出土したため、そこを床面とした。検出面から床面までの深さは、最深部で45cmを測る。

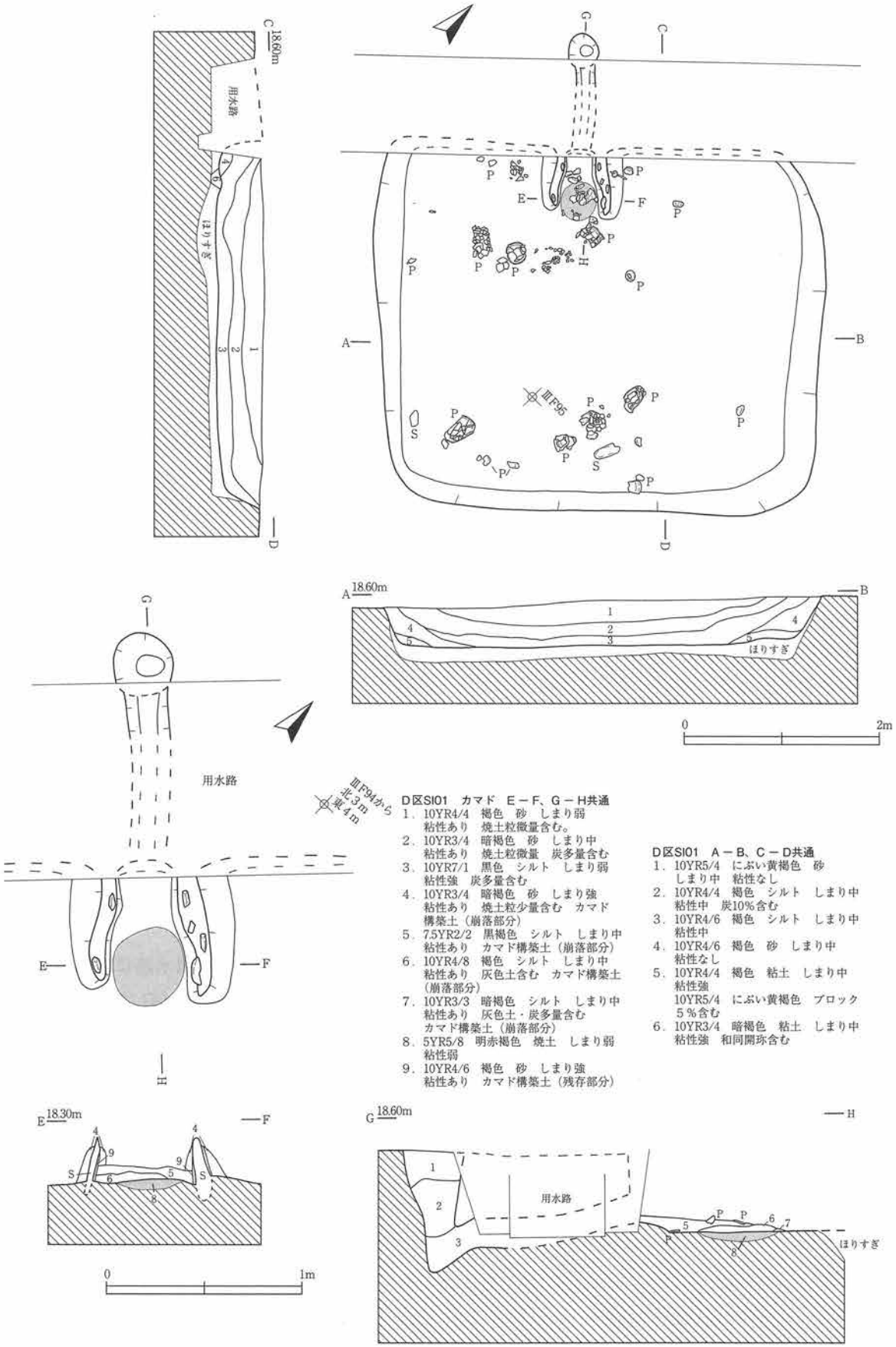
〔埋土〕5層からなる。褐色土を主体とする。

〔カマド〕北西側の壁面中央に位置する。本体部分は、芯材の礫数点と、構築土が僅かに残存していた。燃焼部焼土の範囲は40×35cmで、床面から5cmの深さまで強く被熱している。煙道の長さは約120cm、煙出しは径60cmで、検出面から底面までの深さは125cmを測る。

〔床面施設〕柱穴・貯蔵穴等は確認できなかった。

〔出土遺物〕土師器坏6点（72～77）、土師器小型土器1点（78）、土師器鉢3点（79～81）、土師器台付甕1点（82）、土師器長胴甕11点（83～93）、鉄鏃1点（5009）、刀子1点（5026）、紡錘車1点（5038）、和同開珎1点（5047）が出土した。紡錘車はカマド袖のすぐ外側で出土した。和同開珎は、床面より下

D区SI1



第70図　D区SI1

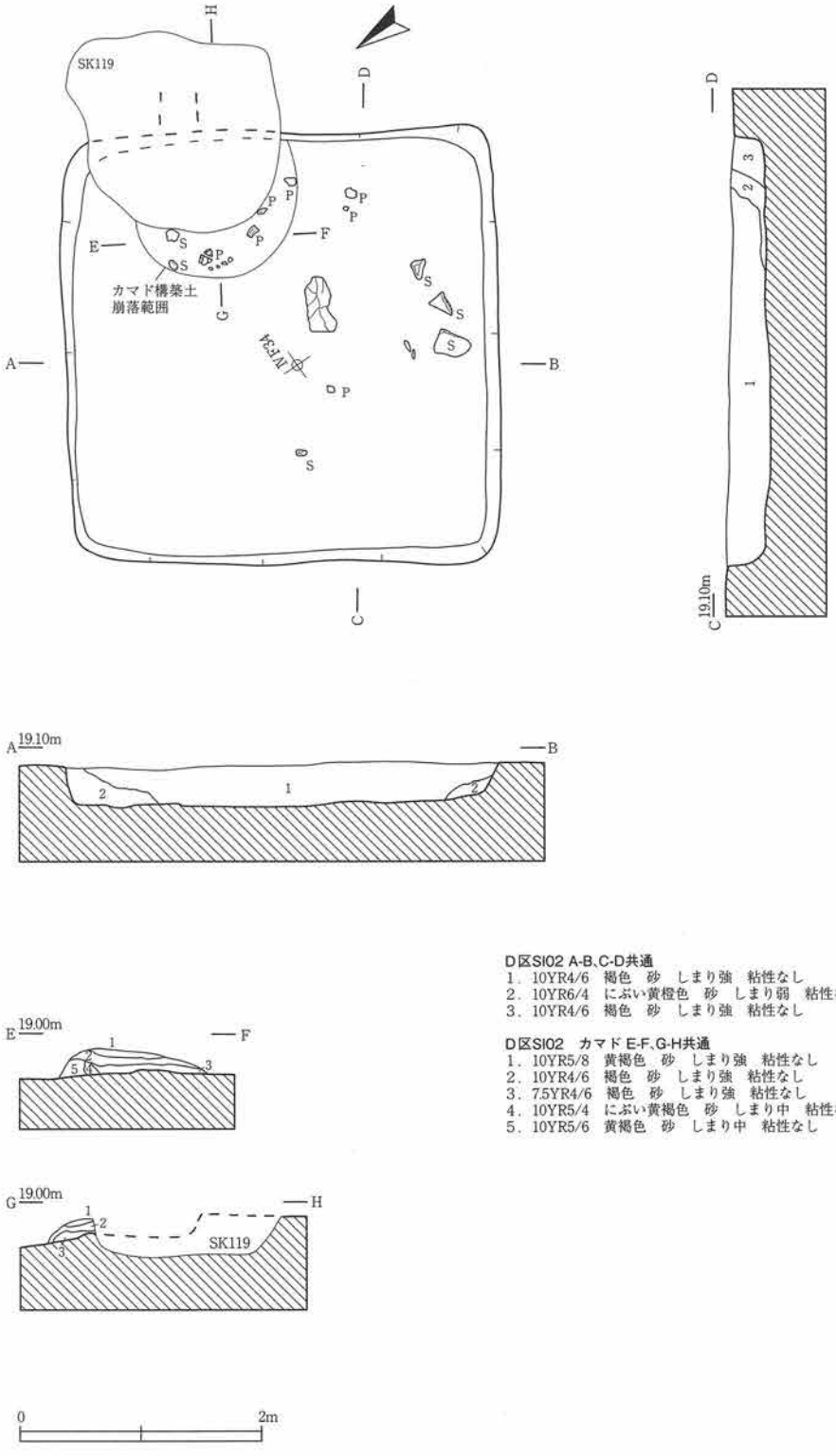
の貼床部分から出土している。
〔性格〕竪穴式住居。
〔時期〕出土した土師器の形態から8世紀後半の住居と考えられる。（川又）

D区SI２竪穴住居　（第71図、写真図版79）
〔位置〕ⅣF33・34・43・44グリッドに位置する。
〔検出面〕第２面で検出した。
〔重複関係〕D区SK119に切られる。
〔形状･規模〕平面形は隅丸方形で、規模は360×355cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。検出面から床面までの深さは、最深部で35cmを測る。
〔埋土〕３層からなる。褐色の砂を主体とする。埋土と床面・壁面の区別は非常に困難であった。
〔カマド〕SK119に切られ、残存しなかった。ただし、カマドがあったと思われる部分には、構築土である黄褐色の砂や焼土ブロック、礫、土器が散乱していた。よってカマドは本来、住居の南東壁面の東よりに位置していたと考えられる。
〔床面施設〕柱穴・貯蔵穴等は確認できなかった。
〔出土遺物〕土師器坏１点(94)、ロクロ土師器長胴甕１点(95)、須恵器大甕１点(96)が出土した。土師器坏には「栄」の字の墨書がある。
〔性格〕竪穴式住居。
〔時期〕出土した土師器から８世紀末～９世紀初頭と考えられる。（川又）

3　掘立柱建物(SB)

D区SB１掘立柱建物　（第72・73図、写真図版81・82）
〔位置〕ⅣF67・68～80・88・89・99グリッドに位置する。
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔重複関係〕D区SB２とプランが重複し、P90がP103（SB２）に切られる。また、P104がP49（単独）に切られている。さらに、SB３とプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いはない。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行き1112cm、梁間716cmで、面積は79.6㎡（24.13坪）である。16個の柱穴（P25・31・37・41・42・78・79・84・87・89・90・93・99・100・104）を使用した。プランの西隅は、攪乱によって大きく削平されているが、本来この位置にも柱穴があった可能性が高い。
〔柱穴〕柱痕は、いずれの柱穴においても確認できなかった。P25・P104には礎盤が存在する。
〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－57°－Wである。
〔柱間寸法〕191cm（6.3尺）を多用している。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明
〔時期〕検出面から、近世の遺構と考えられる。重複関係から、SB２よりも古い建物である。（川又）

D区SI2

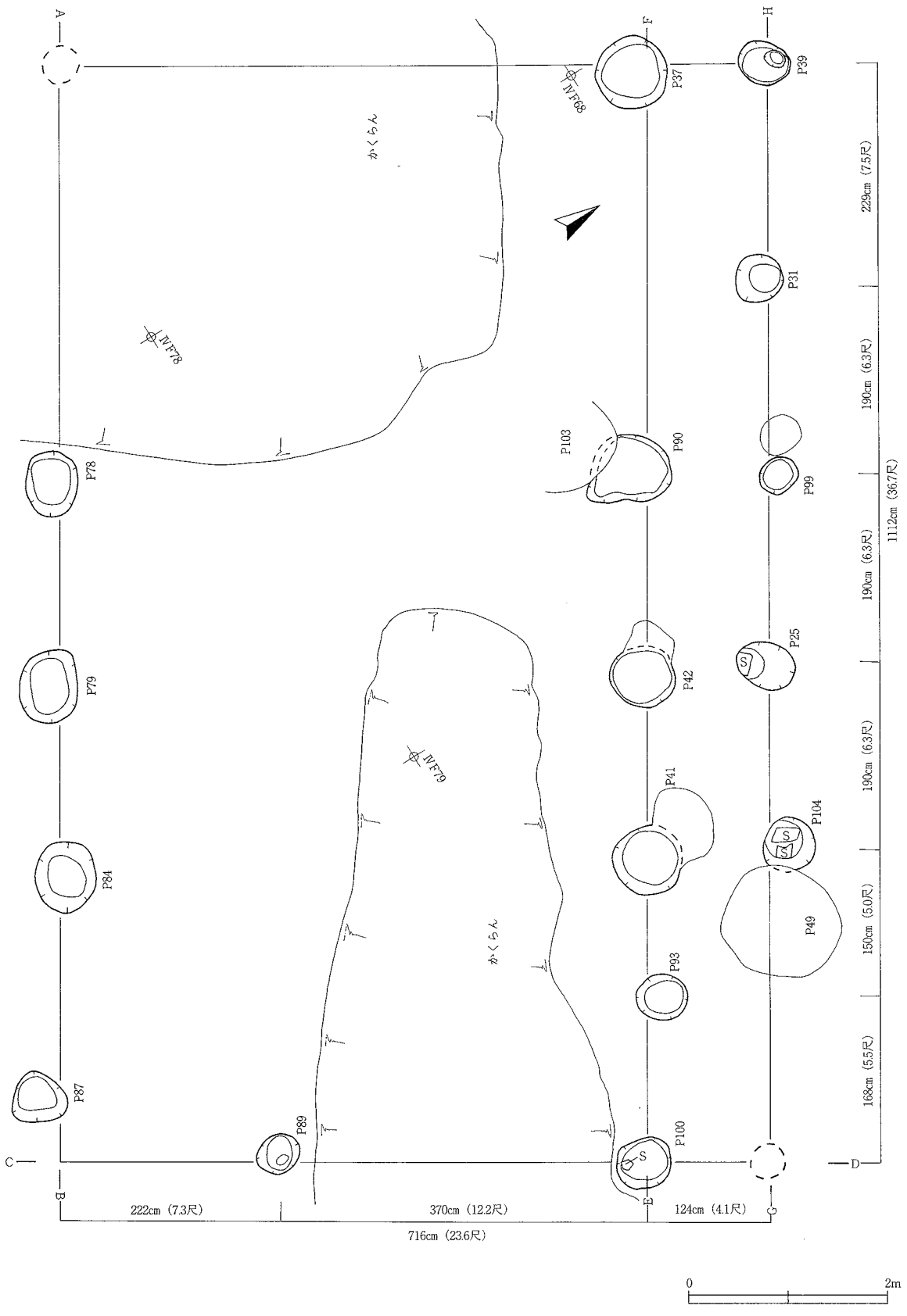


D区SI02 A-B、C-D共通
1．10YR4/6　褐色　砂　しまり強　粘性なし
2．10YR6/4　にぶい黄橙色　砂　しまり弱　粘性なし
3．10YR4/6　褐色　砂　しまり強　粘性なし

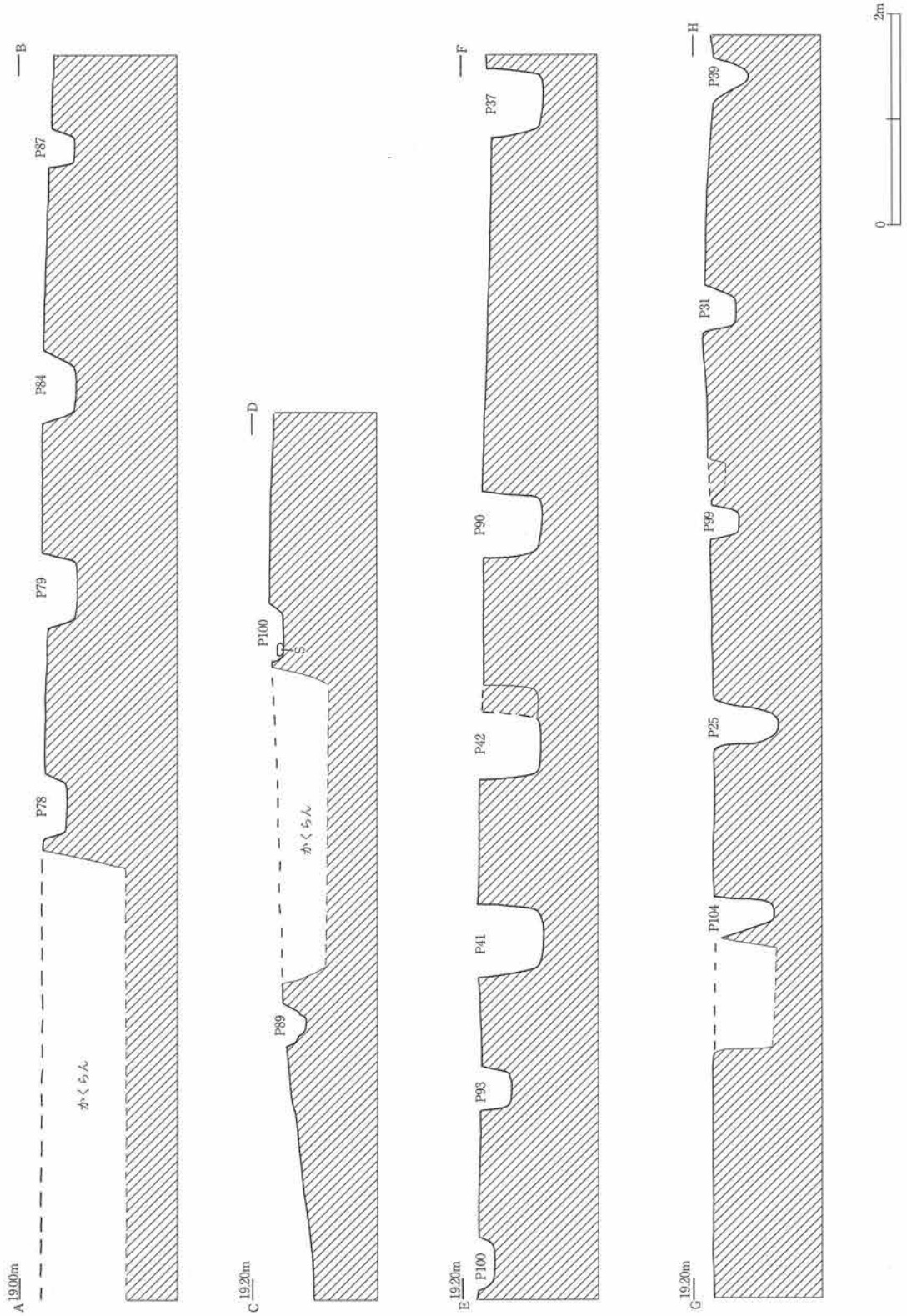
D区SI02　カマド E-F、G-H共通
1．10YR5/8　黄褐色　砂　しまり強　粘性なし
2．10YR4/6　褐色　砂　しまり強　粘性なし
3．7.5YR4/6　褐色　砂　しまり強　粘性なし
4．10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　しまり中　粘性なし
5．10YR5/6　黄褐色　砂　しまり中　粘性なし

第71図　D区SI2

D区SB1



第72図　D区SB１①


B
P87
P84
P79
P78
かくらん
A 19.00m
D
P100
S
かくらん
P89
C 19.20m
F
P37
P90
P42
P41
P93
P100
E 19.20m
H
P39
P31
P99
P25
P104
G 19.20m
2m
0

第73図　D区SB１

D区SB２掘立柱建物　（第74図、写真図版81・82）

〔位置〕ⅣF78～80・88・89グリッドに位置する。

〔検出面〕第１面検出面で検出した。

〔重複関係〕D区SB１とプランが重複し、P103（SB２）がP90（SB１）を切る。また、P104がP49（単独）に切られている。さらに、D区SB３ともプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いはない。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行き582cm、梁間436cmで、面積は25.38㎡（7.69坪）である。11個の柱穴（P25・43・73・91・92・98・101・102・103・104・108）を使用した。

〔柱穴〕P73・103を除く８個の柱穴において、柱穴底面に礎盤が置かれていた。柱痕は確認できなかった。

〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－67°－Wである。

〔柱間寸法〕桁行きの基準寸法は194cm（6.4尺）である。

〔出土遺物〕P103から、肥前産の端反碗１点（4017）が出土している。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕検出面・出土遺物から、近世の遺構と考えられる。また重複関係から、D区SB１よりも新しい建物である。　（川又）

D区SB３掘立柱建物　（第75図、写真図版81）

〔位置〕ⅣF78・79・88～90グリッドに位置する。

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔重複関係〕D区SB１、SB２とプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いはない。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行き631cm、梁間349cmで、面積は22.02㎡（6.67坪）である。８個の柱穴（P74・75・80・82・89・100・111・116）を使用した。

〔柱穴〕柱痕は、いずれの柱穴においても確認できなかった。

〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－79°－Wである。

〔柱間寸法〕桁行きは167cm（5.5尺）を多用している。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕検出面から、近世の建物と考えられる。　（川又）

D区SB４掘立柱建物　（第76図、写真図版81）

〔位置〕ⅣF47・56・57・58・68グリッドに位置する。

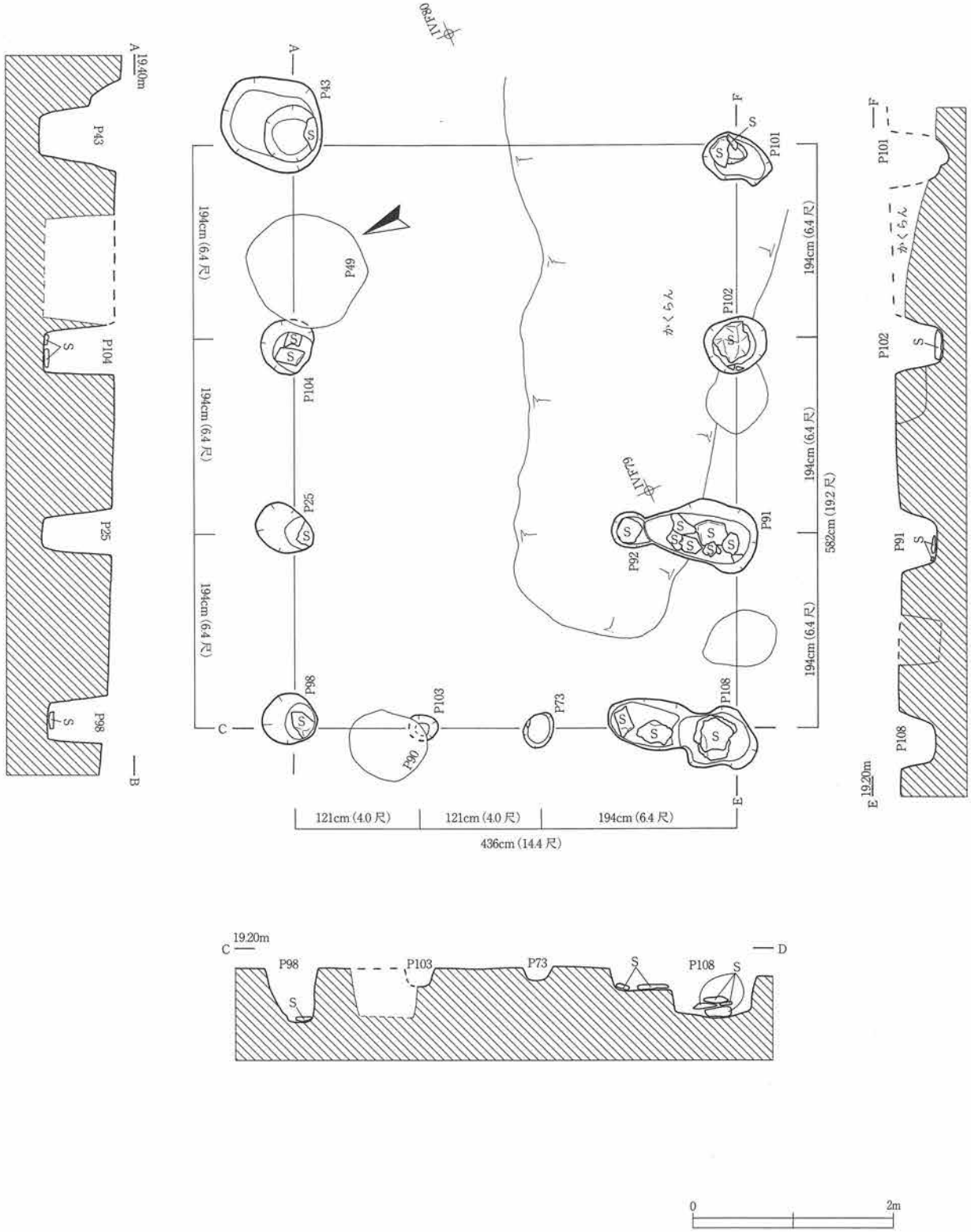
〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔重複関係〕プラン内にD区SZ80（墓壙）が位置する。柱穴との直接の切り合いはない。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行き1001cm、梁間349cmで、面積は34.93㎡（10.59坪）である。14個の柱穴（P１・２・３・５・６・８・９・52・53・54・107・118・119・157）を使用した。プランの東隅は攪乱により削平されているが、本来は柱穴があったものと推定される。P５・P107により、３室に仕切られていたと考えられる。

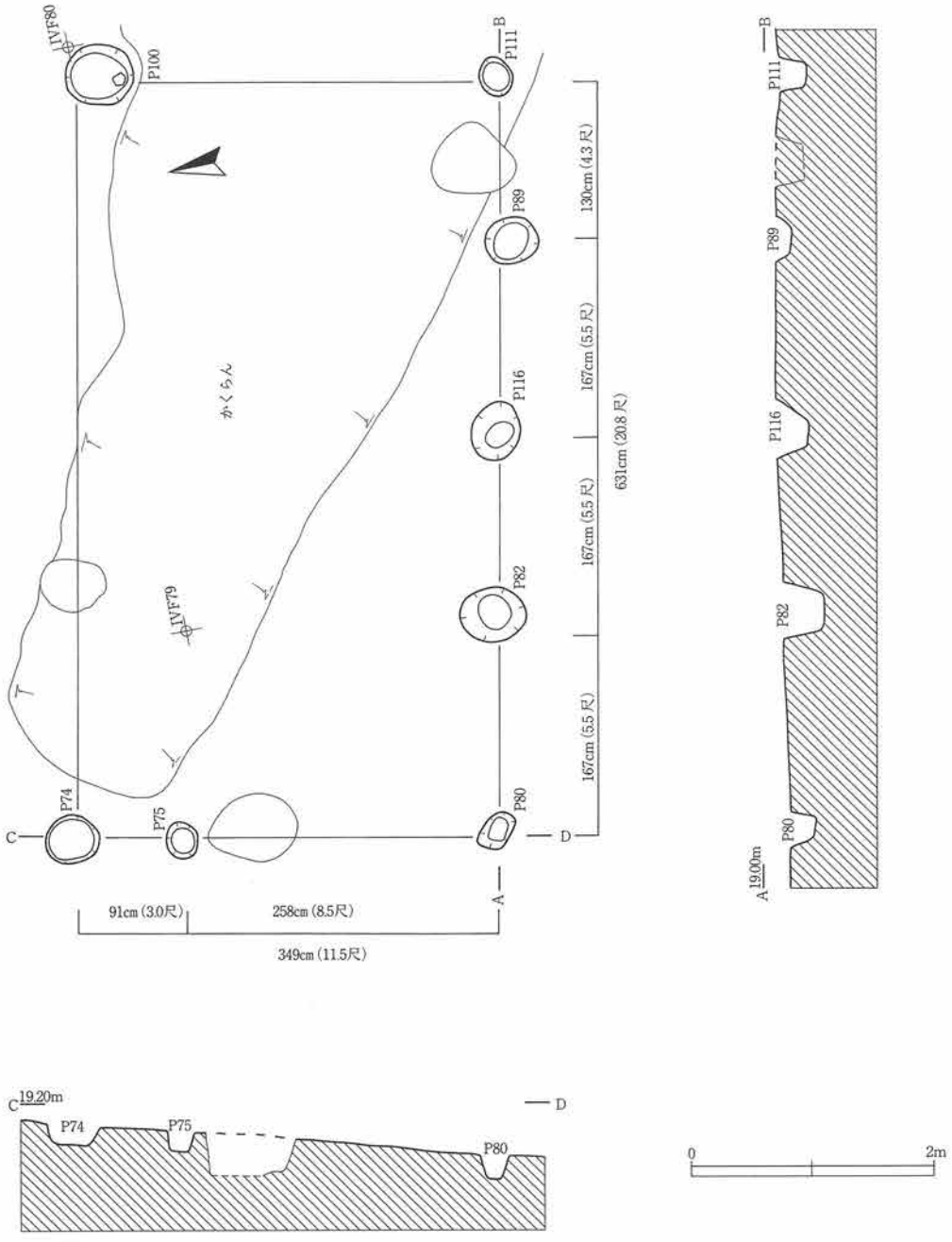
〔柱穴〕一部の柱穴において、埋土断面に柱痕を確認した。

D区 SB2



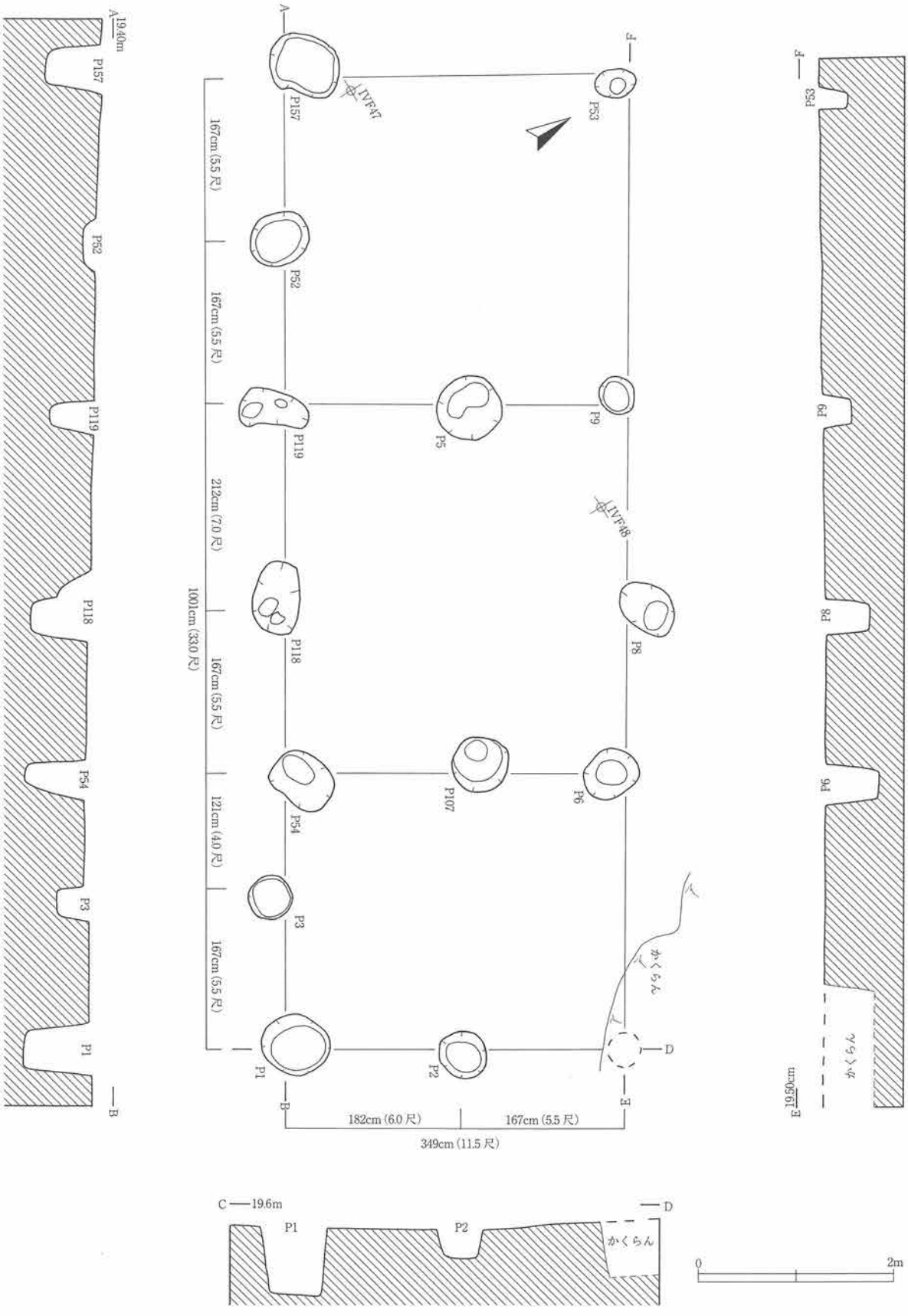
第74図　D区SB2

D区 SB3



第75図　D区SB３

D区 SB4



第76図　D区SB４

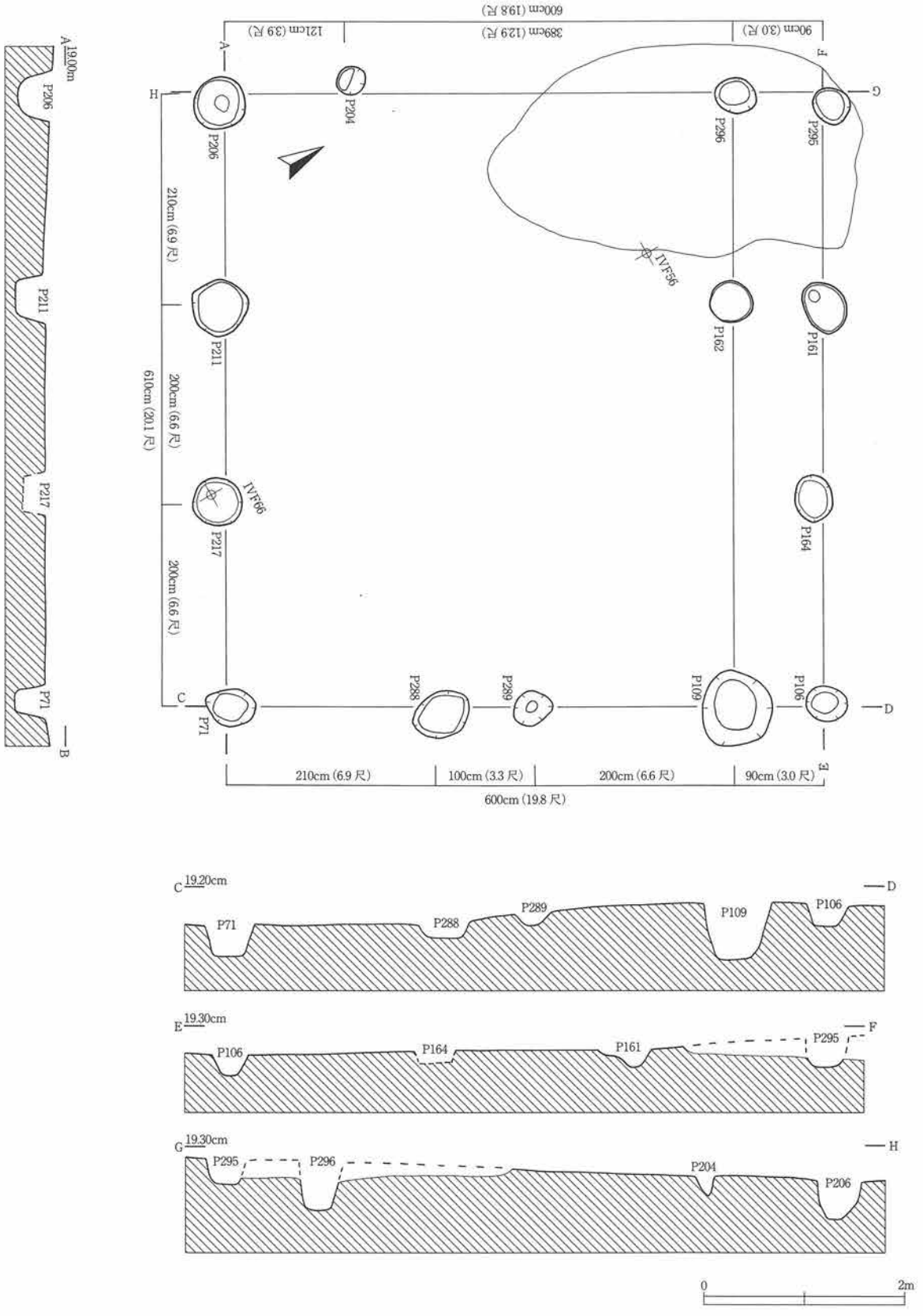
〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－59°－Wである。
〔柱間寸法〕桁行きは167cm（5.5尺）を多用している。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕検出面から、近世の建物と考えられる。（川又）

D区SB５掘立柱建物（第77図、写真図版83）
〔位置〕ⅣF55・56・65・66・76グリッドに位置する。
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔重複関係〕本建物の柱穴P295、296がD区SK120を切る。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行き610cm、梁間600cmで、面積は36.6㎡（11.09坪）である。14個の柱穴（P71・106・109・161・162・164・204・206・211・217・288・289・295・296）を使用した。
〔柱穴〕柱痕は確認できなかった。
〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－61°－Wである。
〔柱間寸法〕基準寸法は200cm（6.6尺）である。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕検出面から、近世の建物と考えられる。また重複関係から、D区SK120よりも新期である。（川又）

D区SB６掘立柱建物（第78図、写真図版83）
〔位置〕ⅣF53・54・63・64・73グリッドに位置する。
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔重複関係〕D区SB７、SB８とプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いはない。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行951cm、梁間527cmで、面積は50.12㎡（15.19坪）である。11個の柱穴（P133・136・145・146・172・178・184・191・194・195・221）を使用した。
〔柱穴〕柱痕は確認できなかった。
〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－31°－Eである。
〔柱間寸法〕基準寸法は243cm（8.0尺）である。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕検出面から、近世の建物と考えられる。（川又）

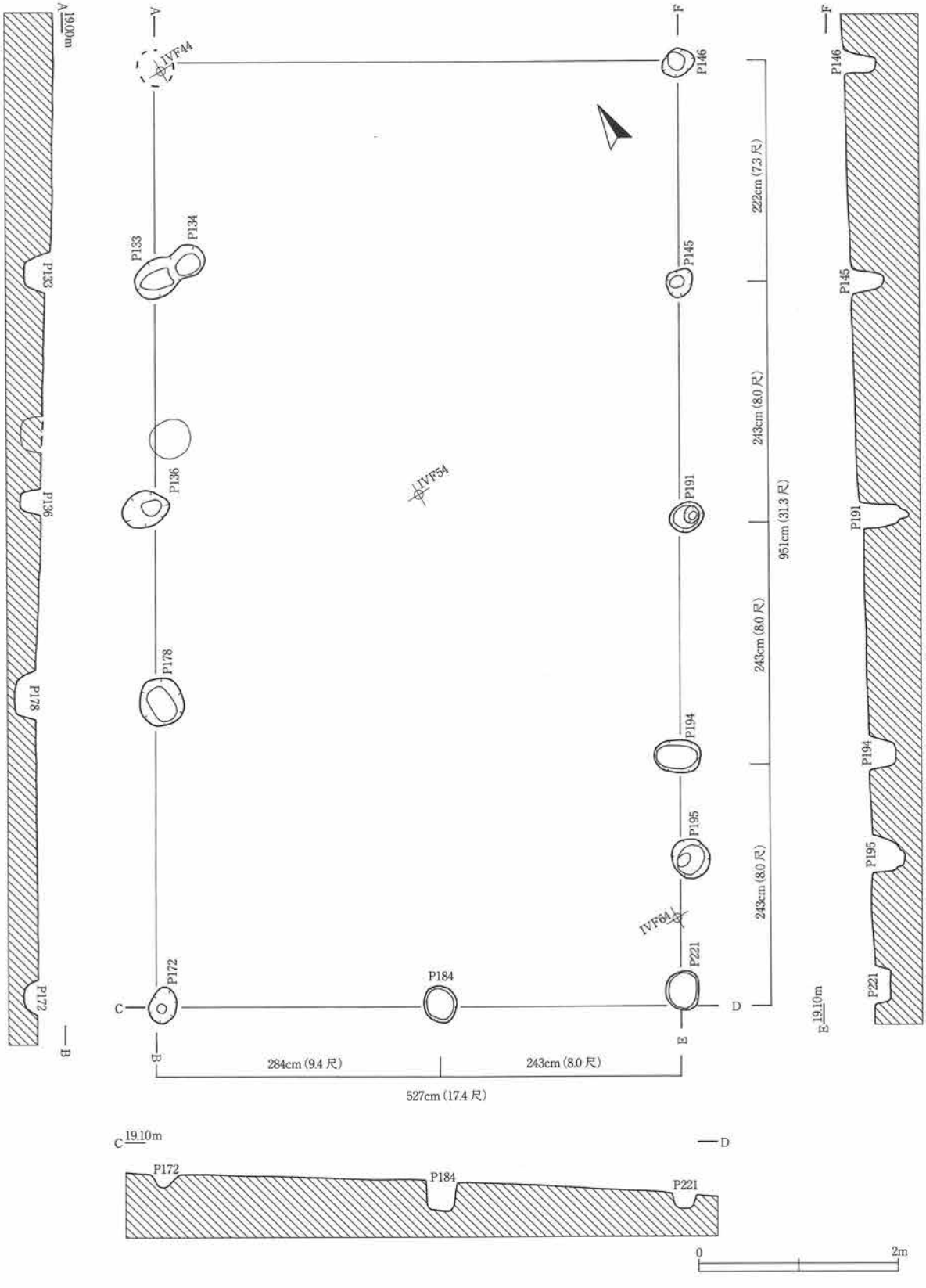
D区SB７掘立柱建物（第79図、写真図版83）
〔位置〕ⅣF53・62～64・74グリッドに位置する。
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔重複関係〕D区SB６、SB８とプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いはない。

D区 SB5



第77図　D区SB５

D区 SB6

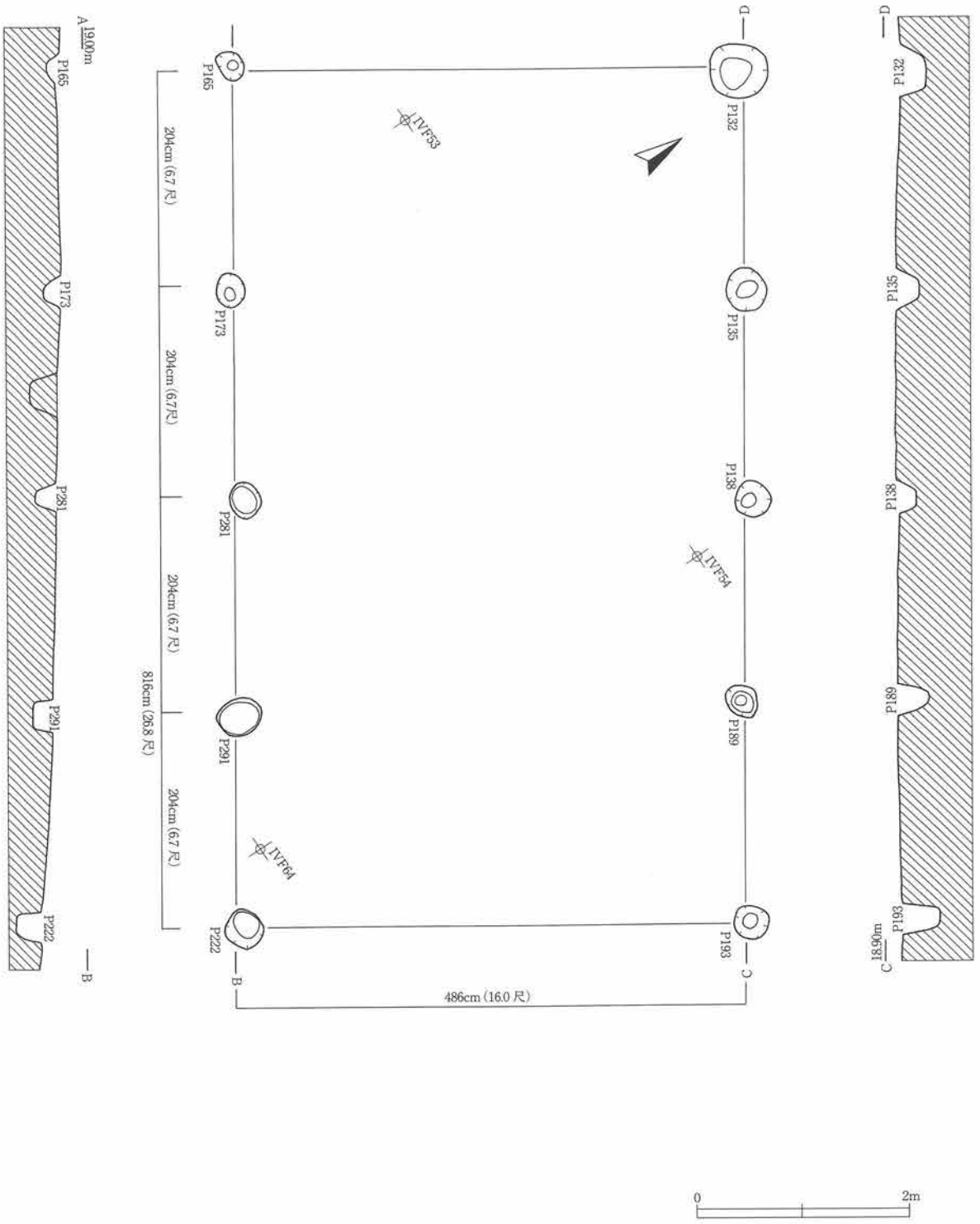


第78図　D区SB6

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行き816cm、梁間486cmで、面積は39.66㎡（12.02坪）である。使用した柱穴は10個（P132・135・138・165・173・189・193・222・281・291）である。
〔柱穴〕柱痕は確認できなかった。
〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－57°－Wである。
〔柱間寸法〕基準寸法は204cm（6.7尺）である。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕検出面から、近世の建物と考えられる。（川又）

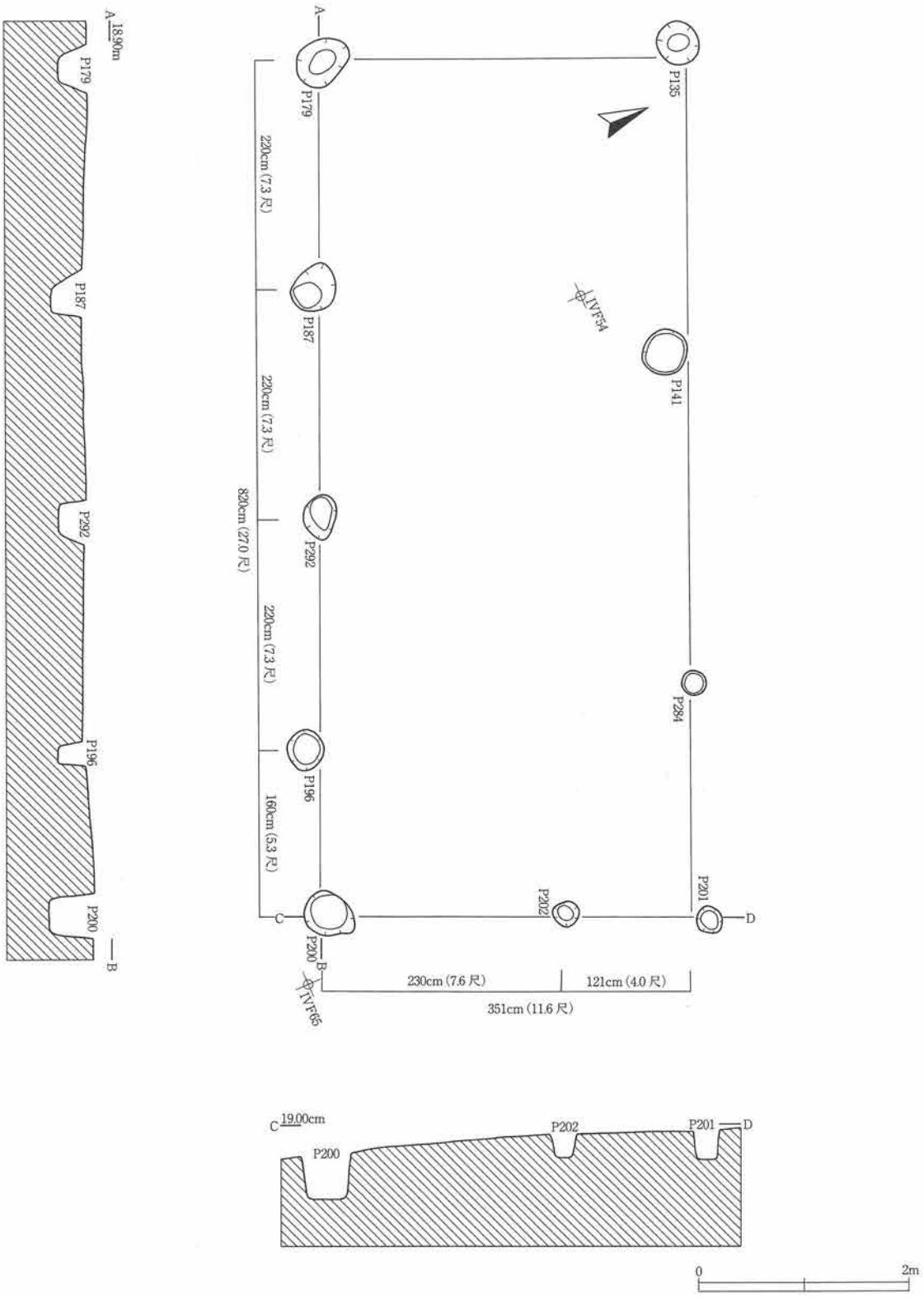
D区SB８掘立柱建物　（第80図、写真図版83）
〔位置〕ⅣF53・54・63～65グリッドに位置する。
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔重複関係〕D区SB６、SB７とプランが重複するが、柱穴同士の直接の切り合いはない。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行き820cm、梁間351cmで、面積は28.92㎡（8.76坪）である。使用した柱穴は10個（P135・141・179・187・196・200・201・202・284・292）である。
〔柱穴〕柱痕は確認できなかった。
〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－67°－Wである。
〔柱間寸法〕桁行きは220cm（7.3尺）を多用している。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕なし
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕検出面から、近世の建物と考えられる。（川又）

D区 SB7



第79図　D区SB７

D区 SB8



第80図　D区SB８

4　土　　坑（SK）

D区SK118土坑　（第81図、写真図版84）

〔位置〕ⅣF46グリッドに位置する。

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔重複関係〕D区SD７を切る。

〔形状・規模〕平面形は円形で、長軸方向はN－29°－Wである。断面形は碗形を呈する。規模は開口部径100×98cm、深さ46cmを測る。

〔埋土〕黒褐色土による単層である。

〔出土遺物〕なし

〔性格〕不明である

〔時期〕D区SD７は、出土遺物（永楽通寶）から15世紀以降の遺構と考えられる。重複関係から、本遺構はこれより新しい遺構である。　（川又）

D区SK119土坑　（第81図、写真図版84）

〔位置〕ⅣF44グリッドに位置する。

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔重複関係〕D区SI２と重複し、これを切る。

〔形状・規模〕平面形は概ね円形で、東側がやや張り出す。長軸方向はN－74°－Wである。床面は平坦で、壁は外傾し、断面形は椀形を呈する。規模は開口部径198×178cm、深さ70cmを測る。

〔埋土〕２層からなる。暗褐色土を主体とする。埋土下位には焼土粒・土器片が多く含まれる。

〔出土遺物〕埋土から土師器長胴甕片（129）が出土しているが、これは重複するSI２に伴う遺物である可能性が高い。東側の張り出しからは、径20～30cmの礫が数点出土した。

〔性格〕不明である。

〔時期〕検出面より、十和田a火山灰降下以後～近世の遺構と考えられる。　（川又）

D区SK120土坑　（第81図、写真図版84）

〔位置〕ⅣF55グリッドに位置する。

〔検出面〕第１検出面で検出した。

〔重複関係〕D区SB５の柱穴P295・P296と重複し、これに切られる。

〔形状・規模〕平面形は楕円形で、長軸方向はN－29°－Wである。底面は平坦でなく、最深部から開口部へ向けて緩やかに立ち上がる。断面形は皿形を呈する。規模は開口部径340×210cmで、深さ52cmを測る。

〔埋土〕黒褐色土による単層である。

〔出土遺物〕埋土より、11世紀のかわらけ１点（1022）が出土している。

〔性格〕不明である。

〔時期〕出土遺物より、11世紀～近世の遺構と考えられる。　（川又）

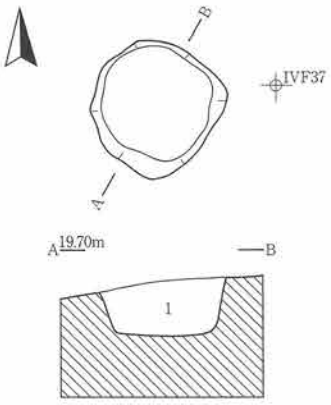
D区SK121土坑　（第81図、写真図版84）

〔位置〕ⅣF54グリッドに位置する。
〔検出面〕第１検出面で検出した。
〔重複関係〕なし
〔形状･規模〕平面形は楕円形で、長軸方向はN－49°－Eである。底面は平坦で、壁は外傾し、断面形は皿形を呈する。開口部径196×170cm、深さ20cmを測る。
〔埋土〕黒褐色土による単層である。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明である。
〔時期〕検出面より、十和田ａ火山灰降下以後～近世の遺構と考えられる。　（川又）

D区SK122土坑　（第81図、写真図版85）

〔位置〕ⅣF95グリッドに位置する。
〔検出面〕第２検出面で検出した。
〔重複関係〕C区SD101と重複するが本遺構が古い。
〔形状・規模〕精査時の掘りすぎのために正確な形状・規模は不明である。残存部から推定すると、平面形は楕円形で、長軸方向はN－45°－Eである。壁は外傾し、断面形は碗形を呈する。残存部の規模は、開口部径155×85cm、深さ61cmを測る。
〔埋土〕２層からなる。黒褐色土を主体とする。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明である。
〔時期〕検出面より、８世紀～９世紀の遺構と考えられる。　（川又）

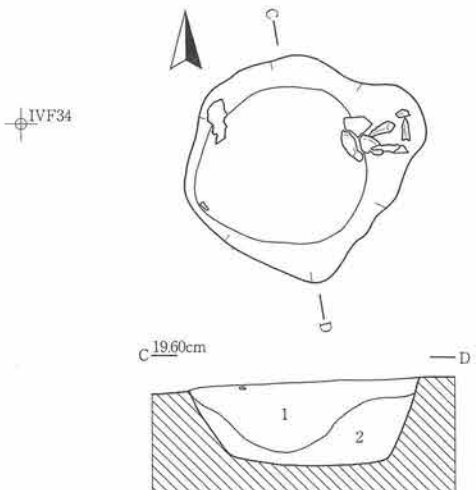
D区 SK118



D区ＳＫ118

1．10YR3/3　暗褐色砂　しまり強、粘性なし。
　黄色砂帯状に入る。（自然堆積）

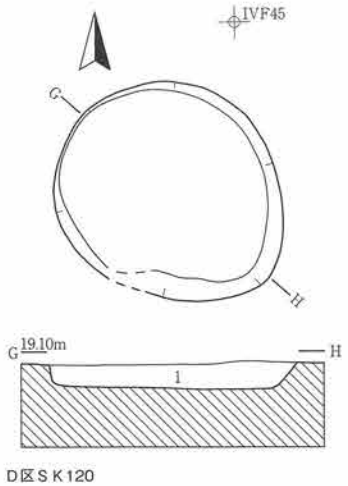
D区 SK119



D区ＳＫ119

1．10YR3/3　暗褐色砂　しまり中、粘性なし。
　下位に黄色砂含む。
2．10YR5/6　黄褐色砂　しまり中、粘性なし。
　黒色砂まだらに含む。

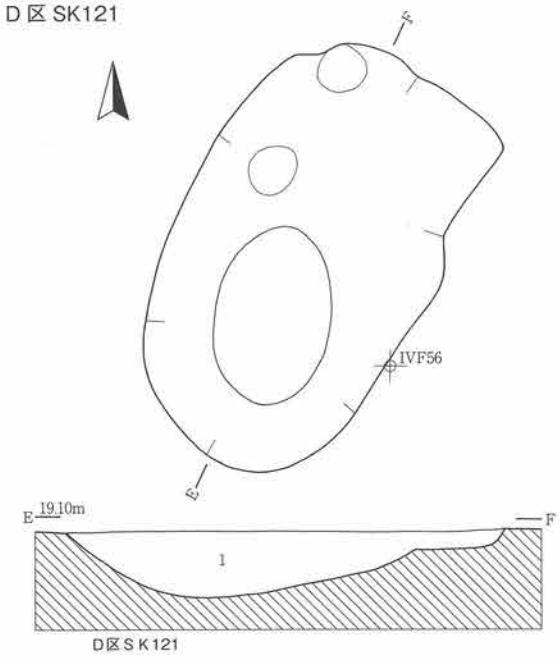
D区 SK120



D区ＳＫ120

1．10YR2/3　黒褐色砂　しまり強、粘性弱。
　黄色砂ブロック（φ１cm）１%、炭化物２%含む。

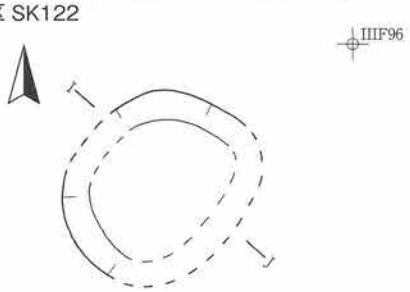
D区 SK121

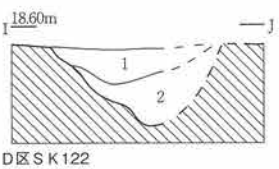


D区ＳＫ121

1．10YR2/3　黒褐色砂　しまり中、粘性なし。
　黄色砂ブロック（φ２～３cm）３%、炭化物微量含む。

D区 SK122





D区ＳＫ122

1．10YR2/3　黒褐色シルト　しまり中、粘性中。
　黄色砂をブロック状に含む（人為堆積）上面に土器含む。
2．10YR4/4　褐色シルト　しまり中、
　粘性中。炭化物微量含む。

第81図　D区SK118～D区SK122

5　畝間状遺構（SX）

D区SX20畝間状遺構　（第82図、写真図版86）

〔位置〕ⅢF86～88・96～98・ⅣF05～08に位置する。

〔検出面〕第２検出面である。

〔形態〕D区SI１と同一面で検出し、洪水砂層内に東西13m、南北10mの長方形の範囲を確認した。C区SD101と農業用水路によって一部削平を受けているが、残存状況は良好であった。またD区SX21と重複するが、本遺構が新しい。D区SX21とは畝間がほぼ直行する。確認面からの高さ10～12cmで畝間幅は30cm程度と狭く、畝間の断面は半円形である。畝間芯間距離にばらつきがあることから、検出できなかった畝間があると推測される。

〔出土遺物〕なし

〔性格〕古代の畠である。

〔年代〕隣接する８世紀後半の竪穴住居跡であるD区SI１との関連性が指摘できるものの、明確な決め手はない。検出面と十和田a降下火山灰層より下位に位置することから、８世紀後半～９世紀初頭と推測される。　（米田）

D区SX21畝間状遺構　（第82図、写真図版87）

〔位置〕ⅢF75～77・85～89・96～98・ⅣF06～09・18～19に位置する。

〔検出〕第２検出面である。

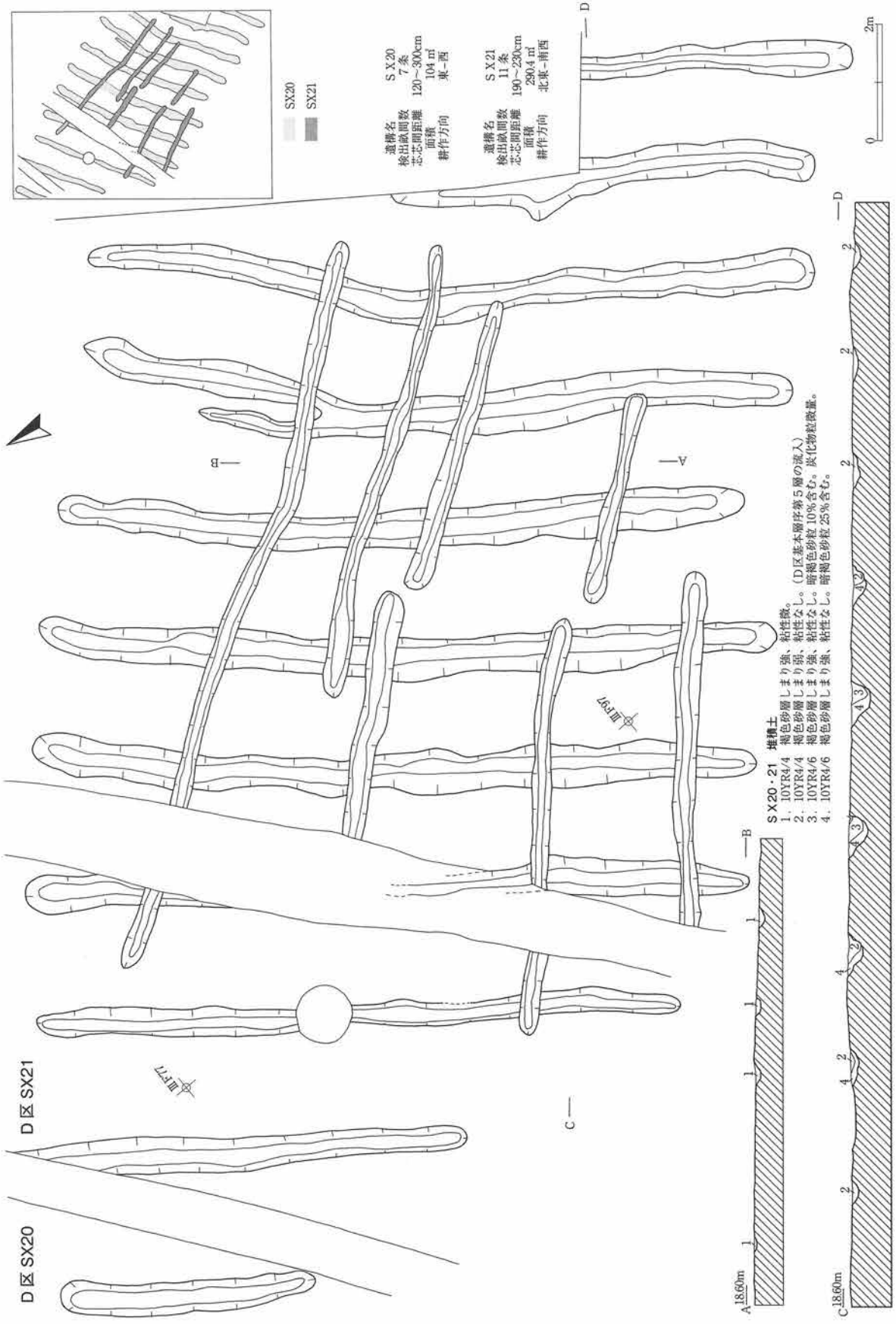
〔形態〕D区SI１と同一面で検出し、洪水砂層内に南西－北東方向12.8m、北西－南東方向22.2mのほぼ長方形の範囲を確認した。C区SD101と農業用水路によって一部削平を受けているが、残存状況は良好であった。確認面から畝高12～34cmで畝間幅は60～80cmとやや広い。畝間の断面は半円形、または蒲鉾形である。重複関係をみるとD区SX20より古く位置づけられる。

〔層位〕第１層はD区SX20埋土である。２～４層は畝間土であり、土壌の流入が見られる。

〔出土遺物〕なし

〔性格〕古代の畠である。

〔年代〕隣接する８世紀後半の竪穴住居跡であるD区SI１との関連性が指摘できるものの明確な決め手はない。検出面および遺構の重複関係から８世紀後半～９世紀初頭と推測される。　（米田）



第82図　D区SX20、D区SX21

Ⅸ　E区の遺構

1　E区概観

平成15年度調査の大グリッドⅠA区、ⅠB区をE区と称している。調査区全体の北西部分に相当する。E区は調査前には宅地、畑、県道として使用されていた。調査の担当は羽柴、星、立花である。ここではE区の遺構について記述をおこなう。E区検出の遺構は竪穴住居跡(SI) 4棟、掘立柱建物(SB) 6棟、窪み状遺構(SX) 1基、焼土1基、土坑(SK) 31基、である。

E区の地形は中央部分の標高が高く、北側(山手)から南側(北上川)に向かうにつれて標高を減ずる。北側の山裾は特に標高が下がり、東側に向かう流路が形成されている。東西方向では、西側に向かうにつれて、標高を徐々に増し、調査区西端で急激に高度が下がる。

E区の基本土層は第3図のように認識した。2層は十和田a降下火山灰を含んでおり、2層上面で検出される遺構の上限年代を示す。3層上面では竪穴住居等を検出できたが出土土師器の年代観から8世紀後半～9世紀初頭頃の面と推測される。3層上面から掘り込まれた竪穴住居(E区SI3)の床面～床下から後北土器の破片が出土し、その面に相当する4～5層付近は、後北土器の年代(3～4世紀頃)と推測される。基本土層の6層は縄文時代末期の土器を含んでおり、それより下の層は縄文時代の包含層となる。　(羽柴)

2　竪穴住居(SI)

E区SI1竪穴住居　(第84図、写真図版88・89)

〔位置〕ⅠA37・38・47・48に位置する。

〔検出面〕2層上面(第1検出面)。

〔重複〕現代の攪乱、E区SB1の柱穴P9・P10と重複するが本竪穴が古い。

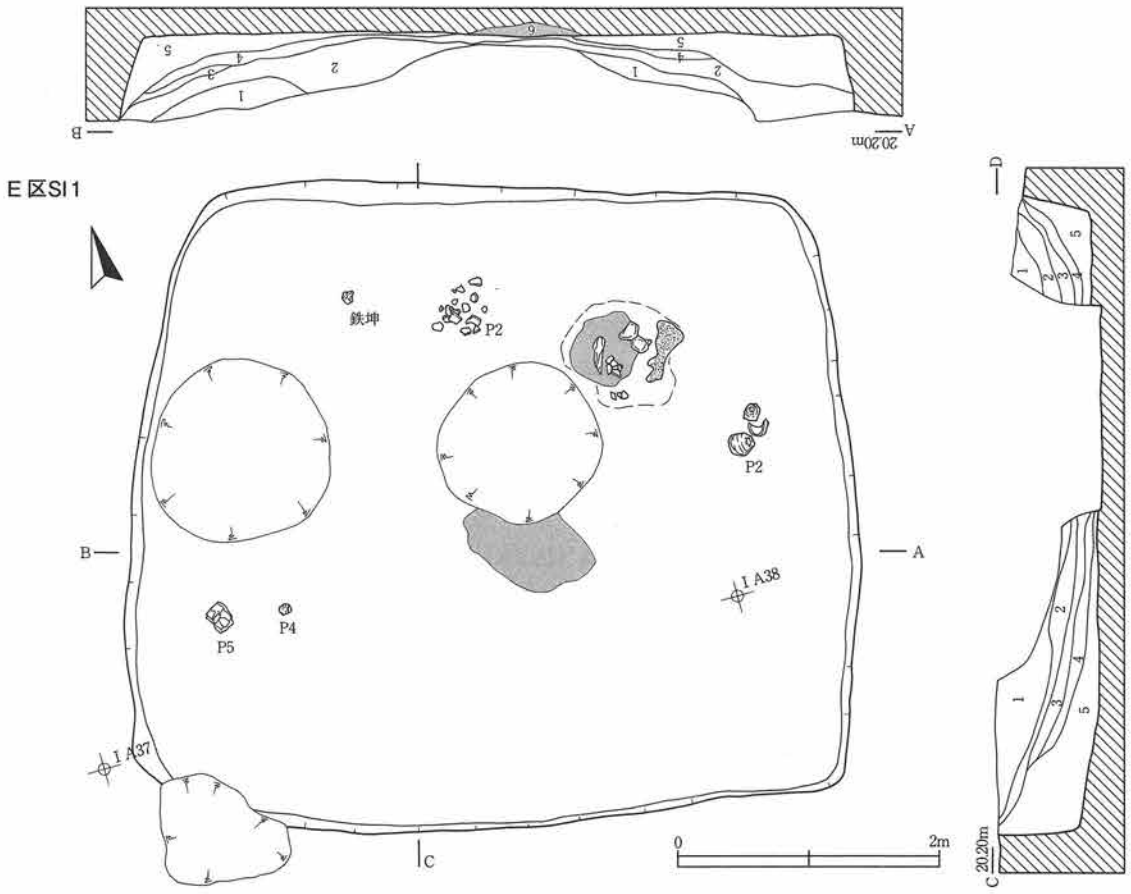
〔形態〕東西約530cm、南北約480cmの方形プランである。床面積は約25.44㎡である。底面は判別し難かったが、概ね平坦と判断された。貼床は施されていないと判断した。確認面から床面までの深さは約76cm、床面の標高は約19.42mである。壁はほぼ垂直に立つ。柱穴、壁溝は検出できなかった。また床面ほぼ中央に火焼面(焼土2)と、中央から北東寄りにも火焼面(焼土1)がある。

〔カマド〕壁面に取り付く煙道のあるカマドは構築されていない。上記のように床面に焼土1、焼土2の2つの火焼面が存在する。いずれも現地性焼土で、床面で火を焚いたものである。焼土1は礫、粘土、焼土で被覆されており、煙道を持たないカマドの可能性がある。覆土は7層に分けられる。焼土2は礫、粘土、焼土の散布はなく、熱変化した火焼面のみである。

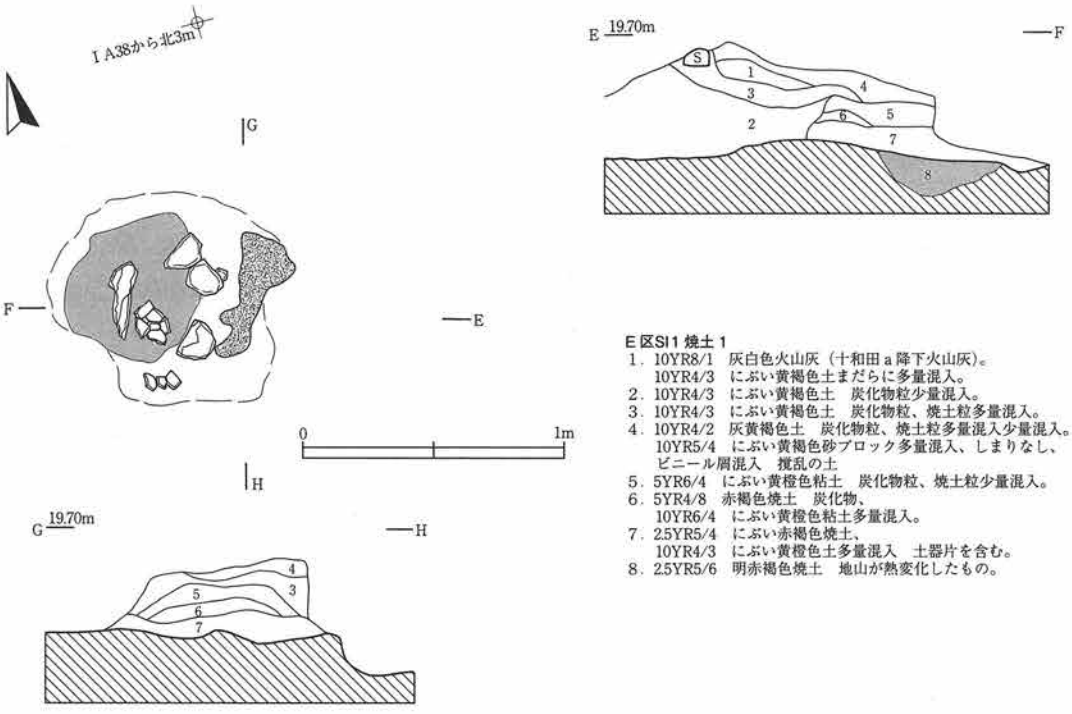
〔埋土〕埋土は5層に分けられる。堆積土の形状から自然堆積と判断される。最下層の5層の土は地山と非常に類似しており、壁、床を検出するのが非常に困難であった。4層はほぼ純粋な十和田a降下火山灰層である。住居廃絶後に5層がレンズ状に堆積し、その窪みに降下した十和田a火山灰が周辺から流れ込んだと想像される。3層は十和田a降下火山灰が滲んだように混入する。4層の堆積後に水が溜まり、泥状の十和田a火山灰層と、堆積したにぶい黄褐色土が混ざりあって生成された層と推測される。

〔出土遺物〕焼土1の覆土から土師器坏(97・98)、土師器長胴甕(99・101・102・104・105・106)、

第83図　E区遺構配置図



E区SI1
1．10YR4/4　褐色土　10YR4/1　褐灰色土まだらに多量混入。
　炭化物粒少量混入。
2．10YR3/1　黒褐色土　10YR4/4　褐色土まだらに多量混入。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR8/1　灰白。
4．10YR8/1　灰白色火山灰(十和田a降下火山灰)。
　10YR4/3　にぶい黄褐色土まだらに多量混入。
5．2.5YR5/6　明赤褐色焼土(焼土２)　地山の熱変化したもの。



E区SI1 焼土１
1．10YR8/1　灰白色火山灰（十和田ａ降下火山灰)。
　10YR4/3　にぶい黄褐色土まだらに多量混入。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　炭化物粒、焼土粒多量混入。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物粒、焼土粒多量混入少量混入。
　10YR5/4　にぶい黄褐色砂ブロック多量混入、しまりなし、
　ビニール屑混入　攪乱の土
5．5YR6/4　にぶい黄橙色粘土　炭化物粒、焼土粒少量混入。
6．5YR4/8　赤褐色焼土　炭化物、
　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土多量混入。
7．2.5YR5/4　にぶい赤褐色焼土、
　10YR4/3　にぶい黄橙色土多量混入　土器片を含む。
8．2.5YR5/6　明赤褐色焼土　地山が熱変化したもの。

第84図　E区SI1

須恵器大甕（110）が出土した。97の坏は内外面ロクロ調整であるが酸化炎焼成がなされている。98は回転糸切り後、底部が変形し丸底になっている。99･101は小型の長胴甕である。どちらも内面に炭化物が付着している。102はロクロ不使用の長胴甕、104・105・106はロクロ使用の長胴甕である。106の底部は砂粒が付着する「砂底」である。105は体部と底部が接合しないが同一個体と判断した。110の須恵器大甕は体部破片である。外面に平行タタキ、内面に青海波の当て具痕がある。また、床面東壁寄りから須恵器長頸壺（109）が出土した。口縁部を欠くがそれ以外はほぼ完存品である。大きく３つに割れて出土した。高台部は貼り付けたものである。高台内には砂粒がドーナツ状に付着している。埋土２層中からは土師長胴甕（100）が潰れた状態で出土した。接合したところ完存品となった。また須恵器壺（108）も２層中からの出土である。３層からは長胴甕長胴甕（103･107）は床面近くの５層中出土である。107の外面には砂粒混じりの粘土を塗布している。また図示していないが、埋土中から鍛冶滓が出土している。

〔性格〕古代の竪穴住居である。

〔年代〕十和田a火山灰の堆積層位から、十和田ａ火山灰降下直前に廃絶したと判断される。十和田ａ火山灰降下を915年とすると、廃絶の実年代は10世紀初頭と推測される。（羽柴）

E区SI２竪穴住居（第85図、写真図版90・91）

〔位置〕０A93・０A03に位置する。

〔検出面〕３層上面（第２検出面）。

〔重複〕なし

〔形態〕土層把握の目的のトレンチにより、東壁を破壊してしまった。南北長は約272cmを数える。平面形は隅丸方形と推測される。検出した分の床面積は約2.58㎡である。プランを方形と仮定すると床面積は約3.84㎡となる。床面は平坦で、貼床は施されていないと判断した。確認面から床面までの深さは64cm、床面の標高は約18.17mである。壁は中場で角度が変わり斜めに立ち上がる。カマドは北壁にある。柱穴、壁溝は検出できなかった。

〔カマド〕北壁にカマドがある。住居のプランを方形と仮定すると、カマドは北壁中央より東寄りになる。土層観察トレンチにより、カマド本体の東半分と煙道を破壊してしまった。検出できたのは火焼面のおよそ1/3と西側のソデだけである。ソデは芯材に偏平な粘板岩を床面に埋め込んで用い、褐色の土を塗って構築している。火焼面は深さ約６cmまで熱変化している。カマドの覆土は２層に分けられる。

〔埋土〕埋土は４層に分けられる。形状から自然堆積と判断される。２層と３層は酸化鉄分の混入がみられ、溜まった水の沈殿により生成された層と推測される。１層はほぼ純粋な砂層である。４層は地山と類似し、床面、壁面との区別が非常に難しかった。

〔出土遺物〕４層中に礫が含まれていただけで、人為的な遺物の出土は全くなかった。

〔性格〕古代の竪穴住居である。

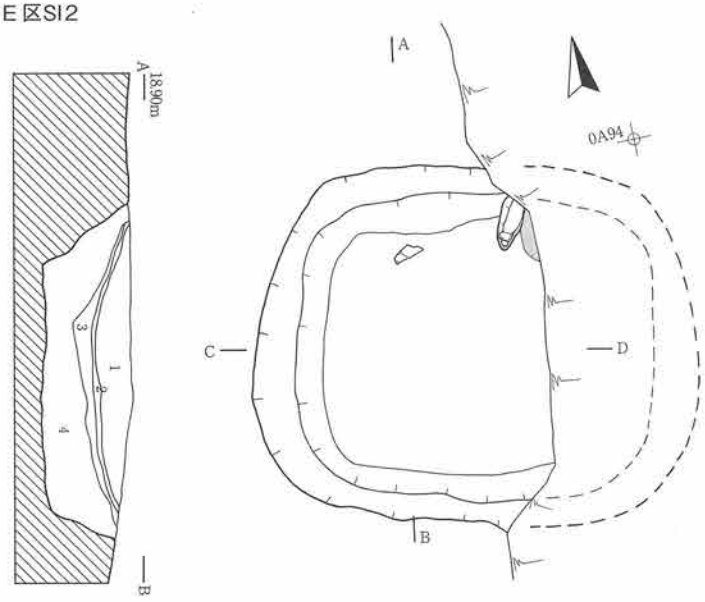
〔年代〕遺物が存在しないので確定は困難であるが、検出面から８世紀後半～９世紀初頭の竪穴住居と推測される。（羽柴）

E区SI３竪穴住居（第86図、写真図版92・93）

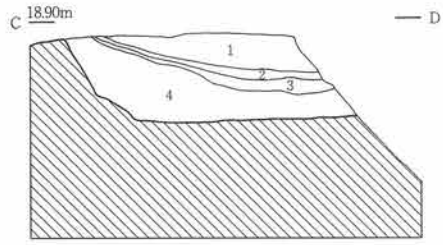
〔位置〕ⅠA32・33・42・43に位置する。

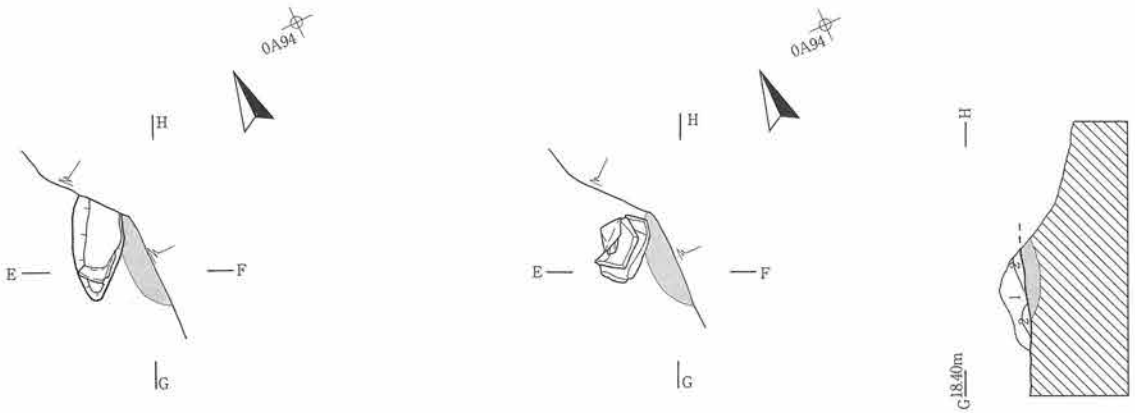
〔検出面〕４層掘り下げ中に存在を把握したが、本来、３層上面で検出できたと推測される。第２検

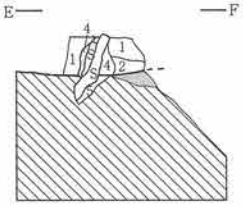
E区SI2



E区 SI2
1．10YR5/8　黄褐色砂
2．10YR6/2　灰黄褐色土　酸化鉄分少量混入、粘性あり。水成堆積層か。
3．10YR5/2　灰黄褐色土　酸化鉄分膜状に沈殿、水成堆積層。
4．10YR5/3　にぶい黄褐色　土炭化物粒、礫少量混入、粘性あり。







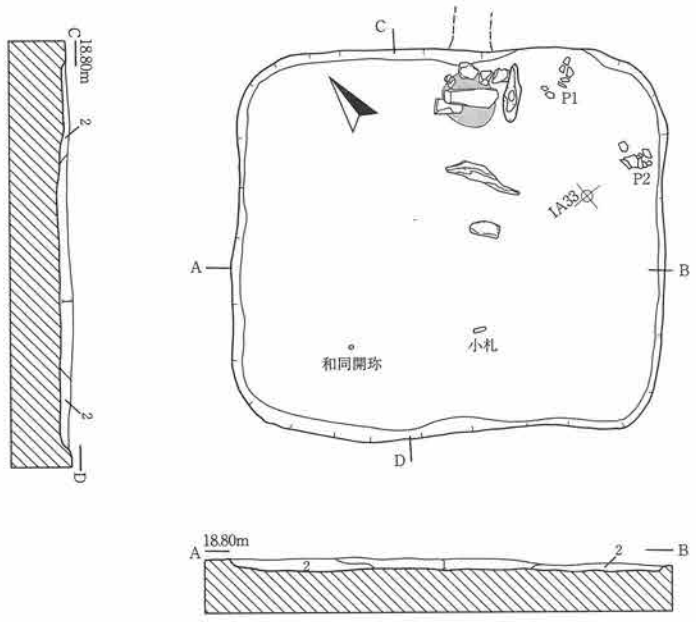
E区 SI2カマド
1．10YR5/3　にぶい黄褐色土　炭化物粒、焼土粒微量混入。
2．5YR3/2　暗赤褐色土　炭化物粒、焼土粒多量混入。
3．2.5YR3/4　暗赤褐色焼土　火焼面、床面が熱変化したもの。
4．10YR4/6　褐色土（5YR3/2）暗赤褐色土、まだら多量混入。
　カマドのソデを構成する土。
5．10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。ソデ石据付の掘方。

第85図　E区SI2

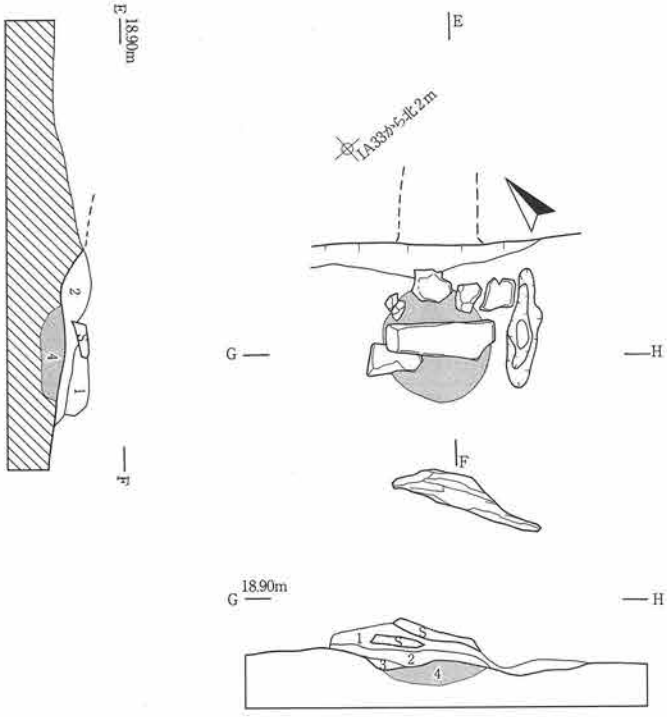
出面に相当する遺構である。
〔重複〕なし
〔形態〕南北長は約302cm、東西長は342cmを数える。平面形は隅丸方形である。床面積は約10.33㎡である。床面は概ね平坦で、貼床は施されていないと判断した。確認面から床面までの深さは9cm、床面の標高は約18.65mである。壁は斜めに立ち上がる。カマドは北壁中央にある。柱穴、壁溝は検出できなかった。
〔カマド〕北壁中央にカマドがある。煙道部は検出時の掘り過ぎで失われてしまった。ソデは両側ともに残存していないが、東側にはソデの芯材を埋めた掘り込みがみられる。火焼面の上面とカマドの全面約60cmの床面には偏平な粘板岩が散布し、カマド構築材が散乱したものと推測される。火焼面は直径約40cmの円形で、深さ約10cmまで熱変化している。カマドの覆土は3層に分けられる。この覆土中からは獣骨片が出土している。獣骨の種、部位は細片のため不明である。
〔埋土〕埋土は2層に分けられる。2層は地山と類似し、床面、壁面との区別が非常に難しかった。
〔出土遺物〕カマドの覆土からロクロ不使用の土師器坏（111）が出土した。全体に二次被熱しており、内面は黒色処理になっていない。床面からは土師器長胴甕（113･114）が出土した。類似した器形、調整であるが同一個体ではない。114はP1・P2の2ヶ所に分かれて出土した。また、床面南東部分から須恵器坏の口縁部破片（112）が出土した。ロクロ調整のものである。他に床面から鉄製品の挂甲小札（5017）、床面からやや浮いた高さから和同開珎（5048）が出土した。また上述のようにカマド覆土から獣骨片が出土しているが、細片のため種、部位は不明である。
〔性格〕古代の竪穴建物である。
〔年代〕出土遺物の年代観と検出面から8世紀後半の竪穴住居と推測される。（羽柴）

E区SI 4 竪穴住居（第87図、写真図版94～96）
〔位置〕ⅠA10・11・20・21に位置する。
〔検出面〕もともと土取りされていた調査区西側に位置し、5層上面で存在を把握されたが、周囲の竪穴住居の検出面から推測すると、本来、3層上面から掘り込まれていたと推測される。第2検出面の遺構である。
〔重複〕なし
〔形態〕南北長は約408cm、東西長は428cmを数える。平面形は隅丸方形である。床面積は約17.46㎡である。床面は概ね平坦で、カマドの周辺に他より硬い部分（図の点線の範囲）がある。この範囲の床面上に、4層とした薄い層があるが、貼床というよりは、住居使用の過程で踏み締められ土と判断すべきであろう。
確認面から床面までの深さは15cm、床面の標高は約18.45mである。壁はやや斜めに立ち上がる。カマドは北壁の中央よりやや東寄りにある。柱穴、壁溝は検出できなかった。
〔カマド〕北壁の中央よりやや東寄りにカマドがある。煙道部は土取りにより失われている。ソデは両側ともに偏平な粘板岩を芯材にして床面に埋め込んでいる。またカマドの天井に渡していた石が外され、火焼面の上に縦に横たわっている。住居廃絶の際に意図的にカマドを壊した可能性がある。また火焼面内の煙道寄りに2つの石が直立している。支脚の可能性と天井石を支える支柱の双方の可能性が考えられる。火焼面は直径約44cmの円形のプランで、深さ約8cmまで熱変化が及んでいる。カマドの覆土は3層に分けられる。この覆土中からは土師器坏（115）、土師器長胴甕（116･117）が出土している。また覆土の3層中から獣骨、獣歯片がシャーレ1個分出土と、鉄鏃（5032）が出土した。

E区SI3



E区SI3
1.10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入
2.10YR4/4　褐色土　炭化物粒少量混入



E区SI3カマド
1.10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。
2.5YR3/2　暗赤褐色土　炭化物粒、焼土粒多量混入　獣骨片を含む。
3.10Y4/4　褐色土　炭化物粒少量混入　ソデ石を外した窪みに堆積した土か。
4.2.5YR6/4　にぶい橙色焼土　火焼面　床面が熱変化したもの。

第86図　E区SI3

〔埋土〕埋土は3層に分けられる。堆積の形状から自然堆積と推測される。2・3層は地山と類似し、床面、壁面との区別が非常に難しかった。

〔出土遺物〕カマドの覆土からロクロ不使用の土師器坏（115）が出土した。全体に二次被熱しており、内面は黒色処理になっていない。同じくカマド覆土から土師器長胴甕（116･117）が出土している。他に床面からは土師器、須恵器の出土はなかった。また多数の鉄製品が出土している。床面から蕨手刀（5001）、責め金具（5002）、長頸三角形鏃（5003）、長頸鏃（5004・5012）、不明鉄製品（5031）が出土し、埋土中から鎌（5034）、カマド覆土3層から鉄鏃片（5032）が出土している。長頸鏃（5004・5012）は取り上げ時には一個体として扱ったが、クリーニングの結果2個体と判断された。また床面の6カ所とカマド覆土3層から獣骨、歯片が出土している。

骨、歯の同定結果は以下の表にまとめた。

出土位置	種	部位	その他
床面骨1	イノシシ	左上顎第2後臼歯	LM 2
床面骨1	イノシシ	左下顎第3切歯	RI 3
床面骨1	イノシシ	右下顎第3前臼歯	RP 3
床面骨1	イノシシ	左下顎第2臼歯	RP 2
床面骨1	イノシシ	左下顎第1切歯	LI 1
床面骨1	イノシシ	左下顎第2切歯	LI 2
床面骨1	イノシシ	右下顎第2切歯	RI 2
床面骨1	イノシシ	右下顎第1切歯	RI 1
床面骨2	イノシシ	歯片	
床面骨3	不明	不明	
床面骨4	不明	不明	
床面骨5	ニホンジカ	鹿角（落角）	角座部残存
床面骨6	不明	不明	
カマド3層	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位端
カマド3層	イノシシ	第2・第5末節骨	
カマド3層	イノシシ	第2・第5中足骨	近位端
カマド3層	イノシシ	第3手根骨（R）	
カマド3層	イノシシ	第3・第4中節骨	
カマド3層	イノシシ	第2・第5中足骨	遠位骨端外れている（若い個体）
カマド3層	イノシシ	第3手根骨（R）	
カマド3層	イノシシ	第3・第4中足骨	遠位端外れている（若い個体）

〔性格〕古代の竪穴住居である。

〔年代〕出土遺物の年代観と検出面から8世紀後半の竪穴住居と推測される。（羽柴）

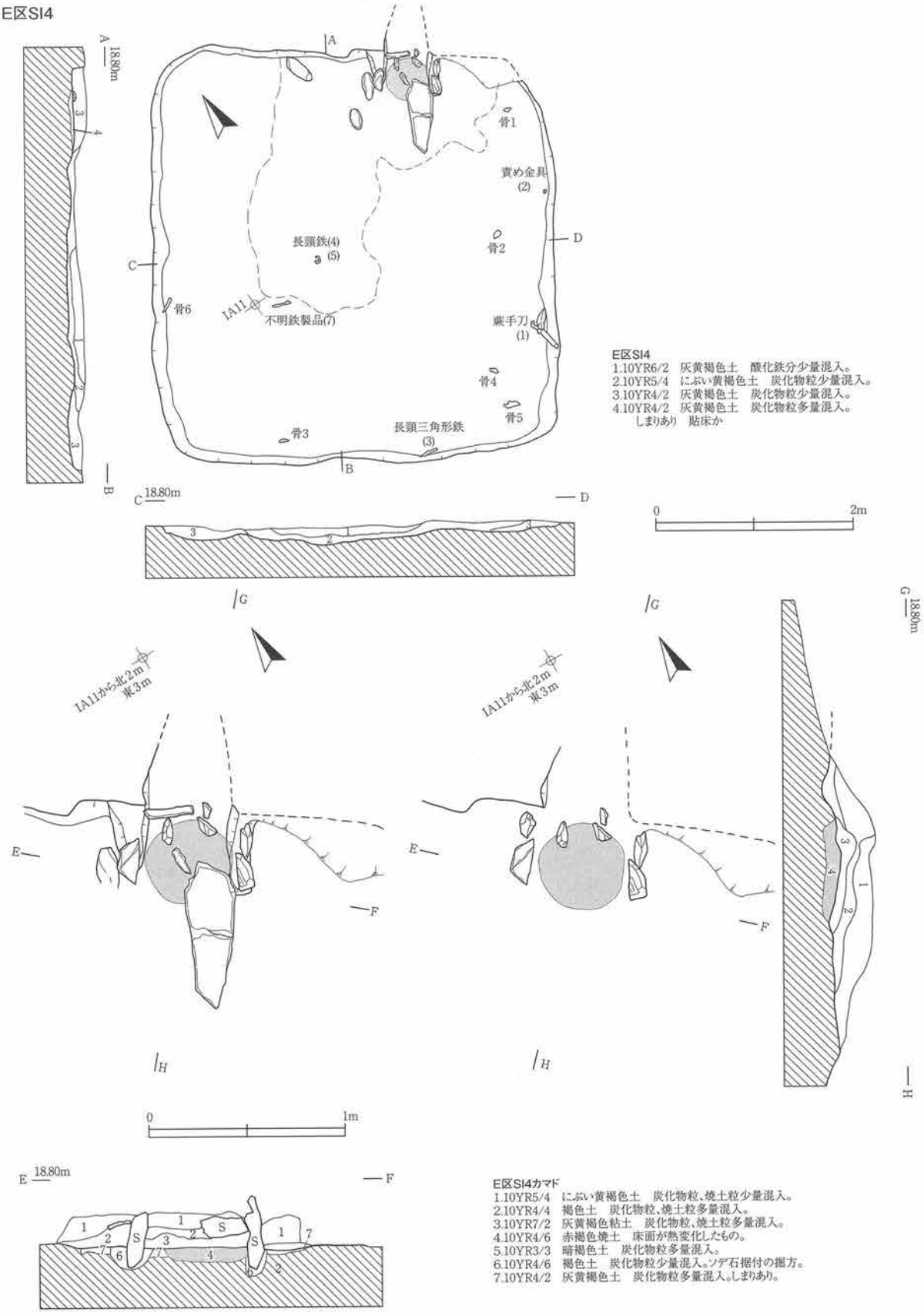
E区SX 1 窪み状遺構　（第88図、写真図版97）

〔位置〕ⅠA35・45・55に位置する。

〔検出面〕3層上面（第2検出面）。

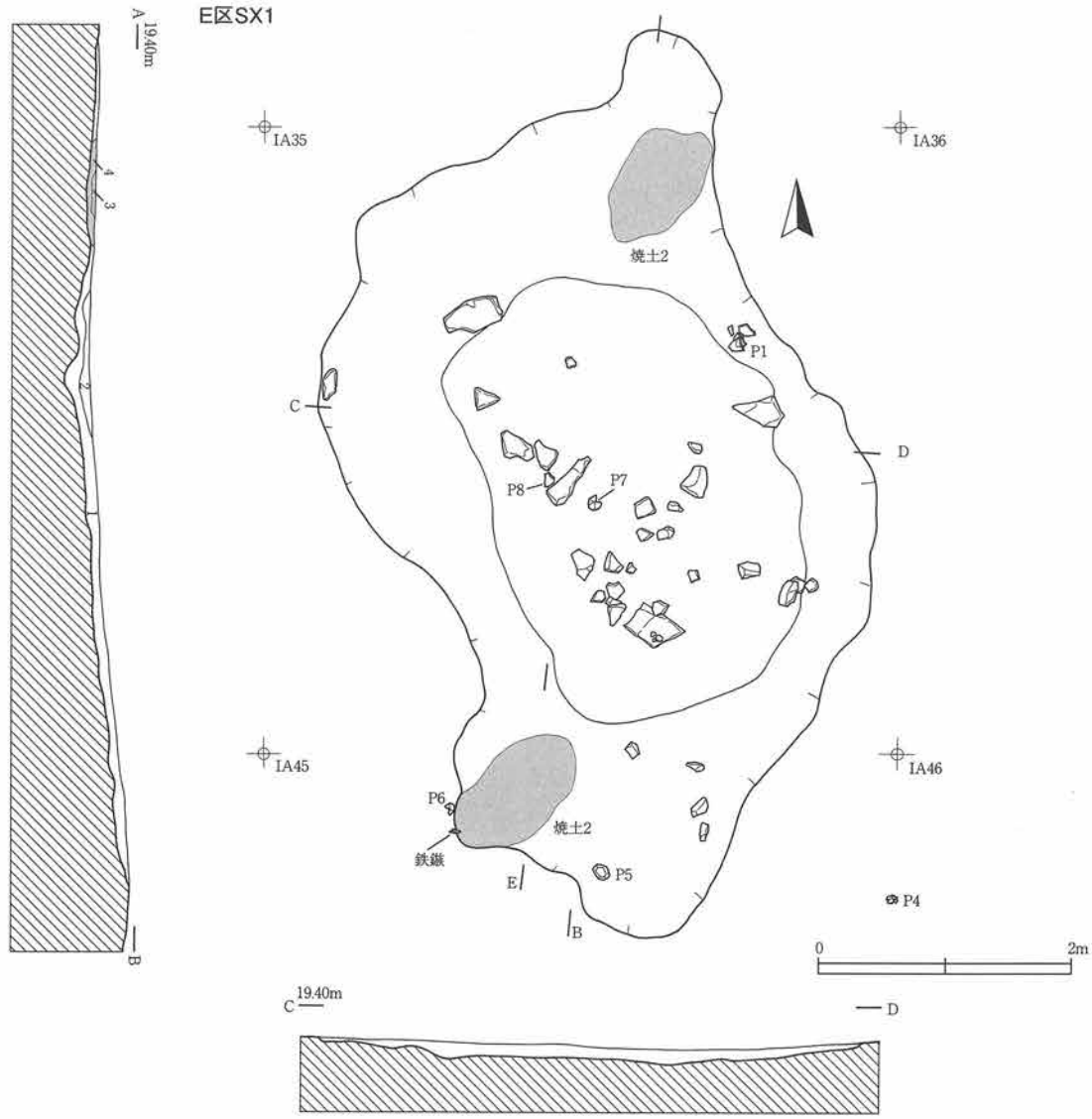
〔重複〕なし

〔形態〕不整な形状の窪みである。南北の最大長は712cm、東西の最大長は412cmである。底面は皿状

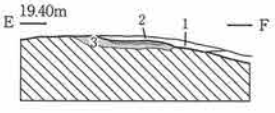

E区SI4
18.80m
A
B
C
D
骨1
責め金具
(2)
長頭鉄(4)
(5)
骨2
骨6
IA11
不明鉄製品(7)
蕨手刀
(1)
骨4
骨5
骨3
長頭三角形鉄
(3)
E区SI4
1.10YR6/2　灰黄褐色土　酸化鉄分少量混入。
2.10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。
3.10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物粒少量混入。
4.10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物粒多量混入。
しまりあり　貼床か
0
2m
G
H
E
F
IA11から北2m
東3m
0
1m
E区SI4カマド
1.10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒、焼土粒少量混入。
2.10YR4/4　褐色土　炭化物粒、焼土粒多量混入。
3.10YR7/2　灰黄褐色粘土　炭化物粒、焼土粒多量混入。
4.10YR4/6　赤褐色焼土　床面が熱変化したもの。
5.10YR3/3　暗褐色土　炭化物粒多量混入。
6.10YR4/6　褐色土　炭化物粒少量混入。ソデ石据付の掘方。
7.10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物粒多量混入。しまりあり。

第87図　E区SI4

で平坦ではない。確認面から最深部までの深さは22cm、底面最深部の標高は18.82mである。プラン内の南部（焼土１）と北部（焼土２）に現地性の焼土が存在する。焼土１は窪みの底面が焼けたもので、焼土２は窪みを埋めた埋土の上から焼成されている。底面から埋土１層には礫、土師器、須恵器片が散布している。



E区SX1
1.2.5YR7/2　灰黄褐色土　酸化鉄分多量混入。炭化物粒少量混入。
　礫、土器片を含む。水成堆積層か。
2.10YR5/3　にぶい黄褐色砂
3.5YR7/4　にぶい橙色焼土　炭化物粒多量混入。現地性焼土。（焼土2）
4.5YR2/4　極暗赤褐色焼土　現地性焼土。1層が熱変化したもの。（焼土2）



E区SX1焼土1
1.10YR6/6　明黄褐色土　炭化物粒多量混入鉄製品、
　土器片を含む。
2.5YR6/8　橙色焼土　現地性焼土。
3.5YR2/4　極暗赤褐色焼土　現地性焼土。地山が熱
　変化したもの。

第88図　E区SX１

〔埋土〕２層に分けられる。１層には酸化鉄分が多量に混入し、水成堆積層と推測される。２層はほぼ純粋な砂層である。

〔出土遺物〕上述のように底面～埋土１層から礫、土師器、須恵器が出土している。図示したものは土師器坏（118・119）、須恵器坏（120）、土師器長胴甕（121・122）である。土師器坏（118）はSX１のプラン外からの出土であるが、ここではSX１の出土品として扱っている。底辺部に回転ヘラケズリの再調整が施される。また焼土１を被覆する土（１層）からは鉄製の鏃（5007）が出土している。出土した礫の多くは遺跡周辺に多く見られる板状の粘版岩である。

〔性格〕遺構検出時は竪穴住居のプランと考え、形状の把握に努めたが、住居のプランには成り得なかった。また掘り下げ時も竪穴住居の可能性を考え精査を進めたが、竪穴住居とする根拠を見いだせず、結局「窪み状の遺構」と判断した。用途は自然の窪みに礫や土器片などの不要物を廃棄した「廃棄坑」と推測される。２つの焼土は有機質の不要物を焼成した痕跡であろうか。

〔年代〕検出面と出土土器の年代観から９世紀初頭～前半の年代が推測される。（羽柴）

E区焼土１（第89図、写真図版98）

〔位置〕ⅠB43・53に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

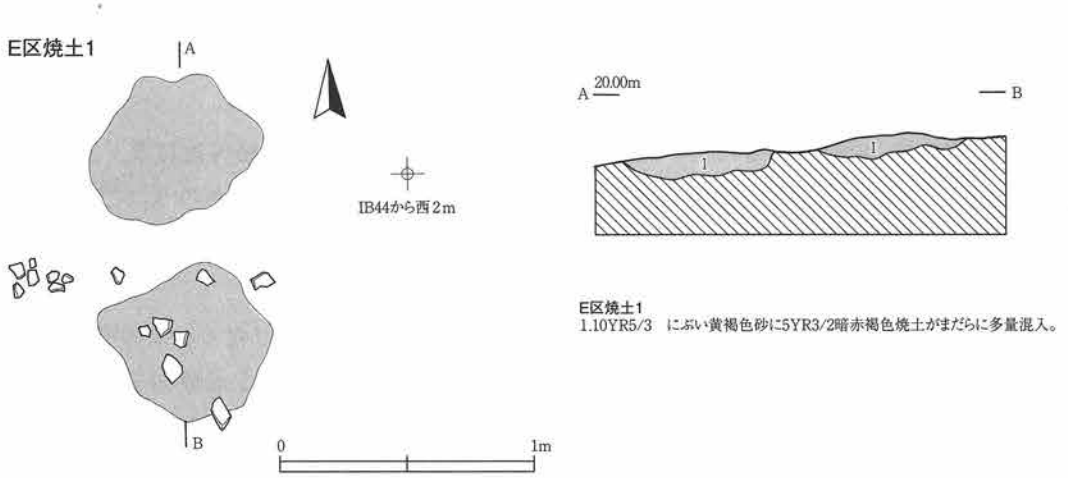
〔重複〕E区SB２とプランが重複するが直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。だがE区SB２は北宋銭の出土から中世以降、本遺構は土師器の出土から古代の遺構と推測される。よって本遺構がE区SB２より古いと推測される。

〔形態〕不整な円形の２つの火焼面からなる。どちらも現地性焼土である。南側の火焼面の内部と中央部に土師器片が散布する。熱変化は深さ８cmに及んでいる。火焼面上面の標高は19.83mである。

〔出土遺物〕上記の様に土師器の破片が散布していた。図示したのは土師器長胴甕（123･124）である。

〔性格〕現地性の焼土である。古代の竪穴建物の壁が失われ、残存したカマド火焼面、あるいは地焼炉部分と推測される。

〔年代〕検出面と土師器の年代観から10世紀初頭～前半と推測される。（羽柴）



第89図　E区焼土１

3　掘立柱建物（SB）

E区SB１掘立柱建物　（第90・91図、写真図版99～106）

〔位置〕ⅠA24・25・26・34・35・36・37・38・44・45・46・47・48・55・56・57・58に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区SI１、E区SK15と重複するが本建物が新しい。またE区SK12、E区SK14と重複するが本建物が古い。また住居のプラン内にE区SK10、E区SK11、E区SK16、E区SK17、E区SK18、E区SK19、E区SK20、E区SK21、E区SK29、E区SK30が所在するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。同時存在の可能性もあり得る。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは2243.5cm、梁間は1183cmである。梁間と桁行の総長の比は１：1.9である。面積は265.40㎡（80.4坪）である。使用した柱穴は52個である。SK１、SK２、SK３は調査時に「SK」の名称を付したが調査の結果、柱穴と判断された。名称はSKのままだが柱穴として数えている。また、P11・P42には「P」の略号を付しているが、調査の結果、柱穴ではないと判断した。柱穴総数52個にはこの２個を数えていない。

間取りの確定は難しいが、岩手県南部の礎石民家、また発掘調査で検出された掘立柱民家に多数見られる間取りを参考に図中に間取りの線を想定した。P24～P32の通りには、P10とP40、P40とP２の間に柱穴が存在しないので、南北の間仕切り線を引かなかった。想定した間取りを近世民家の間取りの名称を当てはめるならば、建物の半分を占める東側の空間は「ニワ」、真ん中の前の部屋が「ナカマ」、真ん中の後が「オカミ」、西側前の部屋が「ザシキ」、西側後が「ナンド」ということになる。この間仕切りについては確定しきれない要素が多く、あくまでも「想定」であることを記しておく。

また前面（南側列）の上屋柱では中央のP１～P６の列に対して、西側のP７、P８、そして東側のP16の柱穴が一直線上に通らない。背面（北側）でもSK３～P９の列に対して、東側のP65が一直線上に通らない。これがどのような理由によるものか、また間仕切りにどのように反映されるかは解決できていない。

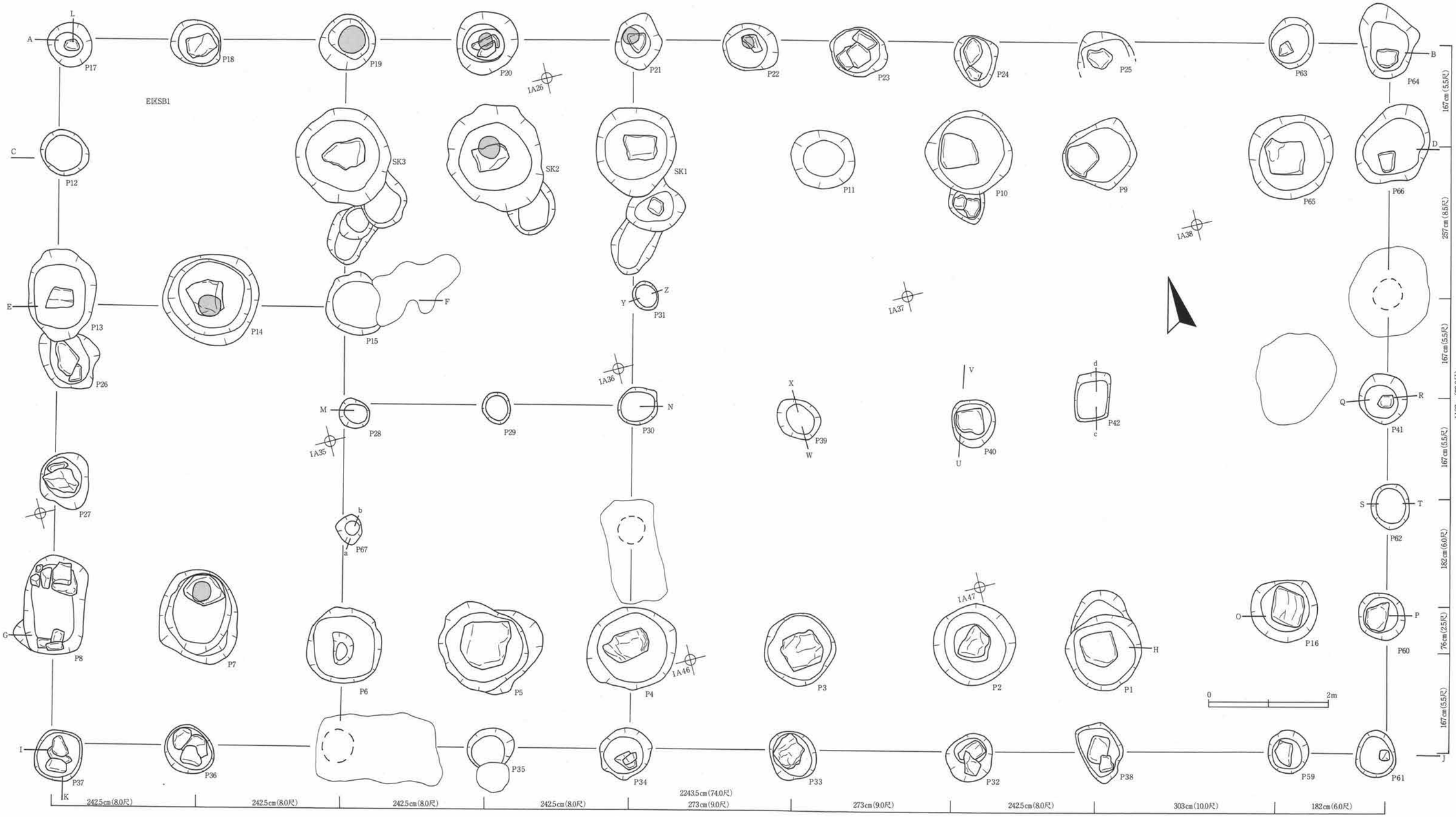
〔柱穴〕上屋柱と下屋柱で、柱穴掘方の大きさ、深さに著しい差がある。上屋柱の掘方径は約150cm、深さは約120cm程である。下屋柱は掘方径約80cm、深さは約80cm程である。間仕切りの柱穴と推測されるP28、P29、P30、P31、P67は径・深さともに非常に小さい（径約40cm、深さ約20cm）。

また、幾つかの柱穴で柱痕が確認され、柱の抜き取りは基本的に行われていないと推測される。柱痕の径は上屋柱で約32cm、下屋柱で約24cm程である。

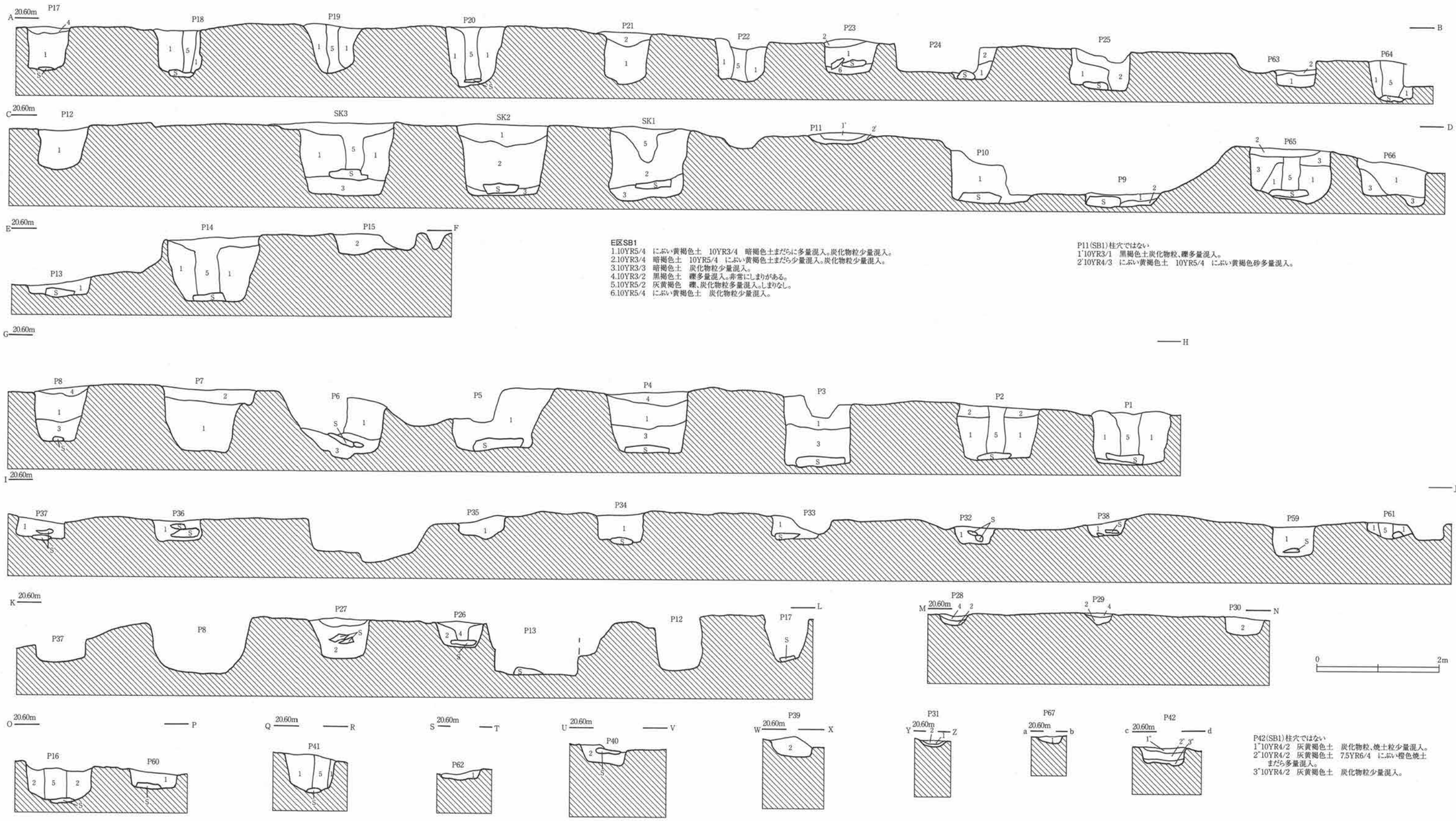
柱穴総数52個の内、40個の底面に石が礎盤として置かれている。石は遺跡付近に多く見られる偏平な粘板岩である。地盤が砂質で脆弱なため、しっかりした礎盤が必要なのであろう。この偏平な粘板岩は礎盤の他にも掘方の埋土中に含まれている例も多い。これは柱を埋めて固定する際の根固め石と推測される。

北側列の上屋柱SK１、SK２、SK３、P10には南側に浅い掘り込みが取り付く、この中でSK１、P10のものには礫が置かれている。調査時は別の柱穴との切り合いとも考え、土層断面を設定し観察したが、柱穴本体の埋土との際は全く見いだせず、柱穴本体と一体の同時存在と判断した。この礫の存在と、南側列の上屋柱穴に掘り込みが付随しない点から、単なる掘方の掘り込み時の作業のためのステップとも考え難いが、明確な用途は判断できない。

P11は調査時には本建物の上屋柱の並びに位置し、平面形状も他と類似することから「P」の名称を


EE-SB1
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P41
P42
P59
P60
P61
P62
P63
P64
P65
P66
P67
SK1
SK2
SK3
1A26
1A35
1A36
1A37
1A38
1A46
1A47
0
2m
167cm(5.5尺)
257cm(8.5尺)
167cm(5.5尺)
167cm(5.5尺)
1183cm(39.0尺)
182cm(6.0尺)
76cm(2.5尺)
167cm(5.5尺)
242.5cm(8.0尺)
242.5cm(8.0尺)
242.5cm(8.0尺)
242.5cm(8.0尺)
224.5cm(74.0尺)
273cm(9.0尺)
273cm(9.0尺)
242.5cm(8.0尺)
303cm(10.0尺)
182cm(6.0尺)

第90図　E区SB1①



E区SB1
1.10YR5/4　にぶい黄褐色土　10YR3/4　暗褐色土まだらに多量混入。炭化物粒少量混入。
2.10YR3/4　暗褐色土　10YR5/4　にぶい黄褐色土まだら少量混入。炭化物粒少量混入。
3.10YR3/3　暗褐色土　炭化物粒少量混入。
4.10YR3/2　黒褐色土　礫多量混入。非常にしまりがある。
5.10YR5/2　灰黄褐色　礫、炭化物粒多量混入。しまりなし。
6.10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。

P11(SB1)柱穴ではない
1'10YR3/1　黒褐色土炭化物粒、礫多量混入。
2'10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR5/4　にぶい黄褐色砂多量混入。

P42(SB1)柱穴ではない
1"10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物粒、焼土粒少量混入。
2"10YR4/2　灰黄褐色土　7.5YR6/4　にぶい橙色焼土まだら多量混入。
3"10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物粒少量混入。

第91図　E区SB1②

付した。しかし半裁した結果、深さも浅く、堆積の形状も柱穴とは異なることから、柱穴ではないと判断した。しかし、検出位置から本建物に付随する何らかの施設の痕跡の可能性が高い。可能性としては大甕を埋めて固定するための掘り込みなどが考えられる。またP42も調査の結果、柱穴ではないと判断した。この埋土には焼土、炭化物が含まれており、カマドや炉などに関連する施設の痕跡の可能性が考えられる。確証はないが本建物の施設と考え図示した。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN－15°－Eである。

〔柱間寸法〕桁行では8.0尺（242.5cm）を多用し、他に6.0尺（182cm）、9.0尺（273cm）10.0尺（303cm）と1.0尺で割り切れる数値を用いている。梁間では5.5尺（167cm）が多用され、他に2.5尺（76cm）、6.0尺（182cm）、8.5尺（257cm）と0.5尺で割り切れる数値を用いている。梁、桁ともに曲尺で割り切れる数値を用いていることから、本建物の建築には曲尺を用いている判断できる。

〔出土遺物〕SK１から美濃産陶器志野向付？（3219）、P４から肥前産？染付小碗（細片のため図化不能）、P10掘方北側から美濃産陶器丸皿（3051）と漳州窯系青花碗（2068）、P14埋土から美濃産志野反り皿（3072）、P16埋土から漳州窯系青花碗（2071）、P20埋土から肥前産？染付碗（4015）、P23掘方北側から美濃産志野反り皿（3069）、P33埋土から漳州窯系青花碗（2069）、P64埋土から美濃産志野反り皿（3073）、SK３埋土から瀬戸・美濃産白天目碗（3053）が出土している。またSK２埋土２層から永楽通寶（5062）、SK３掘方から永楽通寶（5063）と不明銅銭（5070）、P３埋土から不明銅銭（5065）、P６埋土からは寛永通寶（古寛永､5073）、P65礎盤中央上から不明銅銭（5069）が出土した。またSK１の底面近くに貝殻が含まれていた。これらの遺物は柱の抜き取りが行われていないと推測されることから、建物の建築時に入り込んだ遺物と思われる。またP７の柱痕に収まる状態で石臼片（上臼6014）が出土した。これは建物廃絶後、柱痕部が空洞となり、その部分に意図的に詰め込んだと推測される。

〔付属施設〕上述のように、P11・P42が建物内の何らかの施設の痕跡と推測される。

〔建物の性格〕近世民家の主屋である。

〔年代〕柱穴からの出土遺物の中で最も新しいものはP６出土の「古寛永通寶（5073）」である。古寛永の初鋳年代は西暦1636年であるので、本建物の建築年代はそれよりも後になる。岩手県南の掘立柱民家の変遷年代観（羽柴　1997「岩手県平泉町における近世掘立柱民家について」紀要ⅩⅦ（財）岩手埋文）に照らし合わせれば､17世紀後半の建築年代が想定される。ここでは大きく17世紀中～後半の建築としておきたい。（羽柴）

E区SB２掘立柱建物（第92図、写真図版107・108）

〔位置〕ⅠB42・43・52・53に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区焼土１とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。だが本建物は北宋銭の出土から中世以降、E区焼土１は土師器の出土から古代の遺構と推測される。よって本建物がE区焼土１より新しいと推測される。

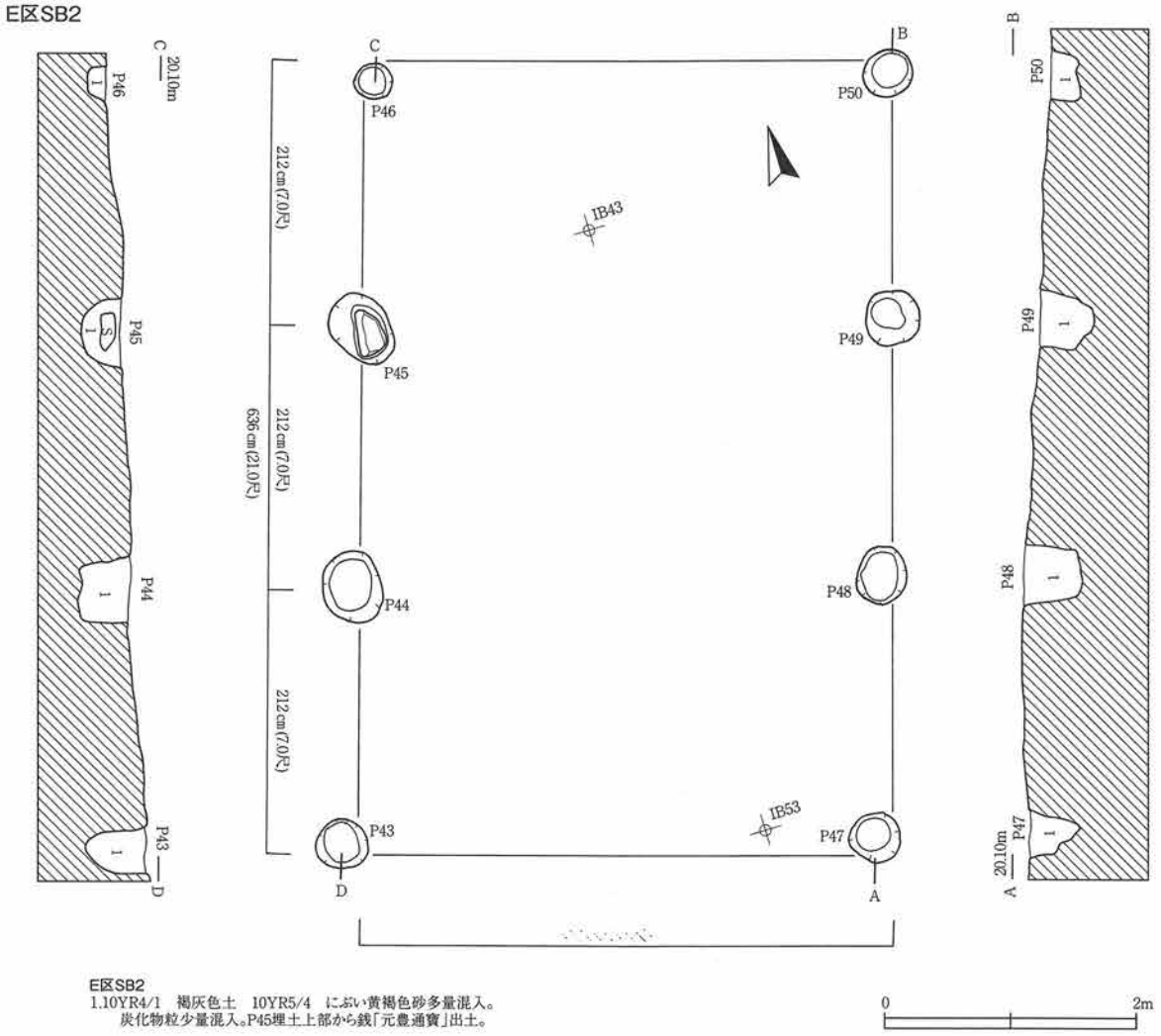
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは636cm、梁間は424cmである。面積は26.97㎡（8.2坪）である。使用した柱穴は８個である。梁間の中間に柱穴は存在しなかった。

〔柱穴〕いずれの柱穴からも柱痕は見いだせなかった。また、抜き取りの有無は判断できなかった。P45には偏平な粘板岩が置かれており礎盤と判断される。

〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－16°－Wである。

〔柱間寸法〕基準寸法は212cm（7.0尺）である。

〔出土遺物〕P45の埋土上部から元豊通寶（5052）が出土した。元豊通寶は北宋銭で初鋳年は西暦1078年である。字体は行書である。
〔付属施設〕特になし。
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕出土した元豊通寶の初鋳年から、西暦1078年以降の建物であることは確実である。それ以上の判断は難しいが、北宋銭が出土したことから、中世に属する可能性を指摘しておきたい。　（羽柴）

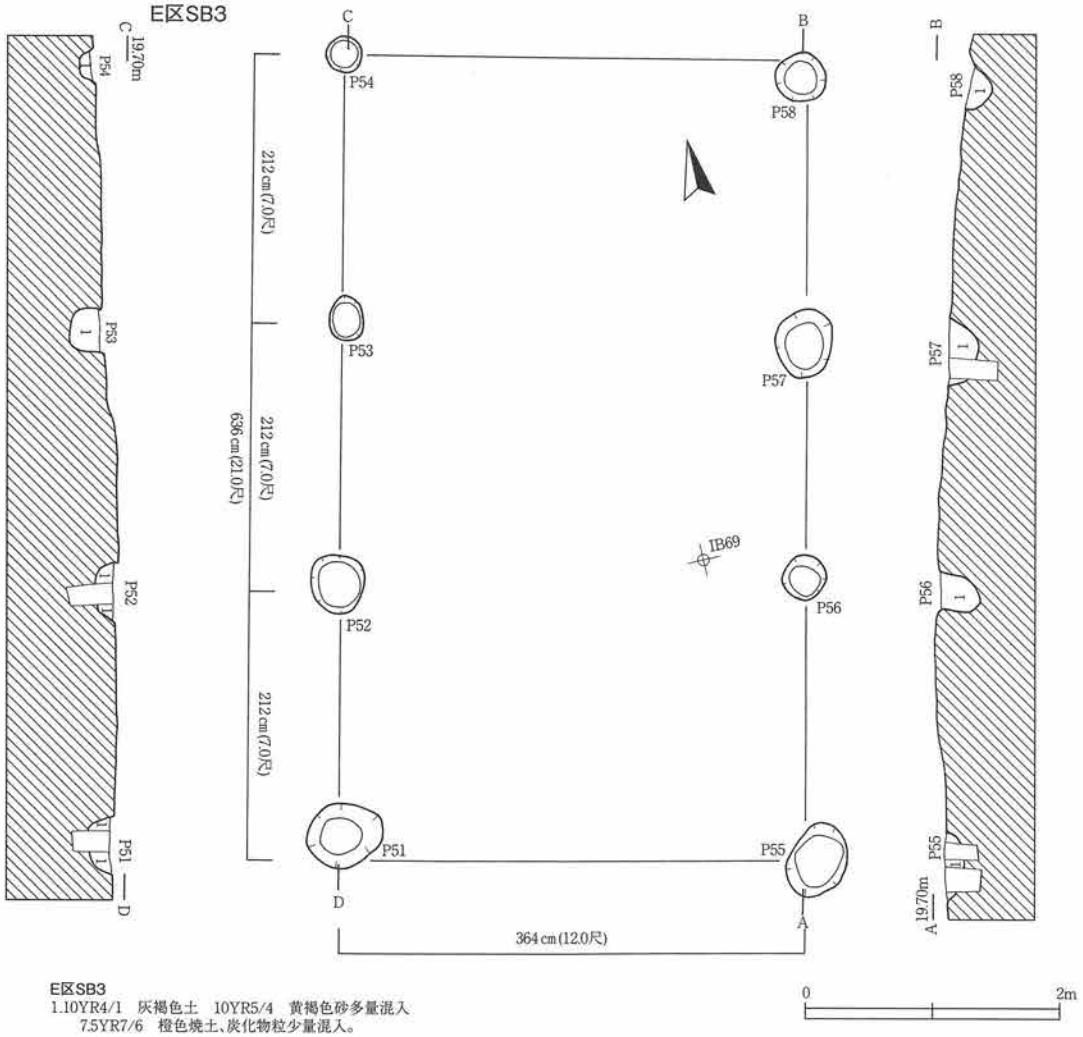


第92図　E区SB２

E区SB３掘立柱建物　（第93図、写真図版107・109）

〔位置〕ＩB68・69・78・79に位置する。

〔検出面〕 2層上面（第1検出面）。
〔重複〕長芋作付けのトレンチャーにより壊されている柱穴がある。他の遺構との重複はなし。
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは636cm、梁間は364cmである。面積は23.15㎡（7.0坪）である。使用した柱穴は8個である。梁間の中間に柱穴は存在しなかった。
〔柱穴〕いずれの柱穴からも柱痕は見いだせなかった。また、抜き取りの有無は判断できなかった。
〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－13°－Wである。
〔柱間寸法〕桁行きの基準寸法は212cm（7.0尺）である。梁間は182cm（6.0尺）と判断される。
〔出土遺物〕なし
〔付属施設〕特になし。
〔建物の性格〕不明である。
〔年代〕柱穴からの出土遺物がなく、また周辺からも特に遺物の出土はなく、年代決定が難しい。大きく、中世～近世の建物としておく。（羽柴）



第93図　E区SB3

E区SB４掘立柱建物　（第94図、写真図版110・111）

〔位置〕ⅠB30・31・40・41・50・51・60・61に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区SK７、SK８、SK23、SK24と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは1287cm、梁間は364cmである。面積は46.85㎡（14.2坪）である。使用した柱穴は10個である。梁間の中間に柱穴は存在しなかった。細長い形状であるが、間仕切りの柱穴は見いだせなかった。

〔柱穴〕ほとんどの柱穴から柱痕は見いだせなかった。また、抜き取りの有無は判断できなかった。

〔建物方位〕桁行きの軸方向はN－４°－Wである。

〔柱間寸法〕桁行きでは227cm（7.5尺）と303cm（10.0尺）を使用している。梁間は182cm（6.0尺）の２倍と判断される。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕特になし。

〔建物の性格〕位置と規模から近世民家E区SB１の付属屋の可能性も考えられるが、E区SB１とは軸方向が異なり、明確な判断はできない。

〔年代〕柱穴からの出土遺物がなく、また周辺からも特に遺物の出土はなく、年代決定が難しい。大きく、中世～近世の建物としておく。　（羽柴）

E区SB５掘立柱建物　（第95図、写真図版112～114）

〔位置〕ⅡB05・06・07・15・16・17に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区SB６と重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは954cm、梁間は485cmと推測される。面積は46.27㎡（14.0坪）である。使用した柱穴は６個である。梁間の中間に柱穴は存在しなかった。建物の南側は平成13年度の調査区に延びるが、平成13年度の調査では柱穴を検出できていない。すでにこの部分は深掘をおこなっており、柱穴の追認をすることができなかった。

〔柱穴〕いずれの柱穴からも柱痕は見いだせなかった。P88・89・90には粘板岩の礎盤が置かれている。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN－22°－Eである。

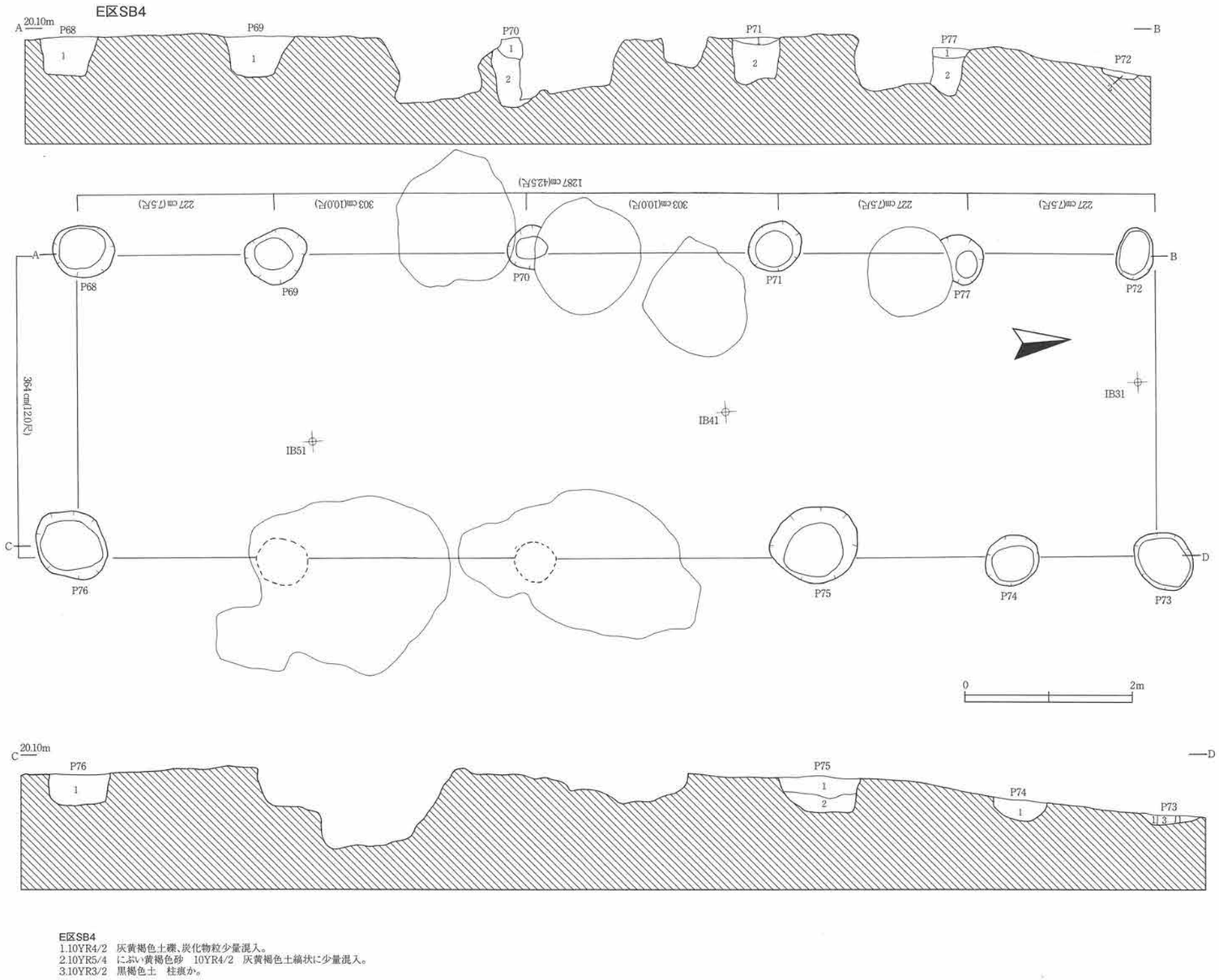
〔柱間寸法〕桁行きでは182cm（6.0尺）と242cm（8.0尺）と288cm（8.5尺）を使用している。梁間は242.5cm（8.0尺）の２倍と判断される。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕特になし。

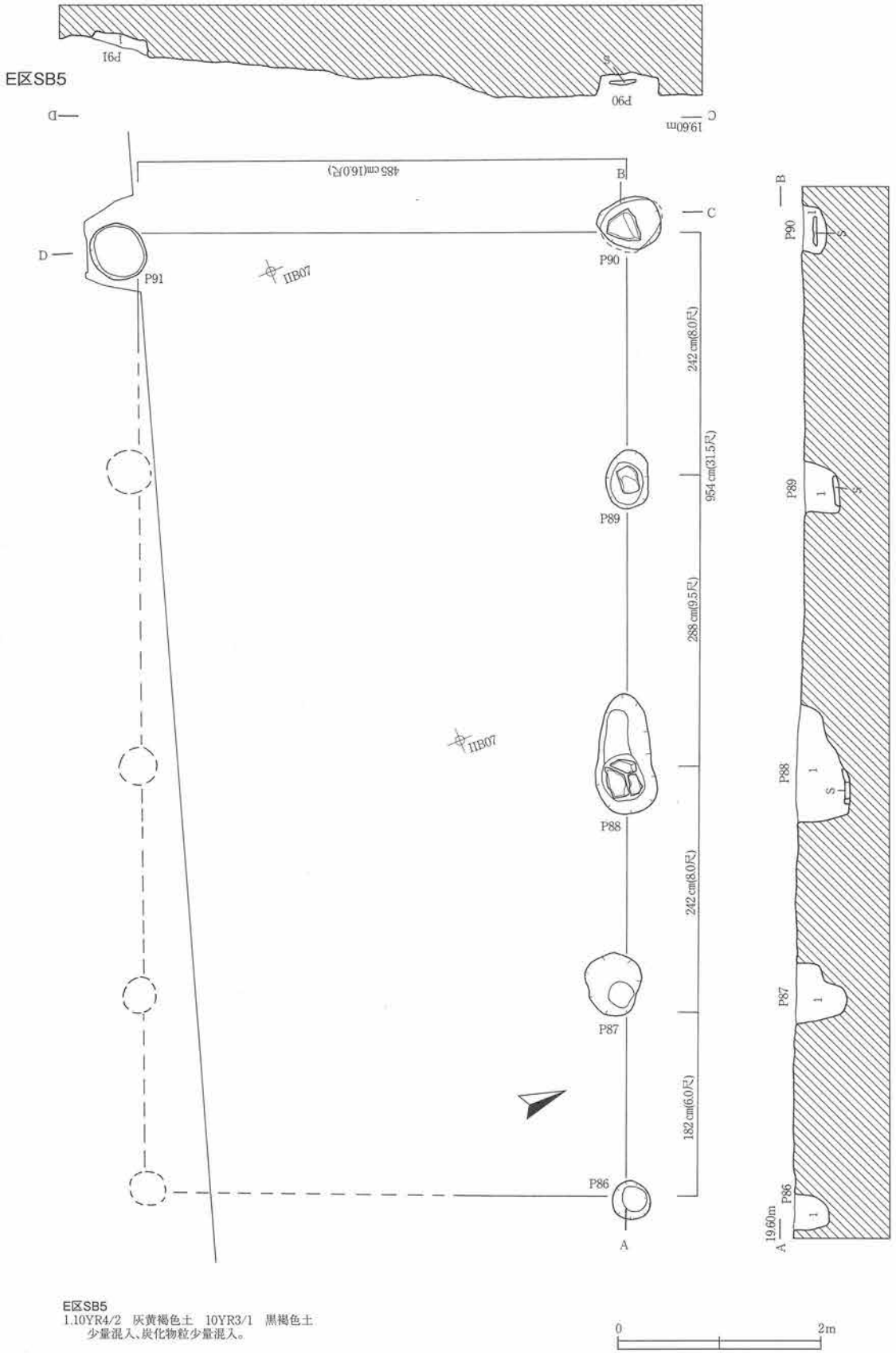
〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕本建物と重複するE区SB６の柱穴から初鋳1310年の至大通寶が出土しており、それよりも新しい本建物は1310年以降の建築となる。これ以上の詳細な年代は示し難いが、中世に属する可能性が高いと思われる。　（羽柴）



E区SB4
1.10YR4/2　灰黄褐色土礫、炭化物粒少量混入。
2.10YR5/4　にぶい黄褐色砂　10YR4/2　灰黄褐色土縞状に少量混入。
3.10YR3/2　黒褐色土　柱痕か。

第94図　E区SB4



E区SB5
1.10YR4/2　灰黄褐色土　10YR3/1　黒褐色土
　少量混入、炭化物粒少量混入。

第95図　E区SB５

E区SB６掘立柱建物　（第96図、写真図版112・114・115）

〔位置〕ⅡB06・07・16・17に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区SB５と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行きは848cmである。建物の南側は平成13年度の調査区に延びると推測されるが、平成13年度の調査では柱穴を検出できていない。すでにこの部分は深掘をおこなっており、柱穴の存在の追認をすることができなかった。よって梁間の長さ、面積は不明である。使用した柱穴は４個である。

〔柱穴〕いずれの柱穴からも柱痕は見いだせなかった。P94には粘板岩の礎盤が置かれている。

〔建物方位〕梁間の軸方向はN－11°－Eである。

〔柱間寸法〕桁行きでは212cm（7.0尺）を使用している。

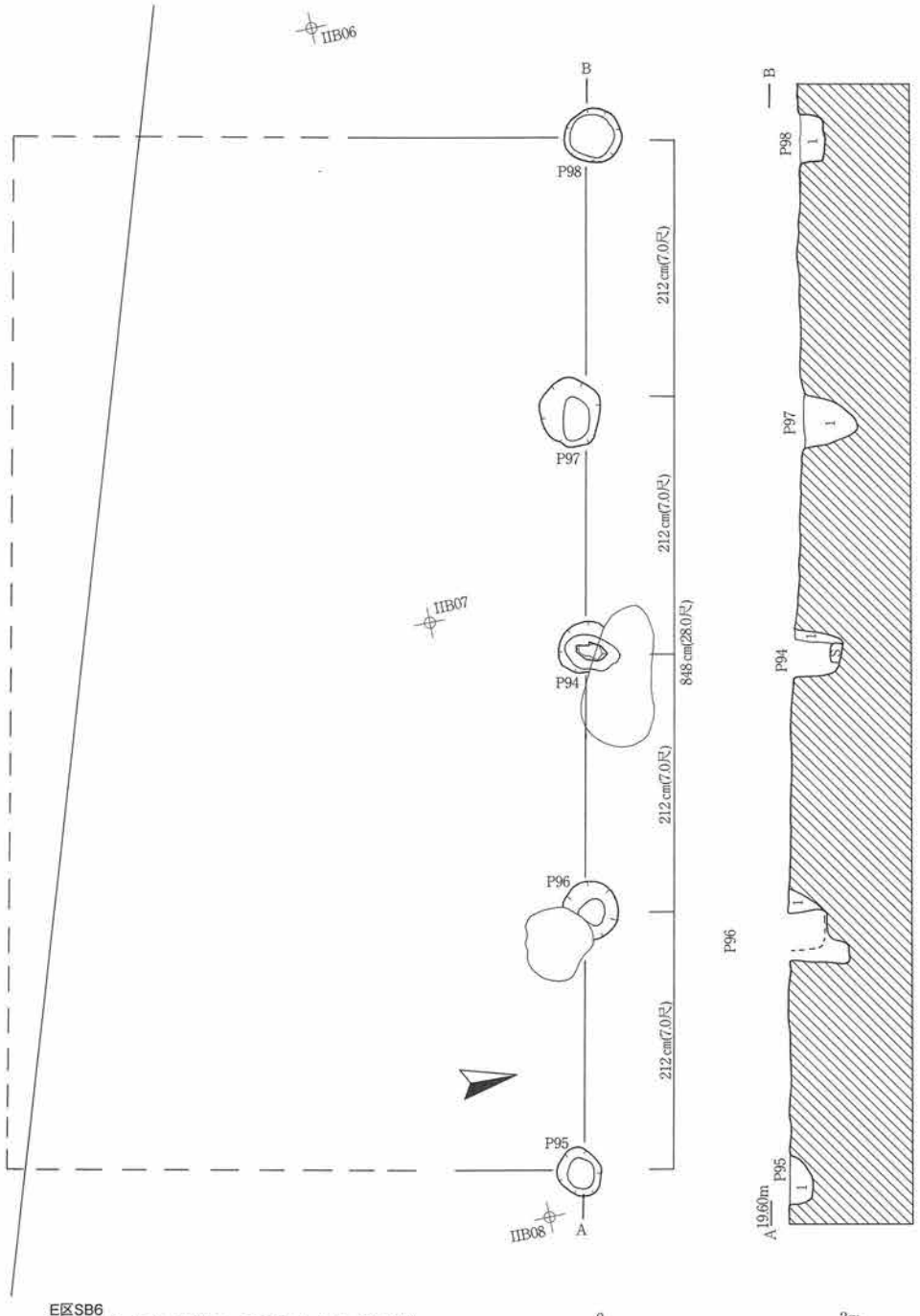
〔出土遺物〕P94の礎盤の上から至大通寶（5058）が出土した。至大通寶は元銭で初鋳年は西暦1310年である。

〔付属施設〕特になし。

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕P94から初鋳1310年の至大通寶が出土しており、本建物は1310年以降の建築となる。これ以上の詳細な年代は示し難いが、中世に属する可能性が高いと思われる。　（羽柴）

E区SB6



E区SB6
1.10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR5/4　にぶい黄褐色砂まだらに多量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒?微量混入、しまりある。

第96図　E区SB６

4　土　　坑（SK）

E区では31基の遺構に「SK」の略号を付したが、SK１、２、３の３基は調査の結果、E区SB１を構成する柱穴と判断された。よって、ここではSK１からSK３までの記述はおこなっていない。

E区SK４土坑　（第97図、写真図版116）

〔位置〕ＩA68に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕なし
〔形態〕開口部は東西が長軸の隅丸長方形を呈する。底面は概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは72cmである。底面の標高は18.92mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕
〔性格〕形状から長芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。
〔年代〕近～現代の構築の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK５土坑　（第97図、写真図版116）

〔位置〕ＩA68・69に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕なし
〔形態〕開口部は東西が長軸の隅丸長方形を呈する。底面は概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは105cmである。底面の標高は18.61mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕形状から長芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。
〔年代〕近～現代の構築の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK６土坑　（第97図、写真図版116）

〔位置〕ＩA69に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕なし
〔形態〕開口部は不整な円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは94cmである。底面の標高は18.82mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕埋土中から肥前産磁器皿（4075）が出土した。
〔性格〕形状から長芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。
〔年代〕近～現代の構築の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK７土坑（第97・98図、写真図版116）

〔位置〕ⅠB50に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区SB４の柱穴P70と重複するが、本遺構が新しい。

〔形態〕開口部は不整な円形を呈する。底面は平坦ではない。壁はやや斜めに立ち上がる。確認面からの深さは83cmである。底面最深部の標高は19.04mである。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕なし

〔性格〕形状から長芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。

〔年代〕近～現代の構築の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK８土坑（第97・98図、写真図版117）

〔位置〕ⅠB50に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区SB４の柱穴P70と重複するが、本遺構が新しい。

〔形態〕開口部は円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは69cmである。底面の標高は19.22mである。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕埋土中から相馬系？の陶器水甕（3190）、肥前産の京焼系陶器皿（3050）が出土した。

〔性格〕形状から芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。

〔年代〕近～現代の構築の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK９土坑（第97・98図、写真図版117）

〔位置〕ⅠB40・50に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区SB４のプラン内に位置するが、直接切り合う部分はない。他の土抗とE区SB４の前後関係から類推すると本遺構が新しい。

〔形態〕開口部は不整な円形を呈する。底面はやや皿状になっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは45cmである。底面の標高は19.42mである。

〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕埋土中から大堀相馬産陶器碗、肥前産磁器碗が出土した。どちらも細片で図化はおこなっていない。

〔性格〕形状から芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。

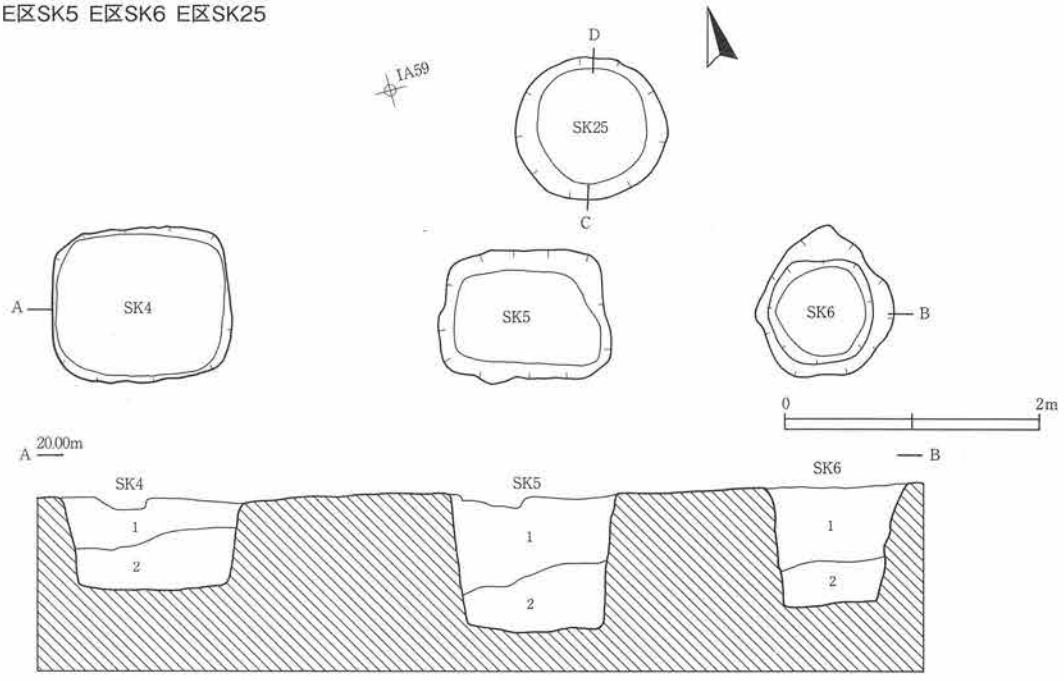
〔年代〕近～現代の構築の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK10土坑（第97・98図、写真図版117）

〔位置〕ⅠB40に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

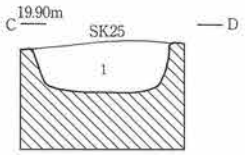
E区SK4 E区SK5 E区SK6 E区SK25



E区SK4
1．10YR3/3　暗褐色土しまり普通、粘性なし。
2．10YR3/3　暗褐色土（10YR4/3）にぶい黄褐色土多量混入。しまり普通、粘性なし。

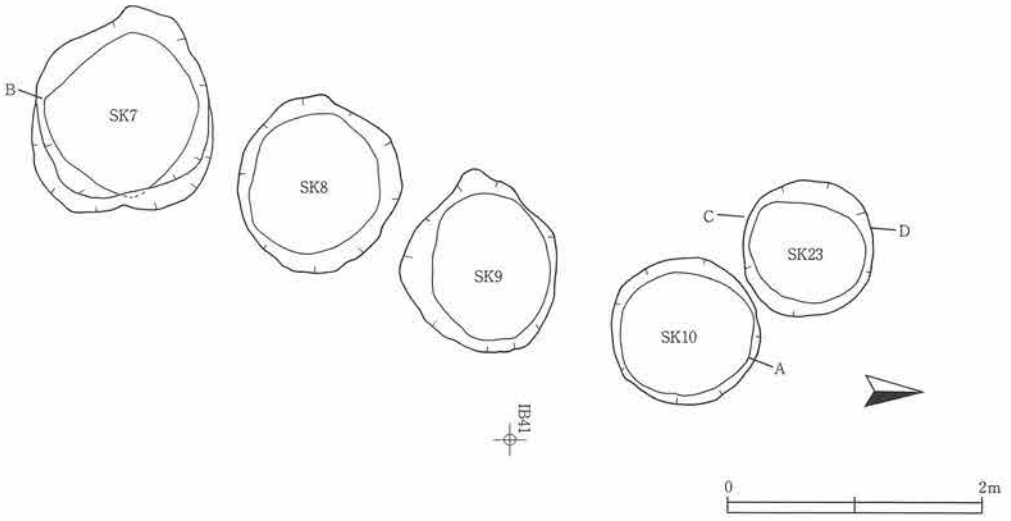
E区SK5
1．10YR3/3　暗褐色土しまり普通、粘性なし、小礫少量混入。
2．10YR3/4　にぶい黄褐色土と　10YR3/3　暗褐色の混土しまり普通、粘性なし。

E区SK6
1．10YR3/3　暗褐色土しまり普通、粘性なし。小礫少量混入。
2．10YR3/4　にぶい黄褐色土と　10YR3/3　暗褐色の混土しまり普通、粘性なし。



E区SK25
1．10YR4/1　褐灰色土　10YR5/4　にぶい黄褐色土　まだら多量混入、炭化物粒少量混入。近世磁器片出土。

E区SK7 E区SK8 E区SK9 E区SK10 E区SK23



第97図　E区SK４～E区SK10、E区SK23、E区SK25

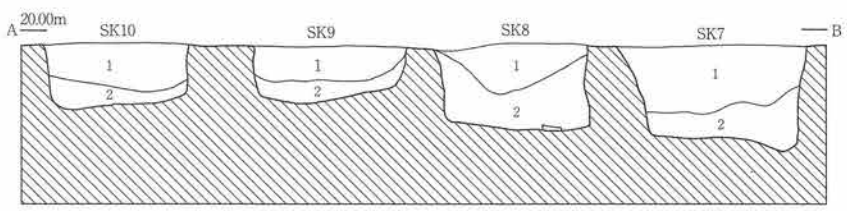
〔重複〕E区SB４のプラン内に位置するが、直接切り合う部分はない。他の土抗とE区SB４の前後関係から類推すると本遺構が新しい。
〔形態〕開口部は円形を呈する。底面はやや皿状になっている。壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは50cmである。底面の標高は19.41mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕形状から芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。
〔年代〕近～現代の構築の遺構と推測される。（羽柴）

E区SK11土坑　（第98図、写真図版117）
〔位置〕ⅠA48に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１のプラン内に位置するが、直接切り合う部分はなく前後関係は不明である。出土遺物の年代観からおそらく本遺構が新しい。
〔形態〕開口部は不整な楕円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは99cmである。底面の標高は19.29mである。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕埋土中から産地不明磁器壽文皿（4104）が出土している。また在地産？の磁器碗も出土しているが細片のため図化していない。
〔性格〕E区SB１のプラン内にあり、何らかの付属施設の可能性もあるが断定はできない。具体的な性格は不明である。
〔年代〕壽文皿（4104）は19世紀以降の年代であり、本遺構は19世紀以降の構築と推測される。（羽柴）

E区SK12土坑　（第99図、写真図版118）
〔位置〕ⅠA47・48・57・58に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１の柱穴P16と重複するが本遺構が新しい。
〔形態〕開口部は不整な楕円形を呈する。北側にテラスを持っている。底面は概ね平坦である。テラス部分以外の壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは74cmである。底面の標高は19.34mである。
〔埋土〕３層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕埋土中から相馬系？陶器土瓶の注口部（3211）が出土している。
〔性格〕不明である。
〔年代〕出土遺物から19世紀以降の構築と推測される。（羽柴）

E区SK13土坑　（第99図、写真図版118）
〔位置〕ⅠA47・57に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

E区SK7
E区SK8
E区SK9
E区SK10
E区SK23

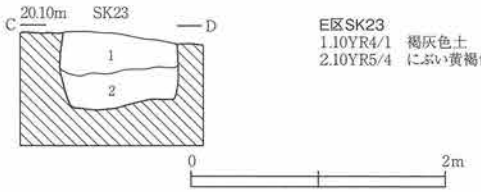


E区SK7
1.10YR3/3　暗褐色土　10YR4/3　にぶい黄褐色砂多量混入。
　しまり普通、粘性なし。
2.10YR3/3　暗褐色土　しまり普通、粘性なし。

E区SK8
1.10YR3/3　暗褐色土　小礫少量混入。しまりあり、粘性なし。
2.10YR3/3　暗褐色土　10YR4/3　にぶい黄褐色砂少量混入。
　しまり普通、粘性なし。

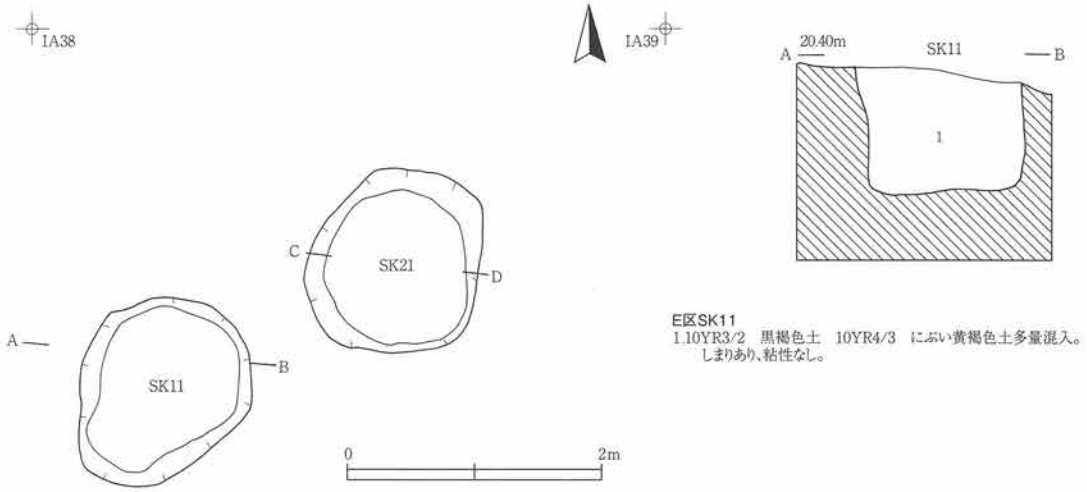
E区SK9
1.10YR3/3　暗褐色土　小礫少量混入。しまり普通、粘性なし。
2.10YR3/4　にぶい黄褐色土　10YR4/3　にぶい黄褐色砂少量混入。
　しまり普通、粘性なし。

E区SK10
1.10YR3/3　暗褐色土　小礫少量混入。しまり普通、粘性なし。
2.10YR3/4　にぶい黄褐色土　10YR4/3　にぶい黄褐色砂少量混入。
　しまり普通、粘性なし。

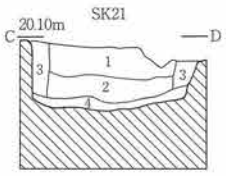


E区SK23
1.10YR4/1　褐灰色土　小礫、炭化物粒多量混入。
2.10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。

E区SK11 E区SK12



E区SK11
1.10YR3/2　黒褐色土　10YR4/3　にぶい黄褐色土多量混入。
　しまりあり、粘性なし。



E区SK21
1.10YR4/1　褐灰色土　しまりなし。礫多量混入。石製挽臼片を含む。
2.10YR5/1　褐灰色土　1層よりしまりあり。
3.10YR6/1　褐灰色土　焼土粒少量混入。桶を埋設した裏込めの土。
4.10YR5/4　にぶい黄褐色砂　10YR6/1　褐灰色土少量混入。

第98図　E区SK７～E区SK11、E区SK21、E区SK23

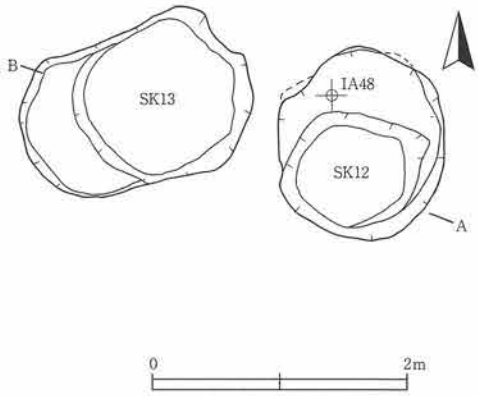
〔重複〕E区SB１のプラン内に位置するが、直接切り合う部分はなく前後関係は不明である。
〔形態〕開口部は不整な楕円形を呈する。南西側にテラスを持っている。底面は概ね平坦である。テラス部分以外の壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは72cmである。底面の標高は19.49mである。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明である。
〔年代〕近世～現代の構築と推測される。（羽柴）

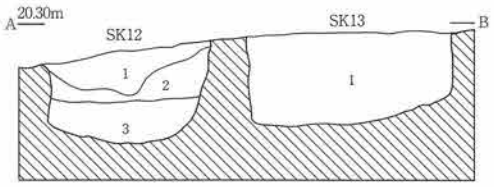
E区SK14土坑　（第99図、写真図版118）
〔位置〕ⅠA44・45・54・55に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１のプラン内に位置し、おそらくSB１の柱穴を壊している。よって本遺構がSB１より新しいと推測される。
〔形態〕開口部は長方形を呈する。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは68cmである。底面の標高は19.26mである。
〔埋土〕４層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。４層は調査時の掘り過ぎの可能性がある。
〔出土遺物〕埋土中から肥前産磁器碗（4019）、肥前産？磁器皿（4089）が出土している。
〔性格〕不明である。
〔年代〕出土した肥前磁器から、18世紀以降の構築と推測される。（羽柴）

E区SK15土坑　（第99図、写真図版118）
〔位置〕ⅠA56・57に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１の柱穴P38と重複するが本遺構が古いと判断した。しかし、本遺構出土遺物の年代観とE区SB１の年代観に齟齬がある。土層断面とP38の礎盤の石が残存することから前後関係を判断したのであるが、判断ミスの可能性もある。
〔形態〕開口部は不整な円形を呈する。底面はやや凹凸がある。壁は斜めに立ち上がる。確認面からの深さは51cmである。底面の標高は19.12mである。
〔埋土〕２層に分けられる。１層中には礫が多量に混入する。２層からは自然堆積、人為堆積の別は判断できない。４層は調査時の掘り過ぎの可能性がある。
〔出土遺物〕埋土中から明産肥前産磁器皿（4082）、在地産陶器擂鉢（3177）、相馬産陶器鉢（3124）、寛永通寶（新寛永　5084）が出土した。
〔性格〕不明である。
〔年代〕出土した在地産陶器擂鉢（3177）は19世紀以降の製作年代である。よって本遺構は19世紀以降の可能性が高い。（羽柴）

E区SK16土坑　（第100図、写真図版119）
〔位置〕ⅠA45に位置する。

E区SK12 E区SK13

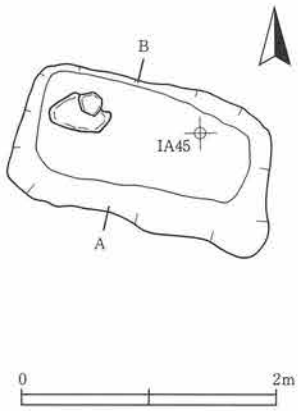


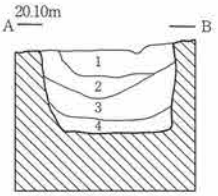


E区SK12
1.10YR3/2　黒褐色土小礫少量混入。しまりあり、粘性なし。
2.10YR4/3　にぶい黄褐色土と　10YR3/3　暗褐色土の混入。
　しまり普通、粘性なし。
3.10YR3/3　暗褐色土しまり普通、粘性なし。

E区SK13
1.10YR3/3　暗褐色土しまり普通、粘性なし。

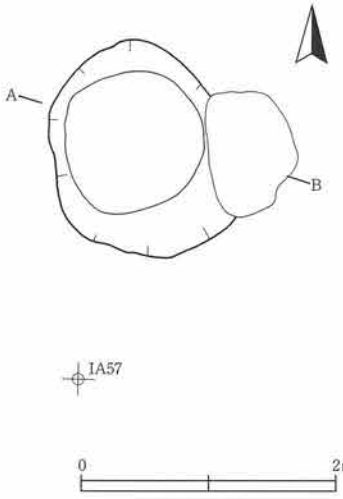
E区SK14

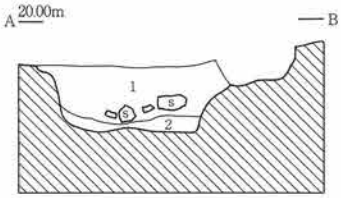




E区SK14
1.10YR4/2　灰黄褐色土　礫、草根多量混入。
　しまりなし。
2.10YR3/1　黒褐色土　礫多量混入。
3.10YR5/3　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。
4.10YR5/4　にぶい黄褐色土　酸化鉄分少量混入。
　掘り過ぎの可能性もあり。

E区SK15





E区SK15
1.10YR5/3　にぶい黄褐色砂　炭化物粒、礫多量混入。
2.10YR7/8　黄橙色ローム　10YR5/3　にぶい黄褐色土
　まだらに多量混入。明染付出土。

第99図　E区SK12～E区SK15

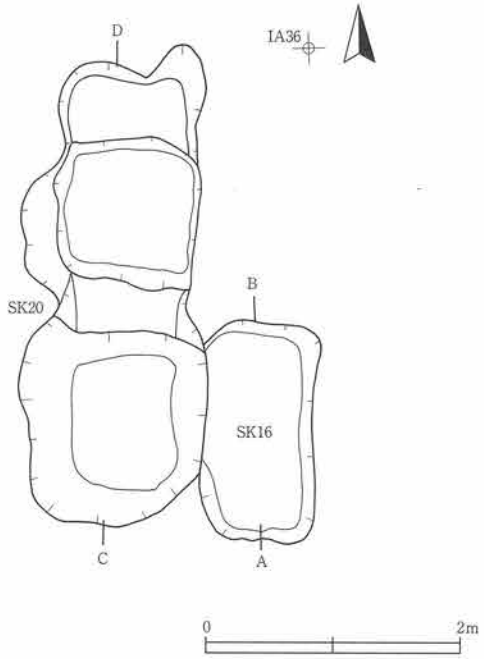
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SK20と重複するが本遺構が古い。またE区SB１のプラン内に位置するが、直接切合う部分がなく前後関係は不明である。
〔形態〕開口部は隅丸の長方形を呈する。底面に凹凸がある。壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは21cmである。底面の標高は20.50mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明である。
〔年代〕近世～現代の遺構と推測される。（羽柴）

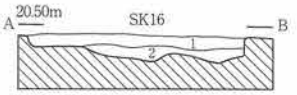
E区SK17土坑（第100図、写真図版119）
〔位置〕ⅠA47に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１の柱穴P40と重複するが、本遺構が古い。
〔形態〕開口部は不整な方形を呈する。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは31cmである。底面の標高は19.94mである。
〔埋土〕１層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明である。
〔年代〕E区SB１との前後関係から、近世前半の遺構と推測される。（羽柴）

E区SK18土坑（第100図、写真図版119）
〔位置〕ⅠA47に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１のプラン内に位置するが、直接切合う部分がなく前後関係は不明である。
〔形態〕開口部は不整な方形を呈する。壁の中場に段が付いている。底面は概ね平坦である。確認面からの深さは101cmである。底面の標高は19.21mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕埋土中から瀬戸産陶器腰錆碗（3014）が出土した。
〔性格〕不明である。
〔年代〕出土遺物の年代から18世紀末以降構築の遺構と推測される。（羽柴）

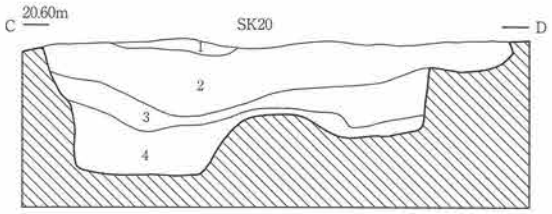
E区SK19土坑（第100図、写真図版119）
〔位置〕ⅠA36・37・46・47に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１のプラン内に位置するが、直接切合う部分がなく前後関係は不明である。
〔形態〕開口部は不整な円形を呈する。底面には凹凸があり、壁はほぼ垂直に立つ。確認面からの深さは123cmである。底面の標高は19.01mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕なし

E区SK16　E区SK20



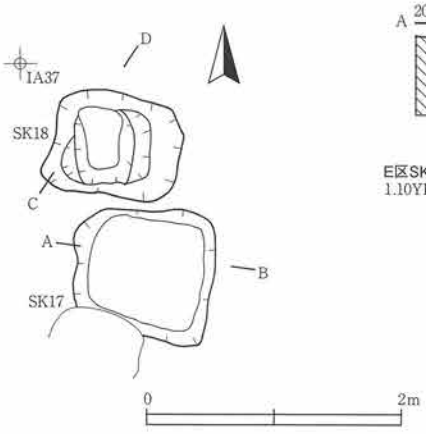


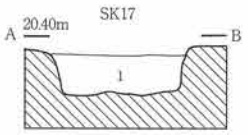
E区SK16
1.10YR3/2　黒褐色土　炭化物粒、礫少量混入。
2.10YR5/3　にぶい黄褐色土　10YR3/2　黒褐色土混入。



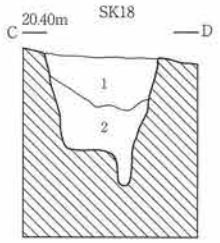
E区SK20
1.10YR4/1　褐灰色土　10YR5/4　にぶい黄褐色砂　まだら少量混入。
2.10YR5/4　にぶい黄褐色土　10YR4/1　褐灰色土　まだら少量混入。
　炭化物粒少量混入。
3.10YR4/1　褐灰色土と　10YR5/4　にぶい黄褐色砂の混入。焼土粒
　少量混入。
4.10YR4/4　褐色土　10YR4/1　褐灰色土縞状に少量混入。

E区SK17　E区SK18



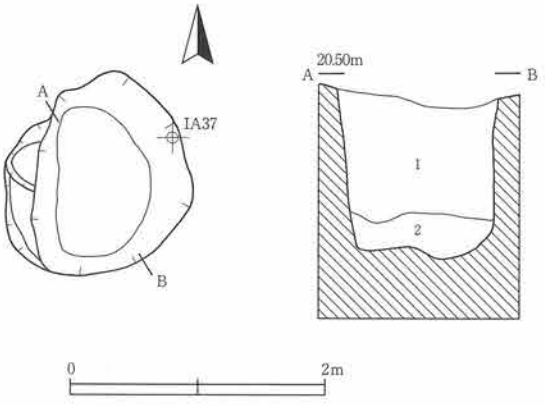


E区SK17
1.10YR3/2　黒褐色土　礫少量含む。



E区SK18
1.10YR3/2　黒褐色土　10YR4/3　にぶい黄褐色土中量混入。
2.10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR3/2　黒褐色土少量混入。

E区SK19



E区SK19
1.10YR3/2　黒褐色土　10YR4/3　にぶい黄褐色土多量混入。
　しまり普通、粘性なし。
2.10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR3/2　黒褐色土多量混入。
　しまりなし、粘性なし。

第100図　E区SK16～E区SK20

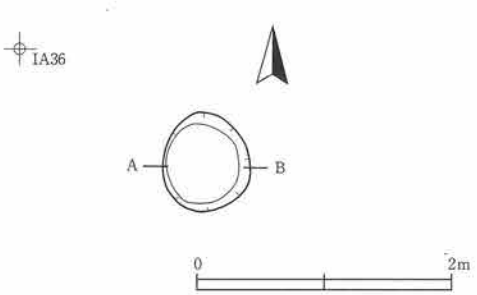
〔性格〕不明である。
〔年代〕近世～現代の遺構と推測される。（羽柴）

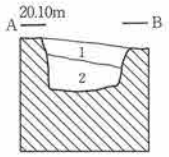
E区SK20土坑（第100図、写真図版120）
〔位置〕ⅠA45に位置する。
〔検出面〕2層上面（第1検出面）。
〔重複〕E区SK16と重複するが本遺構が古い。またE区SB1のプラン内に位置するが、直接切合う部分がなく前後関係は不明である。
〔形態〕2つの長方形が連なった平面形である。壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは最深部で105cmである。最深部の標高は19.41mである。
〔埋土〕4層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕細片のため図化不能であったが、肥前産磁器皿が出土している。
〔性格〕不明である。
〔年代〕近世～現代の遺構と推測される。（羽柴）

E区SK21土坑（第98図、写真図版120）
〔位置〕ⅠA48に位置する。
〔検出面〕2層上面（第1検出面）。
〔重複〕E区SB1のプラン内に位置するが、直接切り合う部分はない。本土坑の構築によりE区SB1の柱穴が失われた可能性が高い。また本土抗のプラン半分がE区SB1のプラン外にはみ出ており、E区SB1同時存在の可能性は低い。
〔形態〕開口部は不整な楕円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立ち上がる。土層断面の形状から桶を埋設した遺構と判断される。確認面からの深さは49cmである。底面の標高は19.52mである。
〔埋土〕4層に分けられる。4層は掘方底面に敷いた土、3層は桶を埋設した裏込めの土である。1、2層は桶を外した後に堆積した土である。
〔出土遺物〕埋土中から肥前産？の磁器端反碗（4016）が出土している。また埋土上位から挽き臼（6015）が出土した。この挽き臼は上臼の約半分の破片で、E区SB1のP7出土の破片と接合した。
〔性格〕桶を埋設した遺構である。用途は便所、肥溜めと推測される。
〔年代〕出土遺物から19世紀以降の構築と推測される。（羽柴）

E区SK22土坑（第101図、写真図版120）
〔位置〕ⅠA46に位置する。
〔検出面〕2層上面（第1検出面）。
〔重複〕E区SB1のプラン内に位置するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。
〔形態〕開口部は円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは40cmである。底面の標高は19.58mである。

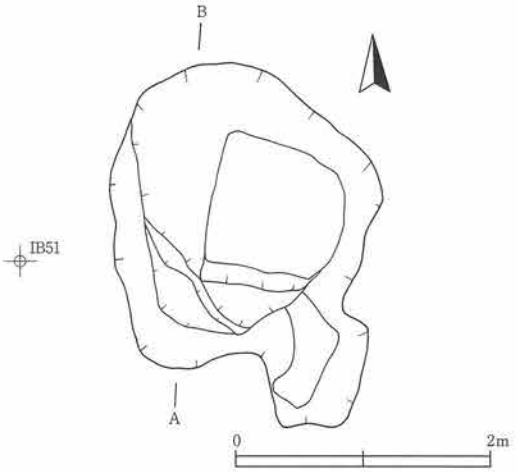
E区SK22

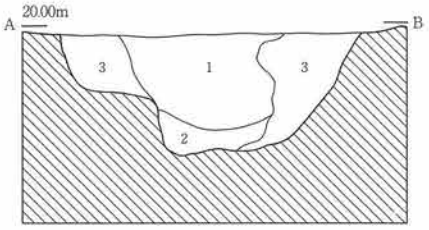




E区SK22
1.10YR4/1　褐灰色土　炭化物粒多量混入。
2.10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。

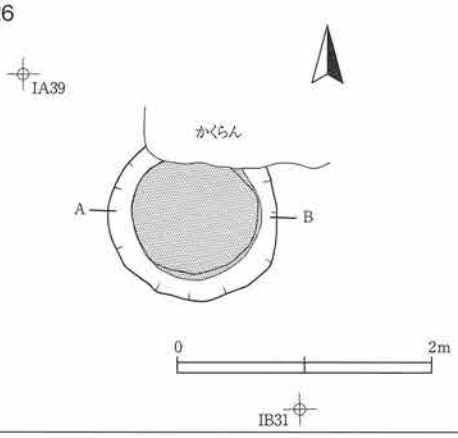
E区SK24

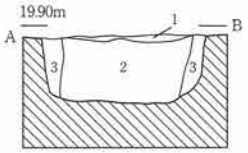




E区SK24
1.10YR4/1　褐灰色土　炭化物、焼土縞状に多量混入。
2.10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物粒少量混入。10YR5/4　にぶい黄褐色土　まだら多量混入。
3.10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物粒少量混入。

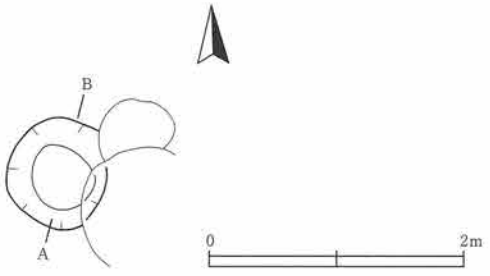
E区SK26

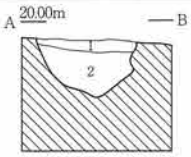




E区SK26
1.10YR5/4　にぶい黄褐灰色砂　10YR4/1　褐灰色土　まだらに多量混入。炭化物粒多量混入。
2.10YR4/1　褐灰色土　礫多量混入。桶を抜き取った後に入った土。
3.10YR6/1　褐灰色土　炭化物粒少量混入。桶を埋設した裏込めの土。

E区SK27





E区SK27
1.10YR4/1　褐灰色土炭化物粒少量混入。
2.10YR5/4　にぶい黄褐色土　10YR4/1　褐灰色土縞状に多量混入。炭化物粒少量混入。

第101図　E区SK22、E区SK24、E区SK26、E区SK27

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明である。
〔年代〕近～現代の遺構と推測される。（羽柴）

E区SK23土坑（第97・98図、写真図版120）
〔位置〕ⅠB40に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB４の柱穴P77と重複するが、本遺構が新しい。
〔形態〕開口部は円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立ち上がる。確認面からの深さは60cmである。底面の標高は19.41mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕埋土中から東北地方？産の磁器碗（4041）、大堀相馬産陶器徳利（3205）が出土している。
〔性格〕形状から芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。
〔年代〕近～現代の遺構と推測される。（羽柴）

E区SK24土坑（第101図、写真図版121）
〔位置〕ⅠB51・61に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB４と重複するが、本遺構が新しい。
〔形態〕開口部は不整な形状を呈する。南壁にテラスがあり、底面には凹凸がある。壁はやや斜めに立ち上がる。確認面から最深部の深さは92cmである。底面の標高は19.11mである。
〔埋土〕３層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕埋土中から陶器擂鉢（3152）、肥前産陶器三島手大鉢（3128）、大堀相馬産陶器碗（3033）、大堀相馬産陶器皿（3089）が出土した。
〔性格〕不整な形状で人為的なものか否か判断が難しい。
〔年代〕出土遺物から18世紀以降の構築と推測される。（羽柴）

E区SK25土坑（第93図、写真図版121）
〔位置〕ⅠA69に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕なし
〔形態〕開口部は円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さ40cmである。底面の標高は19.36mである。
〔埋土〕２層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は判断できない。
〔出土遺物〕埋土中から東北地方産磁器徳利（4127）、在地産？陶器擂鉢（3174）が出土した。
〔性格〕形状から芋を貯蔵する「芋穴」と推測される。
〔年代〕近～現代の遺構と推測される。（羽柴）

E区SK26土坑　（第101図、写真図版121）

〔位置〕ⅠA49に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕現代の攪乱と重複するが本遺構が古い。

〔形態〕開口部は不整な円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁は概ね垂直に立ち上がる。平面検出時に遺構輪郭内に径約100cmの円形のプランが見え、また土層断面の形状から、桶を埋設した遺構と判断される。確認面からの深さは51cmである。底面の標高は19.30mである。図のスクリーントーンは検出時に見えた円形の範囲である。

〔埋土〕３層に分けられる。３層は桶を埋設した裏込めの土である。１、２層は桶を外した後に堆積した土である。

〔出土遺物〕埋土中から在地？産陶器小甕（3197）、平清水系磁器徳利（4134）が出土した。また細片のため図示していないが、型紙摺り磁器碗が出土している。それから昭和22～23年の50銭黄銅貨が出土している。

〔性格〕桶を埋設した遺構である。用途は便所、肥溜めと推測される。

〔年代〕型紙摺り磁器碗と50銭黄銅貨の出土から近代以降の廃絶と推測される。　（羽柴）

E区SK27土坑　（第101図、写真図版121）

〔位置〕ⅠB40に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕E区SK23と重複するが本遺構が古い。またE区SB４の柱穴P77と重複するが本遺構が新しい。

〔形態〕開口部は円形を呈する。底面は皿状で平坦ではない。壁は斜めに立ち上がる。確認面からの深さは42cmである。底面の標高は19.39mである。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世～現代の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK28土坑　（第102図、写真図版122）

〔位置〕ⅠA15・16に位置する。

〔検出面〕２層上面（第１検出面）。

〔重複〕なし

〔形態〕開口部は不整な楕円形を呈する。底面は皿状で平坦ではない。壁は斜めに立ち上がる。確認面からの深さは46cmである。底面の標高は20.14mである。

〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔性格〕不明である。

〔年代〕近世～現代の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK29土坑　（第102図、写真図版122）

〔位置〕ⅠA35に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１のプラン内に位置するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。
〔形態〕開口部は円形を呈する。底面は概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立つ。確認面からの深さは25cmである。底面の標高は20.28mである。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明である。
〔年代〕近世～現代の遺構と推測される。　（羽柴）

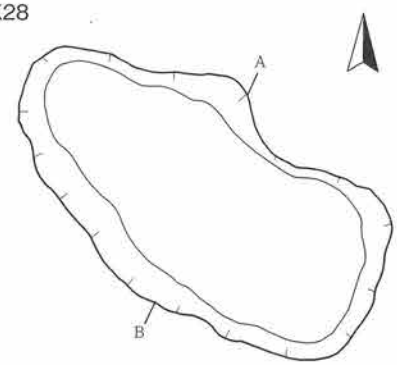
E区SK30土坑　（第102図、写真図版122）

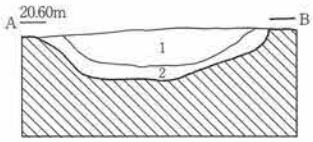
〔位置〕ⅠA46に位置する。
〔検出面〕２層上面（第１検出面）。
〔重複〕E区SB１のプラン内に位置するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。
〔形態〕開口部は不整な楕円形を呈する。底面は平坦ではない。壁は斜め立つ。確認面からの深さは81cmである。底面の標高は19.67mである。
〔埋土〕２層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕形状から人為的なものではない可能性もある。
〔年代〕近世～現代の遺構と推測される。　（羽柴）

E区SK31土坑　（第102図、写真図版122）

〔位置〕ⅠB96・97・ⅡB06・07に位置する。
〔検出面〕３層上面（第２検出面）。
〔重複〕なし
〔形態〕焼土混じりの埋土２層がリング状に見え検出された。開口部は隅丸方形を呈する。底面は皿状で平坦ではない。壁は斜め立つ。確認面からの深さは39cmである。底面の標高は18.01mである。
〔埋土〕２層に分けられる。２層は焼土混じりの土であるが、現地性焼土か、二次堆積の焼土か明瞭に判断できなかった。土坑底面、壁面には被熱が及んでおらず、熱変化は全くしていない。
〔出土遺物〕なし
〔性格〕不明であるが、焼土が存在し人為的な遺構と判断される。
〔年代〕検出面から８世紀後半～９世紀初頭の遺構と推測される。　（羽柴）

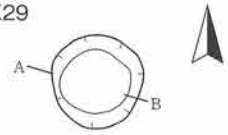
E区SK28

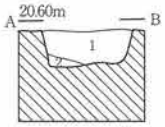




E区SK28
1．10YR4/1　褐灰色土細礫多量混入。しまりあり。
2．10YR4/2　灰黄褐色土　10YR5/4　にぶい黄褐色まだら多量混入。

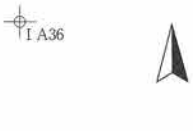
E区SK29

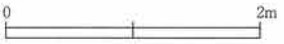


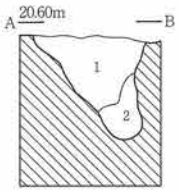


E区SK29
1．10YR3/3　暗褐色土　10YR4/3　にぶい黄褐色土まだらに少量混入。炭化物粒少量混入。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土掘りすぎか。

E区SK30

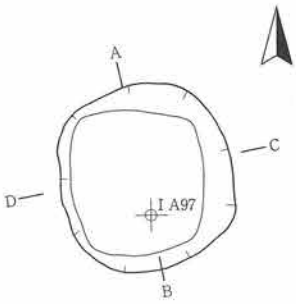


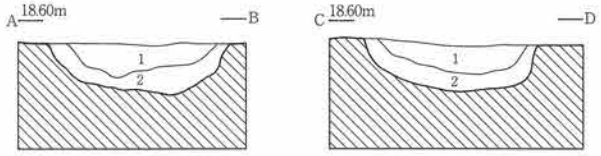




E区SK30
1．10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR3/3　暗褐色土多量混入。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR3/3　暗褐色土多量混入。炭化物粒多量混入。

E区SK31





E区SK31
1．10YR5/4　にぶい黄褐色土砂粒少量混入。しまりあり。
2．10YR5/4　にぶい黄褐色土　2.5YR3/1　暗赤灰色焼土粒状に多量混入。炭化物粒多量混入。

第102図　E区SK28～E区SK31

X 出 土 遺 物

平成13～16年度調査の「河崎の柵擬定地」で出土した遺物は以下の通りである。

1　土師器、須恵器
2　かわらけ（11世紀のかわらけ、12世紀のかわらけ、13～14世紀のかわらけ）
3　中世陶磁器（国産陶器、中国産磁器）
4　近世陶器（肥前産、瀬戸・美濃産、京・信楽系、大堀相馬産、在地産）
5　近世磁器（肥前産、瀬戸産、平清水産など）
6　金属製品（鉄製品、銅製六器、銭貨など）
7　その他の遺物（後北式土器、土製品、石製品）
8　近代遺物（磁器、ガラス瓶）

各々の遺物については、実測図版の下に観察表を付した。出土地点、法量などは表を参照していただきたい。文章中では必ずしも個々の遺物について説明していない場合もある。

1　土師器・須恵器

平成13～16年度の河崎の柵擬定地発掘調査全体で、土師器、須恵器は総重量で189.5kgが出土している。この内、掲載した土師器、須恵器の重量は49.8kg、不掲載の土師器、須恵器の重量は139.7kgである。重量比における掲載率は26％ということになる。不掲載遺物139.7kgの内、土師器は131.9kg、須恵器は7.8kgである。しかしながら、この数値は、坏類における土師器、須恵器の分類が徹底してない状態での計測値であり、信頼性は低いものである。

また掲載した土師器は143点、須恵器は92点である。その他に土師器、須恵器以外で、関連が深い遺物もここに掲載している。緑釉陶器１点、土錘53点、土鈴１点、土製支脚１点、石製支脚１点である。

土師器・須恵器の出土状況は各遺構の記述で触れている。ここでは土師器、須恵器自体の特徴について記す。遺物個々のデーターについては観察表中に記してあるので、文中では必ずしも個々の遺物について触れない場合もある。

観察表中の「種類」は酸化炎焼成のものは「土師器」、還元炎焼成のものは「須恵器」と記した。赤色がかった色調をしていても硬質の焼成であれば「須恵器」とし、ロクロ調整のみの坏でも土師質の焼成であれば「土師器」としている。またロクロ使用の長胴甕も土師質の焼成であれば「土師器」としている。このように、ここでの土師器、須恵器の分類は生産工人の別、背景を考慮に入れていないものである。

また、観察表中の「法量」の高さで（　）付きのものは、欠損している個体で、現存している部分の高さ表している。口径、底径は反転実測で求めた数値も（　）を付さず記している。

観察表の「調整」はスペースの関係があり、口縁部のヨコナデの記載を省略している例が多い。不足な点は実測図中から読みとっていただきたい。

「色調」はその個体外面の面積の大きい色調について記した。色調の観察には土色帳を用いた。

（羽柴）

C区SI１竪穴住居の土師器・須恵器　（第103・104図、写真図版125・126）

C区SI１は平成13年度調査の住居跡である。図示したのは土師器坏２個体（１・２）、小型長胴甕１個体（７）、ロクロ不使用長胴甕２個体（８・９）、ロクロ使用長胴甕１個体（10）、須恵器坏４個体（３～６）、須恵器長頸壺１個体（11）である。

土師器坏は非ロクロの１とロクロ使用の２がある。１は体部下半～外底面はヘラケズリが施され、粗いヘラミガキが施される。底部は平底である。２は底辺部に回転ヘラケズリが施され、切り離しは回転糸切である。体部は直線的に立ち上がっている。３～６は須恵器坏である。４・５は浅黄橙色で須恵器一般の灰色ではないが硬質な焼成で須恵器とした。胎土、色調、器形ともに共通で同じ窯の産と推測される。３・６は口縁部が外反する器形で双方が非常に類似する。胎土も類似し同一個体の可能性も高い。６の切り離しは回転ヘラ切である。７の小型長胴甕はロクロ不使用である。頸部に段が明瞭にある。体部外面のヘラケズリの下地にハケ目が施されている。口縁部内面には帯状に炭化物が付着している。８・９はロクロ不使用の長胴甕である。８は下半部のみであるが、９と類似したプロポーションと推測される。どちらも底部にヘラケズリが施される。９の頸部には不明瞭ながら段がある。10はロクロ使用の長胴甕である。ロクロ調整の下地のタタキ目は詳細に観察したが確認できなかった。ロクロ調整によりタタキ目の痕跡が消された可能性が高い。外面体部中央には２条の工具による傷？が付いている。また体部外面には粘土がまばらに付着している。11は小破片であるが須恵器長頸壺の口縁部破片と推測される。口唇部が上につまみ出されている。（羽柴）

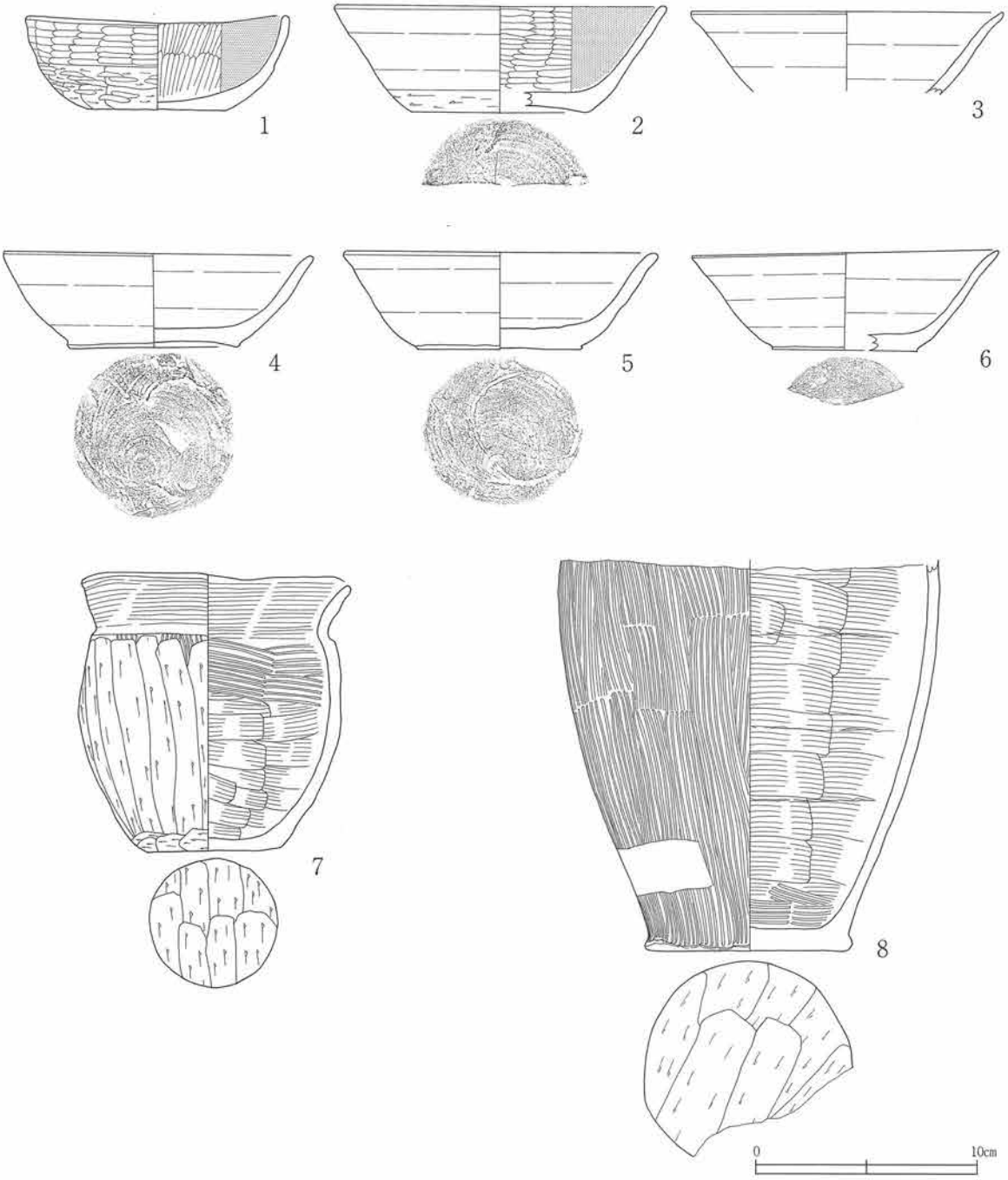
C区SI２竪穴住居の土師器・須恵器　（第105図、写真図版126）

C区SI２は平成13年度調査の住居跡である。図示したのは土師器長胴甕１個体（12）、須恵器大甕１個体（13）である。12はロクロ不使用の長胴甕である。頸部に段はなく、口縁部は外反する。13は須恵器大甕の口縁部破片である。口縁部ヨコナデの下地にタタキ目がみられる。また頸部下には格子目状のタタキ目が存在する。口縁部外面には鋭利な工具で「×」の刻線が２つ施される。焼成前の線刻と思われるがはっきり判別できない。（羽柴）

C区SI３竪穴住居の土師器・須恵器　（第106・107図、写真図版127・128）

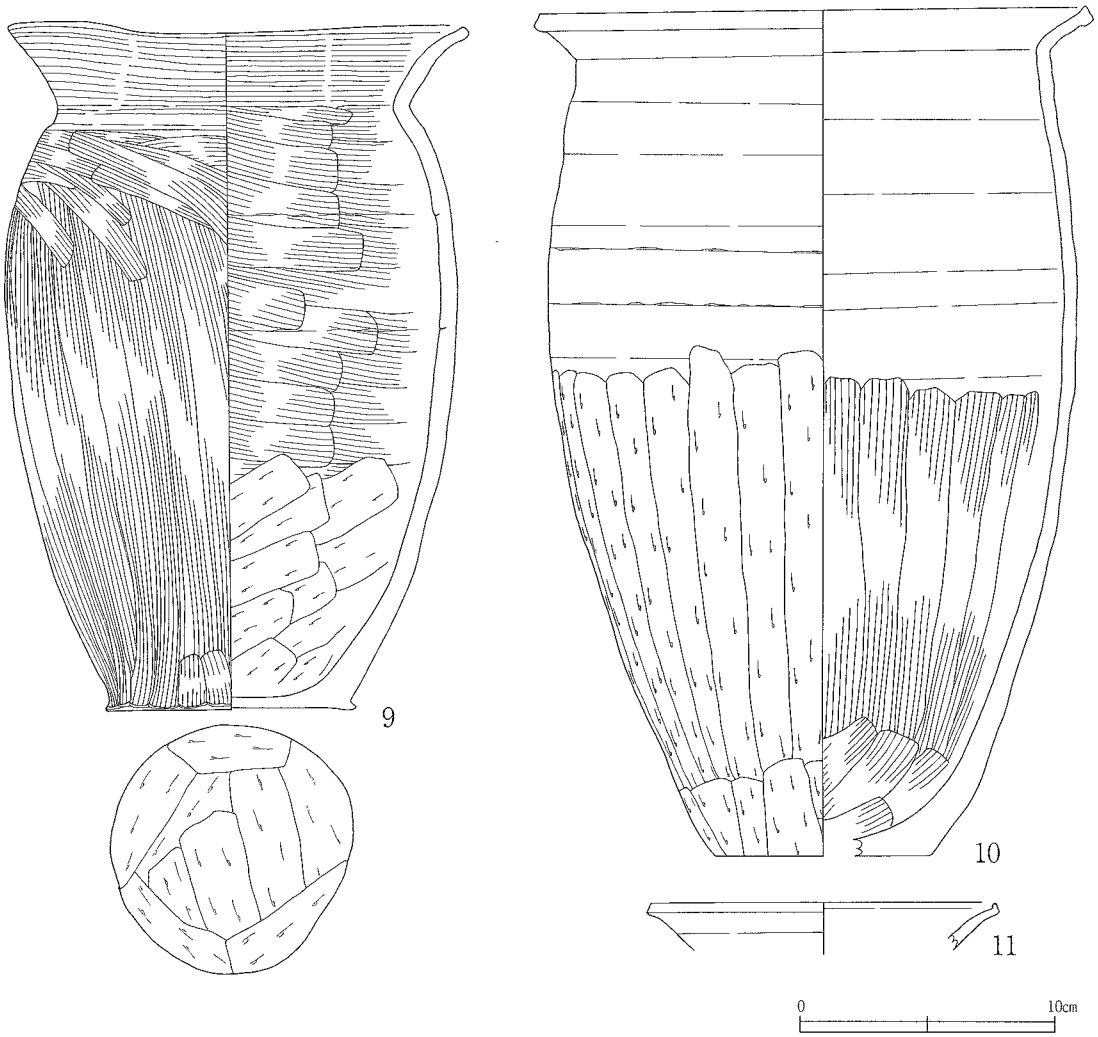
C区SI３は平成14年度調査の住居跡である。図示したのは土師器坏４個体（14～18）、須恵器坏５個体（19～23）、ロクロ不使用長胴甕１個体（24）、ロクロ使用長胴甕２個体（25・26）、須恵器甕１個体（27）、須恵器鉢１個体（28）である。また土師器、須恵器以外に土錘（29）を図示している。

土師器坏は非ロクロとロクロ使用のものがある。14・15はロクロ不使用で、外面体部下半はヘラケズリの上にヘラミガキが施される。14は座りの良い平底風丸底である。16～18はロクロ使用で、いずれも内面黒色処理である。16･17は底辺部に手持ちヘラケズリ再調整が施されている。18は底辺部と外底面に回転ヘラケズリが施されている。17の体部外面中央には「井」の線刻が施されている。細い線刻で焼成後に施されている。18の外底面には墨書が施されている。「杖」の字に似るが判読は難しい。19～23は須恵器坏である。いずれも黄褐色系の色調であるが、硬質な焼成で須恵器とした。色調、胎土、器形は類似し、底辺部に手持ちヘラケズリ再調整が施される。22､23はほぼ同じ部位に墨書が施されている。墨痕は明瞭ではないが、どちらも「浄」の字が横位に書かれていると推測される。24はロクロ不使用の長胴甕である。外底面には木葉痕がある。25､26はロクロ使用の長胴甕である。26はロクロの下地のタタキ目が明瞭に残る。25は詳細に観察してもロクロ下地のタタキ目が見えない。27の須恵器甕は口縁部と体部下半～底部が接合しないが、胎土、色調から同一個体と判断し、図上で器形復元をお



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1	土師器	坏	C区SI１	4.4	12.0	6.2	ﾍﾗﾐｶﾞｷ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	黄橙色	外底面ヘラケズリ
2	〃	〃	C区SI１貼床中	4.8	15.2	8.0	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	黄橙色	回転糸切
3	須恵器	〃	C区SI１埋土下部	(3.7)	14.2	—	ロクロ	ロクロ	褐灰色	
4	〃	〃	C区SI１カマド脇埋土P１	4.5	14.1	7.6	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	回転糸切
5	〃	〃	C区SI１床直P２	4.5	14.4	7.5	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	回転糸切
6	〃	〃	C区SI１カマド右ソデ内	4.6	14.0	6.6	ロクロ	ロクロ	灰白色	回転ヘラ切
7	土師器	長胴甕	C区SI１床面P３	12.7	12.2	5.8	ﾊｹﾒ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐灰色	外底面ヘラケズリ
8	〃	〃	C区SI１カマド内埋土	(17.8)	—	9.1	ハケメ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	外底面ヘラケズリ

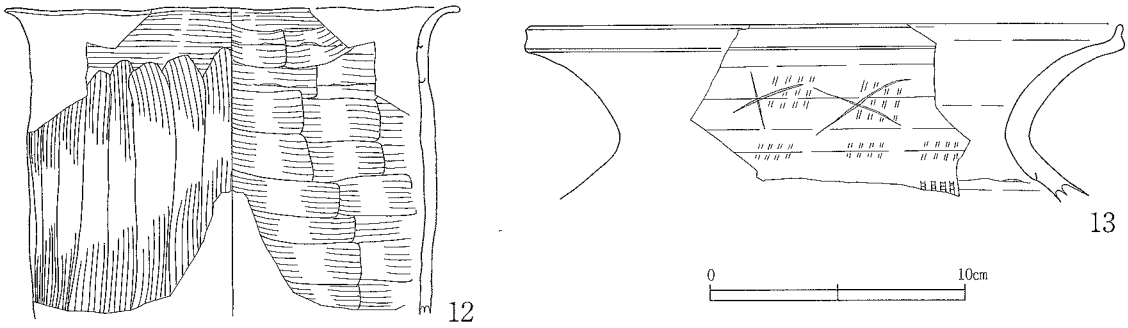
第103図　C区SI１の土師器、須恵器①(１～８)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
9	土師器	長胴甕	C区SI1床面P1、P3	27.3	18.2	10.0	ヘラナデ	ﾍﾗﾅﾃﾞ ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	浅黄橙色	外底面ヘラケズリ
10	〃	〃	C区SI1	33.5	21.5	8.4	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	ﾛｸﾛ ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙色	ロクロ下地のタタキ目みえず
11	須恵器	長頸壺	C区SI1カマド燃焼部	(1.9)	13.9	—	ロクロ	ロクロ	褐灰色	口縁部破片

第104図　C区SI1の土師器、須恵器②(9～11)

こなった。外面底辺部にはヘラケズリが及ばず、下地の格子目状タタキ目が露出している。28は須恵器鉢である。二次被熱しており破片により色調が異なり、器面がはじけている部分がある。ロクロ下地のタタキ目は詳細に観察したが確認できなかった。29は土錘である。素焼き製品で欠損していない。外面には指頭圧痕がみられる。重さは77.2gである。　(羽柴)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
12	土師器	長胴甕	C区SI２埋土	(12.2)	18.0	—	ヘラナデ	ヘラナデ	明黄褐色	
13	須恵器	大甕	C区SI２埋土	(7.1)	23.3	—	ﾛｸﾛ　ﾀﾀｷ目	ロクロ	褐灰色	口縁部に「×」の線刻

第105図　C区SI２の土師器、須恵器(12～13)

B区SI１竪穴住居の土師器・須恵器　(第108・109図、写真図版128～130)

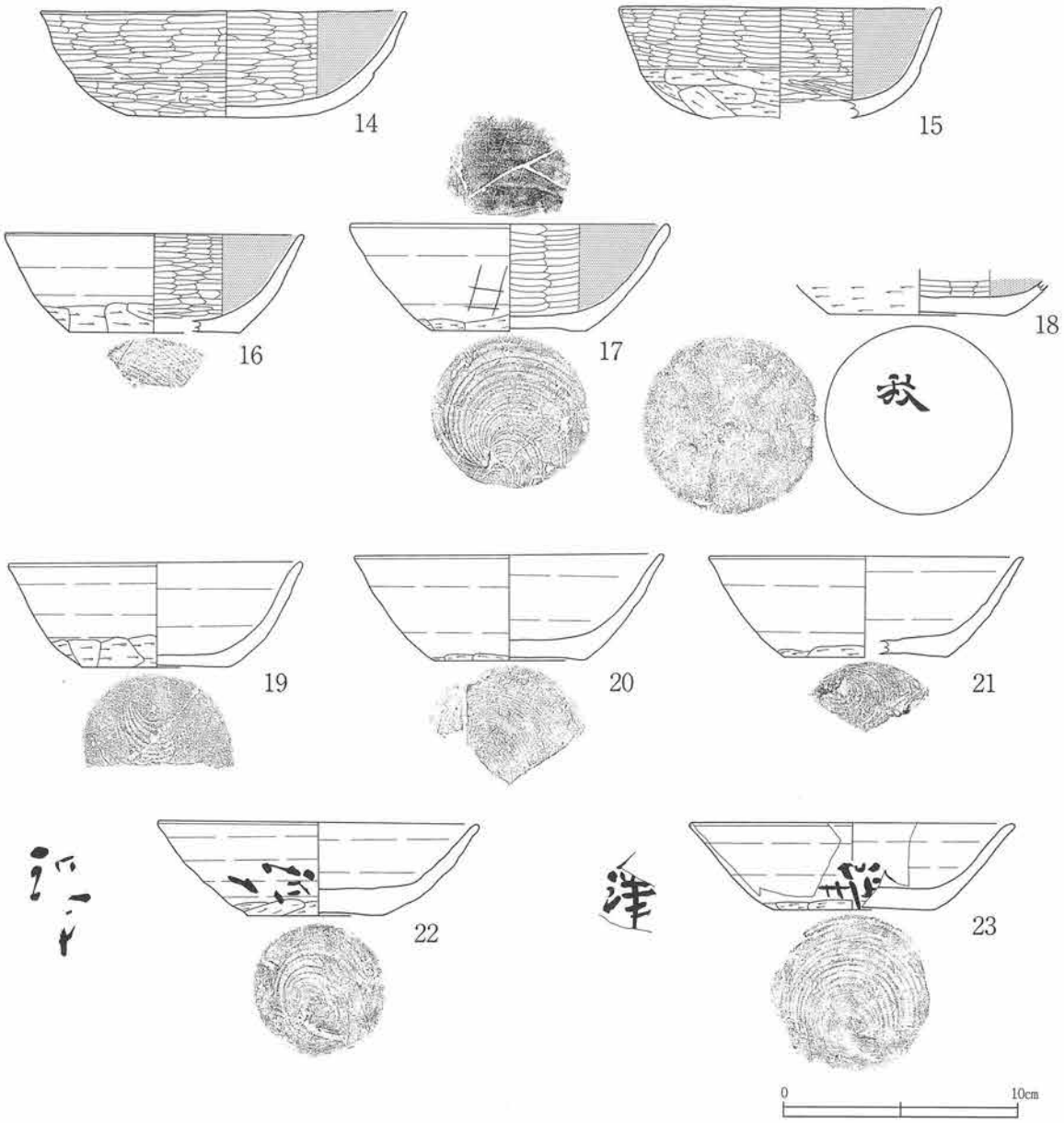
B区SI１は平成15年度B区検出の住居跡である。図示したのは須恵器坏２個体（30・31)、ロクロ不使用長胴甕５個体(32～36)、ロクロ使用長胴甕１個体(37)、土師器鉢１個体(38)である。

30はカマド火焼面からの出土で二次被熱が著しく色調が土師器に似るが、須恵器として分類した。色調は二次被熱による変化と考えたい。31はロクロ調整のみの須恵器坏である。切り離しは回転糸切である。32・33はロクロ不使用長胴甕の体部下半～底部の破片である。32は外底面に木葉痕、33はヘラケズリが施される。どちらも外面に粘土がまばらに付着する。34は頸部に段があり、外面に粘土が付着する。粘土には指でなでつけた痕跡があり、意図的に塗布したものと推測される。35は大型のロクロ不使用長胴甕である。頸部には明瞭な段がある。外面口縁部ヨコナデの下地にハケメが認められる。36は体部外面に粘土の塗布が認められ、外底面にはヘラケズリが施される。37はロクロ使用長胴甕である。底径が口径の1/3以下の器形である。詳細な観察の結果、ロクロ下地のタタキ目の存在が確認できた。38は土師器鉢である。内外面にヘラミガキが施され、内面は黒色処理である。ロクロ調整は認め難い。２破片が接合したが、二次被熱を受けており、破片により色調が異なる。　(羽柴)

C区SI４竪穴住居の土師器・須恵器　(第110図、写真図版130)

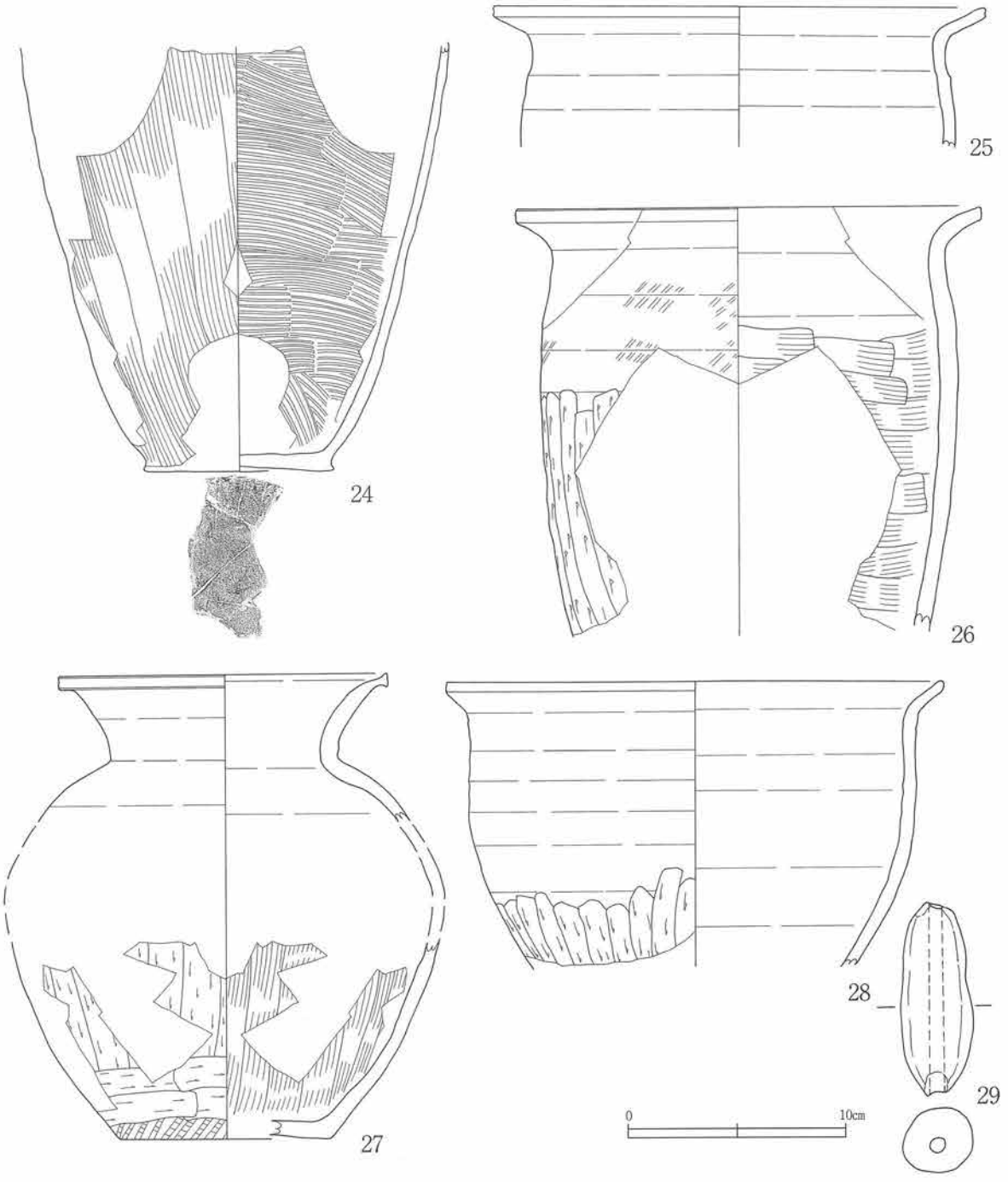
C区SI４は平成15年度C区検出の住居跡である。図示したのは土師器坏２個体（39・40)、ロクロ不使用土師器長胴甕１個体(41)、土師器球胴甕１個体(42)である。また円盤状の土製品(43)が出土している。

39・40はロクロ不使用の坏である。どちらも体部下半はヘラケズリの上に粗いヘラミガキが施される。40は皿形に近い器形である。41の土師器長胴甕は頸部に段を持っている。外面のヨコナデ、ヘラナデの下地にハケメが施されている。外底面は木葉痕である。42は土師器球胴甕である。肩部～口縁部を欠失している。外底面には木葉痕が施される。43は円盤状の土製品である。外面には指？によるナデが施される。カマド覆土からの出土で、カマド支脚の可能性も考えられるが判別は難しい。



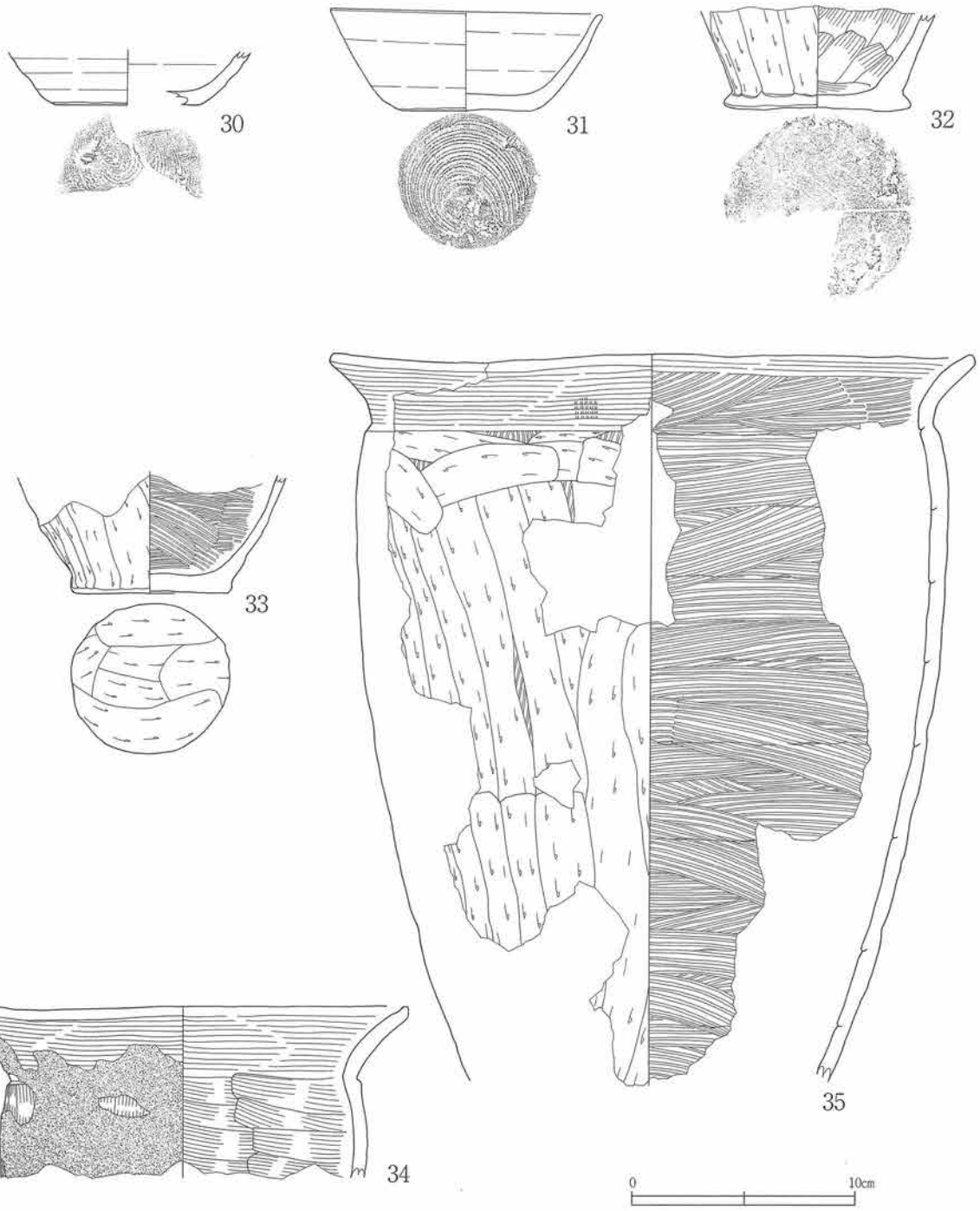
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
14	土師器	坏	C区SI３床面	4.6	14.7	7.5	ﾍﾗﾐｶﾞｷ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	橙色	外底面ヘラケズリ、ヘラミガキ
15	〃	〃	C区SI３P３	(4.8)	13.6	—	ﾍﾗﾐｶﾞｷ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	黄橙色	外面下半ヘラケズリのみ
16	〃	〃	C区SI３埋土	4.2	12.8	7.3	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	浅黄橙色	静止糸切か
17	〃	〃	C区SI３埋土	4.6	13.8	6.6	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	外面に「井」の線刻
18	〃	〃	C区SI３埋土	(1.5)	—	7.8	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	灰白色	外底回転ヘラケズリ、墨書
19	須恵器	坏	C区SI３埋土	4.5	12.6	6.4	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ロクロ	浅黄橙色	回転糸切
20	〃	〃	C区SI３埋土	4.5	13.4	6.6	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ロクロ	にぶい黄橙色	回転糸切
21	〃	〃	C区SI３埋土	4.3	13.4	7.0	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ロクロ	灰黄褐色	回転糸切
22	〃	〃	C区SI３P２埋土	4.3	13.8	5.8	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ロクロ	にぶい黄橙色	回転糸切　墨書
23	〃	〃	C区SI３カマド埋土	3.6	14.0	6.8	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ロクロ	浅黄橙色	回転糸切　墨書

第106図　C区SI３の土師器、須恵器①(14～23)



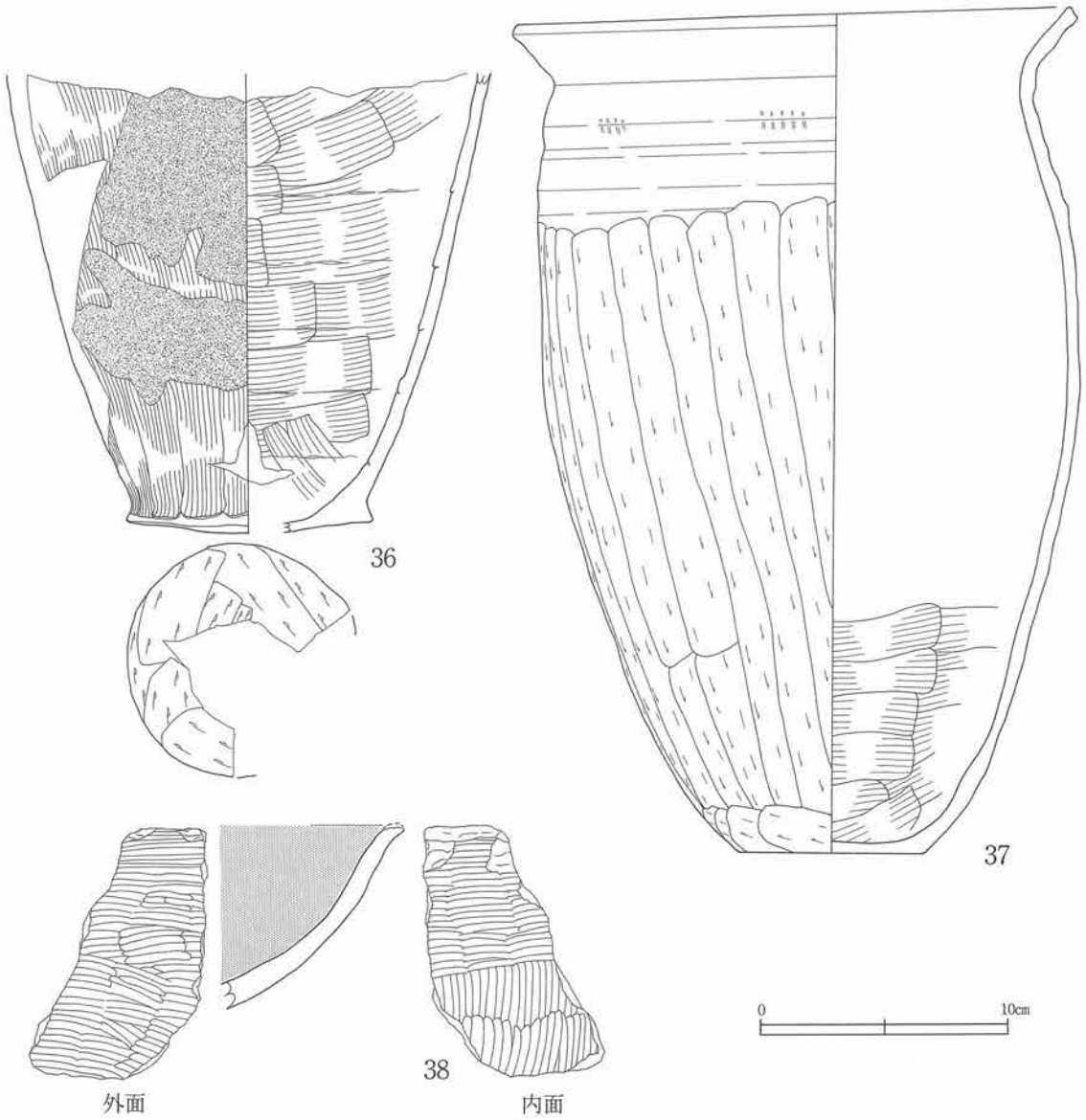
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
24	土師器	長胴甕	C区SI３貼床中	(19.7)	—	8.8	ヘラナデ	ハケメ	にぶい黄橙色	外底面木葉痕
25	〃	〃	C区SI３貼床中	(6.5)	22.4	—	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	ロクロ下地のタタキみえず
26	〃	〃	C区SI３	(19.7)	21.1	—	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ　ヘラナデ	褐灰色	ロクロの下地にタタキ目
27	須恵器	甕	C区SI３埋土、床面	(21.4)	15.1	9.7	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ　ヘラナデ	褐灰色	外面底辺部にタタキ目
28	〃	鉢	C区SI３貼床中	(13.2)	22.9	—	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ	褐灰色	二次被熱している
29	—	土錘	C区SI３P５埋土中	9.0	3.1	—	指頭圧痕	—	橙色	土師質　重さ77.2g

第107図　C区SI３の土師器、須恵器②(24～29)



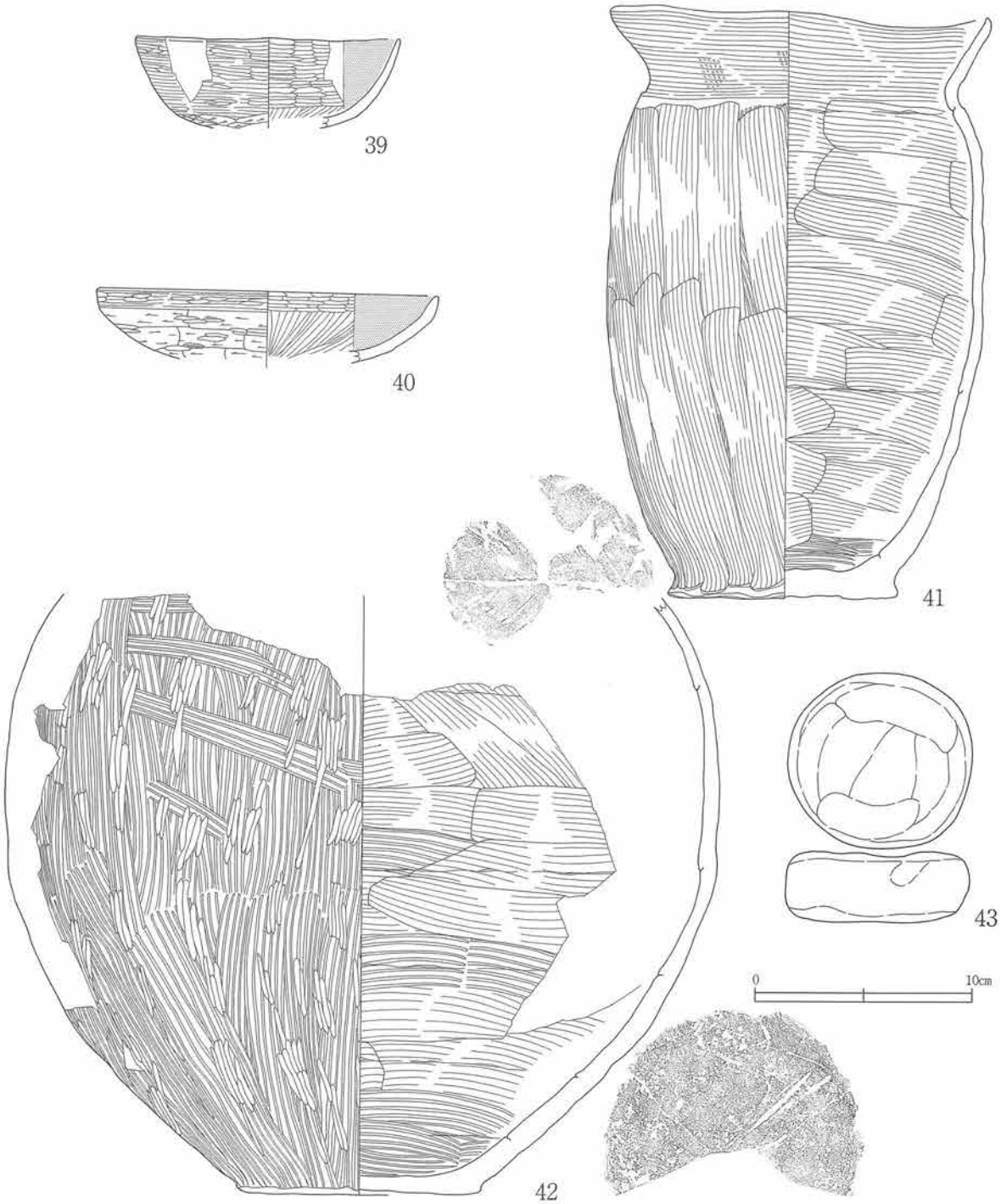
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
30	須恵器	坏	B区SI1カマド燃焼部	(2.5)	—	6.0	ロクロ	ロクロ	橙色	土師質の焼成
31	〃	〃	B区SI1カマド右袖脇	4.7	12.3	6.0	ロクロ	ロクロ	灰白色	回転糸切
32	土師器	長胴甕	B区SI1カマド燃焼部P3	4.4	—	8.5	ヘラケズリ	ヘラナデ	褐灰色	外面焼けた粘土付着
33	〃	〃	B区SI1カマド燃焼部P5	(5.4)	—	7.0	ヘラケズリ	ハケメ	浅黄橙色	外底面ヘラケズリ
34	〃	〃	B区SI1カマド燃焼部	(7.8)	20.4	—	ヘラナデ	ヘラナデ	赤褐色	外面に粘土を塗付
35	〃	〃	B区SI1カマド燃焼部P3、P5	(33.3)	29.3	—	ハケメ ヘラケズリ	ハケメ	橙色	口縁部ヨコナデの下地にハケメ

第108図　B区SI1の土師器、須恵器①(30～35)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
36	土師器	長胴甕	B区SI１カマド燃焼部	(19.0)	—	10.0	ヘラナデ	ヘラナデ	橙色	外面に粘土を塗付
37	〃	〃	B区SI１カマド燃焼部	35.0	23.1	7.5	ﾛｸﾛ ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ﾛｸﾛ ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙色	ロクロの下地にタタキ目あり
38	〃	鉢	B区SI１カマド燃焼部	(7.5)	—	—	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ヘラミガキ	橙色	ロクロ使用の有無不明

第109図　C区SI１の土師器、須恵器②(36～38)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
39	土師器	坏	C区SI４床面No.9	(4.2)	12.2	—	ﾍﾗﾐｶﾞｷ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	灰白色	外底面ヘラケズリ
40	〃	〃	C区SI４床面No.4	(3.2)	15.7	—	ﾍﾗﾐｶﾞｷ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	黒色	外底面ヘラケズリ
41	〃	長胴甕	C区SI４床面No.10	27.7	17.4	10.6	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄橙色	外底面木葉痕
42	〃	球胴甕	C区SI４床面No.2	(27.6)	—	11.5	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄橙色	外底面木葉痕
43	—	支脚？	C区SI４カマド覆土	3.4	8.6	—	指ナデ	—	淡黄色	土製品土師質

第110図　C区SI４の土師器、須恵器(39～43)

C区SI５竪穴住居の土師器・須恵器　(第111～113図、写真図版131・132)

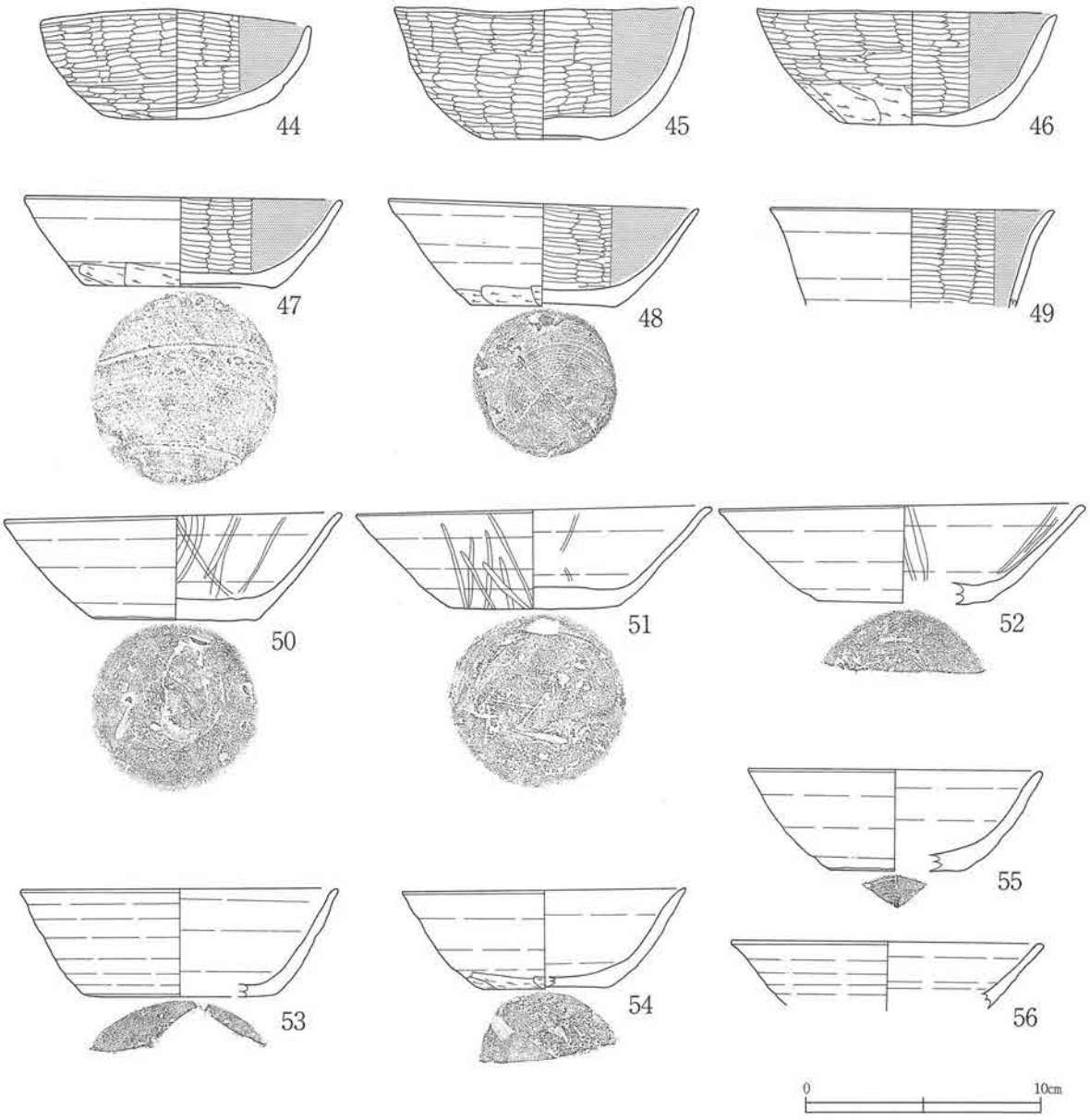
C区SI５は平成15年度C区検出の住居跡である。図示したのは土師器坏６個体（44～49)、須恵器坏７個体(50～56)、ロクロ不使用土師器長胴甕４個体(57～60)、土師器ロクロ使用長胴甕１個体(61)、須恵器甕（62)、須恵器大甕（63)、である。またカマド火焼面に直立した状態で、石製の支脚（64）が出土している。

土師器坏はロクロ不使用のもの（44～46）と、使用のもの（47～49）がある。ロクロ不使用の44は外面に明瞭な段を持っているが、45･46には段が無い。46の外面下半部と外底面はヘラケズリが施される。ロクロ使用の47･48は底辺部に手持ちヘラケズリ調整が施される。47の切り離しは静止糸切、48は回転糸切である。48は糸切痕の上に「×」の線刻が施される。焼成前の線刻である。49のロクロ坏は口縁部の破片で再調整の有無、切り離し方法は不明である。口縁部が外反する器形である。50～56は須恵器坏である。50～53は胎土、器形、火襷の形状が非常に近似し、同じ窯の製品と推測される。切り離しは回転ヘラ切である。53は外面のロクロ目が明瞭である。切り離しは回転ヘラ切である。54は底辺部に手持ちヘラケズリが施されている。ヘラケズリは外底面にも及び、回転糸切の上にヘラケズリが施されている。55は浅黄橙色の色調で、器形、質感、色調がC区SI１出土の４・５・６と近似する。切り離しは回転糸切である。口縁部内面に油煙が付着している。56は非常に硬質な焼成である。口縁部の破片で切り離し方法は不明である。57～60はロクロ不使用の長胴甕である。57～59は頸部に段がある。底部破片60は59と同一個体の可能性が高い。57の口縁部内外面には炭化物が付着している。60の底面にはヘラナデが施されている。61はロクロ使用の中型長胴甕である。体部外面上半はカキメ、下半部にはヘラケズリが施される。下地のタタキ目は詳細に観察したが確認できなかった。62は須恵器甕の下半部片である。外面の調整はロクロとその上に弱いヘラケズリがなされている。底辺部には格子目状タタキ目が露出している。内面はカキメが施される。63は須恵器大甕の体部片である。内外面の表面は灰色の色調であるが、破断面の内部は赤褐色の色調である。外面はタタキ目の上からハケ目状の調整が横位に施されている。内面は上部にのみ、当て具痕があり、下部はナデがなされている。64はカマド火焼面に直立していた石製の支脚である。加工痕は見いだせず、適した形状の自然石をそのまま使用している。石質は砂岩である。（羽柴）

C区SI６竪穴住居の土師器・須恵器　(第114図、写真図版132・133)

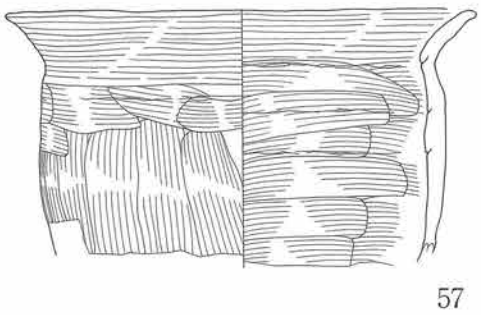
C区SI６は平成15年度C区検出の住居跡である。図示したのは須恵器坏３個体(65～67)、ロクロ不使用土師器長胴甕３個体（68～70)、須恵器甕（71）である。

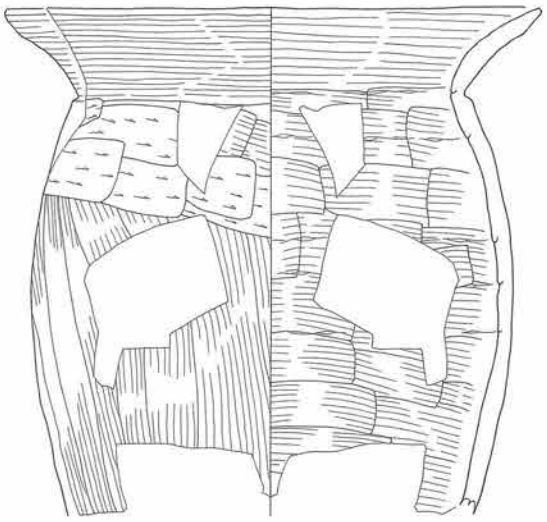
65～67は須恵器坏である。65は酸化炎焼成に似た色調であり、土師器、須恵器の分類に迷ったが、硬質な焼成で、内外面無調整であることから須恵器に分類している。内面と口縁部外面に油煙の付着がある。66と67は器形、質感、火襷の形状が近似し同じ窯の産と推測される。切り離しは回転糸切である。67は口縁部外面に墨書がある。68～70はロクロ不使用の長胴甕である。68は中型の長胴甕で頸部には段がない。外底面にはヘラナデが施される。69は頸部に段があり口縁部が強く外反する。底面には木葉痕が施される。70は長胴甕としたが、バケツ形の特異な器形である。体部外面、外底面には粗いヘラケズリが施されている。口縁部内面には炭化物が付着し煮沸に使用されたことを物語っている。70は須恵器の甕である。口縁部破片で硬い焼成である。（羽柴）

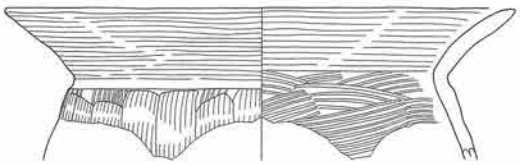


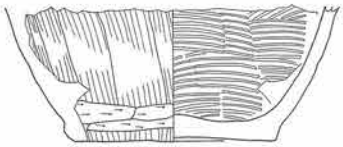
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
44	土師器	坏	C区SI５埋土上部	4.7	11.6	3.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙色	底部丸底
45	〃	〃	C区SI５床面No.7	5.5	12.9	3.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙色	外底面ヘラミガキ
46	〃	〃	C区SI５床直	5.0	12.8	6.2	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラミガキ	黄橙色	陥没部分からも破片出土
47	〃	〃	C区SI５床面	3.8	13.6	8.2	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙色	SK１埋土からも破片出土　静止糸切
48	〃	〃	C区SI５床面No.12	4.5	13.3	6.2	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	外底面に「×」の線刻
49	〃	〃	C区SI５床直上層	(4.2)	12.2	—	ロクロ	ヘラミガキ	浅黄橙色	回転ヘラ切　火だすき痕
50	須恵器	坏	C区SI５埋土上位No.1	4.5	14.5	7.0	ロクロ	ロクロ	灰白色	回転ヘラ切　火だすき痕
51	〃	〃	C区SI５床面No.4	4.4	15.3	4.4	ロクロ	ロクロ	灰白色	回転ヘラ切　火だすき痕
52	〃	〃	C区SI５床面No.9	4.4	15.3	7.2	ロクロ	ロクロ	灰白色	回転ヘラ切
53	〃	〃	C区SI５焼土１内	4.7	13.5	8.4	ロクロ	ロクロ	灰白色	回転ヘラ切
54	〃	〃	C区SI５P4埋土	4.2	12.2	5.4	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	回転糸切の上を回転ヘラケズリ
55	〃	〃	C区SI５埋土上位	4.3	12.6	5.6	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	回転糸切
56	〃	〃	C区SI５カマド内No.12	(2.8)	13.4	—	ロクロ	ロクロ	褐灰色	

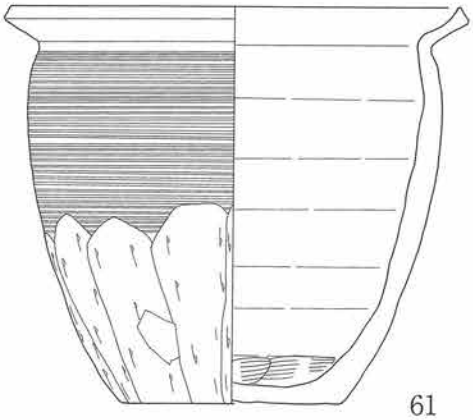
第111図　C区SI５の土師器、須恵器①(44～56)

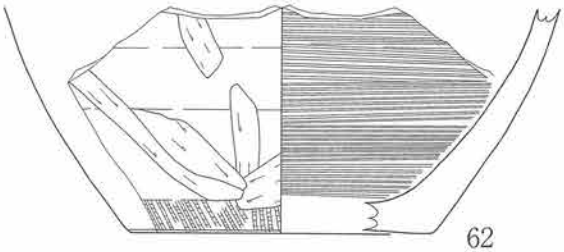

57


58


59


60


61


62

番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
57	土師器	長胴甕	C区SI５床直	(10.2)	18.4	—	ヘラナデ	ヘラナデ	橙色	SK１埋土からも破片出土
58	〃	〃	C区SI５焼土１内	(20.0)	21.0	—	ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	陥没部分からも破片出土
59	〃	〃	C区SI５カマドNo.6、No.14	(6.0)	20.0	—	ハケメ ヘラナデ	ハケメ	浅黄橙色	60と同一個体か
60	〃	〃	C区SI５カマド火焼面No.9	(5.3)	—	8.0	ヘラナデ ヘラケズリ	ハケメ	橙色	外底面ヘラナデ
61	〃	〃	C区SI５焼土１内	15.7	18.2	8.6	カキメ ヘラケズリ	ロクロ	橙色	ロクロ下地のタタキ目みえず
62	須恵器	甕	C区SI５床直	(8.9)	—	12.0	ヘラケズリ タタキ	カキメ	青灰色	底辺部にタタキ目

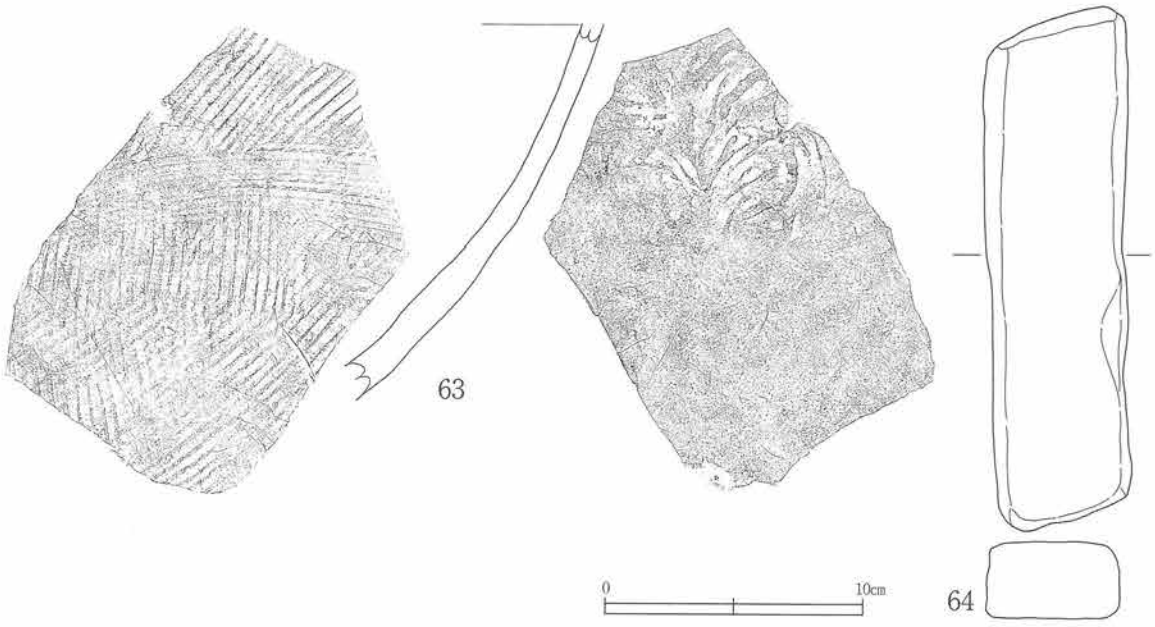
第112図　C区SI５の土師器、須恵器②(57～62)

C区SI７竪穴住居の土師器・須恵器　（第136・137図、写真図版147・148）

C区SI７は平成16年度C区検出の住居跡である。図示したのは土師器坏１個体（218）、ロクロ不使用土師器長胴甕２個体（219・220）、ロクロ使用土師器長胴甕（221）、土師器鉢（222）、須恵器甕（223）である。その他に土錘を49個（224～272）図示している。

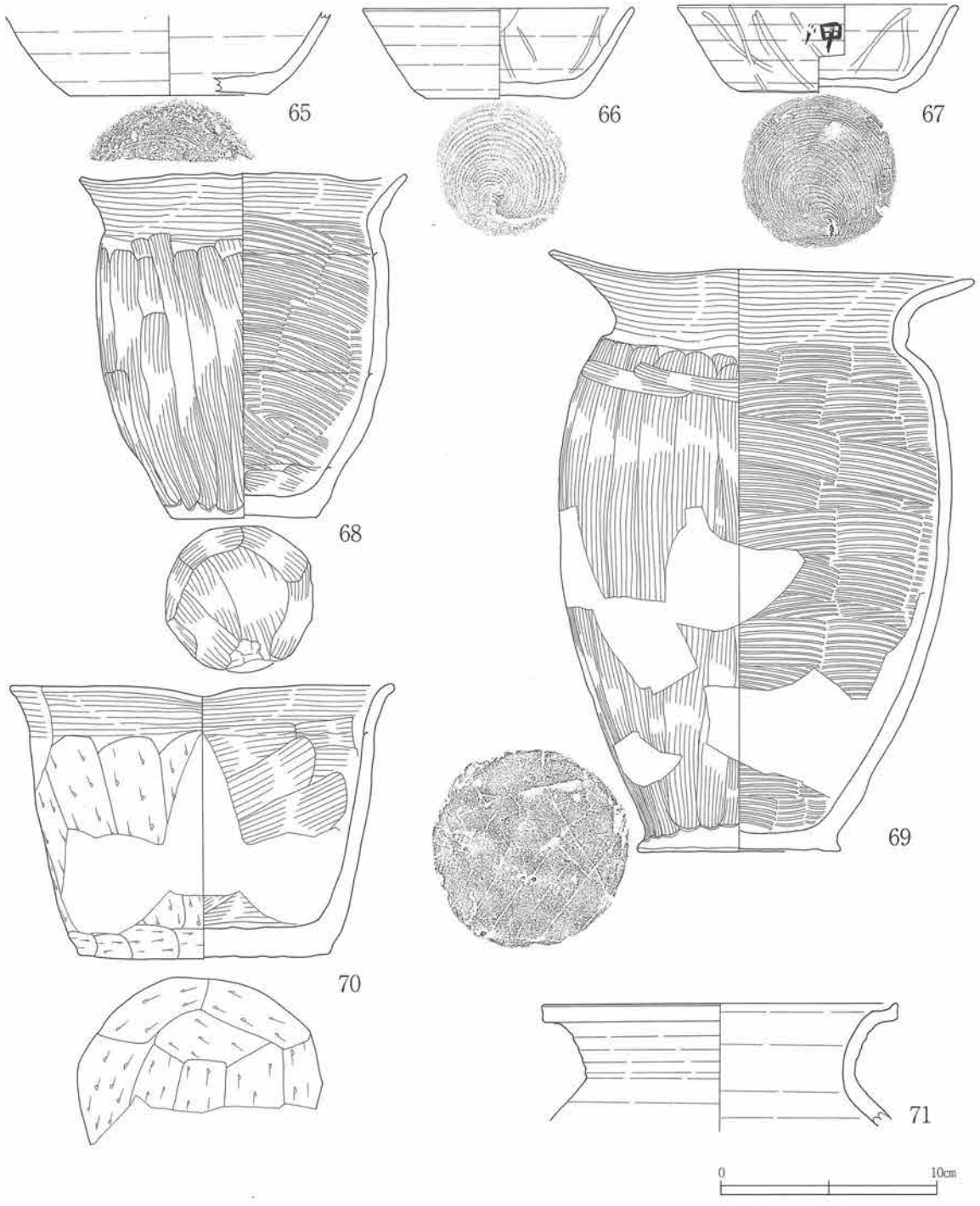
218は土師器坏である。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキで黒色処理である。内面には「×」の線刻が施されている。焼成後の線刻と判断される。外面と外底面に油煙の付着がある。219は小型の土師器長胴甕である。ロクロ不使用で口縁部内面に炭化物が付着する。219は大型の土師器長胴甕である。ロクロ不使用で、横倒しで土圧で潰れた状態で出土した。外面はハケ目の上からヘラナデが施されている。外底面はヘラナデが施される。外面には炭化物が付着し、実際に煮沸に使用したことを物語っている。221はロクロ使用の土師器長胴甕である。図示した破片部位の他に、接合しない口縁部片も出土している。体部外面には焼けた粘土が薄く付着している。222は土師器の鉢である。内外面に緻密なヘラミガキが施されており、下地がロクロ調整か否か判断が難しい。口縁部が真っ直ぐなことから、ロクロ成形と推測される。内面は黒色処理が施されている。223は須恵器甕である。体部片であるがロクロ目を頼りに径を求め、器形を図示した。胎土は灰色で、やや軟質な感じがする。ロクロ目の下地のタタキ目は確認できない。224～272は土錘である。住居検出以前に出土したものもあるが、C区SI７出土品として扱っている。完存品の重量の平均値は13.05gである。土師器と同じ胎土で調整等は確認できない。

C区SI７は埋土中位に十和田ａ降下火山灰がレンズ状に堆積しており、火山灰降下前に廃絶した住居と判断できる。よって出土した土師器、須恵器も十和田a火山灰以前の年代が与えられる。（羽柴）



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
63	須恵器	大甕	C区SI５埋土上位	(15.8)	—	—	タタキ	アテ具痕	灰色	外面にハケメ状の工具痕
64	石	支脚	C区SI５カマド内	20.1	幅5.7	厚3.0	なし	なし	にぶい赤褐色	加工痕はない　火焼面に直立

第113図　C区SI５の土師器、須恵器③(63～64)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
65	土師器	坏	C区SI６埋土No.25-2	(3.7)	—	9.2	ロクロ	ロクロ	黄橙色	土師質の焼成
66	須恵器	坏	C区SI６床直	4.2	12.6	7.0	ロクロ	ロクロ	褐灰色	回転糸切　火だすき痕
67	〃	〃	C区SI６床直	4.1	13.0	7.3	ロクロ	ロクロ	黒色	回転糸切　火だすき痕
68	土師器	長胴甕	C区SI６カマド内	16.1	15.3	6.8	ヘラナデ	ハケメ	にぶい黄橙色	外底面ヘラナデ
69	〃	〃	C区SI６床直	27.2	19.9	5.5	ヘラナデ	ハケメ	にぶい黄橙色	陥没部分からも破片出土
70	〃	〃	C区SI６床直	12.8	18.0	11.8	ヘラケズリ	ヘラナデ	明赤褐	外底面ヘラケズリ
71	須恵器	甕	C区SI６陥没部分	(5.8)	16.5	—	ロクロ	ロクロ	青黒色	

第114図　C区SI６の土師器、須恵器(65～71)

D区SI 1 竪穴住居の土師器　（第115～118図、写真図版133～136）

D区SI 1は平成15年度D区検出の住居跡である。図示したのは土師器坏６個体(72～77)、土師器小型土器１個体(78)、土師器鉢３個体(79～81)、土師器台付甕１個体(82)、土師器小型長胴甕１個体(83)、土師器長胴甕10個体 (84～93) である。

72～77は土師器坏である。72は内面にヘラミガキが施されておらず、黒色処理もなされていない。体部外面には明瞭な段がある。73は平底で体部内外面に段がない。外面のヘラミガキの下地はハケメである。74は外面に明瞭な段がある。外底面にもヘラミガキが及んでいる。75は内外面に段がない。内面はヘラミガキであるが黒色処理はなされていない。二次被熱により炭素がとんだ可能性もある。76、77は体部外面には段がある。また、どちらも外面体部下半はヘラケズリで外底面にも及んでいる。内面にはヘラミガキが施されるが黒色処理はなされていない。76は底面が平らではなく座りが悪い。

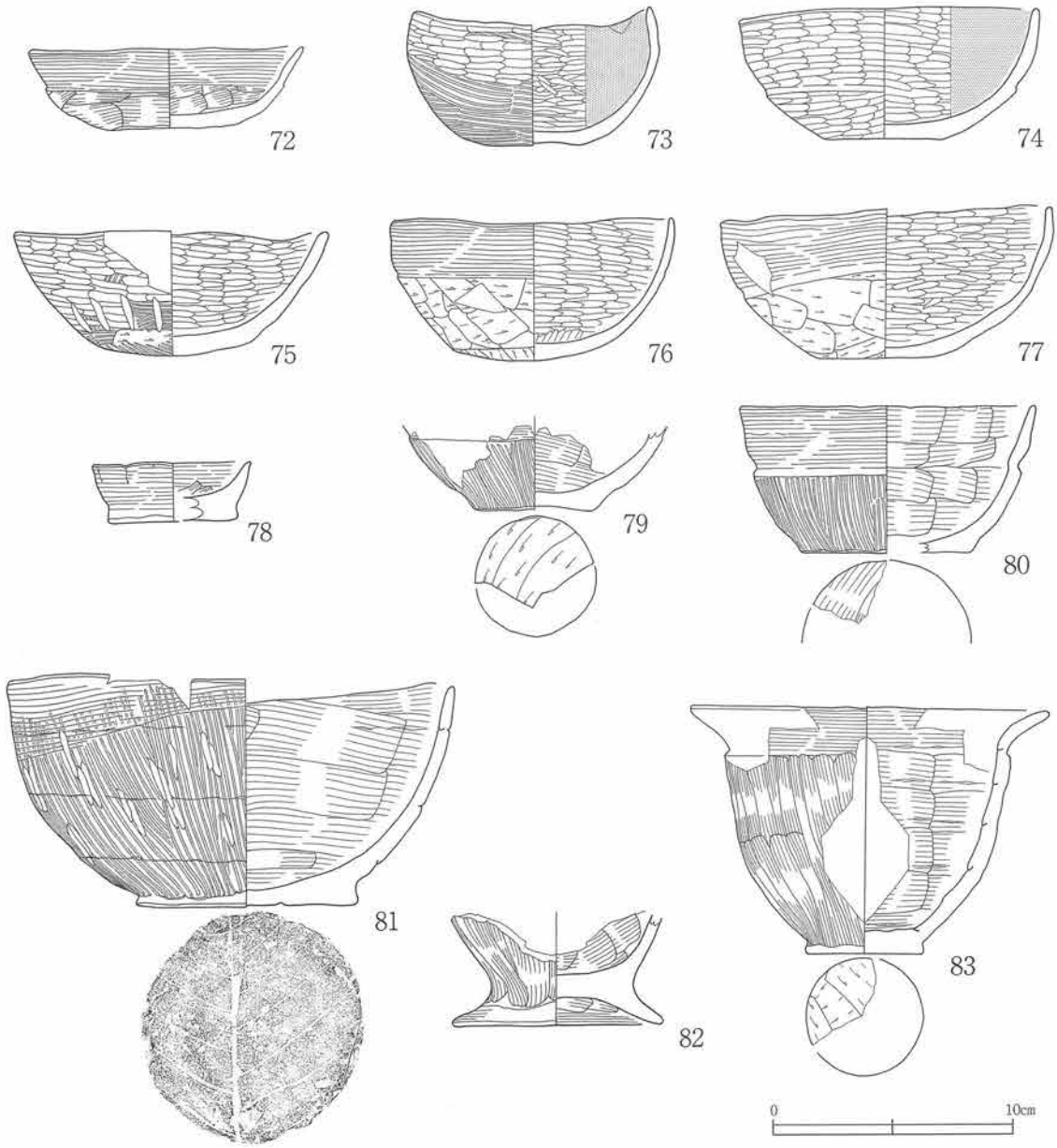
78は小型土器である。内外面にヨコナデが施されている。底面にはヘラナデ？が施されている。79～81は土師器鉢である。79・80は法量的に坏と変わりがないが、平底で長胴甕と共通する調整がおこなわれていることから、坏と区別して鉢とした。どちらも体部外面にはハケ目が施され、頸部に段があり、口縁部はヨコナデである。81は球胴甕の上半部を切り離した様な器形である。外底面には木葉痕がある。外面は上端までハケメが施され、口縁部はその上からヨコナデをおこなっている。

82は土師器台付甕である。ハの字に開く台を持つが、甕部分は欠損しており全体の形状は不明である。２破片からなるが二次被熱しており、破片どうしの色調が異なる。

83は小型の土師器長胴甕である。底径が小さい器形である。体部外面はヘラナデであるが、強くなで付けているためヘラミガキのような光沢を放っている。頸部には段がある。

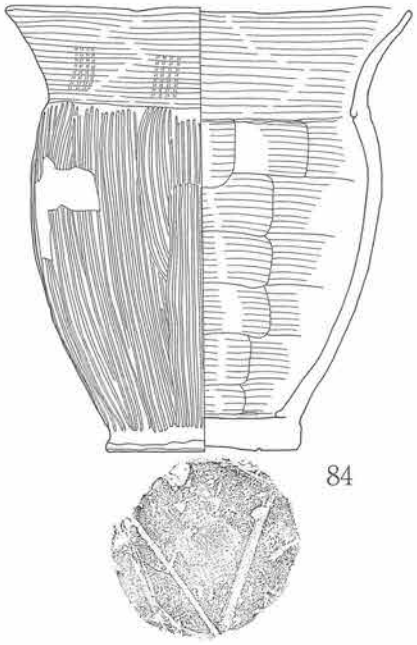
84～93は土師器長胴甕である。すべてロクロ不使用のものである。84～87は器高が20cm程度の中型の長胴甕である。いずれも頸部に段があり、体部外面の調整はハケメである。84は被熱のため器面が荒れ内外面に炭化物が付着している。85・86は破片によって色調が異なっている部分があり、割れた後に２次被熱していることを示している。またどちらも内外面に炭化物が付着している。87は二次被熱による器面の荒れが著しい。底部を欠損する個体である。

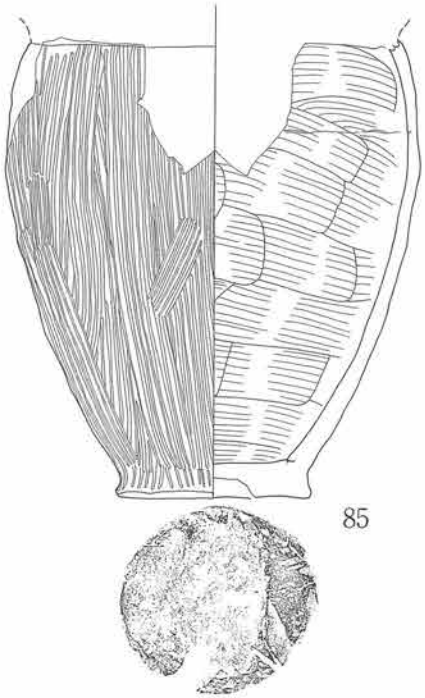
88～93は器高26cm程度の大型の長胴甕である。88・91・92・94は内外面に炭化物が付着し、煮沸に使用した痕跡が存在するが、89・90・93には炭化物の付着が全くなく、器面も灰白色で硬く、火にかけて煮沸に使用した痕跡が全く無く、未使用品と考えられる。また不明瞭なものもあるが、いずれにも頸部に段がある。外底面も確認できるものはいずれも木葉痕がある。　（羽柴）

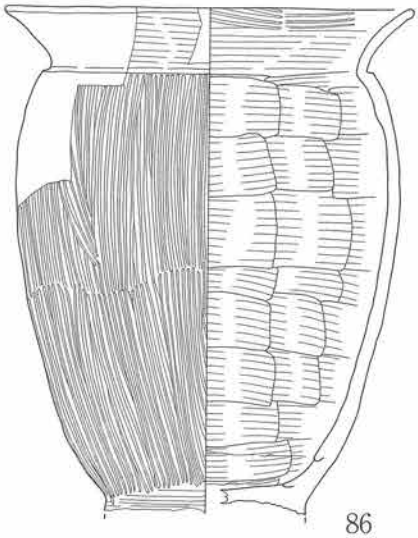


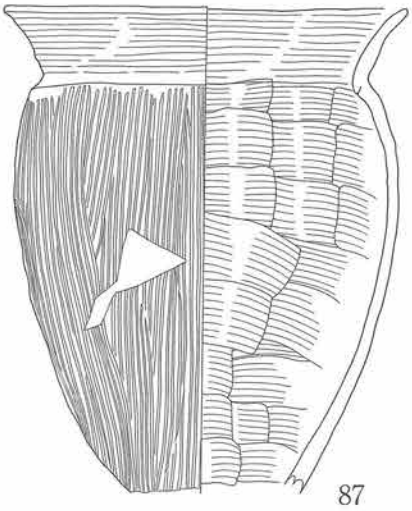
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
72	土師器	坏	D区SI１床面No.9	3.4	11.5	5.4	ヨコナデ　ヘラナデ	ヨコナデ　ヘラナデ	黄橙色	内面ヘラミガキなし
73	〃	〃	D区SI１床面No.10	5.8	9.8	4.0	ハケメ　ヘラミガキ	ヘラミガキ	明黄褐	底面平底
74	〃	〃	D区SI１床面No.14	5.5	12.6	5.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙色	底面平底
75	〃	〃	D区SI１床面No.4、No.19	5.3	13.2	—	ハケメ　ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙色	底面丸底
76	〃	〃	D区SI１2層下位	7.0	11.8	—	ヨコナデ　ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄橙色	底面丸底
77	〃	〃	D区SI１床面No.12	6.6	13.9	—	ヨコナデ　ヘラケズリ	ヘラミガキ	黄橙色	底面丸底
78	〃	小型土器	D区SI１カマド内	2.5	6.7	5.4	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色	外底面ヘラナデ
79	〃	鉢	D区SI１床面No.17	(3.6)	—	4.8	ハケメ	ヘラナデ	黒色	外底面ヘラケズリ
80	〃	〃	D区SI１床面	6.2	12.4	7.1	ハケメ	ヘラナデ	褐灰色	外底面ヘラナデ
81	〃	〃	D区SI１床面No.13	9.5	18.8	9.3	ハケメ　ヘラミガキ	ヘラナデ	灰白色	口縁部ヨコナデ
82	〃	台付甕	D区SI１床面No.6	(4.8)	—	8.8	ヘラナデ	ヘラナデ	橙色	台部内面ヘラナデ
83	〃	長胴甕	D区SI１床面No.8	10.4	15.0	5.0	ヘラナデ	ヘラナデ	灰白色	外底面ヘラケズリ

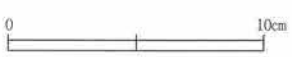
第115図　D区SI１の土師器、須恵器①(72～83)





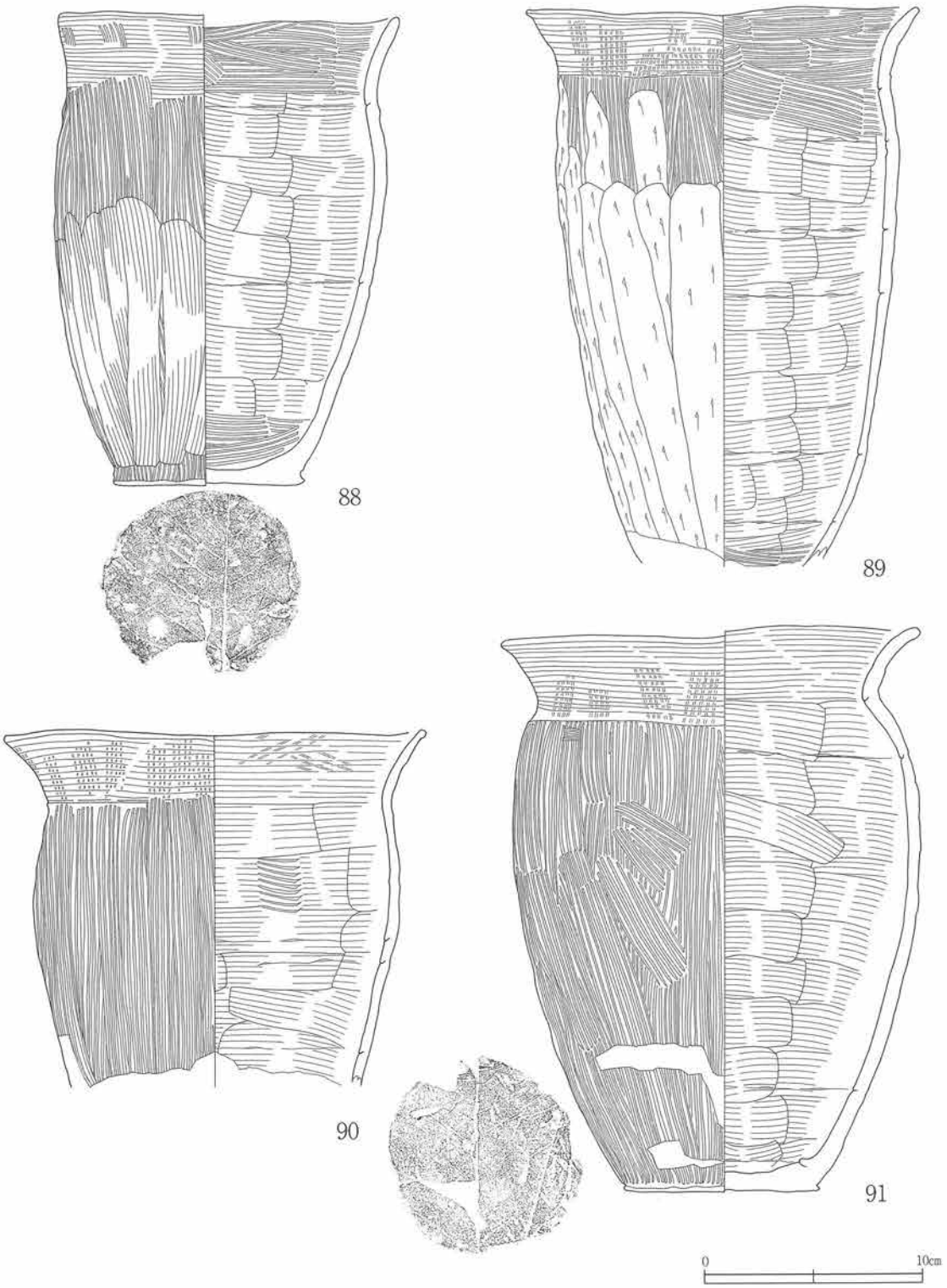






番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
84	土師器	長胴甕	D区SI１床面No.2	17.7	15.7	7.3	ハケメ	ヘラナデ	橙色	外底面木葉痕
85	〃	〃	D区SI１カマド内	(18.2)	—	7.4	ハケメ	ヘラナデ	黄橙色	外底面木葉痕
86	〃	〃	D区SI１床面No.7	(20.0)	16.0	—	ハケメ	ヘラナデ	灰白色	
87	〃	〃	D区SI１床面No.3	(19.2)	15.8	—	ハケメ	ヘラナデ	明褐灰色	

第116図　D区SI１の土師器、須恵器②(84～87)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
88	〃	〃	D区SI１床面No.15	22.2	15.7	9.0	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾅﾃﾞ	ヘラナデ	にぶい黄褐色	外底面木葉痕
89	〃	〃	D区SI１床面No.1	(26.2)	18.2	—	ﾊｹﾒ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰白色	使用痕がみいだせない
90	〃	〃	D区SI１2層上面	(16.4)	19.6	—	ハケメ	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾅﾃﾞ	浅黄橙色	
91	〃	〃	D区SI１床面No.11、18	26.5	19.4	9.0	ハケメ	ヘラナデ	灰白色	外底面木葉痕

第117図　D区SI１の土師器、須恵器③(88～91)

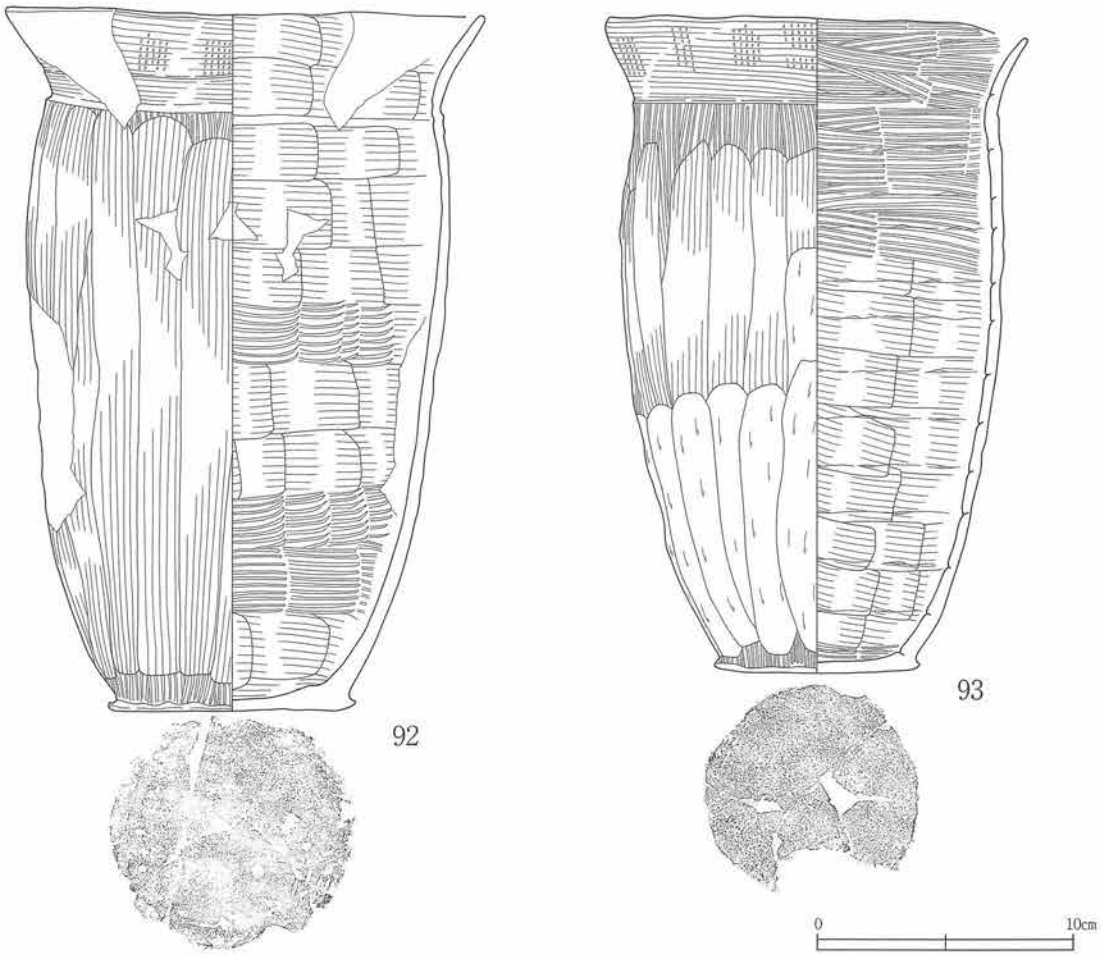
D区SI２竪穴住居の土師器・須恵器　（第119図、写真図版136）

D区SI２は平成15年度D区検出の住居跡である。図示したのは土師器坏１個体（94）、土師器長胴甕１個体（95）、須恵器大甕１個体（96）である。

94は土師器坏である。底辺部と外底面に回転ヘラケズリの再調整が施されている。切り離しの回転糸切痕がヘラケズリ調整の下地に確認できる。また外面口縁部に墨書がある。墨書は「栄」の字が正位に書かれている。そして墨書の背面に線刻がある。焼成後に線刻されたものである。また外面に油煙の付着がある。

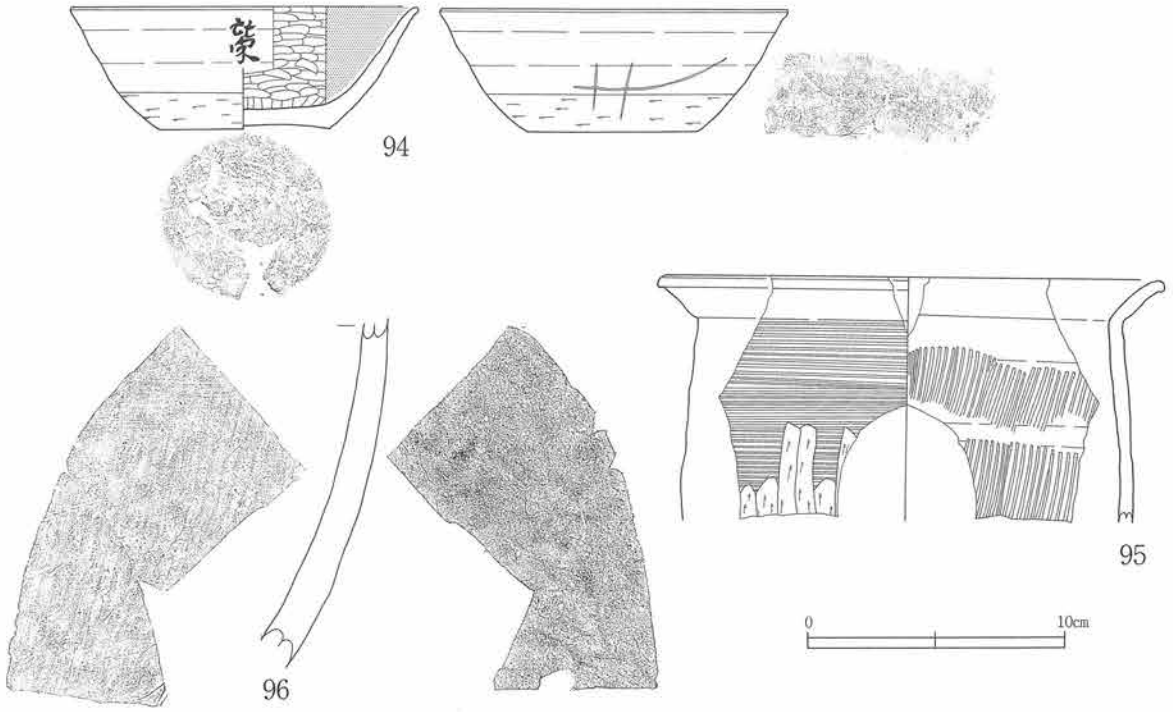
95はロクロ使用の長胴甕である。外面にはカキメ、内面にはロクロ調整の上に縦位のハケメが施されている。ロクロ下地のタタキ目は詳細に観察したが確認できなかった。外面口唇部と口縁部内面に炭化物が付着している。

96は須恵器大甕である。外面には格子目状のタタキ目とヘラによるナデが施されている。内面のアテ具痕ははっきりしない。また内面を擦った痕跡があり、滑らかになっている部分がある。同一個体の破片がⅣD07グリッド７層（平成15年C区）から出土している。　（羽柴）



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
92	土師器	長胴甕	D区SI１カマド脇	27.5	18.9	9.7	ハケメ　ヘラナデ	ハケメ　ヘラナデ	浅黄橙色	外底面木葉痕
93	土師器	長胴甕	D区SI１床面No.5	25.9	16.5	8.1	ハケメ　ヘラケズリ	ハケメ　ヘラナデ	灰白色	使用痕みいだせない

第118図　D区SI１の土師器、須恵器④(92～93)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
94	土師器	坏	D区SI２焼土付近	4.9	13.6	6.6	ﾛｸﾛ　ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	浅黄橙色	外面油煙付着
95	〃	長胴甕	D区SI２焼土付近	(9.6)	19.8	—	ｶｷﾒ　ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛ　ﾊｹﾒ	褐色	
96	須恵器	大甕	D区SI２焼土付近	(13.5)	—	—	タタキ目	アテ具痕？	青黒色	内面を擦っている

第119図　D区SI２の土師器、須恵器(94～96)

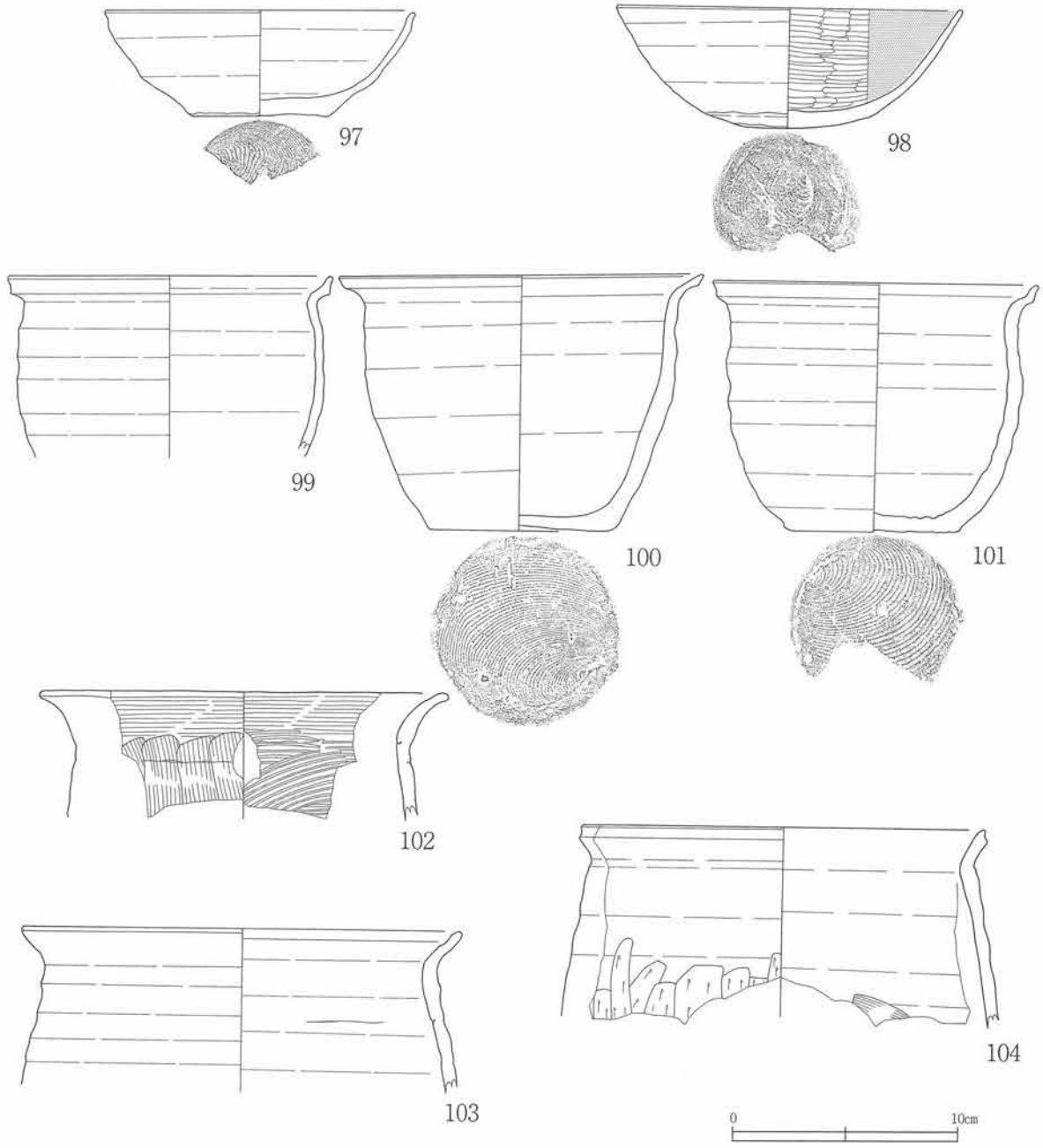
E区SI１竪穴住居の土師器・須恵器　(第120～122図、写真図版137・138)

E区SI１は平成15年度E区検出の住居跡である。この住居の埋土は十和田ａ降下火山灰を層状に含んでおり、出土土師器、須恵器の年代の一端を示している。図示したのは土師器坏２個体(97・98)、土師器小型長胴甕３個体(99～101)、ロクロ不使用土師器長胴甕１個体(102)、ロクロ使用土師器長胴甕５個体(103～107)、須恵器壺１個体(108)、須恵器長頸壺１個体(109)、須恵器大甕１個体(110)である。

97･98は土師器坏である。97は内外面ロクロ調整のみであるが、土師質の焼成であるので土師器としている。内面に炭化物が付着しているが破断面にも付着があり、割れた後の付着と判断される。98は内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。外底面は回転糸切であるが、切り離し後底面が変形して丸底状になり、座りが悪い。

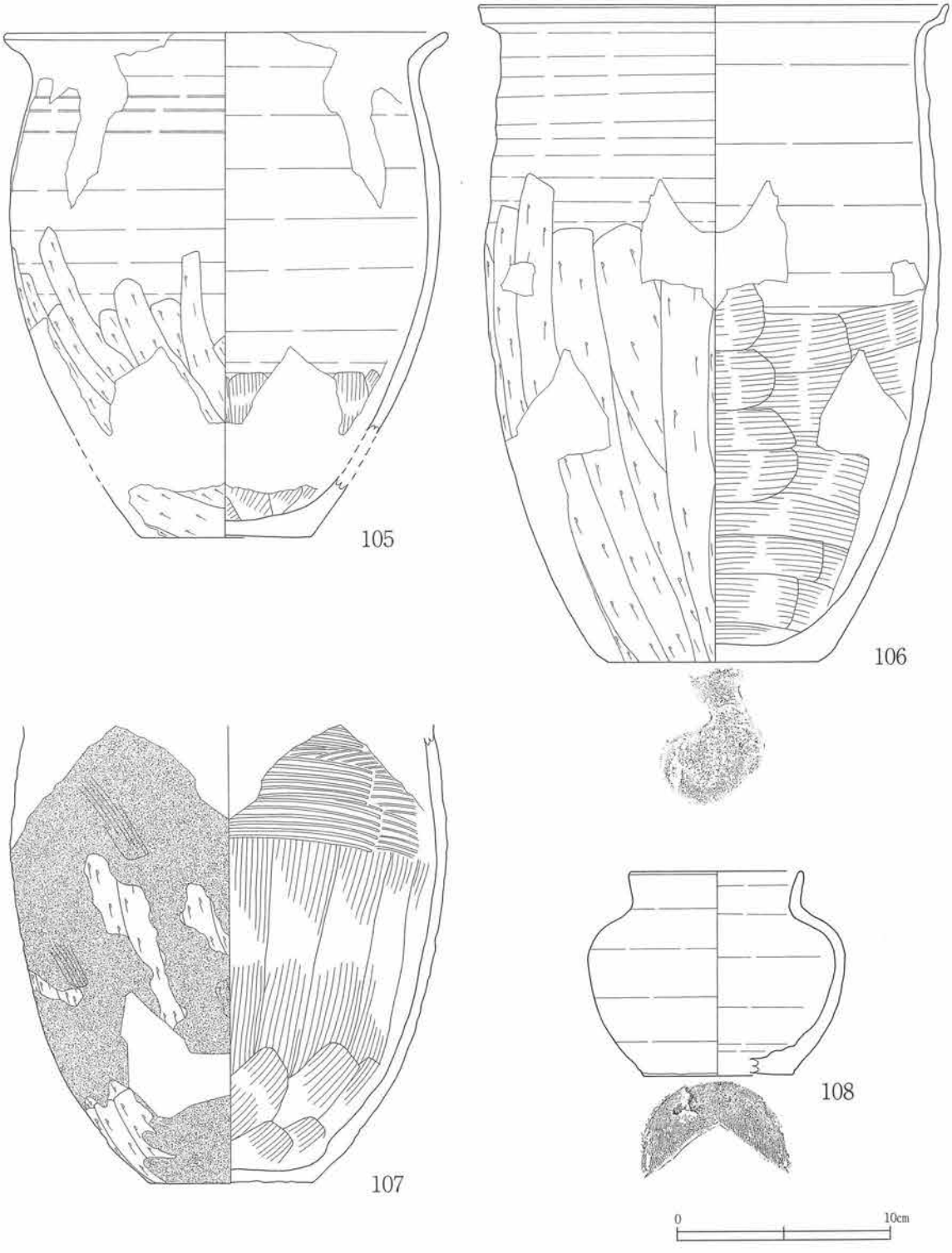
99～101は小型のロクロ長胴甕である。いずれもロクロ調整のみで、内外面に炭化物が付着する。99は底部を欠損するが、100・101の切り離しは回転糸切である。

102はロクロ不使用の長胴甕である。頸部には段がない。103～107はロクロ使用の長胴甕である。103・105は口唇端部が丸く、104・106は口唇端部に面取りがある。いずれにもロクロの下地のタタキ目は存在しない。105は底部が接合しないが、上半部と同一個体と判断し図上で器形を復元した。106は底面に砂粒が付着する「砂底」である。内外面に炭化物が顕著に付着する。107は外面に砂混じりの粘土が付着する。粘土を塗り付けた単位が読みとれ、人為的、意図的な粘土の塗り付けと判断される。



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
97	土師器	坏	E区SI１焼土１覆土	4.7	13.8	6.0	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	土師質の焼成
98	〃	〃	E区SI１焼土１覆土	5.4	15.4	(4.0)	ロクロ	ヘラミガキ	明黄褐色	底部が丸底に変形している
99	〃	長胴甕	E区SI１焼土１覆土	(8.1)	14.2	—	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	内外面炭化物付着
100	〃	〃	E区SI１2層P５	11.6	16.3	8.0	ロクロ	ロクロ	にぶい橙色	内外面炭化物付着
101	〃	〃	E区SI１焼土１覆土	11.2	14.5	7.8	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙色	内外面炭化物付着
102	〃	〃	E区SI１焼土１覆土	(5.7)	18.2	—	ヘラナデ	ハケメ	にぶい橙色	ロクロ不使用
103	〃	〃	E区SI１5層P１	(7.3)	19.5	—	ロクロ	ロクロ	浅黄褐色	
104	〃	〃	E区SI１焼土１覆土	(8.6)	18.0	—	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ　ヘラナデ	浅黄褐色	

第120図　E区SI１の土師器、須恵器①(97～104)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
105	土師器	長胴甕	E区SI１3層	(24.0)	21.0	8.0	ﾛｸﾛ　ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛ　ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐灰色	体部と底部は接合しない
106	〃	〃	E区SI１焼土１覆土	31.3	22.2	10.0	ﾛｸﾛ　ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛ　ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰黄褐	外底面砂粒付着
107	〃	〃	E区SI１5層P１	(21.8)	—	7.7	ヘラケズリ	ﾊｹﾒ　ﾍﾗﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色	外面粘土塗り　ロクロ甕
108	須恵器	壺	E区SI１2層P４	9.7	8.2	7.0	ロクロ	ロクロ	青黒色	内外面器面がはじけている

第121図　E区SI１の土師器、須恵器②(105～108)

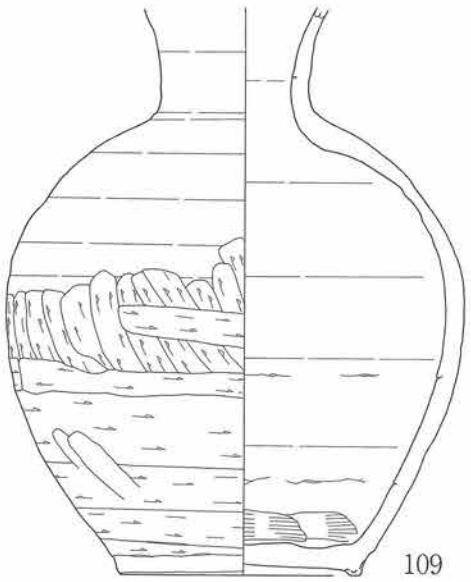
108は須恵器の壺である。口縁部が短く、短頸壺とすべきであろうか。内外面の器面が全体にはじけて凸凹になっている。底面の切り離しは回転糸切りである。109は須恵器長頸壺である。口縁部が欠損するが、それ以外はほぼ完存品である。底面に低い高台が付くが、剥離している部分があり貼り付け高台と判断できる。高台内にはわずかな砂粒がドーナツ状に付着し、中心部分には指頭の圧痕が顕著に付く。頸部に接合の痕跡は明瞭に見いだせず、頸部より上も体部からロクロで引き出して成形した可能性が高い。外面体部下半は回転速度の遅い、回転ヘラケズリ調整が施されている。

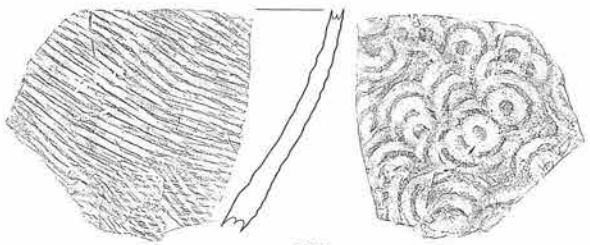
110は須恵器大甕の体部破片である。外面には格子目状タタキ目、内面には同心円状のアテ具痕が明瞭に施される。外面のタタキ目は交差して施されている部分がある。　（羽柴）

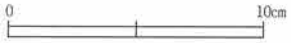
E区SI３竪穴住居の土師器・須恵器　（第123図、写真図版139）

E区SI３は平成15年度E区検出の住居跡である。図示したのは土師器坏１個体（111）、須恵器坏１個体（112）、土師器長胴甕２個体（113・114）である。

111はロクロ不使用の土師器坏である。カマド覆土からの出土で二次被熱が著しく、内面の黒色処理もとんでいる。体部外面に段はない。外面体部下半はヘラケズリである。112はロクロ使用の須恵器坏である。口縁部のみの破片で切り離し方法は不明である。B区SI１出土の須恵器坏31と胎土、色調が近似する。113・114はロクロ不使用の土師器長胴甕である。双方の調整、器形、胎土が類似するが別個体である。どちらも内外面に炭化物が付着している。114は頸部に段がない器形である。　（羽柴）

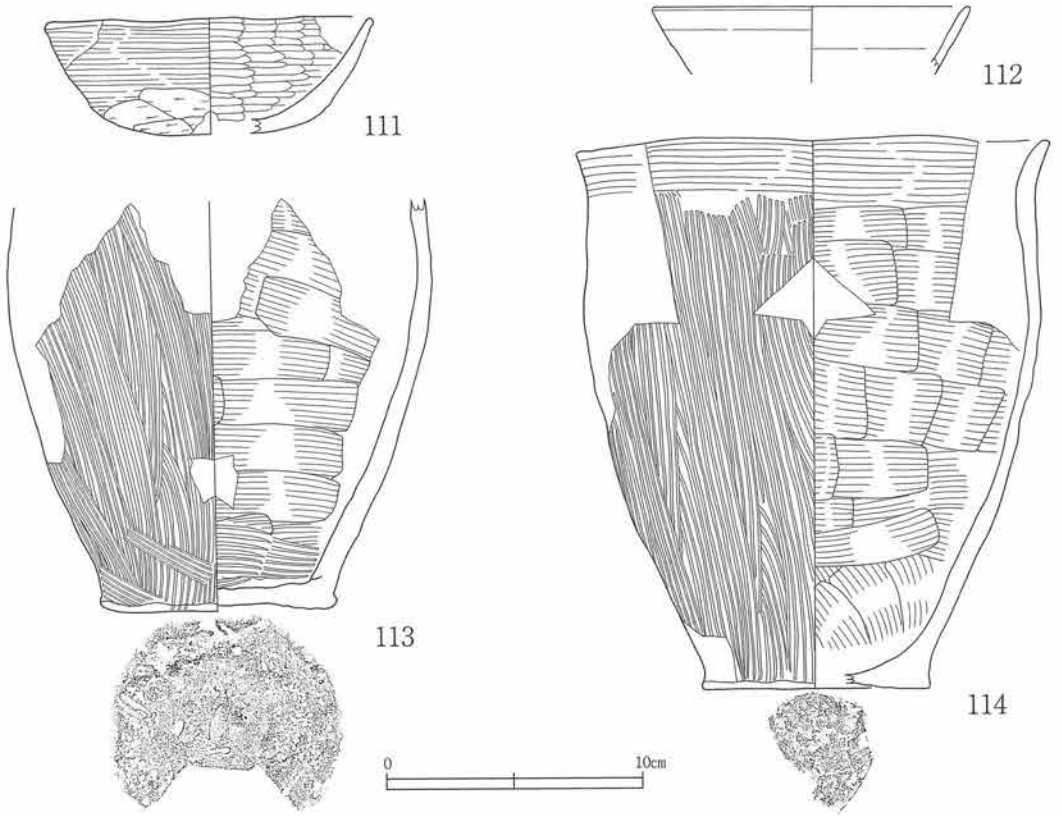




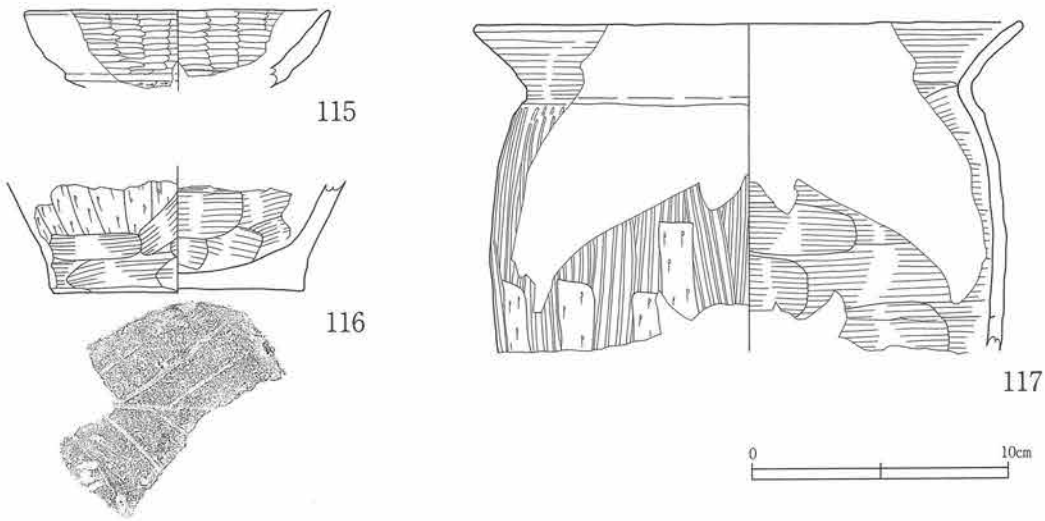


番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
109	〃	長頸壺	E区SI１床面P２	(22.5)	—	9.5	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ロクロ	灰色	外面下半回転ヘラケズリ
110	〃	大甕	E区SI１焼土１覆土	(8.6)	—	—	タタキ目	アテ具痕	黄灰色	

第122図　E区SI１の土師器、須恵器③(109～110)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
111	土師器	坏	E区SI３カマド覆土	5.6	12.8	—	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ヘラミガキ	明赤褐色	二次被熱している
112	須恵器	坏	E区SI３床面	(2.8)	12.4	—	ロクロ	ロクロ	灰白色	
113	土師器	長胴甕	E区SI３床面P２	(16.2)	—	9.2	ハケメ	ﾊｹﾒ ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙色	外底面木葉痕
114	〃	〃	E区SI３床面P２	21.8	18.6	9.0	ハケメ	ヘラナデ	褐灰色	113とは別個体



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
115	土師器	坏	E区SI４カマド覆土	(3.1)	12.0	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙色	外面下半　ヘラケズリ
116	〃	長胴甕	E区SI４カマド覆土	(4.3)	—	10.0	ﾍﾗｹｽﾞﾘ ﾍﾗﾅﾃﾞ	ヘラナデ	赤橙色	外底面木葉痕
117	〃	〃	E区SI４カマド覆土	(13.0)	21.3	—	ﾊｹﾒ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラナデ	灰白色	

第123図　E区SI３の土師器、須恵器(111～114)
E区SI４の土師器、須恵器(115～117)

E区SI 4 竪穴住居の土師器　（第123図、写真図版139）

E区SI 4 は平成15年度E区検出の住居跡である。図示したのは土師器坏 1 個体（115）、土師器長胴甕 2 個体（116・117）である。

115は土師器坏である。内面に黒色処理が存在しないが、二次被熱により炭素がとんだと推測される。体部外面には明瞭な段があり、内面にも段が認められる。外面体部下半にはヘラケズリが施されている。

116･117はロクロ不使用の土師器長胴甕である。116は底部片で木葉痕がつく。117は体部上半の破片で、色調、胎土、硬さ、質感がD区SI 1 出土の長胴甕89・90・93に近似する。頸部には段があり、体部外面にはハケメ、ヘラケズリが施される。（羽柴）

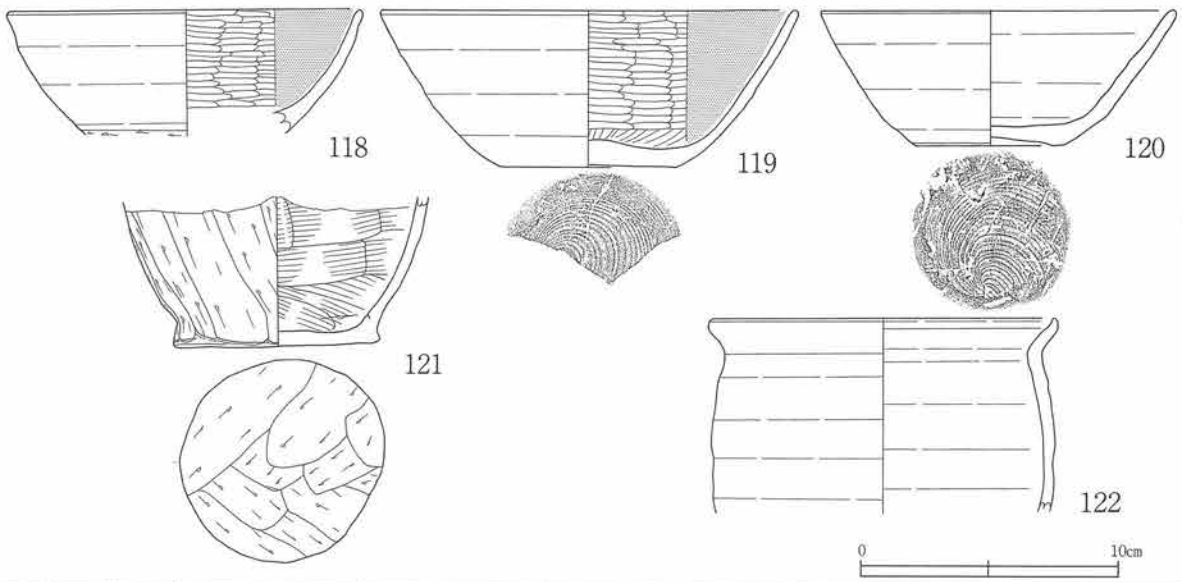
E区SX 1 窪み状遺構の土師器、須恵器　（第124図、写真図版139）

E区SX 1 は平成15年度E区検出の窪み状遺構である。図示したのは土師器坏 2 個体（118・119）、須恵器坏 1 個体（120）、ロクロ不使用土師器長胴甕 1 個体（121）、ロクロ使用土師器長胴甕 1 個体（122）である。

118・119は内面黒色処理の土師器坏である。118は底辺部に回転ヘラケズリの再調整が入るが119にはない。また118の外面には油煙？が付着している。どちらの個体も剥離した状態で割れているが、二次被熱の痕跡は見いだせない。

121はロクロ不使用の長胴甕の底部～体部下半の破片である。やや小振りではあるが、大型の長胴甕と推測される。外底面にはヘラケズリ調整が施される。

122は小型のロクロ土師器長胴甕である。体部外面は器面が荒れており、ロクロ以外に調整が施されているかどうか判断が難しい。口縁部内面には炭化物が帯状に付着する。（羽柴）



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
118	土師器	坏	E区SX 1 埋土P 4	(4.9)	14.0	—	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ	にぶい黄橙色	外面底辺部に回転ヘラケズリ
119	〃	〃	E区SX 1 埋土P 7、P 8	6.2	16.4	6.8	ロクロ	ヘラミガキ	黄橙色	再調整がない
120	須恵器	〃	E区SX 1 埋土P 1	5.4	13.9	5.9	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転糸切
121	土師器	長胴甕	E区SX 1 埋土P 5	(5.9)	—	8.1	ヘラケズリ	ヘラナデ	褐色	外底面ヘラケズリ
122	〃	〃	E区SX 1 焼土 1 内P 6	(7.7)	13.8	—	ロクロ	ロクロ	にぶい橙色	口縁内面に炭化物帯状に付着

第124図　E区SX 1 の土師器、須恵器（118～122）

E区焼土１の土師器　（第125図、写真図版140）

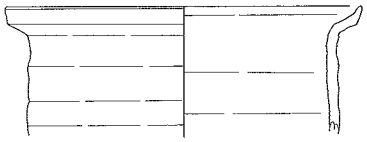
E区焼土１は平成15年度E区検出の現地性焼土遺構である。この焼土は十和田ａ降下火山灰を含むE区の基本土層２層上面の検出であり、十和田ａ火山灰降下に近い時期の所産と推測される。図示したのはロクロ使用土師器長胴甕２個体（123・124）である。123は小型のロクロ土師器長胴甕である。内外面に炭化物が付着している。124は大型のロクロ長胴甕である。ロクロ下地のタタキ目は存在しない。内外面には炭化物が付着する。　（羽柴）

その他の遺構の土師器、須恵器　（第126図、写真図版140）

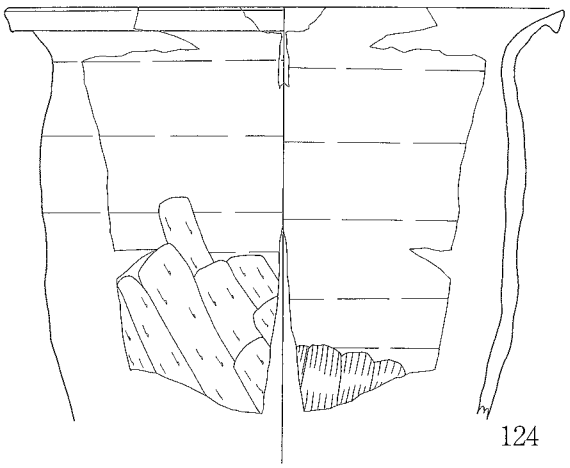
上記以外の遺構出土の土師器、須恵器を一括で示す。各々の出土遺構は表中に記してある。

125は内外面ロクロ調整のみであるが、土師質の焼成と判断し土師器坏とした。質感、胎土は11世紀代のかわらけにも似るがかわらけかどうか確定できない。ここでは一応９～10世紀の土師器として示す。外面には墨書が施されている。126は須恵器坏である。胎土、質感はC区SI３出土の22・23に非常に類似する。外面底辺部には手持ちヘラケズリの再調整が施される。外面に墨書が施される。墨書は横位に施された文字であるが、何の文字か読みとれない。127は須恵器坏である。色調はにぶい橙色であるが硬い焼成で須恵器とした。切り離しは回転糸切で、口縁端部が外側に屈曲している。128は須恵器の甕と推測される。体部中～上半の破片と思われるが小破片のためはっきりしない。体部外面には断面が三角形の凸帯が施されている。129はロクロ使用の長胴甕である。ロクロ下地にタタキ目は存在しない。130は須恵器坏である。色調はにぶい橙色であるが、硬い焼成で須恵器とした。外底面に「本」の字の墨書が施されている。131はロクロ土師器長胴甕である。体部外面に粘土が付着している。人為的に塗布したものと推測される。ロクロ下地のタタキ目は確認できない。132は土師器堝である。ロクロ使用で、ロクロ下地にタタキ目が確認できる。外面にはわずかに炭化物が付着する。

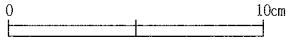
（羽柴）



123

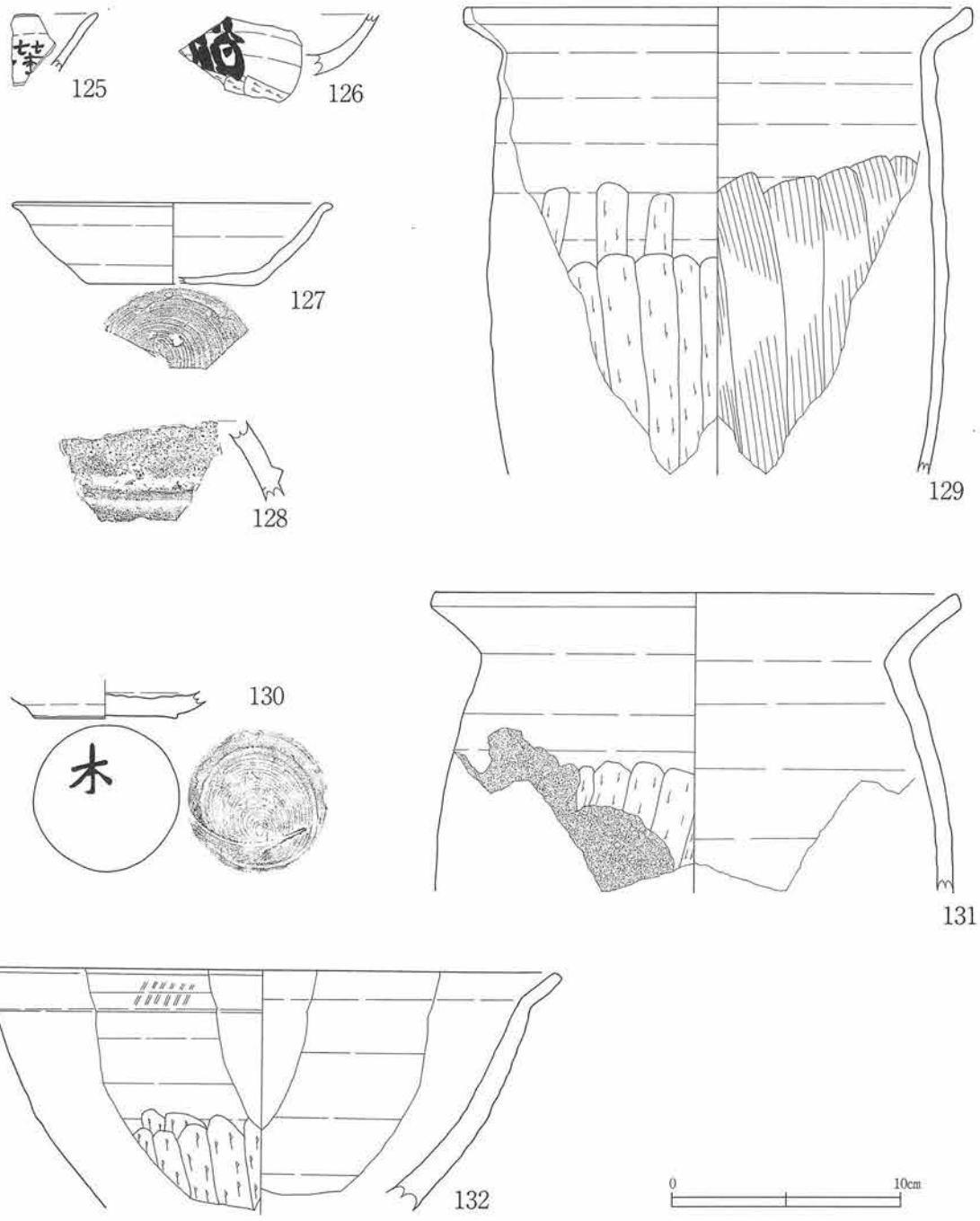


124



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
123	土師器	長胴甕	E区焼土１周辺	(5.1)	14.1	—	ロクロ	ロクロ	橙色	IB53グリッドから出土
124	〃	〃	E区焼土１周辺	(16.2)	22.1	—	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ　ヘラナデ	黒褐色	IB53、IB42グリッドから出土

第125図　E区焼土１の土師器、須恵器（123～124）



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
125	土師器	坏	01SK６埋土	(2.6)	—	—	ロクロ	ロクロ	にぶい橙色	墨書あり　土師質の焼成
126	須恵器	〃	02SK７埋土	(2.6)	—	—	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	にぶい黄橙色	墨書あり
127	〃	〃	B区沢埋土	3.6	14.1	7.5	ロクロ	ロクロ	にぶい橙色	外底面回転糸切
128	〃	甕？	B区沢埋土中(ⅡD92)	(2.5)	—	—	ロクロ？	ロクロ？	暗灰色	外面に凸帯がめぐる
129	土師器	長胴甕	D区SK119埋土	(20.6)	22.2	—	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ ヘラナデ	浅黄橙色	ロクロ下地のタタキみえず
130	須恵器	坏	02旧河道埋土	(1.2)	—	6.1	ロクロ	ロクロ	にぶい橙色	墨書あり
131	土師器	長胴甕	02旧河道埋土	(13.2)	23.4	—	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	明黄褐色	
132	〃	堝	02旧河道埋土	(10.5)	26.3	—	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	黄橙色	ロクロの下地にタタキ目あり

第126図　01～03年度遺構内出土土師器、須恵器(125～132)

第２検出面（8～9世紀面）出土の土師器、須恵器　（第127～134図、写真図版140～146）

８～９世紀面の遺構出土の土師器、須恵器を一括で示す。「８～９世紀面」としたのは、各地区、年度により、基本土層の堆積、認識が異なり、同一層序では示せないために用いた語句である。各地区、年度で層位が異なっていても、対応すると推測される層出土の遺物を一括で示すことにする。ここで示す多くの土師器、須恵器は平成15年度のC区７層出土のものである。この層に対応するのは平成14年度の４層、平成15年度B区２層、平成15年度E区３層上面と推測される。この検出面は第２検出面に相当する。

133～139はロクロ不使用の土師器坏である。133～137は不明瞭なものもあるが外面に段がある。133は段より下にヘラミガキが施されるが、134～137は体部下半～外底面にヘラケズリ調整が施される。この134～137は器形、胎土、質感、調整が非常に類似している。138は底辺部に稜を持つ平底の器形である。体部外面には段がなく、体部下半、外底面にはヘラケズリ調整が施される。139は小型の坏である。外面には段があり、底面は座りの良い丸底である。内面にはヘラミガキが施されるが、黒色処理は存在しない。

140～147はロクロ使用の土師器坏である。140～142は底辺部に回転ヘラケズリ再調整が施され、外底面にも回転ヘラケズリ再調整が施されている。142は底面ヘラケズリの下地に痕跡が残っており、切り離しは回転糸切と判断できる。140～142ともに器壁が厚く類似した器形である。143～146は底辺部に手持ちヘラケズリ再調整が施されている。143の底部切り離しは静止糸切である。144は回転糸切りで、糸切の上に「×」の線刻が施されている。また、体部にも欠損のため全体形は確定できないが「×」と推測される線刻がある。底部、体部どちらの線刻も焼成後に施されたものである。この143は同様に線刻を持つC区SI３出土の土師器坏17と器形、胎土、質感が非常に類似している。145は底部切り離しは回転糸切りである。この個体は胎土に海綿状骨針を顕著に含んでいる。146は底部が欠損しており切り離しは不明である。147は底部の破片である。外底面に墨書が施されているが、欠損しており文字を判読できない。内面にはヘラミガキが施され、黒色処理、切り離しは小破片のためはっきりしないが、静止糸切と判断した。

148～174は須恵器坏である。148～150の切り離しは回転ヘラ切である。火襷痕が顕著で、C区SI５の50～52と器形、胎土、切り離し、火襷痕が非常に類似し、同じ窯の製品と推測される。151は回転ヘラ切の切り離しで、内外面に火襷痕が顕著であるが、148～150とは胎土、器形が異なっている。152～157の切り離しは回転ヘラ切である。154は底径が大きい器形である。灰白色で軟質な焼成である。155は口縁端部が外側に屈曲している。156は底部が分厚い器形で、他に比較して重量感がある個体である。

158～167は切り離しが回転糸切である。158は外面に159は内面に火襷痕がみられる。160は浅横橙色の色調を呈する。胎土、質感、色調、器形がC区SI１出土の４～６に非常に類似し、同じ窯の製品と推測される。161・162は底辺部に手持ちヘラケズリ再調整が施されている。161の底面には線刻がある。焼成後の線刻である。線刻が浅く、底部拓本では判じ難いので、線刻の実測図を図中に付してある。162の内面には油煙が多量に付着する。163～165は口縁端部が外反し、類似した器形である。特に164・165は胎土、質感も非常に類似し、同じ窯の製品と推測される。166は体部外面のロクロ目の凹凸が顕著である。167は高台が付く須恵器坏である。貼り付け高台で、高台内には回転糸切痕が確認できる。169・170は須恵器坏の口縁部破片である。どちらも口縁部が外反している。171～174は墨書が施されている。171～173はC区SI３出土の22、23に胎土、質感が類似し同一窯の製品と推測される。171・172は欠損部があるが、「浄」の字を横位に書いていると推測される。この文字と横位に書いている点は22、23と共通する。173の墨書は何の文字か判じ難く、その天地も判断できない。174は口縁部細片であるが、墨書が認められる。欠損部が多く文字を判別できない。

175～180はロクロ不使用の土師器長胴甕である。頸部を有する個体175・176・180はいずれも頸部に段がある。175～177は小型の長胴甕である。175の内面には炭化物が顕著に付着している。176・177の底部にはヘラケズリが施されている。178・179は大型の長胴甕である。178の外底面にはヘラケズリ、179には木葉痕が施されている。180は中型の長胴甕である。口縁部と頸部以下が接合しないが、図上で器形を復元した。外底面は僅かしかないため図示していないが、ヘラケズリが施されている。

181・182は土師器球胴甕である。181は体部片であるが、外面に赤彩が施されている。赤彩の下はヘラミガキ、内面にはヘラナデが施されている。182は底辺部の破片である。二次的に高熱を受けており、硬く焼け締まっている。内面には鉄滓状のものが付着している。鉄滓状のものは赤紫～錆色を呈する。鍛冶炉にまきこまれた土師器片と推測される。外底面は僅かな面積しか残存せず、圧痕、調整は判別できない。

183～186はロクロ使用の土師器長胴甕である。183は中型の長胴甕で、ロクロ下地のタタキ目が顕著に残っている。184は下半部の破片であるが、内面、外底面の器表面がはじけており、調整を観察できない。底径の大きい器形である。185・186は口縁部破片である。186のロクロ下地にはタタキ目が存在するが、185については確認ができない。

187は特異な器形の土師器である。須恵器の甕に器形が似るが、土師質の焼成である。観察表中では器種を「甕」としている。ロクロ調整で、ロクロ下地にはタタキ目が存在する。内面はカキメとヘラナデが施されている。炭化物などの付着はなく、煮炊きに用いられた痕跡は全くない。

188・189は須恵器長頸壺である。どちらの個体も頸部の継ぎ目から欠損しており、体部と首部を接合する造りである。189は外面が光沢を帯びている。

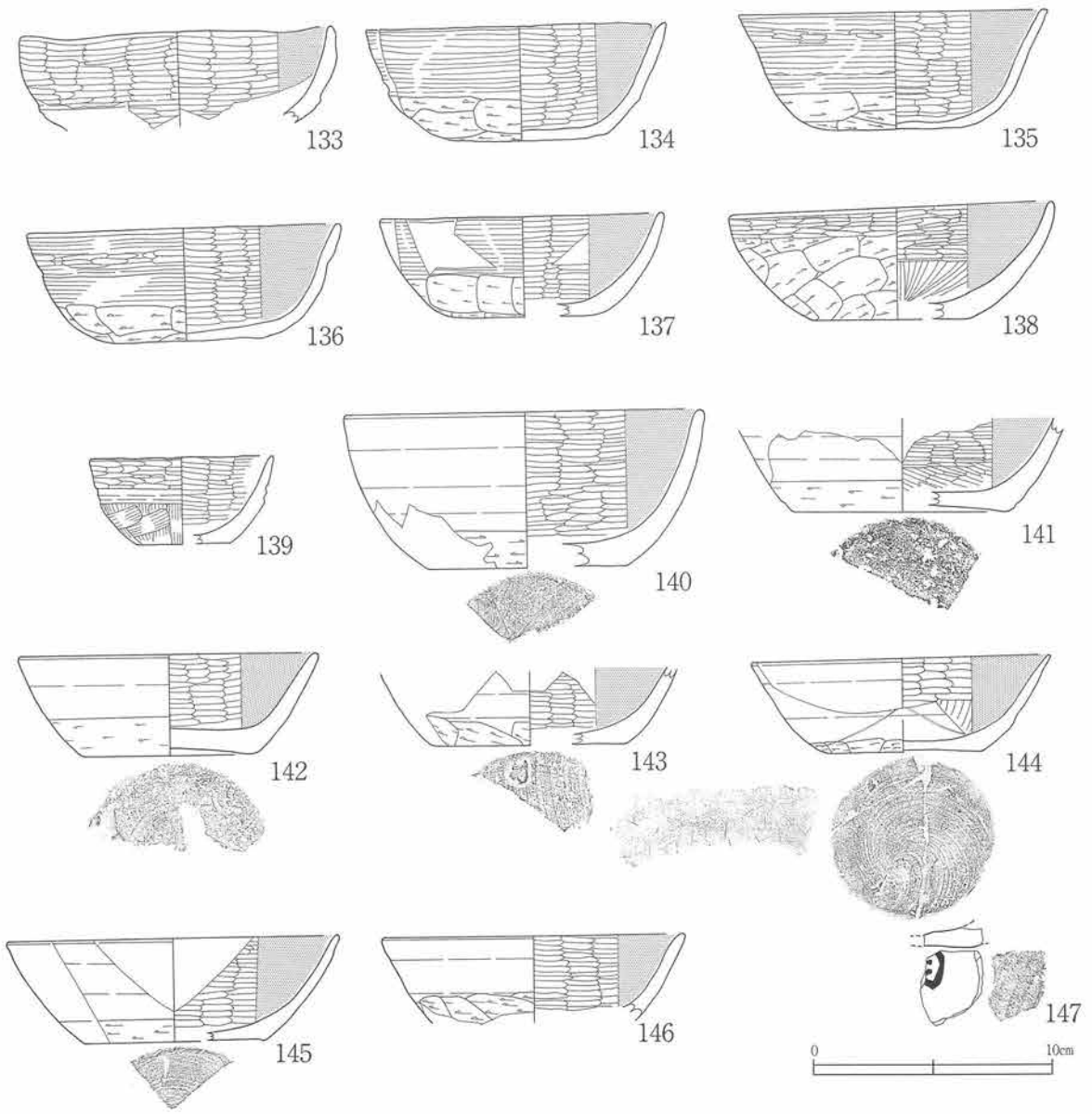
190～194は須恵器甕である。190・191はロクロ下地にタタキ目があるが、192・193はタタキ目が確認できない。194は外面底辺部に格子目状のタタキ目が露出している。191・194は灰白色の色調で軟質な焼成である。

195・196は須恵器大甕である。195は外面に平行タタキ目が施される。外面口縁部のヨコナデの下地にもタタキ目が施されている。内面には窪み状のアテ具痕がついている。196は外底面が平底になっている。外面には平行タタキ目が施され、それが交差して施されている部分もある。内面にはアテ具痕がある。外底面にもタタキ目、内底面にもアテ具痕があり、丸底に成形した後に平底にしていると理解される。

197～201は須恵器大甕の体部片である。197～200タタキ目、色調、質感から同一個体と判断される。197は底辺部の破片と推測される。外面には格子目状タタキ目、内面にはハケメ状の調整痕が施される。200の内面にもハケメ状の調整痕がある。197・198の内面には指？によるアテ具痕がある。201は体部下半の破片と推測される。外面には格子目状のタタキ目が施され、その上から棒状の工具で横位に平行に調整？が施されている。内面にはアテ具痕がある。

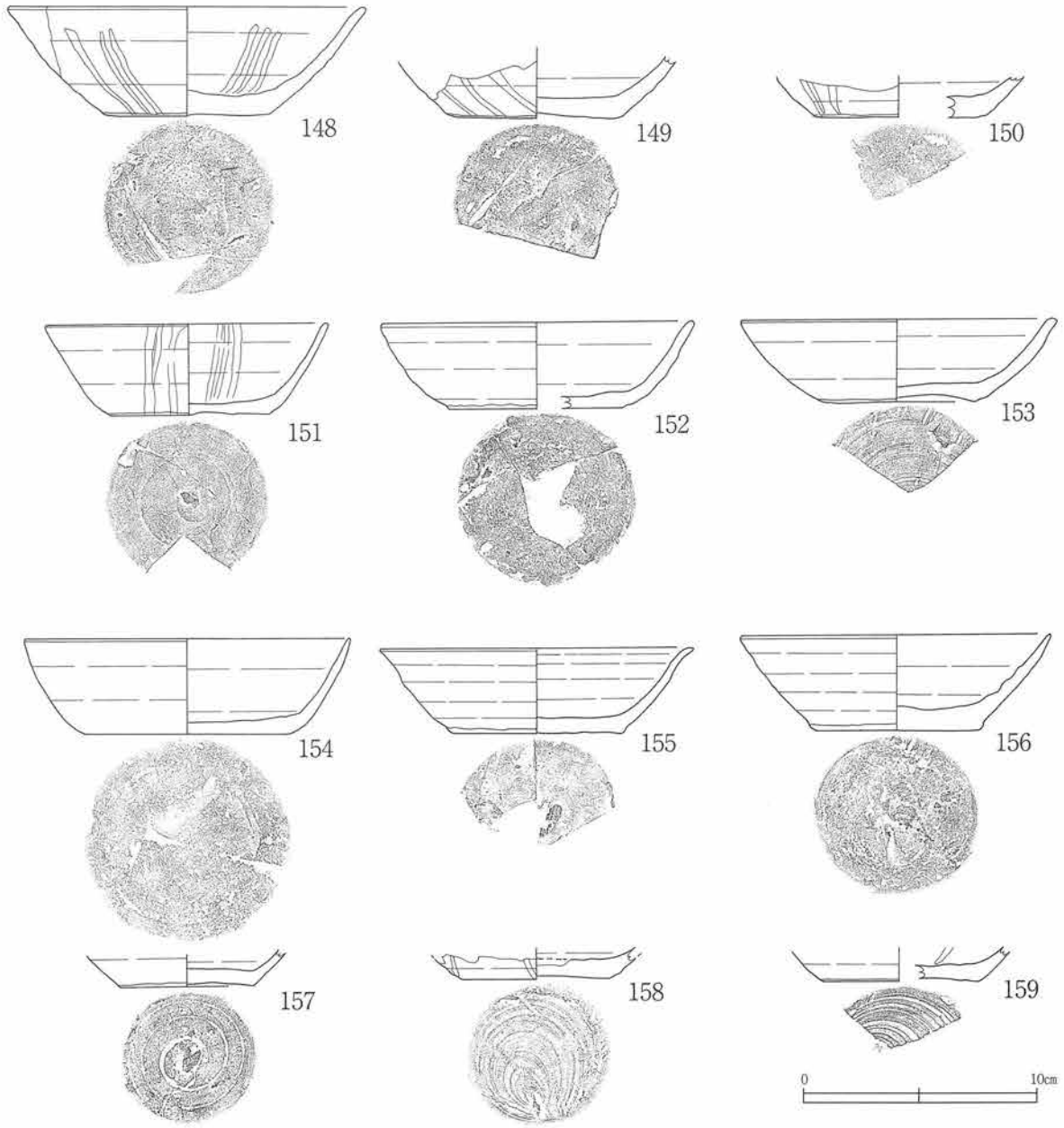
203・204は土錘である。どちらも欠損しており完存品ではない。204はC区SI 3 出土の29と大きさ質感が類似する。（羽柴）

202は無頸の緑釉陶器小壺である。胎土は黄橙色で軟質の焼き上がりである。口径は4.6cm、体部最大径は8.8cmである。体部下半が欠損しているが、扁平球状であると思われる。体部中央から口縁端部にかけてナデ調整、体部下半にはケズリ調整が施される。口縁部内面から体部外面にかけては青みがかった緑釉、体部内面には黄色がかった緑釉が刷毛塗りされる。胎土や釉調から京都洛北産と考えられる。（村田）



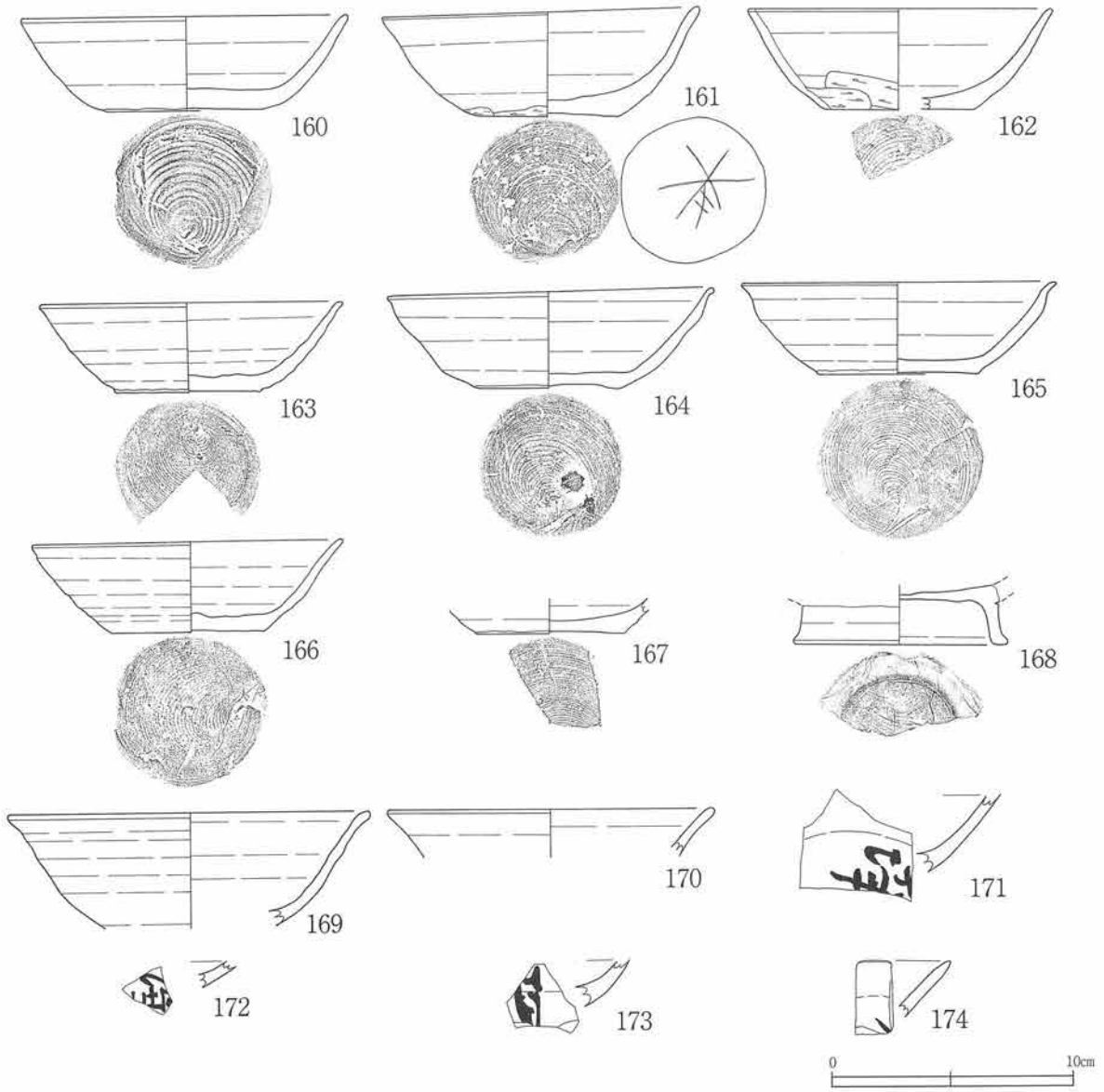
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
133	土師器	坏	ⅣE07　7層	(4.1)	13.4	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙	
134	〃	〃	ⅣE07　7層	4.9	13.2	—	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄橙色	丸底
135	〃	〃	ⅣE07　7層	5.0	13.0	—	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄橙色	外底面ヘラケズリ　外面ヘラミガキあり
136	〃	〃	ⅣE07　7層	5.3	13.4	—	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙色	外底面ヘラケズリ　外面ヘラミガキあり
137	〃	〃	ⅣE07　7層	4.3	12.0	—	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄橙色	外底面ヘラケズリ
138	〃	〃	ⅢD45　7層	5.0	13.7	7.0	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙色	外底面ヘラケズリ
139	〃	〃	ⅣE08　7層	3.7	7.8	4.0	ヘラミガキ ヘラナデ	ヘラミガキ	黄橙色	小型土器とすべきか
140	〃	〃	ⅣE07　7層	6.6	15.3	8.5	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄橙色	外底面回転ヘラケズリ
141	〃	〃	ⅣE07　7層	(4.0)	—	9.0	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	にぶい橙色	外底面回転ヘラケズリ
142	〃	〃	ⅢE83　4層	4.3	12.8	7.4	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	外底面回転糸切か　02出土
143	〃	〃	ⅣE07　7層	(3.2)	—	8.4	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	にぶい橙色	外底面静止糸切
144	〃	〃	ⅣD20	4.1	12.7	6.8	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄橙色	体部と外底面に「×」の線刻
145	〃	〃	ⅣE18　7層	4.4	12.1	7.7	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	浅黄橙色	外底面回転糸切
146	〃	〃	ⅣE07　7層	(3.7)	13.0	—	ロクロ ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙色	
147	〃	〃	ⅢE94　4層	(0.9)	—	—	—	ヘラミガキ	浅黄橙色	静止糸切？墨書あり　02出土

第127図　C区第２検出面土師器、須恵器①(133～147)



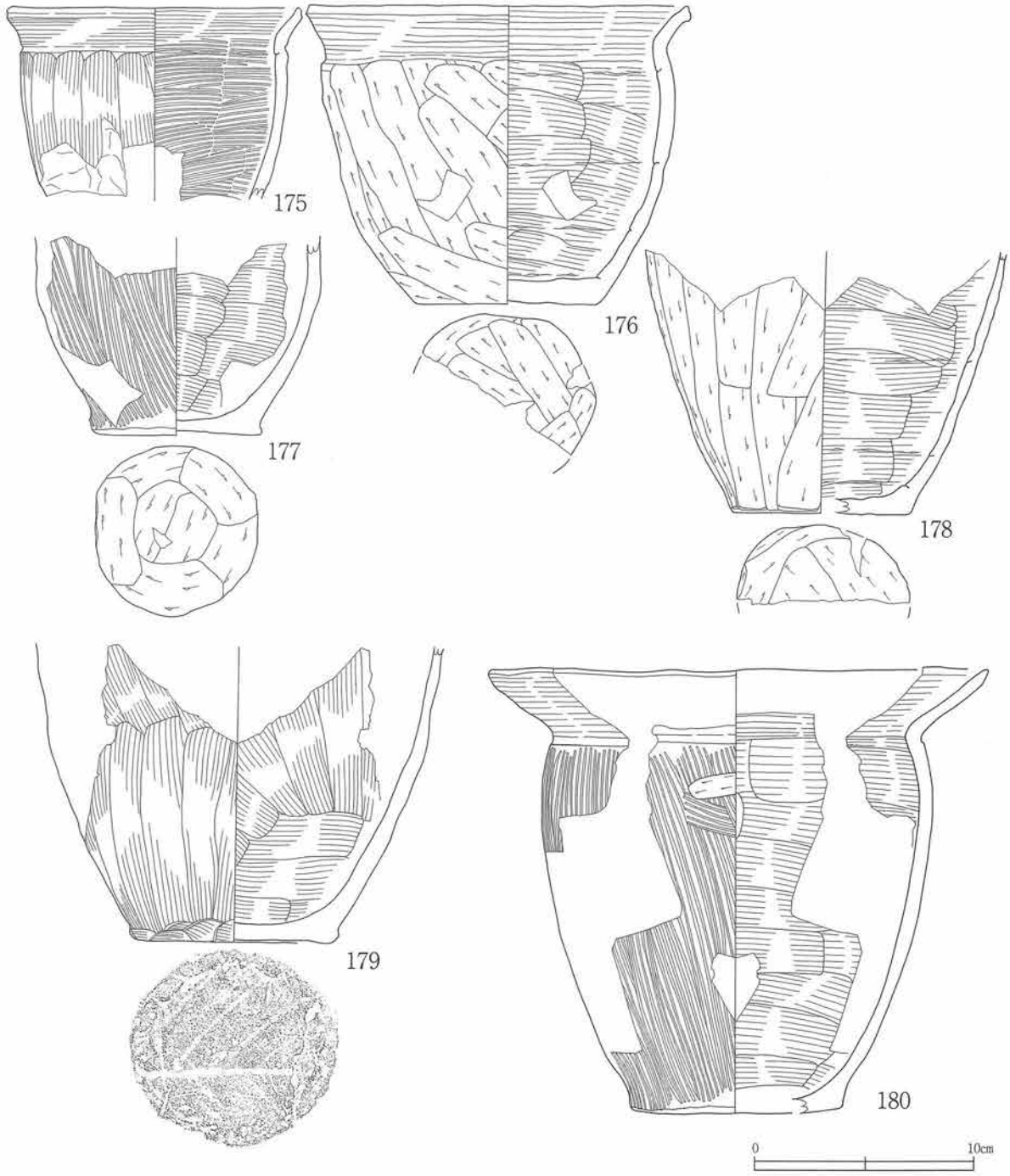
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
148	須恵器	坏	ⅣE08　7層	4.8	15.6	7.2	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転ヘラ切　火だすき痕
149	〃	〃	ⅢF72　5層	(2.5)	—	7.0	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転ヘラ切　火だすき痕
150	〃	〃	ⅣE17　7層	(1.8)	—	7.0	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転ヘラ切　火だすき痕
151	〃	〃	ⅣE07　7層	4.3	12.6	6.9	ロクロ	ロクロ	黄灰色	外底面回転ヘラ切　火だすき痕
152	〃	〃	ⅣE08　7層	3.8	13.6	7.5	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転ヘラ切
153	〃	〃	ⅢE68　5層	3.7	13.7	7.4	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転糸切
154	〃	〃	ⅢE77　2層	4.2	14.3	9.0	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転ヘラ切　02出土
155	〃	〃	ⅢD36　4層	3.8	13.6	7.4	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転ヘラ切　02出土
156	〃	〃	ⅢE95　4層	4.2	13.4	7.2	ロクロ	ロクロ	褐灰色	外底面回転ヘラ切
157	〃	〃	ⅣE08　7層	(1.4)	—	5.8	ロクロ	ロクロ	暗青灰色	外底面回転ヘラ切
158	〃	〃	C区採集	(1.1)	—	6.4	ロクロ	ロクロ	灰色	外底面回転糸切　火だすき痕
159	〃	〃	ⅣE08　7層	(1.3)	—	5.7	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転糸切　火だすき痕

第128図　C区第２検出面土師器、須恵器②(148～159)



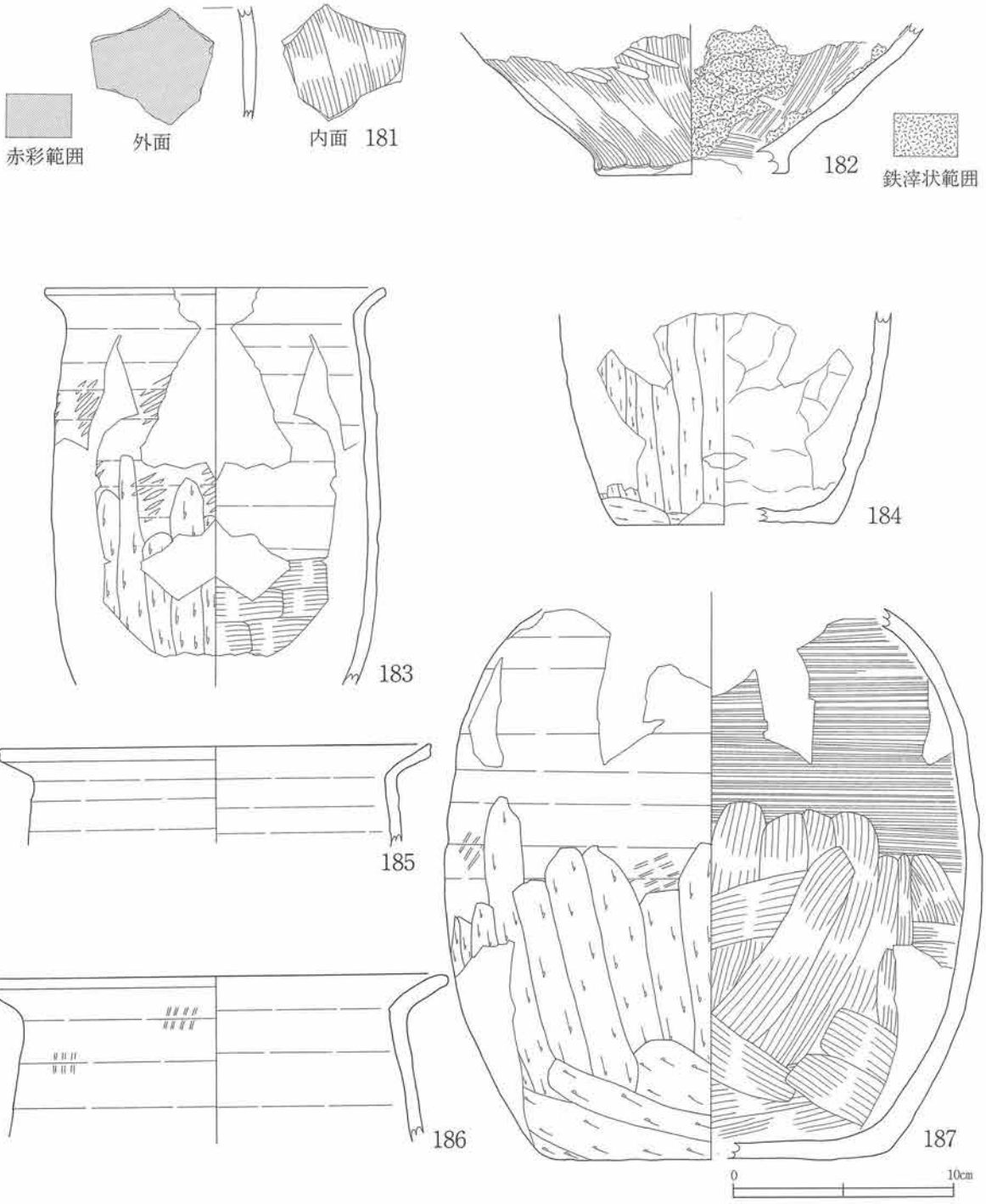
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
160	須恵器	坏	ⅣE08　7層	4.0	13.8	6.5	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	外底面回転糸切
161	〃	〃	ⅣE07　7層	4.7	13.4	6.0	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ	浅黄橙色	外底面回転糸切
162	〃	〃	ⅣE07　7層	4.3	12.8	6.2	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ	浅黄橙色	外底面回転糸切
163	〃	〃	ⅡD82　2層(B区)	3.7	12.8	6.1	ロクロ	ロクロ	黄灰色	外底面回転糸切
164	〃	〃	ⅣD20	4.3	13.8	6.2	ロクロ	ロクロ	橙色	外底面回転糸切　01出土
165	〃	〃	ⅢC47　B－2層	3.9	13.2	6.8	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転糸切　02出土
166	〃	〃	ⅢD36　4層	3.9	13.1	6.4	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転糸切　02出土
167	〃	〃	ⅣE06　7層	(1.5)	—	6.2	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転糸切
168	〃	〃	ⅣE07　7層	(2.2)	—	9.0	ロクロ	ロクロ	灰白色	外底面回転糸切
169	須恵器	坏	ⅣE07　7層(C区)	(4.9)	15.4	—	ロクロ	ロクロ	灰白色	口縁部やや外反
170	〃	〃	ⅢE68　5層(C区)	(2.0)	13.8	—	ロクロ	ロクロ	灰色	
171	〃	〃	ⅣE08　7層(C区)	(3.3)	—	—	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	墨書あり
172	〃	〃	ⅣE18　7層(C区)	(1.1)	—	—	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	墨書あり
173	〃	〃	ⅣE73　1層	(2.0)	—	—	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	墨書あり　02出土
174	〃	〃	ⅣE34　9層下	(2.4)	—	—	ロクロ	ロクロ	灰黄褐色	墨書あり　02出土

第129図　C区第２検出面土師器、須恵器③(160～174)



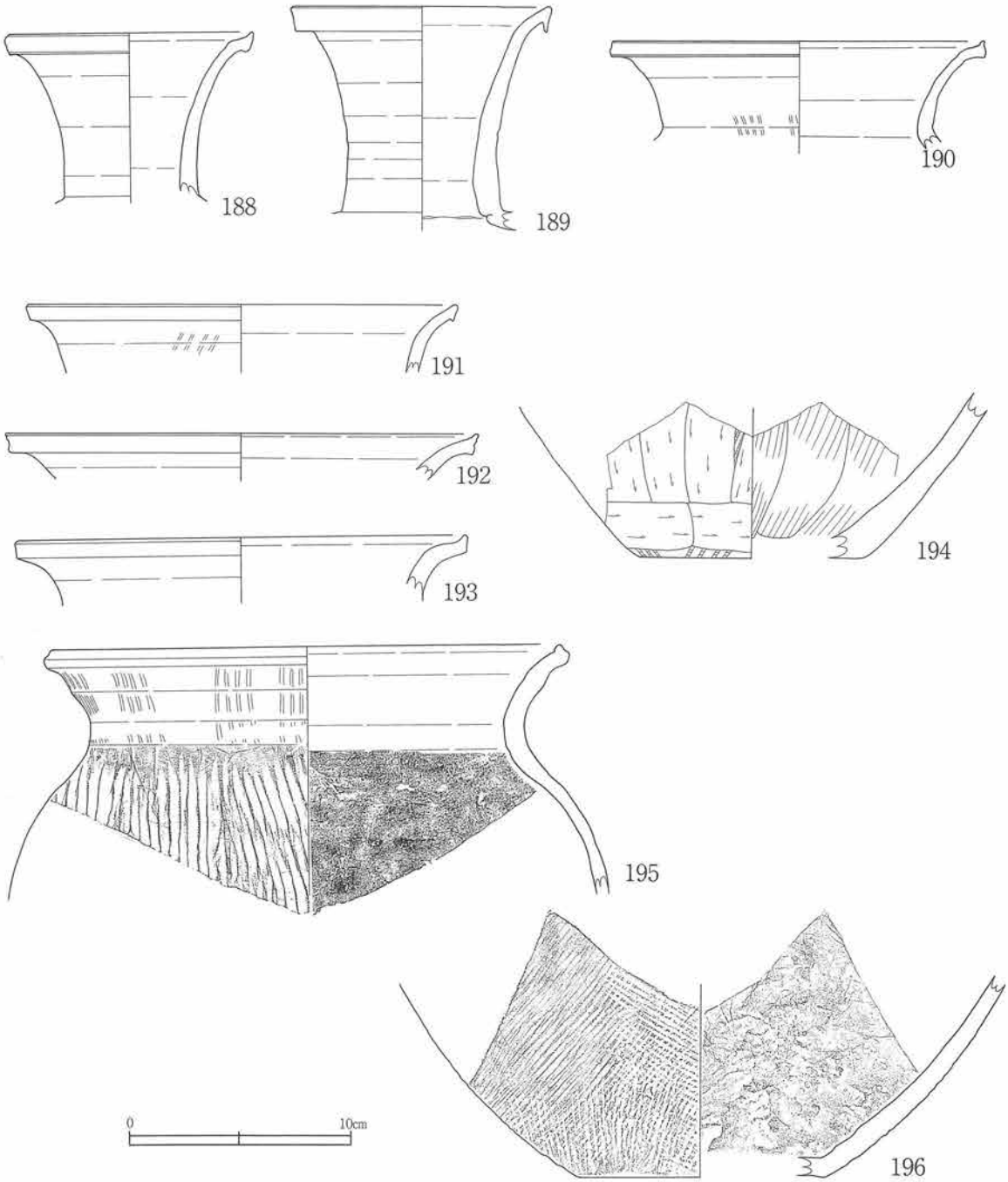
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
175	土師器	長胴甕	ⅢD36　4層	(9.0)	13.6	—	ヘラナデ	ハケメ	浅黄橙色	02出土
176	〃	〃	ⅣE15　7層(C区)	13.9	17.4	8.3	ヘラケズリ	ヘラナデ	黄橙色	外底面ヘラケズリ
177	〃	〃	ⅣE07　7層(C区)	(9.3)	—	7.9	ハケメ	ヘラナデ	褐灰色	外底面ヘラケズリ
178	〃	〃	ⅢD45　4層	(12.2)	—	8.2	ヘラケズリ	ヨコナデ	浅黄橙色	外底面ヘラケズリ
179	〃	〃	ⅡC73　2a層(B区)	(13.8)	—	9.0	ヘラナデ	ヘラナデ	淡黄色	外底面木葉痕
180	〃	〃	ⅣE15　かくらん	(20.8)	23.2	9.8	ハケメ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	外底面ヘラケズリ

第130図　C区第２検出面土師器、須恵器④(175～180)



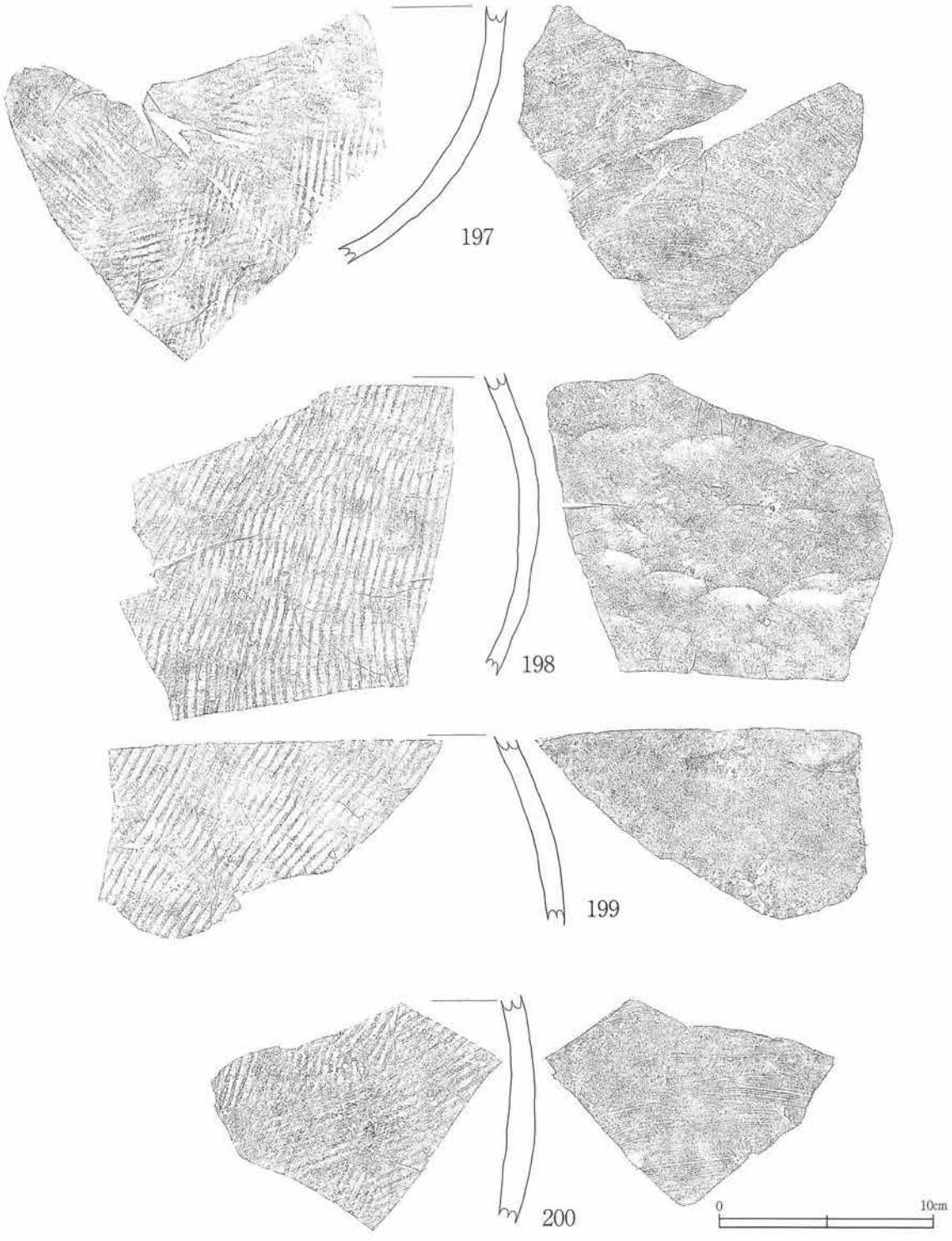
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
181	土師器	球胴甕?	ⅣE08　7層(C区)	(5.3)	—	—	ヘラミガキ?	ヘラナデ	明赤褐色	外面に赤彩あり
182	〃	球胴甕	ⅡD82　2層(B区)	(7.0)	—	8.7	ヘラナデ ヘラミガキ	ハケメ	灰白色	内面に鉄滓状のもの付着
183	〃	長胴甕	ⅢE68　5層	(18.5)	15.8	—	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ ヘラナデ	浅黄褐色	ロクロの下地にタタキ目あり
184	〃	〃	ⅣE18　7層(C区)	(9.8)	—	10.0	ヘラケズリ	剥離して不明	浅黄橙色	ロクロ長胴甕
185	〃	〃	ⅣE08　7層(C区)	(4.5)	20.0	—	ロクロ	ロクロ	橙色	
186	〃	〃	ⅣE08　7層(C区)	(7.8)	21.6	—	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	ロクロの下地にタタキ目あり
187	〃	甕	ⅢD37　4層	(20.7)	—	15.0	ロクロ ヘラケズリ	カキメ ヘラナデ	橙色	土師質の焼成

第131図　C区第２検出面土師器、須恵器⑤(181～187)



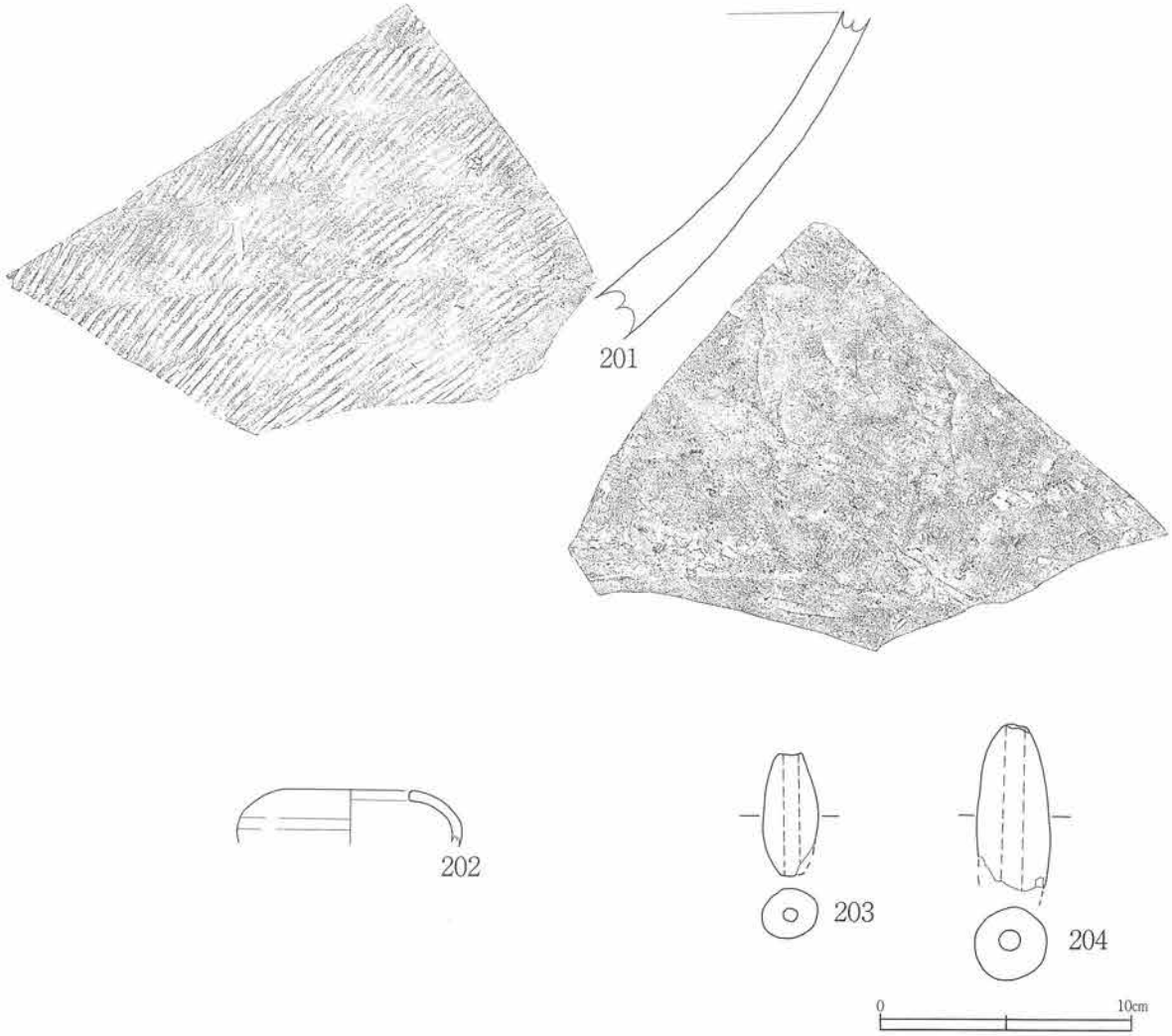
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
188	須恵器	長頸壺	ⅢE84　4層	(7.7)	11.0	—	ロクロ	ロクロ	暗灰色	02出土
189	〃	〃	ⅣE07　7層	(10.2)	11.8	—	ロクロ	ロクロ	暗灰色	
190	〃	甕	ⅢD45　4層	(4.9)	16.6	—	ロクロ	ロクロ	極暗褐色	ロクロの下地にタタキ目　02出土
191	〃	〃	ⅣE18　7層(C区)	(3.1)	19.4	—	ロクロ	ロクロ	灰白色	ロクロの下地にタタキ目
192	〃	〃	ⅡD82　2層(B区)	(2.1)	21.3	—	ロクロ	ロクロ	灰色	
193	〃	〃	ⅣE08　7層(C区)	(3.0)	20.1	—	ロクロ	ロクロ	灰色	
194	〃	〃	ⅣE07　7層(C区)	(7.6)	—	9.8	ヘラケズリ	ヘラナデ	灰白色	底辺部にタタキ目あり
195	〃	大甕	ⅡD82　2層(B区)	(11.3)	23.0	—	タタキ目	アテ具痕	灰色	口縁部　ヨコナデ　下にタタキ目
196	〃	〃	ⅣE08　7層(C区)	(8.8)	—	10.8	タタキ目	アテ具痕	灰色	底部　平底

第132図　C区第２検出面土師器、須恵器⑥(188～196)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
197	須恵器	大甕	ⅢD86　表採(C区)	(12.0)	—	—	タタキ目	アテ具痕	灰白色	198～200と同一個体
198	〃	〃	ⅢD97　表採(C区)	(14.1)	—	—	タタキ目	アテ具痕	灰白色	
199	〃	〃	ⅢD86　表採(C区)	(8.7)	—	—	タタキ目	アテ具痕	灰白色	
200	〃	〃	ⅢD97　5層？(C区)	(10.7)	—	—	タタキ目	アテ具痕	灰白色	内面にハケメ状の調整痕

第133図　C区第２検出面土師器、須恵器⑦(197～200)



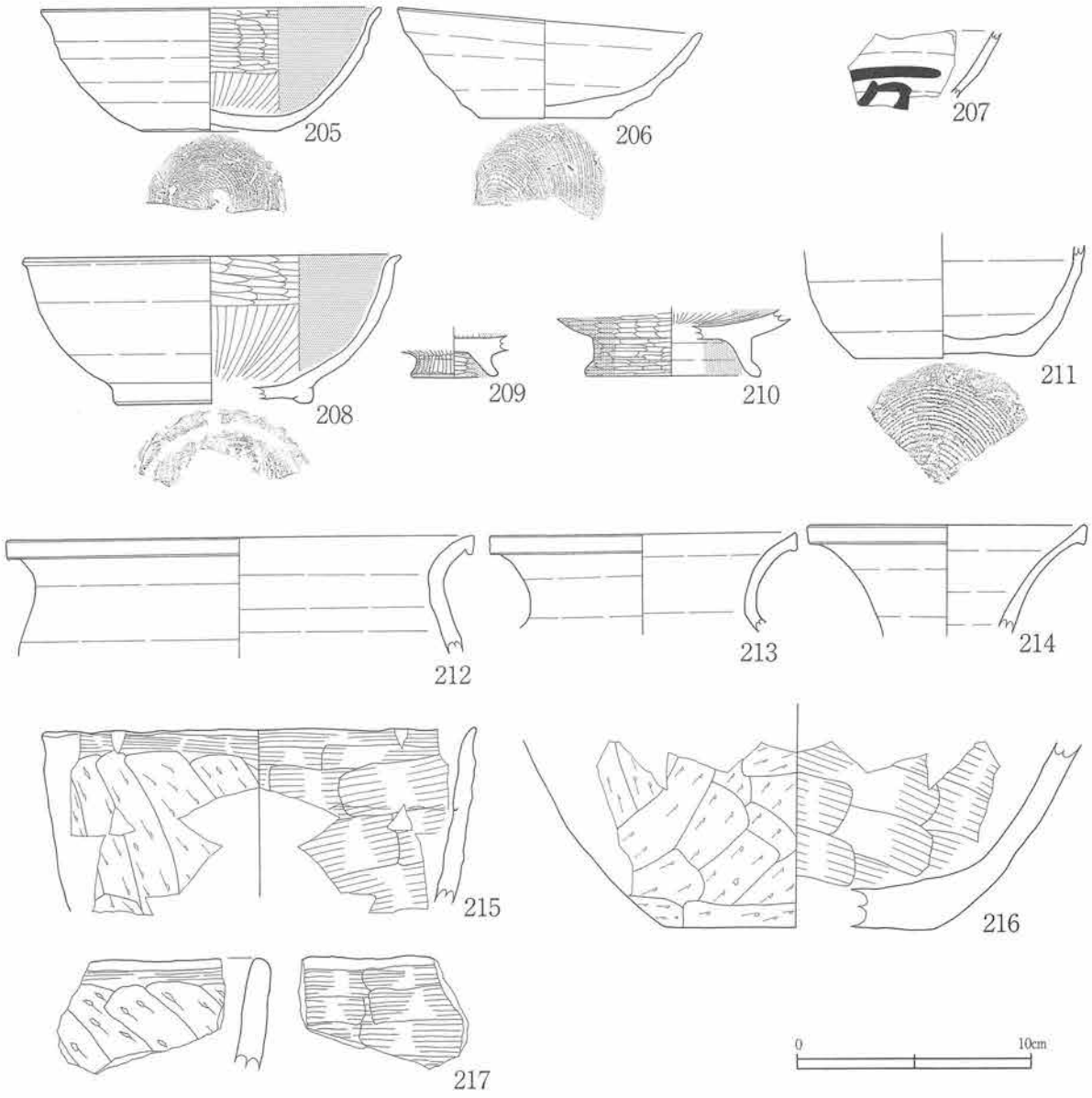
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
201	須恵器	大甕	ⅢD46　4層	(13.9)	—	—	タタキ目	アテ具痕	黒色	02出土
202	緑釉陶器	小壺	ⅢD74　1層下(B区)	(2.1)	4.6	—	緑釉	緑釉	青緑色	胎土軟質で黄褐色　京都洛北産か
203	土錘	—	ⅢC10　かくらん	4.9	2.0	—	—	—	橙色	02出土
204	〃	—	ⅢE85　2層	(6.6)	3.0	—	—	—	橙色	02出土

第134図　C区第２検出面土師器、須恵器⑧(200～204)

第１検出面（十和田a面）の土師器、須恵器　（第135図、写真図版146）

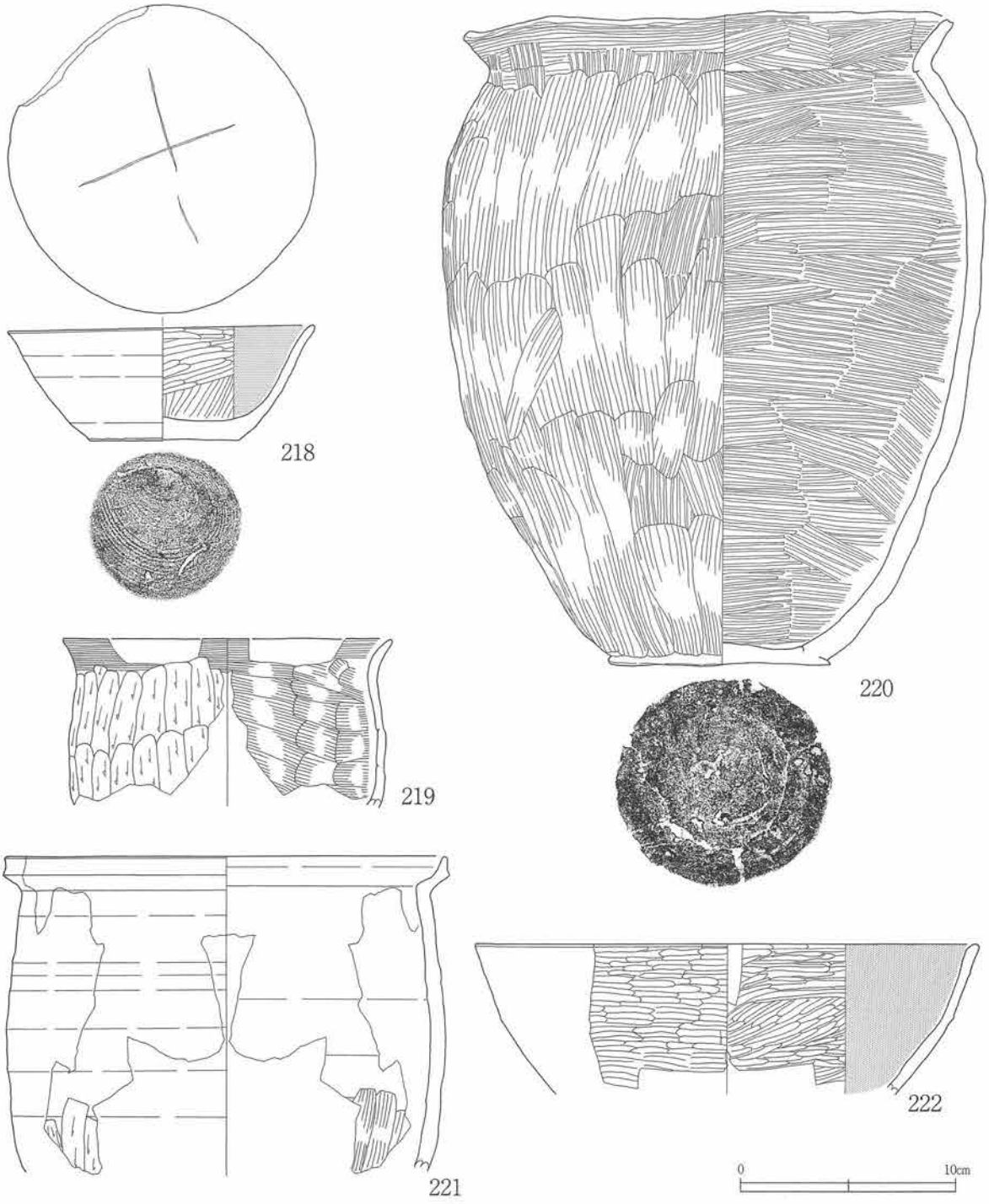
十和田ａ火山灰を含む層出土の土師器、須恵器を一括で示す。「第１検出面（十和田a面）」としたのは、各地区、年度により、基本土層の堆積、認識が異なり、同一層序では示せないために用いた語句である。各地区、年度で層位が異なっていても、対応すると推測される層出土の遺物を一括で示すことにする。ここで示す多くの土師器、須恵器は平成15年度のC区３層出土のものである。この層に対応するのは平成15年度B区２層である。

205～207は土師器坏である。205は内面ヘラミガキ、黒色処理で切り離しは回転糸切である。206は内外面ロクロ調整のみであるが、土師質の調整であり土師器とした。切り離しは回転糸切である。



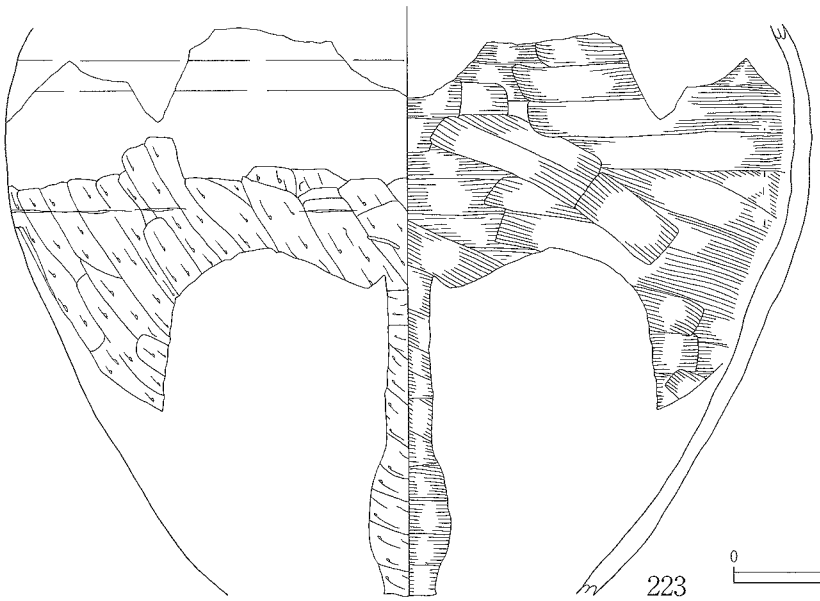
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
205	土師器	坏	ⅢE16 3層(C区)	5.3	14.4	5.8	ロクロ	ヘラミガキ	黄橙色	外底面回転糸切
206	〃	〃	ⅠA08 2層(E区)	4.2	12.6	5.6	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	外底面回転糸切
207	〃	〃	ⅢE17 3層(E区)	(2.6)	—	—	ロクロ	ヘラミガキ	浅黄橙色	墨書あり　内面黒色処理
208	〃	〃	SX2トレンチ中	6.3	15.9	8.2	ロクロ	ヘラミガキ	にぶい橙色	高台内回転糸切
209	〃	〃	ⅢE16 3層(C区)	(1.7)	—	3.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	全面黒色処理
210	〃	〃	ⅢE28 3層(C区)	(2.9)	—	7.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	全面黒色処理
211	〃	長胴甕	ⅢE16 3層(C区)	(4.8)	—	7.6	ロクロ	ロクロ	褐灰色	全面黒色処理
212	〃	〃	ⅢE16 3層(C区)	(5.0)	19.8	—	ロクロ	ロクロ	にぶい橙色	
213	須恵器	甕	ⅠA27かくらん(E区)	(4.3)	13.1	—	ロクロ	ロクロ	灰色	
214	〃	長頸壺	ⅢE16 3層(C区)	(4.7)	11.6	—	ロクロ	ロクロ	黒色	
215	土師器	長胴甕	ⅢE60 3層(C区)	(8.0)	18.3	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	粗い質感のヘラケズリ
216	〃	〃	ⅢE50 3層(C区)	(8.0)	—	11.6	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	粗い質感のヘラケズリ
217	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD15)	(4.6)	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	粗い質感のヘラケズリ　04出土

第135図　第1検出面土師器、須恵器(205～217)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
218	土師器	坏	C区SI７埋土下位(P３)	5.4	14.2	6.8	ロクロ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	内面に「×」の線刻
219	〃	長胴甕	C区SI７埋土下位(P２)	(7.8)	15.4	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	口縁部内面に炭化物付着
220	〃	〃	C区SI７埋土下位(P１)	30.7	22.7	10.2	ハケメ　ヘラナデ	ハケメ	にぶい黄橙色	外底面ヘラナデ
221	〃	〃	C区SI７埋土上位	(14.8)	20.6	—	ロクロ　ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	外面に粘土薄く付着
222	〃	鉢	C区SI７埋土上位	(6.8)	23.3	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	内面黒色処理

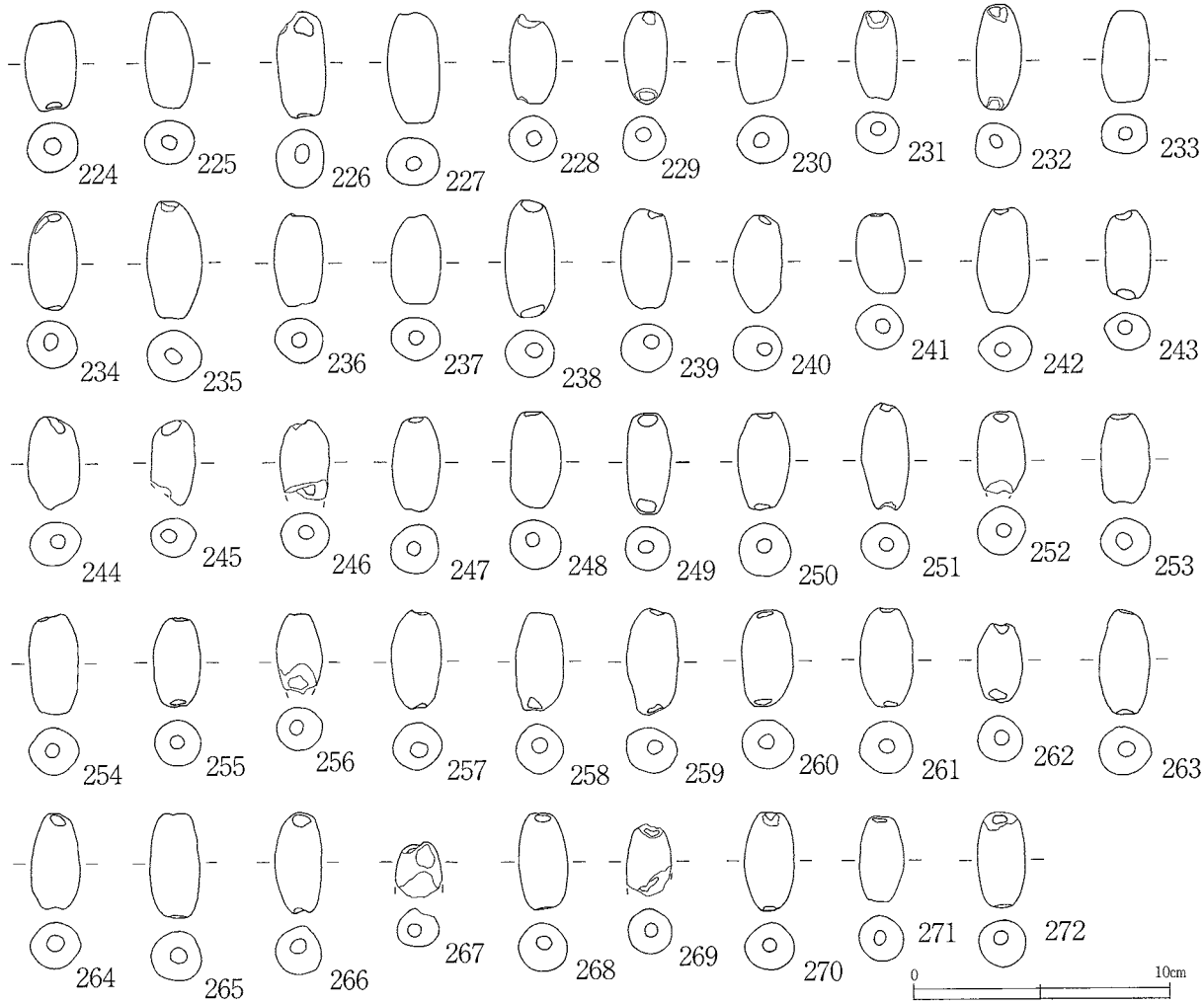
第136図　C区SI７の土師器、須恵器①(218～222)



223

0　10cm

番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
223	須恵器	甕	C区SI７埋土上位	(22.5)	—	—	ヘラケズリ	ヘラナデ	灰色	住居検出時に出土



224 225 226 227 228 229 230 231 232 233
234 235 236 237 238 239 240 241 242 243
244 245 246 247 248 249 250 251 252 253
254 255 256 257 258 259 260 261 262 263
264 265 266 267 268 269 270 271 272

0　10cm

第137図　C区SI７の土師器、須恵器②(223～272)

番号	種類	出土位置	法量(cm)			
			長さ	最大幅	孔径	重さg
224	土錘	C区SI７埋土下位	3.6	2.0	0.7	13.3
225	〃	〃	3.85	1.95	0.6	11.1
226	〃	〃	(4.3)	1.9	0.7	16.9
227	〃	〃	4.45	2.15	0.65	17.5
228	〃	〃	(3.6)	1.9	0.6	10.8
229	〃	〃	(3.6)	1.7	0.6	9.1
230	〃	〃	3.7	2.05	0.65	12.5
231	〃	〃	(3.6)	1.7	0.55	10.2
232	〃	〃	(4.2)	1.8	0.55	12.4
233	〃	〃	3.7	1.85	0.6	12.0
234	〃	〃	3.9	1.95	0.65	12.5
235	〃	〃	(4.2)	2.1	0.6	18.4
236	〃	〃	(3.75)	1.95	0.65	11.9
237	〃	〃	3.6	2.0	0.6	11.9
238	〃	〃	4.7	1.95	0.65	16.3
239	〃	〃	(4.0)	2.05	0.6	15.2
240	〃	〃	3.95	1.95	0.55	11.7
241	〃	〃	4.2	2.1	0.65	14.4
242	〃	〃	3.2	1.9	0.6	10.1
243	〃	〃	3.6	1.75	0.55	9.1
244	〃	〃	3.65	2.05	0.6	10.9
245	〃	〃	(3.4)	1.7	0.6	7.1
246	〃	〃	(3.2)	1.95	0.6	9.6
247	〃	〃	3.8	1.95	0.55	12.0
248	〃	〃	3.85	2.0	0.55	15.1
249	土錘	C区SI７埋土下位	4.05	1.75	0.55	11.0
250	〃	〃	3.95	2.1	0.6	16.3
251	〃	〃	(4.2)	1.95	0.6	12.6
252	〃	〃	(3.3)	1.9	0.6	11.2
253	〃	〃	3.55	1.9	0.7	11.2
254	〃	〃	4.05	1.95	0.55	13.8
255	〃	〃	3.6	1.8	0.55	11.3
256	〃	〃	(3.2)	1.8	0.6	8.2
257	〃	〃	3.95	2.0	0.65	12.2
258	〃	〃	3.95	1.9	0.6	13.0
259	〃	〃	4.25	2.0	0.6	13.0
260	〃	〃	3.9	2.05	0.6	14.0
261	〃	〃	4.0	2.1	0.6	17.1
262	〃	〃	(3.2)	1.75	0.6	8.9
263	〃	〃	4.2	1.95	0.65	14.3
264	〃	〃	3.85	1.9	0.7	11.9
265	〃	〃	4.2	1.95	0.6	15.7
266	〃	〃	4.05	1.85	0.65	12.5
267	〃	C区SI７埋土上位	(2.25)	1.9	0.65	4.6
268	〃	〃	3.9	1.95	0.6	13.8
269	〃	ⅡE96１面	(2.9)	1.75	0.55	7.8
270	〃	ⅡE96１面	(3.95)	2.0	0.55	14.4
271	〃	ⅢE08１面	(3.45)	1.8	0.55	10.8
272	〃	〃	(3.85)	1.85	0.6	13.0

207は外面に「万」の墨書がある。内面はヘラミガキ、黒色処理である。

208～210は高台付の土師器坏である。208は低い貼り付け高台が付く。高台内面には回転糸切痕がある。口縁端部は外側に屈曲する。209は小型の高台付き坏である。内外面、高台内部にヘラミガキが施され、全面に黒色処理がなされている。蓋の可能性も考えたが、高台がハの字に開くこと、高台内面のヘラミガキが他の部位に比較して粗いことなどを勘案して蓋ではないと判断した。210は高台付き坏である。高台は貼り付け高台である。内外面にヘラミガキが施されるが、高台内面にはヘラミガキが施されていない。黒色処理は高台内面を含む全面に施されている。

211は小型のロクロ長胴甕の下半部片である。外底面には回転糸切があり、内面には炭化物が付着する。

212は大型のロクロ長胴甕口縁部片である。ロクロ下地にはタタキ目が確認できない。口縁部、口唇部の形態がE区焼土１出土の124に類似する。

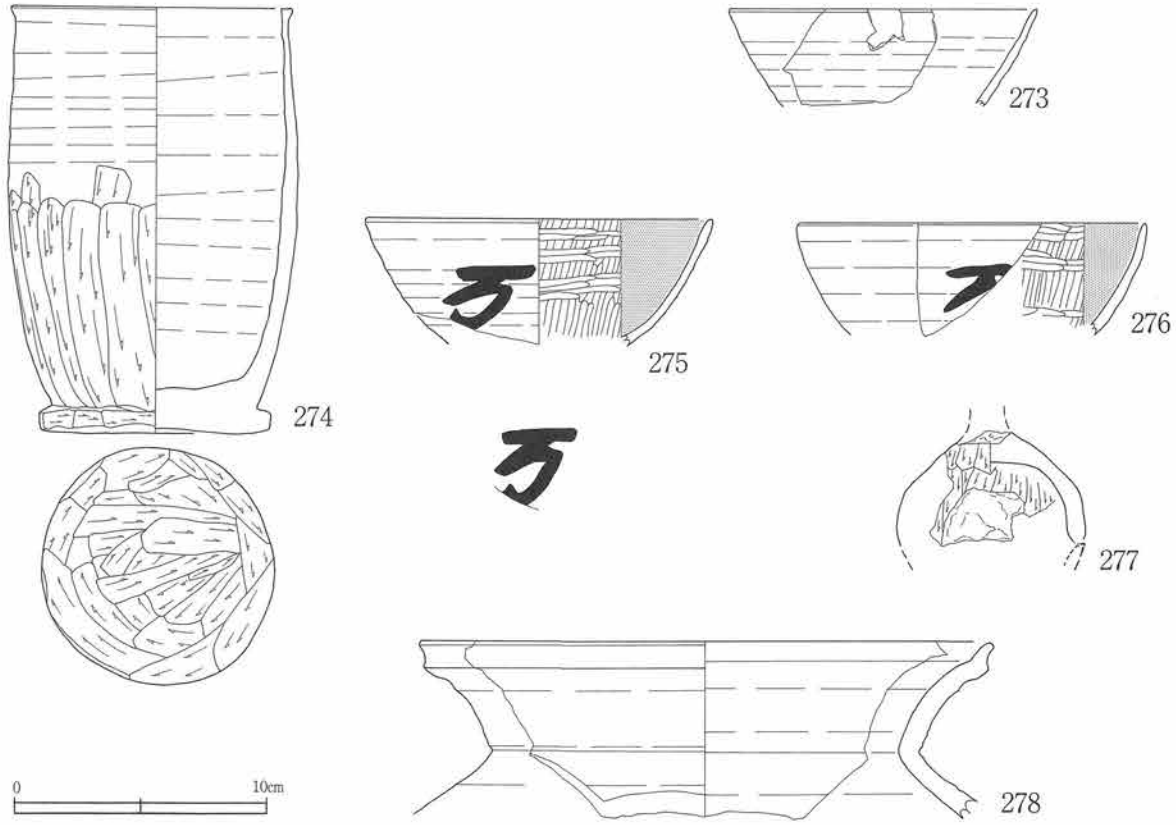
213は須恵器甕の口縁部片である。ロクロ下地のタタキ目は確認できない。214は須恵器長頸壺の口縁部片である。胎土、色調、質感、首の径がE区SI１出土の109に類似する。

215・216はロクロ不使用の土師器長胴甕である。どちらも体部外面のヘラケズリが非常に粗い感じで、共通の質感を持っている。また胎土に砂粒の多い点も共通している。215の口縁部は屈曲がなく、口縁部のヨコナデが施される幅が非常に狭い。216は器壁が分厚く重量感がある破片である。底面と底辺部を隔てる稜がはっきりせず、丸底に近い底部形態になっている。外面底辺部には焼けた粘土が少量付着している。217は平成16年の出土であるがスペースの都合でここに掲載している。215・216と同様に分厚く、重量感のある土師器長胴甕の破片である。B区沢跡埋土からの出土である。　（羽柴）

平成16年度調査第１検出面出土の土師器、須恵器　（第138図、写真図版148）

平成16年度調査において第１検出面（十和田ａ面）で出土した土師器、須恵器を示す。ここでは第１検出面の遺構から出土した須恵器についても扱う。

274はB区沢跡の２層下部（ⅢD06グリッド）から出土した須恵器の不明器種である。灰色の胎土で堅緻な焼成である。筒形の器形で底部が円盤状になっている。外面上半部、内面はロクロ調整、体部下半、外底面にはヘラケズリが施される。ロクロ目の下地のタタキ目は詳細に観察したが痕跡を見出せなかった。円盤状の底面は貼り付けではなく、削り出しによって成形されている。底部厚は1.6cmで安定が良い。口縁部はその端部近くの外面がやや外反し、口縁端部は平坦である。今のところ、この須恵器と共通する器形の事例は見出せず、器種は不明としている。類似する器種としては「こね鉢」があげられる。底部の円盤状の形状、口縁部端部の形状が本須恵器と類似している。しかし相違する点もある。まず器形は、こね鉢の場合ラッパ型に開く文字通り鉢形であるが、本須恵器の器形は筒型である。それからこね鉢の調整は内外面ロクロ調整であるが、本須恵器は体部下半をヘラケズリという甕、長胴甕と共通する調整方法である。それから本須恵器の内面は全く摩耗していない。よって上述のように本須恵器の器種は今のところ不明とせざるを得ない。また、本須恵器は時期についても確定



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
273	須恵器	坏	C区焼土１覆土	(3.9)	12.2	—	ロクロ	ロクロ	明黄褐色	硬い胎土
274	〃	不明	B区沢跡２層（ⅢD06）	16.7	11.0	9.1	ロクロ　ヘラケズリ	ロクロ	灰色	内面摩耗していない
275	土師器	坏	ⅢE08１面	(5.1)	13.8	—	ロクロ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	「万」の墨書
276	〃	〃	ⅢE08１面	(4.4)	13.8	—	ロクロ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	「万」の墨書
277	〃	土鈴	ⅢE08１面	(4.6)	—	—	ヘラケズリ	指頭圧痕	にぶい黄橙色	継目から欠損
278	須恵器	甕	C区表採	(7.0)	22.7	—	ロクロ	ロクロ	灰色	04出土

第138図　平成16年第１検出面出土土師器、須恵器（273～278）

できない。本遺跡出土の土師器、須恵器は第１検出面（十和田a火山灰期）か第２検出面（８世紀後半～９世紀初頭）かどちらかの時期に属する可能性が高い。しかし本須恵器が出土したB区沢跡埋土からは、第２検出面で出土する土師器も、第１検出面期の土師器も出土しており、どちらに属するのか判断が難しい。

275･276は墨書のある土師器坏である。第１検出面ⅢE08グリッド付近から出土しており、近接するC区SI７に本来は伴っている可能性が高い。275の墨書は「万」、276は欠損し墨書も不明瞭であるが同じく「万」と推測される。平成15年調査C区ⅢE18グリッドでも「万」の墨書の土師器坏（207）が出土している。出土地点は10m程しか離れておらず、関係が推測される。時期は出土面とC区SI７の年代観から十和田a火山灰の降下以前、10世紀初め頃と考えられる。

277は土鈴と推測される。にぶい黄橙色の土師質の胎土である。出土位置は第１検出面ⅢE08グリッドでC区SI７との関係が推測される。上部のつまみと下半部が欠損している。下側の破断面は一見、完結する端部のように見えるが、ちょうど継ぎ目から割れたものである。外面にヘラケズリが施され、内面は無調整で指紋が付着している。時期は出土面とC区SI７の年代観から十和田ａ火山灰の降下以前、10世紀初め頃と考えられる。

278は須恵器の甕である。平成16年度調査C区の表土掘削中に出土した。灰色で堅緻な胎土である。ロクロ目の下地のタタキ目は見出せない。時期は出土面から十和田ａ火山灰の降下以前、10世紀初め頃に属する可能性が高い。（羽柴）

平成16年度調査第２検出面出土の土師器、須恵器（第139・140図、写真図版148～150）

平成16年度調査において第２検出面で出土した土師器、須恵器を示す。第２検出面で検出された住居は８世紀後半から９世紀初頭に属するものである。よって、ここで記述する土師器、須恵器もこれと近似する年代が考えられる。

須恵器坏（273）は編集の都合で第１検出面の土師器、須恵器と同じ図に掲載しているが、この須恵器坏が出土したC区焼土１は第２検出面検出の遺構である。色調は明黄褐色であるが、硬い胎土で須恵器に分類している。底部が欠損しており切り離し等は不明である。年代は遺構の検出面から８世紀後半～９世紀初頭と推測される。

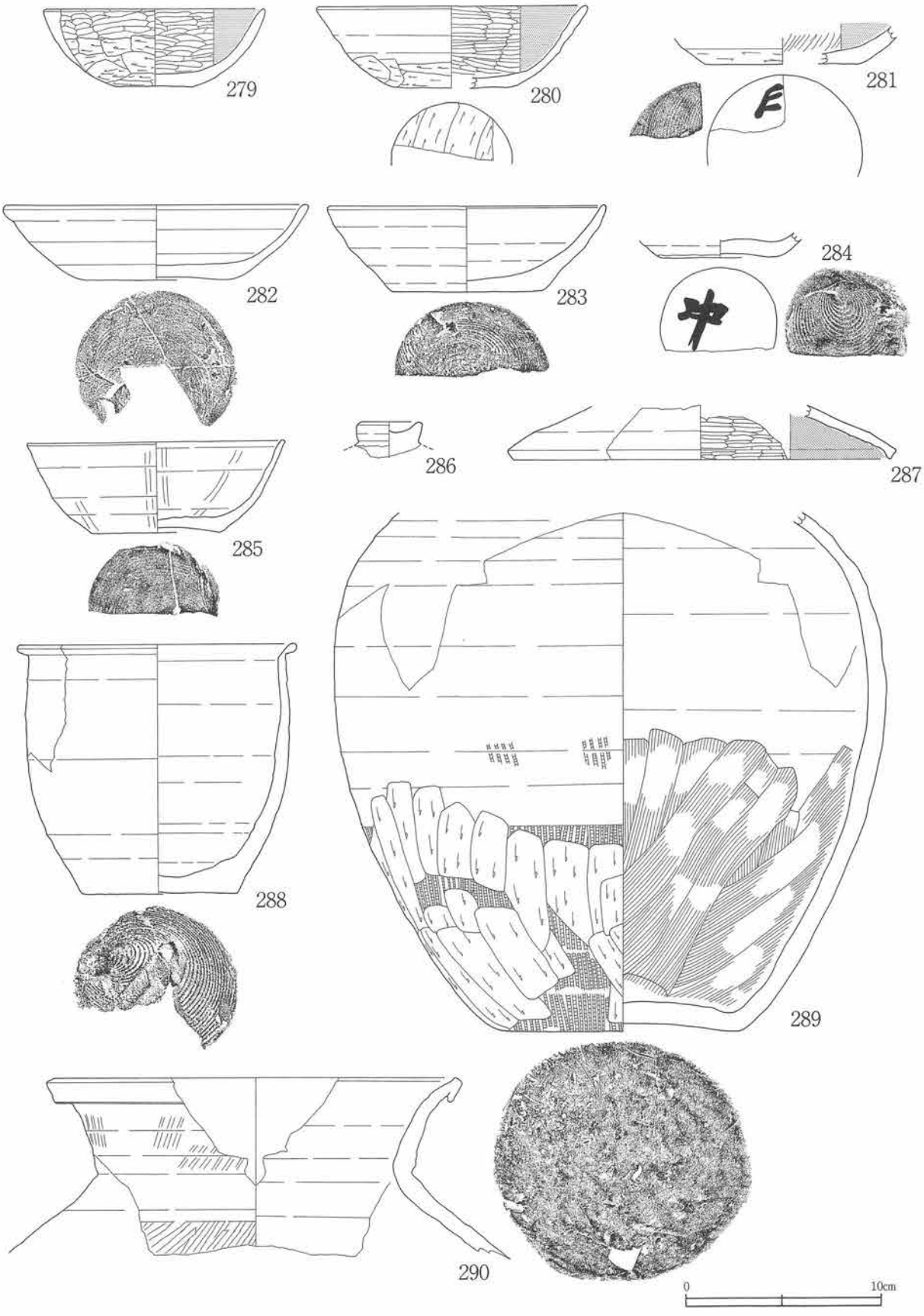
279はロクロ不使用の土師器坏である。平底で体部内外面に段はない。内面黒色処理である。280･281はロクロ土師器坏である。280は底辺部、外底面に手持ちヘラケズリが施されている。281は底辺部に回転ヘラケズリが施される。底面は回転？糸切痕で墨書が施されている。欠損しているため文字は読み取れない。

282～284はにぶい黄橙色を呈するが、堅緻な焼成で須恵器坏に分類している。いずれも回転糸切で内外面ロクロ調整のみである。284の外底面には「中」の墨書がある。285は須恵器坏である。灰黄色でやや軟質な焼成である。底部は回転糸切で内外面に火ダスキ痕がある。

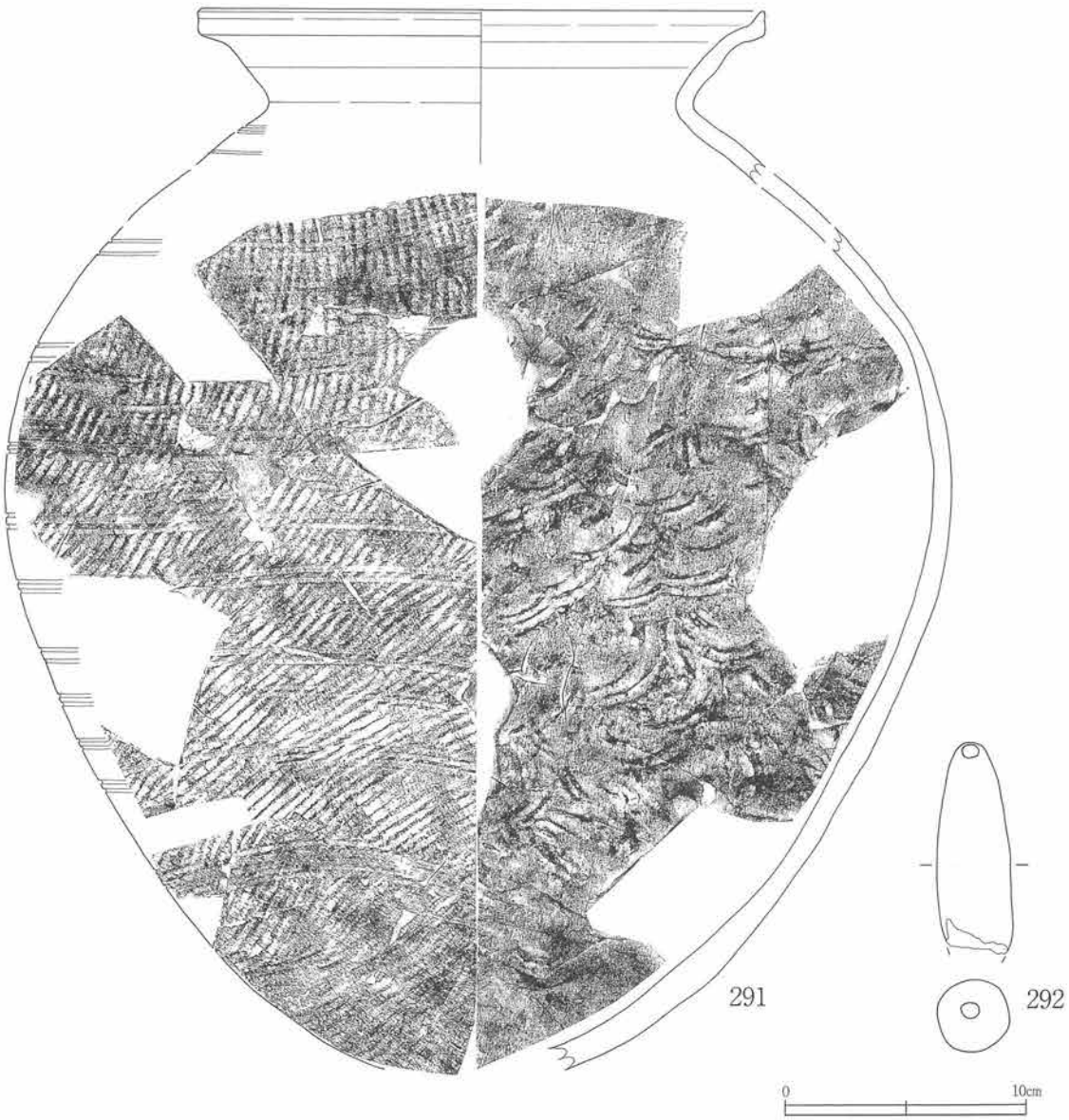
286は須恵器蓋である。つまみ部分の破片である。橙色で堅緻な焼成である。287は土師器の蓋である。外面ロクロ調整、内面ヘラミガキで黒色処理である。径は19.1cmでかなり大きい。下端部が折り返しになっている。本遺跡で蓋と考えられる土師器、須恵器は286・287の２点のみである。

288は小型の土師器長胴甕である。浅黄橙色の胎土で堅緻な焼成である。底面は回転糸切で外面に炭化物が付着する。

289は須恵器甕である。体部下半のヘラケズリと上半のロクロ目の下地にタタキ目が施されている。内面の下半部はヘラナデが施されている。



第139図　平成16年第２検出面出土土師器、須恵器①(279～290)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			外面調整	内面調整	色調	その他
				高さ	口径	底径				
279	土師器	坏	ⅢF74 2面	4.0	11.3	3.9	ﾍﾗﾐｶﾞｷ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	黄橙色	内面黒色処理
280	〃	〃	ⅢF65 2面	4.3	13.8	6.1	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	底面ヘラケズリ
281	〃	〃	ⅣE20 2面	(1.4)	—	8.0	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ヘラミガキ	灰黄色	底面に墨書
282	須恵器	坏	ⅢF84 2面	3.9	15.8	7.5	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙色	底面回転糸切
283	〃	〃	ⅢD33 2面	4.4	14.4	7.8	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙色	〃
284	〃	〃	ⅡC34 2面	(1.3)	—	5.8	ロクロ	ロクロ	にぶい黄橙色	底面に「中」の墨書
285	〃	〃	ⅢF84 2面	4.7	13.3	6.6	ロクロ	ロクロ	灰黄色	内外面に火だすき痕
286	〃	蓋	ⅢF65 2面	(1.8)	—	—	ロクロ	ロクロ	橙色	蓋のつまみ
287	土師器	〃	ⅢF65 2面	(2.8)	—	19.1	ロクロ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色	内面黒色処理
288	土師器	長胴甕	ⅢF75 2面	12.9	14.1	8.0	ロクロ	ロクロ	浅黄橙色	外面に炭化物付着
289	須恵器	甕	ⅢF74 2面	(26.9)	—	12.5	ﾛｸﾛ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛ ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰色	ロクロの下地にタタキ目
290	〃	大甕	ⅢF84 2面	(9.4)	21.4	—	ﾛｸﾛ ﾀﾀｷ	ロクロ	灰白色	割れた後に火熱を受けている
291	〃	〃	ⅢF65、74、84、93 2面	(44.1)	23.1	—	タタキ	アテ具痕	黒褐色	C区SI５出土の63と同一個体
292	—	土錘	ⅢF92 2面	(8.7)	3.1(幅)	—	—	—	橙色	土師質

第140図　平成16年第２検出面出土土師器、須恵器②(291～292)

290・291は須恵器大甕である。290は灰白色の胎土で軟質な焼成である。肩部にはタタキ目、口縁部のロクロ目の下地にタタキ目が確認できる。291は接合しないが同一個体の破片が多数出土している。C区SI５出土の破片（63）も接合しないが、同一個体の破片である。口縁部片と体部片から図上で器形を復原した。丸底で器高はおよそ45cmと推測される。表面の色調は灰～橙色で破断面は赤橙色を呈している。外面は全面にタタキ目が施され、ハケメ状の工具で11条の横線が施されている。内面はアテ具痕で底辺部近くはその上からヘラナデが施されている。292は土錘である。橙色で土師質である。C区SI３出土の土錘（29）と形状、色調、法量が近似する。

283・284を除く他の土師器、須恵器はC区SI５に近接する村道川崎３号線の路面部分から集中して出土したものである。291の須恵器大甕は、同一個体の破片がC区SI５から出土しており、他の土師器、須恵器もC区SI５との関係が予測される。（羽柴）

２　か　わ　ら　け

土師器が日常生活に使用されなくなり、土師質の土器が儀式、儀礼に使用される「かわらけ」に限定されてくる時代は、岩手県域においては11世紀以降と理解されている。ここでは11世紀以降の「かわらけ」について記述する。出土したかわらけは、11世紀中～後半、12世紀後半、13世紀後半～14世紀前半のものに３大別される。

観察表中の法量は反転して求めた数値も（　）を付けず記している。また高さで（　）付きのものは、残存部の値を記している。遺存度は残存している表面積を見た目で判断しており、計測した厳密なものではない。また色調は、その個体の面積の大きい色調を記している。観察には土色帳を使用した。その他の欄に多く記している「すのこ痕」は、かわらけを乾燥する際に下敷きにした、籠、ザルなどの圧痕がついたものである。

11世紀中～後半のかわらけ　（第141～145図、写真図版151～153）

平成13～15年調査で57点（1001～1057）、平成16年調査で43点（1058～1100）、合計100点が出土した。図化が不能な微細片を除いて出土した全点を図示している。すべてロクロかわらけである。色調はにぶい橙色のものが多く、胎土、質感がいずれも近似する。平成15年までの出土総重量は1,150.0g、平成16年の出土総重量は497.5gである。合計で総出土重量は1,647.5gである。掲載していない微細片の総重量は27.0gである。重量比の掲載率は98％になる。

細片のため判断が難しいものもあるが、1001～1016は小型かわらけである。1001は皿形の器形である。今回出土した11世紀のかわらけの中で最も遺存度が大きい。体部内面、外面底辺部には指跡がついている。底部はわずかに突き出している。1002・1003は皿形の器形と推測される。底部は1001よりも大きく突き出している。1004も皿形の器形と推測される。底部はわずかに突き出している。

1005は底部から口縁部までつながった破片であるが、1001よりも身が深く、底部が突き出さない器形である。埦形とするには浅い器形であるが、1001の器形と区別するため、1005の器形を「埦形」と称する。底径も1001よりも大きい。また1005の内面には油煙がわずかに付着している。

1006～1011は1001～1004よりも底径が大きく底部の突き出しがほとんどなく、1005と同様に「埦形」の器形と推測される。1006・1007・1010は底面にすのこ痕がある。1008は内面が剥離している。外面底辺部には油煙が付着している。1011の内面にも油煙？がわずかに付着している。

1012～1016は小型かわらけと推測されるが、口縁部の細片で器形の判定が難しい。口縁部の傾きか

ら、1012～1014は1001のような「皿形」の器形、1015・1016は1005のような「碗形」の器形と推測される。1014は内面に油煙が付着する。

1017～1037は大型かわらけである。1017～1019の底部は突き出し、底辺部が外反して立ち上がっている。底径は後述する1020～1022などに比べるとかなり小さい。1017は外反して立ち上がった底辺部が体部中央でやや内湾ぎみになることを観察できる。1018・1019も同様の器形と推測される。また1017は内面に油煙が付着している。1018・1019の外底面にはすのこ痕がある。

1020～1025も大型かわらけである。これらは底径が1017～1019よりも大きく、底部がほとんど突き出さず、底辺部が内湾して立ち上がる器形である。1020は内外面に、1024は外面に油煙が付着している。

1026～1028は大型かわらけの口縁部片である。反転実測で口径を求めたものである。いずれも口縁部がその端部近くでやや内湾することを読みとれる。この口縁部が1017～1019のタイプか、1020～1022のタイプどちらにつながるかは、どちらに実測図を重ねても器形がスムーズにつながり、判断が難しい。どちらの底部も同様の口縁部である可能性も高い。1026・1027には油煙が付着している。1028は口縁端部近くで器壁がやや薄くなる。

1029～1037は大型かわらけと判断したが、小破片のために口径を求めることができなかったものである。口縁部の傾きから判断すると、1026～1028と同様の器形と推測される。1035の内面口唇部にわずかに油煙？が付着する。1034は1028と同様に口唇部近くで器壁がやや薄くなっている。

1038～1041は口縁部が真っ直ぐ斜めに開く器形の大型かわらけである。反転実測で口径を出したものである。1040を除くと口径は15cm台である。1038は他に比較して、胎土に大きめの礫を含んでいる。内面には指跡がついている。1039は口唇部にすのこ痕がついている。土器を伏せて乾燥させたと推測される。1040の外面は他と異なり黒褐色の色調を呈する。内面は他と類似するにぶい橙色を呈している。

1042・1043も1038～1041と同様の器形と推測されるが、小破片のため口径を求めることができない。1043の内面には油煙かそれ以外の炭化物か判断が難しいが、微量に黒色のものが付着している。

1044～1047は高台の付く大型かわらけである。高台は貼り付け高台で、高台内面に回転糸切痕がある。高台の断面形は三角形である。底辺部は斜めに内湾しながら立ち上がっている。口縁部まで連続する個体はないが、実測図を重ねると、上記の1038～1041の口縁部形態にスムーズにつながり、斜めに真っ直ぐ広がる口縁形態と推測される。1045は高台がはがれた個体、1047ははがれた高台部分の破片である。1044の高台端部はヘラで削り取られたようにギザギザになっている。1046は内面に油煙が付着している。底辺部には指跡がついている。1047は高台部の破片で高台端部にすのこ痕がついている。

1048も高台がつく大型のかわらけである。この個体の高台は、1044～1047の高台に比較すると突出が小さいものである。貼り付け高台で高台内部に回転糸切痕を観察できる。そして、坏部内面にはヘラミガキ調整が施されている。黒色処理はなされていない。

1049～1051は内面にヘラミガキ調整が施される大型のかわらけである。いずれも小破片のために口径を求めることはできなかった。口縁部の傾きから推定すると、1038～1041に類似する、口縁部が真っ直ぐ斜めに開く器形と思われる。下半部、底部は同様に内面にヘラミガキが施されている1048の器形が相当すると考えられる。いずれもヘラミガキは内面のみに施され、外面に施されているものはない。また黒色処理はなされていない。1049のヘラミガキは内面口縁部上端には施されず、ロクロ調整が露出している。1050は口縁部上端部の器壁が薄くなっている。1050・1051のヘラミガキは口縁部

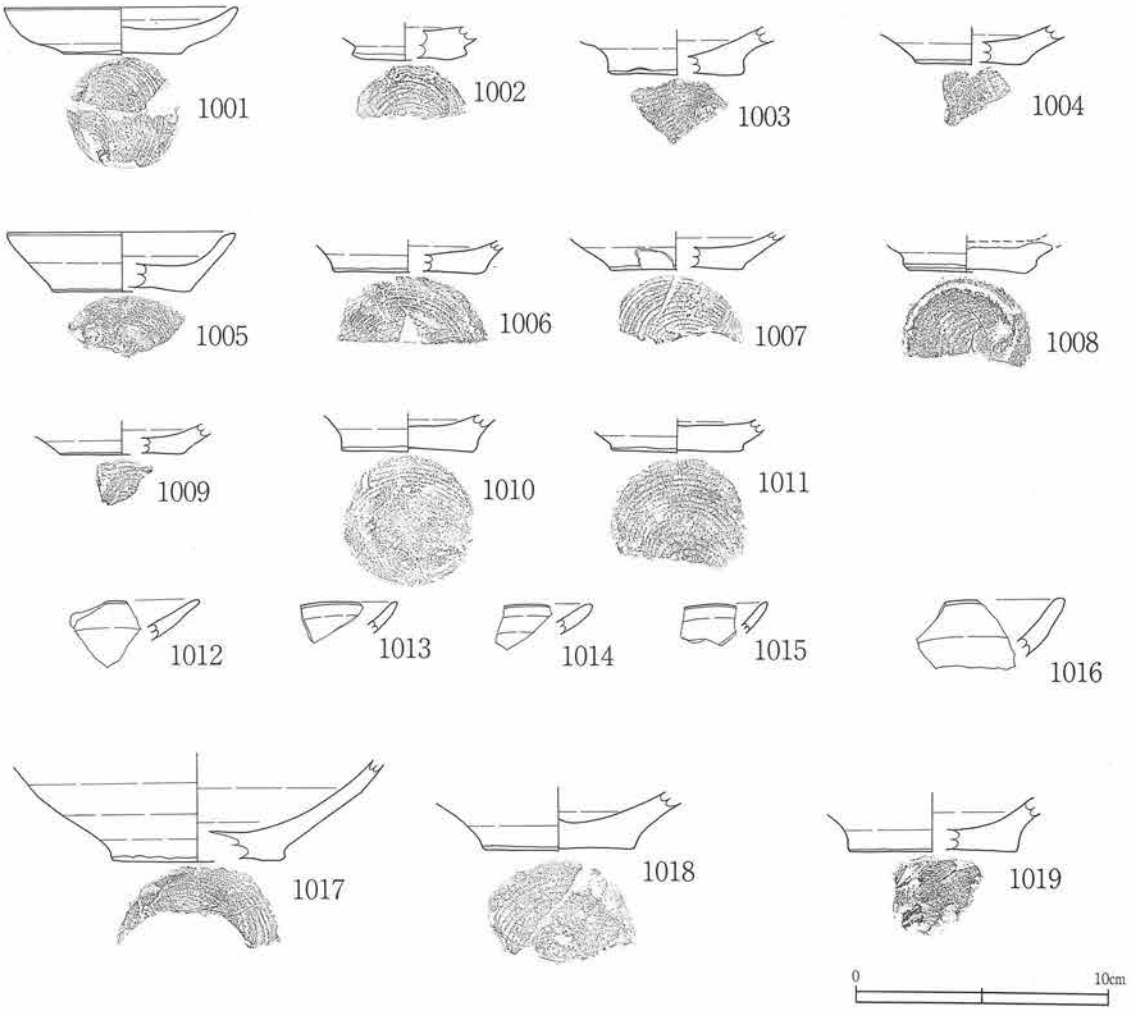
上端にまで及んでいる。

1052は高台部が中実で高い、「柱状高台かわらけ」である。高台の高さは約1.9cmである。高台の底面には回転糸切痕がある。坏部は皿状には開かず、斜めに真っ直ぐ立ち上がっている。欠損のため全体形は不明であるが、かなり身の深い坏部分と推測される。

1053～1057は体部片である。図示した傾きは推測である。いずれも大型かわらけと判断したが、小破片のためあくまで推測である。1056の外面下端には指跡がつく。

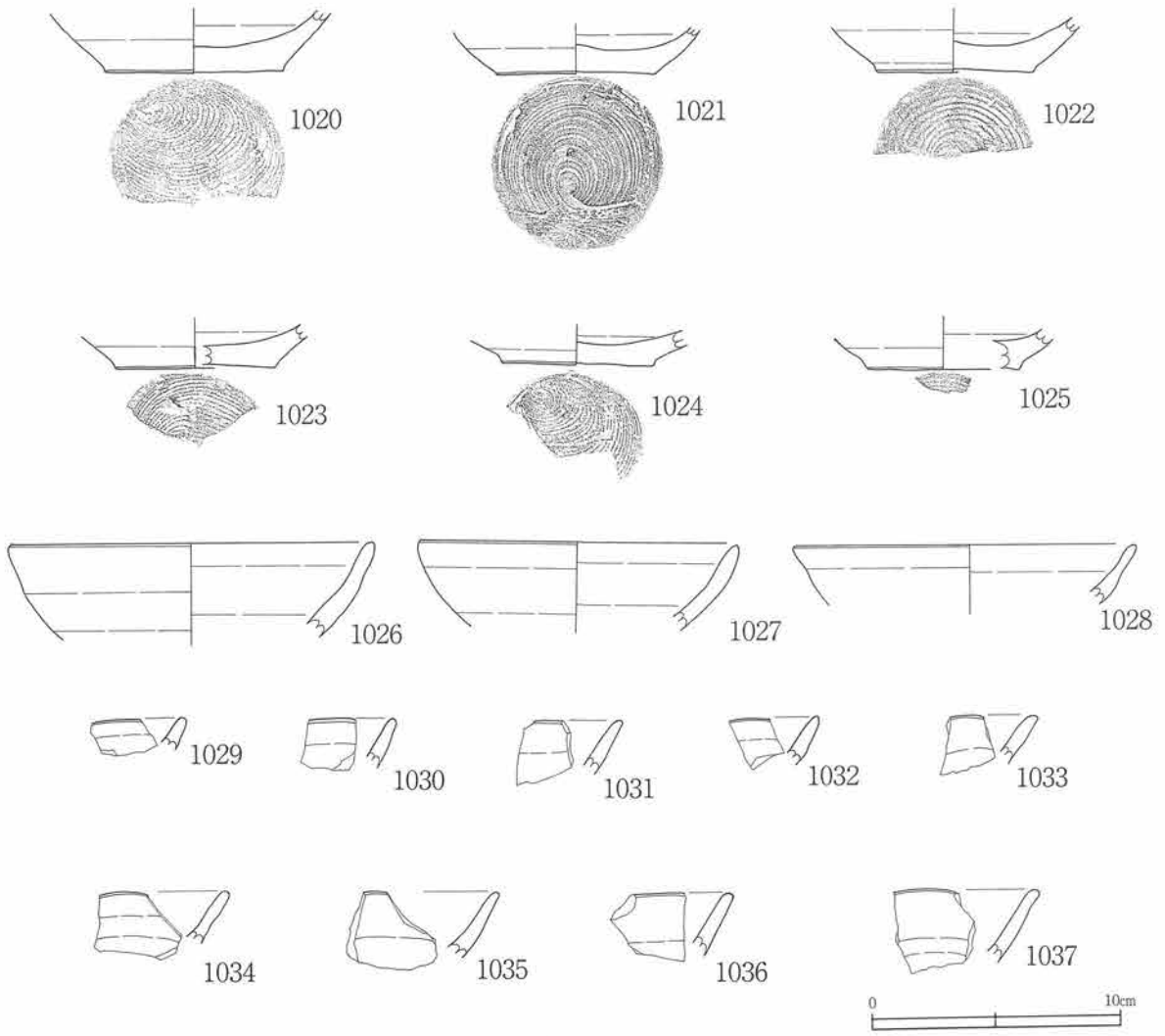
1058～1100は平成16年度調査で出土したかわらけである。いずれもB区沢跡埋土からの出土である。1058～1062は小型のかわらけである。薄手で口縁部がやや膨らむ器形である。11世紀のかわらけにしては薄手の感じが強いが、胎土、色調から11世紀のかわらけと判断した。1061の内面には油煙が付着する。1063～1067は小型かわらけの口縁部片である。1058～1062より厚手な感じがする。1068～1072は小型かわらけの底部片である。1068は底部が僅かに突き出す。1070はかなり深い器形で、皿形というより碗型に近い。1073は4破片が接合したものであり、口径、器形の復原もかなり信頼性が高い。口縁部が内湾しながら立ち上がる大型かわらけである。口縁部外面に油煙が付着している。1074は大型かわらけの口縁部片である。外面に油煙が付着している。底部片1075は1074に胎土、質感が類似し同一個体片の可能性がある。実測図を重ねると器形はスムーズにつながる。1075の底面は回転糸切りですのこ痕がついている。1076は大型かわらけの分厚い底部破片である。すのこ痕が付く。1077～1079も大型かわらけの底部破片である。1078・1079は小破片であるが、なんとか底径を求めた。1080は大型かわらけの底部片である。他の個体に比べて焼成が甘く摩耗している。1081～1085は大型かわらけの口縁部片である。破片が小さく口径を求めることができなかった。1086～1091は体部破片である。おそらくいずれも大型かわらけと思われる。図に示した傾きは推測によるものである。

1092～1095は内外面にヘラミガキがあり、内面に黒色処理を施している破片である。岩手県内において、11世紀のかわらけで黒色処理を施している事例はほとんどないが、これらは胎土、質感、色調、厚さが本遺跡出土の11世紀かわらけと類似し、また、この種の破片が、11世紀のかわらけが多く出土したB区沢跡にかぎって出土していることから、11世紀のかわらけの一種と判断したものである。4破片いずれも、外面のヘラミガキは全面ではなく、上端部を除く口縁部に施され、体部下半はロクロ目が露出している。内面は全面ヘラミガキで黒色処理が施されている。またこの4破片は厚さや胎土が類似し同一個体の可能性も考えられる。いずれも大型かわらけの破片である。1096も1092～1095と類似するが内面にヘラミガキが施されていない破片である。内面にヘラミガキは施されていないが、色調が黒褐色を呈している。外面は口縁上端部を除きヘラミガキが施されている。1097、1098は内面にヘラミガキ、黒色処理を施している底部破片である。1092～1095と同じ理由で11世紀のかわらけと判断している。1097は断面が三角形の貼り付け高台である。高台内部に回転糸切痕を観察できる。1098は幅が狭い削り出し？の高台が付く。1099、1100は剥離した高台部の破片である。1099は断面の幅が広い三角形の高台、1100は幅の狭い端部が外反する形状の高台である。（羽柴）



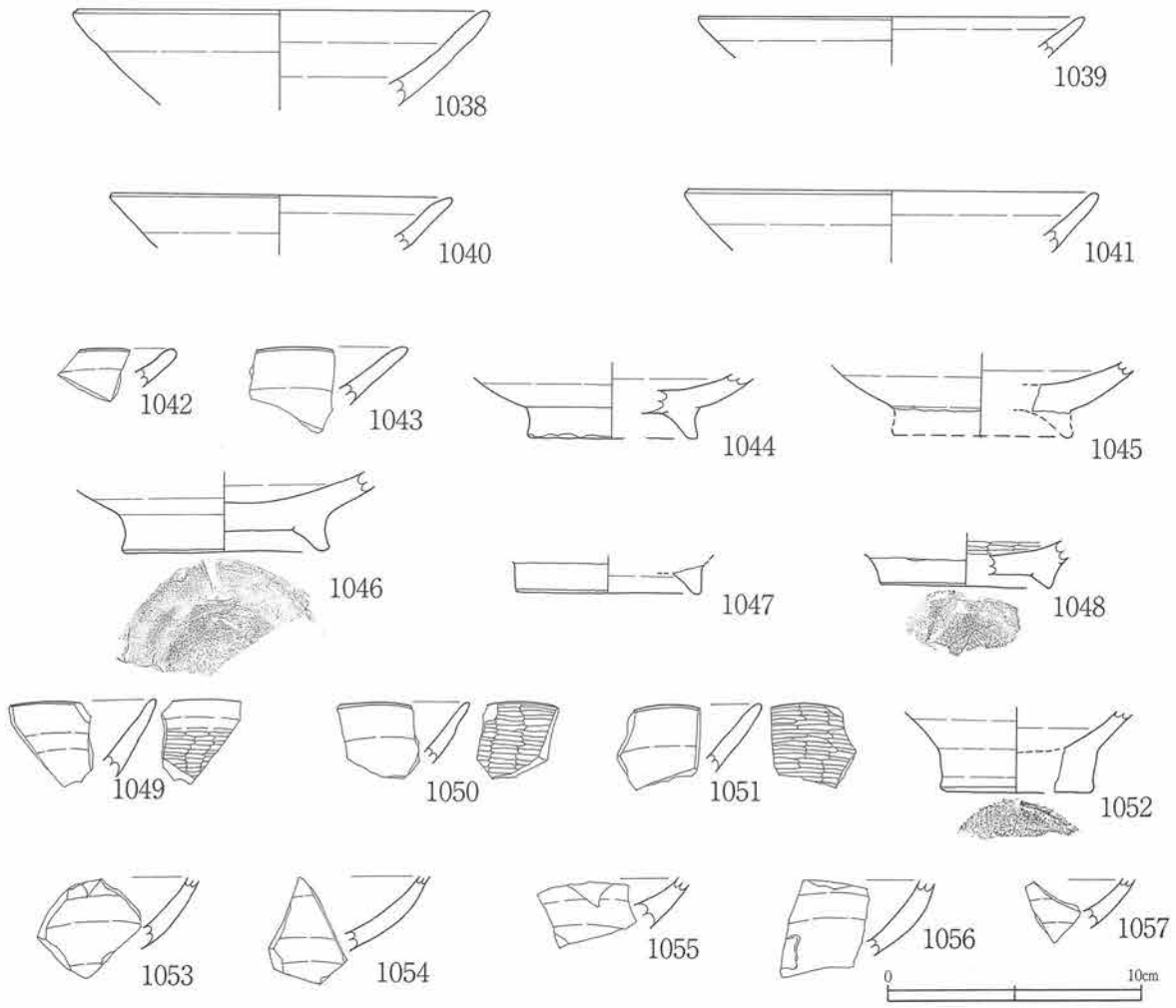
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1001	ロクロ	小	D区南側２層上面	1.9	9.0	4.6	11C中～後	60	浅黄橙色	底面すのこ痕
1002	〃	〃	B区粗掘	(1.3)	—	3.3	〃	20	橙色	
1003	〃	〃	B区沢埋土(ⅢD01～ⅡD91)	(1.9)	—	5.2	〃	20	にぶい橙色	
1004	〃	〃	ⅡC61検出(01出土)	(1.6)	—	4.2	〃	20	にぶい黄橙色	底面すのこ痕
1005	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD03)	2.3	8.8	5.4	〃	40	にぶい橙色	底面すのこ痕　内面油煙付着
1006	〃	〃	B区沢跡２層(ⅡD82)	(1.3)	—	5.9	〃	30	橙色	底面すのこ痕　ⅡD82層からも出土
1007	〃	〃	ⅢD96 ４層(01出土)	(1.4)	—	5.2	〃	40	にぶい橙色	底面すのこ痕
1008	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD01～ⅡD91)	(1.2)	—	4.7	〃	30	橙色	内面剥離　外面油煙付着
1009	〃	〃	ⅢD01 ４層(02出土)	(1.2)	—	4.8	〃	10	浅黄橙色	
1010	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD92)	(1.4)	—	5.2	〃	40	橙色	底面すのこ痕
1011	〃	〃	B区ⅡD94２層	(1.3)	—	5.2	〃	40	浅黄橙色	内面油煙？わずかに付着
1012	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD04)	(1.6)	—	—	〃	5	明黄褐色	
1013	〃	〃	B区沢跡２層(西側ベルト)	(1.2)	—	—	〃	3	にぶい黄褐色	
1014	〃	〃	C区表土	(1.3)	—	—	〃	3	橙色	内面油煙付着
1015	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD01～ⅡD91)	(1.2)	—	—	〃	3	橙色	
1016	〃	〃	ⅣD19 ４層(01出土)	(2.3)	—	—	〃	10	にぶい橙色	
1017	〃	大	B区沢跡２層(西側)	(4.0)	—	6.6	〃	50	橙色	内面油煙付着　ⅢD01 4層からも出土
1018	〃	〃	B区ⅡD91２層	(2.3)	—	6.0	〃	30	橙色	底面すのこ痕　ⅢD01 4層からも出土
1019	〃	〃	B区沢跡２層(西側ベルト)	(2.2)	—	6.6	〃	20	橙色	底面すのこ痕

第141図　11世紀のかわらけ①(1001～1019)



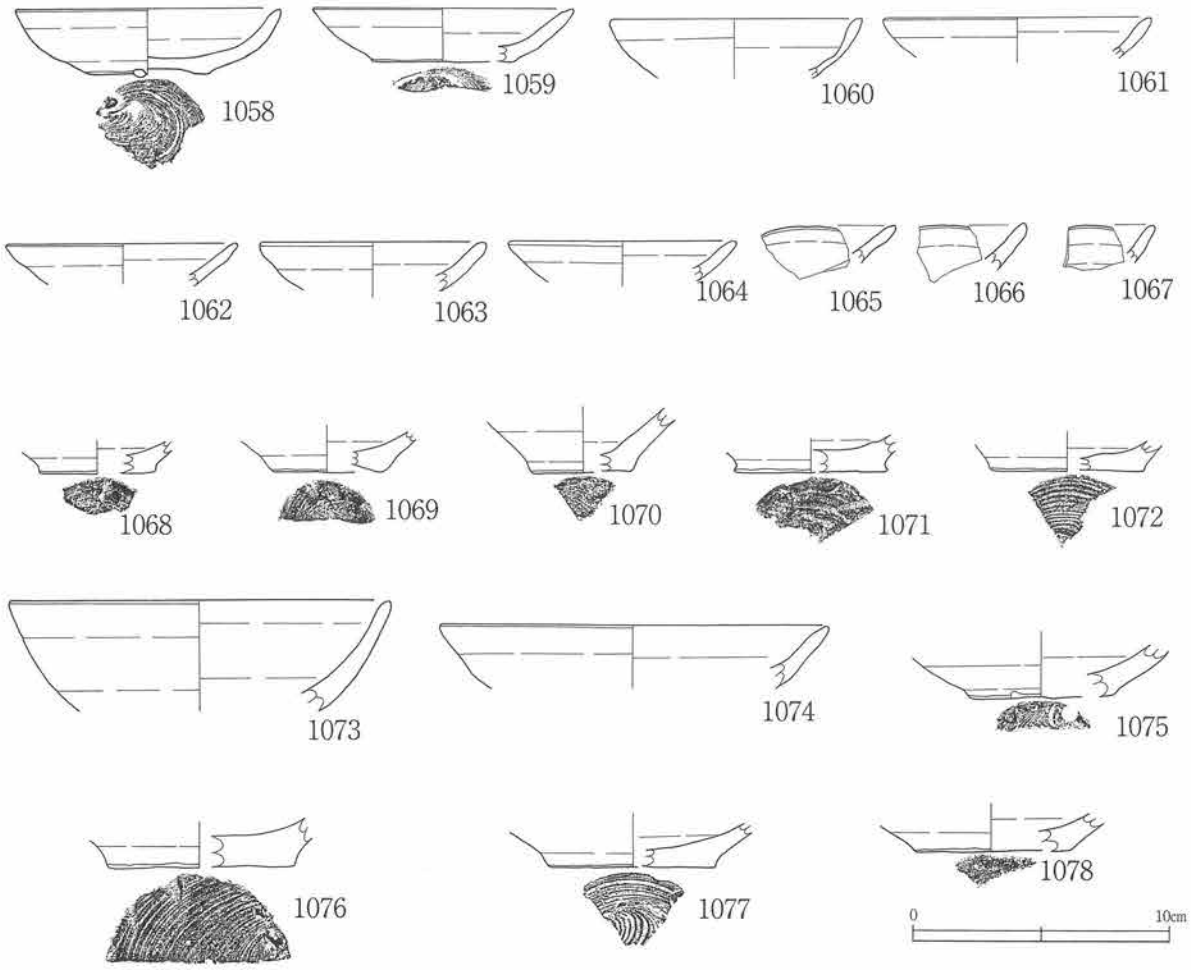
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1020	ロクロ	大	C区ⅢE51 3層	(2.4)	—	7.0	11C中～後	25	橙色	内外面油煙？わずかに付着
1021	〃	〃	B区採集	(1.9)	—	6.3	11C中～後	25	浅黄橙色	
1022	〃	〃	D区SK120埋土	(2.2)	—	6.2	〃	20	にぶい黄橙色	底面すのこ痕
1023	〃	〃	B区ⅡD82 2層	(1.8)	—	6.2	〃	15	橙色	
1024	〃	〃	02SK７埋土	(1.5)	—	6.1	〃	20	橙色	外面油煙付着
1025	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD92)	(2.2)	—	6.0	〃	3	橙色	
1026	〃	〃	C区ⅢE51 3層	(3.8)	14.3	—	〃	5	にぶい橙色	内外面油煙付着
1027	〃	〃	B区SK46埋土	(3.5)	12.5	—	〃	5	にぶい橙色	外面油煙付着
1028	〃	〃	B区沢跡埋土(西側ベルト)	(2.4)	13.5	—	〃	3	橙色	
1029	ロクロ	大	B区沢跡埋土(ⅢD01～ⅡD91)	(1.3)	—	—	11C中～後	1	橙色	
1030	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD92)	(2.0)	—	—	〃	3	にぶい橙	
1031	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD92)	(2.2)	—	—	〃	3	橙色	
1032	〃	〃	B区沢跡２層(西側ベルト)	(2.0)	—	—	〃	2	にぶい橙色	
1033	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD01～ⅡD91)	(1.9)	—	—	〃	2	にぶい橙色	
1034	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD91)	(2.1)	—	—	〃	4	にぶい黄橙色	
1035	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD01～ⅡD91)	(2.7)	—	—	〃	4	にぶい橙色	口縁部内面油煙わずかに付着
1036	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD01～ⅡD91)	(2.6)	—	—	〃	3	橙色	
1037	〃	〃	B区SK46埋土	(2.0)	—	—	〃	4	浅黄橙色	

第142図　11世紀のかわらけ②(1020～1037)



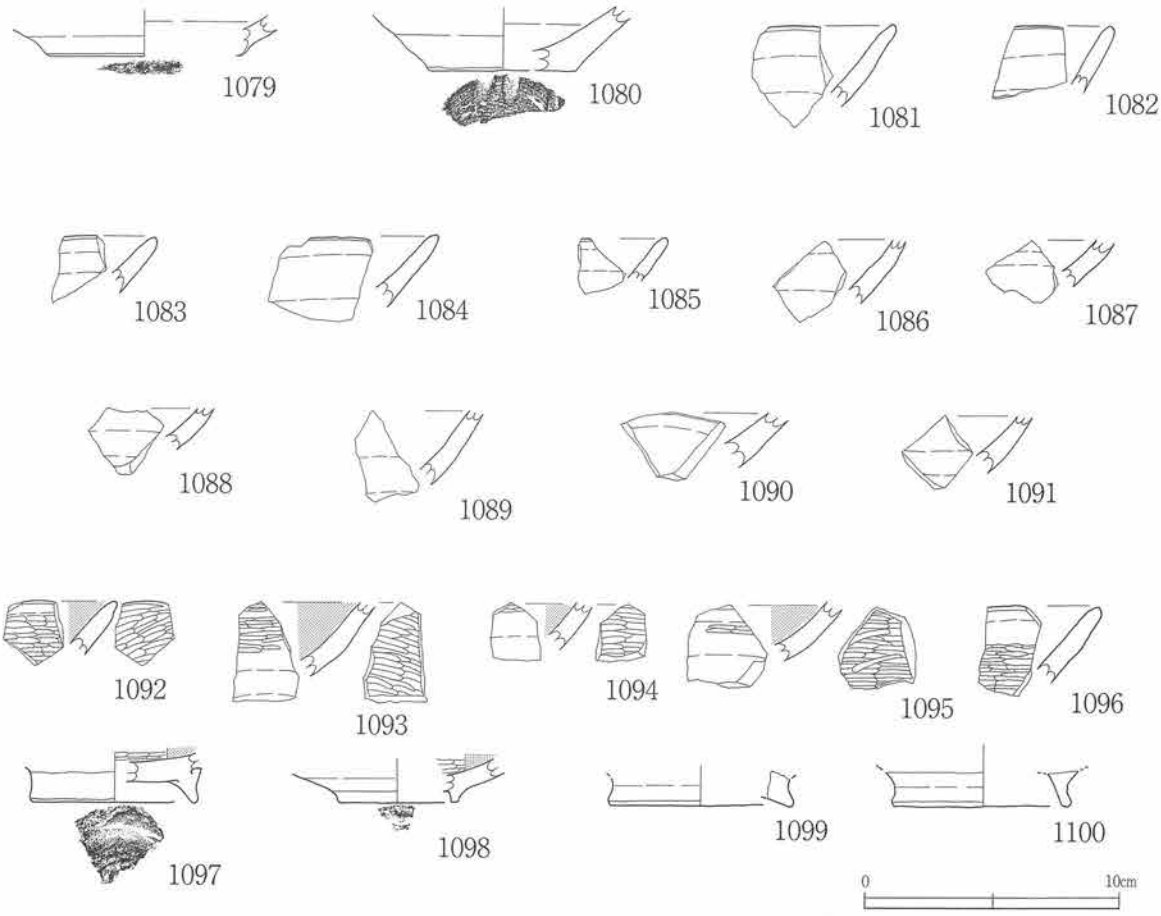
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1038	ロクロ	大	01SD 1 埋土(ⅣD08)	(3.7)	15.9	—	11C中～後	15	明赤褐	胎土に大きめの礫を含む
1039	〃	〃	D区SD102埋土	(1.6)	15.0	—	〃	5	にぶい橙色	口唇部にすのこ？痕
1040	〃	〃	ⅢD27 4層(02出土)	(2.1)	13.3	—	〃	5	黒褐色	内面はにぶい橙色を呈する
1041	〃	〃	01SD 1 埋土	(2.4)	15.8	—	〃	4	橙色	
1042	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD92)	(1.5)	—	—	〃	3	浅黄橙色	
1043	〃	〃	ⅣE25 9層(01出土)	(2.3)	—	—	〃	3	浅黄橙色	内面油煙？わずかに付着
1044	〃	〃	ⅢD96 4層(01出土)	(2.6)	—	6.6	〃	10	橙色	高台内回転糸切
1045	〃	〃	ⅣD07 4層(01出土)	(3.0)	—	6.9	〃	5	橙色	高台剥離
1046	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD95)	(3.2)	—	8.0	〃	30	橙色	内面油煙付着　高台内回転糸切
1047	〃	〃	D区SD102埋土上位	(1.2)	—	7.2	〃	5	橙色	高台端部にすのこ痕付着
1048	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD95)	(1.9)	—	6.6	〃	5	褐灰色	内面にヘラミガキ
1049	〃	〃	ⅢD27 4層(02出土)	(3.0)	—	—	〃	3	橙色	内面にヘラミガキ
1050	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD04)	(2.5)	—	—	〃	3	橙色	内面にヘラミガキ
1051	〃	〃	ⅢD27 4層(02出土)	(2.7)	—	—	〃	3	橙色	内面にヘラミガキ
1052	〃	—	ⅢD27 4層(02出土)	(3.3)	—	5.8	〃	15	橙色	柱状高台　底面回転糸切
1053	〃	大	ⅡC62検出(01出土)	(2.8)	—	—	〃	3	橙色	体部片　傾き推測
1054	〃	大	B区沢跡埋土(ⅡD91)	(2.9)	—	—	〃	3	橙色	体部片　傾き推測
1055	〃	大	C区表採	(2.0)	—	—	〃	2	橙色	体部片　傾き推測
1056	〃	大	ⅣD30 4層(01出土)	(3.0)	—	—	〃	3	橙色	体部片　傾き推測
1057	〃	大	B区沢跡埋土(ⅡD92)	(1.9)	—	—	〃	1	橙色	体部片　傾き推測

第143図　11世紀のかわらけ③(1038～1057)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1058	ロクロ	小	B区沢跡埋土(ⅡD95)	2.6	10.5	4.8	11C中～後	50	橙色	底面に粘土粒付着
1059	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD05)	2.1	10.1	5.5	〃	20	にぶい黄橙色	色調9～10Cの土師器に似る
1060	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD15)	(2.3)	9.0	—	〃	20	浅黄橙色	
1061	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD05)	(1.6)	10.5	—	〃	10	にぶい黄橙色	内面に油煙付着
1062	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD05)	(1.7)	9.2	—	〃	15	浅黄橙色	
1063	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD05)	(1.8)	8.7	—	〃	10	にぶい橙色	胎土に金雲母混入
1064	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD05)	(1.6)	9.0	—	〃	5	にぶい橙色	〃
1065	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD17)	(1.5)	—	—	〃	10	橙色	
1066	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD06)	(1.7)	—	—	〃	10	橙色	器種判別難しいが小型と思われる
1067	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD18)	(1.5)	—	—	〃	5	にぶい橙色	〃
1068	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD05)	(0.9)	—	4.5	〃	10	橙色	
1069	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD95)	(1.3)	—	4.5	〃	20	橙色	胎土に金雲母混入
1070	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD17)	(1.9)	—	4.1	〃	20	橙色	内面暗褐色を呈する
1071	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD17)	(0.8)	—	6.0	〃	30	橙色	底面すのこ痕
1072	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD07)	(1.1)	—	6.1	〃	20	にぶい橙色	内外面に油煙付着
1073	〃	大	B区沢跡2層(ⅢD05、ⅢD06)	(4.4)	15.0	—	〃	25	にぶい橙色	4破片が接合　口縁外面に油煙
1074	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD05)	(2.5)	15.4	—	〃	15	にぶい橙色	外面油煙付着
1075	〃	〃	B区沢跡検出面	(1.7)	—	5.8	〃	10	灰褐色	すのこ痕　74と同一個体か
1076	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD15)	(1.1)	—	7.4	〃	20	にぶい橙色	底面すのこ痕
1077	〃	〃	B区沢跡検出面	(1.3)	—	6.6	〃	15	にぶい黄橙色	すのこ痕　内面黒褐色を呈する
1078	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD08)	(1.1)	—	6.1	〃	5	橙色	器面荒れている

第144図　11世紀のかわらけ④(1058～1078)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1079	ロクロ	大	B区沢跡1層(ⅢD18)	(1.1)	—	7.7	11C中～後	5	橙色	
1080	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD05)	(2.3)	—	5.9	〃	15	橙色	底面すのこ痕
1081	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD05)	(3.2)	—	—	〃	5	橙色	
1082	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD15)	(2.6)	—	—	〃	5	橙色	
1083	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD18)	(2.3)	—	—	〃	3	にぶい橙色	内面油煙付着
1084	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD18)	(2.8)	—	—	〃	5	橙色	外面に黒斑
1085	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD05)	(1.6)	—	—	〃	3	橙色	
1086	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD05)	(2.6)	—	—	〃	3	橙色	
1087	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD05)	(1.9)	—	—	〃	3	にぶい橙色	底辺部の破片
1088	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD18)	(1.7)	—	—	〃	3	橙色	
1089	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD15)	(2.9)	—	—	〃	5	にぶい橙色	
1090	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD15)	(2.4)	—	—	〃	5	橙色	底辺部の破片
1091	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD05)	(2.3)	—	—	〃	3	橙色	内面に油煙
1092	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD05)	(2.1)	—	—	〃	3	橙色	内面黒色処理
1093	〃	〃	B区沢跡埋土	(2.9)	—	—	〃	5	にぶい褐色	〃
1094	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD18)	(1.9)	—	—	〃	3	にぶい橙色	〃
1095	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD06)	(2.2)	—	—	〃	3	橙色	〃
1096	〃	〃	B区沢跡2層(ⅢD07	(3.0)	—	—	〃	5	橙色	内面にヘラミガキがないが黒褐色を呈する
1097	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD15)	(2.0)	—	6.4	〃	5	にぶい黄橙色	内面黒色処理
1098	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD15)	(1.2)	—	4.9	〃	5	にぶい橙色	〃
1099	〃	〃	B区沢跡1層(ⅢD15)	(1.1)	—	7.1	〃	3	橙色	高台部分の破片
1100	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD18)	(1.3)	—	7.0	〃	5	にぶい橙色	剥離した高台部分

第145図　11世紀のかわらけ⑤(1079～1100)

12世紀後半のかわらけ　（第146～148図、写真図版154～156）

平成13～16年度までの調査で、平泉遺跡群のかわらけ編年に照らし合わせて、12世紀後半に位置づけられるかわらけが出土している。12世紀後半のかわらけは、ロクロかわらけが総重量140.0g、手づくねかわらけが総重量2,463.3g出土した。合計で2,603.4gの出土である。重量比ではロクロと手づくねの比率は１：17.6になる。圧倒的に手づくねかわらけの量が多い。この内、図示したのはロクロかわらけ５点(90.0g)、手づくねかわらけ54点(950.1g)である。図示したものは反転実測で径が出せるものを選択した。重量比からすると、図化率は42%になる。

1101はロクロの小型かわらけである。確認できるロクロ小型かわらけはこの１点のみの出土である。胎土には海綿状骨針が混じり、平泉遺跡群出土のロクロかわらけの胎土と非常に類似する。

1102～1105はロクロ大型かわらけである。胎土は海綿状骨針が混じり、平泉遺跡群出土のものと非常に類似する。1102・1103は底部破片で、どちらも底面にすのこ痕が付く。1102は焼成が良好で外面底辺部に指跡がつく。103は接合しないが２破片に分かれている。口縁部破片1105は底部破片1103と胎土、質感、色調が類似し同一個体の可能性が高い。

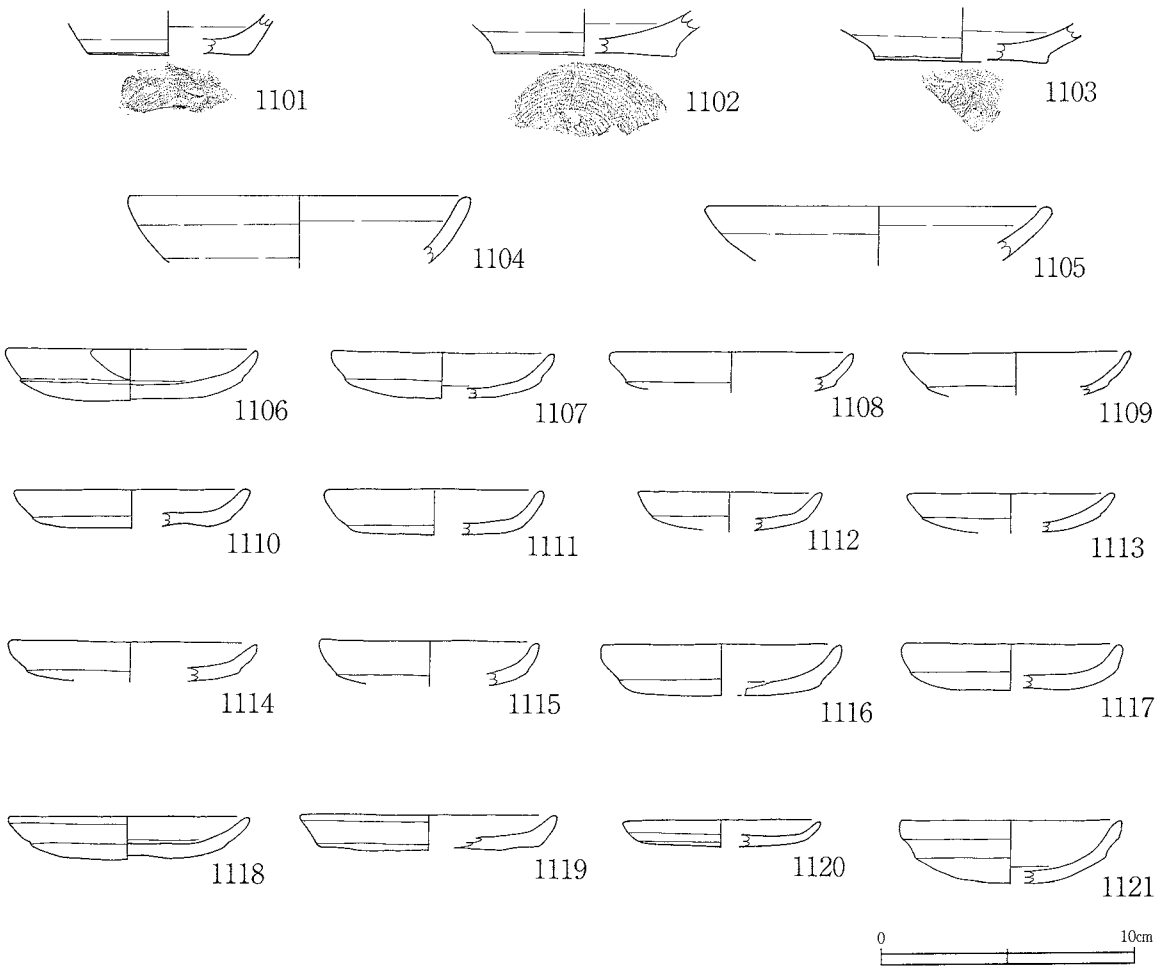
1106～1131は小型手づくねかわらけである。ほとんどは反転実測で口径を求めている。26個体を図示した。口径の平均値は9.48cmである。1106～1117は口縁部が１段なで、口唇部面取りなし。1118～1131は口縁部２段なで、口唇部面取りなしである。２段なでの方が14個体と１段なでの12個体を凌駕している。どちらの口縁部形態のかわらけも、胎土は平泉遺跡群出土の手づくねかわらけと全く同じである。また図示した小型手づくねかわらけの中で油煙が付着するものは１個体も存在しない。1106は外底面にすのこ痕が顕著についている。1111は内外面が黒褐色の色調を呈する。1116は遺存率が約50%で手づくね小型かわらけの中では最も大きい。1118・1119は器高が他に比較すると低い。1120は口径も高さも小さい器形である。1121・1126は器高が高い器形である。

1132・1133は内折れかわらけである。胎土は本遺跡の手づくねかわらけ、また平泉遺跡群の手づくねかわらけと共通である。出土した破片の中で、内折れかわらけと判断できたのはこの２破片だけである。

1134～1159は大型手づくねかわらけである。26個体を図示した。胎土は小型、内折れと同様に平泉遺跡群のものと共通する。口径の平均値は13.97cmである。

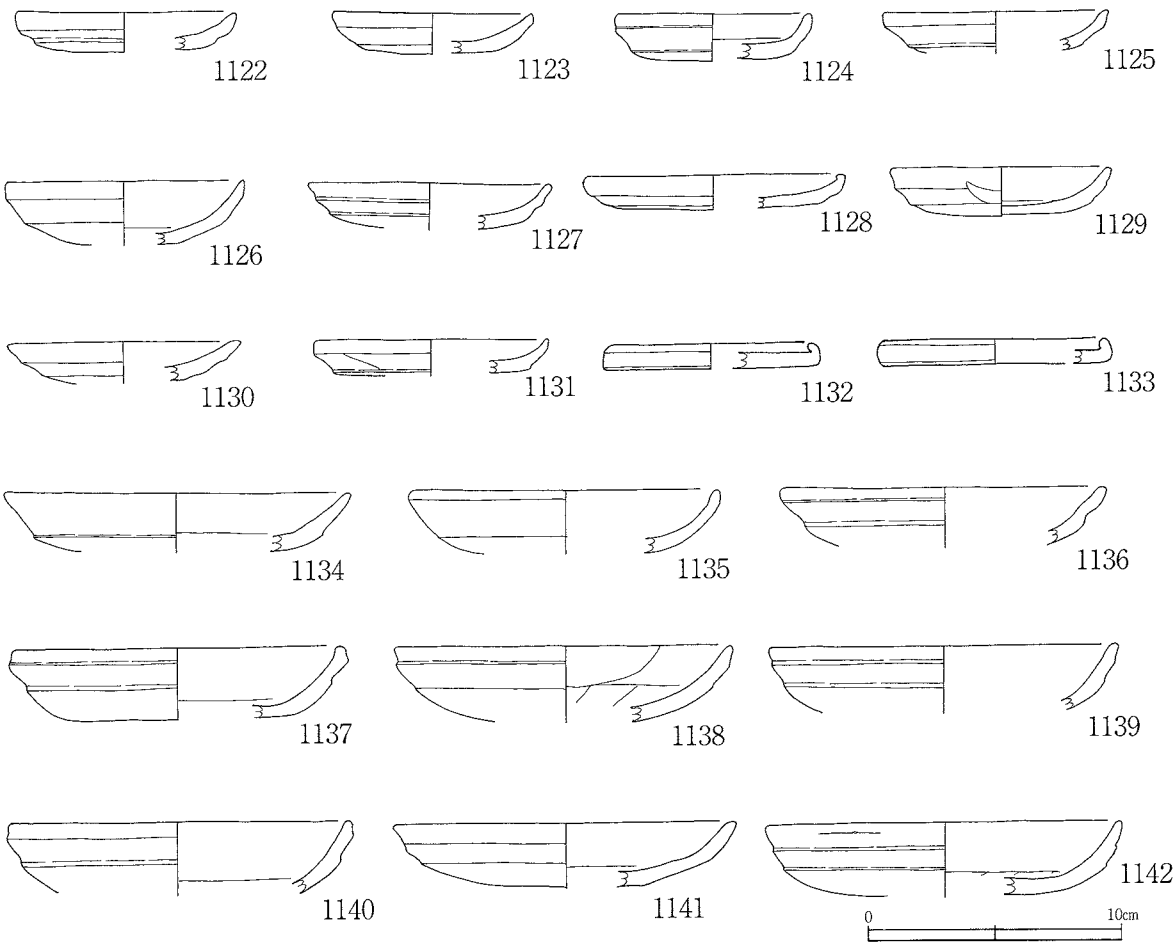
1134は口縁部１段なで、口唇部面取りなしである。図では口縁部が外反するが、口縁部が歪んでおり、内湾する部分もある。1135は口縁部１段なで、口唇部面取り有りである。外面が剥離して欠損している部分がある。1136～1154は口縁部２段なで、口唇部面取りなしである。図示した大型手づくねかわらけ26点のうち19点(70%)がこの口縁部形態になる。図示していない破片でも、「2段なで面取りなし」を多く見いだせる。1145は２破片に分かれるが接合しない。内面と口唇部に油煙が顕著に付着する。遺存率が60%で大型手づくねかわらけの中で一番大きい。1152・1153の内面にも油煙らしいものが付着する。1150は色調がやや赤みを帯び、二次被熱している可能性がある。

1155～1159は口縁部２段なで、口唇部面取り有りの口縁部形態である。1156と1159の破断面は内外面の表面が灰白色であるが、中央部が黒褐色になっている。1157は破片の下端部の破断面を擦って平滑にしている。その意図は不明である。1160は大型の手づくねかわらけである。平成16年のB区沢跡で出土した。平成16年度の調査で出土した12世紀のかわらけで図示したのはこの１点のみである。口縁部２段なで、口唇部面取りなしの個体である。　（羽柴）



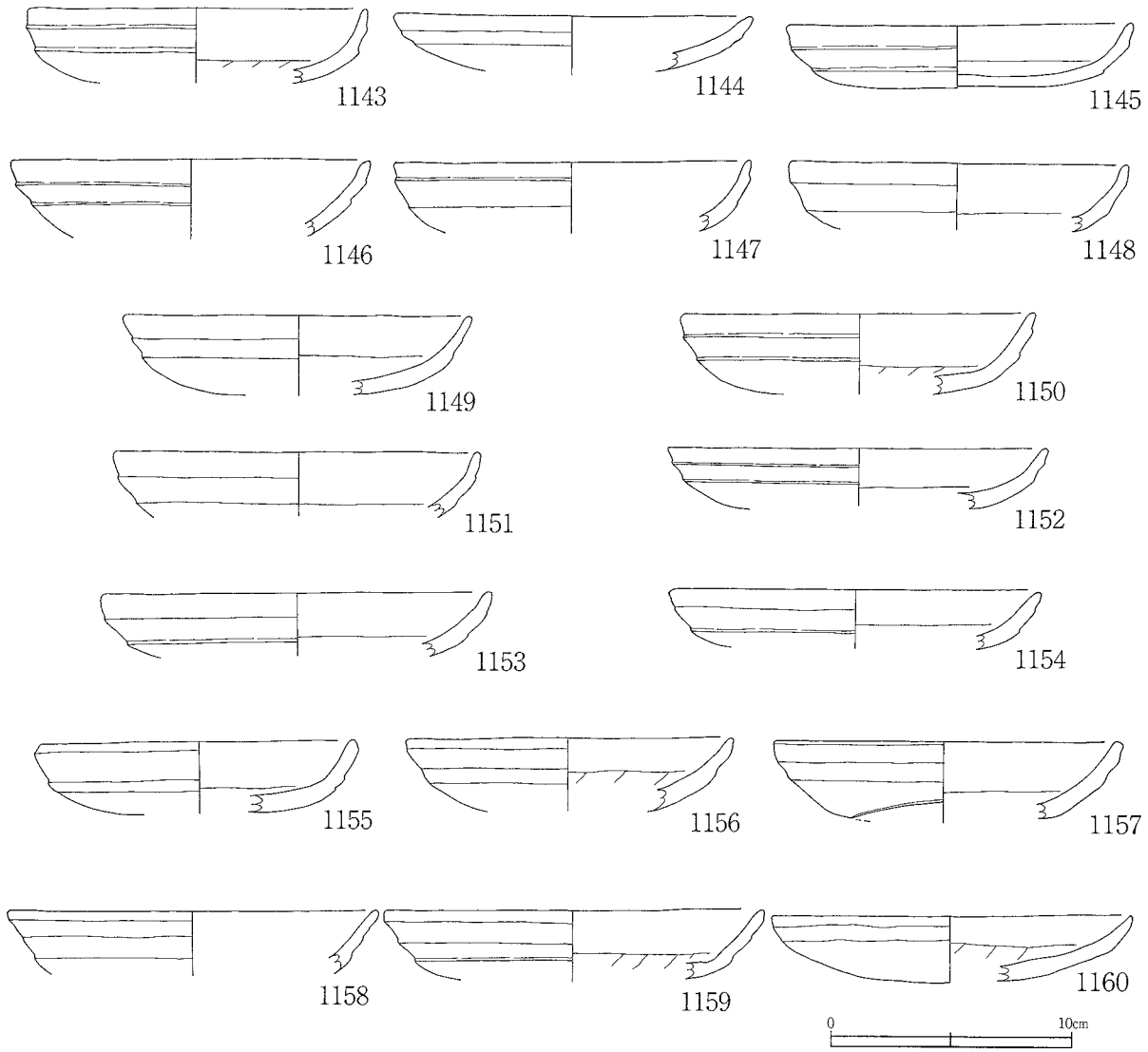
番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1101	ロクロ	小	ⅢD12 4層(02出土)	(1.7)	—	6.2	12C後半	20	灰褐色	胎土骨針混じる
1102	ロクロ	大	ⅣE27 3層(C区)	(1.8)	—	7.0	〃	20	明褐灰色	底部すのこ痕　胎土骨針混じる
1103	ロクロ	大	ⅡC100 4層(02出土)	(1.6)	—	6.8	〃	5	黄橙色	胎土骨針混じる　2破片になっている
1104	ロクロ	大	ⅢD27 4層(02出土)	(2.6)	13.2	—	〃	5	黄橙色	胎土骨針混じる
1105	ロクロ	大	ⅢD01 4層(02出土)	(2.1)	13.4	—	〃	5	黄橙色	胎土骨針混じる
1106	手づくね	小	B区SK44 2層	2.0	9.8	—	〃	45	黄橙色	1段ナデ面取りなし　すのこ痕
1107	〃	〃	B区沢跡2層(西側ベルト)	1.8	8.7	—	〃	25	浅黄橙色	1段ナデ面取りなし　すのこ痕
1108	〃	〃	01SD1(東側)(01出土)	(1.5)	9.4	—	〃	3	黄橙色	1段ナデ面取りなし
1109	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD91)	(1.7)	8.8	—	〃	5	浅黄橙色	1段ナデ面取りなし
1110	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	1.8	8.4	—	〃	15	黒褐色	1段ナデ面取りなし
1111	〃	〃	ⅡC100 4層(02出土)	1.5	9.0	—	〃	45	浅黄橙色	1段ナデ面取りなし　すのこ痕
1112	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	1.5	7.1	—	〃	5	浅黄橙色	1段ナデ面取りなし　すのこ痕
1113	〃	〃	ⅢC10かくらん(02出土)	1.5	8.0	—	〃	5	褐灰色	1段ナデ面取りなし
1114	〃	〃	B区沢跡2層(西側ベルト)	1.5	9.6	—	〃	8	浅黄橙色	1段ナデ面取りなし
1115	〃	〃	ⅡD91 4層(02出土)	(1.7)	8.6	—	〃	5	浅黄橙色	1段ナデ面取りなし
1116	〃	〃	ⅢCかくらん(02出土)	2.1	9.2	—	〃	50	浅黄橙色	1段ナデ面取りなし　すのこ痕
1117	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD01～ⅡD91)	1.8	8.6	—	〃	30	黄橙色	1段ナデ面取りなし　すのこ痕
1118	〃	〃	ⅢC10かくらん(02出土)	1.7	9.4	—	〃	30	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1119	〃	〃	ⅡC100 4層(02出土)	1.5	10.0	—	〃	25	黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1120	〃	〃	ⅢC10かくらん(02出土)	1.1	7.6	—	〃	20	黄橙色	2段ナデ面取りなし
1121	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD01～ⅡD91)	2.5	8.6	—	〃	25	にぶい黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕

第146図　12世紀のかわらけ①(1101～1121)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1122	手づくね	小	ⅡC100 4層(02出土)	1.5	8.6	—	12C後半	20	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし
1123	〃	〃	ⅡC100 4層(02出土)	1.5	7.8	—	〃	20	灰白色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1124	〃	〃	ⅡD83 2層(B区)	1.8	7.4	—	〃	20	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし
1125	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD91)	(1.6)	8.8	—	〃	10	灰白色	2段ナデ面取りなし
1126	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅢD01~ⅡD91)	(2.5)	9.2	—	〃	30	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1127	〃	〃	ⅢD35 3層(01出土)	(1.8)	9.4	—	〃	20	にぶい黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1128	〃	〃	ⅡC10かくらん(02出土)	1.9	10.0	—	〃	20	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし
1129	手づくね	小	B区沢跡埋土(ⅡD91)	1.9	8.6	—	12C後半	40	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1130	〃	〃	ⅡC10かくらん(02出土)	(1.5)	9.0	—	〃	5	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし
1131	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD91)	1.3	9.1	—	12C後半	20	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1132	手づくね	内折	B区沢跡埋土(ⅡD81)	1.0	7.6	8.1	〃	15	浅黄橙色	すのこ痕
1133	手づくね	内折	ⅢD01 4層(02出土)	1.0	8.6	8.6	〃	5	浅黄橙色	
1134	手づくね	大	B区沢跡2層(ⅢD03)	(2.3)	13.4	—	〃	10	灰白色	1段ナデ面取りなし
1135	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	(2.5)	12.0	—	〃	15	灰白色	1段ナデ面取りあり
1136	〃	〃	ⅢD35 3層(01出土)	(2.3)	12.4	—	〃	5	にぶい黄橙色	2段ナデ面取りなし
1137	〃	〃	ⅣD07 4層(01出土)	2.8	2.6	—	〃	10	灰白色	2段ナデ面取りなし
1138	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD91)	(3.0)	13.0	—	〃	10	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1139	〃	〃	ⅣD18付近(01出土)	(2.6)	13.4	—	〃	10	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし
1140	〃	〃	ⅢD54 4層(01出土)	(3.8)	13.2	—	〃	10	灰白色	2段ナデ面取りなし　ⅣD17 4層からも出土
1141	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	2.5	13.4	—	〃	10	灰白色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1142	〃	〃	B区沢跡2層(西ベルト)	2.9	13.8	—	〃	15	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕

第147図　12世紀のかわらけ②(1122~1142)



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1143	手づくね	大	B区沢跡2層(西ベルト)	(3.1)	13.8	—	12C後半	30	灰白色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1144	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	(2.3)	14.6	—	〃	15	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし
1145	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	2.8	14.0	—	〃	60	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　内面油煙付着
1146	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	(3.2)	14.6	—	〃	8	褐灰色	2段ナデ面取りなし
1147	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	(2.9)	14.6	—	〃	5	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし
1148	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	(2.8)	13.6	—	〃	5	灰白色	2段ナデ面取りなし
1149	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD92)	(3.3)	14.2	—	〃	20	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1150	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD95)	(3.4)	14.4	—	〃	25	灰白色	2段ナデ面取りなし　すのこ痕
1151	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	(2.7)	14.8	—	〃	8	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし
1152	〃	〃	ⅡC100 4層(02出土)	(2.5)	15.6	—	〃	5	灰白色	2段ナデ面取りなし　内面油煙付着
1153	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD91)	(2.7)	16.0	—	〃	10	灰白色	2段ナデ面取りなし　内面油煙？付着
1154	〃	〃	ⅢD01 4層(02出土)	(2.4)	15.2	—	〃	10	灰白色	2段ナデ面取りなし
1155	〃	〃	ⅢD03 2層(B区)	3.0	12.6	—	〃	15	浅黄橙色	2段ナデ面取りあり
1156	〃	〃	B区沢跡埋土(ⅡD92)	(3.1)	13.4	—	〃	10	灰白色	2段ナデ面取りあり　B区ⅡD83 2層から出土
1157	手づくね	大	ⅢD01 4層(02出土)	(3.2)	14.0	—	12C後半	20	灰白色	2段ナデ面取りあり　下端部を擦っている
1158	〃	〃	ⅢD12 4層(02出土)	(2.6)	15.2	—	〃	3	浅黄橙色	2段ナデ面取りあり
1159	〃	〃	B区沢跡埋土中(ⅡD91)	(2.9)	15.6	—	〃	15	灰白色	2段ナデ面取りあり　すのこ痕
1160	〃	〃	B区沢跡埋土中(ⅢD06)	(2.7)	14.8	—	〃	40	浅黄橙色	2段ナデ面取りなし　04出土

第148図　12世紀のかわらけ③(1143～1160)

13世紀後半～14世紀前半のかわらけ　（第149図、写真図版157）

13世紀後半～14世紀前半に位置づけられるかわらけが出土している。出土総重は391.3gでこの内20点334.6gを図示した。不掲載の重量は56.7gである。重量比の掲載率は86％になる。図示したのは、小型手づくねかわらけが１点（1201）、小型ロクロかわらけが13点（1202～1211・1213～1215）、ロクロ大型かわらけが６点（1212・1216～1220）である。

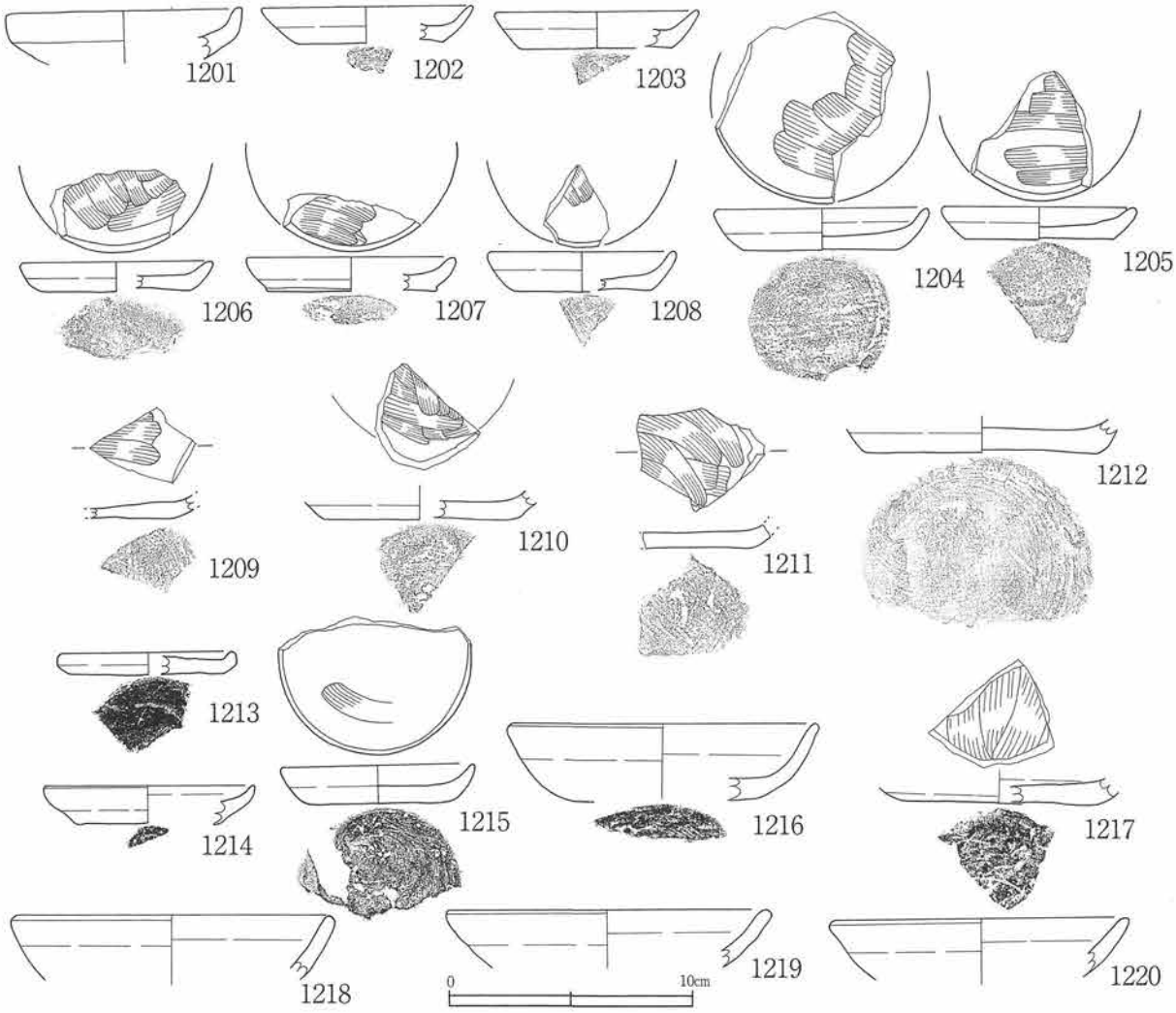
1201は小型手づくねかわらけである。口縁部は１段なでで、口唇部の面取りはない。胎土は砂粒が多く混じる粗いもので、12世紀の手づくねかわらけとは明らかに異なる。

1202～1211小型ロクロかわらけである。1202・1203は破片部位に内底面がないが、他はいずれも内底面にナデ調整が施されている。ナデは指によるものと推測される。また外底面には回転糸切痕があるが、それとともに板状の圧痕もついている。胎土はいずれも砂粒混じりの粗いものである。器形は底径が大きく直接底辺部から短い口縁部が立ち上がるもので、いずれも類似している。

1212は大型のロクロかわらけである。外底面には回転糸切痕とともに板状の圧痕がついている。内底面は器面が荒れており、ナデの有無を確認できない。口縁部～体部を欠くが、小型ロクロかわらけと類似する器形と推測される。内面底辺部に炭化物状のものが微量付着するが、破断面にも付着しており、割れた後の付着と考えられる。

1213～1220はいずれも平成16年度調査のB区沢跡から出土したロクロかわらけである。1213～1215は小型ロクロかわらけである。1213は器高が特に低い個体である。内面のナデは不明瞭である。1214も内面のナデが確認できないが、欠損した部位にナデが施されていた可能性が高い。1215は内面にナデが施され油煙も付着している。

1216～1220は大型かわらけである。1216の内面にはナデが確認できないが、欠損した他の部位に施されていると推測される。1217の内面にはナデが顕著である。　（羽柴）



番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			年代など	遺存度(%)	色調	その他
				高さ	口径	底径				
1201	手づくね	小	01SD１西端(ⅢD83)	(1.8)	9.4	—	13～14C	10	灰白色	胎土に砂粒多量に混じる
1202	ロクロ	小	01SD１埋土	1.5	8.4	—	13C後～14C前	10	浅黄橙色	底面回転糸切か
1203	〃	〃	01SD１西端	1.6	8.2	6.2	〃	10	にぶい黄橙色	底面回転糸切
1204	〃	〃	B区ⅡD95 ２層	1.7	8.6	6.2	〃	80	灰白色	内面にナデ
1205	〃	〃	01SD２西側ベルト	1.3	7.6	6.0	〃	40	浅黄橙色	内面にナデ
1206	〃	〃	01SD１(ⅢD85)	1.2	7.6	6.0	〃	30	浅黄橙色	内面にナデ
1207	〃	〃	01SD１埋土(ⅣD07～08)	1.4	8.4	7.0	〃	10	浅黄橙色	内面にナデ
1208	〃	〃	ⅢD21 ４層(02出土)	1.6	7.4	5.6	〃	10	にぶい黄橙色	内面にナデ
1209	〃	〃	ⅢD27 ４層(02出土)	(0.9)	—	—	〃	10	浅黄橙色	内面にナデ
1210	〃	〃	01SD１(ⅢD85)	(0.8)	—	7.8	〃	20	黄橙色	内面にナデ
1211	〃	〃	01SD１西～東ベルト	(1.0)	—	—	〃	50	浅黄橙色	内面にナデ
1212	〃	大	ⅣD17付近４層(01出土)	(1.4)	—	9.6	〃	60	赤灰色	内面荒れておりナデの有無不明
1213	〃	小	B区沢跡埋土(ⅢD07)	0.9	7.1	5.9	〃	15	灰黄色	内面のナデ不明瞭
1214	〃	〃	B区沢跡１層(ⅢD15)	1.6	8.6	6.1	〃	5	浅黄橙色	内面のナデみえない
1215	〃	〃	B区沢跡１層(ⅢD07)	1.6	7.9	5.5	〃	60	浅黄橙色	内面にナデと油煙付着
1216	〃	大	B区沢跡検出面(ⅢD07)	3.1	12.4	6.9	〃	15	灰白色	内面にナデみえない
1217	〃	〃	B区沢跡１層(ⅢD17)	(1.1)	—	8.2	〃	10	灰白色	内面にナデ
1218	〃	〃	B区沢跡１a層(ⅢD06)	(2.7)	12.8	—	〃	5	にぶい黄橙色	
1219	〃	〃	B区沢跡１層(ⅢD17)	(2.4)	13.1	—	〃	5	にぶい黄橙色	
1220	〃	〃	B区沢跡１層(ⅢD17)	(2.4)	12.3	—	〃	5	灰白色	

第149図　13～14世紀のかわらけ（1201～1220）

3 中世陶磁器

(1) 国産陶器（第150～153・157・158図、写真図版157～159・163）

国産陶器は、総量で小コンテナ２箱分出土している。産地は常滑・渥美・東北地方（瓷器系・須恵器系）があるが、不明なものも多い。

①常滑産陶器（2001・2003・2008～2010・2014～2016・2018～2020・2022・2024・2029・2030・2082～2092）

大甕と片口鉢が出土しており、常滑産と認識できたものは全て掲載した。いずれも破片資料であり、ほとんどが遺構外からの出土である。

2001は、大甕の口縁部周辺の破片である。口縁部は断面が逆L字の受口状で、微弱ながら外面に縁帯を形成する。頸部と肩部の境界は不明瞭で、緩やかに胴部へと移行する。肩部には押印文が施され、全体に自然釉が厚く降灰する。2082は口縁部破片で、口縁端部はN字状に折り返され若干内傾する。2003・2083・2084は、大甕の頸部破片である。2003は頸部が直立し、肩部の張りが強くなるタイプ、2083・2084は肩部から緩やかに立ち上がり、頸部が直立するタイプである。2008～2010・2085・2086は、大甕の肩部破片である。いずれも厚手で、丸味をもって頸部へと至る。内面には接合痕が明瞭に認められる。外面には自然釉が厚く降灰しており、連続押印文が施されるものがある（2008）。2014～2016・2018～2020・2022・2024・2087～2092は胴部下半の破片である。いずれも外面には縦方向にヘラ削り調整が施される。内面の接合痕は明瞭であり、外面にはそれに対応するように押印文が施されるものがある（2014・2016）。2014は外面の磨滅が著しく、押印文が摺り消されていることから転用の可能性がある。

2029･2030は片口鉢である。2029は体部が緩やかに内彎しながら立ち上がり、内外面とも轆轤による調整痕が認められる。ただし、内面は磨滅が著しくそれほど明瞭ではない。2030は小破片であるが、体部は直線的に立ち上がるものと思われる。

②渥美産陶器（2007・2026・2027・2093）

破片が５点あり、全点を掲載した。2026は壺の底部である。底径が7.0cmと比較的大きく、三筋壷の可能性もあるが体部上半の破片がないため断定はできない。底部周辺には縦または斜位にヘラ削り調整が施される。2027は大形壷の底部破片である。外面にはヘラ削り調整が施され、薄く自然釉が降灰する。2090は山茶碗の破片であるが、小片であり、年代等は不明である。

③瓷器系陶器（2002・2004・2006・2011～2013・2017・2021）

明確な産地は不明であるが、胎土の特徴から常滑産製品とは区別されるものである。８点出土しており全点を掲載した。器形や製作技法は常滑産製品と類似するが、今回瓷器系陶器としたものは胎土がやや粗く、器表面にφ３～５㎜程度の黒色の吹き出しがみられる。また、相対的ではあるが常滑産に比べて焼き上がりの色調がより暗赤褐色に近いものが多い。

2002は大甕の口縁部周辺の破片で、肩部と頸部との境界が不明瞭なまま胴部へと移行する。口縁部はほぼ水平に折り返されて端部は短く直立する。内面の頸部と肩部の境界には接合痕とそれを消すための指ナデ調整が明瞭に認められる。口縁部には自然釉が厚く降灰しているが、発色が悪く不透明である。2004は頸部がハの字状に立ち上がり、口縁部は外側に折り返されて水平となる。2011～2013の破片は、肩部がやや直線的である。内面の接合痕は明瞭であり、それと対応して外面に押印文が施される（2012）。外面には自然釉が降灰するが発色は不良である。

④須恵器系陶器（2031）

１点出土している。2031は、四耳壺の胴部破片である。色調は灰褐色で、胴部外面に数状の櫛描波状文が施される。内外面とも轆轤調整の痕跡が明瞭である。外面には非常に薄い透明釉（自然釉か）が確認できる。

⑤産地不明の陶器（2005・2023・2025・2028・2032・2094）

2005は、甕の口縁部破片である。頸部は直線的で、口縁部はN字状に折り返される。2023・2025はいずれも胴部下半の破片である。胎土は橙色で、器壁は非常に厚い。2028は、壺の底部付近と思われる。灰色で精緻な胎土を用いており、内外面共に灰釉が厚く認められる。2032は、擂鉢の底部片で内面に粗い摺目が数状施されている。2094は外面に灰釉が施された蓋である。産地などは不明であり、近世に属する可能性もある。

⑥瓦質土器（2033）

2033は瓦質土器の火鉢である。底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は断面が三角形状となる。体部外面は回転ヘラ削り調整が施された後に上半部に菊花文のスタンプが押圧される。口縁部内外面と底部周辺には丁寧にミガキ調整が施される。体部内面にはコテによる轆轤目が明瞭に認められる。欠失しているが、底部には半球状の足が三ヵ所に取り付けられていたと考えられる。足の剥落部を観察すると、取り付け部には接合を容易にするために針で無数に小孔が開けられており、接合部では細かいナデ調整を施して接合痕を消している。（村田）

(2)　輸入陶磁器（第154～156図、写真図版160～162）

輸入陶磁器には、白磁・青白磁・青磁・青花・天目茶碗がある。今回は輸入陶磁器と確認されたものについてはほぼ全点図示した。

①白磁（2034～2044）

2034・2036は口縁端部が小さい玉縁状になるタイプの碗で、太宰府分類Ⅱ類に分類される。2035は、同じくⅡ類の体部片で2034と同一個体の可能性がある。

2037・2038は、碗の体部片である。体部は直線的に開き、内面に櫛目文が施されることから、太宰府分類Ⅴないし Ⅵ類に分類される。

2040は、口禿皿である。底部は平底で、体部はやや外反しながら口縁部に至る。

2041～2043は四耳壺である。いずれも肩部がわずかに丸味をもち、頸部が直立するタイプである。2041は耳部が残存している。半分欠損しているが、板状の横耳であり、外面に沈線などの装飾は施されていない。体部との接合部はナデ調整によって接合痕が消されている。2043は縦方向に沈線が２条施されている。

2044は体部が球状の小壺である。器壁は薄く、体部外面にのみ透明釉が施される。

②青白磁（2045～2048）

４点出土しており、全点を掲載した。2045は端反碗の口縁部である。外面は緩やかに外反するが、内面はナデ調整によって稜が形成される。2047は碗の底部破片である。器壁は厚く、体部は丸味をもって立ち上がる。高台は外面が内傾し、内面は直立するため断面形は逆三角形状となる。いずれも胎土は白色で、釉薬は鮮やかな青白色である。

2046は碗の体部片である。2045・2047と異なり胎土が灰色であるため、全体として暗青色である。

2048は無頸小壺の蓋である。笠部は扁平なドーム形で、端部はほぼ水平に開く。頂部が欠損しているため、つまみの有無については不明である。笠部外面には花弁状の陽刻が施され、そのうえに釉薬

が掛けられている。

③青磁（2049～2058）

2049は同安窯系の青磁碗である。胎土は浅黄色で、釉薬はオリーブ黄色に発色する。

2050～2058は龍泉窯系の青磁である。2050・2051は蓮弁文碗である。いずれも体部は灰白色で、釉薬は厚く緑色に発色する。2053は碗の底部付近の破片で、内面にわずかに段が形成される。2052・2053は蓮弁文碗の可能性がある。

2054は端反碗である。口縁部の外反は強く、体部は直線的になると考えられる。2056は碗の底部である。器壁は厚く、全体として大振りである。2057は端反皿である。体部の外反は非常に強く、内面には稜が形成される。2054～2057はいずれも胎土が灰色で、釉薬は暗緑色に発色する。

④青花（2067～2079・2081）

染付磁器製品の中で、中国産と考えられるものについては国内産と区別するために青花と呼称する。明確に青花に分類できるものはほとんどが明代に生産されたものと考えられる。

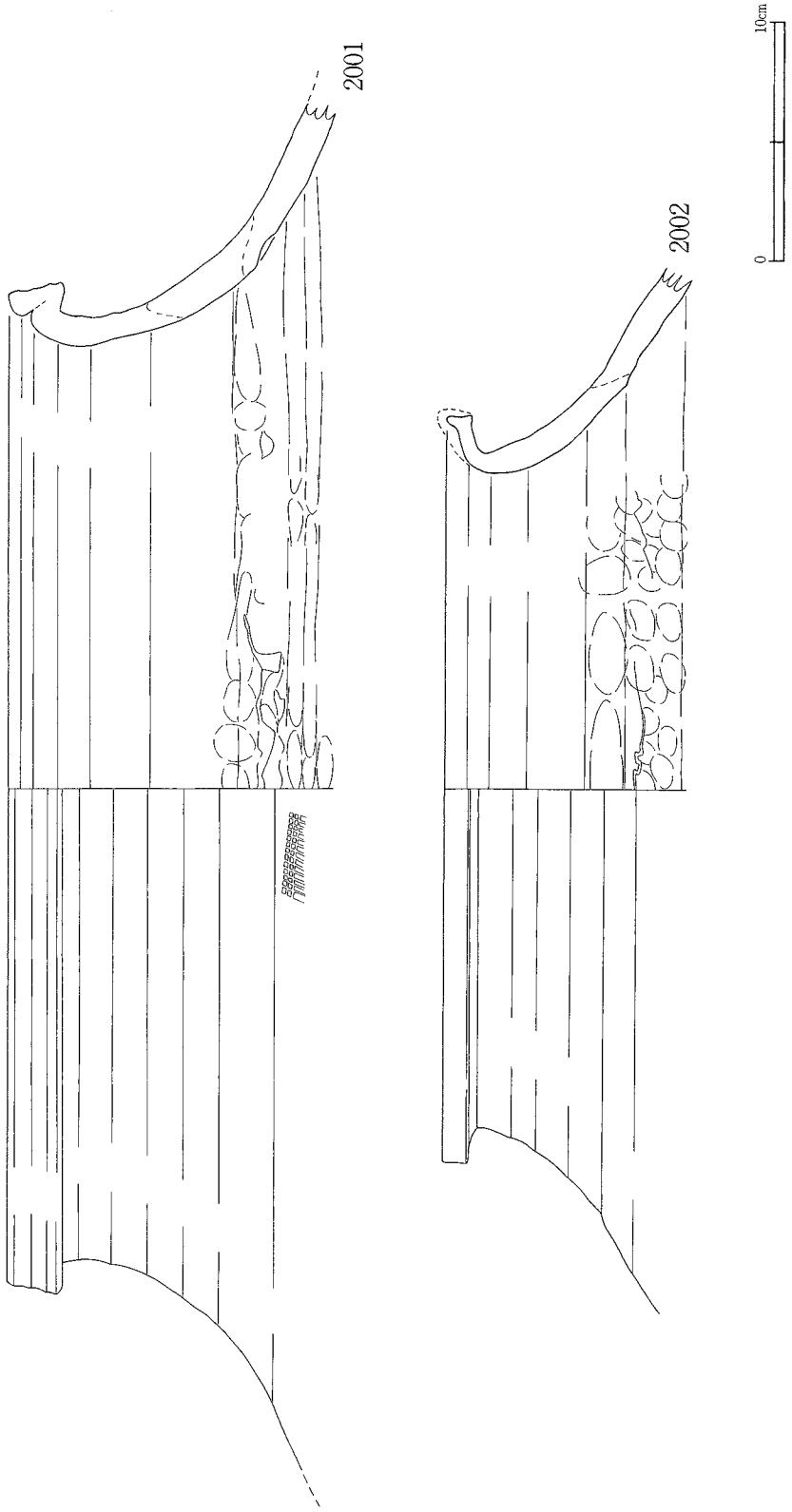
2067～2075は碗類である。2067～2069・2071・2072は器壁が薄く、口縁端部が尖るタイプの丸碗である。いずれも体部外面に連続唐草文が描かれる。2070は若干器壁が厚いが、おそらくこれらと同じタイプであると考えられる。2073はやや厚手の碗である。体部は丸味をもち、内面には微弱ながら突線が形成される。2074・2075は碗の底部破片である。いずれも直立するタイプの高台を有する。高台外面に圏線、底部内面に草花文系の染付が描かれる。

2076・2081は皿である。器壁は薄く、体部は開き気味に立ち上がる。高台は低く、断面形は方形である。底部内面にのみ草花文が描かれる。

2077～2079は細片であるが、2077は碗、2078は小皿、2079は皿の底部になると考えられる。

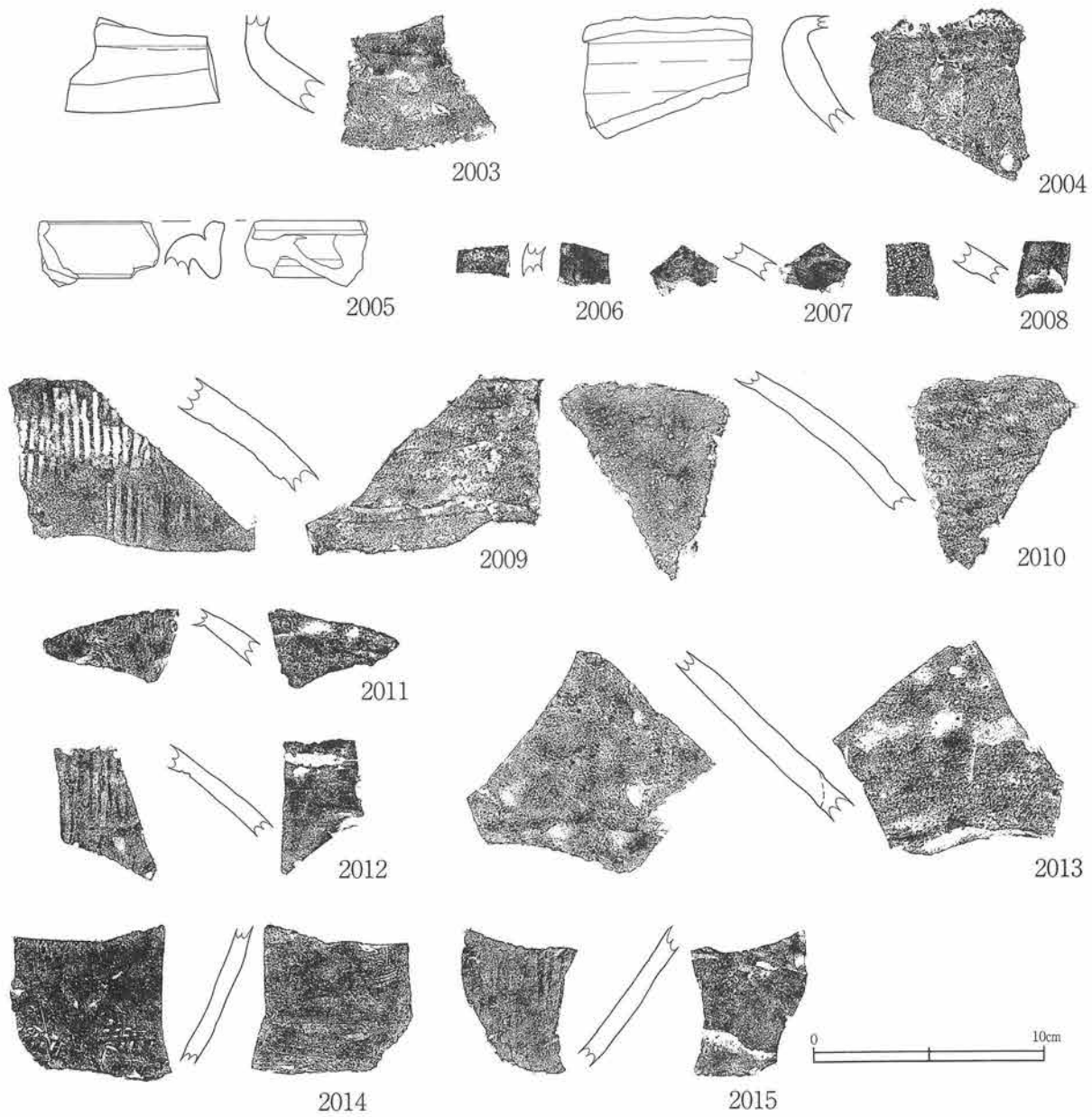
⑤天目茶碗（2080）

体部破片のため全形を知ることはできない。灰色の胎土を用いた陶器で、内外面に鉄釉が施される。（村田）



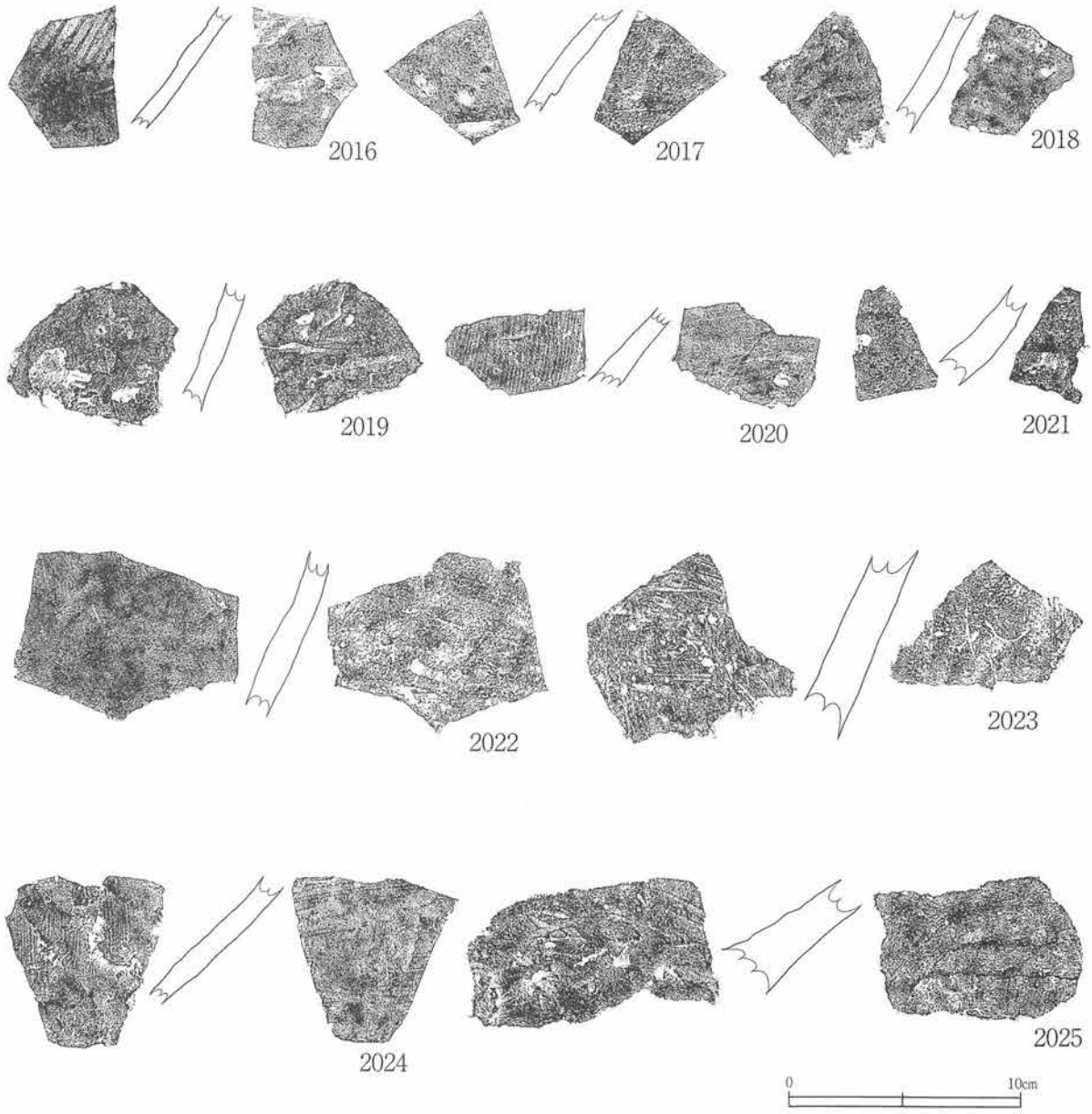
No.	産地など	器種	部位	出土地点	年代(型式)	色調	備考
2001	常滑	大甕	口縁～肩部	01SD1　埋土	5型式	にぶい赤褐	現存高13.4cm、口径41.0cm、押印文あり
2002	瓷器系	大甕	口縁～肩部	01SD1　埋土		にぶい赤褐	現存高10.0cm、口径30.8cm、釉発色不良

第150図　中世の国産陶器①(2001～2002)



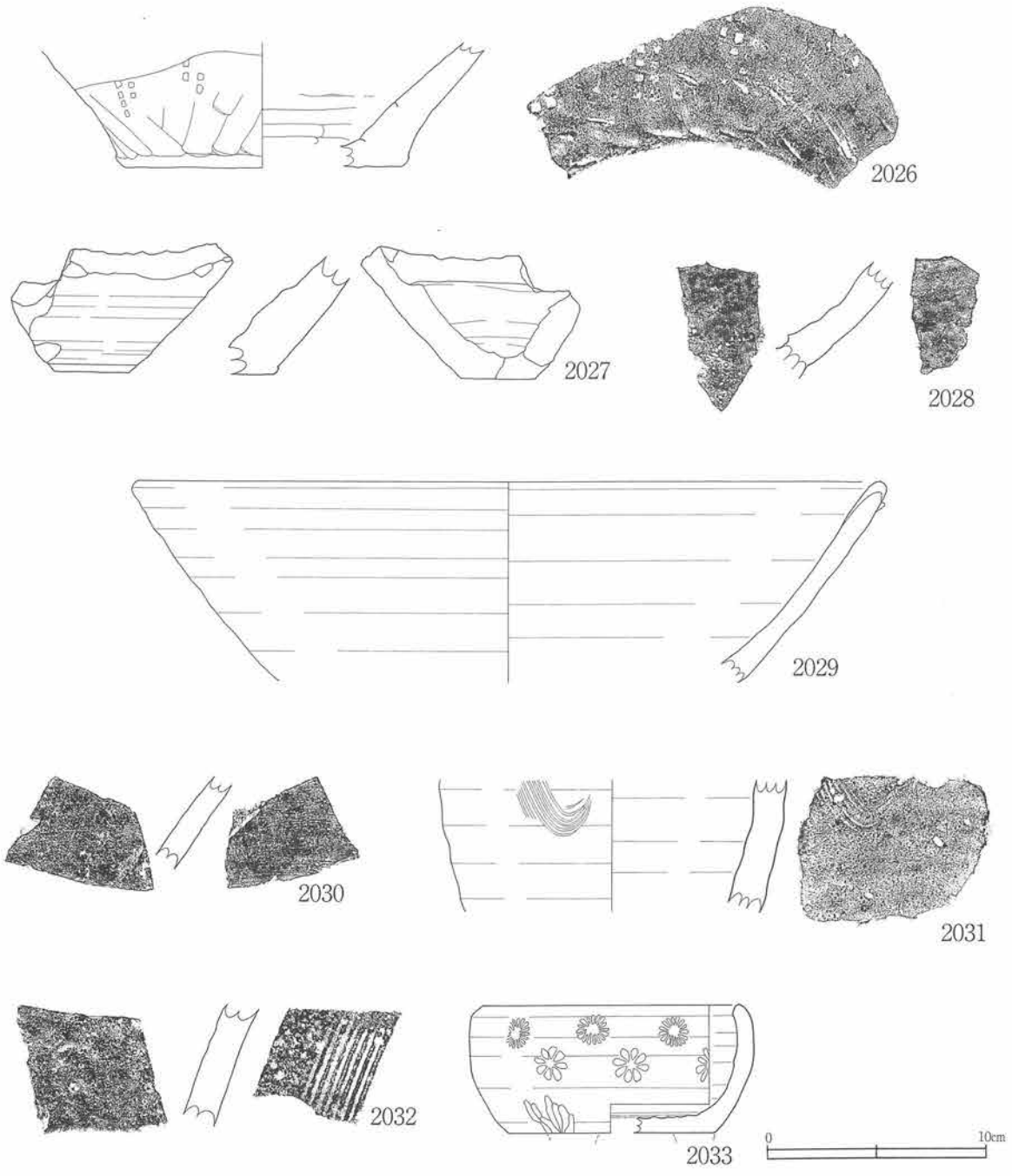
No.	産地など	器種	部位	出土地点	年代(型式)	色調	備考
2003	常滑	大甕	頸部	B区ⅡD72　2層	5型式	暗赤褐色	
2004	瓷器系	大甕	頸部	01SD1　埋土		暗赤褐色	
2005	不明	甕	口縁部	B区SZ20		灰褐色	
2006	瓷器系	大甕	頸部	01SD2ベルト西側		褐灰色	
2007	渥美か	大甕	肩部	C区ⅣE25　1層		灰白色	
2008	常滑	大甕	肩部	01SD1　埋土		褐灰色	
2009	常滑	大甕	肩部	T8　火山灰層	5型式	暗赤褐色	自然釉降灰、外：連続押印文
2010	常滑	大甕	肩部	B区SK15	5型式	にぶい赤褐	自然釉降灰
2011	瓷器系	大甕	肩部	C区ⅣD07　4層		暗赤褐色	
2012	瓷器系	大甕	肩部	01SD2　埋土		にぶい赤褐	外：押印文
2013	瓷器系	大甕	肩部	01SD1　埋土		暗赤褐色	
2014	常滑	大甕	胴部下半	B区ⅢD12　4層	5型式か	にぶい赤褐	外：押印文
2015	常滑	大甕	胴部下半	C区ⅢD34　火山灰層	5型式か	にぶい赤褐	外：押印文

第151図　中世の国産陶器②(2003～2015)



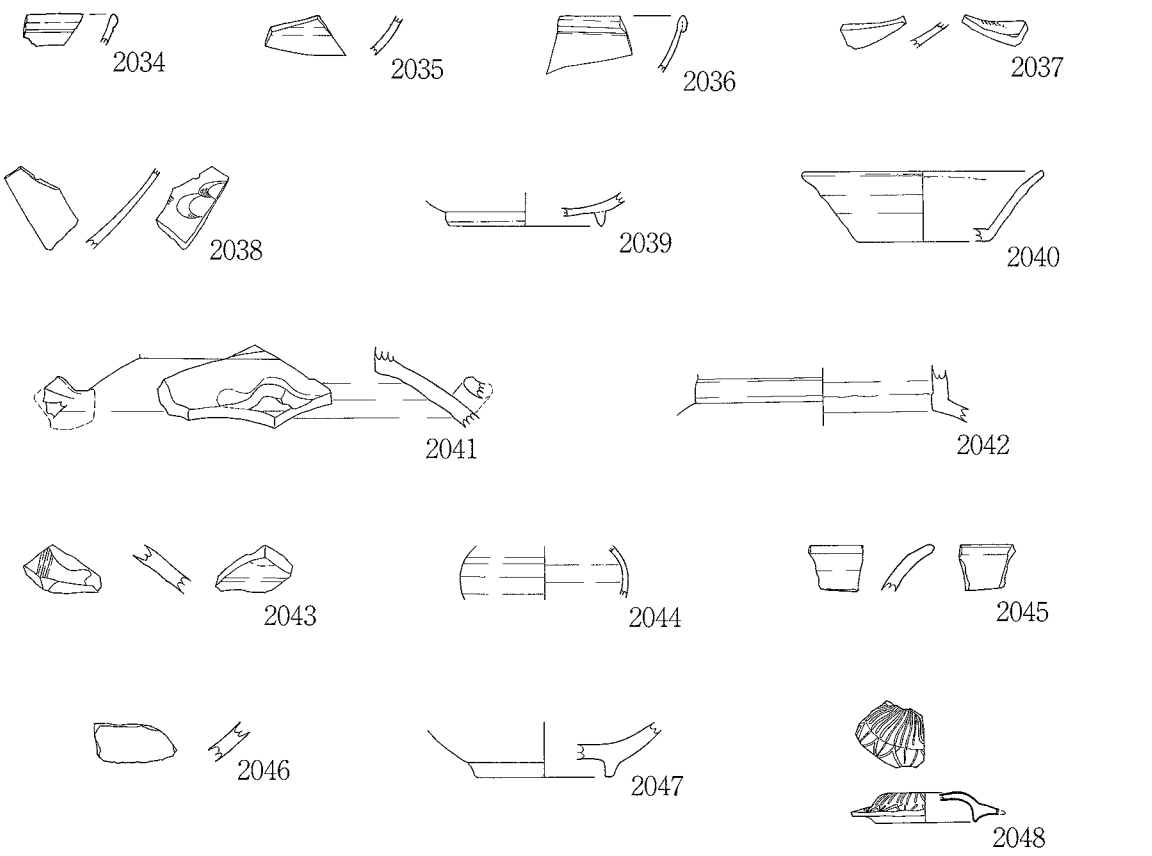
No.	産地など	器種	部位	出土地点	年代(型式)	色調	備考
2016	常滑	大甕	胴部下半	01SD2ベルト間		褐灰色	外：押印文
2017	瓷器系	大甕	胴部下半	01SD1　埋土		暗赤褐色	
2018	常滑	大甕	胴部下半	B区ⅢD01　4層	3型式か	にぶい赤褐	
2019	常滑	大甕	胴部下半	B区ⅢD12　4層		にぶい橙色	ヘラナデ
2020	常滑	大甕	胴部下半	調査区外西側　表採		にぶい赤褐	外：刷毛目
2021	瓷器系	大甕	胴部下半	01SD1　埋土		暗赤褐色	
2022	常滑	大甕	胴部下半	A区ⅡC北半　表採		暗赤褐色	
2023	不明	大甕	胴部下半	E区ⅠA16　第1検出面		にぶい橙色	
2024	常滑	大甕	胴部下半	B区SZ67	5型式	褐灰色	ヘラナデ
2025	不明	大甕	底部付近	E区ⅠB43　第1検出面		橙色	

第152図　中世の国産陶器③(2016～2025)



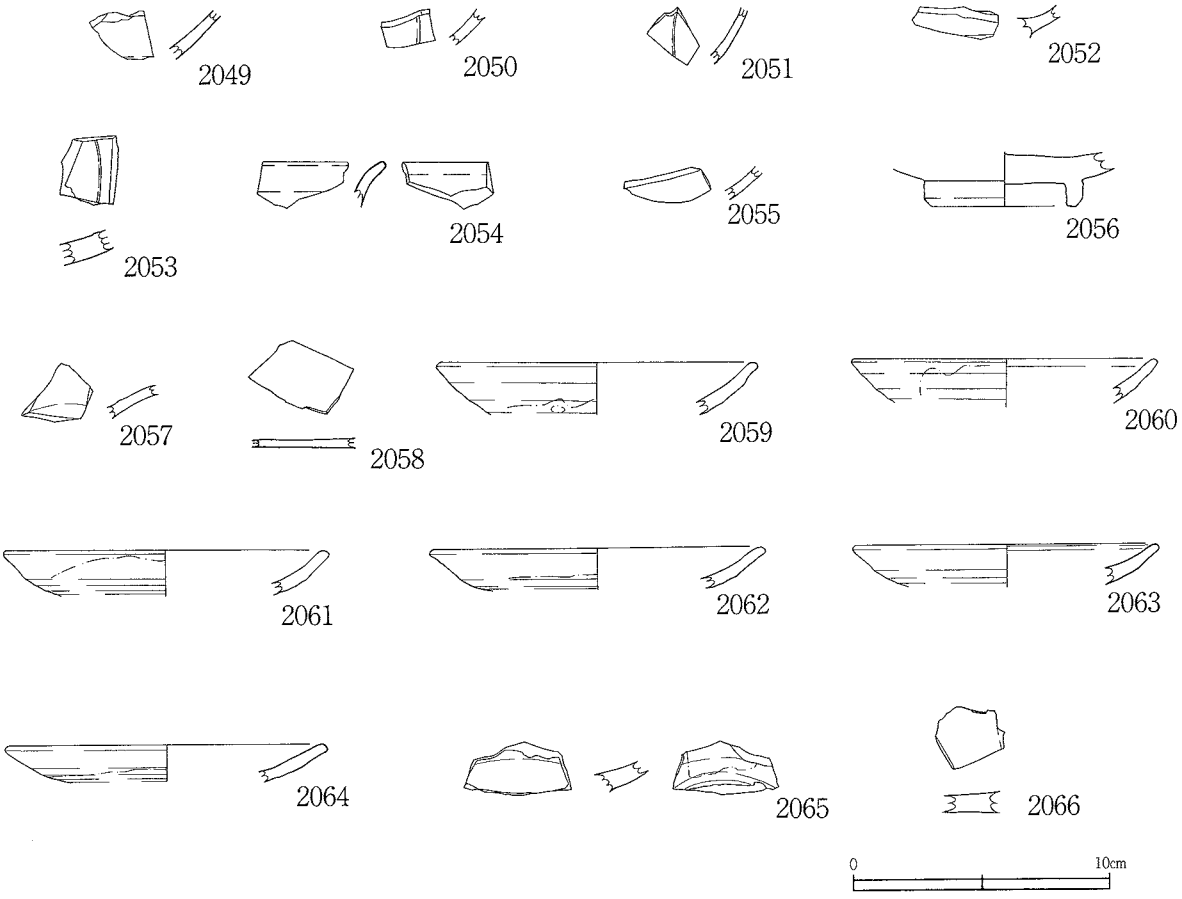
No.	産地など	器種	部位	出土地点	年代(型式)	色調	備考
2026	渥美	壺	底部	C区ⅣD17　4層	12C後半	灰色	三筋壺か
2027	渥美	壺	底部	B区ⅢD01　4層	12C後半	灰色	大型壺の底部か
2028	不明	壺か	底部付近	B区沢跡　埋土		灰色	内外面とも自然釉が厚く降灰
2029	常滑	片口鉢	口縁～胴部	C区ⅢD75　4層	4～5型式	赤褐色	現存高10.2cm、口径34.0cm、内面摩滅
2030	常滑	片口鉢	胴部	C区ⅢD27　4層	4～5型式	灰色	内面摩滅
2031	須恵器系	壺	胴部中央	B区ⅡD83　2層		灰色	外：櫛描波状文
2032	不明	擂鉢	底部付近	B区ⅡD82検出面		にぶい黄橙	
2033	瓦質土器	火鉢	ほぼ完形	01SD4埋土上・中位		黒色処理	現存高：5.8cm、口径11.6cm、外：印花文、三足欠失

第153図　中世の国産陶器④(2026～2033)



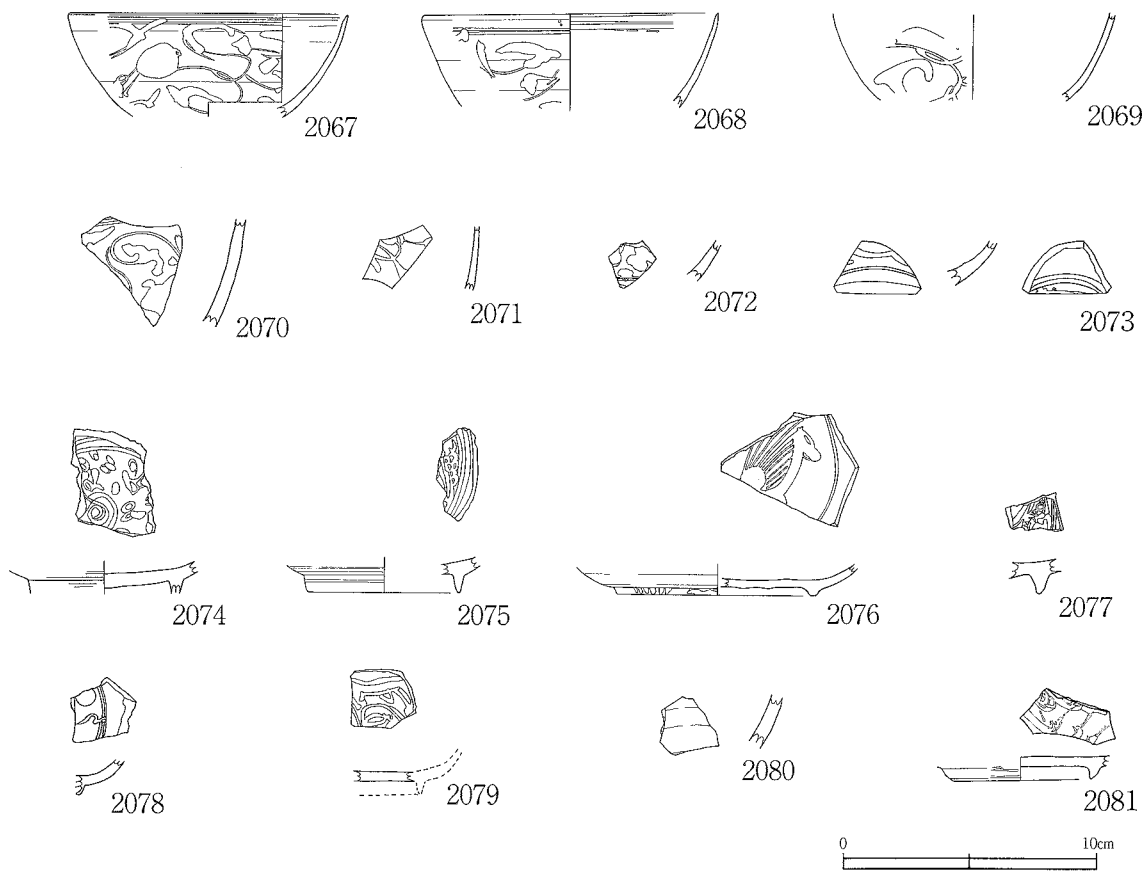
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		文様	胎土・色調	産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径					
2034	白磁碗	C区SD101　No.3・10	(1.2)	—	—	5	0		白色	大宰府Ⅱ類	11～12C	口縁部破片
2035	白磁碗	C区SD101　No.14	(1.6)	—	—	0	0		白色	大宰府Ⅱ類	11～12C	体部破片
2036	白磁碗	B区沢跡　埋土	(2.3)	—	—	5	0		白色	大宰府Ⅱ類	11～12C	口縁部破片
2037	白磁碗	B区ⅢD02　4層	(2.6)	—	—	0	0	陰刻文	白色	大宰府Ⅳ類		
2038	白磁碗	B区ⅡC100　4層	(1.0)	—	—	0	0	陰刻文	白色	大宰府Ⅳ類		
2039	白磁碗	01SD4　埋土上～中位	(1.4)	—	6.4	0	20		灰白色	中国		
2040	白磁口禿皿	C区ⅣD17　4層	2.8	9.4	5.2	10	20		灰色	中国		
2041	白磁四耳壺	C区Ⅲ区　表採	(3.2)	—	—	0	0		白色	大宰府Ⅲ系	12C	頸部破片、耳部残存
2042	白磁四耳壺	01SD1西端	(2.3)	—	—	0	0		白色	大宰府Ⅲ系	12C	頸部破片
2043	白磁四耳壺	B区ⅡB82　2層	(1.9)	—	—	0	0		白色	大宰府Ⅲ系	12C	頸部付近破片
2044	白磁小壺	B区沢跡　埋土	(2.1)	—	—	0	0		灰白色		12C	体部破片
2045	青白磁端反碗	T12南側　地下1m	(1.8)	—	—	5	0		白色・青白色	中国		
2046	青白磁碗	B区ⅡC46　2層	(1.5)	—	—	0	0		灰色・暗青色		12Cか	体部破片
2047	青白磁碗	01SD4　埋土中～下位	(2.2)	—	6.0	0	15		白色・青白色	中国		底部破片
2048	青白磁小壺	C区ⅢE21　検出面	(1.2)	4.0	6.0	15	0		灰白色・暗青色		12C前半	

第154図　中世の中国産陶磁器①(2034～2048)



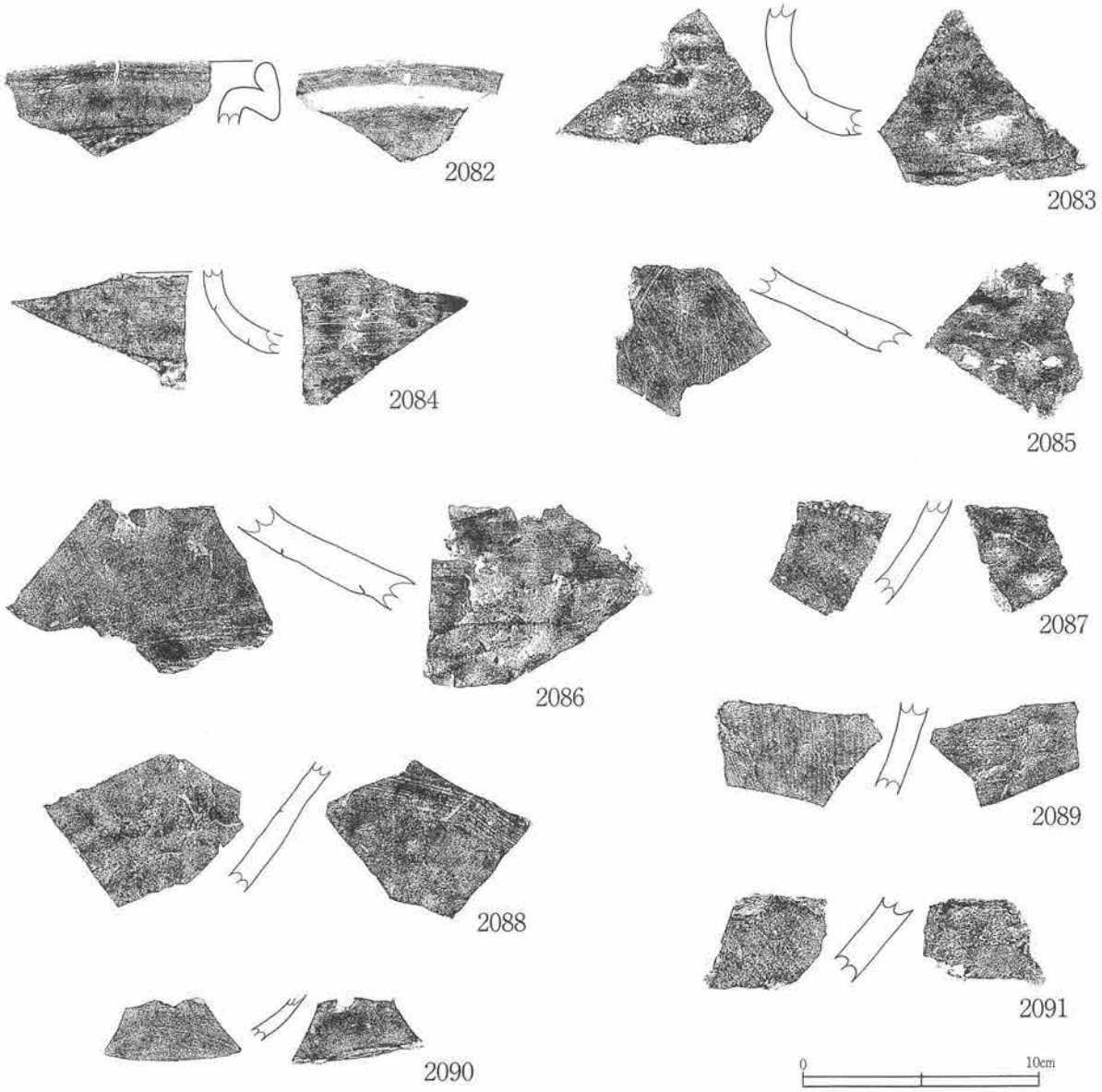
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		文様	胎土・色調	産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径					
2049	青磁碗	B区ⅡD82　2層	(1.9)	—	—	0	0		浅黄色・オリーブ黄	同安窯系		体部破片
2050	青磁碗	C区ⅢE56　1層下	(1.4)	—	—	0	0	蓮弁文	灰白色・緑色	龍泉窯系		体部破片
2051	青磁碗	01SD2ベルト3西側	(2.2)	—	—	0	0	蓮弁文	灰白色・緑色	龍泉窯系		体部破片
2052	青磁碗	C区ⅢE73　4層	(1.3)	—	—	0	0		灰白色・緑色	龍泉窯系		底部付近破片
2053	青磁碗	E区ⅠA31斜面部	(1.4)	—	—	0	0		灰白色・緑色	龍泉窯系	元代	底部付近破片
2054	青磁端反碗	B区ⅡC100　2層	(1.8)	—	—	5	0		灰色・緑色	龍泉窯系	14～15C	口縁部破片
2055	青磁碗	C区ⅢD46　4層	(1.3)	—	—	0	0		灰色・暗緑色	龍泉窯系		体部破片
2056	青磁碗	01SD3　埋土中	(2.2)	—	6.2	0	40	蓮弁文	灰色・暗緑色	龍泉窯系	14後～15C	
2057	青磁反り皿	C区ⅢD74　1層下	(1.3)	—	—	0	0		灰色・暗緑色	龍泉窯系		体部破片
2058	青磁皿	C区ⅣE22　4層	—	—	—	0	0		灰白色・緑色	龍泉窯系		底部中央破片
2059	灰釉小皿	01SD4　埋土下位	(2.1)	12.4	—	15	0	灰釉	灰色・灰オリーブ	美濃	17C後半	
2060	灰釉小皿	01SX3　2層	(1.8)	11.8	—	10	0	灰釉	灰白色・灰オリーブ	美濃	17C後半	
2061	灰釉小皿	01SD4　埋土下位	(1.8)	12.4	—	15	0	灰釉	灰白色・オリーブ黄	美濃	17C後半	
2062	灰釉小皿	01SD4　埋土下位	(1.7)	13.0	—	15	0	灰釉	灰色・灰オリーブ	美濃	17C後半	
2063	灰釉小皿	C区ⅢE　表土	(1.6)	11.4	—	10	0	灰釉	灰白色・オリーブ黄	美濃	17C後半	口縁部破片
2064	灰釉小皿	D区ⅣE45　3層	(1.5)	12.6	—	25	0	灰釉	灰白色・オリーブ黄	美濃	17C後半	
2065	灰釉小皿	01SD4　埋土下位	(1.1)	—	—	0	0	灰釉	灰白色・オリーブ黄	美濃	17C後半	底部付近破片
2066	灰釉小皿	C区ⅢD53　4層	—	—	—	0	0	灰釉	灰色・灰オリーブ	美濃	17C後半	底部中央破片

第155図　中世の中国産陶磁器②(2049～2066)



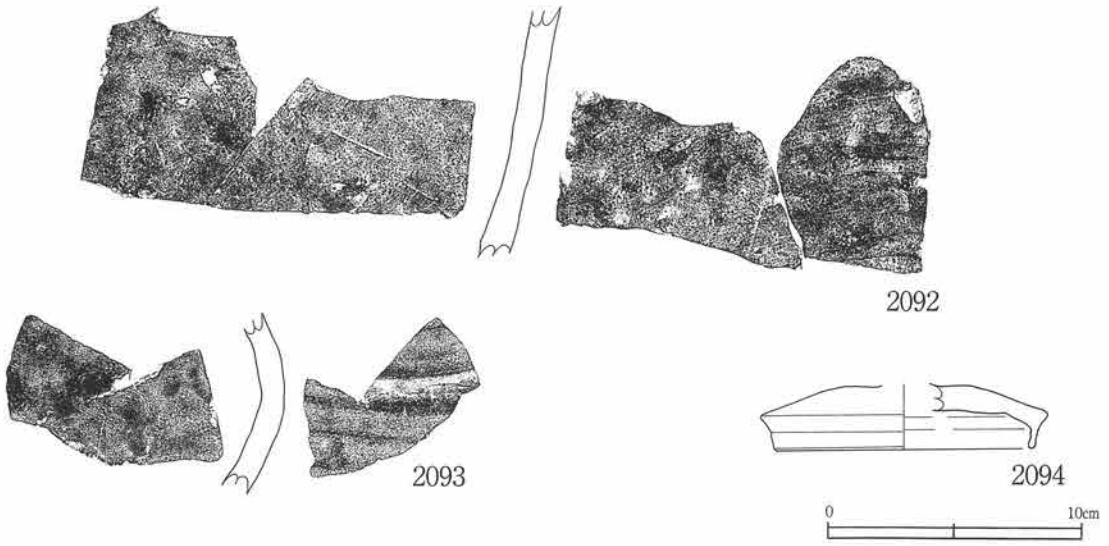
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		文様	胎土・色調	産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径					
2067	青花碗	D区SZ58	(4.1)	10.9	—	25	0	連続唐草文	白色	漳州窯系	17C	
2068	青花碗	E区P10堀方(SB1)	(3.8)	11.5	—	20	0	連続唐草文	白色	漳州窯系		
2069	青花碗	E区P33埋土(SB1)	(3.4)	—	—	0	0	連続唐草文	白色	漳州窯系		体部破片
2070	青花碗	D区墓地付近　表採	(3.9)	—	—	0	0	連続唐草文	灰白色・青白色	漳州窯系		体部破片
2071	青花碗	E区P16埋土(SB1)	(2.5)	—	—	0	0	連続唐草文	白色	漳州窯系		体部破片
2072	青花碗	E区ⅠA59　検出面	(1.6)	—	—	0	0	連続唐草文	白色			体部破片
2073	青花碗	E区ⅠA46　表採	(1.7)	—	—	0	5	草花文	白色			底部破片
2074	青花碗	C区ⅢD98　4層	(1.3)	—	(6.0)	0	0	草花文	灰白色・青白色			高台端部欠損
2075	青花碗	01SD3東ベルト～東埋土	(1.4)	—	6.0	0	5	草花文	灰白色・青白色			
2076	青花皿	E区ⅠA46　表採	(1.4)	—	7.8	0	25	草花文	灰白色・青白色		明代	
2077	青花碗	E区ⅠA32　斜面部	(1.4)	—	—	0	5	草花文	灰白色・青白色			
2078	青花碗	E区ⅠA23　攪乱	(1.8)	—	—	0	5	草花文	灰白色・青白色			底部破片
2079	青花皿	01SD2ベルト1～2	—	—	—	0	0	草花文	白色			底部中央破片
2080	天目茶碗	T13	(2.1)	—	—	0	0	鉄釉	灰色・黒褐色			陶器・体部破片
2081	青花皿	ⅢF66道路部分	(0.9)	—	5.4	0	10	草花文	灰白色・青白色		明代	底部破片

第156図　中世の中国産陶磁器③(2067～2081)



No.	産地	器種	部位	出土地点・層位	年代(型式)	色調	備考
2082	常滑	大甕	口縁部	B区ⅢD14　1層	5型式か	暗赤褐色	若干軟質で他の常滑産製品と胎土異なるか
2083	常滑	大甕	頸部	C区SD104 No.1		暗赤褐色	
2084	常滑	大甕	頸部	B区沢跡(ⅢD15) 1層		暗赤褐色	
2085	常滑	大甕	肩部	B区沢跡(ⅢD06)検出面		暗赤褐色	
2086	常滑	大甕	肩部	表採		暗赤褐色	
2087	常滑	大甕	胴部下半	ⅢD27　撹乱		暗赤褐色	
2088	常滑	大甕	胴部下半	ⅡB区　表採		暗赤褐色	
2089	常滑	大甕	胴部下半	B区SD4　土器②		暗赤褐色	
2090	渥美	山茶碗	胴部下半	B区SD1　埋土		灰色	
2091	常滑	大甕	胴部下半	ⅢD05 表土(沢跡上面)		暗赤褐色	

第157図　中世の国産陶器⑤(2082～2091)



No.	産地	器種	部位	出土地点・層位	年代(型式)	色調	備考
2092	常滑	大甕	胴部	B区沢跡(ⅢD06)２層上位		暗赤褐色	
2093	渥美	甕	胴部	C区SD104		暗赤褐色	
2094	不明	甕	頂部欠損	表採		灰褐色	外面：灰釉　近世の可能性もあり

第158図　中世の国産陶器⑥(2092～2094)

4　近　世　陶　器（第159～178図、写真図版164～180）

近世に属する陶磁器は中コンテナで約16箱分、総破片数にして2000点以上出土している。今回掲載した近世陶磁器は400点（うち陶器238点、磁器162点）である。近世陶磁器は、近年の整地などの地形改変による影響かほとんどが破片状態での出土であり、完形品は墓坑内出土のものを除いては極めて少ない。ただし、遺構内出土のものについては構築年代の根拠とするために、細片であっても掲載するようにしている。また、遺構外出土のものの多くは表土～第１検出面からの出土である。遺構外出土のものについては出土地点や器種の数量比を反映させるような掲載方法にするように実測遺物を抽出した。その結果、掲載した遺物はE区IA・IBグリッド、西側の斜面、B・D区墓地付近の表土～第１検出面、C区ⅢEグリッド近辺出土のものが多くなっている。これらの地点は近世遺構が検出されている地点であり、陶磁器もまたその遺構と関係があるものと考えられる。以下では陶器と磁器に分類し、さらに器種ごとに概説する。なお、掲載にあたっては直下に観察表を付記したため、遺構内外を問わず産地や年代の近しいものごとに掲載するようにしている。

近世陶器は茶碗・皿・鉢・甕・壷・行平鍋・焙烙・徳利・土瓶・蓋・向付・花生・汽車茶瓶・ひょうそくがある。産地は肥前、瀬戸・美濃、大堀相馬（相馬産）、その他の産地不明（東北地方あるいは在地産）に分けられる。

茶碗・湯呑類（3001～3046・3053・3224～3226・3229）

口径が10cm以上のものを茶碗類、それ以下のものを湯呑類とするが、口径が復元できないものも多いため、今回は両者を一括して記述を進める。なお、体部内面や高台端部が磨滅しているものが多いことからこれらが使用品であったことは明らかである。産地には肥前（3001～3009）、瀬戸･美濃（3010～3022・3053）、大堀相馬（3023～3042）がある。

3001・3002は同一個体と考えられるもので、体部下方が丸味をもち口縁部がわずかに外傾気味に立ち上がる。胎土は灰色で、体部下方から内面に鉄釉が施される。3003は口縁部が外傾し、口縁部直下はナデ調整によってくぼんでいる。胎土は灰色で、暗緑色の灰釉が施される。3004は刷毛目茶碗である。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。体部内外面ともに白化粧土で多条の螺旋状刷毛目が描かれ、そのうえに透明釉が施される。3005～3008・3224・3225は呉器手碗である。3005は体部が深く、体部下半からわずかに外方に開きながら立ち上がる。3007・3008は高台内の削り込みは浅く、高台内面はほぼ水平となる。いずれも胎土は黄橙色で、全面に灰釉が施される。3009は丸碗で、体部は丸味をもって立ち上がる。高台は削り込みで、内面には兜巾がみられる。3229は緑釉と灰釉の掛け分け碗の体部破片である。

3010・3011・3013は天目茶碗である。3010は体部が直線的に開き、上方でくびれて口縁部は短く外折する。3011は削り込みの内反り高台で、体部は直線的に立ち上がる。3013は器壁が薄く、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部は外折する。なお、釉薬は3010が柿釉、3011が錆釉と鉄釉、3013が鉄釉である。3053は白天目である。体部下半に稜をもち体部は外反しつつ外方に開く。高台脇はほぼ水平に削り調整が施される。高台脇から体部内面にかけて長石釉が施される。3012・3019は志野丸碗である。3012は半球状の体部を有し、高台は貼り付けの角高台である。3019は体部が高台脇から直線的に立ち上がり、高台の断面形は三角形である。3014～3016は掛け分けの茶碗で、いわゆる「腰錆碗」である。3014には体部上半に沈線、3015には縦方向に丸ノミ彫りが認められる。いずれも鉄釉と灰釉を掛け分

けている。3020は陶器染付の碗で、外面に呉須で草花文と思われる染付文様が描かれる。

大堀相馬産とされる碗類は、釉薬の特徴から緑色透明の灰釉系（3021・3022・3025・3029など）と失透性で白色の藁灰釉系（3023・3028・3030・3034・3035・3039など）に分類することができる。

3021は鉄絵碗であるが、釉薬・鉄絵ともに発色は不良である。体部は半球状で、口縁端部はわずかに尖る。3022は丸碗で、体部下半は丸味をもつが、口縁部は直線的に立ち上がる。釉薬は、高台内面を除いて灰釉が施され、さらに体部外面に流し掛け風に灰釉が掛けられている。3026・3032は腰錆碗である。体部外面下半には多条の沈線が施される。釉薬は、沈線から下位に赤褐色の鉄釉、上位と内面には灰釉が施される。3027は腰折碗である。体部外面中央に沈線が施されており、それを境に体部の屈曲が変化している。3023は平碗で、体部はほぼ直線的に立ち上がり口縁端部は尖る。高台外面は低く、内面は削り込まれる。その他の底部破片をみると、高台形状では断面形が逆台形のもの（3028など）と細長い長方形のもの（3022・3029）があり、高台内が削り込まれるものもある。3038は駒焼の碗と呼ばれるものである。体部内面には駒絵が陽刻され、底部外面には「相馬」印が押される。胎土は暗灰色で、全面に透明釉が施される。3040は外面に駒絵が描かれる碗で、内面には緑青色の灰釉が厚く施されるいわゆる「青ヒビ」である。

3041～3045は小碗である。3041は美濃産の染付小碗で、体部外面には呉須で羽根文が描かれる。体部下方は丸味をもち、口縁部は直立する。高台は浅い削り込み高台で、断面形は扁平な逆三角形である。3042～3045は大堀相馬産の小碗である。3042は器壁が薄く体部下方は丸味をもつ。口縁部にはナデ調整が施される。3043はやや厚手で、口縁部はわずかに内彎する。3042・3043はいずれも付高台で、内面には兜巾がみられる。3044は、体部下方は斜め上方に開くが口縁部はほぼ直立する。高台は付高台で、内面は深く削り込まれる。3042～3044は高台脇から体部内面にかけて灰釉が施される。3045は、器形は3044に類似するが若干厚手である。釉薬は、高台脇から体部内面にかけて藁灰釉が施される。

3046は猪口である。高台脇が削り出され、体部は丸味をもちながらもほぼ直線的に立ち上がる。釉薬は、高台を除いて鉄釉が施される。

皿類（2059～2066・3047～3094・3227・3228）

大きさ・形態ともに種類が豊富である。肥前、瀬戸・美濃、大堀相馬産などがある。

2059～2066は美濃産の灰釉丸皿である。いずれも器高が低く扁平なタイプの小皿で、体部下半には削り調整、上半にはナデ調整の痕跡が明瞭に認められる。胎土には灰色あるいは灰白色の精緻な土が用いられており、さらに体部外面中央から内面全体に暗緑色の灰釉が施される。2065・2066をみると、底部内面に削り調整が施されていることから、高台は削り出し高台と考えられる。

3047～3050は肥前産の染付皿である。3047は京焼風陶器の大皿である。高台は付高台であるが、内外面ともに丁寧な削り調整が施されているため接合痕は確認できない。灰白色の精緻な胎土で、高台脇から体部内面に灰釉が施される。染付は、体部内面に海浜風景文が描かれる。3048は中皿で、3047と特徴はほぼ同じである。3049・3050は底部付近の破片で、いずれも海浜風景文などが描かれているものと思われる。

3051・3052は削り込み高台の丸皿である。いずれも器高は低く、高台は浅く削り込まれる。いずれも全面施釉で、3051には灰釉、3052には長石釉が施される。3071は志野折縁皿である。口縁付近が水平に外方に開き、端部は小さく上方に折り返される。3054は削り出し高台の丸皿、3055は反り皿で、全面に灰釉が施される。3056・3058は鉄絵皿である。いずれも体部内面に圏線と蘭竹文が描かれている。3057は内禿皿である。基本的には全面施釉であるが、底部内面のみ釉剥ぎされている。体部内面には

ソギが入れられ、高台は低い削り出し高台である。3059・3060は灰釉皿である。体部は直線的に開き、轆轤ナデ調整の痕跡が顕著である。口縁端部はナデ調整によって内面がくぼんでいる。3061～3067は丸皿である。ほぼ同型・同大で、口径は13.0cm前後である。体部は緩やかに丸味をもって立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。体部外面には削り調整が明瞭に認められる。高台は付高台で、接合後にナデ調整が施されている。体部下半から内面に長石釉が薄く漬け掛けされているが、後述する志野反り皿や菊皿と比べて透明釉に近く、貫入も認められない。3068～3073は志野反り皿である。3068・3069は直線的に外反するタイプである。3072・3073は体部下半にやや張りがあり、口縁部はナデ調整の際に外方に引き伸ばされている。3074～3079・3086は志野菊皿である。いずれも体部はほぼ直線的に開き、体部下方には削り調整、口縁部にはナデ調整が施される。口縁部はヘラ状工具などで輪花状にカットされ、体部外面には口縁部に合わせて縦方向に丸ノミ彫り、体部内面にはソギが入れられる。高台はいずれも削り出し高台である。また、底部内外面には円錐ピンの痕跡が認められる。なお、3071～3080はいずれも長石釉が厚く全面に施される。3083～3085は志野菊皿または丸皿の底部であるが、残存部分が少なく判別はできない。3080～3082は黄瀬戸菊皿である。体部形状は前述の志野菊皿と類似するが、こちらは轆轤成形後に型打ちをして輪花を形成する。高台は断面方形の付高台で、接合部付近にはナデ調整が施される。釉薬は高台を除いて灰釉を施したのち、口縁部内外面に緑釉を流し掛けする。3088は陶器染付の皿で、体部は外反気味に外方へ開く。染付は体部内面に呉須で草花文と圏線が描かれる。

3088は体部が半球状の皿で、玉縁状の口縁部を有する。体部には藁灰釉が施され、口縁部の数ヶ所に灰釉が流し掛けされる。3089は端反皿で、口縁部は緩やかに外反する。体部には灰釉が施され、口縁部には鉄釉系の釉薬を二度掛けする。3091は内面に段をもつ皿で、底部内面は蛇ノ目状に釉剥ぎされている。3092～3094・3228は輪花小皿である。体部は下方でやや角度を変えながら直線的に開き、口縁端部は尖る。口縁部はヘラ状工具で小さく５ヵ所カットされ、五弁花状になっている。また、底部内面には沈線が一条巡る。高台は付高台で、内面はやや深く削り込まれている。釉薬は、高台内を除いて灰釉が施される。

鉢類（3095～3182・3229・3230）

鉢類には香炉・火入などの火鉢類、擂鉢・片口などの調理具、その他形状不明のものがある。

3095は刷毛目香炉である。体部は筒形で、口縁部は内側に折り返されて玉縁状となる。外面には白化粧土で螺旋状刷毛目が描かれ、そののちに体部下半から口縁部内面にかけて透明釉が施される。胎土は赤褐色で硬質の仕上がりである。3096は陶器染付の袴腰形香炉である。腰が張り体部は直線的に開く。口縁端部は内側に折り返されて玉縁状となる。外面には呉須で草花文と圏線が描かれ、そののち体部外面から口縁部内面にかけて長石釉が施される。3097は陶器染付の筒形香炉である。口縁部は内側に折り返されて断面形が逆三角形となる。外面には呉須で唐草文と圏線が描かれ、そののちに体部外面から口縁部内面にかけて灰釉が施される。

3098～3100は筒形の火入である。いずれも口縁端部が内側に短く折り返される。3098・3099には鉄釉、3100には灰釉が施され、さらに3100は口縁部数ヶ所に鉄釉が落とし掛けされる。3101・3102は筒形鉢である。体部は直立し、内外面とも轆轤目が顕著である。

3103・3104は瀬戸産の掛け分け灰落しである。3104は高台脇がほぼ水平に立ち上がり、体部は直立する。体部外面には横方向に櫛描沈線、縦方向に丸ノミ彫りを行い、沈線付近で鉄釉と灰釉が掛け分けられる。3104は高台脇が斜め上方に立ち上がり、体部は直立する。沈線はみられず縦方向の丸ノミ

彫りのみである。3105は大堀相馬産の灰釉灰落しで、体部下方は水平気味に立ち上がるが、中央やや下位で屈曲して直立気味となる。体部外面にのみ灰釉が施される。

3106は三足香炉である。体部は直線的に立ち上がり、内外面に灰釉が施されている。底部は平底で、半球状の足が取り付けられていたものと思われる。3111は瓶掛である。底部には幅広の脚台を有し、側面には3条の沈線が施される。体部及び脚台部内面にはナデ調整が施され、体部外面には緑釉が施される。3112・3113は体部が半球形の鉢で、口縁部は玉縁状となる。体部には白濁した灰釉あるいは藁灰釉が施される。3115は火鉢の一種と考えられる。底部は平底で、体部は直立する。底部外面付近及び体部内面に錆釉、体部外面に灰釉が施される。3119・3120は片口の注口部である。手づくね成形で、内外面に灰釉が施され、さらに緑釉が流し掛けされる。

3107～3110・3114は練鉢・捏鉢類の底部である。丸味をもって立ち上がる体部を有し、高台は断面方形のものと蛇ノ目高台のものとがある。3109は蛇ノ目高台の鉢で、体部はわずかに丸味をもって外方に開き、外面及び高台には削り調整が施される。釉薬は、体部下方から内面にかけて灰釉が施される。3116は筒形鉢と考えられる、内外面とも飴釉が施される。

3125・3128・3131・3139は三島手鉢で、3128を除いて肥前産と考えられる。3125は口縁部破片で、体部は直線的に開き、口縁部は折縁状となる。内面には三島文が陰刻され、そのうえに化粧土と透明釉が施される。3128は口縁部内面に三島文を陰刻し、そのうえに化粧土と灰釉を施す。3139は底部破片で、体部は直線的に開く。高台は、断面逆台形の付高台である。

3129・3131・3132・3133・3135・3140は刷毛目鉢で、いずれも肥前産と考えられる。3129は口縁部破片で、体部はやや丸味をもち、口縁は外折する。内面に白化粧土で波状に刷毛目が描かれ、そののちに透明釉が施される。3133・3135は体部破片で、いずれも丸味をもって立ち上がり、内面に円周状の刷毛目が描かれる。3140は底部破片で、体部は直線的に立ち上がり、高台は幅広で断面形が方形である。体部内面には渦巻状の刷毛目が描かれる。

3126・3127・3134・3136～3138・3143・3144は鉄絵鉢である。いずれも長石釉が施される。3136・3137は内面にススキと思われる鉄絵が描かれる。また、3126・3136・3138には緑釉が流し掛けされる。3143・3144は体部が直線的に立ち上がり、断面逆台形の付高台を有する。

3142は瀬戸産の黄瀬戸鉢である。底部内面中央には菊文と8条の櫛描沈線が陰刻される。体部に黄瀬戸釉を施したのちに緑釉を流し掛けするが、発色は不良である。

3145～3182は擂鉢である。胎土と口縁部の形状によって3類に細分が可能である。A類（3145～3147）は、体部が深くハの字状に開きながら口縁部へと至る形状である。口縁部は外側に折り返されて縁帯を形成し、端部はナデ調整によって段を形成している。内面の摺目は、体部・底部ともに5・6条単位で放射状に施されている。胎土は赤褐色で、全面に鉄釉が施されており、外面は赤褐色あるいは暗赤褐色である。B類（3148・3149）は瀬戸産の擂鉢である。やや小型で、体部は直線的に開き、口縁部は外反して縁帯を形成する。内面の摺目は、8～10単位で放射状に施される。胎土は黄褐色で若干の砂粒を含み、全面に錆釉が施される。C類（3150～3153）は産地不明の擂鉢である。体部から口縁部は直線的に開き、口縁部外面には段が形成される。内面には櫛目状の摺目が隙間なく施されており、さらに口縁部から3～5cmの部分で水平に揃えられている。胎土は橙色のものが多く、全面に鉄釉が施される。なお、その他の破片については胎土や摺目の特徴をもとに3160・3164・3167・3168・3171・3172はA類、3154・3163・3165・3166・3169はB類、3155・3177・3182はC類に分類することができる。

甕類（3183～3199・3231）

甕類は大きさ・形状・釉薬ともに様々であるため、ここでは口縁部や底部形状に注目して記載する。口縁部は外側に折り返されるものが多く、なかには3191のように内側に突帯が形成されるものもある。底部はいずれも平底で、3185・3189のように回転糸切痕がみられるものもある。体部は倒卵形のもの（3185・3192・3193）と直線的に立ち上がるもの（3187・3189）とがある。釉薬には鉄釉が主体として用いられており、口縁部付近に海鼠釉や灰釉を流し掛けするものが多い。3191は体部下方は外反しながら立ち上がるが、中央で丸味をもって屈曲して直立する頸部へと至る形態である。

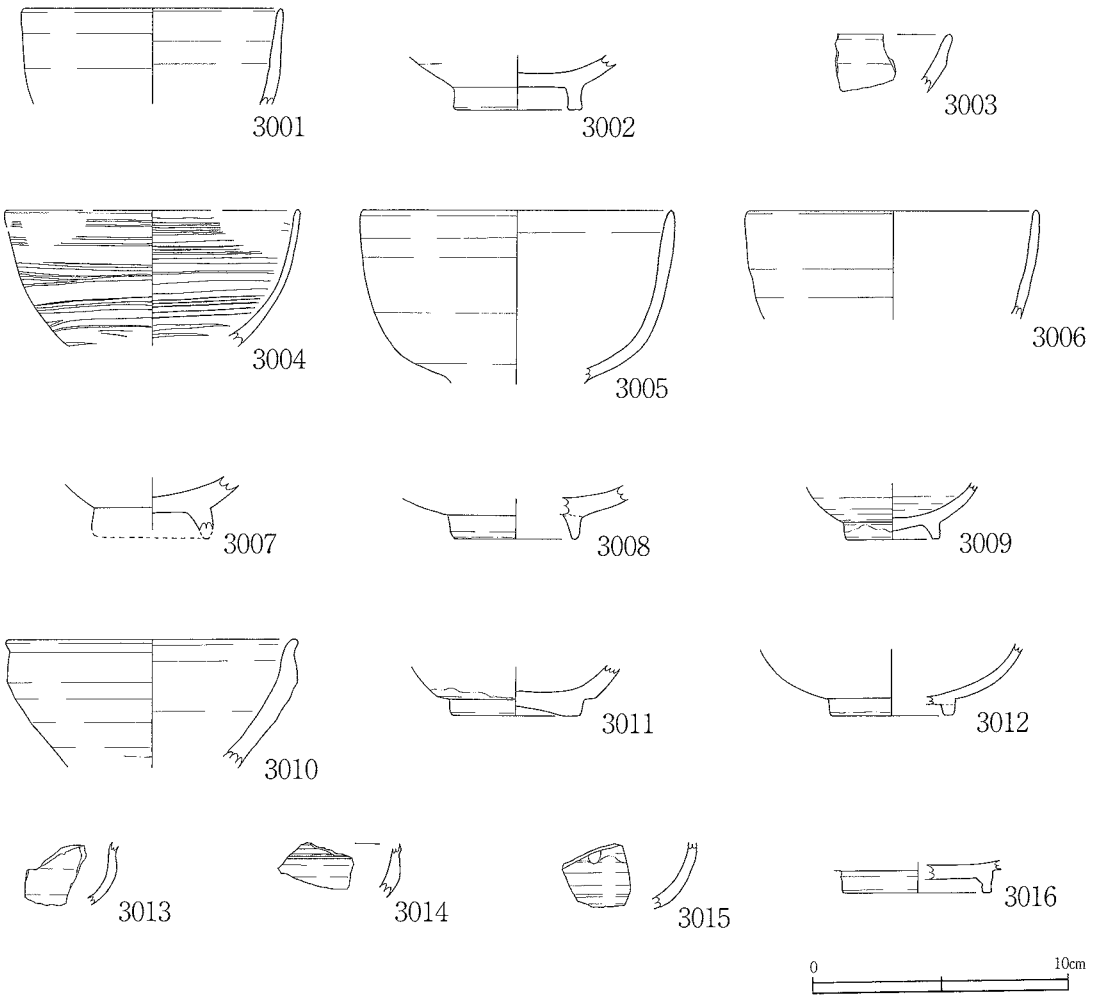
3195は平底の小壺である。体部は半球状で、口縁部は摘み上げられて直立気味になる。釉薬は、体部下方から内面に藁灰釉が施される。3196～3198は小甕で底部は平底で体部はわずかに内彎しながら立ち上がる。

その他（3200～3223）

3200～3202は行平鍋である。体部は丸味をもち、口縁部は折り返されて斜め上方に外反する。3200は体部外面に部分的に灰釉、3201は体部外面の一部と内面に柿釉、3202は体部内面に灰釉が施される。3203は焙烙の把手である。円筒状で、先端が若干ハの字状に開く。胎土は橙色で、透明釉が施される。3204は徳利の頸部である。体部と頸部の境界に明瞭な段をもち、頸部はほぼ直立する。体部上方には飛鉋文が入れられ、さらに外面全体に鉄釉が施される。3205～3208は徳利の体部片で、体部が直線的なもの（3205）、半球状のもの（3206・3208）、やや肩が張るもの（3207）がある。

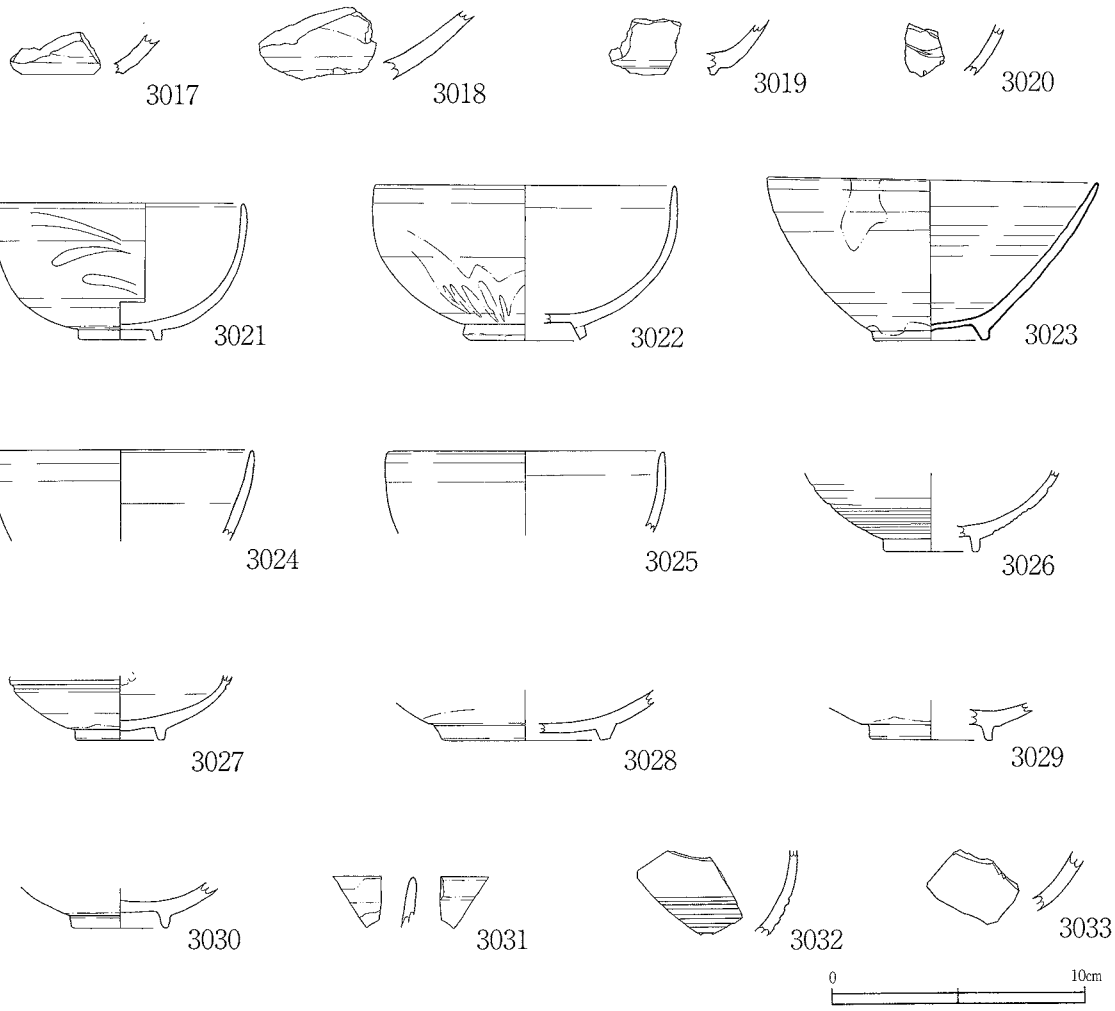
3209～3214は土瓶または急須の類である。3209は体部下半に最大径をもつもので、体部全体に灰釉を施し、さらに体部上半には呉須釉と緑釉を掛け分けている。3210は体部が算盤玉形で、鉄釉と灰釉が掛け分けられる。3211・3212は注口部の破片で、いずれも外面には藁灰釉が施される。3213は体部が直線的に外方に開き、底部は内反する。体部外面下方から上位には藁灰釉、内面には灰釉が施される。3214は底部のみの破片である。底部は平底で、内面には灰釉が施される。

3215・3216はかえり付の蓋、3217は落とし蓋である。3218は小破片であるが、鼠志野（あるいは灰志野）の向付と思われる。3220はやや底径が広く、筒形の花生であると思われる。底部を除いて内外面に灰釉が施される。底部外面には筆書きで「清」の文字とφ1.5cmのスタンプが押印される。なお、スタンプについては磨滅が著しく判読することができなかった。3221は型造り成形の汽車茶瓶である。体部は立方体で、一角に耳状の把手が造られている。口縁部は不整な円形で短く直立する。釉薬は、底部周辺を除いて灰釉が施される。3222は、ひょうそくである。灯芯を立てる部分は欠損しているがほぼ完形である。橙色の素地で、口縁部内面から体部外面に透明釉が施される。（村田）



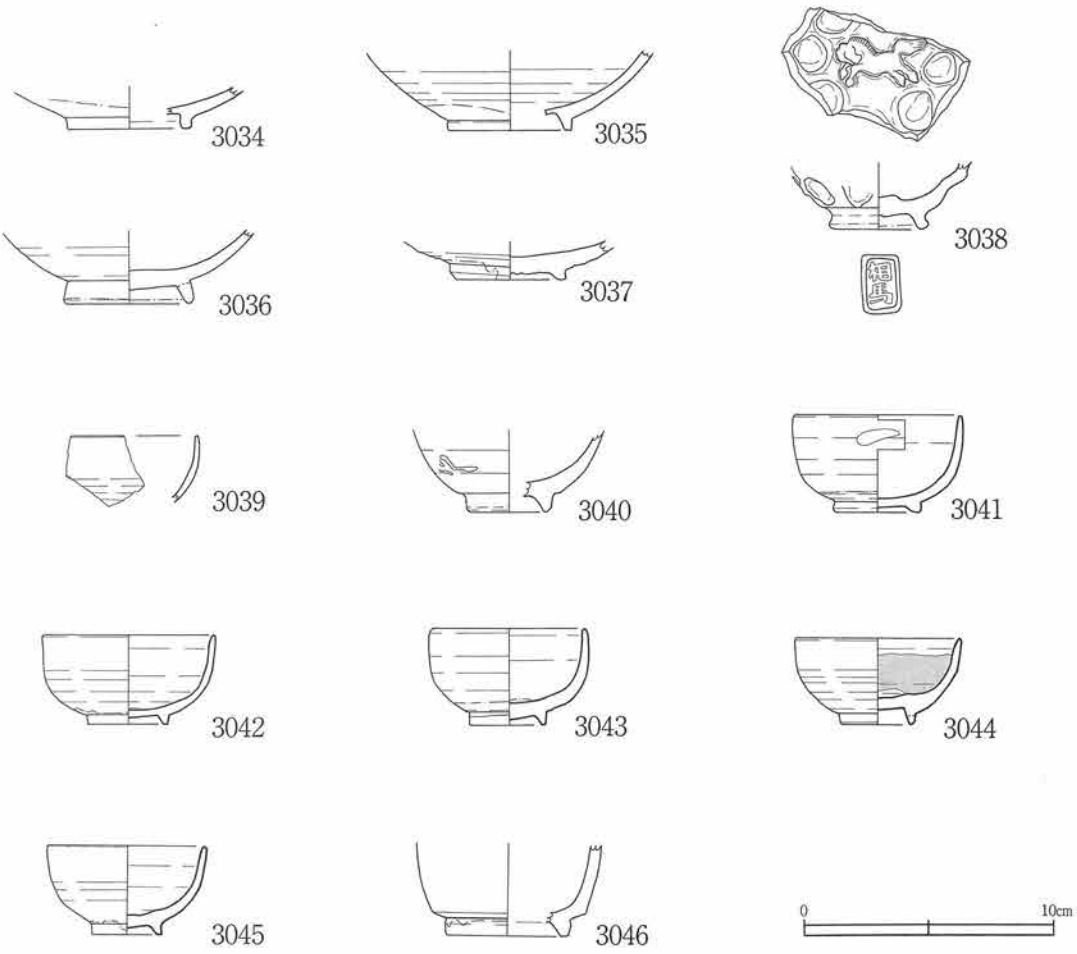
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3001	碗	01SD4　埋土上～中位	(3.8)	10.0	—	15	0	鉄釉		肥前		
3002	碗	01SD4　検出面～埋土	(2.2)	—	4.9	0	90	鉄釉		肥前		
3003	碗	T12南側　表土より1m	(2.3)	—	—	5	0	灰釉		肥前		
3004	刷毛目碗	P24　埋土	(5.9)	11.6	—	15	0	透明釉	螺旋状刷毛目	肥前	大橋Ⅲ期	
3005	呉器手碗	E区ⅠB73　検出面	(6.9)	12.2	—	20	0	灰釉		肥前		
3006	呉器手碗	A区P102　埋土	(4.3)	11.2	—	15	0	灰釉		肥前		
3007	呉器手碗	C区ⅢE73　1層下	(2.1)	—	(4.6)	0	0	灰釉		肥前		高台欠損
3008	呉器手碗	D区SZ64	(2.1)	—	4.8	0	20	灰釉		肥前		
3009	碗	B区西端　粗掘時	(2.2)	—	3.6	0	95	灰釉		肥前		
3010	天目茶碗	E区ⅠB　検出面	(5.1)	11.4	—	5	0	鉄釉		瀬戸・美濃	大窯3期	
3011	天目茶碗	01SX1　埋土	(2.0)	—	5.0	0	80	鉄+錆		瀬戸・美濃	大窯4期	
3012	志野丸碗	E区西側　斜面中	(2.7)	—	4.7	0	25	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3013	天目茶碗	01SD3　埋土	(2.5)	—	—	0	0	鉄釉		瀬戸・美濃	連房7・8小期	
3014	腰錆	E区SK18　埋土	(1.8)	—	—	0	0	鉄＋灰	灰釉流し	瀬戸・美濃	連房8・9小期	
3015	碗	B区ⅡD95　攪乱	(2.6)	—	—	0	0	鉄＋灰	掛け分け	瀬戸・美濃	連房7・8小期	
3016	腰錆	C区ⅢE81　1層	(1.2)	—	5.8	0	40	鉄＋灰	灰釉流し	瀬戸・美濃	連房5・6小期	

第159図　近世の陶器①(3001～3016)



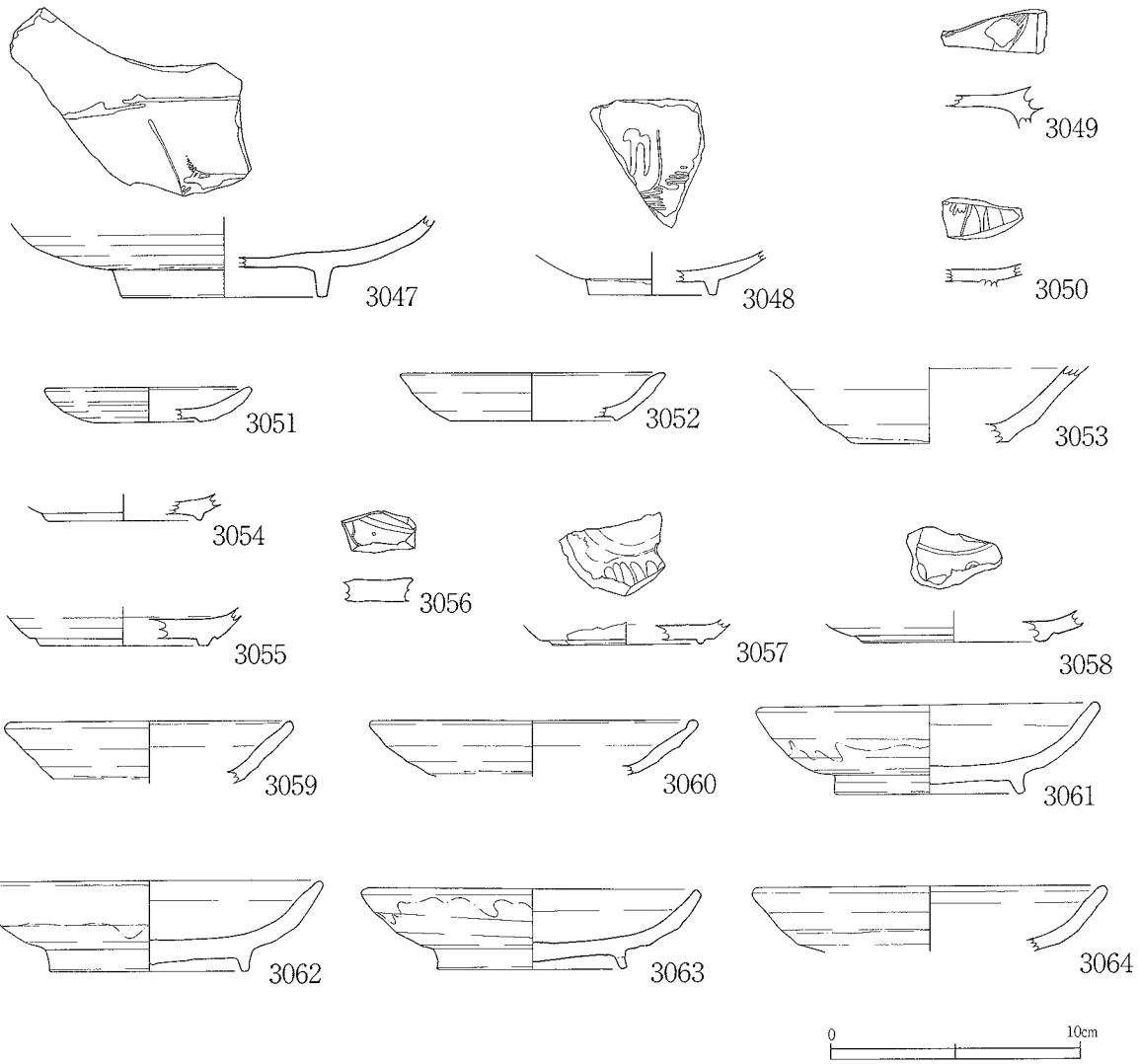
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3017	平碗か	01SK3　埋土	(1.6)	—	—	0	0	灰釉		瀬戸・美濃	古瀬戸か	底部付近
3018	平碗か	D区ⅣE22　3層	(2.7)	—	—	0	0	灰釉		瀬戸・美濃	古瀬戸か	底部付近
3019	志野丸碗	C区ⅢF37　検出面	(2.2)	—	—	0	5	長石釉		瀬戸・美濃	大窯４期	
3020	染付丸碗	E区ⅠA70　表採	(2.0)	—	—	0	0	透明釉	外：草花文	瀬戸・美濃	連房８・９小期	
3021	丸碗	B区墓地　表土	5.4	9.7	3.2	15	100	灰釉	外：鉄絵草花文	大堀相馬	18世紀代	釉薬発色不良
3022	丸碗	C区ⅢE73　1層下	6.1	11.8	4.4	5	20	灰＋灰	灰釉流し	大堀相馬	18世紀代	
3023	平碗	B区SZ11	6.4	13.0	4.4	90	100	灰＋透明		大堀相馬	19世紀代	
3024	碗	A区ⅡB12　検出面	(3.6)	10.4	—	5	0	藁灰釉		大堀相馬	19世紀代	
3025	碗	C区ⅣD07　4層	(3.1)	10.9	—		0	灰釉		在地		
3026	腰錆	E区ⅠB　第1検出面	(3.2)	—	3.8	0	15	鉄＋灰	外：螺旋状沈線	大堀相馬		
3027	腰折碗	D区墓地付近	(2.5)	—	3.4	0	30	灰釉	外：沈線	大堀相馬		
3028	平碗か	C区ⅢD69　1層	(2.0)	—	6.6	0	20	藁灰釉		大堀相馬	19世紀代	
3029	丸碗	D区ⅣE25　1層	(1.5)	—	4.8	0	5	灰釉		大堀相馬	18世紀代	
3030	丸碗	D区SZ89	(1.8)	—	3.8	0	10	藁灰釉		大堀相馬	19世紀代か	
3031	碗	C区ⅣE01　3層	(2.0)	—	—	5	0	飴＋うのふ	うのふ釉流し	大堀相馬	19世紀代	
3032	腰錆	E区ⅠB51　第1検出面	(3.3)	—	—	0	0	鉄＋灰	掛け分け	大堀相馬	18世紀代	
3033	丸碗	E区SK24　埋土	(2.4)	—	—	0	0	灰釉		大堀相馬	19世紀代	

第160図　近世の陶器②(3017～3033)



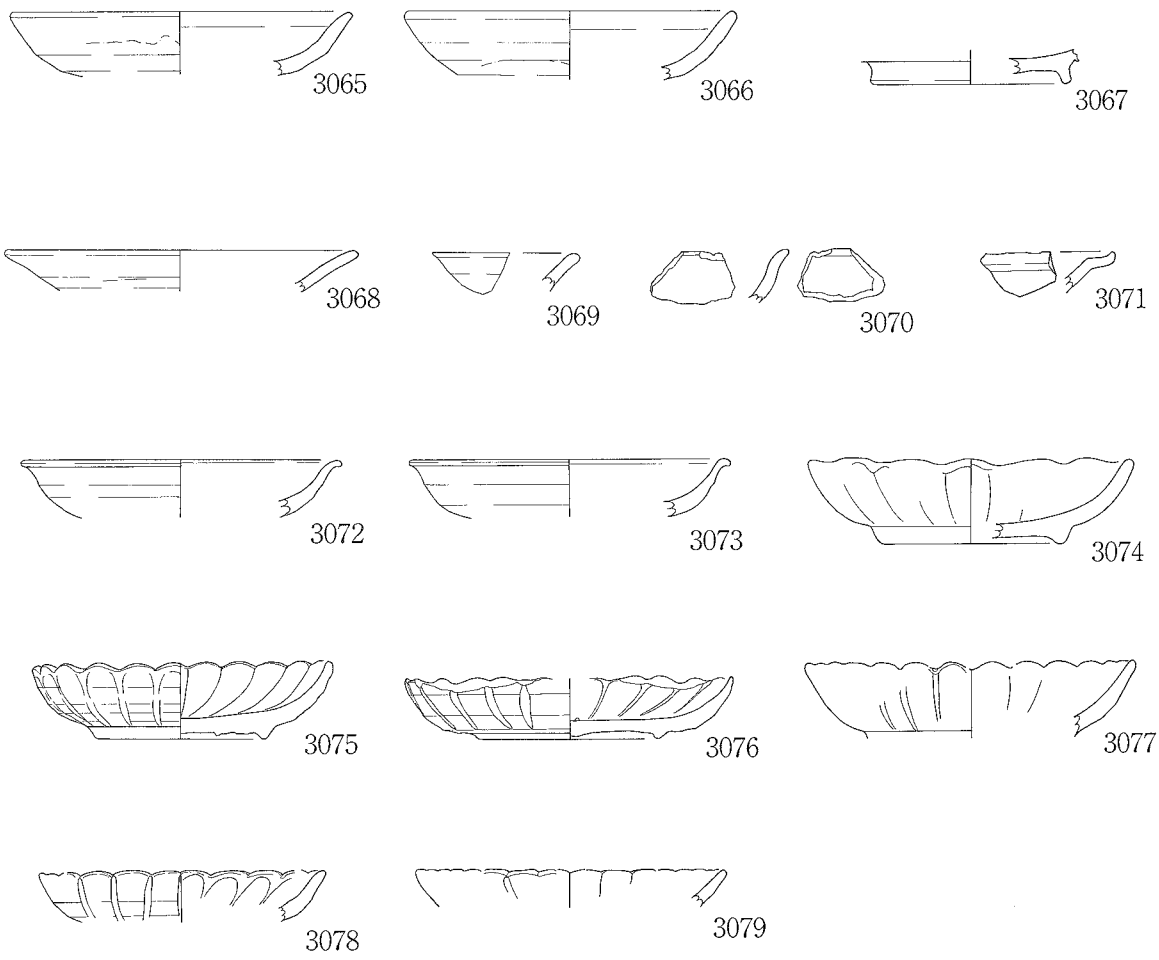
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3034	碗	01SK22　埋土	(1.7)	—	4.9	0	20	藁灰釉		大堀相馬	19世紀代	
3035	碗	E区西側　斜面中	(3.2)	—	5.0	0	25	藁灰釉		大堀相馬	19世紀代	
3036	碗	E区ⅠA27　第1検出面	(2.8)	—	5.0	0	45	飴釉		在地		
3037	碗	C区ⅢD85　撹乱	(1.6)	—	4.4	0	90	灰釉		肥前か		
3038	碗	E区西側　整地中	(3.7)	—	3.6	0	75	灰釉	内：駒の陽刻	大堀相馬	20世紀か	
3039	碗	D区SZ89	(2.7)	—	—	5	0	藁灰釉		大堀相馬	19世紀代	
3040	碗	B区墓地跡　表土	(3.3)	—	3.4	0	25	灰釉	外：鎬、内：青ヒビ	大堀相馬	19世紀代	
3041	小碗	D区SZ43	3.9	6.6	3.4	95	100	灰釉	外：羽根文	美濃	18世紀代	
3042	小碗	D区SZ60	3.6	6.8	3.3	95	100	灰釉		大堀相馬	18世紀代	
3043	小碗	D区SZ83	3.9	6.2	3.1	100	100	灰釉		大堀相馬	18世紀代	
3044	小碗	D区SZ92	3.6	6.4	2.8	100	100	藁灰釉		大堀相馬	19世紀代	赤色顔料付着
3045	小碗	D区SZ84	3.5	6.6	2.9	100	100	灰釉		大堀相馬	18世紀代	
3046	猪口	E区西側　斜面中	(3.7)	—	4.8	0	25	鉄釉		在地		

第161図　近世の陶器③(3034～3046)



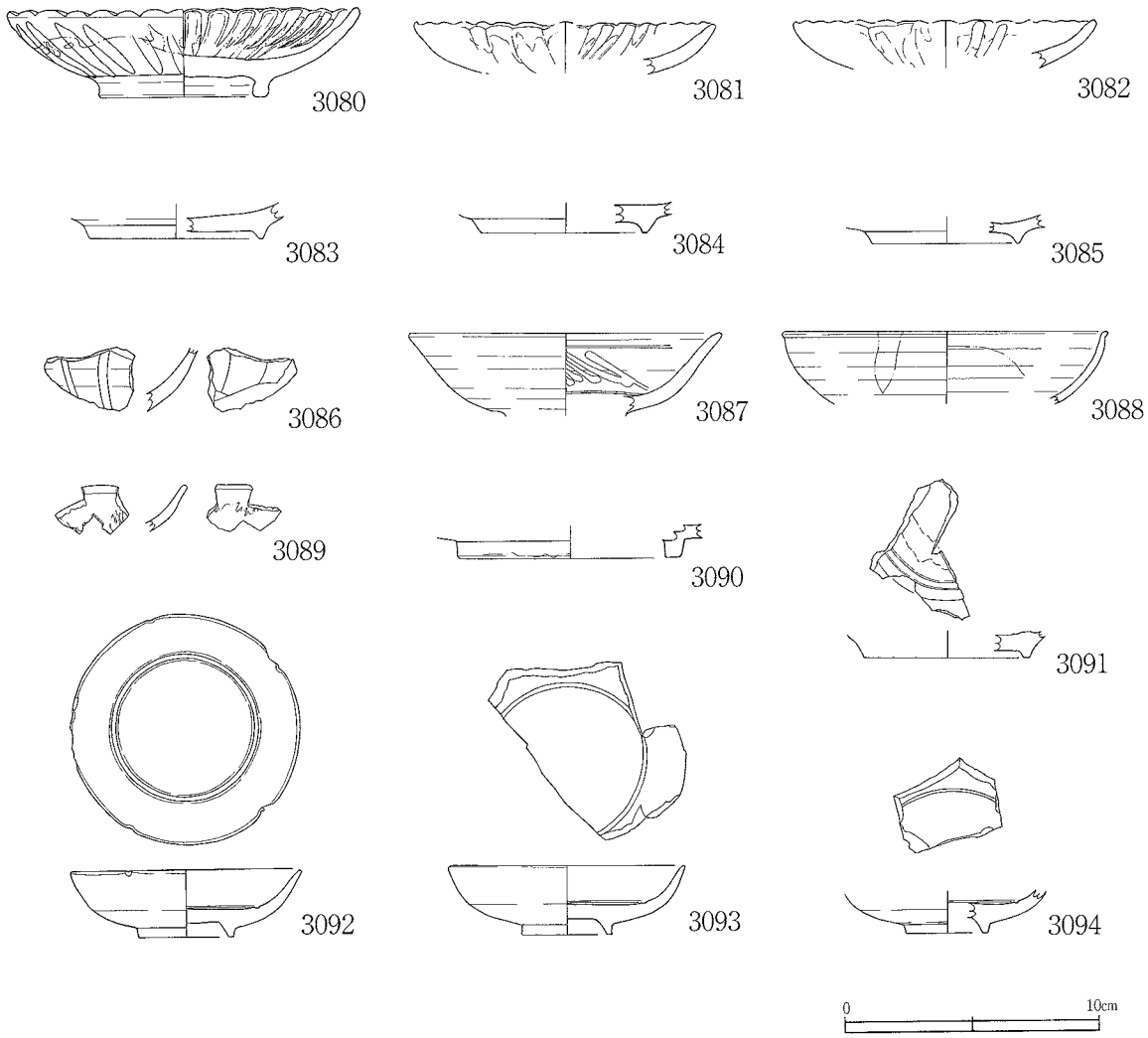
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3047	大皿	01SD2ベルト西側	(3.2)	—	8.2	0	25	灰釉	内：海浜風景文	肥前	17後～18前	京焼風
3048	皿	C区ⅢE73　1～2層	(1.8)	—	5.0	0	10	灰釉	内：海浜風景文	肥前	17後～18前	京焼風
3049	皿	E区ⅠA37　攪乱	(1.7)	—	—	0	0	灰釉	内：海浜風景文	肥前	17後～18前	京焼風、底部破片
3050	皿	E区SK８　埋土	(0.9)	—	—	0	0	灰釉	内：海浜風景文	肥前	17後～18前	京焼風、底部破片
3051	丸皿	E区P10掘方(SB1)	1.4	8.0	4.0	20	20	灰釉		瀬戸・美濃	大窯４期前半	
3052	志野丸皿	B区墓地　粗掘時	1.9	10.6	6.6	20	20	長石釉		瀬戸・美濃	大窯４期後半	
3053	白天目	E区SK３１層(SB1)	(3.3)	—	(6.4)	0	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房２・３小期	高台欠損
3054	小皿	C区ⅢE30　検出面	(1.1)	—	6.0	0	20	灰釉		瀬戸・美濃	連房１・２小期	
3055	反り皿	D区墓地付近　表採	(1.6)	—	6.6	0	25	灰釉		美濃	連房４・５小期	
3056	鉄絵皿	C区　排土中	—	—	—	0	0	長石釉	蘭竹文	瀬戸・美濃	連房１小期	
3057	内禿皿	01SD4　埋土中位	(1.0)	—	5.9	0	20	灰釉		瀬戸・美濃	大窯４期前半	
3058	鉄絵皿	01SD4　検出面	(1.6)	—	7.2	0	15	長石釉	蘭竹文	瀬戸・美濃	連房１・２小期	
3059	皿	01SK3　埋土	(2.5)	11.0	—	20	0	灰釉		瀬戸・美濃か		
3060	皿	D区ⅣE43　１層	(2.2)	12.8	—	15	0	灰釉		瀬戸・美濃か		
3061	丸皿	D区P22	3.6	13.5	7.5	80	100	長石釉		瀬戸・美濃	連房２・３小期	ほぼ灰釉化
3062	丸皿	D区P22　柱痕	3.6	13.4	7.8	45	50	長石釉		瀬戸・美濃	連房２・３小期	ほぼ灰釉化
3063	丸皿	P10　柱痕	3.3	13.0	7.5	50	55	長石釉		瀬戸・美濃	連房２・３小期	ほぼ灰釉化
3064	丸皿	C区ⅣE21　３層	(2.6)	13.8	—	20	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房２・３小期	ほぼ灰釉化

第162図　近世の陶器④(3047～3064)



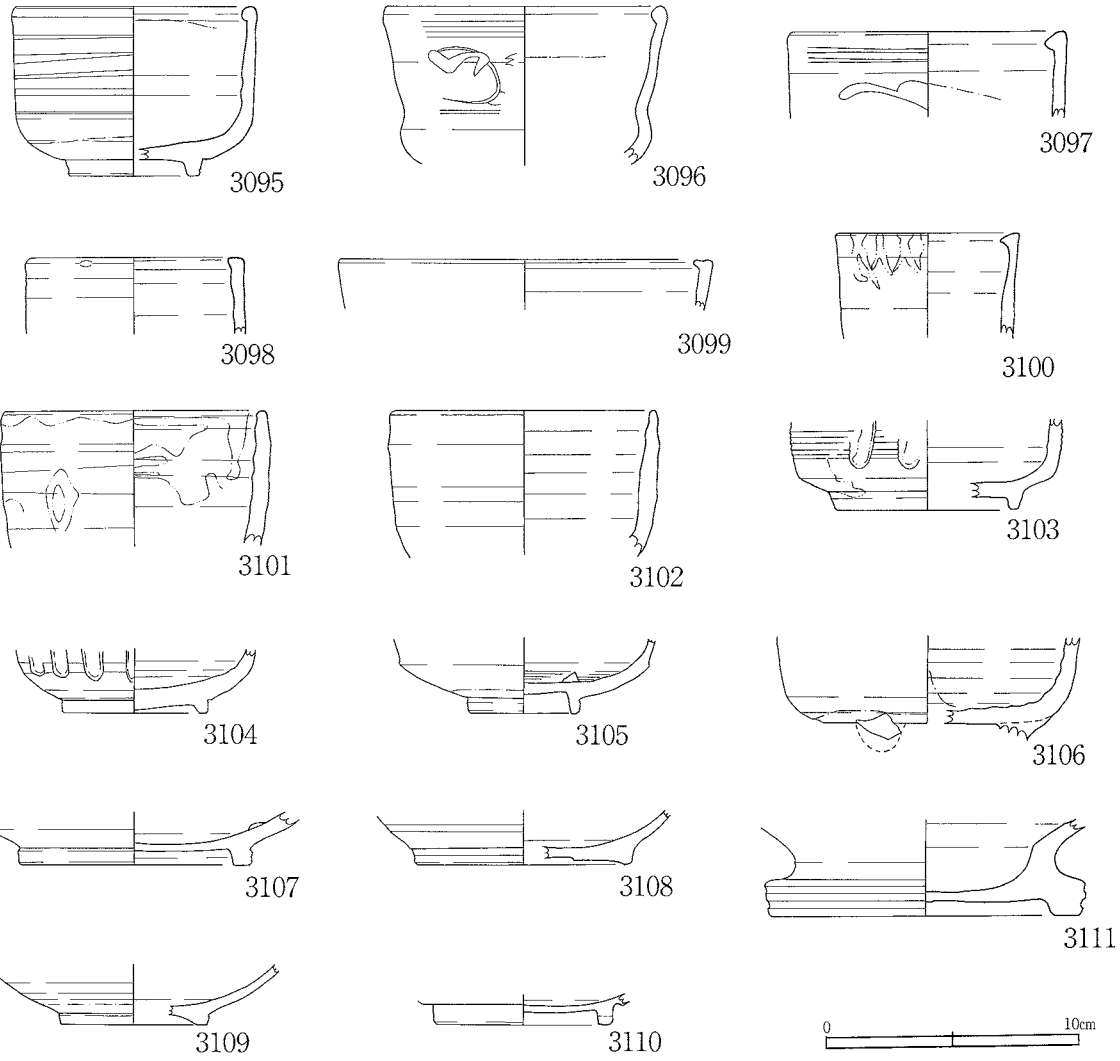
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3065	丸皿	D区ⅣE70　P15　柱痕	(2.5)	13.6	—	10	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房2・3小期	ほぼ灰釉化
3066	丸皿	01SD4　検出面	(2.7)	12.8	—	10	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房2・3小期	ほぼ灰釉化
3067	丸皿	2号柱穴(01年)	(1.4)	—	7.6	0	40	長石釉		瀬戸・美濃	連房2・3小期	
3068	志野反り皿	D区ⅣE45　3層	(1.7)	13.6	—	20	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房1・2小期	
3069	志野反り皿	E区P23堀方(SB1)	(1.5)	—	—	5	0	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3070	志野反り皿	C区ⅢE57　1層	(2.1)	—	—	5	0	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3071	折縁皿	E区ⅠA39　撹乱	(1.7)	—	—	5	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房1小期	
3072	志野反り皿	E区P14埋土(SB1)	(2.3)	12.6	—	15	0	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3073	志野反り皿	E区P64埋土(SB1)	(2.4)	12.3	—	20	0	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3074	志野菊皿	B区SZ52	3.2	13.4	7.2	5	25	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3075	志野菊皿	E区西側　斜面中	3.1	11.8	6.7	50	100	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3076	志野菊皿	B区沢跡　埋土	2.5	12.8	7.2	25	25	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3077	志野菊皿	C区ⅣD08　4層	(3.0)	12.8	(8.4)	5	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房1・2小期	
3078	志野菊皿	C区ⅢE73　1層下	(2.0)	11.2	—	15	0	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3079	志野菊皿	01SK22　埋土	(1.5)	12.0	—	5	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房1・2小期	

第163図　近世の陶器⑤(3065～3079)



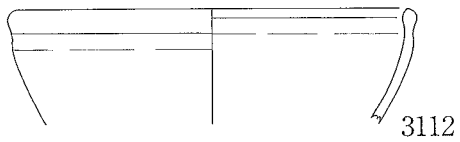
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3080	黄瀬戸菊皿	B区SZ61	4.5	13.6	6.6	45	60	灰釉＋縁	縁釉流し	美濃	連房3・4小期	
3081	黄瀬戸菊皿	A区S65・E60　火山灰層	(2.0)	11.8	—	10	0	灰釉＋縁	縁釉流し	美濃	連房3・4小期	
3082	黄瀬戸菊皿	01SK24	(1.9)	11.8	—	10	0	灰釉＋縁	縁釉流し	美濃	連房3・4小期	
3083	志野菊皿	01SD4　埋土下位	(1.4)	—	6.9	0	15	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	
3084	志野丸皿	E区IB　表土	(1.2)	—	6.6	0	15	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	菊皿の底部か
3085	志野丸皿	02SK59　埋土	(1.1)	—	5.8	0	15	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	菊皿の底部か
3086	志野菊皿	C区ⅢD34　火山灰層面	(2.5)	—	—	0	0	長石釉		瀬戸・美濃	大窯4期	体部破片
3087	染付皿	E区IA13　撹乱	(3.3)	12.4	—	15	0	透明釉	草花文	瀬戸・美濃	連房8・9小期	陶器染付
3088	反り皿	D区ⅣF　表土	(2.9)	12.6	—	10	0	藁灰＋灰		大堀相馬	19世紀代	
3089	反り皿	E区SK24　埋土	(1.8)	—	—	5	0	藁灰＋灰		大堀相馬	19世紀代	
3090	皿	D区ⅣE78　1層	(1.3)	—	8.9	0	15	灰釉		大堀相馬	18・19世紀代	
3091	皿	01SD4　埋土	(1.1)	—	6.6	0	5	灰釉		不明		釉薬発色不良
3092	輪花小皿	C区ⅢE83　1～2層	2.7	9.1	3.8	100	100	灰釉	底部内面沈線1条	大堀相馬	18世紀代	五弁花状に口縁部成形
3093	輪花小皿	C区ⅢE93　1～2層	2.7	9.4	3.6	5	45	灰釉	底部内面沈線1条	大堀相馬	18世紀代	五弁花状に口縁部成形
3094	輪花小皿	C区ⅣD09　第1検出面	(1.7)	—	3.3	0	5	灰釉	底部内面沈線1条	大堀相馬	18世紀代	五弁花状に口縁部成形

第164図　近世の陶器⑥(3080～3094)

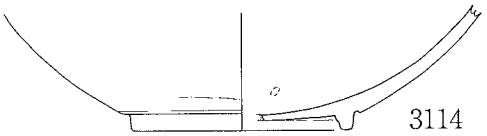


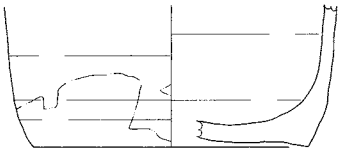
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3095	刷毛目香炉	C区ⅢE93　1～2層	6.7	9.2	5.1	25	45	透明釉	螺旋状刷毛目	肥前	大橋Ⅳ期	
3096	袴腰形香炉	E区　粗掘時	(6.2)	10.8	—	15	0	長石釉	草花文	肥前		陶器染付
3097	筒形香炉	C区ⅢE82　1層	(2.4)	10.8	—	15	0	透明釉	唐草文か	肥前	大橋Ⅳ期	陶器染付
3098	火入	01SD4　検出面～埋土上位	(3.0)	8.2	—	10	0	鉄釉		在地		
3099	火入	C区ⅢE72　2層	(2.0)	14.6	—	10	0	鉄釉		在地		
3100	火入	01SX1検出面～埋土上位	(4.2)	7.0	—	15	0	灰＋鉄	鉄釉流し	在地		
3101	筒形鉢	D区ⅣE33　1層下	(5.3)	10.0	—	20	0	灰釉	化粧土	不明		
3102	筒形鉢	01SX3　2層	(5.8)	10.2	—	10	0	灰釉		不明		
3103	灰落し	01SD4　埋土中～下位	(3.6)	—	7.0	0	25	鉄＋灰		瀬戸	連房7・8小期	
3104	灰落し	E区　粗掘時	(2.5)	—	5.6	0	10	鉄＋灰		瀬戸	連房7・8小期	
3105	灰落し	E区　粗掘時	(3.0)	—	4.2	0	100	灰釉		大堀相馬	18世紀代	
3106	三足鉢	CⅡIE93　1～2層	(4.1)	—	8.2	0	15	灰釉		不明		三足欠損
3107	鉢	D区ⅢF　表土	(2.1)	—	8.9	0	45	灰釉		大堀相馬		
3108	鉢	C区岩淵家前　表採	(2.2)	—	8.2	0	10	灰釉		大堀相馬		
3109	鉢	E区西側　斜面中	(2.2)	—	5.8	0	20	灰釉		肥前		
3110	鉢	C区岩淵家前　表採	(1.2)	—	7.1	0	50	灰釉		大堀相馬		
3111	瓶掛	E区西側　斜面中	(3.8)	—	12.4	0	100	緑釉		瀬戸	連房9小期	

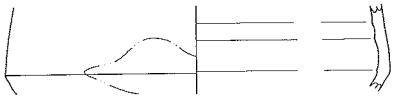
第165図　近世の陶器⑦(3095～3111)

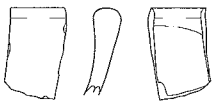

3112

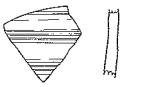
3113


3114

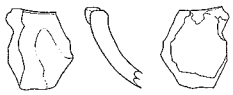

3115


3116


3117

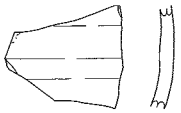

3118

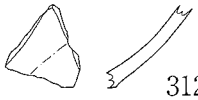
3119

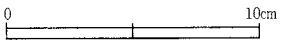

3120

3121

3122

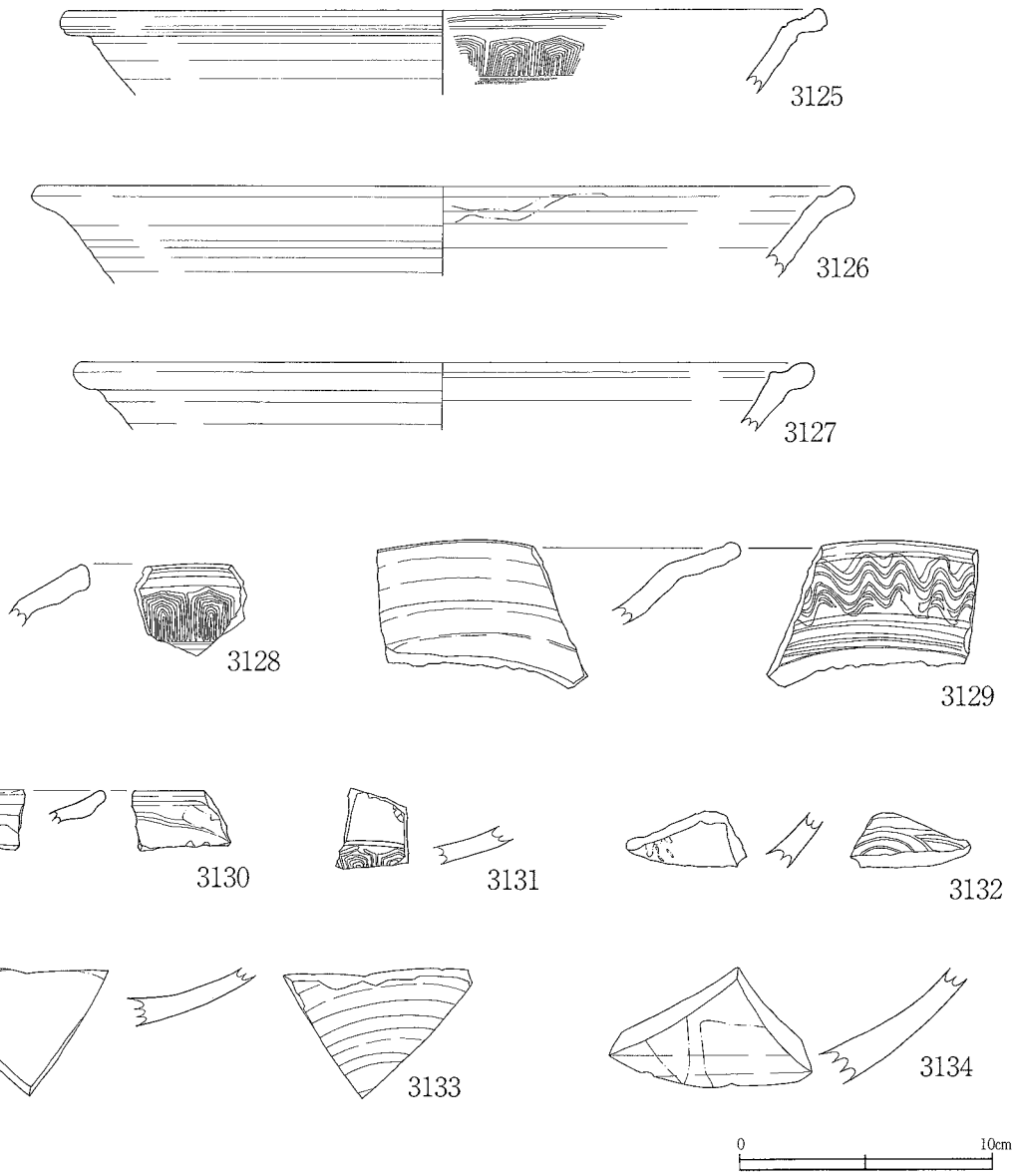

3123


3124



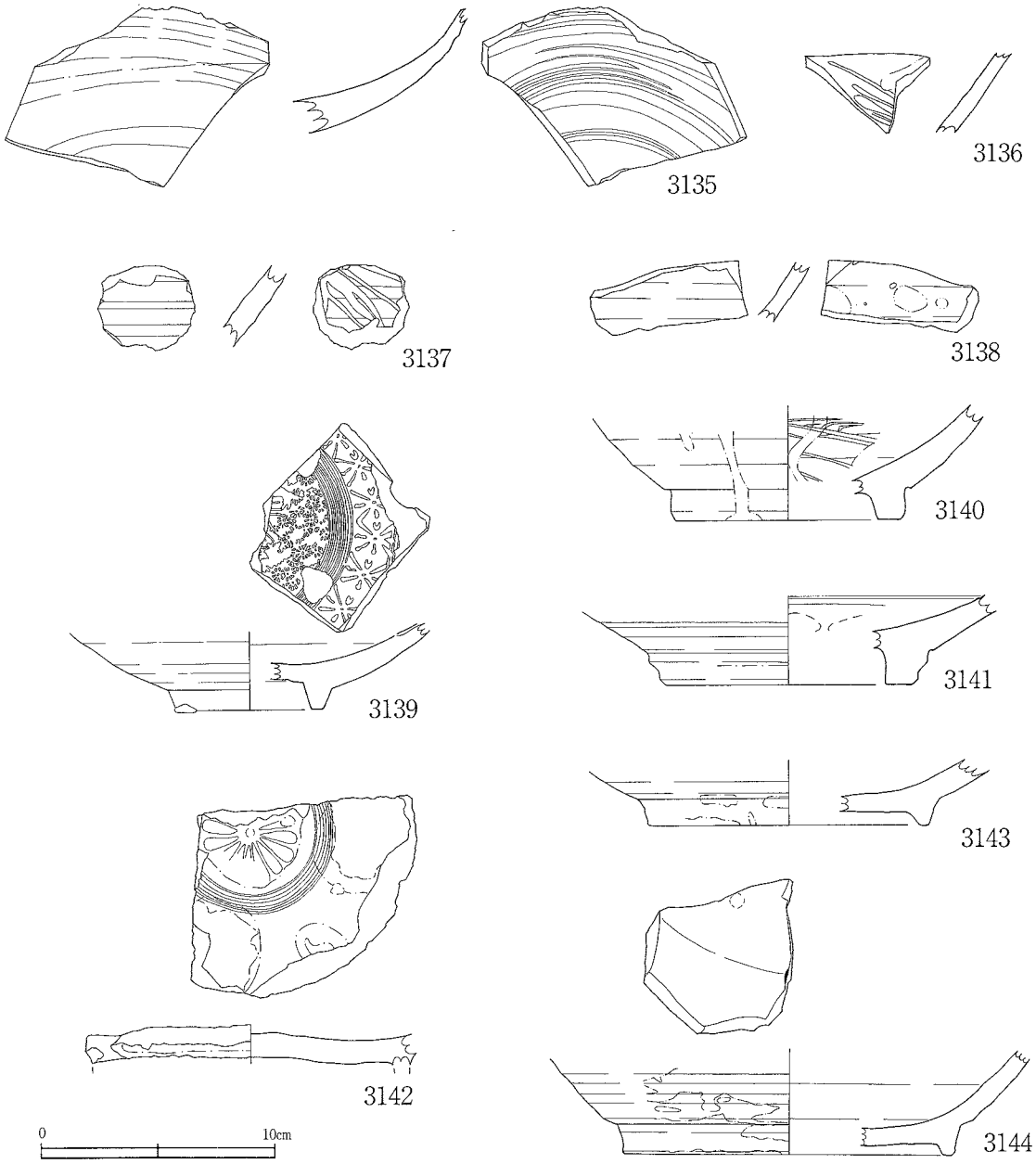
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3112	鉢	E区西側　斜面中	(4.6)	15.4	—	5	0	藁灰釉		不明		
3113	鉢	B区ⅡE91　攪乱	(4.6)	14.0	—	15	0	藁灰釉		不明	近代か	
3114	鉢	E区ⅠA46　攪乱	(4.9)	—	8.5	0	10	藁灰釉		大堀相馬	19世紀代	
3115	筒形鉢か	C区岩淵家前　表採	(5.7)	—	10.8	0	20	錆＋灰	灰釉流し	不明		
3116	鉢か	D区ⅣE78　1層	(4.5)	—	—	0	0	飴＋灰	灰釉流し	大堀相馬か		
3117	鉢	D区ⅣE68　1層	(3.5)	—	—	5	0	鉄＋鉄	鉄釉流し	不明	近代か	
3118	筒形鉢か	01SK26	(2.9)	—	—	0	0	飴釉か	外：櫛目数条	不明		
3119	肩口	C区ⅢE82　1～2層	—	—	—	0	0	灰＋緑	緑釉流し	瀬戸・美濃	連房9・10小期	片口部破片
3120	肩口	D区ⅣE73　2層	—	—	—	0	0	灰＋緑	緑釉流し	瀬戸・美濃	連房9・10小期	片口部破片
3121	鉢	B区ⅡC　表採	(2.0)	—	—	0	0	灰釉	摺絵	瀬戸・美濃か		
3122	鉢	E区SK15　埋土	(3.3)	—	—	0	0	鉄＋灰		在地		
3123	鉢	B区ⅡE92　攪乱	(4.0)	—	—	0	0	灰釉		相馬か		
3124	鉢	E区SK15　埋土	(3.3)	—	—	0	0	藁灰釉		相馬		底部付近

第166図　近世の陶器⑧(3112～3124)



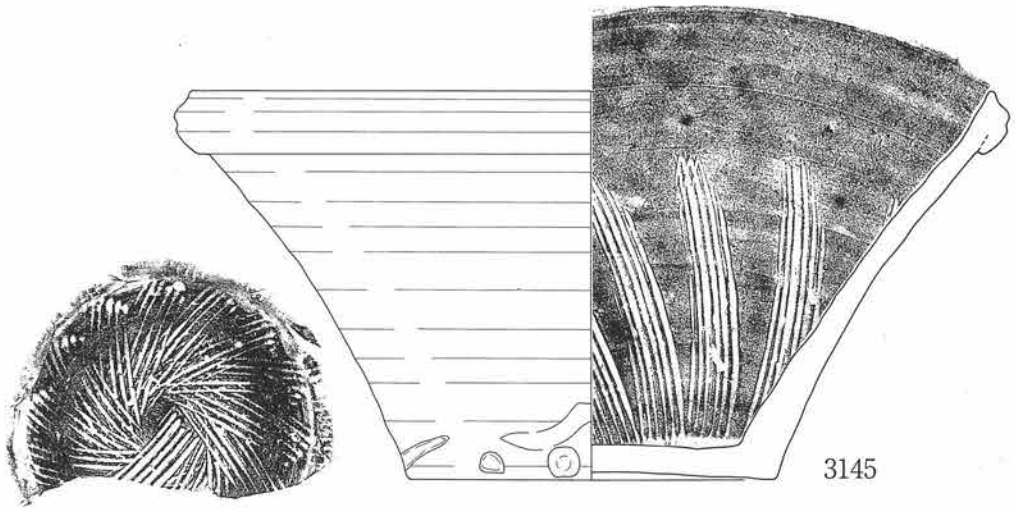
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3125	三島手鉢	E区ⅠA40　攪乱	(3.3)	29.6	—	10	0	透明釉	三島文	肥前		
3126	鉄絵鉢	E区ⅠA22　西側斜面	(3.6)	32.0	—	10	0	黄瀬戸+緑	緑釉流し、鉄絵	瀬戸・美濃	連房1・2小期	
3127	鉄絵鉢	01SD4　検出面~埋土上位	(2.4)	28.8	—	10	0	長石釉		瀬戸・美濃	連房3・4小期	
3128	三島手鉢	E区SK24　埋土(01年)	(2.4)	—	—	5	0	灰釉	三島文	在地	19世紀代	
3129	刷毛目鉢	P24　埋土	(3.3)	—	—	5	0	透明釉	波状刷毛目	肥前		
3130	鉢	E区西側　整地中	(1.3)	—	—	5	0	透明釉	白化粧+鉄+緑	在地		
3131	三島手鉢	D区ⅣE45　1層	(1.5)	—	—	0	0	透明釉	三島文	肥前		
3132	刷毛目鉢	01SD1　3～4層	(2.2)	—	—	0	0	透明釉	渦巻き状刷毛目	肥前		
3133	刷毛目鉢	C区ⅢE93　2～3層	(2.2)	—	—	0	0	透明釉	渦巻き状刷毛目	肥前		
3134	大鉢	C区SD106付近	(4.6)	—	—	0	0	灰釉		肥前		

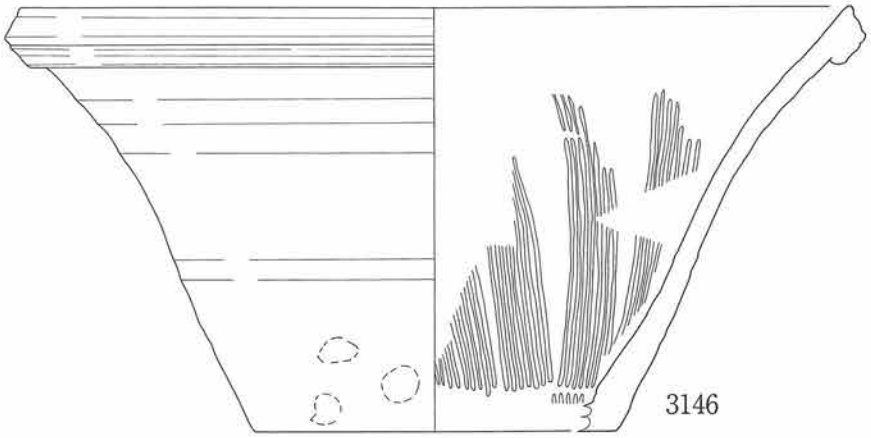
第167図　近世の陶器⑨(3125～3134)

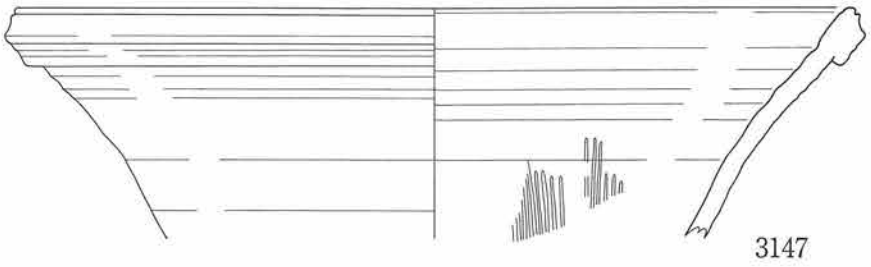


No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3135	刷毛目鉢	E区ⅠA22西側斜面	(5.5)	—	—	0	0	透明釉	渦巻き状刷毛目	肥前		
3136	鉄絵鉢	DⅨE44　P3　埋土	(2.6)	—	—	0	0	長石＋緑	緑釉流し、鉄絵	瀬戸・美濃	連房3・4小期	
3137	鉄絵鉢	EⅨA22　第1検出面	(3.4)	—	—	0	0	長石＋緑	緑釉流し、鉄絵	瀬戸・美濃	連房1・2小期	
3138	鉄絵鉢	B区墓地　粗掘時	(3.5)	—	—	0	0	長石釉	ススキ	瀬戸・美濃		
3139	三島手鉢	D区墓地付近	(3.6)	—	6.3	0	25	透明釉	三島文	肥前		トチ痕あり
3140	刷毛目鉢	EⅨA03　第1検出面	(4.9)	—	9.6	0	15	透明釉	渦巻き状刷毛目	肥前		
3141	刷毛目鉢	CⅨD19　4層	(3.8)	—	10.4	0	10	鉄釉	渦巻き状刷毛目	肥前		目跡あり
3142	黄瀬戸鉢	D区墓地　表採	(1.7)	—	(13.6)	0	0	黄瀬戸＋緑	緑釉流し、菊文	瀬戸・美濃	連房1・2小期	トチ痕あり、高台欠損
3143	鉄絵鉢	C区01SD4　埋土	(2.8)	—	15.0	0	15	長石釉		瀬戸・美濃	連房1・2小期	
3144	鉄絵鉢	P26・27　埋土(01年)	(4.4)	—	14.0	0	20	長石釉	鉄絵	瀬戸・美濃	連房1・2小期	

第168図　近世の陶器⑩(3135～3144)

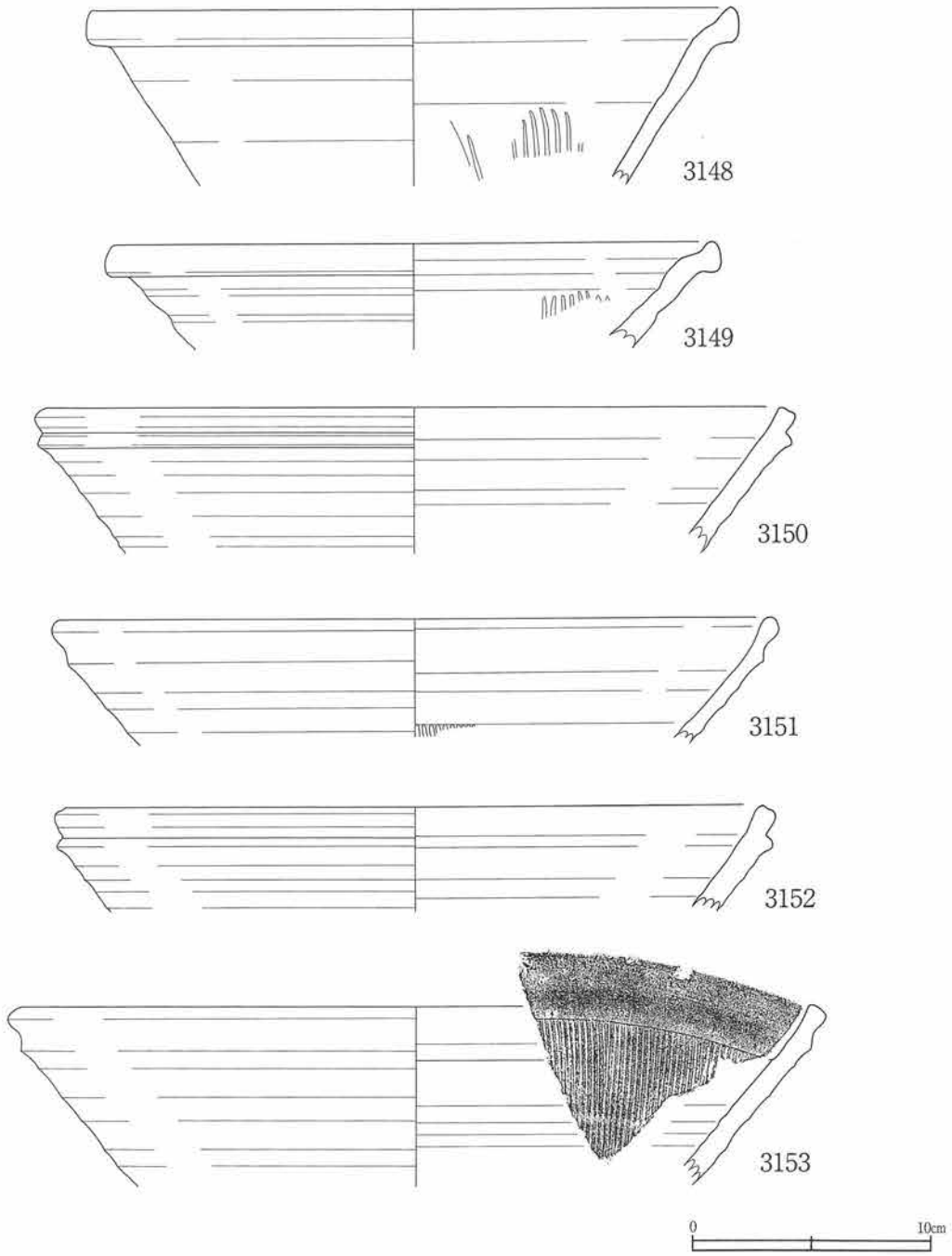






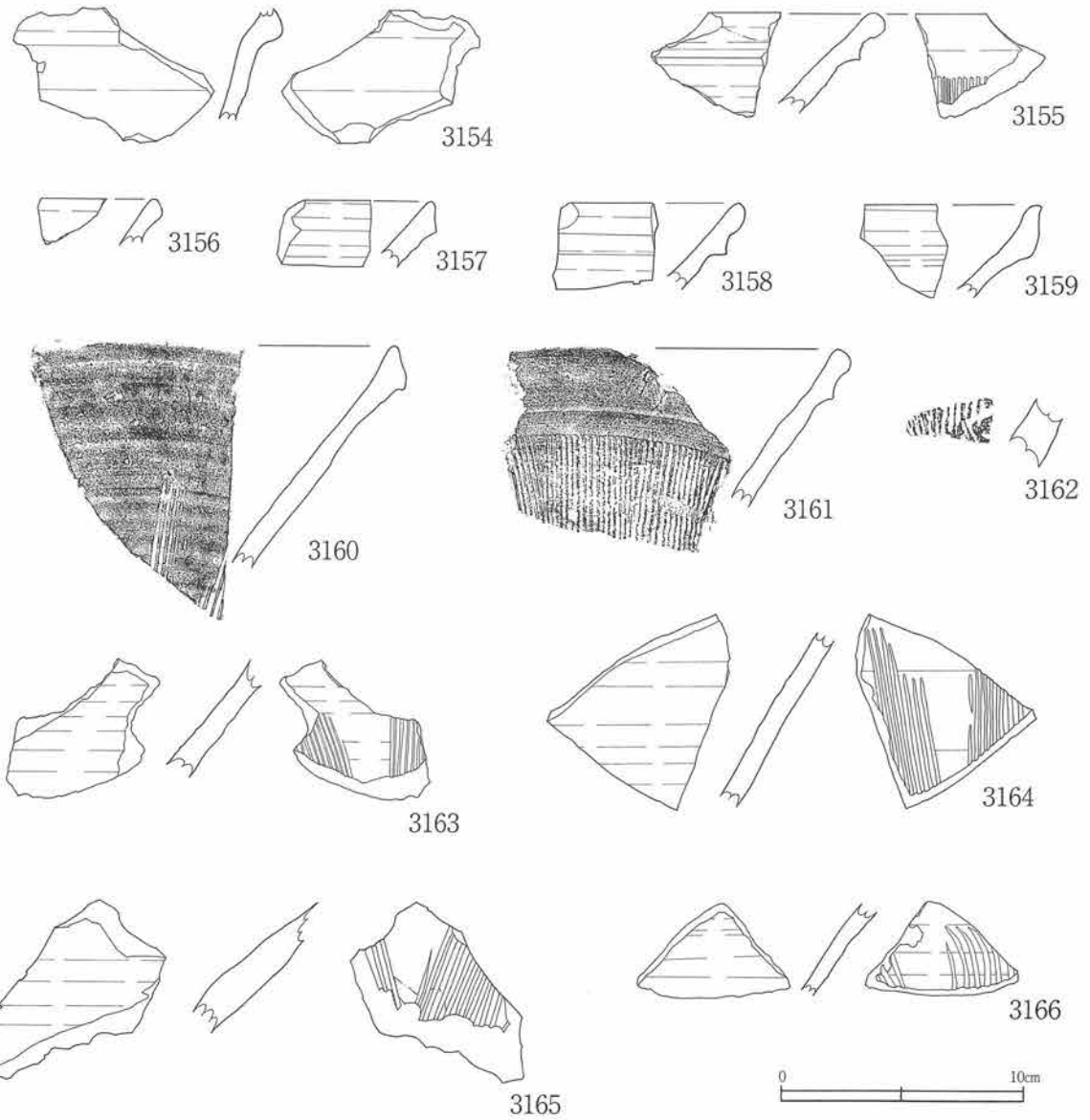
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3145	擂鉢	C区ⅢE佐藤家付近表採	15.5	32.2	14.6	45	60	鉄釉		不明		硬質　A類
3146	擂鉢	C区ⅢE83　2層	16.8	32.7	14.4	10	10	鉄釉		不明		硬質　A類
3147	擂鉢	C区ⅢE83　1～2層	(9.1)	33.0	—	25	0	鉄釉		不明		硬質　A類

第169図　近世の陶器⑪(3145～3147)



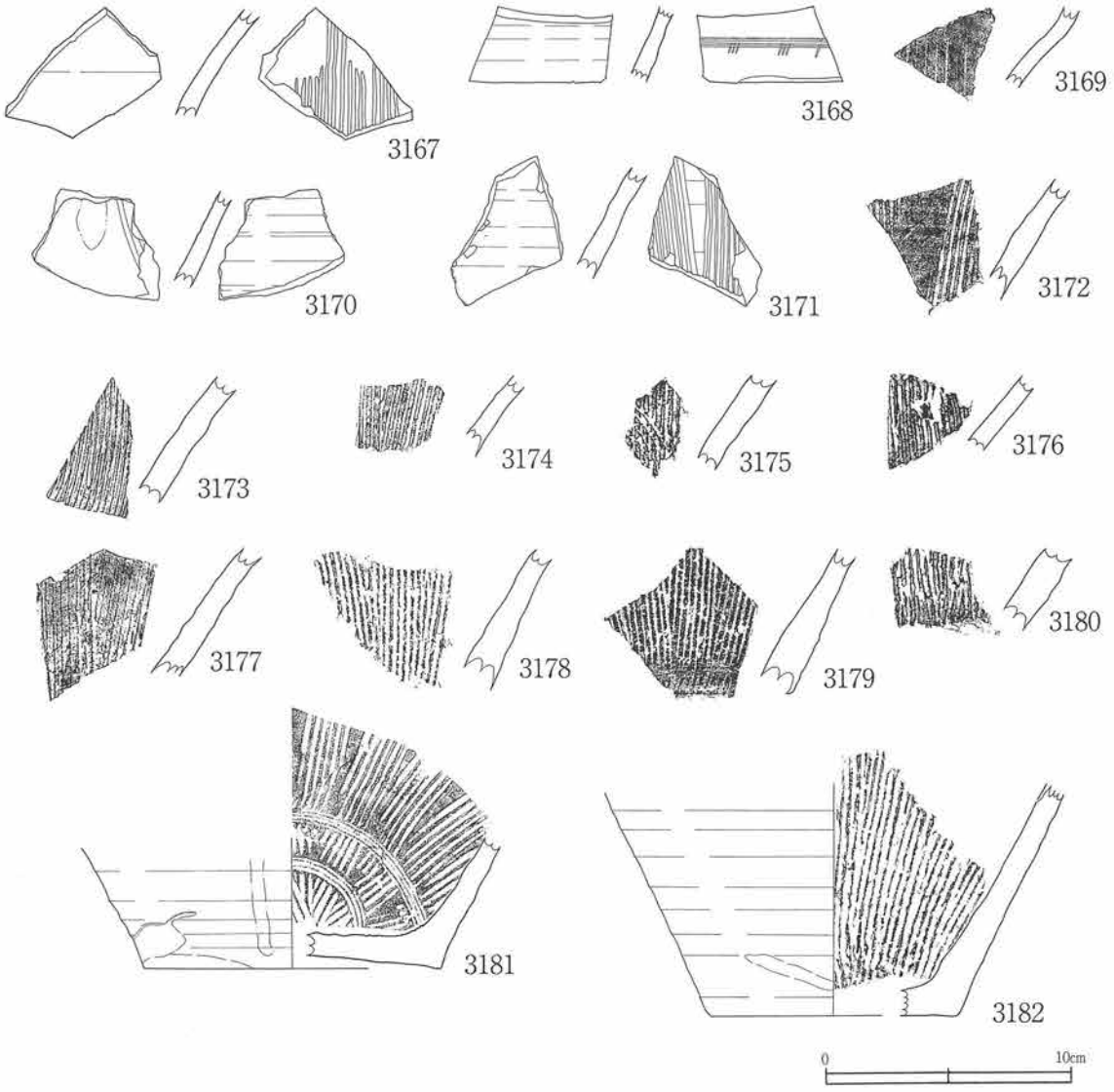
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3148	擂鉢	C区ⅣE22　3層	(7.5)	27.0	—	20	0	錆釉		瀬戸	連房7～9小期	B類
3149	擂鉢	C区ⅣE22　3層	(4.5)	25.4	—	20	0	錆釉		瀬戸か	連房7～9小期	B類
3150	擂鉢	E区ⅠA49	(5.9)	30.8	—	15	0	錆釉		不明		C類
3151	擂鉢	E区西側　斜面中	(5.4)	30.0	—	10	0	鉄釉		不明	近代か	C類
3152	擂鉢	E区SK24　埋土	(4.5)	29.4	—	10	0	鉄釉		不明	近代か	C類
3153	擂鉢	E区旧滝沢家道路側	(7.6)	33.4	—	15	0	鉄釉		不明	近代か	C類

第170図　近世の陶器⑫(3148～3153)



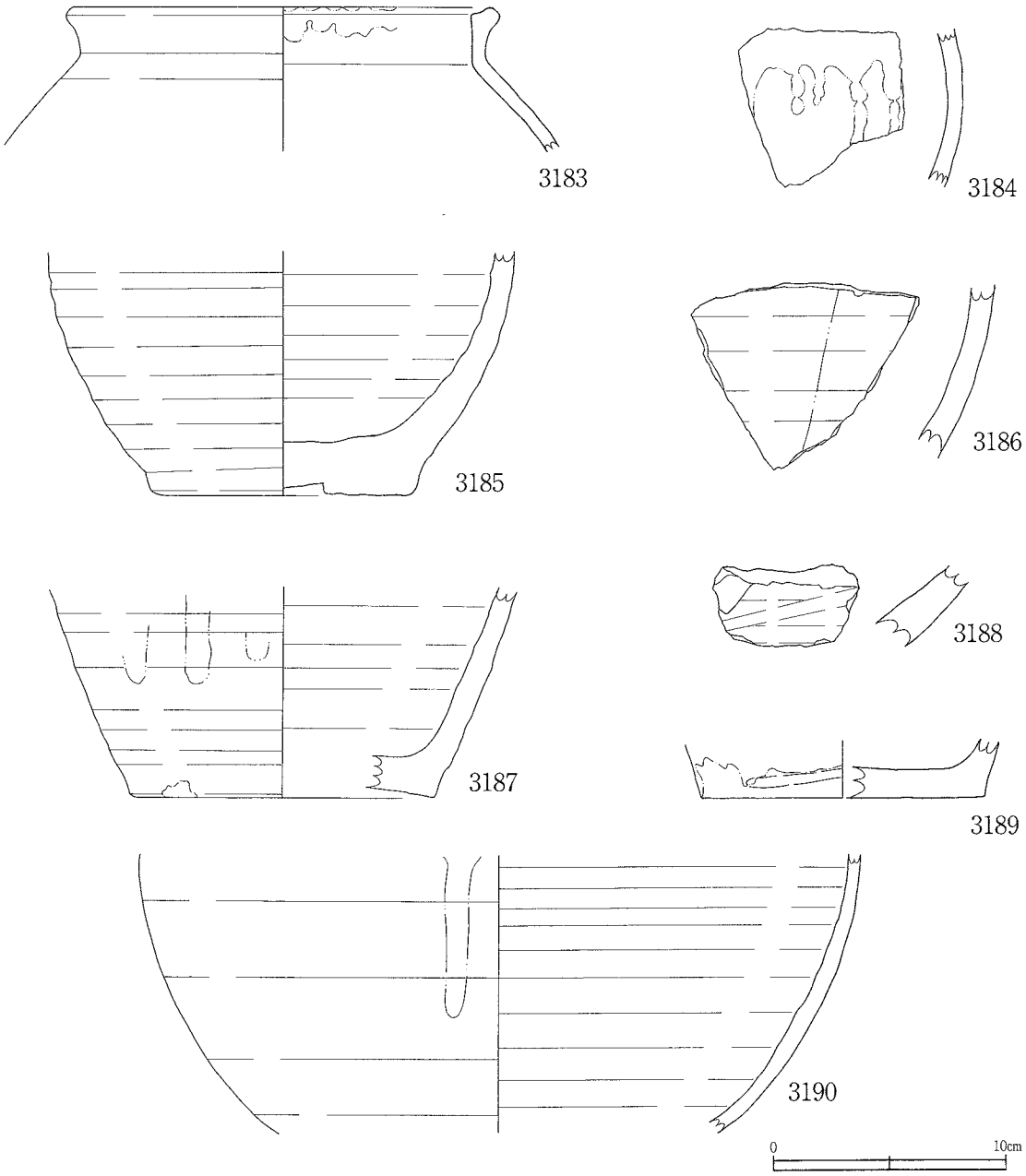
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3154	擂鉢	C区ⅣE22　3層	—	—	—	5	0	錆釉		瀬戸		B類
3155	擂鉢	C区ⅢE67　1層	(4.3)	—	—	5	0	錆釉		在地	近代か	C類
3156	擂鉢	D区P36	(1.9)	—	—	5	0	鉄釉		不明		硬質　A類
3157	擂鉢	E区ⅠA16　攪乱	(2.7)	—	—	5	0	鉄釉		不明	近代か	
3158	擂鉢	E区西側　整地中	(3.6)	—	—	5	0	鉄釉		不明	近代か	
3159	擂鉢	E区ⅠB91　排土中	(3.9)	—	—	5	0	鉄釉		不明	近代か	
3160	擂鉢	D区南側　第1検出面	(9.2)	—	—	5	0	鉄釉		不明		硬質　A類
3161	擂鉢	D区ⅣF27・37　排土中	(6.5)	—	—	5	0	鉄釉		不明	近代か	
3162	擂鉢	E区ⅠA49	—	—	—	0	0	鉄釉		不明	近代	
3163	擂鉢	01SD4　埋土	(4.9)	—	—	0	0	鉄釉		在地		B類
3164	擂鉢	C区ⅢE83　2層	(7.2)	—	—	0	0	鉄釉		不明		硬質　A類
3165	擂鉢	C区ⅢE62　4層	—	—	—	0	0	鉄釉		瀬戸		B類
3166	擂鉢	01SD4　埋土	(3.7)	—	—	0	0	錆釉		瀬戸		B類

第171図　近世の陶器⑬(3154～3166)



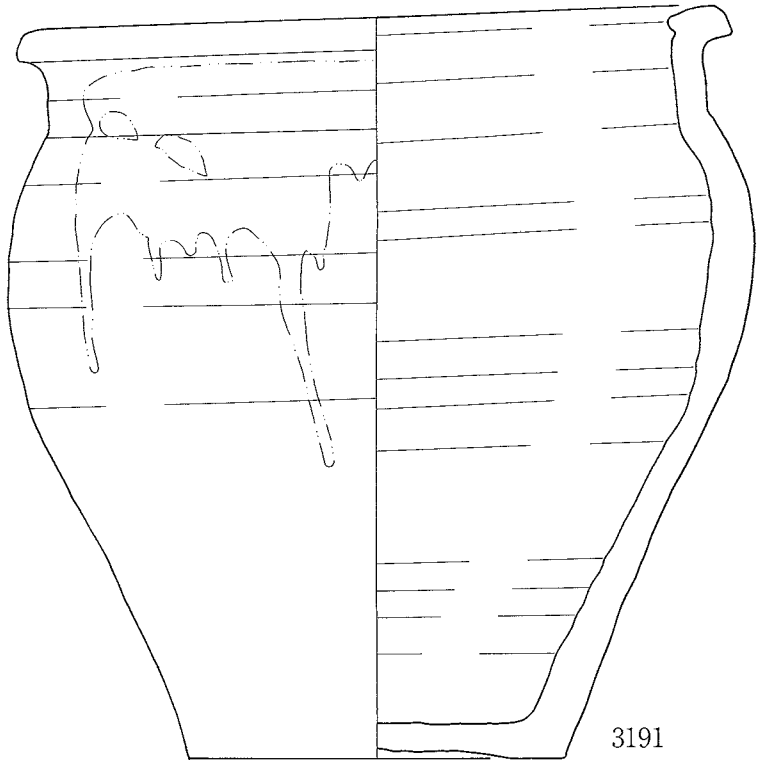
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3167	擂鉢	C区ⅢE83　2層	(4.3)	—	—	0	0	鉄釉		不明		硬質　A類
3168	擂鉢	D区SZ67	(3.0)	—	—	0	0	鉄釉		不明		硬質　A類
3169	擂鉢	E区　攪乱	(3.2)	—	—	0	0	錆釉		瀬戸		B類
3170	擂鉢	01SD4 検出面～埋土上位	—	—	—	0	0	錆釉		瀬戸		B類
3171	擂鉢	E区ⅠA23西側斜面	—	—	—	0	0	鉄釉		不明		硬質　A類
3172	擂鉢	不明	(4.8)	—	—	0	0	鉄釉		不明		硬質　A類
3173	擂鉢	C区　表採	(5.0)	—	—	0	0	鉄釉		不明		硬質　A類
3174	擂鉢	E区SK25　埋土	(3.3)	—	—	0	0	鉄釉		不明	近代か	
3175	擂鉢	E区ⅠA70　表採	(3.9)	—	—	0	0	鉄釉		不明	近代か	
3176	擂鉢	E区ⅠB52 第1検出面	(3.0)	—	—	0	0	鉄釉		不明		硬質
3177	擂鉢	E区SK15　埋土	(5.2)	—	—	0	0	鉄釉		不明	近代か	C類
3178	擂鉢	D区墓地付近　表土	(5.7)	—	—	0	0	鉄釉		不明	近代か	
3179	擂鉢	D区南側　第1検出面	(5.9)	—	—	0	0	無釉		不明		底面摩滅
3180	擂鉢	E区ⅠA　攪乱	(3.3)	—	—	0	0	鉄釉		不明		
3181	擂鉢	E区　排土中	(4.9)	—	12.0	0	20	鉄釉		不明		硬質、底面摩滅
3182	擂鉢	E区西側　斜面中	(9.5)	—	10.0	0	15	鉄釉		不明	近代か	底面摩滅　C類

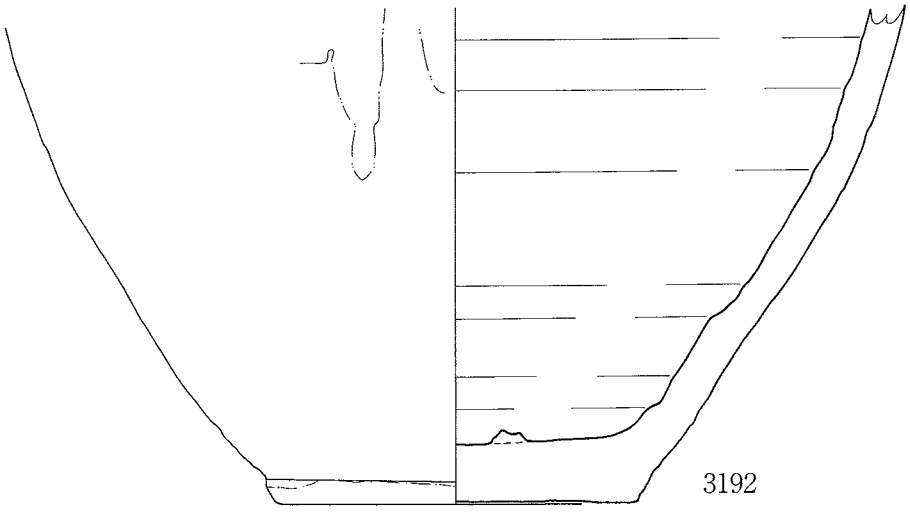
第172図　近世の陶器⑭(3167～3182)



No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3183	甕	C区ⅢE67　1層	(6.2)	17.9	—	10	0	鉄釉		不明		釉薬発色不良
3184	甕	C区ⅢE佐藤家畑　表土	(10.5)	—	10.8	0	100	鉄＋海鼠	海鼠釉流し	東北地方		
3185	甕	D区墓地　表採	(9.1)	—	13.2	0	20	鉄＋灰	灰釉流し	東北地方		
3186	甕	C区ⅢF　表土	(6.8)	—	—	0	0	鉄＋海鼠	海鼠釉流し	東北地方		
3187	甕	C区ⅢF　表土	(7.8)	—	—	0	0	灰＋藁灰	藁灰流し	東北地方		
3188	甕	D区P76	(3.5)	—	—	0	0	鉄＋海鼠	海鼠釉流し	東北地方		
3189	甕	C区ⅣE01　3層	(2.5)	—	12.1	0	40	灰釉		東北地方		
3190	水甕	E区SK８　2層	(11.9)	—	—	0	0	灰＋緑	緑釉流し	東北地方		

第173図　近世の陶器⑮(3183～3190)

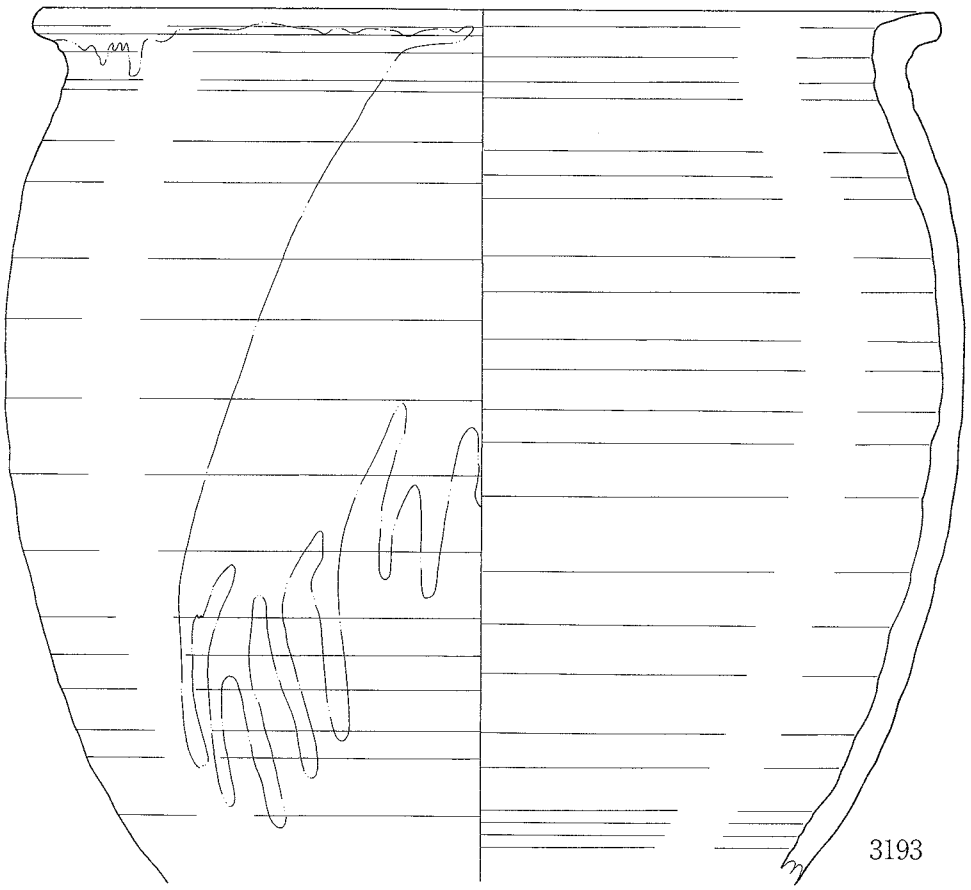




No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3191	大甕	C区岩淵家前　表採	38.8	35.0	20.0	100	100	柿＋鉄	鉄釉流し	東北地方	19世紀代	
3192	大甕	D区東端　表土	(26.2)	—	18.8	0	100	灰＋海鼠	海鼠釉流し	在地	19世紀代	

※縮尺1/4

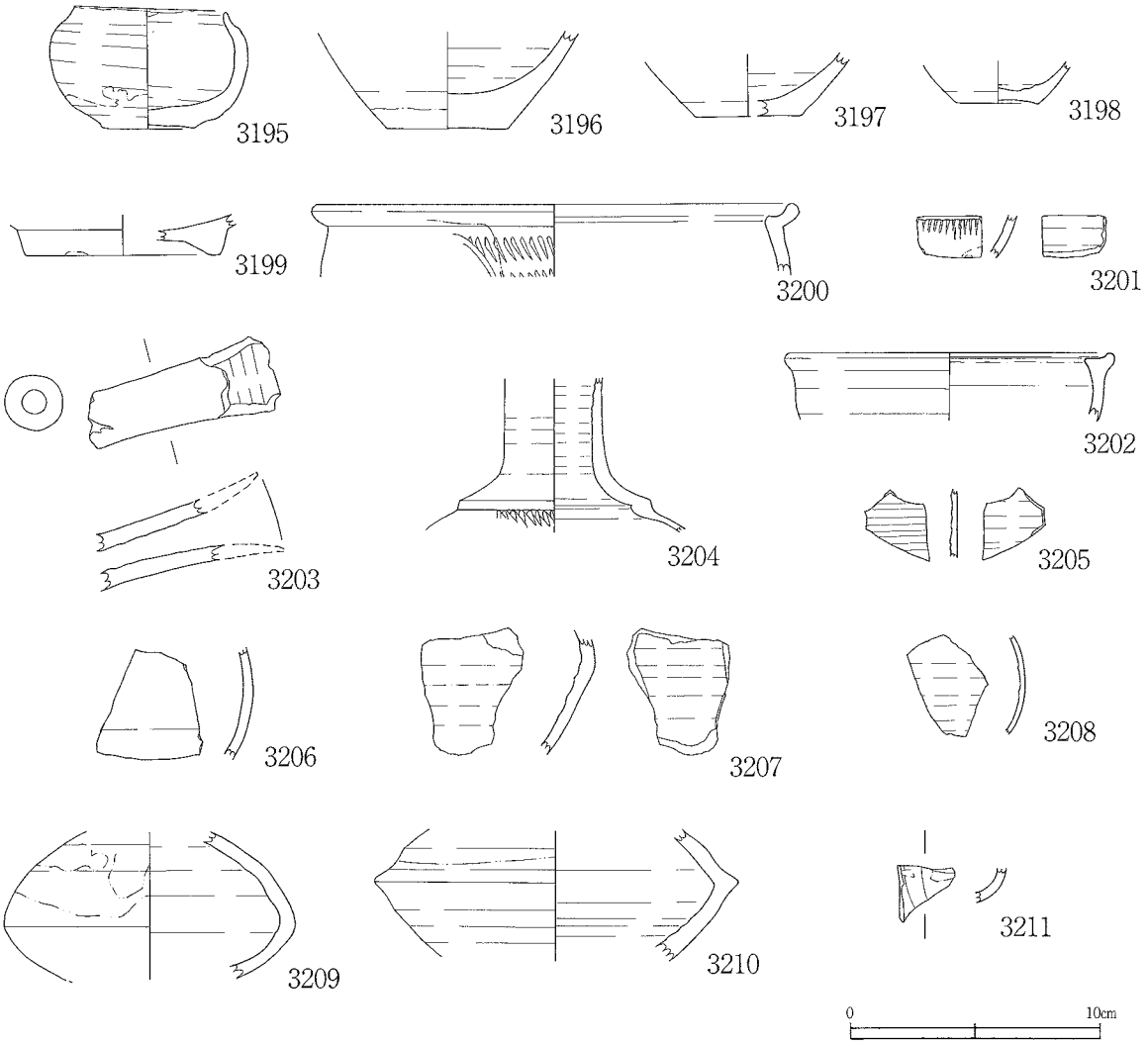
第174図　近世の陶器⑯(3191～3192)



No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3193	大甕	C区岩淵家前　表採	(45.9)	46	—	90	0	鉄＋海鼠	海鼠釉流し	在地	19世紀代	
3194	大甕	E区西側　斜面中	(12.9)	33.2	—	10	0	鉄釉	鉄釉流し	在地	19世紀代	

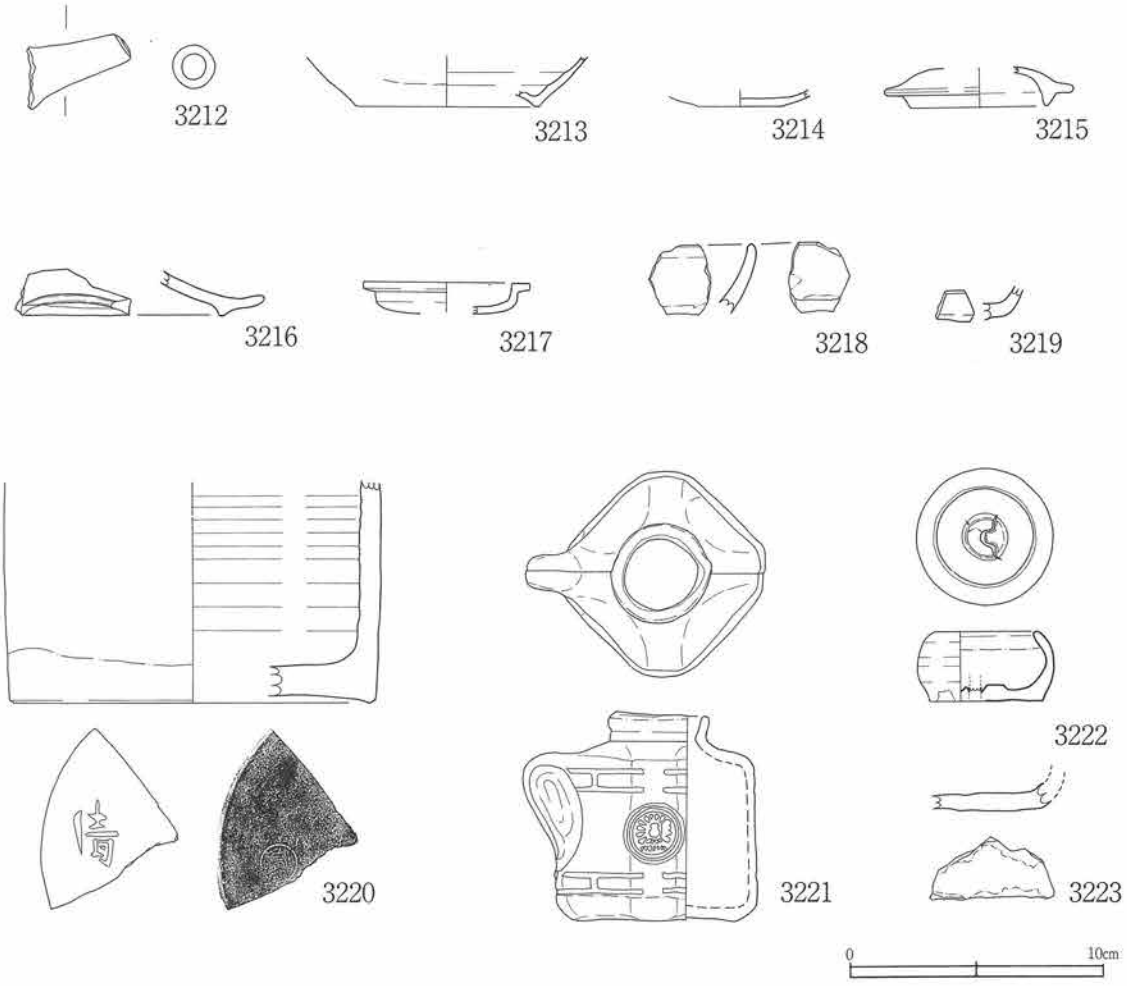
※縮尺1/4

第175図　近世の陶器⑰(3193～3194)



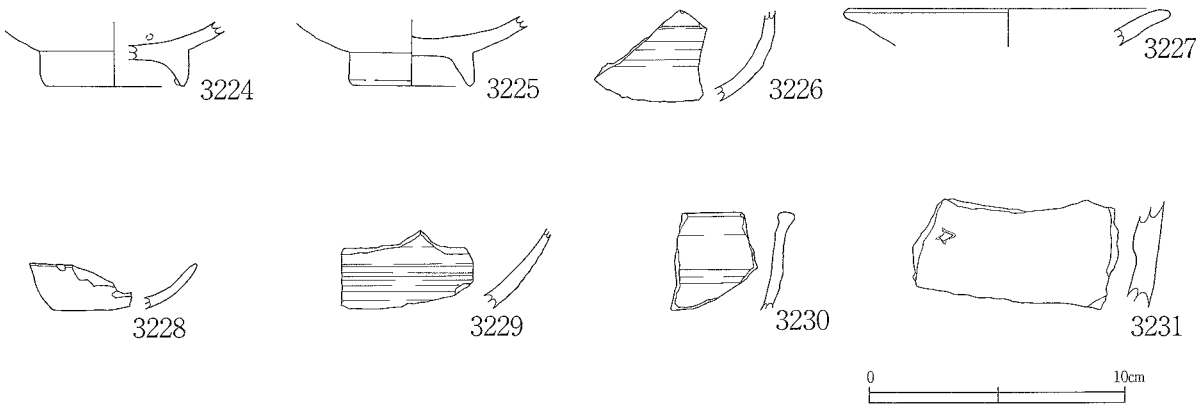
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3195	小壺	B区ⅡD93　攪乱	4.9	6.1	3.8	100	100	藁灰釉		大堀相馬		
3196	小甕	D区ⅢF　表採	(3.9)	—	4.9	0	100	灰釉		在地		
3197	小甕	E区SK26　埋土	(2.2)	—	4.2	0	25	鉄釉		在地		
3198	小甕	E区ⅠA50　第1検出面	(1.8)	—	3.3	0	100	鉄釉		在地		
3199	小甕	D区墓地付近　表採	(1.7)	—	7.8	0	40	灰釉		在地		
3200	行平鍋	E区ⅠA68　攪乱	(2.9)	19.0	—	10	0	灰釉		不明		
3201	行平鍋	D区P32	(1.7)	—	—	0	0	柿釉		不明		
3202	行平鍋	E区西側　斜面中	(2.6)	12.8	—	15	0	灰釉		不明		
3203	焙烙	E区西側　斜面中	—	—	—	0	0	透明釉		不明		柄のみ残存
3204	徳利	E区ⅠZ29　第1検出面	(6.1)	—	—	0	0	鉄＋錆	外：飛鉋文	東北地方		
3205	徳利	E区SK23　埋土	(2.8)	—	—	0	0	緑釉		大堀相馬		
3206	徳利	D区P51　2層中位	(4.4)	—	—	0	0	透明釉		不明		
3207	徳利	E区ⅠA69　第1検出面	(5.0)	—	—	0	0	鉄＋灰		不明		
3208	徳利	E区ⅠA22　第1検出面	(4.0)	—	—	0	0	緑釉		不明		
3209	土瓶か	E区ⅠA03西側斜面	(5.9)	—	—	0	0	透明＋緑＋呉須		不明		
3210	土瓶	E区西側　斜面中	(5.2)	—	—	0	0	鉄＋灰	算盤玉形	不明		
3211	土瓶	E区SK12　埋土	—	—	—	0	0	藁灰釉		相馬		注口部破片

第176図　近世の陶器⑱(3195～3211)



No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3212	土瓶	E区SK12　埋土	—	—	—	—	0	藁＋灰		相馬か		注口部破片
3213	土瓶	D区ⅣF74　1層	(2.0)	—	7.4	—	10	藁＋灰		相馬		
3214	土瓶か	01SX1　検出面～埋土上位	(0.7)	—	3.4	—	25	灰釉		相馬		
3215	蓋	D区ⅣF74　1層	(1.5)	—	3.3	—	25	透明釉		東北地方	近代か	
3216	蓋	E区西側　斜面中	(1.8)	—	—	—	5	透明釉		東北地方		変形著しい
3217	蓋	C区ⅢE67　1層	(1.3)	6.6	—	5	0	鉄釉		東北地方		落とし蓋
3218	向付	01SX3　埋土下位	(2.7)	—	—	15	0	鉄＋長石		美濃		鼠志野
3219	向付か	E区SK1（SB1）	(1.2)	—	—	0	0	長石釉		美濃		
3220	花生か	E区滝沢家道路側	(8.8)	—	14	0	25	灰釉		不明		「清」の銘、スタンプあり
3221	汽車茶碗	C区岩漏家前　表採	8.3	3.6	6.5	100	100	灰釉		不明		型造り
3222	ひょうそく	D区SZ1	2.8	4.0	4.5	100	100	透明釉		不明		
3223	不明	E区滝沢家畑	—	—	—	0	0	長石釉		美濃か		

第177図　近世の陶器⑲（3212～3223）



No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
3224	碗	B区SZ117	(2.5)	—	5.3	0	40	灰釉		肥前		底部破片
3225	碗	D区Ⅰ層盛土内	(2.6)	—	4.6	0	40	灰釉		肥前		底部破片
3226	碗	表土	—	—	—	0	0	灰釉		大堀相馬		体部破片
3227	碗	C区ⅢE08　第1検出面	(1.5)	12.2	—	20	0	灰釉		瀬戸・美濃	大窯4期	口縁部破片
3228	碗	B区SZ118	(1.9)	—	—	5	0	灰釉		大堀相馬	18世紀代	五弁花状に口縁部形成
3229	碗	表土	(3.2)	—	—	0	0	緑＋灰		肥前		体部破片
3230	碗	B区SZ113	(3.9)	—	—	5	0	鉄＋海鼠		不明		口縁部破片
3231	碗	表土	(4.2)	—	—	0	0	無釉		常滑		胴部破片

第178図　近世の陶器⑳(3224～3231)

5　近　世　磁　器（第179～190図、写真図版181～193）

磁器類は、白色の胎土に呉須あるいは人工コバルトで絵付が施され、さらに全面に透明釉を施す単色染付製品が主体をなす。この他にも瑠璃釉や青磁釉製品も出土しているがごく少数である。産地には肥前、瀬戸、東北地方（平清水系含む）がある。

茶碗・湯呑類（4001～4058・4160～4162）

4001～4023はいずれも肥前産と考えられる製品である。4001・4002は丸碗の底部破片で、いずれも底部外面に「太明年製」の銘文が書かれている。4003～4009・4013・4015はいわゆる「くらわんか手」の丸碗である。4003・4004・4008・4009・4013は小振りの碗で、器壁は厚く口縁部が直立気味に立ち上がる。4005～4007・4015は大振りの碗で、器壁は薄く体部は丸味をもつ。体部外面には雪輪草花文（4003・4004）・二重網目文（4005）・海浜風景文（4006）などが描かれる。4010～4012・4014は広東碗で、体部が深く口縁部が直立する。体部外面に圏線と草花文などの染付が描かれる。4016・4017は端反碗である。いずれも器壁は薄く、外面に草花文が描かれる。4018～4023はいずれも底部から体部にかけての破片であり、器形は特定できない。基本的に草花文が描かれるが、4022のように無文で施釉も全面にしないものがある。

4024～4034・4160は瀬戸産と考えられる製品である。4024は広東碗で、体部はわずかに丸味をもって立ち上がる。高台は高く直立するが、高台内は削り込まれていない。体部外面には桐絵が描かれる。4025～4034・4160は端反碗で、口径11.0cm前後のA類（4025～4032・4160）と口径8.0cm前後のB類（4033・4034）がある。A類は、4025のように体部下半の器壁が厚く口縁部の外反が明瞭なものから、4030のように口縁部の外反が非常に弱く、体部下半から口縁部までが直線的なものまである。いずれも付高台で、直立するものとハの字状に開くものがあり、さらに高台内が削り込まれるもの（4028）がある。B類は、器壁が薄く口縁部の外反は明瞭である。A類は体部外面に麦藁手（4025）・草花文系（4026・4027）・楼閣山水文（4028）などが描かれ、口縁部内面に圏線あるいは縁帯、底部内面に波（4025・4028）や帆架舟（4026）などが描かれるものがある。B類には口縁部外面に縁帯、体部外面に木葉文が描かれるが、内面には何も描かれない。

4035～4048は東北地方産（平清水系）と考えられる製品である。ほとんどが丸碗と考えられるが、4044は広東碗の可能性がある。体部下半の器壁は厚く、口縁部が直立気味になるものが多く、口縁端部は尖り気味となる。高台は直立して高台内が削り込まれるものが多いが、4041や4042のように小型の三角高台もある。ただし、4040は高台脇に明瞭な稜をもち、体部は直線的に開くことからやや大きめの猪口である可能性もある。体部外面には草花文（4035・4036）・虫篭文（4037・4045）などが描かれるが、4043・4044のように無文のものもある。また、底部内面には舟あるいは波（4036）や水仙（4038）などが描かれている。なお、4040には鉄釉、4042には銅緑釉が施されている。4161は切込窯産と考えられる端反碗で、外面には海浜風景文が描かれる。

4049は瀬戸産の端反湯呑である。体部下半の器壁が厚く、口縁部は外反して端部は指押さえなどにより輪花状に成形される。高台は低めの付高台で、高台内は深く削り込まれる。体部外面には4方向に草花文が描かれる。4050は東北地方産の蕎麦猪口である。底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、口縁端部は水平に整えられたのち、押圧によってわずかに輪花状に成形される。体部外面には蛸唐草文、口縁部内面には四方襷文が描かれる。4162は筒形湯呑で、正面に海浜風景文、裏面に兎が描か

れる。

4051～4054は肥前産の端反小杯である。4051は体部がハの字状に開きながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。高台は、内反りとなる削り出し高台である。4052は、器壁が厚く体部は丸味をもって立ち上がる。口縁部の外反は弱いが、口縁部内面は稜を有するほど屈曲が強く、口縁端部は尖る。高台は低い付高台で、高台脇が垂直に削り込まれる。4053・4054は、体部がハの字状に開きながら立ち上がり、口縁部はナデ調整によってわずかに外反する。高台は低い付高台で、断面形は三角形である。4051・4052は無文、4053・4054はそれぞれ体部外面に海浜風景文と羽根文が描かれる。

4055～4058は小碗である。4055は筒形の小碗で、体部は直線的に立ち上がって口縁部へと至る。体部外面には草花文が描かれる。4056は体部が丸味をもち、口縁端部は尖る。体部外面には圏線と草花文が描かれる。4057・4058は扁平な小碗で紅猪口とも呼ばれる。体部下方が丸味をもち、口縁部はやや開き気味になる。高台は低い付高台で、断面形は方形である。体部外面には笹絵が描かれる。

皿類（4059～4118・4148～4154）

4059～4094は、肥前産と考えられる皿類である。

4059～4067・4148は紅皿である。いずれも貝殻状に型押し成形されている。体部形状は、器壁が薄く直線的に開くもの（4059・4060）と器壁が厚く丸味をもって立ち上がるもの（4064・4066）の2種類がある。いずれも高台は非常に小さく、体部外面中央から内面全体に透明釉が施される。

4068は、体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部は短く外反する。高台は付高台で、断面形は逆台形である。外面は体部下半に削り調整、上半にナデ調整が施される。染付は口縁部内面には捩り文が5単位、2条の圏線を挟んで体部内面中央には草花文が描かれる。

4069・4070は色絵製品である。4069は体部が内彎しながら開き気味に立ち上がり、口縁端部は三日月状に尖る。高台は付高台で、断面形は逆台形である。高台は内外面ともに削り調整が施される。体部内面には色絵で草花文が描かれ、中央部は布などで蛇ノ目状に釉剥ぎが行われている。4070は大皿で、体部は浅く外方に開く。高台は端部が丸味をもつ断面三角形の付高台で、高台内は削り込まれる。体部内面には色絵が描かれ、さらに一部円周状に釉剥ぎが行われる。

4071・4072・4077は「くらわんか手」の皿である。いずれも4068～4070と比べて絵付けの筆のタッチは粗い。また、4072のように削り出し高台のものも確認できる。染付には海浜風景文（4071）・草花文（4072）・二重網目文（4077）などが確認できるようになる。

4073～4076は蛇ノ目釉剥ぎ皿である。いずれも高台脇が削り込まれ、体部は内彎気味に外方に開く。高台は内外面とも削り調整が施されており、断面形は逆台形ないし三角形である。内面全体と高台脇にかけて透明釉が施され、内面には蛇ノ目状に釉剥ぎされた痕跡が明瞭に認められる。

4078は端反皿である。器高は低く扁平で、体部下半の器壁が厚く口縁端部は引き出されて外反する。高台は断面形が逆三角形状で、高台外面は大きく外傾する。4079・4083・4084は丸皿で、体部下半が丸味をもって立ち上がり口縁部は直立気味となる。全体として器壁が厚く、口縁端部は丸く収められる。高台は低く、断面形は逆三角形である。これらはいずれも体部内面に草花文、外面には蔓草あるいは唐草文が描かれる。4080・4081は、体部下半は丸味をもつが、上半は直線的に立ち上がる。口縁部はナデ調整によりわずかに外方に開く。染付は、体部内面に草花文と花弁文、外面に蔓草が描かれ、さらに高台内に「筒江」の銘款が施される。

4082は小皿である。高台脇は水平に開き、外方に開きながら口縁部へ至る。体部内面には花鳥文と草花文、外面には唐草文が描かれる。4085～4087・4091はいずれも体部内面に型紙で絵付けを行う丸

皿である。底部の器壁は厚いが、口縁部に向かうにつれて薄手となっていく。高台は低く、断面形は逆三角形である。なお、体部外面には唐草文、高台脇には圏線が描かれる。

4095～4104は寿文皿である。寿文皿は木型打ち込みによる寿文と透明釉というシンプルな構成をしているため、産地同定は困難である。したがってここでは器形の特徴によってのみ細分を行う。今回確認できたものは３類に分類可能である。A類は口径12.0cm、器高2.0cm以上のもので、4095が該当する。B類は口径12.0cm前後、器高2.0cm以下の扁平なもので、4098・4099・4100などが該当する。C類は口径10.0cm前後のもので、4101・4102が該当する。いずれも高台脇は内彎し、口縁部は大きく外反する。ただし、B類の口縁部は外反というよりも外方に引き出されるように成形されている。

4106～4110・4114は平清水系を含む東北地方産の皿である。丸皿と端反皿が確認されているが、全形を知りうるものは4114のみである。肥前産にも同型の器形があるが、染付には人工コバルトを使用しており、文様も異なるため、判別は可能である。

4111は肥前産の青磁大皿あるいは盤である。幅広角柱状高台で、体部は直線的に外方に開く。4112・4115・4153は肥前産の大皿である。4115はおそらく口径30cmを超える大型のものと思われる。体部内面に海浜風景文、高台内に「太□□□（太明年製か）」の銘が描かれる。4113は体部内面に陽刻が施される。4116は盤の体部片で、内面には市松模様の染付が描かれている。4153は輪花大皿である。体部はわずかに丸味をもって立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びる。口縁部から体部にかけてヘラ状工具でソギが入れられることによって輪花を成形している。

4117・4118・4151は型打皿である。内外面とも型押しによって成形されており、平面形は方形である。高台の断面形は四角形である。4117は体部内面に蛸唐草文、底部内面に四弁花文が型押しされており、そのうえに呉須が施されている。4151は底部内面に菊文が型押しされており、全体に透明釉が施される。4118も型押し成形による型打皿で、平面形は扇形である。高台は断面形が方形で、体部と異なり長方形状に巡る。底部内面には草花文が描かれているが、染付・釉薬ともに発色不良である。

鉢類（4119～4124）

鉢類には筒形香炉・深鉢・大鉢がある。

4119～4121は筒形香炉である。いずれも体部外面から口縁部内面にかけて釉薬が施される。4119は体部がわずかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は内側に折り返されて端部は水平に整えられる。4120・4121はいずれも体部が直立するタイプの鉢である。4120は口縁部が内側に折り返されて玉縁状になる。4121は底部内面が削り込まれて蛇ノ目凹型高台となっている。なお、4119は体部外面に丸文を描いたのちに透明釉、4120・4121には青磁釉が施される。

4122は倒卵形の香炉と考えられる製品である。体部外面に蔓草が描かれ、底部外面周辺を除いて透明釉が施される。

4123は折縁深鉢である。体部は直線的に斜め上方へ開き、口縁部直下で段を形成して口縁部は受口状となる。体部外面に蔓草、内面に唐草文が描かれる。4124は大鉢である。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外折して水平気味に開く。口縁部内面に葡萄唐草文が描かれる。

瓶類（4125～4136）

瓶類には徳利と水注がある。形態から、Ⅰ類（御神酒徳利）・Ⅱ類（すず徳利）・Ⅲ類（燗徳利）に分類することができる。

4125・4126は徳利Ⅰ類である。体部下半に最大径をもつ倒卵形状で、頸部は細く直立する。高台は

端部が丸い方形で、砂目の付着もみられる。4125は、頸部成形の際の絞り痕が明瞭で、口縁部はハの字状に開いて端部は水平に整えられる。4126の体部及び頸部内面は無釉で、全面にエゴテによる成形痕が明瞭に認められる。

4127～4131は徳利Ⅱ類である。今回は大型で体部が球胴形（4127・4128・4131）あるいは倒卵形（4129・4130）のものをこの類型にしている。いずれも体部破片のため、頸部及び口縁部の形状については不明である。徳利Ⅰ類と同様、体部内面は無釉でエゴテによる成形痕が明瞭に認められる。なお、4132は球胴形の体部に厚手の高台が取り付けられる徳利で、いわゆる「すず徳利」の一般的な特徴を有している個体である。

4132～4135は徳利Ⅲ類である。無高台で体部が直立するものをこの類型にしている。Ⅰ・Ⅱ類に比べて器壁が薄く、内面の成形痕も明瞭である。底部はいずれも平底で、釉薬は施されていない。なお、Ⅱ類同様頸部及び口縁部の形状については不明である。

4136は水注の吊り手部分の破片である。本来は半円状のものと考えられ、断面形は逆台形である。外縁部にのみ蛸唐草文が描かれる。

蓋類（4137～4142）

4137～4139・4142は碗類の蓋と考えられる。笠部は4137のみ直線的に開くが、その他はドーム状である。口縁端部は尖り、いずれも内面には縁帯が描かれる。つまみ部は若干外方に開きながら立ち上がる。笠部外面には鶴と雲（4137）・草花文（4138・4139・4142）が描かれ、全面に透明釉が施される。なお、4138・4139には内面中央に変形した帆架舟が描かれる。

4140・4141は土瓶や急須の蓋と考えられる。4140は笠部が扁平で、外面には松竹文が描かれる。4141は宝珠状のつまみ部のみの破片である。色絵製品で、青・緑・黄色の顔料が掛け分けられている。いずれもかえし部は欠損のため不明である。

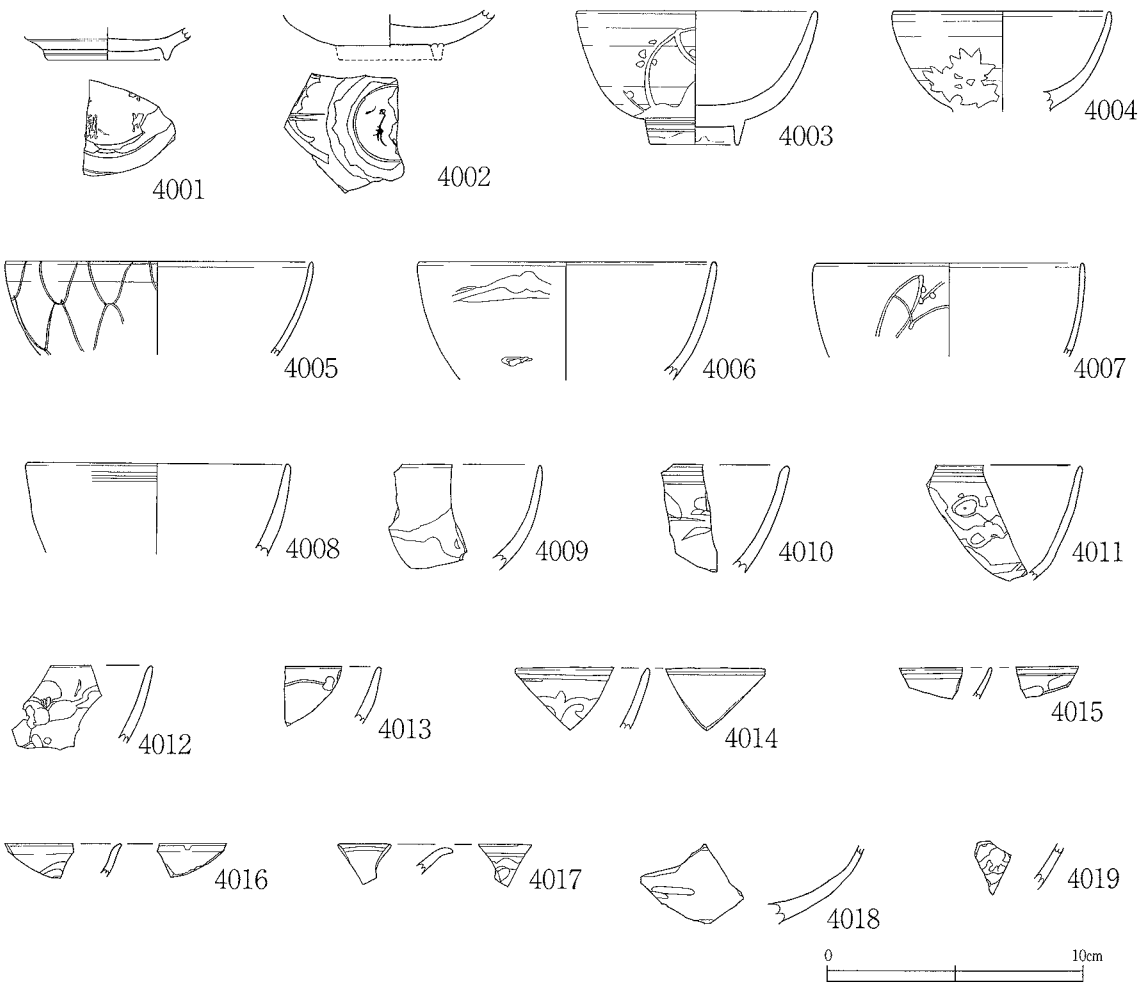
その他（4143～4147）

4143は小壺である。口縁部は短く直立し、体部は扁平な球状になると思われる。体部外面から口縁部内面にかけて透明釉が施される。

4144は餌鉢である。体部はほぼ直立し、口縁部は受け口状となる。口縁部の一端に紐通し用の耳が取り付けられる。底部外面を除いて透明釉が施される。

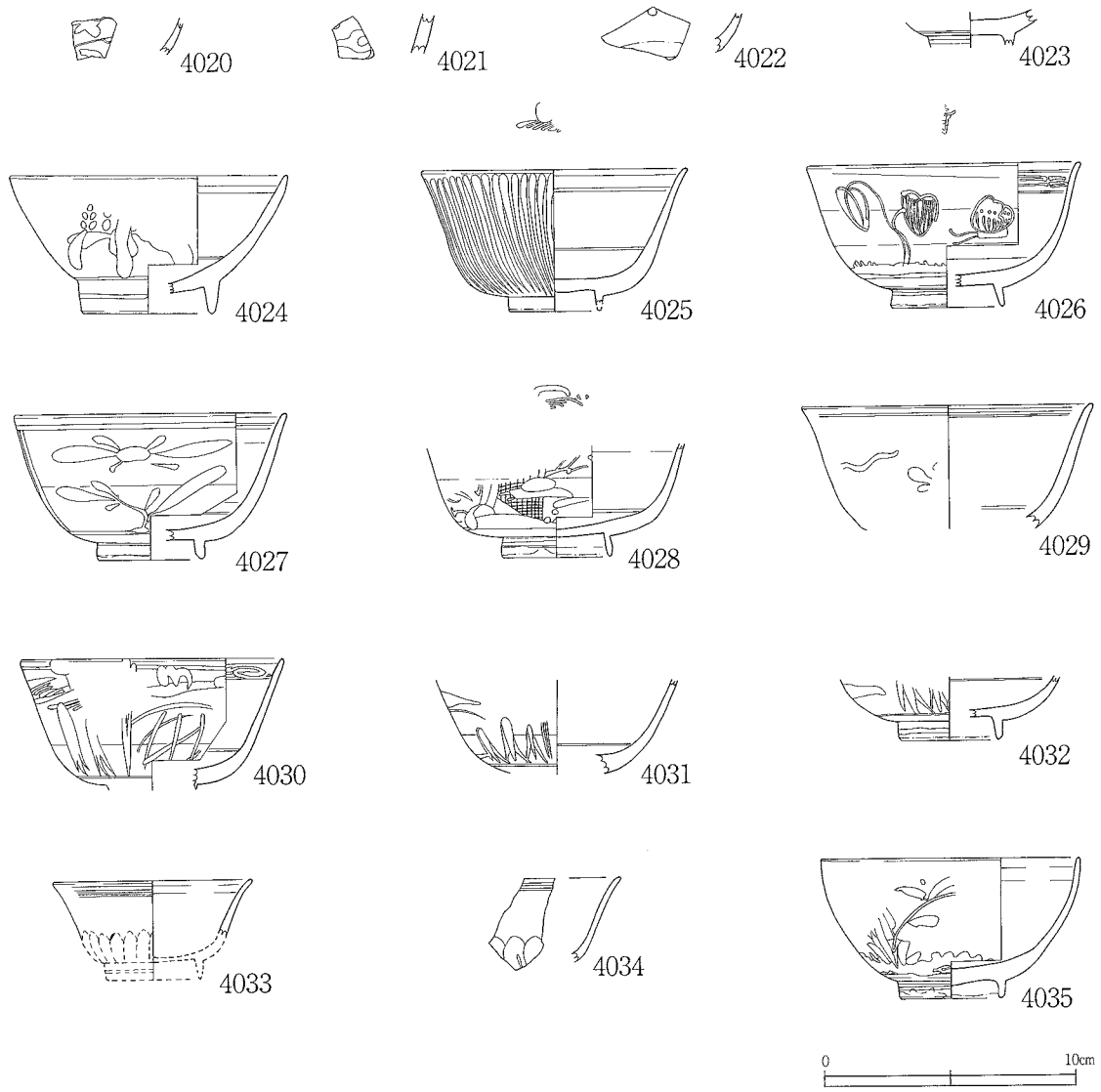
4145・4146は蓋付の碗形合子で、一対になるものである。4145は笠部がドーム状で、口縁部にはかえしが形成される。つまみには細い板状のものが取り付けられている。笠部外面には草花文と雷文、内面には水仙が描かれ、笠部外面には瑠璃釉、かえし部を除いて透明釉が施される。4146は体部下半は丸味をもつが、上半は直立して口縁部へと至る。全体として器壁は薄く、口縁端部は尖る。高台は蛇ノ目凹型高台であるが、釉剥ぎは行われていない。体部外面には4145と対応する配置で草花文と雷文が描かれ、高台内には「渦福」の銘款が施される。体部外面には瑠璃釉、内面及び高台内には透明釉が施される。なお、4147の体部外面には金泥などで上絵付けとして草花文が描かれていた痕跡が残されている。

4147は獅子面形の根付である。内部中空の型造り成形で、側面には接合部の痕跡が認められる。顔面部には鉄釉が施され、さらに全面に透明釉が施される。背面には紐通し用の孔が２孔開けられている。（村田）



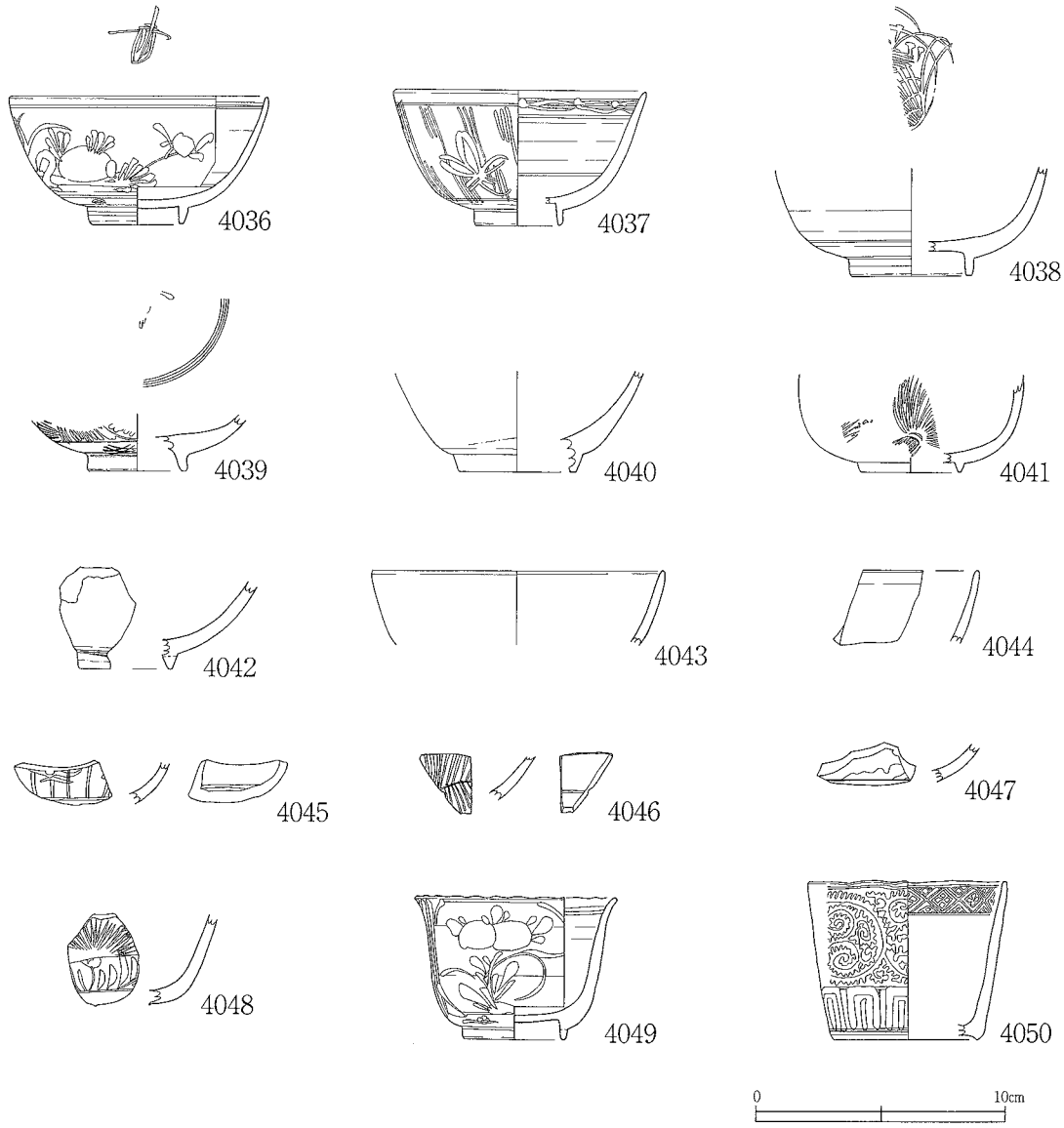
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4001	丸碗	C区ⅢE81　1層	(1.5)	—	(4.2)	0	0	透明釉	海浜風景文	肥前	大橋Ⅳ期	「□□年制」銘、高台欠損
4002	丸碗	01SD4　埋土中～下位	(1.3)	—	4.6	0	5	透明釉	不明	肥前	大橋Ⅳ期	「大明成化年製」銘
4003	丸碗	D区　第1検出面攪乱	5.3	9.2	3.5	20	10	透明釉	雪輪草花文	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4004	丸碗	D区SD6　埋土	(4.0)	—	—	45	0	透明釉	紅葉	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4005	丸碗	B区ⅡD65　攪乱	(3.7)	12.0	—	20	0	透明釉	一重網目文	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4006	丸碗	C区ⅣE01　4層	(4.7)	11.6	—	20	0	透明釉	海浜風景文	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4007	丸碗	C区ⅢE57　1層	(3.7)	10.4	—	20	0	透明釉	雪輪草花文	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4008	丸碗	01SX1　埋土中位	(3.6)	10.4	—	5	0	透明釉	圏線	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4009	丸碗	D区P117　埋土	(4.1)	10.2	—	5	0	透明釉	草花文か	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4010	広東碗	P7　埋土(01年)	(4.2)	8.6	—	5	0	透明釉	草花文	肥前		
4011	広東碗	E区ⅠA27　攪乱	(4.5)	—	—	5	0	透明釉	草花文	肥前		
4012	広東碗	C区ⅢE73　1～2層	(3.1)	—	—	5	0	透明釉	草花文	肥前		
4013	丸碗	D区ⅣF95　1層	(2.2)	—	—	5	0	透明釉	雪輪草花文	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4014	広東碗	B区墓地　表採	(2.4)	—	—	5	0	透明釉	草花文	肥前		
4015	丸碗	E区P20埋土(SB1)	(1.2)	—	—	5	0	透明釉	草花文か	肥前		
4016	端反碗	E区SK21　埋土	(1.4)	—	—	5	0	透明釉	不明	肥前		
4017	端反碗	D区P103　埋土	—	—	—	5	0	透明釉	草花文	肥前		
4018	碗	01SX3　埋土上位	(3.1)	—	—	0	0	透明釉	海浜風景文か	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4019	碗	E区SK14　埋土	(1.8)	—	—	0	0	透明釉	草花文か	肥前		

第179図　近世の磁器①(4001～4019)



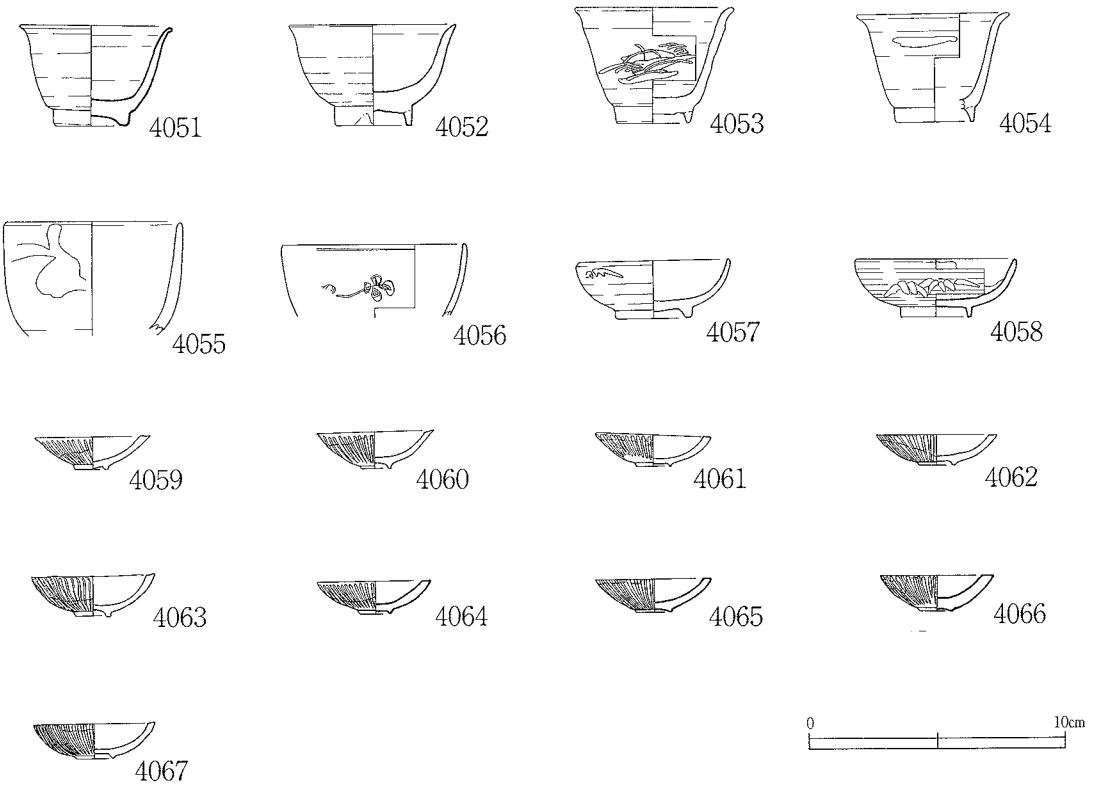
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4020	碗	E区ⅠA70　表採	(1.5)	—	—	0	0	透明釉	草花文	肥前		
4021	碗	D区墓地　表採	(1.5)	—	—	0	0	透明釉	草花文	肥前		
4022	碗	D区SZ89	(1.5)	—	—	0	0	透明釉		肥前		
4023	碗	C区ⅢD36　1層下	(1.5)	—	(3.4)	0	25	透明釉	圏線	肥前		くらわんか手、高台欠損
4024	広東碗	E区西側　斜面中	5.6	11.0	7.2	5	30	透明釉	花	瀬戸	連房10小期	
4025	端反碗	E区西側　斜面中	5.7	10.8	(3.8)	50	0	透明釉	蕨麦手	瀬戸	連房10・11小期	見込：波、高台欠損
4026	端反碗	E区道路　粗掘時	5.8	10.8	4.4	25	45	透明釉	草花文	瀬戸	連房10・11小期	見込：帆架舟か
4027	端反碗	E区ⅠZ29　検出面	5.9	10.8	4.2	45	45	透明釉	草花文	瀬戸	連房10・11小期	
4028	端反碗	C区ⅢE旧佐藤家　表採	(4.5)	—	4.4	0	70	透明釉	楼閣山水文	瀬戸	連房10・11小期	見込：波
4029	端反碗	D区墓地　表採	(5.0)	11.6	—	20	0	透明釉	草花文	瀬戸	連房11・12小期	
4030	端反碗	C区ⅢE旧佐藤家　表採	(5.1)	10.6	—	35	0	透明釉	海浜風景文	瀬戸	連房11・12小期	
4031	端反碗	E区道路　粗掘時	(3.7)	—	—	0	0	透明釉	海浜風景文	瀬戸	連房11・12小期	
4032	端反碗	E区西側　斜面中	(2.5)	—	3.9	0	40	透明釉	海浜風景文	瀬戸	連房11・12小期	
4033	端反碗	D区ⅣF95　1層	(2.3)	8.0	—	20	0	透明釉	木葉文	瀬戸	連房10小期	
4034	端反碗	D区ⅣE78　1層	(3.4)	—	—	5	0	透明釉	木葉文	瀬戸	連房10小期	
4035	丸碗	B区墓地　表採	5.70	10.3	4.0	5	90	透明釉	草花文	東北地方	19世紀代	

第180図　近世の磁器②(4020～4035)



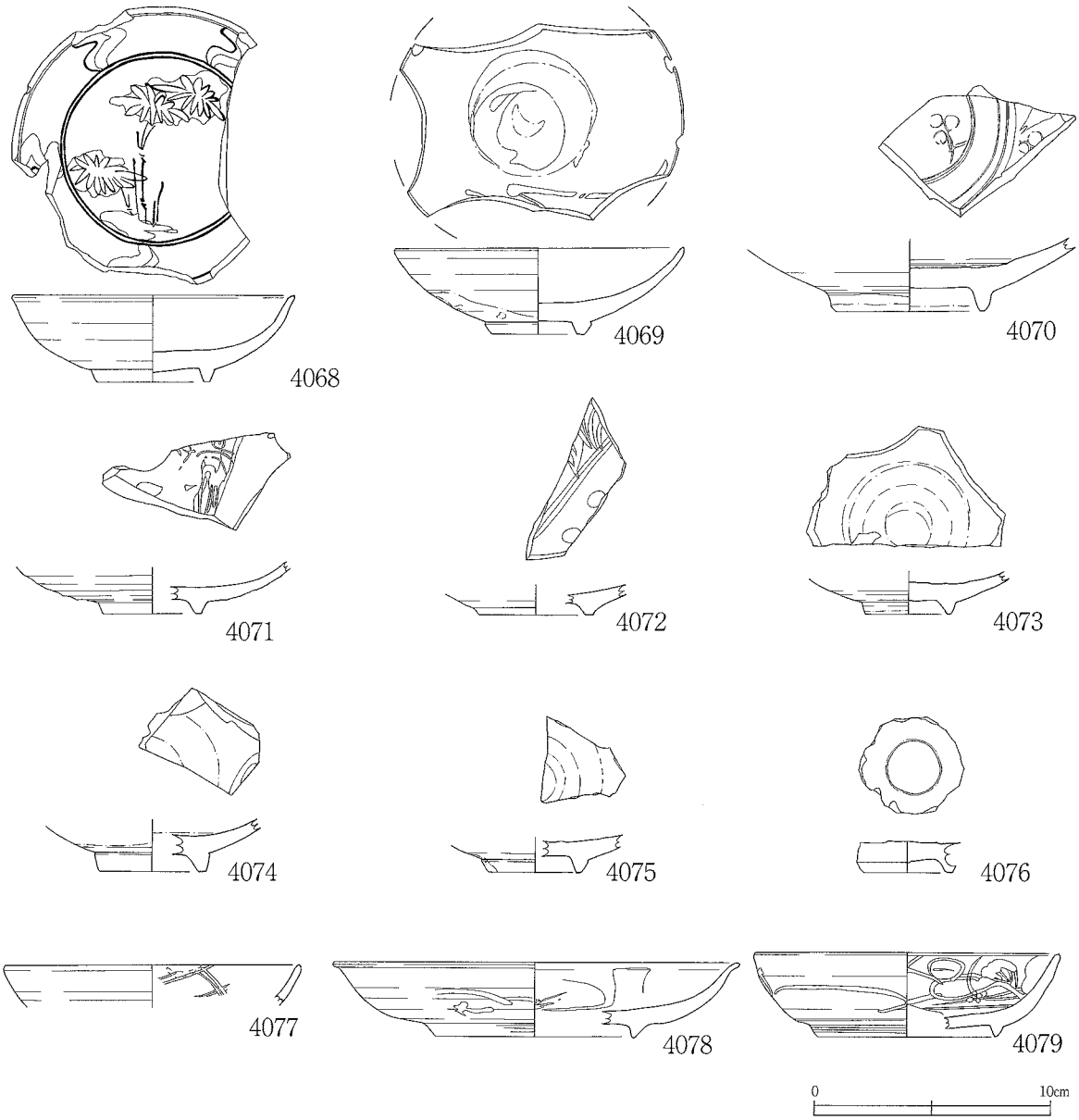
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4036	丸碗	E区ⅠA69・ⅠB33　検出面	5.2	10.2	3.6	80	100	透明釉	牡丹草花文	平清水系	19世紀代	見込：舟
4037	端反碗	D区南側　2層上面	5.5	10.0	3.5	25	20	透明釉	虫篭文	平清水系	19世紀代	
4038	丸碗	E区西側　斜面中	(4.4)	—	4.8	0	45	透明釉	圏線	平清水系	19世紀代	見込：水仙
4039	丸碗	E区西側　斜面中	(2.3)	—	3.8	0	20	透明釉	麦藁文	平清水系	19世紀代	見込：舟か
4040	碗	P10　埋土(01年)	(4.1)	—	4.8	0	5	鉄釉		不明	19世紀代	
4041	丸碗	E区SK23　埋土	(4.1)	—	4.0	0	10	透明釉	藁束文	東北地方	近代か	見込不明
4042	碗	E区西側　斜面中	(3.5)	—	—	0	5	銅緑釉		不明	19世紀代	
4043	碗	01SD4　埋土	(3.0)	11.6	—	10	0	透明釉		不明	19世紀代	
4044	碗	E区西側　斜面中	(3.0)	—	—	5	0	透明釉		不明	19世紀代	
4045	碗	BⅡC96　2層	(1.7)	—	—	0	0	透明釉	虫篭文	東北地方	19世紀代	釉薬、発色不良
4046	碗	D区P33　埋土	(1.7)	—	—	0	0	透明釉	麦藁文か	平清水系	19世紀代	
4047	碗	CⅢE98　第1検出面	(1.5)	—	—	0	0	透明釉	草花文	東北地方	19世紀代	
4048	碗	E区西側　斜面中	(3.7)	—	—	0	0	透明釉	草花文	平清水系	19世紀代	
4049	筒形湯呑	E区西側　斜面中	5.8	8.0	4.0	45	100	透明釉	草花文	瀬戸	連房11小期	口縁部輪花状
4050	蕎麦猪口	CⅢE旧佐藤家　表土	6.4	8.0	5.8	50	20	透明釉	蛸唐草文	東北地方	19世紀代	口縁部輪花状

第181図　近世の磁器③(4036～4050)



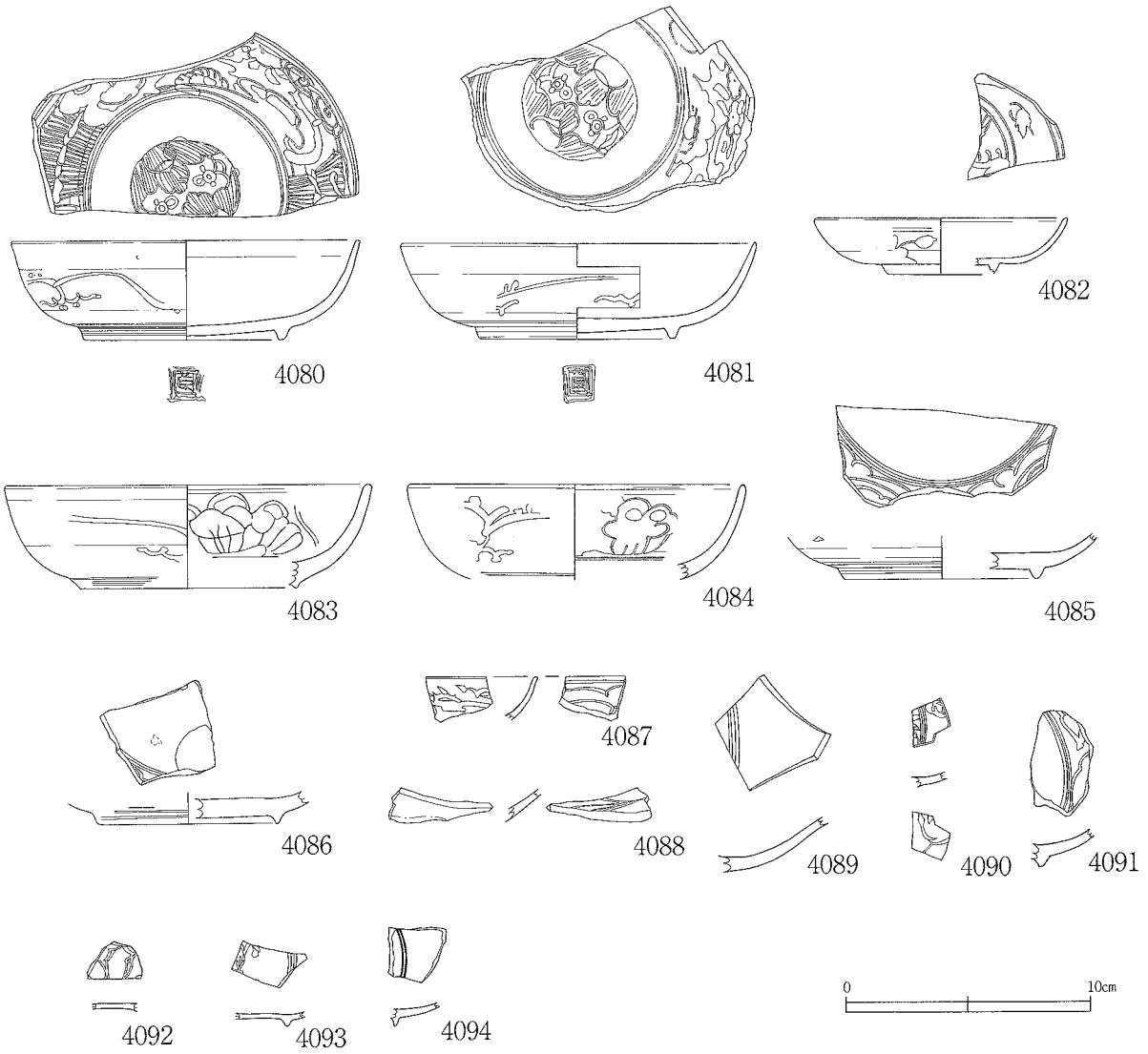
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4051	小杯	B区SZ43	4.0	6.0	2.9	95	100	透明釉		肥前	大橋Ⅳ期	
4052	小杯	B区SZ6	4.6	6.1	2.8	100	25	透明釉	波＋舟	肥前	大橋Ⅳ期	
4053	小杯	01SD4　埋土	4.3	5.8	3.0	25	20	透明釉	羽根文	肥前	大橋Ⅳ期	
4054	小杯	D区SZ31	4.0	6.6	3.0	95	100	透明釉		肥前	大橋Ⅳ期	
4055	小碗	E区ⅠA23西側斜面	(4.5)	6.8	—	5	0	透明釉	羽根文か	東北地方		
4056	小碗	E区P22　埋土	(2.4)	7.2	—	20	0	透明釉	草花文	肥前か		
4057	小碗	B区SZ78	2.3	6.0	2.8	30	100	透明釉	笹絵	肥前	大橋Ⅳ期	
4058	小碗	D区SZ38	2.3	6.3	2.8	100	100	透明釉	笹絵	肥前	大橋Ⅳ期	赤色顔料付着
4059	紅皿	B区SZ2	1.3	4.6	1.3	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4060	紅皿	B区SZ2	1.5	4.6	1.2	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4061	紅皿	B区SZ81	1.4	4.6	1.2	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4062	紅皿	B区SZ84	1.3	4.7	1.4	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4063	紅皿	B区SZ15	1.6	4.8	1.4	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4064	紅皿	D区SZ2	1.3	4.5	1.2	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4065	紅皿	D区SZ7	1.3	4.5	1.4	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4066	紅皿	D区SZ55	1.4	4.5	1.4	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4067	紅皿	D区SZ92	1.4	4.8	1.4	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	

第182図　近世の磁器④(4051～4067)



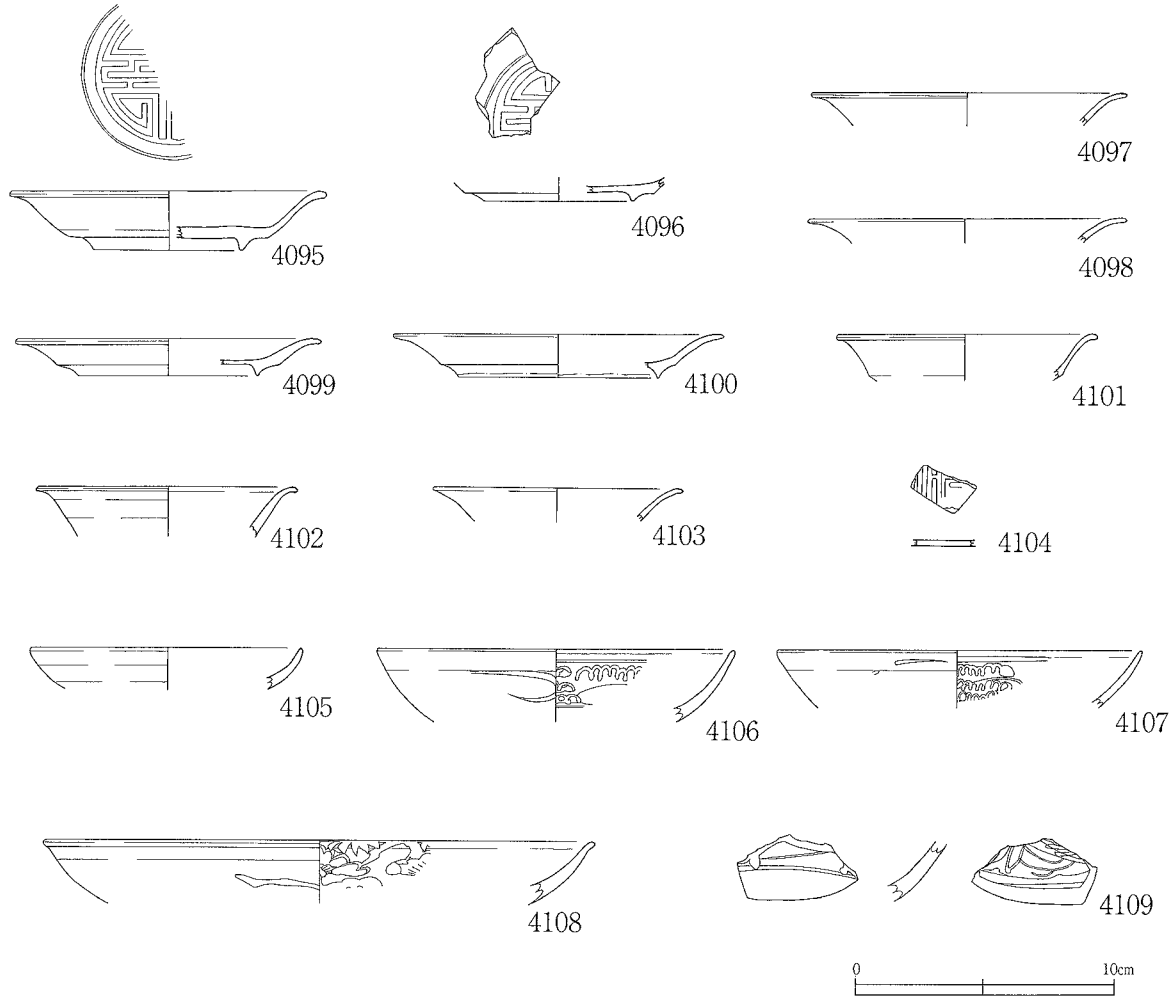
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4068	皿	01SX1　検出面	3.7	11.8	4.8	30	100	透明釉	捩文＋草花文	肥前	大橋Ⅱ期	
4069	皿	A区P102　埋土	3.7	12.0	4.0	25	100	透明釉	色絵草花文	肥前		
4070	皿	P22　埋土(01年)	(3.1)	—	6.4	0	25	透明釉	色絵草花文	肥前		
4071	皿	B区SZ14	(2.2)	—	4.2	0	45	透明釉	海浜風景文	肥前		
4072	皿	D区SD６　埋土	(1.3)	—	4.9	0	40	透明釉	草花文	肥前	大橋Ⅴ期	くらわんか手
4073	皿	E区道路　粗掘時	(1.9)	—	3.6	0	45	透明釉		肥前		内：蛇ノ目釉剥ぎ
4074	皿	E区道路　粗掘時	(2.3)	—	4.5	0	10	透明釉	染付あり	肥前		内：蛇ノ目釉剥ぎ
4075	皿	E区SK６　１層	(1.6)	—	4.0	0	20	透明釉		肥前		内：蛇ノ目釉剥ぎ
4076	皿	E区SK21　埋土	(1.4)	—	3.7	0	60	透明釉		肥前		内：蛇ノ目釉剥ぎ
4077	皿	E区ⅠA28　攪乱	(1.8)	12.4	—	10	0	透明釉	二重網目文	肥前		
4078	端反皿	E区西側　斜面中	3.2	17.0	8.4	5	5	透明釉	草花文＋蔓草	肥前	大橋Ⅴ期	
4079	皿	E区道路　粗掘時	3.6	12.8	7.6	25	25	透明釉		肥前		

第183図　近世の磁器⑤(4068～4079)



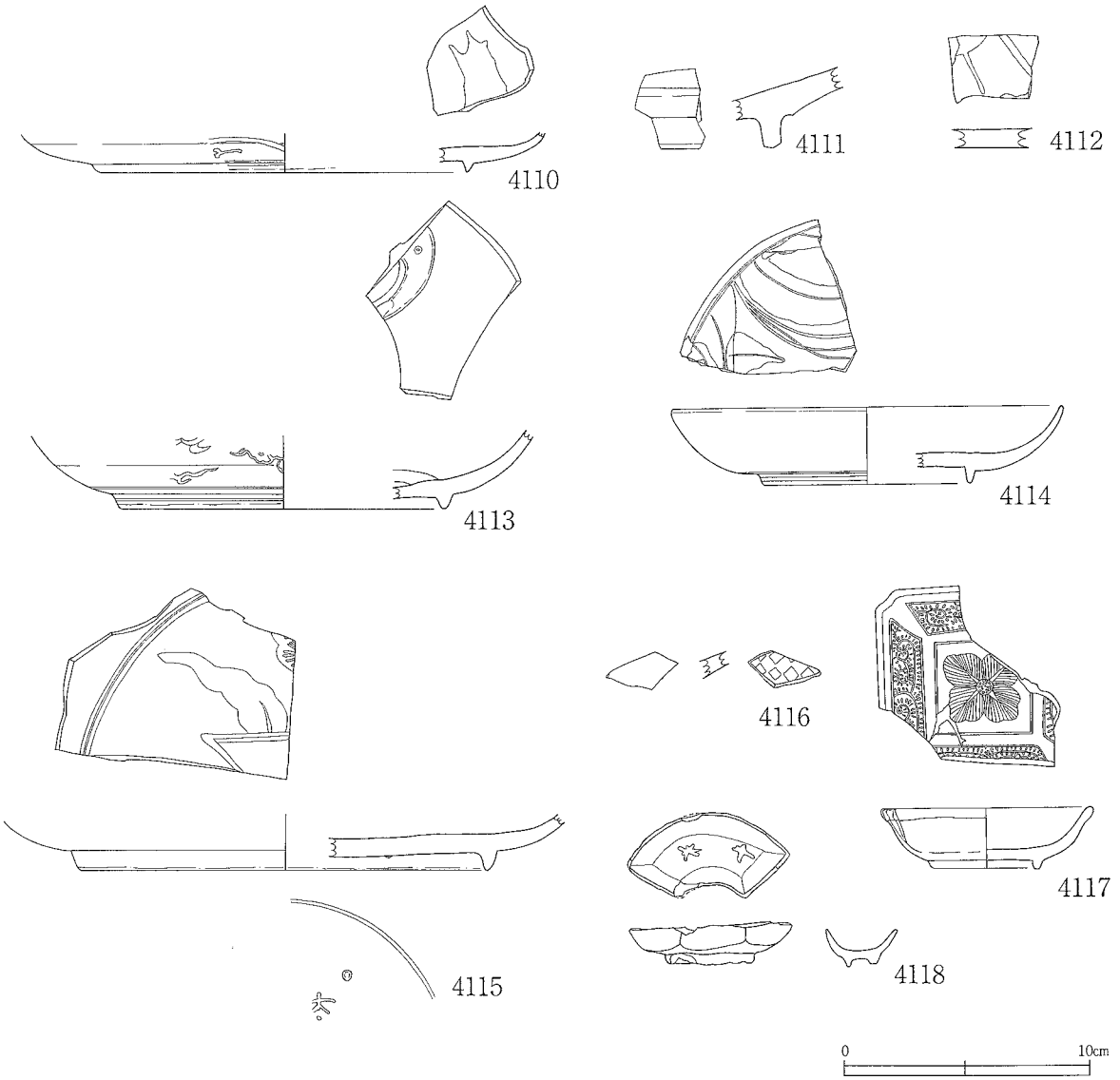
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4080	皿	E区西側　斜面中	4.2	14.3	8.2	20	50	透明釉	草花文＋蔓草	肥前	大橋Ⅳ期	「筒江」銘
4081	皿	E区ⅠA　表土	4.0	14.4	8.0	5	75	透明釉	草花文＋蔓草	肥前	大橋Ⅳ期	「筒江」銘
4082	小皿	E区SK15　埋土	2.4	10.4	4.4	5	5	透明釉	花鳥文＋草花文	肥前		
4083	皿	C区岩淵家前　表採	4.3	14.8	8.8	10	10	透明釉	草花文＋蔓草	肥前		
4084	皿	E区ⅠA03・04　粗掘時	(4.0)	13.6	—	5	0	透明釉	草花文＋蔓草	肥前		
4085	皿	C区ⅢE73　1～2層	(1.8)	—	8.0	0	25	透明釉	型紙摺絵			
4086	皿	P25　埋土(01年)	(1.3)	—	7.3	0	20	透明釉	型紙摺絵			
4087	小皿	C区ⅢD36　1層下	(1.8)	—	—	5	0	透明釉	型紙摺絵			
4088	小皿	C区ⅢE66　1層	(1.4)	—	—	0	0	透明釉	色絵草花文	肥前		体部破片
4089	端反皿	E区SK14　埋土	(2.4)	—	—	0	0	透明釉	型紙摺絵か			体部破片
4090	小皿	E区ⅠA28　攪乱	—	—	—	0	0	透明釉	花鳥文か	肥前		体部破片
4091	皿	C区ⅢE65　1～2層	(1.5)	—	—	0	0	透明釉	型紙摺絵			底部破片
4092	小皿	E区SK15　埋土	—	—	—	0	0	透明釉	草花文か	肥前		底部破片
4093	小皿	C区ⅢE73　1～2層	(0.6)	—	—	0	5	透明釉	草花文	肥前		
4094	端反皿	C区ⅢE82　1層	(1.0)	—	—	0	5	透明釉	圏線	肥前		

第184図　近世の磁器⑥(4080～4094)



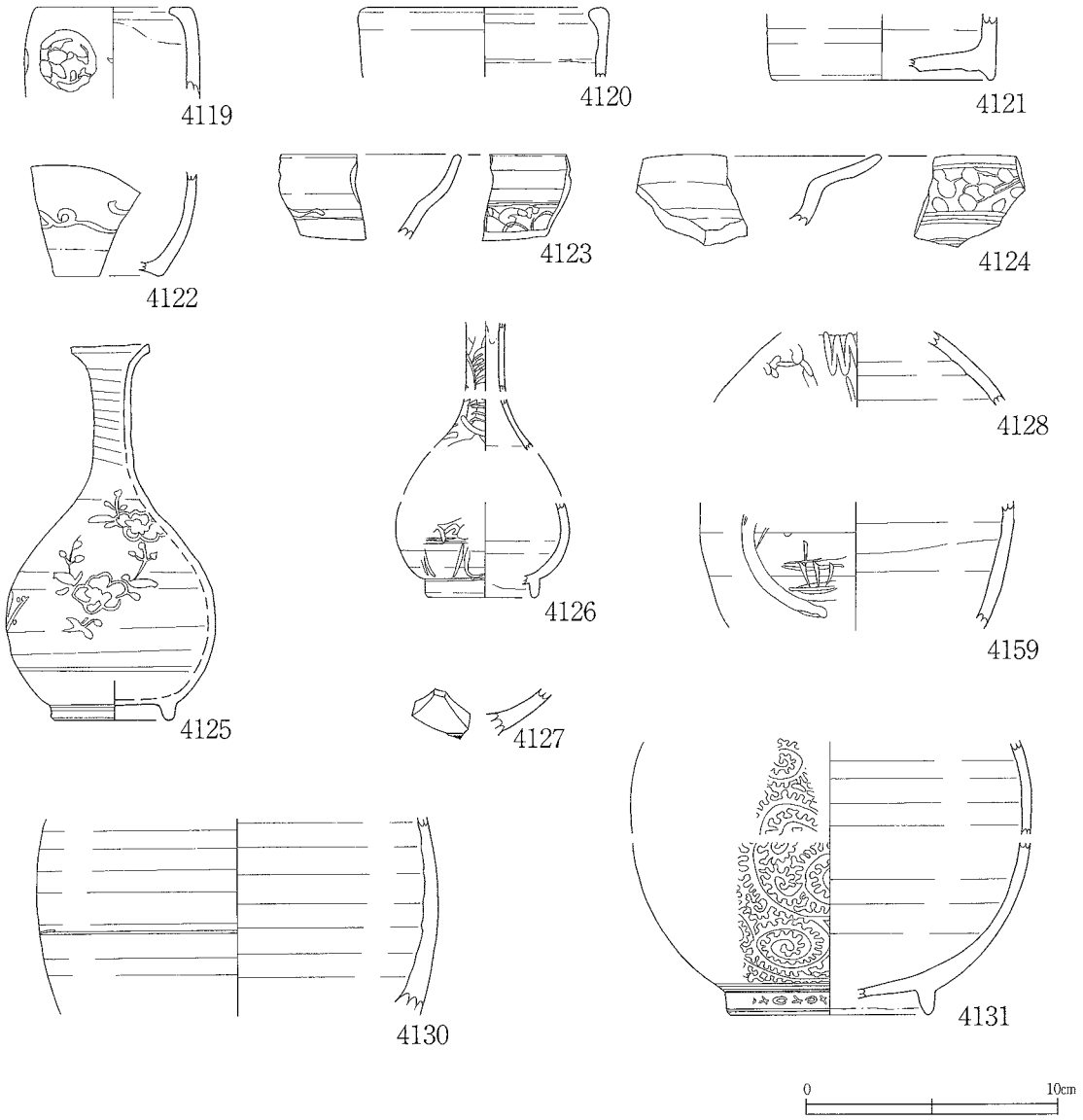
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4095	寿文皿	E区西側　斜面中	2.4	12.0	5.8	30	50	透明釉		不明	19世紀代	A類
4096	寿文皿	E区0Z100　第1検出面	(0.9)	—	5.8	0	15	透明釉		不明	19世紀代	A類か
4097	寿文皿	C区ⅢE97　第1検出面	(1.0)	12.4	—	5	0	透明釉		不明	19世紀代	B類
4098	寿文皿	D区　1層	(1.3)	12.2	—	10	0	透明釉		不明	19世紀代	B類
4099	寿文皿	D区ⅣE78　1層	2.0	11.6	7.0	20	20	透明釉		不明	19世紀代	B類
4100	寿文皿	D区南側　2層上面	1.7	12.8	7.8	15	15	透明釉		不明	19世紀代	B類
4101	寿文皿	D区ⅣE78　1層	(1.8)	10.0	—	10	0	透明釉		不明	19世紀代	C類
4102	寿文皿	E区西側　斜面中	(2.0)	9.8	—	15	0	透明釉		不明	19世紀代	C類
4103	寿文皿	C区ⅢE77　1層下	(1.2)	9.6	—	15	0	透明釉		不明	19世紀代	C類
4104	寿文皿	E区SK11　埋土	—	—	—	0	0	透明釉		不明	19世紀代	
4105	丸皿	D区ⅣE55　P5	(1.6)	10.5	—	25	0	透明釉		不明	19世紀代	
4106	端反皿	E区ⅠA03西側斜面	(2.9)	14.0	—	10	0	透明釉	草花文+蔓草	平清水	19世紀代	
4107	丸皿	E区西側　斜面中	(2.3)	14.2	—	10	0	透明釉	草花文+蔓草	平清水	19世紀代	
4108	端反皿	E区西側　斜面中	(2.5)	21.4	—	10	0	透明釉	草花文+蔓草	肥前か	19世紀代	

第185図　近世の磁器⑦(4095～4109)



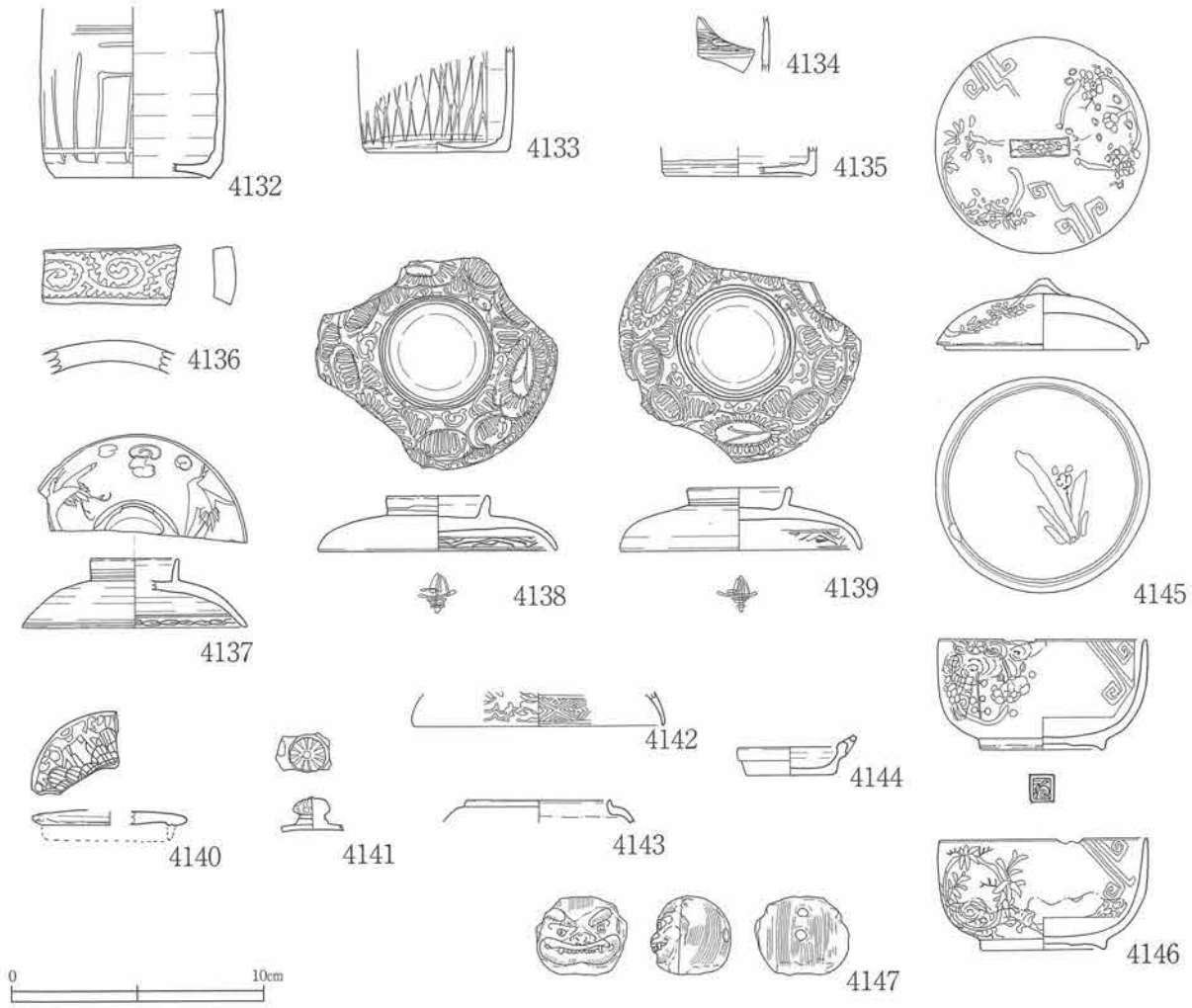
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4110	大皿	C区岩淵家前　表採	(1.6)	—	15.2	0	10	透明釉	海浜風景文+蔓草	肥前	大橋Ⅳ～Ⅴ期	
4111	大皿(盤)	B区ⅡD65　攪乱	(3.3)	—	—	0	5	青磁釉		肥前		
4112	大皿	E区　表採	—	—	—	0	0	透明釉	海浜風景文か	肥前		
4113	大皿	E区西側　斜面中	(3.2)	—	13.3	0	15	透明釉	唐草文	肥前か		内面に陽刻
4114	大皿	E区西側　斜面中	3.2	16.1	8.6	20	20	透明釉	草花文	平清水系		
4115	大皿	E区ⅠA54　攪乱	(2.3)	—	16.8	0	20	透明釉	海浜風景文	肥前	大橋Ⅳ期	「太□□□」銘
4116	盤	ⅢE75　4層	—	—	—	0	0	透明釉	市松模様	不明		
4117	型打皿	E区ⅠA05･06　表採	2.6	8.6	4.2	25	65	透明釉	唐草＋花	平清水系		方形
4118	型打皿	B区SZ78	1.7	6.7	3.4	95	90	透明釉	染付あり	肥前か		扇形

第186図　近世の磁器⑧(4110～4118)



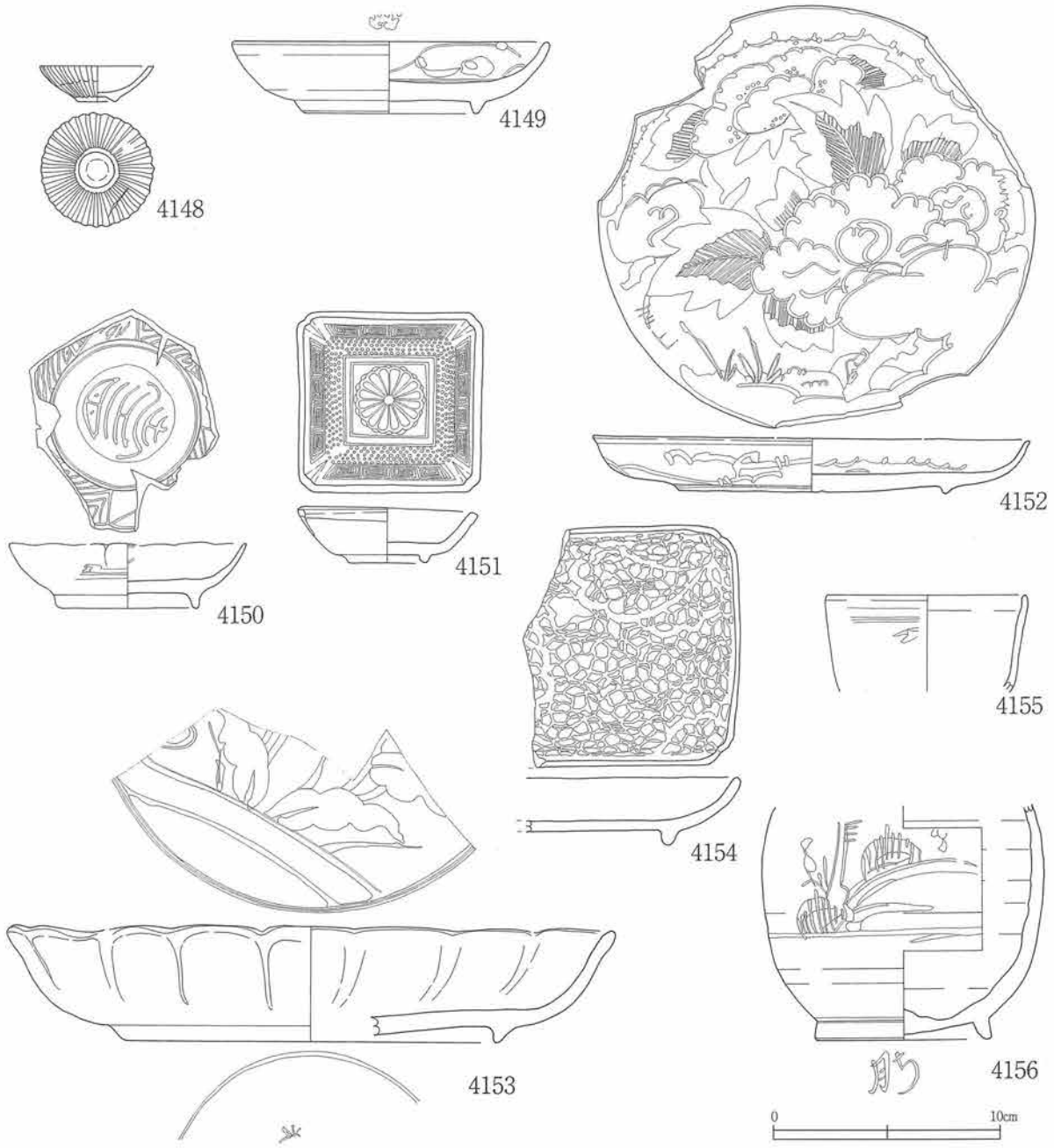
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4119	火入	01SD2ベルト西側	(3.7)	6.2	—	25	0	透明釉	丸文	肥前		
4120	火入	E区ⅠA03・04　粗掘時	(2.8)	9.4	—	10	0	青磁釉		肥前		
4121	火入	E区SK24　埋土	(2.7)	—	8.6	0	10	青磁釉		肥前		
4122	甕か	E区西側　斜面中	(4.5)	—	—	0	5	透明釉	蔓草	東北地方		内面無釉
4123	大鉢	P25　埋土(01年)	(3.4)	—	—	5	0	透明釉	草花文＋蔓草	肥前		
4124	大鉢	01SD4　埋土上～中位	(3.0)	—	—	5	0	透明釉	唐草文	肥前		
4125	徳利	B区SD6	15.3	3.1	4.8	100	100	透明釉	草花文	肥前		御神酒徳利(Ⅰ)
4126	徳利	E区ⅠA　表土	—	—	4.5	0	25	透明釉	草花文	肥前		御神酒徳利(Ⅰ)
4127	徳利	E区SK25　埋土	—	—	—	0	0	透明釉		東北地方		
4128	徳利	C区岩淵家前　表採	(3.1)	—	—	0	0	透明釉	草花文	肥前か		
4129	徳利	E区道路　粗掘時	(5.1)	—	—	0	0	透明釉	山水文	肥前か		
4130	徳利	C区岩淵家前　表採	(8.1)	—	—	0	0	透明釉	圏線	東北地方		すず徳利(Ⅱ)
4131	徳利	E区西側　斜面中	(11.1)	—	8.0	0	10	透明釉	蛸唐草文	東北地方		すず徳利(Ⅱ)

第187図　近世の磁器⑨(4119～4131)



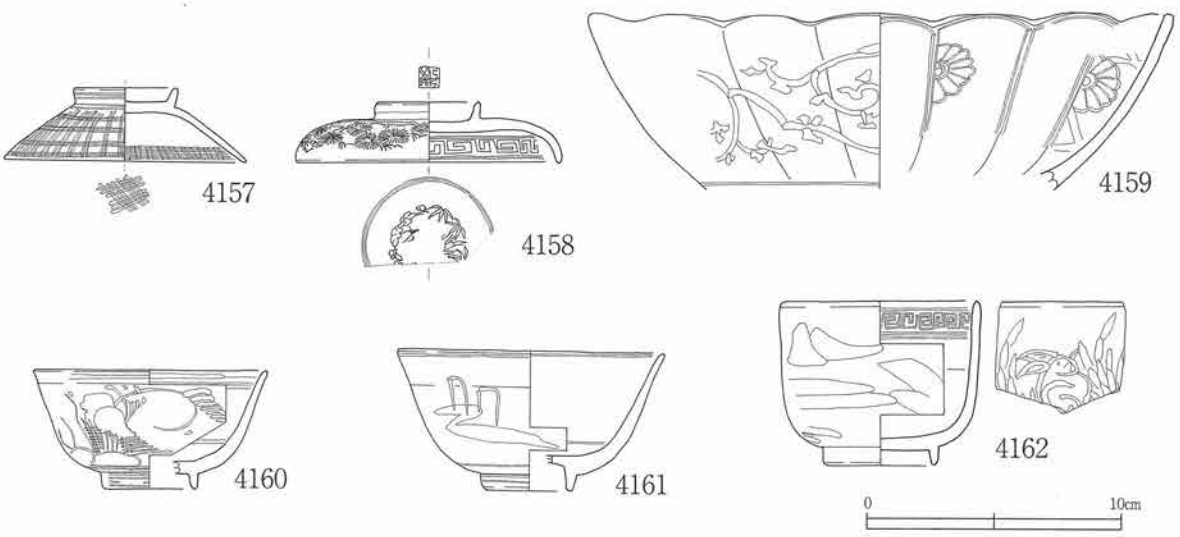
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4132	徳利	D区ⅣF26　表土	(6.8)	—	6.2	0	35	透明釉	格子文	東北地方		燗徳利(Ⅲ)
4133	徳利	B区墓地　表採	(4.2)	—	5.7	0	50	透明釉	松葉文	東北地方		燗徳利(Ⅲ)
4134	徳利	E区SK26　2層	(2.3)	—	—	0	0	透明釉	木賊文	平清水系		燗徳利(Ⅲ)
4135	徳利	02SK38・39	(1.2)	—	5.8	0	15	透明釉	圏線	東北地方		燗徳利(Ⅲ)
4136	水注	B区ⅡD83　3層	—	—	—	0	0	透明釉	蜻唐草文	不明		把手破片
4137	蓋	C区ⅢE　表土	2.8	9.0	3.5	40	10	透明釉	鶴と雲	東北地方		
4138	蓋	C区ⅢE　攪乱	2.2	9.5	4.0	30	100	透明釉	草花文	平清水系		見込：舟
4139	蓋	C区ⅢE　攪乱	2.5	9.4	4.0	10	100	透明釉	草花文	平清水系		見込：舟
4140	蓋	E区ⅠA69　第1検出面	(0.6)	—	(5.4)	0	25	透明釉	松竹文	東北地方		受部欠損
4141	蓋	B区ⅡD85　2層	(1.4)	—	—	0	0	透明釉	色絵	東北地方		つまみ破片
4142	蓋	E区ⅠA32　第1検出面	(1.3)	10.0	—	5	0	透明釉	草花文+四方襷	肥前か		
4143	小壺	B区ⅡD83　2層	(0.9)	5.8	—	20	0	透明釉		不明		
4144	餌猪口	B区ⅢD04　2層	1.5	4.2	3.5	70	70	透明釉		不明		
4145	合子蓋	B区SZ6	2.8	8.5	7.8	100	100	透明釉	草花文+雷文	肥前	大橋Ⅳ期	見込：菖蒲
4146	合子身	B区SZ6	4.4	8.2	4.8	95	100	透明釉	草花文+雷文	肥前	大橋Ⅳ期	「満福」銘、上絵付草花文
4147	根付	B区SZ2	3.1	3.6	—	100	—	透明釉	色絵	東北地方		獅子面形

第188図　近世の磁器⑩(4132～4147)



No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4148	紅皿	B区SZ110	1.6	3.1	1.6	100	100	透明釉		肥前	大橋Ⅴ期	
4149	皿	04調査区	4.2	14.2	7.7	40	50	透明釉	草花文	肥前		
4150	輪花皿	04調査区	2.9	10.6	6.1	10	95	透明釉				
4151	型打皿	04調査区	2.5	8.1	3.4	100	100	透明釉	雷文＋菊花			
4152	大皿	04調査区	2.5	19.4	11.7	50	100	透明釉	草花文＋蔓草			
4153	輪花大皿	04調査区	5.2	26.6	16.6	30	30	透明釉	海浜風景文	波佐見	大橋Ⅲ～Ⅳ期	「大□□□」銘
4154	型打皿	04調査区	3.0	(9.5)	(6.3)	70	70	透明＋青磁	唐草文			
4155	蓋物	B区SZ116	(4.4)	8.8	—	10	0	透明釉	草花文			
4156	徳利	B区SZ124	(10.5)	—	7.8	0	90	透明釉	楼閣山水文		大橋Ⅳ期併行	すず徳利(Ⅱ)

第189図　近世の磁器⑪(4148～4156)



No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
4157	蓋	04年調査区	2.9	9.5	3.9	55	100	透明釉	格子文	肥前		見込：格子文
4158	蓋	〃	2.4	10.4	4.0	40	75	透明釉		肥前		
4159	輪花鉢	〃	(6.9)	23.0	—	20	0	透明＋青磁	草花文＋蔓草			
4160	端反碗	〃	4.8	9.0	3.5	40	40	透明釉	楼閣山水文	瀬戸	連房第11小期	
4161	端反碗	〃	5.5	10.4	3.4	35	35	透明釉	海浜風景文	切込		
4162	筒形湯呑	〃	6.5	7.5	4.3	40	50	透明釉	海浜風景＋兎			

第190図　近世の磁器⑫(4157～4162)

6　金　属　製　品（鉄製品、六器、銭）

(1)　古代・中世の鉄製品（第191・192図、写真図版194・195・197～199）

いずれも錆化が著しく、出土時点では器種を判別できるものが限られていた。しかし、整理作業中にX線透過写真撮影を行ったところ、多くのもので遺存状況が良好であることが確認された。今回図示したものは42点で、その内訳は武器類（蕨手刀・鉄鏃）17点、武具類（小札）４点、農工具（刀子・鎌・紡錘車・火打金）13点、その他（釘・鉄鍋・不明製品）８点である。また、鉄製品ではないが鍛冶関係遺物として鞴の羽口１点と鉄滓３点が出土している。以下では種別ごとにその特徴を述べることにする。

①武器類（5001～5016・5031～5033）

5001は蕨手刀である。刃部先端を欠損しており、現存長は35.7cm、刃部幅2.8cm、棟側の厚さ0.7cmである。共金造の製品で、ほぼ直線的に刃部から柄部に続いており柄反りはほとんど認められない。棟は平棟で柄部と刃部の幅はほとんど変化しない。柄頭は巻きが強く、中心部にφ５㎜の孔が確認できる。装具として鍔と鞘口金具が残存している。鍔は長三角形状の喰出鍔で、最大長5.7cm、厚さ0.65cmであり刀本体より若干大きい程度である。5002は責金具で、5001に伴う刀装具である。厚さ0.12cmの薄い鉄板を用いており、倒卵形状である。金銅などの付着物は認められない。

5003～5016は鉄鏃で、鏃身部と頸部の形状によって分類が可能である。5003は長頸三角形式鉄鏃である。鏃身部断面形は菱形で、鏃身関部は直角関である。頸部は厚手で、断面形はほぼ正方形である。茎部関も直角関で、茎部には木製の矢柄と結束するための紐が残存している。なお、紐についてはX線写真に明瞭に写ることから、金属製であると考えられるが、材質については不明である。5004・5005は長頸式鉄鏃の頸部で、いずれも鏃身部を欠損している。5003に比べて扁平な造りで茎部関は無関である。5006は鏃身部が二股に分かれる雁又式鉄鏃であるが、鏃身部の大半を欠損している。5007・5008は短頸の腸抉長三角形式鉄鏃である。5007の鏃身部は両丸造であり、腸抉は浅い。茎部関は直角関である。茎部は中央と先端を欠損しているが、細まりながら茎尻へと至るものと考えられる。5008は鏃身部先端を欠損しているが、両丸造の長三角形式鉄鏃で、5007に比べて腸抉は深い。頸部以下は欠損しているため全形を知ることはできない。5009は無茎三角形鏃である。極めて薄手であり、刃部も不明瞭である。5010・5011は鑿箭式鉄鏃である。5010は鏃身長3.2cmという小型の製品で、鏃身関部は台形関である。茎部は直線的で、関部付近には木質が残存している。5011は鏃身部のみの破片であるが、5010よりやや大型である。この他にも長頸式鉄鏃の頸部破片（5012～5015）、茎部破片（5016・5032・5033）などが出土している。なお、5031は不明鉄製品としているが、長さ・厚さとも長頸式鉄鏃の頸部に類似していることから、長頸式鉄鏃が変形したものとも考えられる。

②武具類（5017～5020）

小札およびそれに類するものが４点確認されている。5017は幅広長条形の小札で、札頭と札足は円形である。縅孔一列で、縅孔は第三縅孔まで、綴孔は第一綴孔で３孔、第二綴孔で２孔、覆輪孔は２孔確認できる。なお、第二綴孔には革紐が残存している。5018は長条形の小札で、札頭は斜めに切り落とされるが札足は水平である。縅孔・綴孔については錆によって塞がれており、X線写真観察によっても綴孔が３孔確認できるのみである。5019は長条形の小札で、片側面に抉りが入っている。X

線写真観察では第一縅孔と綴孔が各１孔ずつ確認できる。5020は小札状鉄製品としたものである。小型で第一縅孔らしき孔が１ケ所確認できるが、小札であるか否かは断定しがたく、穂積み具である可能性もある。

③農工具類（5021～5030・5034・5038）

5021～5030は刀子である。5021は細身平造の刃部で、関部は両関である。茎部には木質が残存している。5022は幅広平造の刃部で、関部は棟側の直角片関である。茎部は短く、刃部側は先端より8.6cmの部分で斜関状に角度を変えて茎部先端へと至る。5023は刃部先端と頸部先端を欠損しているが比較的大型の刀子である。5024は刃部が両丸造、撫角関の刀子である。茎部は細身で、断面形は扁平な長方形である。5025は刃部先端が使い減りしている。平造の刃部で刃部側が角関、棟側が斜関である。その他にも刃部・茎部の破片が出土しており、確認できるものでは刃部側斜関（5027）、棟側直角片関（5028）、茎部が長いもの（5029・5030）などがある。

5034は鎌である。刃部先端に向かって緩やかに湾曲するが、刃部側は研ぎ減りのためか若干直線的になっている。折り返し部は、柄に着装した状態で刃の方をみて左側に折り返している。なお、折り返し部の形状から、刃は柄に対して鈍角に取り付くものと考えられる。

5038は紡錘車である。軸部先端を欠損しているが、遺存状態は良好である。車輪部は扁平な円盤状で、中央にφ0.5cmの穿孔があり、軸部が貫通している。軸部はφ0.4～0.5cmの棒状であるが、車輪部付近はやや隅丸方形状となる。

④その他（5039～5042）

5039～5041は釘である。5039・5040は断面形がほぼ正方形の角釘である。5041はやや厚手で扁平な角釘で、釘頭が折り返されている。

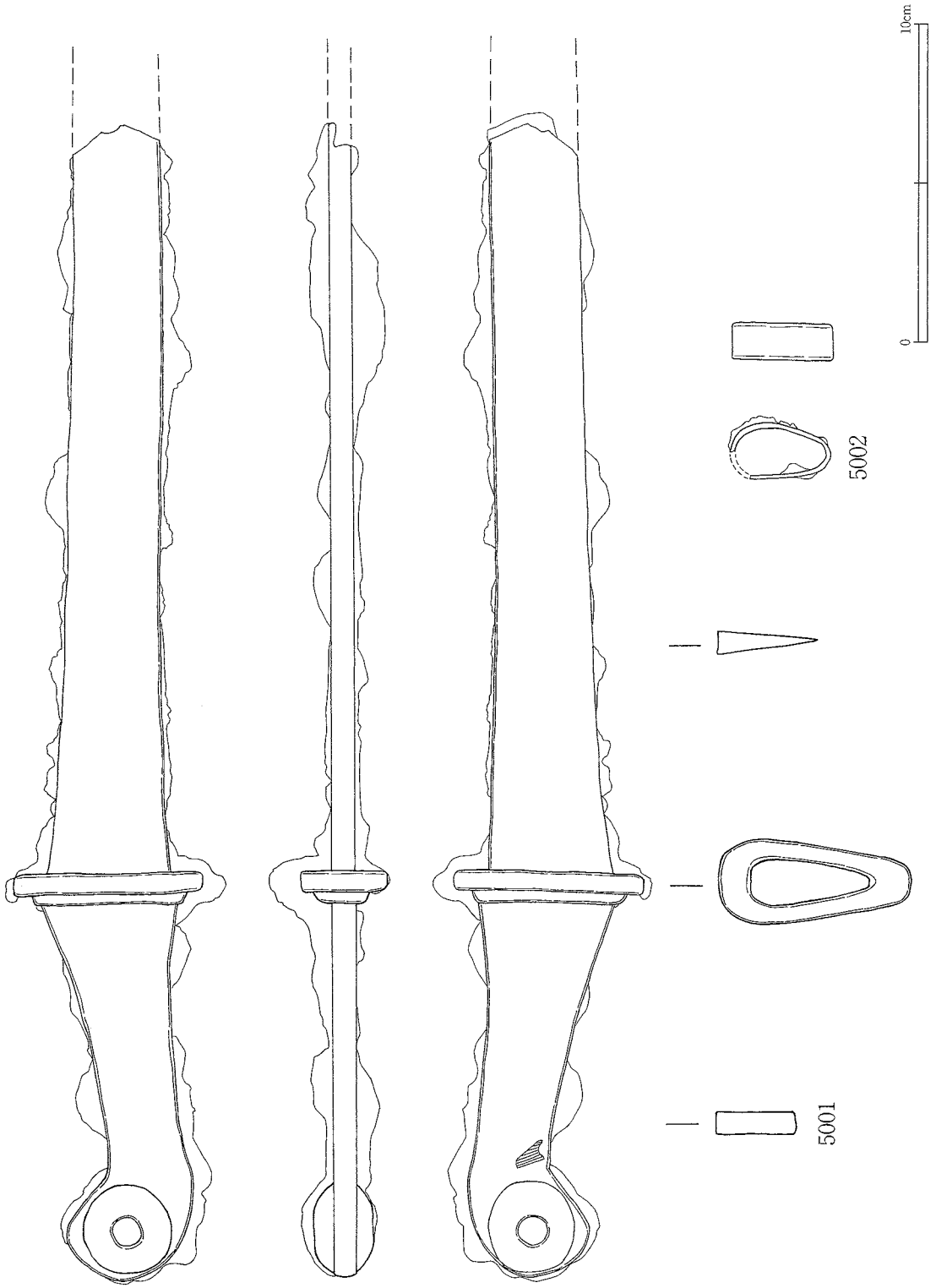
5042は鉄鍋の体部片である。耳部付近のみの破片であるが、体部の彎曲状況を勘案するとおそらく外耳式の鉄鍋になると思われる。縦耳式の鋳造品で、体部の器壁は比較的厚い。

5035は長条形の不明鉄製品である。錆化が激しく、X写真観察によっても断面形や刃部の有無などを確認することはできなかった。5036は農工具あるいは利器と考えられる鉄製品であるが、先端部が欠損しているため全形を知ることができない。幅1.2cm程の円筒状の鉄棒に厚さ0.1～0.2cmの鉄板を巻いたもので、先端付近は断面が扁平な長方形となる。

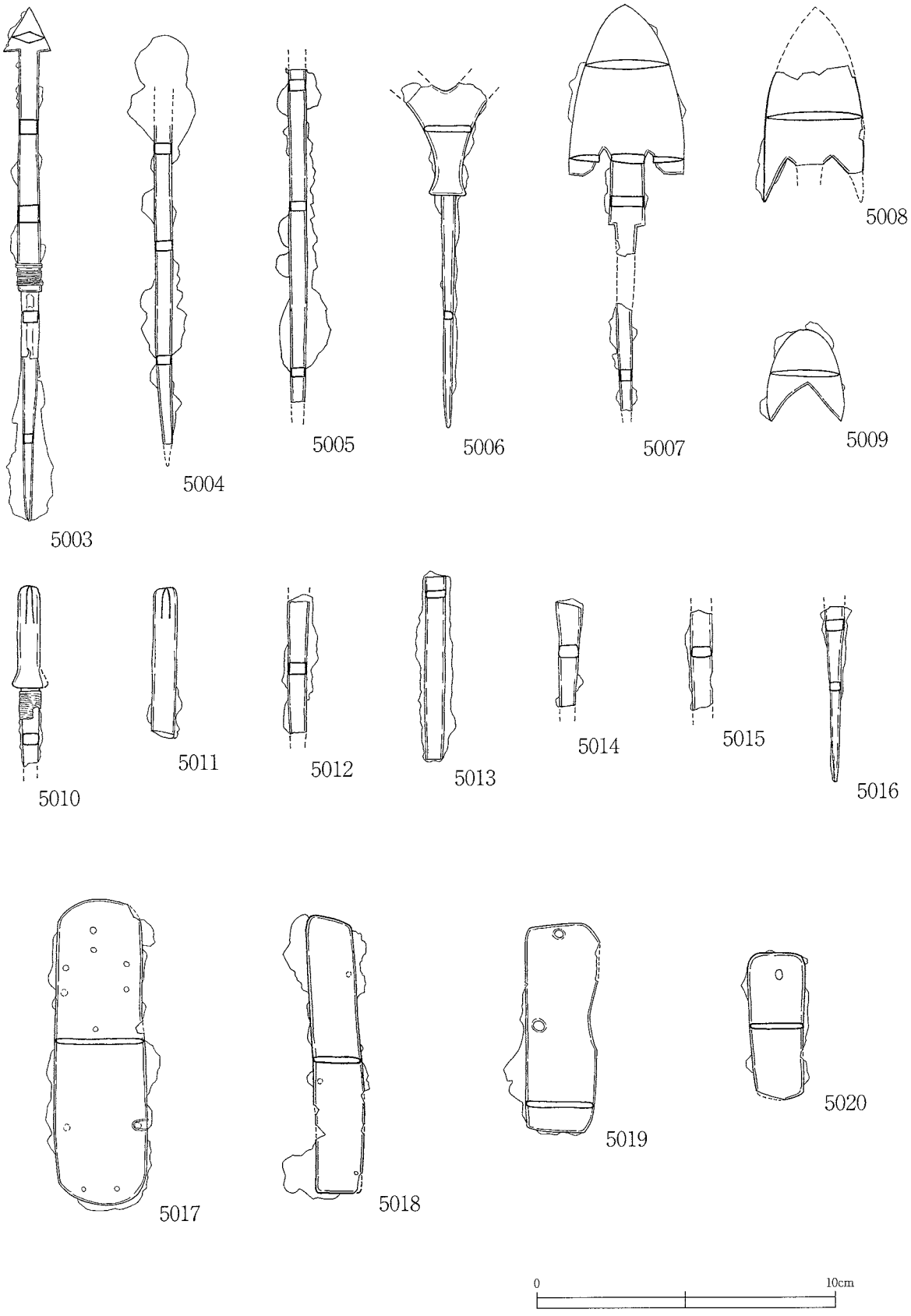
⑤鍛冶関係遺物（5043）

5043は鞴の羽口で、先端部付近のみの破片である。やや粗い土を用いて成形されており、先端には熔着滓が付着している。なお、現存部からは調整痕などは確認できなかった。また、図示していないが、製鉄に関係する遺物として流動滓がE区SI1と、E区IA32グリッドから各１点（計255.97g）、D区ⅣE44６層から碗形滓１点（111.67g）が出土している。

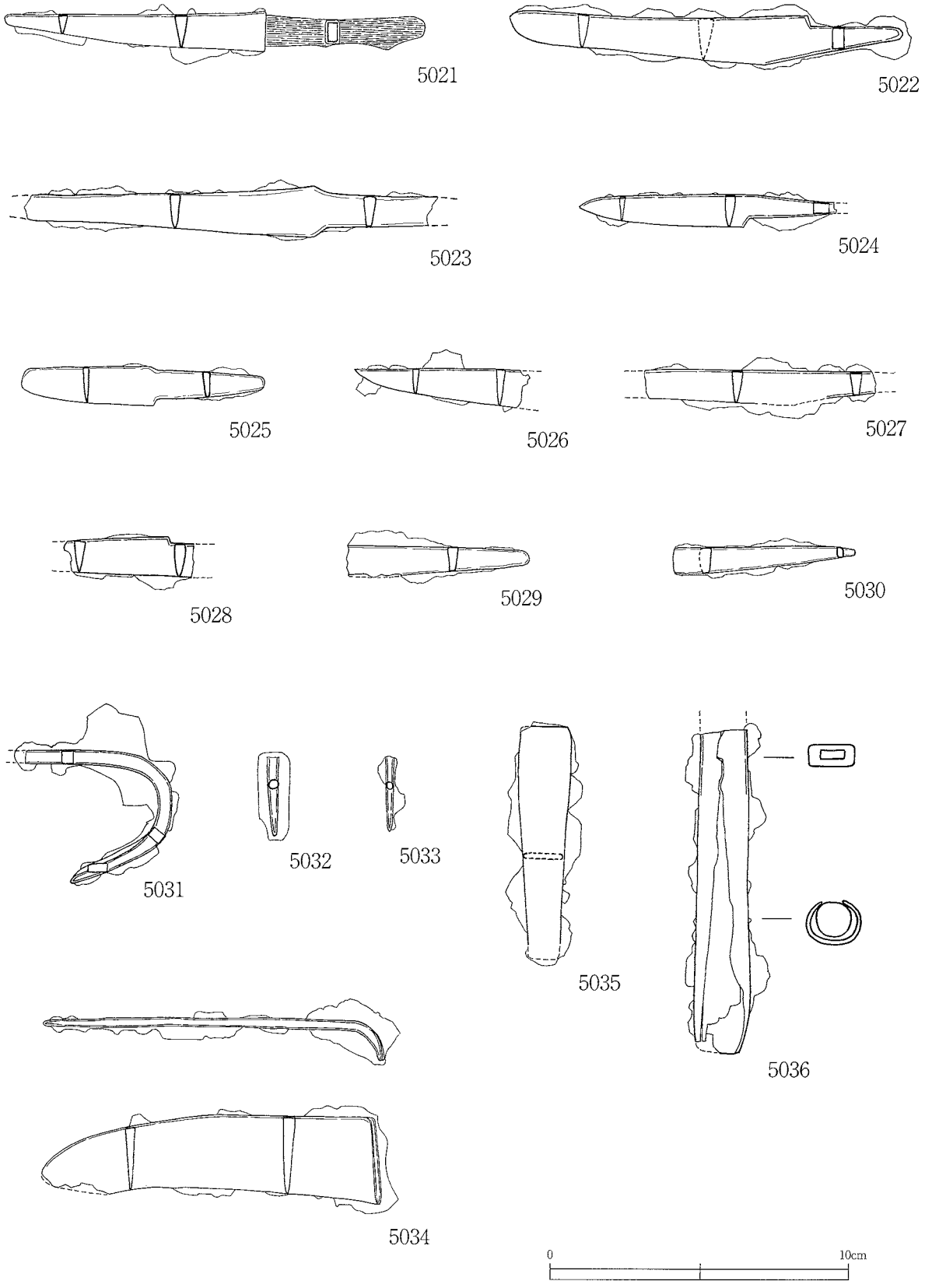
（村田）



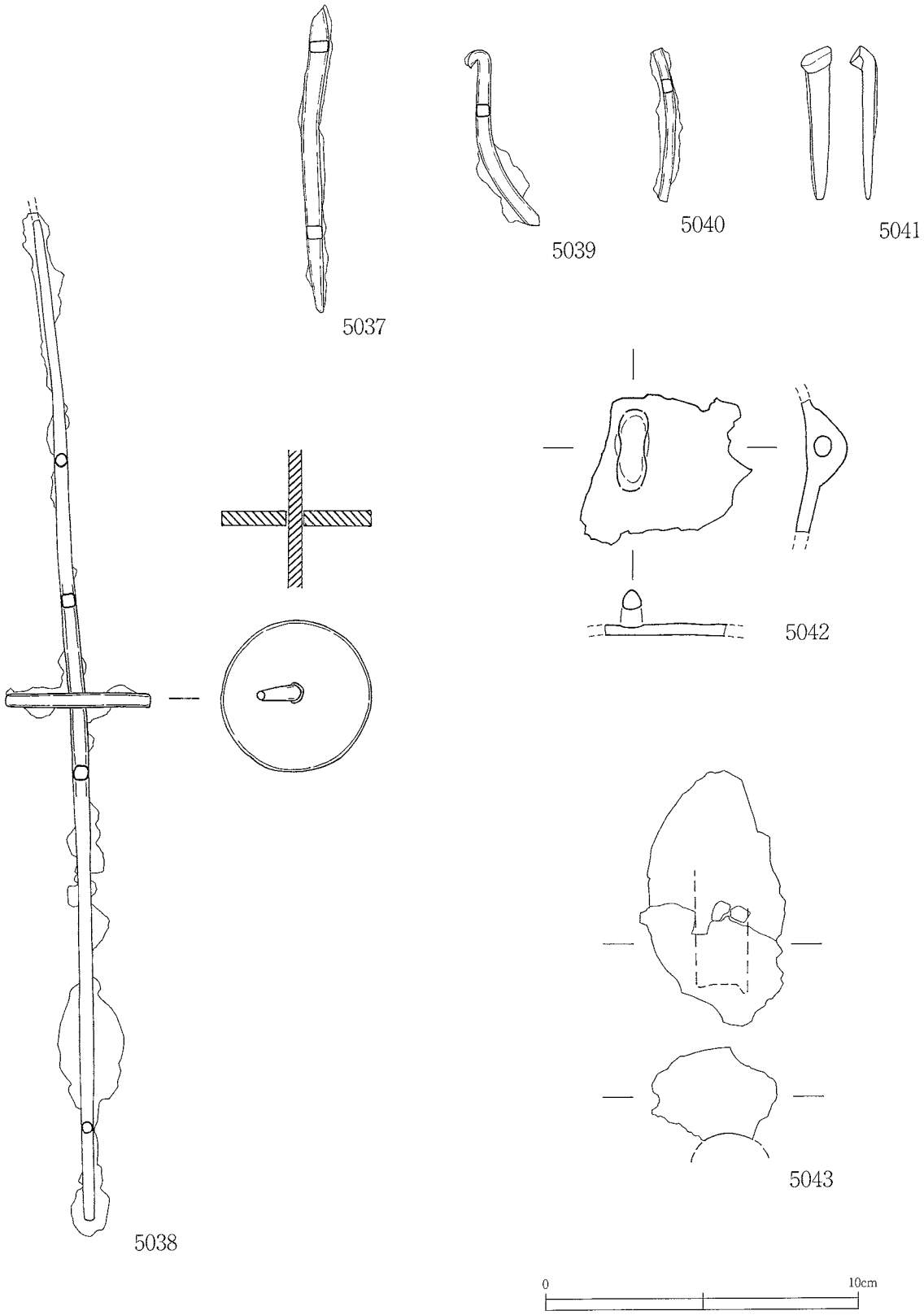
第191図　古代～中世の鉄製品①（5001～5002）



第192図　古代～中世の鉄製品②（5003～5020）



第193図　古代～中世の鉄製品③（5021～5036）



第194図　古代～中世の鉄製品④(5037～5043)

No.	器種	出土地点・層位	計測値				備考
			全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
5001	蕨手刀	E区SI４　床面	(35.7)	2.8	0.7	約500	切先欠損
5002	責金具	E区SI４　床面	3.1	1.8	1.2	5.70	ほぼ完形
5003	長頸三角形式鉄鏃	E区SI４　床面	(17.3)	0.65	0.6	35.09	茎部先端欠損
5004	長頸式鉄鏃	E区SI４　床面	(13.8)	0.6	0.35	24.80	頸部のみ残存
5005	長頸式鉄鏃	C区SI４　床面	(11.3)	0.65	0.35	18.03	頸部のみ残存
5006	雁又式鉄鏃	B区沢跡　１層	(11.6)	1.6	0.2		
5007	長三角形式鉄鏃	E区SX１　焼土３	(12.2)	3.8	0.4	34.52	頸部一部、茎部先端欠損
5008	長三角形式鉄鏃	B区沢跡　埋土	(4.6)	3.4	0.2	15.28	刃部先端、頸部以下欠損
5009	鉄鏃	D区SI１	3.1	2.5	0.2	3.70	
5010	鑿箭式鉄鏃	B区沢跡　埋土	(6.1)	0.7	0.4		
5011	鑿箭式鉄鏃	B区沢跡　１層下位	(5.0)	0.8	0.4		鏃身部のみ残存
5012	長頸鏃	E区SI４　床面	(4.5)	0.7	0.4	7.16	頸部のみ残存
5013	鉄鏃	D区ⅢF65　第２面	(6.1)	0.7	0.25		頸部のみ残存
5014	鉄鏃	B区沢跡　１a層	(3.0)	0.65	0.4		頸部のみ残存
5015	鉄鏃	B区沢跡　２層	(3.3)	0.6	0.3		頸部のみ残存
5016	鉄鏃	B区沢跡　１層上位	(5.8)	0.55	0.4		頸部のみ残存
5017	小札	E区SI３　床面	10.3	3.2	0.2	26.26	孔径0.15～0.2cm（11孔）
5018	小札	C区SI３　床面直上	9.4	1.6	0.2	20.13	３孔確認
5019	小札	C区ⅢD75　P２	7.0	2.4	0.2	25.04	
5020	小札状鉄製品	B区沢跡　埋土	4.9	1.8	0.2	7.66	径0.3cmの穿孔（１孔）
5021	刀子	C区SI３　壁面	14.3	1.35	0.4	21.66	木質残存
5022	刀子	C区SI５　床面	13.2	1.6	0.45	28.57	完形
5023	刀子	B区ⅢD33　第３面	(13.8)	1.5	0.35		刃部・茎部先端欠損
5024	刀子	C区SI５　床面	(8.6)	1.1	0.5	12.01	茎部先端欠損
5025	刀子	B区沢跡　１層	8.3	1.3	0.3		完形
5026	刀子	D区SI１　２層下位	(6.0)	1.2	0.3	8.26	刃部のみ残存
5027	刀子	C区ⅣE07　４暗	(7.6)	1.2	0.5	18.80	刃部先端、茎部先端欠損
5028	刀子	C区ⅣE07　焼土１	(4.5)	1.1	0.4	12.26	刃部先端、茎部先端欠損
5029	刀子	B区ⅢC17　１c層	(6.2)	1.2	0.3		茎部のみ残存
5030	刀子	D区ⅢF64　２層	(6.1)	0.8	0.3		茎部のみ残存
5031	不明鉄製品	E区SI４　床面	(10.2)	0.5	0.7	16.74	鉄鏃の頸部か
5032	鉄鏃	E区SI４カマド３層	(2.5)	0.25	0.25	0.84	茎部先端のみ
5033	鉄鏃	B区沢跡　埋土	(2.2)	0.4	0.4	3.66	茎部先端のみ
5034	鎌	E区SI４　埋土	11.5	2.9	0.4	50.48	ほぼ完形
5035	不明鉄製品	B区沢跡　埋土	(7.9)	1.7	0.2	28.13	刀子の刃部か
5036	不明鉄製品	C区SI４　床面	(10.9)	1.9	1.5	68.51	
5037	不明鉄製品	B区沢跡　２層	(10.0)	0.6	0.4		
5038	紡錘車	D区SI１	(32.1)	4.8	0.5	70.06	軸部先端欠損
5039	釘	B区沢跡　１a層	(6.3)	0.4	0.4		
5040	釘	B区沢跡　１層中～下位	(5.0)	0.35	0.4		
5041	釘	B区沢跡　１層	4.9	0.7	0.5		
5042	鉄鍋	B区沢跡　２層	(4.8)	5.5	0.2～0.4	38.98	外耳式、耳部残存
5043	羽口	E区西側　斜面中	(8.4)	(4.0)	(2.8)	105.61	

(2)　六　　器（第193図、写真図版196・199）

密教法具の「六器」が出土している。六器は密教修法の壇上に配して使用される密教法具で、6個を一具として使用することから「六器」の名称を持つ。六器は高台がついた椀と、それを置く高台付きの台皿からなる。出土したのは椀が一個と台皿が2個である。椀と台皿1個(5032・5033)はⅣF55グリッド3層上面（平成15年度D区）から出土した。この地点は調査時には「D区SX1」とした窪んだ地形で、椀と台皿は約10cm離れて出土した。この出土状況からは意図的に置かれた、埋納したという様子は読み取れなかった。「D区SX1」は調査の結果、人為的な遺構と判断されず、遺構として登録していない。もう1個の台皿5034はⅣE26グリッド3層検出のP157（平成15年度C区）から出土している。P157は近年の木根の攪乱と想定されている。台皿と共に美濃産陶器志野菊皿が出土している。椀と台皿1個（5032・5033）と、もう1個の台皿（5034）の出土地点は約57m離れた距離になる。

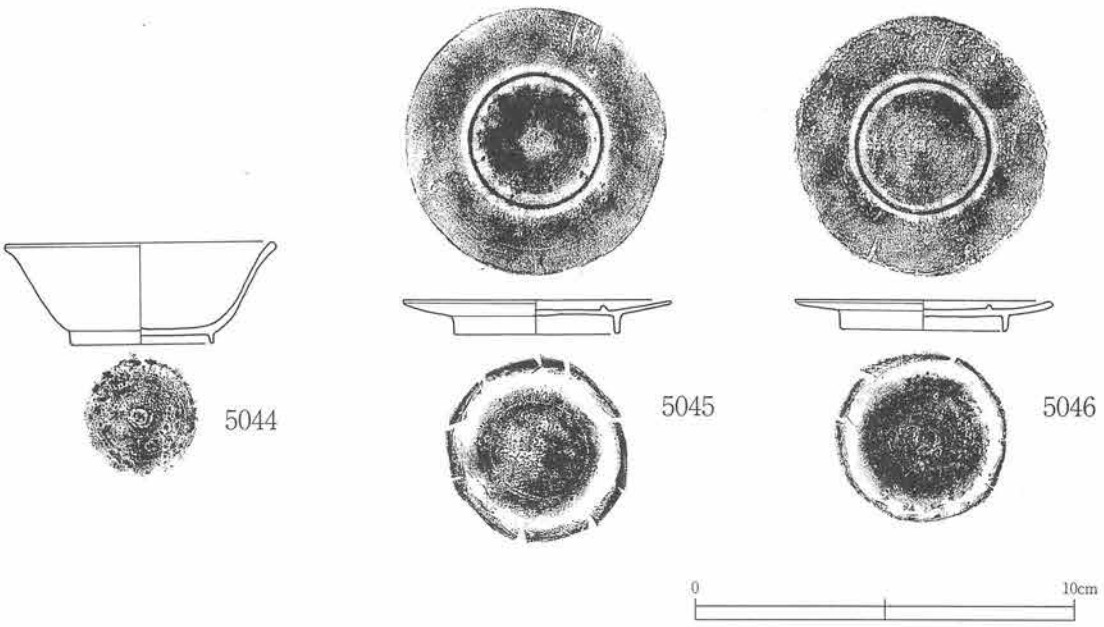
椀（5032）は素文のものである。口径7.2cm、底径3.7cm、全体の高さ2.6cm、高台高0.3cmを計る。高台部の器厚は0.9mm、椀本体部分の器厚は1.5mm、重量は67.22gである。現状の色調は全体が緑青色を呈している。高台内には同心円状の削りの痕跡がついている。この削り痕は椀部分の内面、外面にも認められる。器表面には埋没していた土に由来すると思われる砂粒が付着している。器形は、高台部がほぼ垂直に立ち上がり、椀部分の口縁部は緩く外反する。

台皿（5033）は素文のものである。口径7.1cm、底径4.3cm、全体の高さ0.9cm、高台高0.5cmを計る。高台部の器厚は1.8mm、皿部分の器厚は1.0mm、重量は46.98gである。皿部分の見込み部分に圏線状の盛り上がりがある。高さは1.1mmで断面形は三角形を呈する。全体の径は3.6cmである。現状の色調は緑青色～深緑色を呈している。器面全体にロクロ使用の削り痕跡が認められる。口唇部の一部分が腐食のため、摩耗したようになっている。椀と同様に器表面には埋没していた土に由来すると思われる砂粒が付着している。

台皿（5034）は素文のものである。口径6.8cm、底径4.3cm、全体の高さ0.8cm、高台高0.4cmを計る。高台部の器厚は1.4mm、皿部分の器厚は1.8mm、重量は40.97gである。皿見込み部分に圏線状の盛り上がりがある。高さは0.9mmで断面形は四角形を呈する。全体の径は3.6cmである。現状の色調は大部分が緑青色を呈し、緑青の皮膜が剥がれた部分が赤灰色を呈している。緑青の皮膜は口唇部全体と見込み圏線状盛り上がりの裾付近で顕著に剥がれている。器面全体にロクロ使用の削り痕跡が認められる。皿部口唇部は全周が腐食のため、摩耗したようになっている。5033と比較すると器表面の砂粒の付着は少ない。

この六器について京都国立博物館、久保智康氏に実見していただき、年代等についてご教示を賜った。製作年代については薄手の造りであること、器高、高台高が低いことから、「12世紀代」の年代を示していただいた。11世紀代のものである可能性も否定できないが、比較する11世紀以前の六器の遺品はほとんど無いということである。少なくとも13世紀以降に下る可能性は、器形から判断してほぼ無いということである。また、製品の完成度は同時代の畿内出土のものと比較しても何ら遜色がないということである。製作手順は鋳型で大まかな形を鋳出し、それを削って整形したものとのご教示を受けた。

六器の材質分析については東北芸術工科大学、松井敏也氏に蛍光X線分析をおこなっていただいた。分析方法、分析結果は第XI章に記載している。椀（5033）、台皿（5034・5035）のいずれも、銅の含有量が多く、鉛、錫の含有量が非常に少ないことから青銅製品ではなく、「銅製品」とすべきということである。またヒ素の含有量が非常に多いのが特異であるとご教示をたまわった。なお、この材質分析では鍍金の痕跡はみあたらなかったとのことである。（羽柴）



No.	器種	出土位置	金属の種類	その他	重さ（g）
5032	六器（鉢）	ⅣF55 3層上面（D区）	銅		67.22
5033	六器（台皿）	ⅣF55 3層上面（D区）	〃	5032とは約10cm離れて出土	46.98
5034	六器（台皿）	P157埋土（ⅣE17 C区）	〃	P157はC区SB４のP158と重複する穴	40.97

第195図　銅製品（密教法具）（5044～5046）

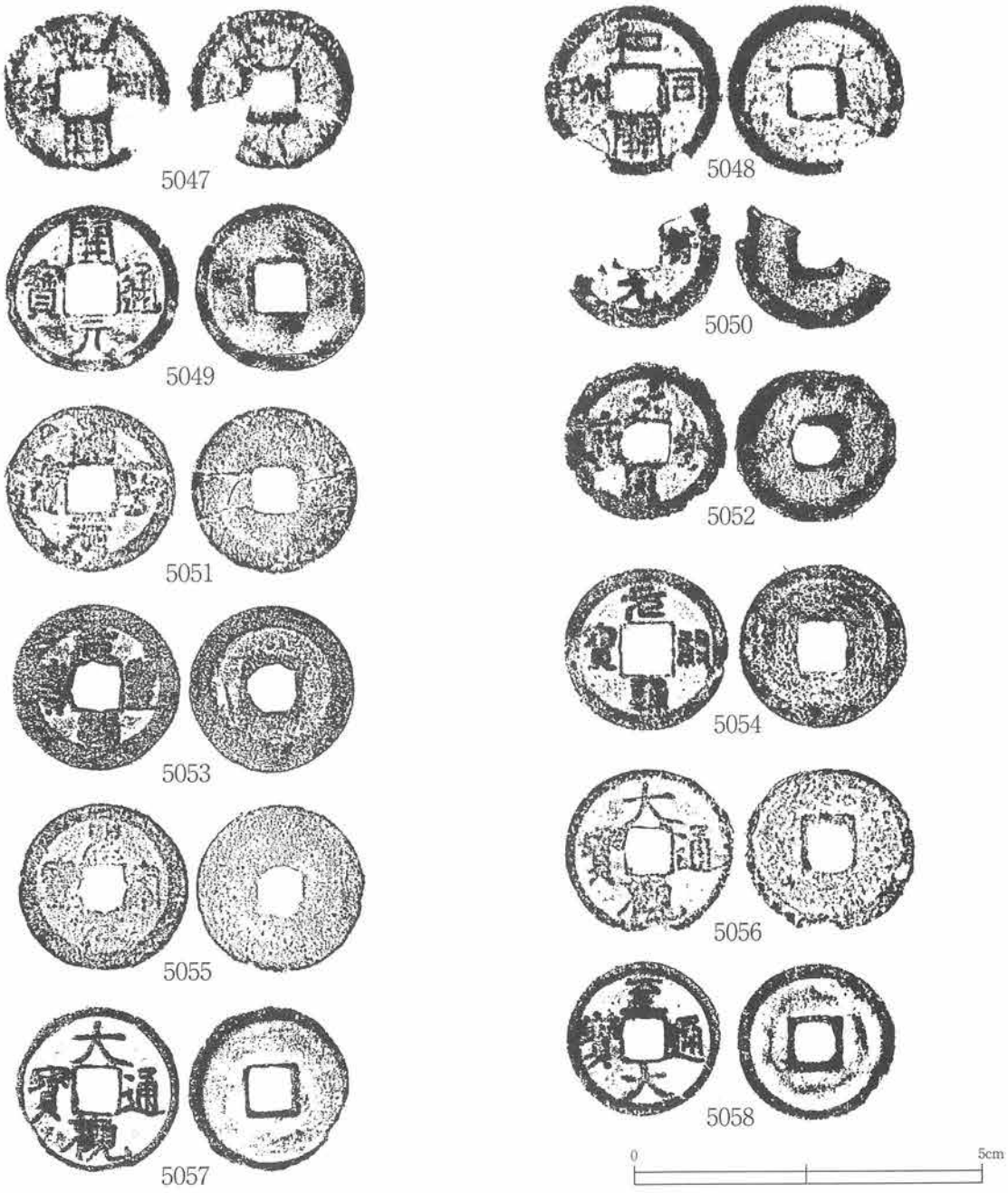
⑶　銭　　貨（第194～197図、写真図版196）

ここでは墓壙、墓域から出土した以外の銭貨を掲載している。48点を図示している。この内訳は和同開珎２点、中国銭（鐚銭、輪銭を含む）23点、寛永通寶15点、近代以降の貨幣８点である。

5047･5048は和同開珎の銅銭である。5047はD区SI１の貼床中から出土した。欠損しており、腐食のため遺存状態がやや悪い。5048はE区SI３の埋土中から出土した。一部欠損するが、腐食の度合いが少なく5047より遺存状態は良好である。

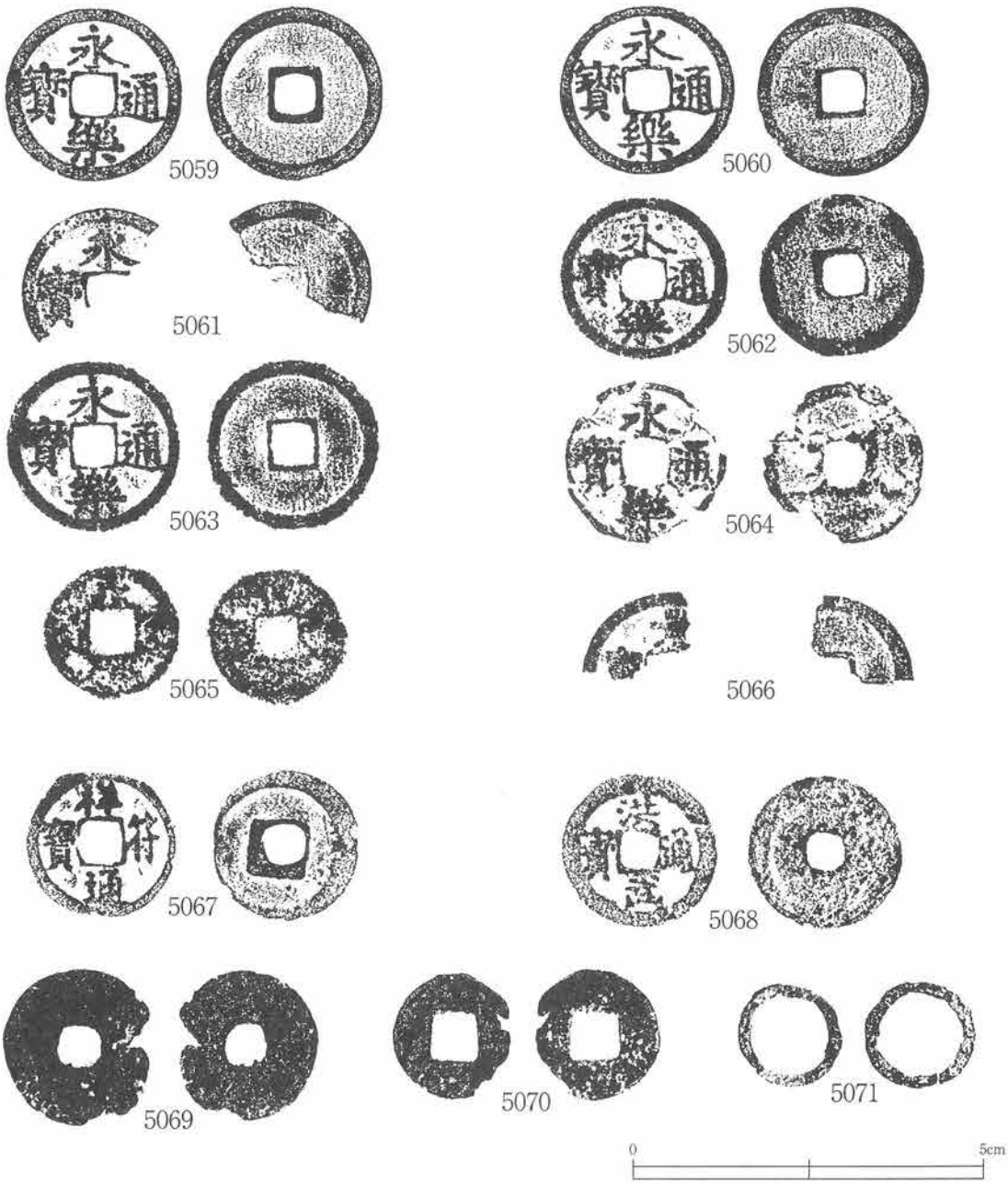
5049は唐銭の開元通寶である。重量もあり遺存状態は良好である。5050～5057は北宋銭である。5050は欠損しているが、残った文字から「祥符元寶」と判断した。いずれも厚さ、重さがしっかりしており、模鋳銭ではなく本銭と推測される。5057は元銭の至大通寶である。径がやや本銭より小さい。

5059～5064は明銭の永楽通寶である。5059～5063は本銭と思われるが、5064は模鋳銭と推測される。5065は中国銭の模鋳銭と推測されるが、銭種の判読ができなかった。5066は残存部に「景」「寶」の文字がみられ、「景祐元寶（北宋1034年）」か「景定通寶（南宋1260年）」のいずれかと思われる。5067は北宋銭の祥符通寶である。銭の周囲が削られたのか径が小さくなっている。5068は明銭の洪武通寶である。本銭と推測される。5069･5070は模鋳銭と推測される。どちらも銭種を判読できない。5071はいわゆる「輪銭」、リング銭の類と思われる。非常に脆弱な遺存状態である。（羽柴）



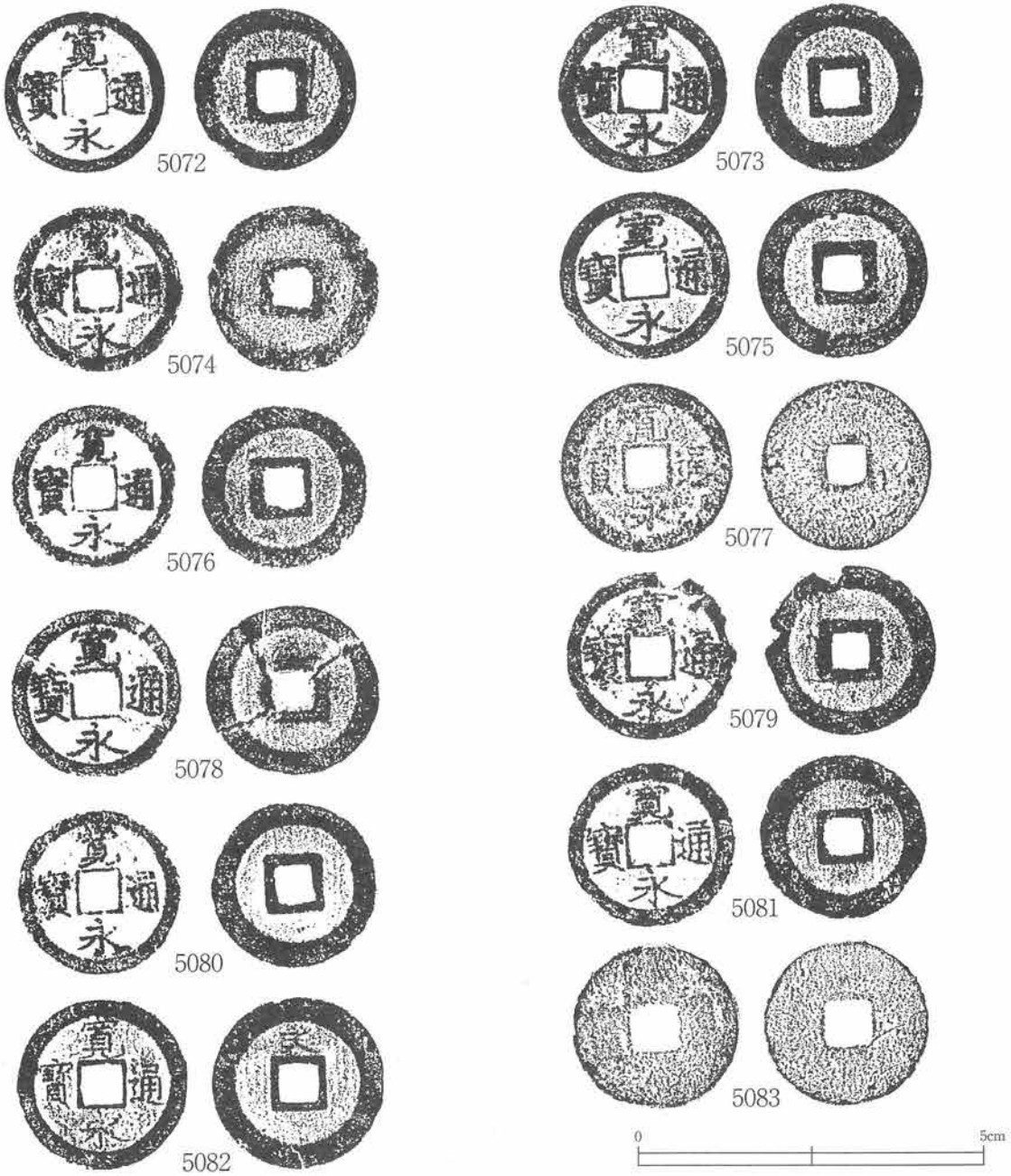
掲載No.	出土地点	銭貨名	備考	初鋳年(鋳造年)	材質	たて	よこ	厚さ	穿径	重量(g)
5047	D区SI１北西貼床	和同開珎		708	銅	2.36	2.43	0.15	0.70	1.43
5048	E区SI３埋土	和同開珎		708	銅	2.50	2.53	0.15	0.62	1.99
5049	01SD１西端	開元通寶		621・唐	銅	2.44	2.51	0.13	0.69	3.52
5050	01SD２埋土	祥符元寶		1009・北宋	銅	(1.85)	(2.38)	0.10	—	1.26
5051	D区南側表土	治平元寶	篆書	1064・北宋	銅	2.43	2.44	0.15	0.67	2.59
5052	E区P45埋土(SB２)	元豊通寶	行書	1078・北宋	銅	2.30	2.39	0.10	0.54	2.18
5053	D区ⅢF66盛土	元豊通寶	篆書	1078・北宋	銅	2.48	2.47	0.10	(0.68)	3.48
5054	C区ⅣE18検出面	元祐通寶	篆書	1086・北宋	銅	2.45	2.44	0.16	0.67	3.35
5055	D区SK121埋土	聖宋元寶	篆書	1101・北宋	銅	2.44	2.46	0.12	0.66	2.83
5056	D区P206埋土	大観通寶		1107・北宋	銅	(2.40)	2.47	0.20	0.63	2.89
5057	D区旧村道盛土	大観通寶		1107・北宋	銅	(2.42)	2.43	0.14	0.61	2.90
5058	E区P94礎盤上(SB6)	至大通寶		1310・元	銅	2.31	2.31	0.14	0.57	2.94

第196図　銭貨①(5047～5058)



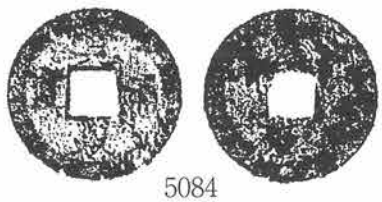
掲載No.	出土地点	銭貨名	備考	初鋳年（鋳造年）	材質	たて	よこ	厚さ	穿径	重量（g）
5059	C区南側	永樂通寶		1408・明	銅	2.50	2.52	0.15	0.59	3.27
5060	C区南側	永樂通寶		1408・明	銅	2.45	2.46	0.10	0.60	2.43
5061	C区ⅢE98表採	永樂通寶		1408・明	銅	(1.81)	(2.36)	0.13	—	1.58
5062	E区SK２埋土（SB１）	永樂通寶		1408・明	銅	2.37	2.37	0.11	0.56	2.16
5063	E区SK３埋土（SB１）	永樂通寶		1408・明	銅	2.48	2.50	0.11	0.59	1.84
5064	01SX１埋土下位	永樂通寶		1408・明	銅	2.35	2.34	0.13	0.63	0.85
5065	E区P３埋土（SB１）	不明			銅	(1.90)	(1.91)	0.07	0.62	0.80
5066	01C区ⅣE45 ３層	不明			銅	—	—	—	—	0.63
5067	C区SD104南側埋土	祥符通寶		1009・北宋	銅	2.10	2.05	0.10	0.55	2.30
5068	C区SD104南側埋土	洪武通寶		1368・明	銅	2.21	2.20	0.12	0.55	2.71
5069	E区P65礎石上（SB１）	不明			銅	2.17	(1.66)	0.06	0.55	0.65
5070	E区SK３埋土（SB１）	不明			銅	(1.82)	(1.75)	0.06	0.67	0.45
5071	E区P79底面	不明	輪銭？		銅	1.35	1.40	0.06	1.20	0.17

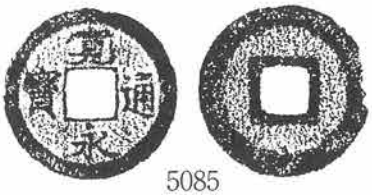
第197図　銭貨②（5059～5069）

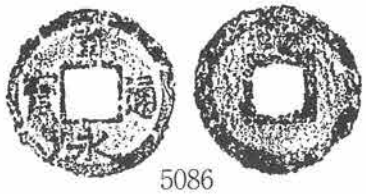


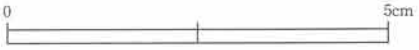
掲載No.	出土地点	銭貨名	備考	初鋳年(鋳造年)	材質	たて	よこ	厚さ	穿径	重量(g)
5072	C区Ⅳ E26表採	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.37	2.34	0.12	0.54	2.27
5073	E区P６埋土(SB１)	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.45	2.46	0.14	0.53	3.39
5074	E区ⅠA22検出面	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.49	2.52	0.17	0.49	3.48
5075	E区ⅠB62検出面	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.49	2.51	0.16	0.53	3.86
5076	E区排土	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.42	2.42	0.13	0.58	3.33
5077	不明	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.48	2.47	0.14	0.56	3.17
5078	01SX１埋土下位	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.50	2.53	0.10	0.61	1.90
5079	01SX２底面	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.47	2.50	0.11	0.53	2.23
5080	01SX３埋土	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.43	2.42	0.13	0.54	2.61
5081	01P３埋土	寛永通宝	古寛永	1636	銅	2.45	2.44	0.12	0.52	2.38
5082	01P103埋土	寛永通宝	新寛永・背文	1668	銅	2.52	2.52	0.13	0.59	3.43
5083	D区P130埋土	寛永通宝	新寛永・無背	1697	銅	2.39	2.40	0.10	0.66	2.13

第198図　銭貨③(5070～5081)

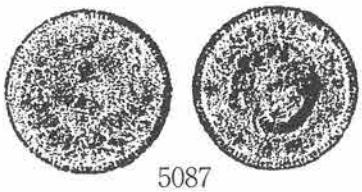

5084

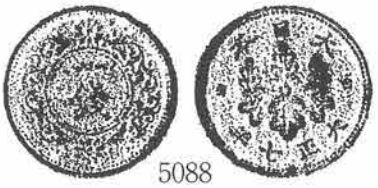

5085


5086

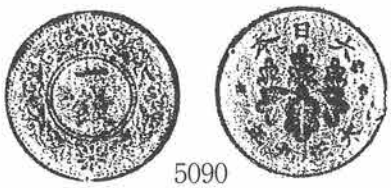


掲載No.	出土地点	銭貨名	備考１	初鋳年（鋳造年）	材質	たて	よこ	厚さ	穿径	重量（g）
5084	E区SK15埋土	寛永通宝	新寛永・無背	1697	銅	2.30	2.32	0.13	0.60	2.20
5085	E区ⅠA23検出面	寛永通宝	新寛永・無背	1697	銅	2.30	2.30	0.10	0.64	1.81
5086	01SX１付近３層	寛永通宝	新寛永・無背	1697	銅	2.28	2.24	0.11	0.66	1.81


5087

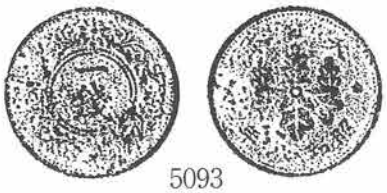

5088

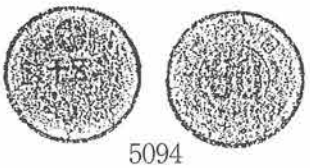
5089


5090

5091

5092


5093


5094

掲載No.	出土地点	銭貨名	備考	初鋳年（鋳造年）	材質	たて	よこ	厚さ	穿径	重量（g）
5087	E区表土	半銭		明治19	銅	2.18	2.18	0.12	—	3.29
5088	C区ⅢE13攪乱	一銭		大正７	銅	2.31	2.30	0.13	—	3.68
5089	C区ⅢE22検出面	一銭		大正８	銅	2.35	2.31	0.16	—	3.48
5090	D区南側攪乱	一銭		大正９	銅	2.30	2.30	0.12	—	3.60
5091	E区調査区西側表採	一銭		大正10	銅	2.30	2.31	0.14	—	3.62
5092	E区表採	一銭		大正12	銅	2.30	2.30	0.14	—	3.73
5093	C区攪乱	一銭		昭和８	銅	2.31	2.31	0.13	—	3.56
5094	B区SK26埋土	五十銭		昭和23？	黄銅	1.89	1.89	0.14	—	2.37

第199図　銭貨④（5082～5092）

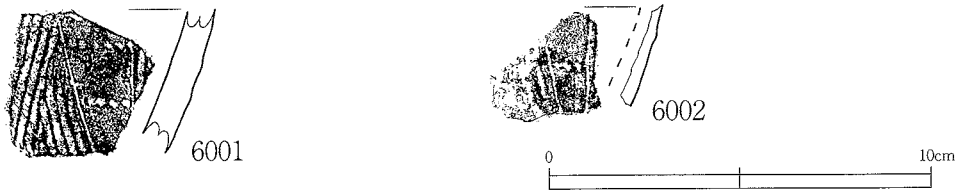
7　その他の遺物（後北式土器、土製品、石製品）

その他の遺物として、後北式土器、土製品（人形、瓦質小皿）、石製品（硯、人形、石錘、挽臼、石鉢）、をとりあげる。

(1)　後北式土器（第198図、写真図版196）

古代の竪穴住居、E区SI３の貼床の有無を確かめるため、床面を掘り下げ中、後北式土器の破片が出土した。周辺を掘り広げたところ、合計５片の後北土器片が出土した。この内図示したのは２片（6001・6002）で、他の３片は微細片のため図示していない。これらの土器片は胎土、施文が類似し、同一個体の深鉢と推測している。周辺をさらに広げ、遺構の検出に努めたが、遺構を見いだすことはできなかった。出土したグリッドはＩA11グリッド付近で、層位は平成15年度E区の３～４層に相当する。

6001は体部破片である。出土した中では最も大きい破片である。LR単節の帯縄文と三角形連続刺突文、沈線が施されている。微隆起線は施されていない。胎土は砂粒が多く混じり、海綿状骨針は肉眼では観察できない。外面には全体に炭化物が付着している。6002も体部破片である。剥離した外面の破片で、6001と同様にLR単節の帯縄文と三角形連続刺突文、沈線が施されている。胎土も6001と同様で、外面に炭化物が付着する。（羽柴）



No.	種類	出土位置	その他
6001	後北式土器	IA32　3～4層	L単節帯縄文　三角形連続刺突文
6002	〃	〃	6001と同一個体　E区 SI3の床下から出土

第200図　後北式土器（6001～6002）

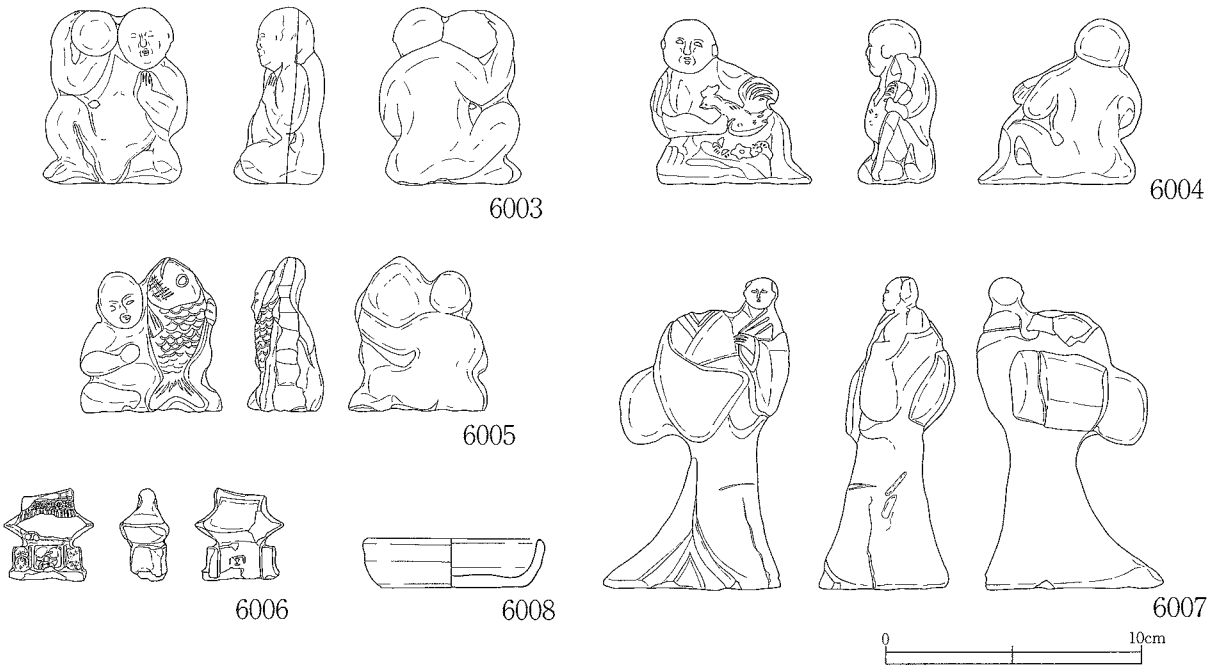
(2)　土製人形（第199図、写真図版200）

6003～6005・6007は人形である。両面とも型抜き成形で、内部は中空である。6003は俵担ぎ、6004は鶏抱き、6005は魚（鯛）抱きと呼ばれる人形である。6007は子守りをする女性を象ったものである。なお、女性の頭部が欠損しているが、これが意図的なものであるか否かは不明である。6005・6007は底面が作り出されておらず、内面が見えるようになっている。いずれも両側面には接合痕あるいはそれを撫で消した痕跡が認められる。6004は内部に玉が入れられており、振ると音が鳴るようになっている。今回出土した土製人形にはいずれも彩色は確認できないが、製作段階から無彩色であったか土中で剥落したかは不明である。

6006は神社の社殿を象った型抜き成形の製品である。鰹木をもつ本殿をモチーフとしたもので、小型品であるが屋根には垂木や軒丸瓦などが子細に表現されている。

6008は瓦質小皿である。底部は平底で、体部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁部内外面にはナデ調整が施される。底部はヘラによる切り離し技法を用いており、反時計回りに切り離しの痕跡が認められる。内外面ともに黒色処理されており、内面には赤色顔料（酸化鉄か）が付着している。

（村田）



No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径			釉薬	絵付・文様			
6003	土製人形	B区SZ９	7.0	最大幅5.5		100		無釉	彩色なし		近世～近代	俵担ぎ
6004	土製人形	B区SZ78	6.5	6.7		100		無釉	彩色なし		近世～近代	鶏抱き
6005	土製人形	B区SZ99	6.1	5.0		100		無釉	彩色なし		近世～近代	魚抱き
6006	土製人形	B区ⅡC100　２層	3.6	1.9		90		無釉	彩色なし		近世～近代	神社
6007	土製人形	B区SZ99	12.4	7.2		90		無釉	彩色なし		近世～近代	子守の女性
6008	瓦質小皿	B区SZ59	2.0	6.8	5.7	100	100		内外面黒色処理			

第201図　土製品（6003～6008）

(3) 石　製　品（第200～203図、写真図版196・201・202）

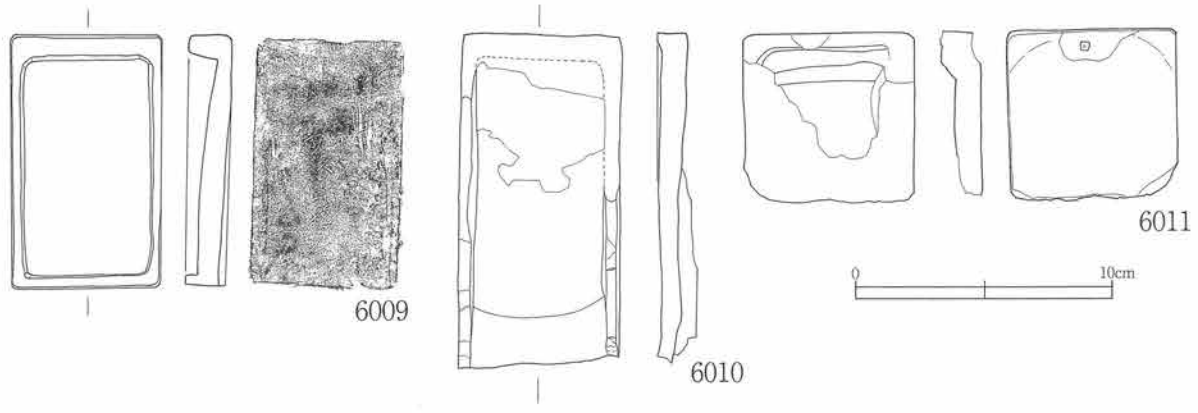
6009は頁岩製の硯である。平面形は隅丸の長方形である。墨の付着は認められないが、内外面とも磨滅が著しいことから使用品であったことは明白である。底面には線刻で「賀蔵」の銘が入れられている。6010は赤色頁岩製の硯で、海側の二角と陸側の上面を欠損している。内面は鉄が付着しているため明瞭ではないが、底面の磨滅が著しいことから使用品であることは明白である。6011は頁岩製の硯である。２次的に利用されたものと考えられ、陸側を打ち掻いて海を形成している。（村田）

平成13年度調査の01SD１の埋土（ⅣD07グリッド）から石製の人形（6012）が出土している。凝灰岩製で橙色を呈している。一見、土製品と見まがう色調、質感を呈するが、詳細に観察すると土製品のような胎土の混入物が全く無く、石製品と判断できる。重量は9.08gである。線刻により人面が表現されている。目は吊り上がり、半開きの口から牙が突き出している。口の下にはあご髭？が表現されている。髭の下には円形の刺突？があるが、意図的なものか否か判断が難しい。鼻は「V」字形で表現されている。底面は平坦に成形されている。底面ほぼ中央に、開口部径６～８㎜、深さ約1.1cmの円錐形の掘り込みがあり、棒を装着したと推測される。側面、背面には石を削った際の、縦位の成形痕が全体にある。後頭部は欠損したように抉れているが、その面にも成形痕があり、製作時からの抉れと判断できる。頭頂部には径４～６㎜の楕円形の欠損痕？があり、角、あるいは烏帽子が表現されており、それが欠損した可能性がある。しかし、確実にこれが欠損痕か否か、判別は難しく、はっきり断定できない。

この石製品の出土した01SD１からは11世紀中～後半のかわらけと、13世紀後半～14世紀前半のかわらけが出土している。かわらけの年代観から、この人面石製品は11世紀中～後半かまたは13世紀後半～14世紀前半のどちらかに属すると推測される。

この人面の表情が目を吊り上げ、口から牙をむき出しにしていることから「疫病神」を表したものと推測される。用途は、「疫」や「穢れ」を払う「形代」と推測される。

6013は石製の錘と考えられる。6012と全く同じ石材で一見土製品と思える色調、色感を呈する。紐



No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾		産地	年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付・文様			
6009	石製硯	B区SZ78	1.8	10.0	6.0	100				頁岩		裏面に所有者？の銘
6010	石製硯	B区SZ31	1.6	13.2	6.4	70				赤色頁岩		
6011	石製硯	C区ⅢE82　２層	1.6	(6.7)	(6.7)	40				頁岩		底面磨滅、転用

第202図　石製品①（6009～6011）

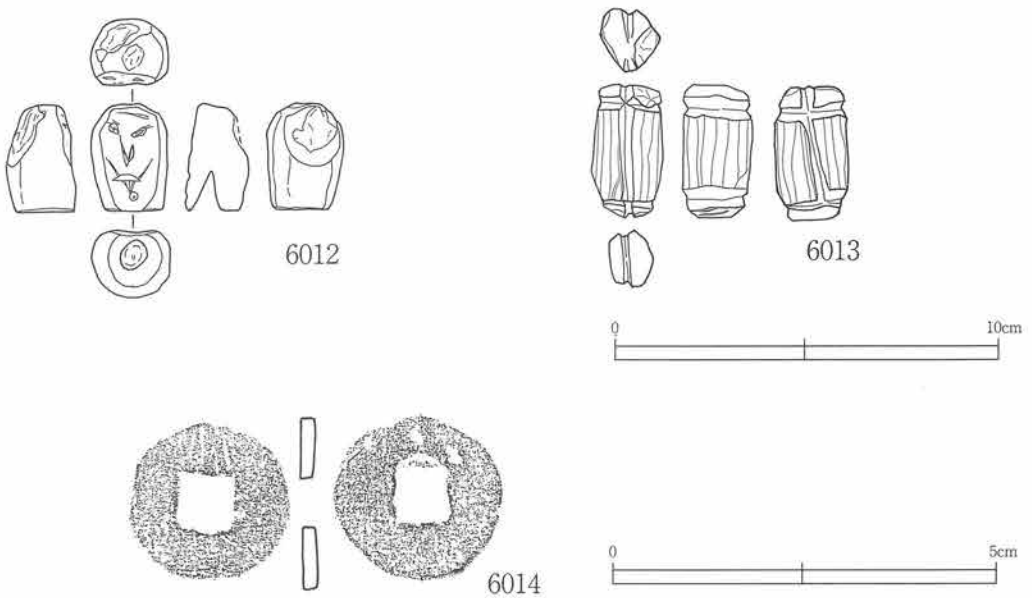
を巻く刻みが体部と上下両端面に施されている。出土は平成16年度調査のB区沢跡１層（ⅢD08）からの出土である。出土遺構の年代観から11世紀～14世紀に属する可能性が高い。石材が全く同一なことから、石製人形6012と同時期と推測される。

6014は石製の貨幣模造品である。石質は凝灰岩で暗赤褐色の色調である。形状から貨幣の模造品と判断した。表面（図の左側）の上部に線刻が施され文字の様にも見えるが判読できず、文字を意図したものではない可能性もある。C区SB１のP15の埋土から出土し、建築の際の祭祀行為に使用された可能性がある。時期については建物の年代が不明瞭なことから特定できないが、中世～近世初頭の可能性が考えられる。

6015は石製挽臼の上臼である。２つに割れて出土した。半分がE区SB１の柱穴P７の柱痕に入り込んだ状態で、もう半分がE区SK21の１層中から出土した。接合すると完形になる。石質はデイサイト（石英安山岩）である。卸目は放射状のパターンである。穀物供給高は上面では台形を呈している。把手を差し込む穴は四角形を呈している。把手を差し込む穴の対面には長方形の浅い穴がある。下面（目のある面）は斜めに磨り減っている。所属年代は出土遺構から近世の可能性が高い。

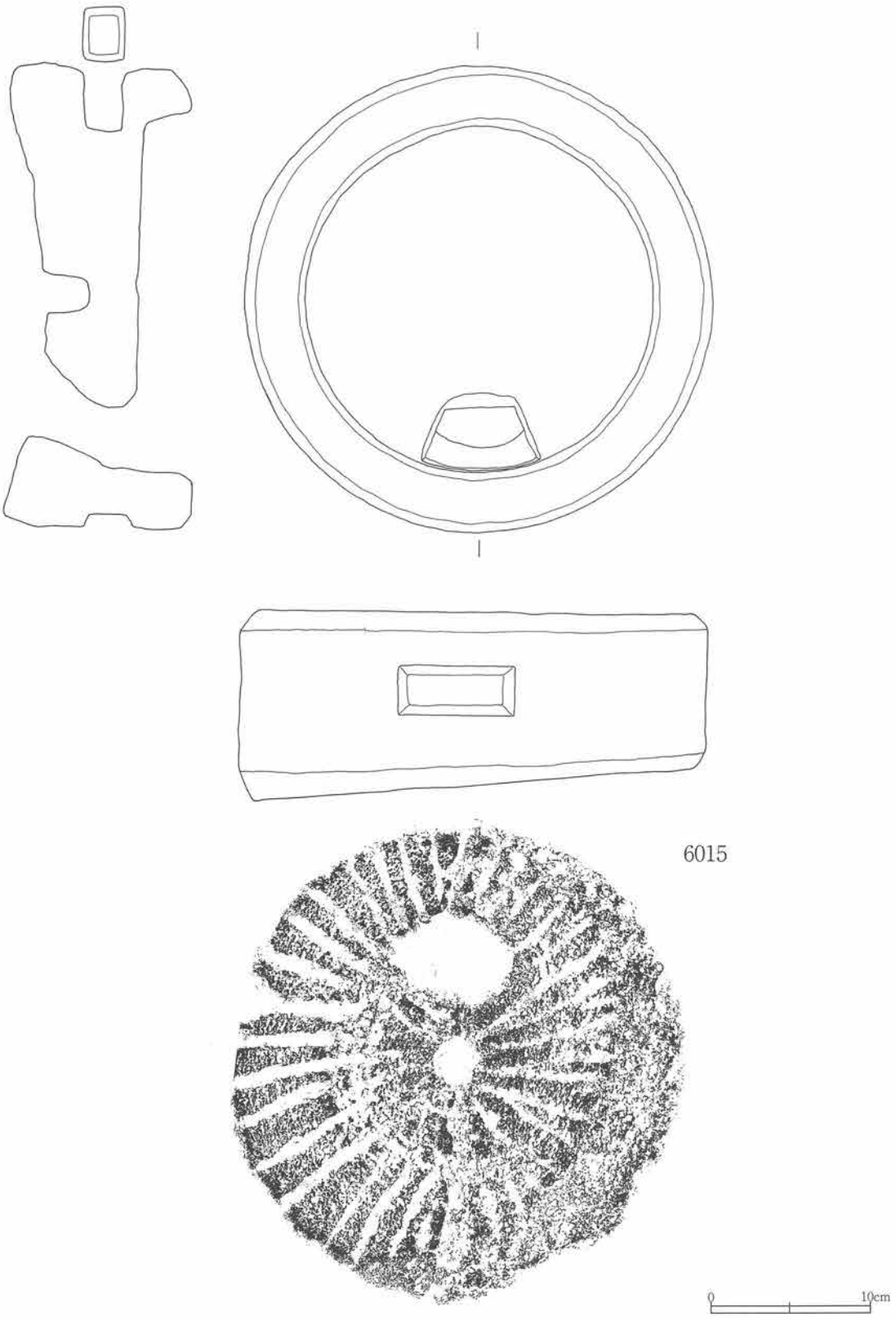
6016は石製挽臼の下臼である。大グリッドＩA区（平成15年度E区）の表採品である。約1/4の残存である。全体に被熱を受けているようであり、全面がボロボロになっている。摩耗と被熱のため、卸目はほとんど確認できない。拓本を観察すると放射状の目のパターンが読み取れそうであるが、はっきり断定できない。底面には成形時の鏨跡が観察できる。石質はデイサイト（石英安山岩）である。所属時期は不詳である。

6014は石鉢である。ＩA22グリッドの現代の盛土中（平成15年度E区）から出土した。石質はデイサイト（石英安山岩）である。外底面は平底で、外面には成形時の鏨跡が残る。内面はあまり摩耗しておらず、擂る作業には使用されていないと思われる。所属時期は近世～近代と推測される。　（羽柴）



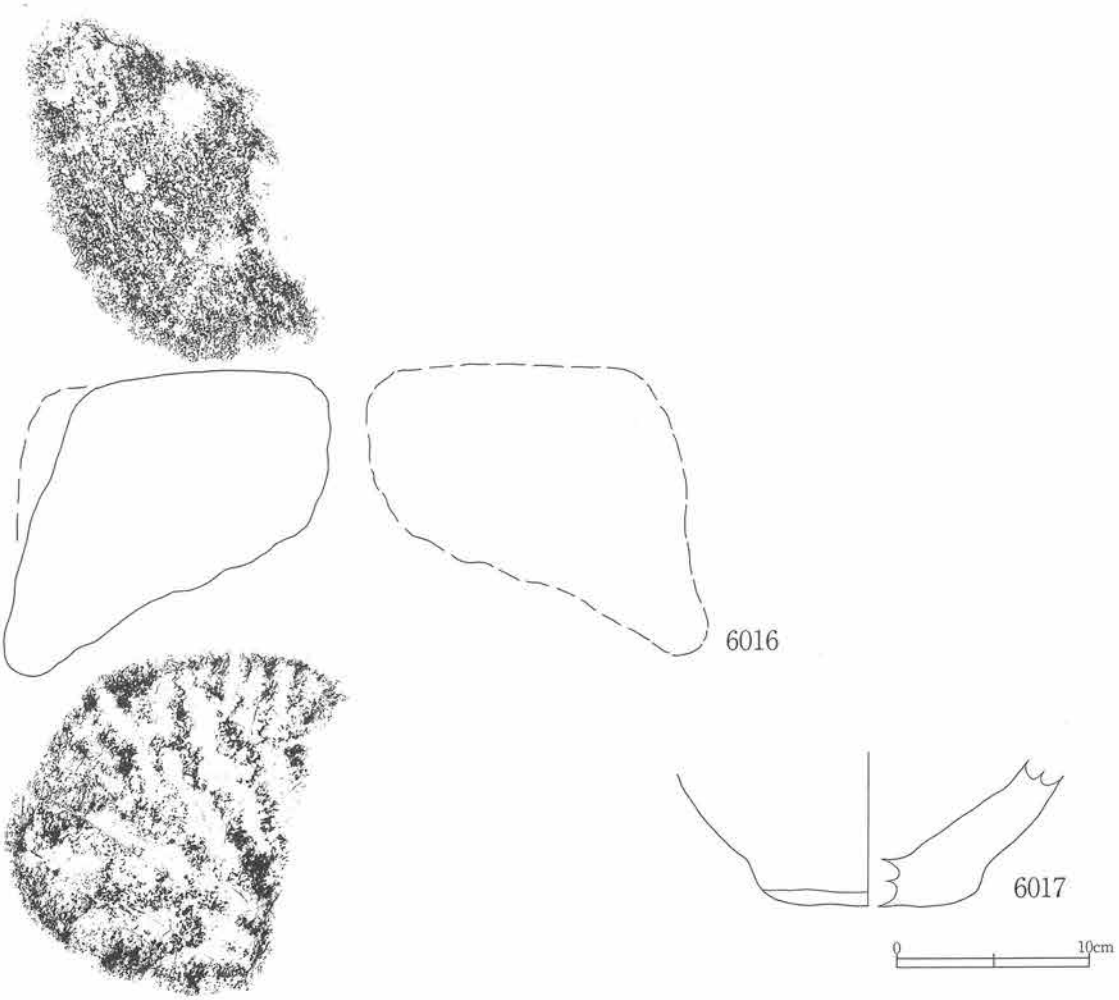
番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ（g）
6012	人形	01SD１埋土（ⅣD07）	凝灰岩	線刻により人面を表現	9.08
6013	錘	B区沢跡１層（ⅢD08）	凝灰岩	2004年度出土　6003と全く同じ石材	9.20
6014	銭形	C区SB１P15埋土	凝灰岩	銭を模したものか	2.10

第203図　石製品②（6012～6014）



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ（g）
6015	石臼	E区SB１P７柱痕	デイサイト	２つに割れている。E区SK21 １層からも出土	12,000

第204図　石製品③（6015）



番号	器種	出土位置	石質	その他	重さ（g）
6016	挽臼	ＩA区(E区)	デイサイト	下臼、被熱している。 卸し目不明	4,900
6017	石鉢	ＩA22盛土中(E区)	デイサイト	内面はあまり摩耗していない。	900

第205図　石製品⑤(6016～6017)

8 近 代 遺 物

(1) 近代磁器（第204・205図、写真図版203・204）

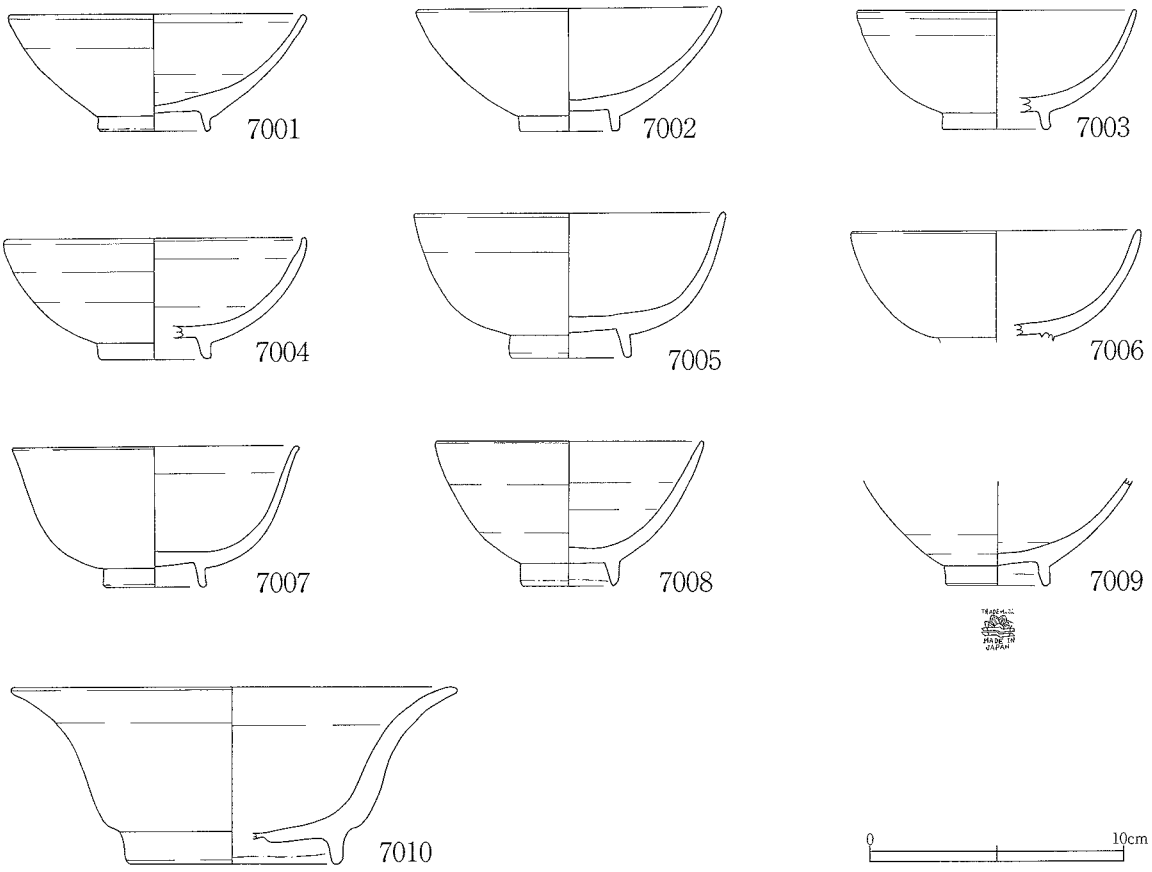
近代(ここでは明治時代以降としておく)に属する遺物は調査区全域から大コンテナで4箱分程度出土している。なかでも型紙摺絵や銅板転写を用いた磁器製品が最も多いが、出土量が多いにもかかわらず近世陶磁器に比べてバリエーションが少ない。したがって、今回は型紙摺絵・銅板転写製品のなかでも代表的な器形・文様をもつものを中心に掲載してその特徴を述べることにする。

7001～7007は型紙摺絵、7008・7009は銅板転写の製品である。平碗形（7001・7002）・丸碗形（7003～7006・7008・7009）・端反碗形（7007）があるが、丸碗形が多い。体部下半の器壁が厚いものがほとんどで、口縁部は端部が丸く収まるもの（7001など）と尖るもの（7002など）がある。高台はいずれも厚手の付高台で、高台内が削り込まれるものが多い。いずれも全面に透明釉が施され、7001～7007には人工コバルト、7008・7009は赤や緑などの顔料を用いて文様が描かれる。（村田）

7010は型紙摺絵の鉢である。高台脇がやや張っており、体部は大きく外反して口縁部へと至る。高台は蛇ノ目凹形高台で、高台内は中央を除いて釉剥ぎが行われる。文様は体部外面と口縁部内面に施される。

7011～7016は中皿（口径15.0cm前後）である。いずれも底部から体部下半の器壁が厚く、体部は丸味をもって立ち上がる。7011～7015は口縁部が輪花状になる。輪花の成型方法としてはヘラ状工具で内面を削ぐ方法（7011・7012）と指押さえを多用することによって内面を凹ませる方法（7014・7015）がある。高台はいずれも蛇ノ目凹形高台である。文様は体部内面全体に施され、体部外面に唐草文などの摺絵が施されるものも多い。なお、7016の体部外面の唐草文は筆描きである。

7017～7020は大皿（口径20.0cm以上）である。7017～7019は底部及び体部下半の器壁が厚く、体部は



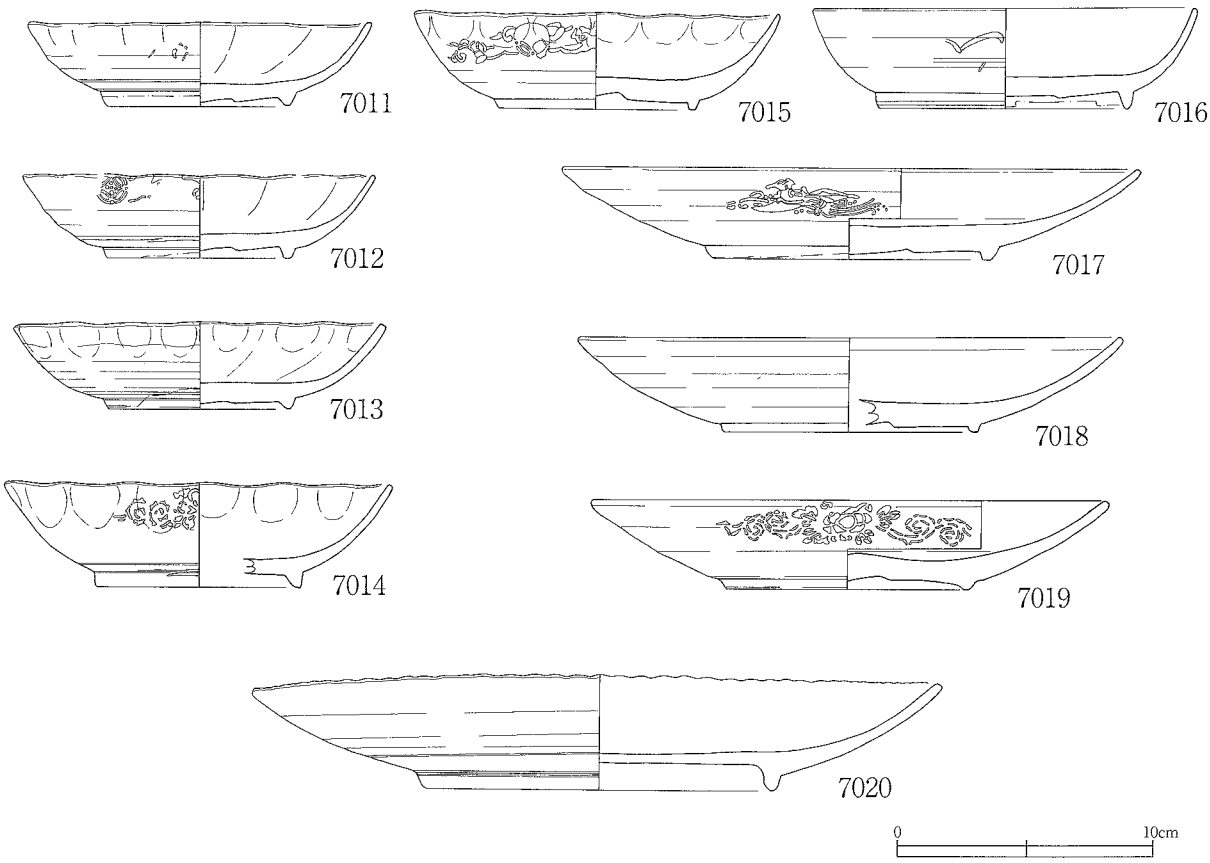
No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾			年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付方法	裏文様・銘		
7001	碗	E区ⅠZ29　第1検出面	4.7	11.5	4.2	60	60	透明釉	型紙摺絵			
7002	碗	E区ⅠA32　第1検出面	4.9	11.9	4.0	5	40	透明釉	型紙摺絵			
7003	碗	D区ⅣF葛西家北側　表土	4.9	10.9	4.0	35	35	透明釉	型紙摺絵			
7004	碗	C区ⅢE旧佐藤家　表土	4.9	11.6	4.4	30	30	透明釉	型紙摺絵			
7005	碗	B区ⅡD74	4.7	12.2	4.6	5	25	透明釉	型紙摺絵			
7006	碗	C区ⅢE旧佐藤家	(4.4)	11.2	—	35	0	透明釉	型紙摺絵			
7007	碗	E区西側　斜面中	5.6	11.0	3.9	20	70	透明釉	型紙摺絵	製造番号		
7008	碗	D区SD2　埋土	5.7	10.5	3.6	80	100	透明釉	銅版転写	銘有り		
7009	碗	E区西側　斜面中	(4.2)	—	4.0	0	100	透明釉	銅版転写			
7010	鉢	C区ⅢE旧佐藤家　表土	7.0	17.0	7.6	45	45	透明釉	型紙摺絵			蛇ノ目凹形高台

第206図　近代陶磁器①（7001～7010）

直線的に外方に開きながら立ち上がる。高台は蛇ノ目凹形高台である。体部外面には鳳凰(7017)や草花文(7018)などの摺絵が施される。7020は、体部が直線的に外方に開く。口縁部は非常に細かい輪花状に成形されており、輪花の部分には柿釉が施されるいわゆる「いげ皿」である。高台は厚手の付高台で、高台内は若干削り込まれる。　(村田)

(2)　ガラス瓶(第206・207図)

調査区内からは近～現代のガラス瓶が多量に出土している。ここではその代表的なものを幾つか図示する。なお、各遺物のデータは表中に示している。　(村田)

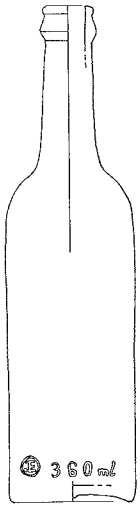


No.	器種	出土地点・層位	法量(cm)			残存率(%)		装飾			年代	備考
			器高	口径	底径	口径	底径	釉薬	絵付方法	裏文様・銘		
7011	輪花中皿	E区西側　斜面中	3.3	13.6	7.2	20	90	透明釉	型紙摺絵	唐草文		蛇ノ目凹形高台
7012	輪花中皿	E区西側　斜面中	3.3	13.8	7.2	10	95	透明釉	型紙摺絵	草花文		蛇ノ目凹形高台
7013	輪花中皿	C区ⅢE　表土	3.5	14.3	7.2	20	45	透明釉	型紙摺絵			蛇ノ目凹形高台
7014	輪花中皿	D区ⅢF葛西家北側　表土	4.1	15.0	8.2	40	40	透明釉	型紙摺絵	草花文		蛇ノ目凹形高台
7015	輪花中皿	D区墓地　第1検出面	3.8	14.4	7.7	40	100	透明釉	型紙摺絵	唐草文		蛇ノ目凹形高台
7016	中皿	D区ⅣF葛西家北側　表土	4.0	14.8	9.6	5	35	透明釉	型紙摺絵	唐草文		蛇ノ目凹形高台
7017	大皿	E区西側　斜面中	3.6	22.6	10.8	10	100	透明釉	型紙摺絵	鳳凰		蛇ノ目凹形高台
7018	大皿	C区ⅢE旧佐藤家　表土	3.8	21.1	9.8	15	45	透明釉	型紙摺絵			蛇ノ目凹形高台
7019	大皿	E区ⅠA　表採	3.5	20.0	9.4	100	100	透明釉	型紙摺絵	草花文		蛇ノ目凹形高台
7020	輪花大皿	B区墓地　表土	4.5	27.2	13.8	90	100	透明釉	型紙摺絵			

第207図　近代陶磁器②(7011～7020)

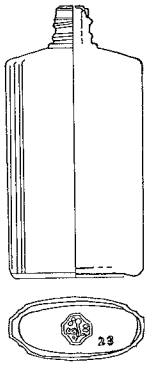
7021

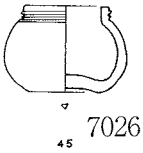
7022

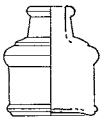


7023

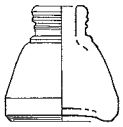
7024


7025

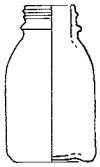

7026



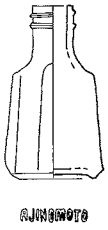
7027



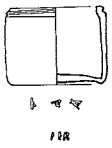
7028

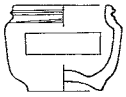

7029

7030



7031

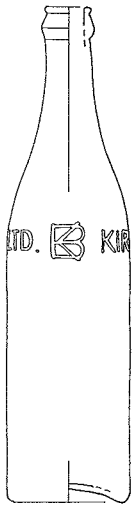

7032


7033

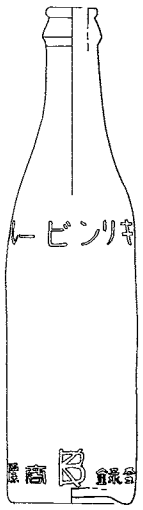
7034

No.	用途・内容物	法量(cm)			残存率(%)		色調	備考
		器高	口径	底径	口径	底径		
7021	カルピス	(26.0)	—	6.0	0	100	無色透明	
7022	ソース	24.0	1.6	5.5	100	100	うすい緑色	360mℓ、ブルドックソース
7023	しょうゆ	24.0	1.8	5.5	100	100	うすい緑色	360mℓ
7024	化粧品	13.0	1.6	5.8	100	100	濃い緑色	
7025	化粧品	13.0	1.4	5.8	100	100	無色透明	
7026	クリーム	4.2	4.8	3.4	100	100	ピンク	E区西側出土
7027	インク	5.3	1.8	4.8	100	100	緑色	底面に「S. L. N」、ⅢE区出土
7028	インク	5.6	2.2	4.8	100	100	緑色	底面に「S. S. S」、ⅢE区出土
7029	薬	7.5	2.2	3.5	100	100	茶色	ⅢE区出土
7030	目薬	9.0	0.4	1.2	100	100	緑色	ⅢE区出土
7031	調味料	8.3	1.8	4.5	100	100	無色透明	「AJINOMOTO」、ⅢE区出土
7032	のり	4.6	4.0	4.3	100	100	緑色	ヤマトのり
7033	クリーム	4.2	4.5	3.5	100	100	白色	E区西側出土
7034	クリーム	2.6	2.2	2.8	100	100	白色	

第208図　ガラス瓶①(7021～7034)



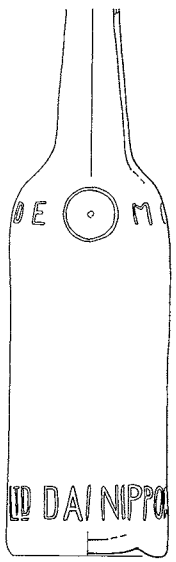
7035



7036

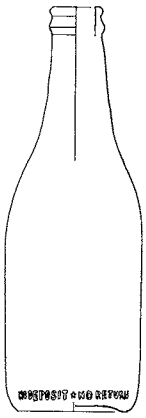
7037

7038

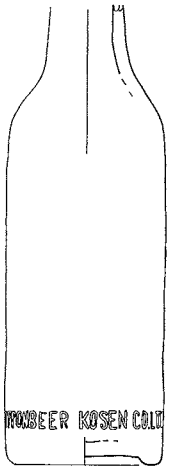


7039

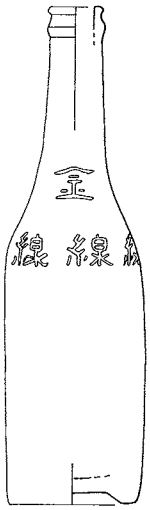
7040



7041



7042



7043

No.	用途・内容物	法量(cm)			残存率(%)		色調	備考
		器高	口径	底径	口径	底径		
7035	ビール	24.0	1.8	5.2	100	100	無色透明	キリンビール
7036	ビール	24.0	1.8	5.4	100	100	茶色	キリンビール
7037	ビール	(26.5)	–	6.4	0	100	茶色	キリンビール、ⅢE区出土
7038	ワイン	29.0	2.3	6.4	100	100	茶色	赤玉ワイン
7039	ビール	(26.5)	–	7.0	0	100	茶色	大日本ビール、E区西側出土
7040	ビール	19.0	2.0	5.4	100	100	茶色	製造番号8312-56　輸入ビール米ダグラス社製
7041	ビール	19.5	2.0	5.0	100	100	茶色	製造番号68-109　輸入ビール米ダグラス社製
7042	ビール	(22.0)	–	6.6	0	100	茶色	ユニオンビール、E区西側出土
7043	サイダー	24.0	2.0	5.8	100	100	濃い緑色	金線サイダー、D区東側出土

第209図　ガラス瓶②(7035～7043)

XI　付　　編

1　土壌分析・放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、古代～中世の遺構である溝跡（C区SD101）と、はたけ状遺構とされる畝跡（D区西壁、D区SX21）を対象に、自然科学的手法を用いて、1）溝跡の年代推定、2）はたけ状遺構の栽培植物の検証、という2点の課題について検討する。

(1)　はたけ状遺構の栽培植物の検証

1）試料

試料は、本遺跡発掘調査区内2箇所（D区西壁、D区SX21、C区SD101）から採取された土壌9点（試料番号1～9）である（表1）。以下に各地点と試料の概要を示す。

・D区西壁

当地点は、発掘調査区土層断面に畝跡が検出される地点である。土層は、I～VIb層の6層に分層されている。このうち、V層上面から畝間が認められることから、発掘調査所見によれば当土層を作土として耕作を行っていた可能性が考えられている。試料は、当地点の土層のIII・IV・VIa（試料番号1・2・5）とV層に含まれる畝間覆土（試料番号4）と畝間に挟まれる作土と考えられる土層（畝b：試料番号3）から採取された土壌5点である。

表1　土壌分析試料一覧

試料番号	採取地点	層位	畝・畝間	土　色	土　質	P	PO
1	D区西壁	III層		灰黄褐色	シルト質細粒砂	●	●
2		IV層		灰黄褐色	シルト質細粒砂	●	●
3		V層	畝b	にぶい黄褐色	シルト質細粒砂	●	●
4			畝間	灰黄褐色	シルト質細粒砂	●	●
5		VIa層		灰黄褐色	シルト質細粒砂	●	●
6	SX21		畝	オリーブ褐色	シルト質細粒砂	●	●
7			畝	灰黄褐色	シルト質細粒砂	●	●
8			畝間　覆土1層	オリーブ褐色	シルト質細粒砂	●	●
9			畝間　覆土3層	オリーブ褐色	シルト質細粒砂	●	●

凡例）P：花粉分析　PO：植物珪酸体分析

・D区SX21

D区のほぼ中央部、C区SD101西側から検出された畝間状遺構に相当する。当地点の畝間状遺構は、発掘調査時の所見では、To－aの下位から検出されている。このことから、少なくとも10世紀頃にはこれらの火山灰に覆われ、使用されなくなったと考えられる。試料は、畝間及び畝間に挟まれる土層（試料番号6，試料番号7）から採取されている。さらに、検出された畝間の幾つかは2～4層に分層され、特に4層に分層された畝間の覆土（畝間1層：試料番号8，畝間3層：試料番号9）より採取が行われている。

これら試料について、全点を対象に花粉分析・植物珪酸体分析を行う。なお、これら土壌は、試料によって灰黄褐色、にぶい黄褐色、オリーブ褐色と土色が異なるが、いずれもシルト質細粒砂からなる。

2）分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による

植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理的、化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。なお、表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

(2) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2. 5）の順に物理的、化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定し、計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

3）結果

(1) 花粉分析

結果を表2に示す。花粉化石は、各試料ともほとんど検出されない。検出された種類は、木本花粉6種類（ツガ属、トウヒ属、マツ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属）、草本花粉3種類（イネ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、キク亜科）、シダ類胞子3種類（ヒカゲノカズラ属、イノモトソウ属、他のシダ類）である。これら僅かに検出される花粉化石、胞子化石は保存状態が極めて悪い。

表2　花粉分析結果

種類 ＼ 試料番号	D区西壁 1	2	3	4	5	SX21 6	7	8	9
木本花粉									
ツガ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－
トウヒ属	－	－	－	1	1	－	－	－	－
マツ属	－	－	－	－	－	1	－	－	1
ハンノキ属	－	－	1	－	1	－	－	1	－
コナラ属コナラ亜属	－	－	1	－	1	－	－	－	－
ニレ属―ケヤキ属	－	－	－	－	1	－	－	1	－
草本花粉									
イネ科	－	－	－	－	1	－	1	1	－
サナエタデ節―ウナギツカミ節	－	1	－	－	－	－	－	－	－
キク亜科	－	－	－	－	－	－	1	－	－
不明花粉	－	－	－	－	－	－	－	－	－
シダ類胞子									
ヒカゲノカズラ属	－	－	－	－	－	－	1	－	－
イノモトソウ属	－	－	－	－	－	1	－	－	－
他のシダ類胞子	1	1	1	2	5	7	1	1	3
合　計									
木本花粉	0	0	2	1	4	1	1	2	1
草本花粉	0	1	0	0	1	0	2	1	0
シダ類胞子	1	1	1	2	5	8	2	1	3
総計（不明を除く）	1	2	3	3	10	9	5	4	4

(2) 植物珪酸体分析

結果を表3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良で、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各地点の植物珪酸体の産状を述べる。

・D区西壁（試料番号1～5）

当地点の分析試料のうち、試料番号2・4から栽培植物であるイネ属の籾殻に形成されるイネ属穎珪酸体がわずかに認められる。また、栽

表3　植物珪酸体分析結果

種類 ＼ 試料番号	D区西壁 1	2	3	4	5	SX21 6	7	8	9
イネ科葉部短細胞珪酸体									
タケ亜科ネザサ節	1	5	1	1	103	116	21	4	－
タケ亜科	2	1	－	3	1	2	－	－	－
ヨシ属	－	－	－	－	－	－	3	－	1
ウシクサ族ススキ科	－	－	－	－	－	1	－	－	－
イチゴツナギ亜科オオムギ族	－	8	－	4	－	－	－	－	－
イチゴツナギ亜科	－	6	－	12	－	1	1	－	－
不明キビ型	1	1	－	1	2	－	2	－	－
不明ヒゲシバ型	－	1	－	－	－	－	2	－	－
不明ダンチク型	－	3	－	1	1	3	－	－	－
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
タケ亜科ネザサ節	1	8	－	4	163	115	24	22	－
タケ亜科	3	3	3	1	3	5	－	－	4
ヨシ属	3	－	－	1	3	－	－	－	－
ウシクサ族	－	－	－	－	－	－	－	－	1
不明	2	4	－	－	2	－	－	－	1
合　計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	4	25	1	22	107	123	29	4	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9	15	3	6	171	120	24	22	6
総　計	13	40	4	28	278	243	53	26	7
珪化組織片									
イネ属穎珪酸体	－	2	－	2	－	－	－	－	－

培種を含む分類群であるオオムギ族もわずかに検出される。しかし、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種か否かの判別が難しい。試料番号３など他の試料からは、栽培植物に由来する植物珪酸体が全く認められない。この他に、各試料からはネザサ節が認められ、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに認められる。

・SX21（試料番号６～９）

４試料とも栽培植物に由来する植物珪酸体は全く認められない。各試料からは、ネザサ節を含むタケ亜科が認められ、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに認められる。

４）考　　察

花粉化石は、堆積物中からほとんど検出されなかった。僅かに検出された花粉化石も、外膜が溶けるなど保存状態は悪い。これは、好気的な環境条件下にあったため、化学的な酸化や土壌微生物の影響によって分解、消失したことが推測される。一方、植物珪酸体も検出個数の少ない試料が多い。植物珪酸体が比較的多く検出されたD区西壁のⅥa層とSX21畝戊では、タケ亜科ネザサ節が多産する。ネザサ節は、林床や開けた場所に生育する種類を含むことから、おそらくこれらの種類は、自然堤防上などに生育していたものを反映していると考えられる。ただし、ネザサ節が含まれるタケ亜科の植物珪酸体は、他のイネ科起源の植物珪酸体と比較して風化に強く、また生産量の多いことが、これまでの研究から指摘されている（近藤，1982；杉山・藤原，1986）。したがって、他の植物珪酸体よりも残留しやすいと考えられ、ネザサ節の出現率が過大に評価されている可能性もある。この他に、僅かに検出されるヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科なども、河道沿いや自然堤防上に生育していた母植物に由来している可能性がある。

一方、D区西壁のⅣ層や畝間口では、栽培植物であるイネ属の籾殻に由来する植物珪酸体が検出された。同試料では、栽培種を含む分類群であるオオムギ族の植物珪酸体も僅かであるが認められた。ただし、畝bやSX21の畝、畝間覆土からは、上記したような栽培種に由来する植物珪酸体が全く検出されなかった。これらの栽培植物あるいは栽培植物を含む植物珪酸体の検出が少ないことや、土層毎の産状の変化が不明瞭であること、平面的な調査においてイネ属やオオムギ族の際だった産出が認められないことから、このはたけ状遺構における稲作（陸稲）やムギ栽培の可能性は支持できない。また、敷き藁や堆肥として、稲藁や麦藁等を利用した点についても、本分析結果からは言及することはできない。

岩手県内では、これまでの発掘調査で当該期のはたけ状遺構と考えられる畝跡が多数確認され、本報告と同様な目的で分析調査が行われている。その結果、皀角子久保Ⅳ遺跡（軽米町）・上鬼柳Ⅳ遺跡（北上市）等では、植物珪酸体や種実遺体等の産状から、イネやムギ類の栽培の可能性が示唆されている（株式会社古環境研究所，1988；パリノ・サーヴェイ株式会社，1988・1992）。一方、大向Ⅱ遺跡（二戸市）のように、イネ科作物に由来する植物珪酸体が全く検出されない調査事例もあり、この他の作物（例えば、根菜類、豆類、野菜類など）が栽培されていた可能性も指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表）。本遺跡では、本分析結果を見る限り、イネ科以外の作物が栽培された可能性も考慮する必要がある。なお、はたけ状遺構における栽培植物の検証については、竪穴住居跡内などで認められる植物利用の痕跡や、畝跡等の土壌中に含まれる微細な植物片から、情報が得られることがある。今後は、これらの視点も含めて総合的な調査を行い、当時の栽培植物について検証していきたいと考えている。

(2)　遺構の年代推定

1）試料

試料は、上記したD区西壁Ⅴ層から採取された土壌１点（試料番号３）、D区SX21畝から採取された土壌１点（試料番号６）、C区SD101覆土から採取された炭化物１点（試料番号10）と土壌２点（試料番号11・12）の計５点である。

これら試料のうち、試料番号３・６・11・12については、土壌中から分析試料となりうる試料（炭化物片など）の抽出を行った。その結果、試料番号３では炭化物片が0.1g以下、試料番号６では炭化物片などが全く検出されなかった。そのため、調査担当者と協議･検討を行い、２試料の代替試料として、試料番号10に認められた２点の炭化物（形状から大･小と仮称する）を分析試料とした。また、３点の土壌試料（試料番号13～15）を追加し、このうち試料番号６と同一地点から採取された試料番号13より分析試料として足りる量の炭化物が抽出されたことから、分析試料とした。

したがって、放射性炭素年代測定試料は、試料番号10炭化物大、試料番号10炭化物小、試料番号11・12、試料番号13の計５点を対象に行う。なお、５試料のうち試料番号10～12の４点については、炭化材であり、当分析及び樹種同定を同時に行える量であったことから、樹種同定を合せて行っている。

2）分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5，568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

3）結果および考察

結果を表４・５に示す。D区SX21の畝から採取された炭化物の年代（補正年代）は、1,190BPを示した。この年代値は、約８世紀頃に相当する。一方、C区SD101覆土から採取した炭化物のうち、埋土中位に相当する試料番号10･11は、630BP～810BPを示し、約12～14世紀頃の年代に相当する。C区SD101底面の炭化物の年代は、1130BPを示し、約９世紀頃の年代に相当する。また、合せて行った炭化材同定の結果、試料番号13を除く、４試料は広葉樹に同定された。

表４　放射性炭素年代測定

資料番号	採取地点	層　位	種　類	補正年代（BP）	δ13C（‰）	測定年代（BP）	Code No.
10	SD101	埋土中位No.1大	炭化材（広葉樹）	630±40	−26.82±0.92	660±40	IAAA-31892
10	SD101	埋土中位No.1小	炭化材（広葉樹）	720±40	−29.58±0.92	800±30	IAAA-31893
11	SD101	北ベルト中位	炭化材（広葉樹）	810±40	−29.11±0.94	880±30	IAAA-31894
12	SD101	底面	炭化材（広葉樹）	1,130±40	−28.52±0.95	1,190±30	IAAA-31895
13	SX21	畝	—	1,190±40	−31.07±0.63	1,290±30	IAAA-31940

1）年代値の算出には、Libbyの半減値5,568年を使用。
2）BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差δ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表５　暦年較正結果

資料	補正年代（BP）	暦年較正年代（cal）		相対比	Code No.
10	630±40	cal AD 1,301 − cal AD 1,327	cal BP 649 − 623	0.548	IAAA-31892
		cal AD 1,347 − cal AD 1,372	cal BP 603 − 578	0.175	
		cal AD 1,379 − cal AD 1,392	cal BP 571 − 558	0.134	
10	720±40	cal AD 1,268 − cal AD 1,298	cal BP 682 − 652	0.548	IAAA-31893
11	810±40	cal AD 1,212 − cal AD 1,268	cal BP 738 − 682	0.548	IAAA-31894
12	1,130±40	cal AD 891 − cal AD 904	cal BP 1,059 − 1,046	0.091	IAAA-31895
		cal AD 911 − cal AD 976	cal BP 1,039 − 974	0.034	
3	1,190±40	cal AD 781 − cal AD 793	cal BP 1,169 − 1,157	0.708	IAAA-31940
		cal AD 804 − cal AD 885	cal BP 1,146 − 1,065	0.276	

1）計算には、RADIOCARBOON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuivar and PJ Reimer）を使用
2）付記した誤差は、測定誤差δ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

D区SX21は、発掘調査所見によれば、To－a下位から検出されたことから、はたけ状遺構の使用期間は10世紀には終えたと想定されている。本分析結果は、約８世紀頃の年代を示すことから、これらの所見と整合する。一方、C区SD101は、To－aに由来するテフラ層を掘込み構築されていることや、11世紀後半～12世紀前半の所産と考えられる陶磁器が出土していることから、10世紀以降に構築されたことが推定されている。この所見によれば、試料10・11の年代はそれぞれ異なるが、調査所見を支持する結果と言える。これに対して、溝底面の炭化物は、10世紀以前の年代を示し、調査所見と異なる。このような結果を示した要因としては、古い時期の炭化材が考えられる。今後、試料の由来、溝跡構築時の状況や溝跡の埋積過程、溝跡覆土中におけるテフラの産状を含めて、改めて検討することが望まれる。

引用文献

株式会社古環境研究所, 1988, プラント・オパール分析調査報告書. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集　皀角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書　一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査, 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 116-128.

近藤　錬三, 1982, Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書, 32p.

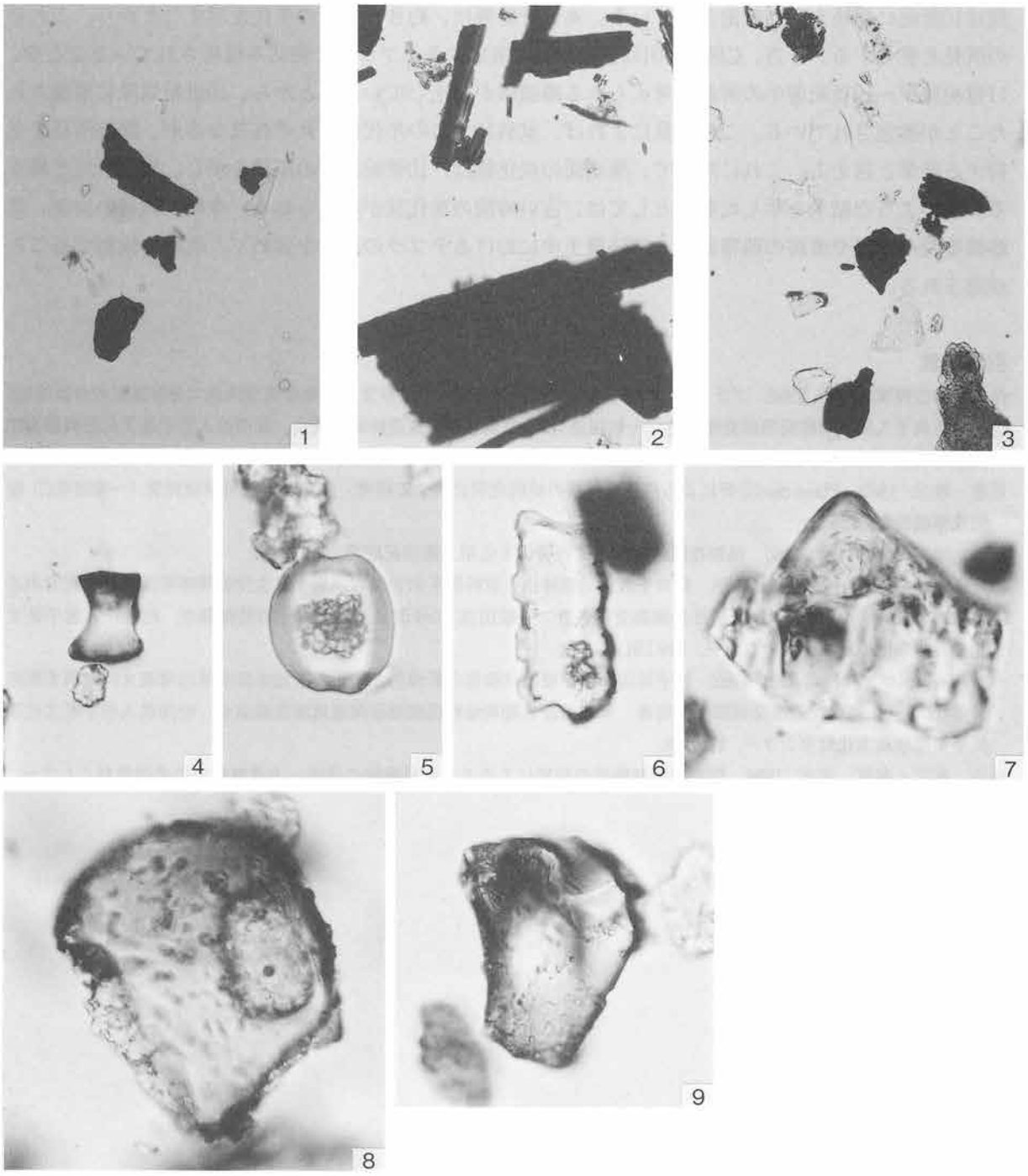
近藤　錬三・佐瀬　隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-64.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 1988, 皀角子久保Ⅵ遺跡出土試料種子同定報告. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集　皀角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書　一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査, 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 129-134.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992, 種子同定および植物珪酸体分析報告. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第160集　上鬼柳Ⅳ遺跡発掘調査報告書　東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査, 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 177-188.

杉山　真二・藤原　宏志, 1986, 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学, 19, 69-84.

図版1　花粉分析プレパラート内の状況写真・植物珪酸体



1．状況写真(試料番号2)
2．状況写真(試料番号6)
3．状況写真(試料番号8)
4．ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号2)
5．ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号6)
6．オオムギ族短細胞珪酸体(試料番号2)
7．イネ属穎珪酸体(試料番号4)
8．ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号5)
9．ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号2)

2　密教法具の材質分析

東北芸術工科大学（現筑波大学）　松井　敏也

【蛍光X線分析】

六器（報告書掲載番号5044～5046）材質分析を蛍光X線分析によりおこなった。使用した分析装置は波長分散型蛍光X線分析装置である。分析条件は管電圧50KV、管電流50mA、X線管球の対陰極はCrである。測定雰囲気は大気状態でおこなった。分析範囲は直径20㎜の円である。測定結果を表１に示す。数値は検出された元素をもとにファンダメンタルパラメータ法（FP法）にて100wt％に規格化された値である。

表１　六器の蛍光X線分析結果（wt％）

	銅	錫	鉛	ヒ素	銀	鉄	アンチモン
鋺（5044）－01	79	0.6	2.1	18.0	0.31	0.22	0.14
鋺（5044）－02	87	1.1	1.1	9.20	0.42	0.21	0.12
鋺（5044）－03	91	0.8	0.9	6.10	0.34	0.21	0.10
台皿（5045）－01	90	0.4	1.1	8.00	0.35	0.48	0.13
台皿（5045）－02	87	0.4	1.9	10.0	0.23	0.11	－
台皿（5046）－01	82	0.9	2.7	13.0	0.59	0.33	0.20
台皿（5046）－02	87	0.6	2.1	8.50	0.60	0.18	0.14
平均	86	0.7	1.7	10.4	0.41	0.25	0.14

青銅の主成分である錫や鉛をほとんど含まないことから、本製品は銅製品であることがわかる。ヒ素の含有量が多くヒ素銅の可能性がある。ヒ素の含有率は５wt％以上であり、山形県、福島県、宮城県などから出土する青銅製の仏具関係資料のヒ素含有率（１％以上）と類似していることがわかった。すべてさびの上からの分析であるためにその腐食状態によって分析値の誤差が考えられるが、今後の岩手県における中世青銅器の材料技術を考える上での一つのデーターになろう。

XII　ま　と　め

1　河崎の柵擬定地の遺構変遷

本遺跡の名称は「河崎の柵擬定地」であるが、11世紀の前九年合戦の時代以外にも人々の生活が営まれていた。以下、時代ごとの変遷の概略を示す。縄文時代については第3分冊で示すことになるので、ここでは後北土器の時代（3～4世紀）以降のものを扱う。

3～4世紀

同一個体と推測される後北土器片が2片（6001･6002）出土している。この土器に伴う遺構は検出されなかったが、何らかの生活が営まれた空間であったと推測できる。

8世紀後半～9世紀初頭

第2検出面の検出遺構が相当する。竪穴住居（（）内はカマド方位）ではB区SI1（北東）、C区SI1（東）、C区SI3（東）、C区SI4（北西）、C区SI5（東）、C区SI6（東）、D区SI1（北西）、D区SI2（東）、E区SI2（北東）、E区SI3（北東）、E区SI4（北東）がある。他の遺構では畝間状遺構D区SX20、21、くぼみ状遺構E区SX1、焼土遺構C区焼土1がある。

第2検出面の出土土器を観察すると、8世紀後半のものと8世紀末～9世紀初頭のものに2分できる。出土土器の年代観から竪穴住居を分類すると、8世紀後半に属するのはC区SI4、D区SI1、E区SI3、E区SI4である。8世紀末～9世紀初頭に属するのはC区SI1、C区SI3、C区SI5、C区SI6、D区SI2である。

カマド方位をみると8世紀後半のグループは北西と北東にまとまる。8世紀末～9世紀初頭のカマド方位は、B区SI1の北東以外は東であり、カマド方位にまとまりが認められる。このように土器の年代観による分類とカマド方位のまとまりは概ね合致しており、分類の妥当性を示している。E区SI2は出土遺物が皆無であるが、カマド方位からは8世紀後半のグループに属する可能性が高い。畠状遺構D区SX20とSX21は重複しており、古いSX21が8世紀後半、新しいSX20が8世紀末～9世紀初頭に属すると考えることができる。くぼみ状遺構E区SX1は出土遺物から8世紀末～9世紀初頭のグループに属するものである。

このように第2検出面の遺構は8世紀後半と8世紀末～9世紀初頭に2分類できるが、これは集落が各段階で途絶しているのではなく、切れ間なく連続的に営まれた集落と解釈した方が妥当であろう。この集落は和同開珎を所有し、蕨手刀、鉄鏃、小札などで武装した人々が暮らしていた。和同開珎の所有は律令政府とのつながりを示し、武具武器が充実しているのは胆沢方面への征夷の時代相を表している。この時期の集落の調査は本遺跡以外には、磐井郡内では皆無に近い状態である。当地方における征夷の具体的な様相を明らかにするために良好な資料になり得る集落である。

10世紀初頭

第1検出面において十和田a火山灰が埋土内に堆積する遺構が相当する。竪穴住居C区SI7、E区SI1、畝間状遺構C区SX1、C区SX2、C区SX3、焼土遺構E区焼土1がある。竪穴住居C区SI7、E区SI1は埋土中の床面近くから十和田a火山灰が堆積しており、火山灰の降下直前に廃絶された住居と

判断できる。畝間状遺構はその土層断面から十和田a火山灰の降下後に耕作されたことを読み取れ、住居の時期と齟齬がある。しかし、耕作されたのは十和田a火山灰の降下後とはいっても、火山灰降下と大きな時間的隔たりは想定できないものである。この畝間状遺構の土層断面は火山灰以前から耕作されていたものを、火山灰以後に再び復旧した状況と読み取るべきと考える。竪穴住居C区SI７は畝間状遺構C区SX２と近接するが両者は重複していない。これも住居と畠が同時存在であった可能性を示していると判断される。今回の調査は２万㎡以上に及ぶ広大な調査区であったが、当時期の竪穴住居跡はC区SI７とE区SI１の２棟のみであった。この２棟の住居はおよそ220mも離れ、それぞれが単独に存在している。この住居どうしが単独で離れて存在する状況はこの時期の集落の一形態を示している可能性がある。

11世紀中～後葉

前九年合戦の時期の遺構である。調査区を南北に横断する堀C区SD101がこの時期に属する。本報告書に掲載ではないが、平成12年度調査で検出された堀「RG01」もこの時期の遺構と判断される。C区SD101とRG01は同じ軸方向でおよそ70m離れて平行に構築されている。この２本の堀は北上川と北側の高地に挟まれた低地の狭隘部を遮断する形に掘られており、北上川上流部への進出を妨害する「交通遮断施設」と推測される。「交通遮断施設」は城郭史、合戦史の視点からみて、前九年合戦の時代のものとして妥当な時代相を持った施設である。このC区SD101とRG01の２条の堀こそ「河崎柵」を構成する遺構と判断される。

12世紀

調査区域内で12世紀の遺物が散布した状態で出土している。それらは、かわらけ、白磁四耳壺、青白磁小壺蓋、須恵器系陶器波状文四耳壺、渥美産壺、銅製六器などであり、日常生活に用いられた器物というより、何らかの儀礼、儀式に用いられたものと推測される。具体的に言えば経塚の埋納物に多くみられるものばかりである。これに対する12世紀の遺構は方形周溝B区SD１がある。B区SD１は埋土から手づくねかわらけ、渥美産山茶碗が出土し12世紀に属する遺構と考えられる。この方形周溝が経塚のマウンドの周囲を巡る溝と考えたいのである。経塚の盛り土が崩壊し埋納された遺物が周辺の散乱したのが上記の12世紀遺物の出土状況と解釈したい。また12世紀の遺物が全て経塚の埋納物ではなく、かわらけなどは経塚を造営する際の法要や修法の際に用いられたとも解釈できる。B区SD１の東側にあるL字形の溝B区SD４もB区SD１同様に経塚を巡る溝の残欠の可能性があるが、埋土中から中世の遺物も出土しており、年代決定の決め手に欠ける。

13～15世紀

出土遺物では13世紀～14世紀のかわらけ、13世紀～15世紀の国産陶器、中国産青磁がまとまった量出土している。その他に文保二（1318）年銘の板碑、応永年間（1394～1434年）銘の板碑があり、13世紀～15世紀初めにかけての痕跡が濃厚に存在する。検出遺構では溝01SD１と溝C区SD104がこの時期に属する可能性が高い。また流水痕であるB区沢跡もこの時期に生成されたものと解釈される。掘立柱建物はその時期特定が難しいが、柱穴から1078年初鋳の元豊通寶が出土したE区SB２、1310年初鋳の至大通寶が出土したE区SB６が当時期の建物である可能性が高い。また出土遺物がないが、E区SB６とそれに重複するE区SB５もこの時期に属する可能性がある。このように中世の河崎の柵擬定地内にはかわらけや、中国磁器を使用する階層の者が居住していたと推測される。

また今回の調査区内には出土したものを合わせて三十数基の板碑が所在している。記年銘のあるものは上記の２基のみであるが、記年銘の無い板碑も概ね14～15世紀に造立されたと推測される。これらの板碑のほとんどは西屋敷の近世墓地周辺で見出されたものである。西屋敷墓地付近では12世紀の経塚の痕跡と推測される方形周溝B区SD１がある。中世にはこの経塚は崩壊しておらずマウンドが残っており、この塚に結縁を求めて板碑を造立した想像される。中世の河崎の柵擬定地内には、居館とともに、「霊場」的な板碑が造立される空間が存在していたのである。

16世紀

16世紀代の中国産青花（染付）、大窯期の瀬戸・美濃産陶器が一定量出土しており、この時期の遺構の存在が想定される。溝01SD３と01SD２が出土遺物からこの時期の遺構と推測される。01SD３はL字形の溝で、C区SB１と重複するC区SB２を取り囲んでおり、建物に伴う溝と判断される。よって掘立柱建物C区SB１とC区SB２も当時期の建物と判断できる。この建物の存在から中国産染付や大窯期陶器を所有する階層の者の居館が存在したことがわかる。大窯期陶器に中には天目茶碗も含まれており、居住者の階層の高さを示している。この居住者が近世初頭から屋敷を確認できる葛西家の祖先と連続性があるか否か判断は難しい。

17～19世紀

河崎の柵擬定地内に近世初頭から葛西家の先祖が屋敷を構えたとされている。本家が「西屋敷」で近世の早い段階で「東屋敷」と「中峯屋敷」が分家したといわれている。「西屋敷」は本報告書のE区付近に屋敷を構え、「中峯屋敷」は平成12年度調査区付近、「東屋敷」は平成12年度調査区の東側の発掘調査区外に屋敷があったという。そして近世後半に「隠居屋敷」が中峯屋敷から分家したとされる。「隠居屋敷」は本報告書のD区に屋敷を構えていた。このように本報告書の対象範囲内にあった近世屋敷は「西屋敷」と「隠居屋敷」である。西屋敷に関連する遺構は掘立柱建物E区SB１がある。これは17世紀の建物で大きさから主屋と考えられる。E区ではその他に主屋級の掘立柱建物は検出されておらず、E区SB１以降は礎石建物の主屋に建て変えられたと推測される。掘立柱建物E区SB４はE区SB１に付随する付属建物と推測される。

隠居屋敷に関連する遺構はD区で検出された掘立柱建物群（D区SB１～SB８）が相当すると思われる。これらは主屋級の規模ではなく付属屋である可能性が高い。また棟数が多いことから隠居屋敷に関係のない中世の建物も含まれている可能性もある。隠居屋敷の主屋は当初から礎石建物であり、礎石が動かされたため、建物が検出されなかったと推測される。このように近世屋敷は調査区内とその近辺に存在していたが、それに伴う墓域も存在している。「B区墓域」は西屋敷の墓所で「D区墓域」は東屋敷、中峯屋敷、隠居屋敷の墓所であったという。

20世紀

近代以降にも河崎の柵擬定地内において人々の生活は営まれ続けている。もちろん多くの遺構が存在したがそれらは「攪乱」として扱い、報告書では遺構として扱っていない。ただし、B・E区の土坑のほとんどは「芋穴」と称される長芋などを保存するための貯蔵穴で20世紀以降のものである。これらは調査時に時期判断をできずに遺構番号を付したため報告をおこなったものである。　（羽柴）

2　河崎柵研究史

「河崎柵」は前九年合戦に登場する安倍氏方の「柵」である。当遺跡はこの「河崎柵」の擬定地である。ここでは河崎柵について言及した文献を示し、若干の解説を加え、研究史を概観したい。

陸奥話記（11世紀後半成立）

貞任等率精兵四千余人　以金為行之河崎柵為営拒戦黄海

陸奥話記は前九年合戦の顛末を記した物語である。前九年合戦終息後、それほど年数を経ずにまとめられたと推測されている。河崎柵についての記述は上記の文章のみで、その具体的な場所、構造についての記述は皆無である。、だが、この記述から「河崎柵」と「黄海」は近接した位置関係と推測され、河崎柵の場所を特定する手がかりになる。

天明六（1786）年「未完菅江真澄遊覧記」 白帝社 白山友正編 1966 130頁

葛西城の址を、ゆん手に見つつ、小川ひとつこえて川崎といふ処に行て、清悦の墳たづぬれば、「斉藤なにがしといふ人の軒ちかく白檀の生ひしけりし下也」とおしへたり。かくて、其ところに至れば、ある人、あないして、「この清悦坊は、義経につきそひ奉りてよりあやしのいろくすをくひて、いのちながらへて、寛永七年の夏まで世にありて、ここにいたりて身まかりて侍るよしを伝へ聞て侍る。又こと処にも清悦の塚あれど、いつはりにてやはんべらん」といひて別たり。門崎といふ処にいでて、松川のうまや、相川の村を・・・・

近世の地誌類で河崎柵の擬定をおこなっているものは管見に及ぶかぎりでは存在しない。門崎村安永風土記にも河崎柵に関する記述は全くない。また天明～寛政年間に東北地方を遊覧した菅江真澄は河崎の柵擬定地内にある「清悦社」を天明６年８月６日に訪ねているが、その記述に河崎柵についての話題は登場していない。真澄は黒沢尻を訪れた際には「あるしにいさなわれて阿部のふる館のあと見にとて行ぬ。」と川岸の黒沢尻柵擬定地をわざわざ訪ねている。このように安倍氏についても知識、興味を持っていた真澄が、河崎の柵について記していないのは、18世紀当時、門崎村の川崎が、河崎柵の擬定地として、あまり流布していなかったことを示しているのではないだろうか。

吉田東伍「大日本地名辞書 第七巻 奥羽」557頁　明治三十九（1906）年

「今、門崎村内に擬せらる、猶考ふべし。○大槻氏云、陸奥話記に見ゆる河崎柵の旧地は、薄衣駅の北に砂鉄川ありて、東北より流れ来て、北上川に会す、此河口なる旧門崎村の川崎の地、是れなるべし、黄海より北二里許なり。」

管見に及んだ中で、門崎村川崎を河崎柵擬定地にあげている最も古い文献は大日本地名辞書（吉田東伍）である。文中の「大槻氏」とは大槻文彦博士のことであろう。これが大槻文彦の著書からの引用か、談話の取材によるものか明らかにできない。一関市立博物館の小岩弘明氏によれば、大槻文彦の著作中で、河崎柵について言及したものは今のところ見出せないという。いずれにせよ、確認できる範囲では大槻文彦が、当遺跡（川崎村門崎字川崎）を河崎柵に擬定した最初の人物ということになる。

青木武助　「大日本歴史集成上巻二」866頁　大正二（1913）年

されど頼時子多く、長子貞等任父に代はりて衆を領して勢あり。九月、頼義、官符を賜はり、諸國の兵士を徴発し、糧食を輸納せんと謂ひて許さる。十一月頼義、兵一千八百人餘を以て貞任を河碕柵　陸前國柴田郡川崎ならんといふ　に襲へり。貞任、精兵四千を率ゐて出てて戦ふ。・・・

大日本歴史集成には河崎柵が柴田郡川崎（現宮城県川崎町）と記されるが、その根拠については全く触れられていない。言うでもなく、柴田郡川崎では国府との位置関係から、「河崎柵」であることは全く当てはまらない。「大日本歴史集成」は日本歴史を通史的に見た書物であり、各々の事象については深い考証がなされていないと思われる。短絡的に陸奥国の「川崎」の地名を拾い出し、記したものにすぎないのだろう。

藤原相之助　「日本先住民族史」310頁　大正五（1916）年

黄海は今東磐井郡にて北上川の東岸にある小駅なれども、古へは北上川西岸日形田澤の邊も黄海と稱へしならんか。

本営を構へたる河崎柵は疑問なれども、青木氏の歴史集成に柴田郡川崎なりといえるは、妄断も甚だし。按ずるに今東盤井郡に門崎村（カンザキと訓む）といふがありて、布佐、川崎の両区區あり、古壘も二ヶ所にあり、其の一即ち川崎の柵にて金為行が居りし所ならん、地形を按ずるに黄海より北に去る今道の二里餘、共に北上川の東岸にして、衣川の關を出づること五六里なり貞任は官軍の為すなきに乗じ勢威大いに振ひ、遙かに南方に進出して兵要の地を占めたるなり。尚思ふに気仙郡司金為時が、頼時の弟良昭等と戦ひしも北上川以東にて官軍は河東に迫り、良昭が兵は川を越えて戦ひ、遂に大敗したれば、貞任之に鑑み勢力を河東にも張りしならんか。

この著書では上記の大日本歴史集成の、河崎柵＝柴田郡川崎説を「妄断も甚だし」と断じ、東磐井郡門崎村をその擬定地としている。門崎村の古壘二ヶ所というのは門崎城と布佐館を指すのであろうか、どちらも城館跡も字川崎には存在せず、筆者が具体的にどの古壘を河崎柵としているのか判断は難しい。

岡部精一「奥羽沿革史論」185頁　大正五（1916）年

河崎柵と黄海の地點について申します。河崎柵は金為行といふものの居所で貞任が四千餘人の精兵を以てこれに據つたのを頼義が千八百人を以て攻めた所で、黄海は其時に戦場となった地である。此の戦は大風雪の裡に行はれ八幡太郎義家が武勇を示したのを以て有名であります。さて此二地點はいづれも今日の門碕薄衣等の諸村の在る地と云はれて居る。此地は東稲山の南端が出張つて砂鉄川と千厩川といふ二つの川が北上川に合流する所で南北に河流を控へ最も形勝の地である。黄海は其の南に當つて今日なほ同名の村名が残つて居る。此等の地は凡て要害で守るに易く攻むるには最も難いから大戦闘を演出し官軍も遂に敗北したのであります。

奥羽沿革史論は東北地方の歴史に関する講演録である。上記は岡部精一氏の「前九年役と後三年役」の講演録である。講演では前九年役の経過の説明をおこない、「前九年の役に現はれたる地理の説明」

として、前九年合戦の登場する各地名、施設の考証を述べている。河崎柵については門崎～薄衣付近とし、地点の限定を避けているが、河崎柵＝門崎村川崎を否定しているわけではない。

岩手縣教育會東磐井郡部會「東磐井郡誌」171頁　大正十四（1925）年

河崎の柵址

門崎村の南隅砂鉄川口北上河に會する川口の地なり天喜の昔源将軍が貞任を征討せし時の柵址に擬すと大槻博士の説なり

「川口の地なり」は「川崎の地なり」の誤植と思われる。全体の文章から、大日本地名辞書を参照しての引用と推測される。

熊田葦城「日本史蹟大系第三巻」1365頁　昭和十（1935）年

河崎柵址（かはさきのきし）　源頼義大敗の地

河崎柵址（かはさきのきし）は、陸中國東磐井郡門崎村（とどさきむら）に在り、砂鐵川（しゃてつがわ）、東北より、流れ来りて、北上川に會す、此河口なる門崎村の川崎の地、此れなるべしと云う。

河崎柵は、安部貞任（あべのさだたふ）の母方の叔父金為行（こんのためゆき）の居城なり、貞任此柵に據り、兵を黄海（きのみ）に出だして、頼義の軍を防ぐ。黄海村は東磐井郡に屬し河崎柵址の南一里ばかりの地に在り、東山の南麓にして、陸前國登米郡嵯峨立村と、境を接し、北上川の畔に在り、黄海川は北上山の山脈より、源を発し、西流して、此所に来り北上川に注ぐ。

河崎柵を門崎村川崎に特定している。文の構成から大日本地名辞書を引用したことがわかる。門崎のルビに「とどさき」とあるのは、大日本地名辞書の「門崎村」のルビ「カドサキ」の誤植であろうか。

門崎村史編纂委員会編　「門崎村史」　369頁　昭和三十一（1956）年

河崎の柵

前九年の役で有名な川崎の柵趾は現在小名の西屋敷から東屋敷までの間であろうと謂われている。人皇第七十代後冷泉天皇天喜年間と云えば今から九百年も前の昔の事であるから、今では当時の面影を偲ぶものは一つも見当たらないが当時の名称であろうと思われる東門口、西屋敷があるが西屋敷名は西門口であり、その地域内には舘ヶ崎「フナトカド」（船渡門は渡舟場）針山（張山で陣張山と云伝わる）九万とか五粉寺跡（今の五分一はこれより）東木山安入寺、蔓生寺跡等があり或は東屋敷前から砂鉄川落合までの間の北上川に大石に築かれたワ框ク跡があり、（現在も一框と呼ばれている）この辺一帯相当大規模な柵が築かれてあったであろうことがうかがわれるのである。

門崎村史編纂は昭和27年２月に開始され、昭和31年５月に刊行されている。門崎村史は頁数391頁に及ぶ大冊であるが、河崎柵についての記述は上記の文章と見取り図１頁のみで存外に乏しい分量である。（他に「古戦場川崎の柵史」と題して、陸奥話記からの引用が１頁弱ある。）

この文章では門崎村川崎が河崎柵跡として記され、それに関連させた地名伝承、地名起源説が記されている。この地名起源説とほぼ同じ内容のものは下記の小岩末治の未発表稿（昭和29年４月）にも記されており、この当時地元では広く流布されていた話なのであろう。この河崎柵に関する地名起源説の発生がどの程度さかのぼるものか（起源説の真偽は別として）判断は難しいが、「東門」、「西門」に

ついては近世屋敷「西屋敷」、「東屋敷」からの連想であるのは明らかであり、近世以降に造られた地名伝承もで含まれている。うがった見方をすれば、村史編纂の熱気の中で、新たに意味付け、解釈がなされた地名伝承の可能性もあるのではないか。

岩手県「岩手県史第一巻」554頁　昭和三十六（1961）年

柵名	擬定地諸説	文献
河崎	1 東磐井郡川崎村門崎	『日本地名辞書』『日本先住民族史』『東磐井郡誌』『門崎村誌』『日本史蹟体系』第三巻『世界歴史事典』
	2 東磐井郡川崎村門崎と薄衣	『奥羽沿革史論』
	3 宮城県柴田郡川崎村	『大日本歴史集成』

岩手県史では陸奥話記に登場する安倍氏の12柵について、それぞれの擬定地諸説と文献を表にまとめている。河崎柵については上記の３擬定地にまとめられている。擬定地の諸説についての論評はなされておらず、擬定地の表示に留まっている。

岩手県立博物館所蔵小岩末治コレクション「川崎の柵址」

本稿は岩手県立博物館所蔵の小岩末治コレクションに収められている論文「川崎の柵址」の原稿である。この論文は雑誌「開発クラブ」に掲載の予定であったが、雑誌の廃刊のため未発表稿になったものである。奇しくも本報告書作成中に本稿の所在を知り、河崎柵の研究史を語る上で重要な資料と考え、ここに全文を掲載する。本原稿は岩手県立博物館所蔵小岩末治コレクションの「登録番号86035　整理№原94」である。本稿の閲覧、掲載に関して岩手県立博物館考古部門高木晃氏、小原祐子氏に便宜を図っていただいた。

小岩末治氏は大正12年生まれ、平成12年に76歳で逝去されている。小岩氏は昭和25年より県史編纂係所属の県職員として岩手県史の執筆にあたっている。「河崎柵」の現地踏査もこの県史編纂にかかわる資料収集の一環としておこなわれ、そこで得られた知見によりまとめられた論文と推測される。

小岩氏の経歴、調査研究活動、そして小岩コレクションの内容については「岩手県立博物館収蔵資料目録題18集　考古Ⅶ　小岩末治コレクションその１（岩手県立博物館2005）」に詳細がまとめられている

昭和29年　小岩末治　「川崎の柵址」『開発クラブ』掲載予定未刊行

川崎の柵址

小岩末治

陸奥話記によれば

「同年十一月（註天喜五年）、将軍（源義義）兵千八百余人を率いて、貞任等を討たんと欲す。貞任等精兵四千余人を率いて、金為行之河崎柵を以て營と為し、黄海に拒き戦う。時に風雪甚だ勵しく道路艱難、官軍食無く人馬共に疲る。賊類新羈之馬を馳て渡足之軍に敵す。唯客主之勢異なるに非ず、又寡衆之力の別有り。官軍大いに敗れ、死する者数百人云々」（原漢文）。

と見えている。

私は先日東磐井郡門崎村公民館長千葉萬次郎氏、同村鳥畑隆治氏、小野寺惣清氏、葛西喜代平氏の案内を得て、同村川崎に所在する所謂川崎柵址擬定地を踏査した。川崎柵址擬定地については、二十

年以前故菅野義之助が踏査された由である。

そもそも「陸奥話記」の冒頭に

「六箇郡之司安倍頼良なる者有り。是れ同じく忠良が子也。父祖忠頼は東夷の酋長にして、威名大いに振るい、部落皆服す。六郡に横行し人民を却署す。子孫尤も滋蔓なり。漸やく衣川の外に出て賦貢を輸さず、徭役を勤むる無し。代々驕奢にして、誰人も敢て之を制すること能はず」(原漢文)と見えるが如く、安倍氏は忠頼の時代から勢力があらわれ、忠良は陸奥大掾(国府の官人)となり、頼良に至って奥羽二州の横領使となり、遂に実力は国司を凌ぐ有様となった。

安倍氏の先祖は長髄彦の兄安日王と伝えるが、忠頼に至る迄の系は不詳である。平安時代前期に於て、安倍安仁(陸奥出羽按察使)、安倍比高(出羽權介·陸奥守)、安倍貞行(陸奥守)、安倍三寅(鎮守府将軍)、安倍清行(陸奥守)等の名前を認めるが、いま直ちにこれらと忠頼との継がりを求めることも一寸無理である。

○

日本史を経済史的な眼でみれば、平安時代後期の開幕は、口分田の公収なく荘園乱立するというあわただしさに始まり、十世紀後半には国司の遙任が盛んとなり、地方各地が荘園化するに至り、十一世紀前半には国司に命じて新立荘園を二度も禁じたが、効果はさっぱりあがらなかった。

安倍氏が勢力を得たのは、正しく上述の百年間のことであり、かかる傾向は全国的一般的なものであったことを知らねばならぬ。

而して前九年、後三年の役があったのは、十一世紀後半のことであった。

○

西暦一〇五一年(永承六年)、源頼義は、陸奥守兼鎮守府将軍に任命され赴任したが、一寸した行き違いから、天喜二年に至って安倍氏と戈矛を交えることとなり、以来康平五年に至るまでの九年間、両者攻防持久戦を展開したわけである。

さて胆沢城を中心とする平安時代前期の交通(陸路及び海路)は、律令や延喜式によって窺い知られるが、安倍氏の時代には北上川舟運が殊にも明瞭となってくる。

安倍氏の持っていた主要な諸柵は、いずれも北上川と支流の交叉点に位置しており、その悉くが水陸交通、産業交易の拠点であったことは、盛岡市史(第2分冊)中世篇の中で田中喜多美が既に述べておられるが、陸路の駄載に比して河川における舟積のそれが、到底問題にならぬほど荷量の大であることを思うとき、その見解は正鵠を得たものと評し得るであろう。

川崎柵址擬定地は北上川本流と砂鉄川の交叉点に位置しており、如上の諸柵と共通点を持っているのであり、安倍氏勢力領地の南端に位置して、玉造、栗原方面に勢力を伸張するその門戸をなしていたと思われる。

○

ところでもう少し詳しくこの地方の古代文化を究明するならば、私が調査した近隣の奥玉や折壁村からは、早期縄文式文化に属する貝殻腹縁刺突文土器の破片が出ているし、それの尖底部分も三個発見されている(註1)。このような尖底部は従来宮古付近の貝塚でのみ出土していたので、内陸部でも丹念に探せば当然認められるということで我々を大いに勇気づけてくれたのであるが、門崎付近にもこれらは当然発見されると思われる。

門崎村布佐付近には、後期から晩期の縄文土器が出土しており、大部分は鳥畑隆治氏の所蔵にかかる。晩期の縄文土器は所謂大洞A式に属し、この型式から弥生式土器まではわずかの進歩に過ぎないし、是より北の水沢で弥生式土器が確認されたから理の当然として(註2)この地方でも、千八百年位

前には稲作農耕が行われたものと考えられ、それを証明する遺物も発見されることと信ずる。殊に日形、油島方面に期待される（註３）。

また古墳時代に相当する古式土師器も、まだこの付近からは出ていないが（註４）それらの分布も広範囲なようであるから、将来胆沢城などに先立つ文化相も、次第に判明していくと思われ、新古の土師器やこれに付随する文化の違いも、今後研究されねばならぬ分野である（註５）。

○

門崎村布佐最明寺は、その縁起や風土記をみると奈良時代の開創で慈覚大師との関係を述べている。同じく布佐の千手堂は最明寺と密接な関係を有する如くで、今日なおこの千手堂には焼身ではあるが一本彫りの古佛像が五躰祭られてある。このような佛像は平泉等に見る寄木造りの佛像より古いこと必定であるから、やはり川崎柵址などと同じく安倍氏の文化に関聯して考えられる。ここに注意しなければならぬのは、風土記を見ると徳川時代に布佐最明寺境内から布目瓦が出土したことである。また前村長佐藤武氏や小野寺惣清氏のお話によれば、所謂川崎柵址からも以前布目瓦が出土した由であるが、残念なことにいまそれを示すことができない。石田茂作氏によれば、布目瓦と申すのは徳川時代には使用されなかったので、布目瓦の出土する地帯はすべて慶長以前の古建築があった証拠となるが、岩手県内の出土事例としては、

平泉地方（嘉祥寺址、花館蔵王権現堂址、経蔵址、柳御所址、伽羅御所址）
一ノ関地方（山ノ目、中条廃寺址）
古城村明後沢。胆沢城址内外。伯済寺址。
立花村黒（ママ）石丈六堂址。稲瀬村三照竈址。
田原村小田代澤田前。盛岡城址等。（門崎村二地点）。

など十数箇所を挙げることができる。

盛岡城は慶長四年に築城を終わったので（盛岡市史中世篇）ここから布目瓦の出るのは当然だが、最近私が田原村小田代沢田前小山勝徳氏の所で確認した布目瓦は、図に示した如くわずか一片に過ぎないが、その布目の状態から盛岡城より古いことが知られたのである。この付近にもやはり慈覚大師の伝説を持つ所があり、今後調査を進める計画であるが、門崎村の二地点も確実な証人や証拠があるので、やはり県内古瓦の出土地に算入して差支えないと思われる。

○

元禄十一年中、仙台藩士生江助内は東山地方の大絵図を作成しているが、各村肝入に於ては、其の際資料となるべき村絵図を提出している。門崎村分の控えは鳥畑隆治氏の手許にあるが、これらの絵図は寛永の末年幕府に差出するため作成した所謂寛永古絵図と大差ないものである。

いま現在の門崎村地図（一万分の一）に、元禄古絵図から転記して示せば図の如くなるが、それについて少し説明すれば、川崎柵址として最も肯かれる範囲は現在の字川崎であり、ここにはおそらく当時の遺構と思われる石塁が一ノ框という地名のもとに現存しており、かかる石塁は北上川に沿って全面的にあったものらしく、昭和十二年の大洪水の際にも、清悦坊付近にその一部が櫛形に露出した由であり、その後護岸工事の際その石塁を崩してしまったことは惜しまれる。柵址の東西には夫々東門、西門の地名があり、中央に船場があり西磐井との主要な交通路線であったことは、そのかみ安倍氏時代の柵址にも条件が適い、凡ゆる点で藩政時代の商港たる隣接の薄衣船場に先行するのである。

舘崎はまた舘先（前）でもあり、東門から伸びて九百間を越える針山堤は、張山（築山）の意と思われて、元禄絵図に記しあり、その塁堤の内側には針田（張田）、木戸ワキ（城戸（柵戸）脇）等の地名や水門があり、銚子館を含めた川崎一帯の、恰も外濠であるかの観を呈している。

かかる景観は、ちょうど志和城址の擬定地に彷彿しており、彼の城山を是の銚子館に比することもできよう。

本日の読売紙には、胆沢城当時の柱脚が出土したことを伝えている。此の地点は私どもが年来予知していたもので、川崎の場合も今後手掛りとなるものが出ることは期待され、幸に理解深い橋本門崎村長、高橋助役、教委佐藤要一氏に対しても、その際いち早く連絡下さるようくれぐれもお願いしたことである。

(29. 4. 1。31. 1. 22註)

(註) 参考引用文献

田中喜多美氏「岩手科学史序説」「佛教伝来と岩手の遺蹟」其一、二。昭和27年。「月刊いわて」
司東眞雄氏「平安時代の岩手県南寺院考」。昭和29年。ただし時代区分観などは必ずしも賛成できないが

註１　小岩末治「岩手内陸における早期の縄文土器」岩手史学研究19。

註２　伊東信雄氏「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」古代学三の二。

註３　鳥畑壽夫君「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」上代文化25。昭30. 4。
鳥畑隆次氏所蔵の破片には、縄文式末期の大洞A'（エーダッシュ）式土器破片があり、鳥畑壽夫君は谷起島の例を弥生土器と発表したが、これは現在ではむしろ縄文式土器最後の型式と見るのが妥当であろう。

註４　もっともちょっと離れた永井村杉山古墳群からは、ワラビ手刀や土器が出ており（小岩末治「岩手県内古墳等出土品の一考察」岩手史学研究18)。昨年伊東信雄氏が発掘調査された節にも、須恵器や鉄刀が出、古墳の構造も判明した。

註５　門崎村役場を建てる際、同敷地内から、糸切底の皿形土師器（ハジキ）が出ており、その特徴からみて、奈良、平安初期、即ち胆沢城頃のものと思われる。参照（小岩末治「岩手県における土師器文化考」上岩手史学研究21）

◎　なお註１と註２の間に、布佐洞窟を調査された加藤孝氏の研究発表を引用させていただくべきだが、割愛した。ただここから古い陶器の破片が出た由であり、県内の古陶については嘗て私もふれたことがある。（岩手史学18)。

以下、未発表稿に添えられていた佐藤要一（門崎村教育委員）あての手紙（下書きと思われる）を示す。

佐藤要一様　幸便にて　　小岩末治

私が病に倒れたのが去る二十九年四月、五月十四日入院したわけでしたが、同封の稿はその直前、金子定一氏にわたしてあったもの・・家内に出させた。・・それが五月三日の消印になっております。（他にも二編ばかりありますが)・・。

貴村でお世話になったお礼の意味をこめて、紹介を試みたのでしたが、とうとう印刷にならず残念です。田中主任は「川崎柵」について言質をとられたくなかったようですので、朱線で消しました。本当は「柵址」とするには調査発掘が必要なわけですから・・・・

私のようなチンピラが「史談」として「開発クラブ」にのせるのならば許していただけると思ったからでした。・・・

この間、佐藤様おいでの節は川崎柵について田中主任は言質をとられたくなかったとみえて、口を濁しておられました。私も確信を持っている訳ではありませんが、擬定地の第一候補とするには現在のところ差支えないと思いますので、原稿の通りです。

何か村史の御参考ともなれば幸いです。なお先週おいでかとお待ちしましたが、実は二月五日から十二日まで、東京、仙台へ出張しますので、その間は私が実測図や写真原版など整理している関係上、御用に立ちかねるかとも存じます。それで、なるべくなら二月三日（金）までにおいで下さるか、あるいは二月十三～十八日間においでの程、その次の週は田中主任の出張です。おいで下さらなかったら、お手紙でも田中主任あて下されば、原稿などだったらお送りできると存じます。　　早々不備

3 「河崎の柵擬定地」は「河崎柵」であるのか

「河崎の柵擬定地」はその名の通り前九年合戦に登場する「河崎柵」の擬定地である。今回の調査で得られた知見から、当遺跡が河崎柵であるのか見解を示す必要があろう。

発掘調査でみつかった11世紀の遺構、遺物

平成15・16年度の調査では幅約4.5m、深さ約1.7mの堀が長さ約65mにわたってみつかっている（C区SD101）。この堀はまだ調査区外である北側にまだ続いている。堀の埋め土からは11世紀に属する中国産白磁碗の破片が出土し、堀の年代は11世紀に属する可能性が高い。この堀と平行に走る別な堀（既報告、RG01）がすでに平成12年度の調査でみつかっている。幅は約４m、深さは約１mでC区SD101よりやや小規模である。

これらの堀の用途を考えてみる。堀が造られた位置は、高地（通称陣張山）と北上川に挟まれて平地が狭くなる地点で、平地の狭隘部の入口を塞ぐ形に堀が造られている。安倍氏の本拠地である鳥海柵や厨川柵を攻めるには北上川に沿って北上していく必要がある。よってこの平地の狭隘部は必ず侵入軍が通る地点とすることができる。その地点を遮断する形に堀が２条掘られているのである。この堀の造られた目的は敵軍の進撃を遮断する交通遮断施設と判断される。

11世紀に属する遺物は前述の白磁碗片とかわらけがある。しかしながらこの出土遺物量は多いものではない。河崎の柵擬定地の発掘調査面積は20,000㎡以上に及ぶが、11世紀のかわらけは全部で約100片しか出土していない。この量は鳥海柵のかわらけの出土量に比べると非常に少ない量である。

「河崎の柵擬定地」の性格

河崎の柵擬定地の調査では11世紀の堀跡が検出され、かわらけも出土している。しかしながら11世紀に属する建物跡は存在せず、上述のように遺物の量は非常に少ない。このように河崎の柵擬定地では日常的な生活が営まれた気配が非常に希薄なのである。このことから、安倍氏の時代に河崎の柵擬定地は日常的に生活を営んだ場所ではなく、合戦に際して、敵の進撃を阻止するために築かれた交通遮断施設と位置付けるのが妥当と考えられる。このように安倍氏の「柵」の中には「交通遮断施設」としての機能を持ったものがあることが指摘できるのである。これまでの安倍氏の「柵」は日常的な居館、地域支配の拠点といった解釈が主流であった。もちろんそのような機能をもった「柵」も存在すると思われるが、新たに「交通遮断施設」の視点から「柵」の研究を進めれば明らかになってくることも多いのではないか。

「河崎の柵擬定地」は「河崎柵」か

河崎の柵擬定地は交通遮断施設の機能をもった安倍氏時代の施設である可能性が高いと考えられるが、ここではその根拠となる事象を列挙したいと思う。

①地元の伝承

古くからこの場所が「河崎柵」跡という伝承が地元にはあり、周辺の地名を河崎柵と結びつけた地名起源伝承が存在している。また明治以降、多くの研究者がここを河崎柵擬定地の第一候補にあげている。

②地名が「川崎」であること、

遺跡が位置する場所は川崎村門崎字川崎である。村名の川崎は昭和31年の合併以降につけられたものであるが、字名の「川崎」は寛永検地帳にも登場している。

③11世紀中頃のかわらけが出土していること

11世紀中頃のかわらけの全国的に見ても出土事例は非常に少なく、岩手県内では5箇所あまりでしか見つかっていない。その事例の少ない遺物が出土していることは無視できない。

④　二重の掘跡がみつかっていること

「交通遮断施設」として有効な位置から堀がみつかっている。この堀の年代は出土遺物、検出面から解釈して11世紀のもので矛盾ないものである。擬定地から軍事的、防御的色彩の強い遺構がみつかっているのである。交通遮断施設は城郭史、合戦史の観点からみても、11世紀に存在する施設として妥当なものである。

⑤　陸奥話記の記述との位置関係

陸奥話記には「河崎柵をもって営となし黄海に防ぎ戦う」と記されている。これは「川崎柵」と「黄海」が距離的に近い位置関係にあることを示している。河崎の擬定地から北上川沿いに下流約8kmには黄海（藤沢町黄海）という地名があり、陸奥話記の記述と矛盾なく解釈できる位置関係である。

以上の点から「河崎の柵擬定地」が陸奥話記に登場するの「河崎柵」である可能性は非常に高いと示すことができる。　（羽柴）

4　土師器・須恵器について

河崎の柵擬定地の発掘調査では第1検出面と第2検出面でそれぞれ土師器、須恵器が出土している。これらの土師器、須恵器の年代観について示したい。

第1検出面の土師器・須恵器

第1検出面では2棟の竪穴住居（E区SI1、C区SI7）が検出されている。どちらの住居も埋土中に十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積しており、十和田a火山灰の降下直前に廃絶された住居と判断できる。遺構外の第1検出面出土の土師器・須恵器も住居と同時期のものと推測される。十和田a火山灰の降下年代は西暦915年とされており、第1検出面の土師器･須恵器はその直前の10世紀初頭に属すると推測される。

土師器坏は内外面無調整のいわゆる赤焼土器の坏（97）と内黒で外面に再調整のない坏（98･218）がある。また貼り付けの低い高台を持つ内黒坏（208）、足高の貼り付け高台を持つ内外面ヘラミガキ黒色処理の坏（209・210）がある。

土師器長胴甕はロクロ長胴甕（103～107･221など）と非ロクロ長胴甕（102･220など）がある。ロクロ長胴甕はいずれもロクロの下地にタタキが施されないものである。口縁部形態は口縁が「く」の字に折れ曲がるものと口縁端部が立ち上がるものがある。非ロクロ長胴甕は体部外面がヘラナデ、内面がハケメの調整で口縁部が「く」の字に折れ曲がる形態のもである。小型の土師器長胴甕もロクロ（99～101）と非ロクロ（219）のものがある。ロクロは底辺部までロクロ調整で回転糸切りのものである。またC区SI7では内外面にヘラミガキが施され内面黒色処理の土師器鉢（222）が出土している。ヘラミガキの下地がロクロ調整か否か不明である。

須恵器は壺、長頸壺、甕、大甕がある。壺（108）は短頸壺に分類すべきかもしれない。長頸壺（109）は口縁部が欠損している。底部には低い貼り付け高台が付いている。大甕（110）は外面平行タタキ目、内面は青海波に似るアテ具痕である。甕（223）は体部上半のロクロ目の下地にタタキ目は施されていない。

第2検出面の土師器・須恵器

第2検出面の出土土師器を概観すると、ロクロ不使用の坏、頸部に段のある非ロクロ長胴甕、ロクロ坏、ロクロ使用長胴甕が混在しており、8世紀後半～9世紀初頭頃の土師器群と推測される。これらを整理作業開始時は時間幅の狭い単一の時期に属するものとして解釈しようとしたが、やはりある程度の時間幅をもった、時期差のあるものが混在すると判断した方が妥当であると判断した。住居ごとに出土土師器・須恵器を観察すると大きく2つの時期に分けるのが妥当と思われる。先行するのがD区SI1に代表される8世紀後半頃のグループ、後続するのがC区SI5に代表される8世紀末～9世紀初頭のグループである。

①8世紀後半のグループ

D区SI1の出土遺物にはロクロ使用の土師器、須恵器が含まれていない。土師器坏は小型で完全な平底ではないが、座りのよい丸底である。長胴甕は筒型に近い器形が多く、いずれも頸部に段がある。時期は8世紀後半と推測される。この住居からは和同開珎（5047）が出土しており土師器の年代観と矛盾しない。

その他にこのグループ属するのはE区SI3、E区SI4、C区SI4がある。E区SI3ではロクロ須恵器坏

片（112）が出土しているが、丸底の土師器坏（111）とロクロ不使用の土師器甕が出土している。この住居からは和同開珎（5048）が出土しており土師器の年代観と矛盾しない。

E区SI４では体部外面に段のある土師器坏（115）と頸部に段のある土師器長胴甕（117）が出土している。この住居跡からは蕨手刀（5001）が出土している。

C区SI４では丸底と推測されるロクロ不使用の土師器坏（39・40）と頸部に段のある土師器長胴甕（41）、土師器球胴甕（42）が出土している。

②８世紀末～９世紀初頭のグループ

C区SI５では多様な土師器、須恵器の坏が出土している。土師器坏は小型の平底のロクロ不使用のもの（44～46）とロクロ坏で静止糸切りのもの（47）と回転糸切りのもの（48）がある。須恵器坏は回転ヘラ切りのもの（50～53）、回転糸切りのもの（54・55）がある。土師器長胴甕はロクロ不使用で頸部に段のあるもの（57～59）、ロクロ使用のもの（61）がある。まさにロクロ不使用からロクロ使用の過渡期の様相を呈する土器群である。時期は８世紀末～９世紀初頭と推測される。

その他にC区SI１、C区SI３、B区SI１、C区SI６、D区SI２の土師器・須恵器がこのグループに属すると推測される。ほとんどの住居で非ロクロ土師器坏とロクロ土師器坏、須恵器坏が共存し、土師器長胴甕もロクロ長胴甕と頸部に段のある非ロクロ長胴甕が共存している。ロクロ長胴甕のロクロの下地にはタタキ目が確認されるものが多い。坏以外の須恵器の器種も一定量みられ、須恵器甕（27・62など）、大甕（63・96など）が存在する。

墨書・刻書土器について（第208図）

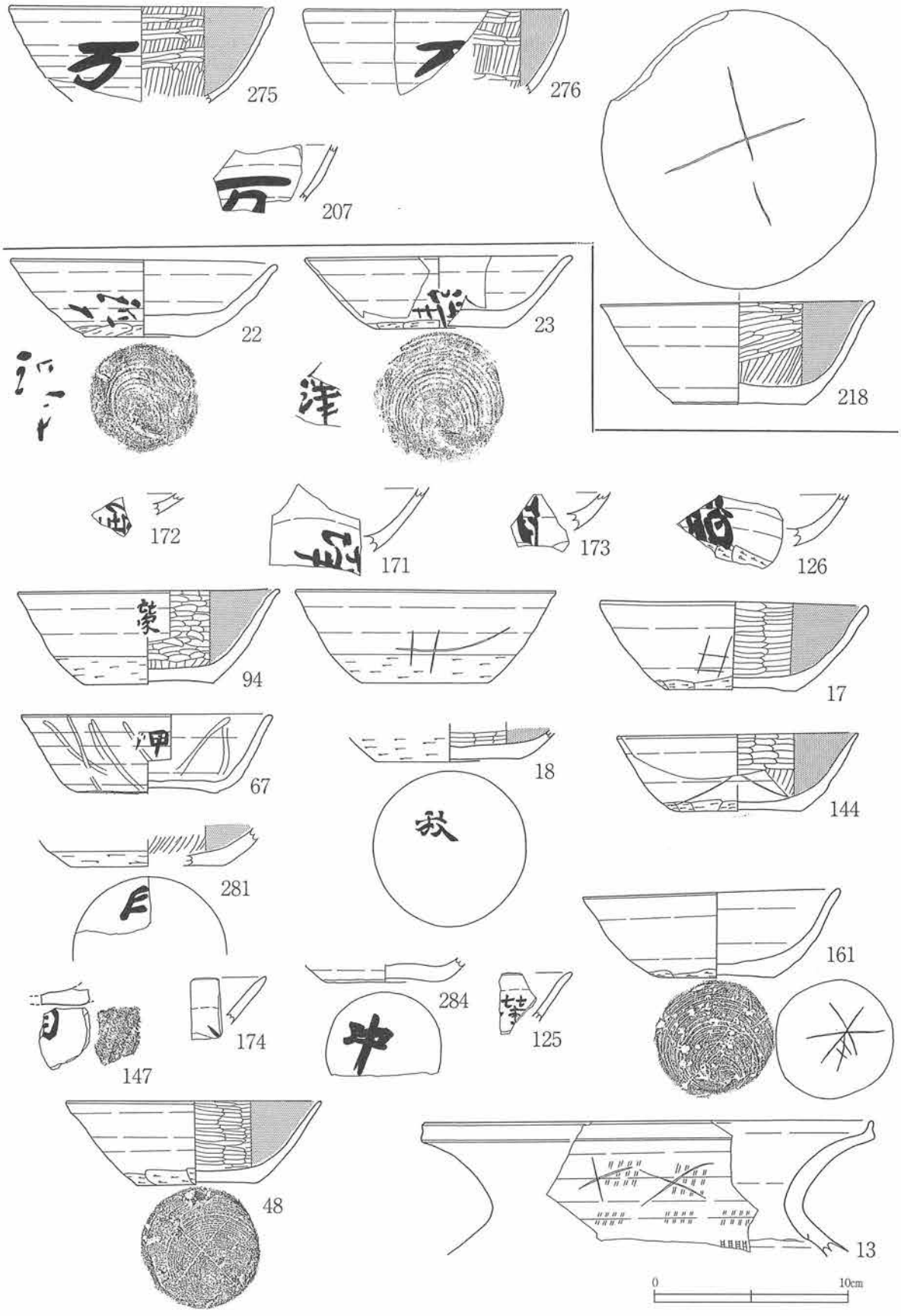
第１検出面出土の墨書・刻書土器　・・・10世紀初頭のものである。207・275・276の土師器坏には「万」の墨書が書かれている。字体が類似し、出土位置も近接しており関連が推測される。218の土師器坏は内底面に「×」の刻書が施されている。

第２検出面出土の墨書・刻書土器・・・土師器、須恵器に墨書、刻書がみられる。これらの年代は８世紀末～９世紀初頭のグループに属すると思われる。岩手県内の墨書土器では最も古い段階に属するものと思われる。

「淨」と推測される墨書が施される須恵器坏がある。22・23・171・172の４点である。いずれも外面底辺部に横位に「淨」の字が記されている。これらの須恵器は底辺部に手持ちヘラケズリの施される回転糸切りの坏で均質なものである。いずれも黄橙色の色調で、質感も共通しており同一の窯の製品と判断できる。また文字の種類は不明であるが、126・173も「淨」が書かれたものと均質な須恵器坏である。これらも「淨」と同様に外面の底辺部に横位に文字が書かれている。

94の土師器坏には「栄」の墨書と刻書が刻まれている。「栄」の字は旧字体で、外面口縁部近くに正位に書かれている。刻書は墨書の背面に刻まれている。墨書と刻書は一対の可能性が考えられる。また17・144の土師器坏は体部にそれぞれ「井」、「×」の刻書が刻まれている。この刻書の背面は欠損しており、その部分の墨書の有無は不明である。

66の須恵器坏口縁部には旁が「甲」の字が書かれるが、偏が不明で文字を判読できない。18・147・284の土師器坏には底面に墨書が書かれているが文字を特定することができない。130の須恵器坏の底面には「木」の墨書がある。174の須恵器坏の体部外面に墨書があるが文字の種類を判断できない。284の須恵器坏の底面には「中」の墨書がある。48の土師器坏の底面には「×」の刻書がある。161の須恵器坏の底面には「奉」の字に形状が似る刻書がある。13の須恵器甕の口縁部には「×」の刻書が２つ刻まれている。（羽柴）



第210図　墨書・刻書集成

5　緑釉陶器小壺について

B区の遺構外から緑釉陶器の小壺（報告書掲載番号202）が１点出土している（以下、本資料とする）。淡緑色の釉が施される黄橙色で軟質の焼き上がりの製品で、京都洛北窯産と推定される。

本資料は肩部が張る扁平球状の小壺である。これまで発見されている緑釉陶器小壺は、体部形状は肩部の張るものや体部中央に最大径をもつものなどがあり、有高台または擬高台風の底部をもつものが多い。体部下半以下を欠損しているためあくまで推定であるが、本資料も体部形状についてはこれまで発見されている事例と同様の特徴をもつと考えられる。ただし、これまで確認されている事例のほとんどは頸部がわずかに直立するタイプであり、本資料のような無頸のものというのは全国的にも類例が少なく、極めて希少な事例といえる。

次に年代的位置付けについて考えていきたい。緑釉陶器の小壺は、椀・皿類に比べて出土例が多くないためそれ自体についての編年は現在のところ確立されていない。したがって、本資料についても型式学的に年代を比定することは困難である。ただし、緑釉陶器の小壺は体部形状をみても彩釉陶器からの系譜を引くものが多いこと、淡緑色の釉が施される軟陶で洛北窯産であることを積極的に評価すると、本資料は９世紀前半に位置づけられる可能性がある。

続いて岩手県内における緑釉陶器出土の意味についてみていくことにしたい。まず、岩手県内で現在緑釉陶器の出土が確認されている遺跡はおよそ20遺跡である。その多くが集落遺跡であり、竪穴住居跡から１～数点の破片状態で出土することが多い。器種は椀・皿類にほぼ限定され、最も多く施釉陶器が出土している水沢市胆沢城跡でも、緑釉陶器に限ると小壺などの小型器種はほとんど出土していない。岩手県内では使用状況が明確にわかる事例は確認されていないが、緑釉陶器は堀立柱建物跡や白磁・灰釉陶器・石帯など一般的な遺跡では出土しない遺構・遺物を有する遺跡からの出土が多いことから、特定の階層に伴う遺物であると考えられる（村田2004）。年代については、いずれも猿投窯編年黒笹14号窯式～黒笹90号窯式期（９世紀前半～後半）に位置づけられる。ただし、ほとんどの遺跡で出土するのは黒笹90号窯式期（９世紀後半）の製品であり、黒笹14号窯式期の製品は胆沢城跡のみで確認されている。本資料が９世紀前半の製品であるとすると、胆沢城に定量的に搬入される猿投窯黒笹14号窯式期（９世紀前半）と併行する時期の製品であり、県内における緑釉陶器の最古段階の事例とみなすことができる（註）。

本資料は遺構外から出土したため、当時の使用状況やその性格を特定することは困難である。しかし、器種として県内で初出例であること、加えて胆沢城跡以外の遺跡で９世紀前半に位置づけられる可能性のある資料が出土したという点は注視しておく必要がある。いずれにせよ、今後は他地域の出土事例および彩釉陶器小壺との比較を通じて本資料の位置付けについて検討していく必要があろう。

（村田）

註．ただし、彩釉陶器の最古例としては北上市上鬼柳Ⅲ遺跡出土の二彩長頸瓶（８世紀後半）がある。

参考文献

愛知県陶磁資料館　1998『日本の三彩と緑釉　－天平に咲いた華－』
高橋照彦　1996「３．緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』
村田　淳　2004「岩手県出土の緑釉陶器　－出土事例の集成と若干の検討－」『岩手考古学』第16号

6　11世紀のかわらけについて

河崎の柵擬定地では11世紀に属すると推測されるかわらけが出土している。11世紀に属すると思われるかわらけは100点（1001～1100）が出土した。これは図化不能な微細片を除いた数量で、出土したほとんどを図示している。図化したかわらけの総重量は1,647.5gで、図化できない微細片の総重量は27.0gである。

出土片は小片が多く、口縁部から底部までの揃った全体の器形を把握できるものは非常に少ない。特に大型かわらけは全体の器形を把握できる資料は１点も存在しない。よって総合的な器種、器形分類は難しい状態であるが、得られた資料から11世紀に属すると推測されるかわらけの特徴を示したい。

出土した資料は特定の遺構、層位から出土したものをピックアップして11世紀のかわらけと推測しているわけではなく、土器の器形、色調、質感から総合的に判断して11世紀のかわらけと推測したものである．それらの基準は11世紀中～後葉の編年位置を与えられている岩手県金ヶ崎町鳥海A・西根遺跡、滝沢村大釜館遺跡、岩手町沼崎遺跡出土資料の特徴との比較によっている。よって本報告書の資料の中に11世紀以外のかわらけが含まれている可能性もあり得るが、資料のピックアップはかなり吟味しておこなったつもりである。

かわらけの分類（第209図）

資料は小型かわらけ、大型かわらけ、高台付かわらけ、柱状高台かわらけに分類される。いずれの器種も製作にロクロを使用しており、切り離しは回転糸切り、底面にすのこ痕を有するものが多い。そして、いずれの器種も色調は橙色がかり、焼成は良好であり砂粒を含んだ胎土は共通している。各器種の割合は（破片のため推測も含む）、小型かわらけが31点で31％、大型かわらけが51点で51％、高台付き（その可能性のあるものも含める）かわらけは17点で17％、柱状高台かわらけが１点で１％である。

（1）小型かわらけ　小型かわらけは大きく２分類ができる。底部がやや突き出し、体部が内湾ぎみに緩やかに立ち上がる浅い皿型のもの・・①（1001・1058）と底部の突き出しが顕著ではなく、体部が直線的に立ち上がり身が深いもの・・②（1005）がある。

（2）大型かわらけ　底部から口縁部まで揃っている資料がなく分類は困難を極めるが、推測も交えて分類をおこなう。口縁部の形態から３分類する。口縁端部まで内湾したままた立ち上がるもの・・①（1026・1027・1073など）。口縁部が内湾ぎみに立ち上がるが、口縁端部がやや外反するもの・・②（1028・1074など）。口縁部が直線的に斜めに立ち上がるもの・・③（1038・1041など）がある。底部から底辺部の破片はいずれも底部がやや突き出し、内湾ぎみに体部が立ち上がりはじめる器形であり、①～③のいずれの下半部も共通した形態の可能性が高い。しかし①～③の実測図の下半に高台付きかわらけの下半部の実測図を継ぎ足しても違和感はなく、①～③が高台付きかわらけである可能性も否定はできない。

（3）高台付かわらけ　高台部を有する個体は９点あるが全体の器形を揃っているものはない。この内、内面にヘラミガキが施されない個体は３点、内面にヘラミガキが施される個体が３点、剥離した高台部のみの破片が３点である。高台を有しない小型、大型かわらけの底部破片で内面にヘラミガキが施されたものは皆無なので、ヘラミガキを有する口縁～体部破片（1049～1051・1092～1096）は、高台付かわらけの破片である可能性が高いと判断できる。高台部の形状は断面が三角形で、貼り付け高台のもの（1044・1046～1048・1097・1099・1100）がほとんどであるが、1098のみは断面が幅の狭い四

角形のケズリ出し？高台である。高台付かわらけの口縁部と推測されるヘラミガキを有する口縁部破片を観察すると口縁端部がやや外反するもの（1049･1050）、口縁部が直線的に立ち上がるもの（1051･1092・1096）がある。またヘラミガキは内面全面と外面の口縁部上半に施されるもの、内面にのみ施されるもの、外面の口縁上半にのみ施されるものなど様々でそのパターンを整理しきれない。またヘラミガキの上に黒色処理を施したものと施していないものの両方が存在する。しかし黒色処理が施される破片は胎土、色調、出土遺構から考えて11世紀のかわらけと判断するのが妥当と判断され、11世紀のかわらけにも黒色処理の技法が存在していることを示す資料である。

このように高台付かわらけ（と思われる破片）の特徴は多様であるが、大きく３つに分類をしておく。断面が三角形の貼り付け高台を持ち、体部にヘラミガキを施さないもの（1044～1046）・・①、断面が三角形の貼り付け高台を持ち、体部にヘラミガキを施されるもの（1048・1097など）・・②、高台が幅の狭い四角形の削り出し高台で体部内面にヘラミガキが施されるもの（1098）・・③。

(4) 柱状高台かわらけ　１点（1052）の出土であり、口縁部を欠損した破片であるため全体の器形は不明である。高台径は5. 8cmであるのに対し、高台高は1. 5cmと低いものである。器部分は口縁部が欠損するが身が深く、皿型というよりも碗型に近い器形と推測される。

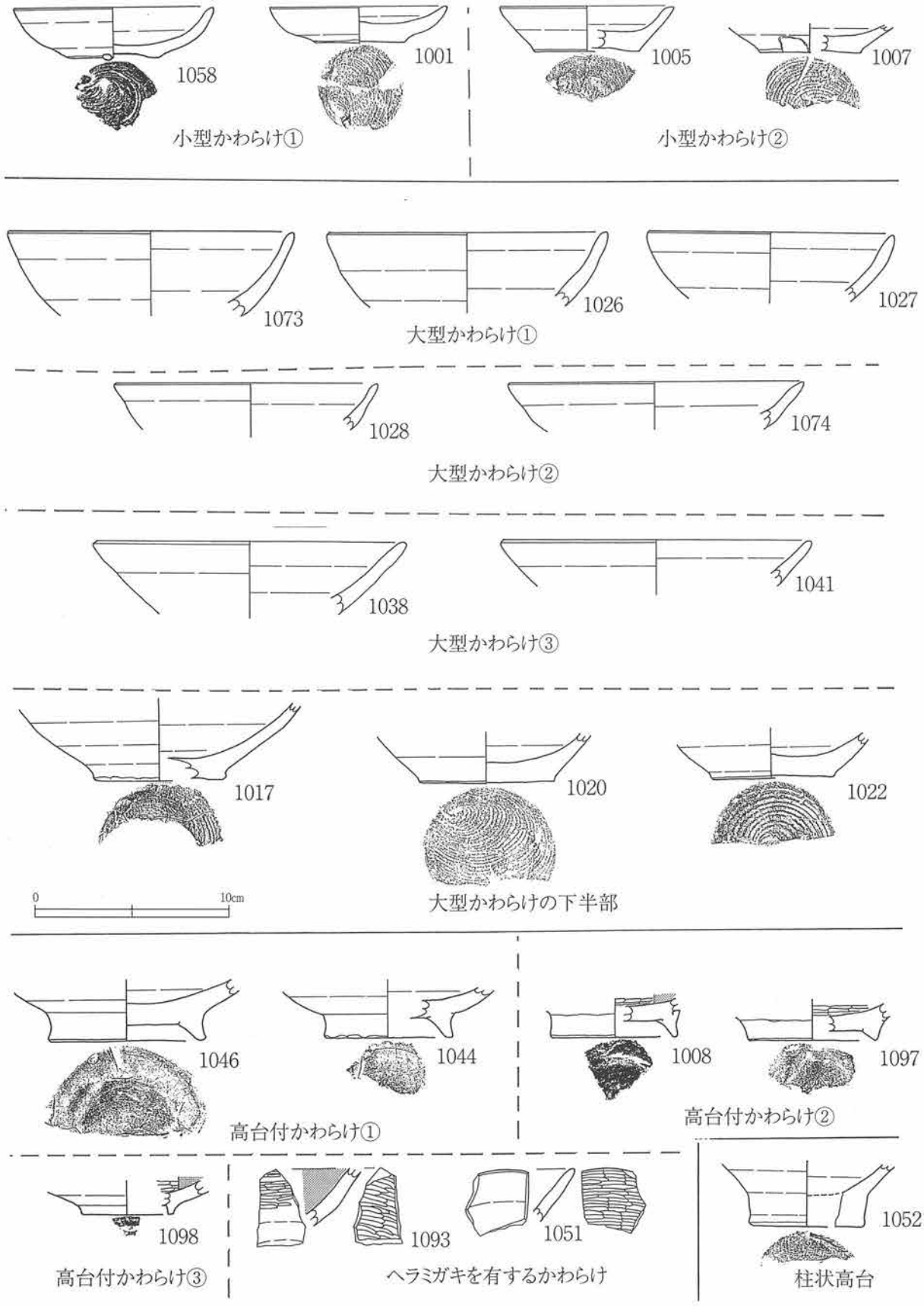
編年的位置

河崎の柵擬定地出土資料は大釜館遺跡、鳥海A・西根遺跡、沼崎遺跡のかわらけと非常に類似点が多い。厚手の器壁、橙色の色調、碗・小皿のセットなどがその類似点として挙げられる。これらの点から河崎の柵擬定地出土資料は、大釜館遺跡、鳥海A・西根遺跡、沼崎遺跡のかわらけとほぼ同じ編年的位置と判断できる。岩手県内におけるかわらけ編年（及川　司2003「陸奥のかわらけ（３）岩手県」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院）において、11世紀のかわらけは大釜館遺跡資料を11世紀中葉、鳥海A・西根遺跡、沼崎遺跡資料をそれよりやや後続する11世紀中葉～後葉（1062年頃）としている。及川は、この時期差を大釜館遺跡の大型かわらけの口径、器高が他の遺跡の大型かわらけより大きいことから設定している。しかしながら、河崎の柵擬定地の場合、大型かわらけは器高が明らかなものはなく、口径も12. 5cm～15. 8cmと様々で、大釜館資料と同等のものから鳥海A資料よりも小さいものもあり、この点から大釜館遺跡に相当するか、鳥海Aに相当するか明らかにはできない。よって大きく現在の編年観に照らして河崎の柵擬定地のかわらけは11世紀中葉～後葉とするのが妥当と考える。この時期はまさしく前九年合戦の時代と重なり、河崎の柵擬定地が「河崎柵」である大きな証左の一つになる事象である。また逆に河崎の柵擬定地が「河崎柵」であるならば、出土したかわらけの年代の一端を「黄海の戦い」が勃発した、西暦1056年に求めることも可能になってくる。

また河崎の柵のかわらけには「柱状高台かわらけ」が含まれている。大釜館遺跡、鳥海A遺跡等では柱状高台かわらけは見出されておらず、このグループに柱状高台かわらけの器種は存在しないとされていた。今回の柱状高台かわらけはすでに11世紀中葉～後葉に柱状高台かわらけが器種組成として存在することを示している。そしてヘラミガキ、黒色処理が施される高台付かわらけの出土も、11世紀中葉～後葉のかわらけの器種組成の多様さを示す資料である。

11世紀のかわらけに土師器長胴甕が伴う可能性

確実な供伴関係は証明できないが、11世紀中葉～後葉のかわらけと同時代の可能性が推測される「土師器長胴甕」がある。掲載番号215～217の土師器長胴甕である。これらは器壁が非常に厚く、粗い感じのヘラケズリが施されるものである。口縁部の屈曲はほとんどなく、口縁部のヨコナデの施される



第211図　11世紀のかわらけ分類図

幅が非常に狭い。胎土はかわらけとは異なるものである。これらの土師器の特徴、質感は出土した他の土師器とは非常に違和感を覚えるもので、他の土師器と同時代のものとは考え難い。本遺跡で確認されている新しい時代の土師器のまとまりは十和田ａ降下火山灰前後のもので、これより新しい10世紀後半の土師器の出土は確認されていない。以上の点からこれらの「土師器長胴甕」が11世紀中葉～後葉のかわらけと供伴する時期のものである可能性を指摘したい。この土師器長胴甕の用途は煮沸用具と推測される。大釜館遺跡の報告書においても、11世紀のかわらけに供伴する可能性がある土師器長胴甕が示されている。本資料はこの大釜館遺跡の長胴甕に器形、調整が類似しており、「土師器長胴甕」が11世紀中葉～後葉のかわらけと供伴する可能性を高めている。（羽柴）

7　12世紀の遺物について

河崎の柵擬定地の発掘調査では12世紀の遺物が出土している。12世紀の遺物は言うまでも無く平泉を拠点とした奥州藤原氏の時代と同時代のものである。岩手県内において平泉以外で発掘調査をおこなっても12世紀の遺物はなかなか出土しない。現在のところ東磐井郡内で12世紀の遺物が出土しているのは河崎の柵擬定地のみである。河崎の柵擬定地は平泉（柳之御所遺跡）から直線で約16kmの距離である。

出土遺物の内容（第210図）

出土した12世紀の遺物には、手づくねかわらけ、ロクロかわらけ、渥美産陶器、須恵器系陶器、中国産白磁、青白磁、銅製六器がある。

①かわらけ　12世紀のかわらけの出土総量は、ロクロかわらけが140.0g、手づくねかわらけは2,603.3g出土している。圧倒的に手づくねかわらけの数が多い。手づくねかわらけの大小の比率は、大小どちらであるか判断できない微細片が多く、正確な数値を出すことができないが、大型かわらけの個体数が小型かわらけより多いと推測される。また内折れかわらけも２片が出土している。

これらのかわらけは平泉で出土するものと胎土、器形が全く同じものである。出土した大型手づくねかわらけは殆どが２段ナデであり、時期的なまとまりを有する可能性が高い。大まかな時期しか示せないが12世紀第３四半期である可能性が高い。かわらけには油煙が付着するものが存在し、灯明皿として使用された個体があることを示している。

②国産陶器　渥美産陶器は広口壺（2026）、壺（2027・2093）、山茶碗（2090）がある。壺2027と2093は同一個体の可能性がある。卵倒型の体部を持つ壺と推測される。須恵器系陶器は波状文四耳壺の体部片である。外面に櫛描きの波状文が施されている。珠洲産の可能性が高いと思われる。出土した常滑産陶器の中に12世紀に属する可能性のものもあるが、体部破片の場合その詳細な時期を特定することは困難で、明確に12世紀に属する常滑産陶器は提示することができない。

③中国産磁器　白磁碗（2037・2038）、白磁四耳壺（2041・2042・2043）、白磁小壺（2044）、青白磁小壺蓋（2048）がある。大宰府分類Ⅱ類の白磁碗（2034～2036）は12世紀前半に属する可能性もあるが、11世紀段階に属するものと考え、ここで述べる12世紀の遺物には入れない。白磁碗2037、2038は内面に劃花文が施されている。大宰府分類のⅥ類に相当すると思われる。2038は青白磁碗に分類するべきかもしれないが一応白磁碗とした。白磁四耳壺は2041、2042が胎土、色調から同一個体の可能性が考えられる。2043は別個体と推測される。2043は外面に垂線が施されている。いずれも大宰府分類Ⅲ系と推測される。白磁小壺（2044）は体部破片で薄手の作りである。2048は青白磁小壺の蓋である。釉の

発色が悪く青灰色を呈する。
④銅製六器　密教法具の六器である。鋺（5044）が1個体と台皿（5045・5046）が2個体ある。器形、器厚から12世紀に属すると判断される。

出土遺物の特徴

出土した遺物はいずれも日常生活に使用するというよりも、儀式、宗教儀礼に関与する色彩の強いものである。特に銅製六器は密教の修法に用いる純粋な宗教用具である。六器は密教の修法の際に祭壇の上に香炉、華瓶などと並べて用いられるものである。六器が存在することはその場所で密教の修法が行なわれたことを示している。六器は経塚関連の遺跡からの出土する事例がある。経塚を構築する過程の法要、修法に使用されたもの、または修法後、経塚に埋納されたものと解釈される。

また、白磁四耳壺は経塚から出土することが多い。これは、経筒を入れる外容器、または経文そのものを入れる容器として使用されたと推測される。

須恵器系陶器波状文四耳壺、渥美産壺も白磁四耳壺と同様に経塚から出土することが多い。これらも外容器、あるいは経文を入れる容器と推測される。

青白磁小壺、白磁小壺は国内においてはほとんどが経塚からの出土である。お香やガラス小玉を納めて経塚に埋納する事例がみられる。

白磁碗、渥美産山茶碗は生活遺跡から出土する場合もあるが、経塚に埋納されている事例も存在する。また埋納品でなくとも、経塚造営の際の法要、修法に用いられることもあり得るものである。

かわらけも日常生活に用いられる器ではなく、儀式、儀礼の際に使用される器である。経塚造営の際の法要、修法に用いられる可能性を想定できる。

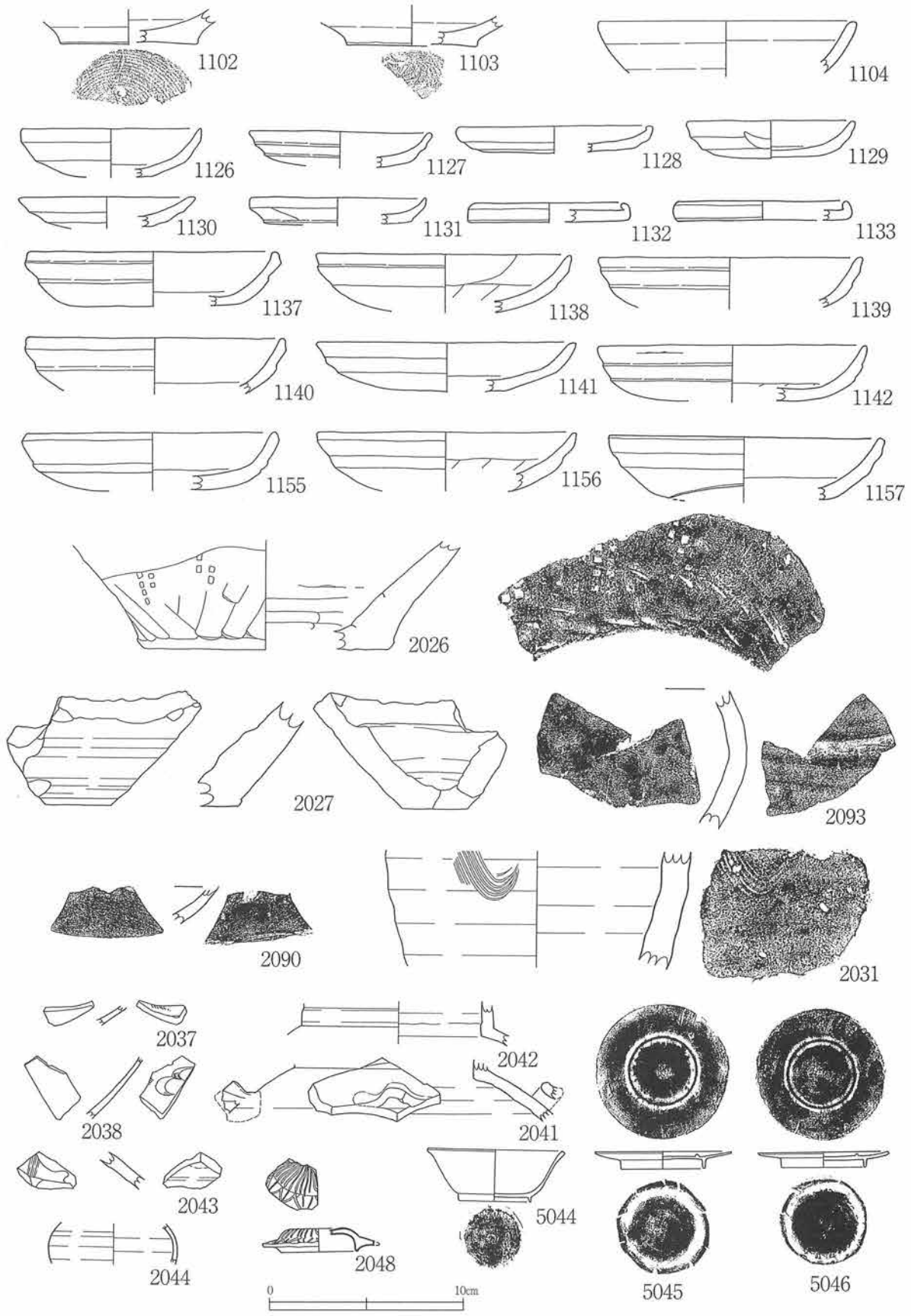
このように河崎の柵擬定地から出土した12世紀の遺物の性格はいずれも経塚、またはその関連遺跡から出土する事例が多いものばかりである。これは河崎の柵擬定地内に12世紀の経塚が存在した可能性を髣髴とさせるものである。これは、遺跡内に存在した経塚の盛り土が崩れ、埋納したものが散乱した状況とすると理解しやすい。

経塚存在の可能性

発掘調査では12世紀の方形周溝（B区SD1）がみつかっている。（径12m、溝の幅1m、深さ0.5m）溝の埋土中からは12世紀の手づくねかわらけ、渥美産陶器山茶碗が出土している。これは盛り土を失った塚の周りを巡る周溝と推測される。この方形周溝が河崎の柵擬定地に存在した経塚の痕跡と考えられるのである。しかし白磁四耳壺、渥美産壺、須恵器系陶器波状文四耳壺の個体数を考えると、経塚の基数が1基とは考え難く、全く痕跡が失われた経塚の存在も想定される。

何故、12世紀に河崎の柵擬定地に経塚が築かれたのであろうか。奥州藤原氏は安倍氏の子孫である（清衡の母は安倍氏の娘）。その奥州藤原氏が悲劇的な滅亡をした安倍氏の追善供養を、前九年合戦の舞台でおこない、経塚を造営した可能性が考えられるのではないか。鳥海柵跡でも12世紀の渥美産袈裟襷文壺、常滑三筋文壺の破片が出土している。経塚が確認されているわけではないが、これらの陶器は日常生活に用いられることは少なく、経塚に埋納されることが多い器種である。河崎柵のみではなく、安倍氏ゆかりの鳥海柵でも12世紀の経塚存在の痕跡が存在するのである。

河崎の柵擬定地の調査区内に所在した西屋敷葛西家の南面には「清悦社」が祭られていた。清悦は源義経の家臣で、泰衡が義経を討った戦いを自ら体験した人物とされる。不老長寿になり寛永7年（1630）に四百六十歳余で、葛西宮内の家で没したという。その清悦を葬ったのが「清悦塚」で、清悦



第212図　12世紀遺物集成

を祭った社が「清悦社」であるという。安永風土記には「清悦塚」の記述があり、また菅江真澄遊覧記には「清悦の墳」の記述がある。

「門崎村書出（安永４年）」
清悦塚　高三尺　廻り一間
右塚當村西屋敷九左衛門地形之内ニ御座候　右九左衛門先祖宮内儀清悦と申す浪人者久敷養置寛永七年之頃死去仕此所ニ葬候由申傳候　右清悦と申者往古源義経候御家臣之由申傳候事

「菅江真澄未刊南部仙台遊覧記（天明６年８月６日）」
小川ひとつこえて川崎といふ処に行て、清悦の墳たづぬれば、「斉藤なにがしという人の軒ちかく白壇の生ひしけり下也」とおしへたり。かくて、其ところに至れば、ある人、あないして、「この清悦坊は、義経につきそひ奉りてより、あやしのいろくすをくひて、いのちながらへて、寛永七年の夏まで世にありて、ここにいたりて身まかりて侍るよしを伝え聞て侍る。又こと処にも、清悦の塚あれど、いつはりにてやはべらん」といひて別たり。

これらから、なんらかの墳丘が実際に存在していたことが窺い知れる。清悦社と検出された方形周溝は約50m離れた位置関係である。12世紀の経塚の存在が「清悦塚」の伝承形成のきっかけなった可能性が推測される。（羽柴）

8　近世陶磁器の出土傾向

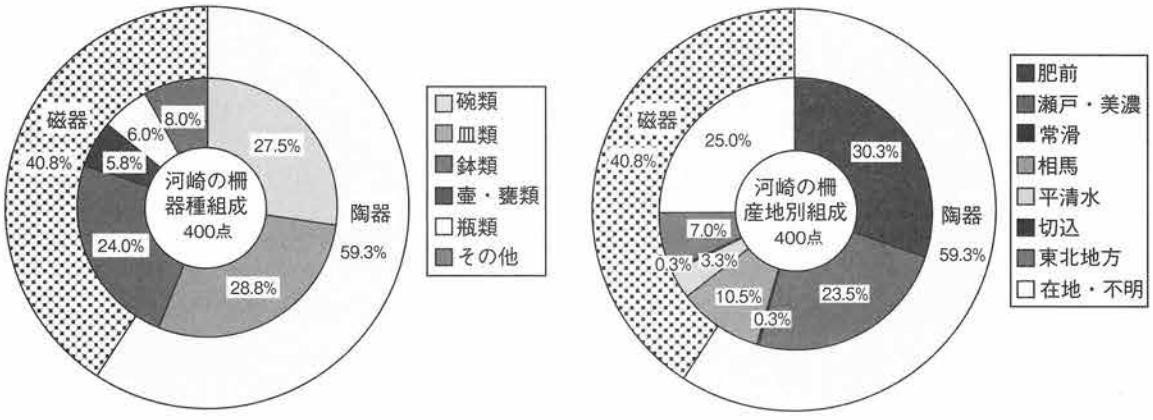
堀立柱建物や墓など多くの近世遺構が確認されている本遺跡では、総破片数約2000点以上、個体数にして500点を超える近世陶磁器が出土した。本節では遺跡内出土の近世陶磁器について、主に器種・産地組成を中心に検討を加える。

器種と産地組成

詳細は事実記載の項に記してあるので、ここでは大まかな器種組成と産地構成についてみていく。まず材質別にみると、総掲載点数400点のうち陶器が238点、磁器が162点である。破片数計算に基づいた点数ではないため誤差を含む可能性はあるが、おおよそ６：４の割合で陶器が多い。全体的な器種構成をみると、大別器種として碗類（茶碗・湯呑など）、皿類（大皿・中皿・小皿・型打皿など）、鉢類（香炉・火鉢・大鉢・擂鉢など）、壺・甕類、瓶類（徳利・土瓶・急須など）、その他（紅皿・蓋・向付・花生・小壷・合子・根付・汽車茶瓶・ひょうそくなど）に分類することができ、多い順に皿類29%（115点）、碗類28%（106点）、鉢類24%（96点）、壺・甕類６%（25点）、瓶類６%（24点）、その他８%（36点）となっている（グラフ参照）。

次に材質ごとの器種組成をみていく。まず陶器は238点のうち、碗類（茶碗・湯呑）21%（49点）、皿類（大皿・中皿・小皿）24%（58点）、鉢類（香炉・火鉢類・大鉢・黄瀬戸鉢・擂鉢など）37%（89点）、壺・甕類８%（18点）、鍋類（行平鍋・焙烙）２%（４点）、瓶類（徳利・土瓶）５%（11点）、その他（蓋・向付・花生・汽車茶瓶・秉燭）４%（９点）となっている。鉢類が最も多く、ついで皿類、碗類となっており、細別器種でみると鉢類では擂鉢や大鉢（鉄絵鉢・黄瀬戸鉢など）といった調理用具、皿類では志野丸皿や灰釉輪花皿などの小皿が多い。産地については、肥前、瀬戸・美濃、常滑、相馬（大半が大堀相馬）、その他不明のもの（東北地方諸窯あるいは在地産か）がある。

磁器は162点のうち、碗類（茶碗・湯呑）35%（57点）、皿類（大皿・中皿・小皿・型打皿）35%（57点）、鉢類（火鉢類）４%（７点）、甕類１%（１点）、瓶類（徳利）８%（13点）、その他（紅皿・蓋・小壷・合子・根付）17%（27点）となっており、碗類と皿類が大半を占め鉢・甕類などの大型器種は全体の１割に満たない。細別器種をみると、碗類では肥前産丸碗と瀬戸産端反碗が多く、その他の器種として紅皿も多く出土している。産地については、肥前、瀬戸、東北地方諸窯（平清水系・切込含む）がある。



河崎の柵擬定地近世陶磁器組成

18世紀以降の肥前産製品が圧倒的多数であり、瀬戸窯産製品は19世紀前半代、東北地方産と思われるものについてはおおむね19世紀前半代以降と考えられる製品が確認できる。

年代について

本項では、各生産地における編年をもとに本遺跡出土陶磁器の年代について検討を加える。

①　肥前産製品

肥前産製品については大橋康二による編年をもとに年代を考えていく（大橋1989）。陶器は碗・皿・香炉・鉢の4器種31点が確認できる。このうち刷毛目碗（3004）は大橋編年Ⅲ～Ⅳ期（17世紀後葉～18世紀前葉、以下大橋□期とする）、京焼風の皿（3047～3050）は大橋Ⅲ期（17世紀後半）、陶器染付香炉（3097）が大橋Ⅳ期（18世紀前半）に位置づけることができる。また、呉器手碗（3005～3008）・刷毛目鉢（3129・3132など）・三島手鉢（3125・3139など）は多くが体部破片であるため根拠に乏しいが、おおむね大橋Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。

磁器は碗・湯呑・皿・鉢・瓶など89点が確認でき、ほとんどが単色染付製品である。このうち4068の皿は大橋Ⅱ期（17世紀前葉）、4153の青磁輪花大皿は波佐見産で大橋Ⅲ～Ⅳ期と考えられるが、その他の多くが大橋Ⅳ期（18世紀前葉～中葉、4001・4002・4051～58など）、または「くらわんか手」と呼ばれる大橋Ⅴ期（18世紀後葉～19世紀前葉、4003～4009など）の製品である。

②　瀬戸・美濃窯製品

瀬戸・美濃窯産製品は、器種のバリエーションが全産地の中で最も多く、年代幅も大窯期後半から連房式登窯第3段階（16世紀末～19世紀中葉）までと広い。ここでは藤澤良祐による大窯および瀬戸窯編年をもとに考えていく（藤澤1998・2002）。まず最古例として大窯4期の製品があり、灰釉丸皿（3051）、内禿皿（3057）、志野丸碗（3019）、志野反り皿（3069など）、志野菊皿（3074～3076）などがまとまって出土している。続く連房式登窯期に入ると、連房第1段階（17世紀初頭～後半、以下連房を省略）には美濃窯産製品が多く確認できる。第1・2小期には鉄絵皿（3056など）、志野製品（3077など）、鉄絵鉢（3126など）、第3・4小期には灰釉小皿（2059～2066）、黄瀬戸菊皿（3080～3082）、鉄絵鉢（3127など）があり、大窯期から継続してまとまった量が搬入されている。しかし、続く第2段階前半（17世紀末～18世紀前葉）になると出土量は減少し、3016の腰錆（第5・6小期）を除いて明確にこの時期に比定できるものはほとんど確認できない。

第2段階後半から第3段階初頭（18世紀中葉～後葉）に比定できる製品には擂鉢（3148・3149）・灰落し（3103・3104）・陶器染付の皿（3087）などがあるが、大窯4期から連房第1段階までに比べて出土量は多くない。続く第3段階後半（19世紀前葉）になると出土量はさらに減少し、瓶掛（3111）や片口（3119・3120）のほかにこの時期以降に位置づけられる製品は確認できない。

磁器は、広東碗・端反碗・筒形湯呑・皿の4器種14点が確認できる。いずれも単色染付製品で、連房10～12小期（19世紀前半～後半）に位置づけられるものである。

③　相馬産製品

相馬産製品については生産地資料を用いた編年が確立していないため、関根達人による消費地資料を用いた編年を参考に年代を考える（関根1998）。全て陶器で、器種は碗・皿・鉢がある。まず、最古例に位置づけられるのは尾呂茶碗写しの碗（3022）で、仙台城二の丸第3号土坑出土例と類似していることから18世紀前葉頃のものと考えられる。ただし、この他にはこの時期に位置づけられるものは確認できない。

体部下半の張りが強く緑色の釉調をした小杯（3041・3042）は18世紀後葉～末、鉄絵が施される丸碗

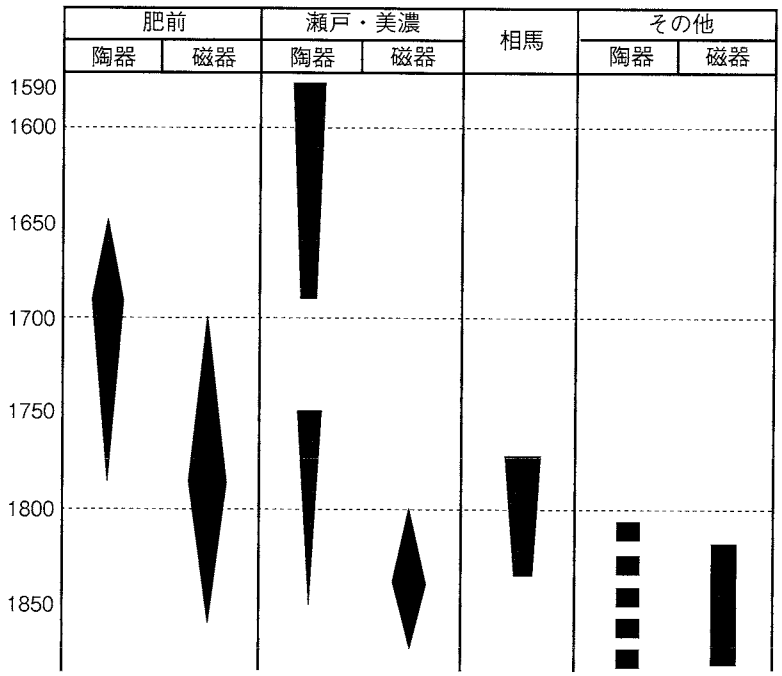
（3021）や体部の開きが強く口径が大きいタイプの腰錆（3026）などは18世紀末～19世紀初頭に位置づけられる（関根1998）。その他にも3091～3093の輪花小皿など、同様の釉調のものを同時期のものとすれば、18世紀前葉頃と比べて出土量は大幅に増加しているといえる。

釉薬の変遷については検討を要するが、一般的に失透性の藁灰釉系陶器は19世紀に入ってから出現するといわれている。この見解に従うと、3023・3024などは19世紀以降の製品と推定され、それに類するものも本遺跡では一定量確認できる。ただし、19世紀以降の相馬産製品の変遷については不明な点が多いため、詳細な年代については今後の検討課題としておきたい。

④　その他

本遺跡では、その他の産地と考えられる製品も数多く出土している。まず量的にもっとも目立つのが磁器である。このなかで切込窯産と思われるものは4161の碗1点のみであり、その他はいわゆる平清水系または東北地方諸窯産と推定されるものである。その他にも陶器では常滑産の大甕（3231）が1点確認できるが、海鼠釉が施される鉢類（3184・3186など）や器高が高く胴部が深い形状の擂鉢（3145～3147など）が量的には多い。これらについても東北地方諸窯産と推定されるが、東北地方の窯業生産地については開窯年代を含めて不明な点が多く、編年についても確立されていない。そのためこれらについては年代比定の根拠が乏しく、現状では東北地方に窯業生産技術が定着した19世紀前葉以降の製品であると考えておきたい。

最後に各産地を総合した出土量の傾向についてまとめておきたい（消長図参照）。まず、本遺跡で最も古く位置づけられる近世陶磁器は美濃窯産大窯４期（16世紀末）の志野製品である。これ以降17世紀前半には瀬戸・美濃窯連房式登窯第１段階の製品が一定量搬入されており、この段階では瀬戸・美濃窯産陶器が組成のほとんどを構成している。しかし、17世紀後半以降には瀬戸・美濃窯産陶器の搬入量は徐々に減少していき、18世紀前半にはいったん途絶える。一方で、肥前産製品は17世紀前葉（大橋Ⅱ期）の磁器皿以降、刷毛目・三島手などの陶器が確認される17世紀後葉（大橋Ⅲ期）にかけて徐々に増加しており、18世紀（大橋Ⅳ期）には磁器も加わって19世紀以降の東北地方諸窯産製品の増加時期まで陶磁器組成の主体となっていく。また、この頃から少量ながら相馬産陶器も確認されるようになる。



河崎の柵擬定地近世陶磁器の消長

続く18世紀後半には、再び瀬戸・美濃産製品では擂鉢や鉢などの大型器種が確認されるようになるが、17世紀代よりも出土数は少なく、代わって相馬産陶器が大幅に増加する。そして、19世紀以降になると相馬産陶器と瀬戸窯産磁器の出土量も増加しているものの、この頃には東北地方諸窯産と考えられる製品が量的に圧倒し、陶磁器組成のなかで大きな比率を占めるようになる。これ以後は肥前、相馬、瀬戸・美濃の３者で構成されていた組成が東北地方諸窯産主体となる組成へと変化し、以後型紙摺絵・銅板転写など近代磁器に主体が移っていくことになる。

県南部出土事例との比較

本節では県南部北上川流域及び沿岸部で近世陶磁器がまとまって出土し、100点以上実測図が掲載されている遺跡との比較を行い、本遺跡出土の近世陶磁器の傾向についてみていくことにする。今回取りあげるのは、北上川流域では胆沢町板子沢遺跡、前沢町川岸場Ⅱ遺跡、平泉町志羅山遺跡（第46次）、同町下構遺跡の４遺跡、沿岸部では大船渡市猪川館跡である。ここでは大まかな器種・産地・年代の比較に焦点を絞って検討を加える（355頁グラフ）。

①器種組成

各遺跡とも陶器が全体の５～６割を占め、そのうち碗・皿類が器種全体の６割近くである。また、グラフには表れていないが碗・皿類は陶器と磁器がほぼ同数、鉢・甕類はほとんどが陶器類であるという点も共通する。ただし、下構遺跡と志羅山遺跡では磁器の碗・皿類が卓越する。

②産地構成

各遺跡とも肥前産磁器の出土量が最も多く、次いで相馬産陶器、瀬戸・美濃窯製品の順となっている。常滑、京・信楽、丹波系などの製品も確認できるが、それらはごく少量であり客体的な存在である。ただし、今回比較した遺跡のなかでは川岸場Ⅱ遺跡と河崎の柵擬定地では相馬産陶器よりも瀬戸・美濃窯製品の出土量が多い。これには18～19世紀代に環濠屋敷と御蔵場が造営され最盛期を迎える川岸場Ⅱ遺跡と、大型堀立柱建物などが構築され17世紀代に一つのピークを迎える河崎の柵擬定地という形成年代の差はあるが、いずれも瀬戸・美濃窯製品の流通量が多くなる時期の遺跡であることを反映しているといえる。

③県内における近世陶磁器の出土状況

消費地遺跡における出土状況については、先学による研究があるため（羽柴1996・藤澤1998・大橋1999など）、これらを参考に岩手県内における近世陶磁器の搬入状況について検討を加えることにする。なお、遺跡の形成年代および調査面積が異なるため、遺跡内の全体量からみた年代を比較してもデータとして有効とはいえないことから、年代別の搬入量についてみていくことにする。

まず、県内における近世陶磁器の最古例としては猪川館跡出土の大窯１・２期（16世紀前半）の灰釉皿と天目茶碗を挙げることができる。この他にこの時期の製品が出土している遺跡は今回例示したなかにはないが、大窯１・２期の瀬戸・美濃窯製品あるいは青花皿などの船載製品は主に城館跡で少量出土するようである。東日本太平洋側ではこの時期には未だ肥前産磁器より船載製品の出土量が勝るということであり（大橋1999ａ・ｂ）、岩手県内の出土状況もそれを追認するものといえる。

16世紀後半～17世紀前半には瀬戸・美濃大窯４期～連房第１段階および肥前産大橋Ⅱ期の製品が各地で確認されるようになる。瀬戸・美濃窯製品については岩手県を含む東北地方北部太平洋側では比較的多くの遺跡で出土が確認されているが（藤沢1998）、肥前産製品については衣川村瀬原Ⅰ遺跡や西館遺跡などで磁器皿が出土しているにすぎない。また、どの遺跡も総じて出土量は少なく、河崎の柵擬定地を除いて今回例示した近世陶磁器の出土量が多い遺跡でも傾向はほぼ同じである。

17世紀後半～18世紀代になると、東北地方北部全域で大橋Ⅳ期に属する肥前産製品の出土量が増加する。羽柴直人の集成によると、県北部（盛岡南部藩領域）の北上川流域では９割の肥前産陶磁器と１割の相馬産陶器で構成され、県南部（伊達藩領域）ではやや相馬産陶器の比率が高くなるということである（羽柴1994）。河崎の柵擬定地でもこの時期に限定すると肥前産磁器が８割、残り２割を相馬産、瀬戸・美濃窯産陶器で分け合うような組成となっている。

19世紀前半になると、肥前産製品では「くらわんか手」と呼ばれる大橋Ⅴ期の製品が大量に流通しており、前段階に引き続いて肥前産製品優位の産地構成となっている。県南部（伊達藩領域）においては相馬産製品の比率が急激に増加する一方、瀬戸・美濃窯産陶器は鉢類などの大型製品が若干確認されるのみとなる。また、碗・皿類など供膳具に限ると、河崎の柵擬定地・板子沢遺跡・川岸場Ⅱ遺跡のように18世紀後葉～19世紀には相馬産陶器が瀬戸・美濃窯産陶器を凌駕する遺跡も出現する。

まとめ

以上、冗長ではあったが他遺跡との比較も含め河崎の柵擬定地出土の近世陶磁器について検討を加えてきた。最後に本遺跡出土資料の位置付けについて述べてまとめとしたい。

年代別の出土傾向については県南部をはじめとして県内全域との状況と大枠ではほぼ同様の状況といえる。ただし、瀬戸・美濃窯製品に限ると連房第１段階に比べて第２・３段階の陶器製品が大幅に減少するというように、子細な点では仙台城二の丸のような東北地方南部に近似する時期も見受けられる。18世紀以降の器種構成については県南部（伊達藩領域）の状況とかわるものではないが、掘立柱建物および200基以上に及ぶ近世墓群が検出されている本遺跡では、出土個体数では川岸場Ⅱ遺跡（御蔵場跡）など特定の性格をもつ遺跡を除いては卓越している。16世紀末～17世紀前半における瀬戸･美濃窯製品の出土量が卓越する点と、それ以降の陶磁器の出土量および遺構群の多さは、古くは近世初頭に志野製品を嗜好し入手可能であったこと、それ以降も近代まで一定量の搬入品を入手可能な立場にあった家系の存在を裏付けるものといえる。

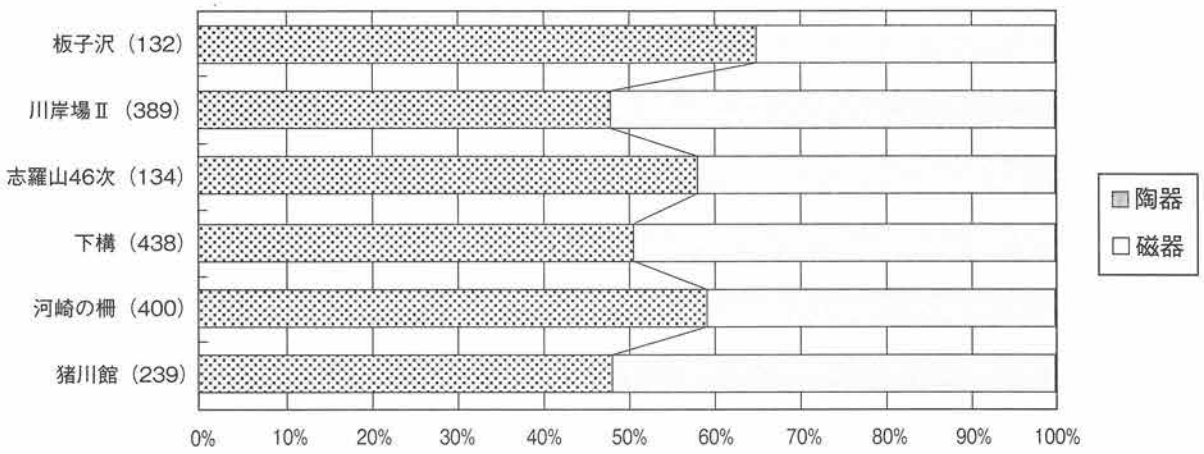
参考文献

大橋康二　1989　『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
大橋康二　1999a　「肥前陶磁の流通（東日本）」『国内出土の肥前陶磁　東日本の流通を探る』九州近世陶磁学会
大橋康二　1999b　「北海道・東北地方出土の肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁　東日本の流通を探る』九州近世陶磁学会
九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』
関根達人　1998　「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査センター
羽柴直人　1994　「東北地方北部における近世陶磁器の様相　－1690～1780年代の消費状況の集成－」『紀要ⅩⅣ』㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
福島県立博物館　1990　『東北の陶磁史』
藤澤良祐　1998　「近世瀬戸焼の生産と流通」『瀬戸市史　陶磁史篇六』瀬戸市
藤澤良祐　2002　「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要　第10輯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター

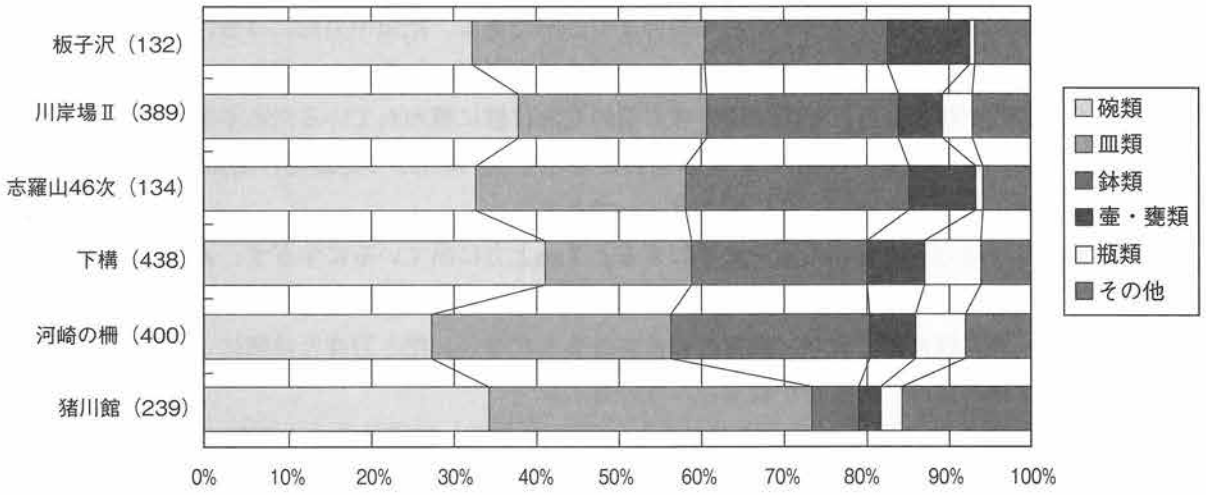
引用報告書（全て㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行）

小山内透　2000　『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第317集
斎藤博司　1994　『猪川館跡発掘調査報告書』第203集
羽柴直人　2000　『志羅山遺跡第46・67・74次発掘調査報告書』第312集
羽柴直人　2004　『下構遺跡第２次発掘調査報告書』第446集
村上　拓　1999　『板子沢遺跡発掘調査報告書』第305集

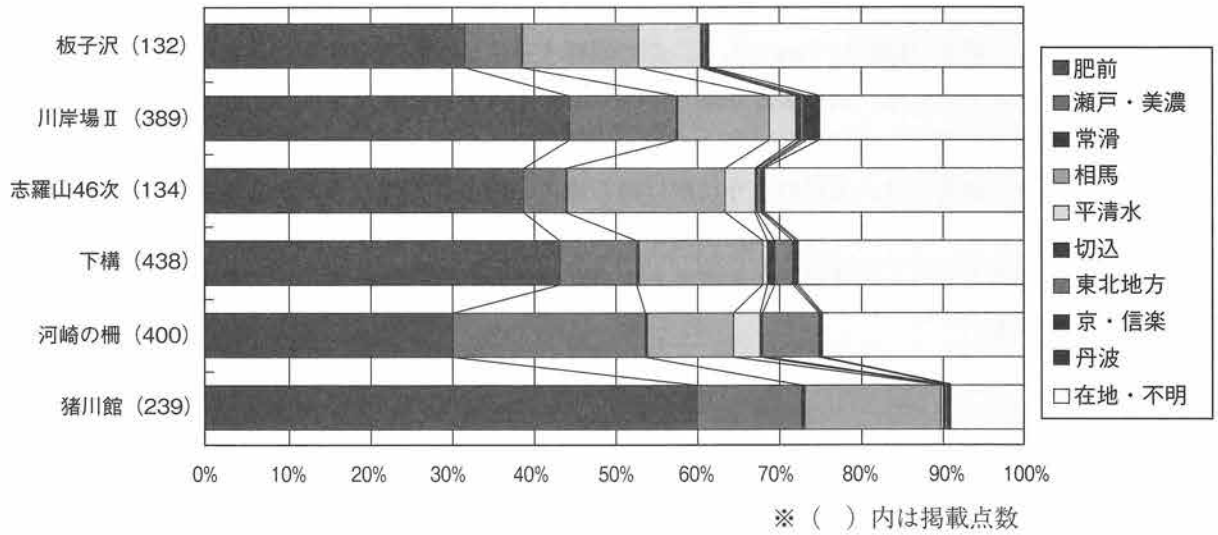
陶器・磁器の組成比



器種組成



産地構成



※（　）内は掲載点数

岩手県内主要遺跡における近世陶磁器出土比較

9　E区SI４出土の蕨手刀について

ここではE区SI04出土の蕨手刀（5001）について、再度その特徴にふれつつ年代的な位置づけを中心に若干の検討を試みたい。

観察

本遺跡出土蕨手刀（報告書掲載番号5001：以下では河崎刀と略称する）は先端部を欠損するものの把頭、把など刀身部が比較的良好に遺存している。現存長357㎜、棟幅７㎜、刀身幅最大で38㎜、把幅は最大で42㎜である。把木をもたない共鉄造りの構造をもつ。装着される装具には懸け通し金具、鐔、縁金具があるが、それ以外の足金具などは出土しない。以下各部位ごとにその特徴を述べよう。

蕨手刀は把頭が早蕨の形状に類似することから名付けられたように、把頭の形態に特徴がある。本例の把頭は把の先端から下側（刃側）に向けてやや角度を変えて鈍角に屈曲している。刃側のラインをみるとこの屈曲部には角をもたない。把頭端は弧線状を呈するが、円形というより隅丸方形状を呈する。把頭の幅は30㎜、長さは屈曲部から先端部まで29㎜である。把頭中央部には懸け通し孔が穿たれており、鉄製座金具が両側から装着される。この金具は直径28㎜、高さ６㎜であり、中央に懸け通し孔である８㎜の孔が穿たれる。表面に菊弁状の溝の有無は錆に覆われているため不明である。

把（把間）は錆に覆われているものの、ほぼ全容が遺存する。鐔元から把頭端の屈曲までの長さ83㎜、幅は最大で42㎜、最小で24㎜であり、厚さは７㎜である。

いわゆる把反りは刀身の背側の線を基準にすると７㎜上方に出ているにすぎず、あまり反りが発達しない。絞りとなる鐔元と把頭の下端との差は20㎜であり、絞りの強い部類に属するであろう。把間には有機質が一部に残存しており、把巻きの痕跡かもしれない。把と刀身とは関によって区画されており、把側には鐔に接して縁金具が装着されている。

関は現状では鐔や把縁金具のため観察できないが、刀身幅と把幅の差から両関であると推定できる。鐔元での幅は刀身部の方が小さい。鐔は鉄製の喰出鐔であり、平面形は上位に最大径もつ広義の倒卵形である。長さ60㎜、最大幅27㎜、厚さ７㎜であり、両側縁は刃側に向かって直線的にすぼまっていく。鐔は刀身の構造から鋒側から挿入されており、先述の縁金具によって固定されている。

刀身は鋒部分が欠損しており、現状では長さが235㎜である。元幅は39㎜と最大であり、最小は中央部で29㎜である。厚さ（棟幅）は７㎜である。この現存する法量から推定するとあまり刀身の長くない部類に属すると考えられる。鎬の痕跡が無く平造りである。刀身はまた、反りが無く直線的にのびているが中央部がやや湾曲している。

装着されている装具には、先述のように懸け通し金具、縁金具、鐔の３点があるが、足金具は発見されていない。また、出土地付近には縁金具が１点出土しており、長径31㎜、短径が18㎜であり、一部欠損する。この大きさから蕨手刀に装着される金具ではなく、小刀のようなより小型のものに装着されると思われる。

以上のように観察すると、河崎刀の最大の特徴は、把頭の形態と欠損しているもののその全長にあるといえる。

類例の紹介

本例は先端部（鋒）が欠損しているため全体の形状・法量が不明である点は先にふれた通りであるが、

その平面形態はある程度復元できる。蕨手刀はおもに把頭の形状で大別できることから、これを基準に本例と類似する例をいくつかあげてみたい。把頭の分類は八木(1996)に詳しく、ここではこの分類にしたがっておく。

本例は前項の観察のように、把頭が鈍角に屈曲することから、八木分類のF類に相当する。『蕨手刀集成（第３版)』（八木・藤村2003）によると267例中F類の把頭を有するものは32例確認できる。このうち岩手県内の出土例をあげると以下のとおりである。

No.	出土遺跡	所在地		全長（mm）	刃長（mm）	把反り(mm)	絞り（mm）
1	長根６号墳	岩手県	宮古市	506	387	5	24
2	五条丸古墳群	岩手県	北上市	－	－	8	38
3	菖蒲田古墳群	岩手県	北上市	－	－	8	27
4	五条丸20号墳	岩手県	北上市	502	380	6	27
5	長谷堂	岩手県	大船渡市	－	－	20	37
6	上平	岩手県	宮守村	470	344	6	20
7	日高西小石森塚	岩手県	水沢市	596	455	28	50
8	外川目	岩手県	軽米町	492	350	18	31
9	若柳	岩手県	胆沢町	－	－	16	43
10	摺沢八幡社	岩手県	大東町	－	－	15	31

多くはその出土状況が不明のものが多いが、いわゆる「末期古墳」からの出土が多い傾向にある。また、県外においても北海道～東北地方を中心にして少数ではあるが関東地方も加えてその出土がみられる。とくに東北地方の日本海側には分布が集中する傾向がある。また、本例のように住居跡からの出土はF類についてはあまり例がない。

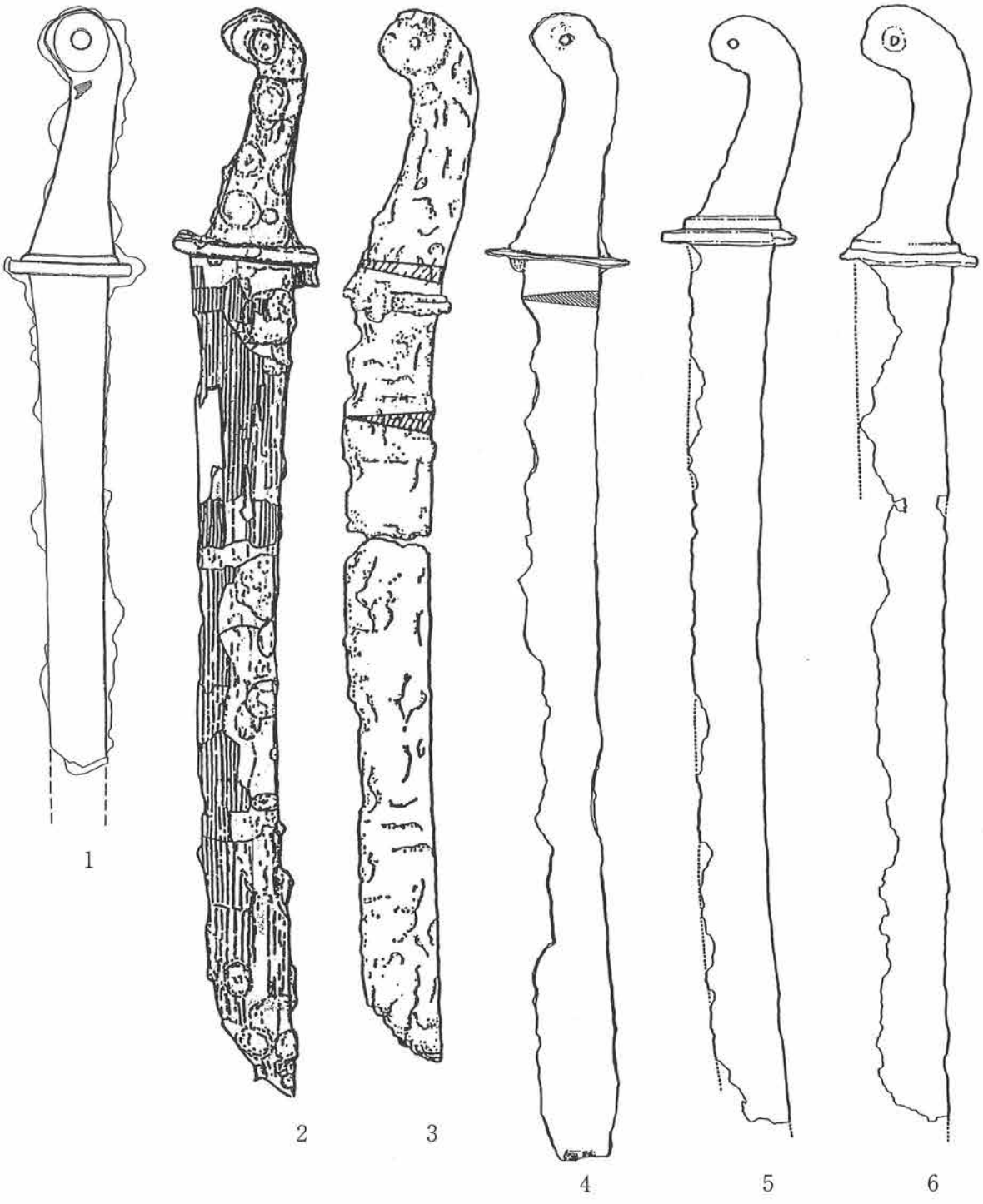
このようなF類の把頭をもつ蕨手刀の特徴をみると、まず装具については足金具が装着される、あるいは遺存する例はほとんど確認できない。その他の装具については懸け通し金具と縁金具・鐔のみであり、このうち縁金具は省略される場合がある。実測図で判断する限りにおいて鞘も明確に伴うものも少ない。共通して装着される装具は鐔のみとなる。

把頭の形態はF類に大別できるものの、細部形態をみると違いも見いだせる。本例（河崎刀）のようにわずかに屈曲するものから、五条丸古墳群や摺沢八幡社出土刀のようにゆるやかに屈曲するものの把頭の長いものも存在する。これらは別に分類されるかもしれないが、例数が少ないため現状では判断できない。把反りの数値では、大きく反るものやあまり反らないものの２者に分けられそうである。これらは黒済のいう２つの系列にそれぞれ対応するものと考えられる(黒済2004)。本例はこのうち把反りの発達しない系列に属するであろう。

関部の構造は、本例のように把が刀身より幅が広くなるものはあまり確認できないが、実物をすべて観察できていないため明確に判断することができない。関部の構造については２者がある可能性を指摘しておく。

把の長さについては、山形県小田島野田刀、岩手県摺沢八幡社刀、岩手県長沼６号墳刀などのように110㎜前後になるものがある一方で、北海道常呂刀、北海道坊主山刀などのように160㎜を超える長さのものがあるが、把の長短の区別は明確にしがたい。

全長あるいは刃長には数値的にいくつかのまとまりがみつけられる。把頭F類のうちでは大きく３つのまとまりがある。全長500㎜前後あるいはそれ以下のものと600㎜以下のもの、600㎜以上のもの



1.河崎の柵擬定地出土(川崎村)　2.長根6号墳出土(宮古市)　3.外川目出土(軽米町)
4.葛蒲田古墳群出土(北上市)　5.摺沢八幡社所蔵(大東町)　6.五条丸古墳群出土(北上市)

第213図　岩手県内出土蕨手刀の諸例

の３者である。この全長の特徴についてはあとでふれる。

このように各種の特徴をみると、多くは共通点する内容を持ちながらも相違点が少なからず確認できる。同じ型式の把頭をもつ蕨手刀においても相違する属性が存在するということである。
また、この同一型式という点から年代的にほぼ同時期に位置づけられることが予想される。次にこの点について考えてみよう。

年代的位置づけ

蕨手刀の編年は古くより研究が重ねられており、とくに八木による研究によりそのおおよその方向性は明らかになりつつある（八木1996など）。これらの成果に導かれながら、本例の年代的な位置づけを行う。

八木論ではおもに足金具と把反り、絞りの数値を基準にして、その前後関係を求めている。F類の把頭をもつ蕨手刀については、おおよそ８世紀前葉から９世紀にかけての年代が考えられている。F類のなかでも絞りや把反りの数値が低いものが古く、数値が大きくなるものが新しいとされる。河崎刀は八木の基準に照らすと把反りが12㎜以下で、絞りが31㎜以上であることから把頭２に内包される。この「把頭２」の年代はやや幅が認められるが８世紀中葉～後葉に位置づけられている。

また、八木論では把頭D・E・F類をもつ蕨手刀は、絞りや把反りの数値が漸次大きくなることを基本とし、数値が大きいものを新しい時期のものと判断している。しかし、黒済の指摘のように把反りが顕著な一群と絞りの顕著な一群に２大別できるなら、単純に数値が大きいものが新しい時期のものとは断定できないであろう。また、絶対年代については装着される足金具の年代観を援用していることもあり、足金具が装着される例の少ないF類の把頭をもつ蕨手刀の年代を決定するには困難が伴っている。

このように明確に遺構にともなって出土する例の少ない蕨手刀の年代は、現段階では問題点も残るものの、F類の把頭をもつものは8世紀前葉を上限として、８世紀後葉を下限と想定できることになる。

今回の出土状況を積極的に評価するならば、明確に８世紀後葉の土器を伴って蕨手刀が出土したことになる。河崎刀のようなF類の把頭をもつ蕨手刀は、共伴する土器の年代からみても、下限の時期である８世紀後葉という年代に限定できるのである。

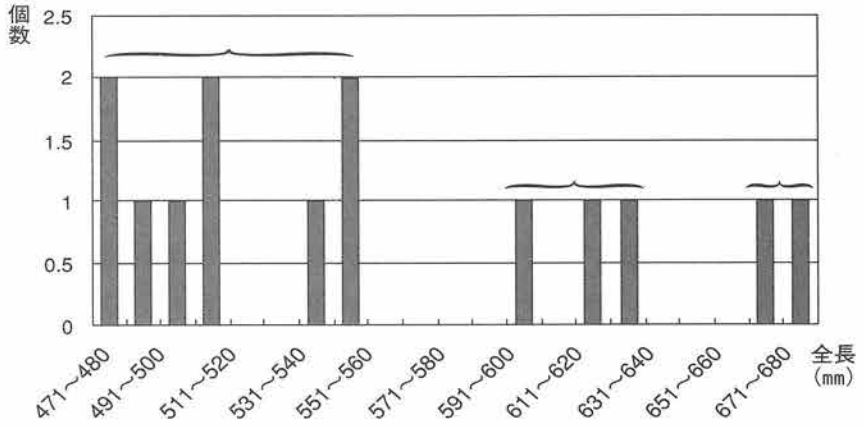
このほか、さらなる問題としては、長さ（全長もしくは刃長）の問題がある。従来、蕨手刀は時期が新しくなるにつれ長寸化していくことが想定されてきた。にもかかわらず本例は鋒が欠損しているものの、どちらかといえば短寸の部類に属すると予想される。このように比較的後出な把頭型式であるF類において、短寸刀も存在すれば、秋田県脇坂飯町出土刀のように全長が665㎜を超えるような長寸刀も存在するのである。把反り・絞りの数値の大小が長寸と短寸に対応する可能性もあるが、先にふれたように把反りと絞りは別系列に分けられる可能性もあるため、この点はひとまず置くことにする。

長さの検討

前項で指摘したように、本来短寸であった蕨手刀が時期を降るにつれ長寸化していくことがこれまでの研究で指摘されている。型式別の平均値を取り出してみると確かに長寸化の傾向は見いだせる。しかし、同一型式においては短寸のものから長寸のものまでその長さが多様であり、１つの型式としてはまとまりがないようにも見受けられる。ここでは、河崎刀と同様の把頭型式であるF類のみの蕨

手刀の全長について若干の検討を加える。

まずF類の把頭をもつ全長の平均をみると562㎜となる。最小が480㎜、最大が680㎜であり、その差が200㎜にもなる。10㎜程度は誤差の範囲として仮に捉えて、どの数値にまとまりがあるかを検討したのが、次のグラフである。



例数が少ないため、今後数値は多少変わる可能性があり、またF類に限定した結果であるため他の型式を含めればさらに数値やまとまりが増える可能性はある。

グラフをみると560㎜以下と600㎜前後以上、670㎜前後以上の３つの範囲に全長が集中するという傾向が認められる。

したがって、F類の把頭をもつ蕨手刀には３つの異なる長さのものが存在することになる。

これらが絞りや把反りの数値の違いによっては年代の前後関係を示している可能性があるものの、ここでは把頭が同一型式である点を強調し、同時期に存在していたと考えたい。

従来蕨手刀は八木論のように徐々に長寸化の傾向にあるとされてきた。相対的、平均値的にみるとこの考えは首肯できるものの、細部をみると必ずしもそういう傾向は認められない。つまり、徐々に長くなるということではなく、短寸の型式が減少し、長い刀身（長寸）の型式が増加する傾向にあるということである。

蕨手刀は刃部が存在する以上、実用的であれ儀礼的であれ武器である刀としての性格を最上位にもつ。そして、その性格上長さが最も重要な属性となる。古代においては長さによって刀の呼称や階級差も見いだされることになるから、「長さ」という点が重要属性となってくるのである。したがって、この問題はさらに検討していく必要があるが、ここでは、「長さ」の重要性を指摘するにとどめ、稿をあらためて述べたい。

以上のように、前後関係がある可能性を含みつつ、同一把頭型式には３種類の全長の蕨手刀が含まれることを指摘した。その点は、黒済のいう把形態違いの指摘と同様に蕨手刀は決して単系的な変化をたどるのではなく、いくつかの系列に分かれて変化していったと考えられる。

これらの検討を通してみると、蕨手刀の編年に際しては、型式の変化が一定している把頭の有効性が指摘できる。

まとめ

以上、年代的位置づけを中心に若干の検討を行った。その結果、河崎刀は短寸であるものの、おもに把頭の型式や共伴遺物によりその時期を８世紀後葉と捉えることができた。また、本刀を検討する

にあたっては様々な問題点を指摘するにいたり、とくに長さ(全長)は重要な属性の一つなる可能性を指摘できた。

蕨手刀における編年作業はこれまでに全体的な傾向は見いだされるようになっているが、まだ細分される可能性や系列に分化できる可能性も認められた。こういった点をさらに深化させることができるならば、今後蕨手刀研究のみならず出土する遺構、とくにいわゆる「末期古墳」に関連してあらたな見解が創出される可能性もうまれる。これらの点は今後あらためて再検討を行っていきたいと思う。(西澤)

＜引用参考文献＞

石井昌国　1966 『蕨手刀』雄山閣
高橋信雄　1984 「岩手の古代鉄器に関する検討(2)」『岩手県立博物館研究報告』第2号
八木光則　1996 「蕨手刀の変遷と性格」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
八木光則・藤村茂克　2003 『蕨手刀集成(第3版)』盛岡市文化財研究会
黒済和彦　2004 「群馬県出土蕨手刀の分類と編年」『群馬考古学手帳』第14号
黒済和彦　2005 「群馬県出土蕨手刀の分布とその性格」『群馬考古学手帳』第15号

出典

1本書
2 (財)岩手埋文1990『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』より
3石井(1966)より転載
4和賀町教育委員会1991『和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅲ』より
5八木・藤村(2003)より転載
6八木・藤村(2003)より転載

10　鉄鏃に関する検討　－分類基準の設定と県内出土資料との比較－

本節では河崎の柵擬定地から出土した鉄鏃について検討を加える。今回の検討においては古墳時代鉄鏃の研究を参考に河崎の柵擬定地出土資料の位置付けとともに県内における出土遺跡の把握と分類基準の設定を目的とする。ただし、古代～中世の鉄鏃についての研究は、古墳時代と比べてその数が少ないこと、加えて岩手県内では鉄鏃の出土点数自体がそれ程多くないことからその内容が判然としていないのが現状であることから、あくまで予察であることを先に述べておく。

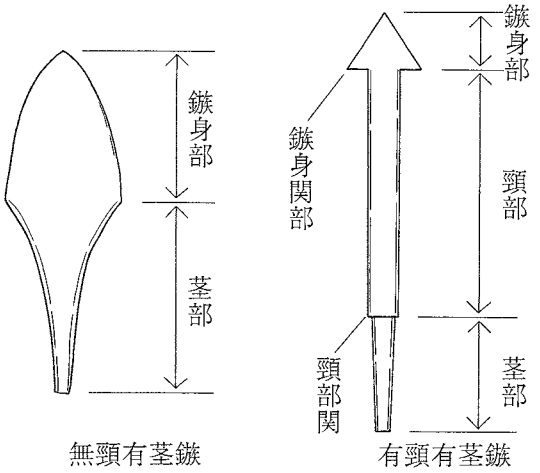
鉄鏃の分類基準について

最初に鉄鏃の分類基準について記しておきたい。第214～216図は、水野敏則による古墳時代鉄鏃の分類（水野2003）を参考として、岩手県内出土鉄鏃の形態を分類･模式化したものである。この水野による分類は、古墳時代中期における日本列島と朝鮮半島との鉄鏃型式の大要をつかむために考案されたものであり、簡便で汎用性がある。本稿は岩手県内出土の古代～中世の鉄鏃を対象としているが、県内出土資料の傾向をつかむことが最大の目的であり、その意味では水野の分類視点は多くの示唆を与えてくれるものであることから、今回はその分類に依拠して論を進めていくことにする。

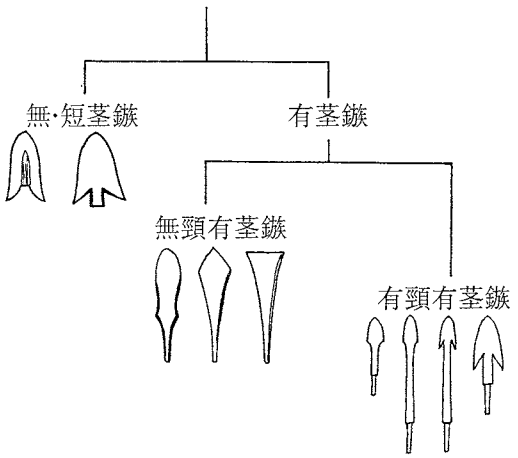
まず大分類としては矢柄への着装形態をもとに分類を行う。県内出土鉄鏃を概観したとき、それらは茎部（なかご）の有無を基準として無茎（短茎）鏃と有茎鏃のいずれかに分類される（第215図）。また、有茎鏃についてはさらに頸部（けいぶ）の有無によって無頸有茎鏃と有頸有茎鏃とに分類される。

その下位の分類（中分類）として鏃身部形態による分類を行う（第216図）。さらにその下位（小分類）として各部の細部形態による分類がある。本稿では基本的にはこの３段階の分類によって検討を加えていくことにする。なお、各形式の呼称については頸部・茎部の有無と鏃身外形の組み合わせにより決定する（例えば頸部を有する鏃身外形が三角形のものについては有頸三角形式とする）。また、有頸鏃の中で頸部長が長い（一般的には５cm以上）ものについては長頸式と付けることにする。

なお、今回対象とした資料は錆化が激しく断面形などが判別困難な個体が多いため、比較的判別が容易な鏃身外形及び頸部関の形態を分類の中心に据えることとする。以下にその分類について簡単に



第214図　鉄鏃部分名称図



第215図　鉄鏃分類概念図（水野2003より転載）

記しておく。

①　鏃身外形

A.　三角形　鏃身長と鏃身幅がほぼ１：１になるもの

B.　長三角形　鏃身長が鏃身幅より２倍程度あるもの

C.　柳葉形　鏃身長が鏃身幅より２倍前後あり、さらに切先から関部にかけてほぼ直線的に垂下、あるいは鏃身中位で内側にくびれるもの

D.　五角形　ふくらが強く稜をなす形状のもので、鏃身長と鏃身幅の比率により細分が可能

E.　方頭形　切先が直線ないしは弧状で、平面形が逆台形となるもの

F.　鑿根形　鏃身部断面形が長方形で、刃部が切刃造あるいは片切刃造のもの

G.　鑿箭形　鏃身部と頸部の境が不明瞭なもので、鏑の有無によって細分が可能

H.　片刃形　鏃身部の片側にのみ刃部が形成されるもの

I.　雁又形　鏃身部がY字状に開くもの

②　頸部関

a.　角関　関部まで頸部が直線的に至るもので、断面形には正方形と長方形がある

b.　台形関　茎部との境界付近で頸部が台形状に広がるもの

c.　円形関　関部がリング状になるもので、環状関と呼称されることもある

d.　棘状関　頸部との境界に方形の突起がつくもの

e.　無関　茎部との境界が無く直線的に茎部へと至るもの

河崎の柵擬定地出土資料の検討

①形態的特徴

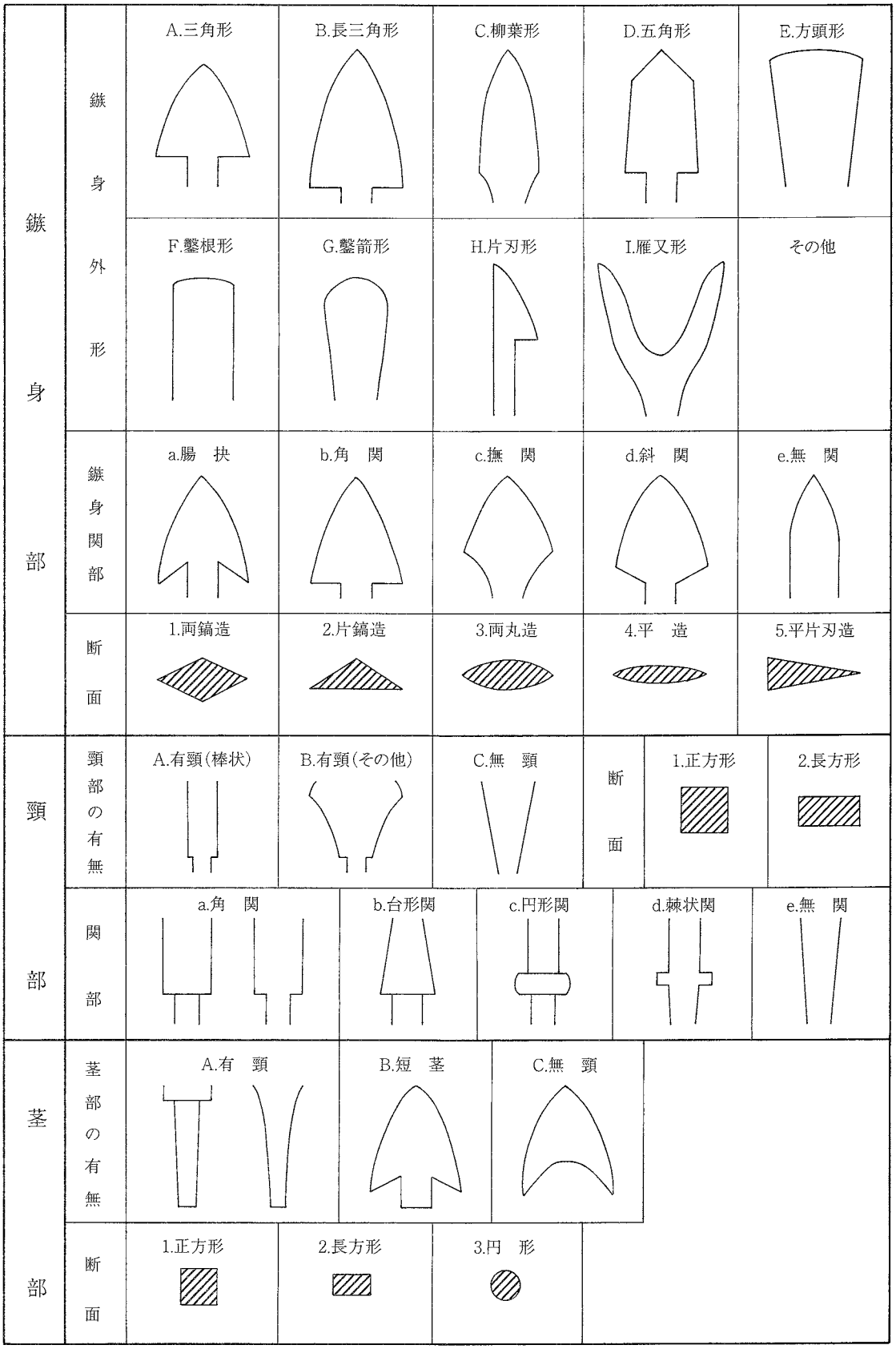
前項で記した分類基準をもとに河崎の柵擬定地出土資料の分類を行う。まず大分類では、有頸有茎鏃（5003～5008）と無頸有茎鏃（5010・5011）、無茎鏃（5009）が確認できる。中分類とした鏃身外形をみると、三角形・長三角形・鑿根形・雁又形の４種類が確認できる。また、有茎鏃のなかでも棒状頸部をもつ長頸式の鉄鏃が量的に最も多い。すなわち、本遺跡出土資料は、長頸式の長三角形式鉄鏃が主体となるという傾向が看取できる。

②年代的位置付け

古代～中世における鉄鏃については研究事例が少なくその内容が判然としていない。その中にあって津野仁は東国を中心として当該期資料の分類と変遷を、飯塚武司は多摩川丘陵を対象として古墳時代後期～古代末期までの変遷を検討している（津野1990、飯塚1991）。鉄鏃の年代決定にあたっては古墳時代から継続する形式の有無、頸部関の造作、長頸式鉄鏃においては頸部の長短が指標となる。以下では、津野らの論考を参照しながら検討を加える。

5003は長頸三角形式に属するもので、頸部長は８cm、頸部関は角関である。頸部関の変遷について津野は、棘状関から角関へという変遷を考えており、棘状関の消滅を８世紀初頭頃（津野編年Ⅰ期初頭、以下単に□期とする）としている（津野1990）。また、Ⅰ期の長頸鏃は次第に短頸化する傾向にあり、頸部長は10cm程度のものから７～８cmのものへと変化するということである。これらを根拠にすると、5003はⅠ期（８世紀初頭～９世紀前半）のなかでも棘状関消滅後から短頸化していく段階（８世紀中葉以降）に属するものと判断される。

5004・5005については無関であることから根拠に乏しい。無関であるため頸部と茎部の境界が不明瞭であるが、いずれも頸部は5003よりも長く10cm程度になると考えられる。先述の通り、長頸鏃はⅠ



第216図　岩手県内出土鉄鏃分類模式図

期のうちに頸部が短くなり、また片刃式などではⅠ期後半から無関のものが出現するということである（津野1990）。鏃身部を欠損しているため推定の域をでないが、残存部の状況を考慮するとⅠ期後半（８世紀後半～９世紀前半）に位置づけられる可能性がある。

5006は雁又式である。関部は台形関で、茎部は完存長で８cmである。鏃身外形は残存部の観察から二股部の抉りはやや深く、刃部下半がほとんど膨らみをもたないタイプと推定される。津野によると、二股部の抉りが深く刃部下半が膨らまないものはⅠ期前半に出現し、Ⅱ期末頃までに刃部下半の膨らみが増していくということである。また関部をみると台形関はⅢ期に激減し、以後円形関が主流となるということである（津野1990）。以上を根拠にすると、5006はⅠ～Ⅱ期（８世紀初頭～11世紀後半）に属すると考えられる。ただし、８世紀代の事例は抉り部が鋭角的であること、津野・飯塚両氏が11世紀代としている事例はいずれも刃部下半が膨らんでおり、茎部長が10cm以上であることを考慮すると、Ⅰ期後半～Ⅱ期前半（８世紀後半～10世紀）に限定できる可能性がある。

次に5007・5008についてみていく。5007は津野分類による長三角形Ⅲ式に分類される形式であり、広根式といわれる形式の代表的事例といえる。腸抉は深く、頸部関は角関である。5008も長三角形式であり、刃部先端を欠損しているが5007と同じく腸抉の深いタイプである。津野・飯塚両氏の論考で例示されたものを見る限り、腸抉が深く頸部関が角関のものはいずれも９世紀に比定されていることから、これらもⅠ期後半～Ⅱ期前半（９世紀代）に属するものと考えておきたい。

最後に鑿根式（5010・5011）についてみていく。5010は鏃身部が3.5cmと短く、関部は台形関である。鏃身部が極端に短いことから、平面形態のみをみると鑿根Ⅱ式（Ⅴ期＝15～16世紀前後）に該当する可能性がある。しかし、5010の鏃身断面形をみると、先端は三角形であるがそれ以下は関部まで長方形であり、関部までの鏃身部断面形が三角形である鑿根Ⅱ式とは異なる。したがって5010については極端に小型化した鑿根Ⅰ式と考えておきたい。ただし、頸部関がⅢ期に主流となる台形関であることと、小型であることから鑿根Ⅰ式のⅤ期に位置づけられる可能性はある。5011については、関部以下を欠損しているため判断根拠に欠ける。ただし、5010と異なり鏃身部は残存長で５cmあることから、鑿根式の中でも5010よりは古いと考えられる。

県内出土事例との比較

本項では県内出土事例との比較を通じて本遺跡出土鉄鏃の位置付けについて考えていく。岩手県内において古代～中世に属する遺跡のうち、鉄鏃が出土している遺跡は管見では集落・古墳・城柵・城館・生産遺跡など約80遺跡にのぼる。最も多いのは集落で、全遺跡の約８割を占める。遺構としては竪穴住居が最も多いが、一遺構あたりの出土点数が多いのは古墳である。次に具体的事例を挙げながら本遺跡との比較を行うこととする。

まず７世紀代の代表的事例として、矢巾町藤沢狄森５・14号墳出土例がある（第217図）。14号墳主体部からは有頸三角形式・有頸鑿箭式・無茎長三角形式が出土している。有頸鏃はいずれも頸部が短く、関部は角関と思われる。鑿箭式は両鏑造である。無茎長三角形式は鏃身幅が狭く腸抉が外方に開くタイプである。有頸鏃は７世紀中葉～後葉と考えられるが、無茎長三角形式は７世紀前葉に比定できる可能性がある。

５号墳主体部からは有頸三角形式と有頸鑿箭式が出土している。いずれも14号墳出土例に比べて頸部が長く10cmを超えるものが多い。関部は角関と考えられる。関部の造作および頸部長から７世紀中葉～後葉と考えられる。

同じく７世紀代のものとして遠野市高瀬Ⅰ遺跡２号墳周溝出土例がある（第218図上）。有頸三角形

式・有頸片刃式・有頸鑿箭式の３種類が出土している。有頸三角形式は、幅広で腸抉があるものと鏃身部が小型で鏃身関部が角関または斜関のものがあるが、前者は１点のみしか確認されていない。有頸片刃式は鏃身関部が撫関または斜関である。いずれも頸部長は８cm前後で、頸部関は角関または無関と考えられる。年代は藤沢狄森５号墳とほぼ同時期か、若干頸部が短いことを考慮するとやや新しくなるものと思われる。

山田町房の沢古墳群では７世紀～８世紀前半の古墳が確認されている。このうちRT04古墳からは７点の鉄鏃が出土しており、有頸長三角形式･有頸五角形式･無茎五角形式が確認できる（第218図下）。有頸長三角形式は腸抉が深く、頸部関は棘状関である。五角形式の鏃身関部は腸抉があるものと角関のものがある。年代については五角形式が主要組成に入っていることと棘状関のものがあることから、Ⅰ期の直前段階（７世紀末頃）のものと考えられる。

盛岡市志波城跡では、城柵存続時期より新しい時期の竪穴住居を中心に鉄鏃が出土している。とくにSI389では有頸三角形式・有頸長三角形式・有頸鑿根式が一括状態で出土しており、この時期の鉄鏃組成を考えるうえで良好な資料である（第219図上）。ほとんどが長頸式の鉄鏃であり、鑿根式が主体となる。有頸三角形式には鏃身部が小型のもの（津野分類三角形Ⅰ式）と大型で腸抉が深いもの（三角形Ⅲ式）があるが、後者は１点のみしか確認できない。頸部長は10cm以下で、頸部関は角関または撫関である。年代は、８世紀初頭に消滅する棘状関とⅡ期後半（10世紀以降）に出現する台形関が確認できないこと、８世紀代とされる事例よりも短頸であることから、９世紀代と考えられる。

宮古市島田Ⅱ遺跡は鉄器生産拠点と考えられる遺跡で、調査区全体で30点以上の鉄鏃が出土している（第219図下）。本遺跡では有頸長三角形式・有頸片刃箭式・方頭式・雁又式が確認されており、長頸式の鉄鏃が主体となるということである。また、関部の造作をみると角関か台形関に限られており、棘状関や円形関は確認されていない。年代としては、９世紀後半～10世紀代と考えられている。

以上、県内における代表的な出土事例を概観してきたが、ここで河崎の柵擬定地出土資料との比較を行っていくことにする。まず７～８世紀の事例と比較してみると、この時期の主体形式となる片刃式・五角形式・鑿箭式は本遺跡では出土していない。頸部長は各遺跡ともそれ程大差ないが、頸部関をみると本遺跡では棘状関のものは確認できない。棘状関が皆無であるという点を考慮すると、本遺跡の鉄鏃は藤沢狄森５･14号墳、高瀬Ⅰ遺跡２号墳、房の沢RT04古墳よりも後出の特徴を備えているといえる。

続いて９～10世紀の事例と比較してみる。まず志波城跡SI389と比較してみると、若干比率の差はあるが、長頸式鉄鏃主体に広根系鉄鏃が加わるという構成は同じである。細部形状をみても頸部長が８～10cm前後、頸部関に棘状関がなく角関主体であるという点で類似点は多い。次に島田Ⅱ遺跡と比較してみると、鏃身外形の形式はほぼ同じだが、島田Ⅱ遺跡では無茎式が多く大型のものが多い。また、長頸式のものについては台形関のものが存在するという点が本遺跡とは異なる。

以上のようにみていくと、本遺跡出土資料は志波城跡SI389とほぼ同時期と考えるのが妥当といえる。とくに長頸式鉄鏃については頸部長が10cm以上のものから８cm前後へと短くなり、それに伴って関部も棘状関・角関（藤沢狄森・房の沢）→角関（志波城）→角関・台形関（島田Ⅱ）と変遷しており、その変遷のなかに位置づける限り、本遺跡の鉄鏃は志波城跡SI389出土資料と近接した時期に位置づけることができる。

ただし、本遺跡の資料は遺構一括資料ではないことと、雁又式など一部のものについては島田Ⅱ遺跡出土例と同時期とも考えられるものが存在することから、個別事例では年代が前後するものもある。この点については今後形式ごとの変遷をたどっていくなかで検討すべき課題といえる。

まとめ

本節では河崎の柵擬定地出土の鉄鏃について比較資料をまじえて検討を加えてきた。最後にその特徴を列記してまとめとしたい。

組成…鏃身外形には三角形・長三角形・鑿根形・雁又形があり、長頸式鉄鏃を主体として若干の短茎・無頸式が加わる。

年代…おおむね津野編年Ⅰ～Ⅱ期前半（８世紀～10世紀）のもので構成される。なかでも８世紀後半～９世紀代に位置づけられるものが多い。

以上のような結果となった。ただし、先述の通り岩手県における古代～中世の鉄鏃については不明な点が多く、今回の検討でも判断根拠に乏しい点が数多くあった。今後は各遺跡出土資料の集成および他地域との比較を通じてその内容を再検討していく必要があろう。（村田）

参考文献

飯塚武司　1991「鉄鏃　-その時代性と地域性-」『研究論集Ⅹ　-創立10周年記念論文集-』東京都埋蔵文化財センター

小山内透　2004『島田Ⅱ遺跡第２～４次発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集

津野　仁　1990「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』第54号　物質文化研究会

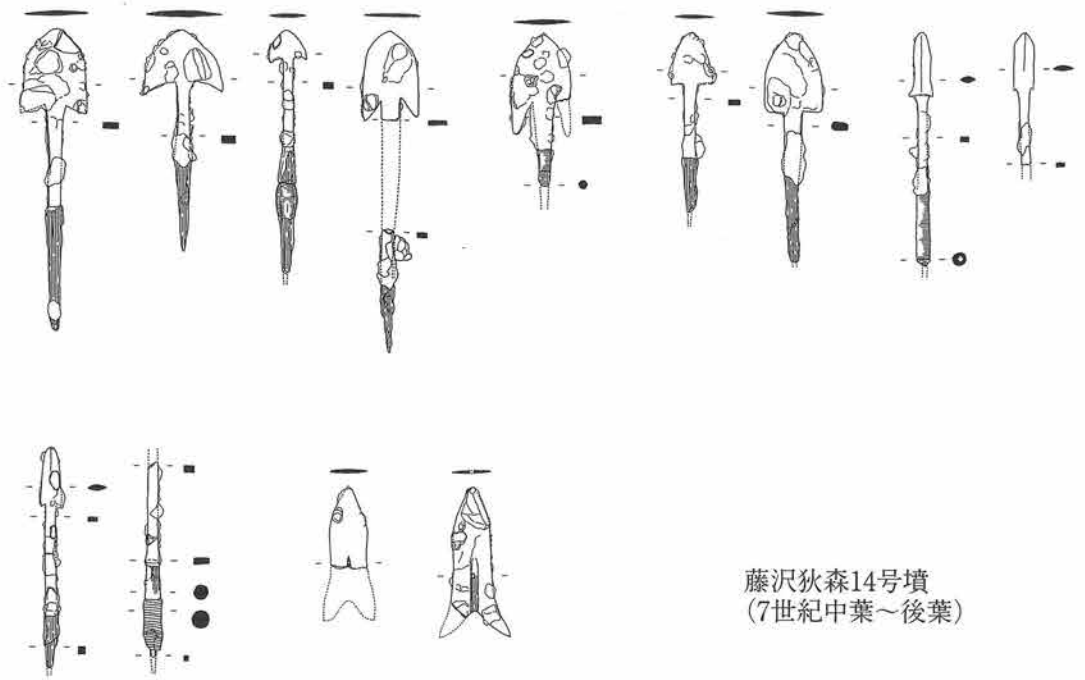
西野　修　1986『徳田遺跡群詳細分布調査報告書　-藤沢狄森古墳群の発掘調査-』矢巾町文化財報告書第８集

水野敏則　2003「古墳時代中期における日韓鉄鏃の一様相」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集

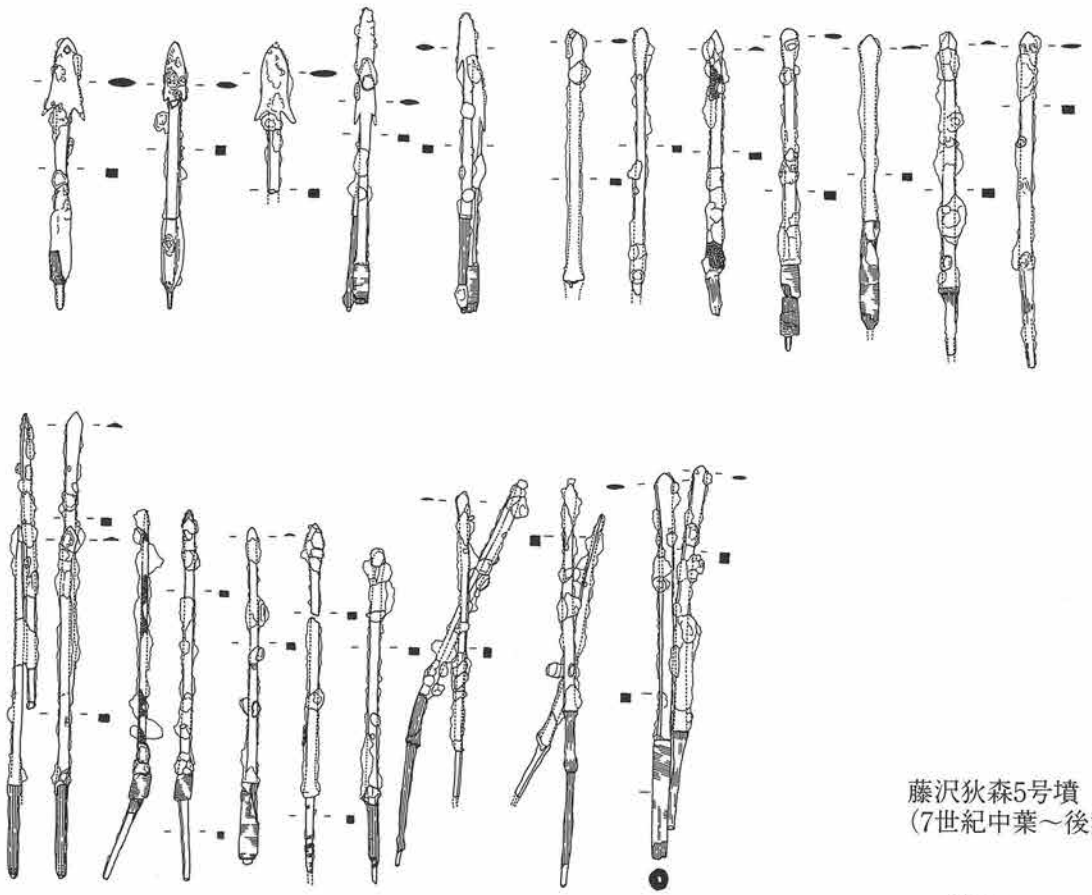
室野秀文他　1982『志波城跡　昭和56年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会

佐々木清文他　1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集

佐藤浩彦　1992『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』岩手県遠野市埋蔵文化財調査報告書第５集



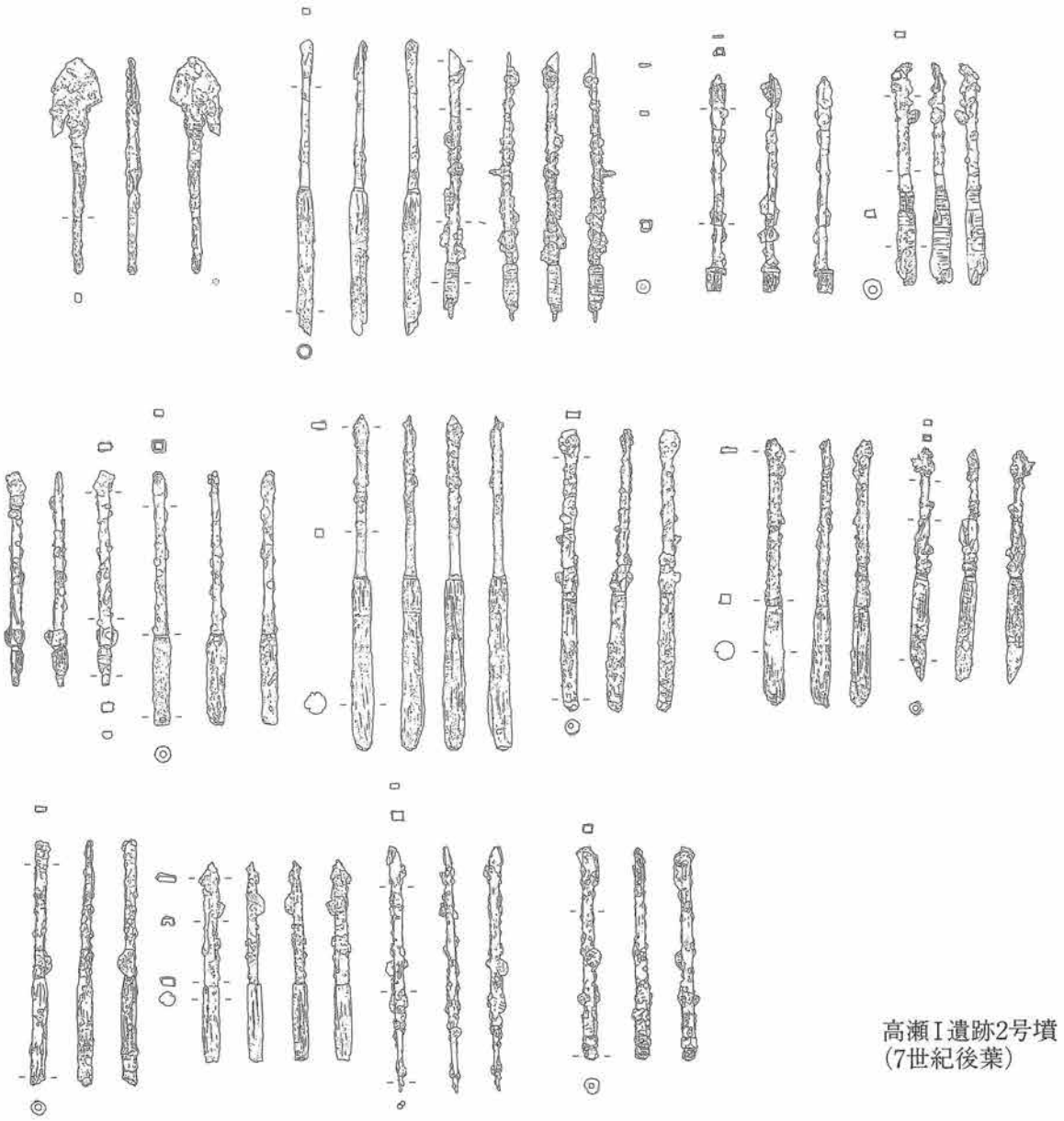
藤沢狄森14号墳
（7世紀中葉～後葉）



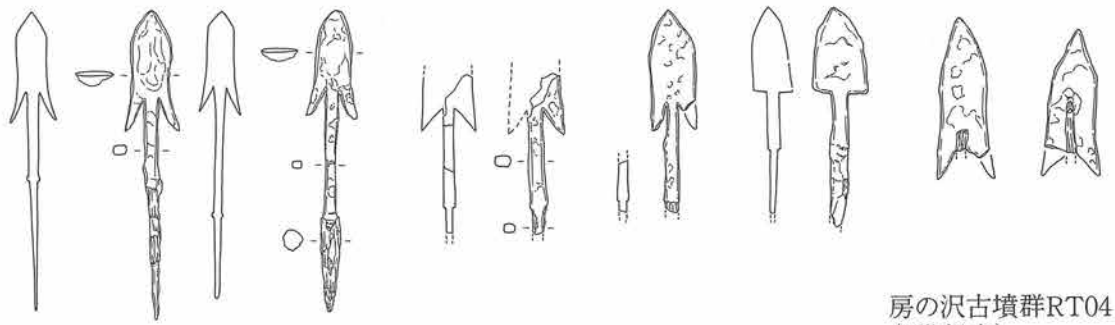
藤沢狄森5号墳
（7世紀中葉～後葉）

縮尺1/4

第217図　岩手県内出土鉄鏃の諸例①



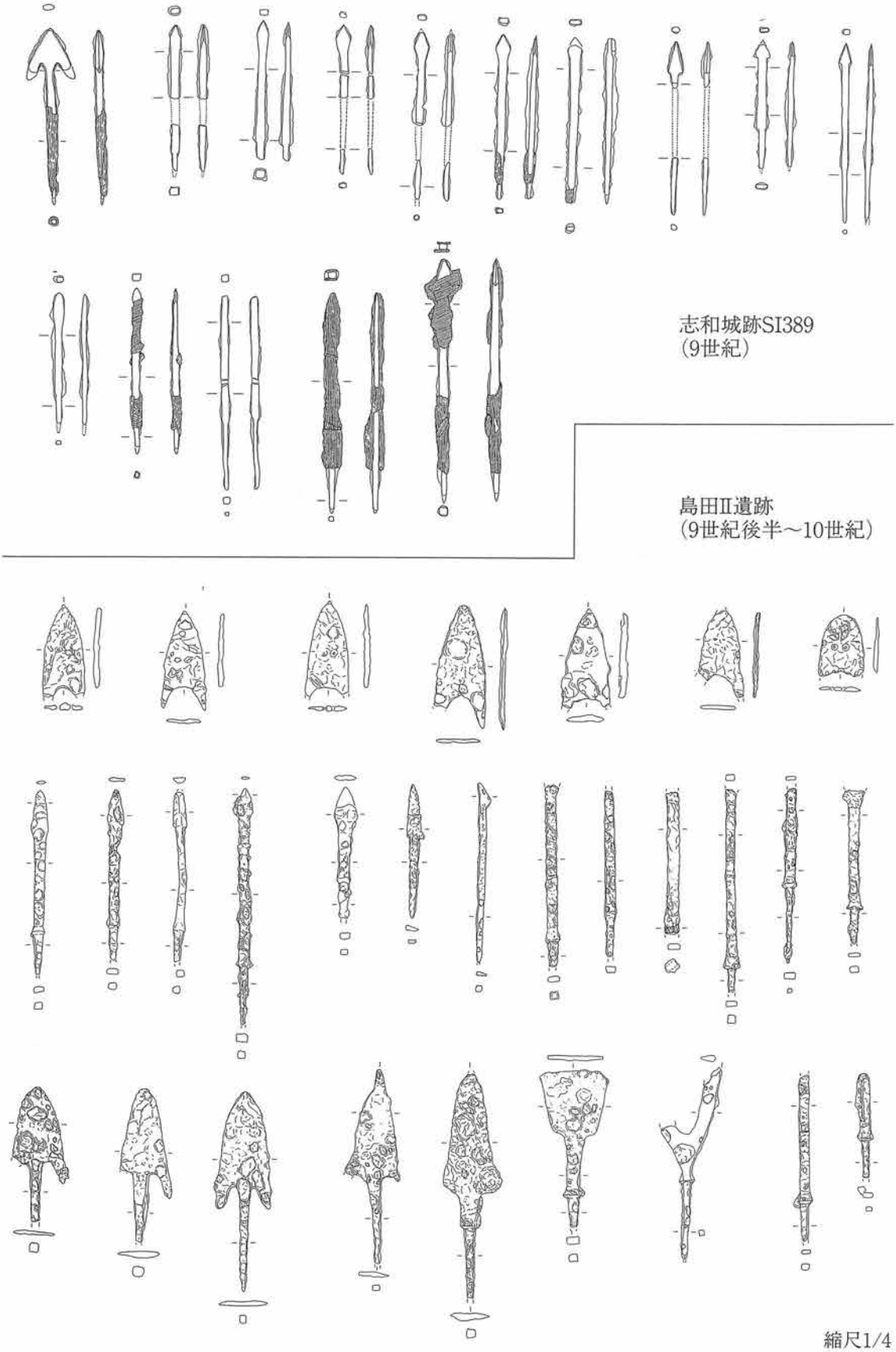
高瀬Ⅰ遺跡2号墳
(7世紀後葉)



房の沢古墳群RT04
(7世紀末)

縮尺1/4

第218図　岩手県内出土鉄鏃の諸例②



第219図　岩手県内出土鉄鏃の諸例③

11　小札に関する若干の検討

河崎の柵擬定地では、可能性のあるものを含めて４点の小札が出土している。本節では、このなかで5017と5018について、他遺跡出土例と比較しながら検討を加えることにする。

ここで再度両者の形態について記載しておきたい。5017は幅広長条形の小札で、札頭･札足は円形である。縅孔一列で、縅孔は第三縅孔まで確認できる。綴孔は第一綴孔で３孔、第二綴孔で２孔、覆輪孔は２孔確認できる。なお、第二綴孔には革紐が残存している。5018は長条形の小札で、札頭は斜めに切り落とされ、札足は水平である。綴孔は３孔確認できたが、その他綴孔および縅孔については錆により塞がれており不明である。なお、いずれも長さが10cm前後あることから腰札と考えられる。

東北地方北部では中世を含めても小札の出土遺跡は20遺跡にも満たない。その変遷については不明確な部分も多いが、今回は岩手県一戸町御所野21号墳出土例と青森県百石町根岸（２）遺跡出土例という、東北地方北部でも代表的な２例を比較資料としてとりあげたい。まず、御所野21号墳では開口部から43点の小札が出土している（高田他2004）。いずれも長条形の小札であり、長さは約7.5～10.0cm、札幅は約1.0cmである。縅孔は一列で第三孔まで、綴孔は第一綴孔で４孔、第二綴孔で４孔確認でき、下搦孔も２孔確認できる。21号墳の造営は８世紀代とされているが、後述する札幅の検討をもとにすると８世紀でも後半段階のものと考えられる。次に根岸（２）遺跡出土例であるが、本遺跡では使用時の状況で出土した塊を含めて約140枚の小札が出土しており、報文中で津野仁が詳細な形態分類と札幅の時期的変化についての考察を行っている（津野1995）。形状についての詳細は報告書に譲るが、津野は各地の出土例を挙げながら、札幅が７世紀後半から漸移的に狭くなっていくという傾向を指摘している。それによると、札幅が1.0～1.5cmである根岸（２）遺跡出土例は８世紀後半（第３四半期）に位置づけられるという。

ここで札幅をもとに河崎の柵擬定地出土例の年代的位置づけについて考えていきたい。津野仁の検討によると、７世紀前葉～中葉の小札では札幅は2.2cmあり、その後８世紀後半のものでは1.0cm前後にまで狭まるということである（津野1995･1998）。これをもとに本遺跡出土例について年代を考えていくと、5017は札幅が3.0cmと広く、札幅だけを根拠にするならば７世紀前葉より古いものと考えられる。これについては他の類例を探したうえで検討する必要があるが、７世紀以前（古墳時代後期）のものであるとすれば岩手県内出土の最古例として位置づけることができる。5018は札幅が1.6cmであり、８世紀第３四半期と推定される根岸（２）遺跡出土例、８世紀後半と推定される御所野21号墳出土例よりも札幅は広い。札幅だけをみれば８世紀第２四半期とされる事例とほぼ同じ札幅であることから（津野1998）、5018については８世紀前半に位置づけることができよう。

以上、簡単ではあるが本遺跡出土の小札について検討を加えてきた。いずれの資料についても岩手県内では最古段階に位置づけられるものであり、県内における鉄製武具の初現を考えるうえで貴重な資料といえる。とくに5017については、東北地方北部では希少な古墳時代後期に属すると推定されるものであり、これについては類例を探すなどをしてさらに詳細な検討を加えていく必要があろう。　（村田）

参考文献

高田和徳他　2004　『御所野遺跡Ⅱ』一戸町文化財調査報告書第48集

津野　仁　1995　「根岸（２）遺跡出土の刀子および桂甲小札について」『根岸（２）遺跡発掘調査報告書』

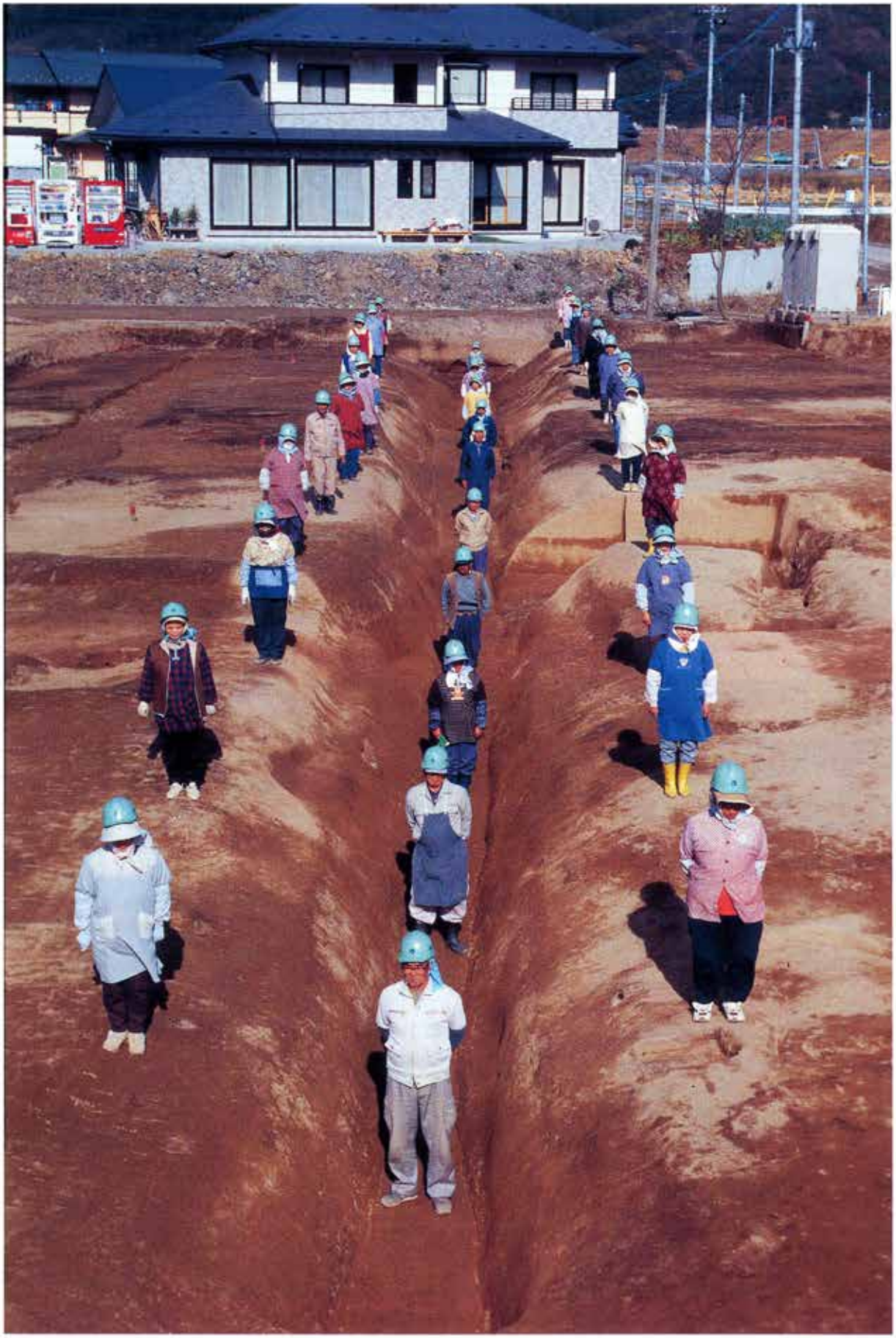
津野　仁　1998　「古代小札甲の特徴」『兵の時代　－古代末期の東国社会－』横浜市歴史博物館･（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

写　真　図　版

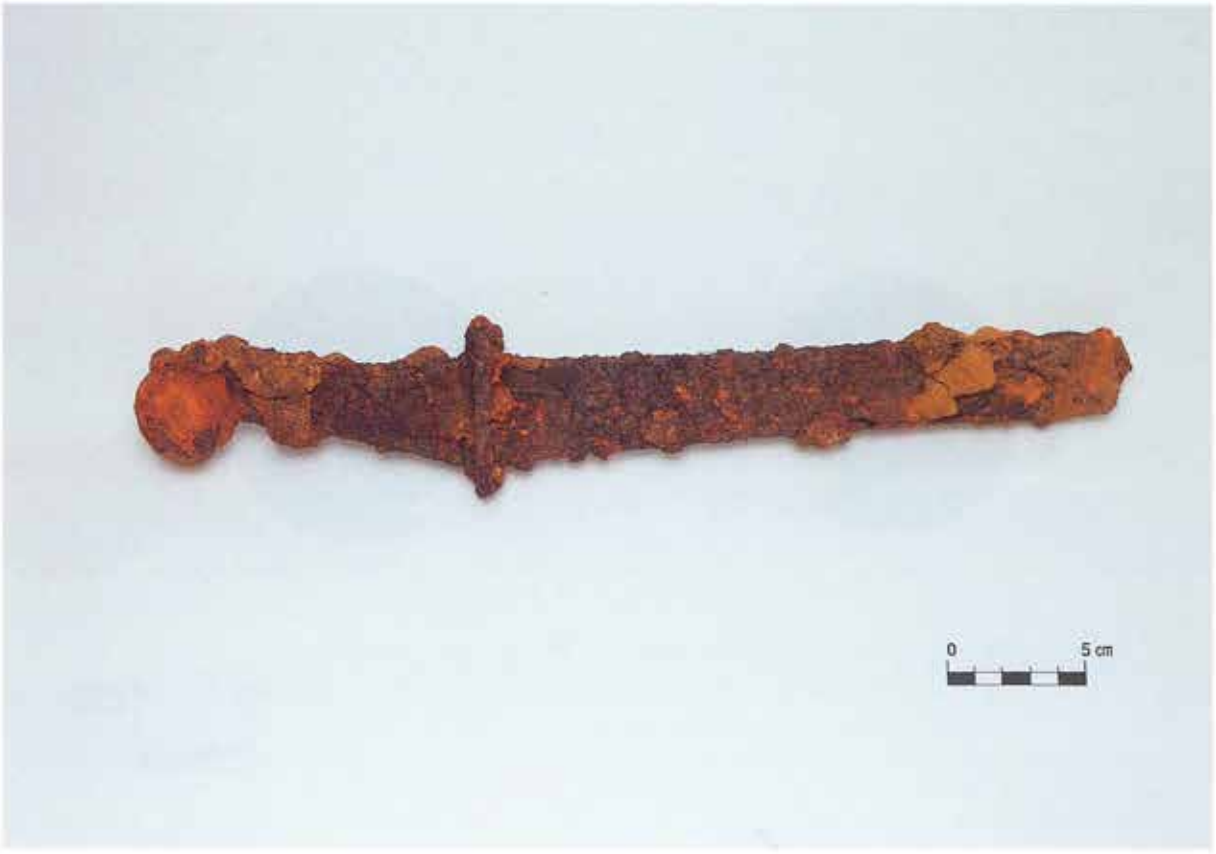
調査区遠景（平成15年8月1日）

調査区全景（平成15年8月1日）

写真図版1　調査区遠景、調査区全景



写真図版２　C区SD101



蕨手刀（5001）

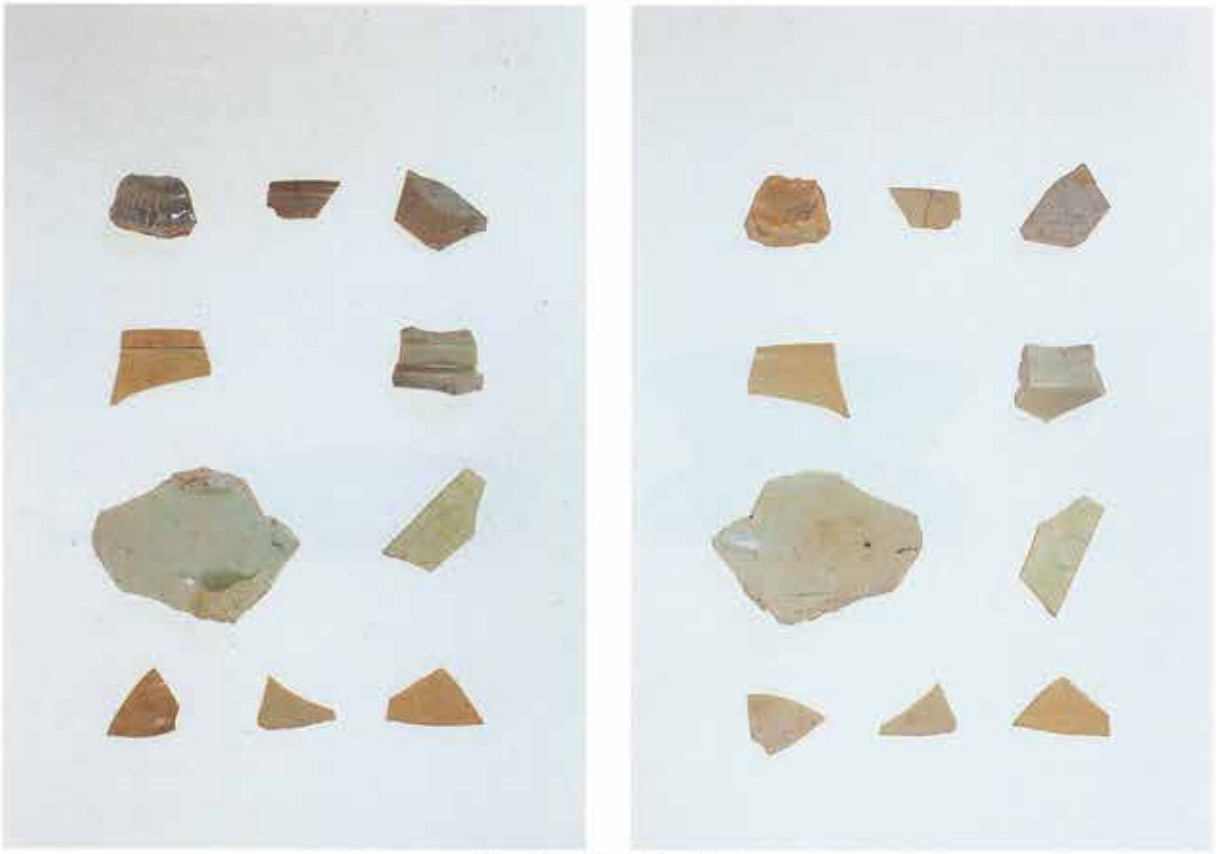
古代の鉄製品

写真図版３　蕨手刀、古代の鉄製品

和同開珎（5047・5048）

11世紀のかわらけ

写真図版４　和同開珎、11世紀のかわらけ



11～12世紀の中国産磁器

12世紀、中世の国産陶器

写真図版５　11～12世紀・中世の陶磁器

六器（5044～5046）

12世紀のかわらけ

写真図版６　六器、12世紀のかわらけ

平成13年度調査終了時(垂直)

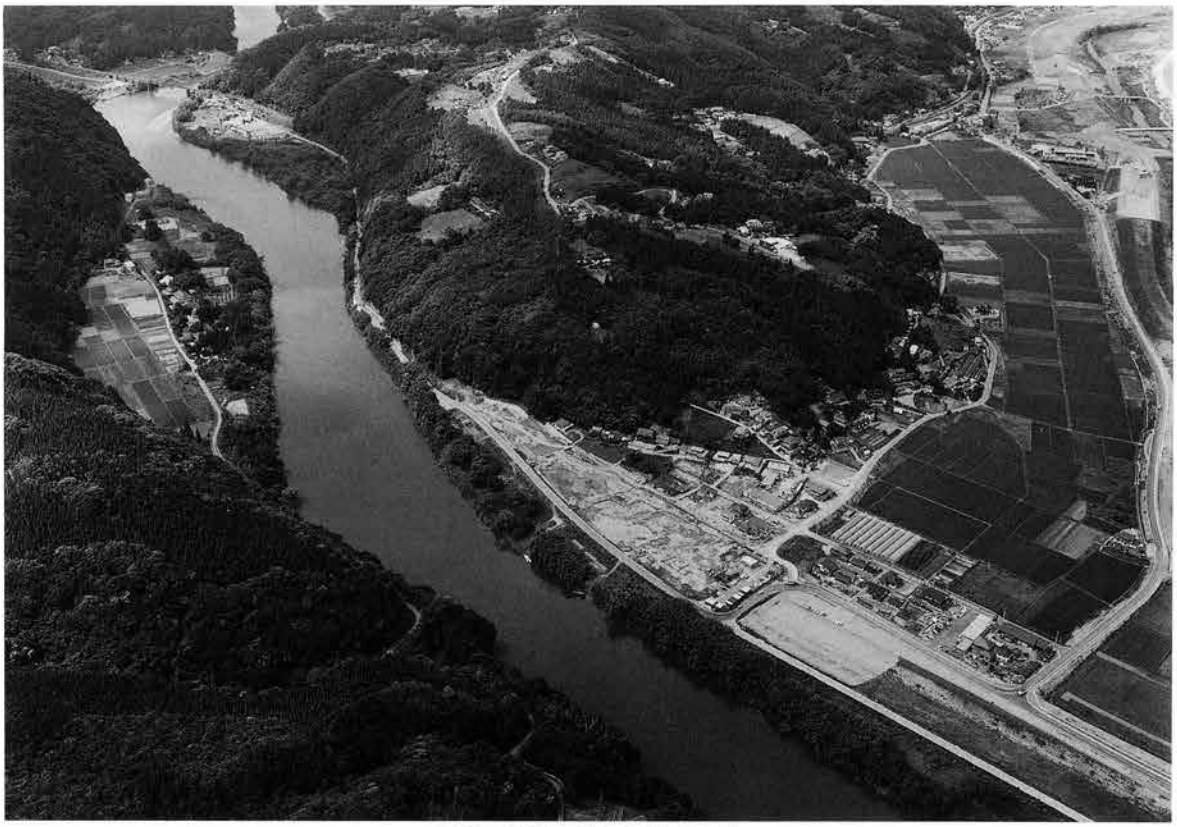
平成13年度調査終了時(垂直)

写真図版７　航空写真平成13年度

平成15年8月1日(南東から)

平成15年8月1日(垂直)

写真図版８　航空写真平成15年度



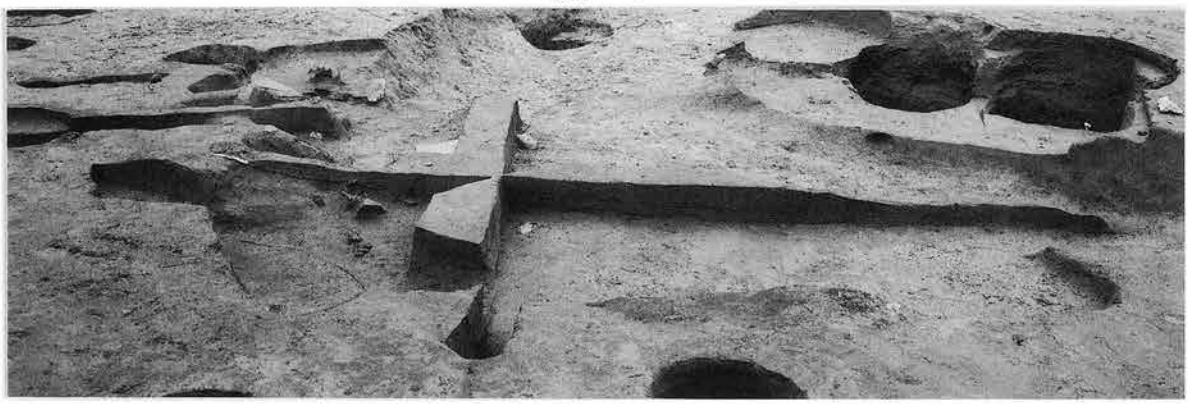
平成16年調査終了時(南東から)

平成16年調査終了時(垂直)

写真図版９　航空写真平成16年度

平面(W→)

断面N–S



断面E–W

写真図版10　C区 SI 1 ①

カマド付近遺物出土状況

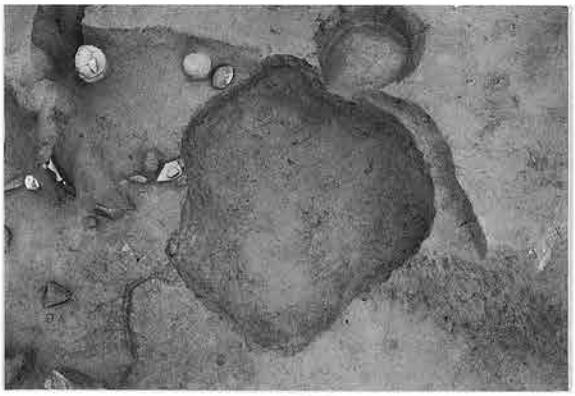
現地説明会風景

カマド袖 N－S

カマド袖 E－W

カマド燃焼部 N－S

カマド燃焼部 E－W

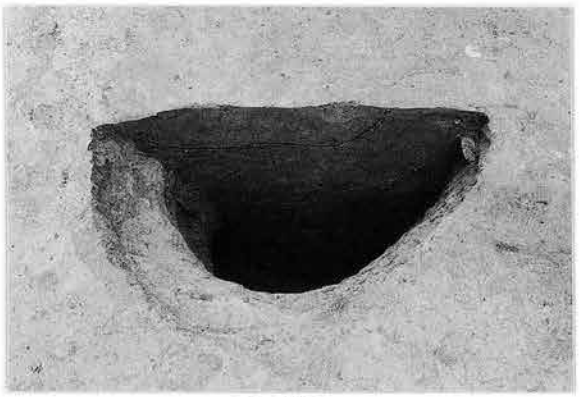


P1 平面

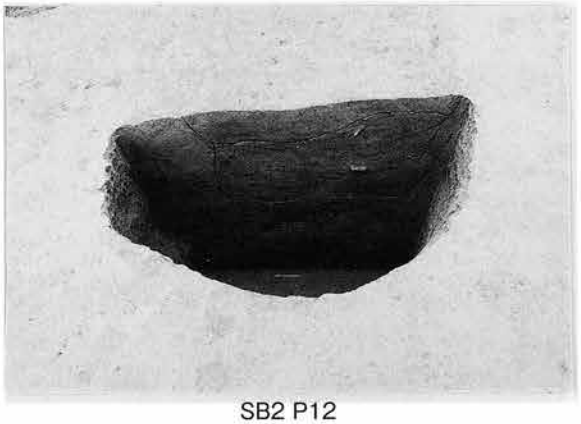
P1 断面

写真図版11　C区 SI 1 ②

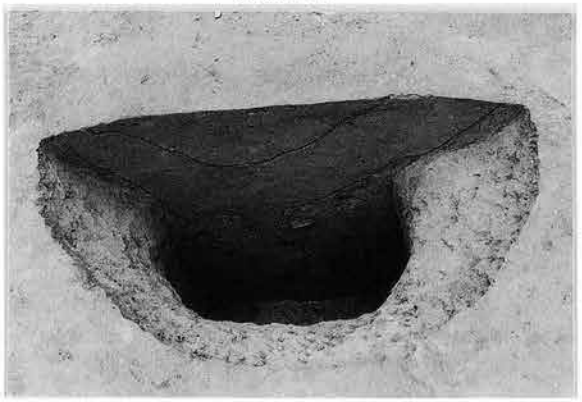
C区SB1　完掘



SB2 P14



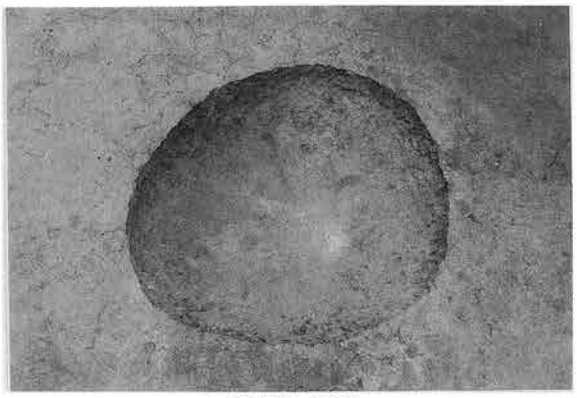
SB2 P12



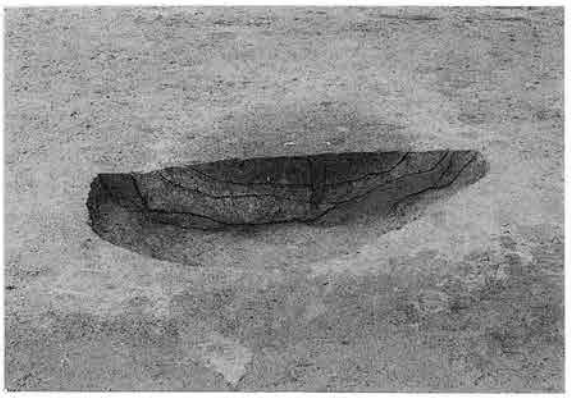
SB2 P15

SB2 P11

写真図版12　C区 SB1・SB2



01SK1 平面

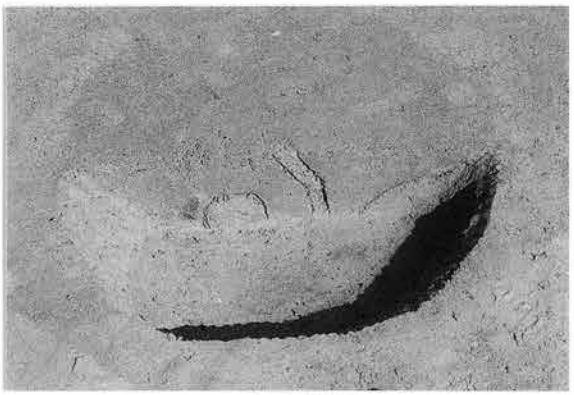


01SK1 断面

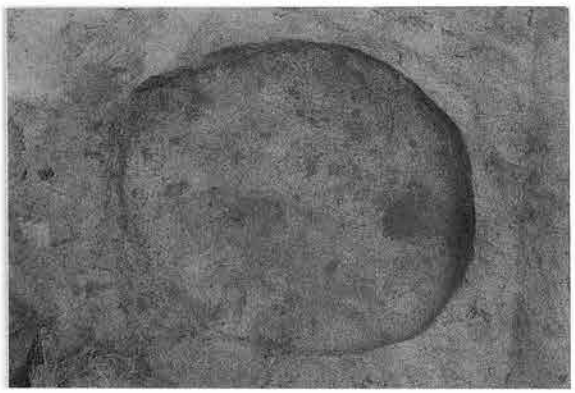
01SK2 平面

01SK2 断面

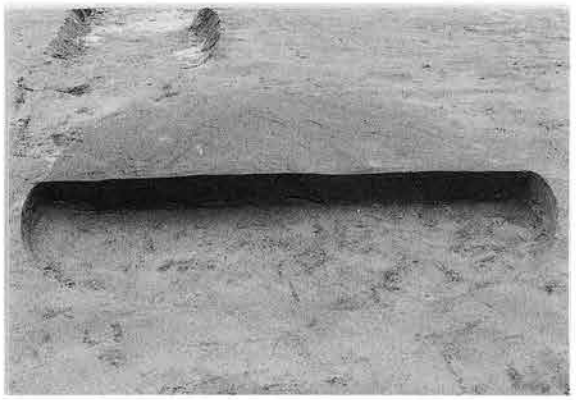
01SK3 平面



01SK3 断面



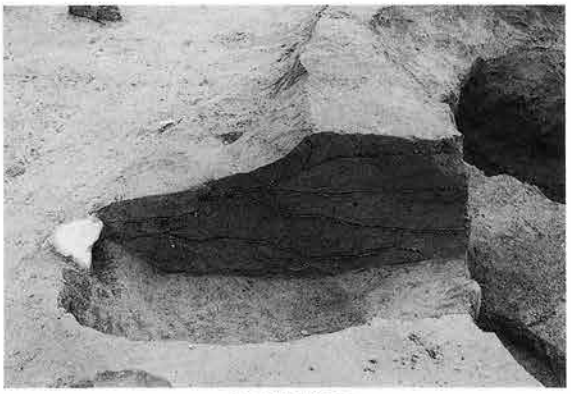
01SK4 平面



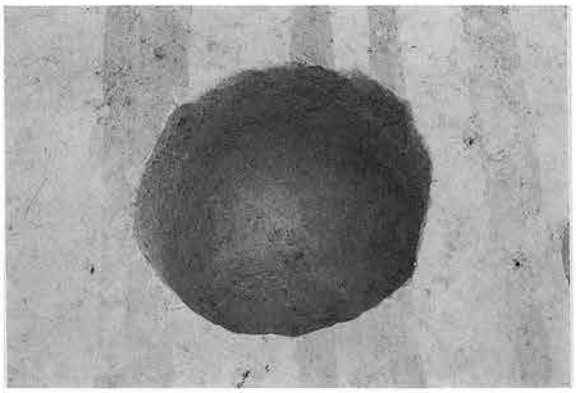
01SK4 断面

写真図版13　01SK１～４

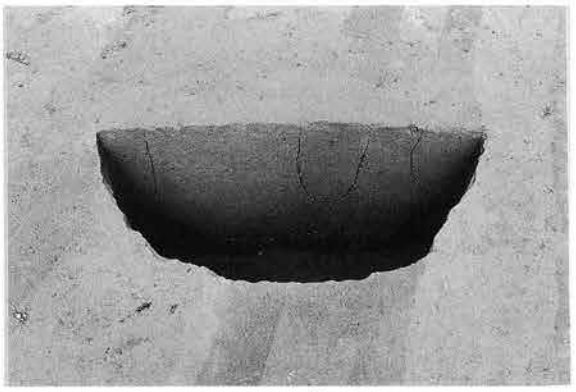
01SK5 平面



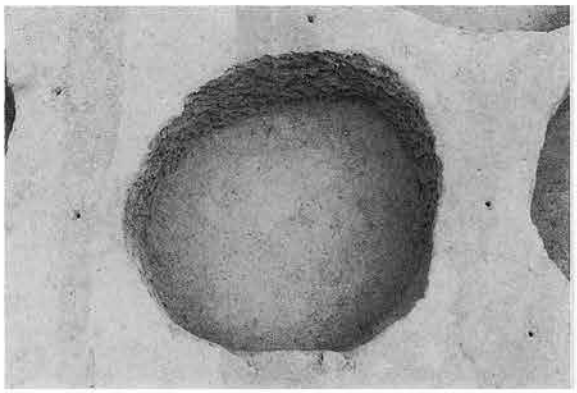
01SK5 断面



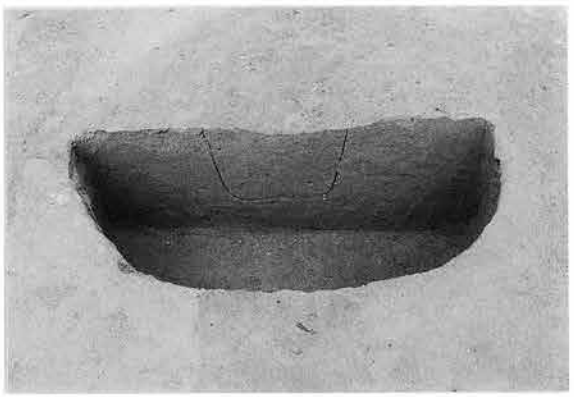
01SK8 平面



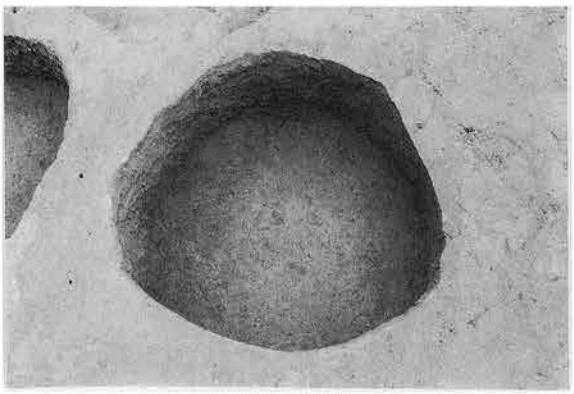
01SK8 断面



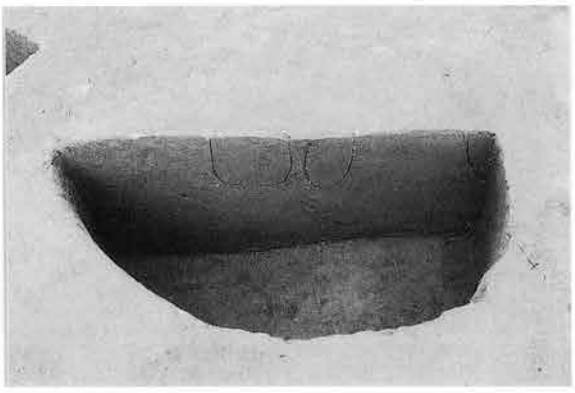
01SK9 平面



01SK9 断面

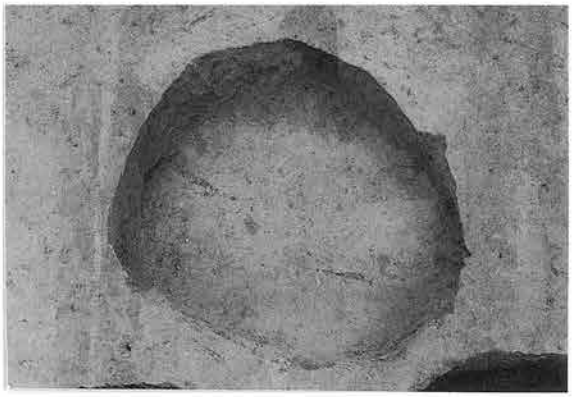


01SK10 平面

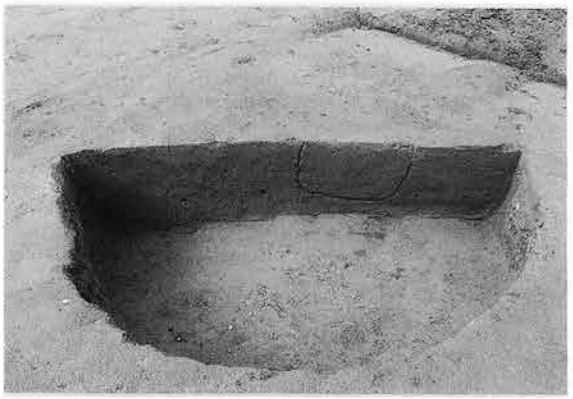


01SK10 断面

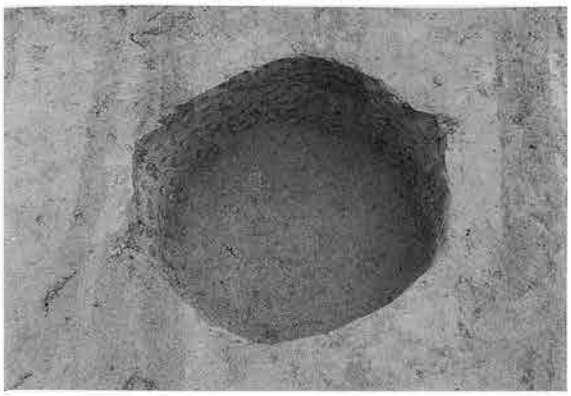
写真図版14　01SK５～10



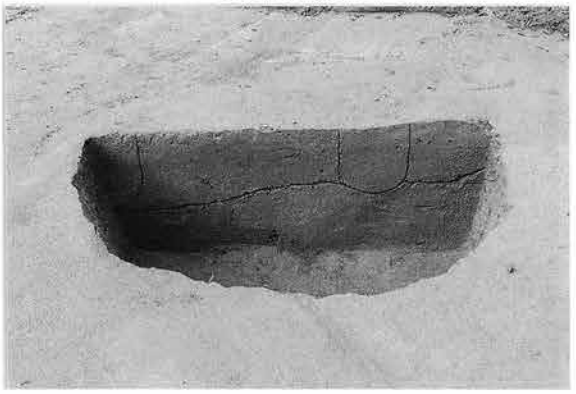
01SK11 平面



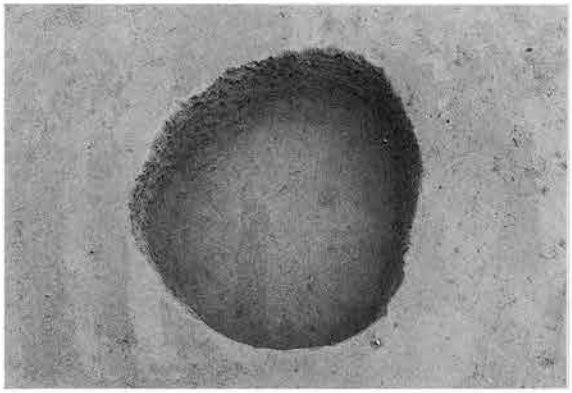
01SK11 断面



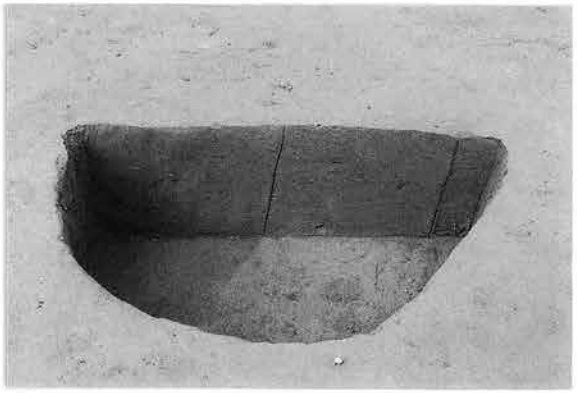
01SK12 平面



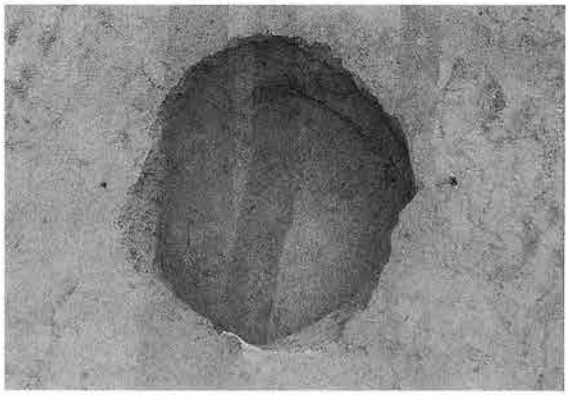
01SK12 断面



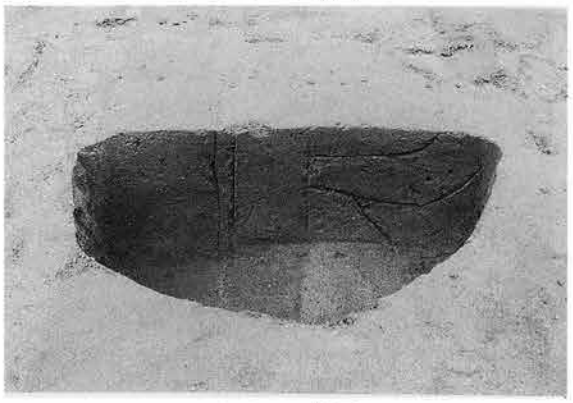
01SK13 平面



01SK13 断面

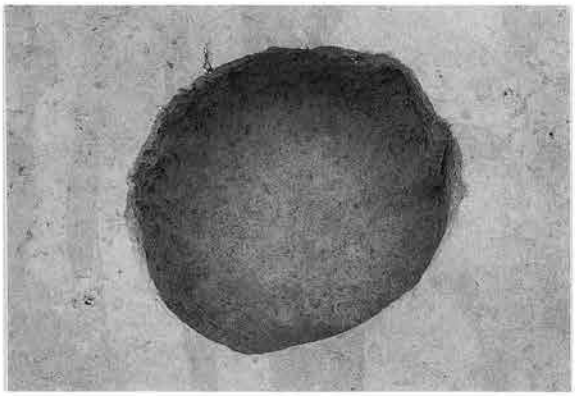


01SK14 平面

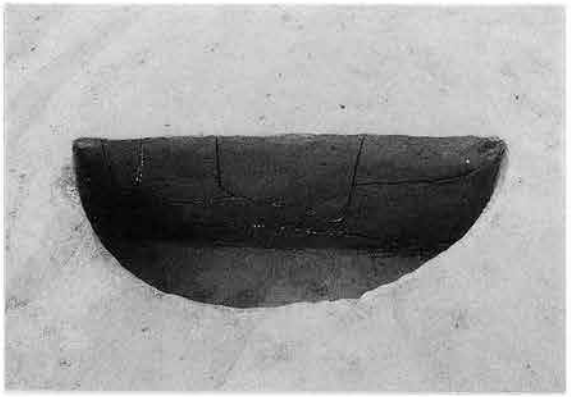


01SK14 断面

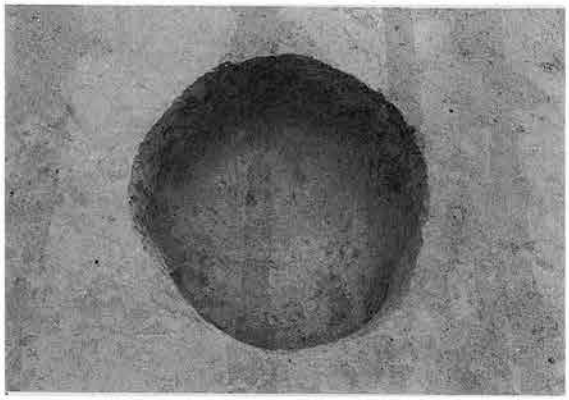
写真図版15　01SK11～14



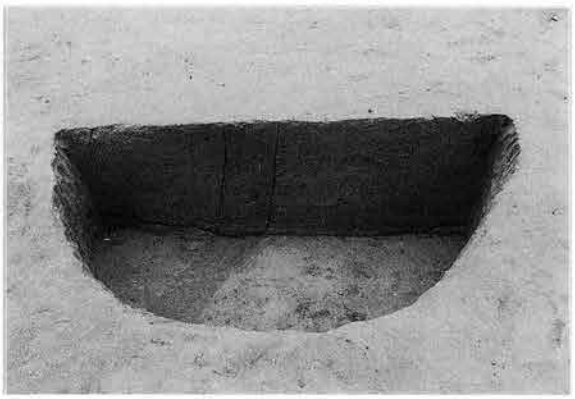
01SK15 平面



01SK15 断面

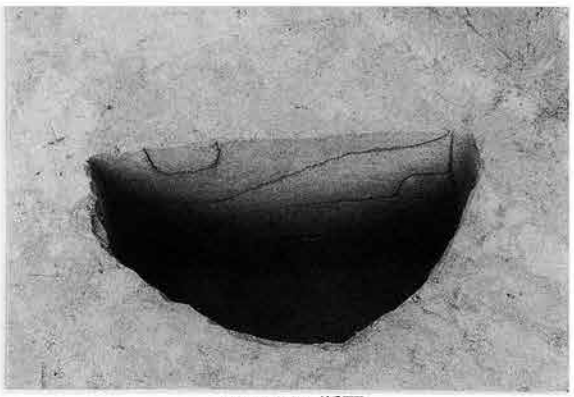


01SK16 平面

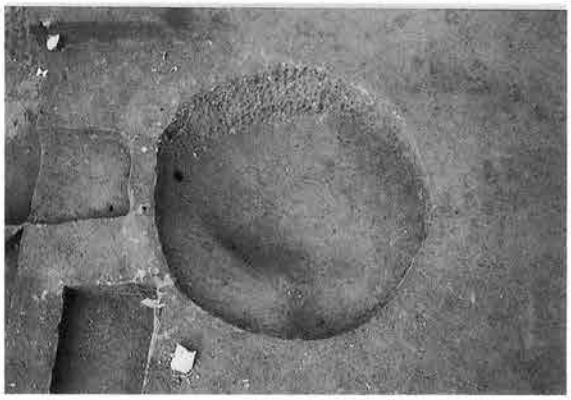


01SK16 断面

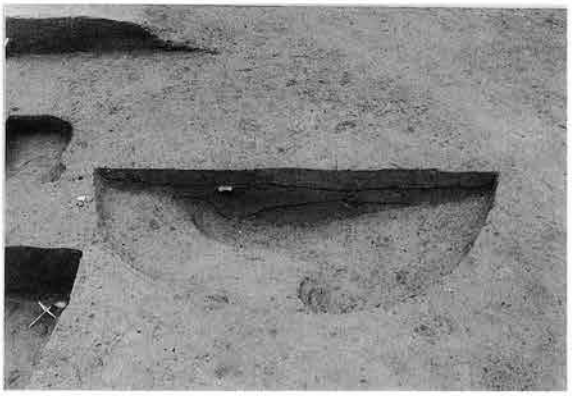
01SK17 平面



01SK17 断面



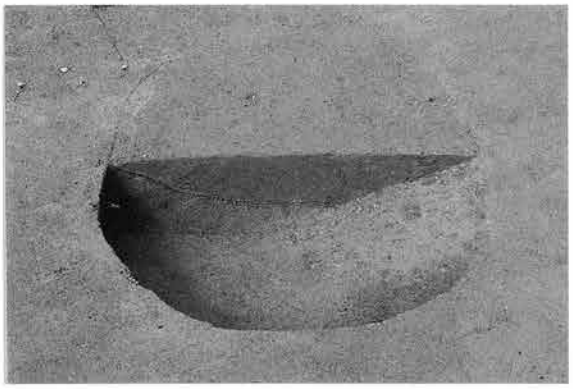
01SK18 平面



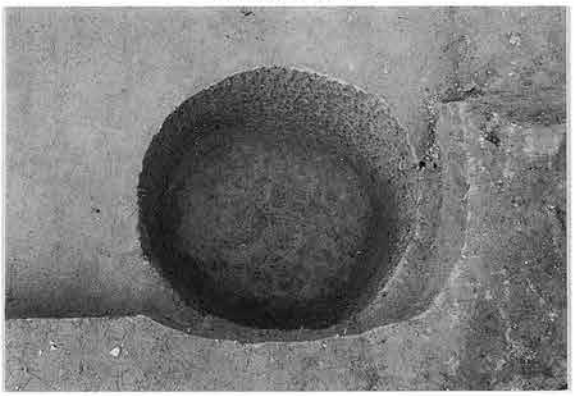
01SK18 断面

写真図版16　01SK15～18

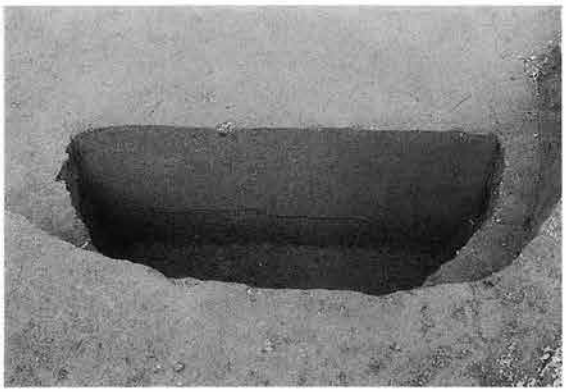
01SK19 平面



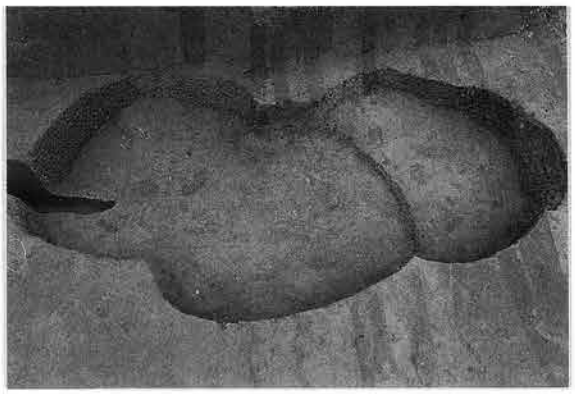
01SK19 断面



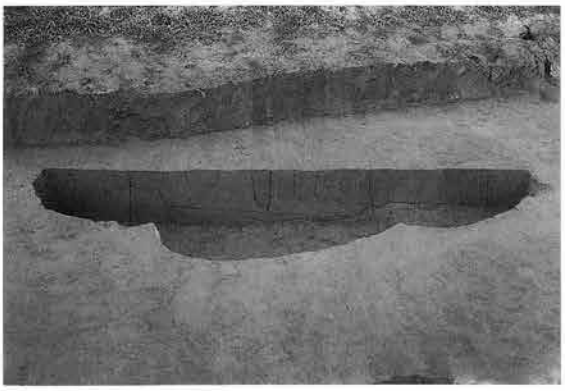
01SK20 平面



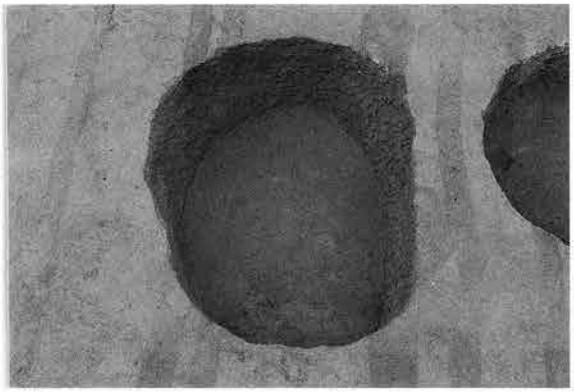
01SK20 断面



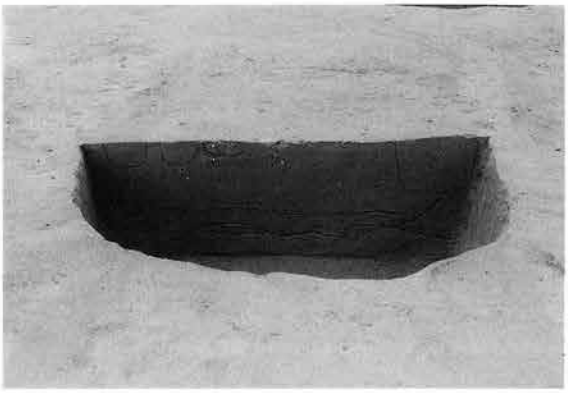
01SK21·22·23 平面



01SK21·22·23 断面

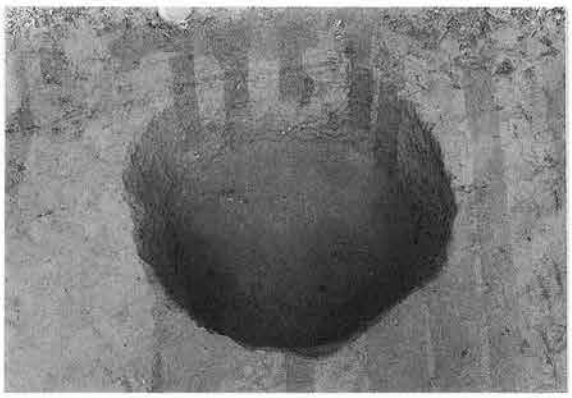


01SK24 平面

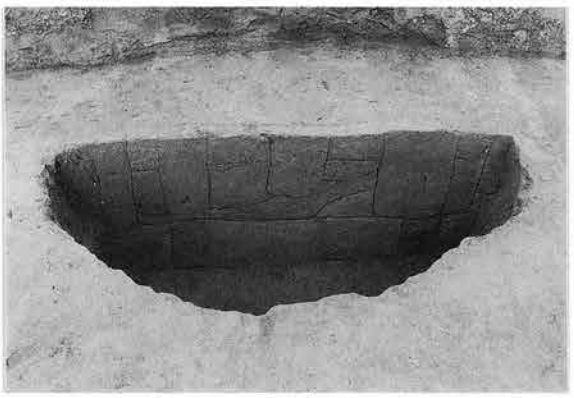


01SK24 断面

写真図版17　01SK19～24

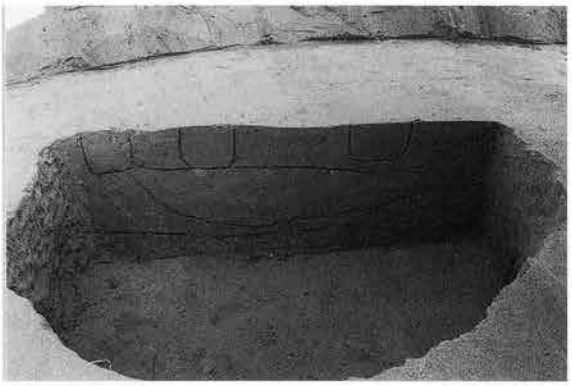


01SK25 平面

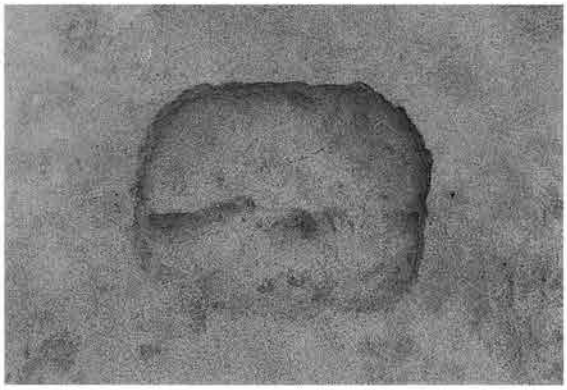


01SK25 断面

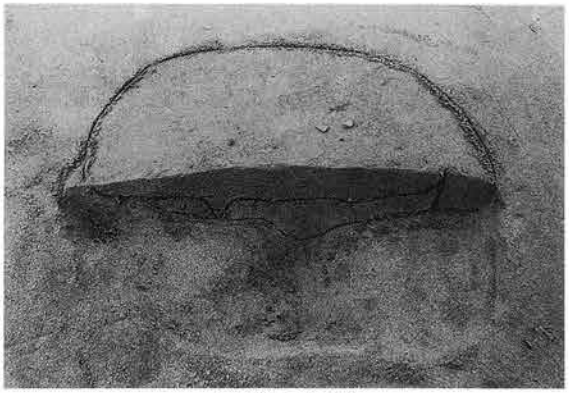
01SK26 平面



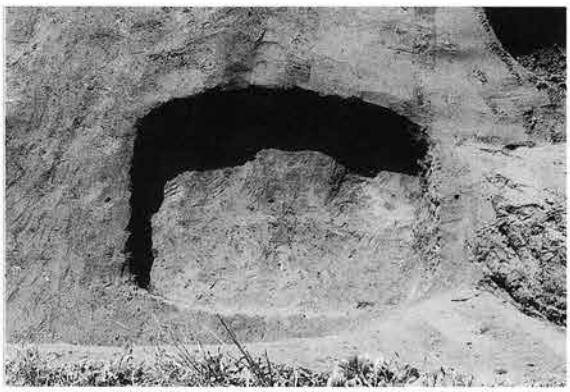
01SK26 断面



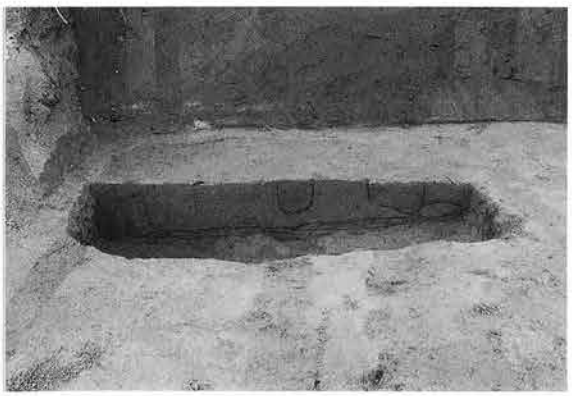
01SK27 平面



01SK27 断面



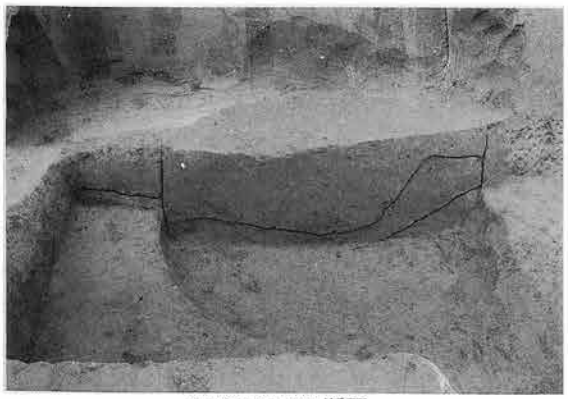
01SK28 平面



01SK28 断面

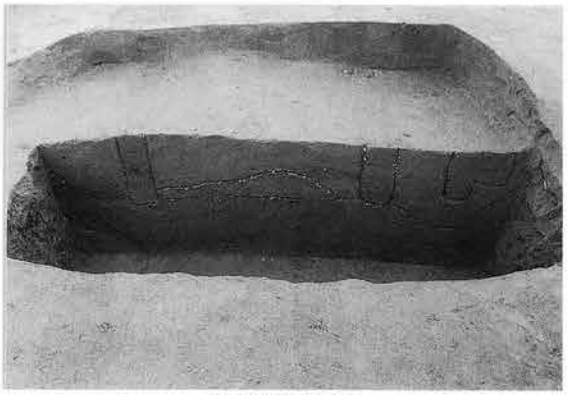
写真図版18　01SK25～28

01SK29･33 平面

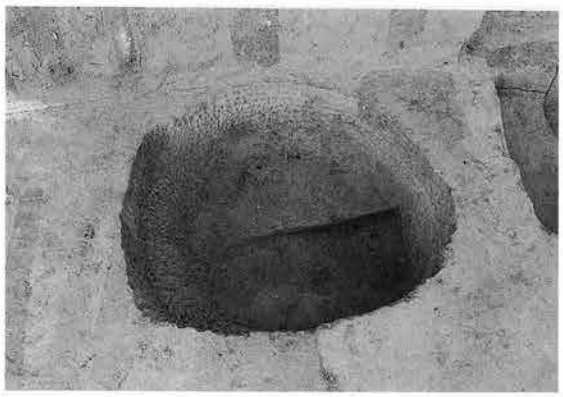


01SK29･33 断面

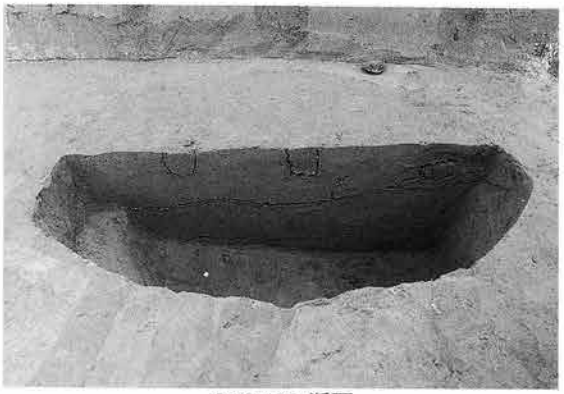
01SK31 平面



01SK31 断面

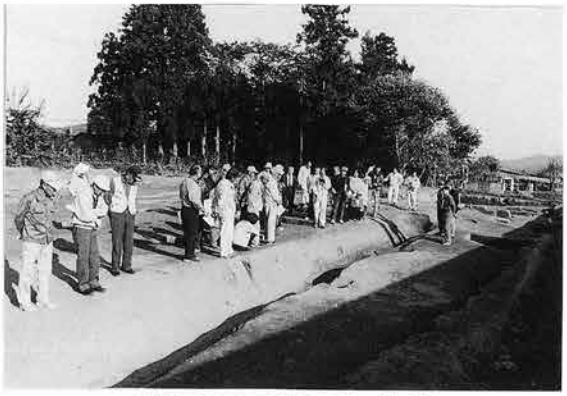


01SK32 平面



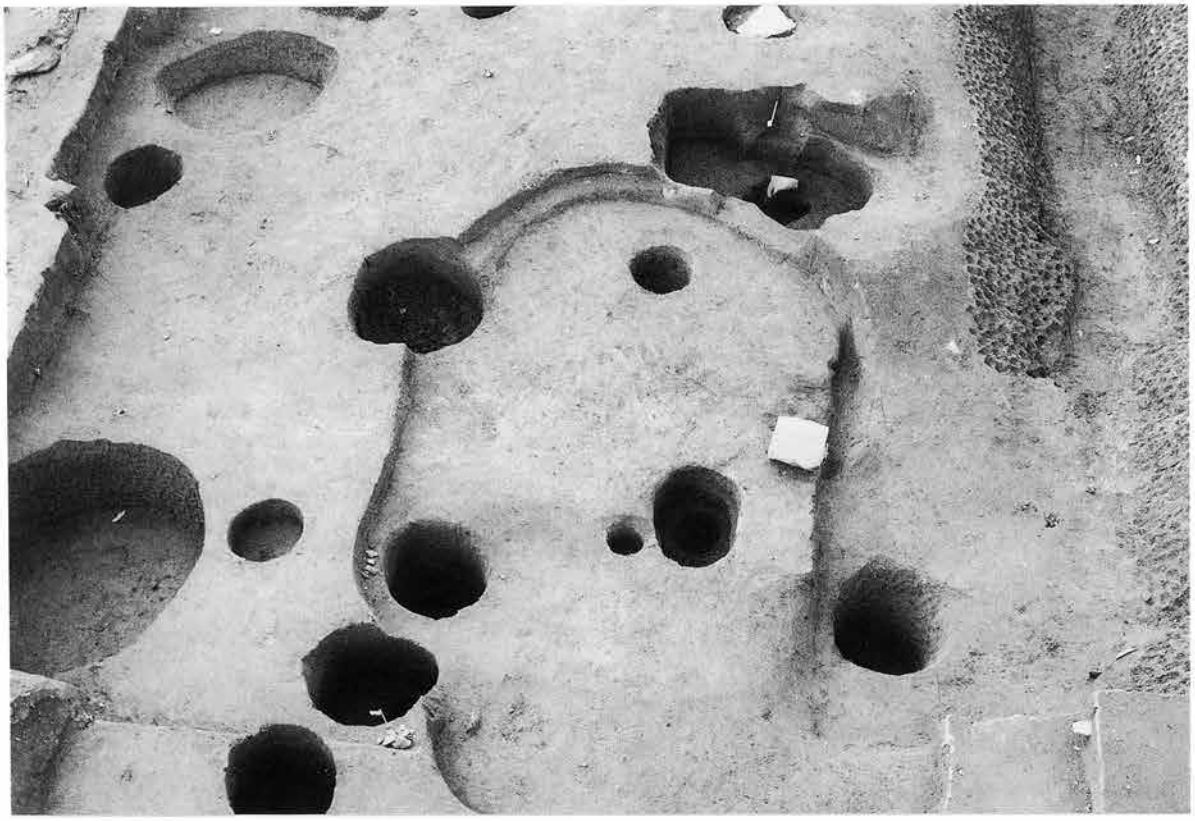
01SK32 断面

現地説明会風景(平成13年度)



現地説明会風景(平成13年度)

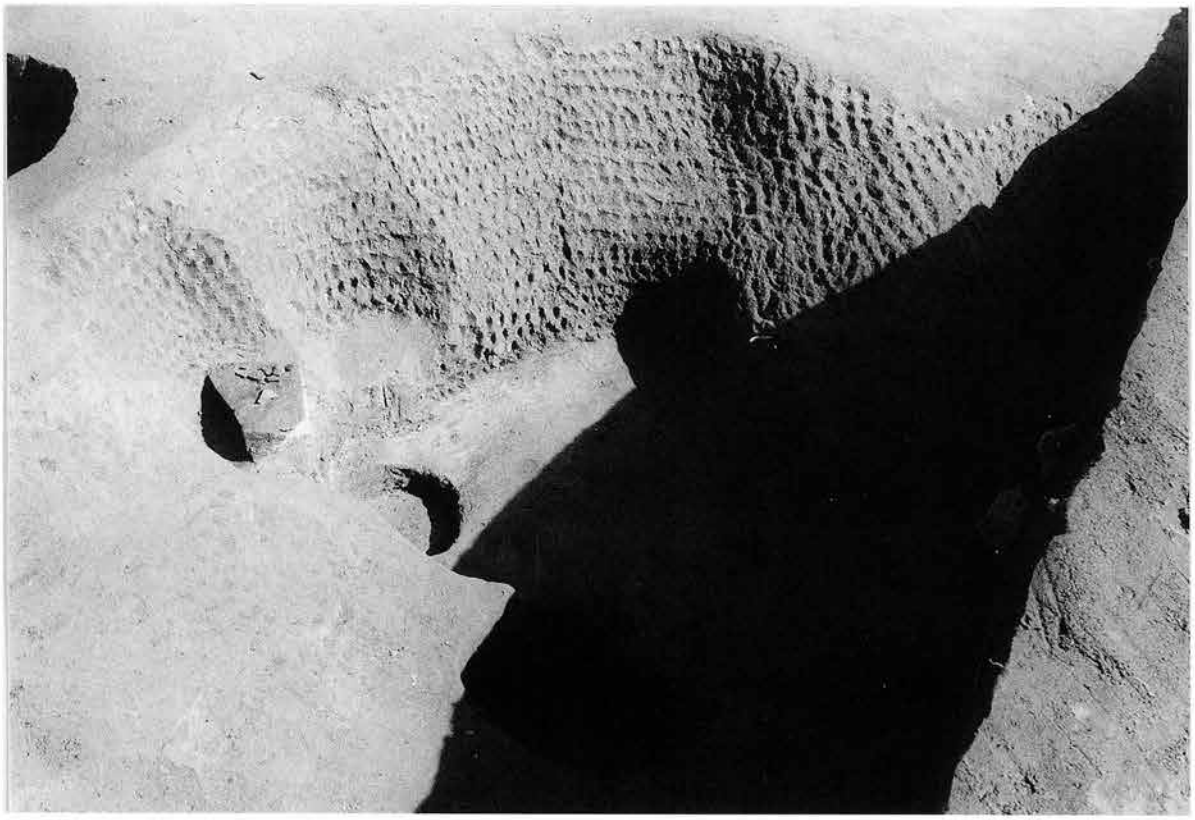
写真図版19　01SK29・31～33



01SX2 平面

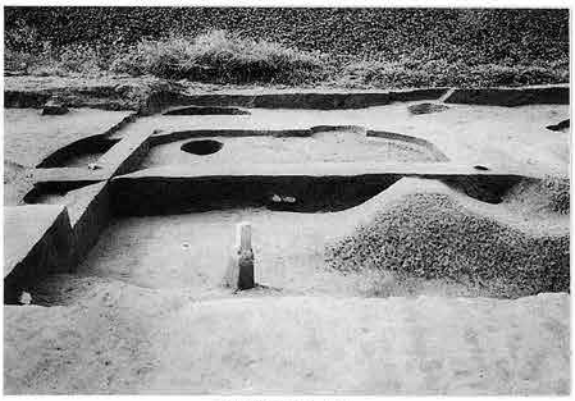
01SX3 平面

写真図版20　01SX２・３

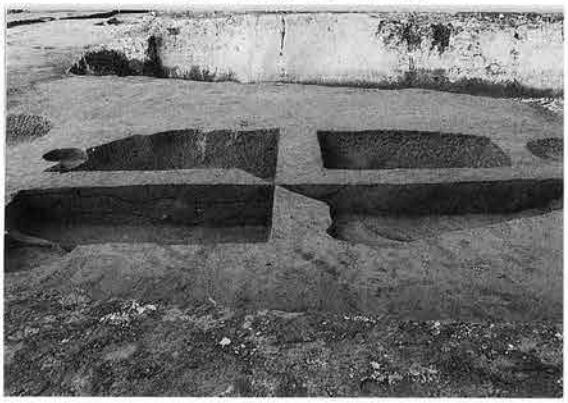


01SX4 完掘(W→)

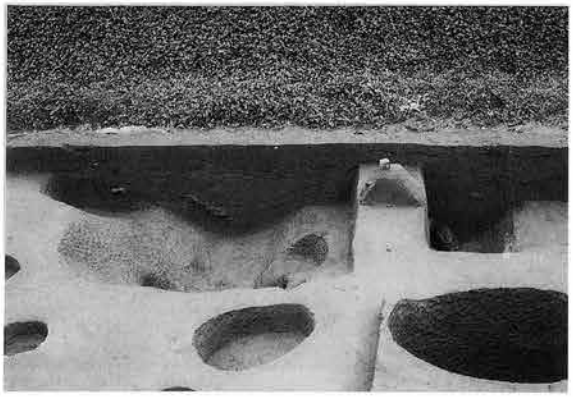
01SX1～01SD4 E－Wベルト



01SX2 E－W



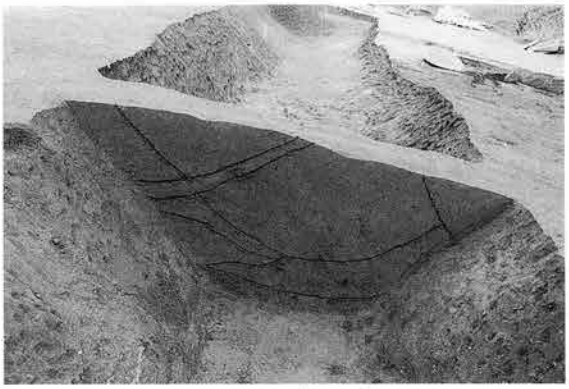
01SX3 W－E



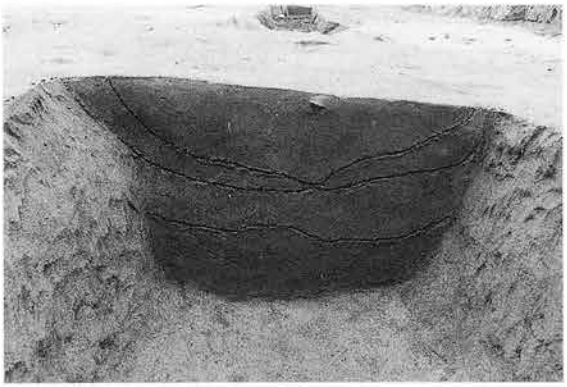
01SX4 E－W

写真図版21　01SX１～４

01SD1(W→)



01SD1 東ベルト



01SD1 西ベルト

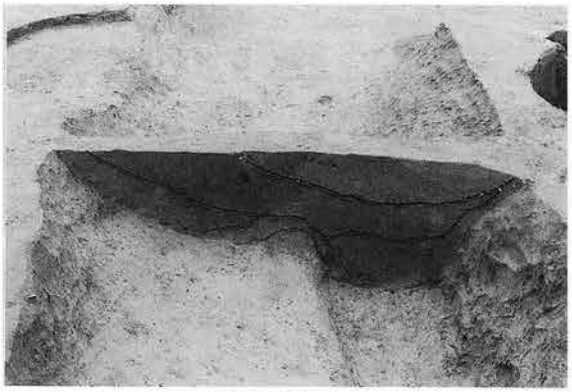
01SD2(W→)

01SD2 東ベルト

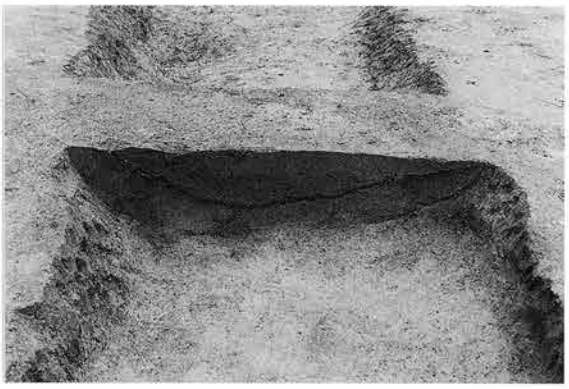
01SD2 西ベルト

写真図版22　01SD1・2

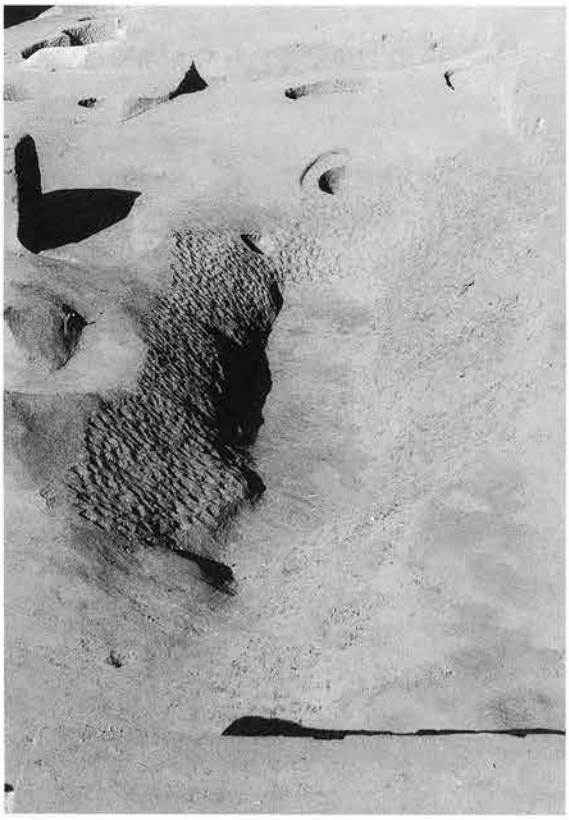
01SD3(W→)



01SD3 東ベルト



01SD3 西ベルト

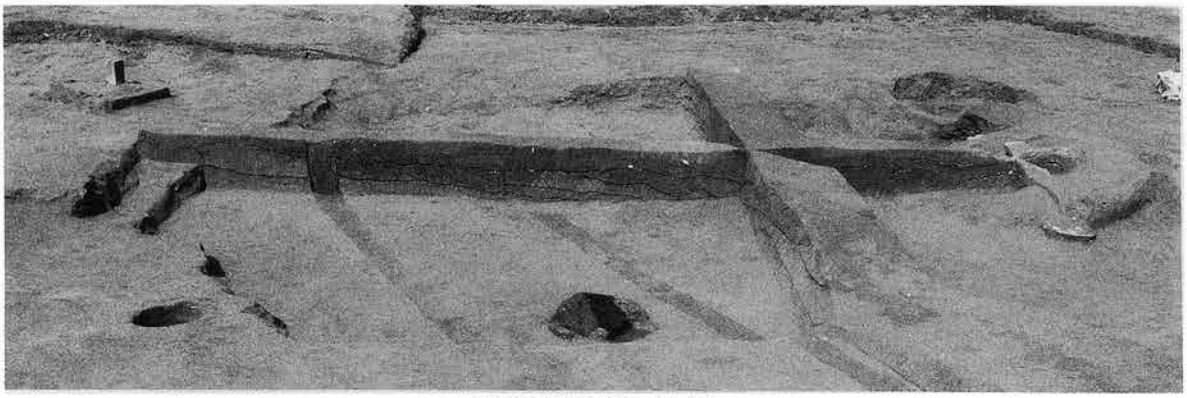


01SD4(E→)

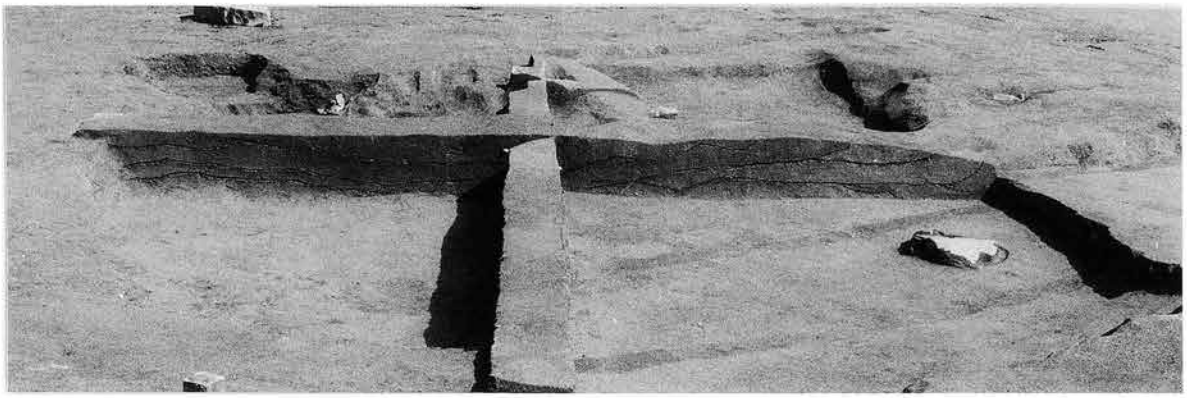
01SD3(S→)

01SD4 断面

写真図版23　01SD3・4



C区SI2 埋土断面 E−W



C区SI2 埋土断面 S−N

C区SI2 カマド

写真図版24　C区 SI2①

C区SI2
カマド覆土断面
C－D

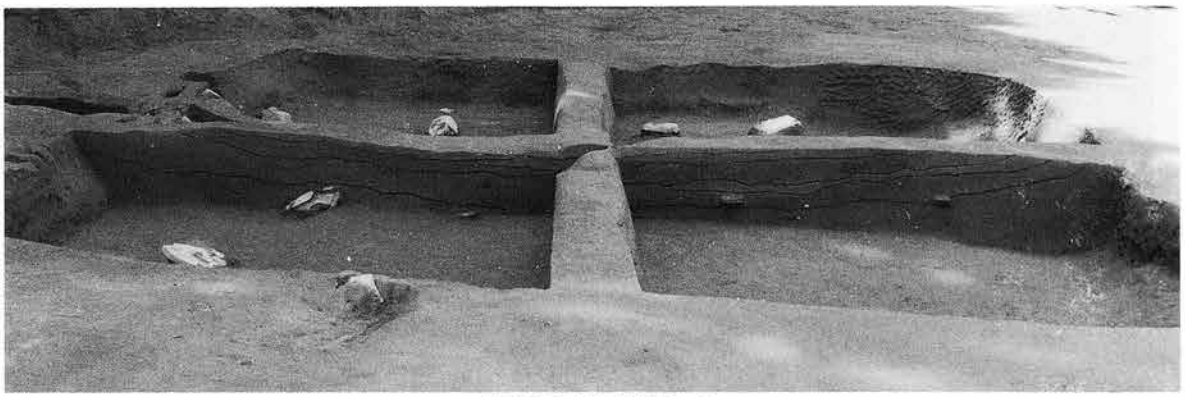
C区SI2
カマド覆土断面
A－B

C区SI2
カマド断面
C－D

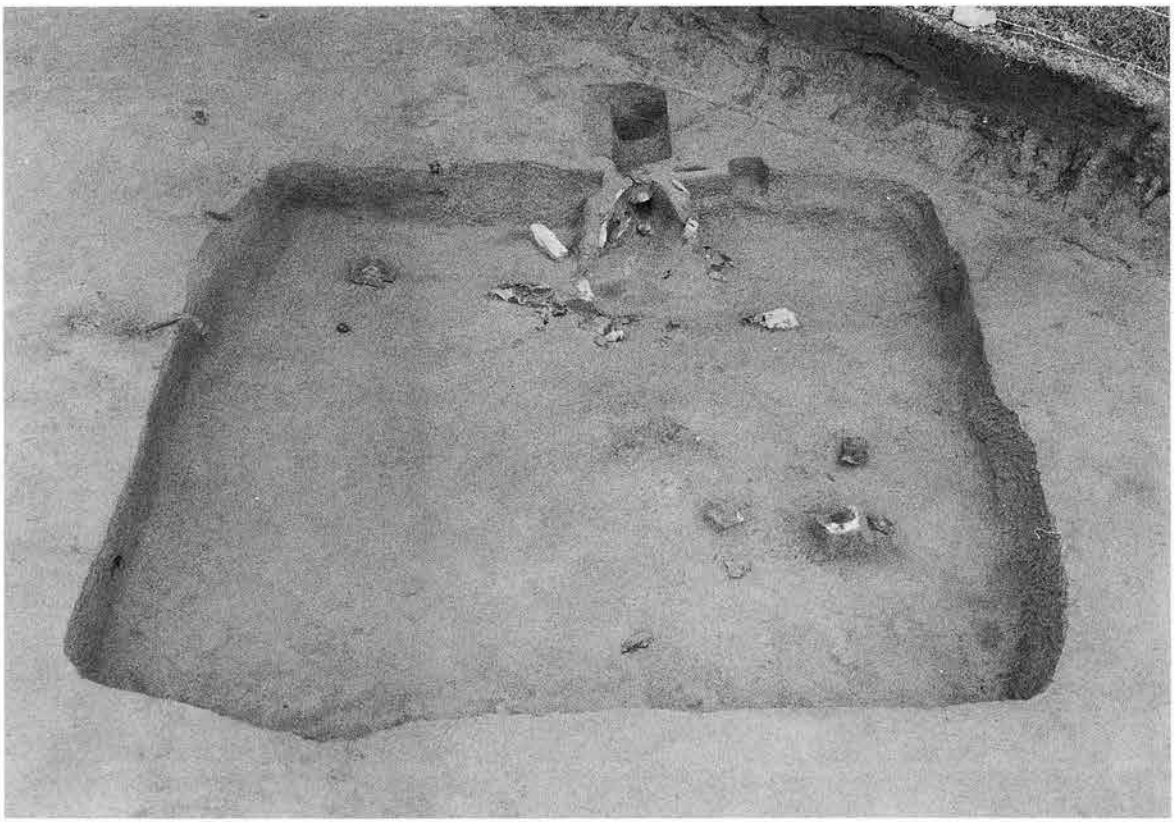
C区SI2
カマド断面
A－B

写真図版25　C区 SI 2 ②

C区 SI3 埋土断面A－B



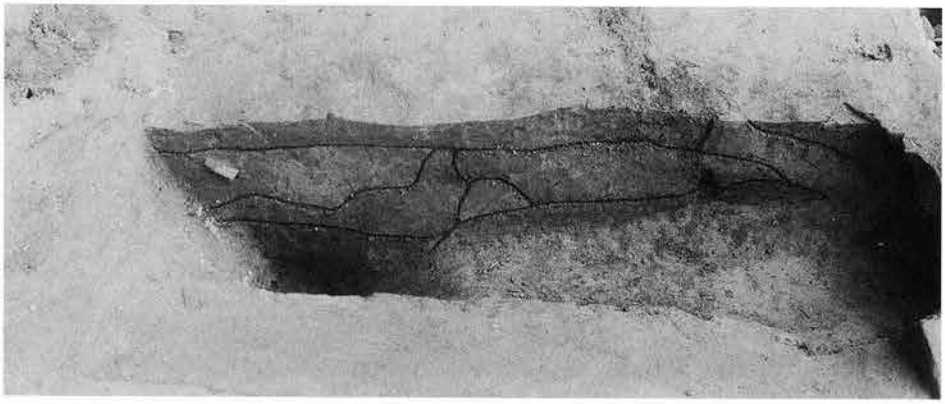
C区 SI3 埋土断面C－D



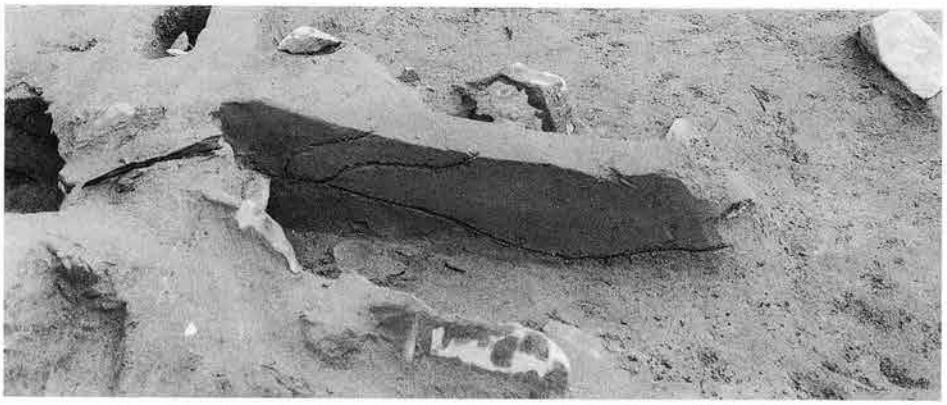
C区 SI3 完掘①

写真図版26　C区 SI３①

C区SI3
カマド完掘



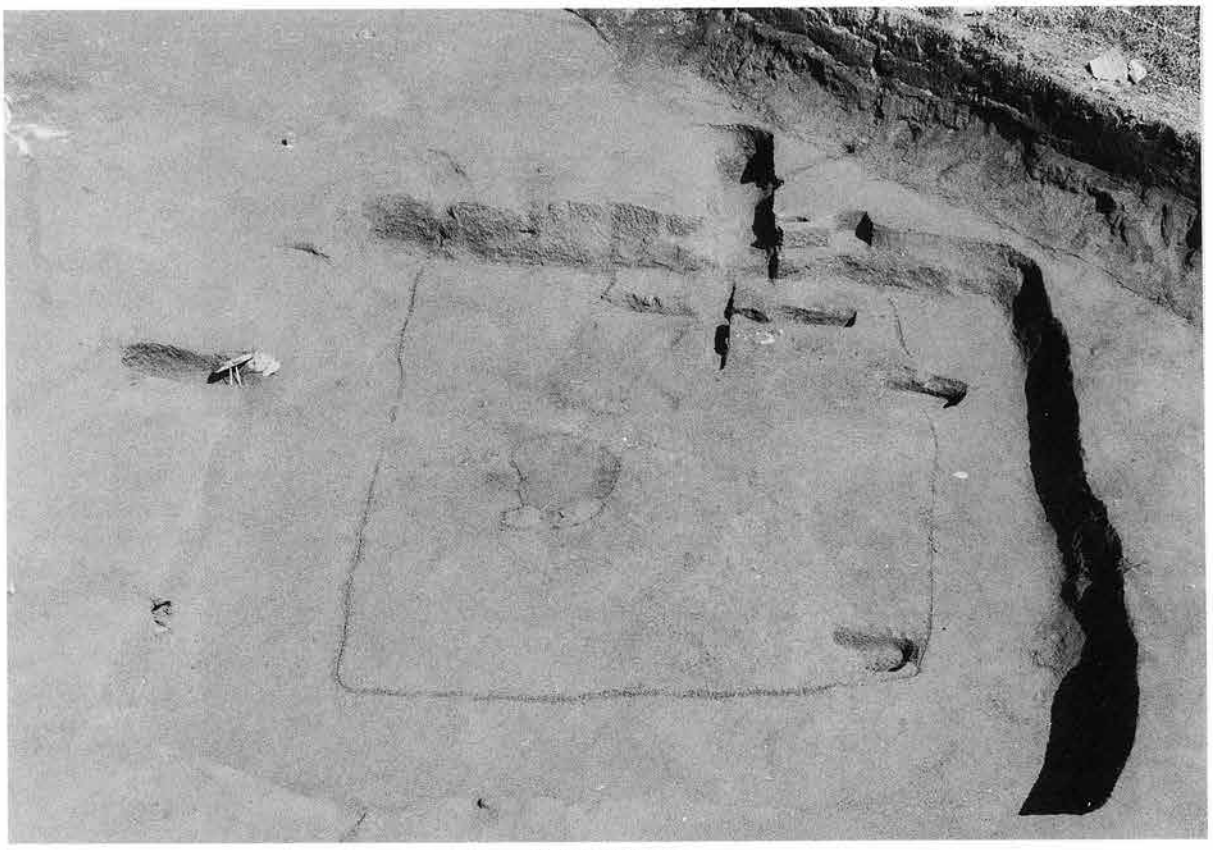
C区SI3
カマド断面
E－F①



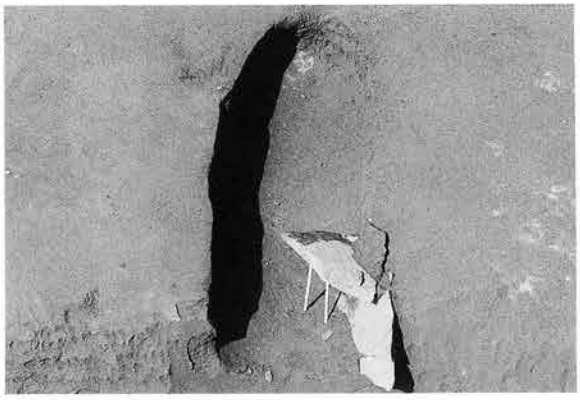
C区SI2
カマド断面
E－F②

C区SI3
カマド断面
G－H

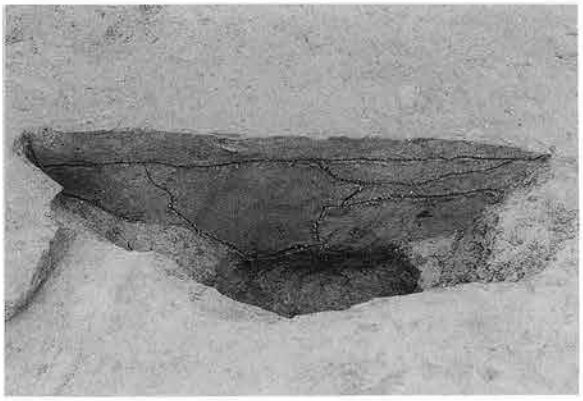
写真図版27　C区 SI３②



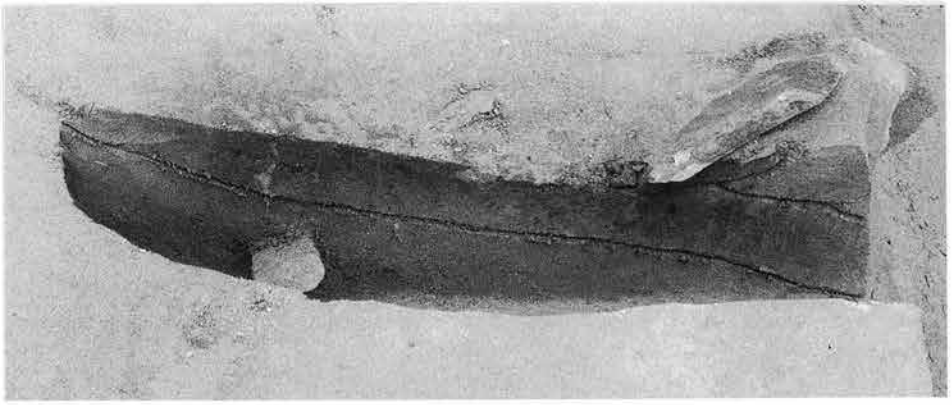
C区 SI3 完掘②



C区 SI3 旧カマド煙道部完掘

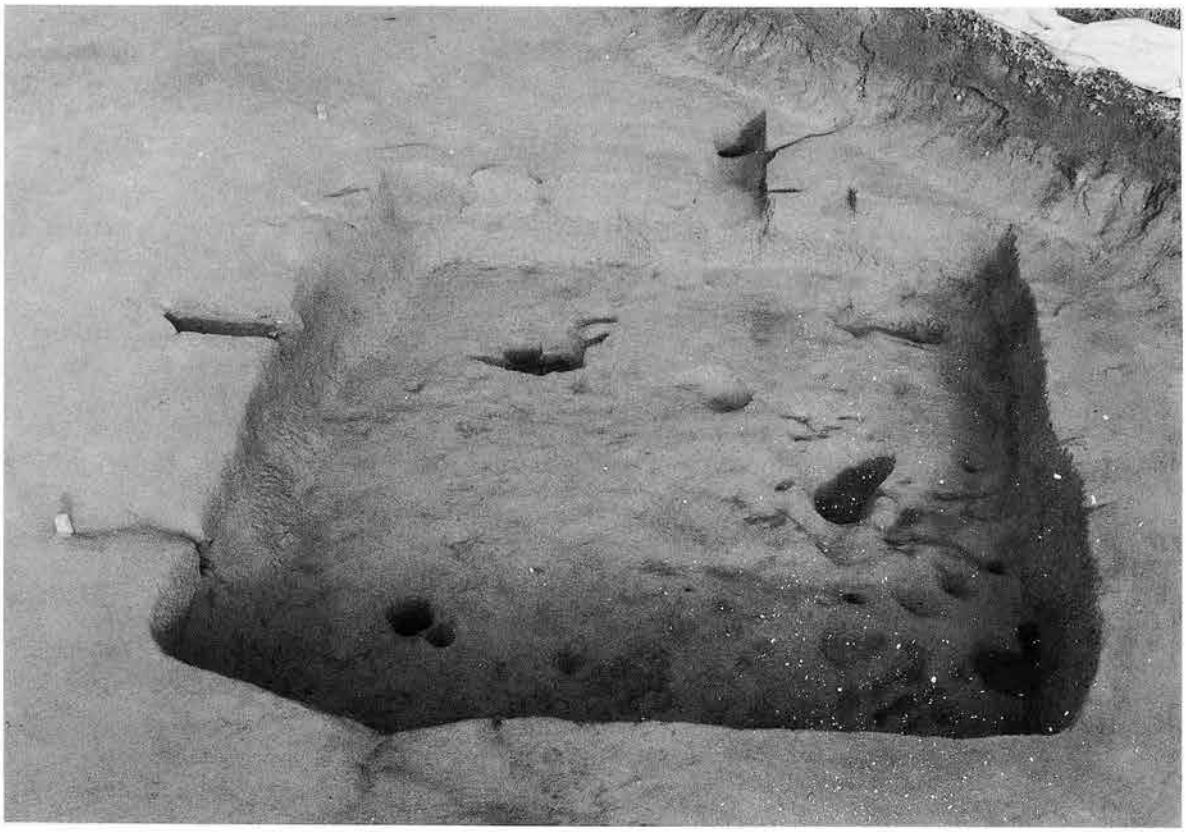


C区 SI3 P2断面

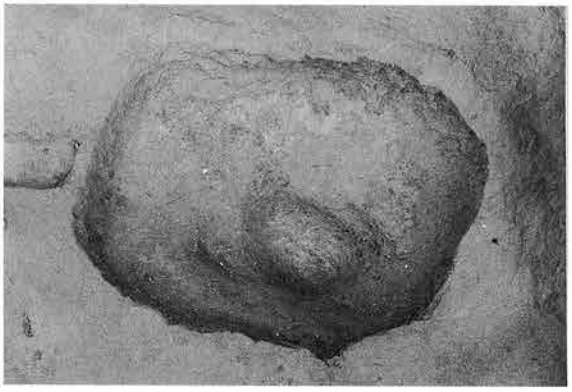


C区 SI3
旧カマド
煙道部
断面

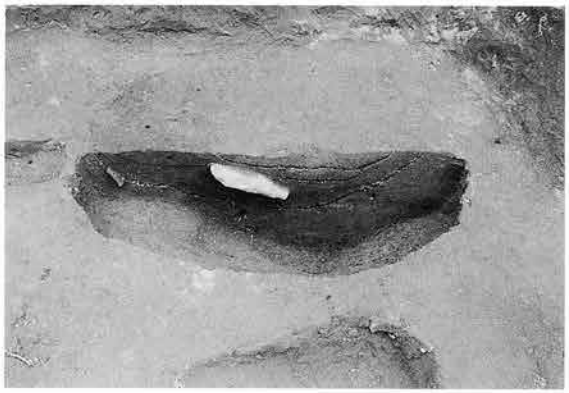
写真図版28　C区 SI 3③



C区SI3(旧住居)完掘③



C区SI3 P1完掘



C区SI3 P1断面

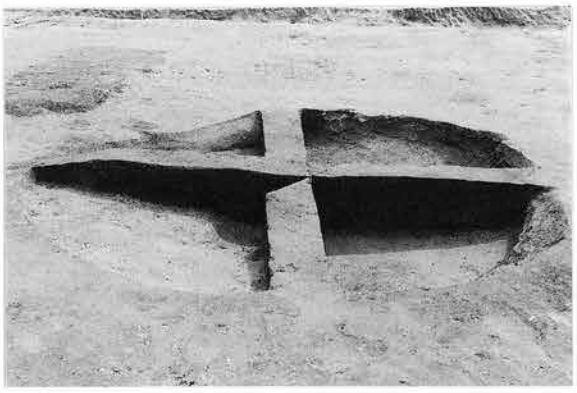
調査区遠景(北より)

調査前D区

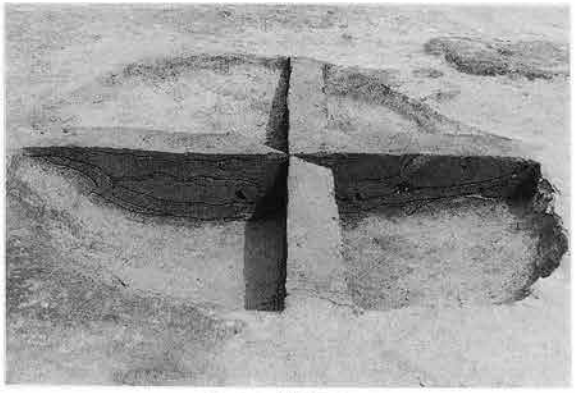
写真図版29　C区 SI3④

C区 SB3

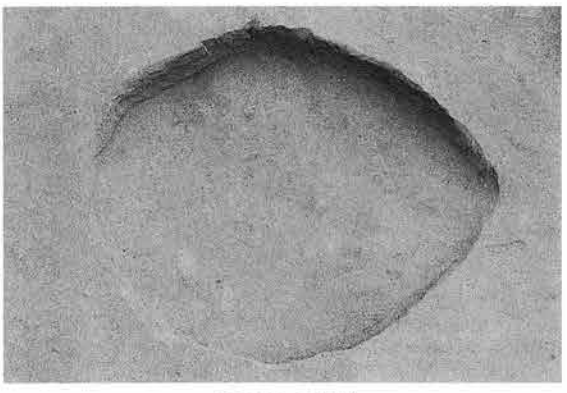
02SK7 完掘



02SK7 断面A－B

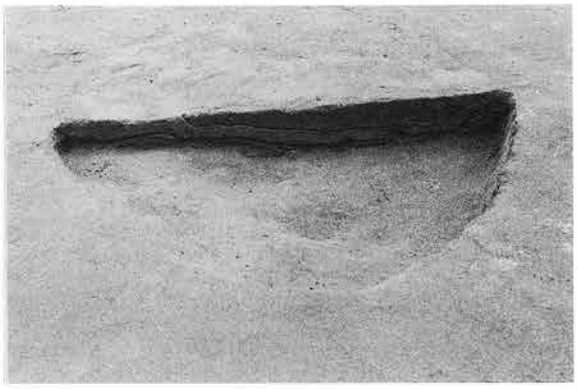


02SK7 断面C－D

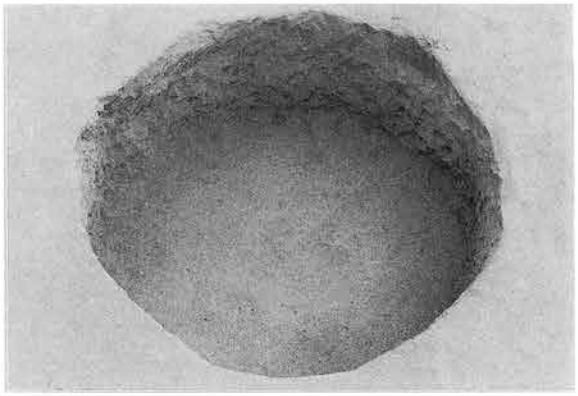


02SK34 完掘

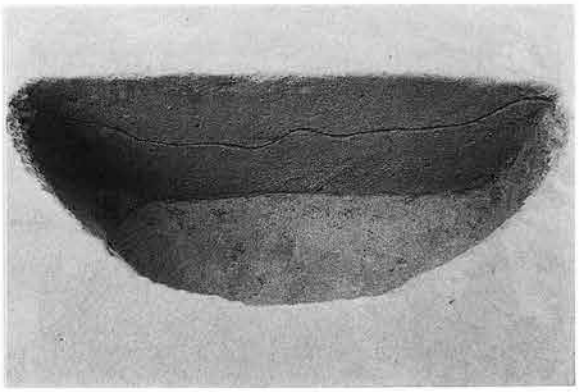
写真図版30　C区 SB３、02SK７・34



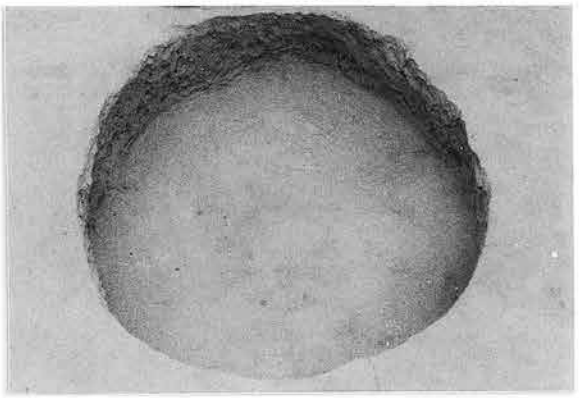
02SK34 断面



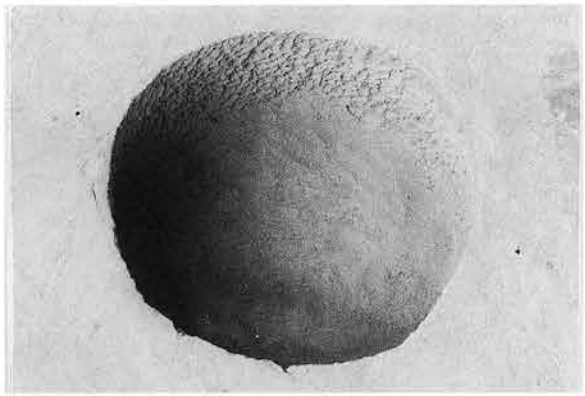
02SK35 完掘



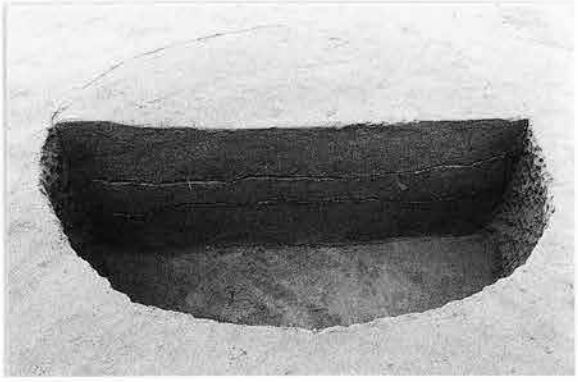
02SK35 断面



02SK36 完掘



02SK37 完掘

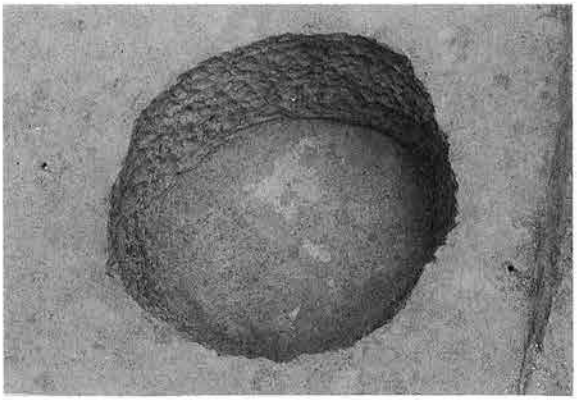


02SK37 断面

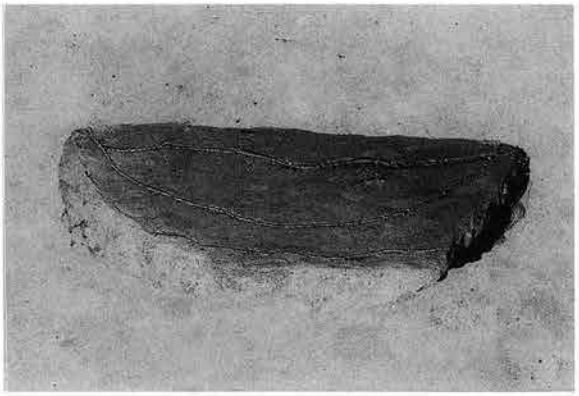
02SK38·39 完掘

02SK38·39 断面

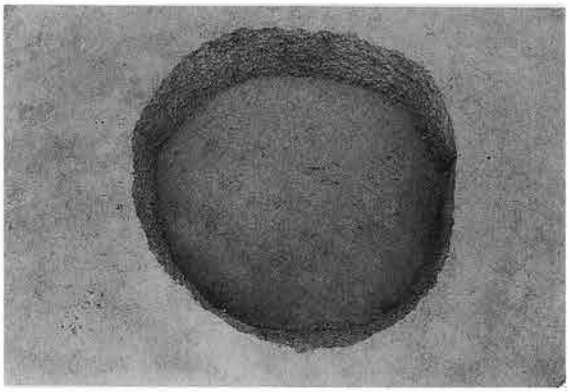
写真図版31　02SK34～39



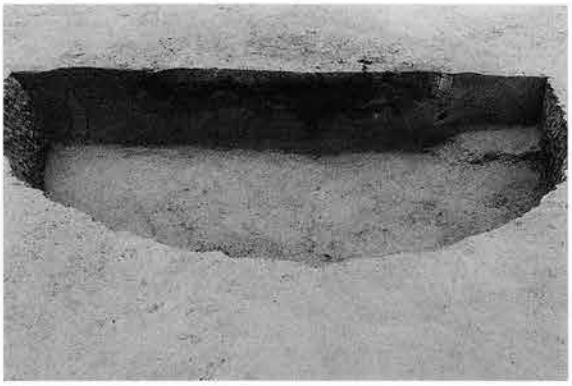
02SK40 完掘



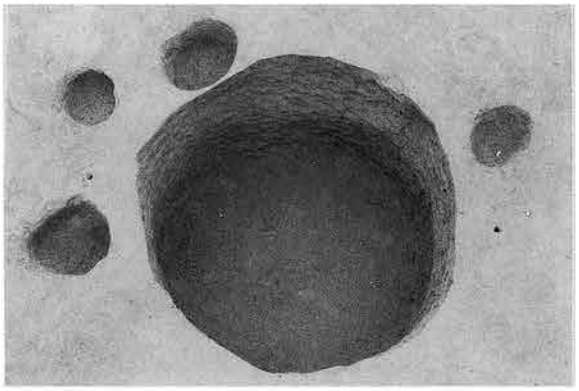
02SK40 断面



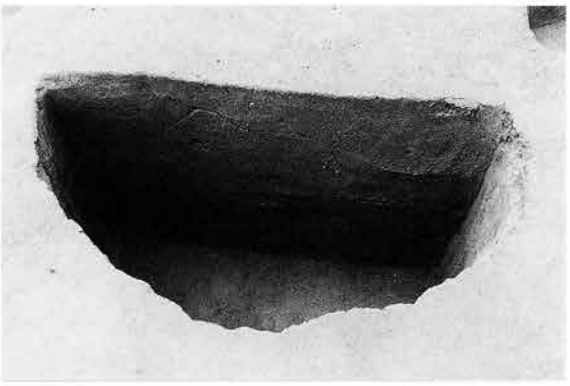
02SK41 完掘



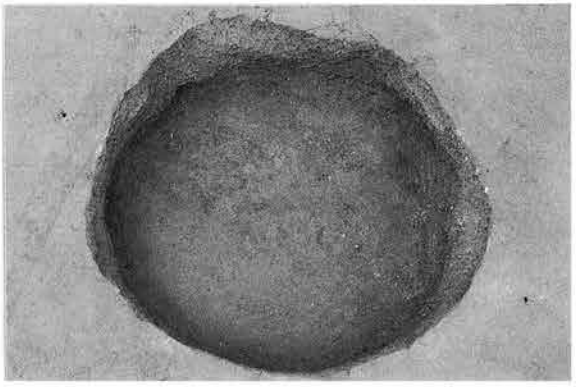
02SK41 断面



02SK42 完掘



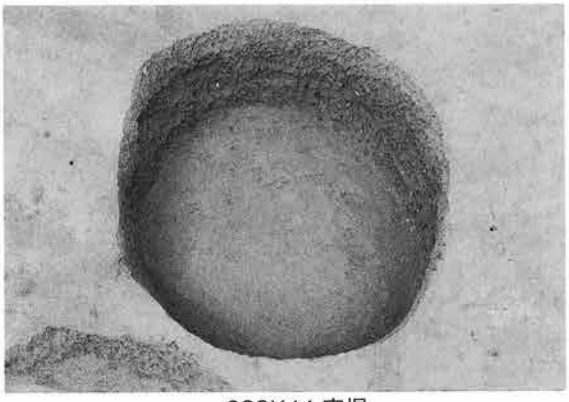
02SK42 断面



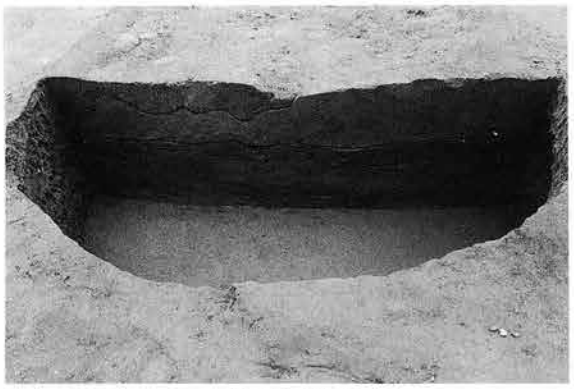
02SK43 完掘

02SK43 断面

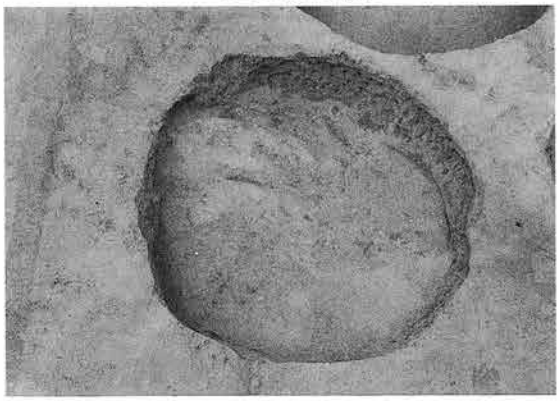
写真図版32　02SK40～43



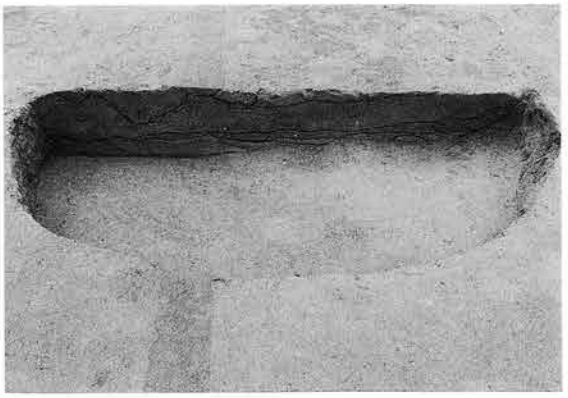
02SK44 完掘



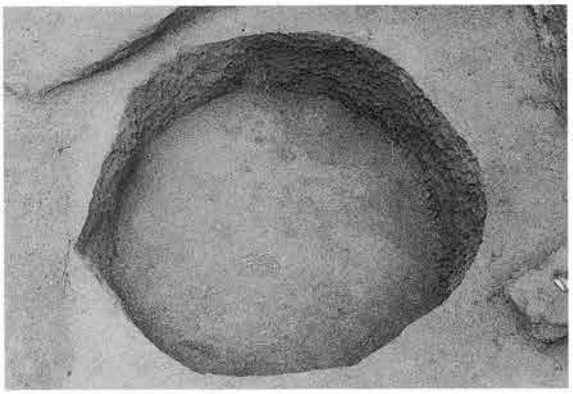
02SK44 断面



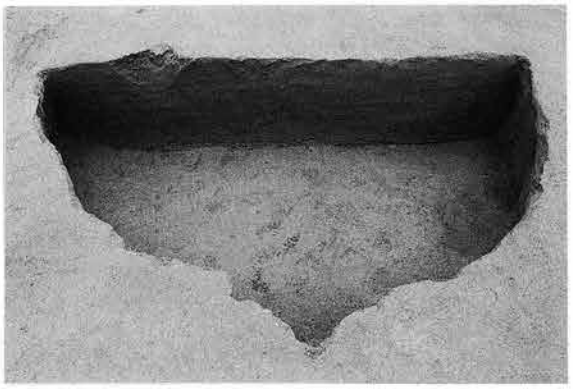
02SK45 完掘



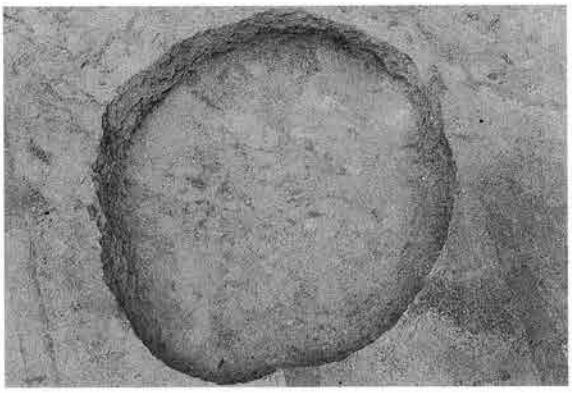
02SK45 断面



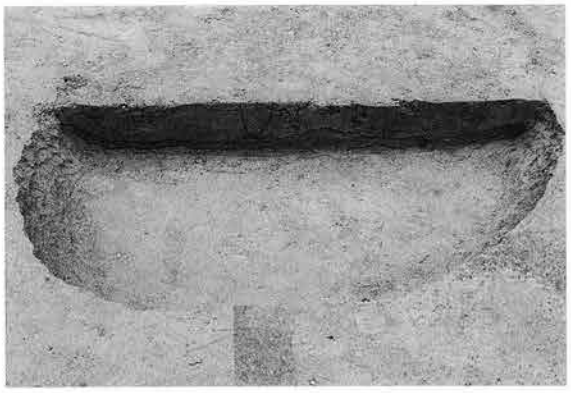
02SK46 完掘



02SK46 断面



02SK47 完掘



02SK47 断面

写真図版33　02SK44～47

02SK51 完掘

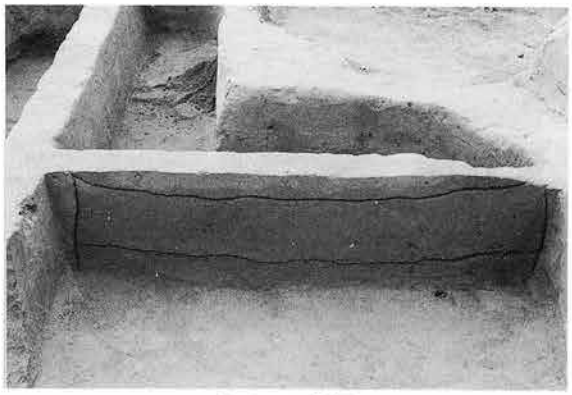
02SK51 断面

02SK52 完掘

02SK53 完掘

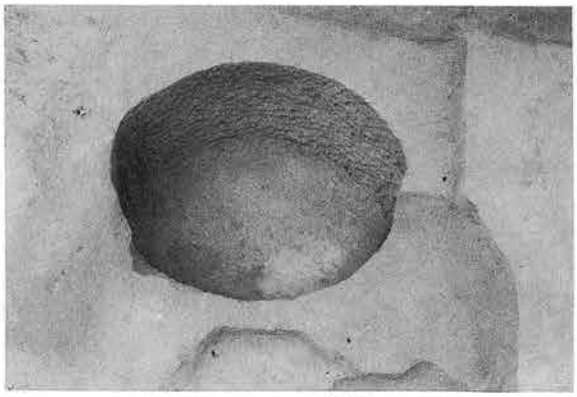
02SK52･53 断面

02SK54 完掘

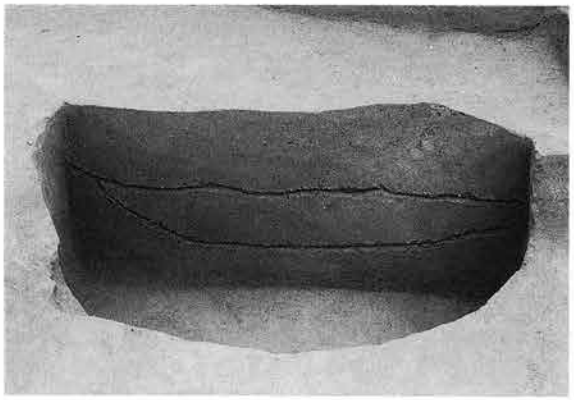


02SK54 断面

写真図版34　02SK51～54

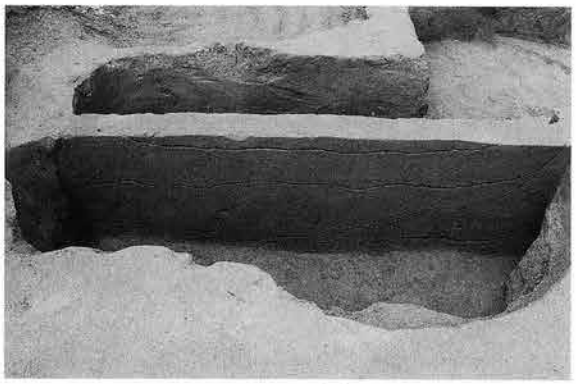


02SK55 完掘

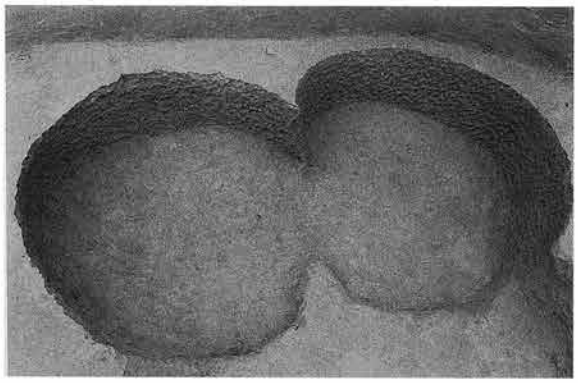


02SK55 断面

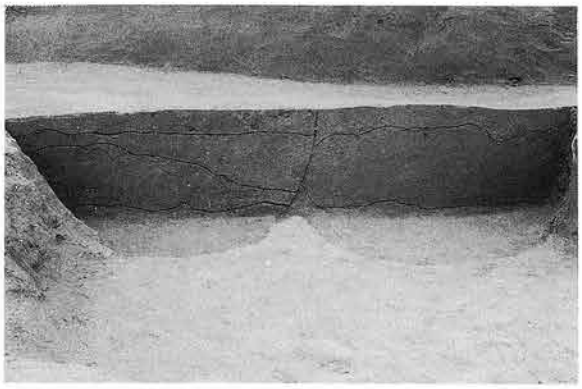
02SK56 完掘



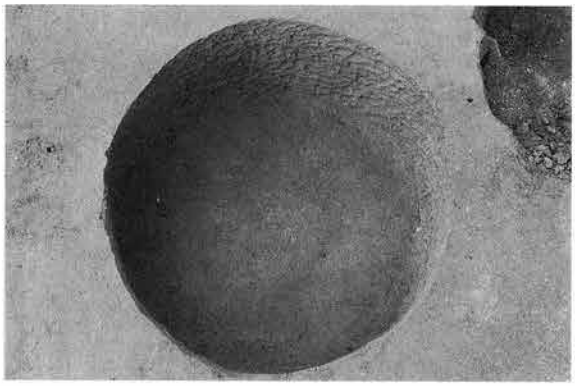
02SK56 断面



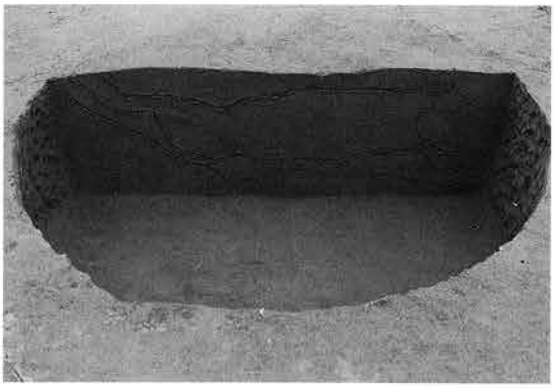
02SK57･58 完掘



02SK57･58 断面



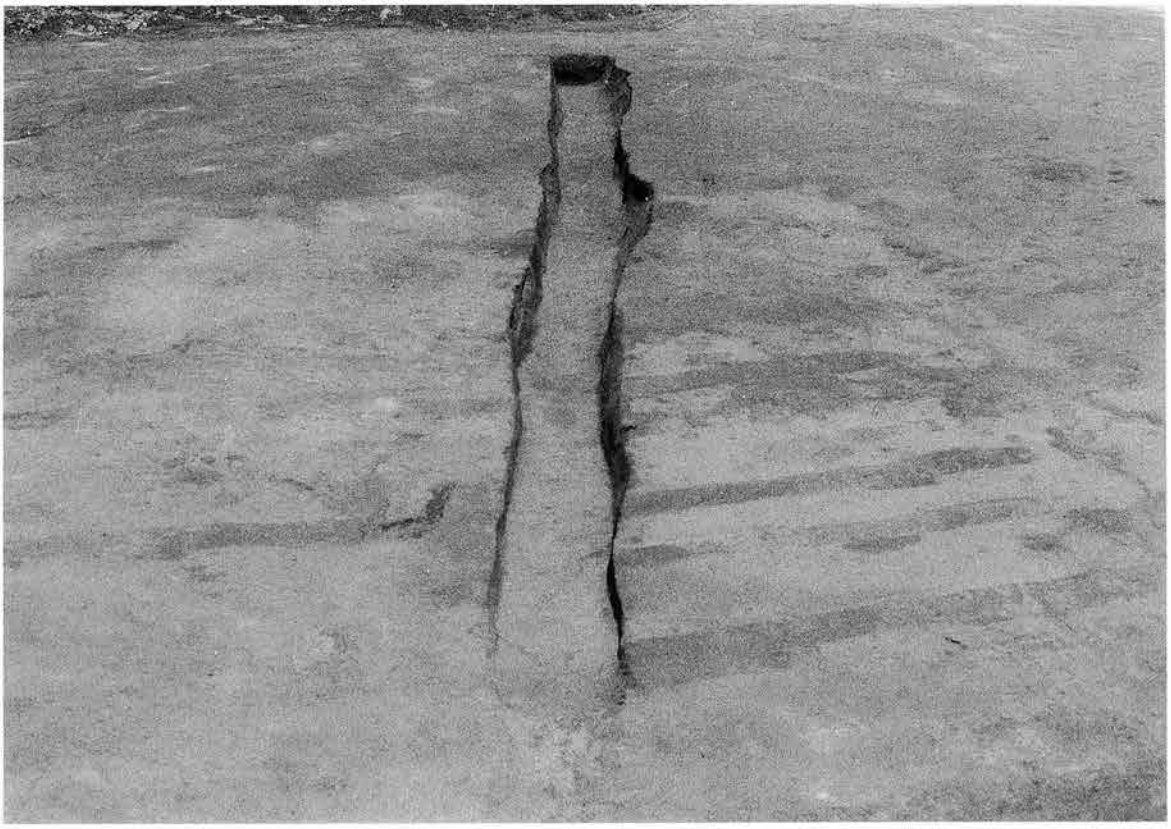
02SK59 完掘



02SK59 断面

写真図版35　02SK55～59

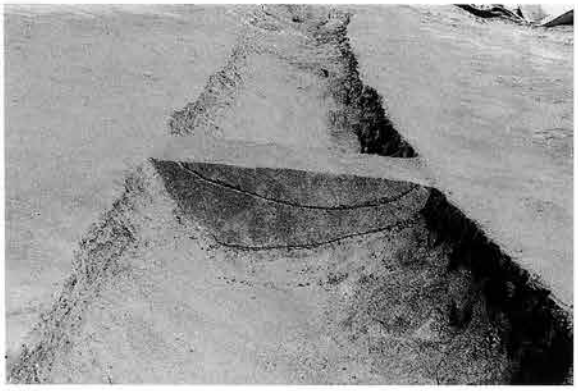
02SD5



02SD6

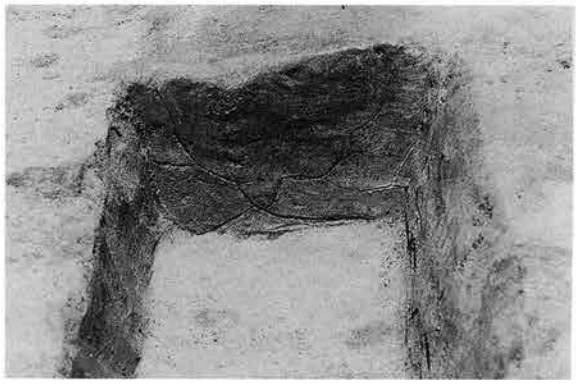
写真図版36　02SD５、SD６

02SD8



02SD5(A－B)断面

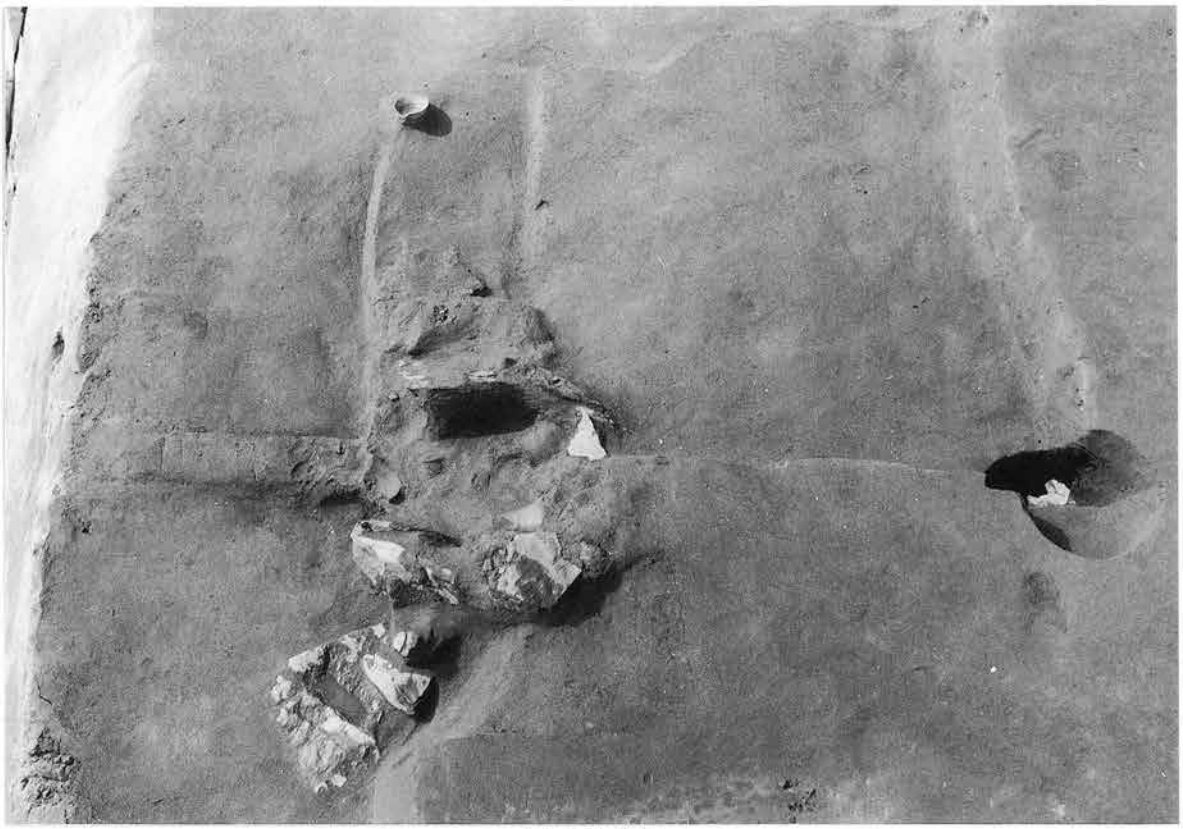
02SD6(A－B)断面



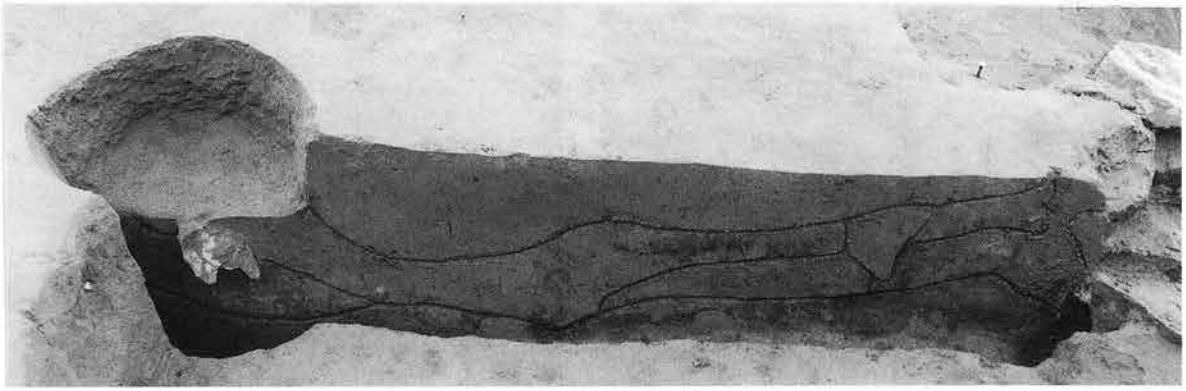
02SD6(C－D)断面

02SD8(A－B)断面

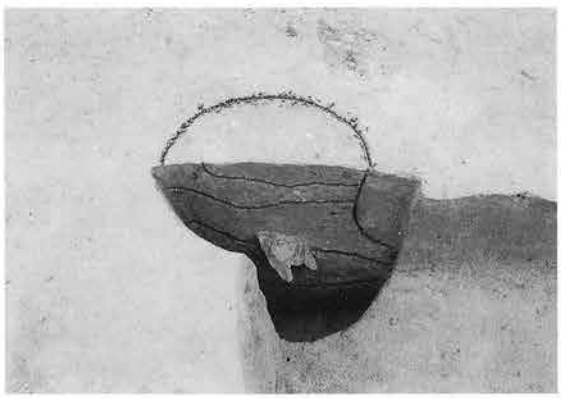
写真図版37　02SD５、SD６、SD８



B区 SI1 平面



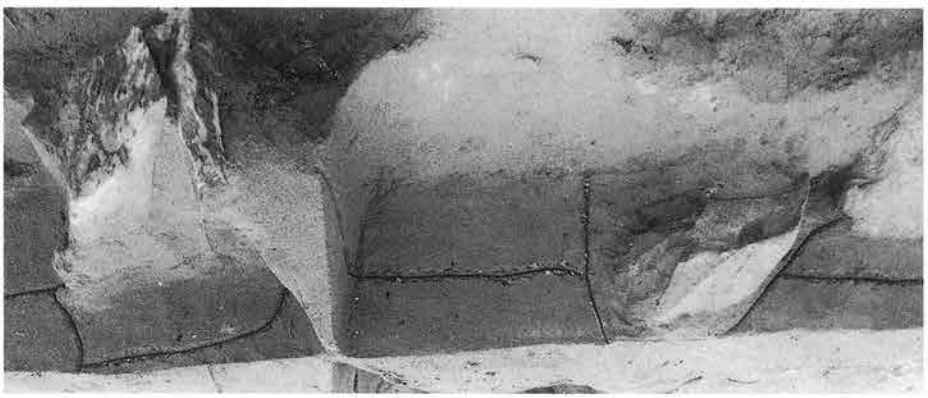
B区 SI1 カマド煙道部断面



B区 SI1 カマド煙出部断面

B区 SI1 完掘

写真図版38　B区SI１①



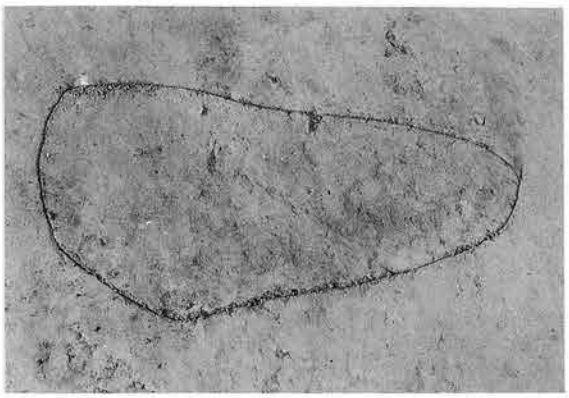
B区 SI1
カマド燃焼部
断面 C－D

B区 SI1
カマド燃焼部
断面 E－F

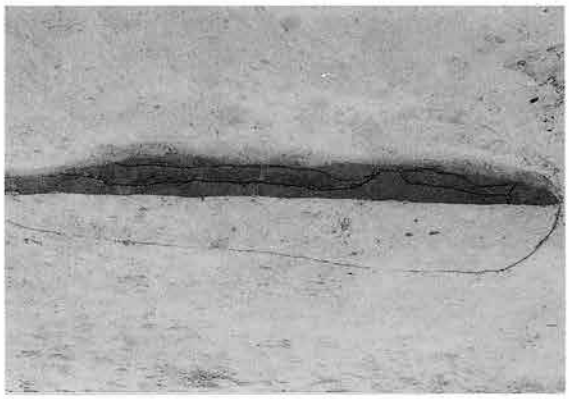
B区 SI1 カマド燃焼部断面 C－D

B区 SI1 カマド燃焼部断面 E－F

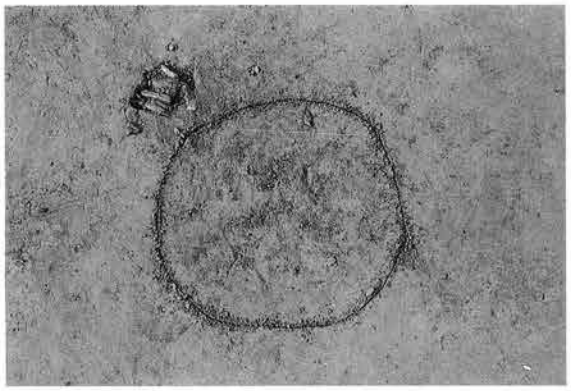
写真図版39　B区SI１②



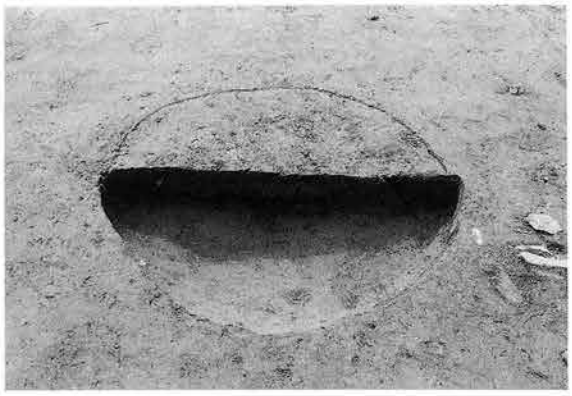
B区 焼土1平面



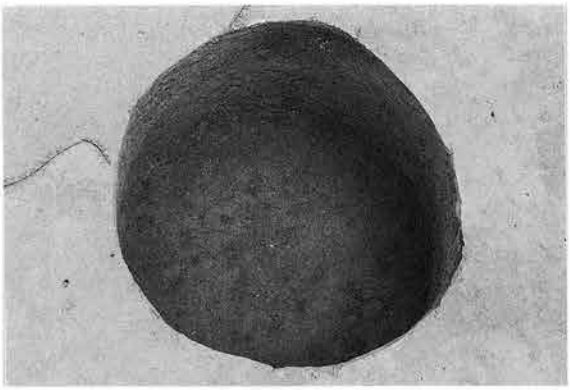
B区 焼土1断面



B区 焼土2平面

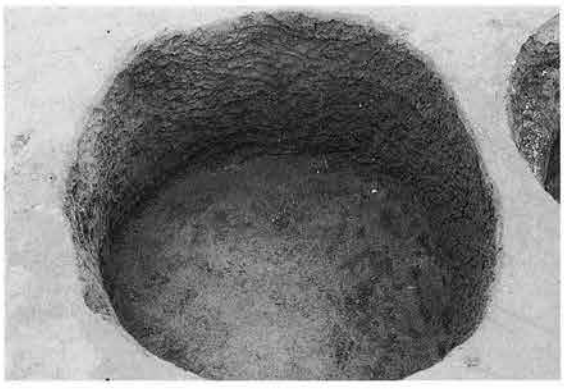


B区 焼土2断面

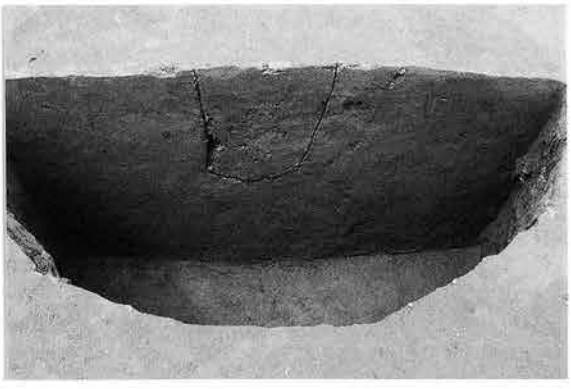


B区 SK1 完掘

B区 SK1 断面

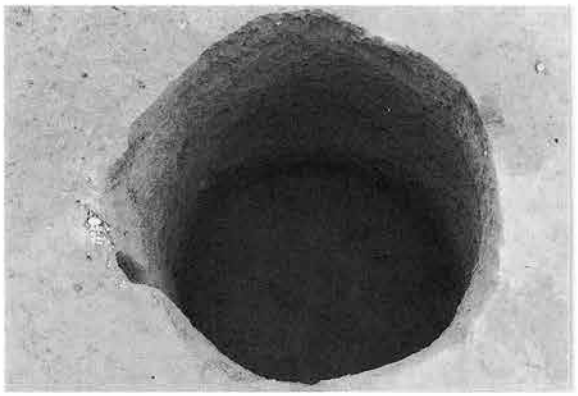


B区 SK2 完掘

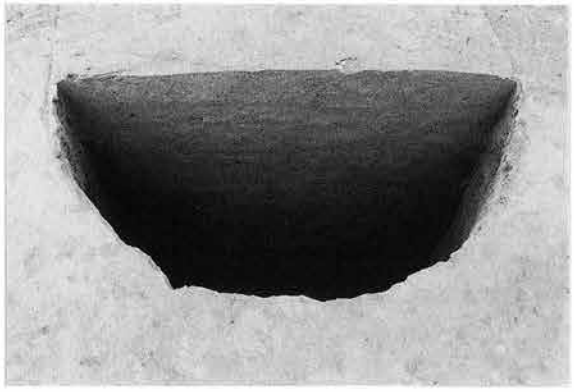


B区 SK2 断面

写真図版40　B区焼土１・２、B区SK１・２

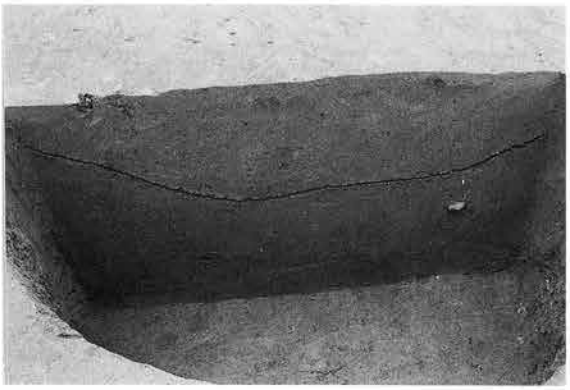


B区 SK3 完掘

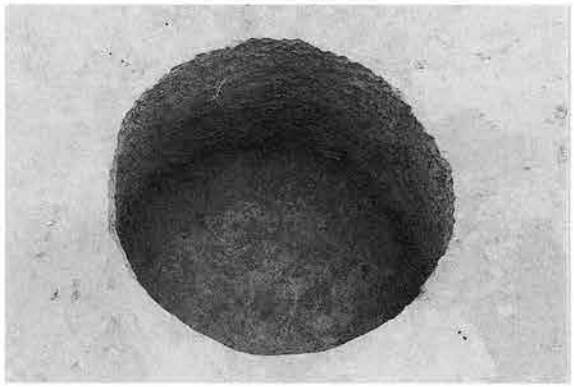


B区 SK3 断面

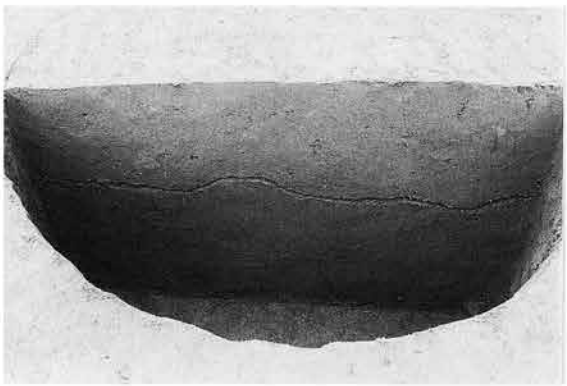
B区 SK4 完掘



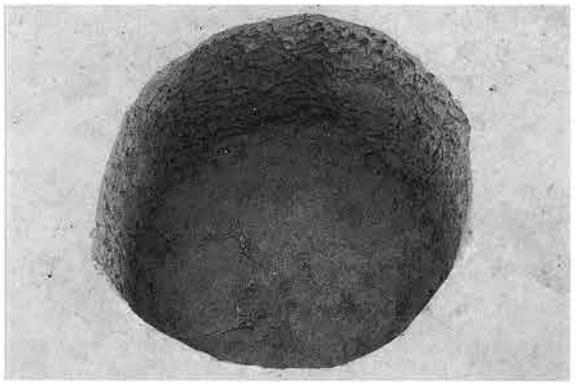
B区 SK4 断面



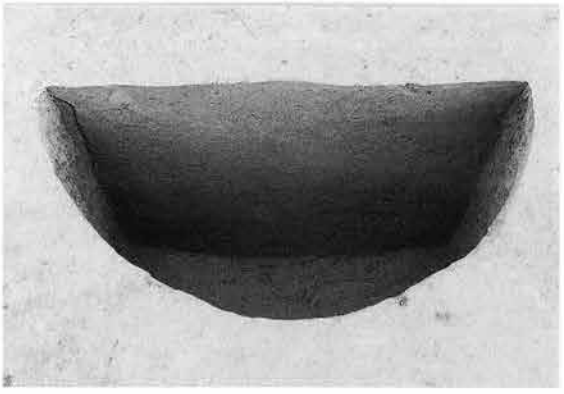
B区 SK5 完掘



B区 SK5 断面

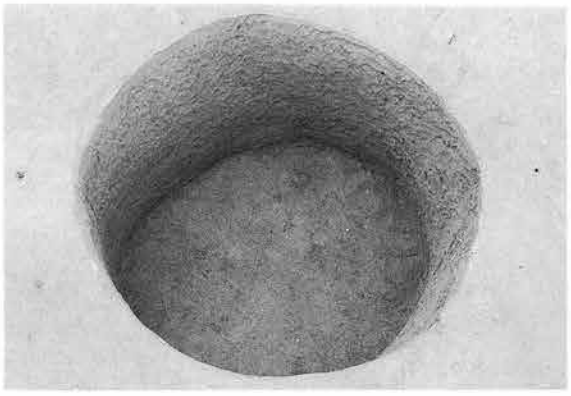


B区 SK6 完掘

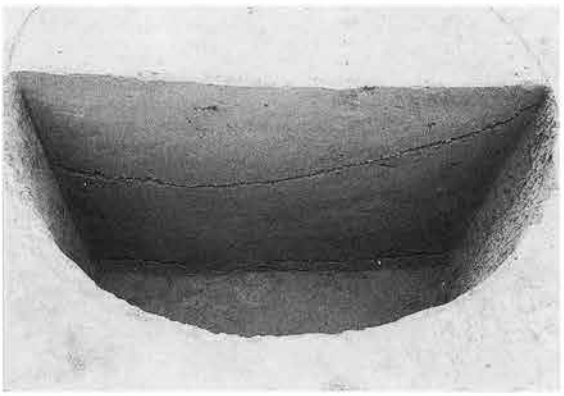


B区 SK6 断面

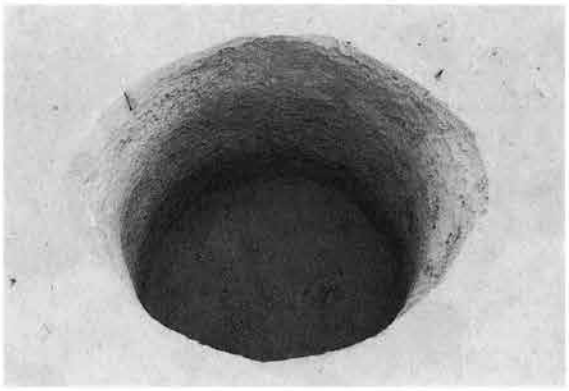
写真図版41　B区SK３～６



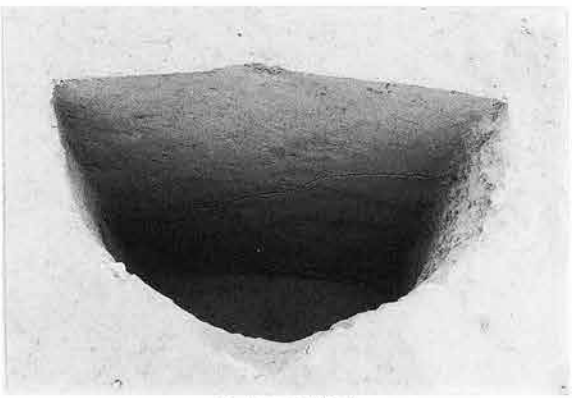
B区 SK7 完掘



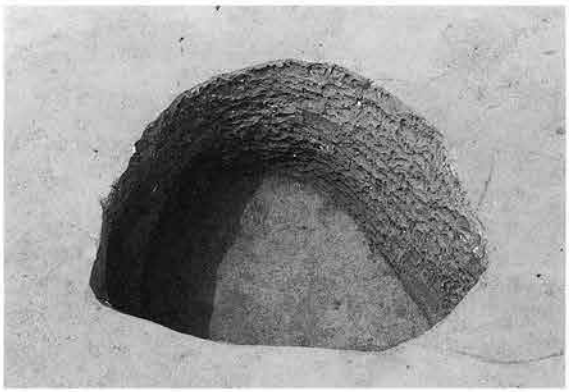
B区 SK7 断面



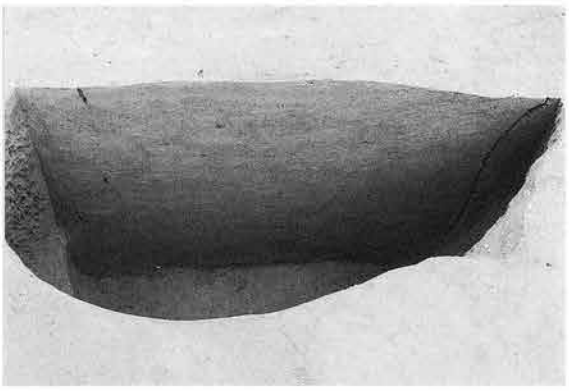
B区 SK8 完掘



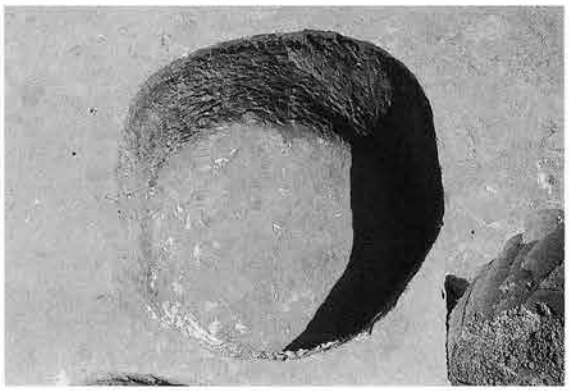
B区 SK8 断面



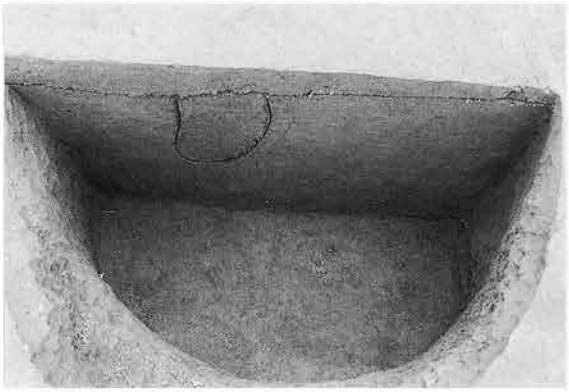
B区 SK9 完掘



B区 SK9 断面

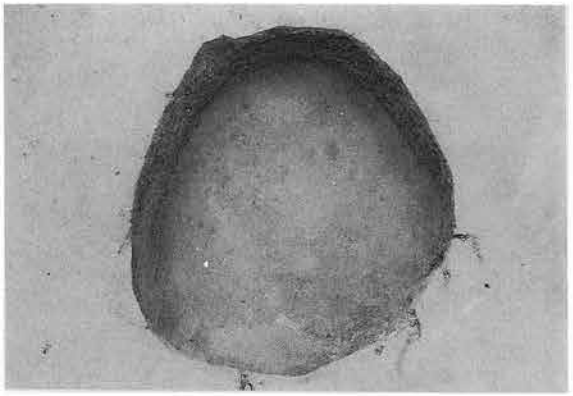


B区 SK10 完掘

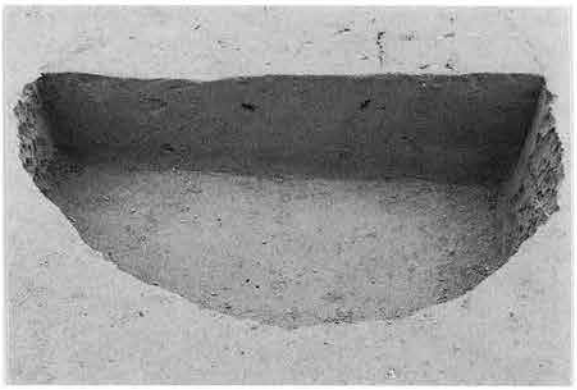


B区 SK10 断面

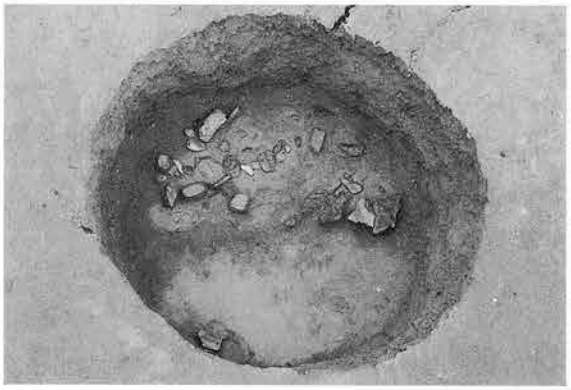
写真図版42　B区SK７～10



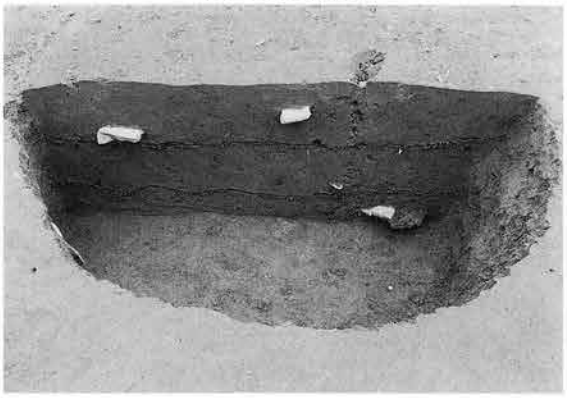
B区 SK11 完掘



B区 SK11 断面

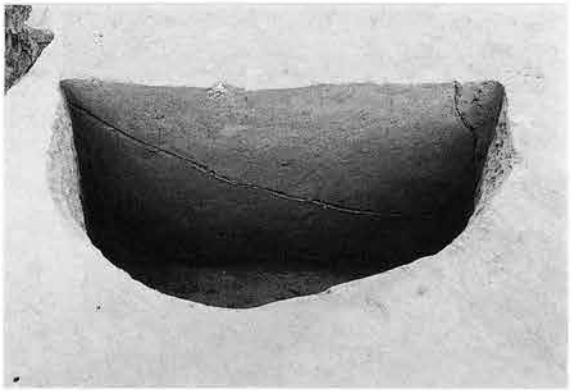


B区 SK12 完掘

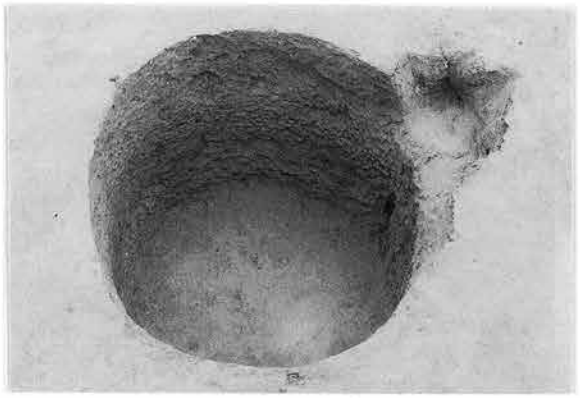


B区 SK12 断面

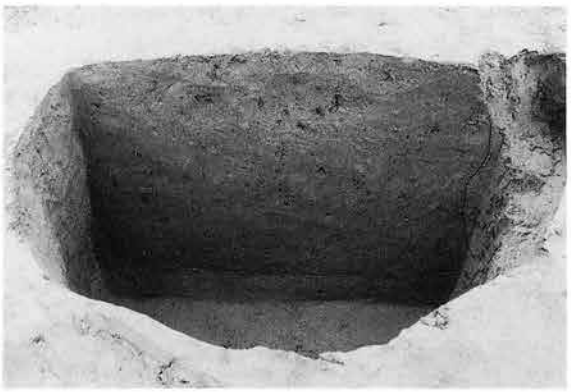
B区 SK13 完掘



B区 SK13 断面



B区 SK14 完掘

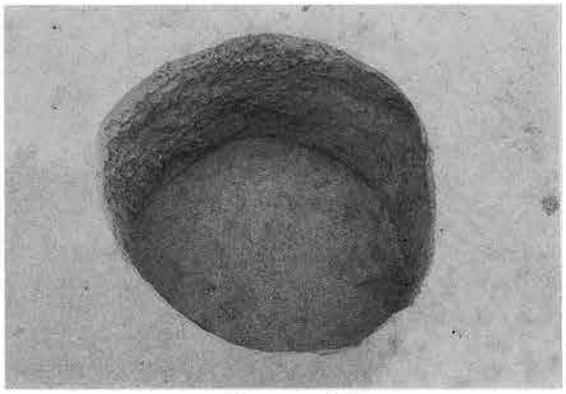


B区 SK14 断面

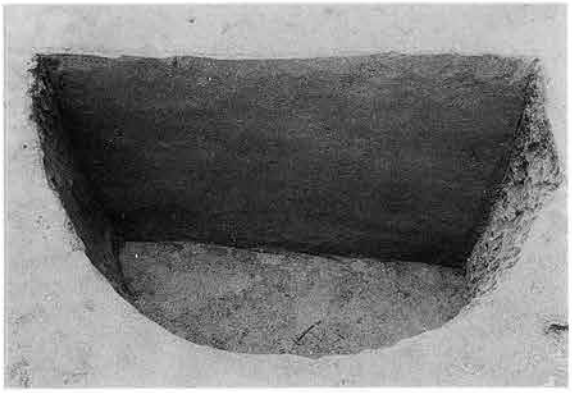
写真図版43　B区SK11～14

B区 SK15 完掘

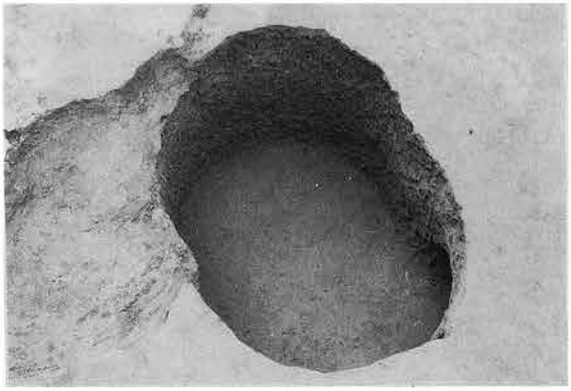
B区 SK15 断面



B区 SK16 完掘

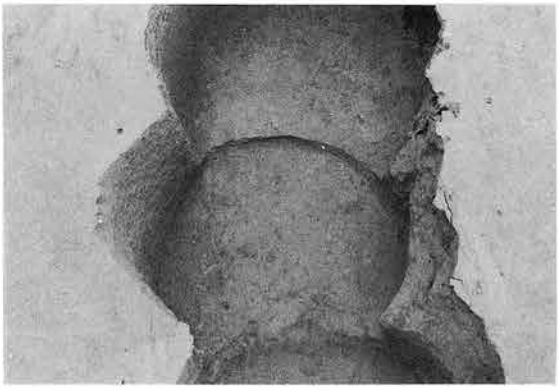


B区 SK16 断面



B区 SK18 完掘

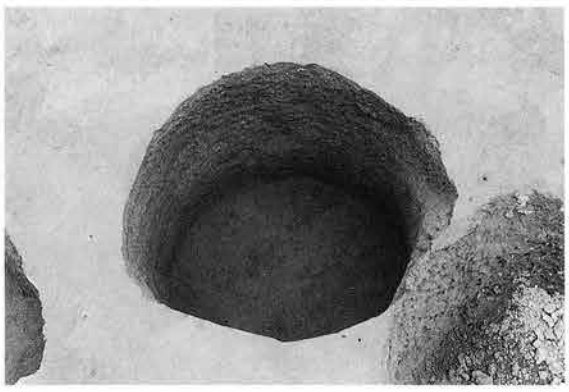
B区 SK18 断面



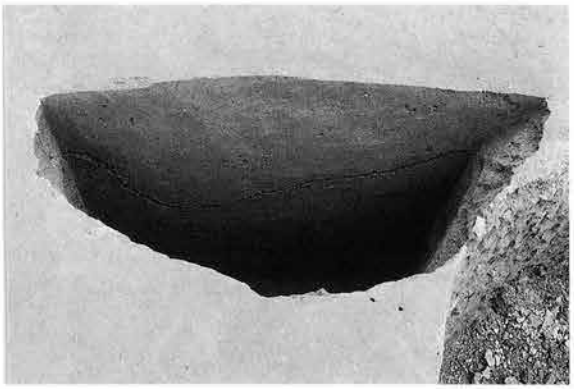
B区 SK19 完掘

B区 SK19 断面

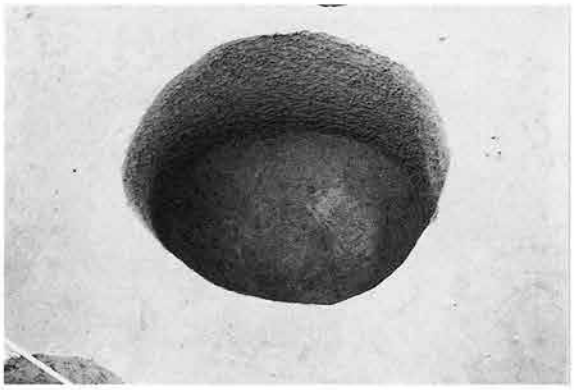
写真図版44　B区SK15～19



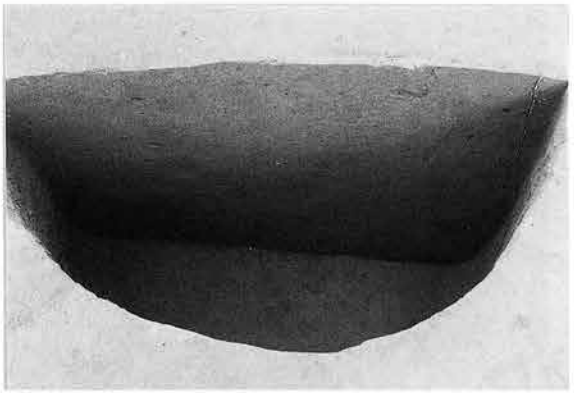
B区 SK20 完掘



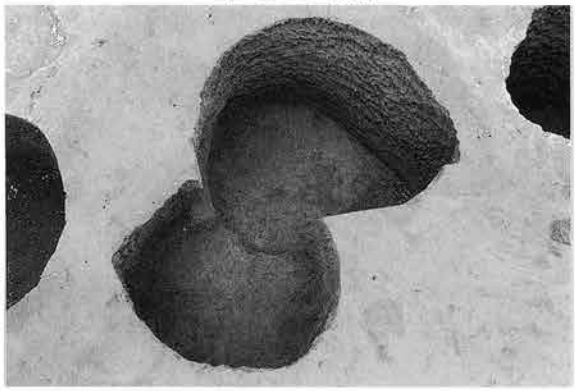
B区 SK20 断面



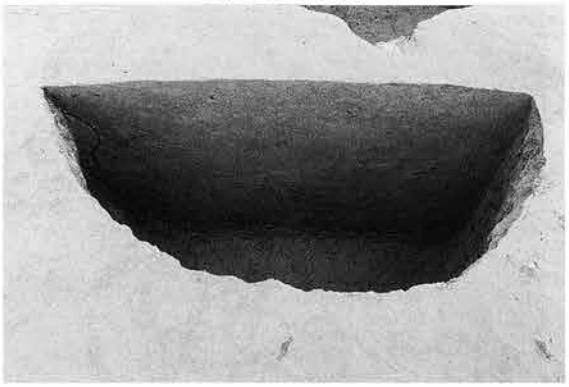
B区 SK21 完掘



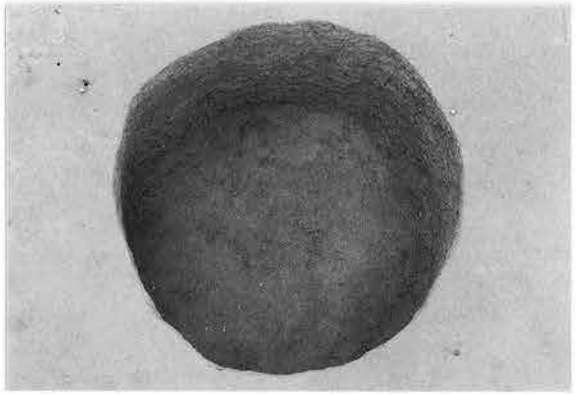
B区 SK21 断面



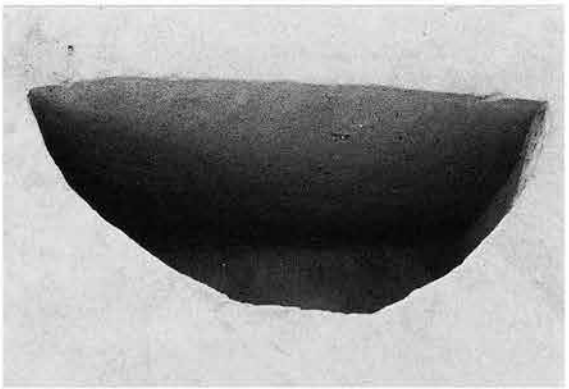
B区 SK22 完掘



B区 SK22 断面

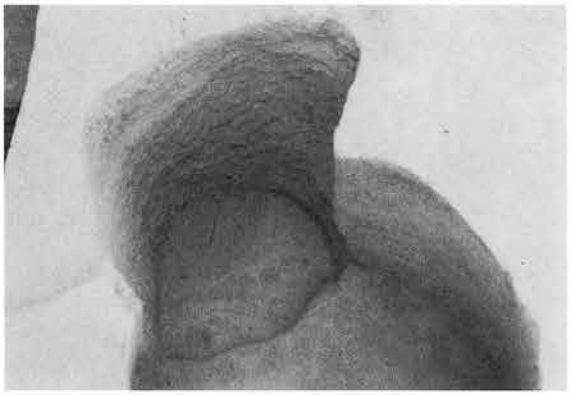


B区 SK24 完掘

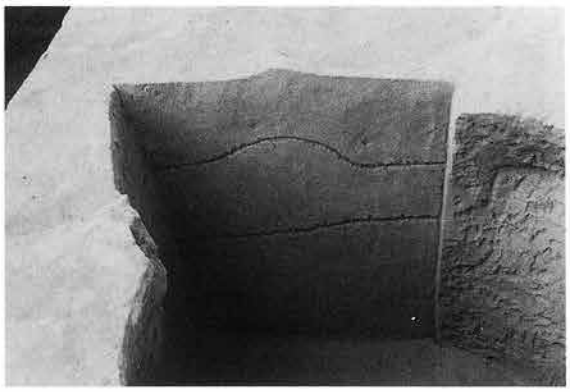


B区 SK24 断面

写真図版45　B区SK20～22・24

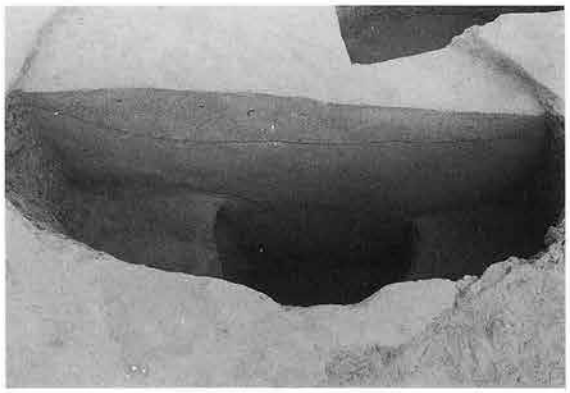


B区 SK25 完掘

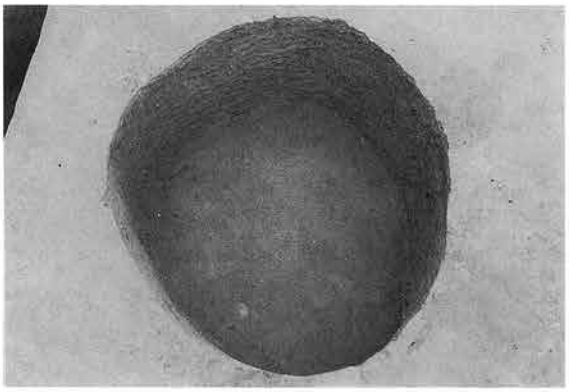


B区 SK25 断面

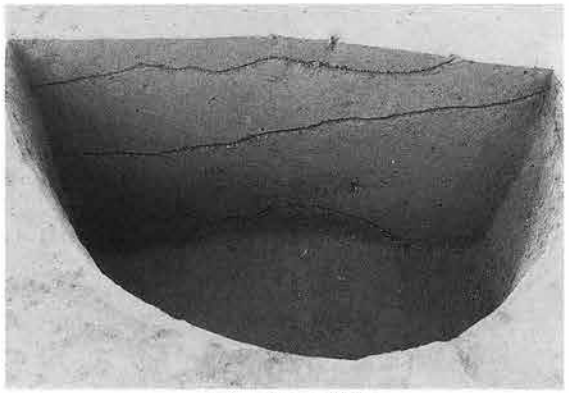
B区 SK26 完掘



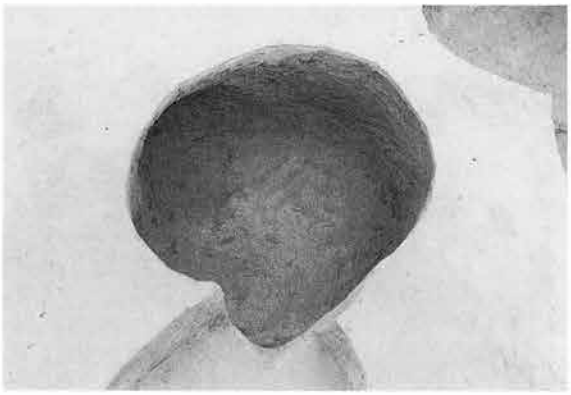
B区 SK26 断面



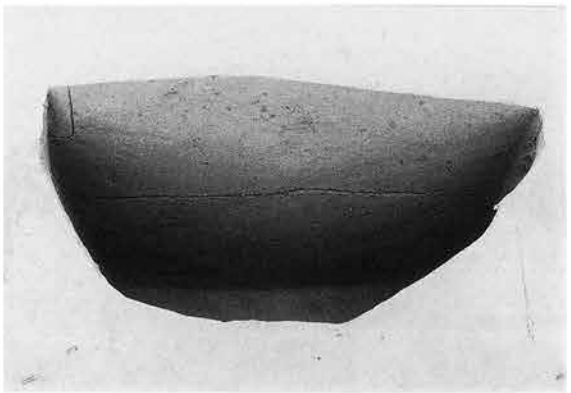
B区 SK27 完掘



B区 SK27 断面

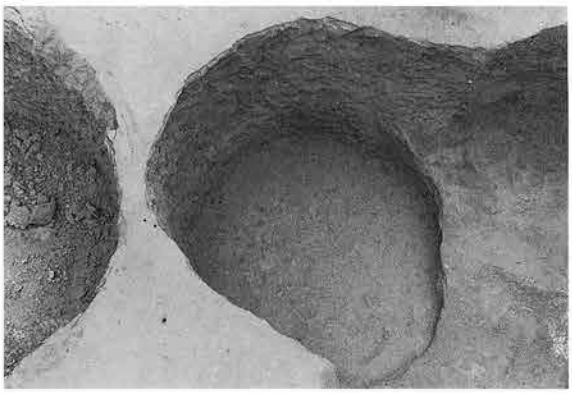


B区 SK28 完掘

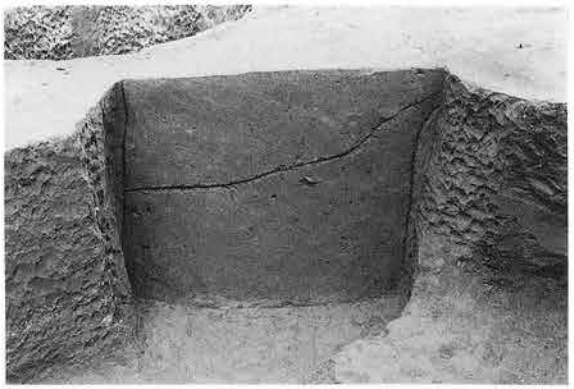


B区 SK28 断面

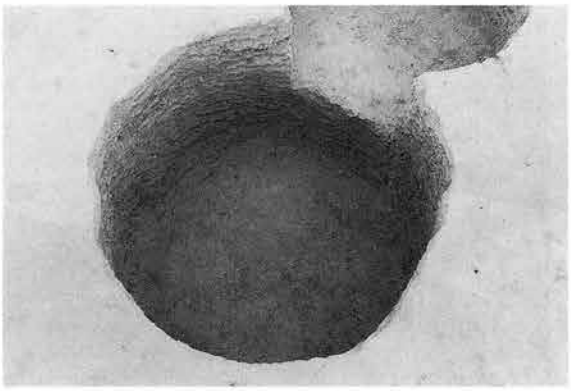
写真図版46　B区SK25～28



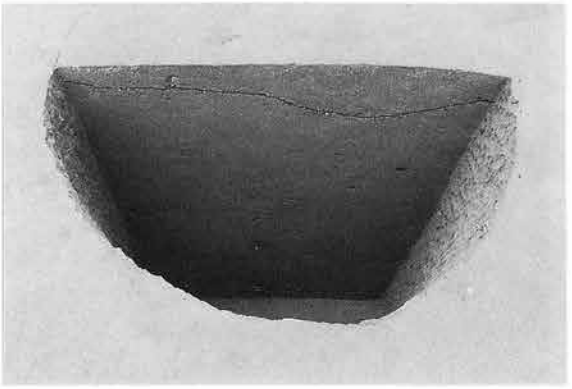
B区 SK29 完掘



B区 SK29 断面

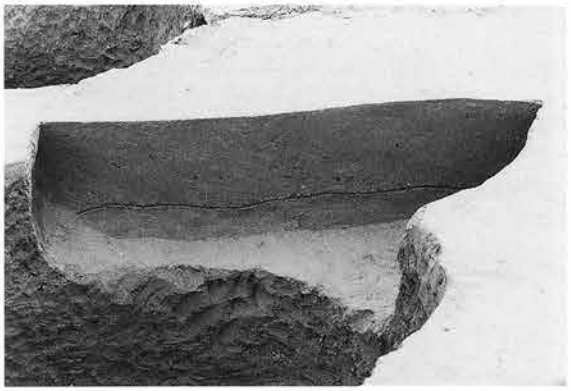


B区 SK30 完掘

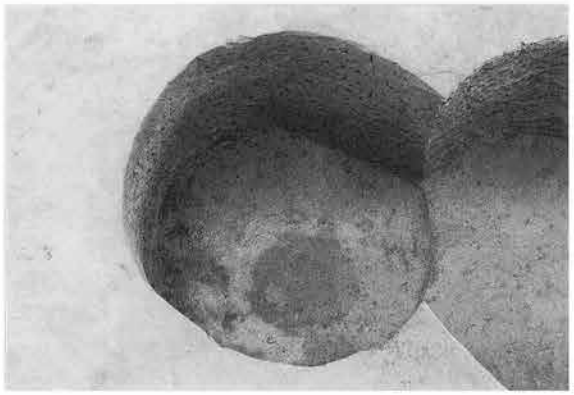


B区 SK30 断面

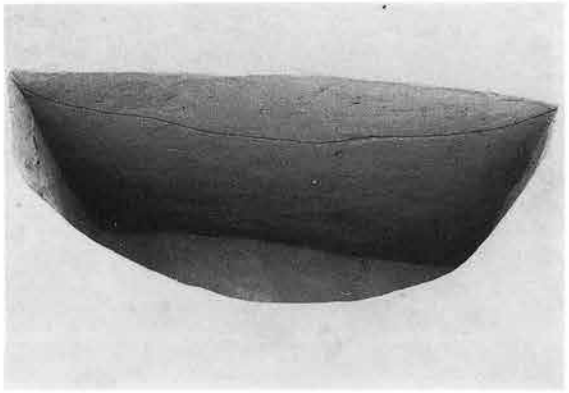
B区 SK31 完掘



B区 SK31 断面



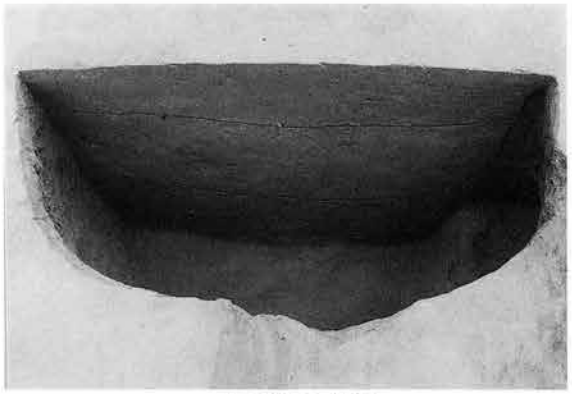
B区 SK32 完掘



B区 SK32 断面

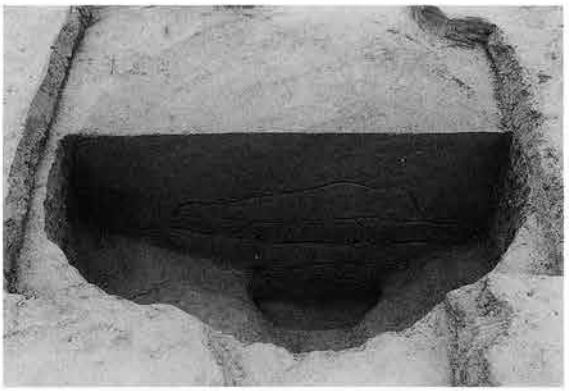
写真図版47　B区SK29～32

B区 SK33 完掘

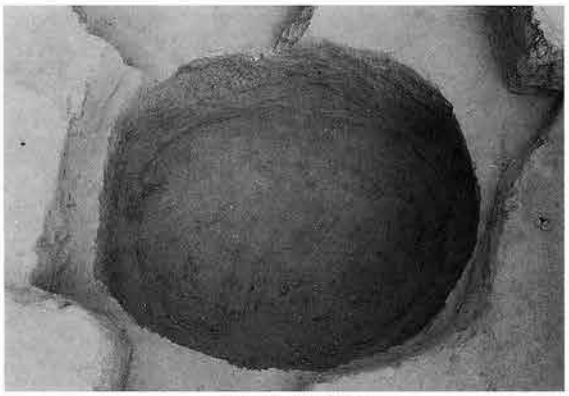


B区 SK33 断面

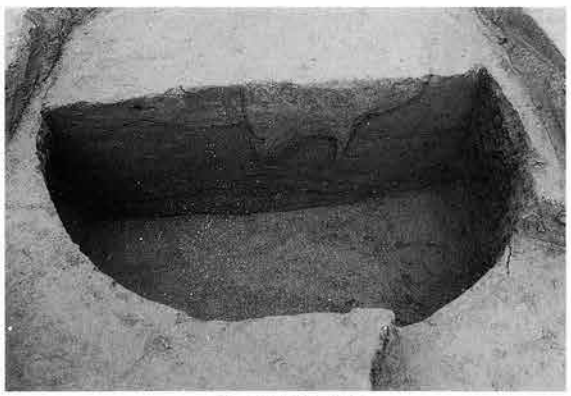
B区 SK40 完掘



B区 SK40 断面

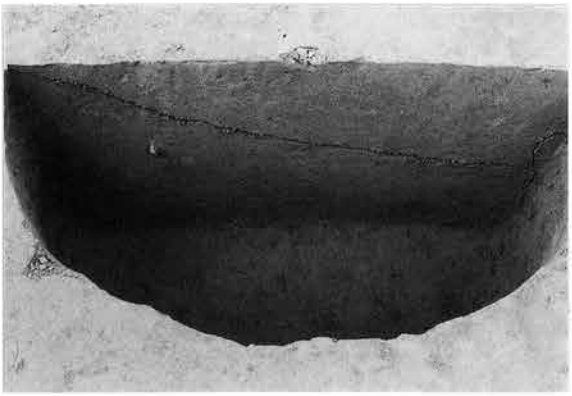


B区 SK41 完掘



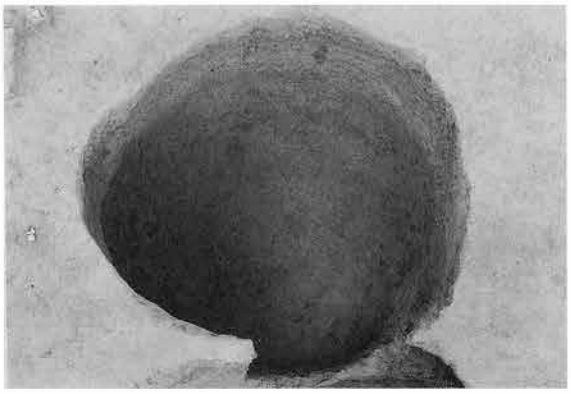
B区 SK41 断面

B区 SK42 完掘



B区 SK42 断面

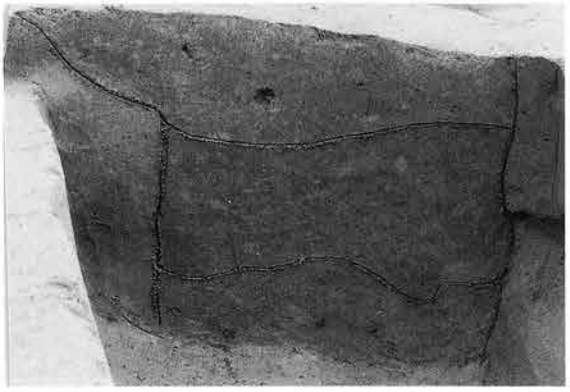
写真図版48　B区SK33・40～42



B区 SK43 完掘

B区 SK43 断面

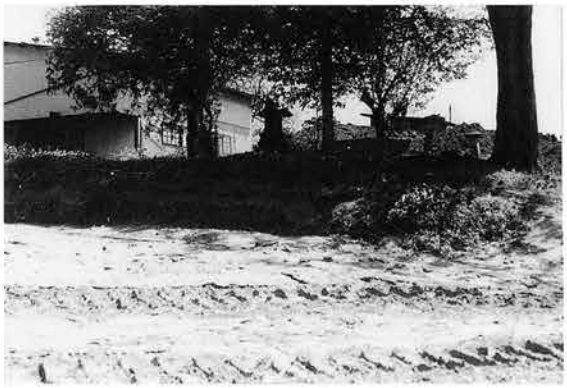
B区 SK44 完掘



B区 SK44 断面

B区 SK45 完掘

B区 SK45 断面

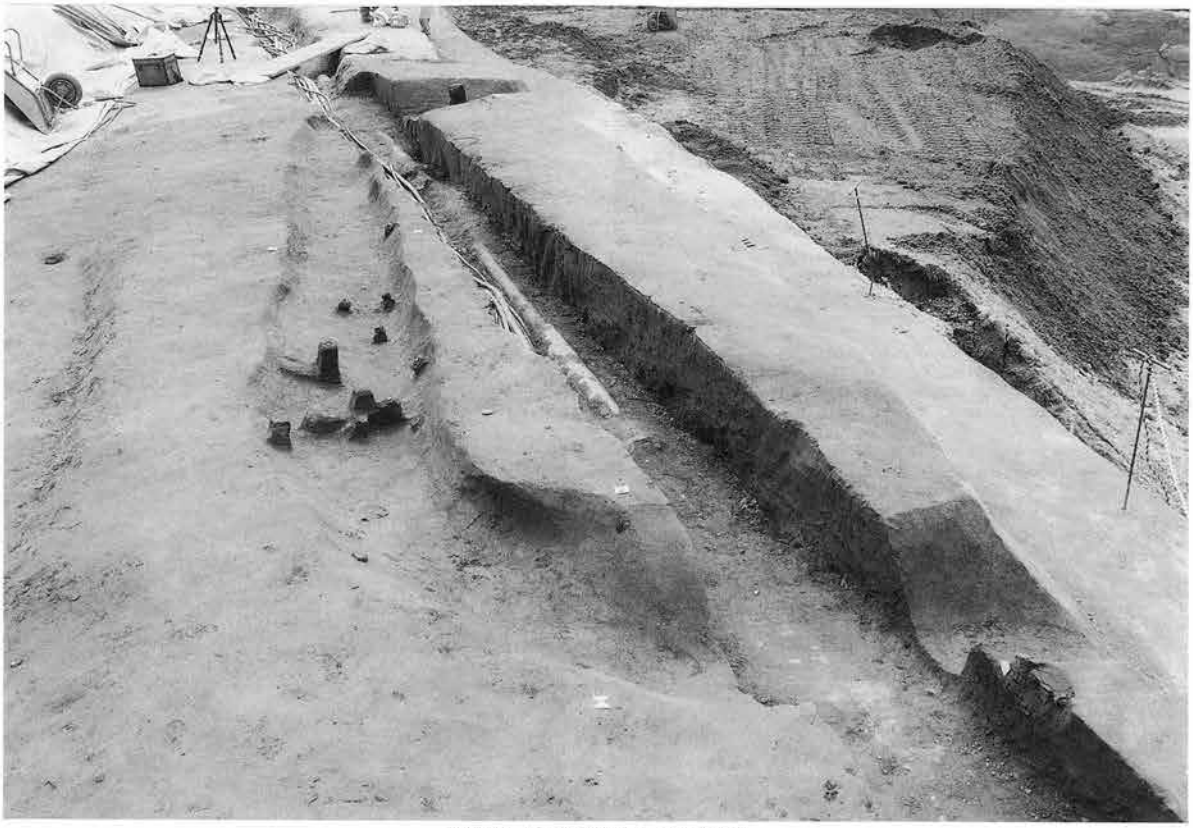


B区 清悦社遠景(西から)

B区 清悦社近景(西から)

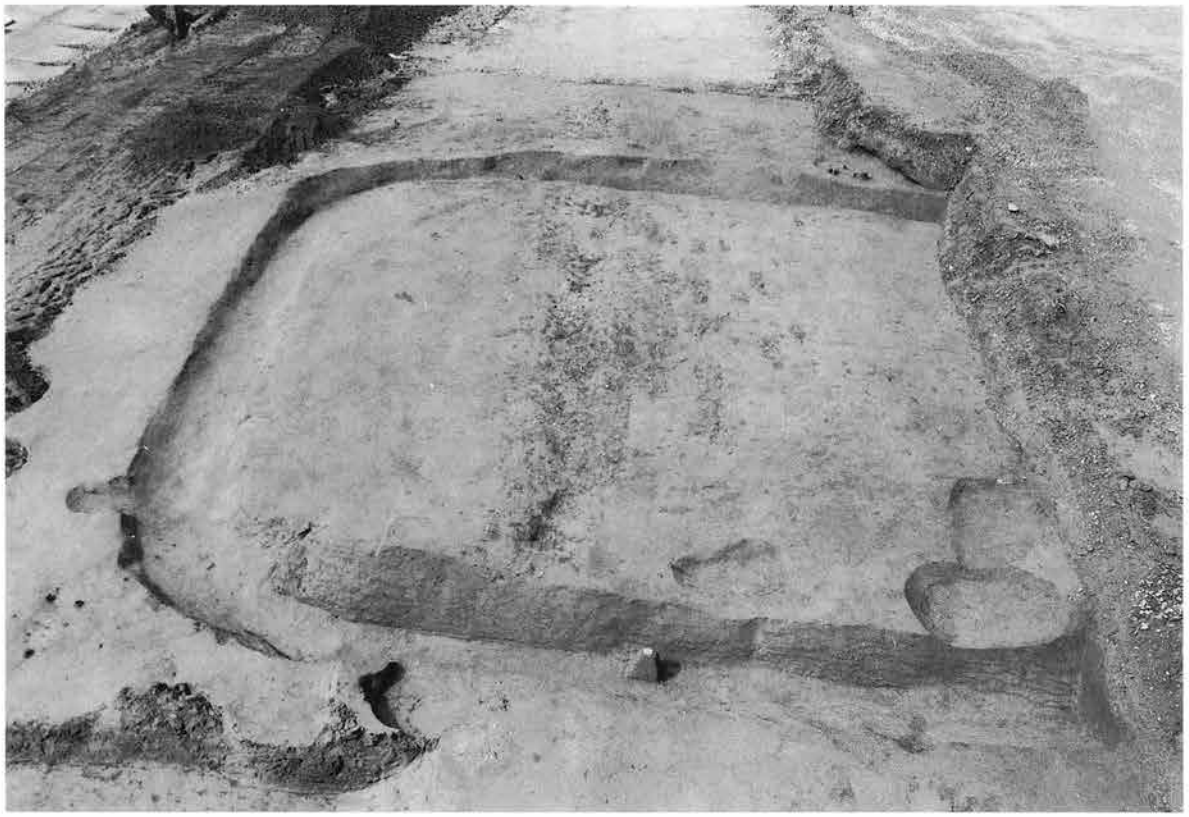
写真図版49　B区SK43～45

検出(平成16年度分)

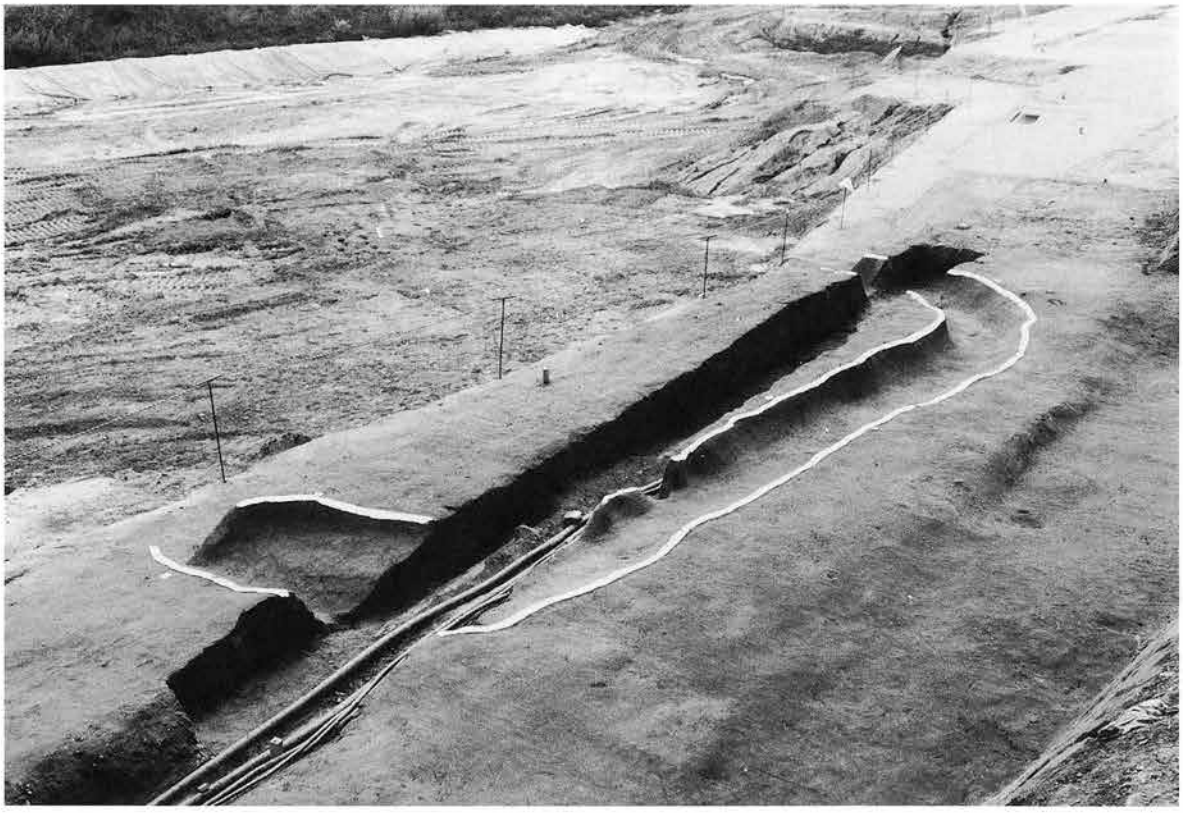


遺物出土状況(平成16年度分)

写真図版50　B区SD１①

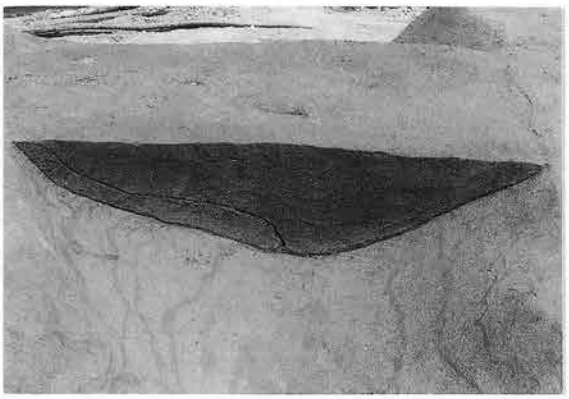


完掘(平成15年分)

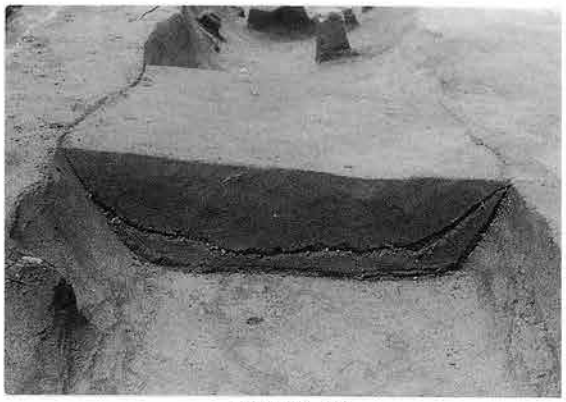


完掘(平成16年分)

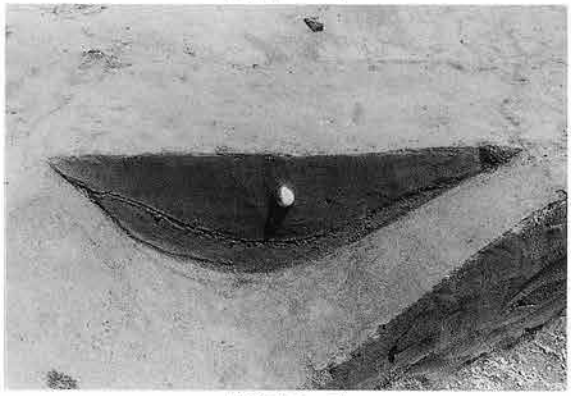
写真図版51　B区SD１②



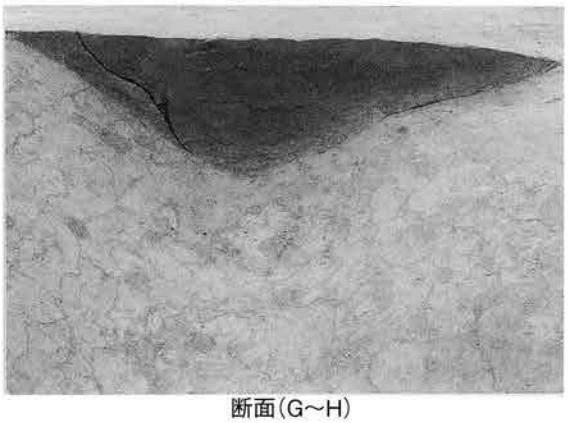
断面(A～B)



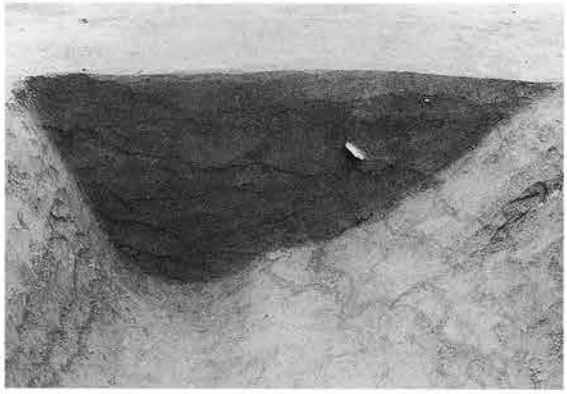
断面(C～D)



断面(E～F)



断面(G～H)



断面(I～J)

遺物出土状況(平成16年)

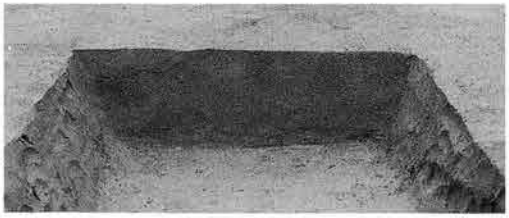
遺物出土状況(平成16年)

遺物出土状況(平成16年)

写真図版52　B区SD１③

B区 SD2

B区SD3

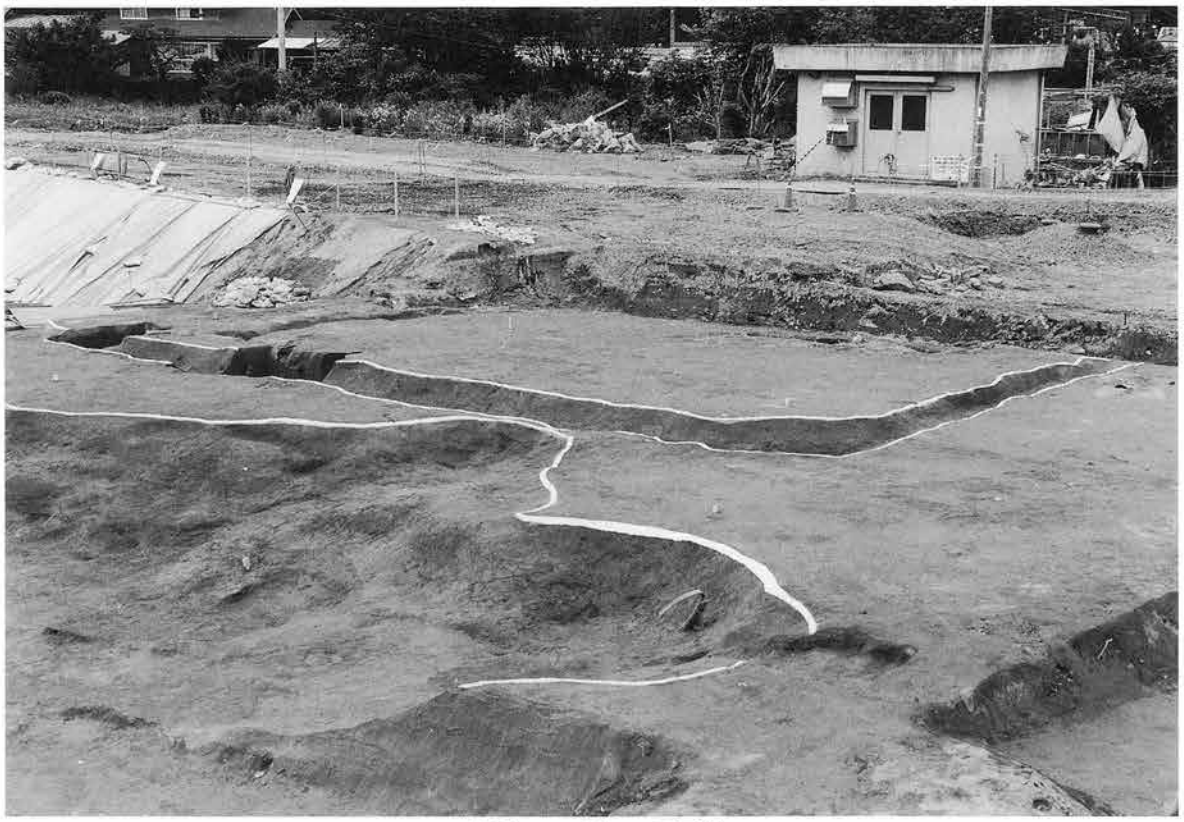


B区 SD2断面(A～B)

B区 SD3断面(A～B)

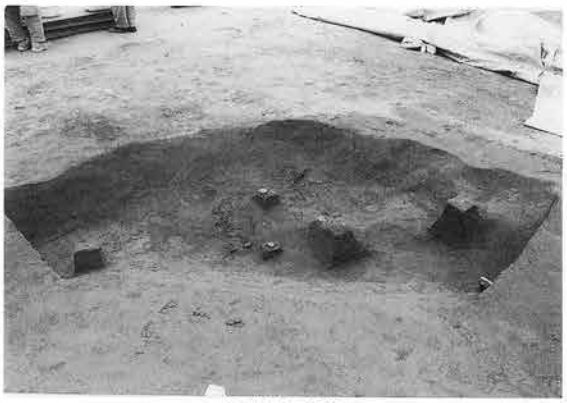
写真図版53　B区SD２、SD３

完掘(SE→)

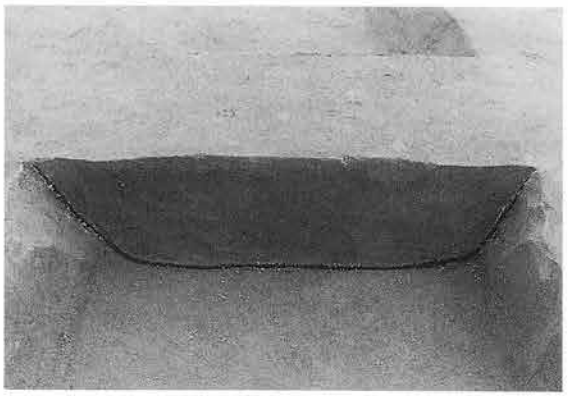


完掘(NE→手前はB区沢跡)

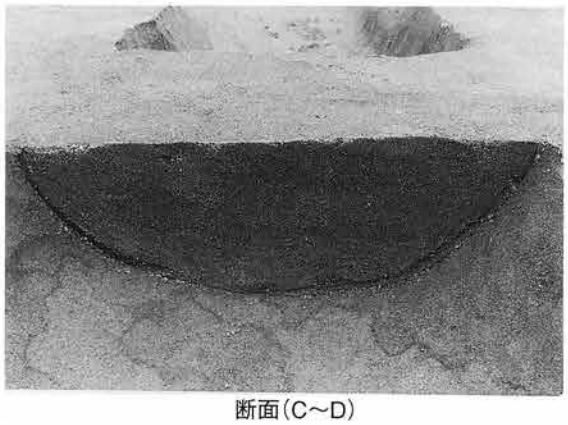
写真図版54　B区SD４①



遺物出土状況

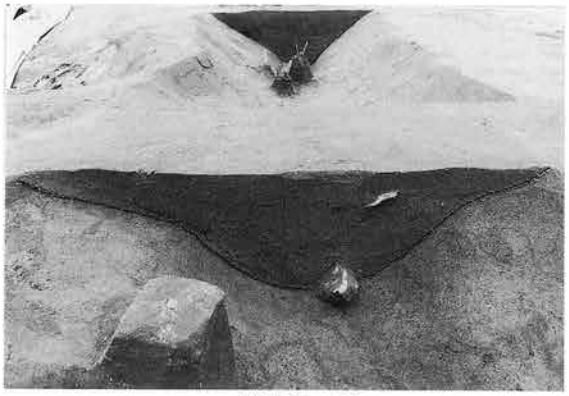


断面(A～B)



断面(C～D)

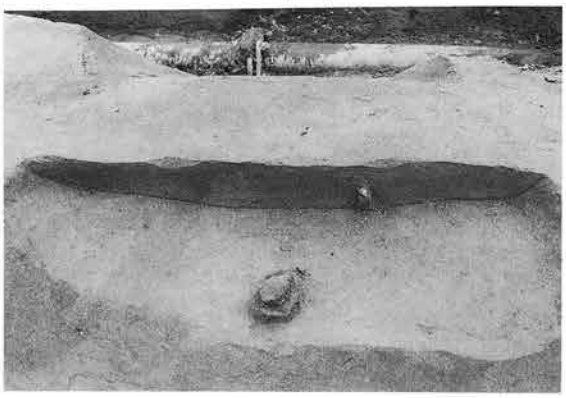
断面(B～F)



断面(G～H)

断面(I～J)

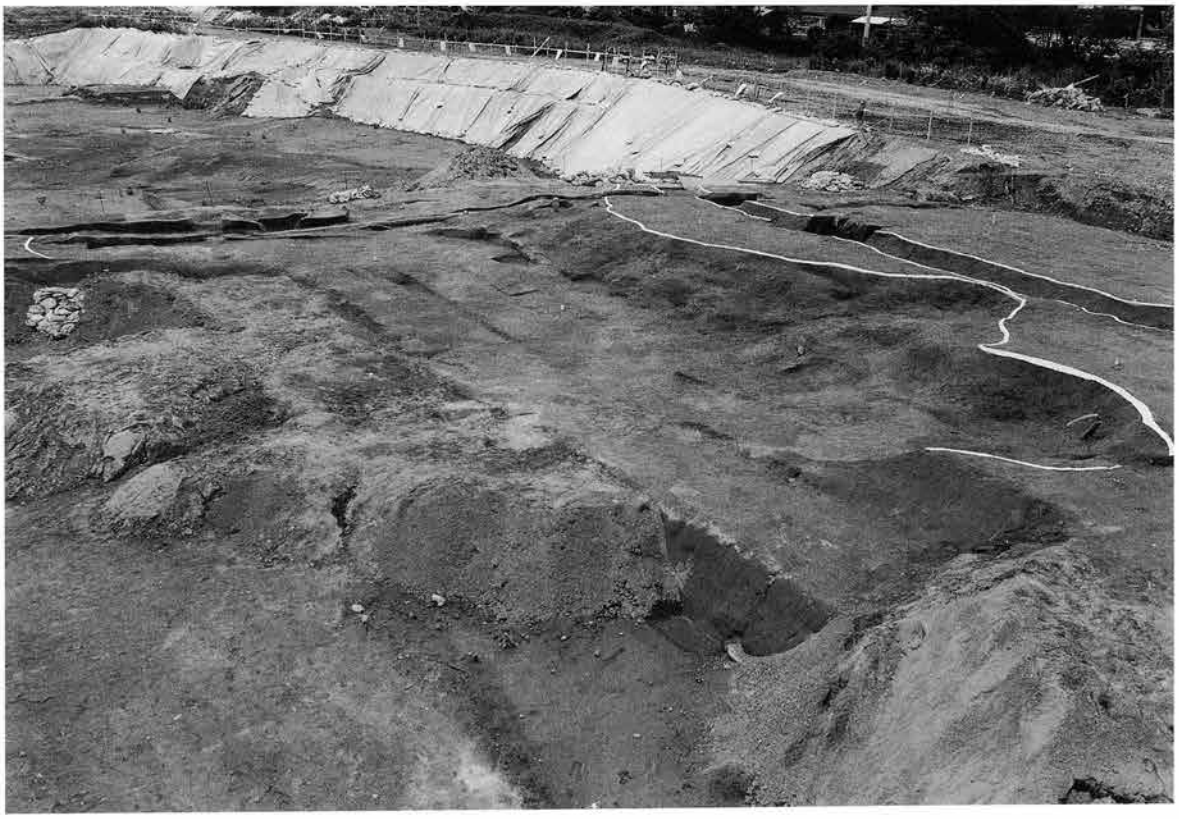
断面(K～L)



断面(M～N)

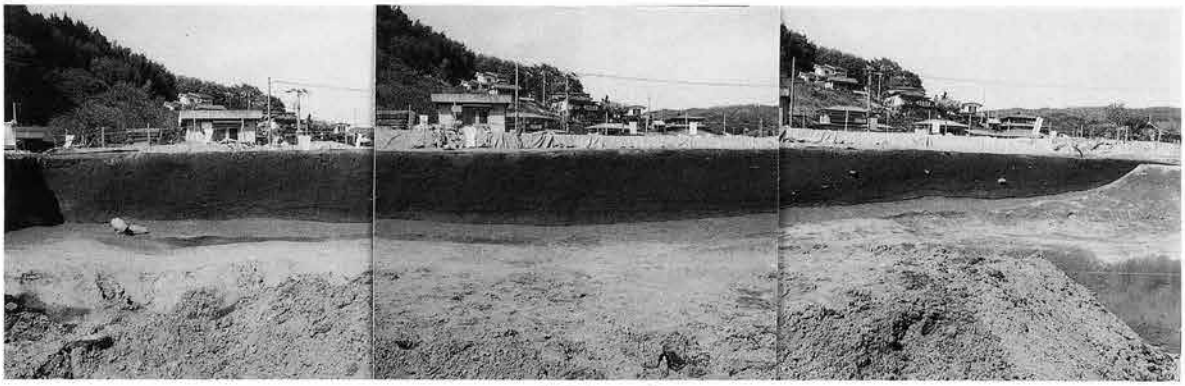
写真図版55　B区SD４②

全景(平成15年分)



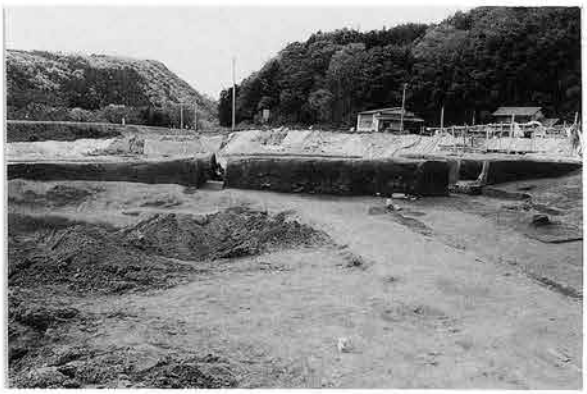
全景(平成16年分)

写真図版56　B区沢跡①



断面(A～B)

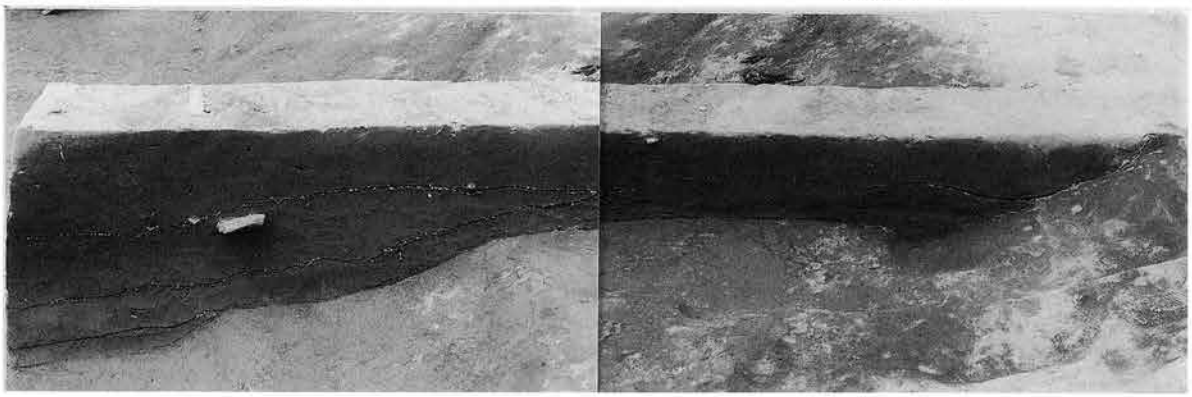
断面(A～B)



断面(C～D)

断面(C～D)

断面(C～D)

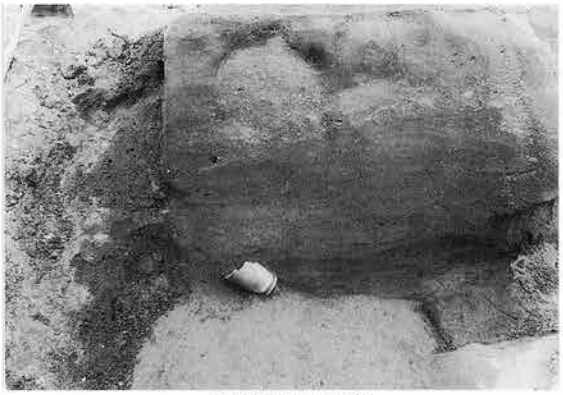


断面(E～F)

写真図版57　B区沢跡②

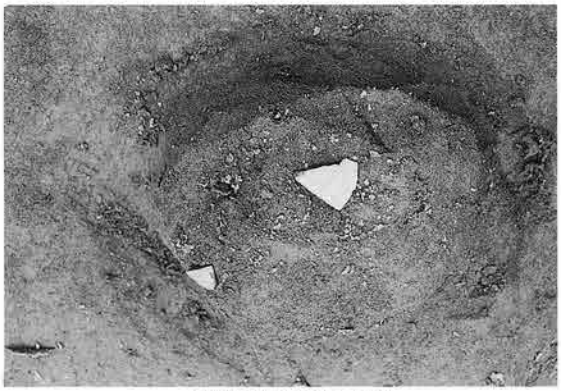
断面(E～F)

断面(G～H)



須恵器出土状況

須恵器出土状況



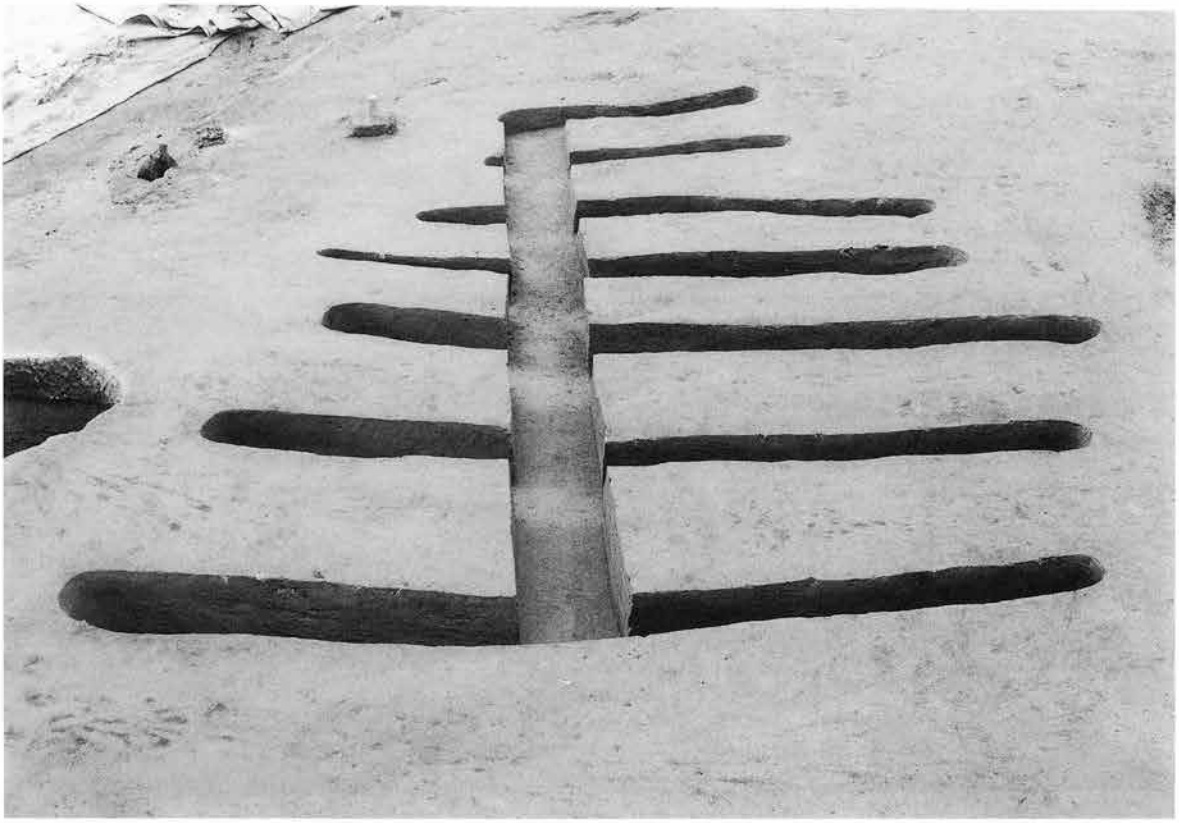
渥美産陶器出土状況

骨・歯出土状況

骨歯　出土状況

作業風景

写真図版58　B区沢跡③

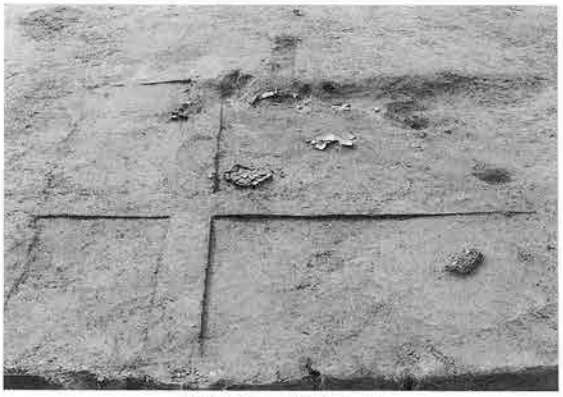


B区 SX1

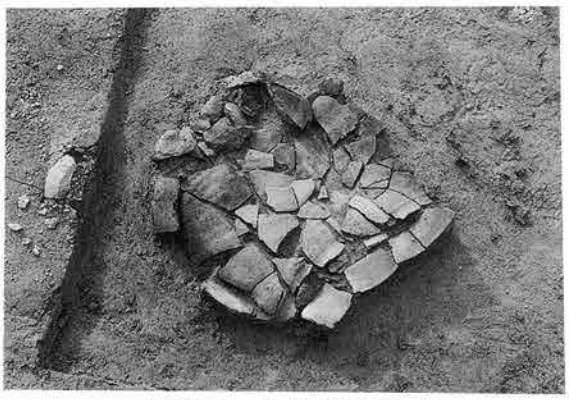
B区 集石

写真図版59　B区SX１、B区集石

C区SI4完掘(E→)



遺物出土状況(E→)

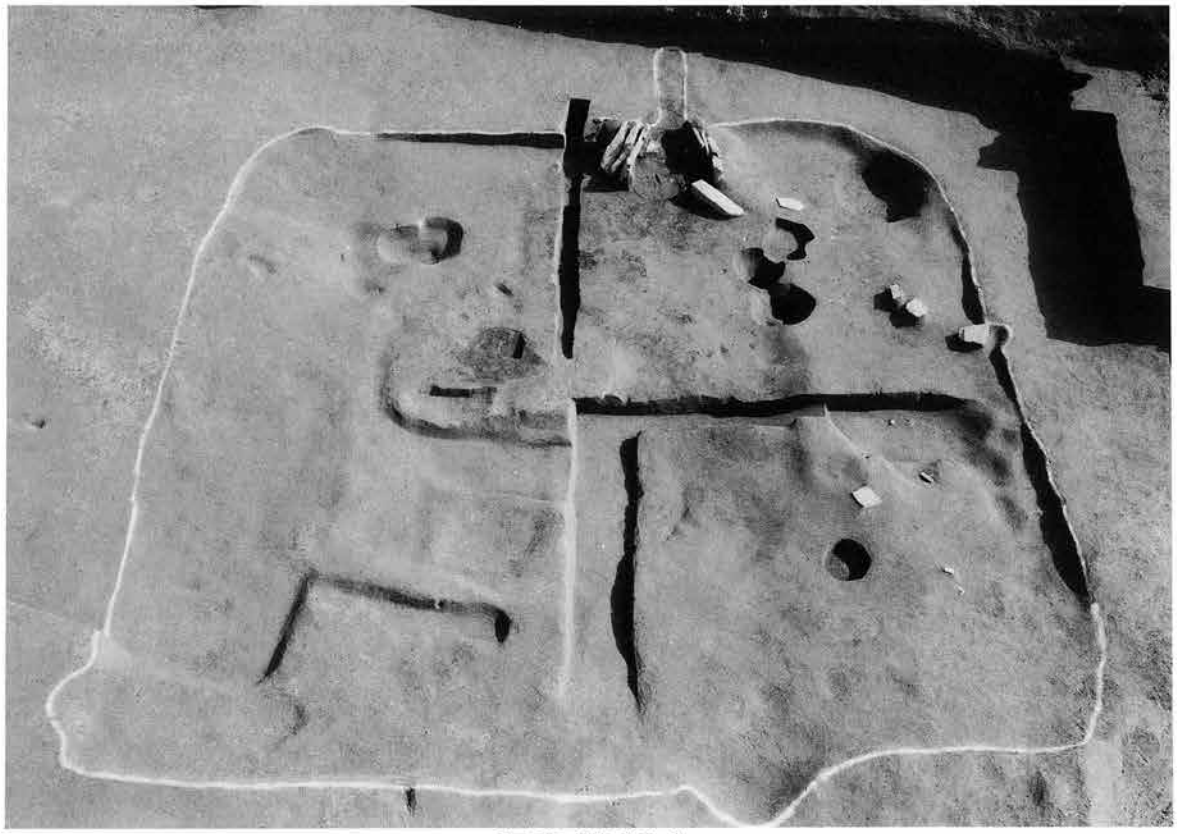


土師器 No.41 出土状況(E→)

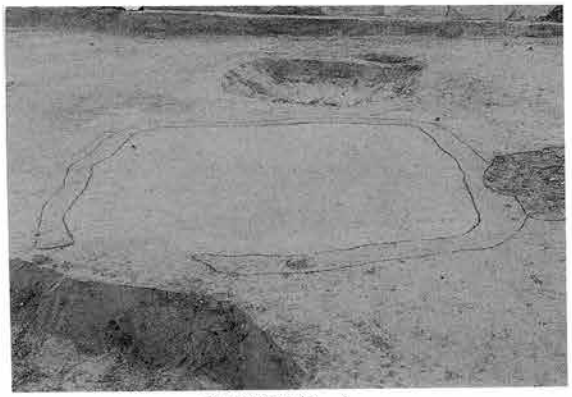
カマド(E→)

カマド断面(S→)

写真図版60　C区SI 4

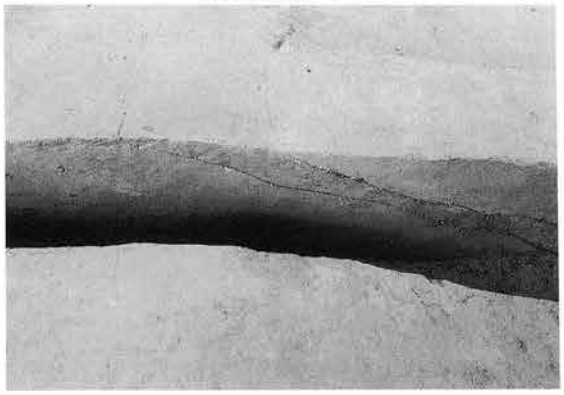


C区SI5 完掘(W→)

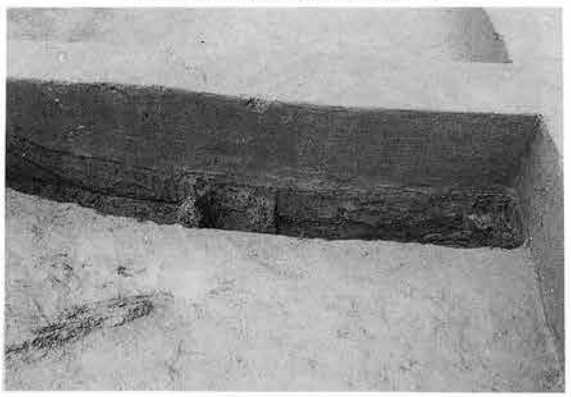


検出状況(S→)

土師器No.47、57出土状況(N→)



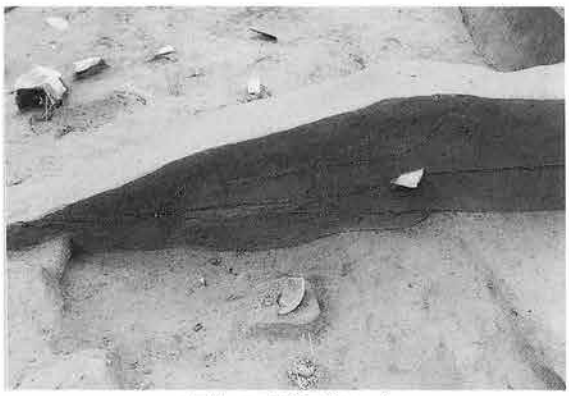
西側断ち割り(1)(S→)



西側断ち割り(2)(S→)

写真図版61　C区SI5①

東西ベルト断面(N→)



南北ベルト断面(W→)

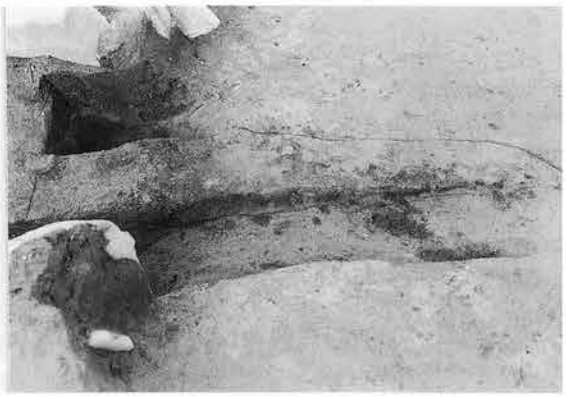
カマド内遺物出土状況(W→)

カマド完掘(W→)

カマド前庭部横断面(W→)

カマド横断面(W→)

カマド縦断面(S→)



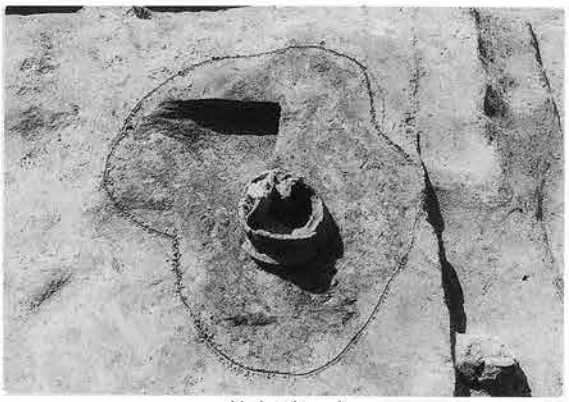
煙道縦断面(S→)

写真図版62　C区SI5②

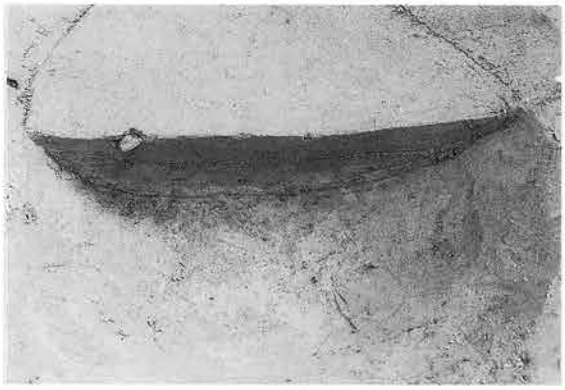
カマド北壁(S→)

カマド南壁(N→)

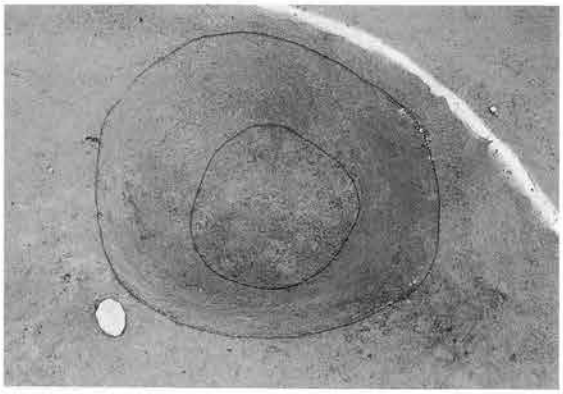
カマド断ち割り(W→)



焼土1(N→)



SK1 断面(W→)

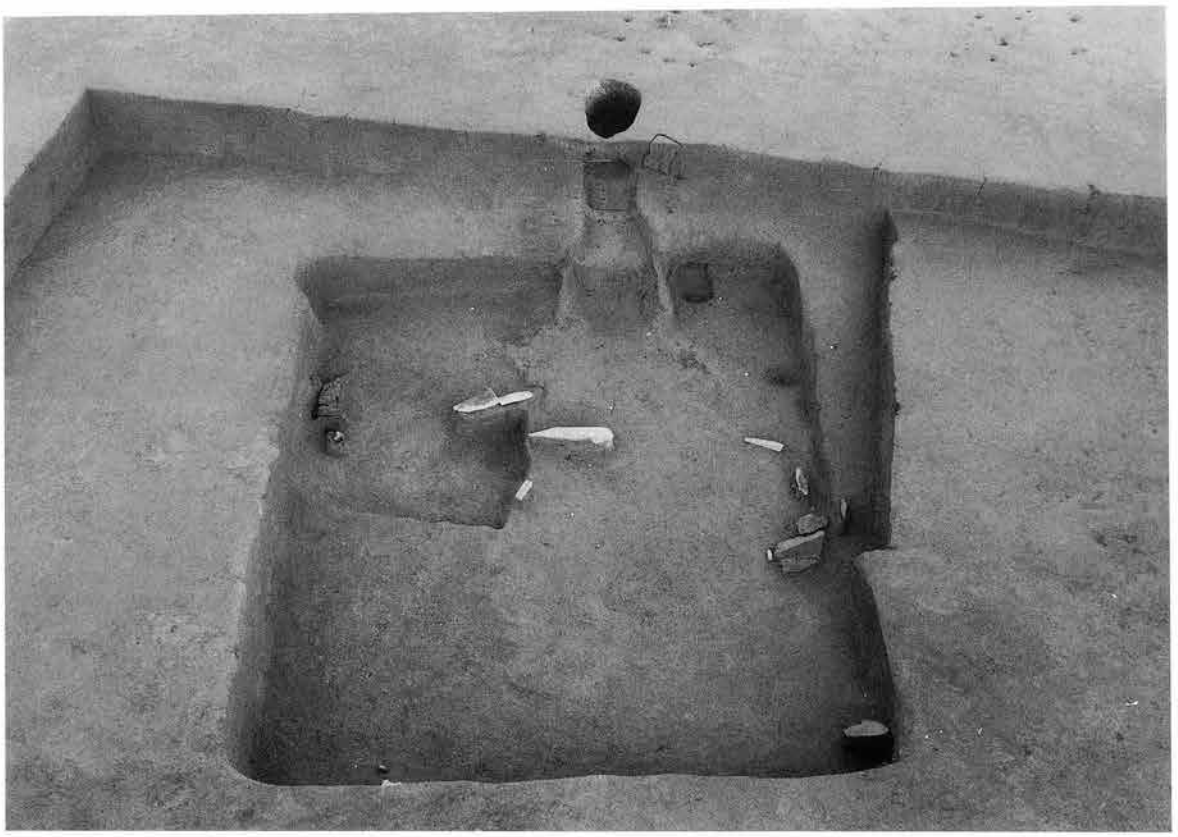


SK1 完掘(W→)

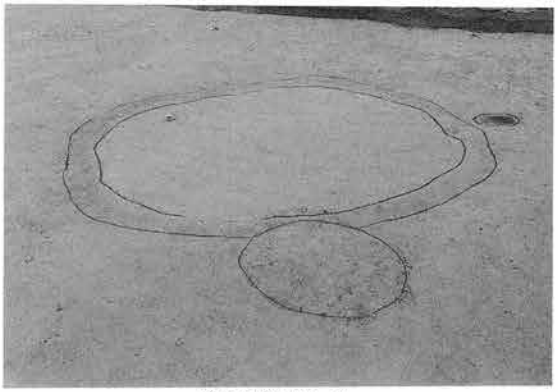
SD105 完掘(E→)

SD105 断面(E→)

写真図版63　C区SI5③、C区SD105

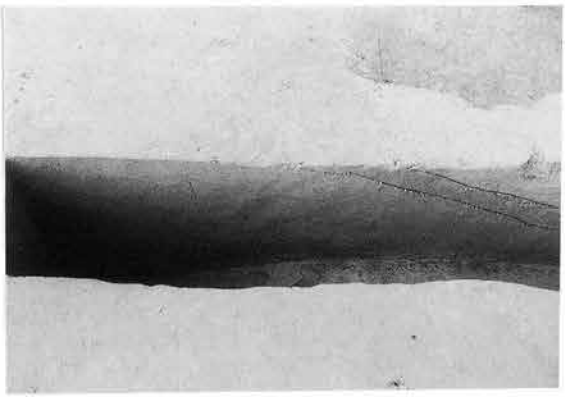


C区SI6 完掘(W→)



検出状況(S→)

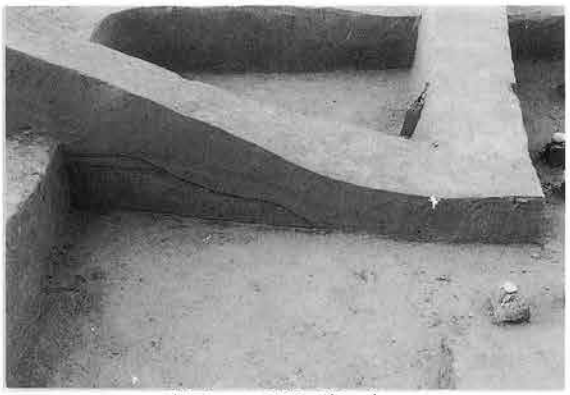
土師器No.69 出土状況(S→)



西側断ち割り(1)(S→)

西側断ち割り(2)(S→)

写真図版64　C区SI6①



東西ベルト断面(S→)

南北ベルト断面(E→)

カマド完掘(W→)

カマド横断面(W→)

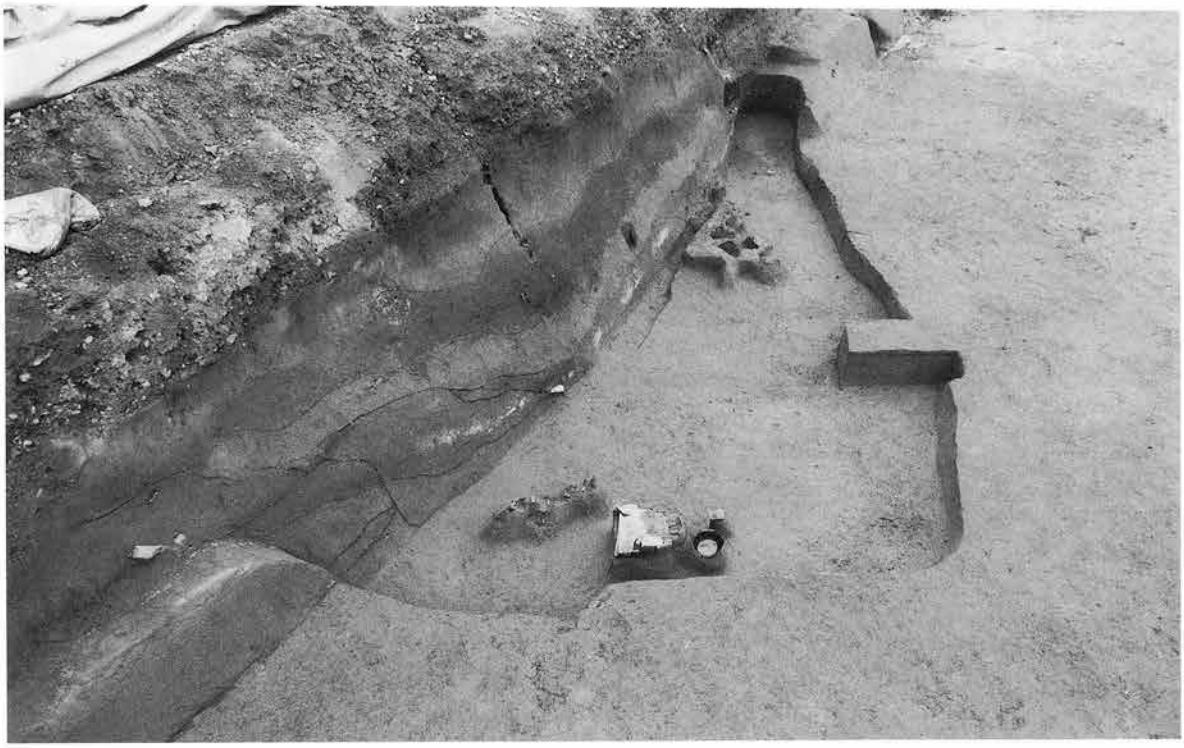
カマド縦断面(S→)

煙道横断面(W→)

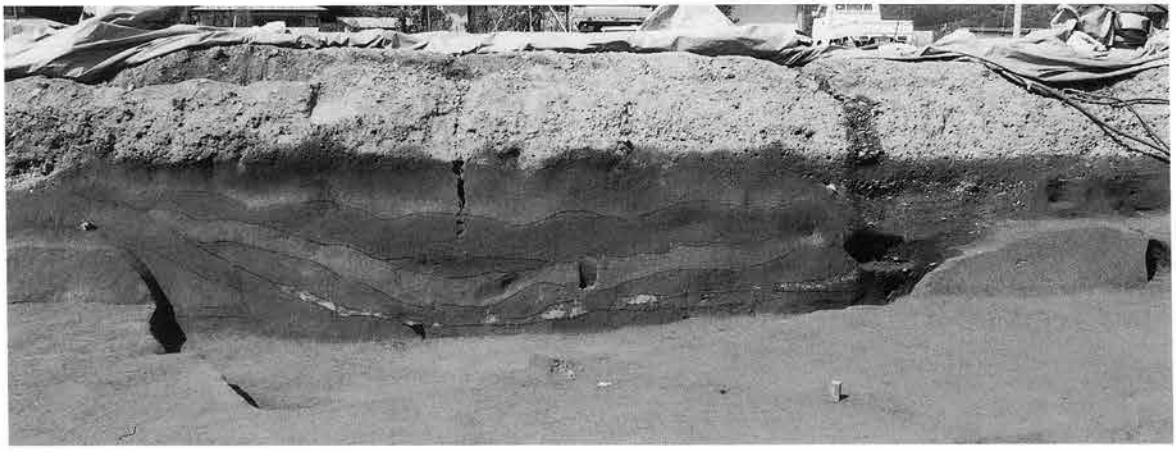
煙道縦断面(S→)

煙出し完掘(S→)

写真図版65　C区SI6②

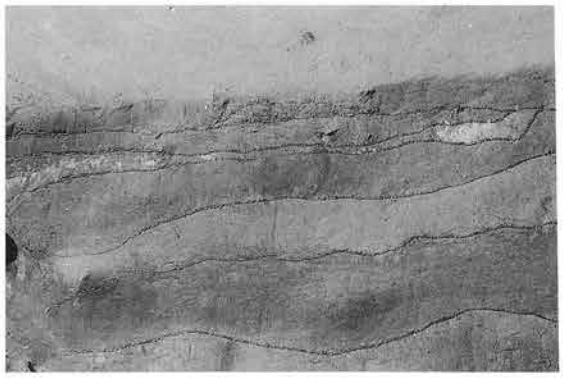


完掘



断面(A～B)

断面(C～D)



断面中の十和田a火山灰

写真図版66　C区SI７①

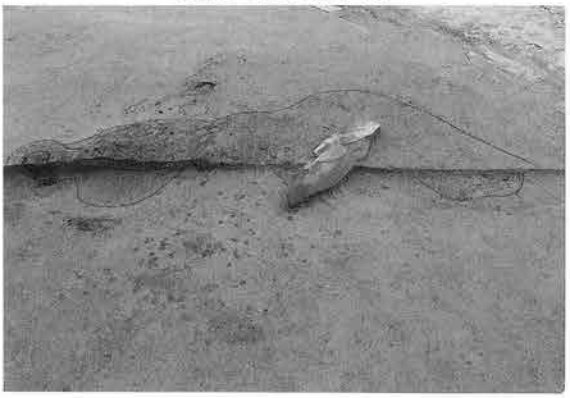
遺物出土状況(S→)

遺物出土状況(W→)

遺物、焼土状況

完掘(遺物取り上げ後)

C区 焼土1検出



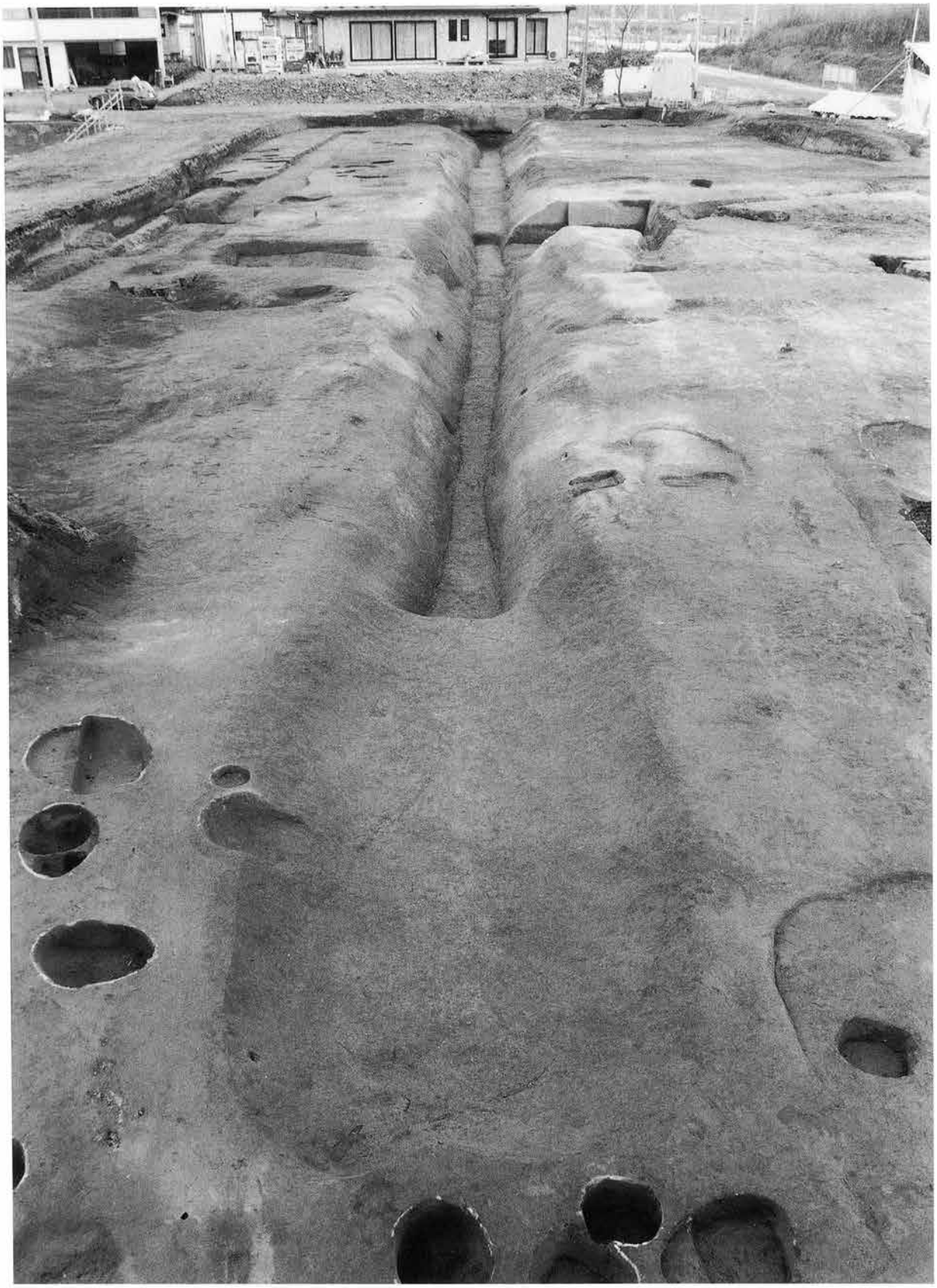
C区 焼土1断面

C区 SB4(P405)

C区 SB4(P408)

C区 SB4(P409)

写真図版67　C区SI７②、C区焼土１、C区SB４



完掘(S→)

写真図版68　C区SD101①

完掘(S→)

完掘(S→)

完掘(S→)

完掘(N→)

写真図版69　C区SD101②

断面(A～A')

断面(B～B')

断面(C～C')

断面(D～D')

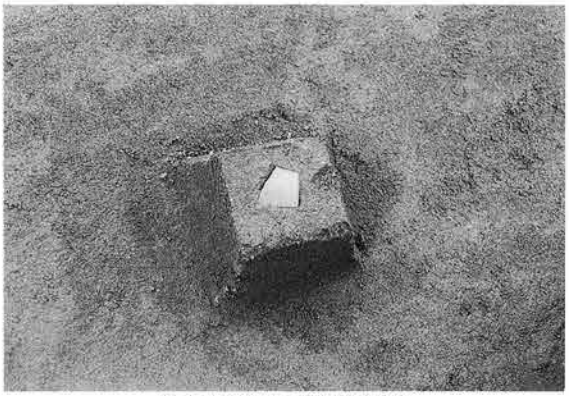
断面(E～E')

完掘(平成16年度)

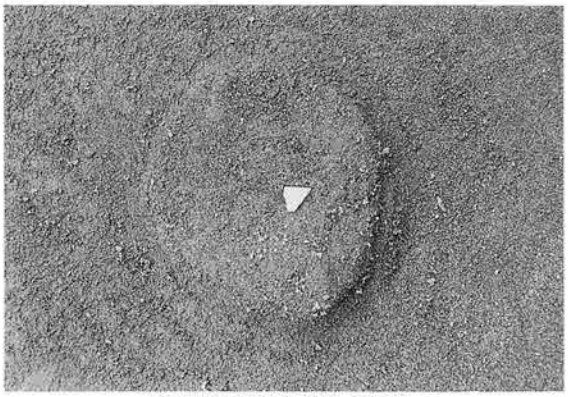
堀内部(N→)

堀内部(S→)

写真図版70　C区SD101③

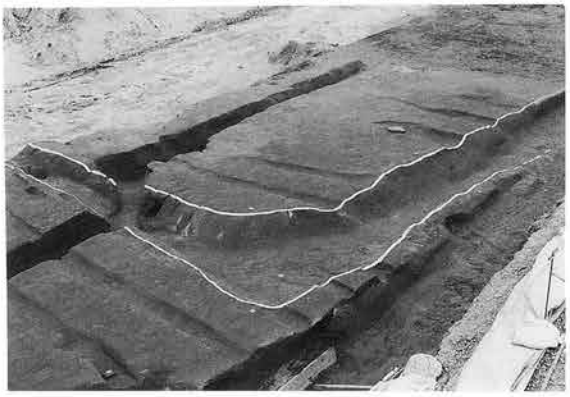


C区 SD101白磁出土状況



C区 SD101白磁出土状況

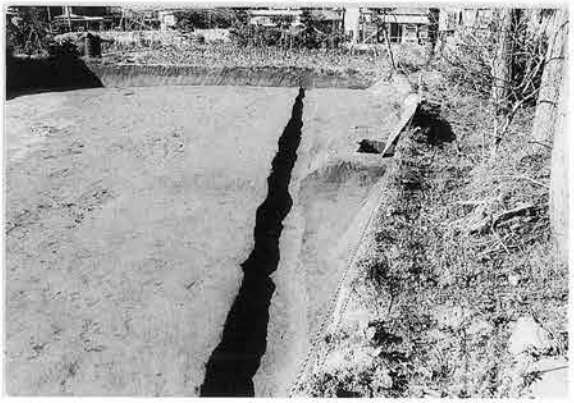
C区 SD104完掘(平成16年)



C区 SD104完掘(平成16年)

C区 SD104完掘(平成15年)

C区 SD104完掘(平成15年)



C区 SD104完掘(平成14年)

C区 SD104遺物出土状況(平成16年)

写真図版71　C区SD101④、C区SD104①

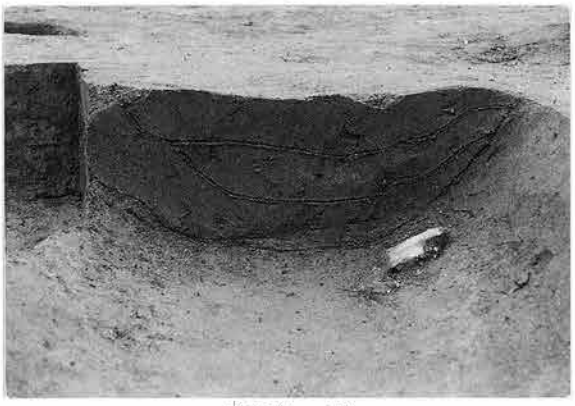
南端部完掘(平成15年)

北部完掘(平成16年)

写真図版72　C区SD104②

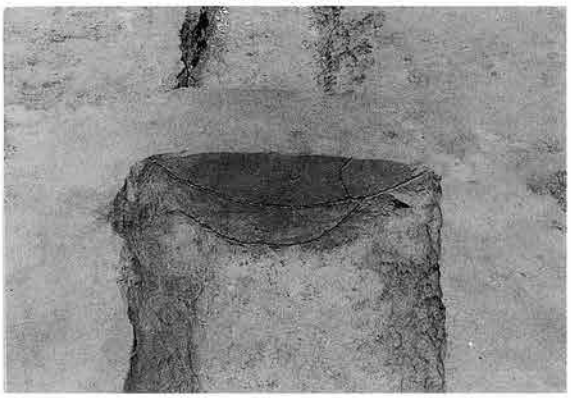
遺物出土状況

遺物出土状況

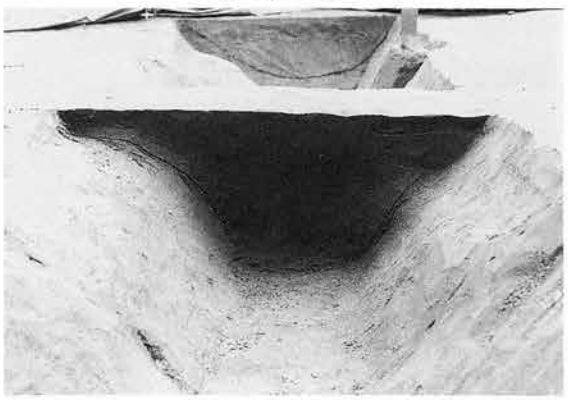


断面(A～A')

断面(B～B')



断面(C～C')

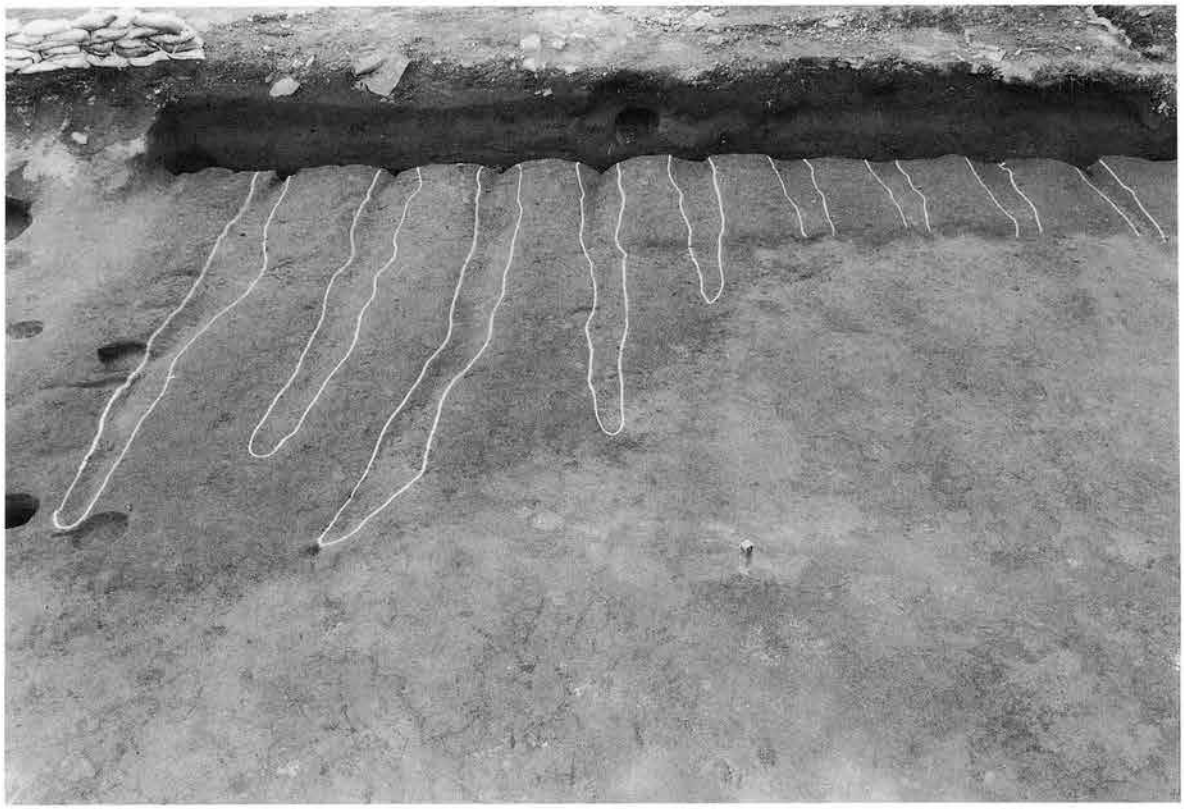


断面(D～D')

断面(E～E')

断面(F～F')

写真図版73　C区SD104③



C区 SX2 完掘

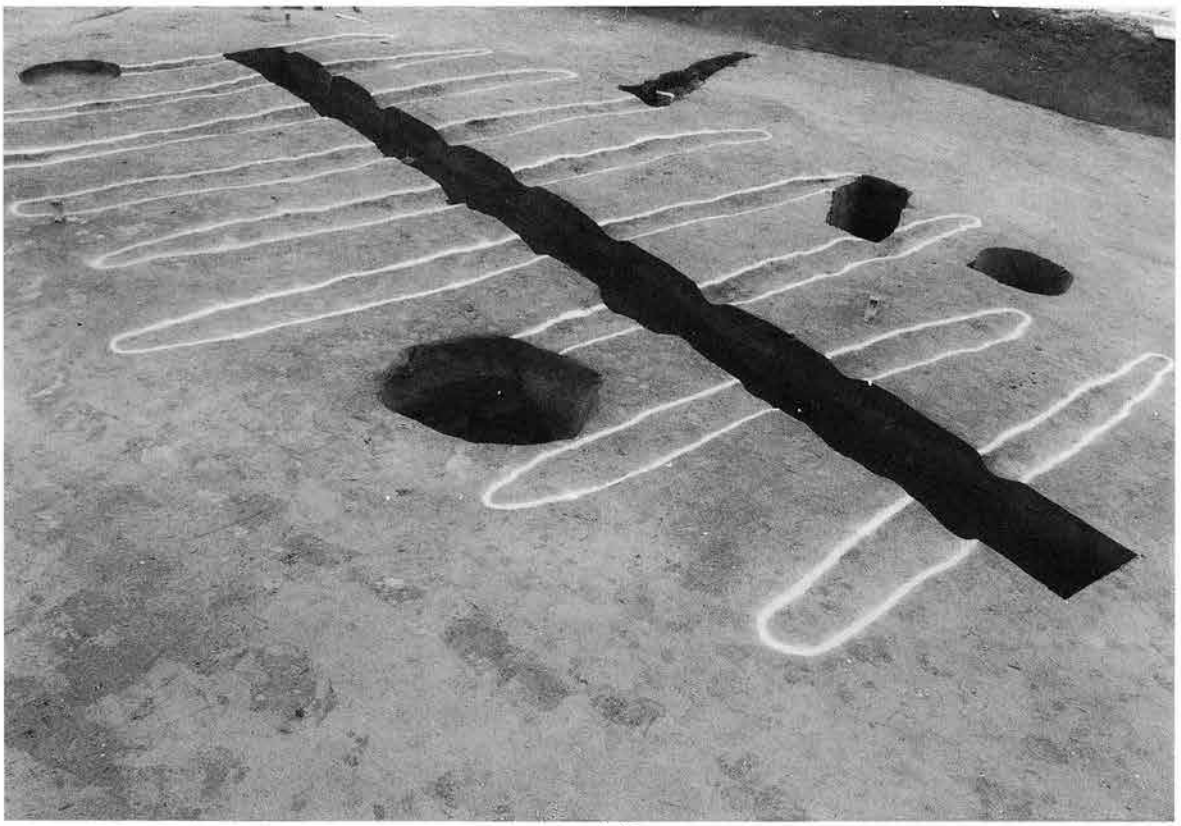
C区 SX1 検出

C区 SX2 断面

C区 SX2(平成16年)

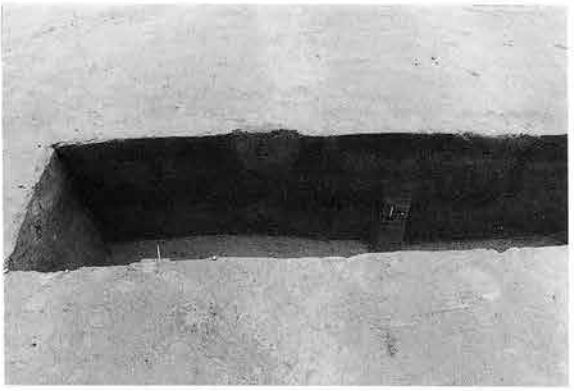
C区 SX2(平成16年)

写真図版74　C区SX１、SX２

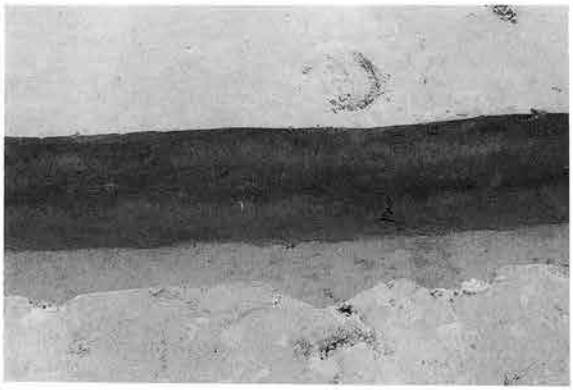


SX3 完掘

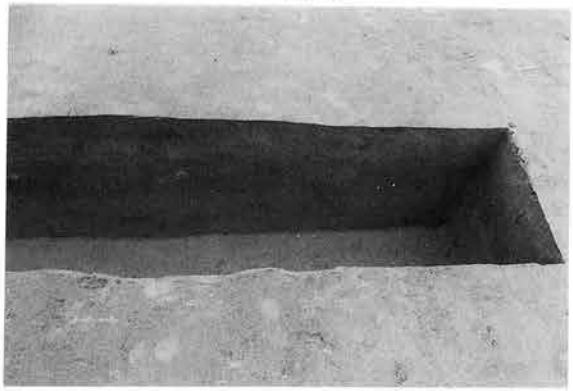
SX3 検出



SX3 断面①



SX3 断面②

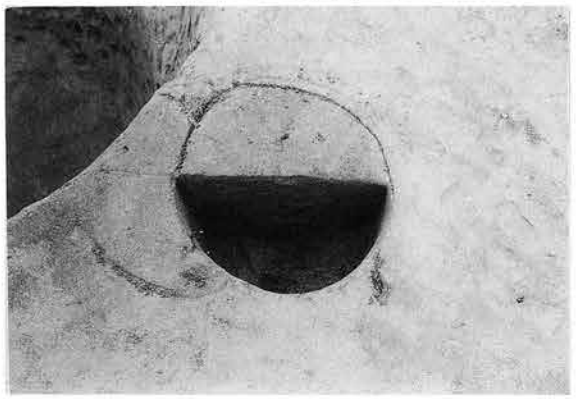


SX3 断面③

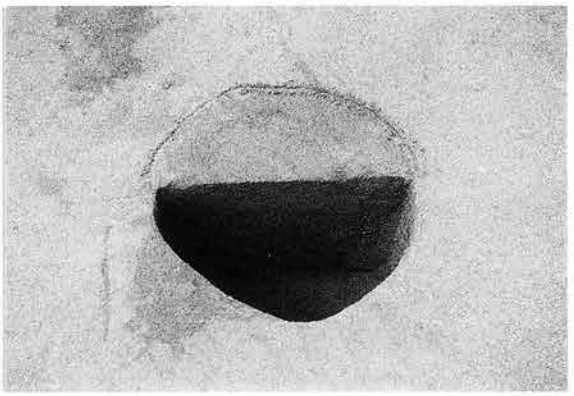
写真図版75　C区SX３

C区 ピット群(1)(N→)

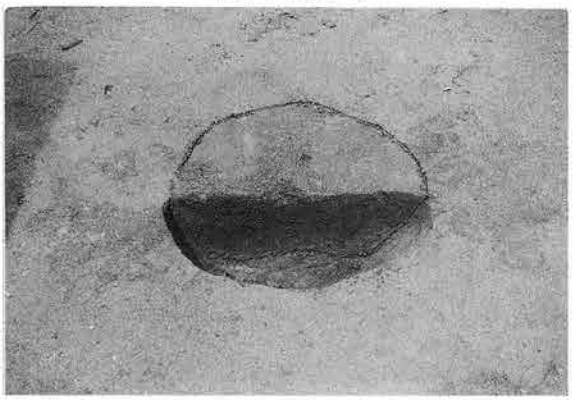
C区 ピット群(2)(N→)



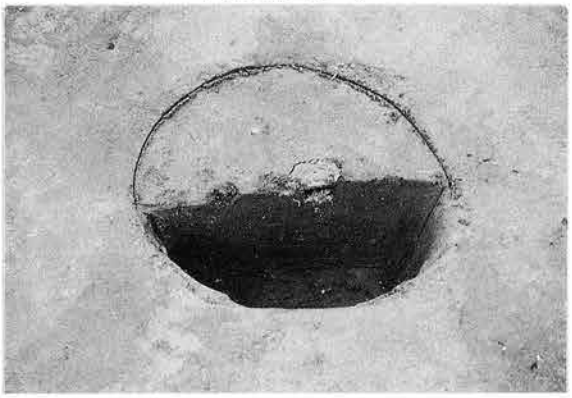
P106 断面(W→)



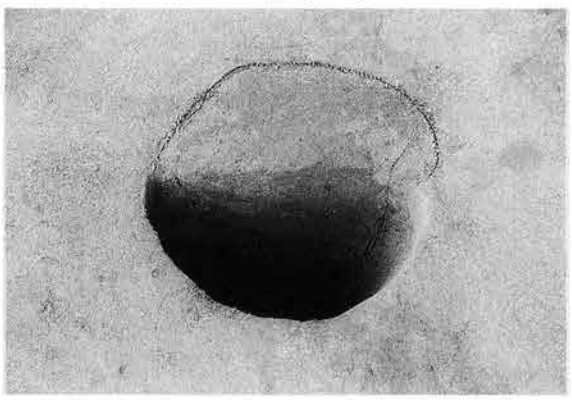
P110 断面(S→)



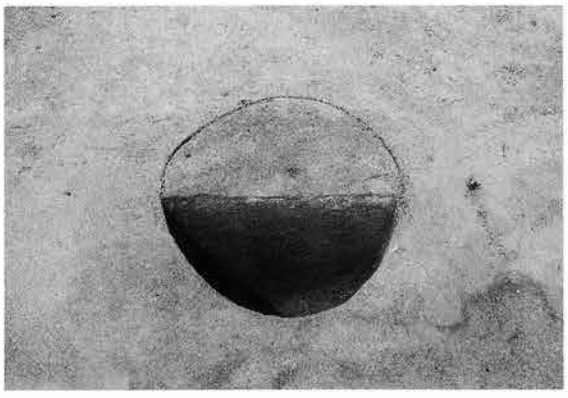
P120 断面(W→)



P121 断面(W→)



P132 断面(S→)



P137 断面(S→)

写真図版76　C区第1検出面ピット群

全景(E→)

断面(E→)

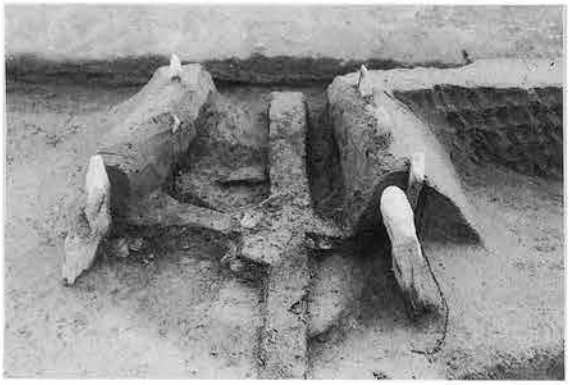
検出状況(W→)

鉄製品検出状況(N→)

写真図版77　D区SI 1 ①

遺物出土状況(S→)

遺物出土状況(E→)



カマド断面(E→)

カマド断面(S→)

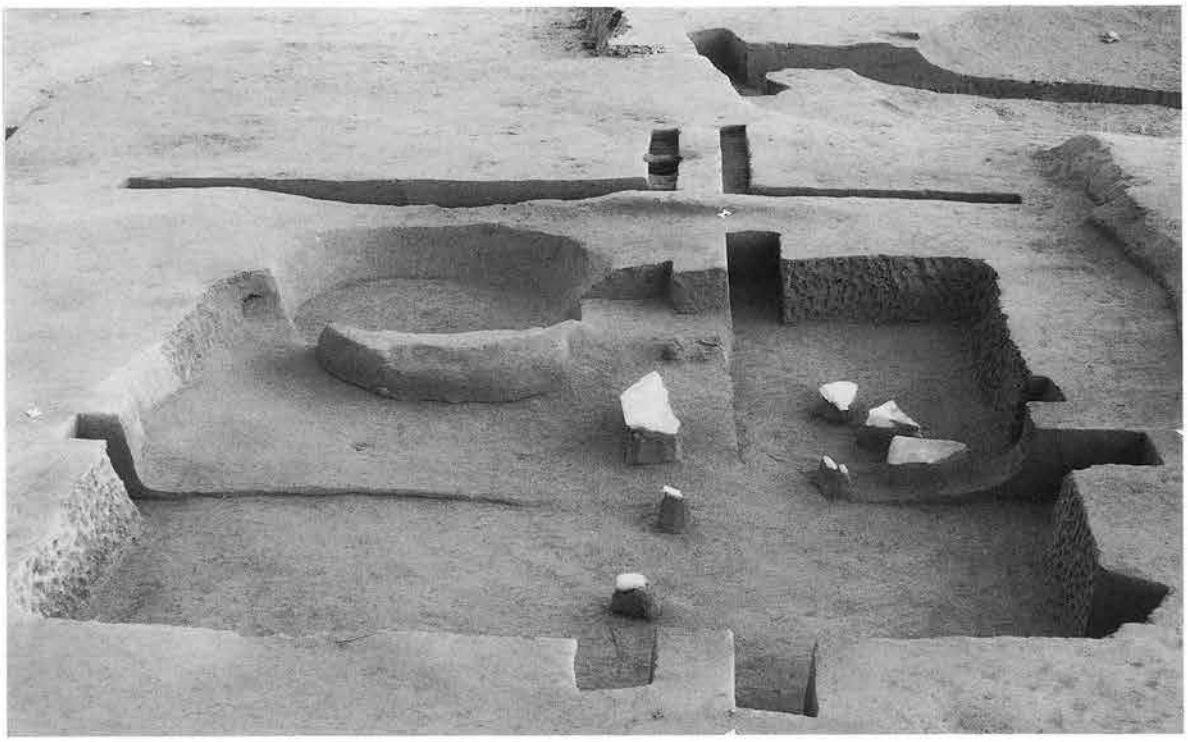
焼土平面(E→)

焼土平面(E→)

カマド完掘(S→)

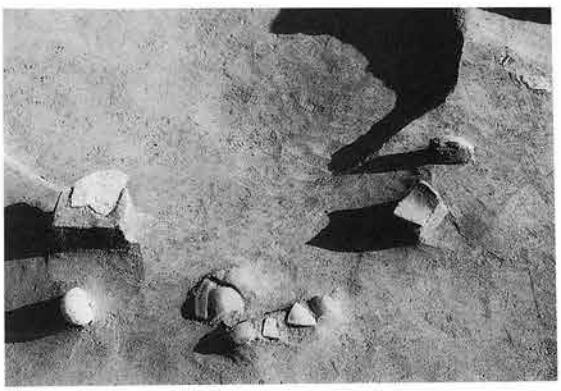
完掘(E→)

写真図版78　D区SI１②



全景(W→)

断面(W→)



遺物出土状況(W→)

完掘(W→)

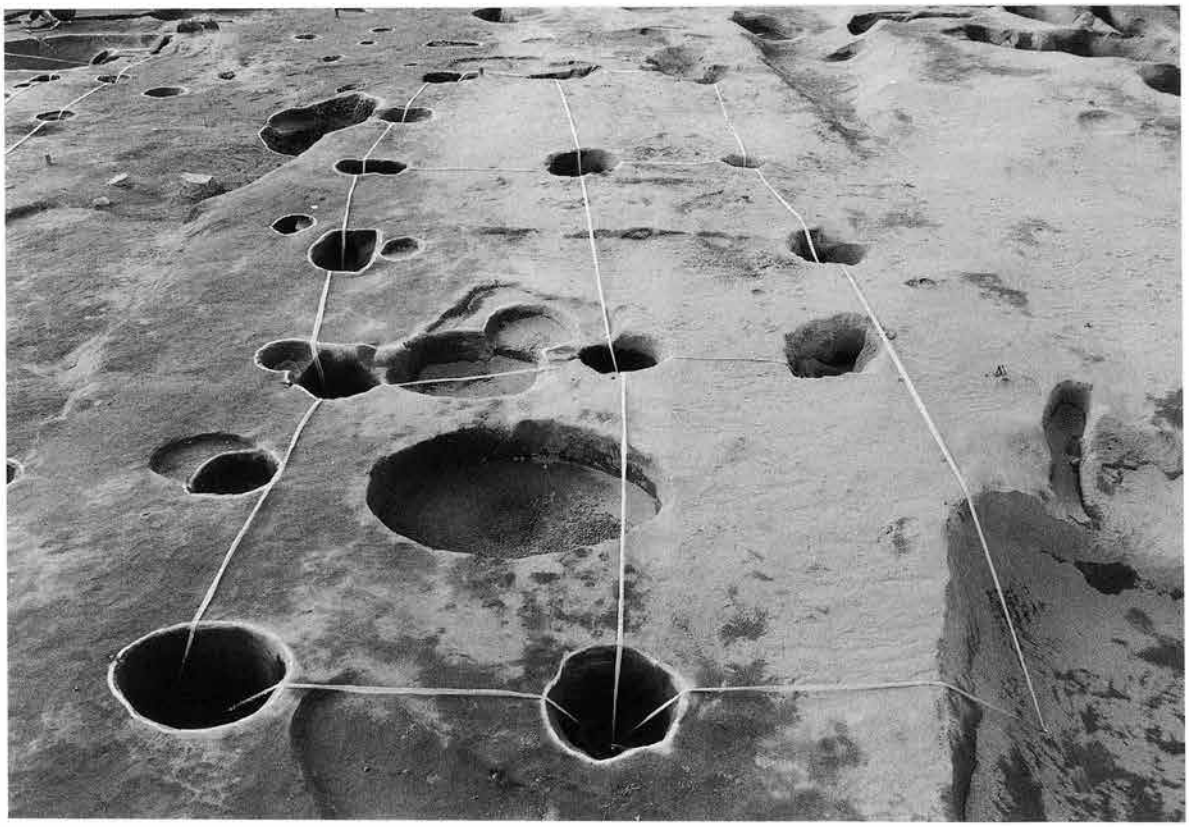
写真図版79　D区SI2

D区 柱穴群(W→)

D区 柱穴群(W→)

写真図版80　D区柱穴群

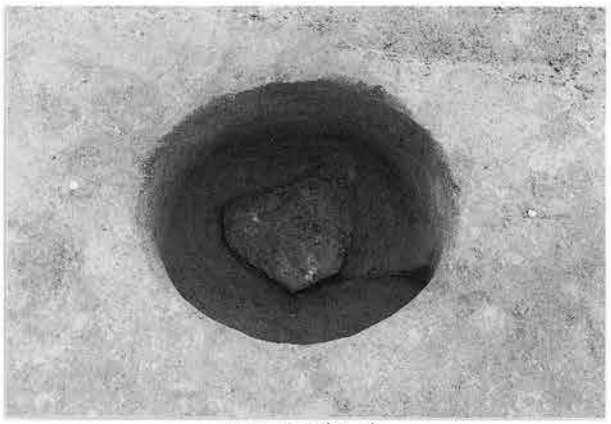
D区 SB1･SB2･SB3



D区 SB4

写真図版81　D区SB１～４

D区 P25(N→)(SB1)



D区 P26(N→)

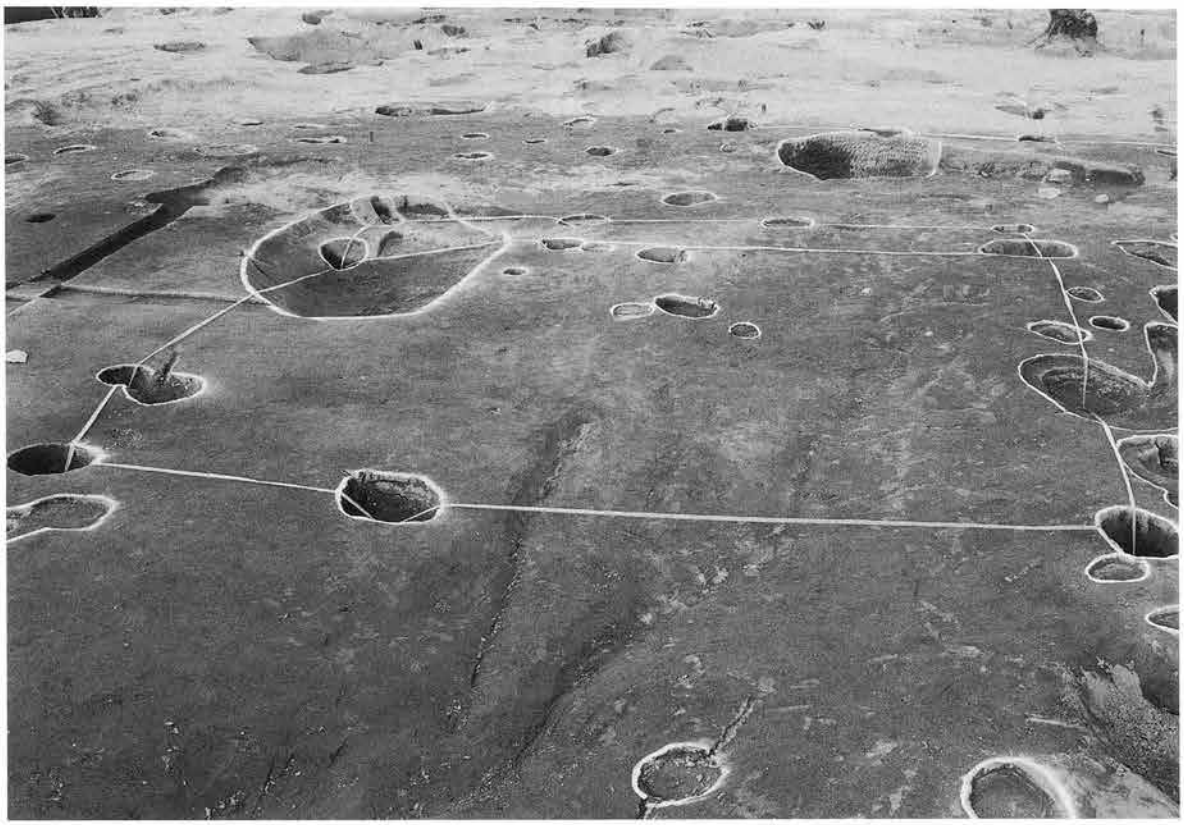
D区 P43(N→)(SB2)

D区 P104(N→)(SB2)

D区 P91·P92(SB2)

D区 P108(SB2)

写真図版82　D区SB１、２柱穴

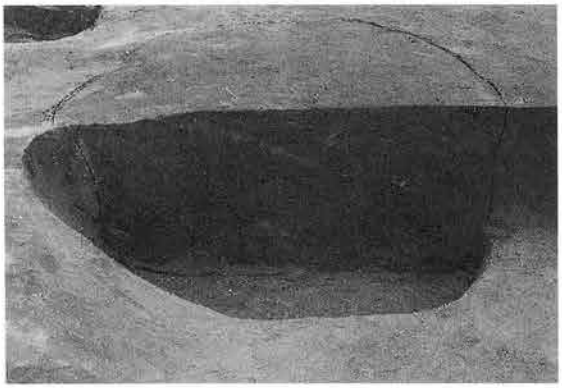


D区 SB5

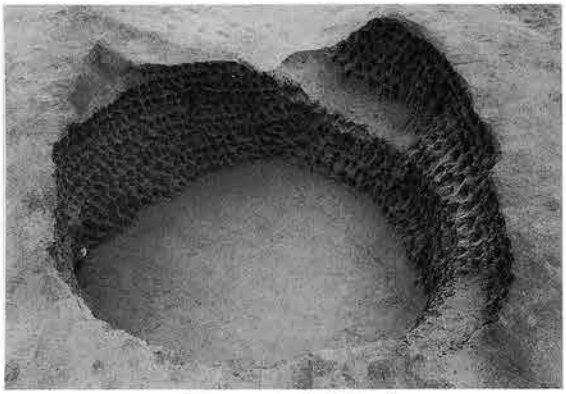
D区 SB6･SB7･SB8

写真図版83　D区SB５～８

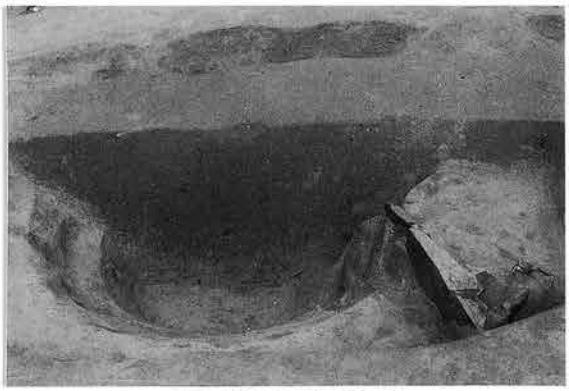
D区 SK118 完掘(S→)



D区 SK118 断面(E→)



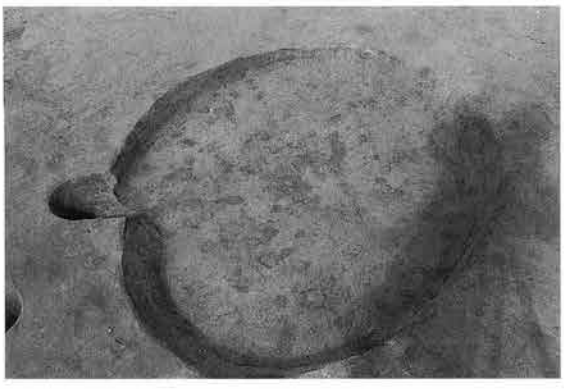
D区 SK119 完掘(S→)



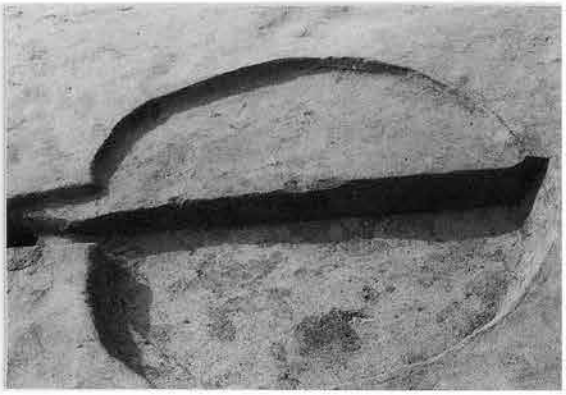
D区 SK119 断面(E→)

D区 SK120 完掘(E→)

D区 SK120 断面(E→)



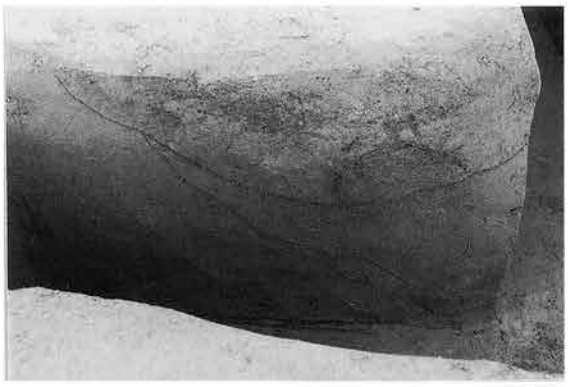
D区 SK121 完掘(E→)



D区 SK121 断面(E→)

写真図版84　D区SK118～121

D区 SK122 完掘(E→)



D区 SK122 断面(S→)

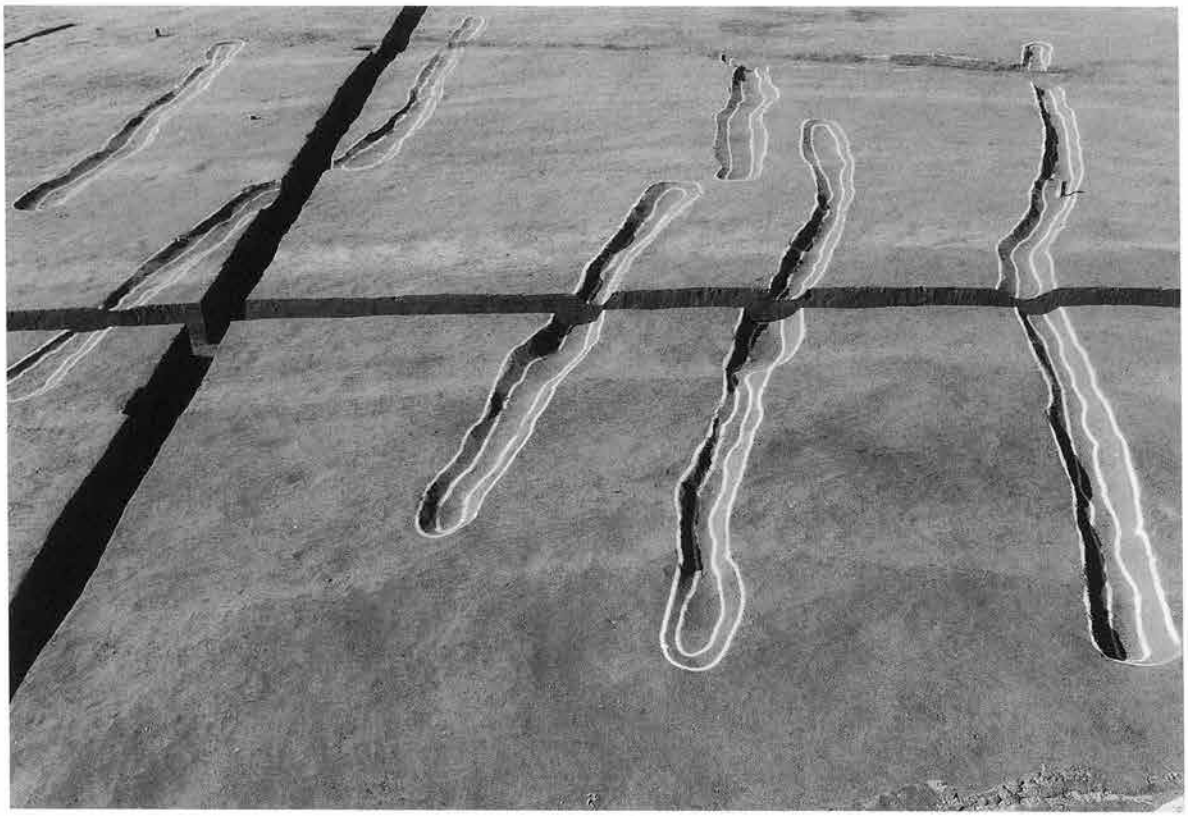
D区 南側土層断面(S→)

D区 北側土層断面(E→)

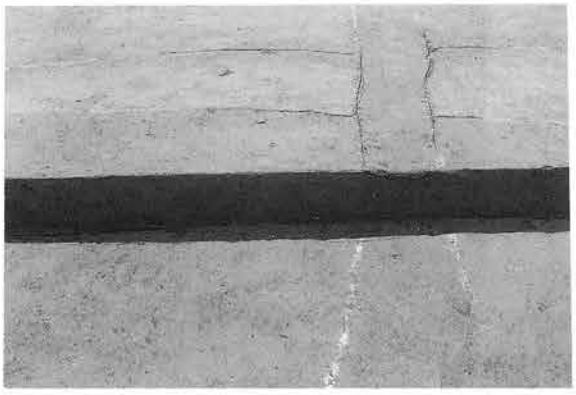
作業風景

作業風景

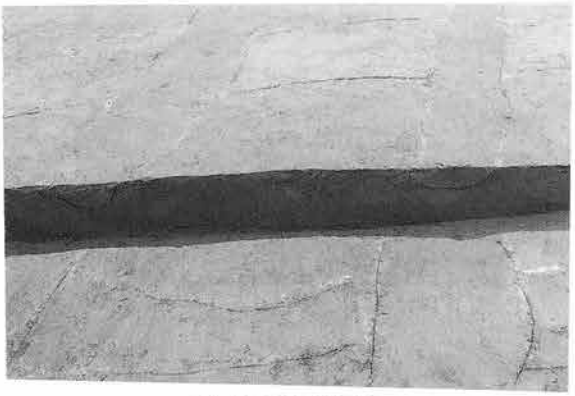
写真図版85　D区SK122、D区土層断面



D区 SX20 完掘



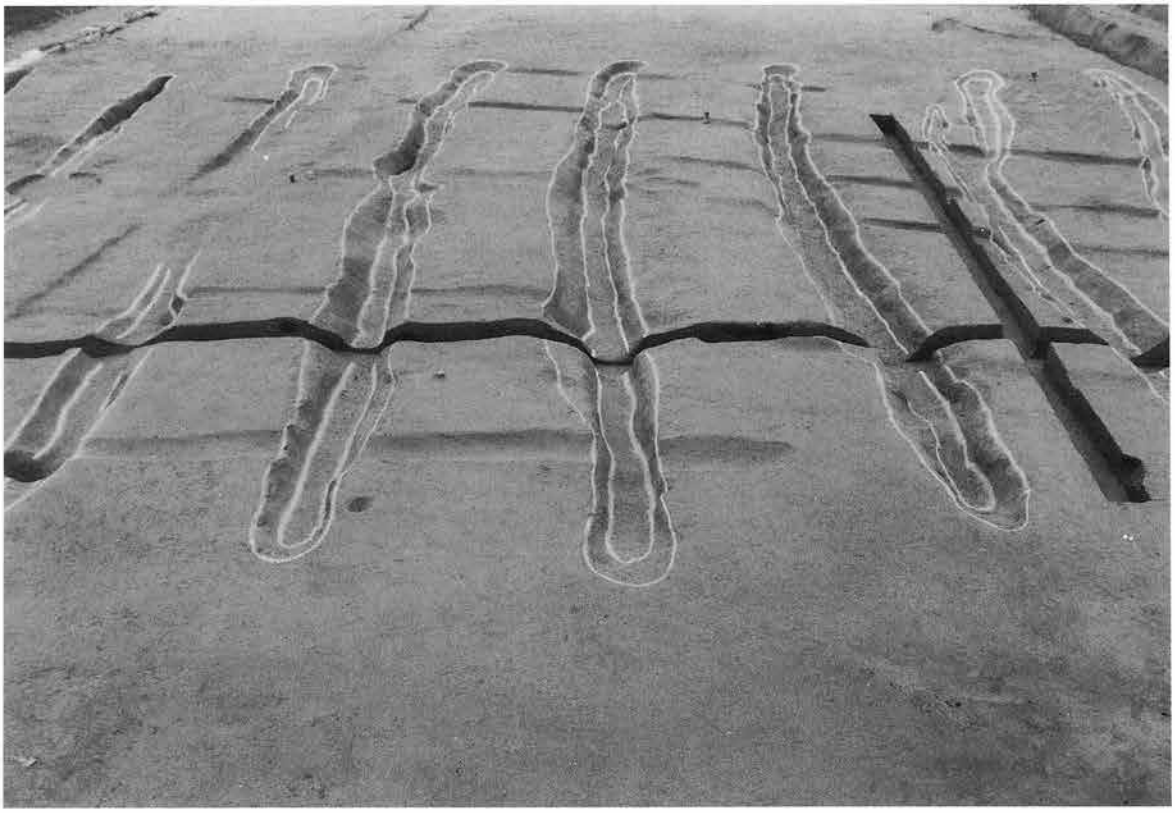
D区 SX20 断面①



D区 SX20 断面②

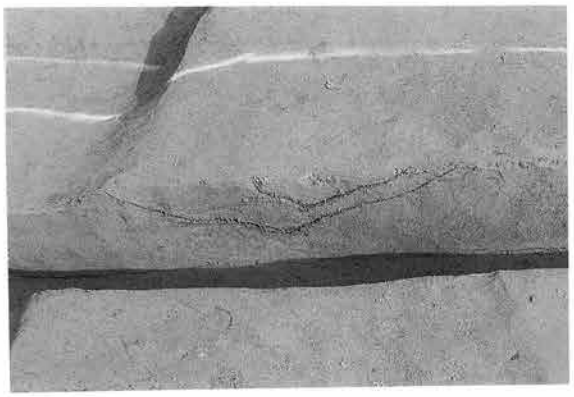
D区 SX20 断面③

写真図版86　D区SX20

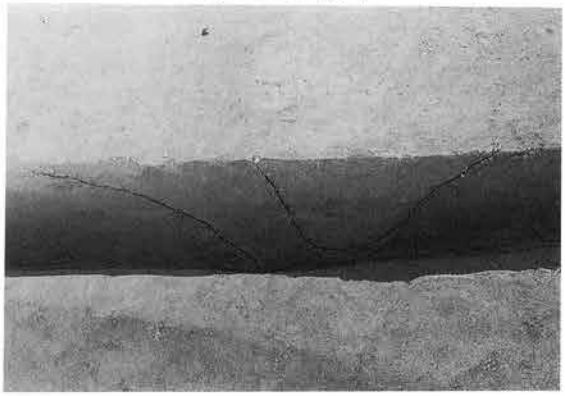


D区 SX21 完掘

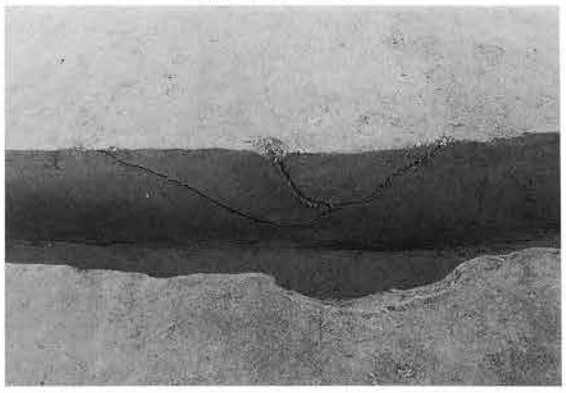
D区 SX21 検出



D区 SX21 断面①



D区 SX21 断面②



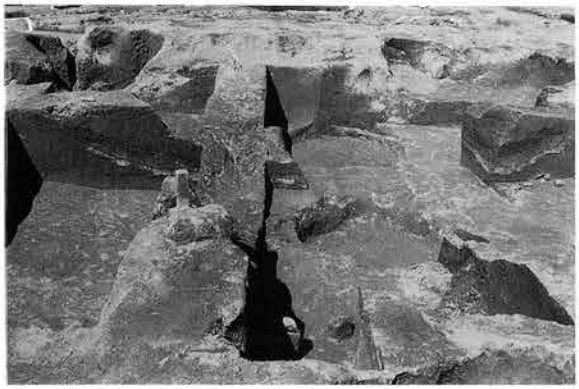
D区 SX21 断面③

写真図版87　D区SX21

E区 SI1完掘

検出状況

埋土断面(南北)



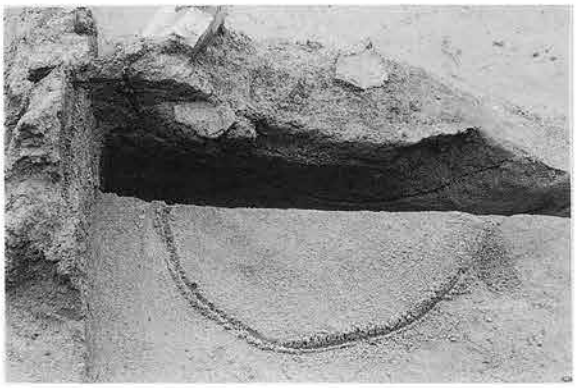
埋土断面(東西)

焼土1検出状況

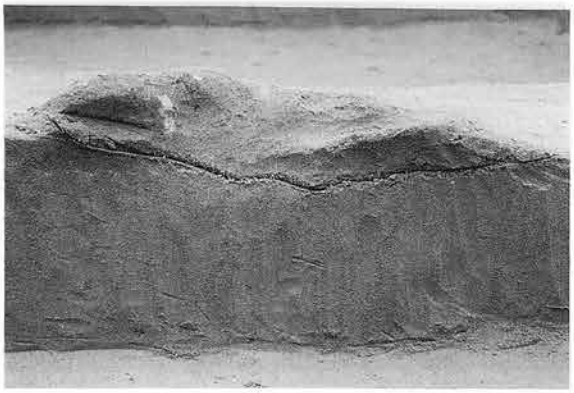
写真図版88　E区SI 1 ①

焼土1断面(南北)

焼土1断面(東西)



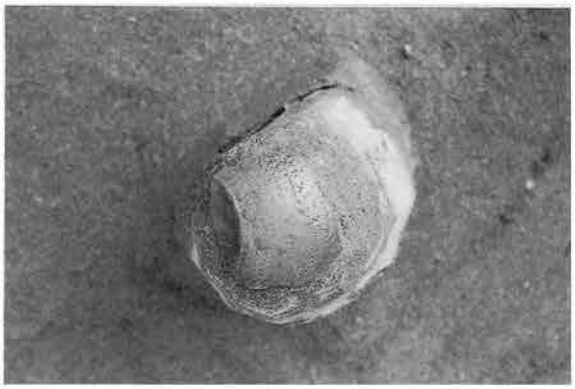
焼土1断面(東西)



焼土2断面

遺物出土状況(107)

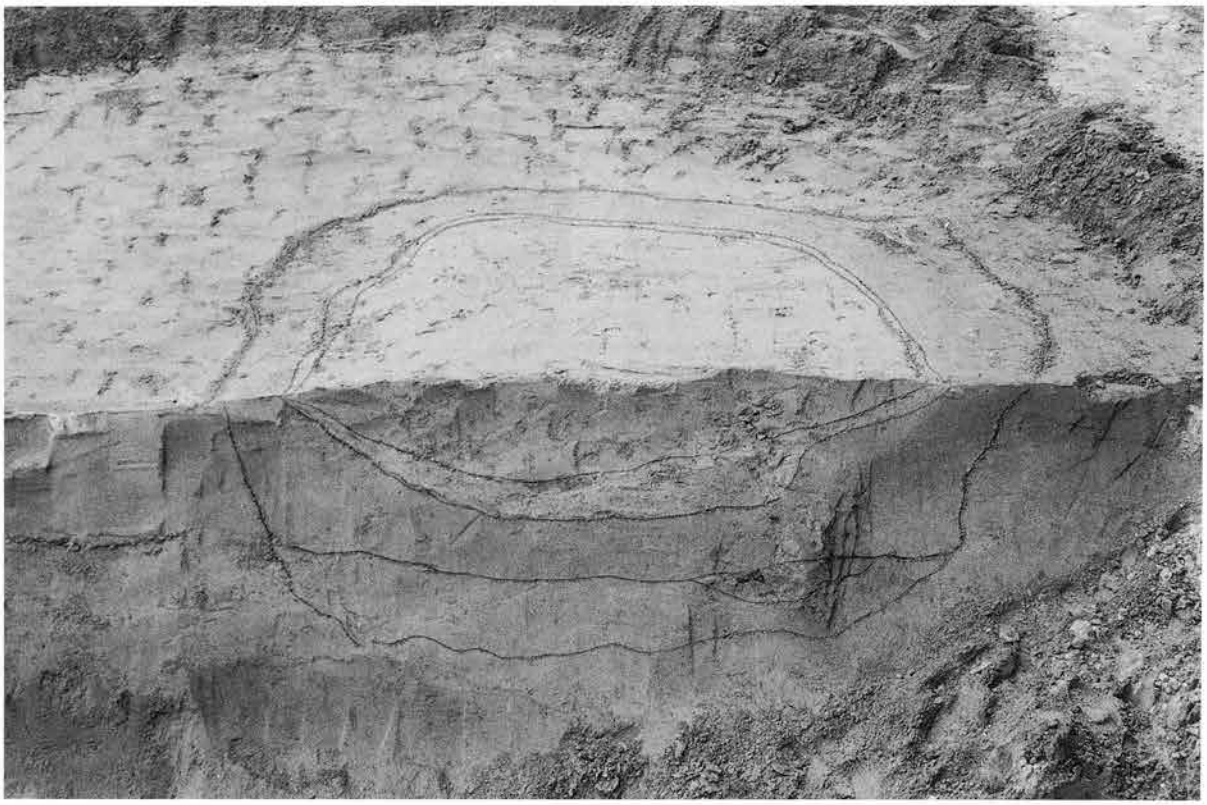
遺物出土状況(109)



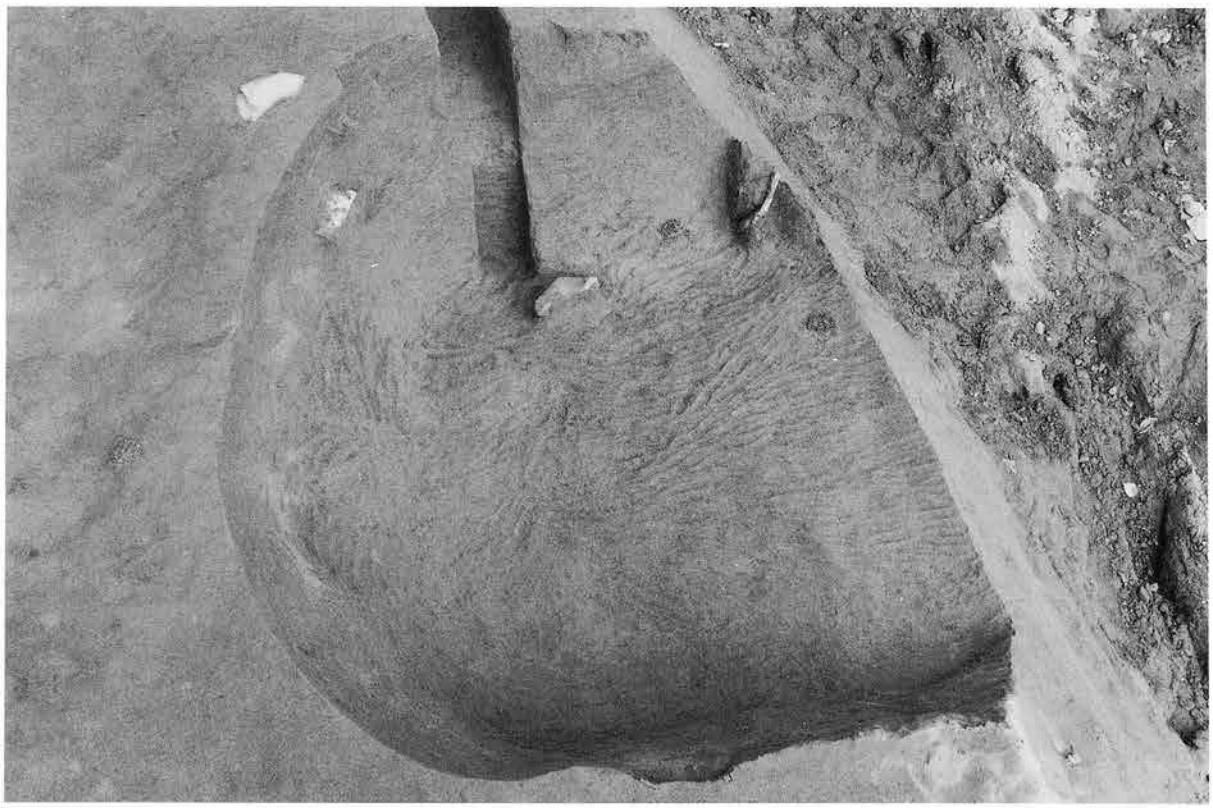
遺物出土状況(108)

遺物出土状況(100)

写真図版89　E区SI１②



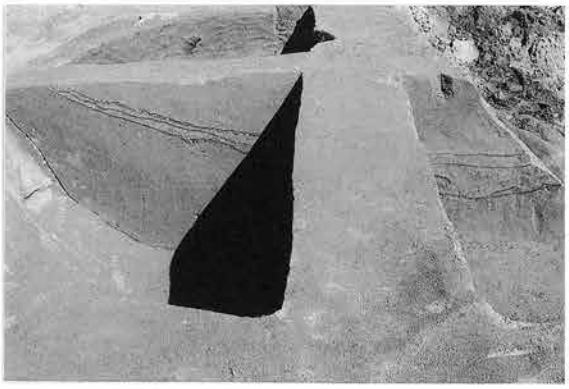
E区 SI2 検出



E区 SI2 完掘

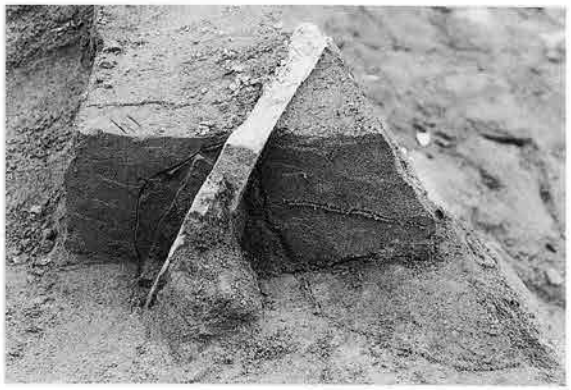
写真図版90　E区SI２①

埋土 断面（南北）



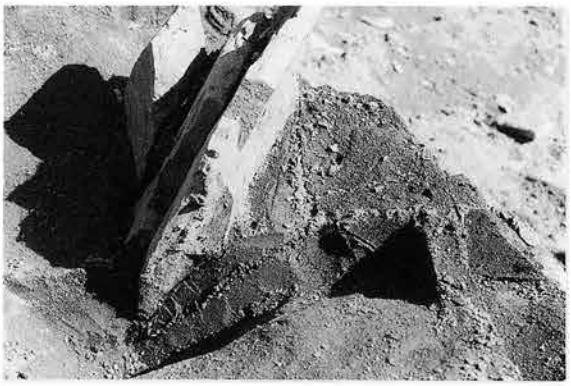
埋土 断面（東西）

カマド 平面



E区 SI2 検出

カマド ソデ石

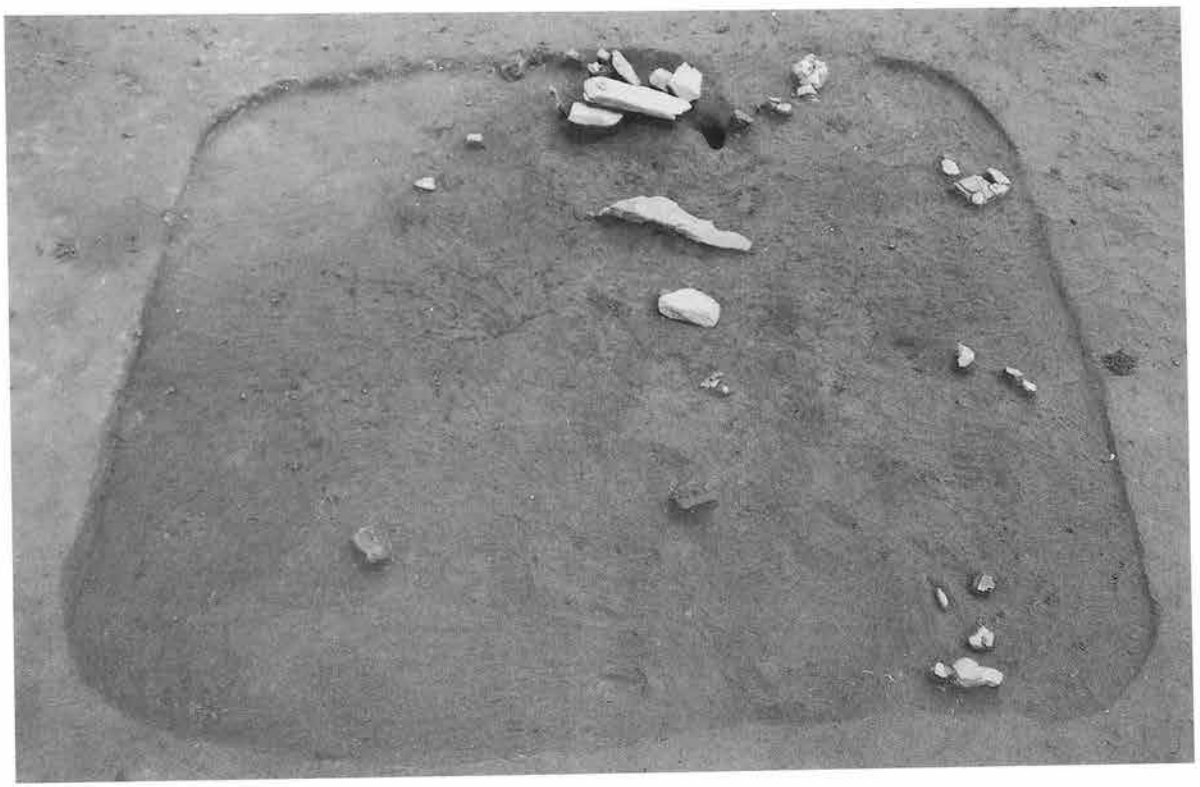


カマド 火焼面断面（東西）

カマド 断面（南北）

カマド 火焼面断面（南北）

写真図版91　E区SI２②



E区 SI3 完掘

検出 状況

埋土 断面(東西)

埋土 断面(南北)

完掘(カマド取りはずし後)

写真図版92　E区SI３①

カマド完掘

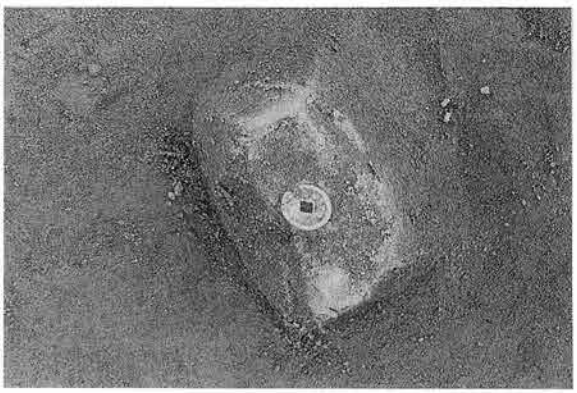
カマド断面(東西)

カマド断面(南北)

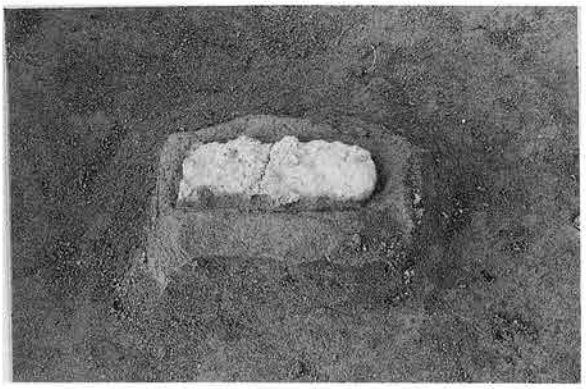
火焼面断面(東西)

遺物出土状況(P1)

遺物出土状況(P2)

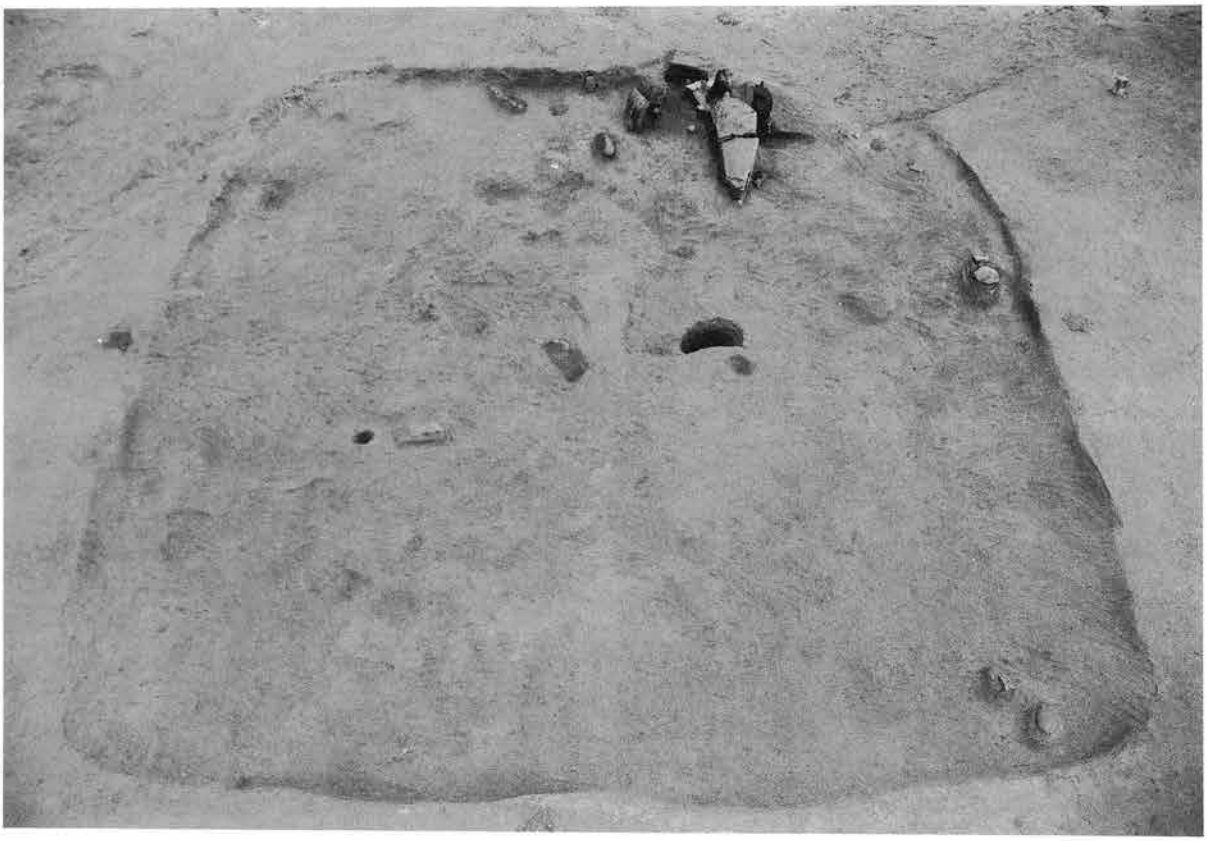


和同開称出土状況

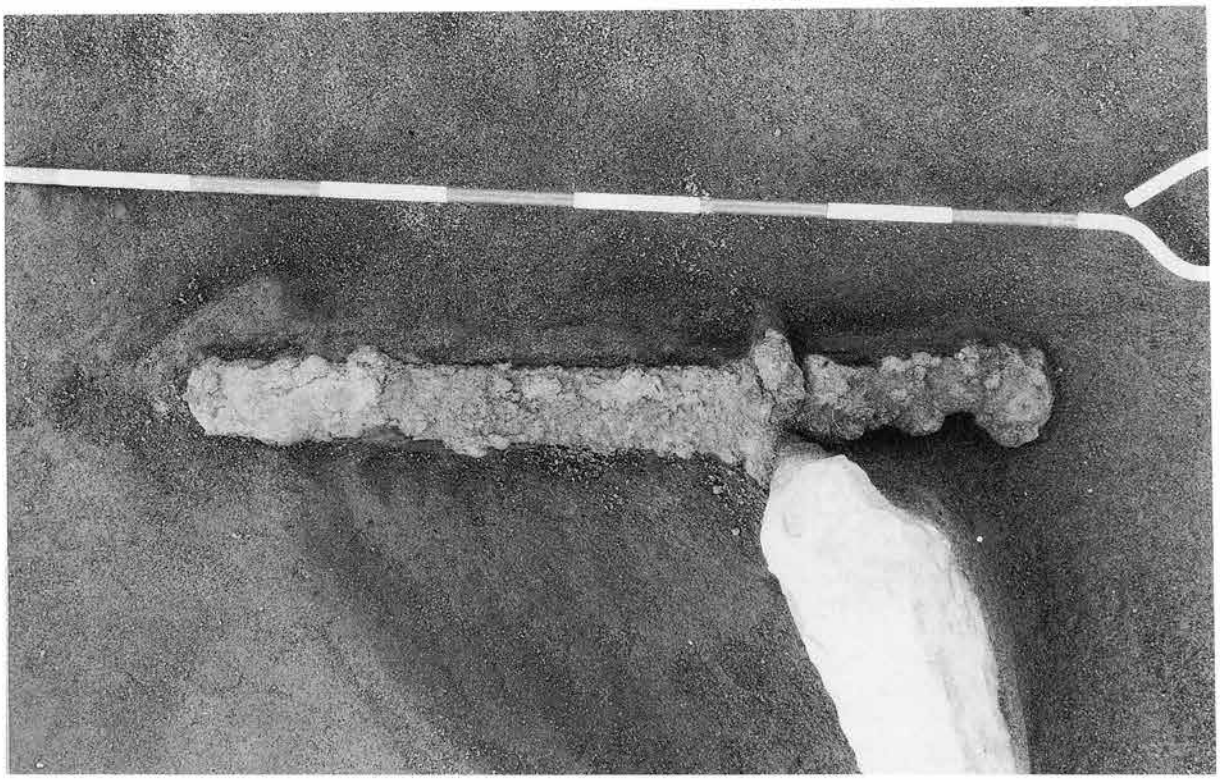


小札出土状況

写真図版93　E区SI３②

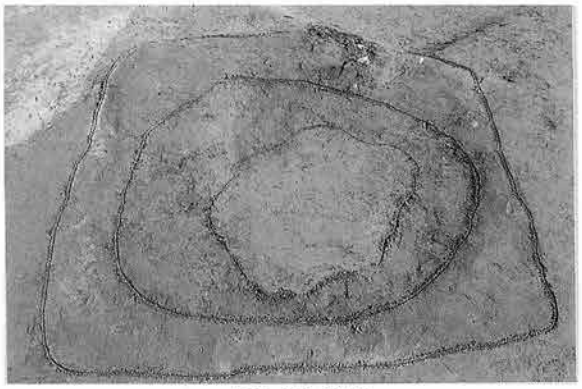


E区 SI4 完掘

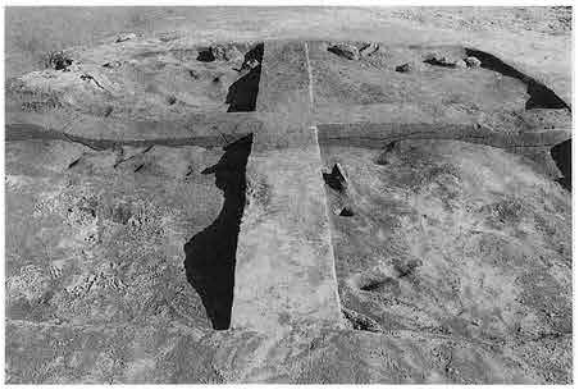


E区 SI4 蕨手刀出土状況

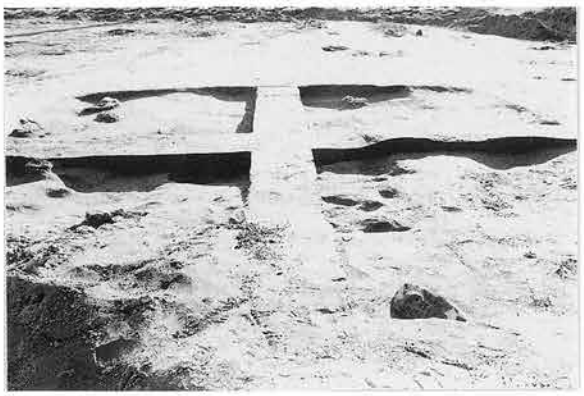
写真図版94　E区SI４①



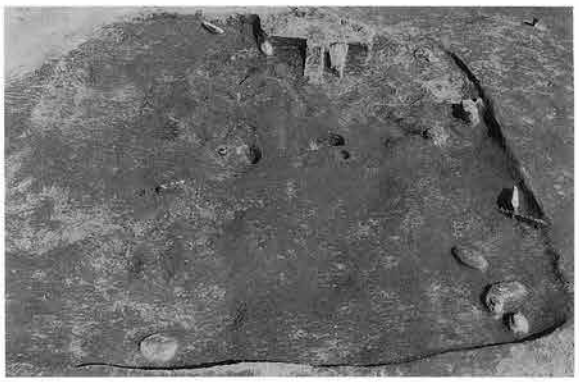
E区 SI4 検出



E 区 SI4 断面(東西)



E区 SI4 断面(南北)



E区 SI4 遺物出土状況

E区 SI4 完掘

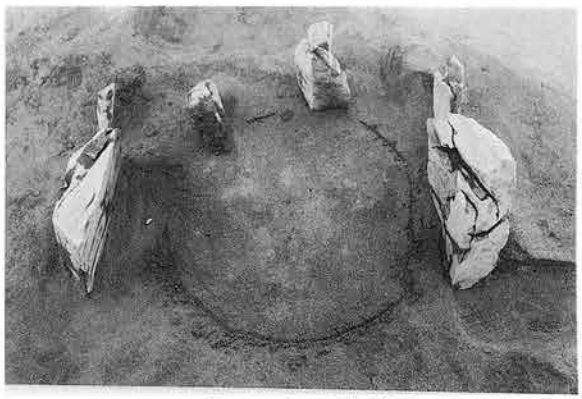
E 区 SI4 カマド断面(南北)

E 区 SI4 カマド断面(東西)

カマド火焼面断面(東西)

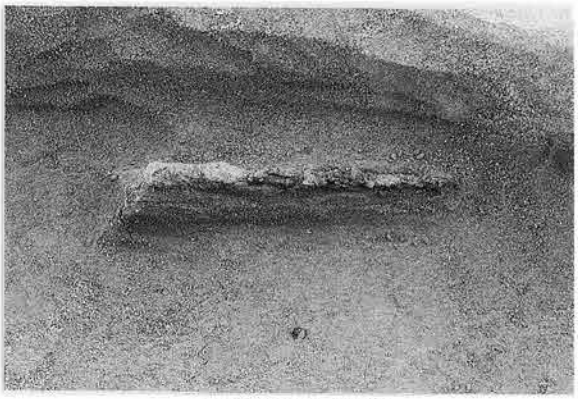
写真図版95　E区SI 4 ②

E区 SI4 カマド完掘

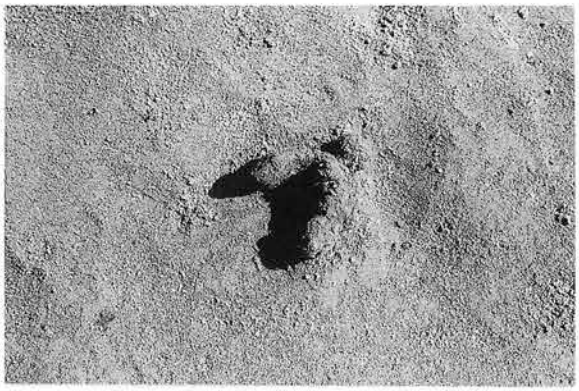


E区 SI4 カマド火焼面

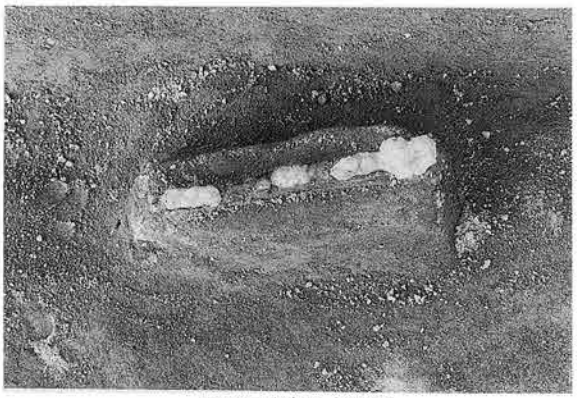
鉄製品(2)出土状況



鉄製品(3)出土状況

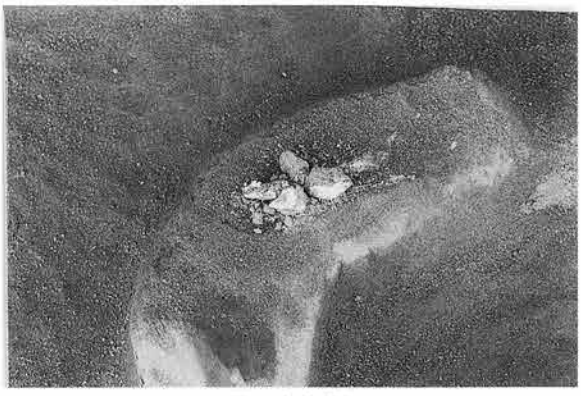


鉄製品(4)、(5)出土状況



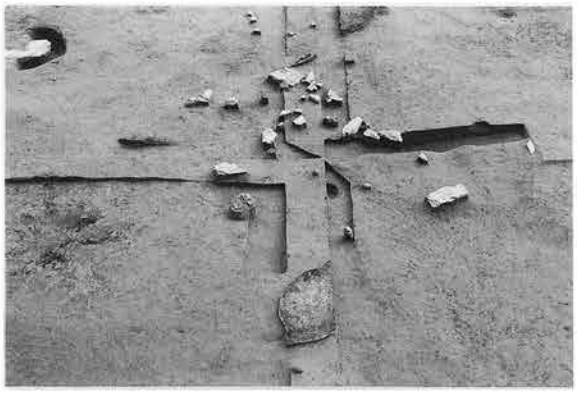
鉄製品(7)出土状況

骨1 出土状況



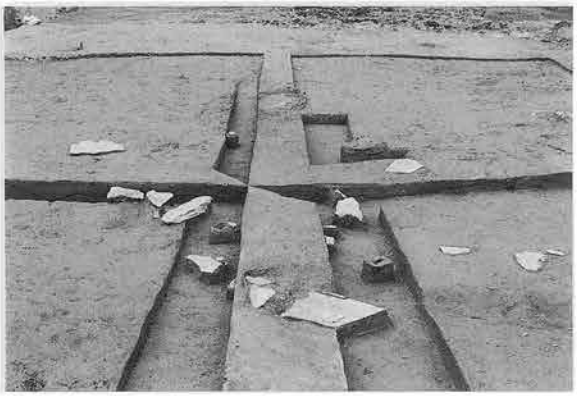
骨5 出土状況

写真図版96　E区SI 4 ③

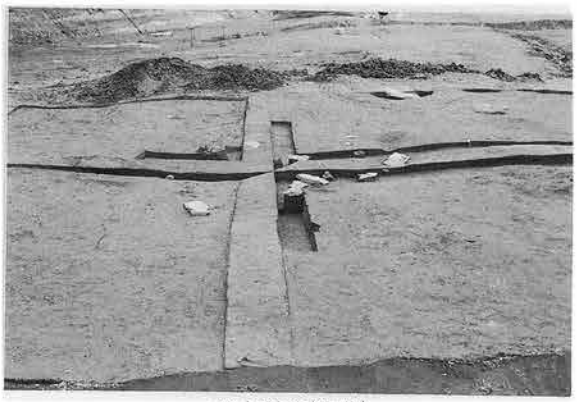


完掘

完掘

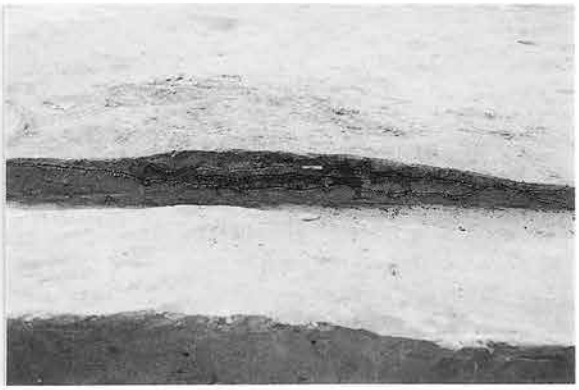


埋土断面(東西)



埋土断面(南北)

焼土1 検出



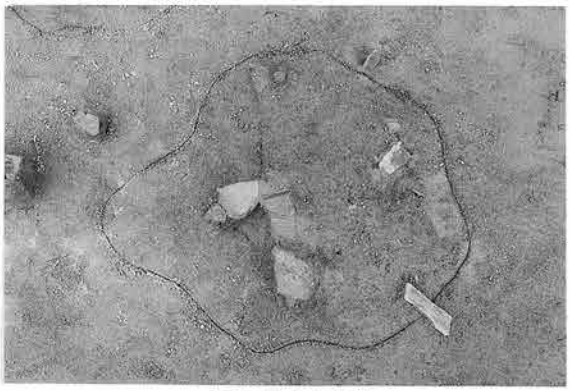
焼土1 断面

焼土2 断面

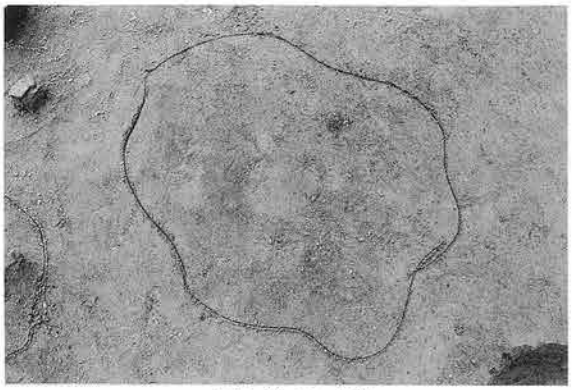
遺物出土状況

写真図版97　E区SX１

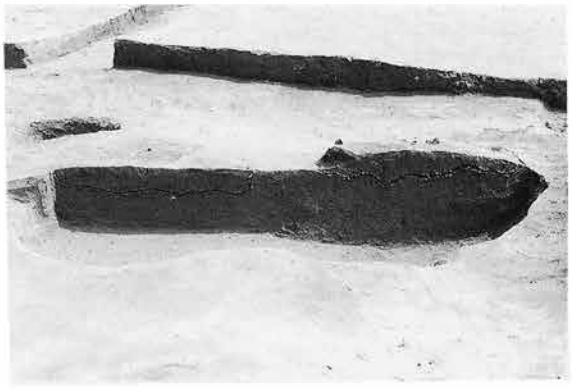
E区 焼土1 全景



E区 焼土1 南側



E区 焼土1 北側



E区 焼土1 断面

作業風景

写真図版98　E区焼土１

E区 SB1 完掘

E区 SB1 完掘

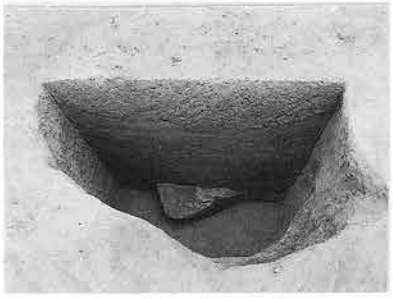
写真図版99　E区SB 1

SK1 完掘

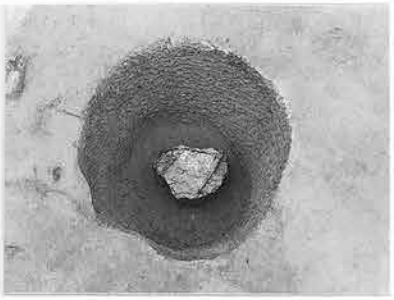
SK1 貝殻出土状況

SK1 断面

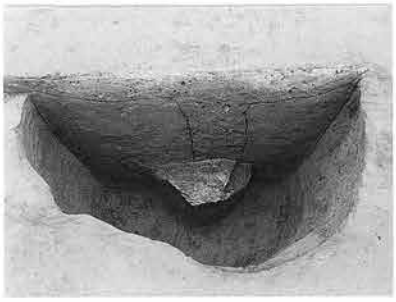
SK2 完掘



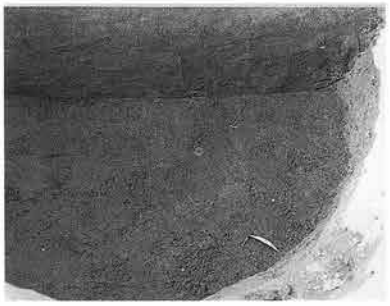
SK2 断面



SK3 完掘



SK3 断面

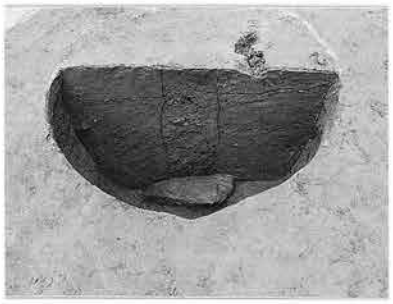


SK3 銭出土状況

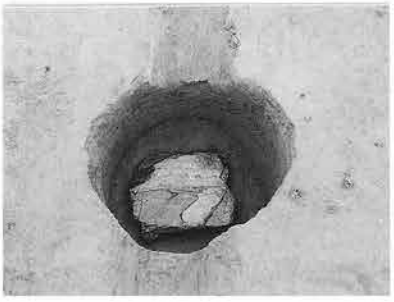
P1 完掘

P1 断面

P2 完掘



P2 断面

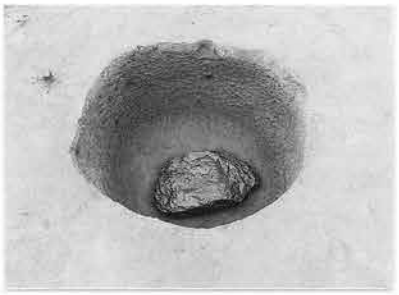


P3 完掘

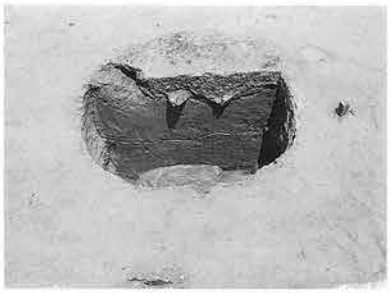
P3 断面

P3 銭出土状況

写真図版100　E区SB１柱穴①



P4 断面



P4 断面

P4 礫出土

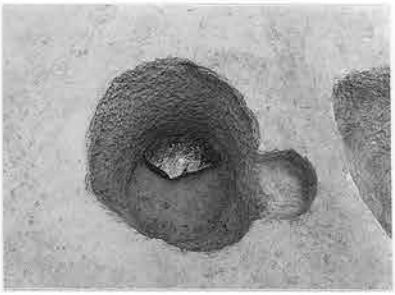
P5 断面

P5 断面

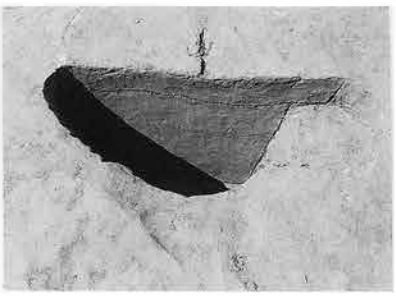
P6 完掘

P6 断面

P6 銭出土状況

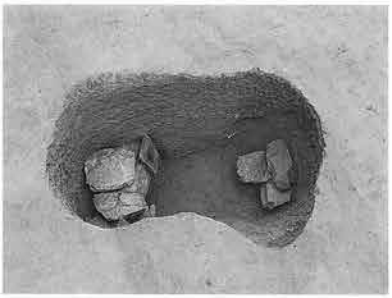


P7 完掘



P7 断面

P6 挽臼出土状況



P8 完掘

P8 断面

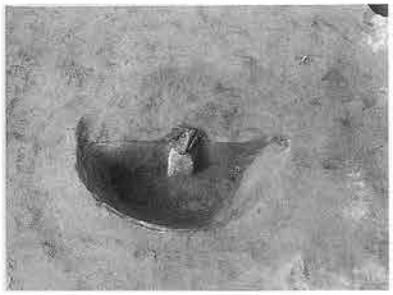
P9 完掘

P9 断面

写真図版101　E区SB１柱穴②

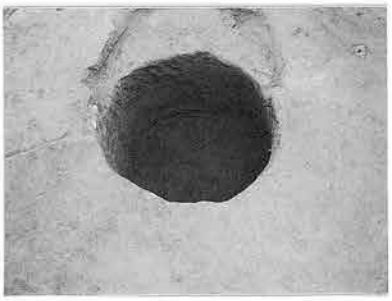
P10 完掘

P10 断面



P11 完掘

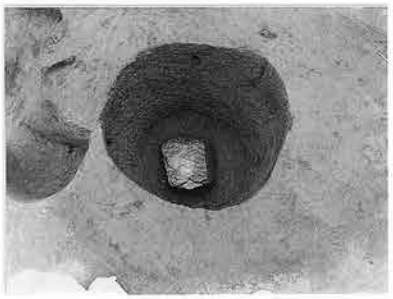
P11 断面



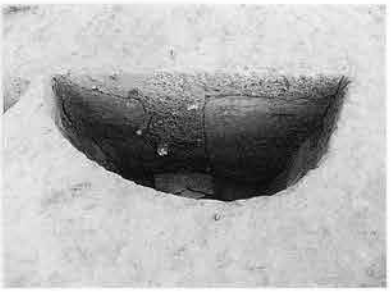
P12 完掘

P12 断面

P13 完掘



P14 完掘

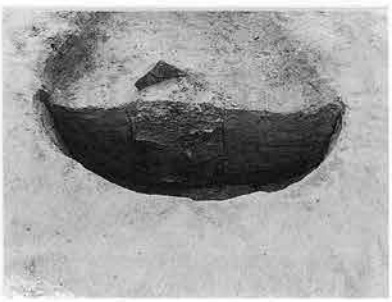


P14 断面

P15 完掘

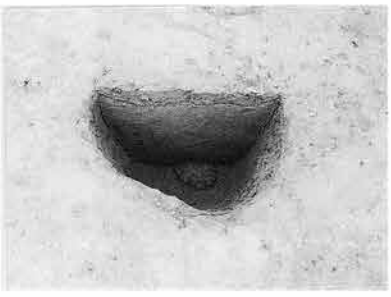
P15 断面

P16 完掘



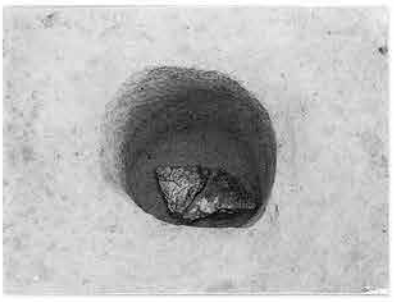
P16 断面

P17 完掘

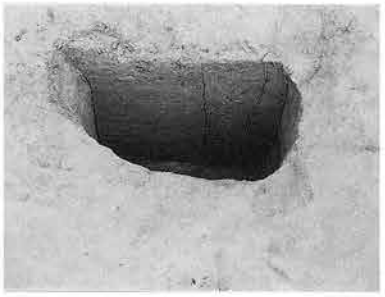


P17 断面

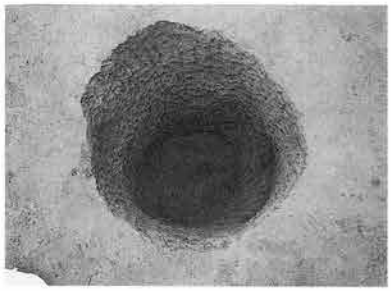
写真図版102　E区SB１柱穴③



P18 完掘



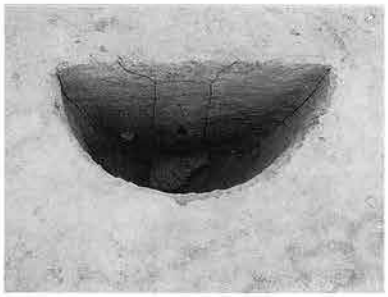
P18 断面



P19 完掘

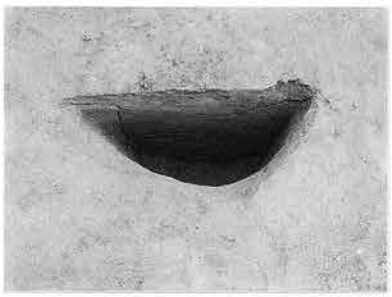
P19 断面

P20 完掘



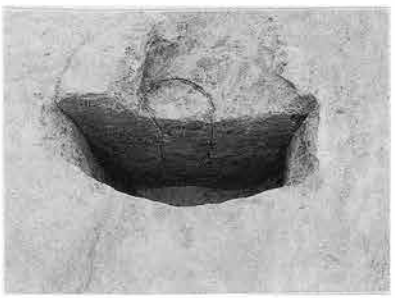
P20 断面

P21 完掘



P21 断面

P22 完掘



P22 断面

P23 完掘

P23 断面

P24 完掘

P24 断面

P25 完掘

写真図版103　E区SB１柱穴④

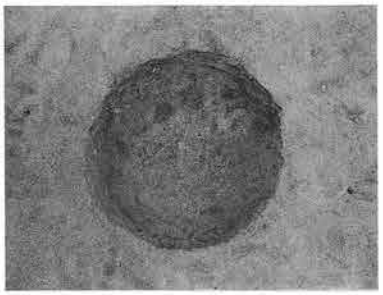
P25 断面

P26 完掘

P26 断面

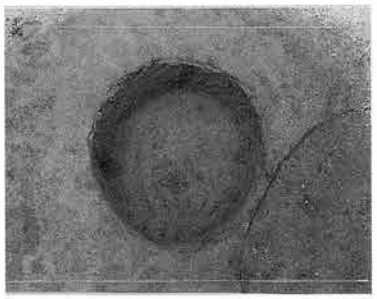
P27 完掘

P27 断面



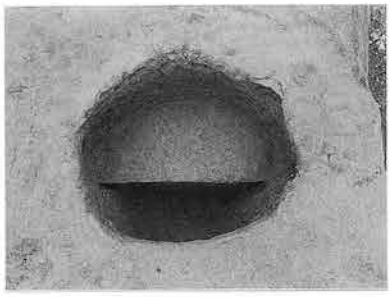
P28 完掘

P28 断面

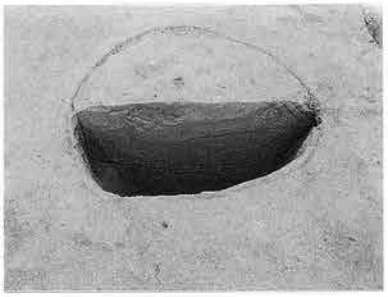


P29 完掘

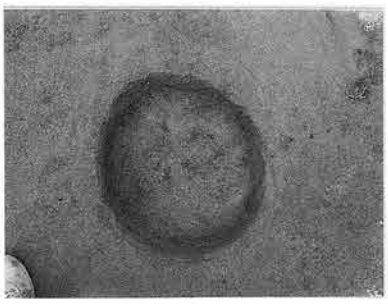
P29 断面



P30 完掘

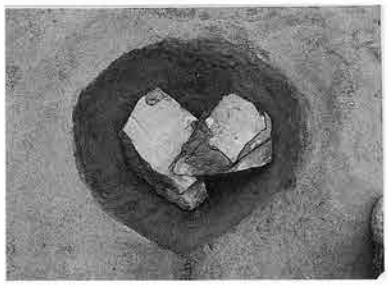


P30 断面

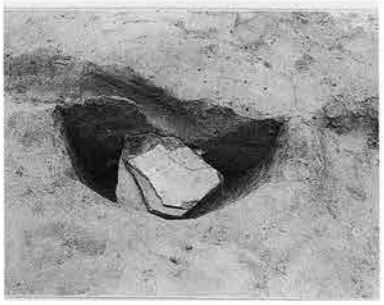


P31 完掘

P31 断面



P32 完掘



P32 断面

写真図版104　E区SB１柱穴⑤

P33 完掘

P33 断面

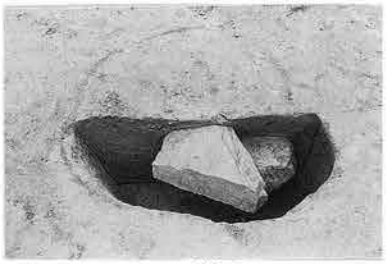
P34 完掘

P34 断面

P35 完掘

P35 断面

P36 完掘


P36 断面

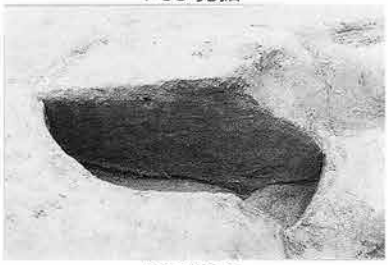
P37 完掘

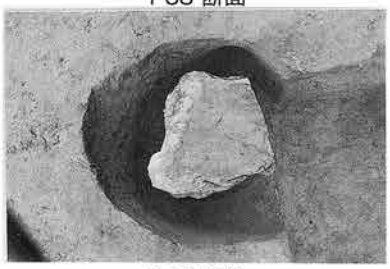
P37 断面

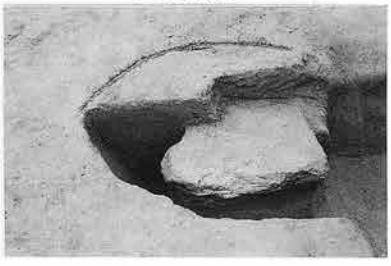
P38 完掘

P38 断面

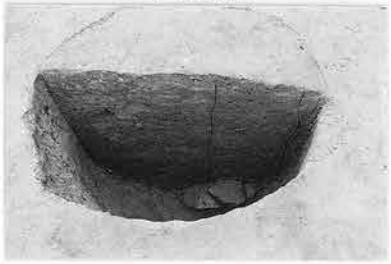
P39 完掘


P39 断面


P40 完掘


P40 断面

P41 完掘

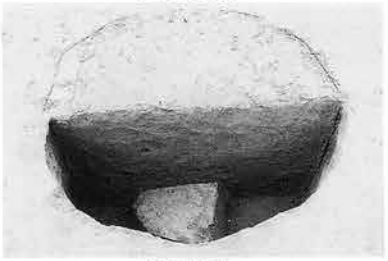

P41 断面

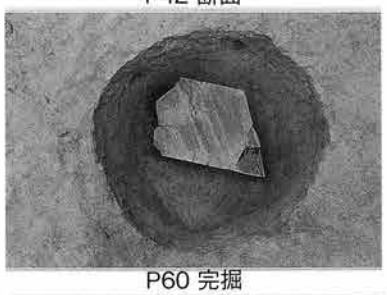
写真図版105　E区SB１柱穴⑥

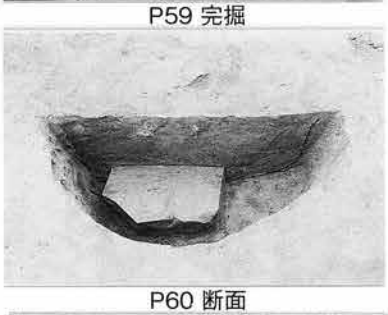
P42 完掘

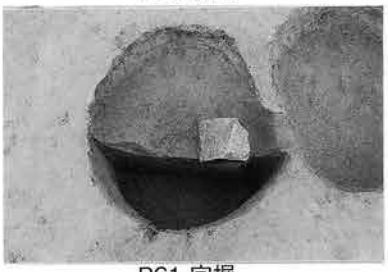
P42 断面

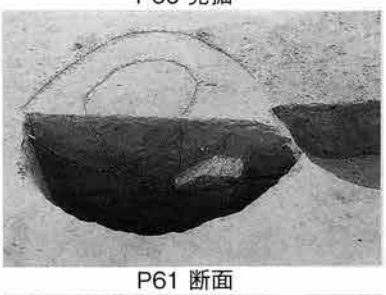
P59 完掘

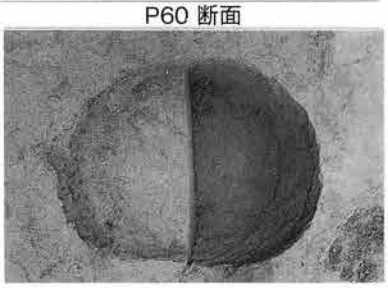

P59 断面


P60 完掘


P60 断面


P61 完掘


P61 断面


P62 完掘

P62 断面

P63 完掘

P63 断面

P64 完掘

P64 断面

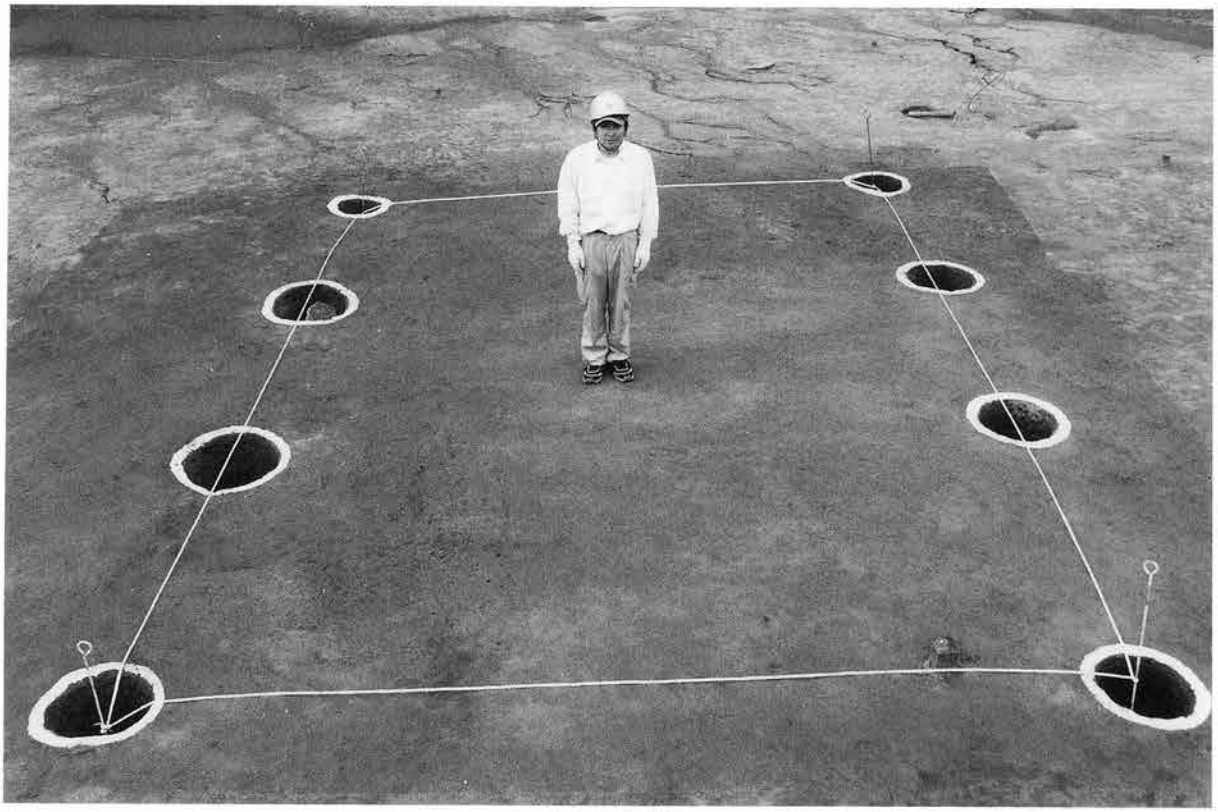
P65 完掘

P65 断面

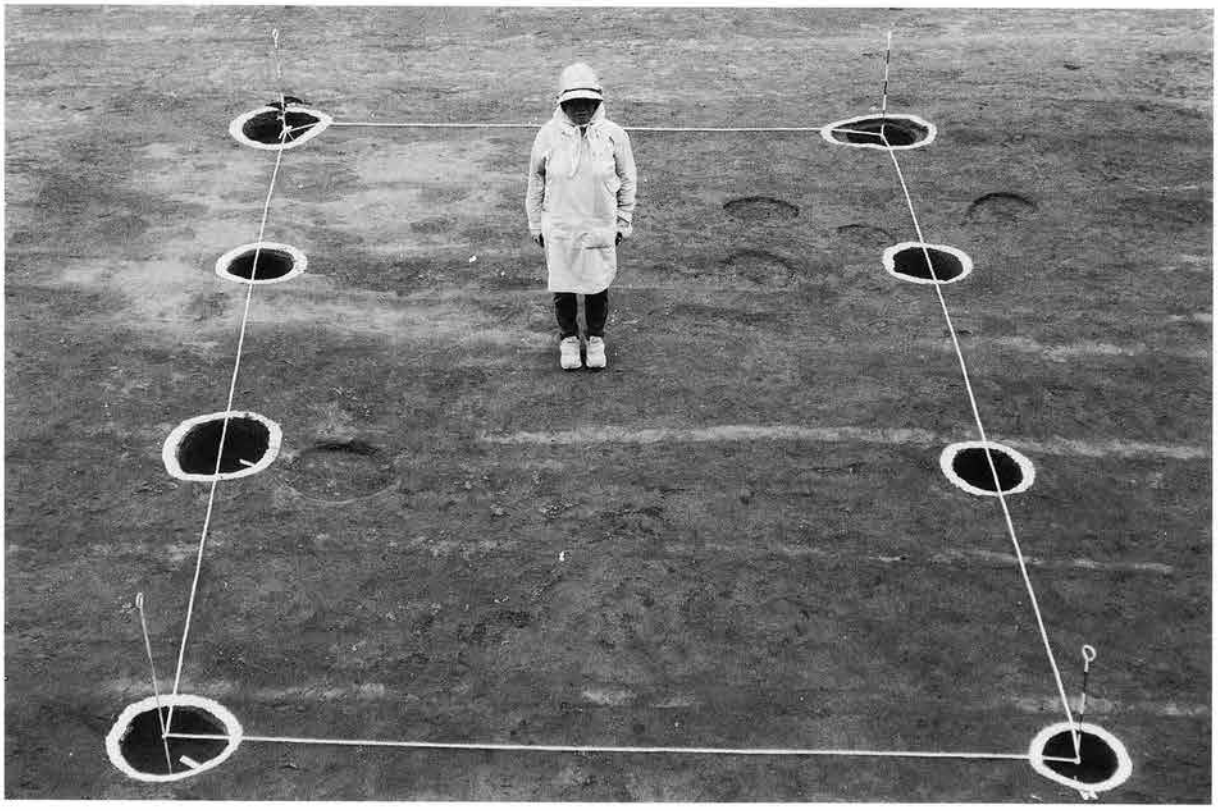
P66 完掘

P66 断面

写真図版106　E区SB１柱穴⑦

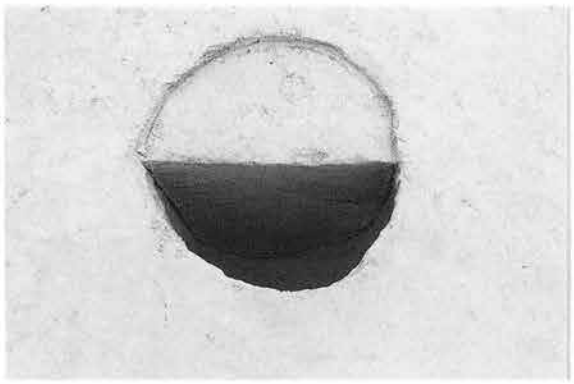


E区 SB2完掘

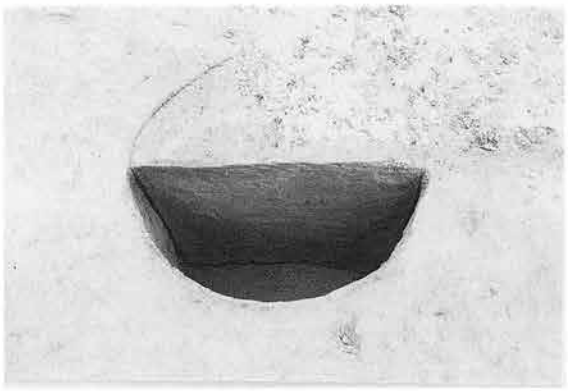


E区 SB3完掘

写真図版107　E区SB２・３

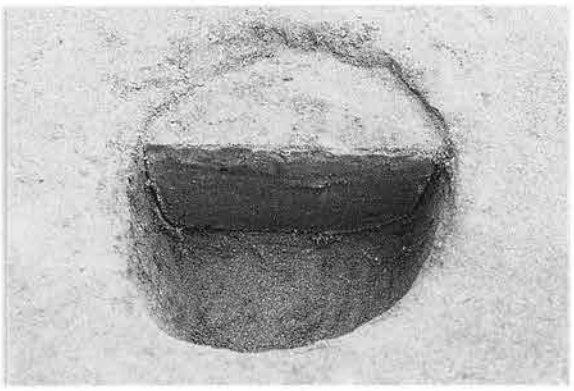


P43 断面

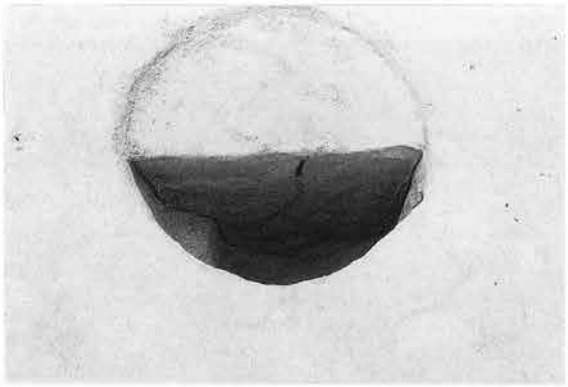


P44 断面

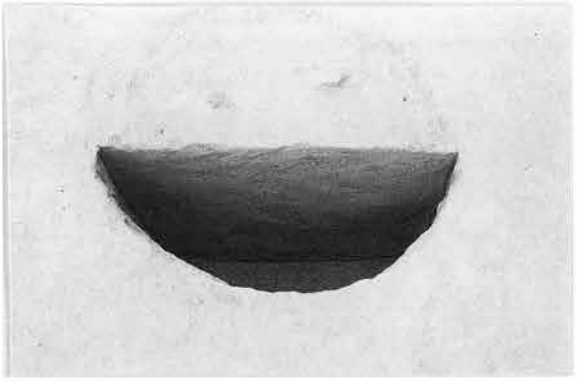
P45 断面



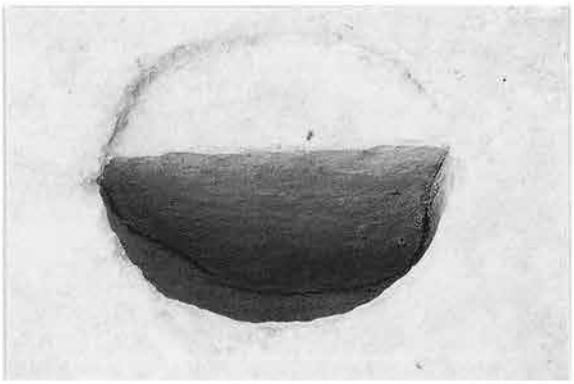
P46 断面



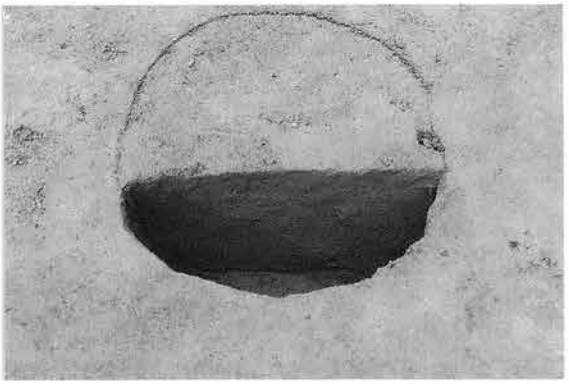
P47 断面



P48 断面

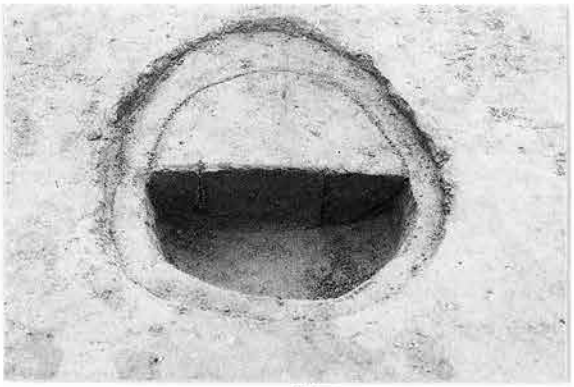


P49 断面

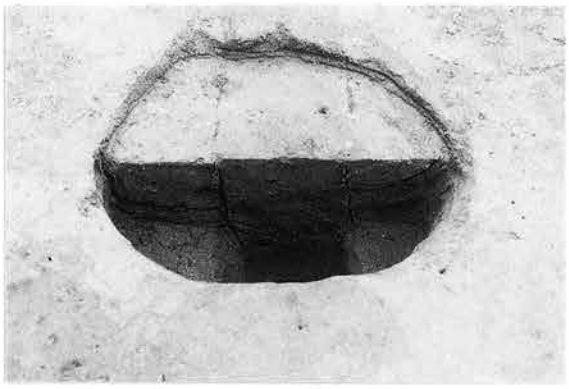


P50 断面

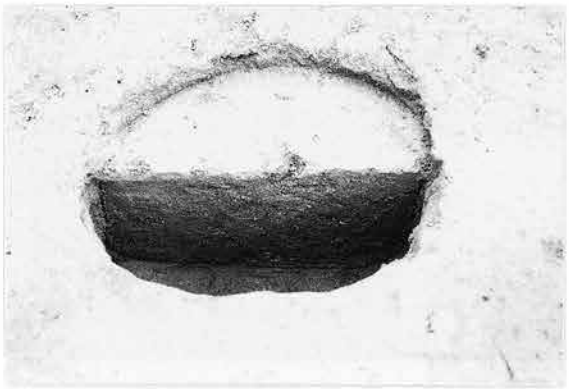
写真図版108　E区SB２柱穴



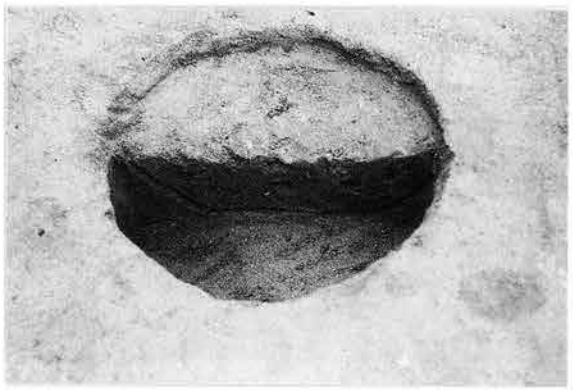
P51 断面



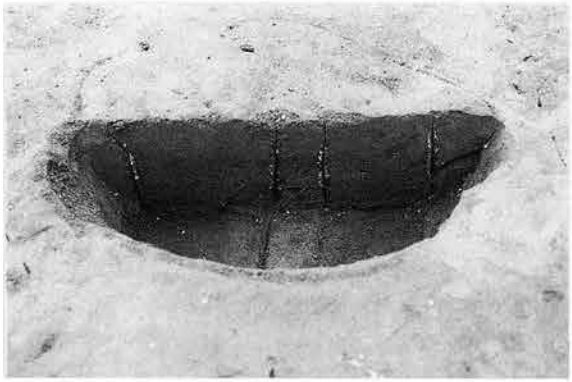
P52 断面



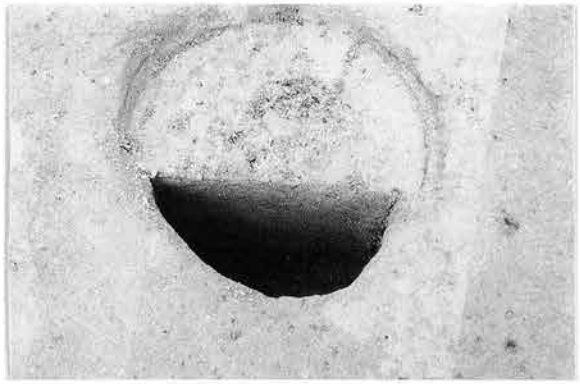
P53 断面



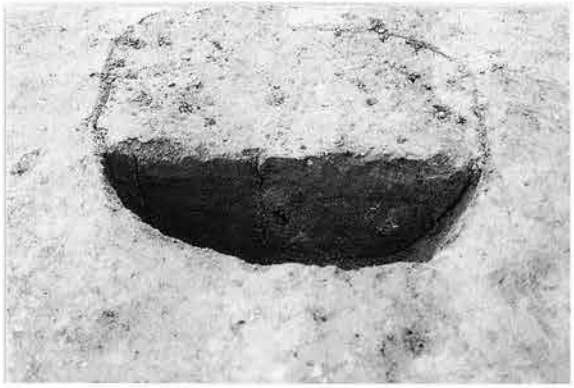
P54 断面



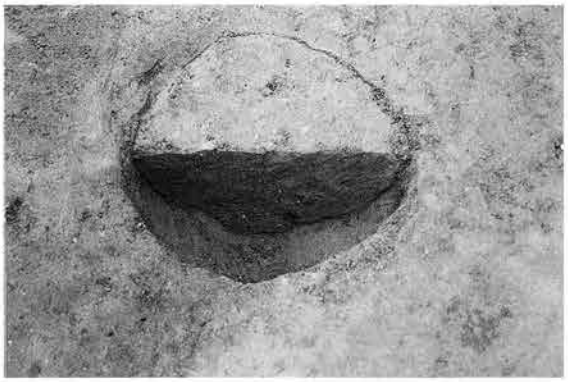
P55 断面



P56 断面

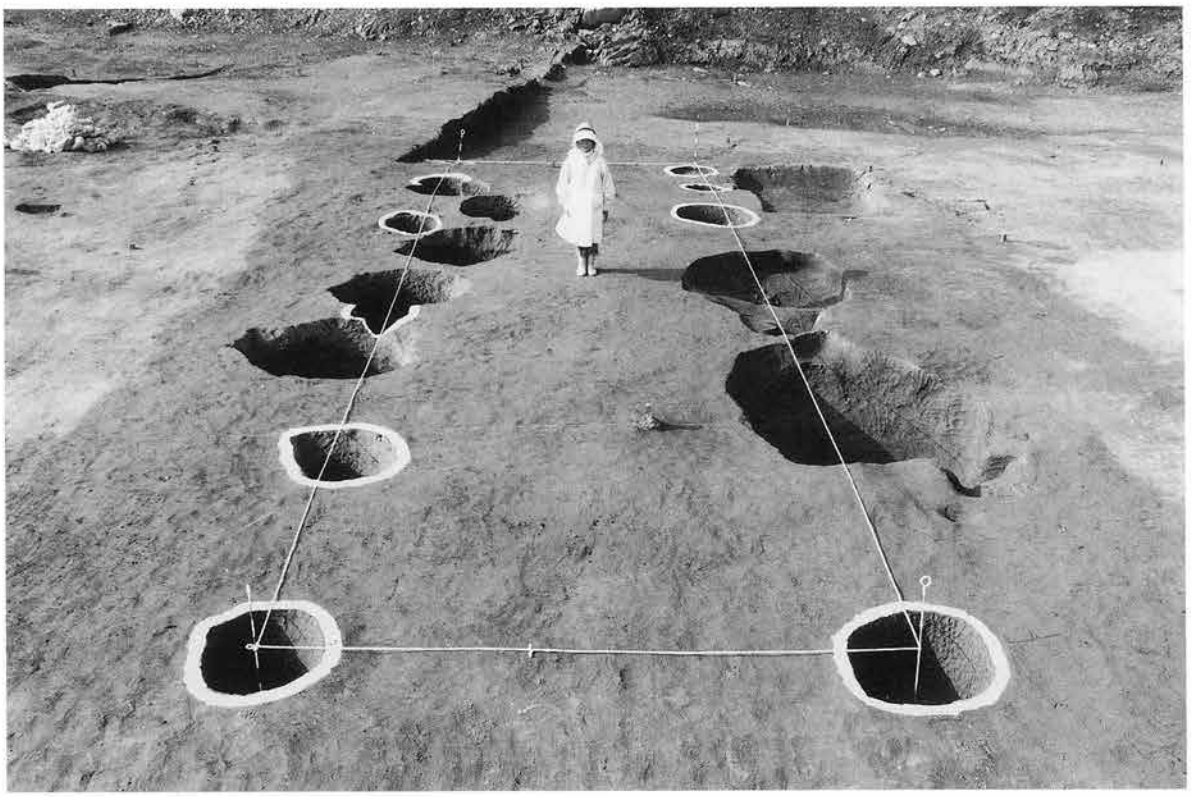


P57 断面

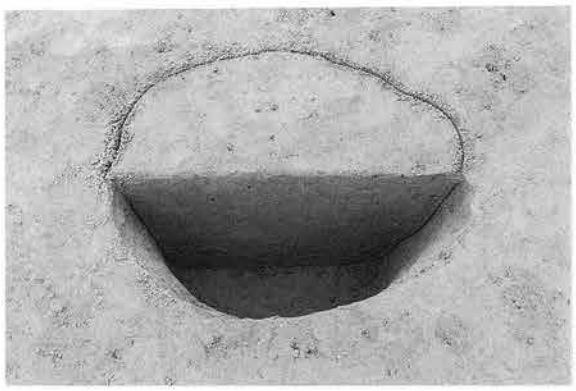


P58 断面

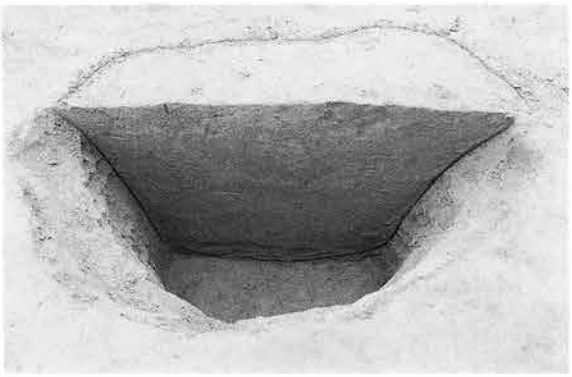
写真図版109　E区SB３柱穴



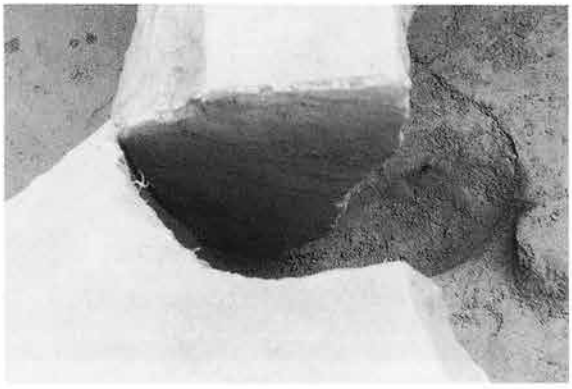
E区 SB4 完掘



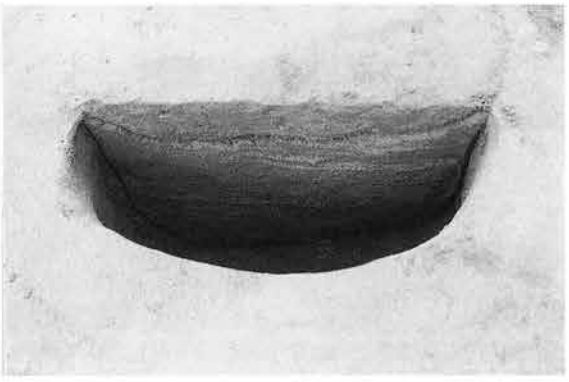
P68 断面



P69 断面

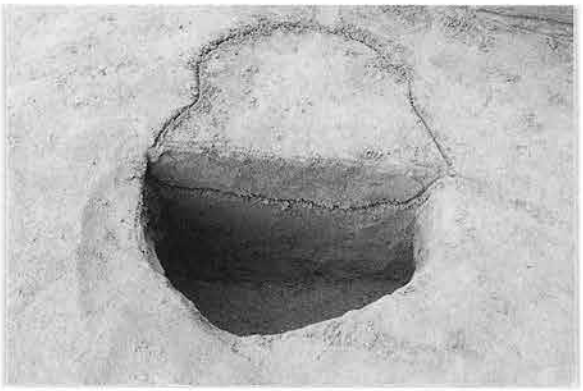


P70 断面

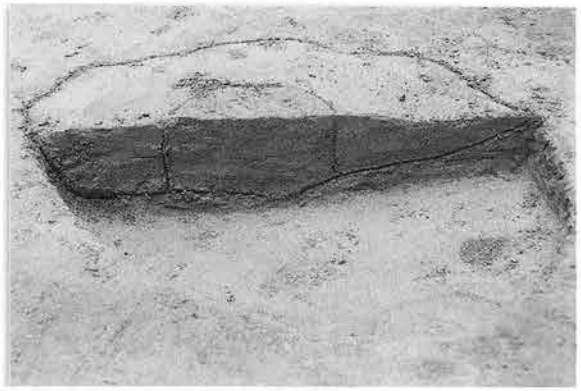


P71 断面

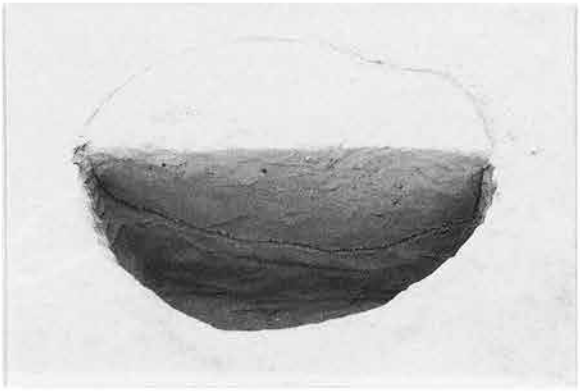
写真図版110　E区SB４完掘、柱穴



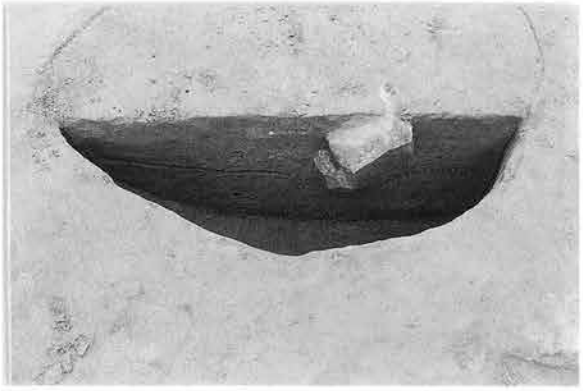
P72 断面



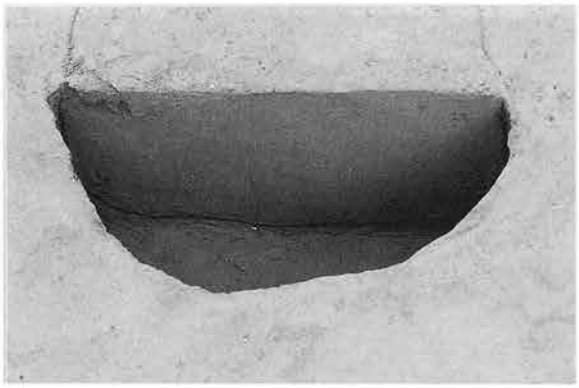
P73 断面



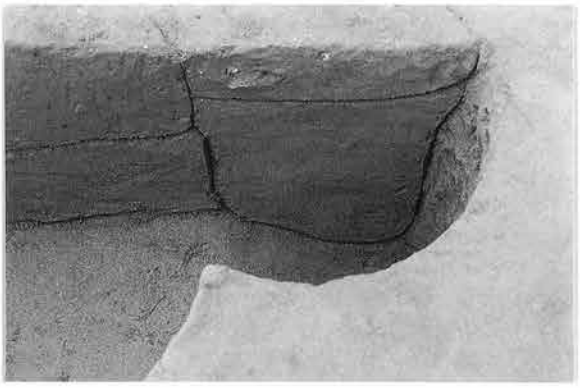
P74 断面



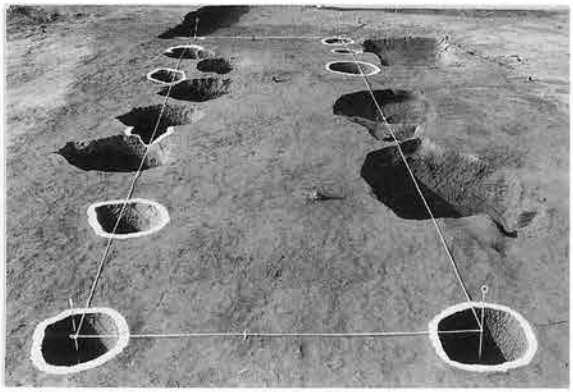
P75 断面



P76 断面



P77 断面

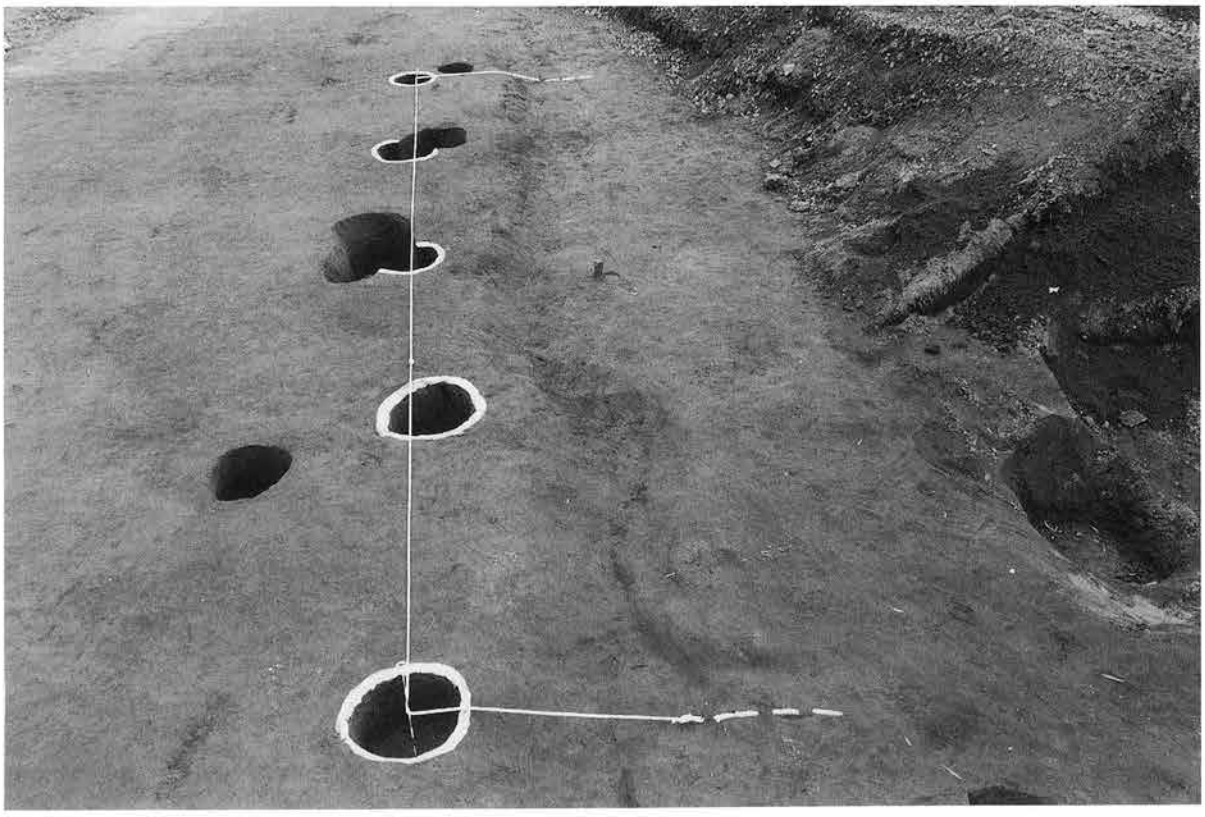


E区 SB4 完掘

作業風景

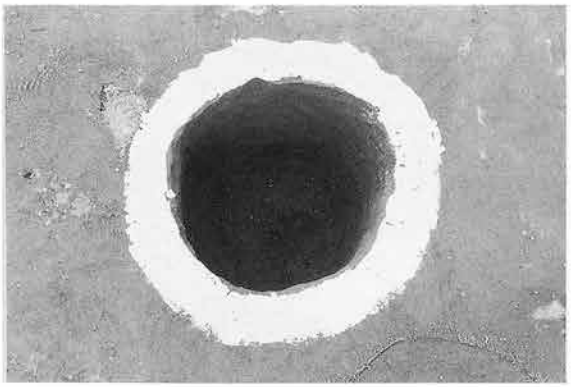
写真図版111　E区SB４柱穴

E区 SB5 完掘

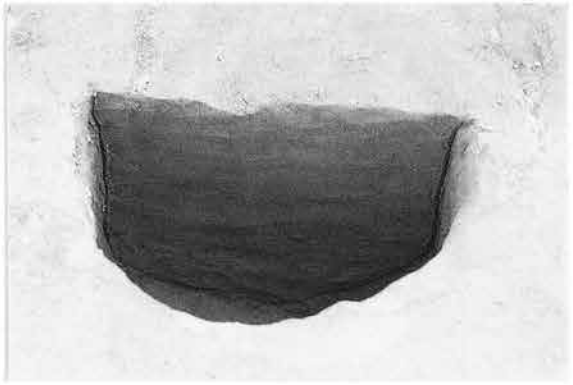


E区 SB6 完掘

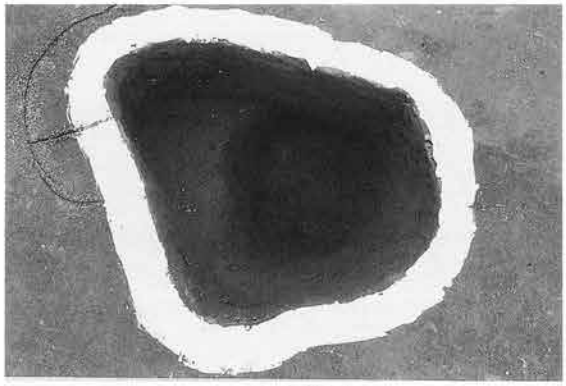
写真図版112　E区SB５・６



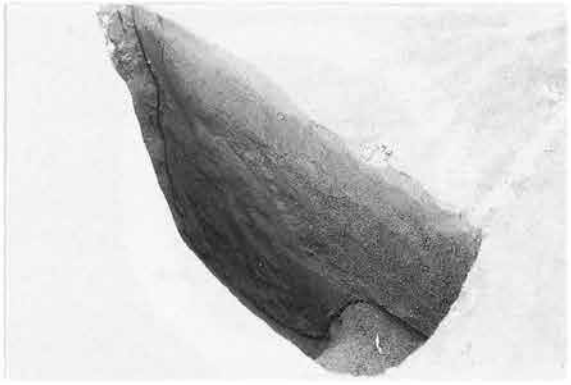
P86 完掘



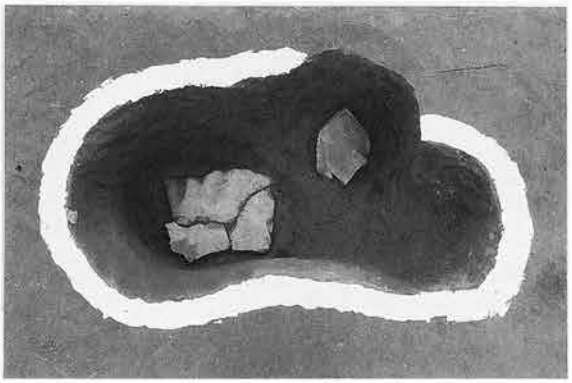
P86 断面



P87 完掘

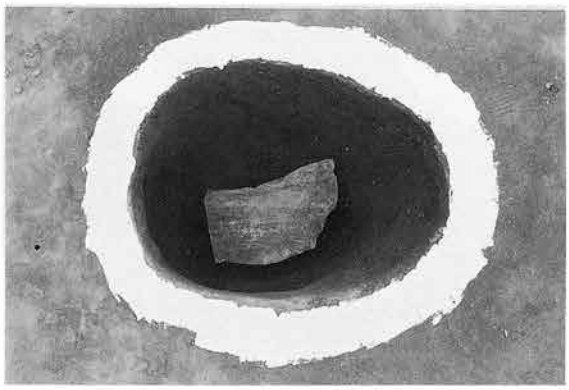


P87 断面

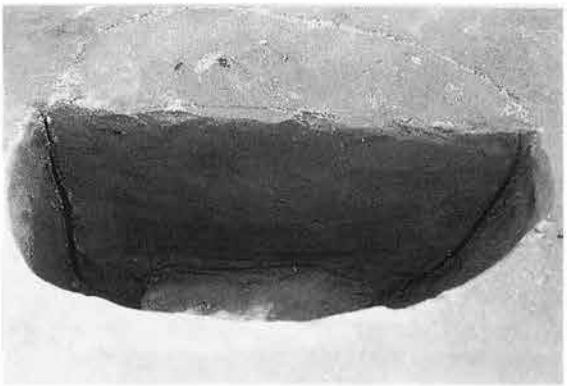


P88 完掘

P88 断面

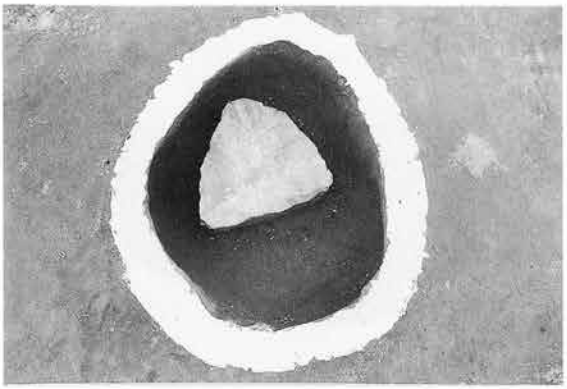


P89 完掘



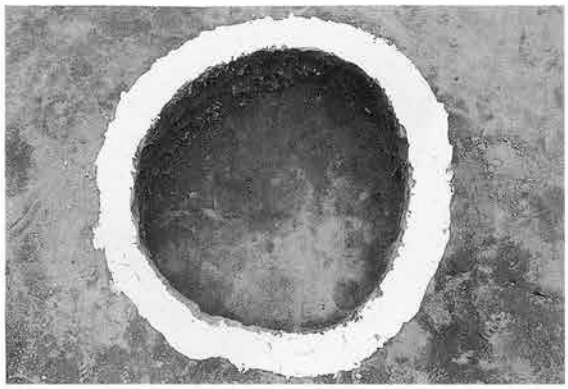
P89 断面

写真図版113　E区SB５柱穴



P90 完掘

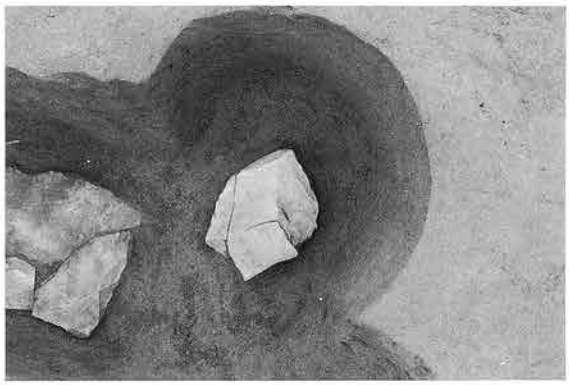
P90 断面



P91 完掘

P91 断面

E区 SB5 完掘

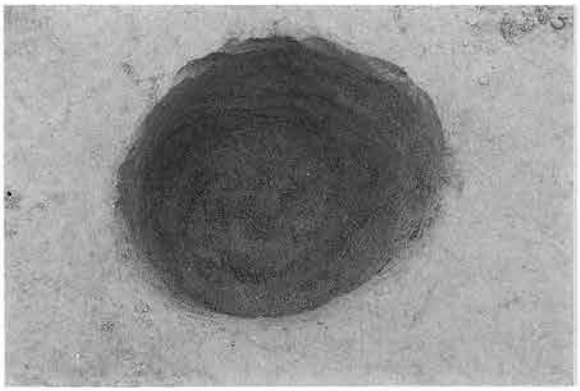


P94 完掘

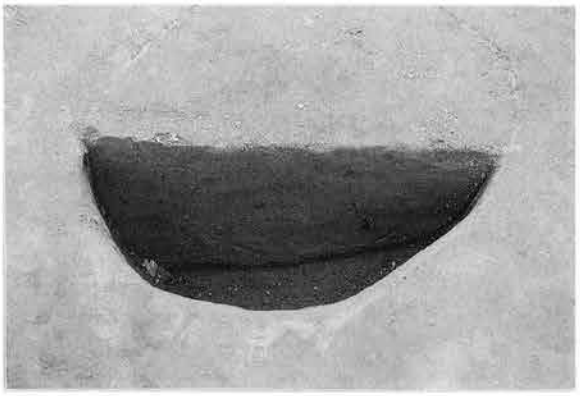
P94 断面

P94 銭出土状況

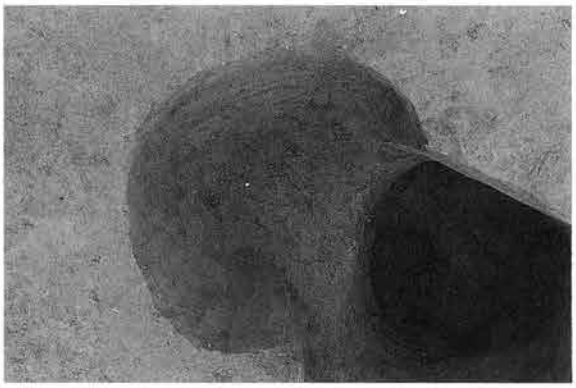
写真図版114　E区SB５・６柱穴



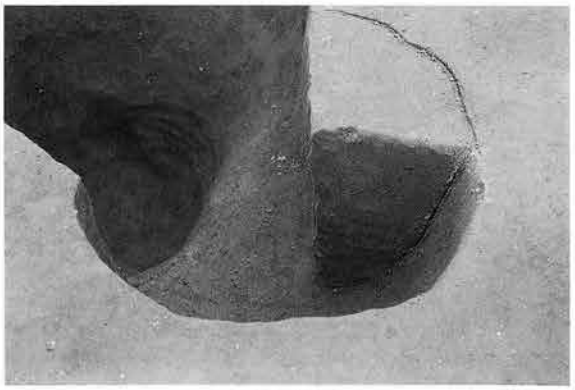
P95 完掘



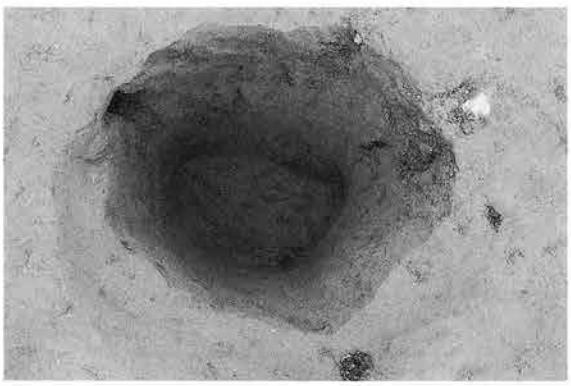
P95 断面



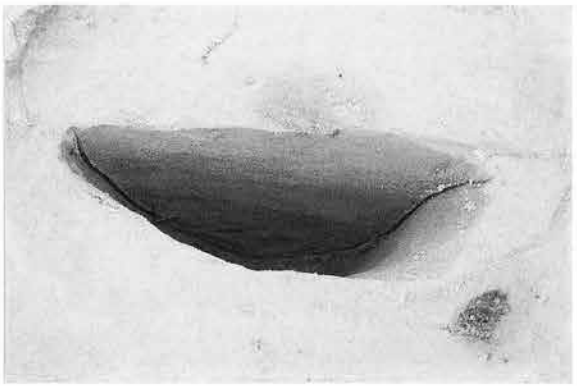
P96 完掘



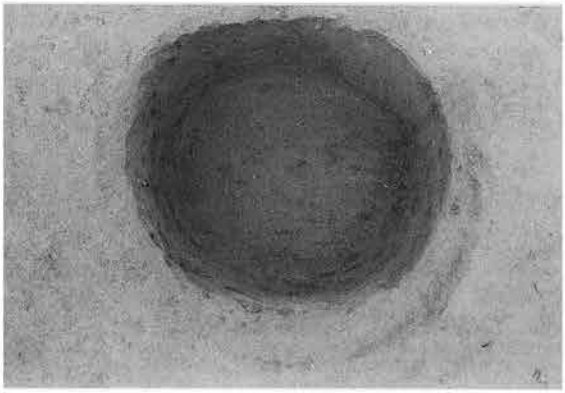
P96 断面



P97 完掘



P97 断面

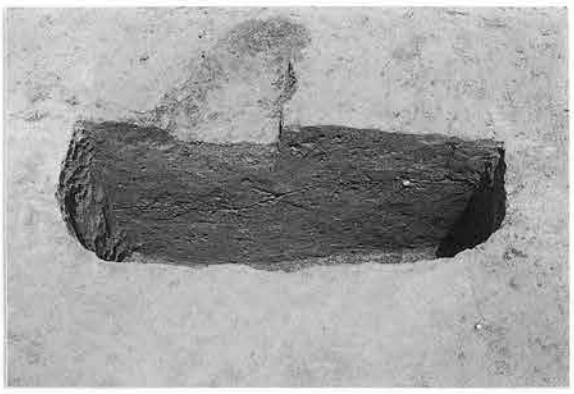


P98 完掘

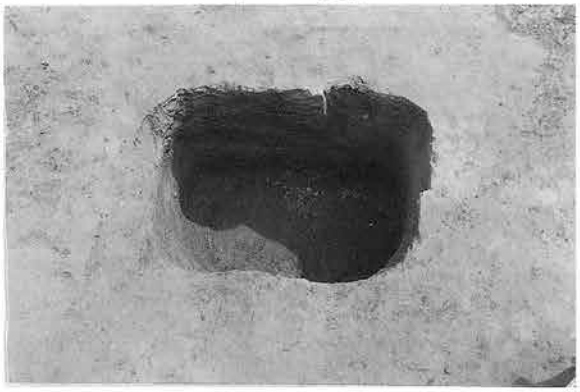
P98 断面

写真図版115　E区SB６柱穴

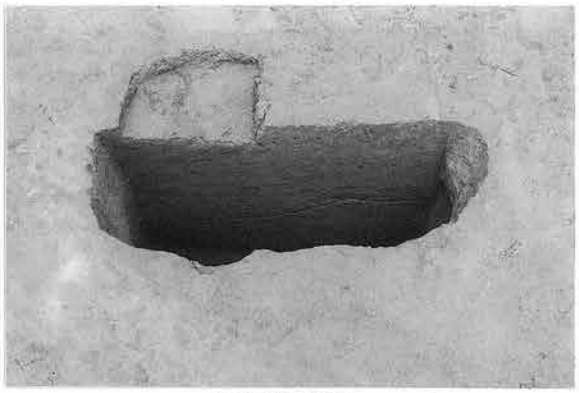
E区 SK4 完掘



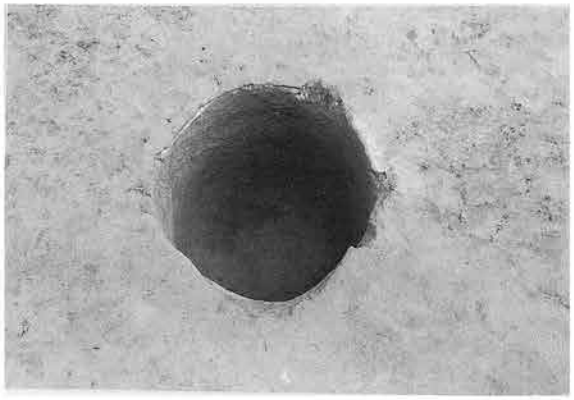
E区 SK4 断面



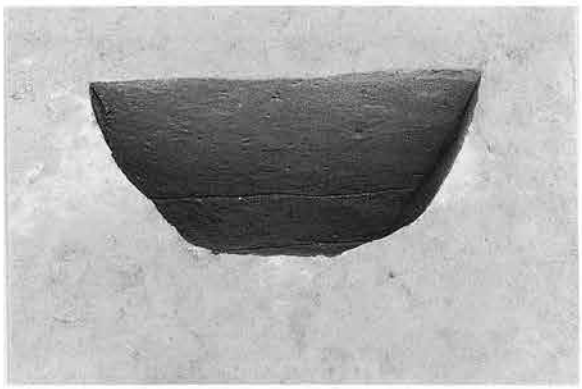
E区 SK5 完掘



E区 SK5 断面

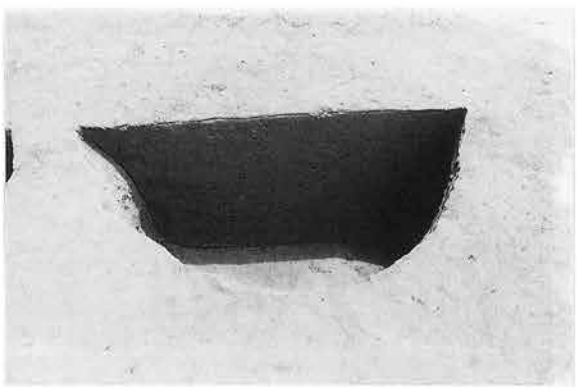


E区 SK6 完掘



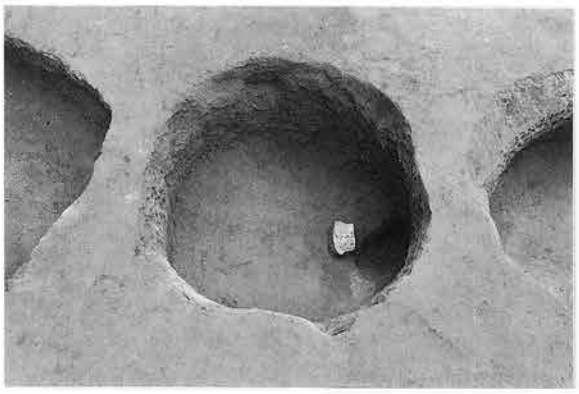
E区 SK6 断面

E区 SK7 完掘

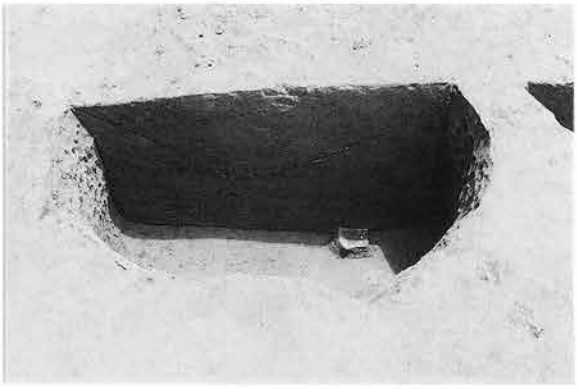


E区 SK7 断面

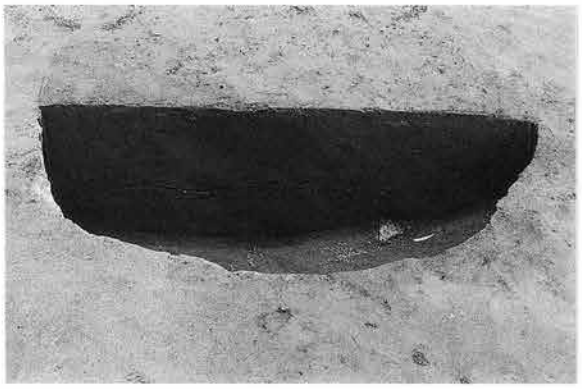
写真図版116　E区SK４～７



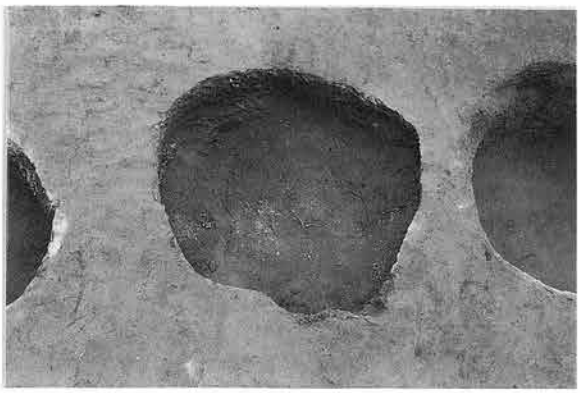
E区 SK8 完掘



E区 SK8 断面

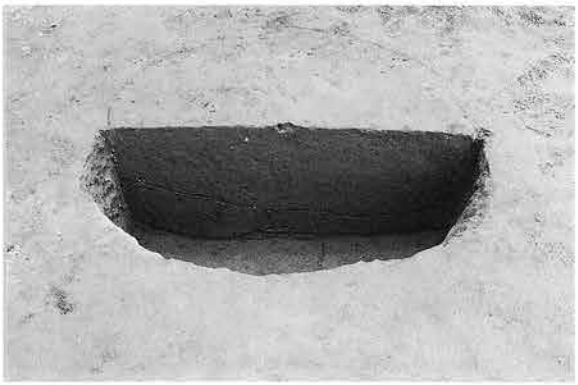


E区 SK9 断面



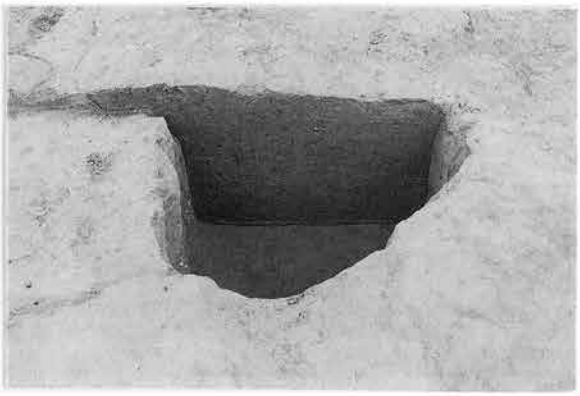
E区 SK9 完掘

E区 SK10 完掘



E区 SK10 断面

E区 SK11 完掘



E区 SK11 断面

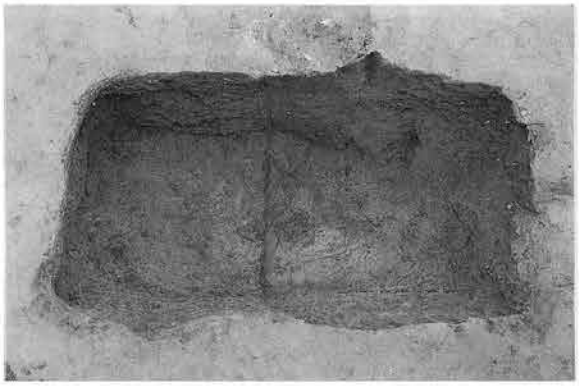
写真図版117　E区SK８～11

E区 SK12 完掘

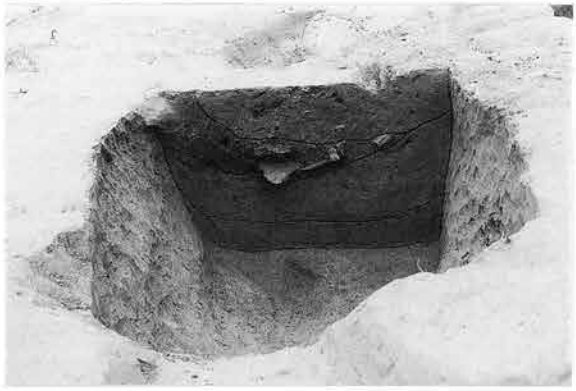
E区 SK12 断面

E区 SK13 完掘

E区 SK13 断面



E区 SK14 完掘



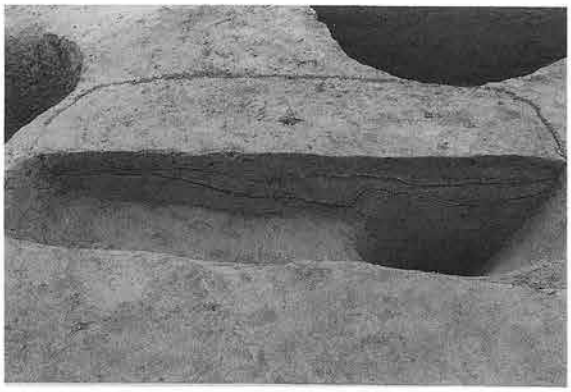
E区 SK14 断面

E区 SK15 完掘

E区 SK15 断面

写真図版118　E区SK12～15

E区 SK16 完掘



E区 SK16 断面

E区 SK17 完掘

E区 SK17 断面

E区 SK18 完掘

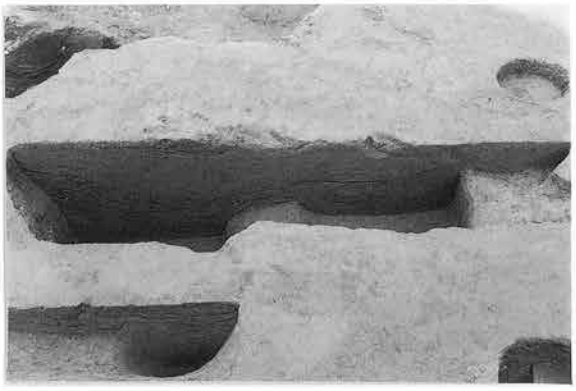
E区 SK18 断面

E区 SK19 完掘

E区 SK19 断面

写真図版119　E区SK16～19

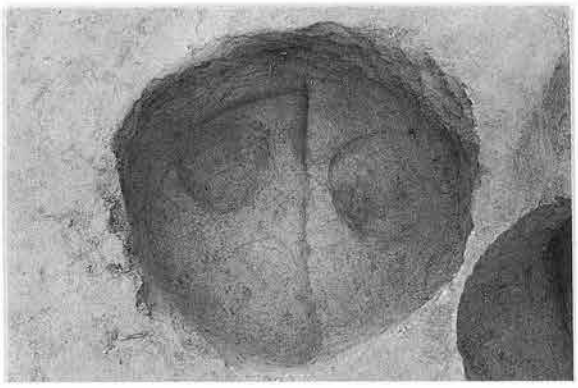
E区 SK20 完掘



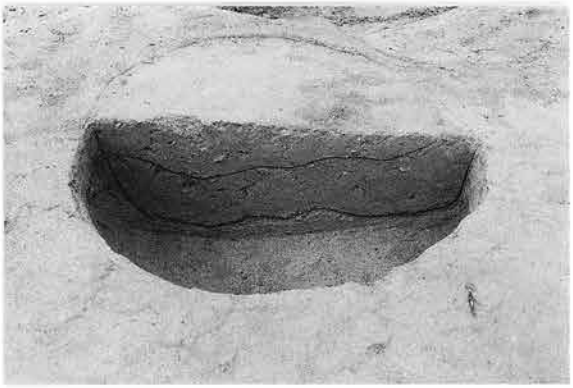
E区 SK20 断面

E区 SK21 完掘

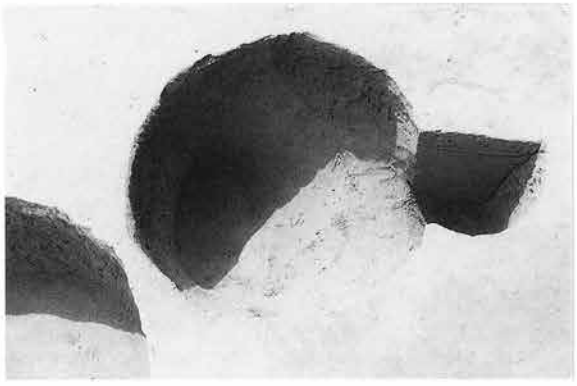
E区 SK21 断面



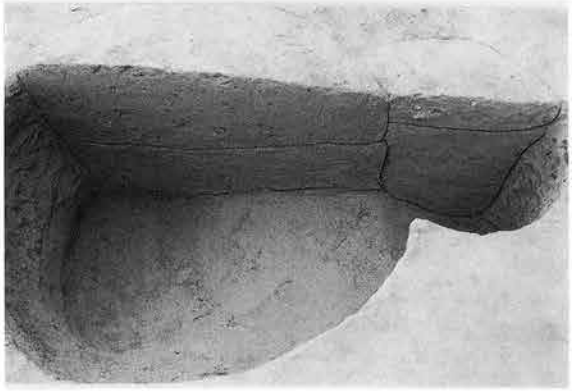
E区 SK22 完掘



E区 SK22 断面



E区 SK23 完掘



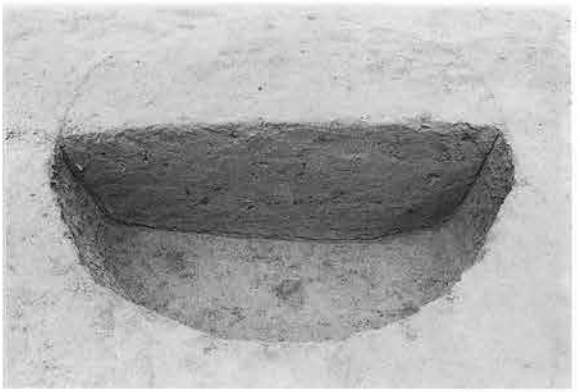
E区 SK23 断面

写真図版120　E区SK20～23

E区 SK24 完掘

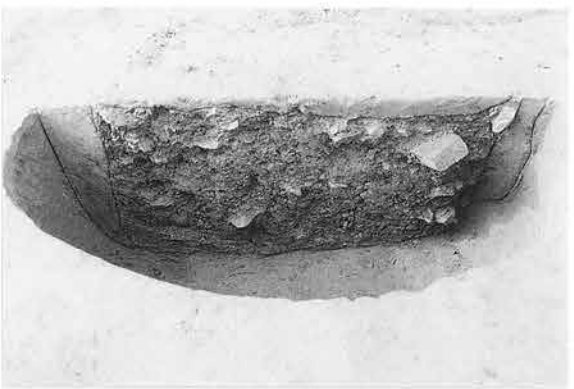
E区 SK24 断面

E区 SK25 完掘



E区 SK25 断面

E区 SK26 完掘



E区 SK26 断面

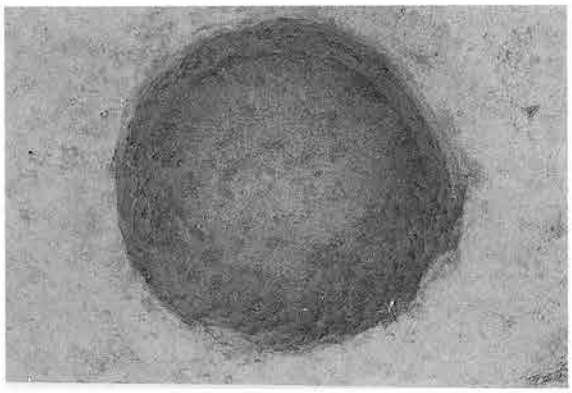
E区 SK27 断面

E区 SK27 完掘

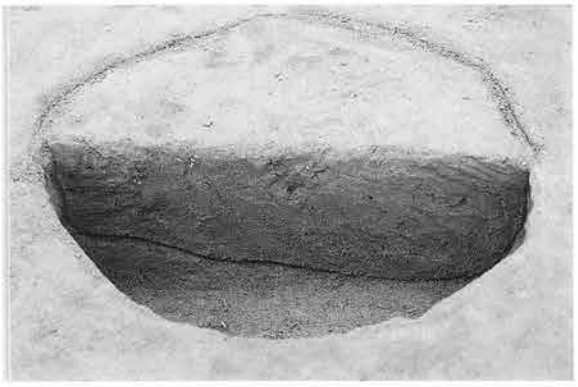
写真図版121　E区SK24～27

E区 SK28 完掘

E区 SK28 断面



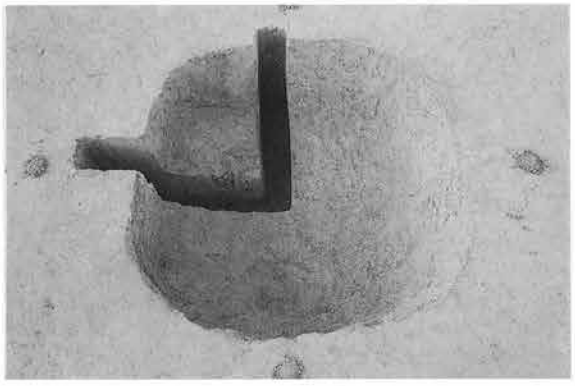
E区 SK29 完掘



E区 SK29 断面

E区 SK30 完掘

E区 SK30 断面



E区 SK31 完掘

E区 SK31 断面

写真図版122　E区SK28～31

調査風景(平成15年)

調査風景(平成15年)

現地説明会(平成15年)

写真図版123　調査風景、現地説明会など(平成15年)

作業風景(平成16年)

門崎小学校体験発掘(平成16年7月21日)

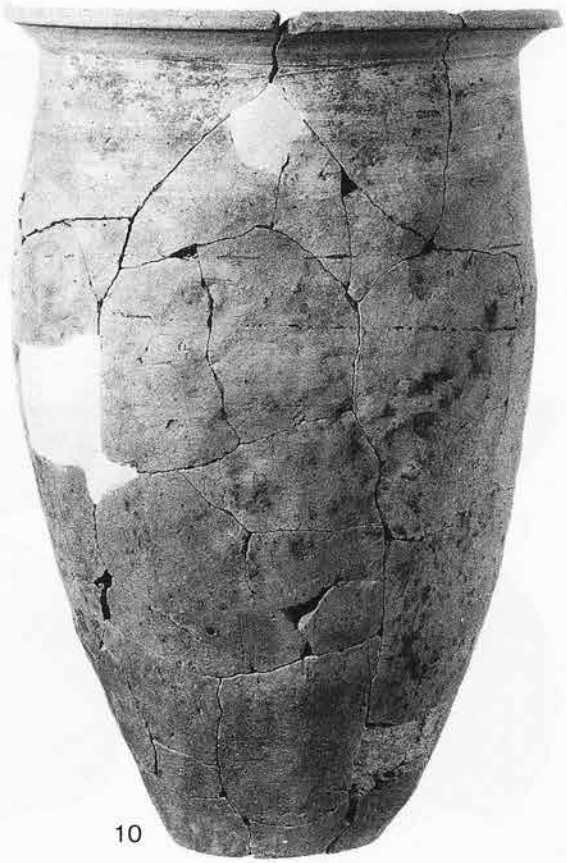
現地説明会(平成16年7月24日)

平成16年度　調査終了時

写真図版124　調査風景、現地説明会など(平成16年度)

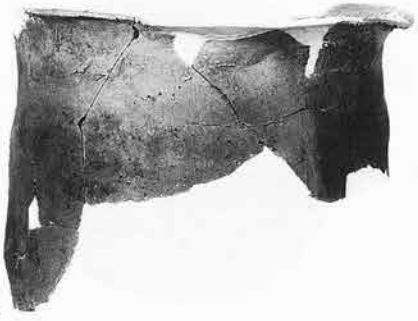
写真図版125　C区SI１の土師器、須恵器①（１～８）

9



10

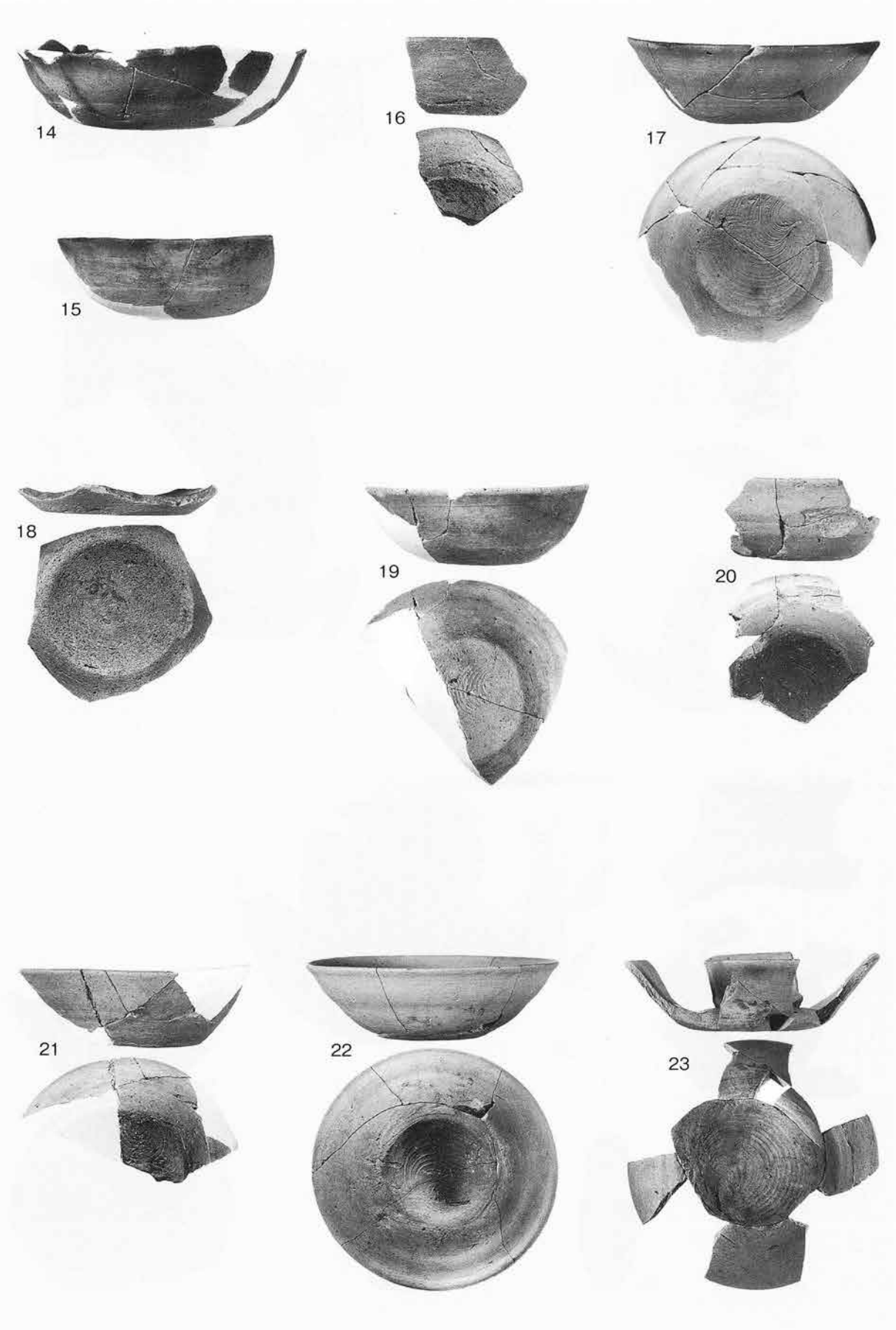
11



12

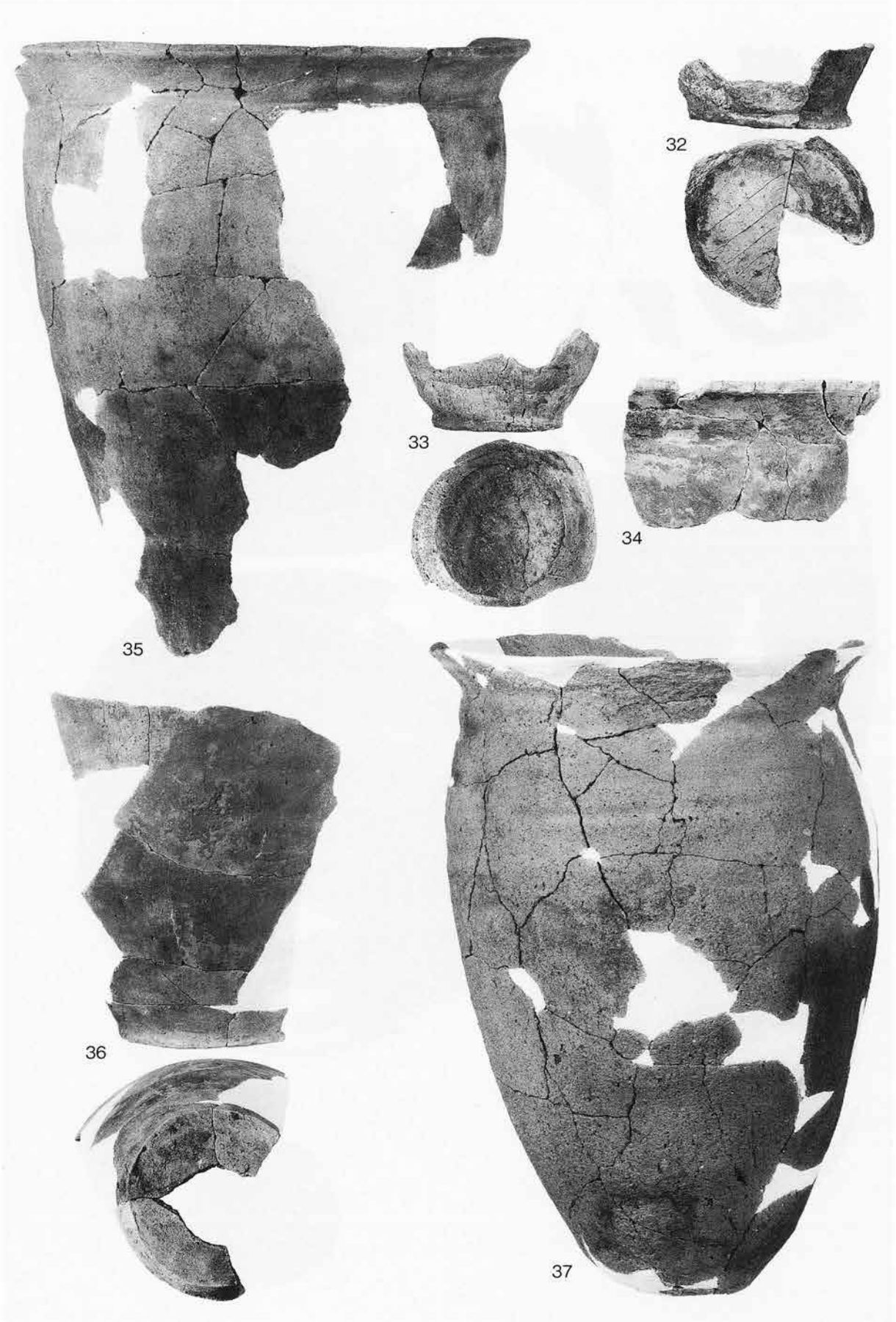
13

写真図版126　C区SI１の土師器、須恵器②（９～11）
C区SI２の土師器、須恵器②（12～13）

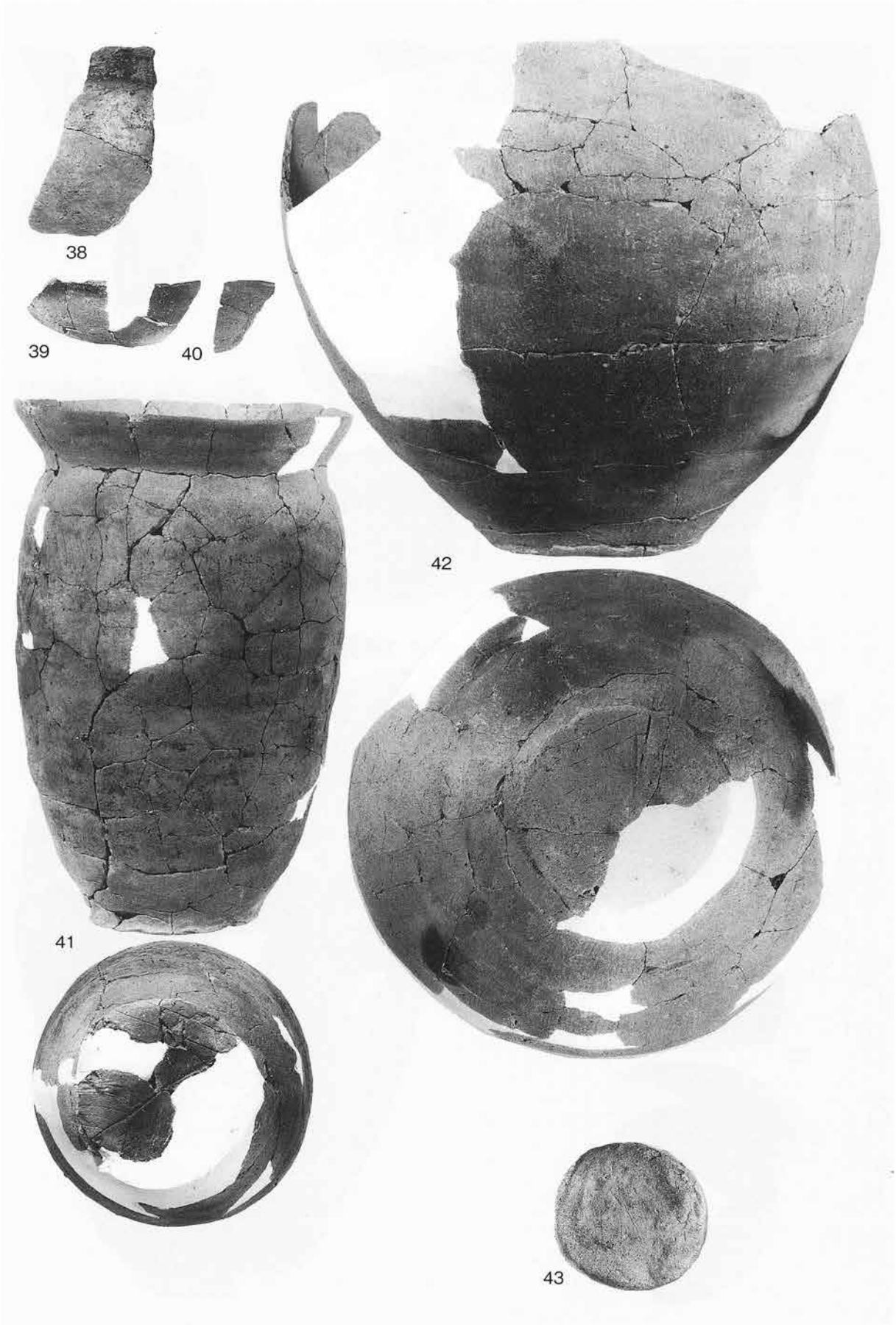


写真図版127　C区SI３の土師器、須恵器①(14～23)

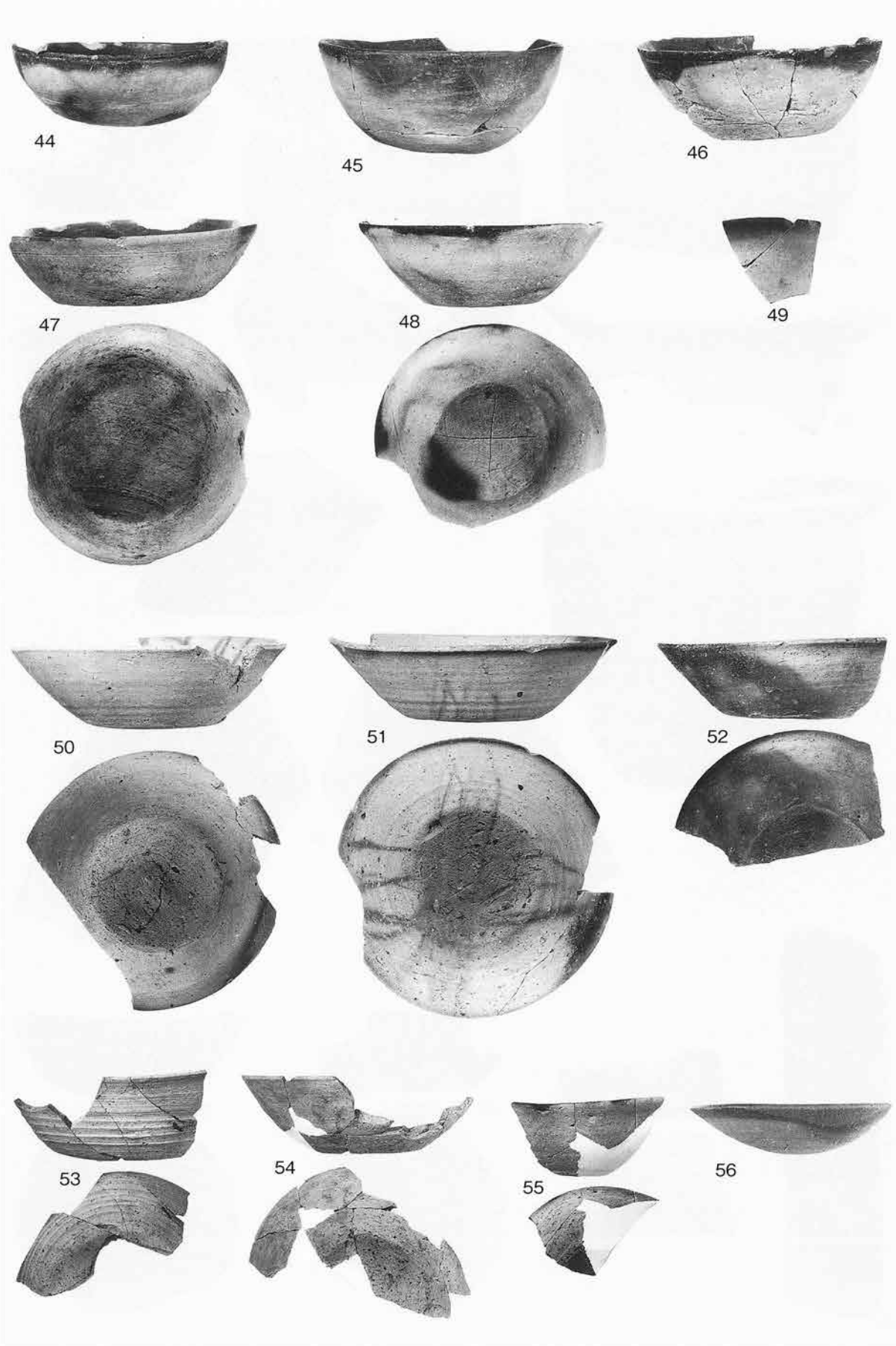
写真図版128　C区SI３の土師器、須恵器②(24～29)
B区SI１の土師器、須恵器①(30・31)



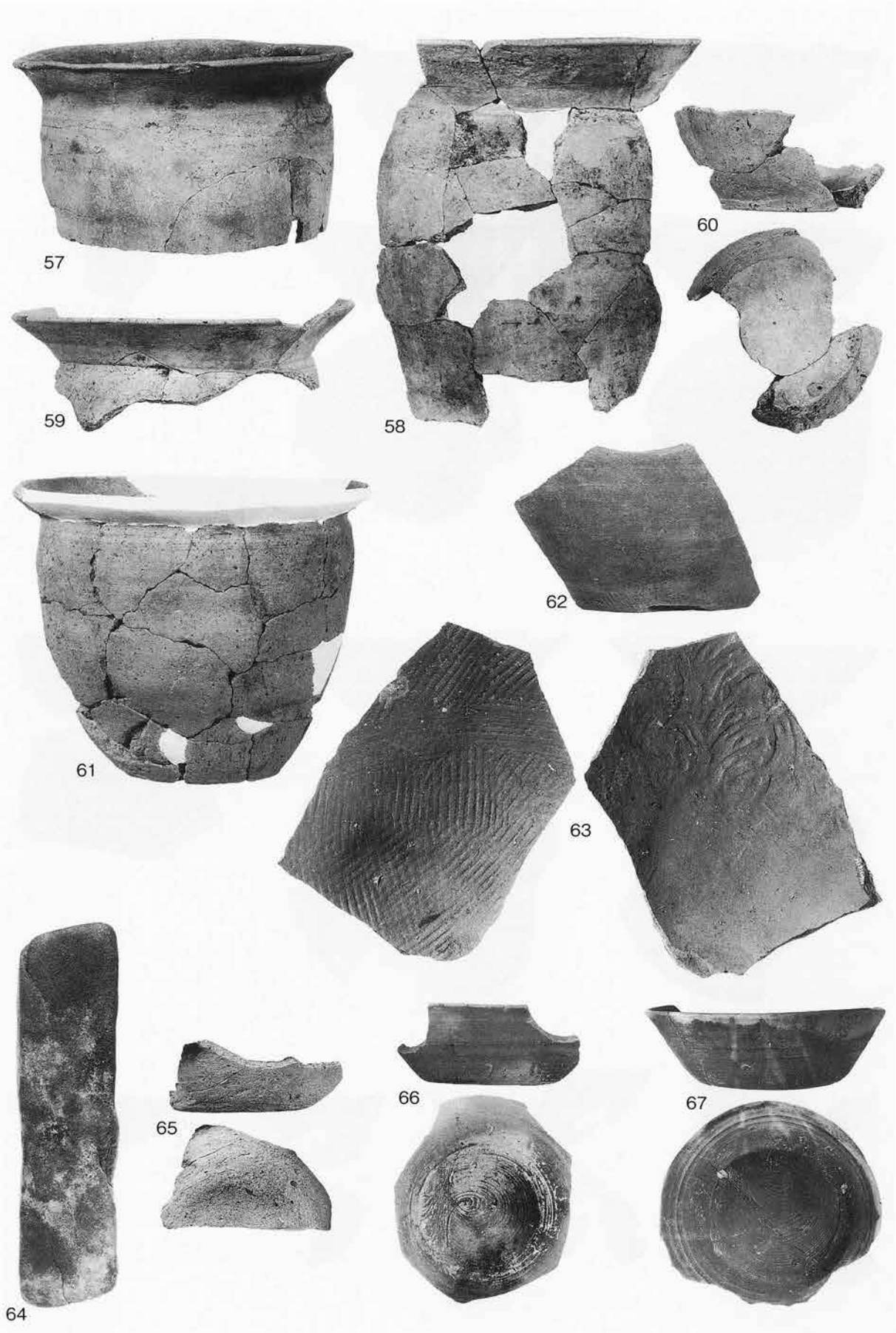
写真図版129　B区SI１の土師器、須恵器②(32～37)



写真図版130　B区SI１の土師器、須恵器③(38)
C区SI４の土師器、須恵器①(39～43)



写真図版131　C区SI５の土師器、須恵器①(44～56)



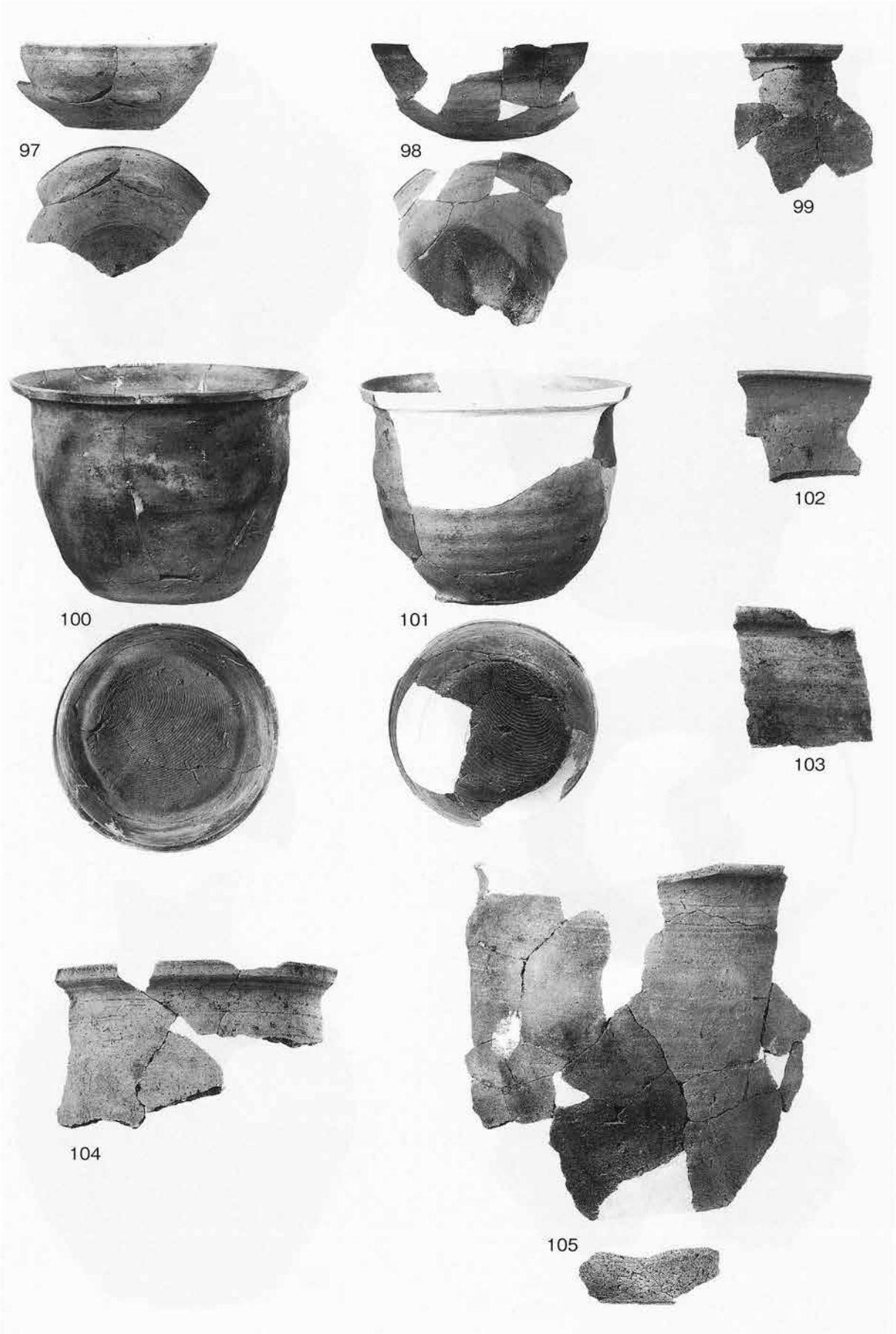
写真図版132　C区SI５の土師器、須恵器②(57～64)
C区SI６の土師器、須恵器①(65～67)

写真図版133　C区SI６の土師器、須恵器②(68～71)
D区SI１の土師器、須恵器①(72～77)

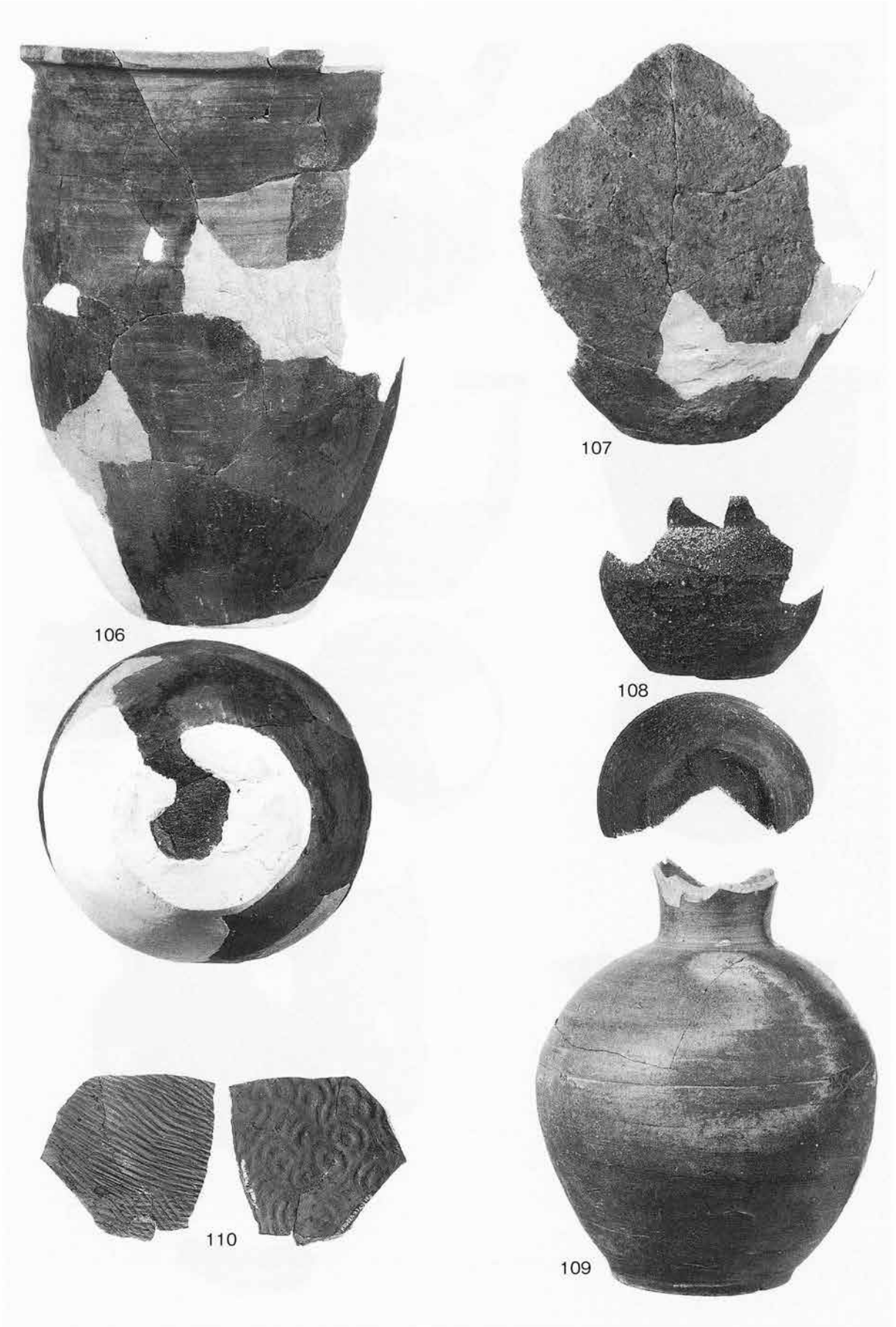
写真図版134　D区SI1の土師器、須恵器②(78～87)

写真図版135　D区SI１の土師器、須恵器③(88～91)

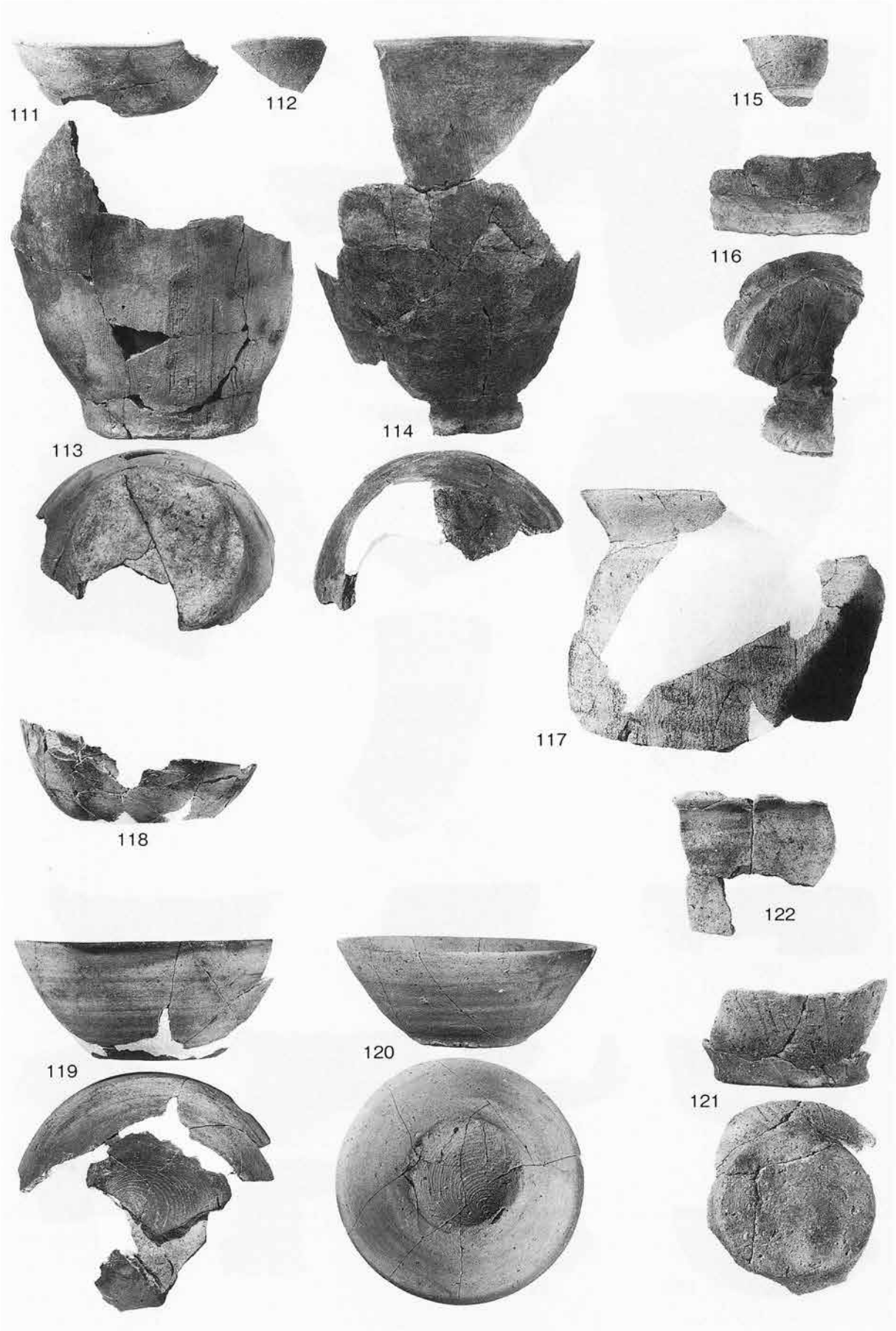
写真図版136　D区SI１の土師器、須恵器④(92～93)
D区SI２の土師器、須恵器①(94～96)



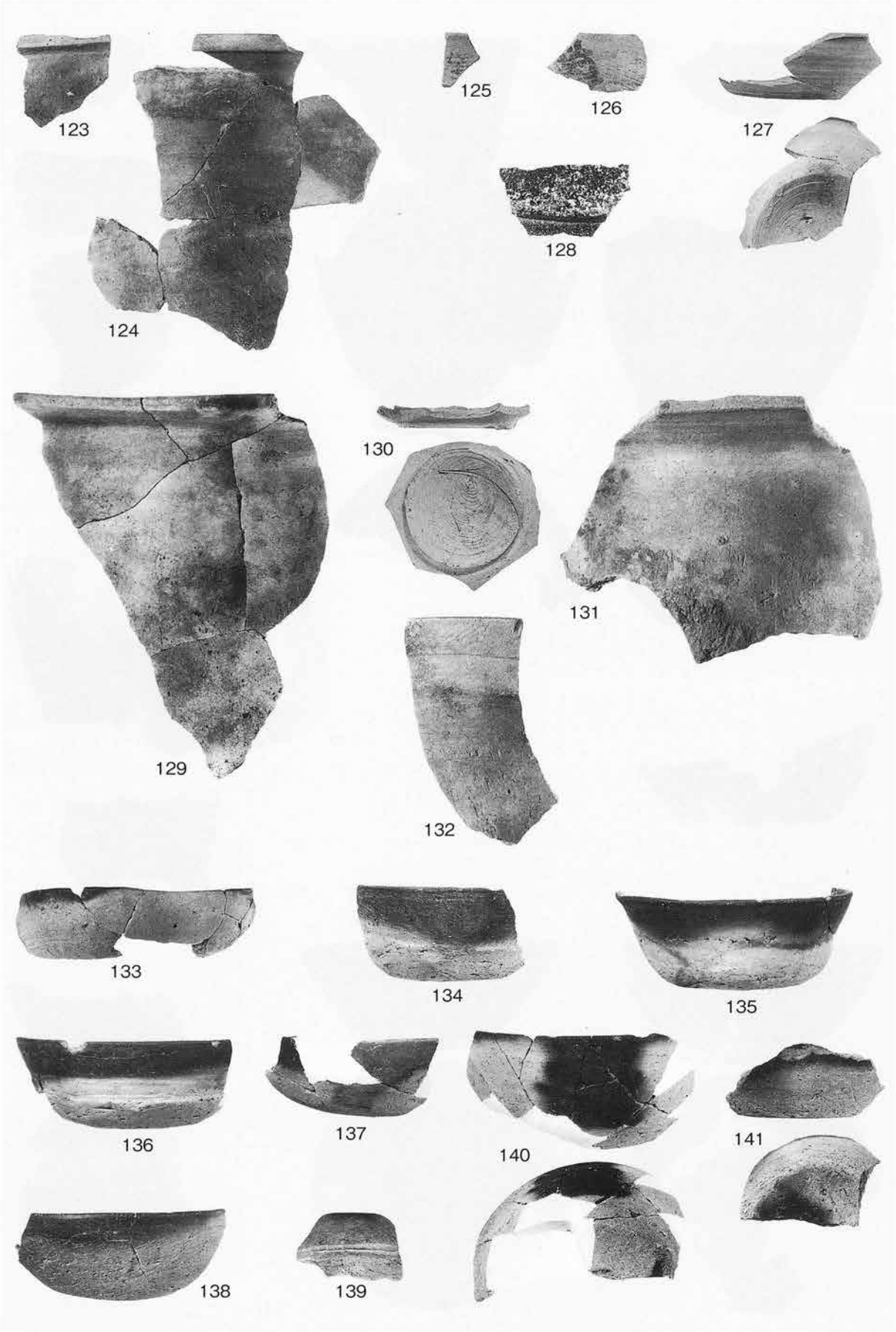
写真図版137　E区SI１の土師器、須恵器①(97～105)



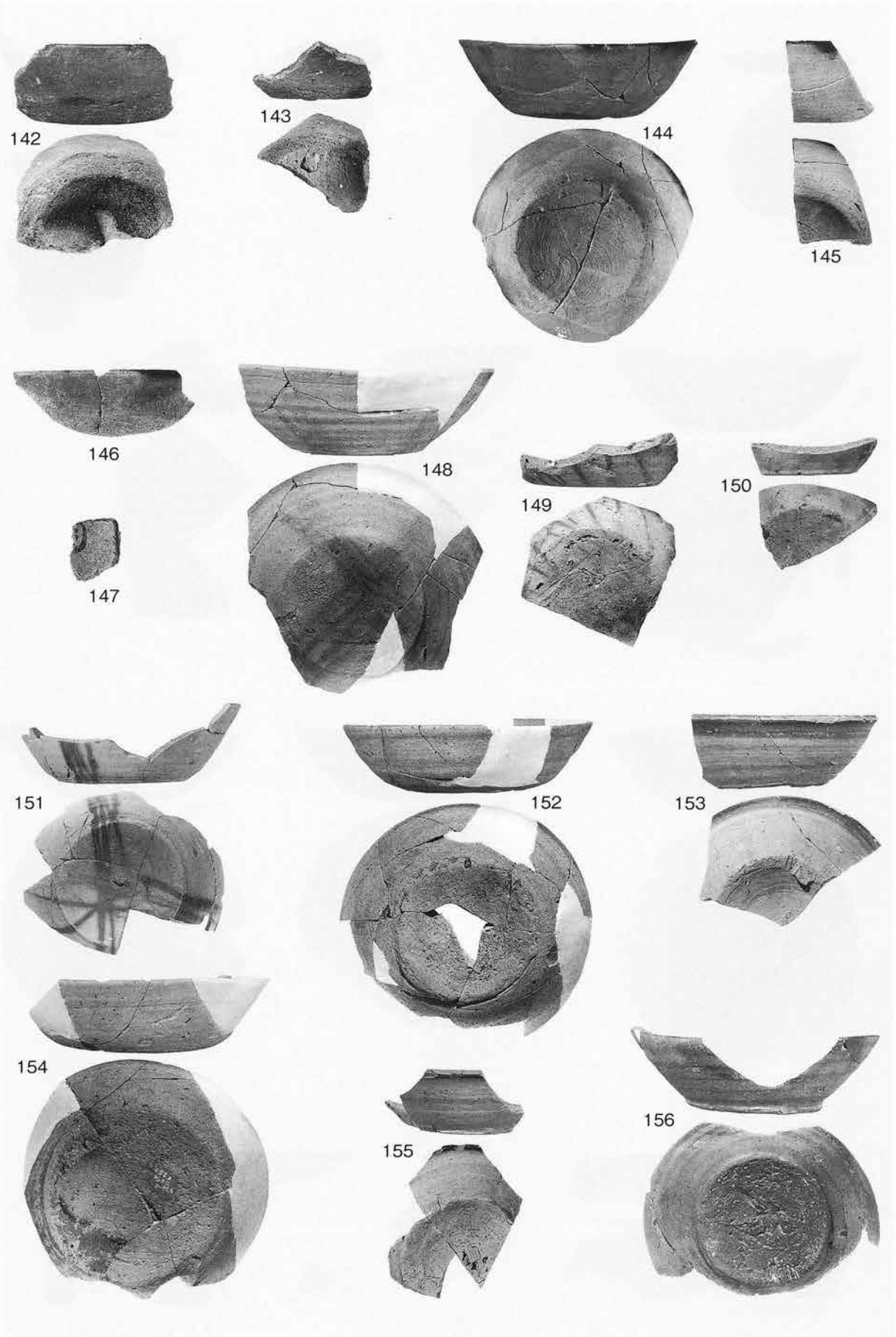
写真図版138　E区SI１の土師器、須恵器②(106～110)



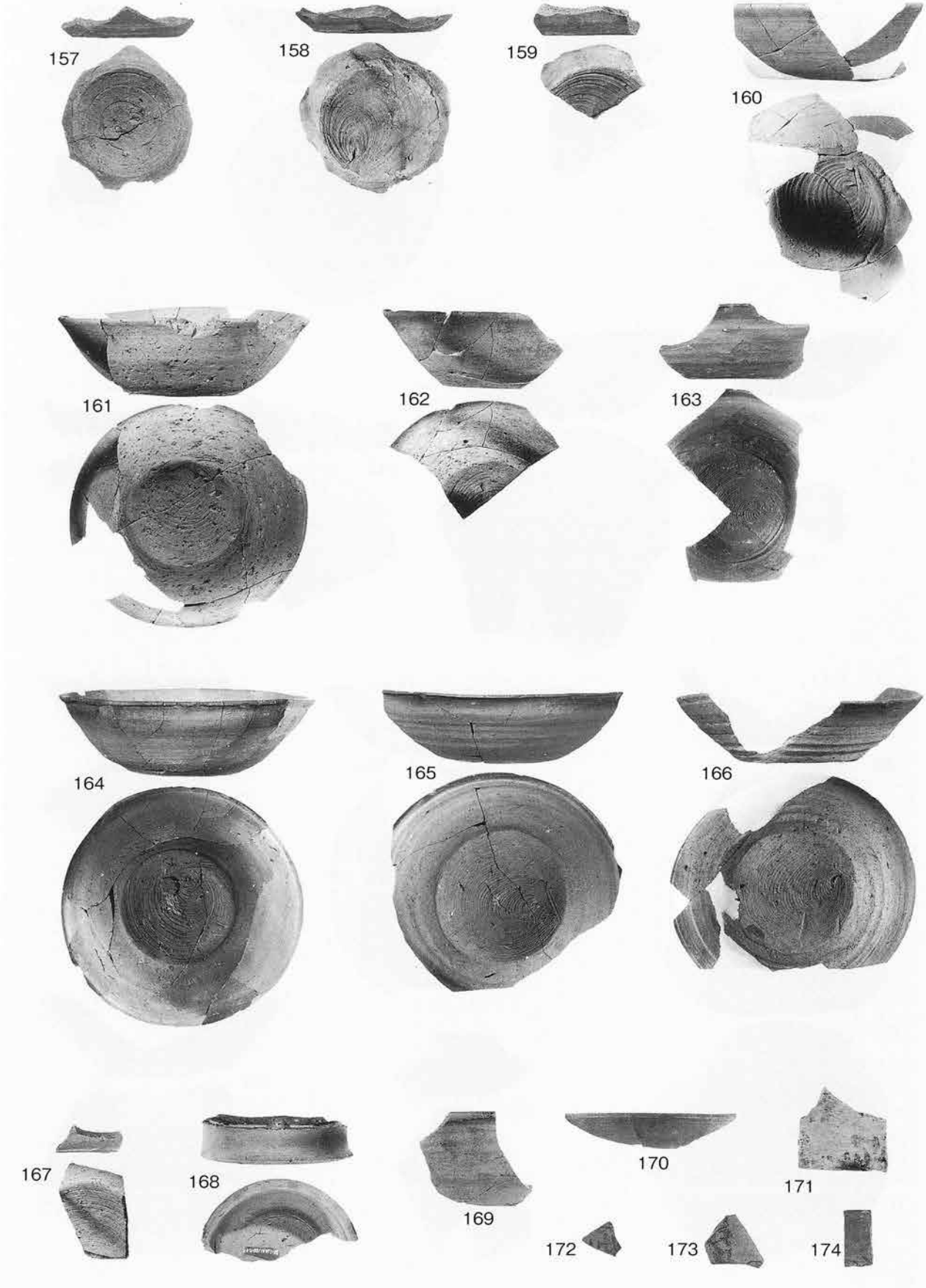
写真図版139　E区SI３の土師器、須恵器(111～114)
E区SI４の土師器、須恵器(115～117)
E区SX１の土師器、須恵器(118～122)



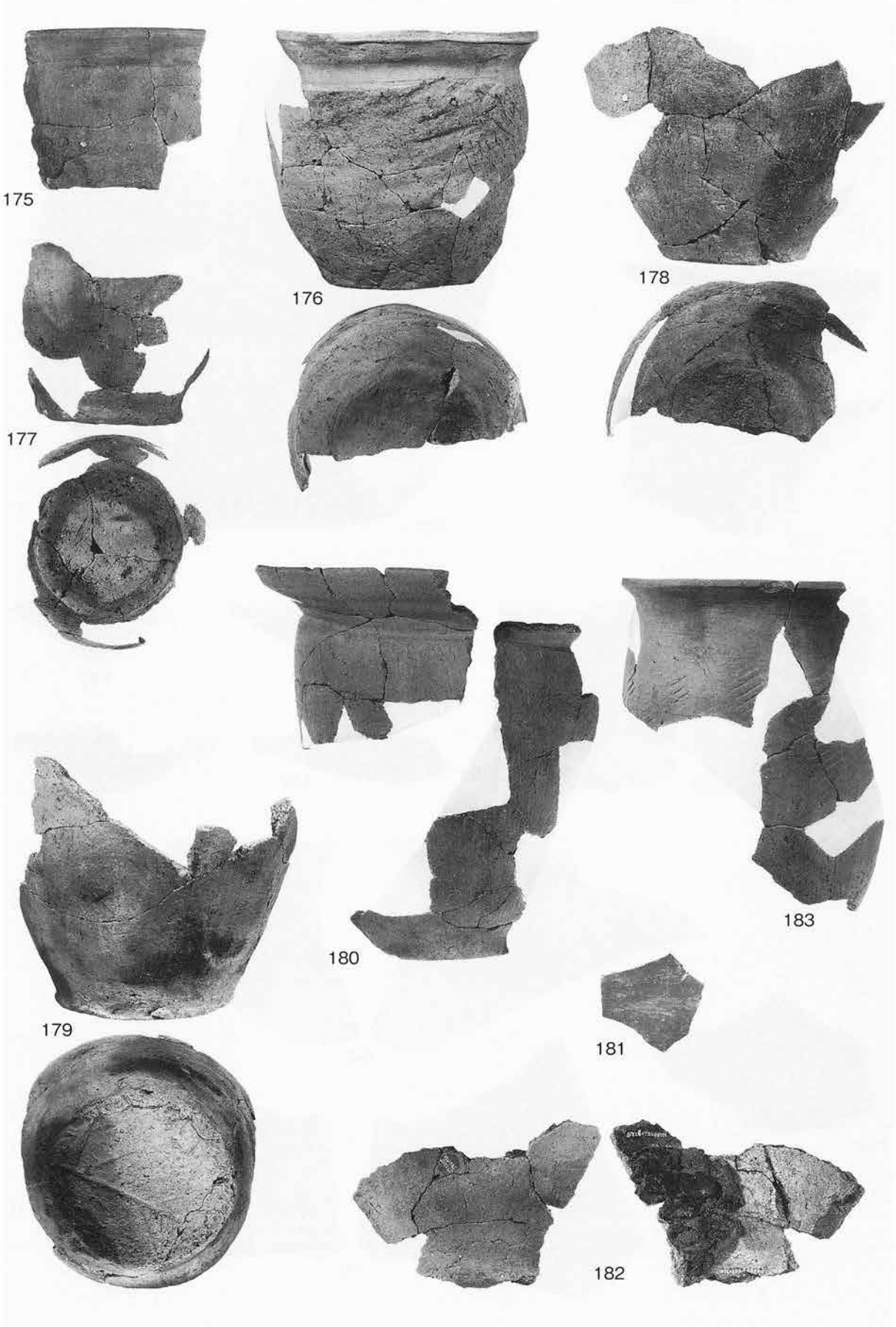
写真図版140　E区焼土１の土師器、須恵器(123～124)
01～03年度遺構内出土土師器、須恵器(125～132)
第２検出面出土土師器、須恵器①(133～141)



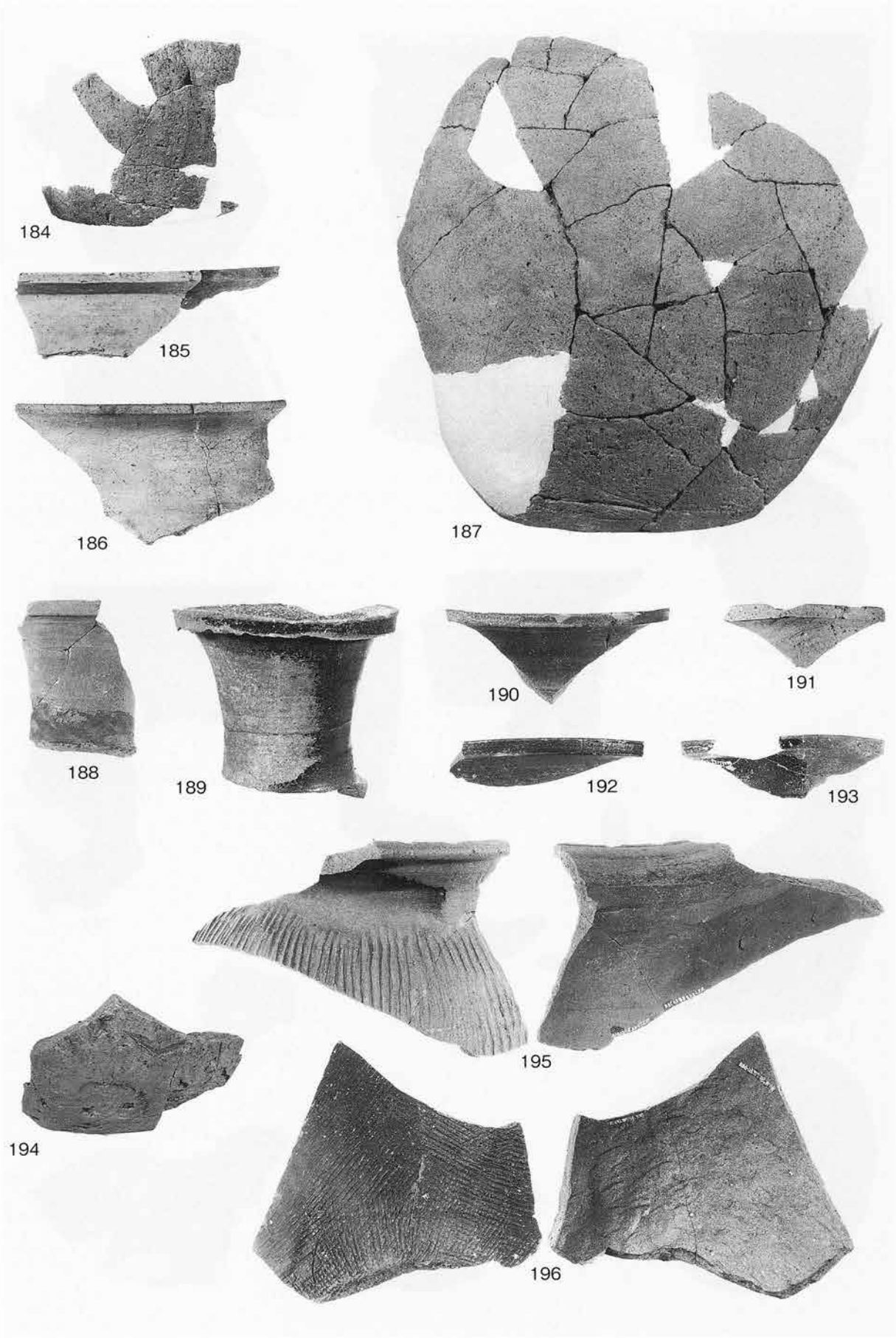
写真図版141　第２検出面出土土師器、須恵器②(142～156)



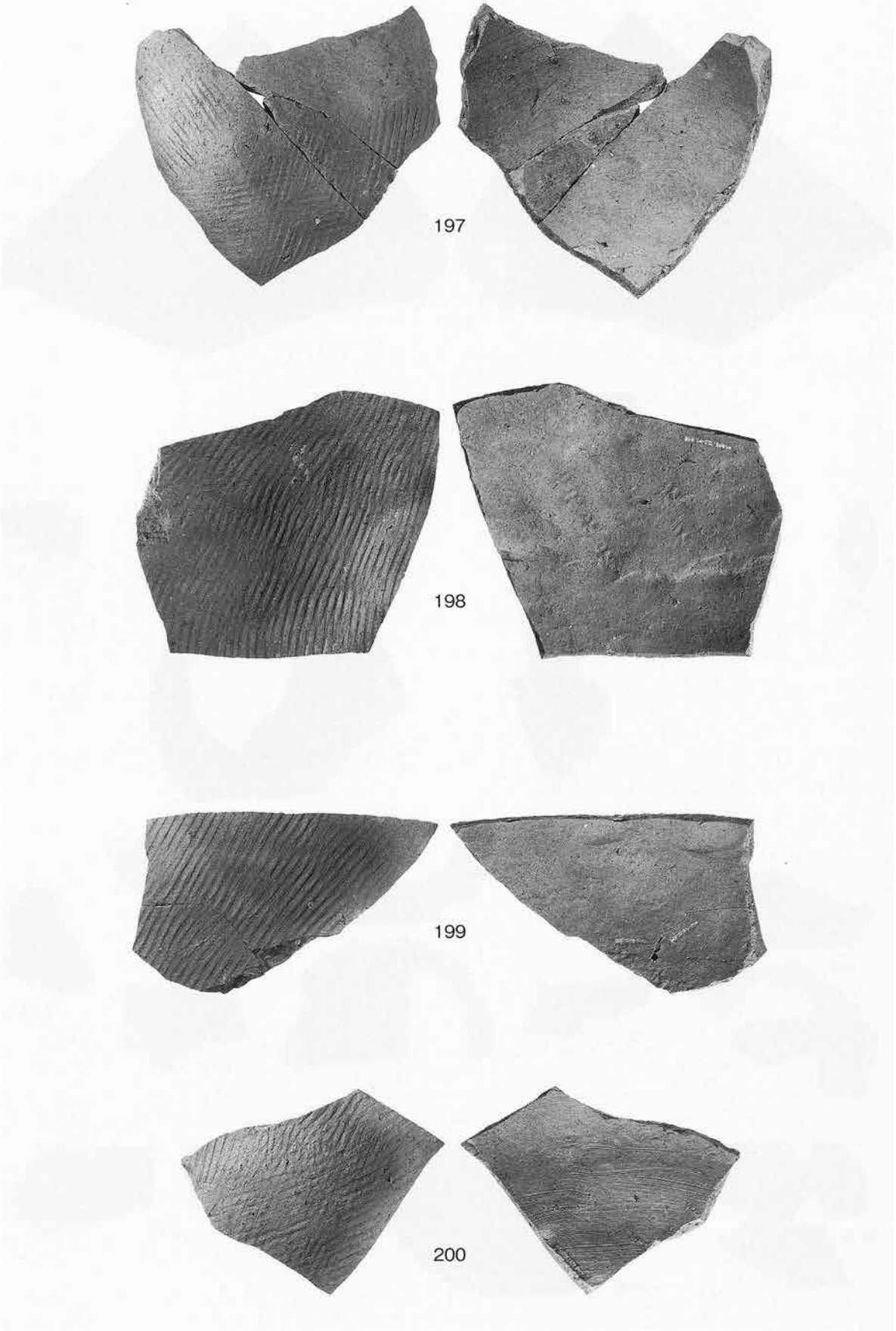
写真図版142　第２検出面出土土師器、須恵器③(157～174)



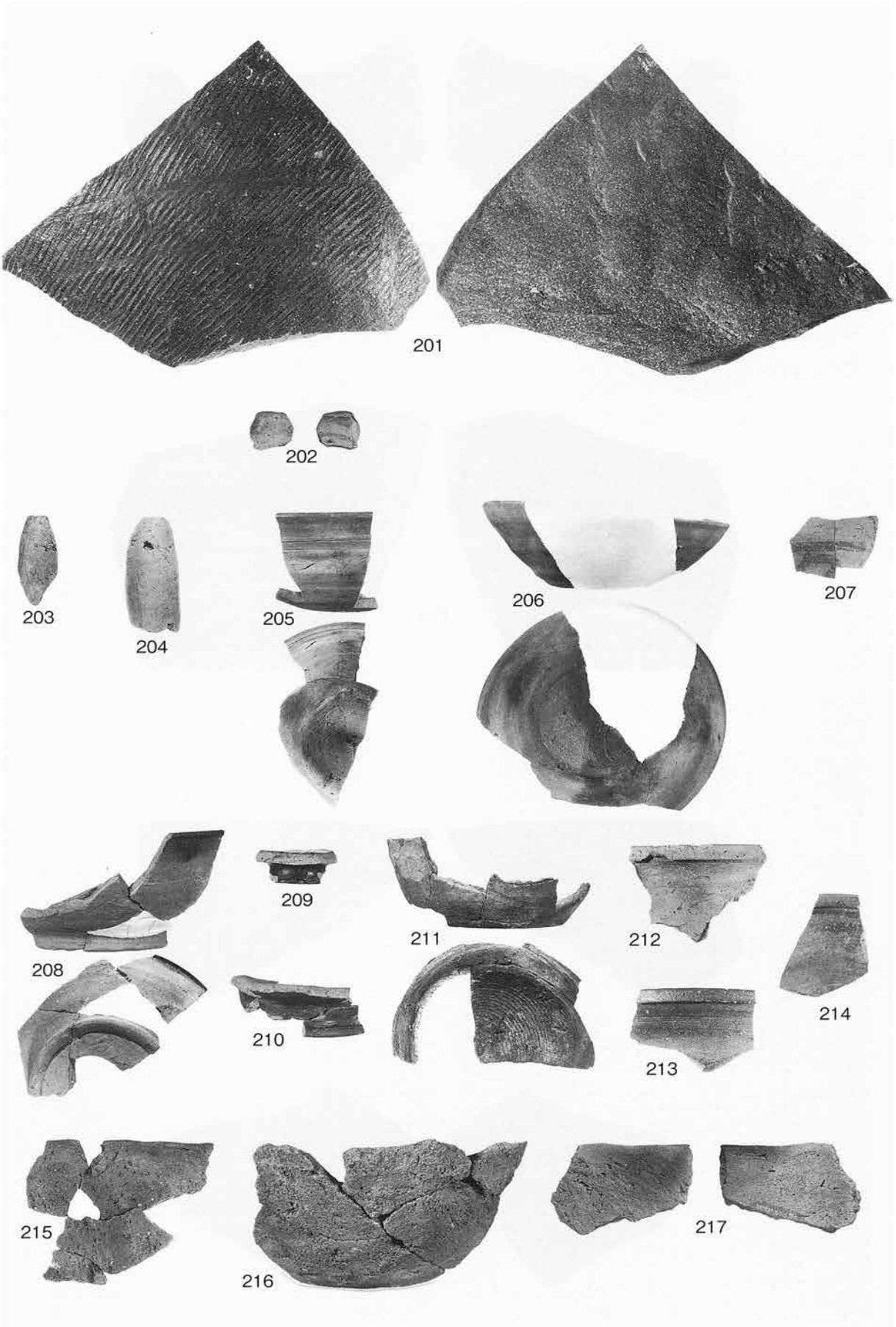
写真図版143　第２検出面出土土師器、須恵器④(175～183)



写真図版144　第２検出面出土土師器、須恵器⑤(184～196)

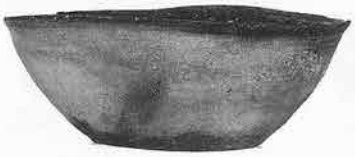


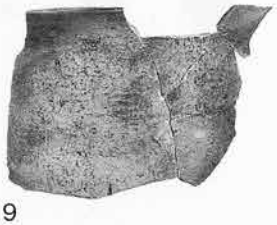
写真図版145　第２検出面出土土師器、須恵器⑥（197～200）



写真図版146　第２検出面出土土師器、須恵器⑦(201～204)
第１検出面出土土師器、須恵器(205～217)

218

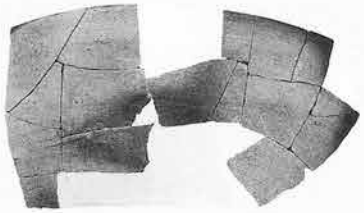




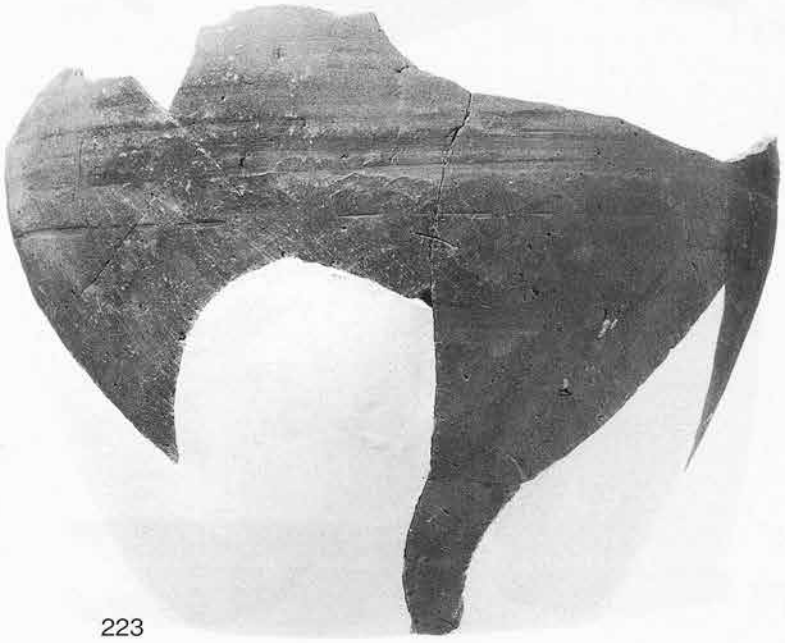
219

220

221

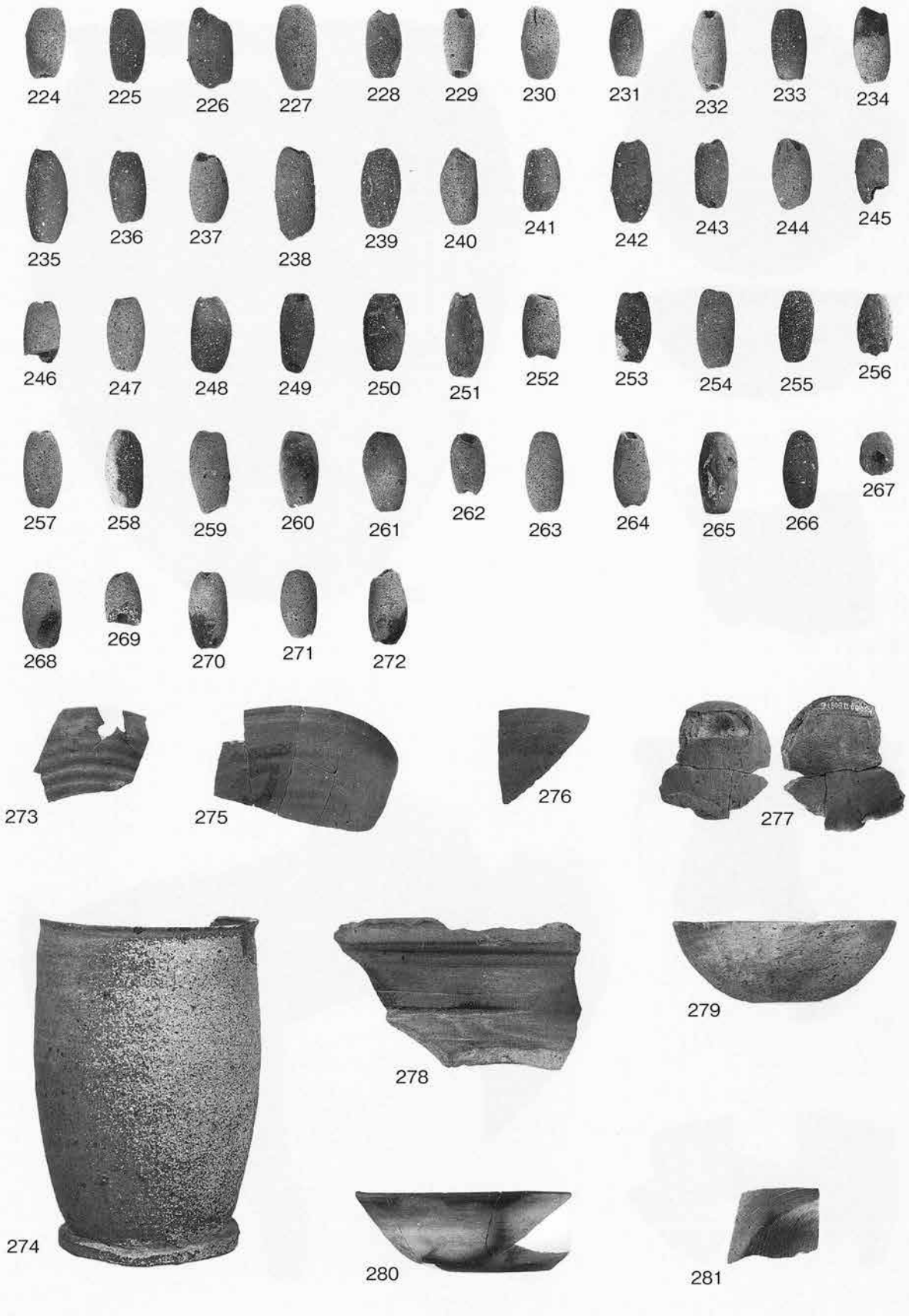


222



223

写真図版147　C区SI７の土師器、須恵器①(218～223)



写真図版148　C区SI７の土錘藕②(224～272)
平成16年第１検出面出土土師器、須恵器(273～278)
平成16年第２検出面出土土師器、須恵器①(279～281)

282

283

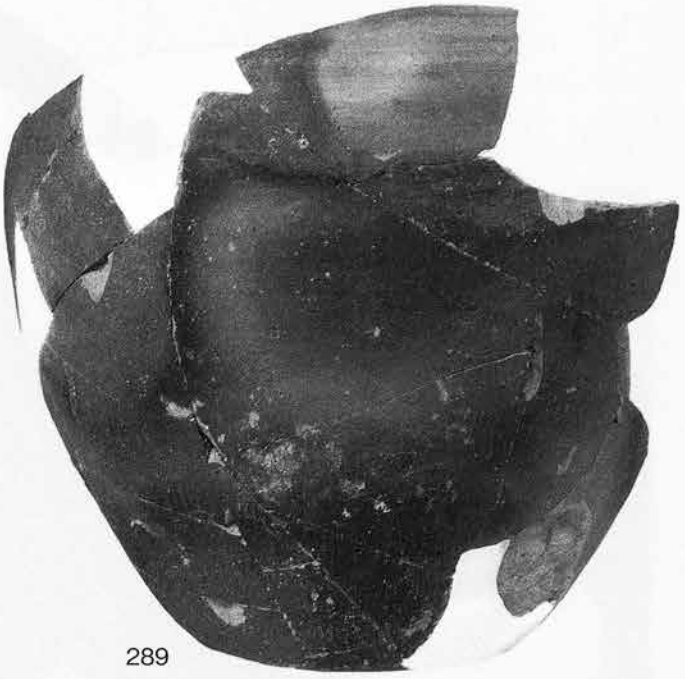
284

285

286

287

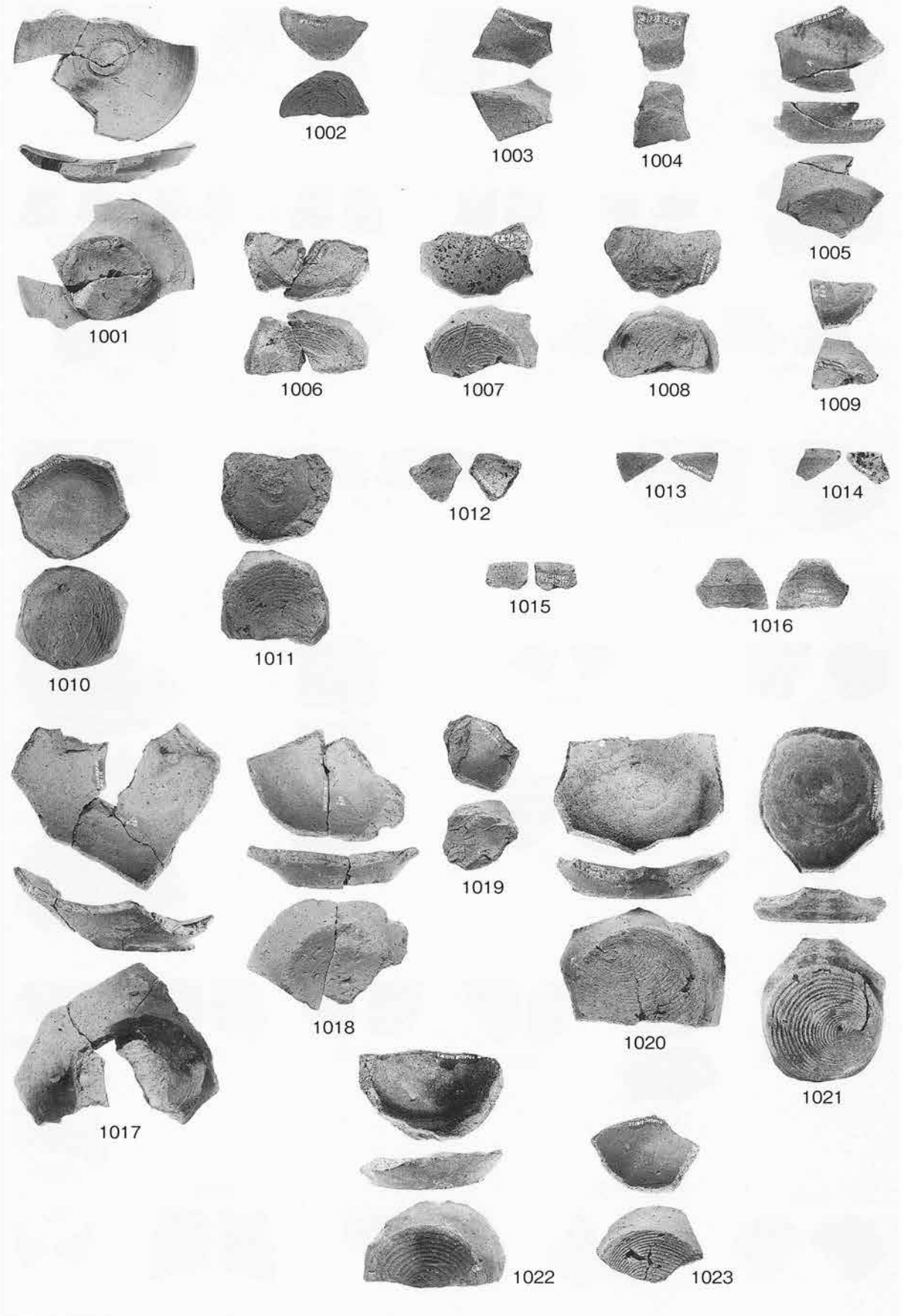
288


289

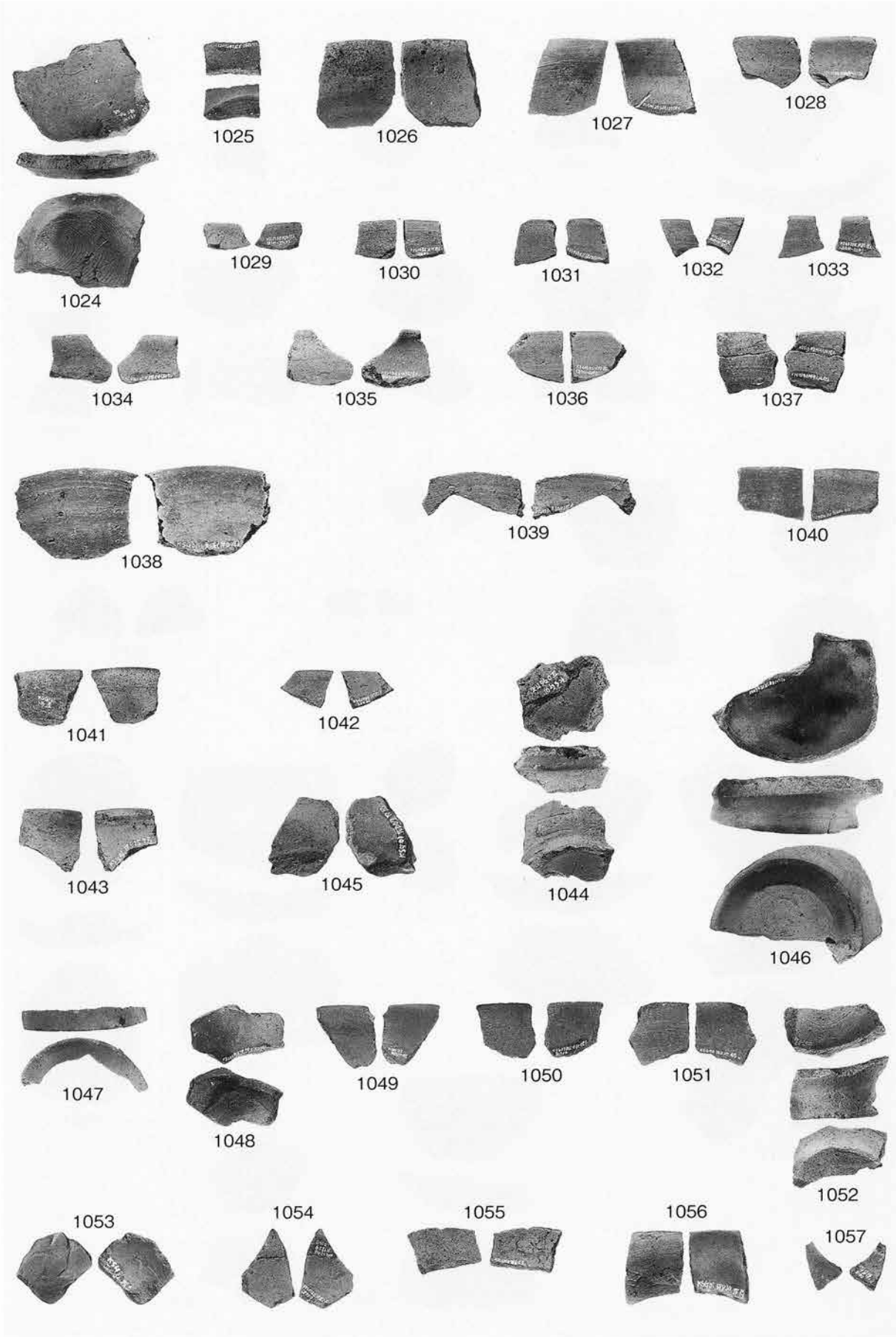
290

写真図版149　平成16年第２検出面出土土師器、須恵器②(282～290)

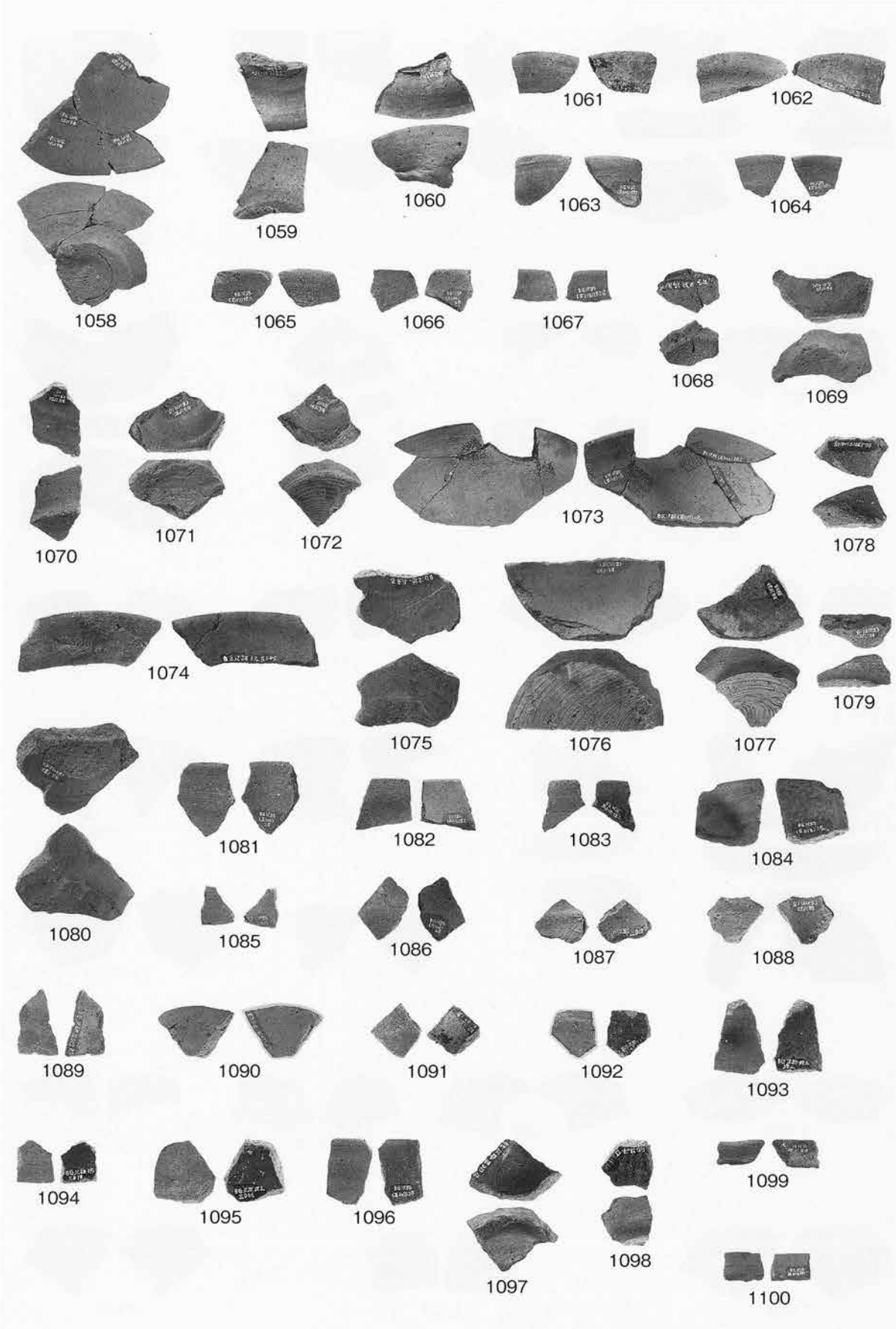
写真図版150　平成16年第２検出面出土土師器、須恵器③(291・292)



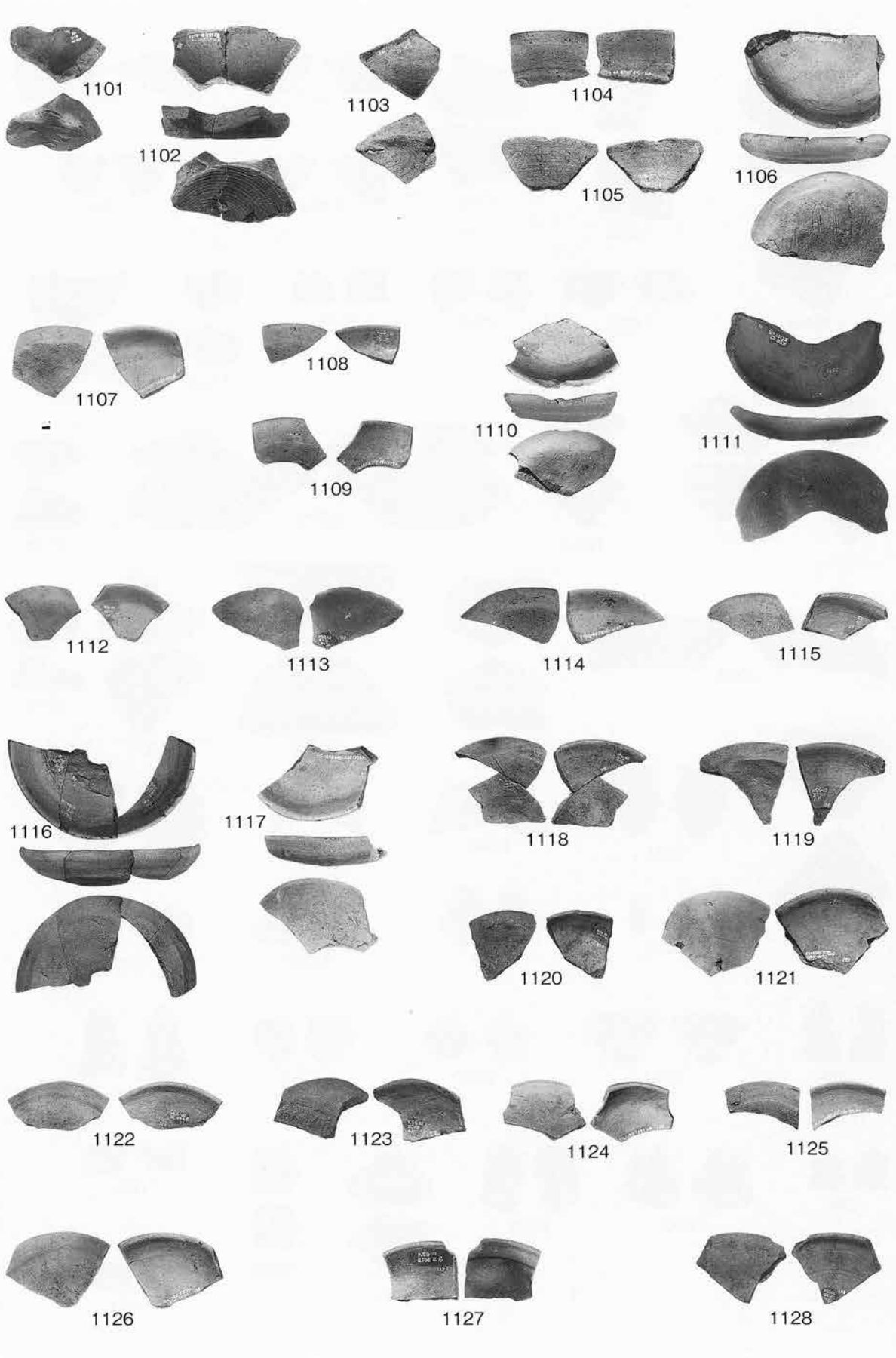
写真図版151　11世紀のかわらけ①(1001～1023)



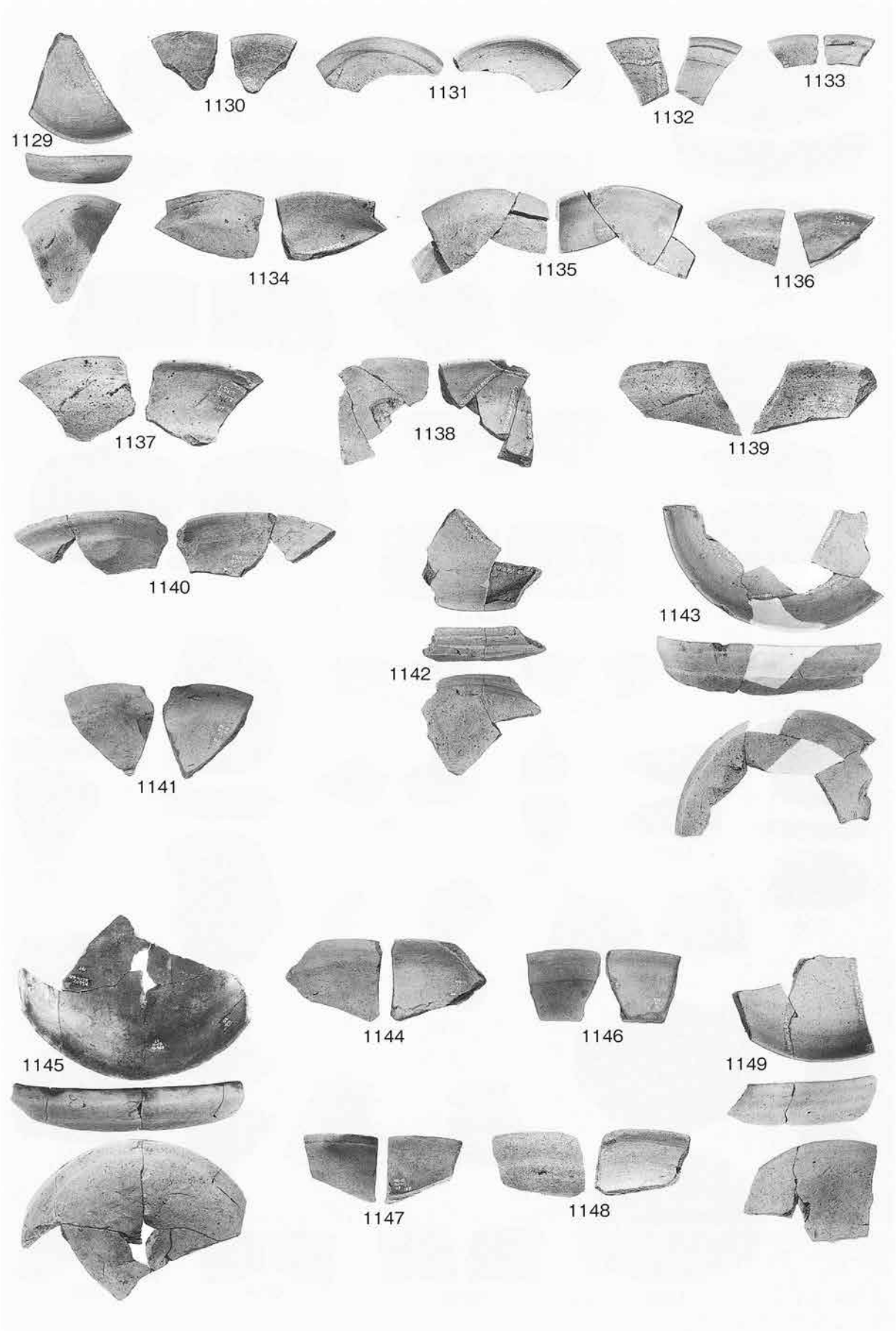
写真図版152　11世紀のかわらけ②(1024～1057)



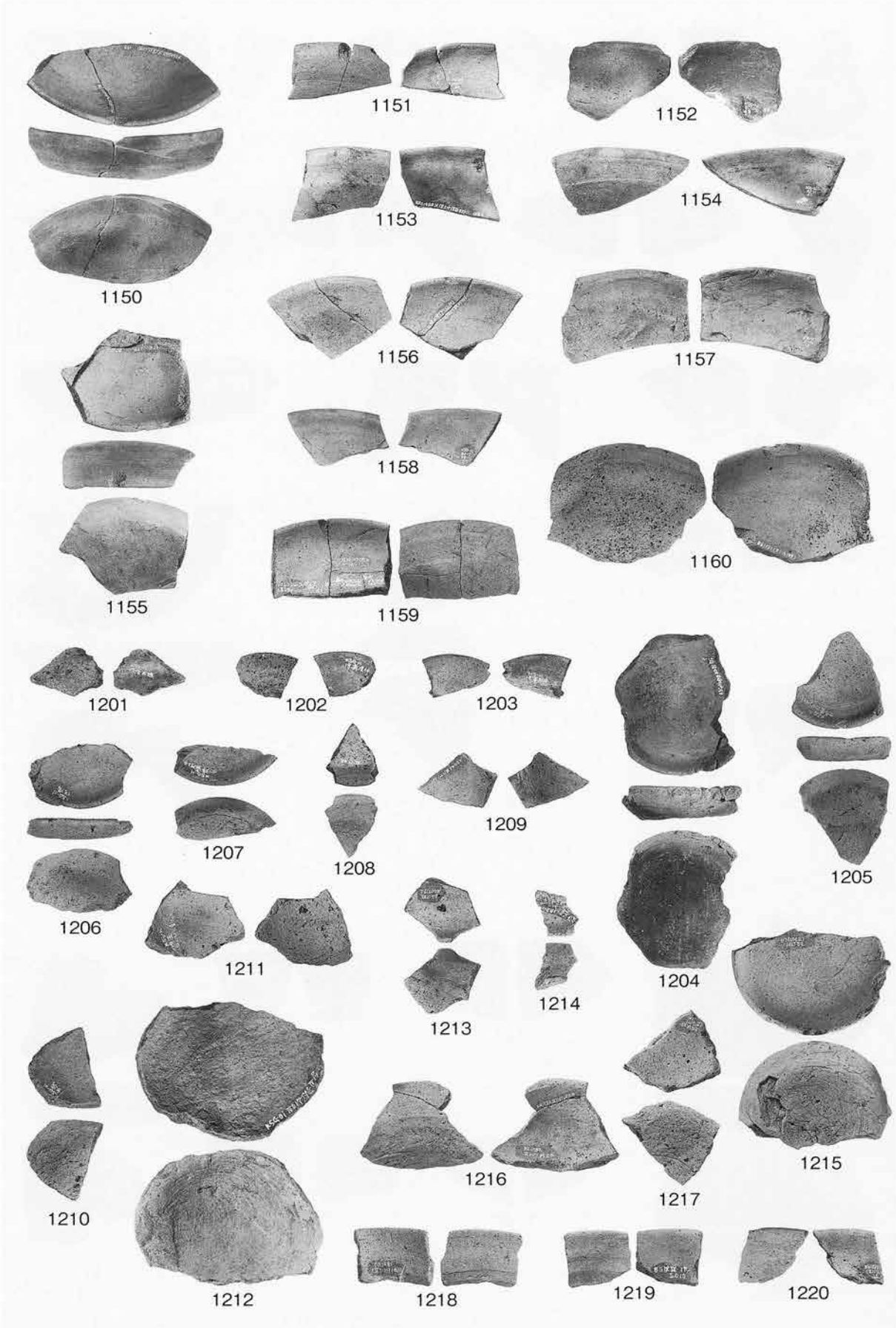
写真図版153　11世紀のかわらけ③（1058～1100）



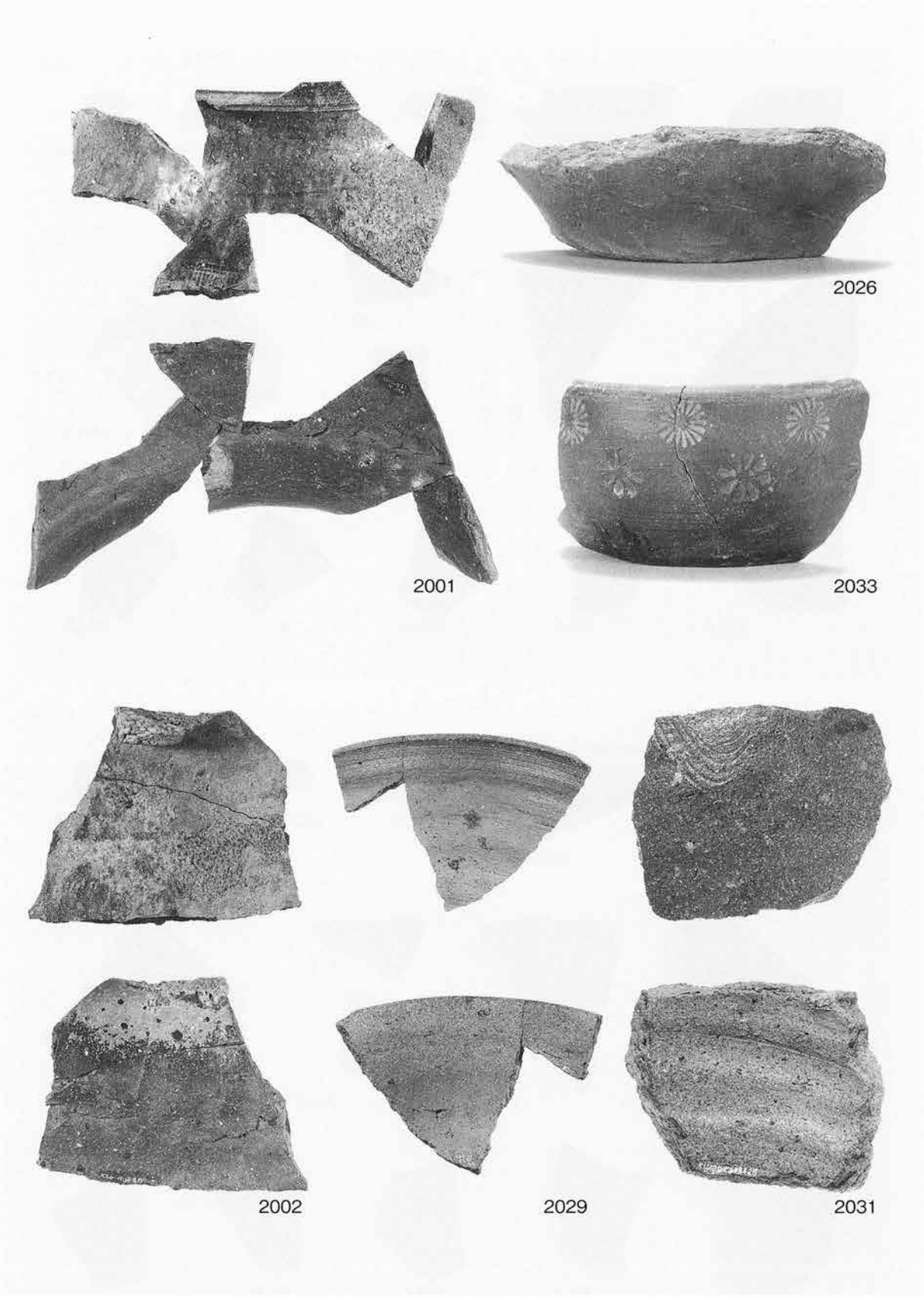
写真図版154　12世紀のかわらけ①(1101～1128)



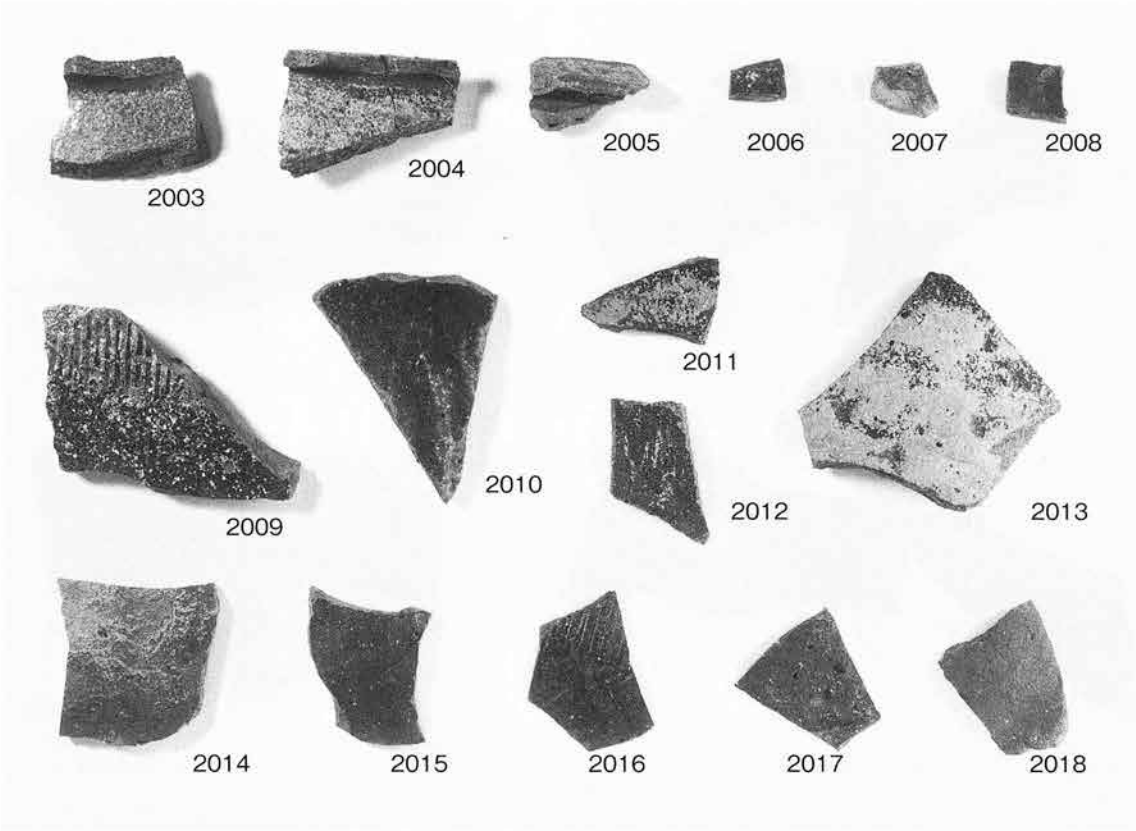
写真図版155　12世紀のかわらけ②(1129～1149)

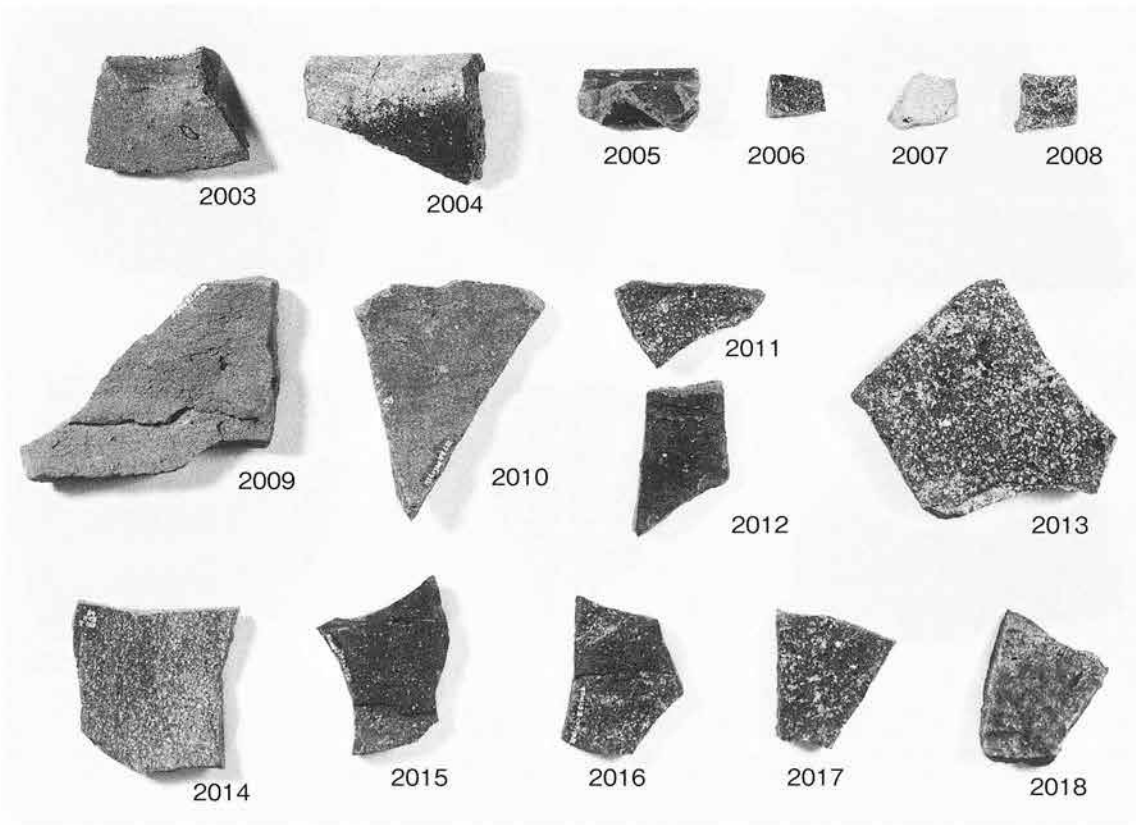


写真図版156　12世紀のかわらけ③(1150～1160)
13～14世紀のかわらけ (1201～1220)

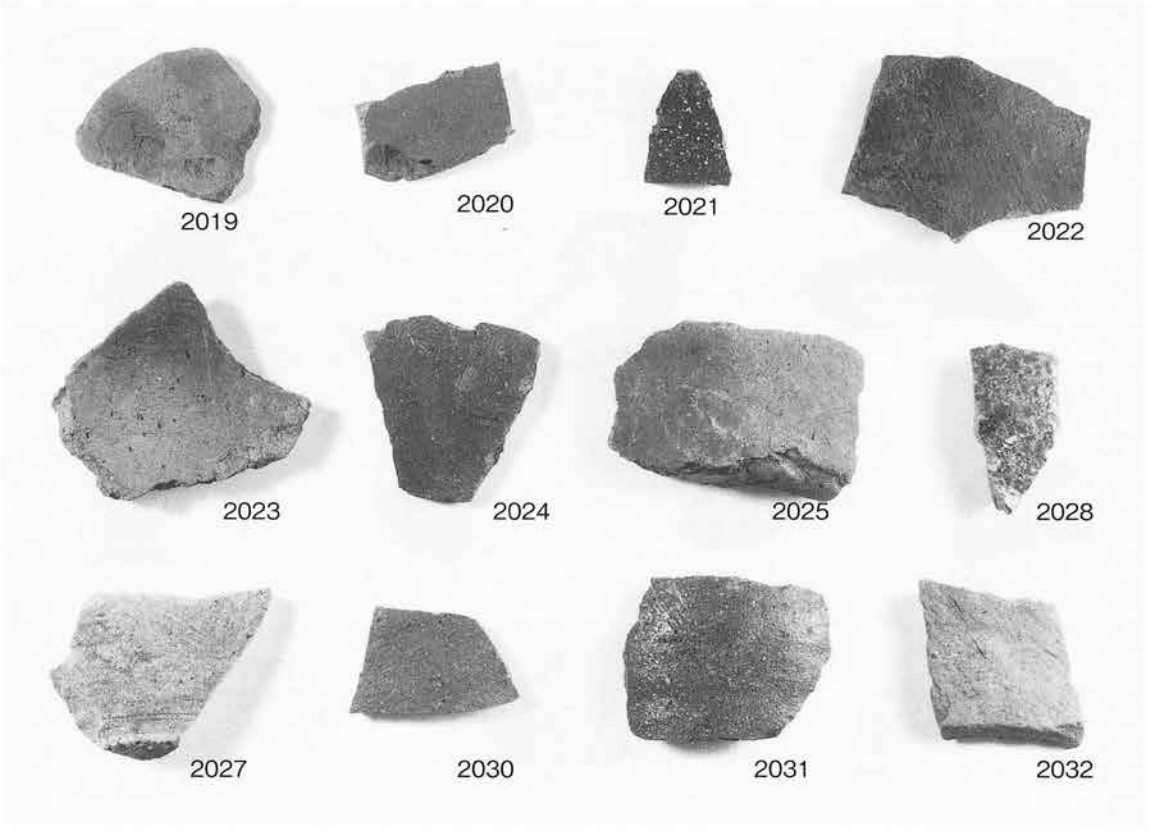


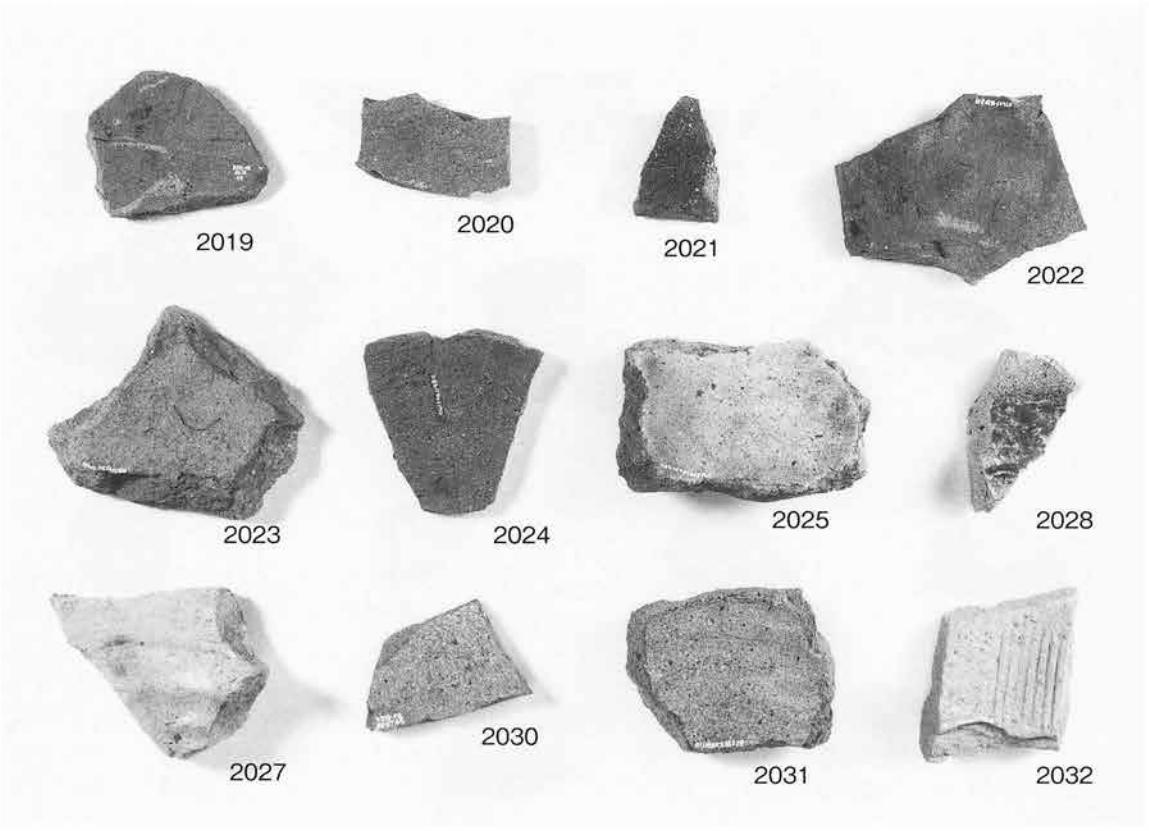
写真図版157　中世の国産陶器①(2001・2002・2026・2029・2031・2033)



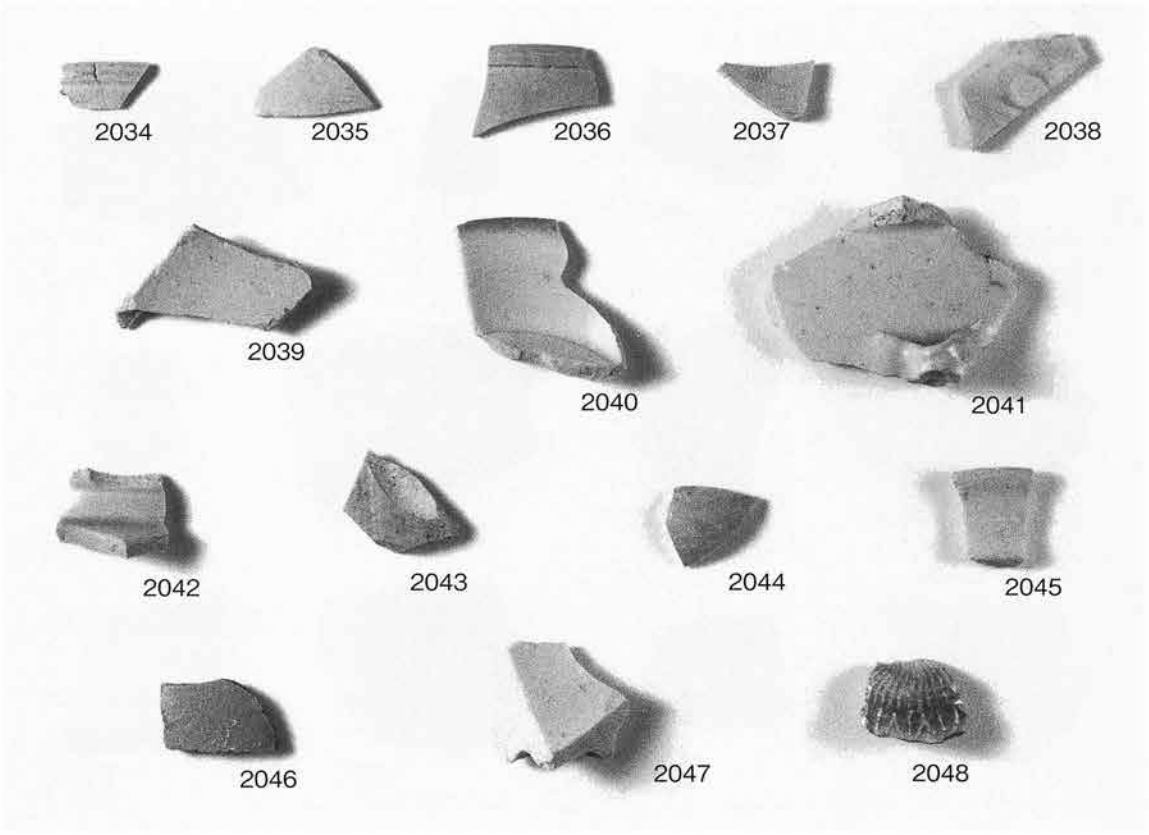


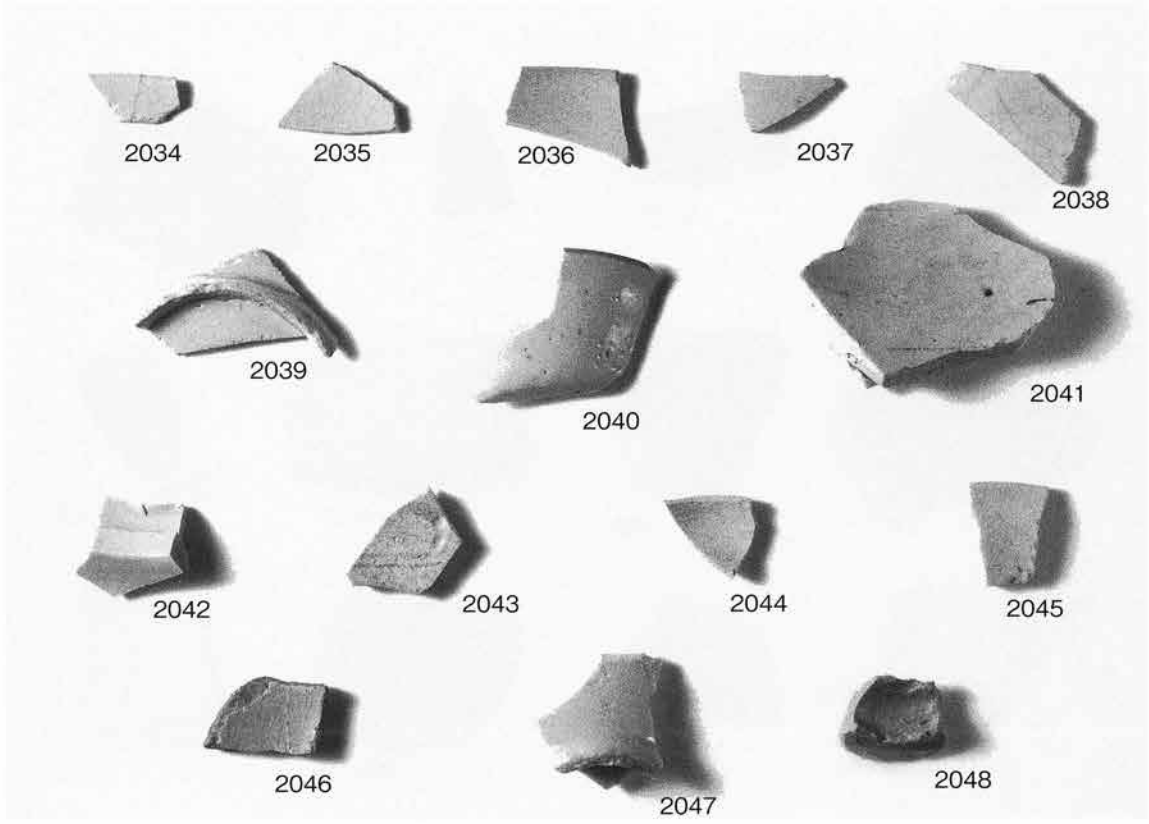
写真図版158　中世の国産陶器②(2003～2018)



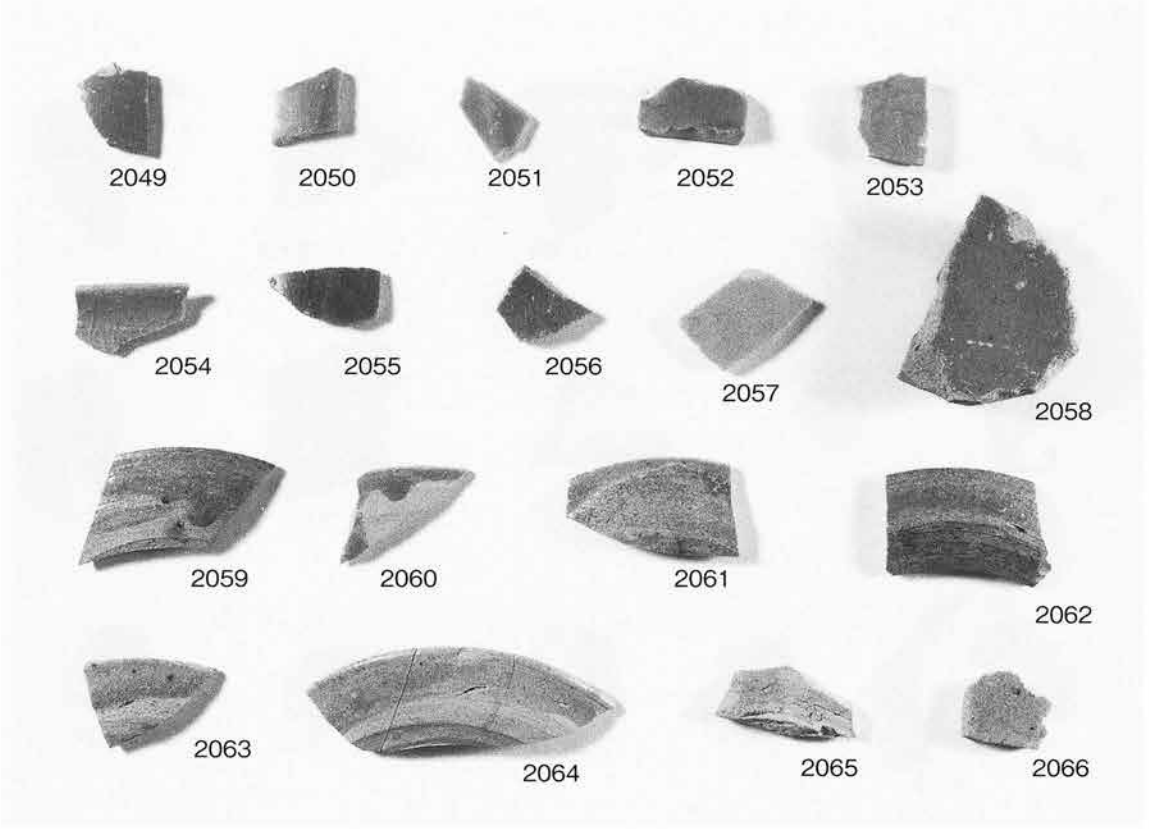


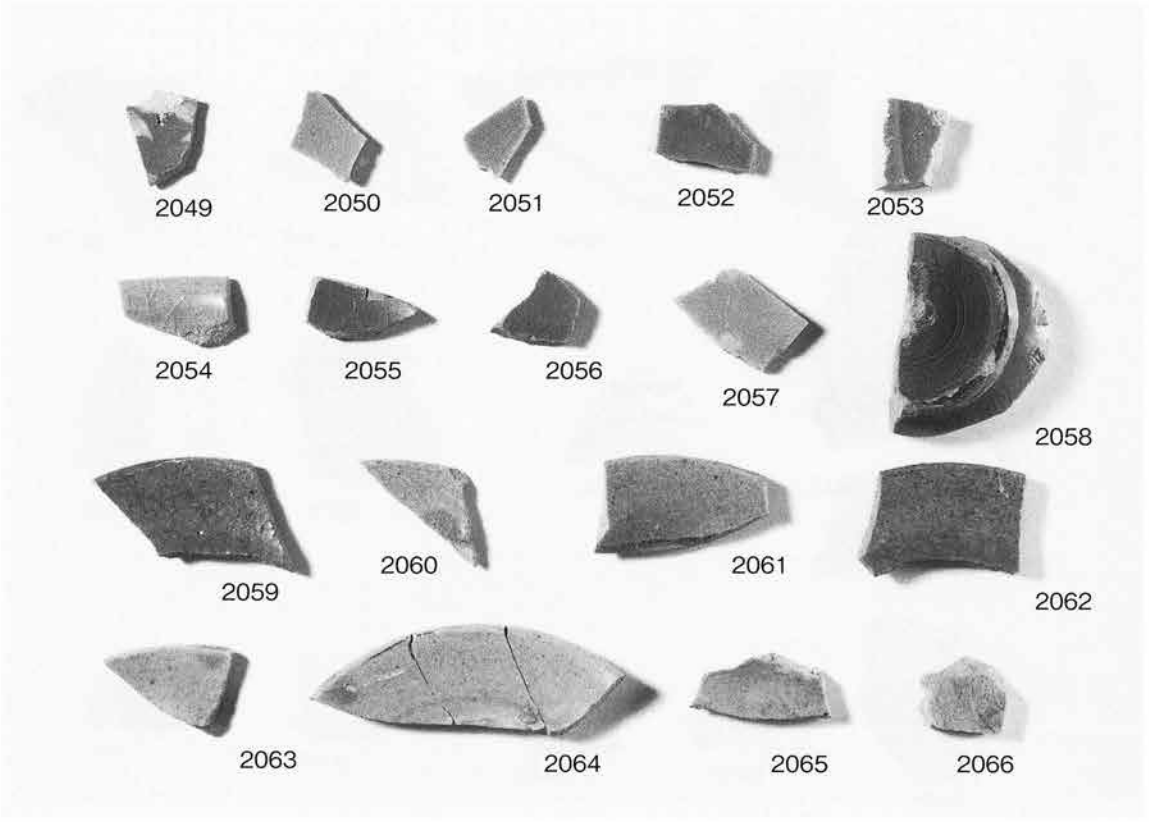
写真図版159　中世の国産陶器③(2019～2025・2027・2028・2030～2032)



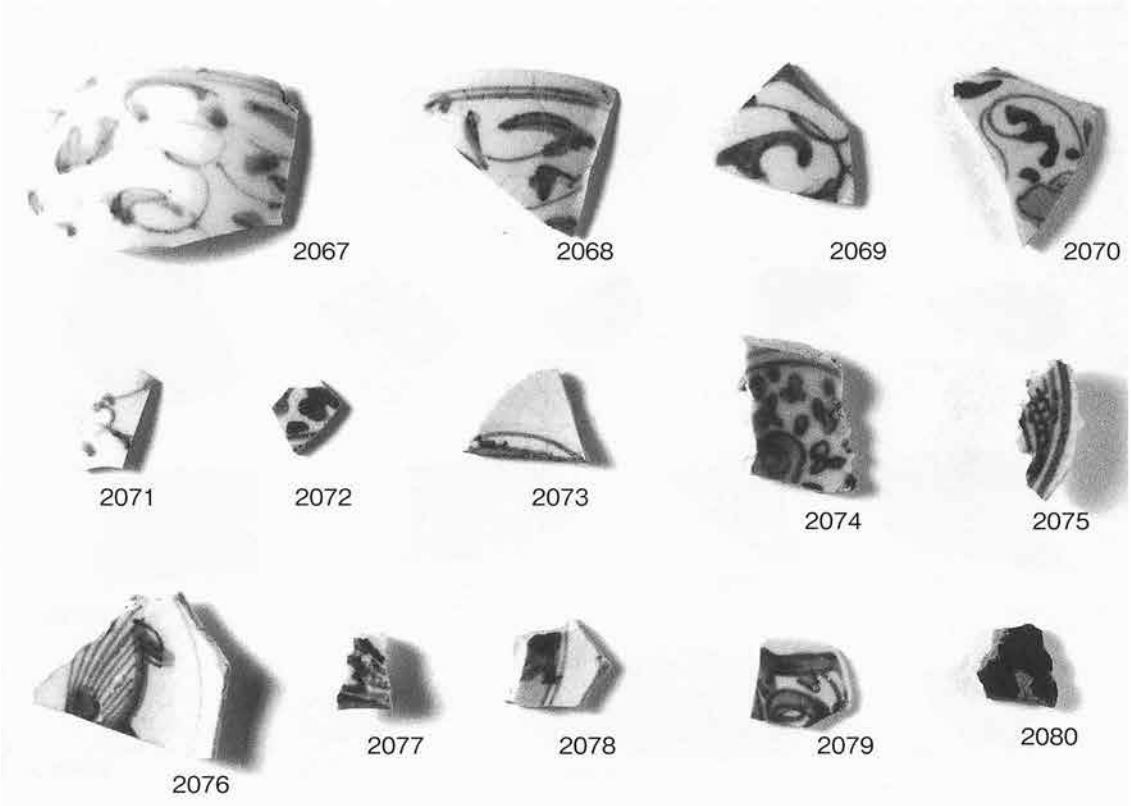


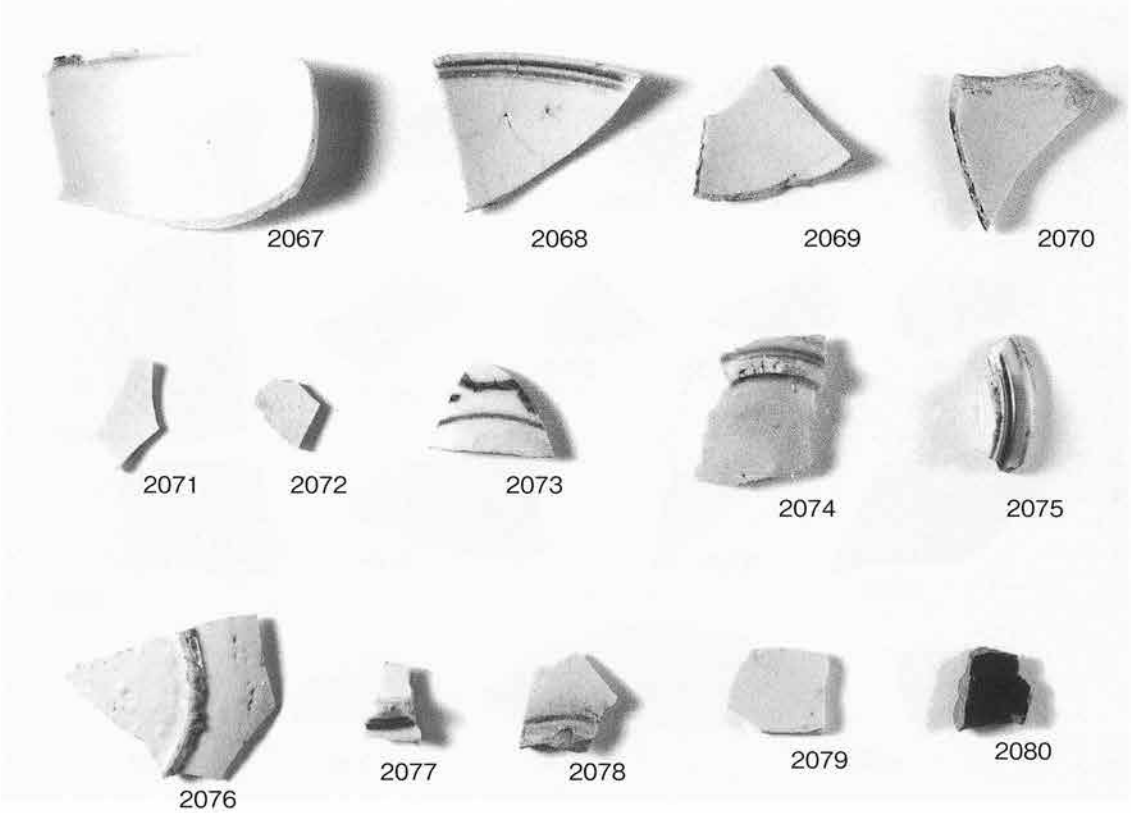
写真図版160　中世の中国産陶磁器①(2034～2048)



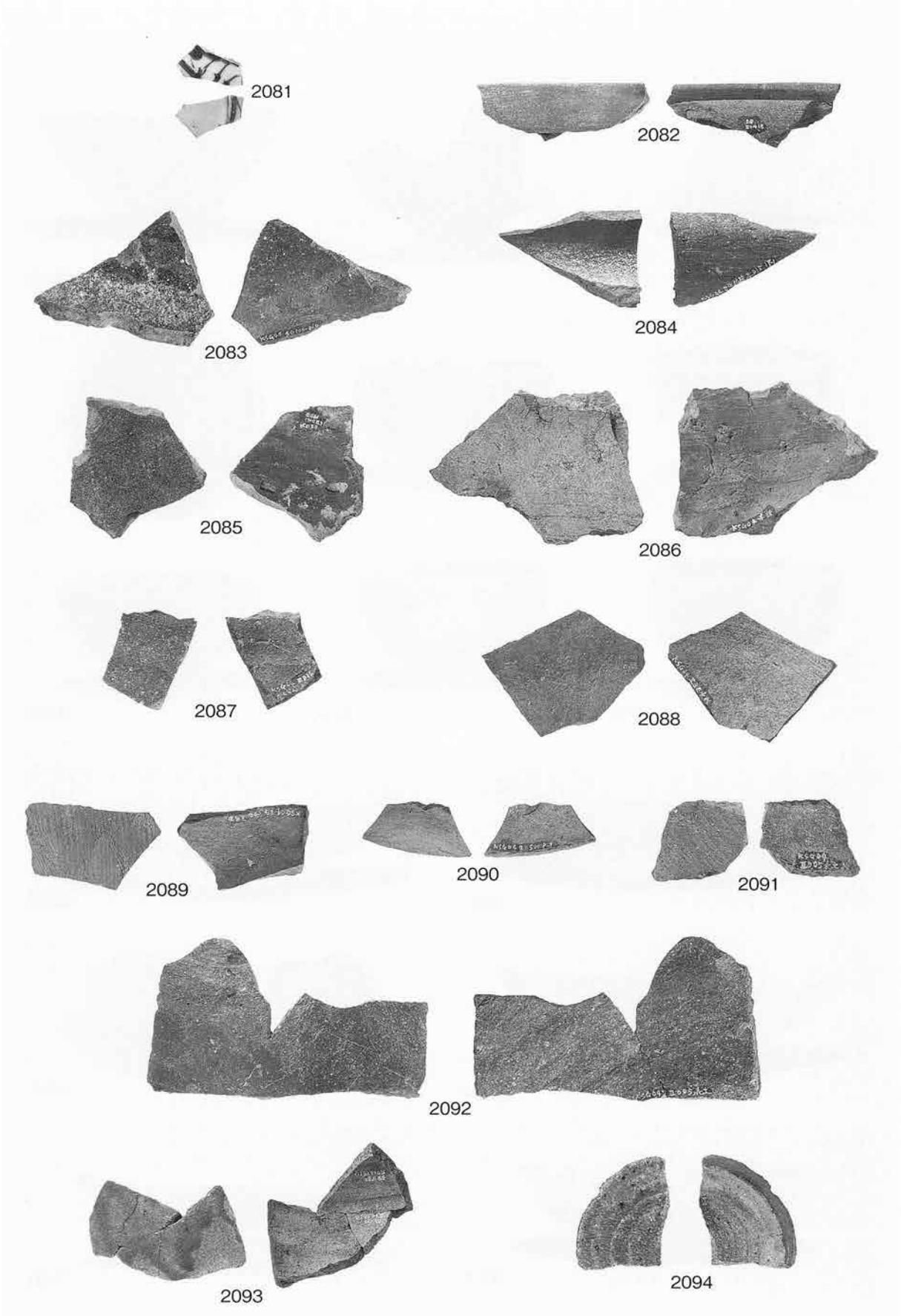


写真図版161　中世の中国産陶磁器②(2049～2066)





写真図版162　中世の中国産陶磁器③(2067～2080)



写真図版163　平成16年度出土の中世陶磁器(2081～2094)

3021

3022

3023

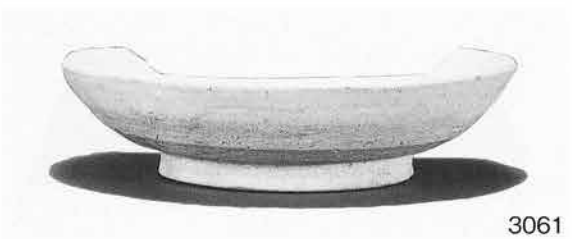
3041

3042

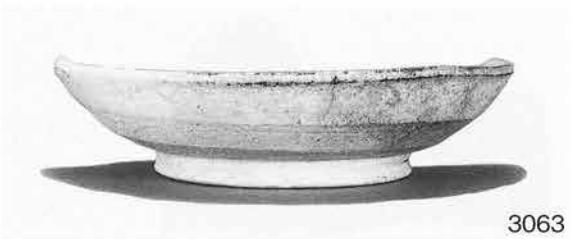
3043

3045

3044


3061

3062


3063

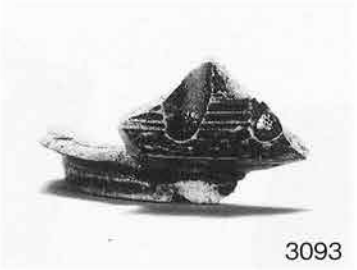
3074

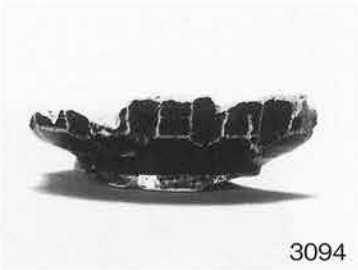
3075

3080

写真図版164　近世の陶器①
(3021～3023・3041～3045・3061～3063・3074・3075・3080)

3092


3093

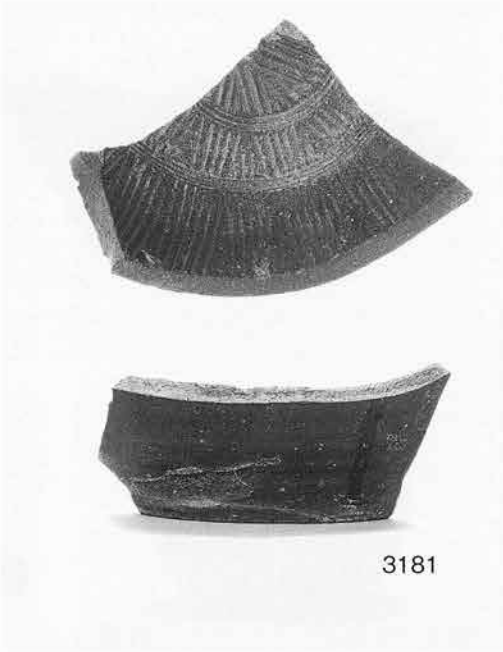

3094

3095

3111

3114

3145


3181

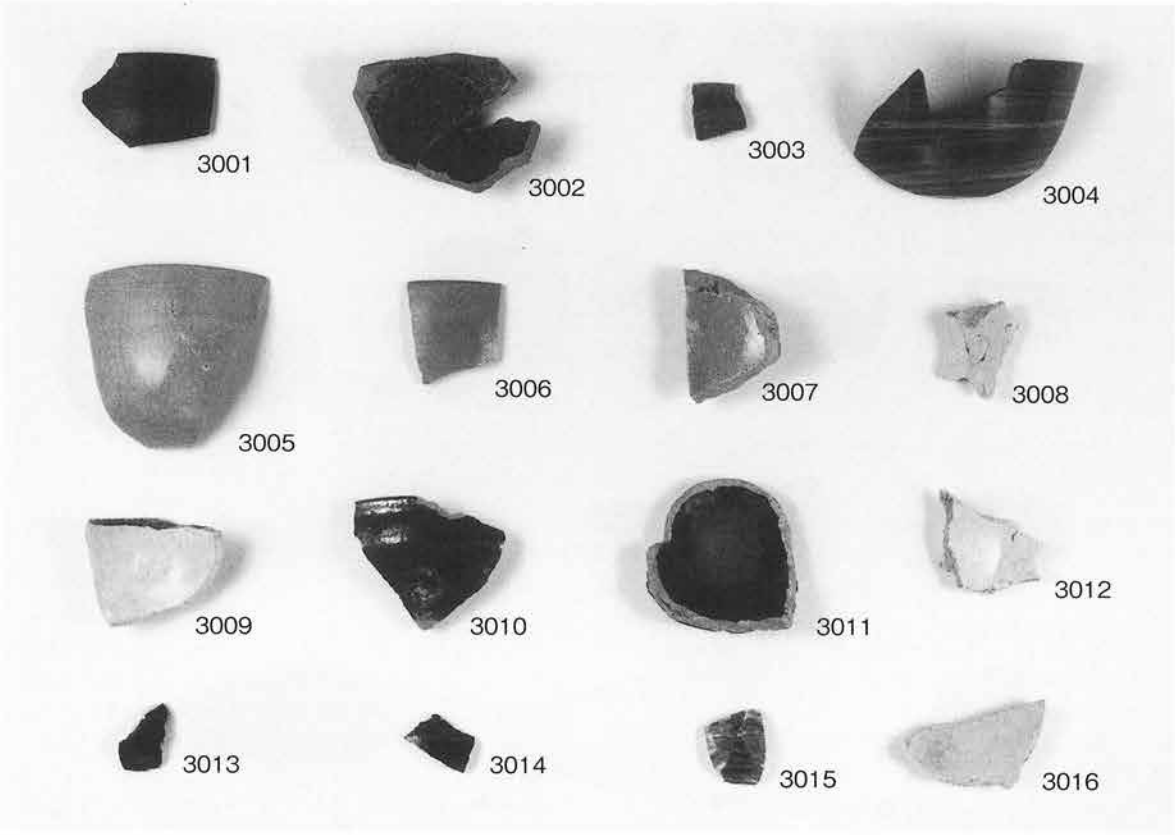
3115

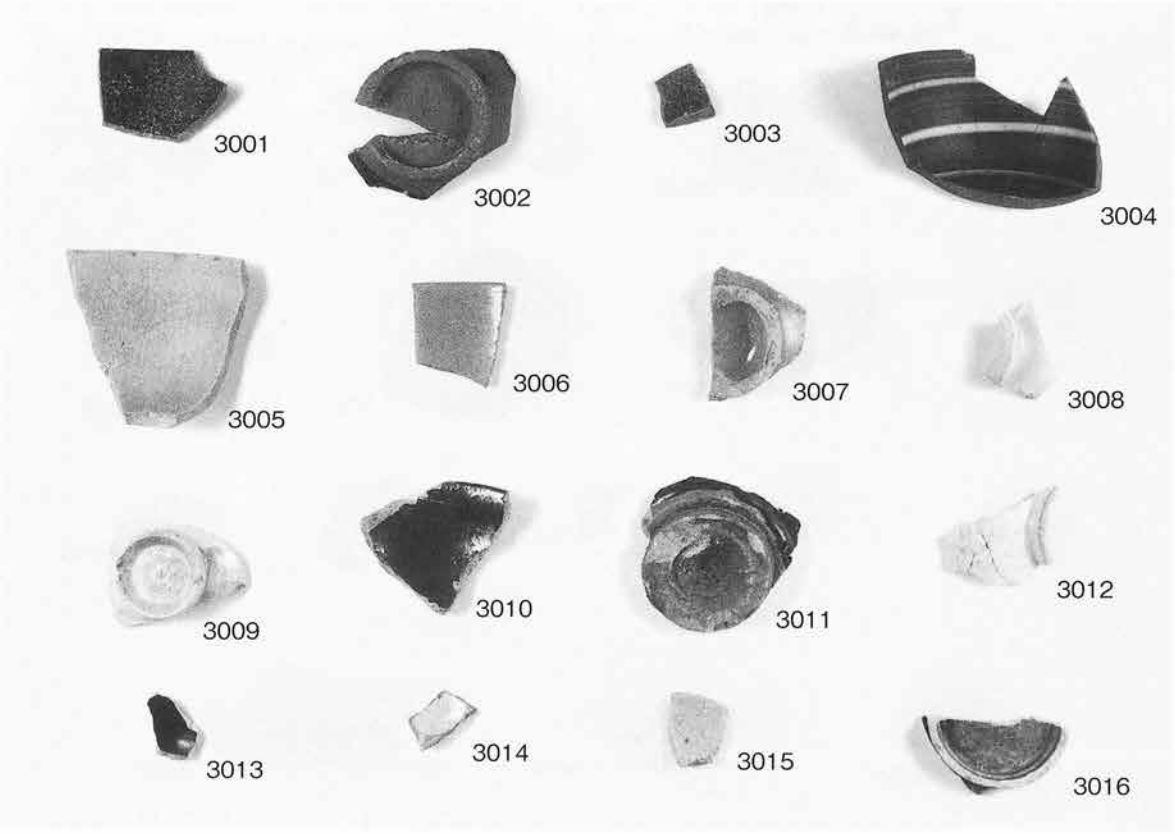
3185

3187

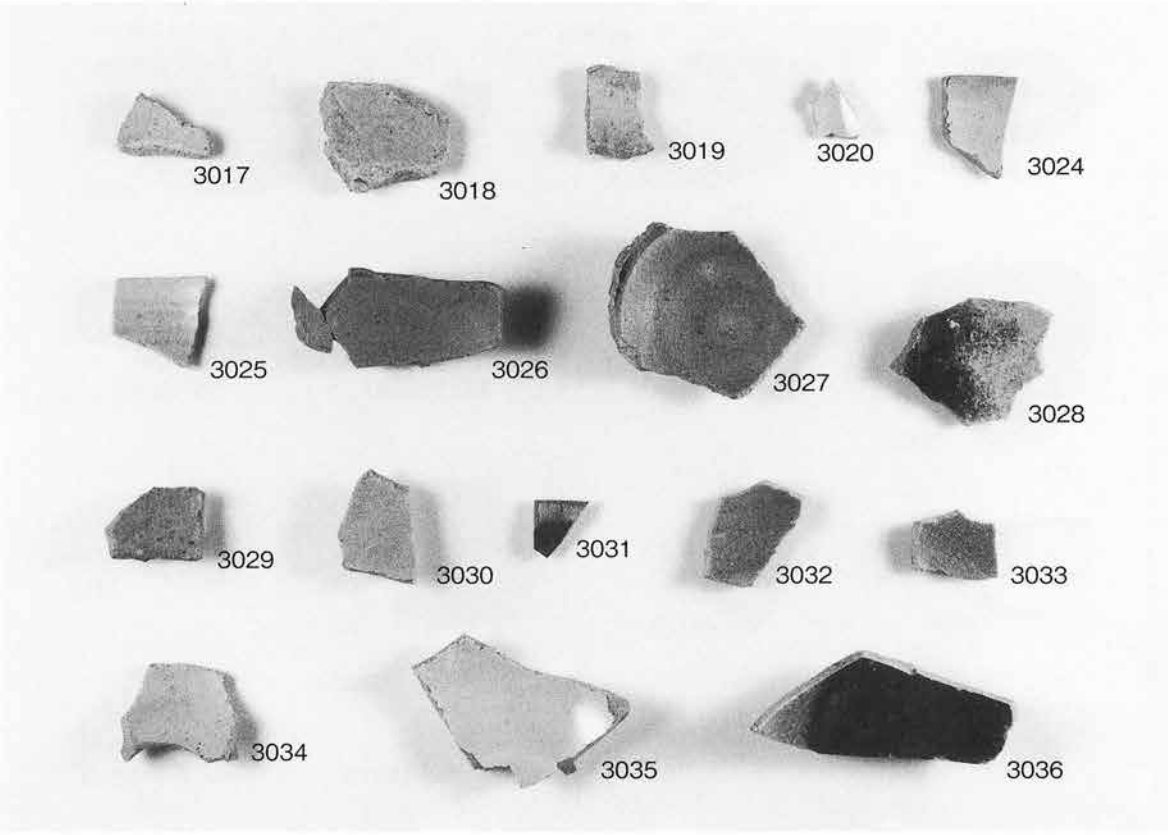
写真図版165　近世の陶器②
(3092・3095・3104・3111・3114・3145・3181・3185・3187)

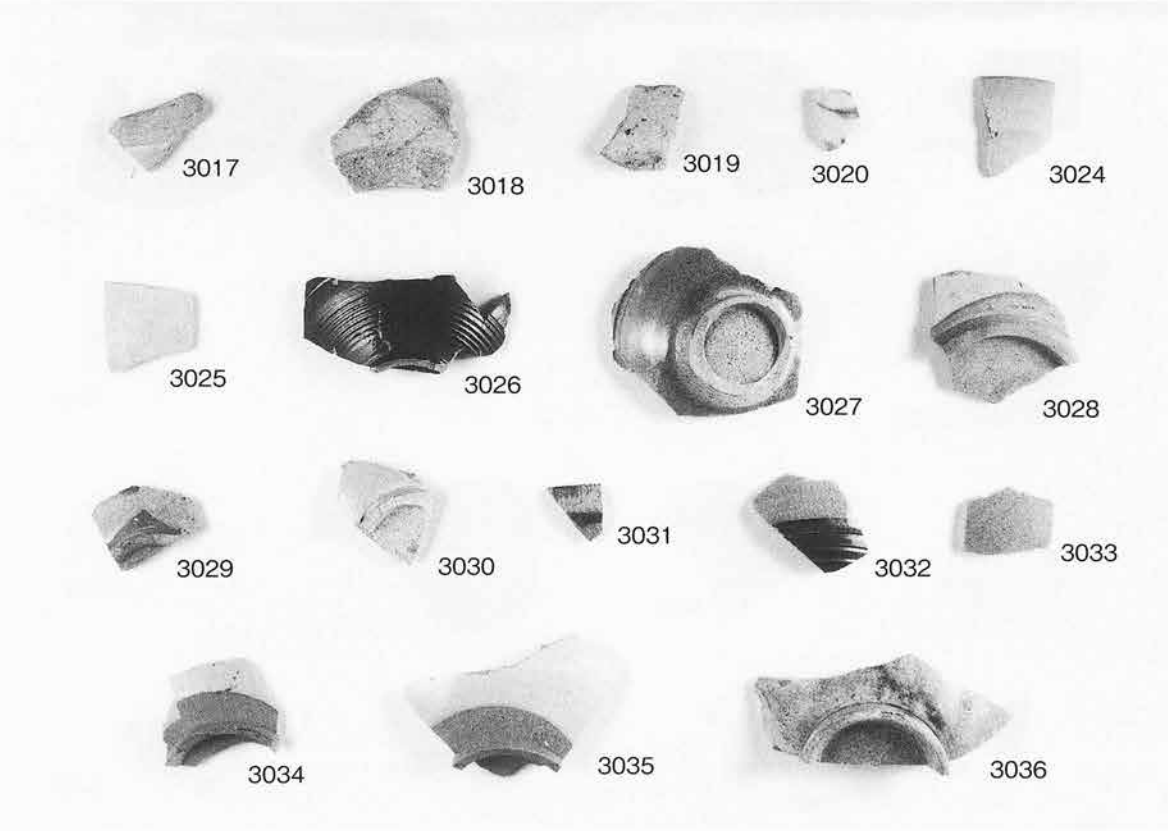
写真図版166　近世の陶器③
(3191・3192・3194・3195・3204・3220～3222)



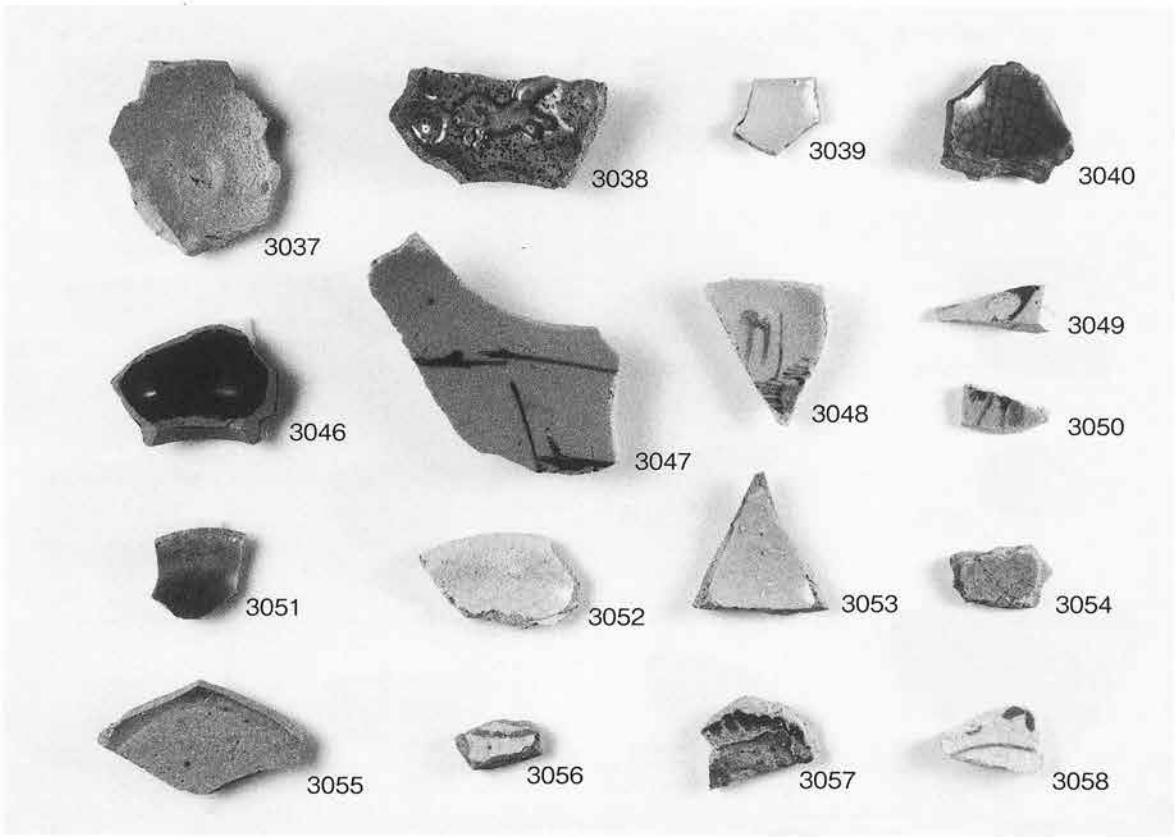


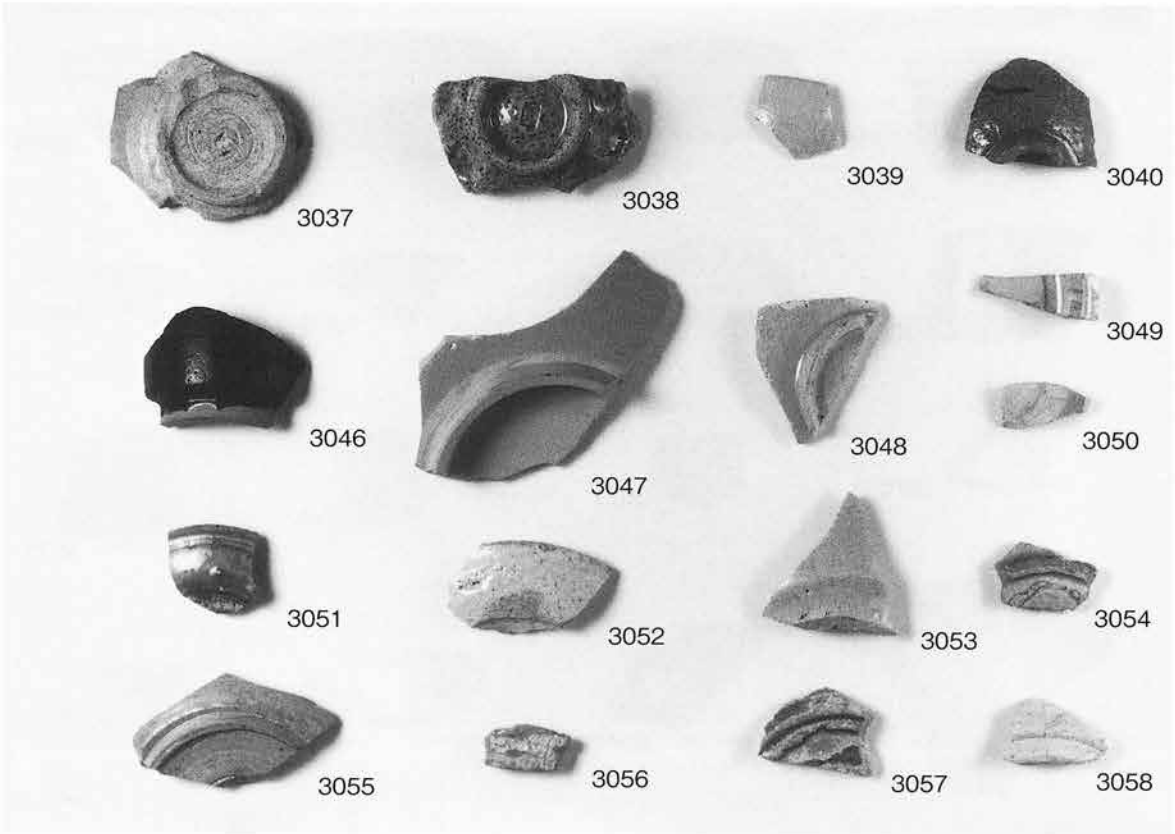
写真図版167　近世の陶器④(3001～3016)



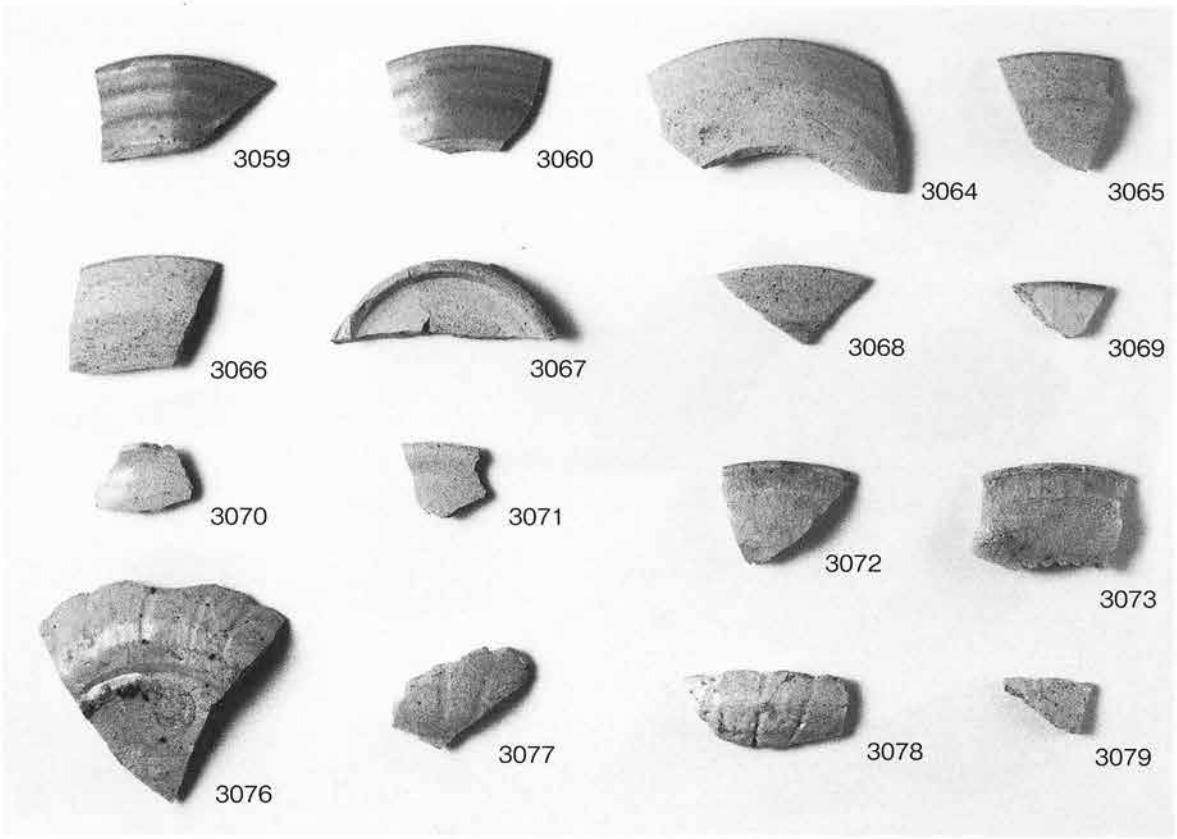


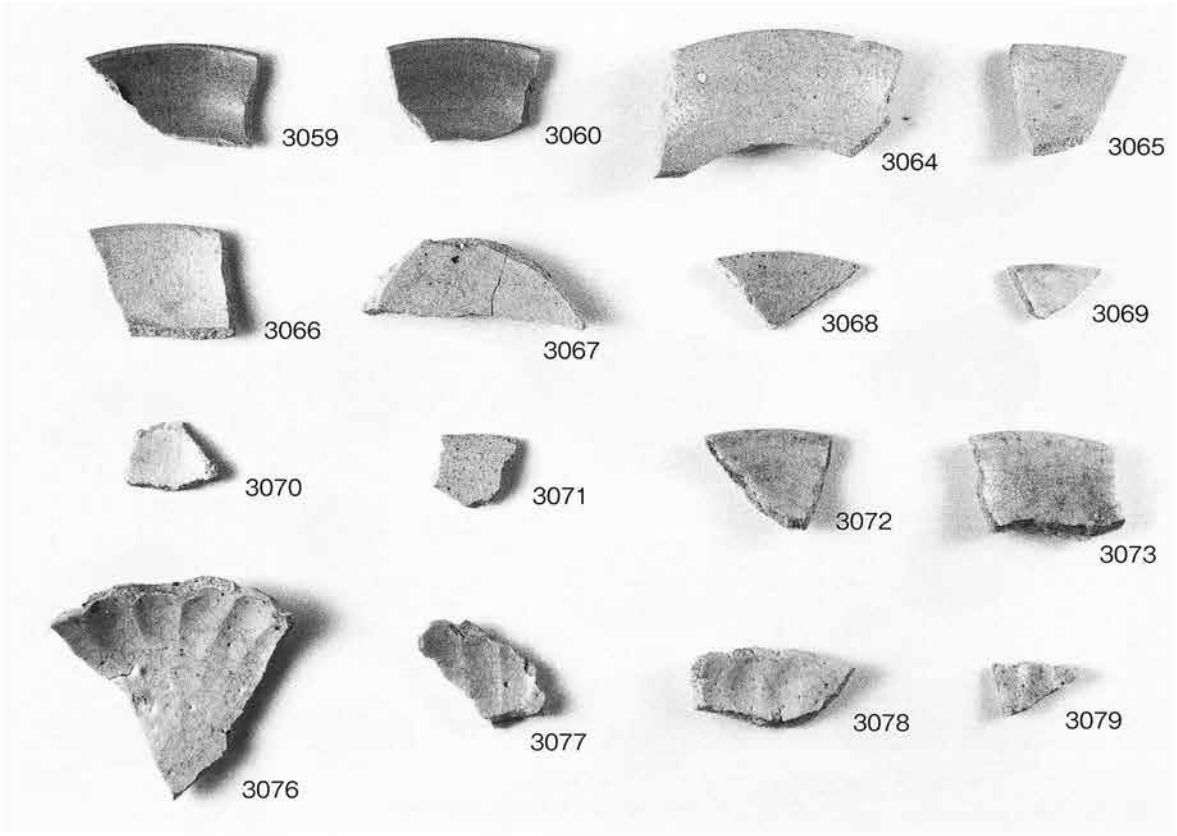
写真図版168　近世の陶器⑤(3017～3020・3024～3036)



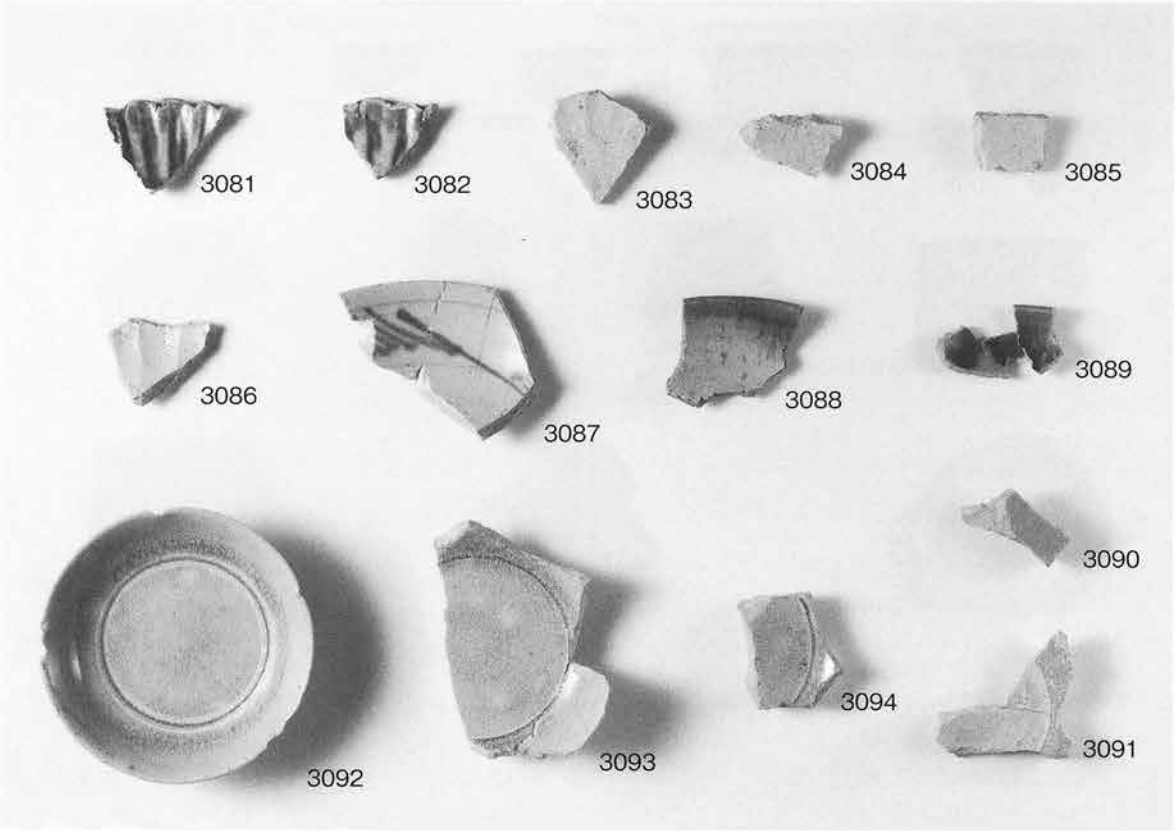


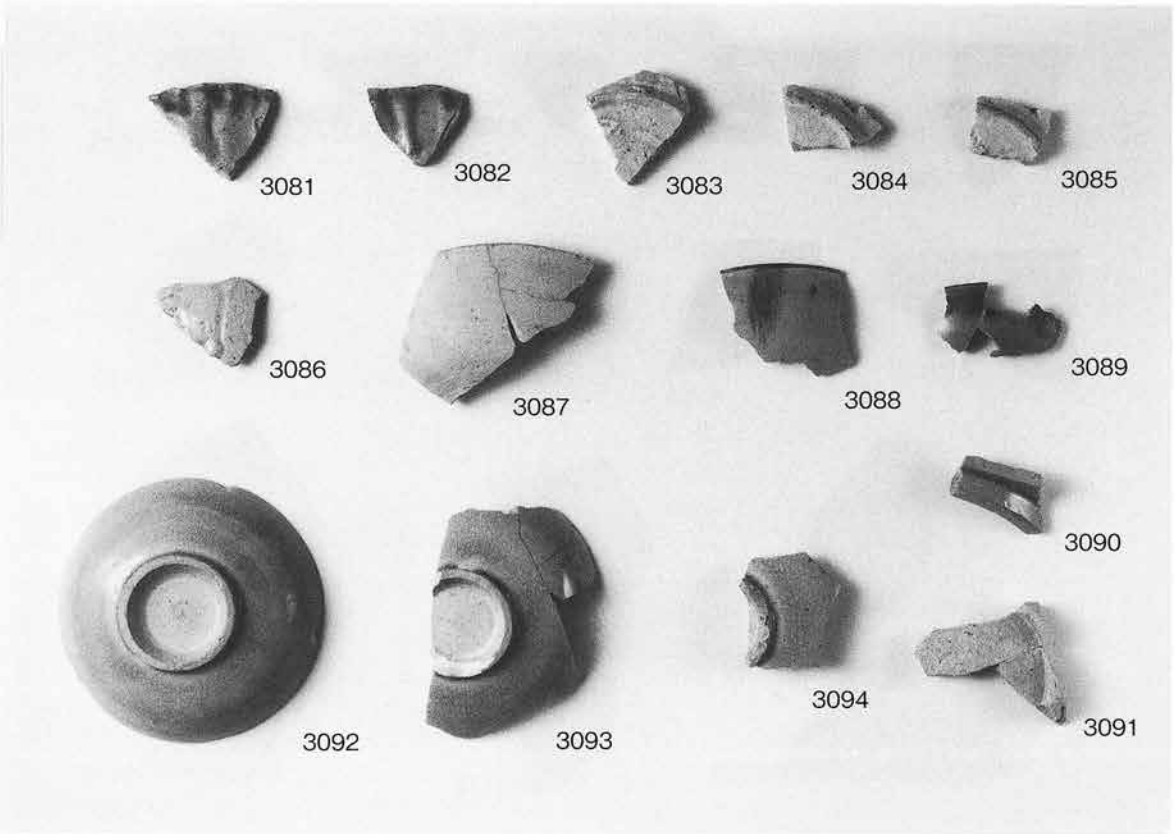
写真図版169　近世の陶器⑥(3037～3040・3046～3058)



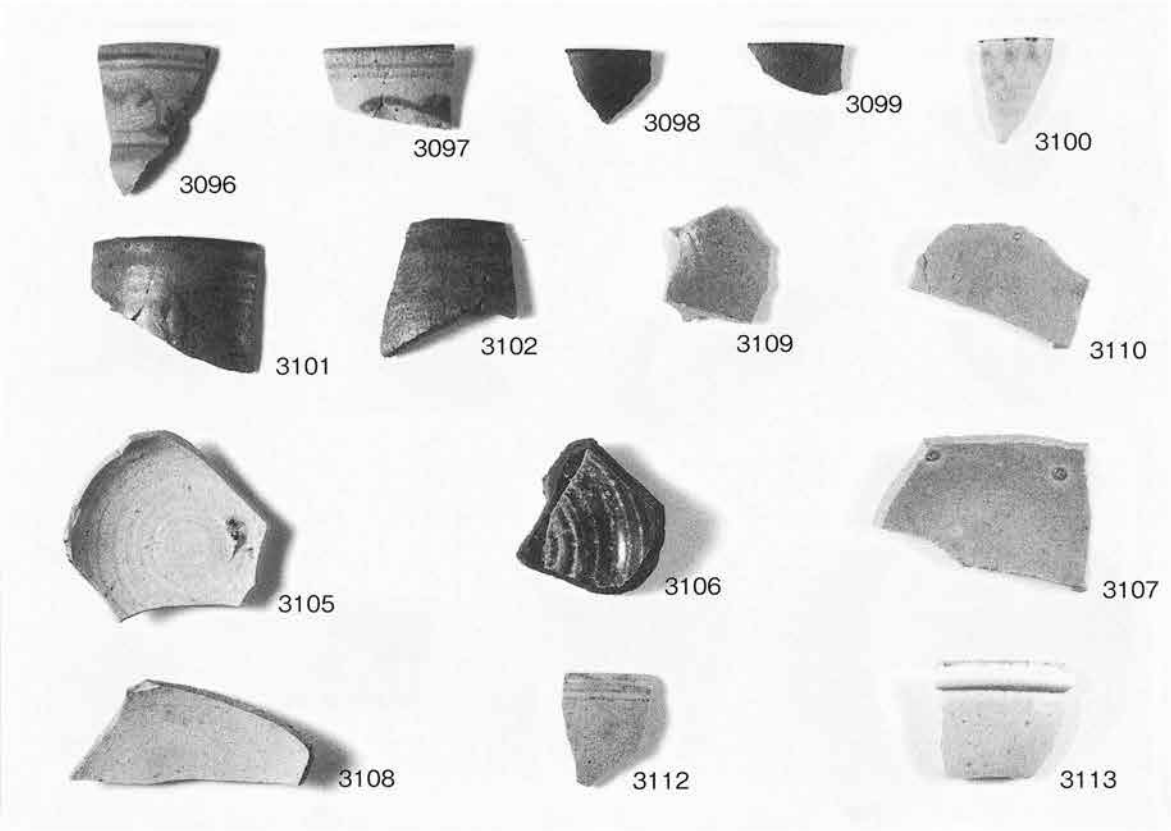


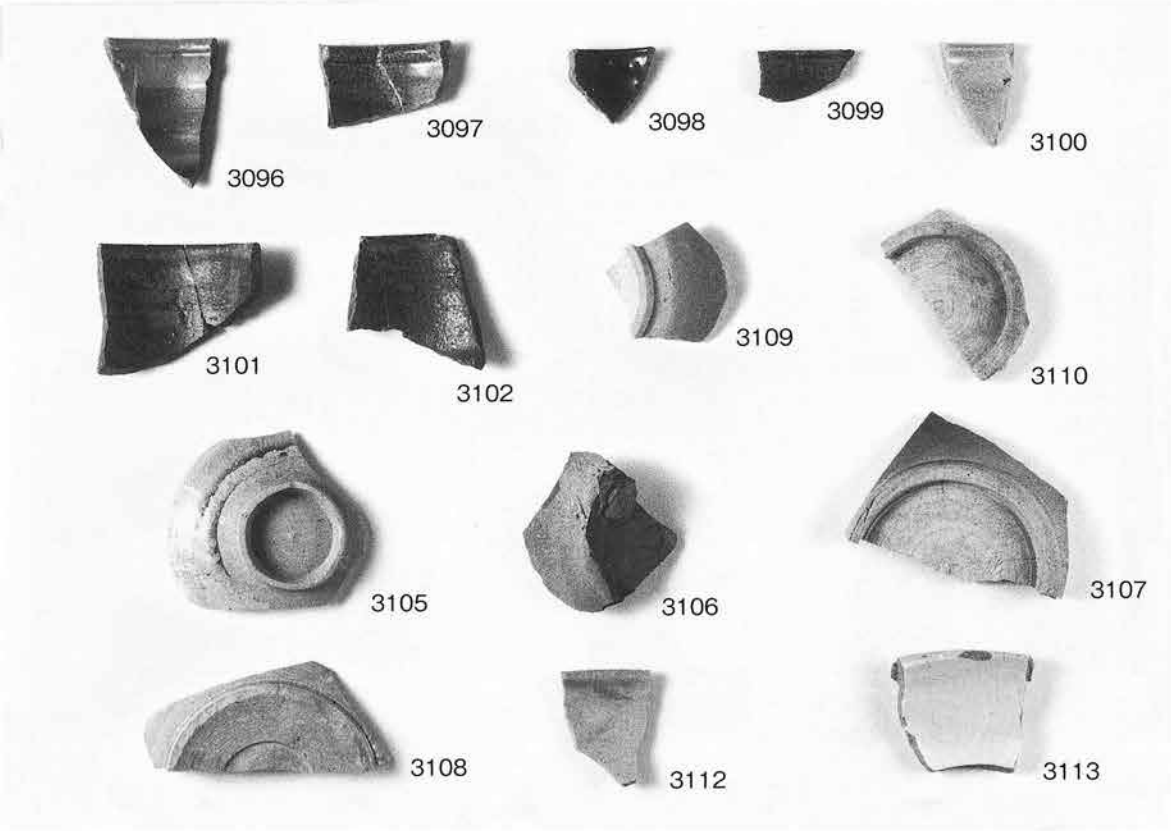
写真図版170　近世の陶器⑦(3059・3060・3064～3073・3076～3079)



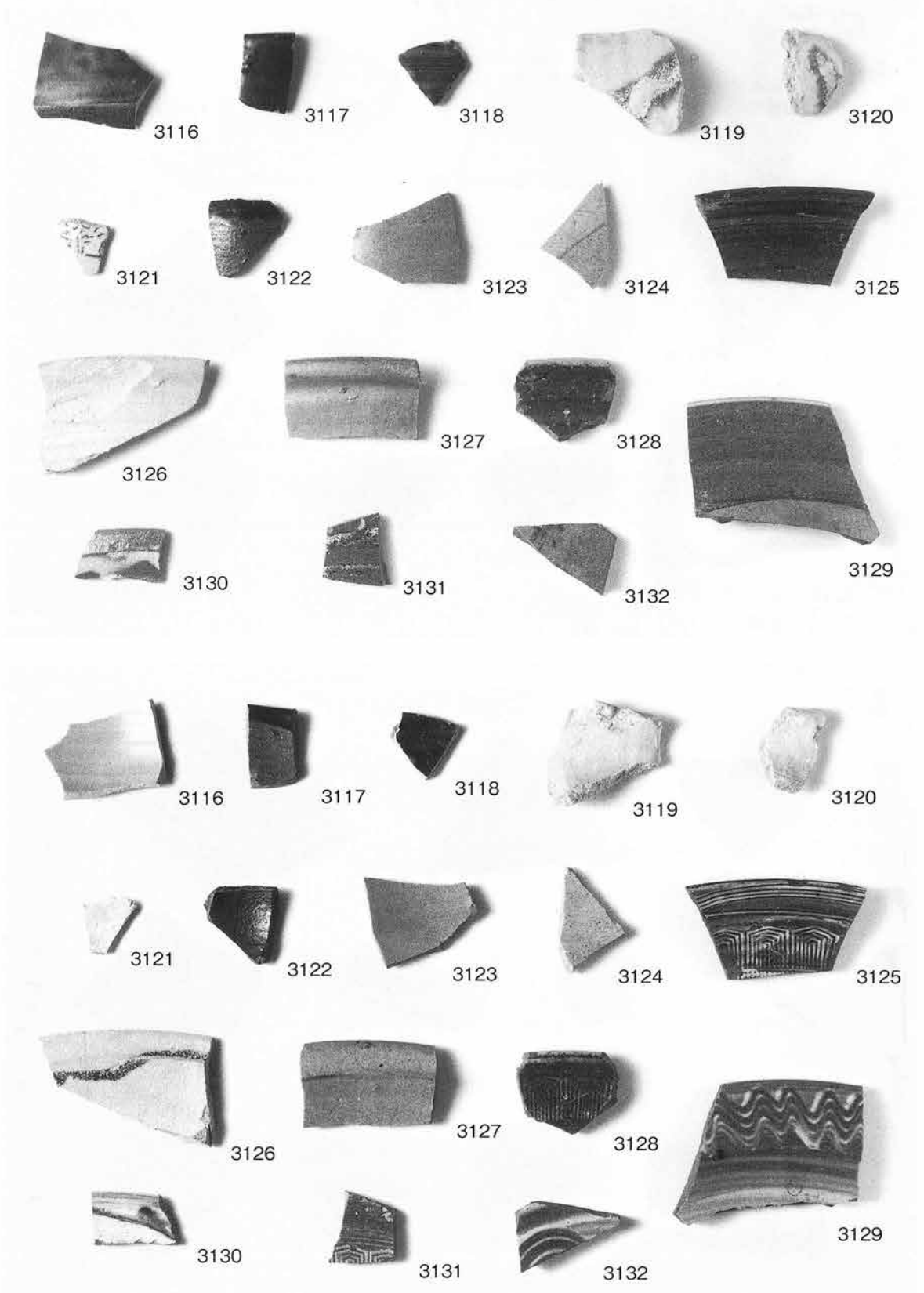


写真図版171　近世の陶器⑧(3081～3094)

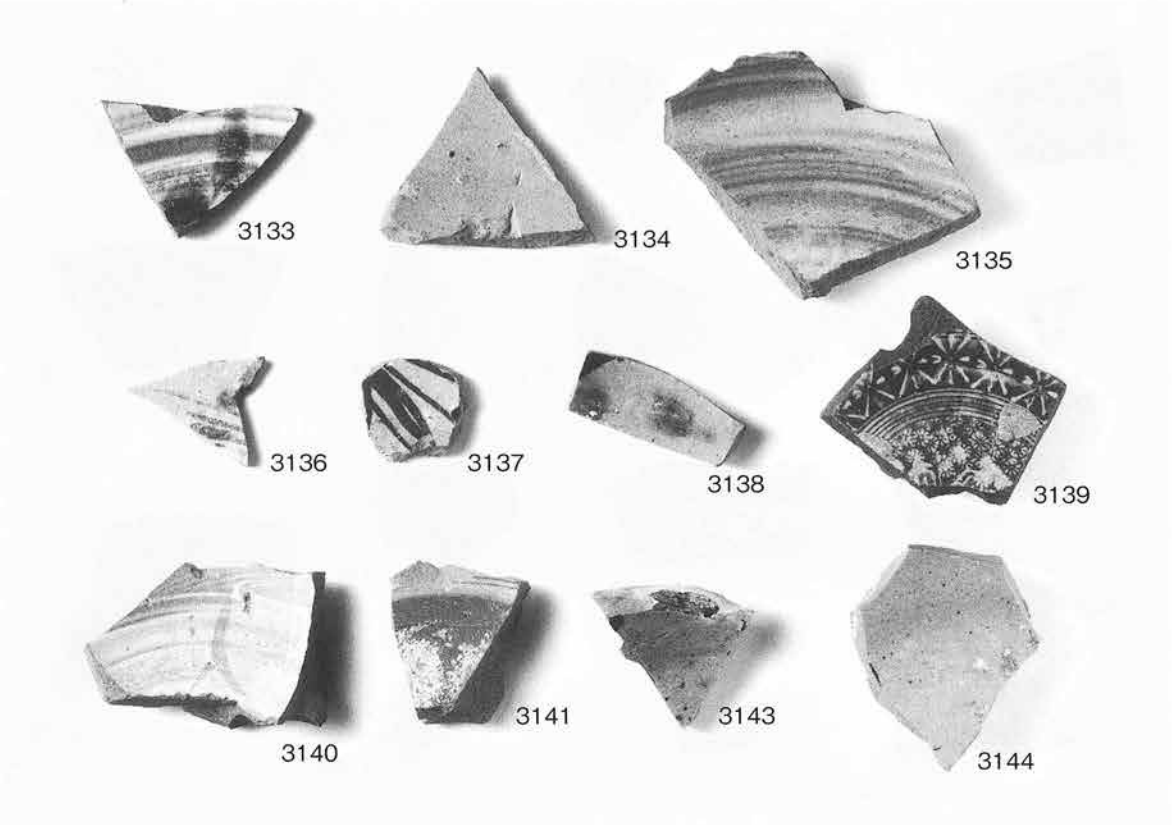


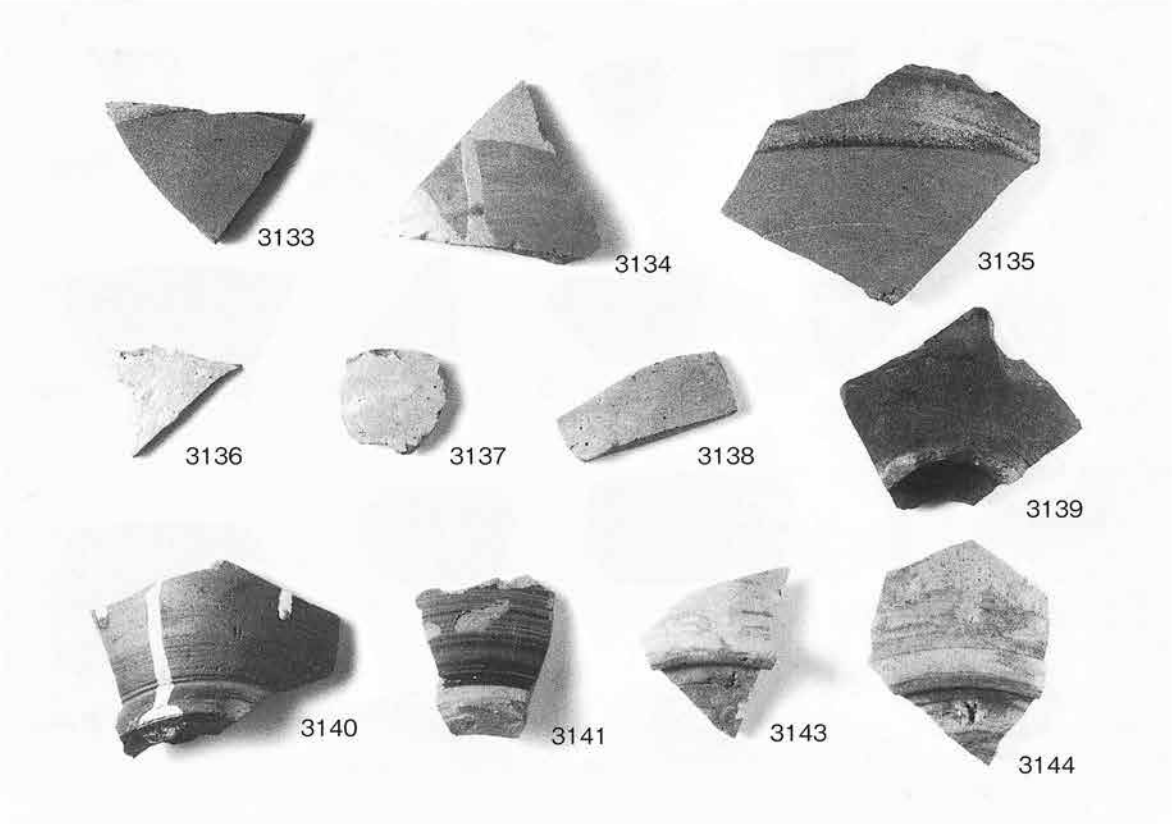


写真図版172　近世の陶器⑨(3096～3102・3105～3110・3112・3113)

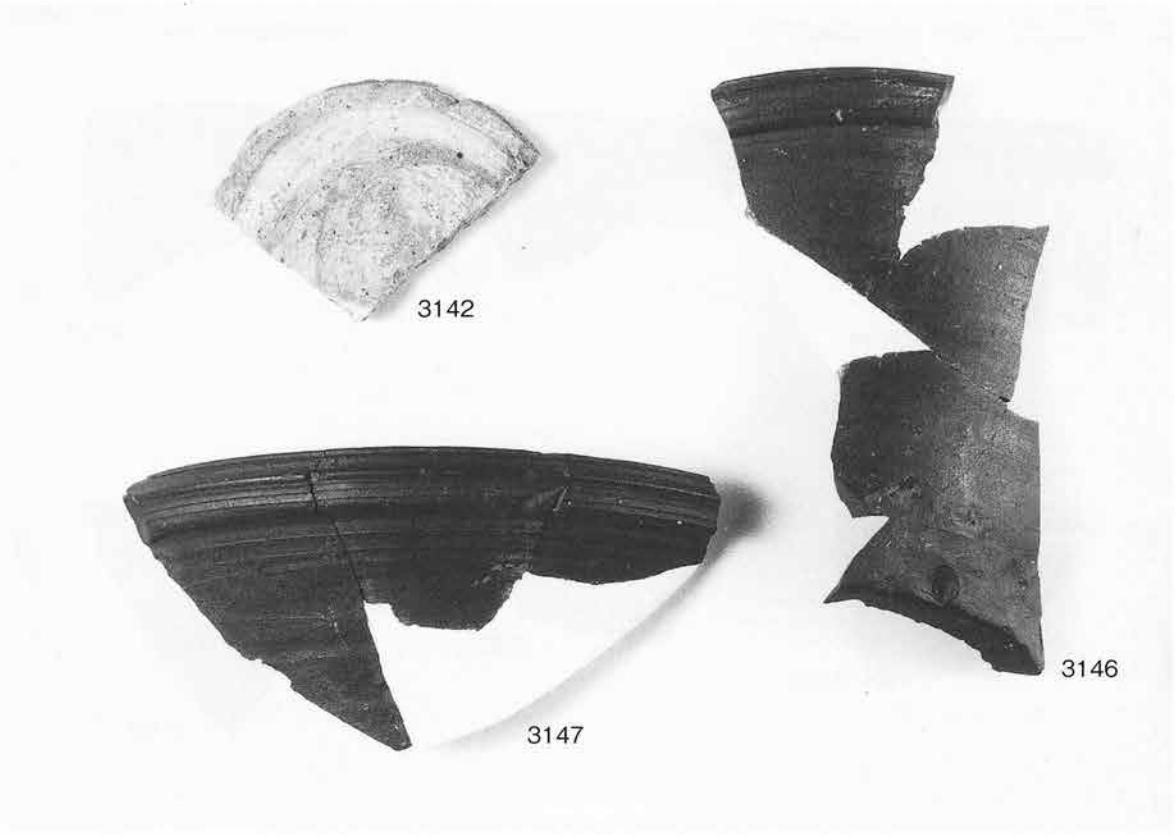


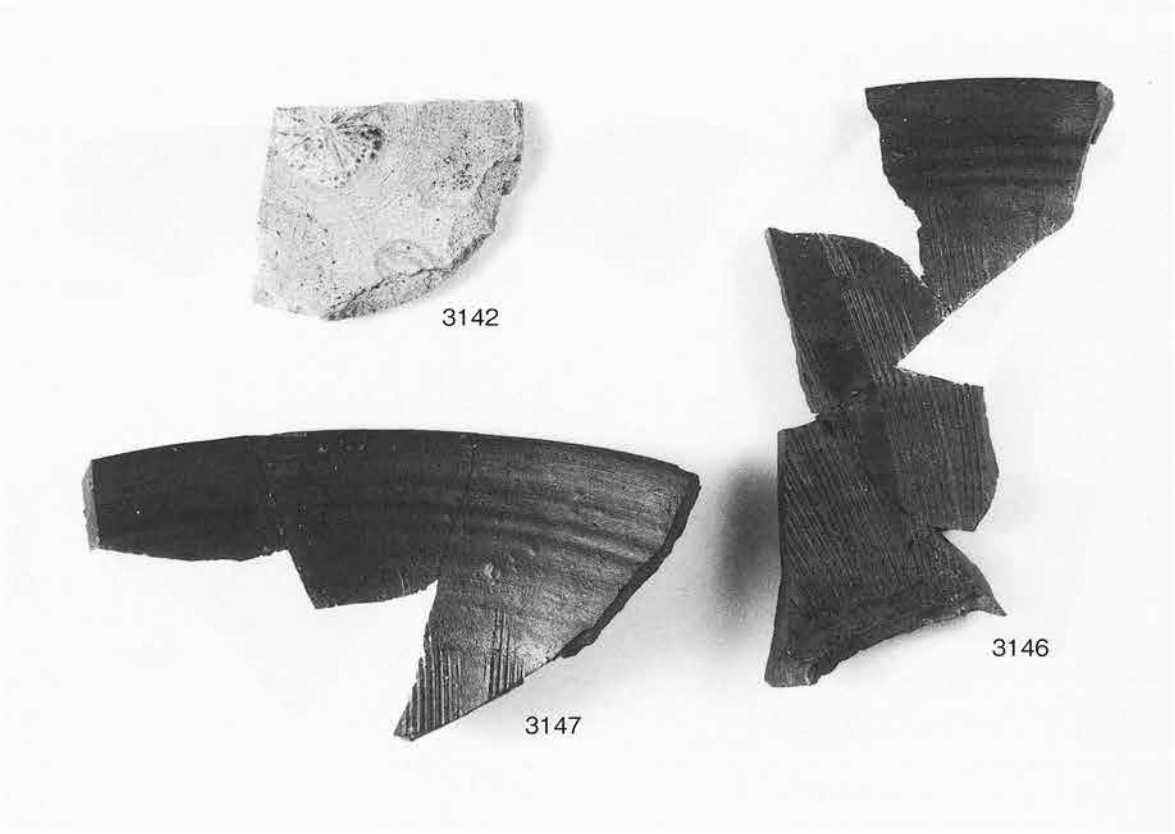
写真図版173　近世の陶器⑩(3116～3132)



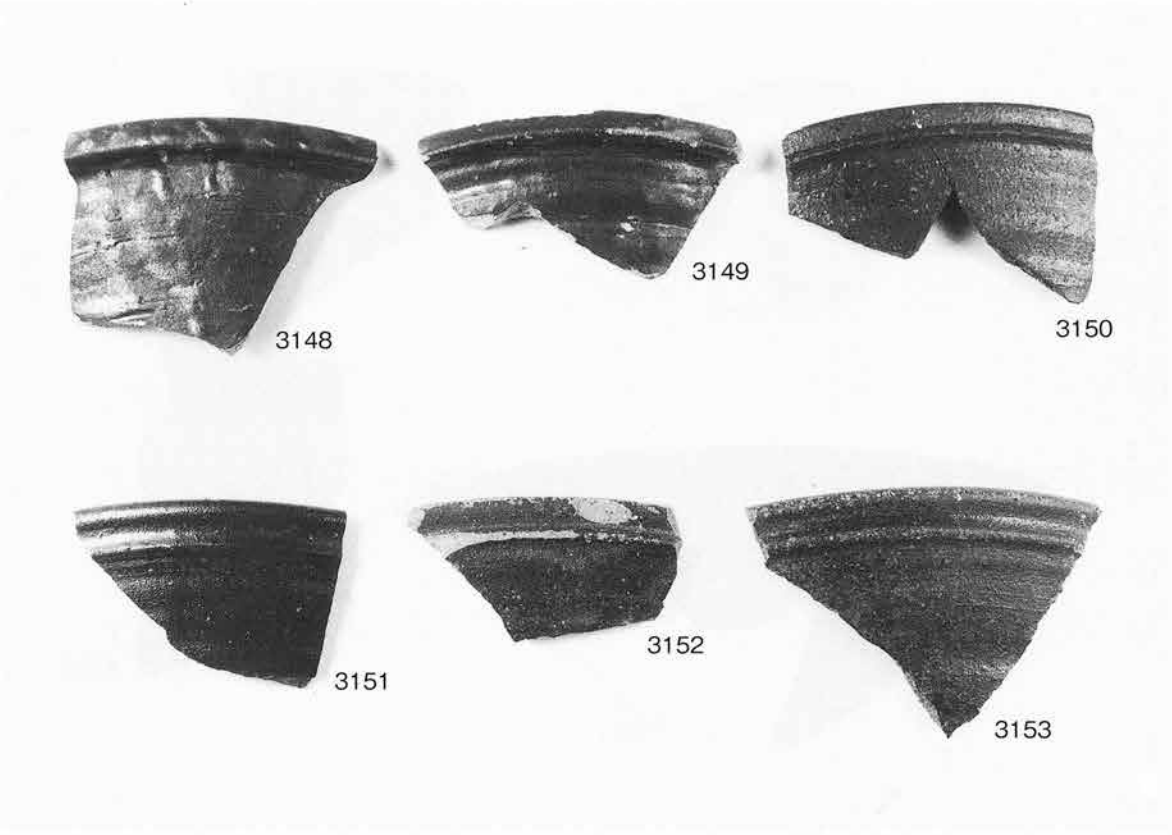


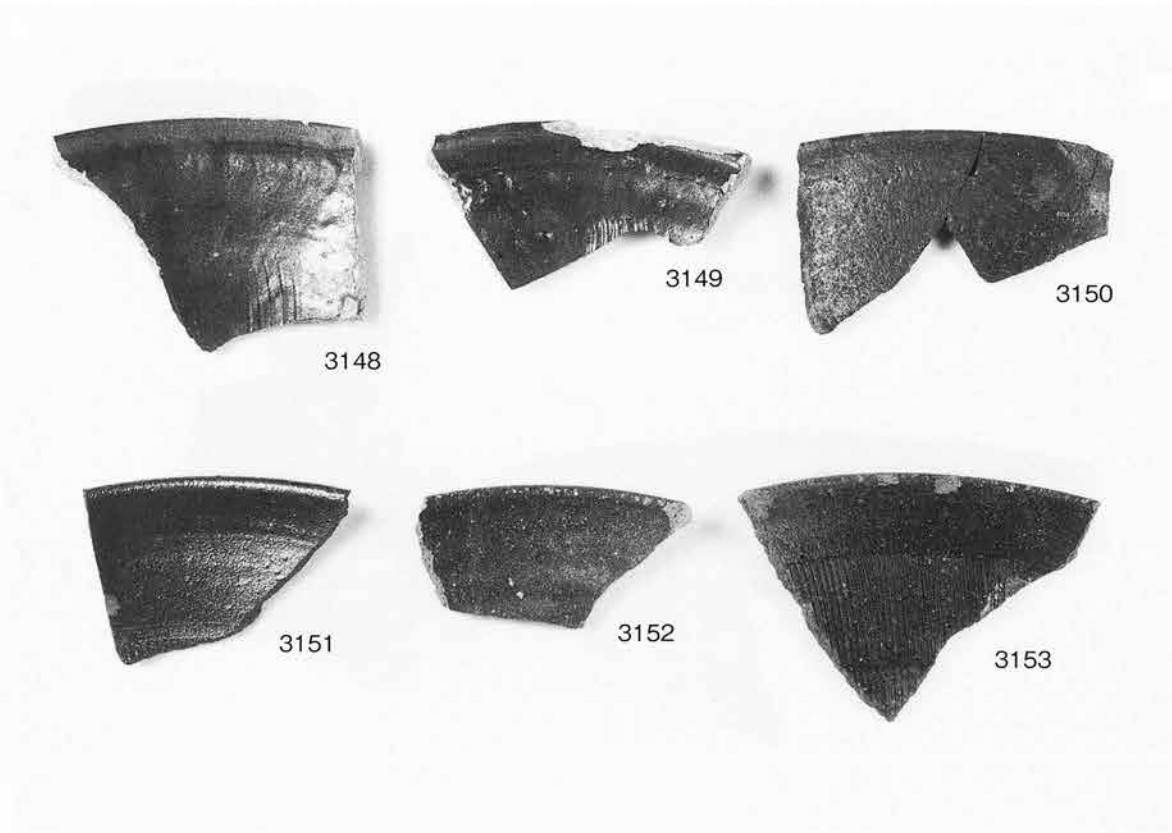
写真図版174　近世の陶器⑪(3133～3141・3143・3144)



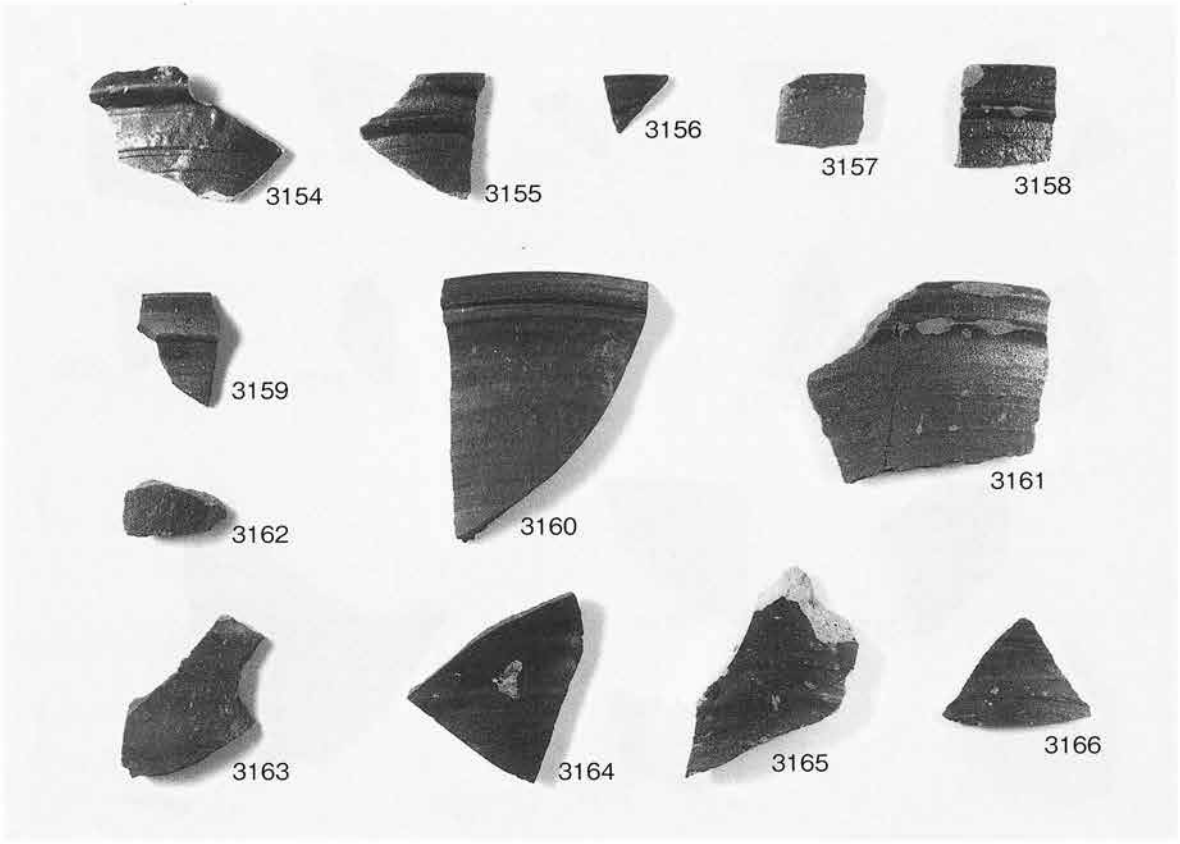


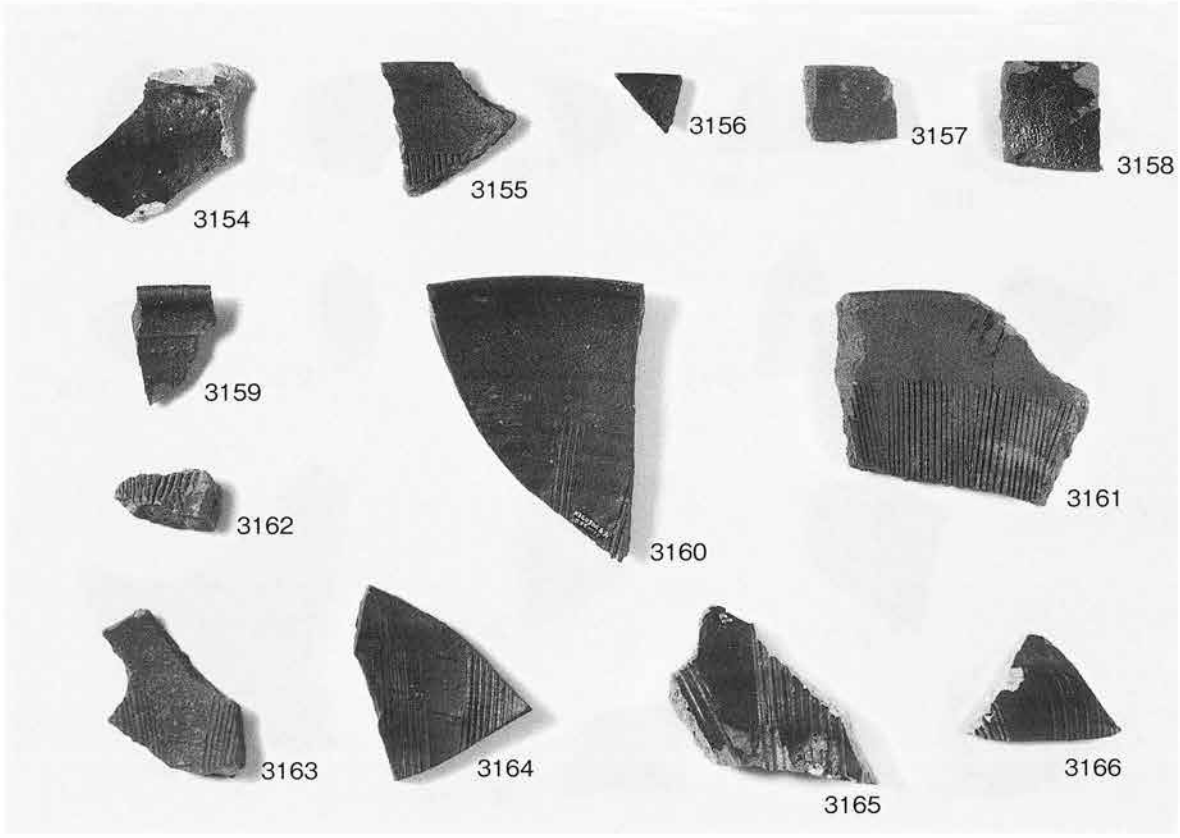
写真図版175　近世の陶器⑫(3142・3146・3147)



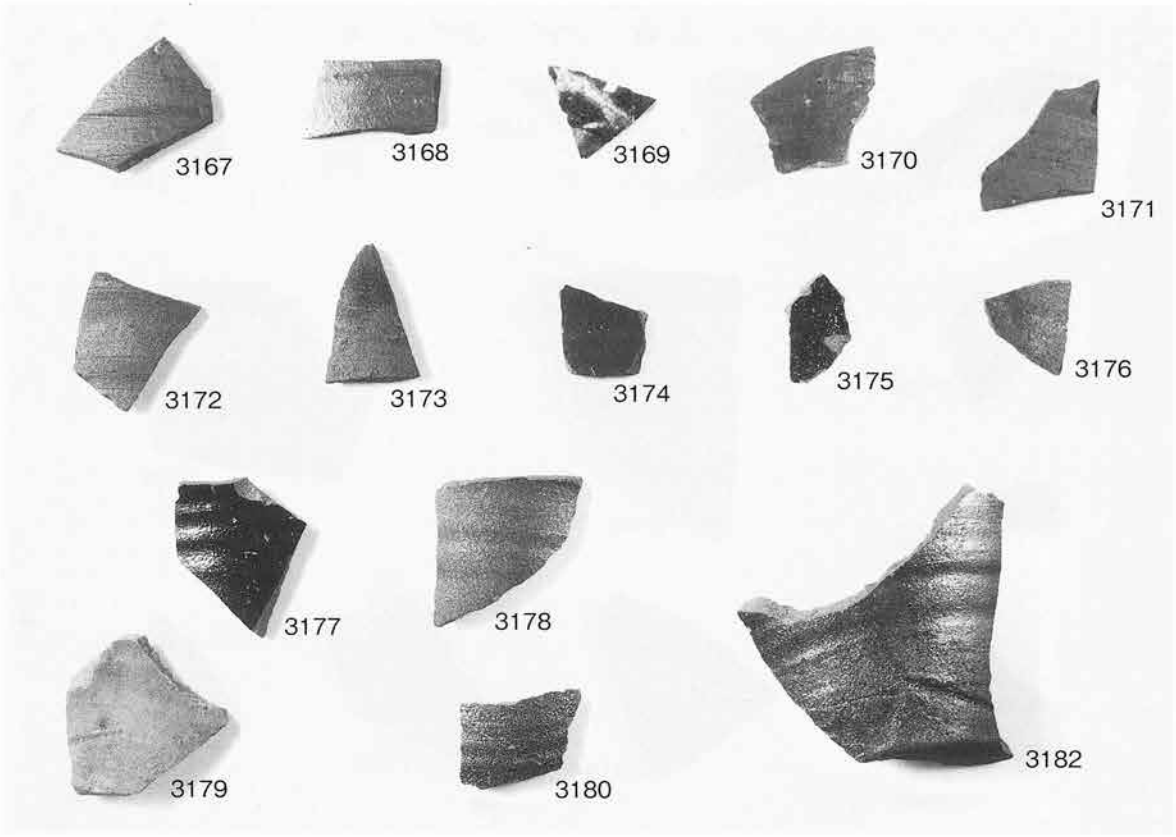


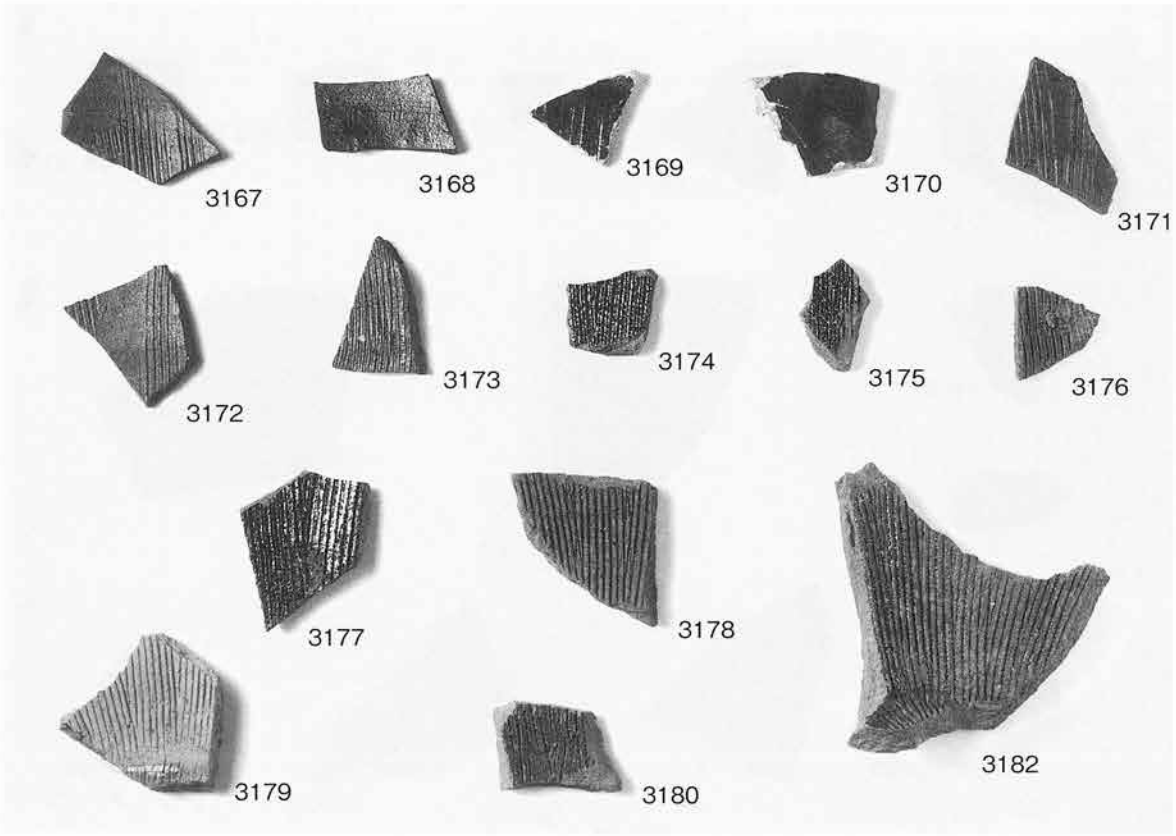
写真図版176　近世の陶器⑬(3148～3153)



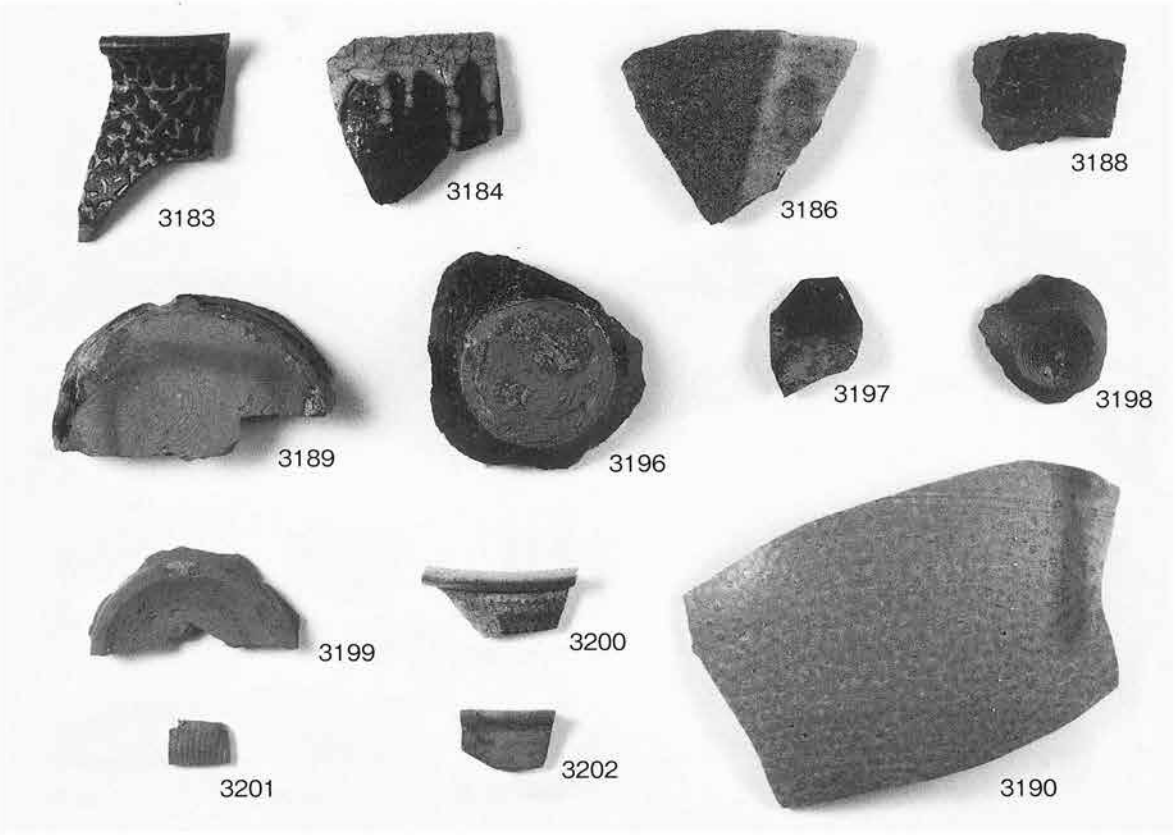


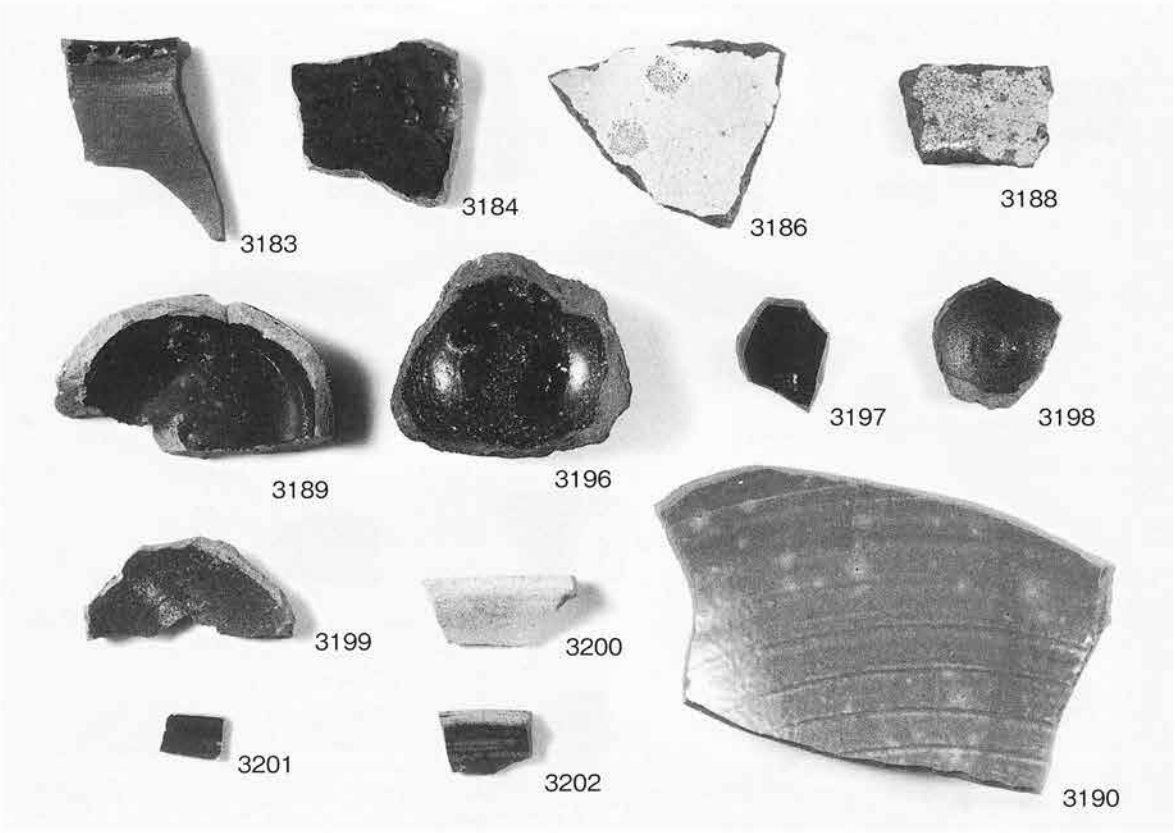
写真図版177　近世の陶器⑭(3154～3166)



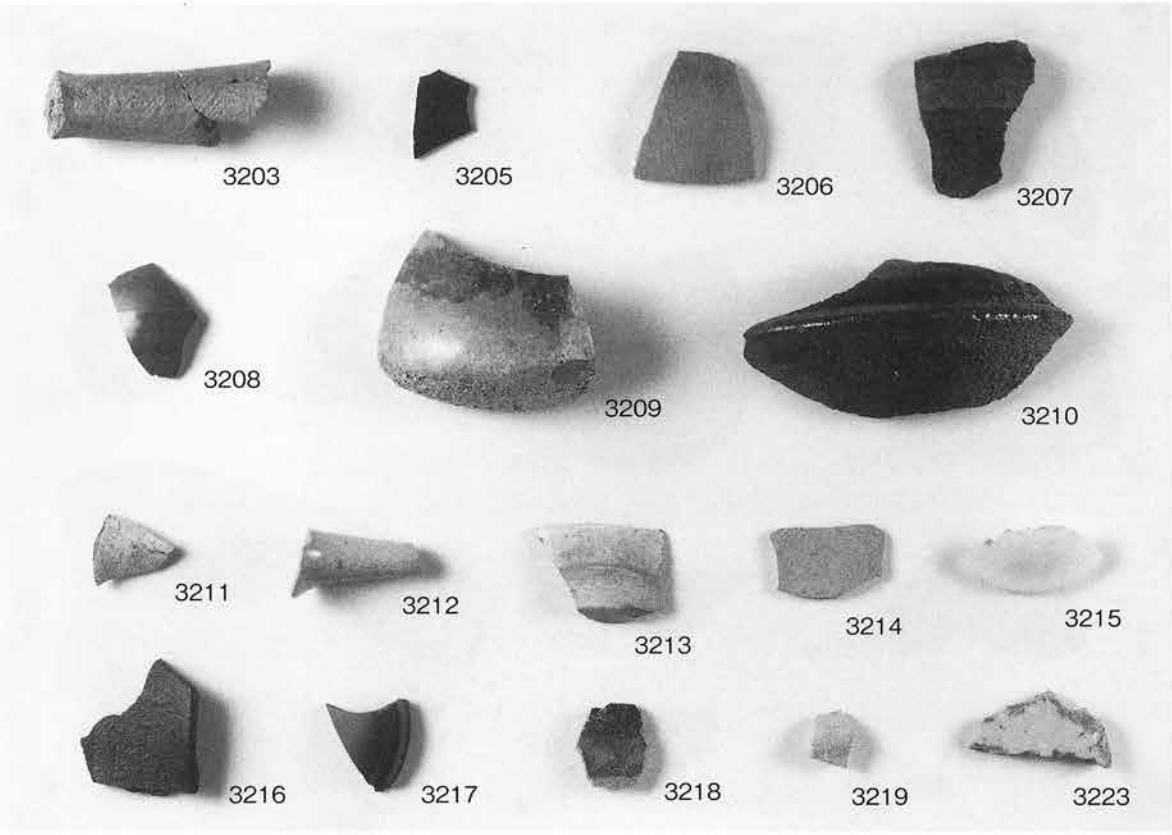


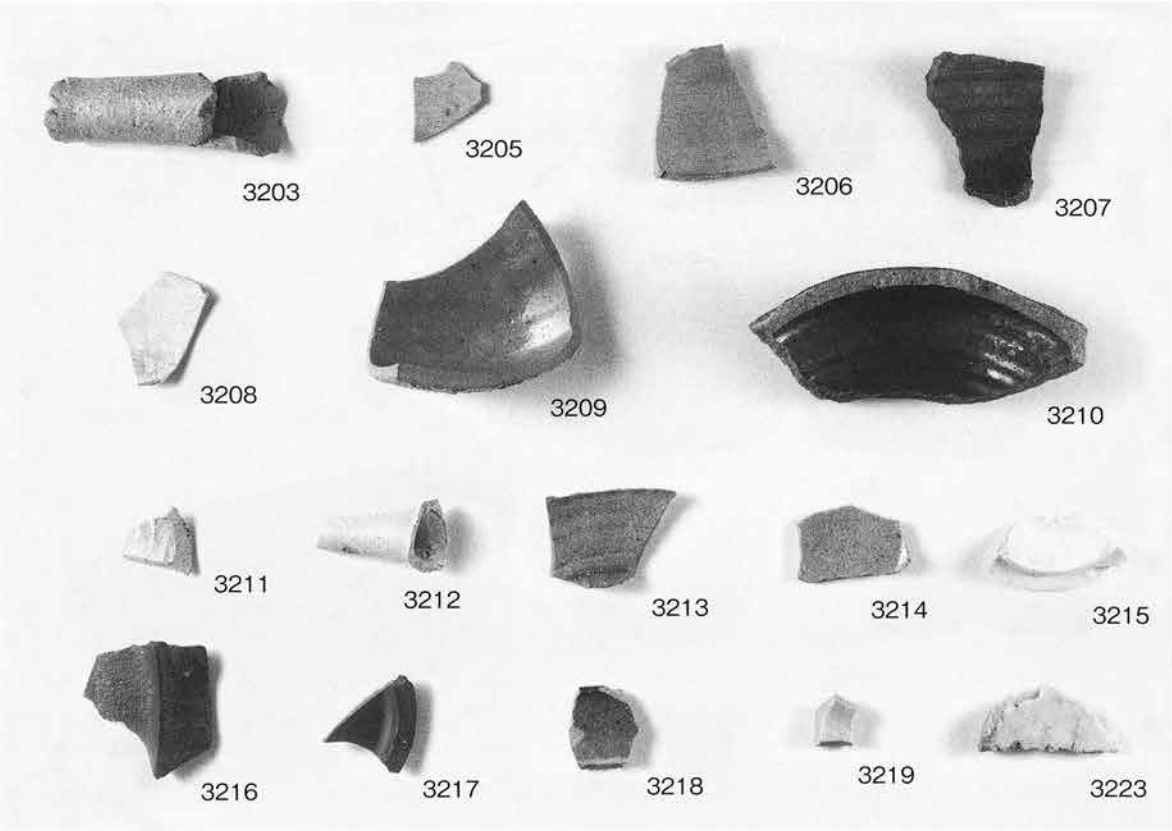
写真図版178　近世の陶器⑮(3167～3180・3182)





写真図版179　近世の陶器⑯
(3183・3184・3186・3188～3190・3196～3202)





写真図版180　近世の陶器⑰(3203・3205～3219・3223)

4025

4028

4036

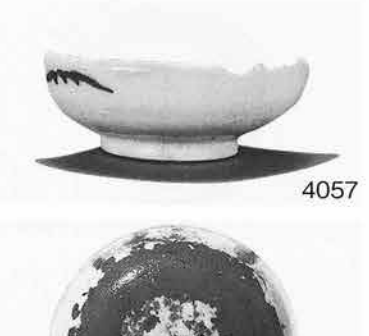
4026

4027

4035

4049

4051


4057

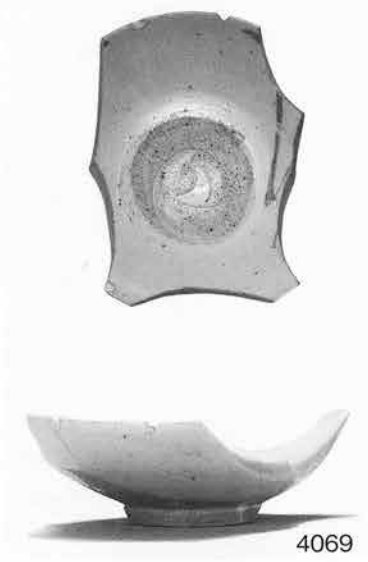
4052

4053

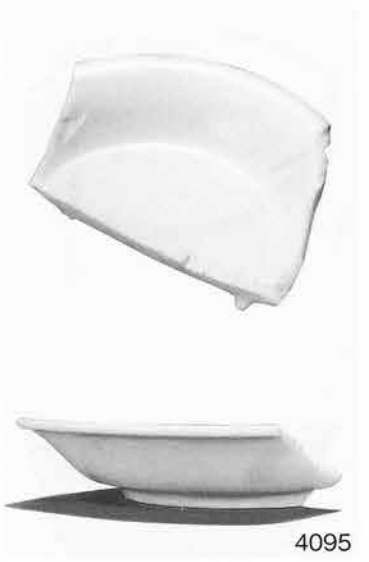
4058

写真図版181　近世の磁器①
（4025～4028・4035・4036・4049・4051～4053・4057・4058）

4068

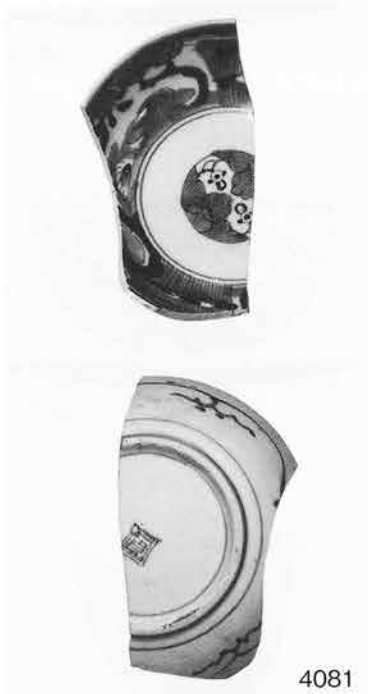


4069



4095

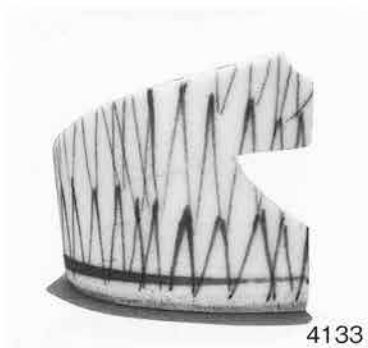
4080



4081

4125

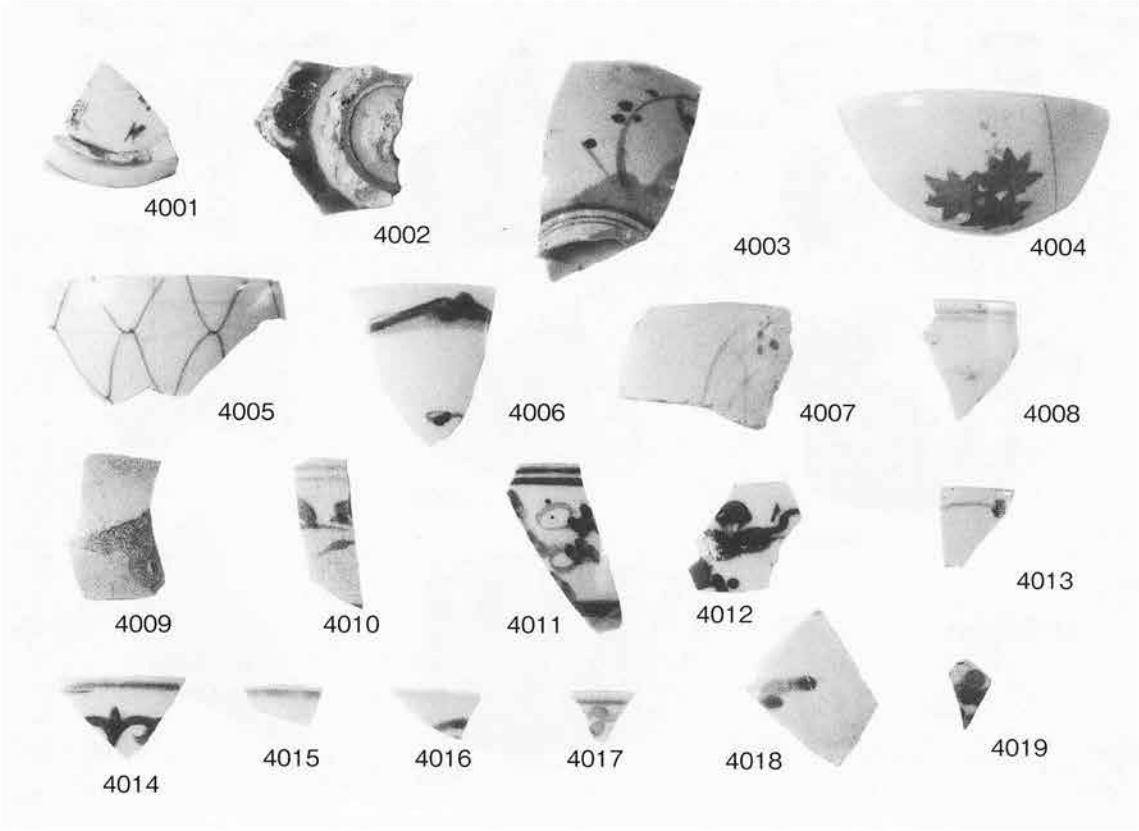
4132

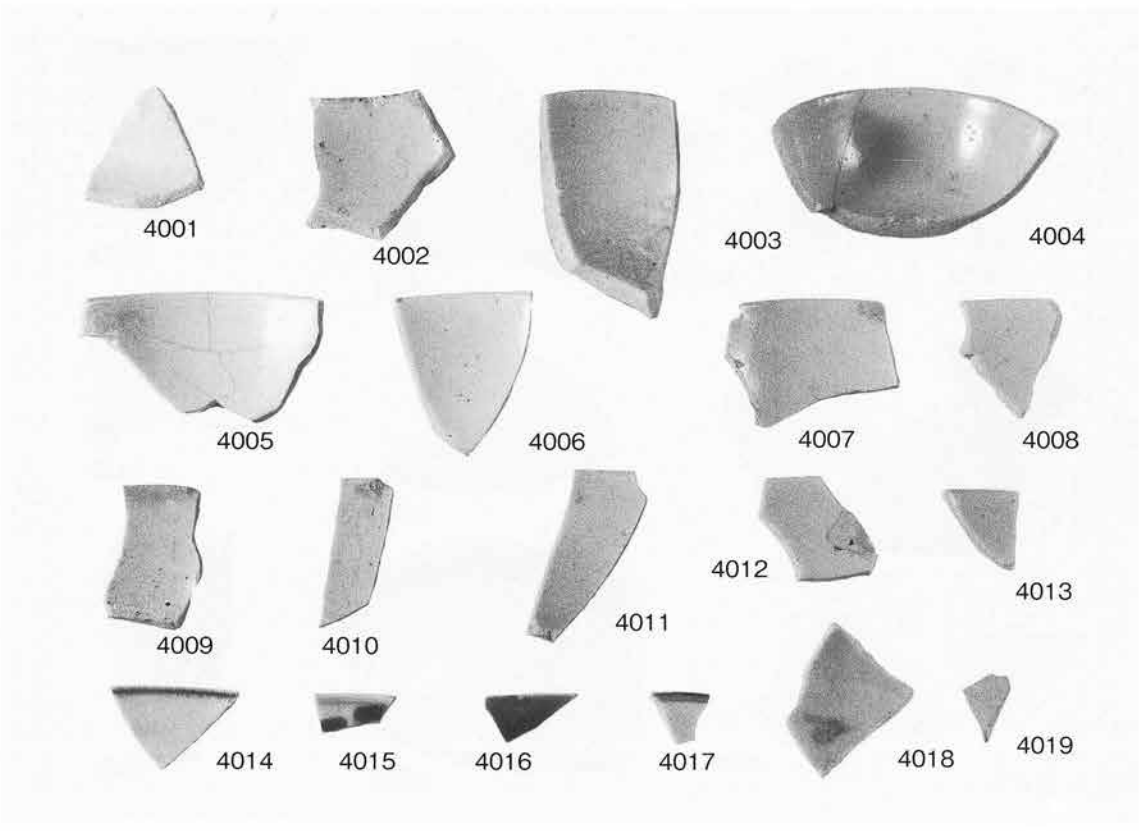


4133

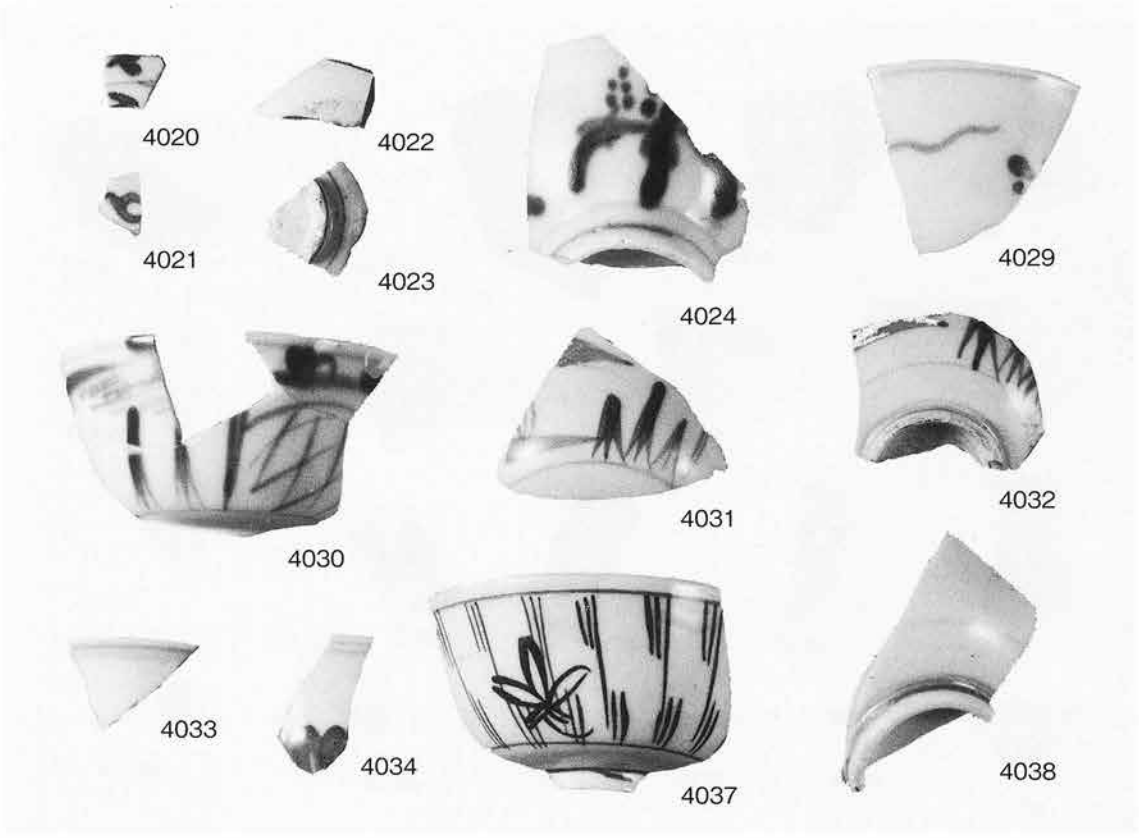
4145、4146

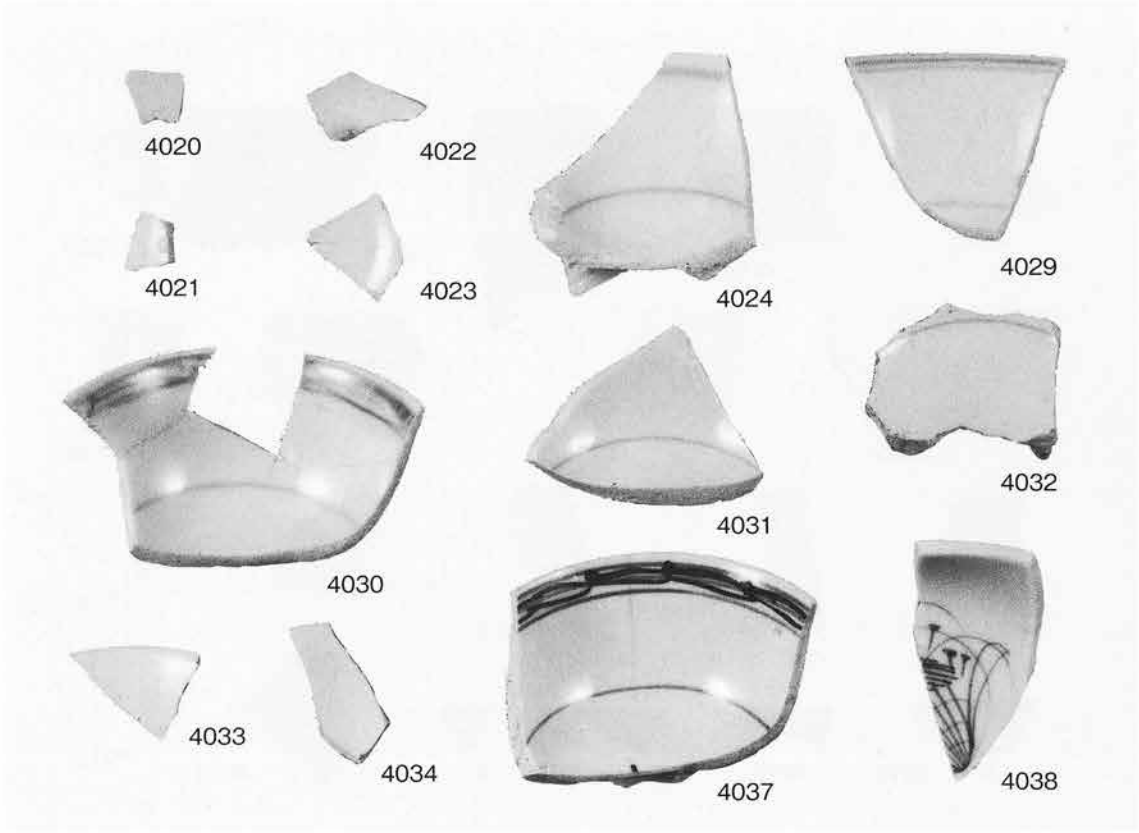
写真図版182　近世の磁器②
（4068・4069・4080・4081・4095・4125・4132・4133・4145・4146）



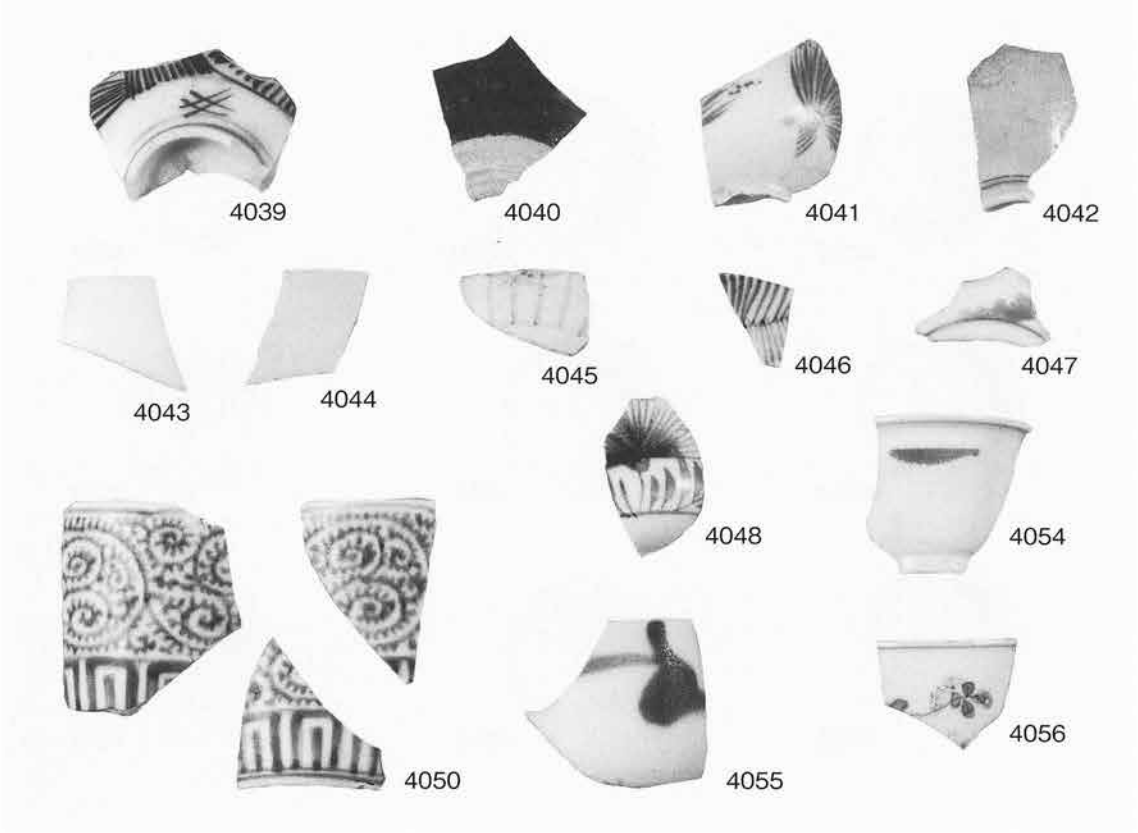


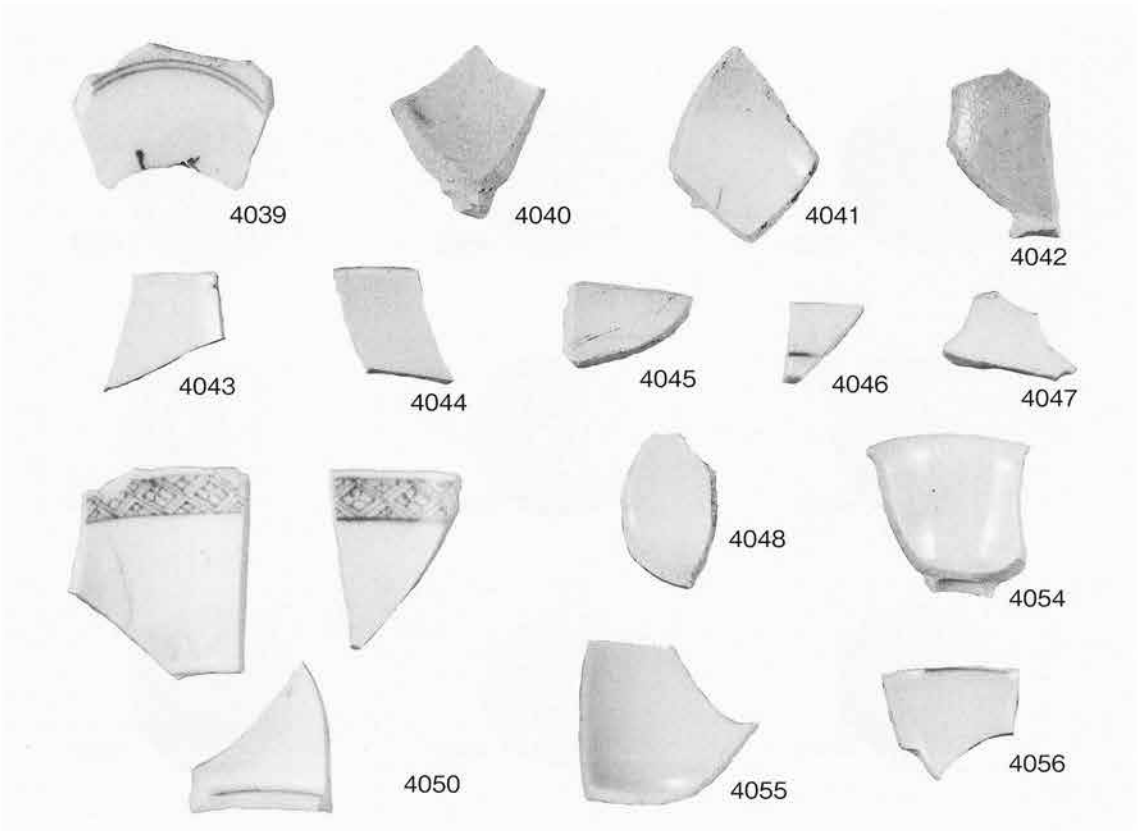
写真図版183　近世の磁器③(4001～4019)



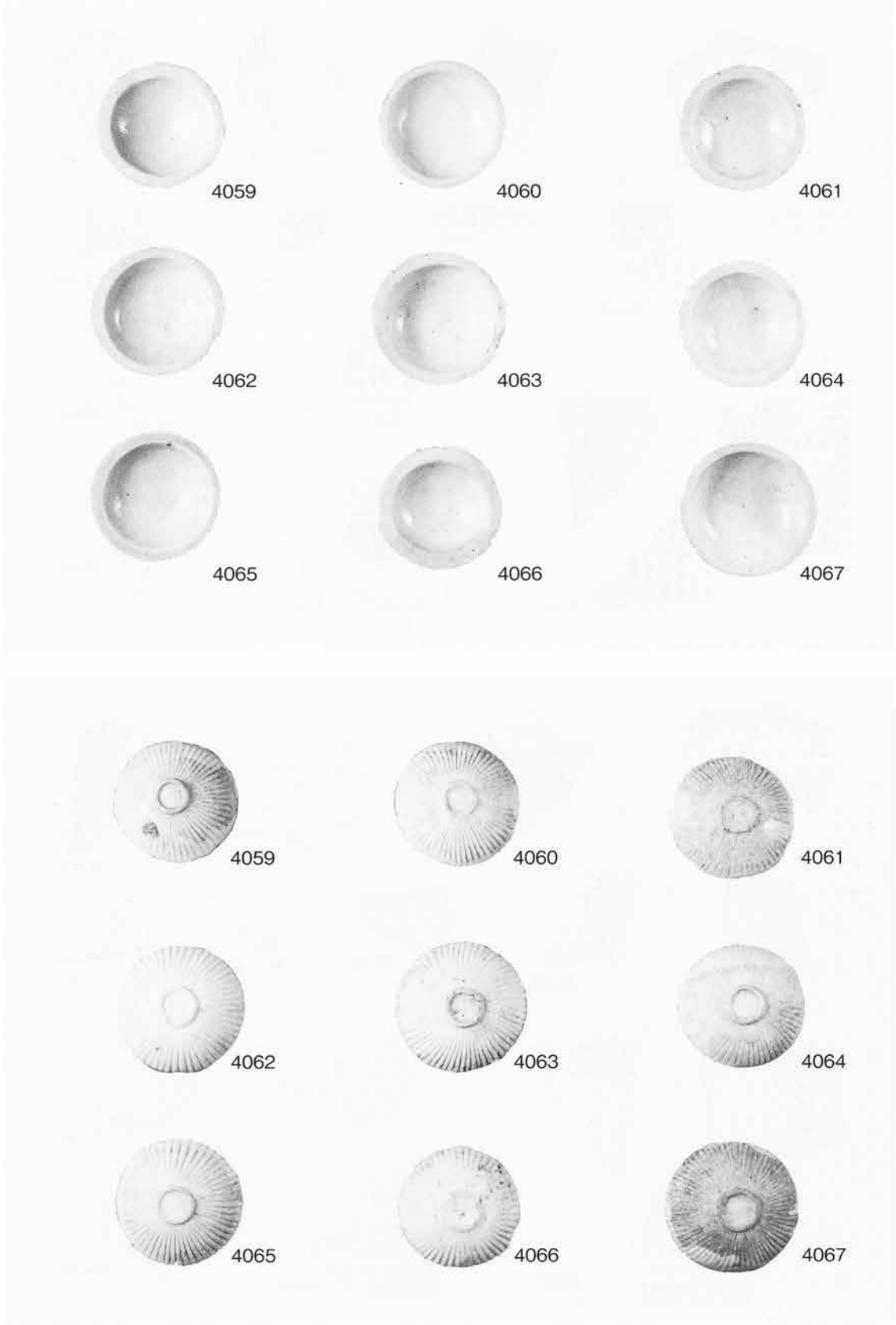


写真図版184　近世の磁器④
（4020～4024・4029～4034・4037・4038）

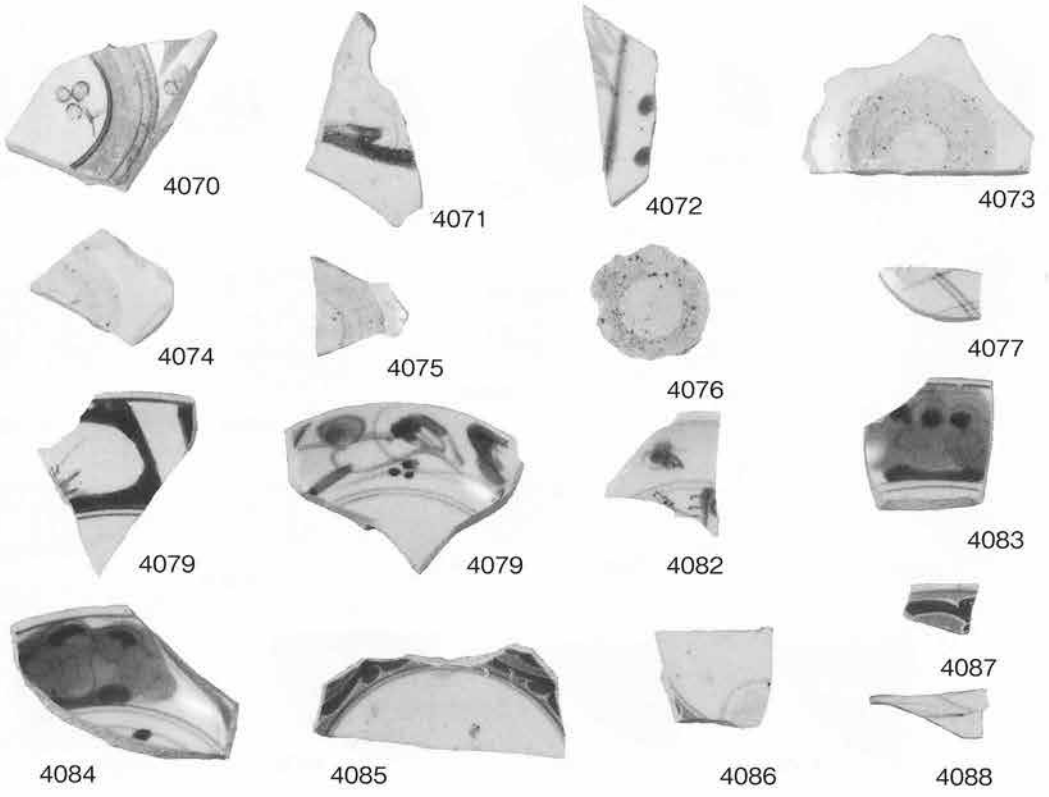


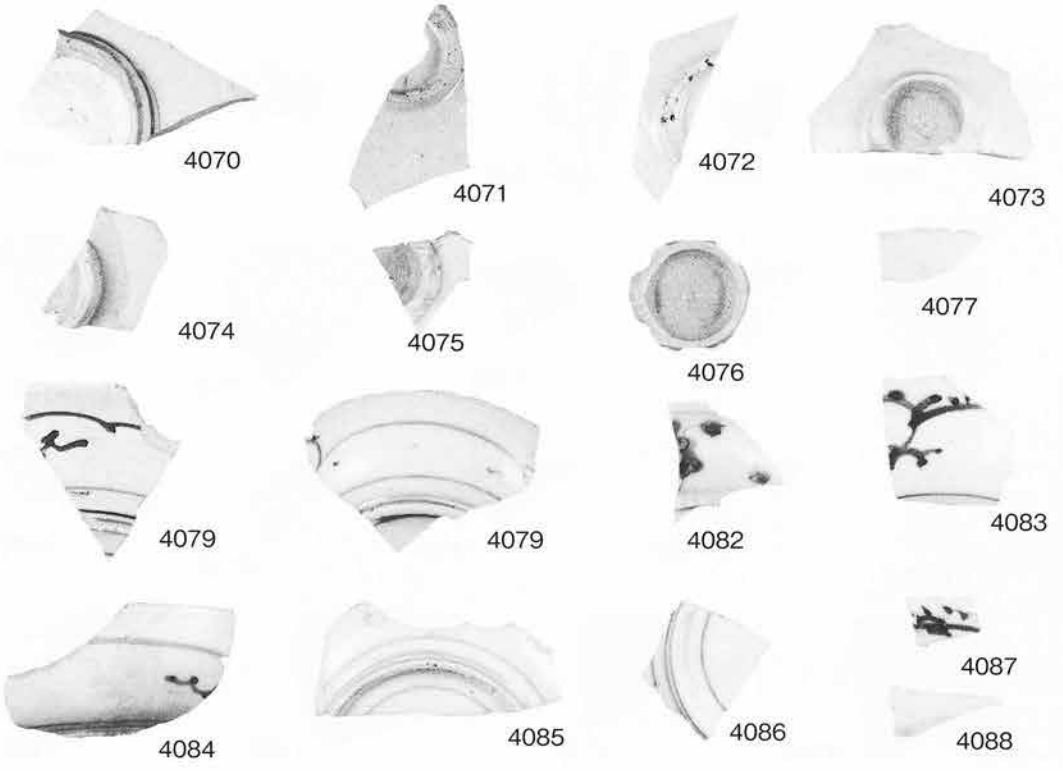


写真図版185　近世の磁器⑤
（4039～4048・4050・4054～4056）

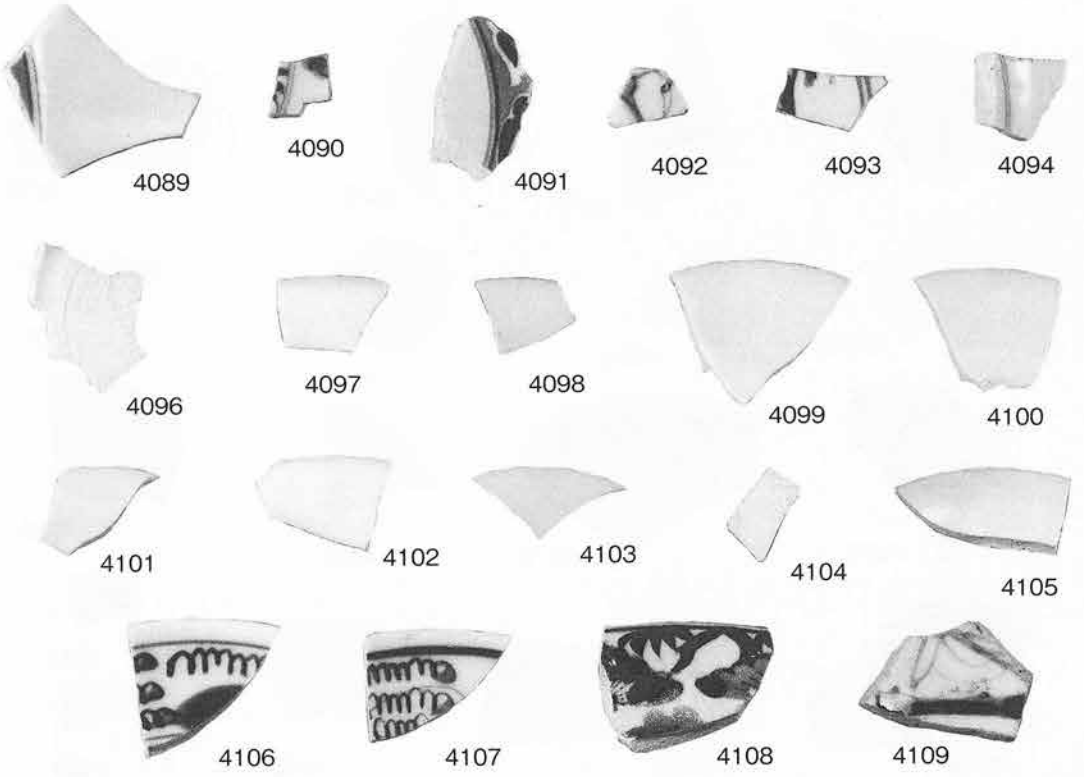


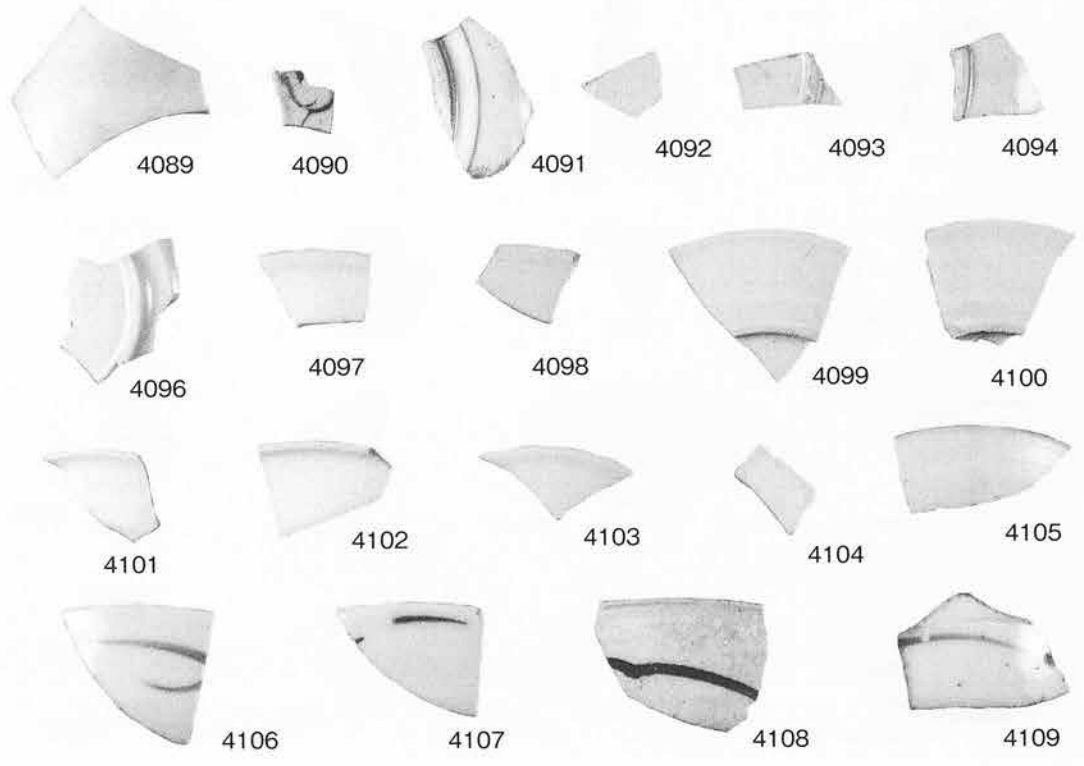
写真図版186　近世の磁器⑥（4059～4067）



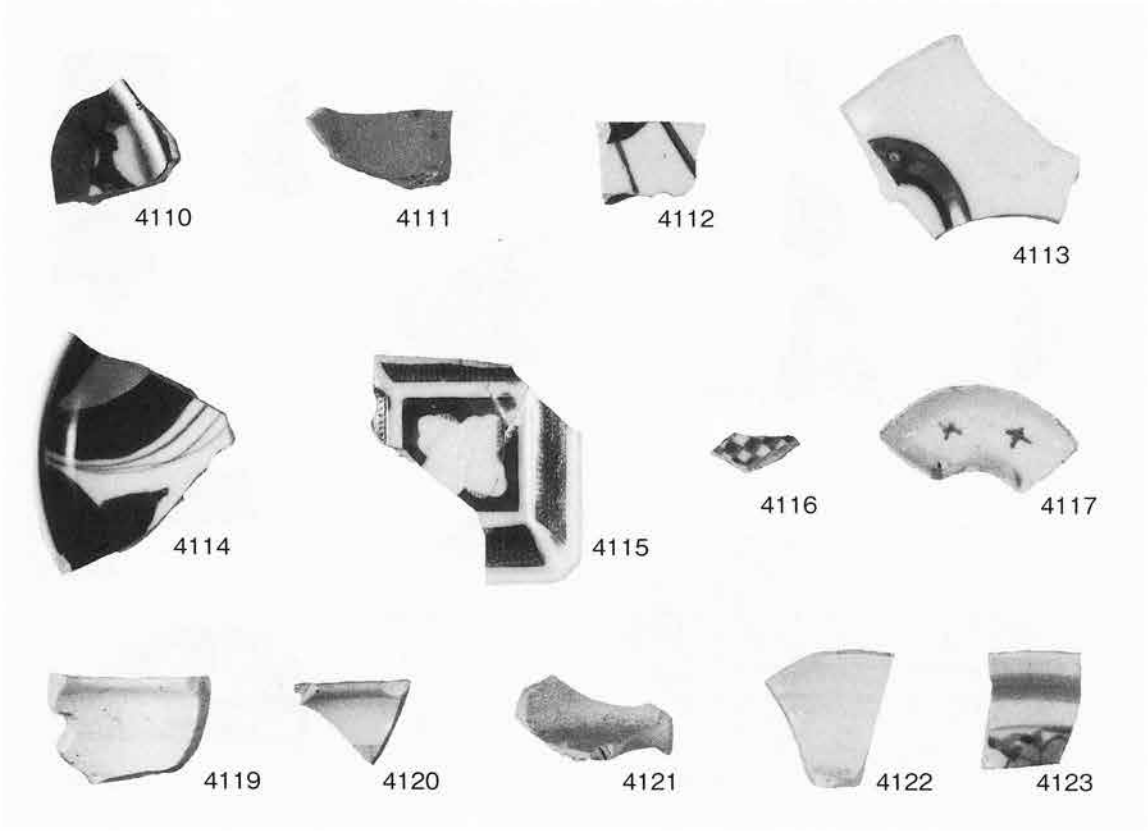


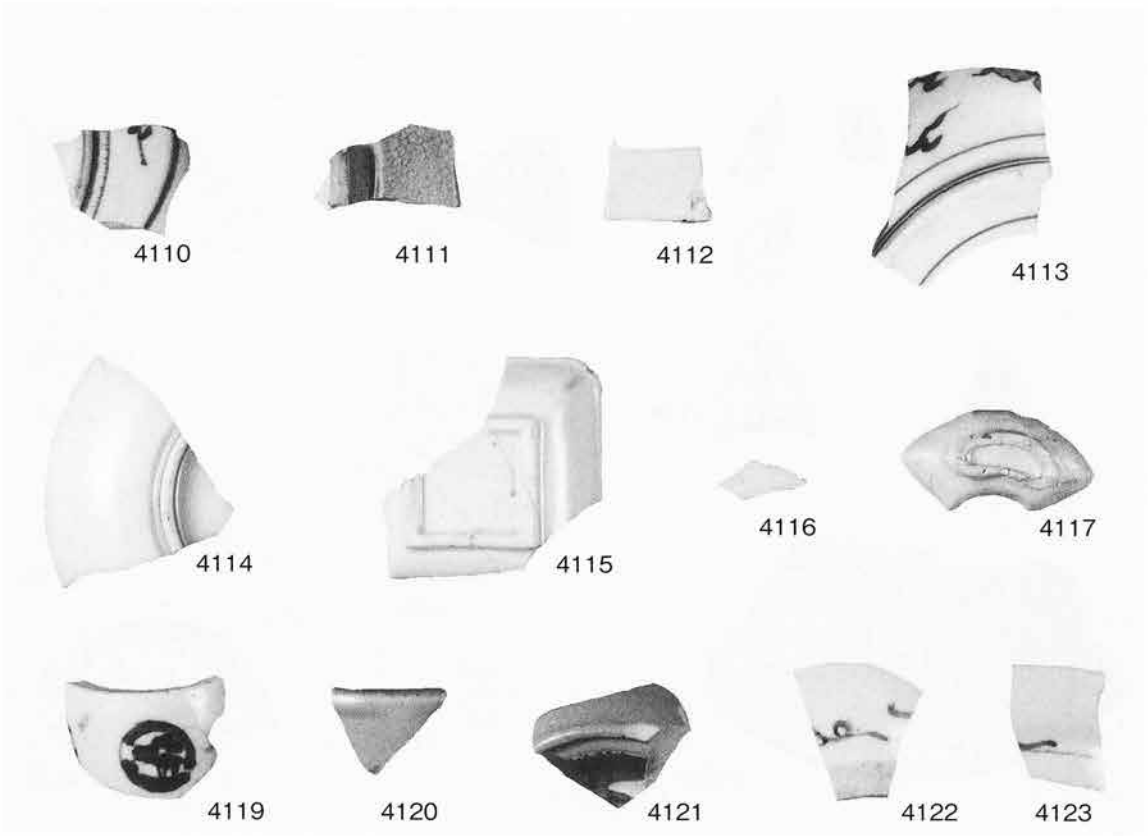
写真図版187　近世の磁器⑦(4070～4079・4082～4088)



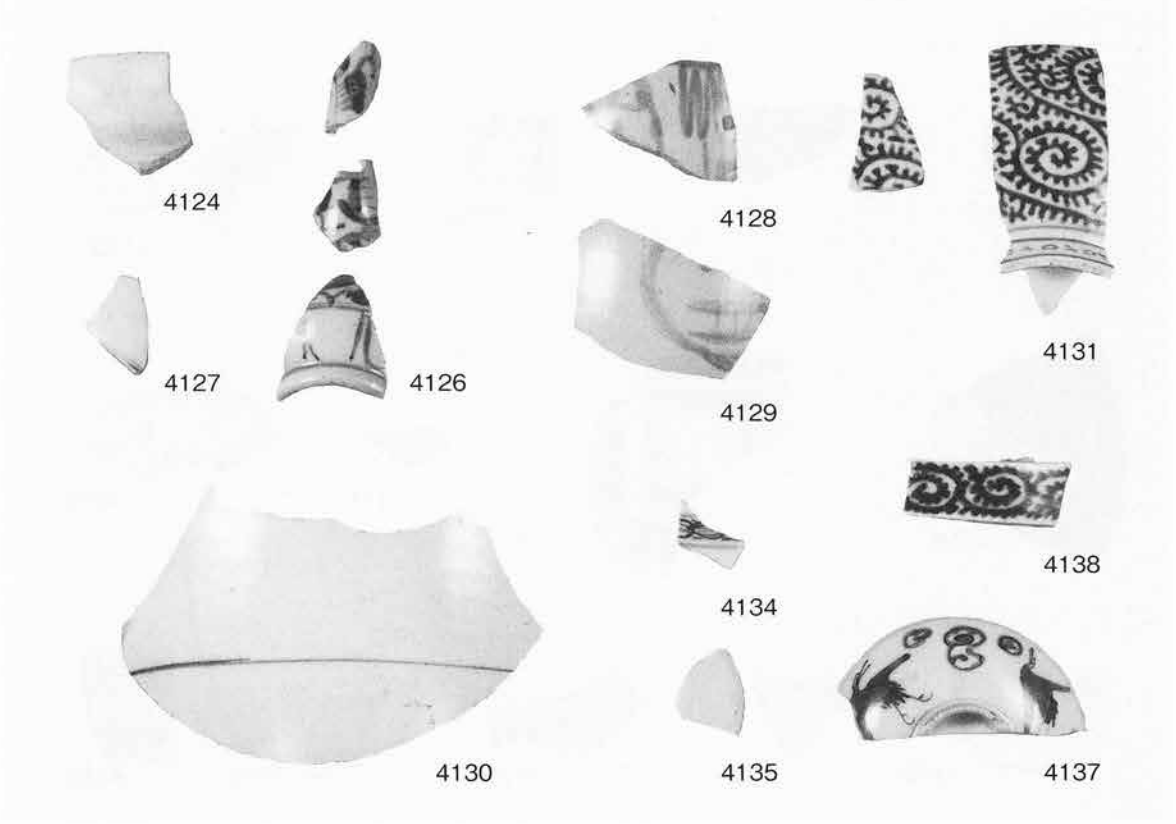


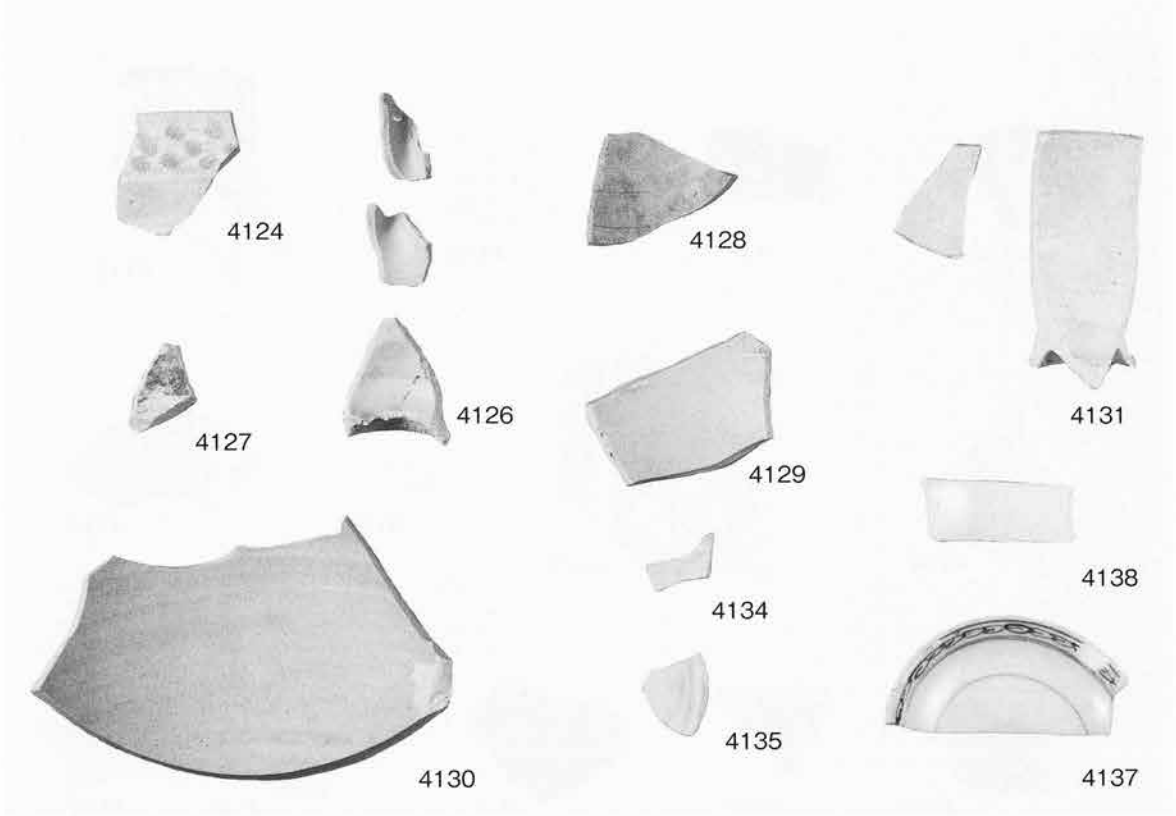
写真図版188　近世の磁器⑧(4089～4094・4096～4109)





写真図版189　近世の磁器(4110～4117・4119～4123)





写真図版190　近世の磁器⑩(4124・4126～4131・4134～4137)

4140

4142

4138

4145

4141

4143

4144

4147

4139

4146

4140

4142

4138

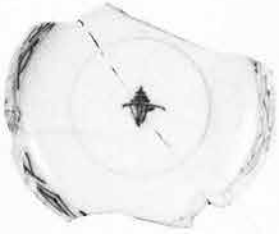
4145

4141

4143

4144

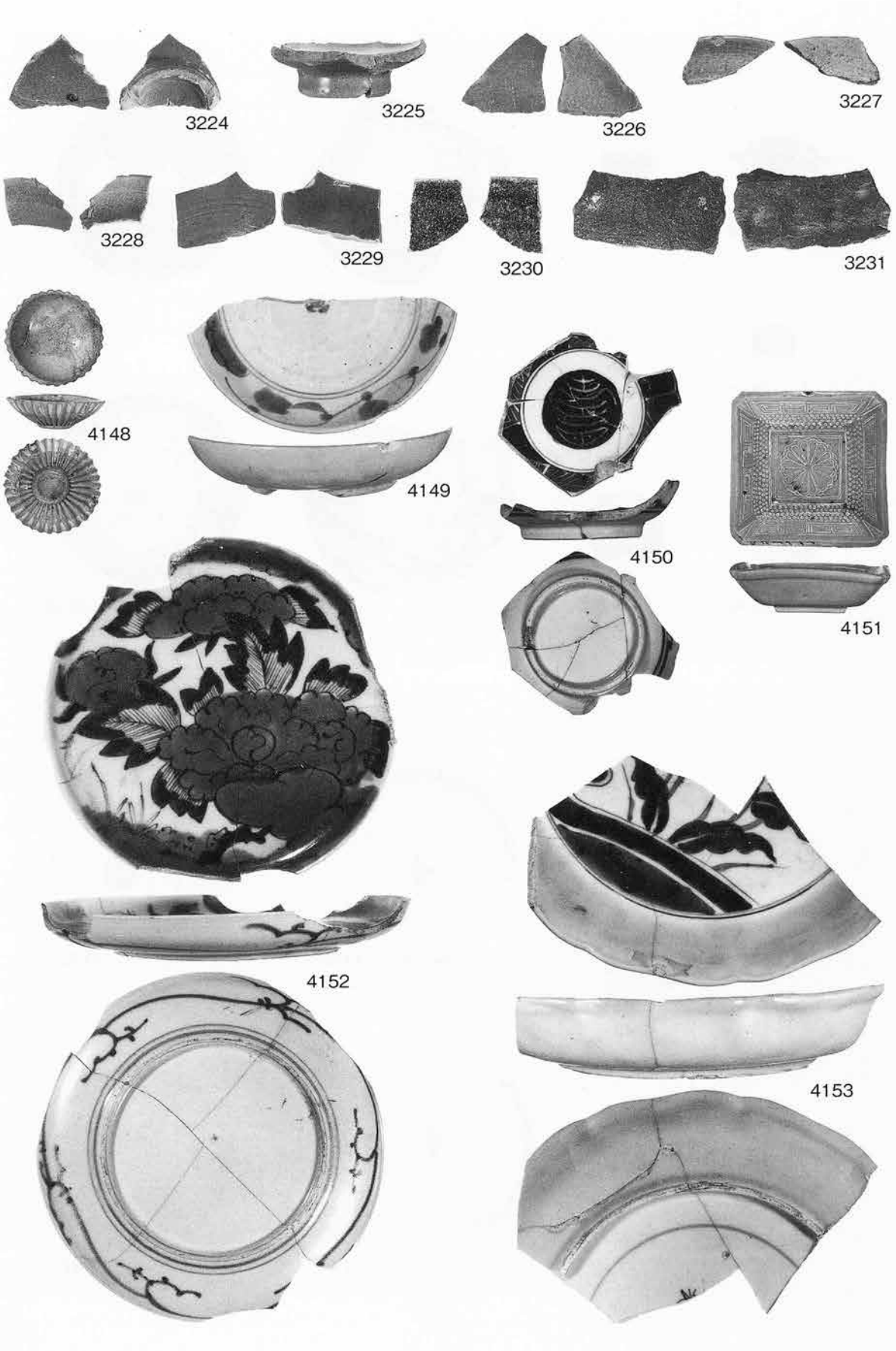
4147



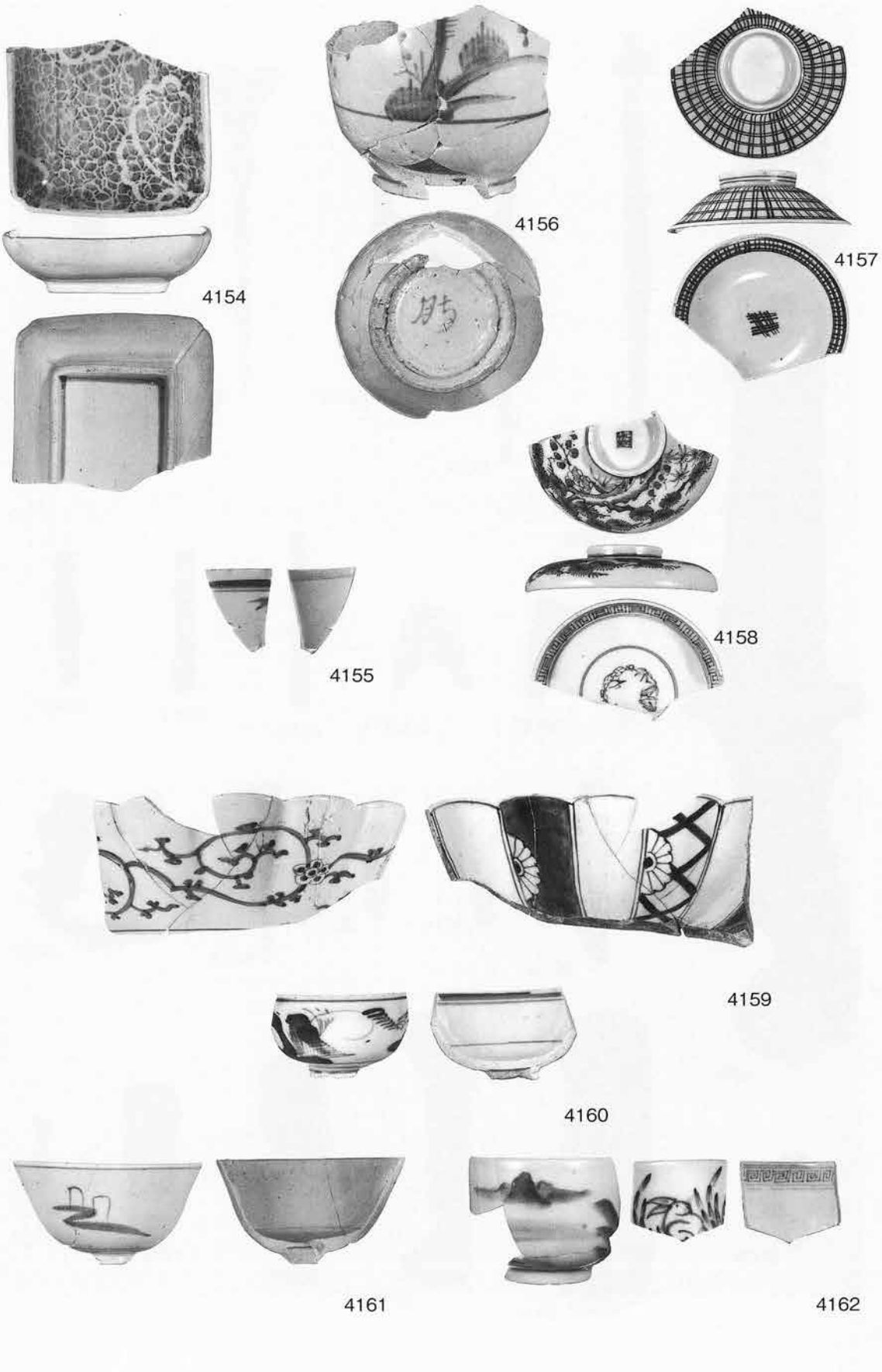
4139

4146

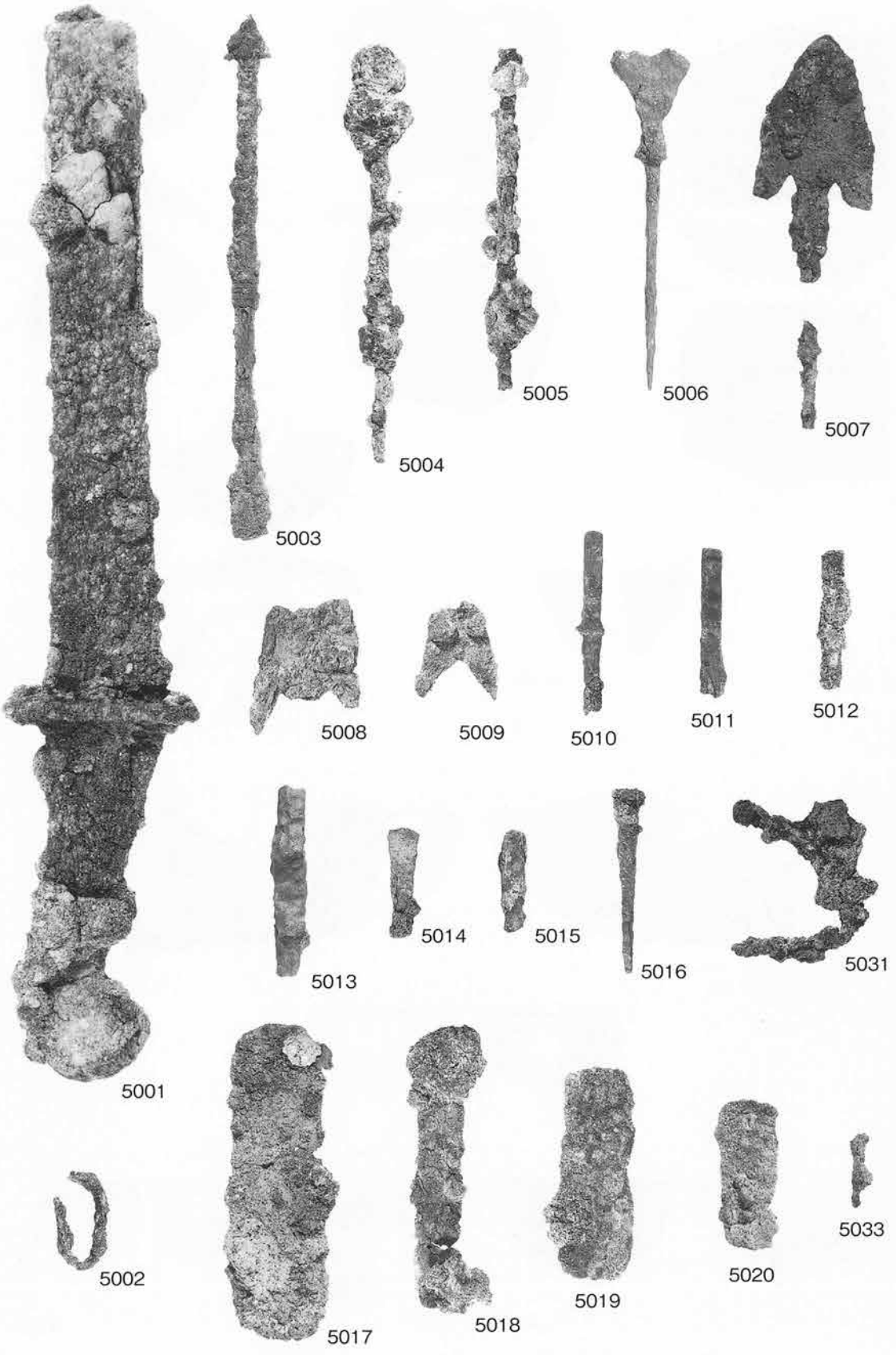
写真図版191　近世の磁器⑪(4138～4147)



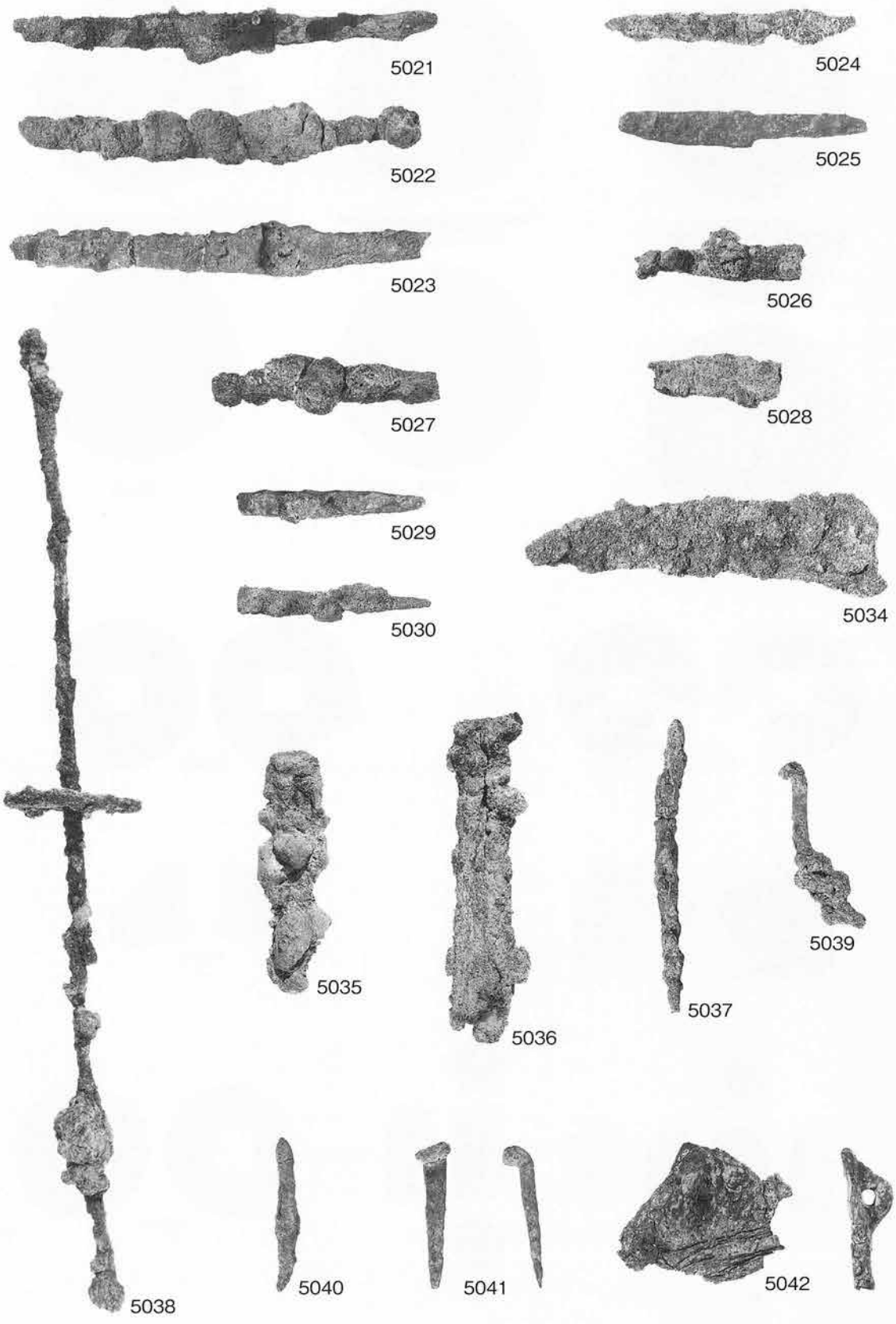
写真図版192　近世の陶器⑱（3224～3231）
近世の磁器⑫（4118～4153）



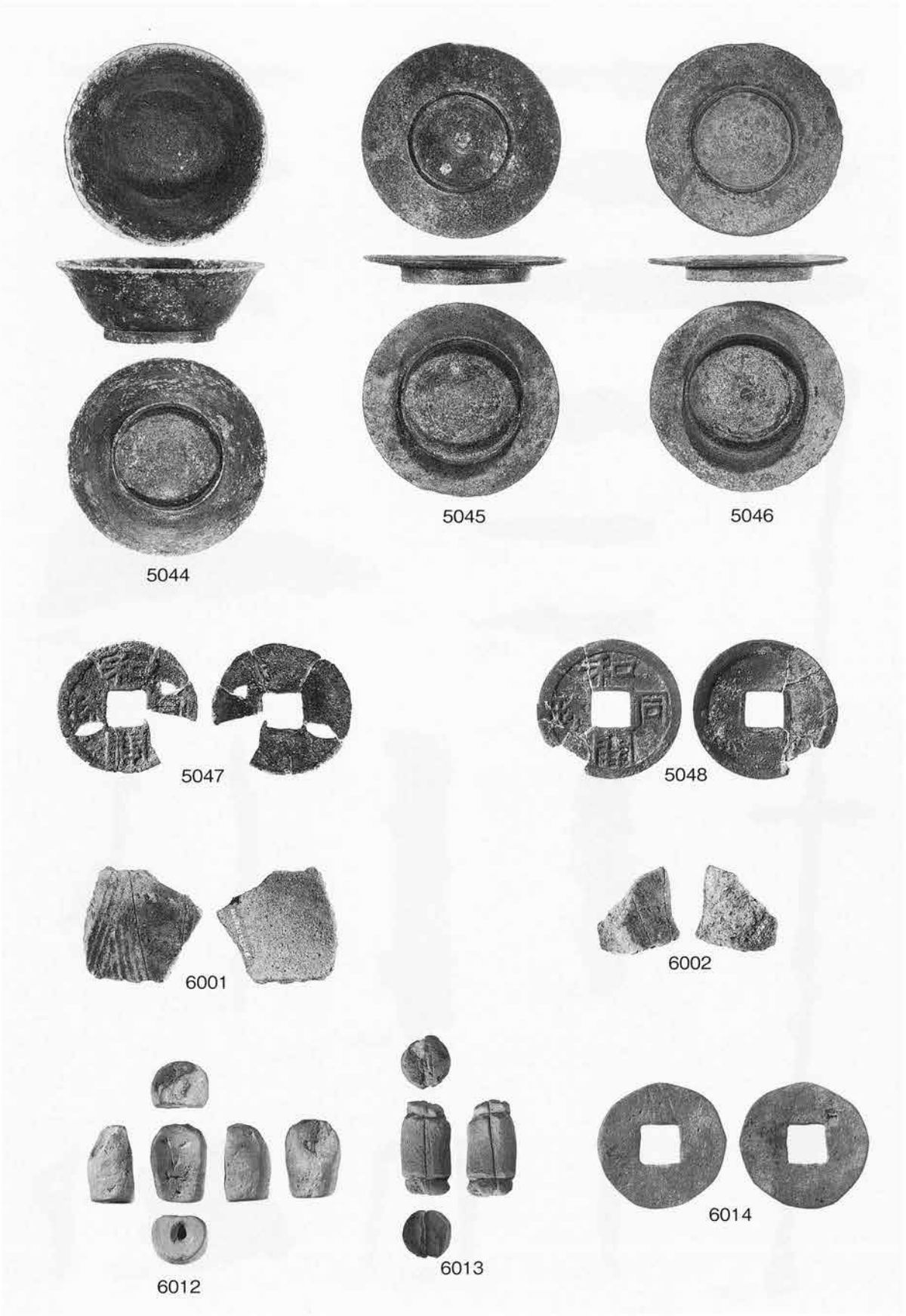
写真図版193　近世の磁器⑬(4154～4162)



写真図版194　古代～中世の鉄製品①
(5001～5020・5031・5033)

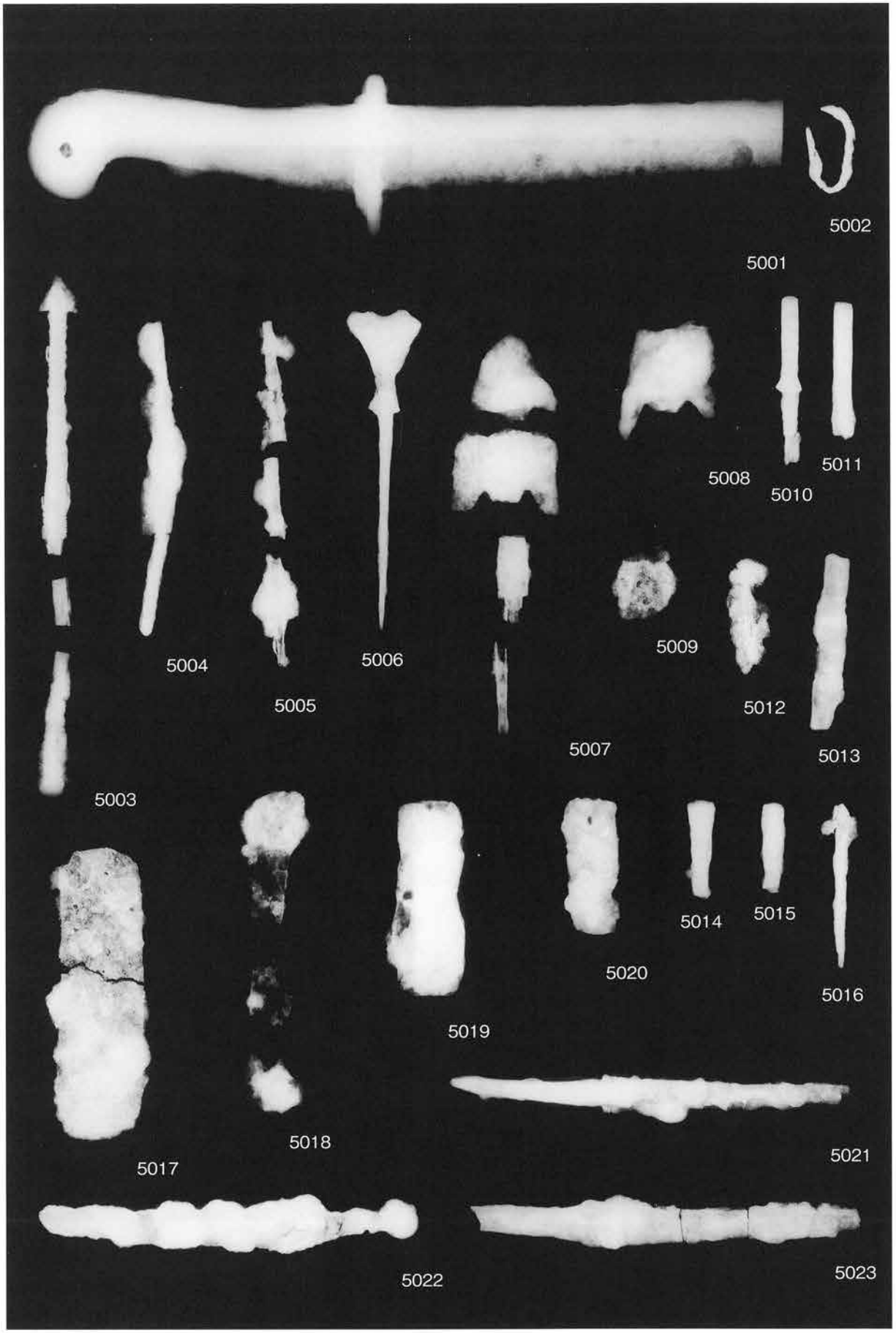


写真図版195　古代～中世の鉄製品②
（5021～5030・5034～5042）

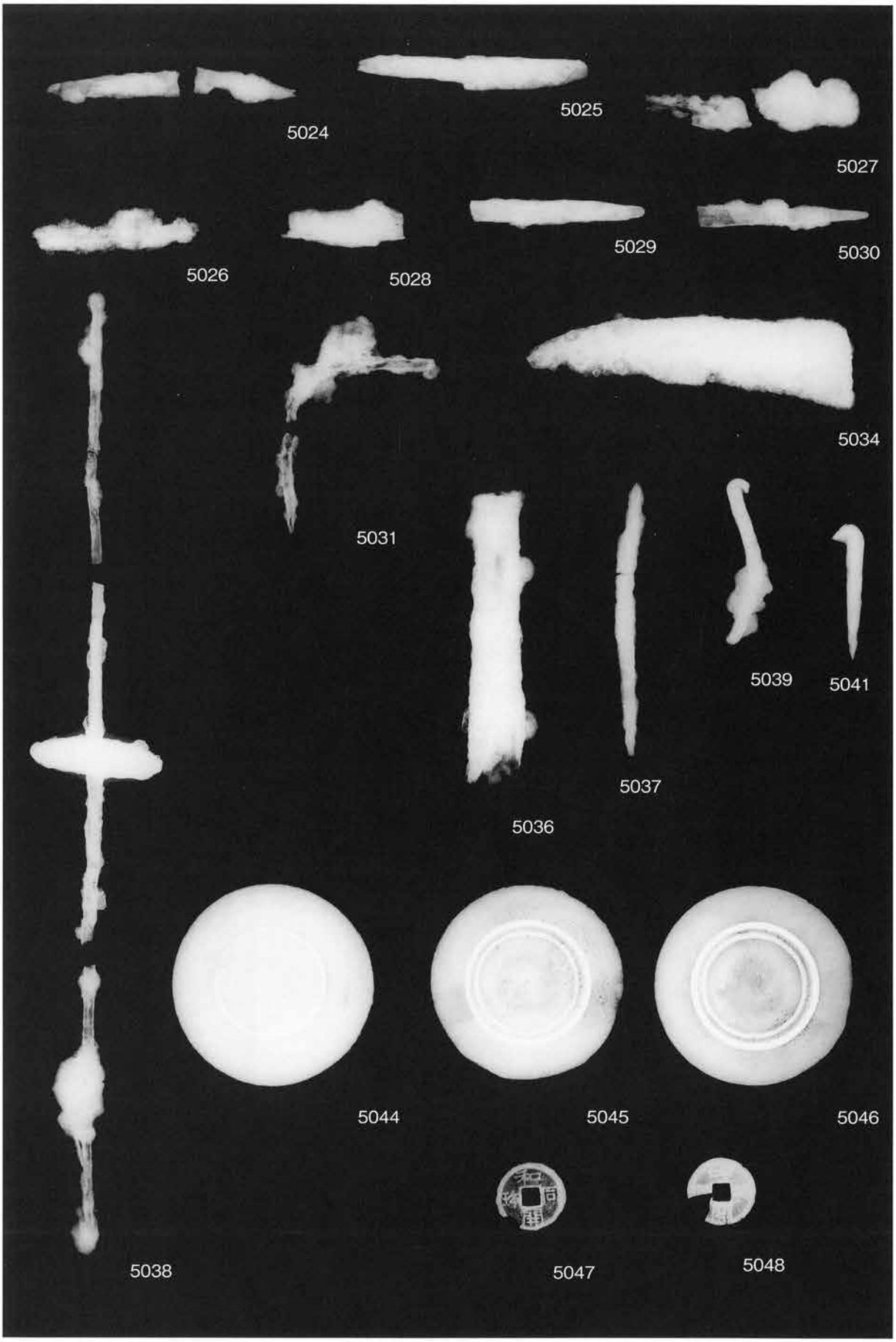


写真図版196　銅製六器(5044～5046)、和同開珎(5047、5048)
後北式土器(6001・6002)、石製品①(6012～6014)

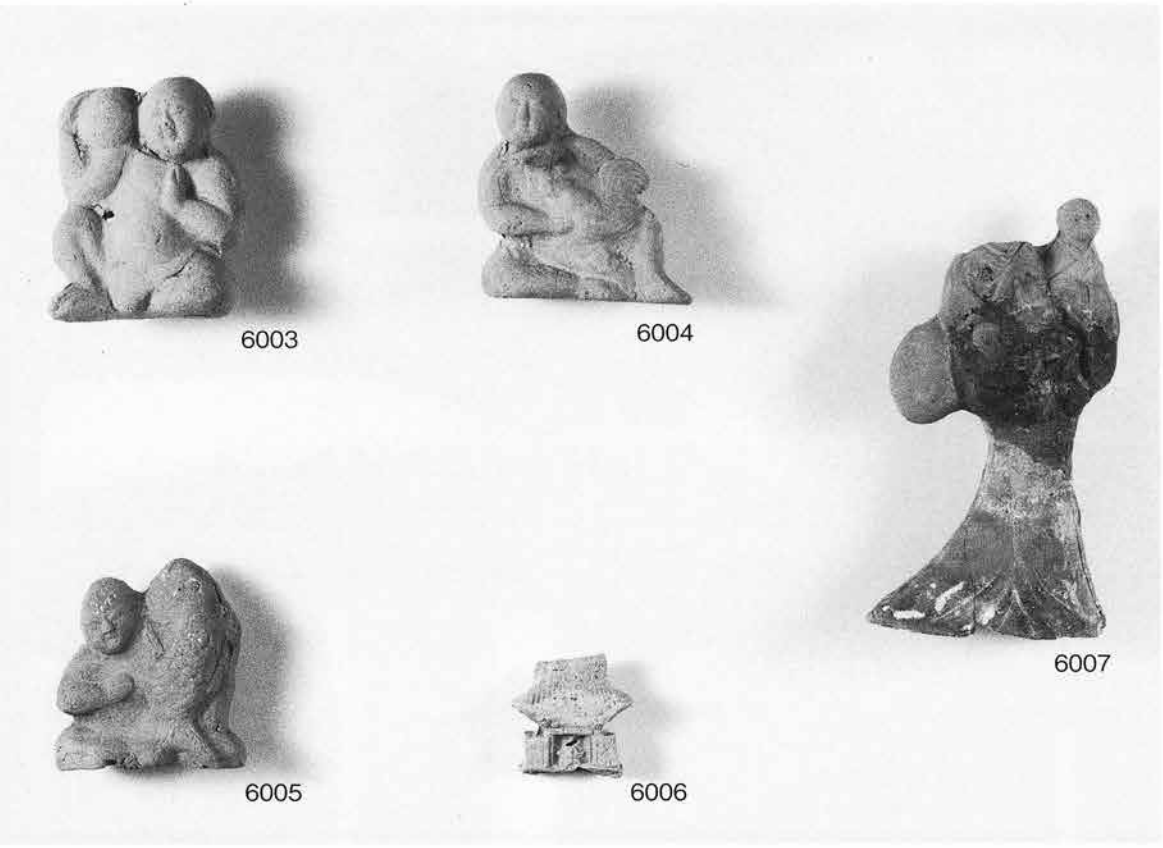
写真図版197　蕨手刀顕微鏡写真

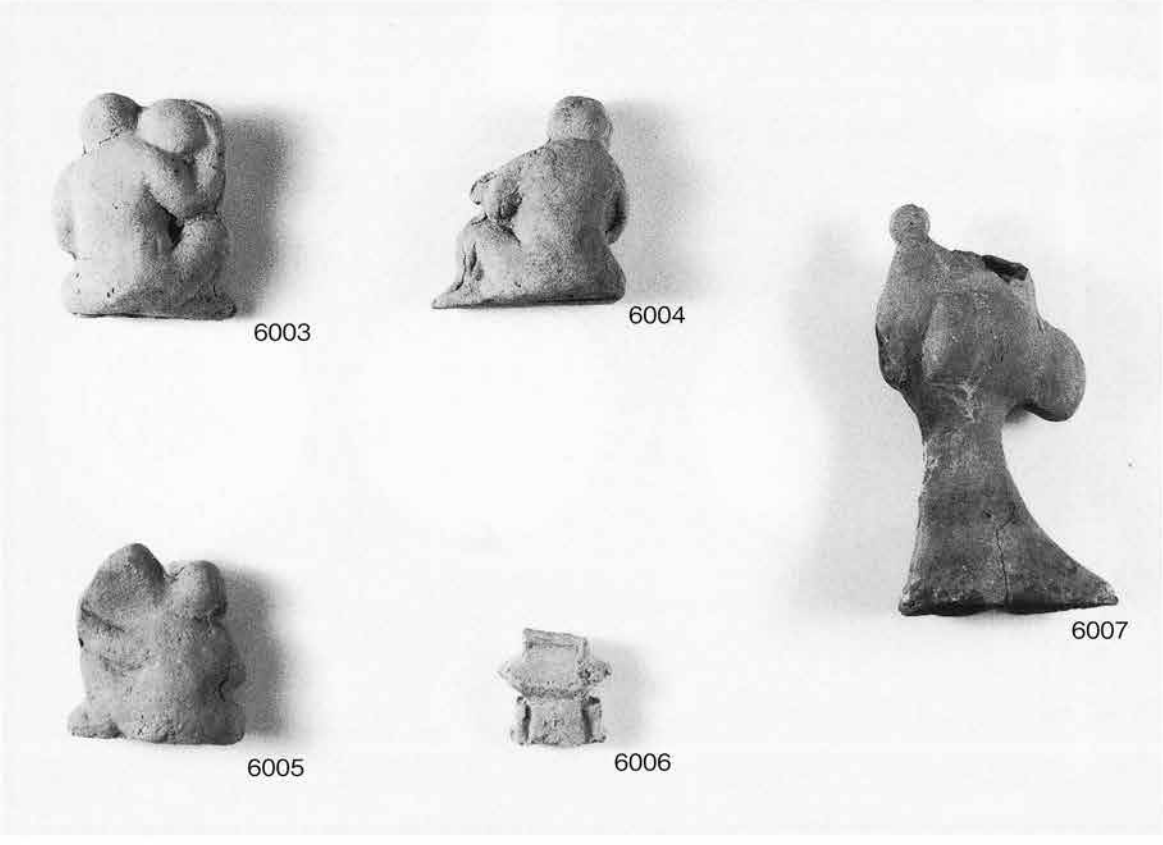


写真図版198　古代～中世の金属製品X線写真①

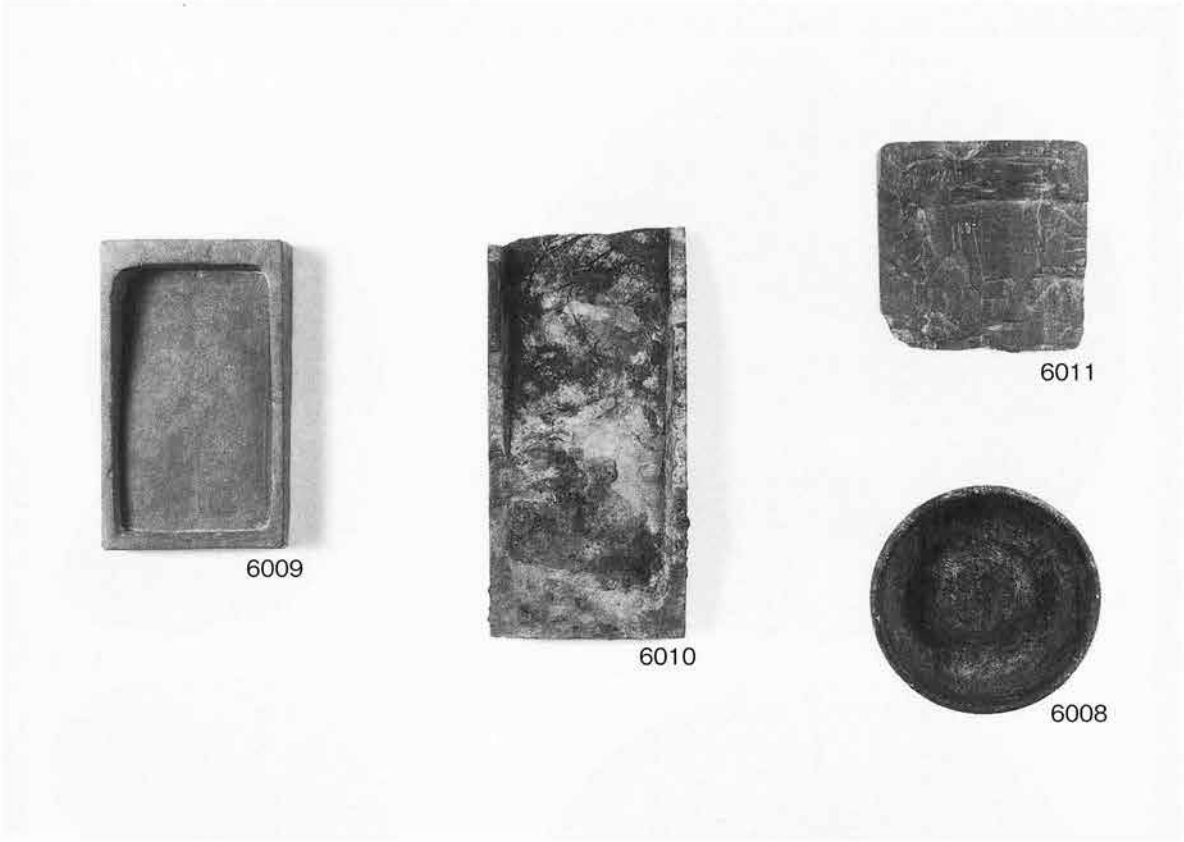


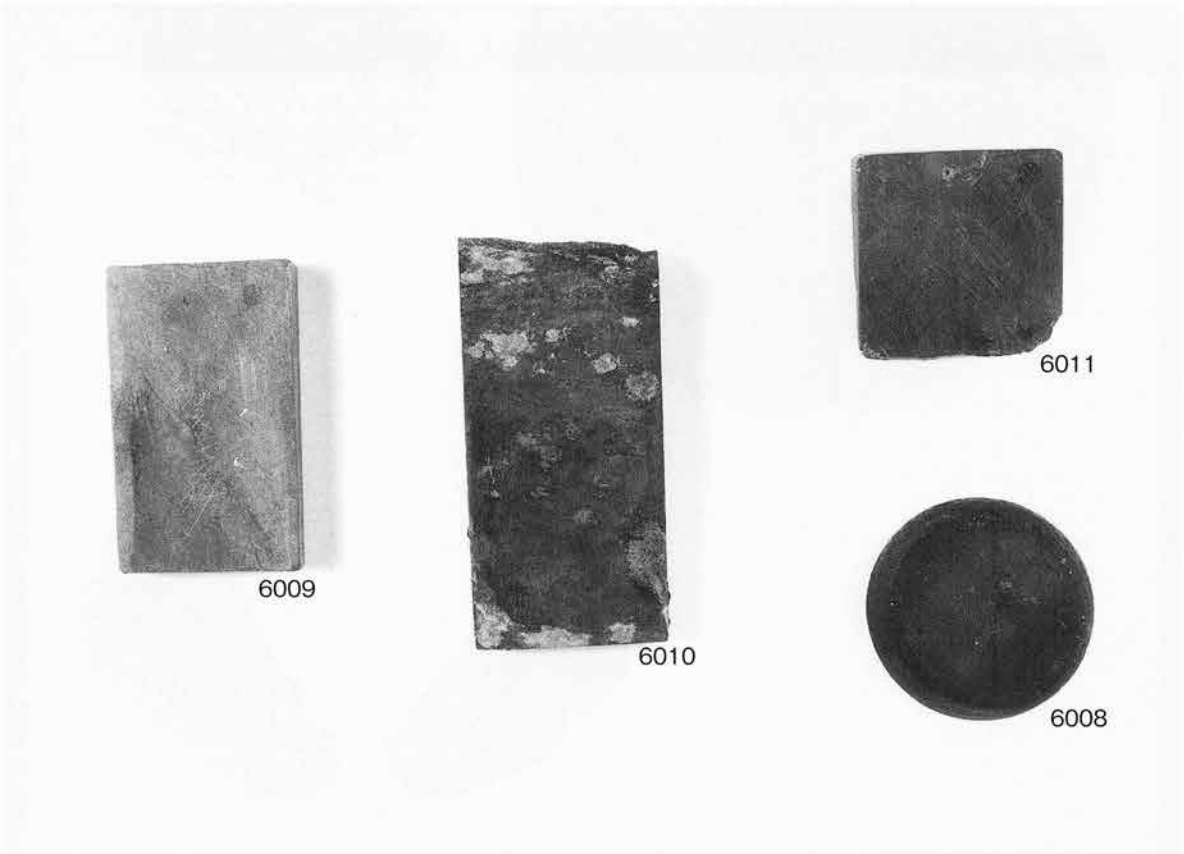
写真図版199　古代～中世の金属製品X線写真②



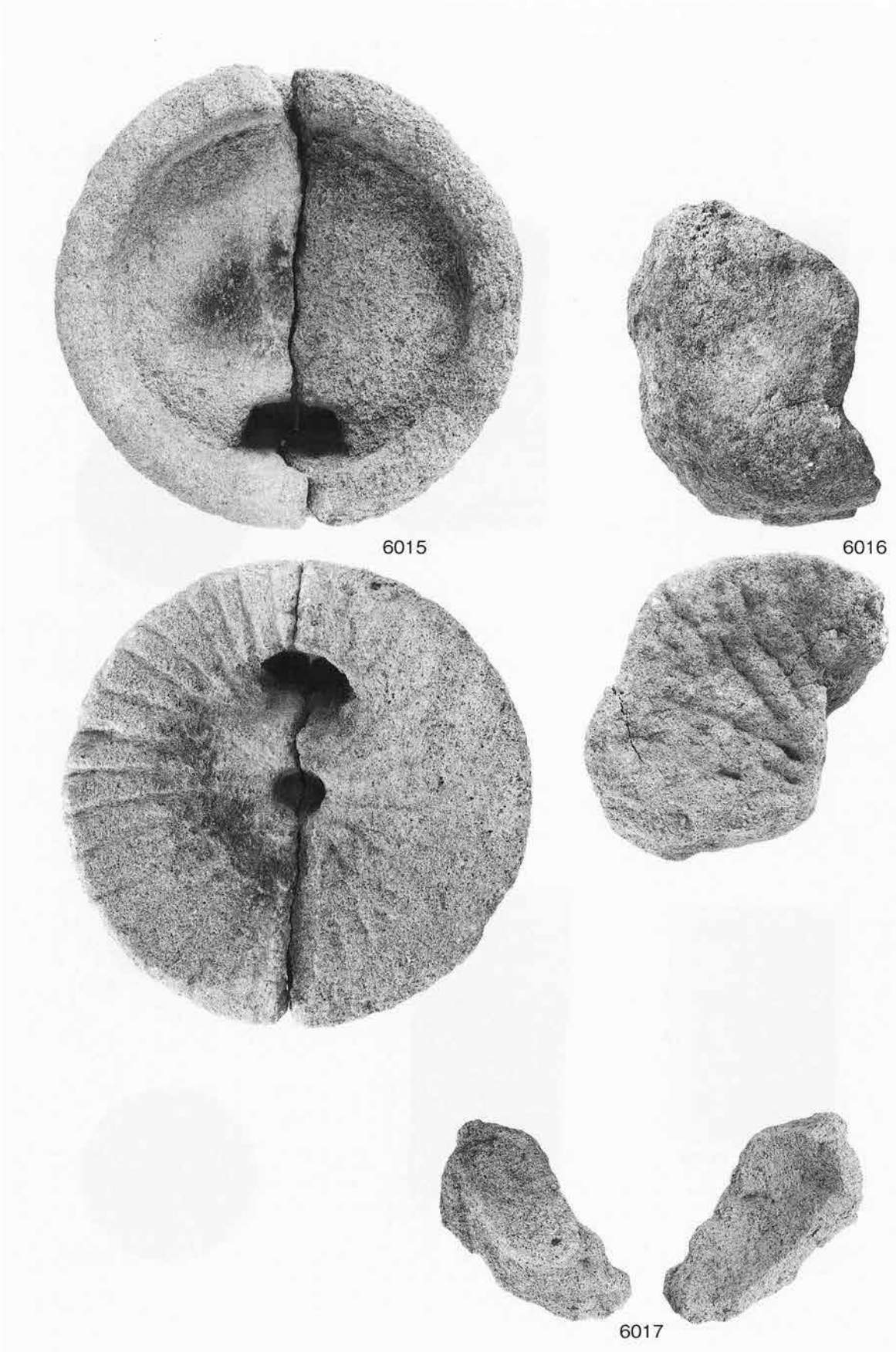


写真図版200　土製品(6003～6007)





写真図版201　石製品②・瓦質土器(6008～6011)



写真図版202　石製品③(6015～6017)

7001

7002

7003

7004

7005

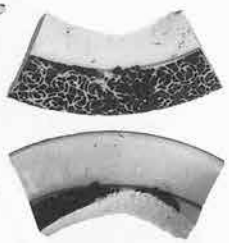
7006

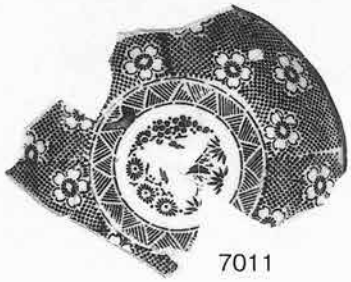
7007

7008

7009

7010



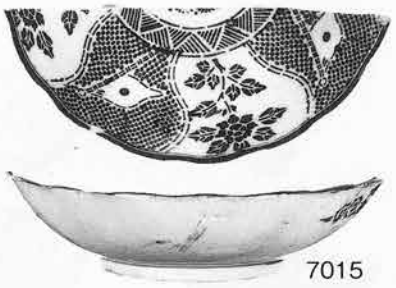

7011

7012

7013

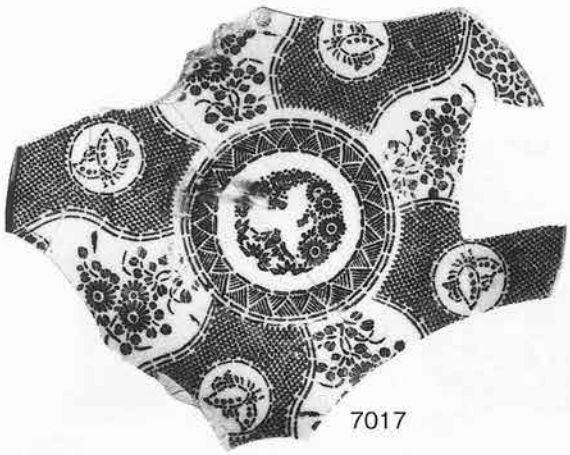
写真図版203　近代陶磁器①(7001～7013)

7014

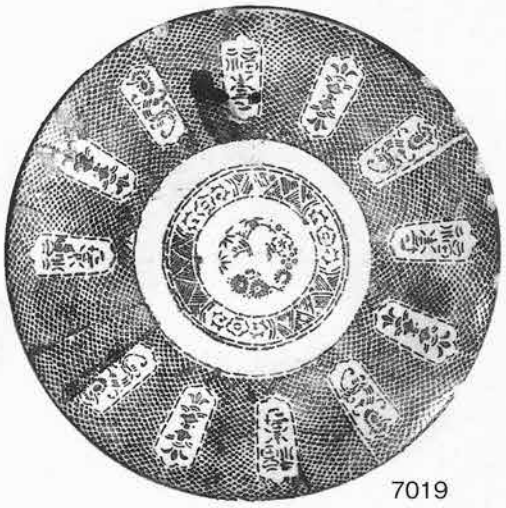


7015

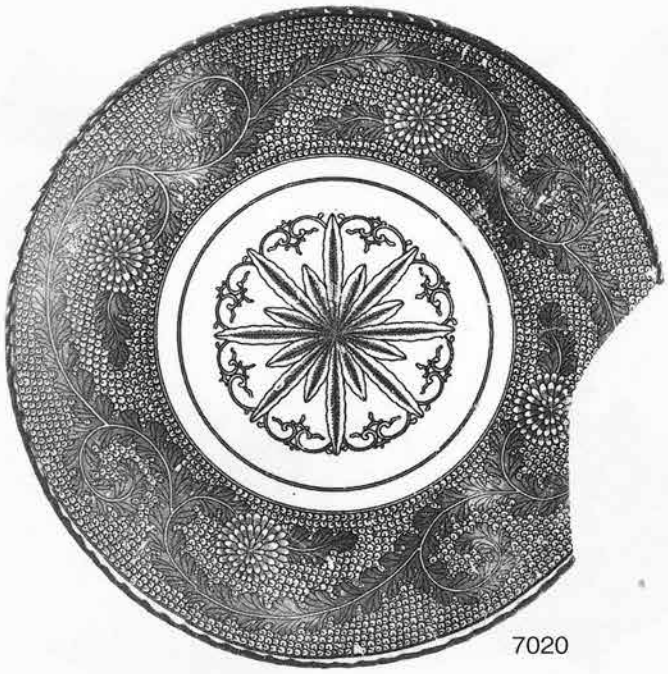
7016



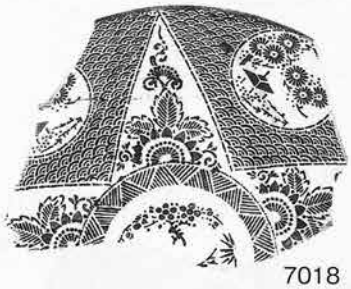
7017



7019



7020



7018

写真図版204　近代陶磁器②（7014～7020）

報告書抄録

ふりがな	かわさきのさくぎていちはっくつちょうさほうこくしょ
書名	河崎の柵擬定地発掘調査報告書
副書名	床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第474集
編著者名	羽柴直人・川又晋・鈴木裕明・村田淳・米田寛・星幸文・立花裕・溜浩二郎・西澤正晴・奈良貴史
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL (019)638-9001
発行年月日	2006年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積
かわさきさくぎてい 河崎の柵擬定地	いわてけんひがしいわいぐんかわ 岩手県東磐井郡川 さきむらあざかわさき 崎村字川崎83-1ほか 〔平成17年9月より一関市川崎町〕	03426 〔平成17年9月より03209〕	0E09－1173	38度54分05秒	141度15分23秒	2001.08.01～2001.11.19 2002.04.16～2002.11.29 2003.04.14～2003.11.28 2004.04.08～2004.08.18	22,845㎡

所収遺跡名	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
河崎の柵擬定地	北上川の洪水対策堤防建設整備事業に伴う緊急発掘調査	集落跡・散布地	縄文時代後期、晩期 3世紀～4世紀 8世紀後半～9世紀初頭 10世紀前半 11世紀中葉 12世紀後半 中世 近世	竪穴住居跡　2棟 炉・焼土　4基 埋設土器　3基 竪穴住居跡　13棟 畝間状遺構　5基 堀　1条 方形周溝　1基 掘立柱建物　18棟 溝　11条 土坑　131基 沢跡　1条 墓壙　224基	縄文土器・石器 土製品 後北式土器 土師器・須恵器 土錘、緑釉陶器 蕨手刀、鉄鏃、小札 和同開珎 かわらけ(11・12世紀) 国産陶器(12世紀) 中国産磁器(11～12世紀) 銅製六器(12世紀) 中世かわらけ 中世陶磁器(国産、中国産) 近世陶磁器 鉄鍋(内耳、吊耳) 銭貨、煙管 硯、土人形 板碑

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474集

河崎の柵擬定地発掘調査報告書

床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査

（第１分冊　古代・中世・近世編）

印　刷　　平成18年２月22日
発　行　　平成18年２月28日

発　行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話（019）638－9001
FAX（019）638－8563

印　刷　株式会社　杜陵印刷
〒020－0122　岩手県盛岡市みたけ２－22－50
電 話（019）641－8000

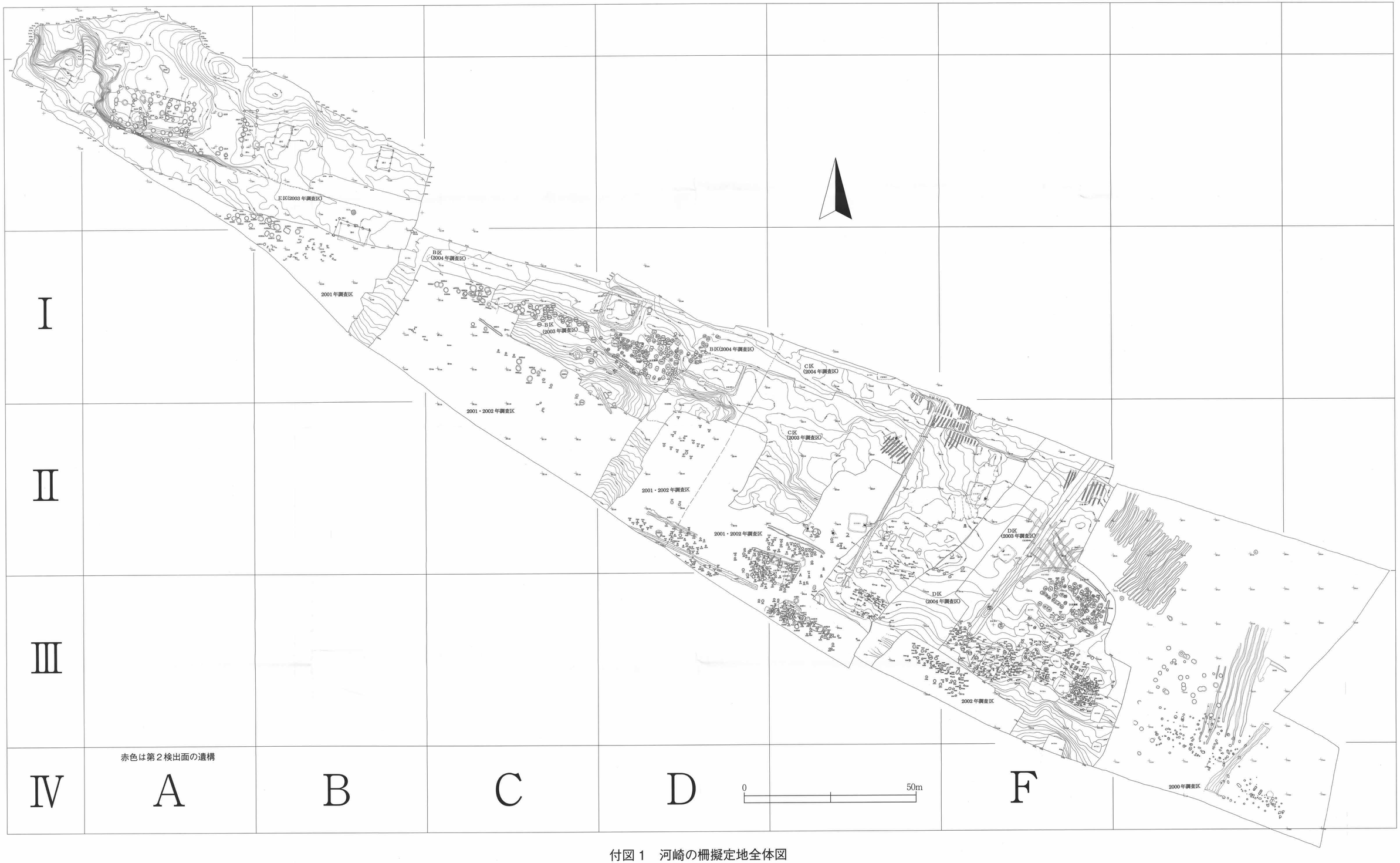
©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書　第474集

河崎の柵擬定地発掘調査報告書

—床上浸水対策特別対策事業関連遺跡発掘調査—

折込図版（~~8~~ 6枚）



付図１　河崎の柵擬定地全体図

B区
(2004年調査区)
B区
(2003年調査区)
B区(2004年調査区)
2001・2002年調査区
2001・2002年調査区
B区SI1
B区SD1
B区SD2
B区SD3
B区SD4
B区SK5
B区SK6
B区SK7
B区SK8
B区SK9
B区SK10
B区SK11
B区SK12
B区SK13
B区SK14
B区SK15
B区SK16
B区SK17
B区SK18
B区SK19
B区SK20
B区SK21
B区SK22
B区SK23
B区SK24
B区SK25
B区SK26
B区SK27
B区SK28
B区SK29
B区SK30
B区SK31
B区SK32
B区SK33
B区SK34
B区SK35
B区SK36
B区SK37
B区SK38
B区SK39
B区SK40
B区SK41
B区SK42
B区SK43
B区SK44

C区
(2004年調査区)

C区
(2003年調査区)

2001・2002年調査区

D区
(2003年調査区)

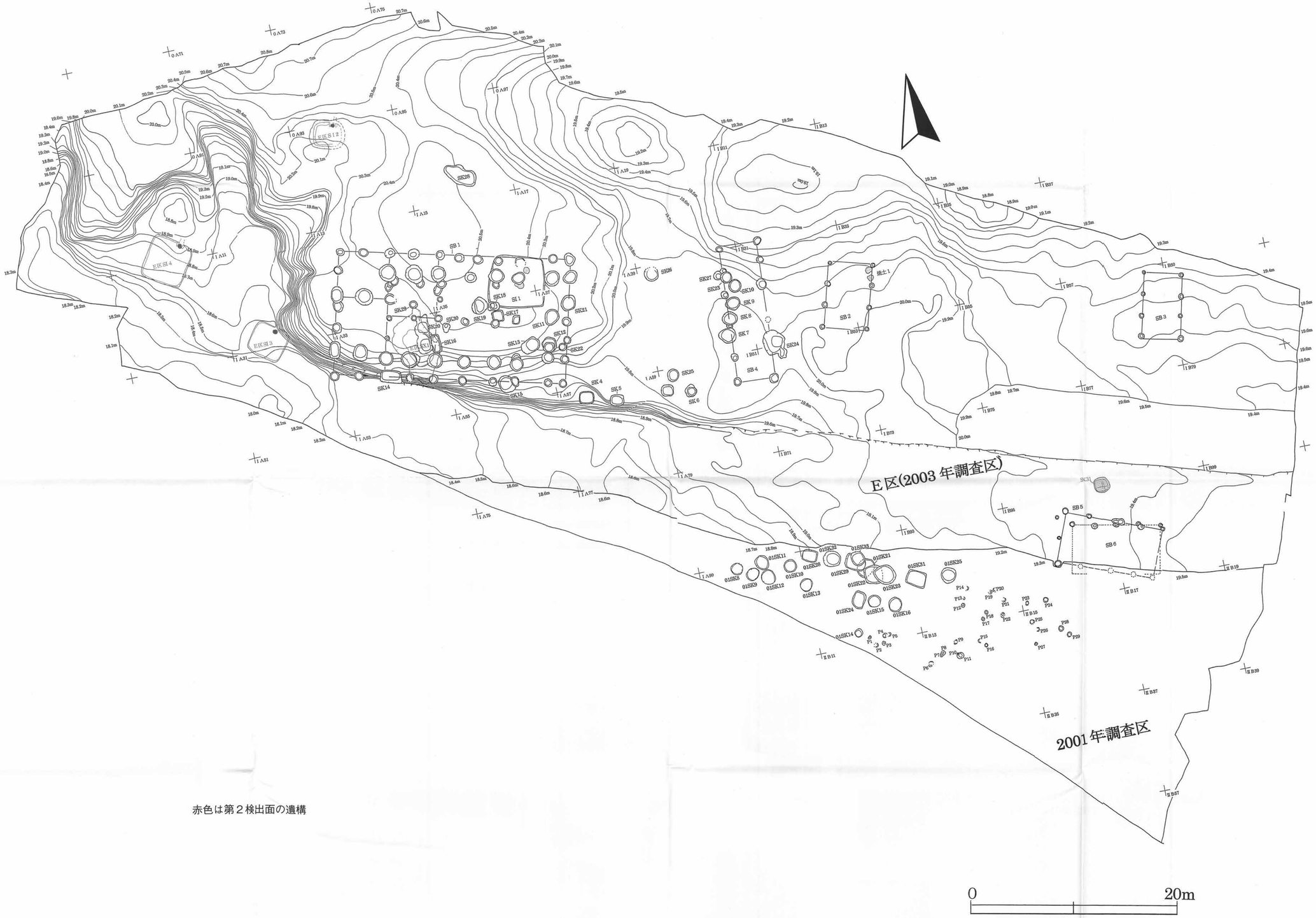
D区
(2004年調査区)

2002年調査区

0　20m

赤色は第２検出面の遺構

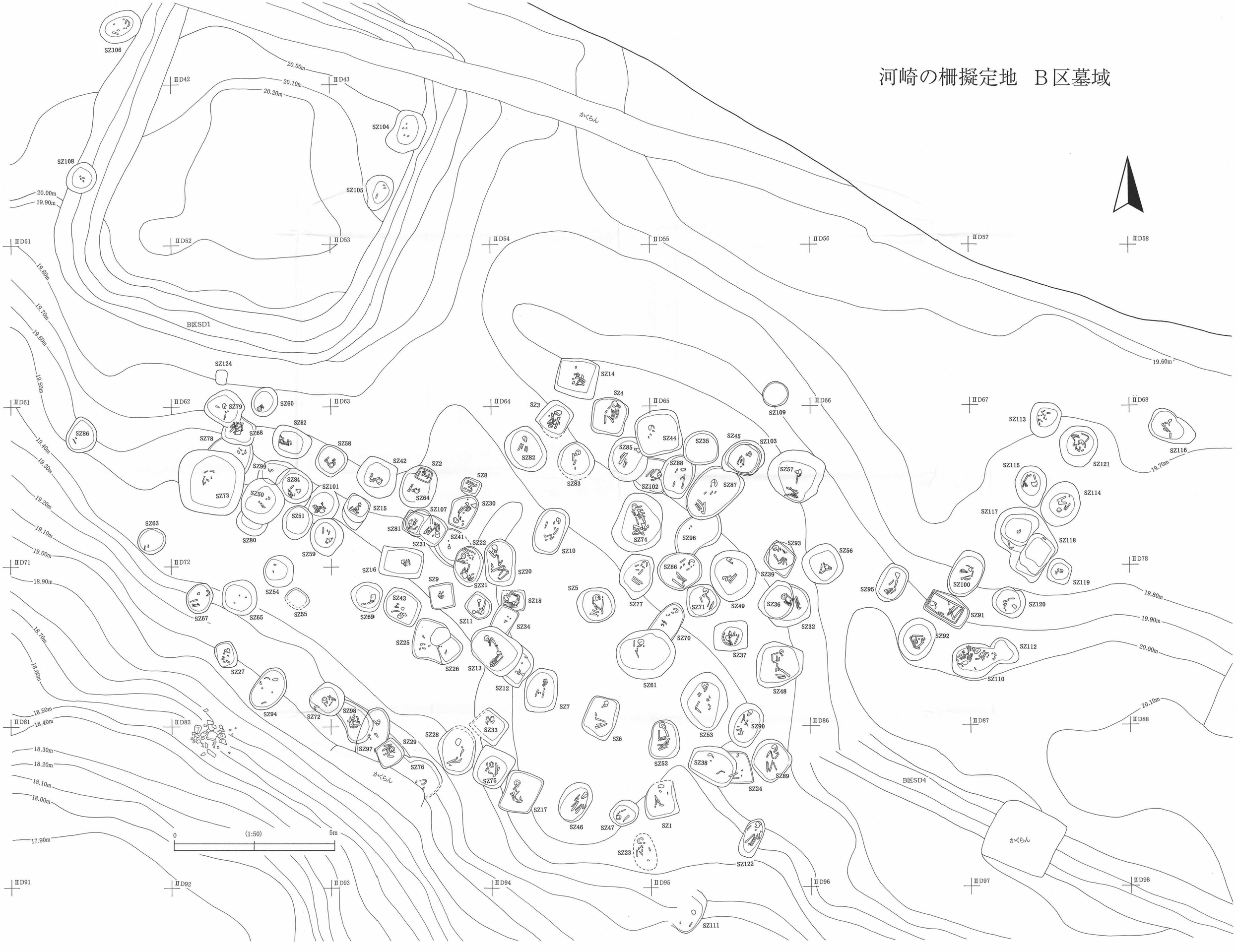
付図３　C区・D区遺構配置図



赤色は第２検出面の遺構

付図４　Ｅ区遺構配置図

河崎の柵擬定地　B区墓域



河崎の柵擬定地　D区墓域

かくらん
IVF04
IVF05
IVF06
IVF07
IVF08
IVF09
IVF10
19.60m
19.50m
SD102
SZ16
SZ30
SZ39
SZ49
SZ47
SZ40
SZ75
SZ29
SZ31
SZ77
SZ76
SZ36
SZ25
SZ66
SZ48
SZ37
SZ64
SZ35
SZ24
SZ46
SZ63
SZ14
IVF14
C区SD101
IVF15
IVF16
IVF20
19.60m
SZ92
SZ93
SZ82
SZ54
SZ42
SZ28
SZ56
SZ18
SZ21
SZ62
SZ105
SZ95
SZ61
SZ15
SZ51
SZ96
SZ55
19.40m
SZ50
SZ83
SZ13
SZ20
SZ97
SZ103
SZ84
SZ91
SZ69
SZ98
SZ104
SZ19
SZ23
SZ17
SZ86
SZ88
SZ41
SZ45
SZ73
SZ85
SZ6
SZ57
SZ71
SZ87
SZ32
SZ72
IVF24
IVF25
IVF26
19.50m
19.40m
SZ90
SZ5
SZ9
SZ58
SZ53
SZ7
SZ65
SZ3
SZ10
SZ26
SZ11
SZ22
SD103
SZ100
SZ78
SZ8
SZ12
SZ101
SZ43
SZ33
SZ2
SZ1
SZ74
SZ44
SZ34
SZ4
SZ52
19.30m
SZ89
IVF36
IVF37
IVF38
SZ70
SZ38
SZ59
SZ79
SZ60
SD107
19.20m
SZ27
19.10m
19.10m
19.00m
18.90m
18.60m
IVF46
IVF47
IVF48
IVF49
IVF50
SZ80
SZ81
0
(1:50)
5m
IVF56
IVF57
IVF58
IVF59
IVF60